THE KAIZO

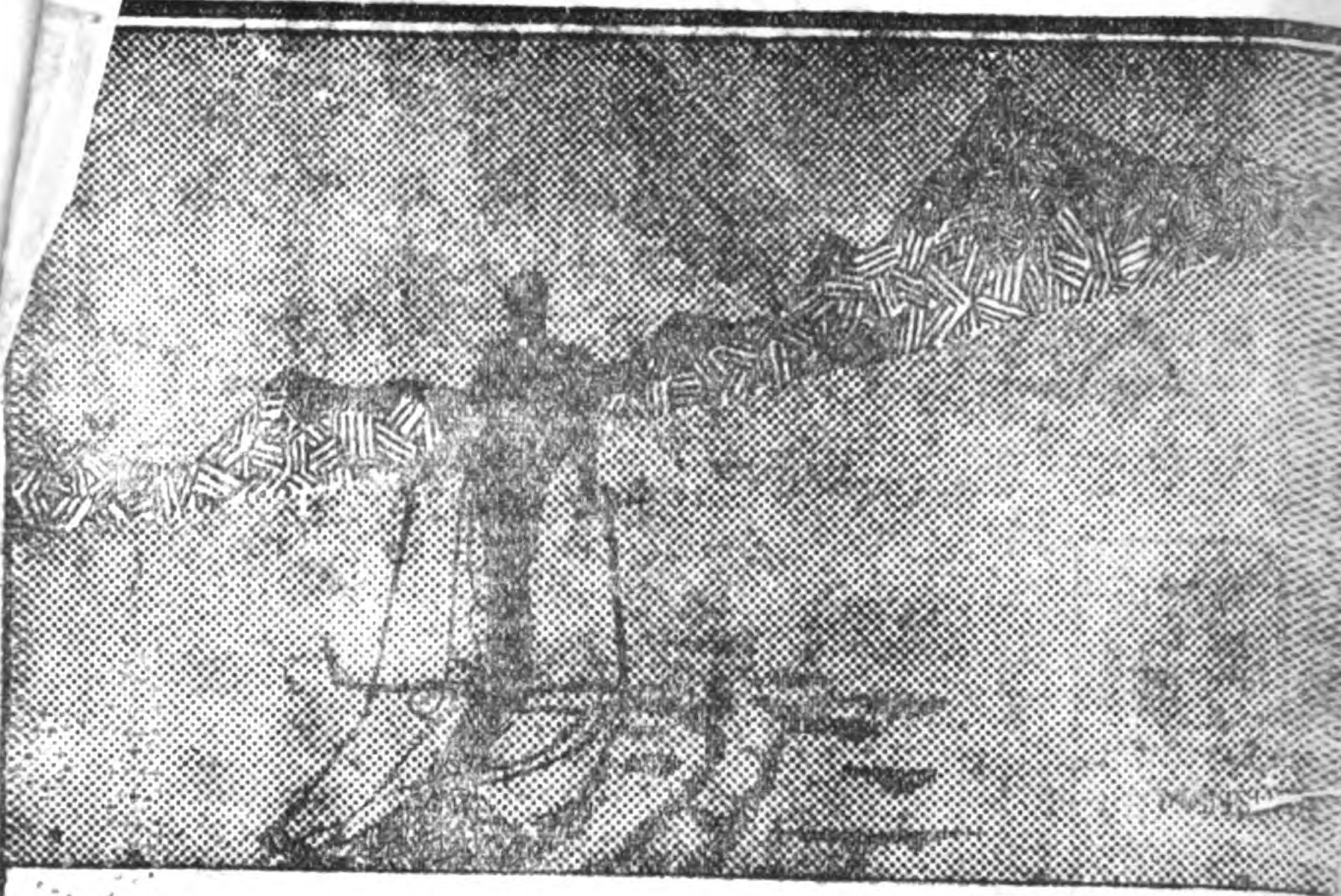
改造

新年號

1925


クラブ煉歯磨
現代醫學上理想の優良歯磨
便利で徳用で衛生的な歯磨
クラブ水歯磨


萬年筆用
プラトンインキ
ペンと紙を腐蝕せぬ……色の褪せないプラトンインキ
ATON INK





作

大ぃなる女その他……正宗白鳥……一五九
ひと秋の場面……犬養健……一七一
墓參……久米正雄……二一五
戲曲 妻……菊池寬……二四八

寄

アインシュタイン　西田幾多郎　リッケルト
フッサアル　ラッセル　サンガ
パピュッス　デュウエー　河上肇
タゴール　……　吉野作造



早稻田大學

中學科　商業科　高等女學科

法律講義

政治經濟講義

文學講義

新學期開始!!見本

志望學科明記の上申込次第無代送呈

現代の吾等にとつて、最深、最大の必要は、實に生活の兩極に徹するにある。内に顧みて吾等自身の根本を見窮めると同時に、それが環境としての社會そのものをも徹底的に研究する必要がある。而して之が目的を達成する爲めの手段として、何人も先づ我が早稻田大學の三大講義錄を併讀する要がある。

東京牛込　早稻田大學出版部　電話牛込 三四五・三七四八番 三四六・三七四九番



東京朝日と附録

我が東京朝日新聞が我國の各階級を通じて最も廣く愛讀せられてゐること及び本紙が凡ての點に於て優秀であると云ふ事は、世間一般の古くからの定評であり、又鞏固な信用でありますから、こゝに殊更に贅言を要しませぬ。愛讀者各位の平素の御愛顧に酬ゆるため本年度は左の二大附録を添付する事に致しました。

新年の大附録

あたらしき趣味の **朝日カレンダー** 一箇年分十二枚綴

裝幀優美高尚柱掛暦

昨年度帝展院展二科會の傑作美人畫を高價刷として極彩色に印刷して上部三分の一に配し、家庭の日常必須事項に興味ある史實を記載してあります。蓋し新聞附録として空前の大附録たるを失ひません。

尚三月以後は約二箇月每に何れの家庭にも向く **家庭朝日** を特別附録として添付します。大家の筆になれる類のない家庭百科辭典であります。

東京朝日新聞社
東京市京橋區瀧山町
振替口座東京一七三〇

謹賀新年

新工場の落成

新工場の儀は機械を増設致候は勿論技術員を増加致し大に製品の優秀と迅速を相計り候間何卒倍舊の御眷顧を給り度此段御披露を兼ね御願申上候　敬白

兩角製本印刷株式會社

東京市芝區愛宕下町三ノ四

電話高輪五六五七番

朝刊 夕刊 國民新聞

早くも紙數震災前を越へ、愛讀者は社會の中流を占む、廣告の効果偉大

◇……新館工事着手……（京橋區加賀町に五百坪の地所を買收し四層樓の大社屋建築工事に着手す落成は明春六月）

主なる讀物

（夕刊）

●時事評論……徳富蘇峰

▽ヂミー漫畫

▽講談「田宮坊太郎」

▽小學生の新聞

▽小說「水澄む」

▽夙に第一流の稱ある商況記事

【綜合編輯により全紙面に生氣溢る】

（朝刊）

●近世日本國民史 元祿時代『義士篇』……徳富蘇峰

▽世界の時相を面白く見せる フォートニュース

▽小說「綠の春」中村武羅夫作 太田三郎畫

▽漫畫「ヌー坊の世界」池部鈞

▽探偵奇談「毒酒の乾杯」陶忠平譯 柳田諒吉畫

▽主婦の讀物「家庭文化」

【この外政治、外交、經濟、社會、文學、娛樂の各方面に實益と興味に滿ちた記事を滿載す】

▲金四千五百圓懸賞の長篇小說當選は十二月十日の紙上に發表

明るくて面白い『國民新聞』を直ぐお讀み下さい

◎直ぐ配達します。最寄新聞店又は東京京橋日吉町の國民新聞社へ。購讀料一ケ月金八十五錢◎

謹賀新年

改暦に際し大方愈々御繁榮の段奉賀上候陳ば弊社毎々御引立を蒙り御厚情難有奉謝候就ては本年も格別の努力を以て鋭意御便宜御取計申上度と存候間何卒倍舊の御愛顧賜度偏に奉懇願候

乙丑元旦

東京印刷株式會社

麹町出張所
東京市麹町區紀尾井町三番地
電話四谷五、二七二番

本社
東京市日本橋區兜町二番地
電話大手六二〇番六八二七番

分社
東京市深川區東大工町四十八番地
電話大手四、三七〇番

醫學士　佐々木光三氏先生著

歐洲の人肉市場

速に讀んで**歐洲人肉**の味を知れ!!!

著者が歐洲各國の魔の裏面に出沒體驗して吾々が歐羅巴には公娼が居らぬと信じて居た迷夢を覺まして居る日本の藝者娼妓賣春婦などとは大いに其趣を異にして居るが勿論一見しても勢力の旺盛なる彼等歐洲人の肉感的な内面には灼熱何者をも鎔かさずには措かないものがある

キッスなど朝飯前の彼等が性慾生活は華かにして放奔強烈な酒の香に醉ひつゝふくゆかな肉體美の女を抱き締めるやうな享樂的快味は其一言一句に秘められて居る誰か一讀青春の血燃えざる者とてあらうか本書一度世に出ずるや好評嘖々飛ぶが如き賣行き再版更に重版も故ありである天下の淑女紳士に一讀を薦む



三六版三百三十餘頁
本文ポイント總ルビ付
三色版優美裝幀箱入
定價金一圓八十錢
送料內地十二錢
代金引換金二圓

—・・—

内容を充實ならしむる爲ポイントを用ひたり五號活字の五百頁以上に該當する

忽ち二十五版

—賣捌所—

東京堂・上田屋・北隆館・東海堂・至誠堂・其他全國各書店

（品切れの際は本會に直接註文せられたし）

發行所　東京市芝榮町十六　帝國出版協會　電話高輪四七二四　振替東京四三一七三

ディーツゲン著
山川均譯

無産階級の哲學

（忽四版）

◆定價貳圓五拾錢
◆送料十七錢

新刊

學問は階級を超越してゐると云ふのはブルジョア學者の曲辯だ。哲學の如き社會科學の如きは特に階級的色彩が強い。本書はブルジョア哲學者に依りて久しく學界から葬られ居たものであるが、時代は良く此眞理と、良著とを筐底に埋沒せしめず、玆に眞の哲學の如何なるものなるかを提唱してブルジョア哲學の城砦に一大爆彈を投ず。譯著が山川君である事が又無上の喜びであらねばならぬ。譯文の明暢、平晰は此書をして一層の親しみを感ぜしめる。

山川均著
レーニンとトロツキー（十一版）
定價參圓五十錢
送料拾五錢

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

法學博士 河田嗣郎著

家族制度と婦人問題

四六判 上製 定價一圓 郵送料十七錢

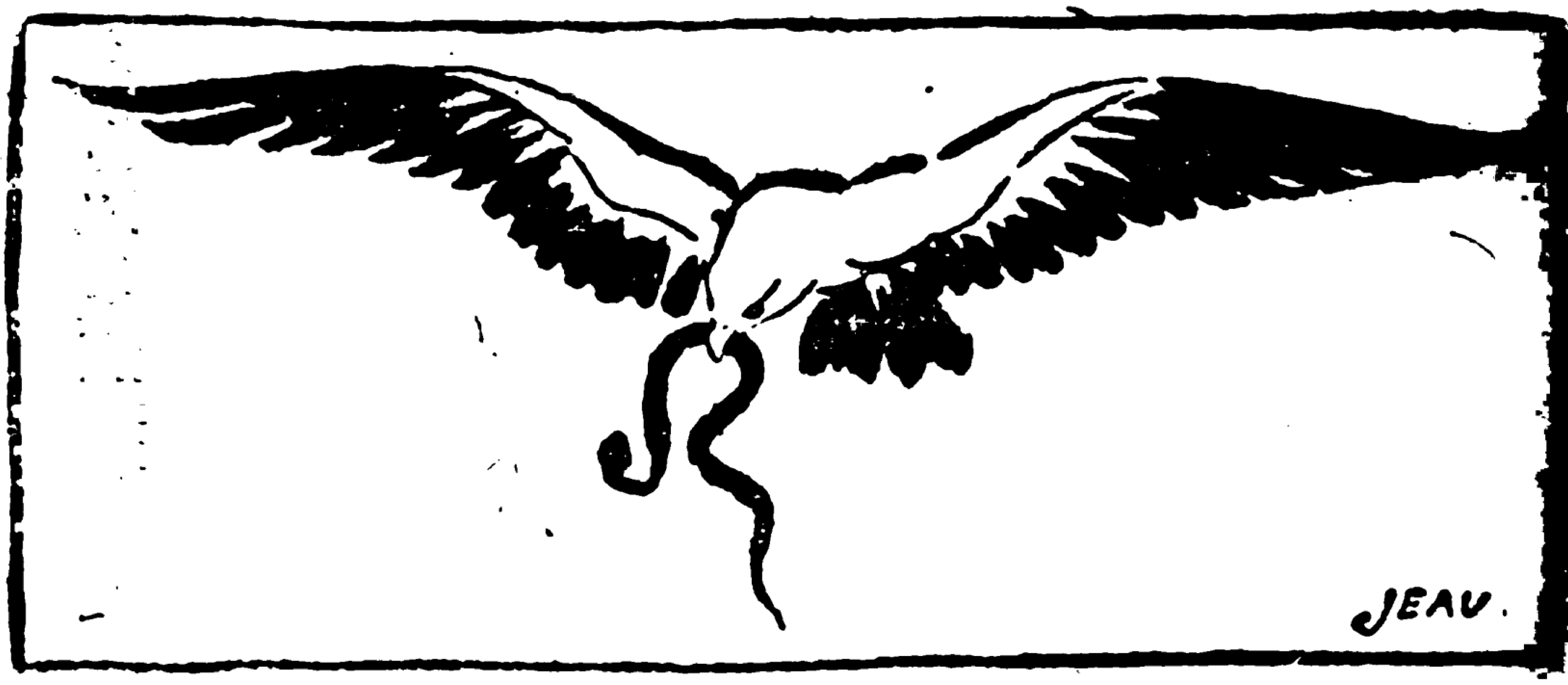
五版

我國の金城鐵壁として立國の最大强みであつた家族制度は個人主義的、社會主義的思想の成長と共に崩壞的行程にあるが如く、我經世家は此問題の爲に革命前の露西亞の如く、或恐怖に襲はれて居る。著者は本問題硏究家としての權威で、本書の一部は『婦人問題』として發表されて一度は當局の忌諱に觸れ絕版となつた者だが、澎湃として寄せ來たる解放的精神は、婦人問題にも、家族制度の上にも劃時代的の變革を來たさでは止まぬ氣勢である。敢えて我國の家族制度の崩壞、及婦人問題の前途を憂慮する人々に此一書を贈る。

河田嗣郎著 **農村問題と對策**（十一版） 定價貳圓 送料十七錢

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

——(支那に經濟立國策を提唱す)——



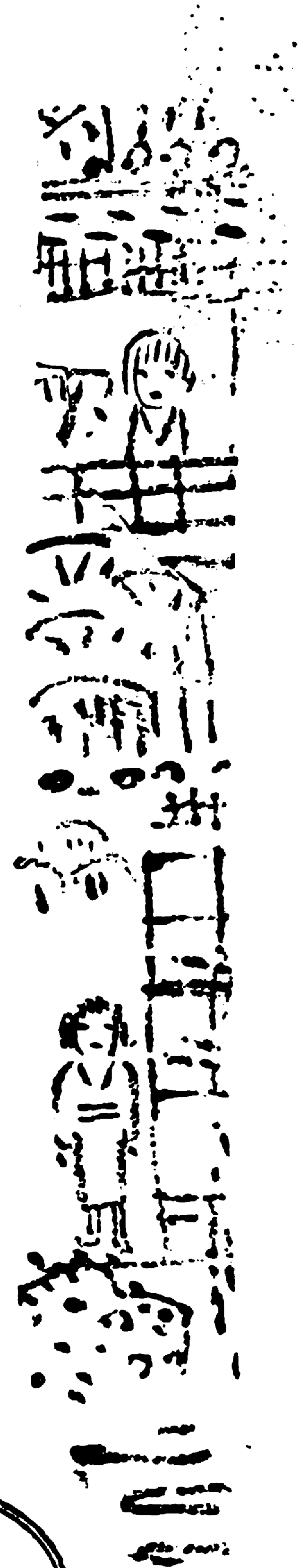
(新年號)

支那に經濟立國策を提唱す

奉天軍閥の傀儡として入京したかの觀があつた段祺瑞が、意外にも支那の武力統一に反對の意志を表明せるは彼の一進歩ではあるが、彼の財政方針は外債借欵によつて交通、牧畜、開墾の方面に一努力を試みんとするにあり。其の經濟組織の根本改革に何等觸るるなきは我徒をして失望せしめた。そして段政府の時局拾收宣言が、依然として過渡時代の政治宣言に止まり、近代的國家の採れる形式と樣違い、舊式資本主義的進行の猿眞似に止まるのはいよいよ以つて遺憾の極みである。彼は北洋軍閥の頭領として現下比類なき經歷の持主であり、よりよき人格の持主ではあるが、その財政的識見に於て零であることが新支那の前途に何等の光明を呼びかけない。孫文が經略の經綸をなす「次植民地」的　激も、大亞細亞主義の宣言も聊か六菖十菊の譏をまぬかれぬのみならず、彼等が革命に用意する[illegible]としては、あまりに非時代的であり、空疎な言葉に過ぎ、民衆の苦悶の具體的な處を[illegible]るのみか、眞に四億蒼生の生命をそそり立たしむる何者もなく、況して、社會的思想の[illegible]化したる現代青年に向つて投げられたる砲彈としては不發の憾みさえ抱かしめる。[illegible]らず、列國の何國をしても彼等軍閥者流の經綸に向つて眞の共鳴を叫ばしめないのみならず列強は現在そのままの財政計劃には安心して借款に應ずるものもなかろう。もしありとすればそは實に恐ろしき利權抵當の國混的の高利貸であらねばならぬ。

我々は一日も早く北京政府が近代的國家の形態を以つて完成さるることを希望するのもだが、それよりは百年を通ずる財政策を樹立し、少數者の經濟的權力を民衆の手中に歸せしめることにある。督軍、省長等の政治的、經濟的權力を剝奪して全國民の手に恢復することにある。もとより孫文の提唱する『十三人の旦那』を追放することには贊成はするがそれより一步前に成すべき實質の大業「經濟立國」が殘されてゐることを忘却してはならぬ。

英雄の事業——軍閥の權力爭奪——は支那に於て將に斷末魔である、でなければ民衆は永劫に塗炭の苦惱を忍ばねはならぬ。然し、革命支那の當然赴くべき過程は政治權力より經濟權力へ——少數者經濟權力を全民衆の手に——



思想と闘爭

森戸辰男

一

古代民族の神話は、現代の吾々にとつても、多くの示唆的なものを含んでゐるのであるが、斯様なものの一つとして私は『人類の墮落』に關するユダヤの神話を擧げることが出來ると思ふ。

舊約聖書の誌す所に從ふと、神から創られた最初の人類、アダムとエバとは、エデンの樂園の中に平和に棲んでゐた。彼等は別に生活に不自由することはなかつた。否、彼等はむしろ自己の勞働なしに、神の園に實る豐饒から、安易な生活をしてゐたとさへ考へられる。が、彼等は唯一つのことを斷念せなければならなかつた。即ち、彼等には園の中央にある認識の樹の實、善惡を識別する樹の實、眼の開ける樹の實を喰ふことだけは、重い刑罰を以て、否、死を以て

禁ぜられてゐたのである。言ひ換へれば、彼等は盲目に留まることを承認しなければならなかつたのだ。彼等は自ら思想することなしに、神の命ずるままに盲從の生活をなすべきであつた。かくて、神の絶對權威は動搖せず、人間は絶對服從をその本分とし、樂園には平和が——權威者の目から——支配した。ところが、玆にさかしらな蛇が出て來た。それは好奇心の象徴でもあらう。此の動物は私かに禁斷の木の實を食ふべく人間を誘うた。なるほど、眼を擧げてみれば、その樹は「食ふによく、目に麗はしく、且つ知慧からんがために慕はしき樹」であつた。そこで、人間は之を食うた。彼の目は開けた。彼は自ら物の理非を辨別する能力を得た。と同時に神の權威は動搖し始めた。樂園には、最早もとの平和が支配しなくなつた。神は人間の反逆に對して、その權威を守らなければならなくなつた。人間はエデンの園から追放された。人間は永遠に樂園を失うた。そして、再び人間が此の身の程を忘れた冒瀆を敢てせぬがために、園の東には、『ケルビムと自ら旋轉する焔の劍を置いて、生命の樹の途」が守備せられたと言ふのである、【創世記第二三章】

勿論、この神話には色々に解釋があるのであつて、私は別にそれに新なるものを附け加へようとするのではない。唯、私にとつては、人間の歴史が强權に對する反抗より始まつたこと、そしてまた人間の眞の認識の目醒めが、從つて思想が、所謂、强權との鬪爭に於て行はれた、と言ふことが、此上なく興味を惹くのである。

此のユダヤ神話の出來事が果して人間の墮落であるか、或は又、向上であるか、それは見る人の立場によつて違ふであらう。强權の立場から見れば、それが人間の墮落であることは、寸毫疑ひの餘地はない。併し、自由の見地から見れば、それはたしかに、人間の向上である。そのことは例へば「永遠の反逆者」バクーニンが此の同じ事實を次のやうに解釋してゐるのを見てもわかる。「吾々の最初の先祖アダムとエバは、ゴリラでないまでも、少くともゴリラと極く近い從兄弟同志で雜食的な貪慾な强剛な動物であつた。そしてそれは凡ての他の種類の動物に比べては、無限に高い程度

に、二つの貴重なる能力、即ち思想する能力と、反逆する能力及欲望とを持つてゐた。此等の兩能力と歴史の過程に於ける其の進歩的共働とは、人間の動物性（經濟）の積極的發展に於ける動的因素、否定的力を形造り、そしてそれ故にまた、人間の中に於ける『人間的なるもの』の一切を造るのである。」××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××××××××××。

人間が禁斷の果を食うたことが、人間の墮落であるか進歩であるかは、ともかくとして、強權の支配する社會、即ち階級社會には、何時の時代にも何處の國にも、普通人の近づくことを禁ぜられたる認識の樹がある。光りと自由とを求むる民衆は屢々之に近づかうとした。が彼等は多くの場合、彼等の生命を以てさへ此の冒瀆的行爲を贖はなければならなかつたのだ。此の知惠の樹は如何なる犧牲に於ても、嚴重に防護せられなければならぬ。×××、×××××××、×××××××××××××、×××××××××××××。從つて、各時代の認識の樹にその時代に應ずるケルビムと旋轉する焔の劍とによつて保護せられ來つた。×××××××××××××××××××××、××××××××××××××。

二

斯樣な見方に對して或人は直ちに答へるであらう。なるほど、古代の社會にあつては、頑迷なる權力者は知識と自立的思考とに對して無理解なる禁遏的態度を採つたであらう。が、近代の開明世界に於ける支配階級の態度は之と正反對であると。實際、現代文化の主潮たるヨーロツパ文明の最も最重なる特徴は、科學的知識とその應用とである。現代は知識の時代、科學の時代である、とは之を讚美する者によつても、之を呪咀する者によつても、均しく承認せらるる所

である。西方文明の此の特色は科學に於て顯著し、機械工業と技藝學（テクノロジイ）に於て、その最高の物的表現を見出してゐる。此等の事項に於ては、近代文明は創造的であり、自足的である、此等のものが先づ與へられてゐれば、ヨーロッパ文明の特色と思はれる所の剩餘のものは、それから自然と出て來る。その文化的構成は、此の實證的（マターオブファクト）知識の一團を實質的中核として、その周圍に叢生してゐるのである。」【ヹブレン、科學の地位】

此の如き實證的知識を基礎とする文明は、少くとも現實的生存競爭に於ては、他種の文明系統よりも有力であり、又同じ此の西歐文明の支配下にある國々の間にあつては、此の科學とその成果とを受容すること多き國民は、それだけ、他國民を凌駕し得る可能性を持ち得たのである。それ故に、近代國家の支配階級は相競うて、科學の進歩とその應用に盡瘁した。我國の如き軍國的色彩の强い國家に於てすらも、支配階級は、學問の進歩と敎育の普及とのためには、多大の注意と努力とを拂ひつゝあることは疑ひなき所である。

そして之に應じて、一般民衆の間にも亦、科學に對する信仰と科學的知識に對する渇望とが益々增して來た。故に室伏君はそのサゼステイブな近著『文明の沒落』の中に——詩人的誇張を以てではあるが——次のやう書いてゐるのである。「科學は既に久しく人々の常識である。人々は科學を恐れ、愛し、崇拜しつつ既に幾世紀かの長い旅路を辿つてきた。科學は今や自由民の間における宗教とまでなつた。人は今や神を恐れずして科學を恐れ、神を信ずることなくして、科學を信ずる。神々は死んで新しい神々が生れた。もろもろの科學はこれなのである。科學は勝ち誇つて知は今や力である。……そこに富がある。藥學がある。藝術がある。哲學がある。道德がある。」【文明の沒落二三〇—一頁】

果して此の如く眞の科學は吾々の周圍に充ち滿ちてゐるか。吾々は支配階級による科學的知識と自立的思想の拒否の下に窒息する代りに、科學的知識の範圍の中に溺れつゝあるのか。支配階級は吾々に認識の樹を開放し、吾々がその果

を救ひ得ないのは、唯、吾々の怠惰と愚昧と不運とのみに歸せらるべきものであるか。現代文明は果して科學的思想の過剰生產によつて沒落しつゝあるか。はたまた、それは科學的思想の不足のために、病みつつあるであるか。

三

私の見る所を以てすれば、現代文明の一つの重大なる疾患は、科學と思想との過剰に原因せずして、獨自的思想と科學的研究の不足、或は不徹底によるのである。現代の所謂文明諸國に於ても、依然として、ケルビムと焰の劍によつて守られた認識の樹があるからである。私は勿論、多くの批評家と共に、ヨーロッパ文明の眞髓が科學と廣義のテクノロジイにあることを承認するものである。が併し、それは自然科學と自然科學的テクノロジイである。此の領域に於ては、自由なる研究とその成果の自由なる應用とが公認せられたのみならず、場合によつて非常に奬勵せられさへした。從つて、此の自然科學の領域に於ては、最も刮目すべき發展があり、その結果、人間は自然及自然力の利用に於て大なる進歩があり、それに應じて、一般人類の幸福、少くともその物質基礎は、著しく增大し得る可能性が與へられたのである。

然しながら、社會科學の方面に於ては、此の如き思想の自由は與へられなかつた。私は社會科學の研究が全然防遏されたと言ふのでない。多くの方面に於て、その研究が公認せられ屢々奬勵されつつあることをさへ認める。併し、それは支配階級の階級的利益を傷けざる範圍に於て公認されたのであり、之を促進する限りに於て奬勵せられたのである。之に反して、此の支配階級の階級的支配を危うすると認められた自由思想は、一切之を禁遏するのが原則であつた。故に、社會科學の多くの部分に於ては、その根本問題を決定するものは、研究對象と研究方法との性質より生ずる避け難

き制約以外、何等の外的拘束を被らざる自由討究の結果ではなくして、當時の支配階級の階級的利益の命令であるのが通常であつた。此の意味に於て、中世の哲學が『教會の侍女』『神學の侍女』であつたやうに、近代の社會科學は——後に述ぶる例外を除いては——主として資本家階級の下僕であつたのである、即ち、多くの社會科學の部門にとつては、支配階級の階級的利益が、意識的もしくは無意識的ア・プリオリであつた。此處に、ケルビムと焔の劍とによつて守られた禁斷の果がある。玆に、吾々の思想の自由の限界がある。此の支配階級の階級的利益の神聖なる一線を越えて思想する者は、禍なるかな、それは人間の墮落である。罪である、死である。かくて、多くの所謂、社會科學の部門は、その科學と言ふ名にも拘らず、根本に於ては、眞實の意味に於ける科學の名に價しなかつたのである。

四

原始共產體の崩壞以來人類の社會は階級對立の社會であつた。××××××××、×××××××××××××××、×××××××。社會の剩餘の物的心的構成は、此の基本的事實に適應するのである。單に、それだけではない、××××××××××、×××××××××××××××××××××××××。××××××、××××、××××、××××××××××××××××××××××××、××××××××、×××××××××××××××。×、××××××、××、×××××××××××××××××××× 他方心的方面に於ては、新なる宗教、新なる道德、新なる科學による舊來の公的宗教、公的道德、公的科學に對する闘爭の形を採るのである。此の意味に於て、階級闘爭は常に文化闘爭である。

支配階級の强權の根據は、窮極的に於ては其當時の經濟組織に基く經濟的勢力に存するのであるが、その事實は必ずしも常に支配階級自身によつて明瞭に認識せられてゐたわけではない。屢々それは宗教的世界、形而上學的世界等の觀念の世界に存すると考へられた。從つて、此等の領域に於ける自由なる研究、獨自なる思想は、支配階級の權力を弱めるものとして絕對に禁遏された。公教會の歷史は、また同時に異端者迫害の歷史であつたとも考へられる。かくして、哲學の研究は久しく教權の下に壓迫されたのである。

今日に於て、その自由研究が當然のことと認められ、且つ、支配によつてそれが奬勵さへもせられつゝある自然科學ですら、此の如き自由を享有したのは、決してさまで遠い昔のことではない。例へば、今日吾々の常識となつてゐる地動說すらも、教權に對する多くの闘爭の後に、始めて確立せられた眞理である。近世に於ける地動說の創唱者コペルニクスが彼の『天體運行論』を公表したは、三十六年の躊躇の後（一五四三年）友人の烈しき督促により、やつとのことであつたが、而もそれは時の法王パウル三世に之を獻本し、のみならず彼の友人が愼重にもその序文の中に、これは『單なる假說』である旨を書き加へることによつて、僅かに、公教會及ルーテル、メランヒトン一派の迫害を免れたといふことだ。後、ガリレイはコペルニクスの說を繼承した。一六一六年、彼は此の說が反聖書的であるとの論難に對して、雄々しくも「研究は聖書の文句によつて妨げられてはならぬ、むしろ聖書の言ひ表はしを自然科學の確定事實に符合せしめるのが神學者の任務だ」と答へたさうである。併し、ローマの異端糺問所は地動說を以て「哲學的見地からは、馬鹿げた沒道理なものであり、且つ一部分は形式上異論である」と宣言し、コペルニクスの學說の流布を禁止すると共に、彼の書を禁斷書目に加へた。而もガリレイはなほ地動說主張を捨てなかつたので、彼は再び宗教裁判にかけられた。その判決によつて、流石のガリレイも遂に公判廷で公然とコペルニクス說を否認しなければならなかつた。俗說に

よれば、彼は裁判廷で地動說を否認した後、直ちに飛び上つて大地を踏みならしながら、『でもそれは動くんだ』「Eppur si muove」と呼んださうである。【マイエル百科大辭典】

コペルニクスのやうに著書を法王に獻本せず、ガリレイのやうに其の說を表面上放棄しなかつたブルーノーは同じ見解のために異端糺問所の裁判に基づき一六〇〇年にローマで焚殺されたのであつた。支配階級は自然科學の爭ひ難き正反對の論說にも拘らず、太陽をして地球の周圍を回轉させなければ承知しなかつたのである。

地球が太陽の一衛星であるとの學說と同樣に、今日では、小學生までの常識となつてゐるのは、生物進化の學說である。併し、此の學說も亦決して樂々とは主張されなかつたのだ。勿論、自由競爭を基調とした資本主義國家イギリスが生物進化に於ける自然陶汰、生存競爭の提唱者チャールズ・ダアヰンの功績を認め、彼の死するや（一八八二年）之をウエストミンスタア寺院に葬つたのは聊かの不思議もない。併し吾々はこの光榮に先つ祖父エラスマス・ダーヰンより父子三代に亘つて、輿論と戰ひつつ續けられた長年の研究の歷史が橫はつてゐることを忘れてはならない。のみならずなほ中世的敎權の支配の殘存した世界に於ける彼の先行者たちは決して左樣に有利な條件の下には置かれてはゐなかつた。

例へばフランスの生物學者ビュフォンは（一七〇七—八八年）は彼の有名な『自然史』の中に、明かに生物進化の事實を認めた一節を書いてゐるさうであるが、彼は其の事を記載せる後、直ちに一轉語を下して『夫れ然り豈に夫れ然らんや』（But No(!)と說き、更に之に加へて、「聖書の示す所によれば、凡ての動物は神の直接に創造したる者にて、凡ての種類の動物の最初の一對は、神の手に依り、初より完全に造り出だされたものである」と言うたさうである、ビュフォンに後るゝ四十年、ダアヰンに先立つ五十年、生物進化の理を世に公にしたラマルクは、そのために「凡ての方面から攻擊せられ、凡ての方面より惜むべき嘲弄に依つて迫害せられ」かくて長き間、凡ての人に見棄てられて、貧乏と盲目と

の生活を送つたとのことである、之に引き換へて、同代の動物學者キュヰエーは、當時の俗論に媚び、盛にラマルクに反對したために、後に擢でられて文部の局長となり、華族の榮譽をまでも授けられたとか。【河上肇『經濟と人生』三二一―四頁】

生物進化の學說も多くの思想上の鬪爭の後に漸く學界の共有物となり、遂に民衆の常識とさへなるに至つたのである。かくの如く、前代の支配階級は自然科學に對して、地球は宇宙の中心であり、人間は生物界に於ける特殊の被造物である、といふことを論述すべく命じたのであつた。

封建的支配階級は何が故に自然科學の研究に斯の如き壓迫を加へて來つたか、その理由は頗る單純である、彼等は彼等の權力の基礎が、彼等の全力を擧げて防護しつゝあつた所の、一定の神學的又形而上學的世界觀に存してゐると考へたからである。故に此の基礎を轉覆せんとする自然科學的自由思想は、とりもなほさず、彼等の支配的權力の根據を危うするものである、之は如何なる犧牲に於ても禁遏されなければならなかつた、かくて、自然科學上の多くの自由研究者は、全然沈默を守るか、又は保護色を用ゐるか、それとも又如何なる形でかかの刑罰を受けるかより外に道がなかつたのである

資本家的支配權の確立と共に少くとも此の事情は一變した。地動說はも早、定說である。ダァヰンはシエクスピアやグラッドストンと一所に、ウェストミンスタアに葬られた。吾々はニュウトンの引力說を信ずるも、アインシュタインの相對性原理を信ずるも自由であり、ワォレイス流の遺傳累積說を信ずるも、デ・フリイスの突變趨異說を信ずるも自由である。吾々はキリスト教を信じ得ると共に、佛教も信じ得、マホメット教徒でも恐らくモルモン信者でも構はず、更にまた無神論者として留まることもできるであらう。形而上學上唯心論に味方するも、又唯物論に贊するも、支配階級の間

ふ可きでない。吾々は權力から何の干渉を受くることなしに、認識論上に於ける論理主義者ともなり、心理主義者ともなり得る。吾々はたしかに、自由研究のヨリ廣い範圍、自由思想のヨリ廣い領分を持つてゐる。

此等の自然科學上、哲學上乃至宗教上の思想、研究の自由は何處から來たのであるか。現代支配階級の自由を愛する精神、寛容、同情より來つたのであるか。私は此の事實を全然否定はしないが、現代に於ける此の方面に於ける思想の自由は、主として支配階級の善良なる性質から來たのでなくして、支配的權力の根據に關する見解の推移に原因するものと考へる。現代支配階級は、最早、その支配的權力の根據を、神と人間との關係や、宇宙の構造や本體や、知識の性質やに存することを求めない。彼等は彼等の權力の根據が、吾々の現實的社會生活の事實、就中、經濟及政治にあることを認めるに至つたのである。斯樣にして、ケルビムと旋轉する焰の劍とは、彼處より此處に移されたのである。即ち、逆說のやうではあるが、現代支配階級は全力を擧げて、夫の無稽なる唯物史觀說を論擊しながら、實際に於ては、自ら最も忠實にその論旨を實踐しつゝあるのである。今や神學と哲學と自然科學とは解放された。のみならず、社會科學に於ても、支配階級の支配力の根據を傷けざる範圍に於て、研究の自由が許されるに至つた。これが現代に於ける『思想の自由』である。併し、吾々は誤つてはならない。吾々が若し社會科學上に於ける研究を突き進めて丁度支配階級の階級的利益の限界にまで來る時に、吾々は再びパラダイスの東の入口に置かれたと言ふケルビムと旋轉する焰の劍に出喰はすのである。其處では社會科學上の自然研究者は、自由科學上の先行者と同じやうに、全然沈默を守るか、如何なる形に於てかローマ法王に獻本し、若しくは、如何なる意味に於てか Eppur si muove か dnt no を彼の研究に附け加へるか、さうでなければ、公私何れかの社會的制裁を甘受しなければならぬのであつた。

故に、社會科學に於て、此の支配階級から置かれた限界を乘り越えて、その獨立的研究を續けた思想家の生涯は、此

の自由を叫ばるゝ文明世界にあつても、多くの場合、迫害と貧窮との連續であつた。私は、此の如き思想家の最も偉大なるものの一人、マルクスの生涯に就いて、諸君の記憶を呼び起して見たい。河上博士は、彼の資本論の成立に關聯して彼の生涯の一面を次の如く書かれてゐる。「彼が初めて『資本』の腹案を作りたるは、一八五二年頃のことである。回顧するに、彼が其の祖國獨逸より逐はれ、新婚の愛妻と相携へて巴里に逃げ落ちたるは、一八四三年、彼が二十五歳の時である。居ること二年、佛國大宰相ギゾーの爲に、追はれてブルュッセルに移り、居ること三年、又白耳義政府の爲に追はれて巴里に歸り、居ること二ケ月、後獨逸に歸國し、一新聞を創刊して其主筆となりしが、間もなく發行禁止を命ぜられ、彼は再び國外に追放せらるゝ身となれり。仍て一旦巴里に逃れたるに、居ること一ケ月にして再び退去の命を受け、大陸の天地身を容るゝ所なきに至つて、終に英京倫敦に落ちのびたるは、一八四九年六月末のことである。扨て、恒産なき身の斯く諸國を流浪しては、軈て困窮に陷るも自然の成行きである。……當時、マルクス夫人の認めた書簡の一節……に依ると、家賃の滯りの爲に「二人の執達吏入り來り、僅かばかりの所有品は、寢台も、襯衣も、上衣も、凡て差押へ、猶、幼時の搖床も、泣き悲しみつゝ側に立ち居たる二人の娘の玩具も、差押へた」といふ事もあつた。其後彼が漸く一家の露命を繋ぎ得たるは『紐育トリビューン』の倫敦通信員となり、一文章毎に五弗の報酬を貰ひ得たるが爲である。彼が大著『資本』の著作に志せし當時の境遇は、實に此の如きものであつた。」（河上肇著、社會問題管見一九〇―二頁）

迫害されたのは彼自身のみではない、彼と同じ運命否より殘酷な運命を擔ふた多くの先輩を持つてゐる。而して此の如き思想其者は當代に於ける異端邪說である。異端糺問所の代りに國家の警察力と裁判所とが此の新なる異端の禁遏に用ひられた。思想上の怪物は退治せねばならぬ。而も此の「怪物がヨーロッパに出沒する―共產主義の怪物が。」有きヨ

ーロッパの凡ての諸強國は、此の怪物を退治する爲に神聖同盟を結んだ、法王とツアールとか、メッタアニヒとギゾオとか、フランスの急進主義者とドイツの警察のスパイどもとか。」(共産黨宣言) 社會科學に於ける禁斷の果は、此の神聖なる大同團結によつて擁護せられ又擁護せられつゝある。これが社會科學の此の領域に於ける自由なる思想を如何に迫害し、從つて此の領域に於ける科學上の自由と進歩とが、如何に多くの犧牲によつて遂げられたかは、諸國の社會主義思想史を繙けば直ちにわかることである。

それはともかく、自然科學に於ける進歩にも拘はらず、社會科學の領域に於ては、依然として、諸天體は、支配階級を中心にして、その周圍を廻轉しなければならず、その生物界に於ては支配階級と云ふ人類が特殊の地位を認めなければならぬのである。支配階級は社會科學に對してかく命ずるのである。×××××××××××××、××××××××××××××、×××、××××××××××××××、×××××××××××××××。故に、現代社會科學の最も重大なる疾患の一つが、伏在してゐるのだと考へる。

五

現代の支配階級は、實生活の組織に於てその經濟的政治的優越を維持し、社會科學の世界に於て「過激」なる學說が彼等の階級的利益に論駁を加へぬ限り、凡ての科學的研究と思想的創造との自由を認める、否、之を獎勵するのである。何となれば、此等の自由は今や彼等にとつて利益を齎すのだから。と言ふのは、社會生活にあつて、所謂文化財の分配は經濟的政治的勢力とによつて決せられる。經濟生活の仕組に於ける急所をさへ掴へて置けば、それで必要且つ十分である。さうしさへすれば現代の社會の仕組に於ては、自然科學上の發明も藝術上の創造も、先づ主として支配階級

の掌中に落ち來るのである。そして民衆は僅かに机からこぼれた屑を拾ひ得るに過ぎないのである。

現代の社會組織に於て、凡て文明進步の成果が先づ特權階級の利益に歸する次第をクロポトキンはその小冊子「青年に訴ふ」に於て最もヴイヴイツドに説示してゐる。彼は書いて言ふ。例へば、諸君が醫者になつて偶然にも貧民窟の病人を診察に行つたとする。そして「薄暗い冷たい室の中に汚ないぼろ蒲團に包まれて、毀れた寢臺の上に、横たはつてゐる。病婦を見る。その側には、子供が襤褸着物の中にふるへながら、大きな眼を開いて諸君を見つめてゐる」。その夫は數日來失業してゐるのだと言ふ。それはどうでもよいとして、諸君は直ちに、「此の病氣の原因は榮養不良と新しい空氣の缺乏による貧血病であると、一見の下に診斷した。諸君は此の病人に向つて何と言ふか。毎日甘いビフテキを食べろと言ふか。郊外に出て少し運動しろと言ふか。もつと乾燥した空氣の流通のいい室に寢ろと言ふか。馬鹿な！それが出來る位なら諸君の忠告を待たないで、とうの昔にやつてゐるのだ」。恐らく諸君も亦「さう云ひたくとも、遂にそれを口から出すことができないで、張り裂けるやうな胸を抱いて、唇に呪咀を浮べて、そしてその家を立ち去るであらう」。一體、此の如き害惡の多くは醫學衞生學の不進步のためではない。「此れ等の學問は、とうの昔に、吾々の健康を保つために吾々はどう生活しなければならないか吾々に教へてゐる。併し、此の領域に於てなされた廣大な研究は全く吾々の書物の中に死文となつてゐるだけぢやないか。それはまたなぜか。それは今日では、科學が少數特權者のためにだけ造られてゐるからだ。××××××××××××××××××××××××××××、××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××××××。」

「次に吾々は、諸君が技術家になるものと想像しよう。諸君は勞働を輕易にしようと何等かの發明を思ひ立ち、青春の身をそれにささげて、幾晩も幾晩も徹夜した結果、遂にある貴重なる發見をしたとする。そこで、諸君は直ぐにそれを實

地に應用して見て、其の結果が餘りに豫想と反するので、大に驚くだらう。數十萬の職工はこれがために職を失ひ、少年勞働者が一種の機械のやうなものとなつて、それに代はる。そして數人の資本家はこれがために巨大の富を得て祝盃を擧げる。噫。これが果して諸君が豫想した所だつたらうか。恐らく諸君は、近代の産業史を學んで、次の結論に到達するであらう、即ち私有財産と勞銀制度の下に於ては、一切の新發明は勞働者の幸福を增進する代りに、その隷屬狀態を强めるものであり、益々失業を頻繁にし恐慌を劇烈にするばかりだ」と。【大杉榮「正義を求める心」三五九—八五頁】

私は此上クロポトキンと共に、純正科學の研究者や法律家や小學校敎師や記者や藝術家の後を追うて考へる煩を避けよう。要するに、現代の階級社會に於ては、その經濟的政治的組織の結果、近代文明が自然科學とその技術の進步によつて獲たる成果が、主として支配階級によつて壟斷されてゐると言ふ事實である。經濟は人間社會の螺旋である。現代の支配階級は正に意識的に、若くは無意識的に、この社會生活の螺旋を捕まへてゐるのである。社會科學の本來の任務はこの社會學的事實を闡明し、自然科學とその應用が少數特權者にのみならず、一般民衆の幸福に資するためには、如何なる社會科學的技術が適用せらるべきか、を明かにしなければならないのだ。×××、×××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××。

クロポトキンは上記の小冊子に於て、「今日はもう科學上の眞理や發見を蓄積する時ではない。」來つて最も緊切なる社會解放の實際運動に參加せよ、と、靑年に訴へたのである。私は之に少しの異論を挾むものではない。併し、私は今、諸君と共に、學徒として、即ち社會生活の觀念的形態の方面に直接の興味を持つものとして、『支配階級の下僕たる範圍を多く脫却してゐない社會科學を眞實の科學たらしめ、それにふさはしい社會科學的技術を發見するための努力が、實生活上に於ける解放運動と、たとへ同列でなくとも、之に次ぐ重要なる任務であることを確信したいのである。

六

私は、現代文明の惠澤は、主として自然科學の進歩と共の有効なる應用とに歸せらるべきあると同時に、現代文明の害惡は、主として社會科學の不進歩とその成果の應用の澁滯とに歸せらるべきものであると考へてゐる。

そこで吾々は進んで、現代に於て、何故社會科學が自然科學と列んで進歩し得なかつたかと言ふことを調べて見たければならぬ。

自然科學に對して社會科學の發達を困難ならしめた原因には、大まかに二種類あると思ふ。一つは學問の對象から來るものであつて、社會科學の對象が人間の社會であると言ふ點に存する。即ち、社會科學は歴史的に成立した複雜なる環境の中にあつて、自己の意志を持つて活動する人間の集團生活を研究しなければならぬのであるから、その研究が無心なる自然を對象とする所謂、自然科學的研究に比較して遙かに困難なことは、多くの人の異論なき所であらう。併し、此の點に關しては、今日、私は之を論ずる積りはない。それはたしかに重大なる學問上の問題である、同時に、この困難はまた研究對象それ自身に附着する困難であるから、此の困難は人間が人間である限り、ある限度に於ては常に存續するであらうことも疑なき事實である。

併し、社會科學研究の困難は單に研究對象即ち、人間の社會現象の複雜なることのみに、原因するものではない。現代に於ける社會科學の領域に於ては、何等かの他の理由により、——第二の點の根本的研究は必然に此の第二の理由に導くのであるが——自然科學に於けるが如き科學的精神が徹底せず、恰も中世に於ける自然科學に於けるが如く、支配階級の利益がその最後の命令者であると言ふ狀態から餘りに多くを脫却してゐないのである。此の第二種の障害に就い

て、私は次により詳細に考へて見たいと思ふ。

第一に、最も露骨なるものは社會科學上に於ける自由研究の直接的壓迫である。これは多くの註釋と例證とを必要としないまでに明瞭なる現代の事實である。×××、×××××××××××××××××××××××××××××××××××、×××。

一般から云へば、支配階級がその封建的色彩が濃厚であればあるだけ、一般思想特に社會的思想に就いて神經過敏である。其の理由は、彼等の支配がも早鞏固なる經濟的基礎をさへ持ち得なくなつたからである。彼等を支うるものは主として傳統的イデオロギイである。而も、此のイデオロギイたるや、既にその適應した經濟的基礎を喪うて、解消の運命が日に迫つてゐるのである。從つて彼等は無理に、此の觀念の世界を維持しなければならぬ。彼等は運命的に精神主義者となり、觀念論者となり御都合理想主義者たらざるを得ない。此の點に於て彼等は丁度、異端糺問所を持つた中世の教權に酷似してゐる。吾々は少くとも此の如き例の一つとして革命前のロシヤの支配階級を擧げ得ると思ふ。

第二には、一面的學說及一面的報道の奬勵普及である。一定の問題に關して相反する二つの主張があつたとする。吾々はその一方の申分だけを聞けば、兩方とも相當に首肯すべき理由があるやうに思へる。吾々は兩者を合せ聞いて始めて、公平な結論に到達することができるのである。然るに、その片方の主張に口を緘し、他の方の者に自由に喋べらせる時には、人々は決して此の言論からは事物の眞相を認識するに至らないであらう。然るに、社會科學に於ては、正に此のことが行はれつつあるのである。講演に於て、書籍に於て、雜誌に於て、特に新聞に於て、常に、直接間接、支配階級的見地よりする材料の取捨選擇が行はれつつあるのである。

よし反對の主張が全然禁遏されないまでも、現代は所謂プロパガンダの時代である。個人間に於ける議論に於て、聲の大きい者、度々喋べる者が屢々勝者であるかのやうな印象を一般傍觀者に與へるやうに、社會に於てはプロパガンダの上手なものが、ともかくさしあたり勝利を占める。大きな新聞廣告を度々見せつけられると、人々は始め馬鹿にしてゐた有用ドラッタも、それではきくのかなあと考へるやうになるやうなものである。そして此のプロパガンダの能力は結局權力と富に依存する。從つて、常態に於ては、富と權力との所有者である支配階級的見解が、社會に於ては他の見解を壓倒し去る。かくして一般民衆は、常に社會科學上の獨斷なき主張と、社會的事象に關する公平なる報道とを聞くことから妨げられてゐるのである。

從つて、一般民衆は、少くとも社會的思想と社會的事實の報道として提供せられるものに就いては、先づ之を受容する前に、自己の判斷を加へなければならぬ。先づ疑うてかからねばならぬ。大杉君は何處かに面白いことを書いてゐる。私は善惡を識別する一つ確實の標準を持つてゐる、×××××××××××××××、××　××××××××、×××××××××、と。これは稍々誇張であらう。併し、私は少くとも民衆政治の基礎が『不信任』であると主張したメンガアの意見には、多くの傾聽すべき眞理が含まれてゐると思ふ。【民衆政策七一—一頁】民衆が安全なる政治を確保するために、常に國家活動を「眼醒めたる不信任」を以て監視しなければならぬと同じく、民衆は、社會的眞實に到達し得んがために、彼等に提供さるる一切の學說報道に對しても亦同じ「目醒めたる不信任」を以て對しなければならぬ。

然るに、今日の教育は、少くとも社會科學の關する限り、民衆の間に、獨立したる判斷力理解力を養ふことを最も等閑視し、その反對に與へられたる一定の社會的見地を盲目的に受け容れさせることに努めてゐるのである。私は何時も

ながら、外國に例を求めることを許して貰ひたい。但しそれは多くの點に於て日本の範例となつた時の舊ドイツであるから、餘りに縁遠い話でもないであらう。ドイツのカイゼル・ヰルヘルム二世は、一八八九年の五月一日の敎育に關する勅令の內に次のやうに言うてゐる。「我祖國の歷史は、特にまた、現世紀の當初より現在の社會政策的立法に至る、我國の社會的經濟的立法及發展の歷史を取扱ひ、之れによつて、プロシヤ王國が舊くより、彼等の手の勞働によつて生活しなければならぬ人民に對して、國母としての保護を十分に與へ來り、彼等の肉體的精神的幸福を增進することをその任務となし來つたこと、及び、將來に於てもまた、勞働者は唯秩序的國家の首長たる國王の保護と眷顧の下に於てのみ正義と彼等の生計の保障とを期待し得る、と言ふことを說示しなければならぬ。特に、効益の見地から、詳密なる實際的事情の說明によつて、既に青年に對しても亦、帝王の指導の下に立つ秩序的國家制度が、法律的經濟的生存に於ける各人の保護と繁榮とのための不可見の前提條件であること、之に反して社會民主主義の學說が實際上實行不能のものであり、且つ之を强いて實行すれば、各人の自由はその家庭生活に至るまで、耐え難き强制を受けると言ふことを說き明かすべきである。所謂、社會主義者の理想に就ては、彼等自身の文句によつて十分その特徴を示し、而も之をなすに方つては、青年の感情及び實際的精神に對して、社會主義が戰慄すべきものと映ずるやうな方法でしなければならぬ。」【マッタス・アードラア『新しき人』一八頁引用】此の如き敎育方針の下には、社會科學上の眞實なる認識が到底學び得べき筈はない。

ラッセルは彼の『自由思想』に關する小冊子の中にアメリカからの面白い例を擧げてゐる。これは專制主義の權化であるカイゼルの國ドイツではなくて、デモクラシイの最も進歩してゐると言ふ自由の國アメリカである。紐育洲に於ては洲政府の認可なしには如何なる學校も設立し得ないのであるが、最近の法律は、「强力、暴力又は不法手段により現

存政府を顛覆せんとする學說の教授を含む」やうな教育計畫を持つ學校には、認可を與へぬことを規定して居る。「現存政府」と言ふ語に何の制限もないので、大戰中にカイゼルの政府を倒せとも教へてならぬことにもなるが、勿論、之は起草者の手落ちであつて法律の眞意ではない。それは同時に定められた洲立學校教員法が之を明かに示してゐる。此の法律によると、教員免狀は「合衆國及本洲の政府に忠誠且つ從順なることを」「十分に示した」者にのみ與へらるべく、之に反して、時處を問はず「本洲及合衆國の政府と異る何等かの政府の形態を」辯護したる者に對しては、拒否せらるべきである。更に、法律を起草した委員會は「現存の社會制度をよしと認めぬ」教員は「彼の公職を放棄すべきであり、」且つ「社會的變化の理論を論議するに熱心ならぬ人々には、靑年及成年を教育して公民的責任を涵養するの仕事を委任することはできない」と言ふことを決議したさうである。ラッセルは書いてゐる。「斯樣な法律の結果は非常に危險である。假りに、議論の便宜のために、紐育洲の政府と社會制度とが地球上嘗て存在したものゝ中最善なものであることを認めよう。併し、之を認めてすらも、恐らく兩者に將來、改善の餘地がないとは何人も言ひ切れまい。ところで、この明な命題、即ち此等の現存政府及社會制度が改善可能であると言ふことを承認する者は、何人も、法律上紐育洲立學校の教員にはなれぬのである。故に、法律は、凡て教育者は僞善者か愚人たるべし、と命令してゐるのである。」(ラッセル、自由思想と官的宣傳二四―七頁」同じ小冊子に於てラッセルが「××××××××××、×××××××××××××××××××××××、××××、××××」と言ふたこの日本に就いては、私は玆に論述するの餘裕を持つてゐない。ともかく、斯樣なる教育制度は――各國大同小異であるが――如何に贔屓目に見ても、豫斷なき社會科學的研究を促進するにふさはしい施設とは云へないであらう。

併しながら、社會科學上の自由思想と自由研究とを妨げる障害としては、上述の消極、積極の直接手段と共に、更に

間接的なるものがある。而も、その社會科學的進歩に及ぼす害惡は、決して前者に劣らないのだ。私は此の如きものとして經濟的壓迫を擧げたい。之が第三の點である。抽象的に考ふれば吾々個人は十分思想の自由を持つてゐる。各人は獨立である。併し、吾々が肉體を持つてゐる以上、吾々は生活のために社會と接觸しなければならぬ。そしてその結果は何等かの形に於て經濟力を支配しつゝある者に依存しなければならぬのが常則である。而も、此の如き力の把握者は現代の支配階級に屬する。而して彼等はそれが拔群なる特殊技能を持たない限り、自己の階級に不利益なる思想を抱いてゐるものを雇傭しないであらう。例へば、工業會社は、物理學上の在來の根本假定たるニュウトン說に疑を懷く所の相對性原理の信奉者をも何の不安もなく雇ひ入れるだらう。が、若し假りに申込者が、自分は現代產業組織の根基に疑を挾んでゐる、自分は社會主義である、と公言したら、その重役たちは果して此の社會科學上の自由思想家をば、先きの自然科學上の危險思想家と同樣に、喜んで歡迎するであらうか。又、例へば、我國に於ける最大の雇主である所の國家が、その傭人即ち官吏を選擇するとする。彼が、クリスチヤンであつても、佛教徒であつても、神道崇敬者であつてもはたまた無神論者であつても、國家は恐らく之を採用するであらう。併し、若し此の求職者が自分は政治學上デモクラシイの信奉者であると言つたら國家はそれに對して前同樣に無關心であるであらうか。支配階級は人々に天上に於ける神々の世界を選ぶの自由を與へるが、地上に於ける實社會の改善に關する理想を選擇することは之を許さないのである。故に、社會科學上に於て自由なる見地を抱くものは、生活を斷念するか、それとも自分の思想を捨てるか、それともまた何等かの形で之を隱蔽し韜晦して行くより道はないのである。斯樣にして、社會科學上の自由研究、獨自的思想は非常な實際上の困難に逢着するのである。

勿論、人間の思想が斯樣なことで折曲げられ窒息させられると言ふことは、甚だあさましいことである。理想に燃え

氣を負うた――併し實生活の外にある――青年學生諸君は、私を以て或は人間を侮辱するものと批難するかも知れない。私は今日諸君の此の盛なる威氣を疑はふとも、挫かうともする者ではさらさらない。併し、諸君が實生活に入つた後十年、諸君自身と理想に燃えた諸君の友人との生活經驗を省察點檢された後、私は諸君と共に再び膝を交へて此の同じ問題に就いて論ずる機會を持ちたいと思ふ。實際、此の經濟的壓迫は、甚だ不愉快な事實であるが、社會科學上の進歩に對する最も有効なる障害をなしつゝあるのである。

或は諸君は言ふかも知れぬ。それは一般人の話である。苟くも學問研究を自己の任務とする學者には當篏まらないと。併し諸君は、吾々學者も亦人間であつて、米の飯を喰はねば、學問ばかり喰つてゐたのでは腹が張らぬ動物である、と言ふ事實を忘れてはならぬ。言ふまでもなく、學問研究の動機を單なる直接なる經濟的利益の追求、不利益の回避に歸せようとする見解は間違つてゐる。吾々は野蠻民族であつた時からヴブレンの所謂「爲にする處なき好奇心」（アイドル・キューリオシティ）を有てゐる、之を學者の尊嚴にふさはしい言葉で云へば、研究のために研究する精神、學問のために學問する精神、眞理のため眞理を求める精神である。此の精神はたしかに學問の發達を導いた最も有力な衝動の一つであることを私は疑ふものではない。此の精神は論理的には、研究其者に附着する內在的制限以外には、何等外的の制限束縛を承認せさるものである。故に、若し人々が單に、形式的論理的にのみ物事を觀察するならば、學者の研究には、社會の階級的支配が要求する何等の外的拘束も存在しない筈である、從つてまた、社會科學には階級的色彩が存在しないことにもなるであらう。

けれども、學者は論理の機械ではなくて人間である。その肉體と共に自分の意志と感情とを持つた人間である。彼が肉體生活のために米の飯を食ひ來つたやうに、彼の精神は常に彼の生れた境遇からその精神的滋養分を攝取して育つて

來たのである。そして此の精神的環境は先に說明したやうに、主として支配階級的見地から組立てられ調合せられてゐるのである。故に、學者の精神には旣に無意識に運命的に、支配階級的意識が這入つてゐるのだ。少からぬ社會科學者は眞面目に、確信を以て、決して權力に阿附するためでもなく、經濟的利益を望むためでもなく、支配階級的の特殊見地に立つ社會科學を以て滿足し、之を擁護することを任務としてゐるのである。彼等の『爲にする處なき好奇心』が彼等の生活環境によつて無意識の裡に、階級的制限を受けてゐることを氣付かないのである。學者の論理主義が彼れ自身の心理によつて反逆されたのである。私は此の社會科學者の心理的限界、即ち彼の支配階級的意識又は無意識を以て、社會科學の進步を困難ならしめた第四點として揭げたいのである。

論理は眞理を作り出すものではない。それは眞理の生產行程に於ける一手段である。此の行程に於て論理を用ゐる者は人間である。一定の心理を持つた人間である。從つて個々の研究者の此の心理が、彼の論理の使用に限界を附するのである。のみならず、研究者は、此の論理を應用すべき自分の研究課題の選擇に於て、旣に彼の心理によつて影響されてゐるのである。普遍的妥當を要求する概念上の論理と階級的制約を含む研究者の具體的心理、此の兩者の特殊なる結合が、その矛盾不徹底を包藏するブルジョア的社會科學の特質をなすものであると考へられる。マルクス主義者は、此の不徹底なるブルジョア科學に對立して、プロレタリア科學を對置せんとするのである。此の兩科學の對立に關してマックス・アドラアは次のやうに言うてゐる。此の兩科學の對立は主として『研究態度』(フオルシユングス・アルト)の相違であつて、その負擔者の相違、又はその追求する階級利害の相違に存するのではない。即ち、必しもブルジョア科學の負擔者がブルジョアであり、プロレタリア科學者の負擔者がプロレタリアであるわけではない「それは多くの場合、少くとも、今日はなほ研學の機會を殆んど持たぬプロレタリアには當嵌まらず、又ブルジョア的學者が必ずしも皆ブルジョアであるわけでもない。更に、ま

た、此の區別は、研究が一つの場合には、意識的にブルジョアの利益の追求のために、他の場合には意識的にプロレタリアの利益の追求のために行はれる、と言ふことでもない。否、此の言葉は一般に、學者の精神的構成の傾向を意味するに外ならぬ、即ち、學者の心的傾向が、現代社會秩序と明白に癒合し、從つて、その範疇を越えては最早思想し得ず、此の限界の點まで來ると、直ちに靜平なる論理的思惟を捨てて、此の限界を超脫した思想系統に對して感情的な反對的立場を採るやうな種類のものであるか、それとも、むしろ現在及過去の歷史的「捉はれ」からの超脫的思惟が、彼等の學問的意識其者の一部をなしつつあるやうな種類のものであるかに係つてゐるのである。そして唯、此の超脫的思索の要求する社會生活の狀態の社會的負擔者として、プロレタリアが出現したが故に、そして、他方に於て此のプロレタリアが同樣にその社會的地位によつて此の如き超脫的思惟をなすべく宿命付けられてゐるが故に、即ち、現在社會に對する超脫的思惟と超脫的行動とがプロレタリアに於て社會學的事實として結合したが故に、マルクスとエンゲルスとは此の如き思想方法をプロレタリア的と呼び、此の思想方法によつて指導された科學をプロレタリア的科學と名づけたのである。」【マックス・アードラア、マルキシズムの國家觀三一四―五頁】此の多產的な超脫的思惟、即ちプロレタリア的思想方法が、現代の社會科學者の多くにとつて、その心的構成の上から、殆んど宿命的に不可能にされてゐることは先に說明した通りである。

故に、社會科學の攻究者にとつては、就中、市民的、小市民的起源の研究者にとつては、所謂學問研究の論理的方法論よりも、自己の心理的省察が根本的に重要である。絕えざる自己省察と不撓の內的闘爭とによつてのみ、吾々はその中に育つた支配階級的考へ方から超脫し得るのである。夫のマルクスの全生涯は、彼が彼の時代に要求したと同じやうに彼個人にとつても最も犀利にして最も峻嚴なる『意識の改良』『自己啓蒙』『自己諒解』に對する不斷の闘爭の連續であ

つた。茲に彼が自ら小市民的知識階級出であつたにも拘らず、よくプロレタリア科學の樹立者たるを得た秘訣が存してゐると思はれる。

最後に、私が社會科學不進步の一事由として指摘したいのは、上述の如き事情から、社會科學に於ては、自然科學に於けるやうに、眞理に對する誠實、即ち忠信をその學者に期待し得ないことである。

誠實ヴアルハフテイツヒカイト、又は正直、即ち、自分の眞實であると信ずることを語つて僞らない、と言ふことは一般市民にとつても重要なる德目の一つである。併し、それは學問的研究の上には致命的に重要である。更にまた、研究者が自己の研究の結果に基づき眞實であると確信したことを自由に發表し得ると言ふことは、科學發達の最要の條件である。故に、誠實は學者の有すべき德目中第一位に位しなければならぬと同時に、社會はその學問的進步だけのためにも、是非とも此の道德の涵養を計らねばならぬ筈である。

例へば、醫學に例を引いて見れば過般嗜眠腦炎が流行して人々を脅威したことがある。さうすると醫者は熱心に此の不明なる病源を研究し、同時に之が治療の方法を工夫する。そして、その自由研究によつて到達したる結果を正直に公表し、學界は之に公正なる批評を加へる。斯う云ふ順序で、今日の醫學はずんずん進步しつつある。ところで、現代の社會其者は、單に流行病のみならず、實に重大な疾患に病んで居る。爲政者も民衆も學者も之に惱んでゐる。之を見て醫者は言ふであらう。それなら、社會科學者は吾々のやるやうにやつたらどうだ。各々此の社會の病源と治療及豫防方法とに關する自由なる研究によつて到達したる結果を公表し、此等の結果を相互に比較考量し、自由なる論議によつてより高い眞理に到達したらよいではないか、さうすれば、社會科學も發達すればその應用によつて人間の幸福も增進するであらうと。一々御尤も千萬である。少からぬ科學者は社會の病源に關する一定の見解を持ち、一定の治療方法をさ

へも考へてゐるのである。併し、彼は例へば醫學に於けるやうに自由なる公表と自由なる討議とをなすの自由を持つてゐない。此處に問題があるのである。少からぬ社會科學者は現代社會に於ては學者としての最高の德目、誠實を實行し得ないのだ。彼等は自己の眞理と信ずる所を正直に語り得ないのだ。彼等は法王に献本するか、「パツト・ノオ」を附するか、エツプール・シ・ムオエと言ふか、しなければならぬのである。諸君にして若し少しの想像力があるならば、現代に於ける眞摯なる社會科學者の勞作の行間には、到る處に此の如き悲痛なる書かれざる多くの Eppur si muove や but no を發見するであらう。社會は社會科學研究者から最も多くの眞理を聞く必要があるにも拘らず、彼等が誠實にその所信を語ることを不可能ならしめつつあるのである。社會科學者は、眞實を語り得ない。そして聞くものは暗中を摸索し、漸く何者かを、正解若くは誤解するのである。此の如き狀態が果して社會科學の進步を促進するに適當な狀態と何人か云ひ得るか。

私は以上五點に亘つて、現代社會に於て、社會科學の根本的研究を困難ならしめる特殊の事情を稍々詳しく述べた。併し此等の諸事情は根本に於ては、現代社會が階級對立の社會であるといふ事實から生ずるのである。故に、社會科學の根本的研究の不進步は、從つてまた現代文明の病患は現代社會の階級的構成に由來すると斷言することもできると思ふ。

七

或人は考へるであらう。なるほど社會の現在の狀態は社會科學の眞の進步に不適當である。併し、それは未だ資本主義が徹底しないからである。資本主義が封建的要素を驅逐するに從うて、此の方面に於ても益々多くの自由が與へられ

ろであらう。資本主義は本來自由主義であり、個人の自由を尊重するのだから。現に、吾國に於ても資本主義の發展と共に、社會科學研究の自由が増大しつゝあるではないかと。

一應道理があるやうにも聞える。併し此の主張には多くの觀念の混雜があると思ふ。第一に、自然科學的哲學的研究との社會的科學的研究との混同がある。資本家階級が封建的支配階級に對立して、自然科學上及哲學的研究の自由を主張し、且つ彼等の階級的利益を危殆ならしめざる限り、社會科學的研究を解放若しくは奬勵したことは、上述の如くである。併し、社會科學上の所謂『高等批評』は、常に之を禁遏し、又は禁遏せんと欲したのである。

第二に、論者は前期資本主義と後期資本主義とを混合してゐる。前期資本主義殊にその搖籃期に於ては、勞働者の搾取に於ての自由と共に、資本家相互の間に於ける競爭の自由が理論上のみならず事實上にも存在した。それは眞實の意味に於ける自由競爭の時代であつた。それは小規模なる商品生產者の時代である。その時代に特色を與へたものは、むしろ小市民の世界であつたやうだ。彼等はお互に恒產を有し、自己若くは僅少なる他人の勞力によつて商品を生產し、之を他人と交換して生活したのである。彼等は各々經濟的獨立の土臺を持つてゐた。故に、彼等は相互に平等であり、自由であり且つ、全く他人の束縛を受くることなく自己獨自の思想を懷くことができた。玆に思想的自由の經濟的基礎があつたのである。前期資本主義に於ける思想上の自由主義は此の傳統の繼承に外ならぬ。加ふるに、前代の資本主義は封建的制度に對する戰鬪的學說であつたから。そして此の戰鬪に於て無產民衆を自分の味方に引き寄せるためにも、屢々此の自由が――往々適度を越えてさへ――强調された。此の自由時代に於て、資本主義はその偉大なる精神文化をも產んだのであつて夫のストルム・ウント・ドランクの時代こそ正に資本主義の古典時代をなすものである。併しそれはも早今日に於ては、『善かりし過ぎし昔(グーテン・アルテン・ツァイテン)』に屬する。

資本主義は發展した。資本は集中し、小市民のみならず、小、中資本家までも、時と共に收奪された。資本主義は今や自由競爭時代から獨占時代に入つたのである。此の資本主義の經濟的發展と同時に、資本主義の思想的自由主義も亦漸次、變革を受けつゝある。即ち、資本主義の獨占化は、同時に思想、就中、社會思想の獨占化に導く傾向を持つてゐるのである。蓋し獨占資本主義の發展した國に於ては、民衆はその生活のために、直接又は間接に、この統一されたる獨占資本に、換言すれば少數の資本王に依存しなければならず、從つてまた彼等の思想は多くの場合彼等の生活の資源の所有者即ち資本王の利益に副ふて影響せらるのである。アメリカ合衆國は自由とデモクラシイとを名物にしてゐる國であるが、同時に獨占資本主義の最も顯著に發達した國である。此の國に於て、資本主義の現在の形相の下に、自由がどのやうに憐れな姿にまで尾羽打ち枯してゐるかは次の例がよく之を示すであらうラッセルに從へば、今日のアメリカの大學では、どんなに學術能力のある學者でも、若しスタンダアド石油會社を攻撃する者は、とても教授の職にありつけないさうである。と言ふのは、凡ての學長はロックフエラアから寄附金を貰つてゐ、又は貰はうとしてゐるからである。そして全アメリカを通して、社會主義者は注意人物であり、非常な技能のない限り職を見つけることが非常にむづかしいさうである。自由の國アメリカは此の如き珍奇なる自由をさへも持つてゐるのである。【上掲小冊子三七頁】

獨占資本主義の下に於ける社會思想の壓迫は、それが表面上自由の皮を着てゐるために、露骨なる封建的壓迫よりもその弊害は恐るべきものがある。それは恰も金融資本主義の對外發展が、武斷的資本主義の侵略政策に比して、外面極めて平和的にして、而もその害惡の及ぶ所、深且つ大であるのと同段である。デモクラシイの看板の下に、資本家の獨裁が行はれつゝあるのである。中世に於て、ローマの教權が天國の鍵を獨占し、民衆の靈魂の運命の決定權を掌握することによつて、民衆を經濟的に隸屬せしめた如く、現代の獨占資本家は資本を獨占し民衆の經濟的生活の運命の決定權を

掌握することによつて、民衆を精神的に隷屬せしめてゐるのである獨占資本主義の發展によつて、精神生活の封建化を再開しようとしてゐる。今日の資本主義は方に此の狀態にある。その發展傾向は自由主義の正反對に向ひつゝあるのである。此の時に方つて、資本主義の自由への發展を望むことは、正に充たされざる希望でなければならぬ。

八

資本主義の獨占的傾向にも拘らず、今日現に、社會科學的自由が漸次その地歩を占めつゝあるのはどうしたわけであるか。

私は思ふに、それは資本主義の新なる發展のためではなしに、その新なる發展にも拘らず、行はれてゐるのである。屢々云はれてゐるやうに、「資本主義の中には既に來るべき社會を構成すべき要素が胚胎してゐる。即ち無產階級社會への進展を可能ならしむる經濟的條件と共に、思想上に於ては階級的制約を超脫しようとする社會科學上の思想的努力と、實生活上に於ては、階級的支配を超脫しようとする社會とが既に發展してゐるのである。兩者は相互に唇齒輔車の關係に立つ、尤も兩者中決定的重要は勿論、後者の側に於て存するのだが。故に、××××××、××××、×××××××××、×××××××××××××××。蓋し、此の新興階級は自己の利益からも、換斷なき社會科學的研究の進歩を熱望するからである。即ち、資本主義の封建化的傾向にも拘らず、比較的少數なる社會科學研究者の不撓なる犠牲的努力によつて、更にヨリ大なる程度に、勞働者階級の勢力增大によつて、社會科學研究の自由は、遲々とではあるが、漸次に擴大しつゝあるのである。

此の如き少數なる殉教的な先驅學者の心血の塊であり、更に無數のプロレタリアの血と汗とによつて培はれた所の、

社會科學上の尊重なる遺產を、吾々は幸にも受けついで居るのである。此の多產なるべき社會科學的見地を發展して社會科學を眞實の意味に於ける科學となすことは、吾々苟めにも學徒の名を辱めてゐるものの光榮ある權利であると共に、人類の幸福が吾々に命ずる嚴肅なる義務なのである。

九

吾國に於て、學問の眞實なる發展に對して最も關心しなければならぬ筈の最大なる團體は大學である。諸君は各々その一員である。數萬の學生と數百の敎師を有する尨大なる學術團體は、此の社會科學の眞實の發展に向つて如何に態度を採りつつあるか。此の態度如何は、我國の社會科學上の進步に重大なる關係を有するであらうと、私は信ずる。

然らば、この大學とは如何なるものであるか。大正七年の大學令によれば「大學ハ國家ニ須要ナル學術ノ理論及應用ヲ敎授シ、並ニ其ノ蘊奧ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ、兼テ人格ノ陶冶及國家思想ノ涵養ニ留意スヘキモノトス」とある。即ち、大學は—私は茲には主として大學の社會學的特質を論ずるので法律上の性質を述べる積はない—學術團體であることは疑ひない、そして、之に稍々遠慮がちに、修養團體たるの性質を加味したもののやうに考へられる。併し、學術團體も修養團體も無條件なものではない。學術は「國家ニ須要ナル」ものでなければならず、修養は「國家思想ノ涵養」に留意せねばならぬ。そこで問題が起る。茲に言ふ國家とは何であるか。

單純に解すれば、此の國家は北米合衆國の國家も、勞農ロシヤの國家も含むやうであるが、勿論さうではなく、これは日本國家である。のみならず、それはその現在形態、即ち軍國主義的資本主義的形態を意味する如くに解釋せらるる危險があり、又左樣に解釋する人々も多々あるのである。さうすると此の條文の社會學的實質は、大學とは軍國主義的

資本主義的國家に須要なる學術の理論及應用を教授し、並にその蘊奥を攻究し、軍國主義的資本主義的思想を涵養する國體となるのである。多くの諸君は私の結論の意外なるに驚いて、そんな筈はないと憤慨するかも知れない。併し、人々の解釋する通説に從へば、正にかくの如くなるのである。勿論、之れは政府が大學に要求した形式である。その實質が此の官的要求と相違せんことは、多くの諸君と共に私の私かに希望する所である。

成立の上から言へば、我國の官學は、法科系統は主として官僚國家の吏員を供給するため、工科系統は所謂殖産興業、即ち資本主義の實質的建設に必要なる技術家を供給するためであつたと考へられる。帝國大學は大體に於て文字通り官僚的資本主義「國家ノ須要ニ應ズル」學術團體であつたのであつた。併しながら、今日ではも早その時代は過ぎ去つたかの如くでもある。從つて、私は大學の名譽のために、又諸君に敬意を表するがために、大學が軍國主義的資本主義的學術兼修養團體であると言ふ解釋をしばらく捨てよう。然らば、法文に所謂國家とは何の意味であるか。

率直に私の考へを言へば、×××××××××××××××××××××××××。×××××、××××××××××××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××××××。×××××××、×××××××××××××××××、××××××××××。×××××××、××××××××××××××××××、×××××××××××、×××××××××××××、××××××、××××××××××、××××××××××××××××××××××××××、××××××。

大學に於て、修養即ち人格陶冶の意味を加味すべきか否かは大なる疑問である。云ふまでもなく、大學に於て所謂教養を主眼に置き、所謂紳士教育を施すべきか、それとも、直接實際社會に役に立つ學術及その應用を主として教ふる所謂實用教育を主眼とすべきかは、背て大に爭はれた問題であつた。そして此の爭ひの結果は大體に於て、實用主義が占

典主義を壓倒したのであると記憶する。明治十九年の帝國大學令は此の傾向を反映してゐるのではないかと思はれる。從つて、大正七年に於て人格陶冶國家思想涵養と言ふ蛇足を附け足したのは、方に數步の退步ではなかつたか。封建的貴族教育の繼承である所謂紳士教育、所謂、古典的理想主義的教育を現代に復興せんとするのは、甚だしき時代錯誤であらねばならぬ。

と言つて、私は所謂教育上の功利主義、即ち職業教育萬能主義に滿足するものではない。教育はレアルでなければならぬ。併し、人間は軍國主義的資本主義的社會組織の機構の一つの螺旋、一つの齒車、一つの鋲として終るには餘りに偉大である。人間は此の如き教育を以て決して滿足しないであらう。彼は理想は求める。山間小村の小供のやうに、山の彼方の未だ見ぬ世界を憧憬する。殊に情に燃え、氣を負ふた青年諸君は、理想は彼等から奪ふことは出來ぬ。××××××××××××××、××××××××、×××××××××××、×××、××××××××、×××××××××、×××××××××。×××××、×××××××××、××××、××、××××××××。××××××、××××××××××××、××××××××、×××××××××××。私は大學が若し單なる資本家社會へのパンの教育、實用主義教育から、一轉すべき機運にあるとするならば、××××××××××××××、理想主義教育であらねばならぬと確信してゐる。

併し、大學の本體は云ふまでもなく學術團體である。其處では、人類の共同社會に須要なる學術が教授され、攻究されねばならぬ。其處では社會科學は現に自然科學や哲學文學の或る部門があるやうに、何等の豫斷を加へず、從つて階級的限界を超脱して思想し研究されなければならぬ。人類の共同社會にとつては、階級的偏見ほどに危險な思想はない

のであるから。此の學術團體に於ては、教授も學生も、共同の眞理の追求者として、相共に眞理の囚はれざる研究とその擁護とに任じなければならぬ。併し、軍國的資本家社會の支配階級は此の如き眞摯なる眞理の研究を何よりも恐れる。××××××××××××××、××××××××××××××××××××××××××。××××××××、×××、×××、×××××××××××××、×××××××××××、×××××、×××××××××××××××××××。×××、××××××、×××××××、×××××××××××××××××××××××××××××××××××××、××、××××××××××××××××××××、×××、×××××××××××××××××××××××××××××××××××。

此の點に關聯して、私は近頃學生の間に二つの歎ぶべき現象を見た。第一は、官邊に於て計畫されつつある教育への軍國主義の侵入に對する學生の反抗運動、即ち『全國學生軍事教育反對同盟』これである。當局は軍事的訓練の強制によつて學生の間に團體的訓練團體的精神を養ふのだ、と稱してゐる。私は現代の學生の間に團體的訓練の必要なることを認める。併し、これを補ふ方法に就いては、當局者と全然反對の意見を持つてゐる。その方法は彼等にヨリ多くの自由と自治の機會を與へ、彼等を自らをして組織に慣れしめることであつて、敢て他所から教師を招く必要はないであらう。而も團體的訓練の教師としては軍隊は最も不適當なるものである。是非共、外部から此の目的のために教師がいるのなら、勞働組合の幹部をも賴んで來て話でも聞いたらよからうと思ふ。何となれば、勞働組合は近代に於ける最も進步した團體訓練の代表者であるから。諸君は笑ふかも知れぬが、それは事實である。軍隊の團體訓練は被訓練者の意志を尊重せざる團體訓練である、絶對的に近かい命令服從關係をその基調とする訓練である。これは根本精神に於て、エジプトのピラミツトを築き萬里の長城を築いた非自由民の團體訓練とさしたる違ひのない團體訓練である。それは正に時代と共に亡ぶべく運命づけられ、且つ現に亡びつつある所の、封建的團體訓練である。之と正反對に、勞働組合の團

體訓練は自由意志を出發點とする。彼等は盲目的服從をなすのではない、彼等の團體行動は根本的に於て他律的操縱ではなく、自律的規律である。彼等の命令者は天降りの上官ではなしに、自己意志によつて撰んだ同僚である。これこそ將來社會に存續すべき眞の團體的訓練であるであらう。

併し主要なのは其點ではない、吾々が最も軍國主義的精神の教育界への侵入を恐れるのは、之によつて眞理に對する研究心が損傷される恐れある點である。軍隊教育の主要目的の一つは、命令服從の習慣を涵養することである。上官の命令なればその是非を論ぜず、遲疑する所なく、惟々として之に服從する精神である。各人の主張の妥當性が位階の上下階段に比例して決定せらるる仕組である。學問的精神は凡ての主張を先づ疑ふにある。吾々は如何なる主張が、誰からなされやうが、總長が言はうが、先任教授は言はうが、博士が言はうが、助教授が言はうが、それが理屈に合はない限り、之を承認しない精神である。此の精神が失はれる時は即ち學問の亡びる時である。軍隊教育の基調は命令服從である、凡て上官の命令することを信頼する精神である。たとひ如何なる上官の主張であらうと凡てを疑ふてかゝらなければならぬ科學的精神は、此の軍隊精神とは正に正反對である。後者が前者を壓倒する時、眞實の意味に於ける學校は亡び、其處に殘る殘骸は最早學校たらずして單なる兵營の一擴張たるに過ぎないのであらう。此の如き根本的に學問的精神と相矛盾せる精神的支配の侵入に對して、學問と教育とのために關心する學生が蹶起すに至つたのは當然のことである。危險なる侵入者に對して、學問的精神の獨立を擁護するのは學徒の神聖なる義務である。それは學生たるの本務の一つであらねばならぬ。

第二に、近時、學生の間に社會科學運動が盛んになつたこともまた注意すべき現象である。此の現象は、現代に於ける社會科學に關する高等教育に對する學生の不信任の表白である。或る部分の學生はまた、階級的限界の内に跼蹐する

社會科學の研究を以て滿足しなくなつたのである。彼等は今や超脱的思惟を要求しつゝある。社會科學の眞の學科への發展を要求しはじめたのである。彼等は官制の社會科學的知識に滿足せずして、眞の社會科學的知識の自己生産の組合を設立したのである。そこにはも早、今日の官僚化された學術團體の影はなく、中世に於ける學徒のギルドにも比し得るものがある。權力によつて施設せられずに、各人の要求から自主的に組織されたのである。命令が支配せずに、自己紀律によつて、秩序が付けられる。所謂專門の特權階級たる敎師はない、存在するものは先輩たるコムレイドと後輩たるコムレイドである。其處に行はれる研究には階級的限界が附せられやう筈がない。それは眞の意味の科學的自由討究である。それは大學の中の眞の大學の萠芽である。

私は社會科學界に於ける此の現象を産業界に於ける勞働組合に譬へることができると思ふ。勞働組合も亦、資本家的産業組織に對する勞働者の自助自衞組織であり、それは、現在の階級的産業組織に對するプロテストであると共に、×××××××××××××××。昔から、國家內の國家 Imperium in Imperio と言ふ諺がある、勞働組合は慥に現代産業組織內に於ける一個の産業組織である。それと同様に、此の社會科學運動も亦、大學內の一個の大學である。現代に於ける高等教育の官僚的組織と、その科學的研究に置かれた階級的限界に慊らざる學徒の自衞自助の組織であると共に、それ自身現存する官僚的教育制度と不透明なる社會科學的研究に對するプロテストであり、×××××××××××××××××××××、×××××××××××××。

斯様な歎ぶべき目醒めが、最近、學生の間に漸次擴大しつゝあることは、學術研究たる大學のために、最大な名譽である。其處には、その官的形式の如何に拘らず、一切の外的覊絆を脱して、純粹に無雜に、學的眞理其者を追求せんとする熱誠と努力が、學徒の間に全然眠つてゐない、と言ふ證據であると思ふ。

併し、それにも拘らず、私は大學と大學生とか、全體の上から見て――少數の、或は望むらくはかなり多數の、例外は別として――此の同じ方向に進むであらうとは、遺憾ながら想像し難い。此の點に關聯して大學のことを考へると、私にはいつも一つの光景が浮んで來る。それは一昨年の春頃であつたが、ベルリンのルスト・ガルテンに於けるプロレタリアの大示威集會が催された時のことだ。少しおくれて出かけた私は、も早、ルスト・ガルテンに這入り得ないほどの人出であつた。既に凡ての空地は群る勞働民衆と赤い旗とで立錐の餘地もなかつた。私はスプレイ河の此方から遙かに此の盛況を眺めた。スプレイと舊宮城との間には、たしか獨立社會黨の勞働青年が陣取つてゐたやうに思ふ。其處に聳え立つてゐるヰルヘルム一世の騎馬像には、すばしつこそうな數人の青年が攀ぢ登つてゐる。そしていづこも同じいたづら好きなチヤメは、此のカイゼル・ヰルヘルムに大きな赤旗を持たして興に入つてゐる。大きな赤旗は皮肉にもガイゼルの立像の頭上高く飜つてゐる。下では、數百の青年が赤い小旗をふりながら、勞働歌「インタアナショナル」を合唱しつつゐる。その時、反對の方向から響き來る歌の聲が聞へた。歌は正しく『ドイツの國は何よりも尊し』と言ふドイツの舊國歌である。私は思はず、後を振り返つた。見れば、一町のウンタア・デン・リンデン街を隔てゝ、ベルリン大學前の廣場、カイゼル・ジョセフ・プラッツには、一團の學生が集つてゐる。彼等は赤や黄や青やとりどりのコーアの正裝をつけ抄からぬ舊ドイツの三色旗さへ彼等の間に飜つてゐた。彼等は今や『ドイツの國は何よりも尊し』に歩調を合せ、ステッキやゴム製毆杖に身を堅めて、反對デモンストレーションを始めやうとする所であつた。

私は進歩的諸運動に關聯して大學のことを考へると、幸か不幸か、すぐに此の光景が私の頭に浮んで來るのである。勿論ドイツの大學生と雖も、凡てこんな頑迷連ばかりでない。彼の間には、自由思想家の團體もあれば、社會主義、又共産主義の團體もある。のみならず、日本の大學はドイツの大學とは大分違ふ。たとへ其處にプロレタリア的分子がないにしても、それは小市民的要素を過分に含んでゐる。その限りに於て、それは、ヨリ進歩的であると考へられる。併し、それにも拘らず、高等諸學校に於ける學生並に教員の大多數は、その育ちからも、その教育からも、又將來又は現在の地位からも、プロレタリア的のそれよりも、ヨリ多く支配階級的影響の下にあると言ふことは疑ひなき所であらう。從つて、社會科學上の研究に於ても、意識的又は無意識的に、支配階級的見地が混入して來、此の如き見地を超脱せる眞實の科學的研究に關する正當なる理解を缺ぐのみならず、あまつさへ、之に感情的に反對するやうな危險が頗る多いのである。これは、勿論、單に諸君に限つたことではない。私たち凡ての非プロレタリア的分子は、生れながらに吾々の意識の中に階級的偏見のバチルスを保藏する保菌者である。そこで吾々にとつては、不斷の自己省察と强靱なる意思の力とが、是非とも必要なこととなり、又、所謂學術團體の中にも眞の目醒めたる學術團體の存在が必要な所以ともなるのである。

併しながら、ケルビムと焔の劒とにも拘らず、敢て支配階級の權力の根さす所の認識の木に近づき、社會科學上の超脫的思惟を試みんとする眞の學徒は、依然として少數であるであらう。彼等は皮肉にも、學術團體の唯中にあつて、眞の科學のために鬪はねばならぬであらう。そして其際、所謂、官權や又、一般支配階級者が、眞實の科學のためにする此の鬪爭に對して、理解、援助はさて置き、むしろ抑壓的態度をさへ採らんとするの危險あるは勿論、諸君の先輩たちである所の、所謂、敎養階級も亦諸君の此の學的努力に言ふに足るほどの援助は與へ得ないであらう。

とはいへ、諸君は決して希望と勇氣とを沮喪する理由はない。諸君には、最も信頼するに足る、有望にして可能的實力を持ち、而も多數なる味方がある。それはプロレタリアである。此のプロレタリアは現代階級社會に於て、その宿命付られてゐる經濟的地位から、從つて又彼等の生活其者の要求から、社會科學の超脱的發展を要求しつつあるのである。彼等が社會科學の捕はれざる眞理を求めるのは、夫の學者の『ためにする所なき好奇心』からではない、彼等の生活其者の叫びである。此處にこそ、社會科學者は自己の超脱的思惟の最も信頼し得る、底力ある後援を見出し得る筈である。眞の社會科學、即ち若きマルクスの所謂「哲學」は、人類解放の「頭腦」であり、プロレタリアはその「心臟」である。×××××××××××××××××××××××、××」であらう。【マクルス、ヘーゲル法理哲學批判】兩者は人類解放のための互に相扶くる二つの車輪である。

嘗て、私が東京大學にゐた頃、時の總長山川氏が、何かの機會に於て、學生に演說をして、次のやうに言はれたことをおぼろに記憶してゐる。即ち、國家は諸君各人のために、その窮乏せる國帑の中からも、多大の費用を――一人前何百圓とか何千圓とか云はれたがそれは忘れた――投じて、今日までの長い年月、諸君の教育を完成したのである。諸君は此の國家の大恩に感じ、努力以て、之に報ずるの心掛がなければならぬ、と。私は此の報恩と言ふ道德が既に過分に、所謂、御都合道德に墮するの危險性を持つてゐると信ずるが、それはともかくとし、總長の訓辭は、それが相當に學生に感動を與へた事實からも考へ得るやうに、或る程度の眞實を含んでゐることは爭はれまいと思ふ。併し、それは飽くまで、或る程度たるに留まり、決して完全な眞理ではない。成程、吾々のためには多大の國費が費されてゐる。それは疑ふことの出來ぬ事實である。が併しその國費は何處から來たのであるか。それは、財政學者が吾々に教えて呉れるやう

な色々な筋道があらうが、××××××××××××××××××××××××××××××××。吾々は搾取された る餘剩價値の分前を受けることによつて、研學できるのである。×××××××××××××、×××××××××。××××××××××××××××××××、×、×××××。××××××××、×××××××××。××××××××、×××××××××××××××××××。此處にまで、報恩思想を徹底すれば、それは始めて、幾分でも現代に通用し得る道徳觀念となるであらう。×××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××、×××××××××、×××××××××××、××××××××××××××××××××××××××。之によつてこそ、吾々は、吾々の故なくして受けつつある不當なる特權の罪障の幾分ノ一をでも償ひ得るのである、總長の言を以て云へば、「鴻恩の萬一に報じ」得るのである。

嘗て西人は『生きることは戰ひである』と言うた。學徒にとつては、生きると言ふことは眞實に思想することである。徹底的に思想することである。そして現在の社會に於ては、社會科學とその應用の進歩のために眞摯に不斷に思想することは、同時に闘ふことを意味するのである。何となれば、階級社會に於ては、眞劍にして敏感なる社會科學研究者は、必ず階級的イデオロギイの障壁に突き當らざるを得ないからである。丁度中世の天才的な眞面目な多くの哲學者、自然科學者がその研究の必然の結果として教權支配の障壁にぶち當つたと同じやうに。かくて、彼は一種の進退兩難（ヂイレンマ）に陷る。思想して障壁に突き衝るか、安易を欲して思想することを停止するか、彼はその一を選ばなければならぬである。若し幸か不幸か、彼が前者を擇るならば、彼はまた是非とも、彼の前面にそそり立つ階級的イデオロギイの障壁に衝突しなければならぬであらう。即ち、現代の階級社會に於ては、眞實に社會科學上に思想すると言ふことは、同時に主として觀念の世界、思想の世界に於て、階級的に闘爭することをも意味するのである。

此の如き事實は社會科學の進歩の上からも、人類の幸福を增進する見地の上からも、頗る不利益なことであり、また悲しむべき現象であるかも知れない。が、吾々はつぶやくことをよさう、それは無用であるから。これは階級社會の下にあつて、社會科學の領域に眞理を求めんとする者の遁れ難き運命である。吾々は吾々の意思を以て此の運命を背負はうではないか。そこに、吾々の學徒としての人類に對するさゝやかながらにも光榮ある義務がそして貢献が横はつて居るのである。嘗てマルクスは當時の學徒に言うたことがある。「科學は利己的な愉みであつてはならない。苟にも科學上の目的のために專念するほどの幸福を持ち得たものは、また最先にその知識を以て人類の奉仕に馳せ參ずるものでなければならぬ」と。眞實なる社會科學の創始者、偉大なる思想家にして不撓の鬪士であつた先驅の言葉に激まされて、此の領域に於て吾々も亦ヨリ深くヨリ眞實に、ヨリ徹底的に、思想し、而して鬪爭しようではないか。これやがてまた學問の進歩を使命とする學術團體の一員たる諸君各自の本務であるであらう。

附言、本稿は一九二四年十一月二十八日、京都帝國大學々友會講演部の講演會に於て、及び同十二月十三日、東京帝國大學新人會第六週年記念講演會に於てなした講演の草稿である。

國民經濟と財政との交涉

併せて我國の財政整理を論ず

堀江歸一

一、財政の特徴——經費有益說——規模の廣大——經費の固定的性質と永續的性質、二、國家經費至上說——之に對する評論——國民經濟に對する財政の壓迫——積極主義の財政策——其結果は一般の期待に反す、三、經費削減の方法——財政緊縮に對する二個の妨害——當局者の臆病癖——制度上の障壁——整理緊縮を成效せしめる條件四、我國經濟社會の病弊と根本的原因——不景氣時代の經濟的現象——其財政膨脹との關係——我國に於て不景氣の永續する理由、五、大正十四年度豫算の意義——實際の整理成績——財政緊縮の不徹底——經費膨脹の新記錄——公債政策、六、經濟社會改善の諸要件——財政の現狀に對する無理解——政黨內閣と官僚內閣——財政整理の不徹底に終れる所以——將來を豫想す——制度の根本的改造に伴はざる財政整理

一

先づ緒論として、國民經濟と財政との關係、此關係を律する原則に就て、多少の攻究を試みる。財政は國家の營む經濟であつて、國民經濟と相對立する地位を占める。相對立する地位を占めるといふが、兩者は決して互に獨立して居るものではなく、關係する所甚だ深いのであつて、一方の盛衰は必ず他方の消長を制する。殊に如何なる國に於ても、國家經濟の特長として著しきは、第一其規模の廣大なることであり、第二其經費の內に、多く固定的支出を要し、其存續の永久的なるもののあることである。財政の規模の大であることは、近年株式會社の組織發達し、大資本を擁する法人の企業の續出するに至つてから、多少潤色されるの觀なきを得ないが大規模の株式會社は通例大規模の財政の營まれる國に

起り、而して前者の規模は遙に後者に劣ることを常とする。隨つて其營む經濟の規模の大なる點に於ては、如何なる國に於ても、財政を推さなければならない。斯くて財政は一國に於て最も大なる經濟を營むものである結果、一國を通じて、最大の消費は、即ち財政に依つて、行はれるのであつて、物資も、勤勞も、勞働も總て財政に於て、最も大なる需要に接する。即ち一時財政學說に於て、經費有益說なるものが多くの人々に依つて認められ、一國の經濟的繁榮を期するには、國家の經費を增加することを以て、第一の政策とする、經費增加して、物資に對する需要盛に爲れば以つて生産業の隆興に資す可く、勤勞に對する需要大と爲れば、以つて人々に職業を付與するを得ると云ふ信念の行はれた所以であつて、ジャン・ボーダンの如き、サー・ウヰリヤム・ペッチーの如き、何れも此點に就て、巧妙なる論理を案出して、一以つて說明の用に充てた。今日に於て、之を見れば、固より一片の邪說顧みるに足らない。如何に財政に於て、經費を膨脹することが、勤勞や物資に對して、需要を增加する道であるとしても一方に國民經濟に於ける資本の供給を乏しからしめたならば、此方面に於ける同種需要を減殺するに至らざるを得ないのみならず、國家經濟たる財政に於ける經費の濫增は多く不生産的經費の增加を伴ふことを常とし、却つて永遠の效果としては、一國全體に於て、物資勤勞に對する需要を減縮することを免かれないのである。斯くの如く經費有益說の愚なることは今日に於て、明瞭であるに拘はらず、尙ほ一部の論者中には、經費の增加に依つて、經濟社會の形勢を一變しようとする考へを棄てない。現に失業者救濟策としても、國家をして經費を增加し、斯く增加した經費の下に、或る事業を起さしめ、此事業に於て、失業者を吸收して、授職の方便に充てようとする說の行はれるが如き、又經費に急劇の節約緊縮が加へられ、財政上に於て勤勞や物資に對して、費される金額が減少したならば、其結果として必ず經濟社會に不景氣の勢が誘致される、此場合に經濟社會の狀勢に急劇の變動なからしめ、殊に從來と同樣の景氣を維持せしめるには、財政の規模亦濫に其收縮されることを可なりとしない、或る程度まで之を擴張し、又斯く擴張したものは、其儘の狀態を持續することに勉めなければならないと云ふ說を見るが如き、孰れも經費有益說若しくは之れに類する學說の一端を示したものであつて、斯くの如きは要するに財政の規模の廣大なることを承認し、之に依賴し、又之を利用しようとする結果である。

第二に財政の特徴を以つて、目す可きものは、其經費に固定的性質を有するもの丶多きことである。思ふに此事たる國家の本質から云つて、國家の職務に急劇なる改廢を施し、過大なる縮小を行うことを許さざる關係上、經費にも亦固定的性質を有せしめるに至らざるを得ないのである。英國に於ける固定基金に屬する諸種の經費の如き、我國憲法第六十七條に據る經費の如き、何れも之に該當するものであつて、前者は上下兩院の議決君主の裁可に依つて、法律其ものを動かさゞる限り、年々定まつた金額の下に支辨されるし、後者亦政府の同意なくして、帝國議會の廢除し、削減することを許されないのである。斯る固定的經費の一國の歳計に生ずるに至つたのは、二者孰れの形態に據るを問はず、財政の基礎を鞏固ならしめる趣意に出でたものであると同時に、政治上の爭議の極端に趨つて、財政組織の安定を傷けることを恐れた結果である。若しも一國に於て立法の事に干與し、經費議定の局に當る場合に、其關係者が總て公的精神を以つて、進退を決し、豫算議決の方針を利用して、政府を苦しめると云ふが如き邪心を懷かなかつたならば、總ての經費は一樣に之を擧げて、立法部の毎年議決に據らしめるごとを可なりとする道理であるが、從來の議會政治、現在の政黨の行ふ政權爭奪の狀態を以つてするときは、斯る信用を與へるを得ない。斯くて多くの經費に對して、毎年の議決を必要とする一方に、少數の經費は之を毎年議決の圈外に居らしめ、固定的性質を與へる。而して此種の經費は項目の數に於ては少ないとしても、其重要なる點に於て、將た又金額の大なる點に於て、他種の經費を凌駕することを常とするのである。

二

國家の經費に對して、至上的優先的地位を與へ、一旦經費として支辨する必要ありと國家に依つて認められて、歳計上に現はれた以上は、必ず此經費支辨に必要なる財源は國家の力に依つて、調達しなければならない、之を調達せずして、經費其のもの丶削減を謀るが如き、許されざる所であると云ふのが國家經費至上說の一斑であつて、此學說に勢力の認められた際には、爲めに經費の膨脹を促すと共に、其緊縮を妨げること少なしとしなかつた。然しながら上說の如

き、一國に財政あるを以つて、國民經濟あるを知らず、又國民經濟上の實力に依つて、財政の涵養される道理を辨ぜざる僻説であつて、何等重きを置くに値しない。如何に或る方面の職務を果す爲めに、或る程度の金額に上る經費を支辨する必要のあることが財政上に發案されたとしても、此經費支辨に要する財源を調達する爲に、幾何程度の壓迫を國民經濟に加へ、國民經濟の發達を害する虞れあるであらうか。其虞れの大なる場合には、一方に國家職務を遂行する利益と他の一方に國民經濟を壓迫する損害とを較量して、以つて經費支辨の當否若しくは支辨額の多寡を決定せざる可からざる道理であつて、國民經濟上の見地から、經費の緊縮廢除を行ふ強き主張が行はれるに至るのである。

國民が國家の財政を支持する爲めに、各自の荷ふ負擔は資本なり、財産なりに對して均衡を求めるのが宜しく、又斯うして其正しきを得るか、其れとも所得なり、消費なりに對して、標準を取るのが然る可き道であるかと云ふ問題に就ては、相當の議論の作ることを免かれないが、孰れの標準に據るにした所で、一國に存する資本、財産、所得等の總量には必ず或る制限があり、其無限大であるを得ない。既に斯く限られた數量の富や、所得を公共經濟と私人經濟との兩者に配分し、各々其宜しきを保たしめようとする以上は、一方を飽和せしめて、他方を缺乏せしめるが如き、事情の不可なりとする所であつて、公私兩方面の用途に置かれた富や所得が孰れの方面に於て、有用とされる程度の高きを得るものであるか、其高き程度を標準として、配分の率を定めなければならない。國家經費至上説の如き、何れの點より見るも、其可なりとする所以を知るを得ない。國家財政上に於ける經費と雖も、國民經濟の狀態に依つては、適宜の取捨減廢の行はれることを以つて、當然とするのである。

然らば如何なる狀態が國民經濟に現はれた場合に、財政の爲めに、國民經濟に壓迫の加へられて居る證左とす可きか。經濟的現象の複雜を極める今日に於ては、一二の事相を捉へて、直に之に充てるのは、甚だ困難であるやに覺へるが、若しも一國に於て、

第一、租税の負擔が多數國民に對して苦惱と爲る程に重く、且つ其負擔が現實に國民の生活上に於ける消費を制限して、生活程度の降下を餘儀なくすること、

第二、收支の均衡を維持するに難く、公債を財源として、辛うじて一時を彌縫すること、

第三、然も其公債たる、年々山積して、供給過剩と爲り、市價に低落を來すと共に、金利上進の勢を促して、已まさること、

第四、右の如き財政上の狀況は必ず一國に於ける貿易の均衡を其國に不利にし、貿易上の逆勢に依つて、金融市場の安全を脅かし、經濟社會の進運を傷けること、

の事實が現はれたならば、國民經濟に對する財政の壓迫は餘程深い程度に達したものと見る可きであつて、到底經費節減の手段に訴へて、切迫した形勢の緩和を求めなければならない。

殊に一國の經濟社會には常に經濟的循環期の法則が働き、好景氣と不景氣との來往することを免かれない。或期間好景氣の續く後には、必ず不景氣の時期が來り、不景氣に苦しめられて、或る期間を過すときには、再び好景氣の到來することを常とする。斯く好景氣と不景氣との去來する間に、一國の國民所得、富の在高、生産能力等に幾何の變動を生ずるものであるか、如何なる國に於ても、此點に就て、數字上正確なる調査の行はれたことを耳にしない。然しながら好景氣時代に於ては、如何なる事業に投下された資本にしても、其生み出す利潤の高率であることに刺戟されて資本の事業に放下される高多く、勞働者に對しても亦高率なる賃銀支拂はれて、勞働能率の增進を來す一方に、資本家は此勞働者の能率を利用し、其運用するを得る資本の總額を擧げて、生産上の能力を發揮せしめされば已まさるに反し、不景氣時代に於ては、一切の事情は右に述べた所と正反對に爲るのであるから、國民の經濟的能力は此二種の時期に於て、大なる懸隔を生ずる道理である。好景氣時代に膨脹した財政をして不景氣時代に於て、之を收縮せしめるを要する理由は實に此所に存するのであつて、若しも這般の伸縮宜しきを得さるに於ては、好景氣時代に膨脹した財政は不景氣時代に爲つて、經濟社會に對して、大なる負擔を及ぼし、景氣の恢復に妨碍を與へること、少なしとしないであらう。而して不景氣の時代に於て、不景氣の下に、國民の經濟的能力に減損を來したと同一の割合を以つて、財政に緊縮を加へようとしても、財政其ものに固定的性質を存し、斯る急劇の緊縮を施すに困難であるとすれば、好景氣時代に於ける財政膨

脹の程度に嚴密なる注意を致し、國力の增進に比較して、或る餘裕を保たしめつゝ財政の膨脹を謀るの方針に出でなければならないのである。

彼の財政上の積極的政策と稱せらるものゝ如き、第一政府の力に依つて、物資并に勤勞に對する需要を盛にし、以つて其間に世間に利益を及ぼさうとする考へや、第二政府を以つて一種の放資機關とし、政府の信用を以つて、醵集した資金を生産的事業に運用し、政府が公債に對して支拂う利子よりも高き利益を擧げしめようとする計畫に基き、斯る政策の下に、直接の利益を蒙る地方民の歡心を繫いで、政黨の勢力を擴張しようとする政治家に依つて、多年行はれて已まなかつた。英米兩國の如き、鐵道其他大なる資本の投下を必要とする事業が專ら民間の經營に託されて居る國に於ては、財政上に積極政策の行はれる餘地は我國に比較して、乏しいようであるが、其れでも尙ほ政治家が軍備擴張殊に海軍擴張を利用することがある。蓋し海軍の擴張を通じて、艦船の建築を行ひ、材料の購入に、勞働の雇傭に依つて造船事業主、斯業に從事する勞働者若しくは斯業の行はれる地方全體を賑はさうとする意に出づるものである。故に財政上に積極政策が行はれたならば、經費の膨張は極まる所を知らない。千八百九十年代から、千九百年代に至る十數年間の歐洲諸國の財政に於て、將た又最近七八個年間の我國財政に於て、經費の膨張著しきを告げたことの如き何れも積極政策の餘殃である。唯英米兩國に於ては、國防上の理由に藉口し、軍備擴張の形態を以つて、積極政策の行はれたのに對し、我國に於ては、軍備擴張と共に、地方經濟振興の口實に基き、鐵道敷設の形態を以つて、行はれた一事に異色の存することを認めるに過ぎない、積極政策が財政に禍難を惹起する點に於ては、即ち一なりと云うことが出來る。

何故に吾人は財政上に於て、積極政策の行はれることを不可なりとして、之に反對するか。蓋し一國に於て物資や勤勞を需要するものは、一の國家あるのみに止まらない、國家と相對して、地方團體の如き、私人の如き、私法人の如き、其れ〳〵獨立の經濟を營み、其經費又は費用を支辨することに依つて、物資や勤勞に對して、需要する所少なしとしない。一方に一國の存在する富の分量には或る限度があり、斯く制限された富を上記各種の團體又は私人の間に分配して、以つて各自の存立并に發展を全うするものである以上は、國家が積極政策を廢棄して、物資や勤勞に對する需要を

省約したとした所で、斯る省約の行はれる一面に於て、國民經濟上に於て勤勞物資の需要される實力を大ならしめるを得る以上は、一方に生じた缺陥は他方の進展に依つて、優に充足される道理であつて、國家としては此充足の作用の行はれる勢を圓滑にし、過渡期に於ける波瀾を回避することに努む可きのみである。

國家を目するに一の資本放下機關を以つてし、國家の實力と信用とに依つて、醵集するを得た一團の資金を利用して、企業的經營に當らしめようとする考へは、國民經濟に於て、私人の間に組織統一の微弱なる場合には、取つて以つて經濟政策を律する一の基調たらしめるを得るかも知れない。個人の間に信用の發達するもの乏しく、資本を所有する多數者が或る一人又は少數者に其資本の運用を託し、單に利益金の分配のみに與らう、否斯く資本運用に長ずる人に之を託する場合に於て、一個の資本家自ら之を運用するよりも、却つて大なる利益金を收める道であると云ふ事實が現はれ、又此事が多數の資本家に依つて、理解されざる間は、如何に株式會社に關する法制が成立した所で、會社の形態を以つて、大企業經營の衝に當らしめるを得ない。斯る場合には、國家自ら國家の信用を利用して、資本醵集の任に當り、個人信用の規模を以つて、成就されざる事業を經營するの必要に接するのであるが、斯る必要は今日の如く株式會社の組織著しく發達し、行く所として、不可なるものゝなき時代には、全然消滅し去つたのである。啻に然るのみならず、國家が自ら任じて、資本放下の機關を以つて居り、公債を發行するに、何等の戒愼を加へず、其信用の限度とする所に近づき又は之を超越するに至つたならば、公債の發行は必ず金融市場を壓迫して、金利上進の勢を促し、國民經濟の健全なる發達と兩立す可からざる結果を生ずるであらう。而して斯る狀態の下に於て發行される公債の條件は國家に取つて、不利なるものと爲り、國家の信用に依賴して、低廉なる利率を以つて、公債を發行すると云ふ希望亦實に空しからざるを得ざるに至るのである。

積極政策の下に、支辨される經費は總て生産的のものであるから、之に要する財源は公債に依つて、調達することを憚らない。蓋し事業から生ずる利益金を以つて、公債の利子を支拂ひ、尙ほ餘れる所を元金の償還に供するを得て、何等の累を國家財政に及ばさないと云ふことは、積極政策を主張し、擁護する論據として、一部の論者に依つて、唱道さ

れる所であるが、此議論は第一積極政策の下に營まれる事業の收利力の相當に豐富なるものであること、第二公債の募集が容易に行はれ、其募集が或る程度まで行はれても、金融市場に壓迫的效果を及ぼさゞることの二條件が備はつて、始めて之を主張するを得るのである。若し其れ國家が積極政策の歩を進めることの甚だしきに至れる結果、國家の着手し、經營する事業から、豐富なる利益の收められることが望まれざるに至る一方に、公債に付せられる利子は次第に高きを告げ、前者の利益と後者の利子との間に存する鞘開きが益々狹く、時に逆鞘と爲つて、公債償還に要する財源の乏しきを告げるが如き場合に接したならば、積極政策の主張は根本的に破壞されたとす可きである。

三

然らば經費を減縮するに如何なる方法があるか。歳計全體に亘つて、冗費を省約することは、一の方法である。蓋し一國に於て、財政の制度成り、行政の組織亦之に伴ひ、互に年の久しきを經れば、其間常に情弊の纒綿する所と爲り、冗官贅職の設けられるもの、次第に多きに至らざるを得ない。或る機會に臨んで、行政の全體に刷新を加へて、斯る弊を杜絶することを必要とする所以であつて、而して此目的を達するには、根本的に國民經濟に對する國家の方針を一變し、從來家長的政治の觀念に據つて、國民經濟に加へた種々の干渉を廢除し、行政の簡易を期するが如き、一の方法であり、殊に從來行はれた積極政策を廢棄したり、全體の財政を通じて、最も多額の經費を支辨しつゝある陸海軍經費に對して、充分の整理を施したりするのは、財政緊縮の方法として、最も有力なるものと認められた。唯斯る根本的整理徹底的緊縮の行はれるに當つて、之に對して妨害を爲す勢力の存することは、吾人の看過する能はざる所であつた。何を以つて斯る勢力とするかと云へば、其一は財政緊縮に依る不景氣の到來を恐れる世人の臆病心並に之に阿らんとする當局者の優柔であり、他の一は經費の固定的性質を打破するの困難である。政府にして固く信ずる所を持し、一時の成敗の如きは、之を眼中に置かず、財政緊縮、行政整理に依つて、經濟社會に不景氣が齎されたり、又は現實に來つて居る不景氣の勢が加重されたりしても、斯の如きは要するに經濟社會を健全なる狀態に就かしめる道程に於て、起る事相

たるに止まり、又此道程を經由するに非ざれば、他日の復興の望まれ難きことに就て國民をして深く理解する所あらしめたならば、如何なる程度の財政整理も亦之を行つて、難きものなきの道理であるが、一面から見れば、今日の立憲政治は表面上輿論政治と稱するが、實質に於ては、社會の衆愚に阿る傾向の著しきを免かれない。財政緊縮の結果として經濟社會に徹底的不景氣を誘致する、然らば或る時期の後に景氣の恢復するに至る事實は如何に明瞭であるとしても、其時の來るまで、多數の國民にして不景氣の浸潤すること、積極政策の下に、得られると豫想した利益の得られざるに至つたことに就て、政府の政策を非なりとし、反對黨亦之に乘じて民衆を煽動するの態度に出でたならば、政治上に如何なる變事を釀すに至るや、測り知るを得ない。政權の獲得並に維持に熱心なる政治家が世論の歸趨に反して、自家の所信に忠なるが如きは、企て及ばざる所であつて、一度び聲明され、着手された整理緊縮の事業が龍頭蛇尾に終ることの多い所以であると解される。

更に經費に與へられた固定的性質は法律に定められた手段を以つてする以上は之を削除し、廢滅することの自由であるは、論を俟たない、英國の固定經費にした所で、法律改廢の手續を以つて、之を動かすを得るし、我國憲法第六十七條に於て、保障された經費であつても、政府に制度法規其ものを改廢する意圖の確乎たるものある以上は、之を爲すに憚らない。唯從來財政の基礎を鞏固ならしめる爲めに、特殊の保障を付した一方に、國防計畫に就ては、其根本を決定する特殊の機關があつたり、官制の改廢に就ては、樞密院の諮詢を經る手數を要したりする爲めに、政府一個の意見を以つて、之を左右しようとする場合に、兎角の言を挾む者を生じ、政府をして爲めに重大なる責任を負ふことを恐れて、實行に躊躇する趣きに至ることとなしとしない。

茲に於てか一國の政府が行政を整理し、財政を緊縮し、國民經濟上に加へる壓迫を除却しようとするには、餘程の決心を要すると共に、輿論の之を援助するものあることを必要とする。政府に此の決心を懷しめるには、政府が立憲政治の今日に於ては、上下兩院を縱斷して、優勢を占める政黨に援助されることを第一の條件とし、更に緊縮整理の道程中に生ずる不利の影響に對しては、國民として姑く之に堪へる覺悟があると云ふことを第二の條件とするのである。英米

兩國が歐洲戰後其れ〴〵早き機會を促へて、財政に一大緊縮を加へ、戰時最大の經費を要した時期に比較して、前者に於ては經費を約三分の一、後者に於ては經費を約五分の一の少なきに至らしめた事歴を覧へば、兩國共に略ぼ完全なる程度まで上記兩種の條件の具備して居つたことが認められるのである。

四

以上私は專ら一國の特殊の事情を顧みず、財政と國民經濟との交渉する所以に就て、原則論を試みたが、以下我國の實際問題に向つて、考へを移したい。我國近年の經濟社會に病弊の著しきものゝあつたことは、何人も認める所である。而して其原因に就ては、人の見る所、自ら異ならざるを得ないだらうが、卑見を以つてすれば

第一、近年我國の財政が國民經濟上の實力を超越して、膨脹を極め、殆ど其限度を知らざるに至れること、

第二、經費中所謂不生產的經費に屬するもの多く、積極政策の下に、經營される事業であつても、後には收利力の乏しきに至るもの多きを占め爲めに國民に對する經費の負擔をして實質的に重からしめたこと、

第三、歲計上に於ける收支の均衡が容易に維持されない爲め、公債政策が濫用され、國家財政の信用を害すると共に、民間の金融市場を壓迫すること、

第四、財政の膨脹は物價の騰貴賃銀の上進を惹起し、加ふるに公債政策の濫用は金利歩合の昂騰と金融の梗塞とを促し、是等の事相は相重なつて、我國產業界を疲弊せしめて、已まざること

の諸點は經濟社會の病弊として、最も重大なるものであつて、而して其基く所は無節制なる財政の膨脹に存するのである。我國に於ては大正九年三月を以つて、經濟社會は恐慌の襲來する所と爲つた。恐慌前投機熱勃興の爲めに、繁榮を告げた我國經濟社會が恐慌を一回轉期として、不景氣に陷つたことは、當然の事實を以つて、之を認めなければならない。然しながら不景氣時代の經濟社會に出現する現象は物價の下落と金利の低廉とでなければならず、物價が下落し、金利歩合亦低廉と爲ればこそ、恐慌當時から不景氣の初期に於て、整理された經濟社會が次第に刺戟を受けて、恢復の

緒に就くを得るのである。即ち不景氣時代に於て、物價と金利と相次いで低落し、兩者の低落することが自ら景氣の恢復を促し、不景氣をして法外に繼續することを許さゞる所以と爲るのであつて、所謂經濟的循環期學說の成立する根據と爲るものと認められる。然るに我國に於ては、不景氣と爲り、又其勢の浸潤しつゝある今日、必ずしも物價並に金利に低落の趣きを示さない、不景氣であつて、物價が依然として騰貴して居つたり、金利も亦不廉にして、金融を梗塞せしめつゝあるが如き、何としても一種の經濟的變態を以つて、見る可きである。而して此事の生じた原因は何れに在るかと云へば、財政の規模頗る膨脹し、不景氣時代に於て、依然として巨額の經費を投じて、物資や、勤勞に對して、大なる需要を致すからである。國民經濟は經濟社會不振の結果として、衰微して居るに相違ない。然るに國家經濟たる財政は一向に衰微せず、好景氣時代に於けると同樣の或は其れよりも大なる規模の下に、營まれて居る以上は、我國の經濟社會には不景氣の潮流と好景氣の潮流と互に交錯し、一方の働きに依つて、他方の働きを牽制しつゝあることは明白の事實であつて、斯くては不景氣の影響の我國に徹底せず、左ればと云つて、景氣恢復の機運の促進されざるに至ることも、亦怪むに足らないのである。

經濟的循環期學說の下に於ては、十年を一期として、恐慌の起ることが說明され、又此十年間に、不景氣時代、整理恢復時代、好景氣時代と云ふ三種の時期があり、而して好景氣時代の頂點に臨んで、恐慌の爆發に接すると云ふ事實が論證された。經濟社會の變動を律する事相の複雜と爲るに隨ひ、經濟的循環期の運用も亦右の如き正確なる規律を保たざるやにも見へるが、今日の經濟社會に於ても、尙ほ一時代の經濟的現象ばかりが獨り永い年數を占めることは、想像されない。三年なり、又は其前後の時期なりに於て、一の經濟的季節が經過して、他の季節の之に代ることを以つて、定則としなければならず、隨つて或る國が恐慌の襲ふ所と爲り、恐慌後不景氣に陷つたとしても、數年の久しきに亘つて、不景氣に苦しめられるが如きは、事實に於て起る可からざる所である。蓋し不景氣の結果、物價の下落することは、人々の生活を安易にして、資本の蓄積を促し、斯く蓄積された資金が低廉なる利率の下に、諸種の事業に放下されるに至つたならば、景氣の恢復は期して待つ可きの道理であるからである。然るに我國に於ては此經濟的循環期學說が

遂に實際に適用されず、大正九年三月の恐慌後に始まつた不景氣が滿四年九個月を經る今日に至つても、毫も其趣きを更めず、或る方面に就て云へば、益々悲慘なる事相に接しつゝあるが如き、如何なる所に其說明を求む可きであらうか。始めは財政の困難、公債市價の低落、金融市場に對する壓迫等を以つて、不利なる事相の重なるものとしたが、今や連年に亘る貿易の不均衡は外國爲替の逆調を來し、此點に於て我國の經濟社會を苦しめること少なしとしない。私をして云はしめれば、我國經濟社會の苦悶斯の如きに至つたのは、經濟社會不景氣の時代に居つて、獨り財政に放漫を事とし、國民經濟と國家經濟たる財政との間に、全然均衡の保たれざることゝ爲つた結果であると斷定するを憚らない。國民經濟不振の時代に於ては、其不振と調節される程度まで、財政の規模を縮小するのが當然の處置であつて、或は斯の如くして不景氣は社會到る所に浸潤し、其勢を逞うするに至るかも知れないが、是れが却つて經濟社會をして速に恢復の道程に就かしめる所以と爲るのである。國民經濟は數年に亘つて、收縮しながら、財政獨り膨張し、恰も經費有益說や、經費至上說を以つて、我國の財政を律し、經費の固定的性質をして其勢を逞うせしめたことが實に我國經濟社會に病弊を齎す所以と爲つたのである。隨つて我國經濟の匡救策としては、些々たる末節に拘泥することを要せず、一意財政の緊縮を急とするの外に、他あるを認めるを得なかつたのである。

五

更に私は我國に於ける現實の問題に基いて、財政と國民經濟との關係を考へたい。大正十四年の豫算案編成に對して、政府が如何なる方針に出るやと云ふことは、我國經濟社會の近き將來に於ける趨勢を決定する上から考へて、最も興味の深き問題であつた。殊に政府は行政財政の整理を標榜し、其結果の大正十四年度豫算案に現はる可きことを國民に期待せしめるの態度を示して居つた。行政財政の整理と云ふことに就ても、時に異樣の解釋が行はれ、行政上の能率を發揮せしめることが整理の眼目であつて。隨つて新官廳の設立とか、新事業費の要求とか云ふが如きことも、此見地から見て、當然の處置として、認容されなければならないと云ふ說も行はれたが、私を以て見るに、今日の事態に於

て、行政財政を整理する必要ありとすれば、其事たる、年來放漫を極めた財政、複雜に流れた行政に革新を施すの一事に基くものであつて、隨つて兩者の整理と經費の削減との間には、不可分の關係を持つものと考へられる。英米兩國の如きは歐洲戰後に於て、財政に一大緊縮を行ひ、斯くて剩し得た收入を財源として、或は租税を輕減免除したり、或は公債を償還したりして財政整理の業を果すと共に、國民經濟振興の目的を達して居る。經費の削減又は其の節約と云ふことは外觀に於て、消極的であるが、一方に國民經濟に對する負擔が緩和されて、其活動に資する效果の大なることは、吾人の閑却する能はざる所である。英國に於て、一時グラッドストン時代の自由黨が經費の削減(Retrenchment)の經費の節約(Economy)を標語として、財政に臨んだことがあり、近年に於ては黨派の別を問はず、如何なる財政家も經費の節約に依つて、戰後財政の處理に勉めて居るのは、爭ふべからざる事實である。我國に於ては、行政財政整理が或る程度まで行はれたとしても、從來の如き鑄型の定まつた組織の下に、政治の行はれて居る限り、國民の負擔に著しき輕減緩和の加へられる餘裕を期するを得るかどうか、此事は當初から私の深く望みを繋がなかつた所である。唯我國從來の財政に於ける病弊として、積極政策の濫妄に行はれた爲めに、總ての方面に亙つて、餘りに放漫を極めて居る。之を緊縮すると共に、公債財源の事業費をも整理し、公債發行に依つて、金融市場を脅かす虞れなからしめる位の整理は必ず行はれなければならないものと考へて居つたし、又行政財政の整理を標榜した政府の體面上、此程度の實效は必ず求められると豫期したのである。然も實際の成績は果して如何なるものであるか。

最近大藏省に依つて發表された大正十四年度豫算案の大綱に據ると、私は政府の行つた所謂行政財政の整理に大なる瑕疵の存することを認めざるを得ない。其第一は財政緊縮の不徹底なることである。即ち大藏省の發表に據れば、明年度の豫算に於ける歳入十四億四千五百萬圓に對して、歳出は十五億三千三百萬圓と計算されて居る。本年度の更正豫算に於ける經費十五億八千五百萬圓に比較すれば、明年度の經費に五千二百萬圓の減少の加へられたことは之を認めるを得るが、本來政府は財政整理に依つて、結局一般會計に於て、一億五千萬圓の節約整理を行ひ、其結果は正に明年度豫算案に現はれて居る可き道理であるのに、尚ほ實際の歳出は右の如くであつて、整理の行はれなかつた本年度に比較して、

著しき相違ありと認められない。然らば政府が數個月の日子を費して、行政財政の整理に沒頭したとして、結局何ものを齎すを得たか、私の了解に苦む所であつて、斯の如きは要するに整理の局に當つた者が官僚軍閥の跋扈を制するを得なかつたり、又過度の經費縮小に依つて、經濟社會に一時的打擊を及ぼすことを恐れたりした結果であると認められる。

第二、經費に加へられた削減の跡の斯の如く不徹底であるのみならず、明年度の豫算案には總豫算の外に、幾多の追加豫算の伴ふことを知らなければならない。局外者の推測する所を以つてしても、退職者に給與される退職賜金の如き、恩給の增額、退職賜金公債に對する利子の如き、何れも追加豫算に於ける經費の重なるものであつて、其金額は一億圓を下らない。然らば明年度に於ける經費は十六億數千萬圓の多きに上り、經費膨脹の新記錄を示すに至る。財政緊縮を標榜した現內閣の下に於て、却つて財政膨脹の新記錄を作るが如き、正に當代の珍事とせざるを得ないではないか。

第三、或は右の如き經費の內には、一時的必要の存するに止まるものがある。官吏退職賜金の如きは、即ち其一であつて、後年度に於て、全然其必要消滅し、經費にも其れだけ緊縮の行はれる道理であるが、一方に今回整理されたと稱される金額一億五千萬圓の內、幾何が能く永久的效果を有すると認められるであらうか。右の金額中、眞實の節減は六千四百萬圓に止り、八千六百萬圓は事業の繰延に過ぎないとすれば、年度の經過と共に、一旦繰延べられた經費が再び歲計に現はれ來つて、經費の膨脹を促し、當局者半歲の苦心に成れると稱される整理の效果は殆ど埋沒されざるを得ざるに至るであらう。

第四、然らば斯る整理に依つて、財政の基礎に幾何の鞏固を加へるを得たであらうか。嚢に揭げた如く、歲入の十四億四千五百萬圓に對して、歲出は十五億三千三百萬圓に上り、歲入不足八千七百萬圓を數へ、之に對しては剩餘金を財源に充てゝ、以つて收支の均衡を維持しようとすることが豫算編成上に於ける一缺陷を暴露したものである。其上に公債の如きも、明年度に於て發行を必要とするもの、既に一億一千萬圓の多きに上り、追加豫算成立の曉には、更に與賜公債其他發行を必要とする以上は、公債政策濫用の弊は容易に我國の財政に於て、之を除くを得ないのである。或は政府は其財政方針の一端として、大正十四年度に於ても、公債は之を市場に公募せざる計畫であると云ふ。公募せざるは公

募するに比較して、幾何勝れるものありとするを得るであらう。然しながら公債政策の爲めに、金融市場に大なる壓迫を加へる原因は公債が高利の下に、市場に公募される故のみに存するものではない。假令ひ公債は市場に公募されずとも、預金部を通じて發行され、我國公債の現在高を増加し、供給過剩の爲めに、市價に底落を來したならば、此一事に依つて、金融市場の壓迫されることを免かれない。蓋し公債の市價の低落は公債を利用して、資金を融通する者に融通の自由を制限し公債を所有することの多額なる銀行の資金融通力を減殺するが如き不利なる影響を伴うからである。行政財政の整理を敢行したと稱する政府の下に於て、尙ほ公債増發され、其市價の低落を通じて、金融市場を壓迫するが如き、近來の奇怪事と云はなければならない。

六

行政財政の整理に對して、世人が望みを繫いだ所は之に依つて財政と國民經濟との間に生ずる不利の交渉と接觸とを排除し、年來疲弊した經濟社會の改善に資せしめるの一事であつた。而して其改善を實現する前提としては、金利歩合の低落、産業資金の供給豐富、貿易逆調の匡正、物價の調節等幾多の行はれざる可らざるものがある。財政の緊縮は必ずしも唯一の對症療法を以つて、目するを得ないかも知れないが、其療法の最も重要なるものであることは、之を爭うを得ない。然るに財政整理の狀況、上記の如くであるとすれば、其將來は現在と比較して、果して幾何の差違ありとするを得るであらうか、其五十歩百歩に過ぎざるや、論を俟たざる次第である。

然らば我國に於て、財政的緊縮を主眼とする財政整理の業の徹底せざること、斯の如く爲るは何故であるか。財政の方針を決定する者は一國の大藏大臣であるとしても、根本の方針を確立するに就て、閣員全體の合議を必要とする。然るに我國に於ては、國民一般に經濟財政の智識を缺いて居るか、閣員中にも亦之を缺く者少なしとしない。現内閣の各省大臣は三億三千萬圓に上る整理案に反對して、遂に之を一億五千萬圓に減少せしめた一方に、新規要求の經費をして二億七千萬圓に達せしめ、之を四千三百萬圓程度に折合うことに就て、容易ならざる曲折を經たと云ふが如き、更に諸

大臣を擁する所謂三派の政黨が黨勢を地方に張る爲めに、鐵道建設費に於ける削減を喜ばず、公債政策が如何なる混亂狀態に陷るを問はず、鐵道の建設に若干の經費を供へしめようとして、狂氣の騷ぎを演ずるが如き、何れも我國財政の現狀に對する理解を缺くの證左である。內閣員が國政の全般に亙る知識と理解とを缺き、單に自己の主管する一官廳の爲めに、一錢一厘なりとも多くの經費を分捕して以つて自己の權勢を張るの具に充てんとする醜態は屢々之を從來の官僚內閣に於て見たのであつて、官僚內閣に此の種の醜態を生ずるや、世人は之れを以つて官僚出身の輩に行政長官たる材幹はあつても、國務大臣たる器局の存せざるものとして、嘲笑するの趣きを免かれなかつた。然も今、同一の非難が政黨內閣の閣員にも加へらるるに至つては、吾人は如何なる形態の內閣を以てしても、內閣員たるものに訓練の足らざることを遺憾とせざるを得ないのである。

一國の政府が行政財政を整理し、然も其整理の規模の大ならんとする場合には、其結果として或は一時不景氣の勢を加重し、或は官界に多數の失職者を生じて、彼等の生活を脅かし、或は從來濫妄なる經費の支辨に依つて、有利なる地位に居つた者の利益を奪ひ去る等、種々の支障、反對に接することを免かれない。是等に對抗して、能く所信を斷行するには、閣員全體の協力に加ふるに、訓練ある政黨の援助を以つてしなければならない。然るに我國今日の狀態は如何であるか。內閣は三派の聯合に依つて支持され、而して三派の經綸には其細目に就ては勿論、根本方針に就てすら、大なる徑庭を存し、三派と閣員との意見にも亦一致を缺くものがある。果して然らば我國に於ては、財政は整理せらる可き必要に會しながら、整理の遂行に必要なる條件は一として備はらなかつたことが認められる。英米兩國に於ては、千九百十九年を以つて、經費縮小の端を發して以來、年々經費に若干の減縮を告げて、次第に戰前の舊時に近づかんとしつゝあるのである。蓋し斯の如きは、最初の機會に於て行はれた經費の縮小が物價の低落を惹起す原因となり、物價の低落が次の年度以後に行はる可き經費の縮小を容易ならしめ、原因結果互に交錯して、以つて財政整理の進行を告げるに至るのである。斯の如きは最も圓滑に財政整理の功業を擧げる所以であるが、然も此結果を收めるには、最初の機會に於て行はれる經費削減額の相當に大なるものであることを必要とするのである。然るに我國に於ては、今回行はれた

整理は甚だしく不徹底なるものであつて、整理と稱しながら、却つて經費の增加を促すが如きに於ては、財政上の關係から見て近き將來に物價の低落することは期待されない。財政以外の關係に於て、政府が如何なる物價調節策を講ずるかは今日不定の問題であるが、爲替相場暴落の如き、物價の騰貴を促進する原因はあつても、一方に之を調節する働きの何れの邊にも見られないのが、現在の狀態であり、而して財政の膨脹は今後に於ても、舊時に異なる所ないとすれば、物價の低落に依つて、將來の經費節約を容易ならしめるが如きことは、我國に於ては遂に之を見るを得ないであらう。斯くて經費が十六億圓臺に居り、一方に數年に亘る不景氣の爲めに、經濟的實力の沈滯衰微しつゝあることを考へたならば、斯る巨額の經費の負擔を强要されることが我國民經濟に如何なる患害を及ぼすであらうか。私の憂慮する所は此一事である。

更に今回の財政整理に就て、私の遺憾とする所は行政制度又は行政組織の根本に就て、何等の改造の行はれなかつた一事である。即ち當局者の擧げて、以つて行政整理と稱するものは、單純なる局課の廢合並に之に伴ふ吏員の陶汰に止まり、此以外に何ものゝ存するを認められない。今日國民の要求しつゝある行政刷新は果して斯の如きものであつたか、官廳一般に横溢する繁文縟禮の弊を除却し、官吏をして直接に民衆に接觸せしめると共に、監督、伺、指令と稱するが如き家長主義的行政の遺物を廢止し、行政の行はれる所をして簡易活潑ならしめるの諸點は行政組織の刷新法として、國民の望んで已まざる所であつた。然も政府は斯る問題には手を觸れず、局課の廢合、官吏の罷免に依つて、若干の節約額を捻出するに努めた。斯くて若干の節約は歲計の表面に現はれたとしても、一二年を經過する間に、行政事務の繁忙と云ふことが口實と爲つて、曩に廢止された局課が新設され併合された局課が獨立し、往時罷免された官吏が復職し、一時見るを得た經費の節約額亦一空に歸するが如きは、從來の行政整理に於て、屢々實際に現はれる所であつた。一此事たる、制度の根本的改革を行はず、單に外面を粉飾することに重きを置いて、行政整理を行ふ場合に於て、免かれ難き所であつて、今回の整理亦に此亞流に過ぎざることは、私の甚だしく遺憾とする所である。國民經濟を匡救するの道としては、今回の整理を以て、將來を打切らうとするが如き、間違の最も大なるものと云はざるを得ない。

無産階級政黨の組織形態

山川均

(一)

日本勞働總同盟は十月五日の、關東關西の兩大會に於いて、無産階級政黨の問題を議題に上ぼしたが、十七日の官業勞働總同盟の大會もこの問題を上程し、續づいて二十一日に開かれた東京市電從業員組合自治會の大會でも、政治運動に對する態度が論議され、海軍勞働聯盟の大會も、その大會に於いて、同じ問題を議題とした。これ等の勞働團體の決議や決定は、具體的の對策には多少の相異こそあれ、ブルジョアの既成政黨から獨立した無産階級の政黨を組織することが刻下の急務であることを認めた點では、悉く一致する。然るに組合以外の一般無産大衆の間には、政治研究會の活動は着々その効果を擧げつゝある。無産階級政黨の組織は、今や當面の實際問題となつたのである。

尤も無産階級黨組織の時機については、多少の異論があるが、それとても、無産政黨の組織を差し迫つた當面の必要とする點で、意見が異つてゐるためではなくて、主として政黨組織の上の、技術の上から見ての時機如何といふことであつて、捉らへ得られる最近の時機に於いて、政黨組織の實現を期するといふ一點では、勞働團體の大多數と、その他の一般無産階級分子の大多數との意見が、最早や一致してゐるものと見て誤りはない。

これは無産政黨問題の、最も根本的な問題が解決されたことを意味してゐる。勿論、無産政黨組織の途上には、尚ほ幾多の重要な問題が殘されてゐる。吾々は是等の重要問題のうちで一唯だ僅かに其の一つを解決しただけである。けれどもこの一つは、最も根本的な、最も基本的な一つである。この一つの問題が解決せられてこそ、吾々は初めて、其の他の重要な問題に進むことが出來る。無産階級分子の多數が、この基本的な問題について、意見の一致を見てこそ、初めて其の他の重要問題を討

議することのできる共通の立場が出來たものである。

(二)

そこで吾々がこの次に解決しなければならぬ問題は、第一には、綱領の問題である。新たに組織せられる吾々の政黨は、如何なる綱領の下に無産階級の政治勢力を結束し、如何なる政綱によつてブルジョアジーの政治勢力に對抗すべきかと云ふことは、如何なる綱領によれば無産階級の政治勢力を結束することが出來、如何なる政綱によればブルジョアジーの政治勢力に對抗することが出來るかと云ふことであつて、之は一面には、日本の社會的發展を背景として、無産階級運動の取るべき最も正しい方向と戰術の基調は何であるかといふ問題に關聯し、一面には、斯ような根本戰術の上から見て、新たに生れようとしてゐる無産階級政黨の當面の任務、無産階級政黨が先づその第一歩に於いて解決しなければならぬ當面の任務は何であるかといふ問題——最も遠大な問題を最も手近かな問題——とに關聯する。それが爲めには、無産政黨は如何なる構成要素を包容しなければならぬか、そして斯ような任務に對して、無産階級が現にどの程度の成熟をしてゐるかと云ふことも、綱領問題を決定する上に重要な條件となる。すべて是等の條件に基づいて綱領問題を考究することとは、今後の努力の中心となすものである。

第二には、組織の問題がある。斯ような綱領の下に、斯ような要素を政治的に結束し、そして無産階級の斯ような究極な目標を計算に入れつゝ、尚ほ且つ斯ような當面の任務に向つて無産階級の大衆を統帥するためには、無産階級の政黨は如何なる組織と構造とを持たなければならぬかといふことである。

第三の問題は、主として技術上の問題であつて、斯やうな無産政黨の組織を最も有効に具體化するためには、如何なる準備と如何なる手順方法を取り、如何なる順序と經路を踏むべきかといふ、組織上の技術に關する問題である。政黨組織の時機如何といふ問題も、おのづから此の項目のうちに含まれる。技術上の問題は、やゝもすると輕視せられる恐れがある。けれども無産政黨の成功と失敗とは、少くとも其一半は、出發の仕方によつて定まるものであつて、これはまた、やがて組織を具體化する技術にかゝつてゐる。無産階級の政黨が歴史的使命を有する限りは、それは究極に於いて失敗することは出來ぬ。若し第一の無産政黨が、技術上の欠點のために失敗したならば、第二第三の無産政黨によつて成功するだらう。けれども、之は精力と時間の浪費である。殊に吾々は、有ゆる注意と努力によつて、小黨分立の勢を阻止しなければならぬ。若し技術上の欠點と不

注意とのために無產階級の諸要素を一つの組織に結束することが出來ないで、幾らかの無產階級的政黨が對立したならば、日本の無產階級運動は可なりに長い年月の間、その影響を蒙ることを忘れてはならぬ。

以上の三つの問題は、互ひに相關連するものであつて、固よりはつきりと區別することは出來ぬ。從つて他の二つの問題と切り離して、そのうちの一つの問題のみを完全に解決することは出來ぬ。けれどもそれにも拘はらず、吾々の對決しなければならぬ今後の問題には、大體に於いて以上の如き三つの方面がある。と云ふことが出來る。そして吾々は丁度今ま、この三つの重要問題のそれ〴〵に就いて考究し、討議し、その解決と實現とに向つて努力することの出來得る時機に到達したのである。

（三）

無產政黨の組織については、まだ具體的の成案として發表せられたものはないが、各々の方面に於いて、相當に研究され論議せられてゐる。組織の問題について、今日までに最も多く注意を拂はれたのは、無產政黨は個人的の加盟者から成り立つ單一體とすべきであるか、それとも團體の聯合體とすべきかと云ふ問題であつた。無產政黨は團體――特に勞働組合――の聯合體でなければならぬと云ふ主張は、曾ては、組合の一部では相當に有力な主張であつた。然しながら無產政黨が團體の聯合體であることが、よし望ましい組織の體樣であると假定しても、日本の現狀に當て嵌めることは六ケ敷い。強いて此の組織形態を取ることになれば、勢ひその政黨は、無產階級の大衆的政黨なる性質を失ふことになる。從つて故らに此の組織形態を固執することは、日本の無產階級運動が當面の必要としてゐるような政黨の成立に、サボタージする結果となるのである。のみならず無產政黨を主として組合の聯合體とすることには、組合運動自身に取つても色々の不便と不利がある。そこで今日では、勞働組合の方面でも、個人的加盟說が多數の意見であつて、團體の聯合體とすることには、却つて有力な積極的の反對がある。

無產政黨は團體の聯合體でなければならぬといふ主張に關聯して、無產政黨は特に勞働組合と農民組合との聯合體として、其他の要素を排除しなければならぬといふ說さへもあつた。しかし此の主張は、一方には、組合組織の外にある無產階級分子を除外しながら、一方には、小作農を全然無差別に、工業勞働者と全く同一の立脚地に立つところの、標本的の無產階級であるかの如く取扱つた理論上の誤謬があるばかりでなく、無產階級の政黨に、組合の政治委員會の聯合協議會以上の意義と職分と

を認めて居らぬ重大な根本的の誤謬がある。そこで無産階級黨の性質と任務が明かに理解されるにつれ、斯ような主張は漸次に姿を消し、今日では組合の内部に於ても、無産政黨は組合に組織せられた勞働者と小作農以外、一般無産階級分子を包含しなければならぬといふ主張が、大多數の意見となつてゐる。（組合と黨との職分については、『勞働組合の進化と職分』と題する小冊子の參照を望む）。

そこで無産政黨は無産階級の有ゆる要素の、個人的加盟に基づく組織といふことが、先づ大體の意向であるらしい。然らば吾々の政黨は、無産階級の中心勢力であり、指導勢力であるべき、代表的な無産階級の經濟上の組織――組合――を、全然度外視してよからうか。個人加盟の組織を取り、團體加盟を認めぬとすれば、勢ひこの問に對しても『然り』と答へねばならぬ。然るに一方には、無産階級の政治運動は、組織された無産階級がその指導勢力とならねばならぬといふ要求がある。最近、河野密氏が『勞働者新聞』に發表せられた組織の提案にも、組合は團體として加盟しないが、黨の『執行委員會には何名かの組合出身者（恐らく過半數）をおき、更に執行委員會と組合の政治部員との合議體によつて政策を決定する』といふ方法を取られてゐるのは、このデレンマを避けようとする努力と見なければならぬ。

組織の問題については、私は曾て團體單位の利益と困難な點とを擧げたあとで、次の如き考へを述べたことがある。

『この點については、私は個人的の加盟と共に、團體的の加盟をも認めることが有利であらうと思ふ。此の問題についても、もつと一般的に論議せられる必要があるが、團體單位と個人單位とを適當に調和した組織を發見することが、恐らく日本の實際の要求して居るところであつて、恐らく多くの人人の意見の落着くところであらうと思ふ。……團體的の加盟と個人的の加盟とを認め、更に組合大會または總聯合の特別の機關によつて聯絡することになれば、組合に組織せられた農民と勞働者は、無産階級黨のうちに二重三重に代表され、若くは二重三重の發言權をもつような組織となる場合もある。けれども産業的に組織せられた無産階級分子が、無産階級黨のうちに有力に代表せられることは、望ましいことである。』（『無産階級の政治運動』三五一頁）。

これは勿論、極めて抽象的な言ひ表はしに過ぎぬから、實際に當て嵌めて具體化しなければならぬ。

云ふまでもなく、實際に當て嵌めると云ふことは、組織の問題の第一の條件でなければならぬ。實際を離れて、純粹に理論

の上から、無產政黨の最もよい組織は何であるかと云ふ問ひは、全然無意味な問ひである。或る組織は或る狀況と或る條件との下には、最も良い組織である。けれども他の狀況と他の條件との下では、或は最も惡い組織となるかも知れぬ。そこで先づ第一に記憶しなければならぬことは、吾々は如何なる狀況、如何なる條件の下にも、最もよいところに組織を求めてはならぬと云ふことである。

それならば吾々は、今日直ちに實現の出來得る組織以外の組織は、全然考へる必要がないかと云へば、決してそうではない。如何なる組織も、今日直ちに、何等の準備なくして實現の出來得るものはない。假りに無產政黨が最も容易に實現の出來得る組織形態を取つて生れたとしても、例へば組合の方面では、この政黨の組織形態に順應した相當の機關を設けたり、組織の上に或る程度の改訂を加へねばならぬ。して見れば、今日直ちに實現が出來ると云ひ、出來ぬといふのも、或る範圍までは程度の問題である。今日實現の出來ない組織形態も、明日は實現の出來得る組織となるかも知らぬ。吾々はその努力をしなければならぬ。之は組織形態の場合も同じであつて、現在日本の組合の分量では、現にあるだけのものを材料にしてどの樣に組み合はせて見たところで、直ちに完全な產業別主義の組合を實現することは出來ぬ。けれどもそれ故に、組合運動は今日、產業別組合主義を採用する必要がないであらうか。否な反對に、組合運動は今日直ちに完成することの出來ない原則の採用によつて、今後に於ける組合組織の發達を指導し、努力の方向を定めることが必要である。無產政黨の組織形態もその通りであつて、今日直ちにその全部を實現することが出來なくとも、無產政黨が當面の任務を全うするためには、遠からざる將來に於いて完成しなければならず、また完成することの出來得る組織の目標を定めておくことは、決して實現と離れることではない。無產政黨の組織形態は、現實の形勢と必要とを離れてはならぬ。けれどもそれと同時に、今日直ちにその設計の全部が實現されぬといふ理由を以つて、無產政黨が多かれ少かれ將來に到達しなければならぬ組織の設計を、直ちに空想視することは出來ぬ。虎と豚とは、生まれ落ちるとから、完成された虎と豚との肉體的構造を持つては居らぬ。けれども生れた小動物が虎となるか豚となるかは、まだ完成されない不完全な構造のうちに定まつてゐる。吾々の政黨が無產階級の階級的政黨として完成せられるためには、初めから、斯ような發達を可能とするところの組織形態を持たねばならぬ。

それと同時に吾々は、將來完成せられる組織の立案や設計

を、餘りにやり過ぎてはならぬ。無産政黨がまだ生まれ落ちもして居らぬ今日、成長してから後ちの帽子や靴の寸法まで、一點一劃も漏れなく設計しておくことは、不可能であるばかりでなく無用である。これ等の組織の上の詳細は、無産政黨の發達が、おのづからその途上に解決してゆくべきものである。若し今日、無産政黨の組織形態の詳細な點に至るまで、この點はどうする、この場合には斯うするといふ立案設計を成就し得たとするならば、そしてその立案設計が、今日、如何にも合理で且つ實際に當て嵌つて居ると思はれるものだつたなら、その立案設計は、恐らくは將來の實際とは最も掛け離れたものだらう。のみならず斯ような組織形態の詳細に亙つて、豫め意見の一致を求めることは出來ぬ。そこで吾々は、組織形態の問題については、大體の輪廓について意見の一致を求めることに滿足し、詳細な點については、無産政黨がその發達の途上に於て遭遇する『必要』をして、之を解決せしめねばならぬ。

大凡そ以上の考慮に基づいて、私はさきに引用した私の抽象的な言ひ表はしを、今少しく具體化して見たいと思ふ。

私が日本の現狀から考へて、最も適當な組織形態と考へるものは、『團體單位と個人單位とを適當に調和した組織』であつて、即ちこれを言ひ換へれば、『個人的の加盟と共に、團體的の加盟をも認める』組織であつた。『團體單位と個人單位とを適當に調和した組織』を求めるのは、云ふまでもなく團體單位の組織に伴ふ利益を失はないで、しかも團體單位から來る欠點と危險とを避けんがためである。從つて、單に無産政黨は、個人的の加盟をも認めるし、團體としての加盟をも受附けると云ふだけでは、固より不充分である。『無産階級の政治運動』のうちに述べたように、『日本の現狀では、問題は寧ろ、一個人の加盟を認めるか否かといふことよりも、一個人の加盟を認めると同時に、團體としての加盟をも認めるか否かといふことである』即ち日本の現狀に適切な組織形態は、個人的加盟に基づく組織であつて、たゞ其の上に團體の加盟をも認めるのであつて、問題は、如何なる形、如何なる方法で團體の加盟を認めるかと云ふことである。これに對する私の答は、大體次の三點に歸着する。

即ち(一)黨の組織形態としては、個人的加盟に基づく組織を取ると共に、(二)無産階級運動の中心勢力たるべき、組織せられた無産階級の意志を有力に代表せしめるために、團體(勞働組合及び農民組合)としての加盟を認め、黨の機關のうちに團體としての意見を代表せしめる方法を取ること、それと同時に、(三)組合の組織は、明確に黨の組織以外におき、組合の組織や機關が、そのまゝ直ちに黨の組織や機關となつたり、兩者

の行動や職分の混同することを嚴密に避けることである。この第三の點は、組合が團體として無産政黨に参加することに伴ふ不利益を最少限度にし、政治運動のために、組合本來の經濟運動の活動能力を減殺せぬために、絶對に必要であると思ふ。

(四)

以上の諸點を考慮に入れて、先づ第一に考へられる方法は、黨の執行機關、乃至は執行機關の特別委員と、勞働組合及び農民組合の特別委員とによつて、常設的の聯合協議會を設けることである。この案によれば、無産政黨の組織は、大體次の如きものとなる。(第一圖參照)

(一)黨員　は個人的に加盟し、一定地域の黨員によつて地方支部を組織する。

(二)地方支部　は黨員の總會を開き得る程度の廣さの地域とする。總會は定期(例へば毎年二回)に開催し、總會に於いて地方支部の執行機關(例へば五名の地方支部委員會)を選擧する。

(三)府縣支部大會　一府縣内の地方支部によつて府縣支部を組織し、定期(例へば毎年二回)に府縣大會を開催する。府縣大會の代議員は黨員數に比例して(例へば五十名ごとに一名の割合で)各地方支部を選擧區として選出する。府縣大會によつて府縣支部の執行機關(例へば七名の府縣支部委員會)と監査委員會を選擧する。

(四)府縣聯合協議會　府縣支部委員會の特別の機關は、その地域に於ける

(1)勞働組合の聯合會、評議會、又は協議會

(2)農民組合の聯合會、評議會、又は協議會

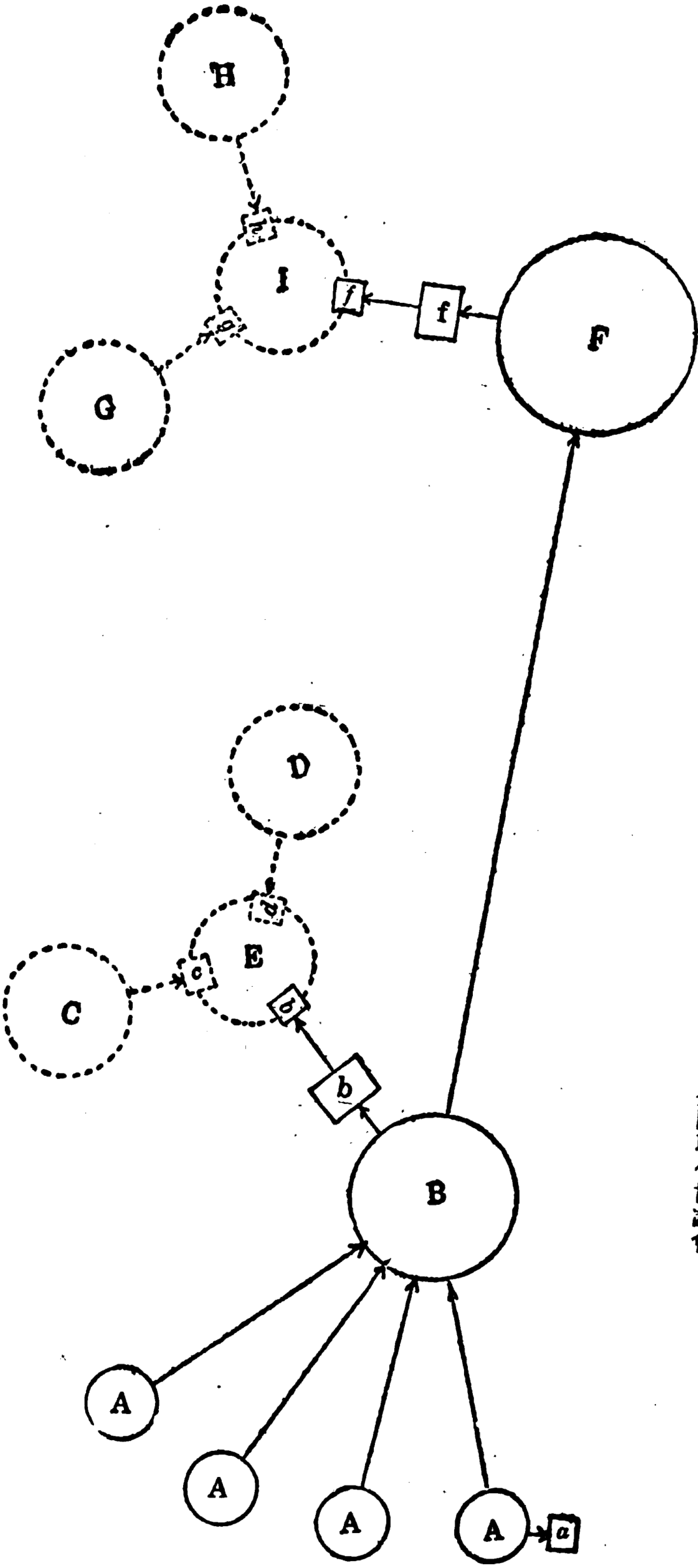
との間に、常設の協議會を設ける。但し府縣支部の機關が聯合協議會を開くべき勞働組合及び農民組合の府縣聯合會、評議會、又は協議會は、同一府縣内に各々一つしか認めぬこと。從つて右に相當した聯合團體等の多い場合には、黨の機關は臨機の暫定的な方法によつて、組合側との協議を行ふこと。

(五)全國大會　府縣支部を合したものが全國的な黨の組織であつて、定期(例へば毎年一回)に開かれる。全國大會はその最高機關である。大會の代議員は、黨員に比例して(例へば黨員三百名ごとに一名の割合で)各地方支部を選擧區として選出する。

(六)中央機關　大會は(1)中央執行委員長及び中央執行委員若干名(例へば三十乃至五十名)と、(2)監査委員會とを選擧する。中央執行委員會は定期に(例へば三ケ月に一回以上)開催し、大會から大會に至る間の黨の最高機關となる。中央執行委

【第一圖】

A 地方支部
a 地方支部委員
B 府縣大會
b 府縣支部委員會
b 同上の特別委員會
C 勞働組合府縣聯合會其他
c 同上の特別委員會
D 農民組合府縣聯合會其他
d 同上の特別委員會
E 府縣聯合協議會
F 全國大會
f 中央執行委員會
f 同上の特別委員會
G 勞働組合全國大會其他
g 同上の特別委員會
H 農民組合全國大會其他
h 同上の特別委員會
I 全國聯合協議會



員會はその中から、常任機關（例へば總務委員七名、幹事、會計）を選擧する。中央執行委員長が同時に總務委員長となる。

（七）全國聯合協議會　中央執行委員會の特別の機關は

(1)勞働組合全國大會、全國總聯合、又は全國協議會

(2)農民組合全國大會、全國總聯合、又は全國協議會

の特別の機關との間に、常設の聯合協議會を設ける。但しこの場合にも、府縣の場合と同じく、黨の機關との間に聯合協議會を開くべき勞働組合及び農民組合の全國機關は、各々一つしか認めぬこと。從つて右に相當した包括的な全國機關の無い場合には黨の機關は臨機の暫定的な方法によつて、組合側との協議會を開くこと。

第一の案は、大凡そ右の如き組織となる。府縣及び全國的の聯合協議會に參加する組合側の聯合團體は、勞働組合農民組合各々一つと定めたのは、斯ような府縣及び全國の聯合團體が完成して居らぬ現狀から見れば、實際に當て嵌らぬように思はれる。けれども既に組合側との聯合協議會を設けるとすれば、各々一團體に制限することは必要欠くべからざることである。なぜならば、假りに數團體の參加を認めることになれば、聯合協議會に獨立の發言權を得る目的のために、別個の聯合團體を組織する機運を促がし、從つて組合運動の分派主義を誘致する恐れがある。また聯合協議會の性質を考へたなら、斯ような制限は、黨の行動に取つても必要欠くべからざるものであることか分かる。聯合協議會は、明らかに黨の組織外の機關であつて、黨の最高機關は云ふまでもなく大會である。勿論、聯合協議會に於ける組合側の意見は、黨の大會にもその他の機關の上にも、相當に有力に反映するには相違ないが、組織の形式の上から云へば、黨の特別の機關は、大會の決定を齎らして聯合協議會に臨むものであつて、聯合協議會の決定に基づいて大會が行動する譯のものではない。聯合協議會の意向は、固より尊重せられるではあらうが、聯合協議會が黨の最高機關ではないのである。そこで聯合協議會の任務とするところは、主として、黨が最高機關の決定に基づいた行動を取る場合に、組合運動との協力を一層有效に、一層緊密に、一層圓滑にすることである。然るに聯合協議會には、數個の組合の聯合團體（多くの場合相ひ對立した競爭團體）が參加して居つて、組合側だけで既に意見が相ひ扞格してゐるとしたならば、聯合協議會は對立組合の爭闘場となり、その所期の效果を擧げ難いばかりでなく、聯合協議會の存在は、却つて黨の行動に累ひするものとなる恐れがある。

先きにも述べたように、聯合協議會の意向は、黨の大會の上

にも其他の機關の上にも、相當に有力に反響するには相違ないが、聯合協議會の本來の性質から云へば、主として、大會によつて爲された決定を行動に移す場合の機關である。そこで聯合協議會以外に、組合としての意志を、黨の決定機關に直接に代表せしめる道が開かれて居らねば、充分に目的を達し得たとは云はれない。この缺點を補はんとしたものが、即ち次に掲げる第二の案である。

（五）

第二の案（第二圖參照）は、地方支部から全國中央機關に至るまでの組織は、第一の案と同じである。尙ほ府縣々々に於いても、また全國的にも、黨の機關が組合の聯合團體の機關との間に、聯合協議會を設ける點も、第一案の通りである。たゞ第二の案は、尙ほその上に、組合から直接に、府縣大會と全國大會とに、直接に代議員を送ることとである。

（一）府縣大會　黨に加盟を決議した組合（勞働組合及び農民組合）は、組合員の數に比例して（例へば組合員三百名またはその端數ごとに一名の割合で）府縣大會に代議員を選出する。

府縣大會に代議員を送る組合は

(1)その府縣內にある單獨の（聯合團體に加盟して居らぬ）地方的組合。

(2)その府縣內にあつて、聯合團體に加盟してゐる地方的組合。

(3)その府縣內にある支部組合（產業別又は職業別の全國的組合の支部、若くは數府縣を包容する組合の支部）。

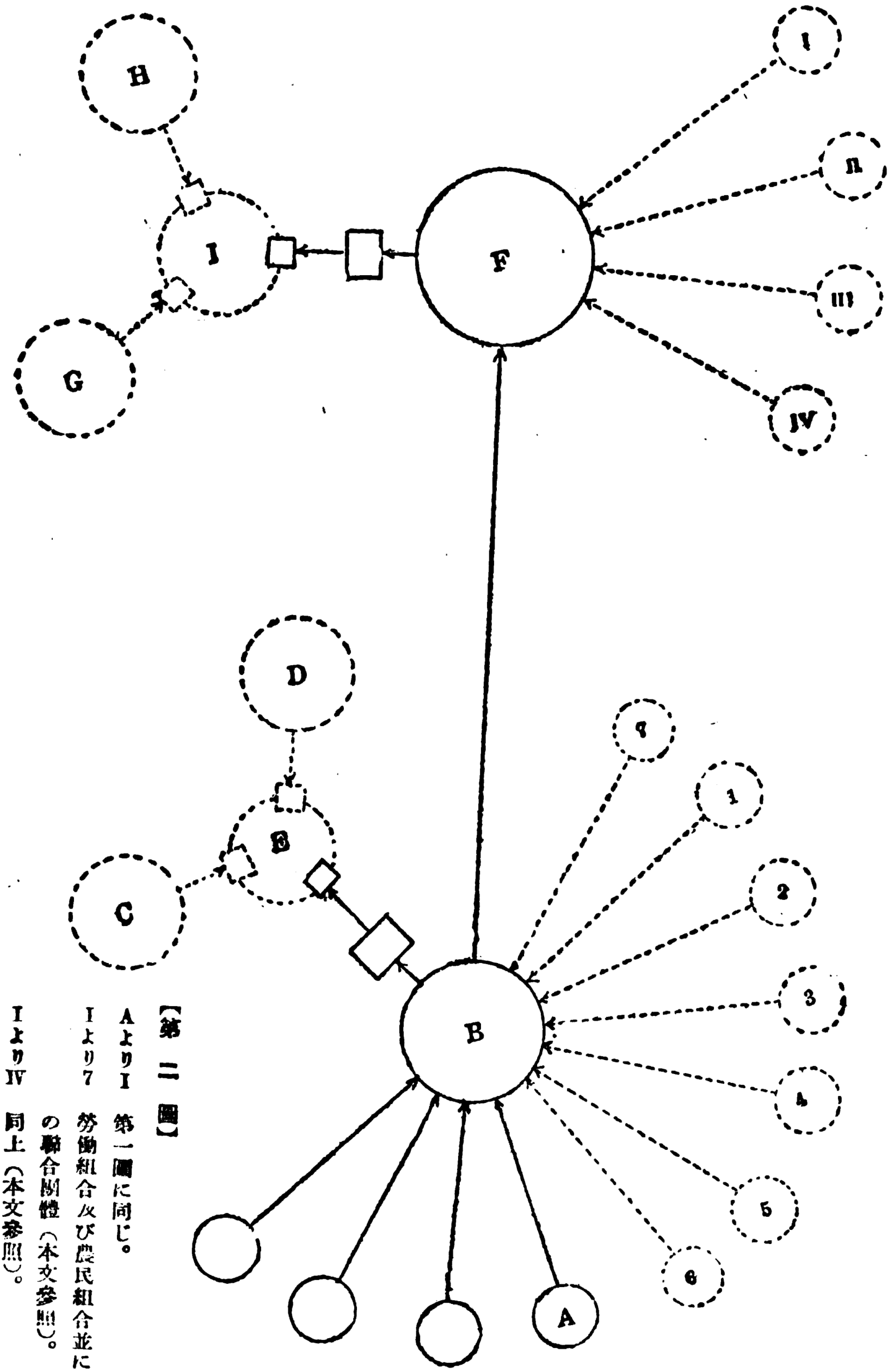
(4)府縣及び府縣よりも小なる地域の勞働組合聯合團體（但し特に定めた大都市を地域とする聯合團體にして、一定數以上（例へば一千名以上）の組合員を有するものを除く）。

(5)その府縣內にある單獨の農民組合。

(6)その府縣內にあつて、聯合團體に加盟せる農民組合。又は府縣以上の地域を包容する農民組合の支部。

(7)府縣よりも小なる地域（一郡又は數郡）の農民組合聯合團體。

であつて、これ等の組合又は聯合團體は、正規の機關によつて黨に加盟を決議した場合に限り、府縣大會に代議員を送ることは無論である。この場合にも、黨の大會に獨立の發言權を得る目的で、競爭組合の發生する傾向を助長したり、又は同じ目的で泡沫的の組合の發生を促がす恐れがある。そこで加盟を決議した組合に對しては、黨は一定の規約により、一定の機關によ



【第二圖】

AよりI　第一圖に同じ。

Iより7　勞働組合及び農民組合並にその聯合團體（本文參照）。

IよりIV　同上（本文參照）。

つて資格の審査を行はねばならぬ。府縣の聯合協議會が成立してゐる場合には聯合協議會をこの資格審査の機關とすることが、最も便利であらう。

組合は必ずしも府縣別の如き、行政區域に沿ふて發達するものではない。工業地帶は隣接府縣に跨つてゐることが多いから、勞働組合の場合に殊にそうである。從つて前掲の如く、府縣によつて資格を定める場合には色々の困難が起るに相違ない。そこで資格審査の機關には、もつと詳細な規定が必要である。例へば、主として甲の府縣にあるが、組合員が多少隣接した乙の府縣に跨つて居る場合の如きは、甲府縣の組合と見做すが妥當であらう。

（二）全國大會　次に掲げる組合及び組合の聯合團體は、組合員數に比例して（例へば組合員二千名またはその端數ごとに一名の割合で）、黨の全國大會に代議員を選出する。

(1)特に定めた大都市を地域とする勞働組合の聯合團體にして、一定數以上（例へば一千名以上）の組合員を包容するもの（一定數以下の聯合團體は、府縣大會に代表者を選出する）。

(2)府縣よりも大なる地域を包括する勞働組合聯合團體にして、一定數以上（例へば一千名以上）の組合員を包容するもの。

(3)産業別又は職業別の全國的組合にして、一定以上（例へば一千名以上）の組合員を有するもの。

(4)府縣及び府縣よりも大なる地域を包括する農民組合又はその聯合團體にして、一定數以上（例へば一千名以上）—の組合員を包容するもの。

全國大會の場合にも、これ等の團體が代議員を送るのは、正規の機關によつて、加盟を決議した場合に限ることは云ふまでもない。また府縣の場合と同じように、加盟を決議した團體に對しては、資格の審査をしなければならぬ。全國聯合協議會の成立してゐる場合には、この資格審査の職分は、協議會によつて行ふことが有効であらう。同一の地域に、二つ又は二つ以上の聯合團體が對立してゐる場合には、審査の上で、その一方又は双方の加盟を承認する。また右に掲げた聯合團體の組合員が、一定數以下の場合には、それ等の聯合團體は全國大會には代議員を送らないで、これを構成してゐる各々の單位組合が、府縣大會に代議員を送ることにする。また産業別又は職業別の全國組合員が、一定數以下の場合にも同じく全國大會には代議員を送らないで、各支部をして、各々その地方の府縣大會に代議員を送らせる。

一都市を地域とする聯合團體は、その地域の關係からすれば、當然府縣大會に代表さるべき筈である。しかし勞働組合はその性質上、大工業都市に集中する傾きがある。そこで是等の大都市の聯合團體が府縣大會に代議員を送つて、大會に代議員を送らぬことになれば、組合運動の重要部分の意志が、地方的の大會にのみ反映して、却つて全國大會には反映せぬことゝなる。のみならず比較的小さな府縣大會のうちに、格外に大きな勞働團體が代表せられることになれば、是等の極く少數の府縣大會と其他の多數の府縣大會とは、その構成があまりに掛け離れたものとなり、從つてその間の意見があまりに掛け離れたものとなる恐れがある。その結果は、組織された無産階級分子の意見と、その他の無産階級分子の意見とが同化し合ふ上にも障害となる。そこで前掲の如く、特に定めた大都市に限り、その都市を地域とする勞働組合の聯合團體は、府縣以上の地域を包容する聯合團體と同一に取扱ひ、府縣大會には、聯合團體を構成してゐる個々の組合から代議員を送り、聯合團體としては全國大會に代議員を送ることが便利である。

全國大會に代議員を送る組合の資格として、一定數以上の組合員を持つことを條件としたのは、全國大會に獨立の發言權を得る目的を以つて、故らに對立團體を作らしめるような傾向の助長を恐れたことが理由の一つである。そこで正式に全國的な聯合協議會が成立し、資格審査が遺憾なく行はれることになれば、組合員の一定數を條件とすることは、必ずしも必要でない。

以上及び以下に用ひた組合員の定數や代議員選出の比例の數字は、多かれ少かれ何づれも假想的なものであつて、尚ほ研究の必要がある。たゞ代議員選出の比例については、支部を選擧區とする一般代議員選出の割合に較らべて、團體からの選出の割合は、原則として遙かに低率でなければならぬ。なぜならば、組合員は一般黨員として支部から代表せられて居り、更に組合として、組合の聯合體として、二重三重、或は四重に大會に代表せられるものだからである。團體として、直接に大會に代議員を送るのは、組合員としての意志が大會に現はれる以外に、尚ほその上に、これ等の組合員の意志を綜合した組合全體としての意志を大會に反映せしめる爲であるから、必ずしも多數の代表員を必要とせぬ。

また第二案の場合には、組合または組合の聯合體が、團體として黨への加盟を決議するものではあるが、組合が黨の組織の一部分となるものではない。組合はたゞ黨の決定機關に代表者を出すだけであつて、黨の組織は、個人として加盟してゐる組合員によつて構成せられて居り、組合の組織は、全然、黨の組

織以外に立つてゐるのである。（右の組織によれば、全國大會及び府縣大會は大凡そ如何なる構成を持つたものとなるかは、極めて興味あり、極めて有益な參考資料となるものであるが、全體の黨員を今から豫想することは、到底不可能である。たゞ現在の勞働組合及び農民組合の全部が團體的に無產政黨に加盟すると假定して、全國大會及び各府縣の大會にほゞ何名の代議員を送ることゝなるかは、大體の概算を立てることが出來るが、こゝには省略する）。

（六）

近き將來に生れんとしてゐる無產階級の政黨に、假りに第二案の如き組織形態、乃至はこれに近い組織形態が採用せられたとするならば、吾々の政黨は、日本の政黨史の上に現はれた如何なる既成政黨よりも、異つた組織を持つものとなり、それだけ吾々の政黨は、無產階級の大衆の組織たる目標に近いものとなる。

けれども右の組織形態は、畢竟するに地域別の組織であつて、この點に於いては、ブルジョアの既成政黨と根本的に異るところはない。勿論、無產階級の產業上の組織たる組合が、團體として加盟してゐるには相違ない。けれども組合は黨そのものゝ組織の外にあるものであつて、黨の組織構造の一部分をなすものではない。組織された無產階級は一般黨員として、組合として、組合の聯合體として、二重三重に黨の決定機關のうちに代表せられるばかりでなく、勞働組合運動全體としても、農民組合運動全體としても、各府縣と全國との聯合協議會により、黨の決定機關の上にも反響を與へ、この決定を行動に移す場合にも有力な影響を持つものであるから、吾々の政黨は、その內容に於いても、決して單なる地域別の組織にのみ立脚してゐるものではなく、間接には、無產階級の產業上の組織に立脚してゐると云ふことが出來る。けれども先きにも述べたように、この事實は、黨そのものゝ組織の上には具體化せられて居らぬ。そして此の範圍に於いては、地域的な地盤の上に立つブルジョアの既成政黨と、根本的に異るところがない（或は少ない）と云はなければならぬ。

一定の政治上の意見によつて、個人的に加盟した黨員を、地域的に組織することが、即ち政黨の本質であるかの如く考へて居る人がある。これは慥かに政黨の本質ではあるが、ブルジョア政黨の本質である。ブルジョアの政黨は、選擧有權者の大衆的の組織ではなくて、選擧有權者の投票を集める爲めの、主として職業政治家の組織である。選擧と投票の獲得との爲めに存

在するブルジョア政黨の組織は、選擧區が地域的である限りは、地域的の以外の組織であることは出來ぬ。また地域的な組織以外の組織を持つ必要がない。ブルジョア政黨の任務は、出來得る限り、政治の階級的性質を蔽ひ隠くし、大衆の錯覺に訴へて、如何なる階級からも投票を獲得することである。斯ような任務を帶びたブルジョア政黨が、地域的の組織を以つて本質とするのは固より怪むに足らぬ。

之に反して無產階級黨の任務とするところは、政治の階級的性質を隠くしてゐる錯覺を打ち破ることである。無產政黨の政綱は、地方に訴へるものではなくて、階級に訴へるものである。無產政黨の勢力は、地方的の地盤の上に立つものではなくて、階級的の地盤に立脚する。選擧戰と投票の獲得とは、固より無產政黨の任務の一つとなるに相違ない。けれども無產政黨は、有ゆる階級から投票を獲得することを目的とするものではなくて、唯だ無產階級の投票を獲得することを目的とする。無產政黨が中間階級の投票をも無視しないのは――否な或る形勢の下には大に重要視するのは――これ等の階級の投票を獲得して、その上に無產政黨の勢力をおき、これ等の階級を以つてその實勢力の基礎とする爲めではなくて、唯だ單に、ブルジョアジーをして、是等の階級の支持を失はしめようとするものに外ならぬ。ブルジョア政黨が、政治の階級的性質を隠蔽して――また隠蔽するために――地域に訴へるに反して、無產階級の政黨は、階級的の利害と意識に訴へる組織である。然るに階級の對立は、地域的に存在するものではなくて、產業的に存在する。

選擧區が地域的に分かれてゐる限りは、そして選擧戰が無產政黨の任務の一つである限りは――其他の必要は暫らくおき――無產政黨はこのブルジョア政治の實際に順應して、何等かの形で地方的の組織を持たねばならぬ。けれどもそれと同時に、無產政黨が眞實に無產階級の政治努力を結束した階級的政黨たる本質を充分に發揮するためには、階級對立といふ事實に並行した組織を持たなければならぬ。即ち產業のうちに無產階級が占めてゐる特殊な地位に照應し、この特殊な地位を直接に反映した產業的の組織を持たなければならぬ。

階級的對立の事實をそのまゝに反映した組織は、日本の現狀に於いては、充分に實現することは出來ぬ。そこで現在のところでは、吾々は地域的の組織以外に、產業線に沿ふた組織を、幾分か加味することを以つて滿足しなければならぬ。

斯ような組織を加味することは、今一つの理由からも必要である。先きにも述べたように、ブルジョアの既成政黨は、選擧

有權者から投票を獲得する爲めの組織——主として職業政治家の——であつて、選擧有權者の組織ですらもない。之に反して吾々の政黨は、無產階級の大衆から投票を獲得する爲めのみの組織ではなくて、大衆そのもの丶組織でなければならぬ。この點に於いて、無產階級の政黨は、ブルジョアの既成政黨とは、根本的に異つたものでなければならぬ。ブルジョア政黨の選擧運動は、何百萬圓かの資金を投じて投票を買ひ取る運動であつて、よし是等の資金が、法律上の選擧違犯を構成するが如き方法で支拂はれないにもせよ、究極に於いては一つの取引である。それは上蔟期に、繭買ひが養蠶地を買ひ歩るくのと、性質に於いても方法に於いても、異るところはない。無產階級の政黨は、斯ような方法によつて、無產階級の大衆から投票を獲得することは出來ぬ。若し吾々の政黨が、同じ方法に於いて、ブルジョア政黨と投票を爭はねばならぬとしたならば、無產大衆の投票を獲得するものは吾々の政黨ではなくて、恐らくブルジョア政黨であらう。無產政黨の恃むところは、唯だ組織の力である。それは無產大衆の投票を獲得する爲めの組織ではなくて、大衆そのもの丶組織であるといふ一點にある。

吾々の政黨が大衆的の組織となる爲めには、それは議會の後の報告演說會と、數年一回の選擧季節にのみ思ひ出される集團ではなくて、常住不斷の組織でなければならぬ。吾々の政黨が斯ような組織となる爲めには、組織單位の內部では、黨員の間に絕えず接觸が保たれ、有力な結束力がなければならぬ。例へば單に選擧運動の便宜のみから云へば、支部の區劃は、選擧區を單位とすることが有利であるかも知れぬ。けれども中選擧區が採用せられると、一選擧區よりも狹い地域に結束の單位をおく必要がある。支部の地域を、黨員の總會を開き得る程度としたのは、其の爲めである。けれども支部の單位を小さくしただけでは、まだ不充分である。そして此の不充分は、吾々を日常の生活に於いて結びつけてゐるところの產業上職業上の組織によつて補ふことが必要である。

斯ような目的のために、私は前述の第二案に、更に次の如く組織を加味したいと思ふ。

(七)

第三案は、以下に附け加へる點を除いては、第二案と同じである。

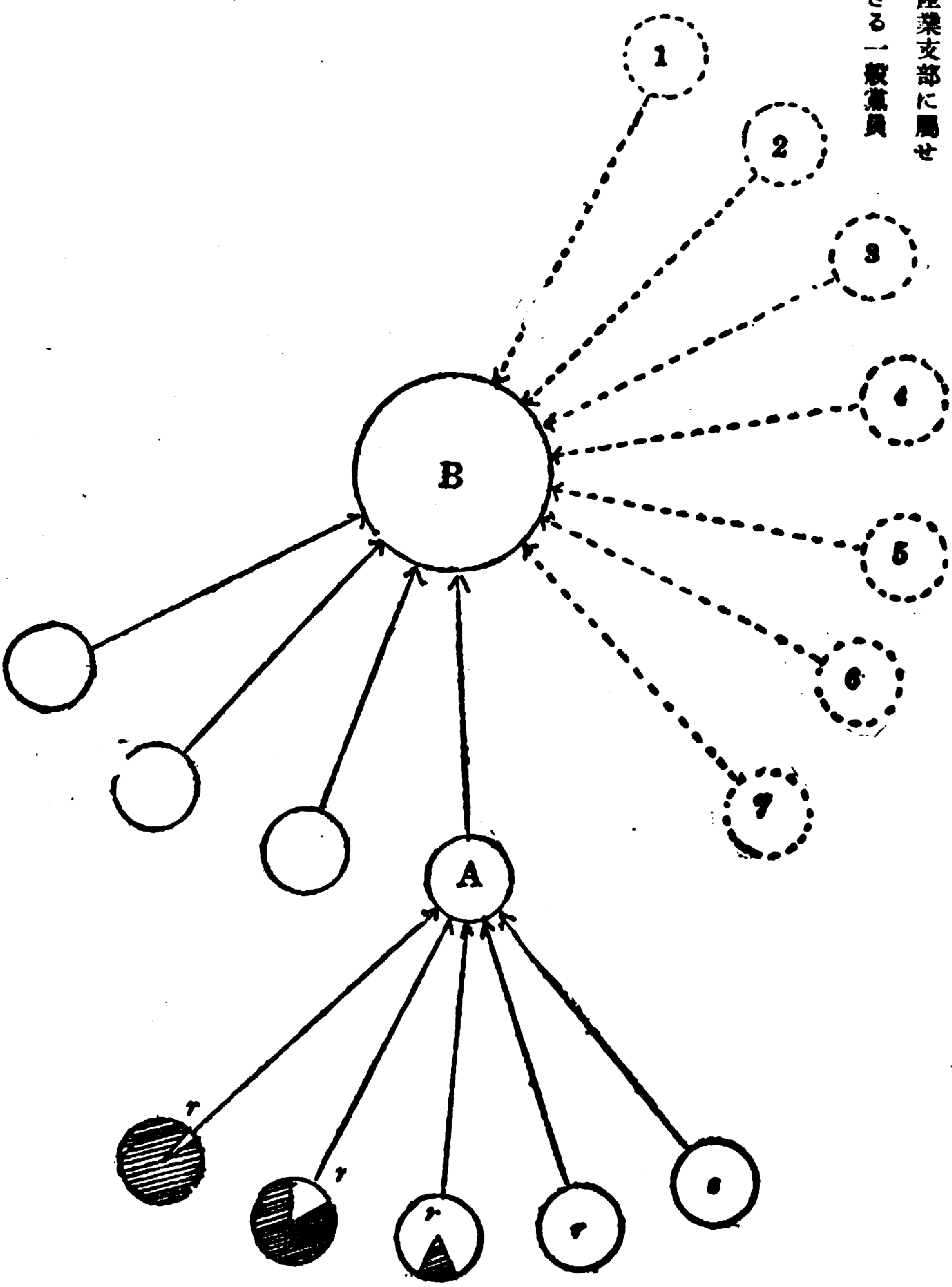
(一)產業幹事　地方支部の地域內に於いて、同一の工場、事業、農場、同一產業または同一の職業に一定數以上(例へば名以上)の黨員のある場合には、選擧によつて、一名乃至三名

【第三圖】

A　地方支部

r　產業支部

s　產業支部に屬せざる一般黨員



（例へば黨員百名以下は一名、三百名以下は二名、三百名以上は三名）の產業幹事を設ける。（產業幹事は工業方面と農業方面とを區別するために、例へば勞働幹事、農民幹事といふように、稱呼の區別をつける）。產業幹事の職分は(1)黨の上級機關と黨員との間の聯絡に當り、(2)黨の上級機關から委任するその他の職務を取り、(3)執行機關の選擧に當り、候補者を詮衡することなどである。地方支部のうちに右の如き產業上の單位（例へば產業支部を呼ぶ）を作ることの出來るのは、(1)勞働部では賃銀勞働者、その他の使用人、俸給生活者、(2)農民部では、小作農と農業勞働者に限る。

(二)地方支部委員會　の選擧には次の如き方法を取る。

(1)勞働幹事の協議會によつて定める
候補者（例へば三名）の中から　一名。

(2)農民幹事の協議會によつて定める
候補者（例へば三名）の中から　一名

(3)一般黨員の中から　三名。

右の割合にて總會の全會で選擧する。

(三)府縣大會は、次の如き代議員によつて構成さる。

(1)各地方支部から選出された代議員（第二案と同じ）

(2)各地方支部の產業幹事。

(3)加盟組合から選出さる代議員。

(四)府縣支部委員會は地方支部委員會の場合に準じ、次の如き選擧方法による。

(1)大會に於ける勞働幹事と、勞働組合から選出された代議員との協議會によつて定める候補者（例へば五名）の中から二名

(2)大會に於ける農民幹事と、農民組合から選出された代議員との協議會によつて定める候補者（例へば五名）の中から二名

(3)一般黨員の中から　五名。

これ等の人員も、いふまでもなく假想的の數字である。また選擧は支部總會の場合と同じく、各部別々に行ふのではなくて、右の候補者表によつて、府縣大會の全會で行ふものである。

(五)全國大會も同じく次の如く代議員によつて構成される。

(1)各地方支部を選擧區として選出される代議員（第二案に同じ）

(2)各府縣の勞働幹事の代表者（一府縣例へば二名）

(3)各府縣の農民幹事の代表者（一府縣例へば二名）

(4)加盟組合から選出された代議員（第二案と同じ）

（六）中央執行委員會、の選擧する同樣の方法を取る。

(1)大會に於ける勞働幹事代表と、勞働組合から選出された代議員との協議會によつて推薦する候補者（例へば十五　名）の中から七名。

(2)大會に於ける農民幹事代表と、農民組合から選出された代議員との協議會によつて推薦する候補者（例へば十五　名）の中から七名。

(3)一般黨員の中から　十六名。

右の割合で、大會の全會に於いて選擧することは、府縣大會の場合と同じである。この場合も數字は假想的であつて、中央執行委員の人員は假りに三十名として、大凡そ妥當と思はれる割合を示したに過ぎぬ。

第二案に以上の組織を取り入れると、餘りに複雜面倒になるかのようであるが、實際には、それほど複雜面倒になる恐れはない。殊に面倒に思はれるのは、恐らく執行機關の選擧であるが、これとても必ずしも、大して手數と面倒を增すものではない。政黨は政治上の意見の一致によつて集まるものではあるが、如何に嚴密な意見の一致によつて集まつても、その內部には必ず右翼と左翼と中央といふような、幾つかの流派が出來る。これは團體を幾ら小さくして見ても、一人一黨でない限り免れない。否なそれがあつてこそ、無産階級を構成する色々の要素の間の、意見の同化が行はれ得るのである。從つて大會で黨の執行機關を選擧する場合には、各々の流派によつてコオカスが行はれ、候補者が立てられるに相違ない。吾々の政黨が、現在日本のブルジョア政黨のように、一切萬事が待合のひそひそ話や最高幹部の茶呑み話の間に、四疊半式に決定され、その結果が、總裁の役員指名となつて表はれるが如き組織でなく、眞に大衆的の組織であるならば、之は當然であるばかりでなく、寧ろ望ましい事である。黨の執行機關の選擧には、當然、各々の流派の間にコオカスが行はれ、立候補が行はれるとしたならば、意味は異つてゐるが手續きに於いて相ひ似たことが、黨の組織の一部として取り入れられたからと云つても、必ずしも手數と面倒とを增すものではない。

けれども吾々は、まだ團體的の訓練に乏しいから大衆的政黨運動の初學者たる吾々に取つては、斯ような組織は、複雜に過ぎると假定したならば、必ずしも右の組織の全部を、一時に完全に實現しなくともよい。吾々は斯ような組織を目標として、實際に實現することの出來得る、最も容易な部分から取り入れてゆけばよいのである。

私は勿論、斯ような組織が複雜に過ぎるとは思はない。從つ

て、それ故に實現が六ヶ敷いとは考へぬ。けれども斯ような組織を完全に、一時に、且つ黨の組織全體に亙つて一樣に實現することは、全然別個の理由から至難である。なぜならば全國の大多數の地方支部に、一齊に斯ような產業支部を設けることは出來ないからである。然しこの點から云へば、府縣の大會に組合の代議員を送つたり、聯合協議會を設けることも同じであつて、或る地方には容易に實現が出來るが、或る地方では、少くとも極めて近い將來には、その實現は望まれぬ。けれどもこの組織にしても、必ずしも、全ての地方に同時に一樣に行はれることを必要とせぬ。吾々は之を實現することの出來る——從つて之を必要とする——地方から實行すればよい。第一に重要なことは、吾々の政黨はどの程度まで、斯ような組織を即時に實現することが出來るかといふ問題ではなくて、吾々の政黨には、斯ような組織に進むべき——また進み得る——道が確立せられてゐるかどうかといふ問題である。

產業支部の組織もその通りであつて、若しその全體を一時に實行することが出來なければ、最も實行の仕易い部分から實行すればよい。また全べての地方に、一樣に實行することが出來なければ、最も實行の容易な地方から實行すればよい。例へば、產業幹部の設けられる狀態にある支部だけに、先づ此の制度を實行し、產業幹事が府縣大會や全國大會に參加することは、止むを得なければ、暫らく保留してもよい。また府縣大會だけに參加して、全國大會への參加を保留するか、乃至は大會へは參加するが、執行機關の選擧に關する機能だけを、止むを得なければ暫らく保留してもよいのである。右の案では、地域的の組織が黨の主たる組織となり、產業上の組織は、その欠點を補ふための補助的の組織に止どまつてゐる。從つてこの組織は、黨の全組織に亙つて一時に一樣に採用せられないでも、必ずしも黨の組織の上に累ひすることはない。たゞ詳細な點について、之に應じた變更を加へればよいのである。

（八）

無產政黨の組織形態については、各々の方面に於いて研究し論議されてはゐるが、今日までのところでは、具體的な考案の發表せられたものは、私の知る限りは極めて稀れである。本文の初めに於いて、私が特に河野氏の具體案に言及したのは、氏の案がこの稀れな提案の一つとして、極めて敎訓的な務めであつたと同時に、氏の提案に現はれてゐる努力の精神は、私の一致するところであると信じたからである。けれども同じ希望と精神とを、如何にして實現するかといふ具體的の方法に至つ

ては　河野氏の案と私の案とは、やゝ趣きが違つてゐる。そこでこの機會に、兩者の相異の基づくところを考へて見ることは、組織問題の討究に取つて、必ずしも無益でないと思ふ。

『……政黨と組合との關係に就いては、三つの場合が考へ得られる。第一は組合が團體として政黨に加入する場合。第二は、組合が政黨に對して中立の場合。第三は以上を折衷した場合。——大體からである。組合の政策を政黨に行はしめると云ふ考へ方からすれば、第一の場合が最もその目的に適つてゐる。例へば英吉利の勞働組合と勞働黨との關係である。併しこれが爲には、勞働組合の力が相當に强くなつてゐることを前提とする。また政黨に起る分裂とかその他特別な事情に依つて、組合がその餘禍を蒙る恐れがある。この際組合の力が强ければ政黨の分裂を自ら處理して行かれるが、若しさうでなければ、組合まで分裂の憂き目を見なければならない。……若し組合がそのまゝ政黨に加入するのであれば、政黨の分裂に伴つて組合も分裂し、組合運動の發達を阻害せぬとも限らぬ。

『そこで政黨は組合の延長でなければならぬと云ふことと、組合がそのまゝ、政黨に加入するのも危險である。と言ふことを考慮して、第三の折衷策を採りたいと思ふ。曰く、組合は政黨に對して獨立してゐるが、政黨の執行委員會には組合の出身者を据へ、同時に組合の政治部と政黨の執行委員會の合議體が政策を決定するやうにせねばならぬと。之は一方に於て、組合を政爭の渦中から免れしめ、その負擔を輕かしめると共に、他方に於ては、政黨の政策を組合の手に收めるものである。……

『問題は、そこで果して實際に政黨を組合で指導して行くとが可能なりや、と云ふことになる。實際としてこの點は、かなり疑ふべき餘地がある。併し政黨の執行委員會に何名かの組合出身者(恐らく過半數)をおき、更に執行委員會を組合の政治部員の合議體に依つて政策を決定するといふ二重の組織とするならば、組合が政黨を指導すると云ふことに近くなるまいか。

『假りに農民組合、水平社、官業勞働、總同盟、その他の團體の個人的加入に依つて所謂橫斷的な政黨が出來たとして、以上の關係を具體的に當てはめて見ると、次のやうになる。

政策委員會
- 政黨執行委員會
  - 思想團體出身
  - 農民組合出身
  - 水平社出身
  - 官業勞働出身
  - 總同盟出身
- 政治部合議體
  - 農民組合政治部
  - 水平社政治部
  - 官業勞働政治部
  - 總同盟政治部

誤解を避ける爲めに附け加へておきたいことは、私が、河野氏の努力の精神に一致すると云つたのは、こゝに引用した文章の全文について、苟もそのうちに含蓄せられてゐると解せらる（乃至は誤り解せらる）一切の點で一致するといふ意味ではない。斯やうな意味でなら、私は極めて主要な點に於いて、或は異つた考へを抱いてゐるかも知れぬ。例へば無產階級黨の組織形態を考へるに當つて、私は決して『組合の政策を政黨に行はしめる』ために、如何なる組織が便宜であるかといふ考へ方をして居るものではない。勿論、河野氏が右の如き考へ方をされてゐる譯ではなく、假りに斯やうな『考へ方からすれば、第一の場合が最もその目的に適つてゐる』と云ふ意味である。そして河野氏は、斯やうな見方からしての最も便宜な、組織形態には、現に反對されてゐるのである。

けれども若し萬一にも、日本の無產階級運動のうちに、無產政黨は『組合の政策を政黨に行はしめる』ための組織であるといふ思想が少しでも潜伏してゐるならば、私は斷乎として之に反對しなければならぬ。組合運動が健全であるならば、事實上、組合の政策を行ふことが、やがて無產階級政黨の任務の一部となる。けれども如何なる場合にも、無產階級の政黨は、或る政策が組合の政策であり、組合の命ずる政策であるといふ理由の爲めに、その政策を遂行する機關ではない。また斯やうな機關であつてはならぬ。米國勞働聯合會の保守主義と反動主義の政策を行はしめる爲めにふさはしい政黨は、無產階級の階級的政黨ではなくて、小ブルジョア的第三黨でなければならぬ。吾々は、米國のブルジョア政黨の政策を助ける爲めの、保守的反動的な組合運動を考へることが出來る。けれども米國の組合運動に奉仕する爲めに、無產階級の政黨が存在しなければならぬとは、固より考へることが出來ぬ。

無產政黨は、組合の延長でもないければ、組合の政策を行ふための機關でもないと云つたなら、この言葉は、或る種の組合主義者の耳には、快よく響かぬかも知れぬ。之に反して、『組合の政策を政黨に行はしめるといふ考へ方』はこの種の組合主義者から、組合運動を理解した考へ方と見做されるかも知れぬ。けれども無產階級の政黨を以つて、單なる組合の延長と考へたり、又は組合の政策を行はしめる爲めの組織であると考へるのは、或る種の組合主義に迎合しようとする考へ方である。たゞに組合主義に迎合しようとする考へ方であるばかりでなく、それはサンヂカリズムの思想のうちの誤つた部分——人間の弱點に迎合した部分——の爲めに慢心し、傲慢になり、自分自身を見失ふた憐むべき組合主義への迎合に外ならぬ。無產階級黨が常に

し、無產階級黨に或る政策の遂行を命ずるものは、唯だ無產階級の階級的利害であり、無產階級の解放といふ階級的の目的である。勞働組合も亦た、この目的の前には、無產階級の政黨と同じく、一つの方法である。無產階級の解放こそ、無產階級運動の一切の方法を神聖化するところの、唯だ一つの目的なのである。無產階級の政黨が、この目的に向つて、その組織形態を順應せしめねばならぬように、同じく勞働組合も、この目的に向つて、その組織を改訂し順應せしめねばならぬ。

それと同時に私は、產業的に組織せられた無產階級が、無產階級運動の中心勢力となり、無產階級運動の指導的精神とならなければならぬことを力說する。私が、組合に組織せられた無產階級が、吾々の運動の指導力とならねばならぬと主張する時には、それは固より或る組合、または組合の聯合體を指してゐるものではなく、組合運動全體を指してゐるものである。もつと適切に云へば、組合運動に具體化してゐるところの、最も進歩した無產階級意識を指してゐるものである。そこで私が、組織せられた無產階級が政治運動を指導しなければならぬと主張する時には、それは特定の組合やその聯合體が、無產政黨の最高機關を獨占しなければならぬと云ふ組合愛國心、乃至は組合利己主義に迎合する意味ではなくて、無產階級政黨の組織は、最高の階級意識を代表してゐるところの、全體として見た組合運動の意志が、たゞに黨の或る特定の機關のうちではかりでなく、一黨の全組織を通じて有ゆるところに、有力に代表され、有力に反映しなければならぬと云ふ意味である。

斯ような意味に於て、私は無產政黨のうちには組織無產者が有力に代表せられてゐなければならぬことを力說する。そして私は、この一事は幾度繰り返して力說しても、決して適當でないと信ずるのである。

然るに一方には、組合が無產政黨の運動に參加する爲に、伴ひ易い弊害と危險とを最少限度に減ずること、就中、黨の政治行動のために、組合本來の行動の領分たるの經濟行動の能力を弱める心配を最低限度に減ずることが、絕對の必要である。そこで無產政黨の最も良い組織形態を求めることは、やがて右の如き二つの要求、二つの必要とを、最も良く調和した組織形態を發見しようとする努力に外ならぬ。そして斯ような努力の精神に於いて、私は河野氏と、全然一致するものである。

（九）

斯ような『考へ方』からして、河野氏の案にも尚ほ多少の考慮の餘地があると思ふ。

先づ第一に氏の案は、或る定められた組合が、必然に、云はゞ機械的に無産政黨の執行機關のうちに多數を占めるといふ目的には、適つてゐる。けれども組織せられた無産階級の意識が、無産政黨の指導的精神となるといふことは、決して黨の執行機關のうちに、一定の組合の代表者が、常に多數を占めるといふことばかりでないことは、先にも言及した通りである。組織せられた無産階級の代表者が、黨の執行機間に多數を占めることには、固より反對すべき理由が無いばかりでなく、寧ろ望ましいことである。けれどもそれは、黨規の約束によつて、必然に機械的にそうなる時にほんとの値打があるのではなくて、組織せられた無産階級が、無産階級の大衆を精神的道徳的に指導し、統帥してゐる結果として、初めて現はるべき事柄であり、初めて値打のある事柄である。組合の代表者が、黨の執行機關に多數を占めることは、組合勞働者が無産大衆を指導することの出來得る原因ではなくて、その指導力のバロメーターであるべきものである。即ちそれは組合に組織せられた無産階級が、如何によく無産大衆の利害を代表し、如何によく無産大衆の前衛となつて戰ひ、如何によく無産大衆の信頼を得てゐるかを表はすところの、指數となるべきものである。

私は、日本に於ける組織せられた無産者は、斯ような任務を立派に果たすことを疑はぬ。從つて無産政黨の執行機關のうちには、組織された無産者の意志が、常に優勢であることを希望し、且つ期待するものである。從つて組織せられた無産階級の代表者が、必然に執行機關のうちに多數を占めるが如き段取りを、機械的に作つておくことにも、必しも反對する必要がないかも知れぬ。けれども、それ故に組織せられた無産階級は無産政黨を指導することが出來ると思ひ、またそれに依つてのみ指導權を維持しようとする考へは、絶對に排斥しなければならぬ。吾々は無産階級政治運動の健全の爲めに、出發の第一歩に於いて、斯ような病的思想の痕跡すらも一掃しなければならぬ。

組織せられた無産階級が、眞實に指導勢力となる爲めには、黨の全組織を通じて到る所に、そして出來得る限り頻繁に、何回も何回も、組織せられた無産階級の思想が、その他の無産階級分子の思想と接觸し、混ざり合ひ、その間に前者の思想によつて後者の思想を同化し、進歩した無産階級意識のうちに、彼等を吸收することの出來る機會を造らねばならぬ。斯ような作用は、たゞ一回の過程で完了することは六ケ敷い。一回よりも二回、二回よりも三回といふ風に、濾過器が濁つた水を濾過するように、幾回かの過程によつて、混濁した意識のうちから、「

澄明な無產階級意識を濾出しなければならぬ。それが爲めには、先づ第一に地方支部の組織のうちで、組織せられた無產階級の澄明な意識に無產大衆を接觸させ、斯くて濾過せられたものは、再び府縣の組織と大會とのうちで、組織せられた無產階級の思想や政策と接觸し同化した上で、更に全國的の組織と大會とのうちで、同じ過程が繰り返へされねばならぬ。

　無產政黨の執行機關のうちに、組織せられた無產階級分子が有力に代表せられるような制度を設けることには、私は決して反對せぬ。けれども執行機關のうちに、たゞ機械的に過半數を占めるといふだけでは、眞の指導權を維持することは出來ぬ。若し大衆の間に、精神的道德的の指導力を失ふたなら、よし執行機關のうちには依然として多數を維持してゐても、大衆はその瞬間に、執行機關の官僚主義化に反逆するだらう。

　河野氏の目標とせられたところは、斯ような機械的な指導ではなくて、組合運動が眞實の意味で、無產政黨の指導精神となるところの組織であつたに相違ない。私は河野氏の文章を通讀して、固より其の然ることを疑はぬものである。從つて黨の執行委員會に、組合出身者が過半數を占めるといふ方法だけでは足りないと思ふ。

　第二には、組合は政黨に近づくことの損失と危險とを避けるために、組合としては絕對に無產政黨に參加せぬ。けれども無產政黨の執行機關にだけは、組合の代表者が如何なる場合にも、必然的に過半數を占める組織でなければならぬ。これは便利な方法である。しかし筋道の通ほつた方法とは云はれない。」組合が何等かの方法、何等かの形で、組合として――卽ち團體として――黨に參加する道を開かぬ限りは、組合として――卽ち團體として――の代表者を、黨の執行機關に選出する道がない。執行機關は、加盟團體の代表者で成り立つか、大會の選舉によるか、この二つの方法を組み合はせるかの外はない。如何なる場合にも、加盟して居らぬ團體の代表者を、團體の代表者たる資格に於いて、黨の執行機關に選出する道はないのである（總裁指名の場合は此の限りに非ず）。

　組合の正式の代表者ですらそうであるが、更に非公式な、組合の『出身者』といふことになると、一層厄介なことになる。「何人を組合の『出身者』と認めてよいか。そして如何なる理由の下に、この非公式の出身者をしかも一定の人員（恐らく過半數）だけ、執行機關に選出すべしといふ黨規を設けたらよからうか。たゞ之に近い結果を收める方法は、大會に於いて、成るべく組合出身者を選出しようといふ、漠然たる希望決議をすることである。けれども其の結果が、間違ひなく一定數の組合出

身者の當選となるとは、何人も受け合ふ譯にはゆかぬ。從つて斯ような方法は、黨の組織形態とは云ふことが出來ぬ。組合の出身者を、非公式に、且つ一定の人員だけ、必ず執行機關に選出しなければならぬといふ難問題は、四疊半の内で解決するに適した問題であつて、大衆的政黨の全國大會に於いて處理するには適せぬ問題である。

第三には、黨の執行機關が大會に於ける選擧によつて構成されないで、團體の代表者の集まつたものが、直ちに執行機關を構成するといふ方法は、黨が嚴密に、團體の聯合體である場合にのみ、初めて考へ得られる方法である。然るにこの案の場合は、(一)黨は純然たる個人加盟によるものであつて、團體の聯合體でないばかりでなく、(二)執行機關のうちに代表されなければならぬ團體は、黨に加盟して居らぬものである。黨には加盟して居らぬ無關係な團體を數へる日になれば、こゝに揭げられた五つの團體以外に、尙ほ幾らもある。これ等の團體のうちにも、黨には關係せぬが、執行委員會にだけは一株持ちたいといふ虫のよい希望者が、續々現はれるかも知れぬ。そこで黨に加盟して居らぬ團體を、黨の執行機關のうちに代表せしめるといふことは、固より問題にならぬと思ふ。

けれども假りにこれ等の團體は、團體として黨に加盟するものと假定しても、尙ほ且つ是等の團體の代表者によつて、直ちに執行機關を構成することは、決して適當な方法とは思はれぬ。思想團體と水平社は暫らく別として、組合だけを考へてもこゝに揭げられた農民組合(恐らく日本農民組合)以外にも、——日本農民組合に加盟して居らぬ多くの農民組合がある。また官業勞働總同盟と勞働總同盟の外にも、例へば日本海員組合の如き、東京市電從業員の自治會の如き、機械工組合聯合の如き、造機工勞組合の如き、相當に有力な組合があるし、海軍勞働聯盟の如き厖大な組合聯合體さへもある。これ等の組合が、悉く無産政黨に參加するか否かは、固より未定の事である。或は是等の組合は、悉く無産政黨に參加せぬ場合があるかも知れぬ。けれども若し無産政黨が是等の要素を包容することが出來なかつたなら、それは無産政黨が、それだけ不成功だつたことを語るものであつて、苟めにも日本の無産階級政黨が、初めから是等の要素を無視して掛かるといふ法はない。若し是等の要素を無視せぬとすれば、執行機關を構成する要素を、特にこの三つの組合に限定することは出來ぬ。從つてその代表者、乃至は出身者を執行委員會に送るべき組合の數は、可なり多數となることを覺悟しなければならぬ。そこで若し是等の組合から、組合員に比例して代表者または出身者を出だすといふことになると、故

小の組合にも、最低限度の一人を許さねばならぬから、執行委員會は一大軍勢となるに相違ない。曾て勞働組合の總聯合の計畫せられた當時、自由聯合主義の信奉者は、各組合の代表者を以つて、直接に執行機關を構成せねばならぬと主張したゝめに、(その結果は、理事五十餘名となるに過ぎなかつたが) 自由聯合主義と合同主義との大論爭を惹き起したことがある。無産政黨の執行機關が、直接に組合の代表者によつて構成せられねばならぬと主張するのは、新しい裝ひをした當年の自由聯合論に外ならぬ。

第四には、假りに此の種の難問題がすべて除去されたとし、そして注文通りの構成を持つた執行委員會が出來上つたと假定することの場合には黨の執行委員會と、この執行委員會に『出身者』を參加せしめてゐる黨とは全然無關係な團體の政治部の合議體とが一緒になつて、黨の政策委員會なるものを組織する。そしてこの政策委員會が、黨の『政策を決定し』『黨を指導し』するとしたならば、本來は黨の政策を決定し、黨を指導すべき最高機關たるべき大會か、殆ど無用となるのである。

主として以上の點について、河野氏の案にも、尙ほ考慮の餘地があるものと思ふ(但し以上の批評のうちには、河野氏が實際主張して居られぬ點までも附け加へて批評した點が少なくない。これはこの機會を、私自身の考へを明かにする機會に用ひたまでゞあつて、決して河野氏に對する非難の意味でないことを斷はつておく)。しかし考慮の餘地のあることに於いては、私自身の案といへども、河野氏のそれと選ぶところはない。否な恐らくは、何人の案といへども、そうである。吾々はお互ひに、無産階級の政黨については、今まイロハを學びかけた一年生である。吾々は決して、唯だ一回や二回の試みにより、または一人や二人の試みによつて、滿足な組織形態の具體案が得られると豫期してはならぬ。同じ立脚地から同じ風景を眺めても、人々によりて、各々その眼界と焦點のおきどころとに、多少の差異がある。各の案には各々欠點があると同時に、特長がある。吾々は多かれ少かれ不完全な考へを、出來得る限り多く持ち寄ることにより、他人の意見を聽くことにより、他人の意見を批評することにより、他人をして自分の意見を批評せしめることによつて、初めて漸次に、欠點の少ない設計に近づくことか出來る。斯樣な意味に於いて、之は何人の功績に歸すべき事業でもなくて、苟も無産階級運動に參加する全ての人々の共同の事業である。そしてこの共同の事業を立派に成就する唯一の方法は、私がしば〳〵繰り返へしてゐるやうに、これを公然の討議に上ぼすことである。そして出來得る限り廣い範圍に

且つて、無産大衆をしてこの討議に參加せしめることである。

(十)

先きにも述べた通り、黨の決定機關のうちにも、黨の執行機關のうちにも、組織せられた無産階級要素が有力に代表せられるといふことには、少しも反對すべき理由がないばかりでなく、極めて望ましいことであつて、私自身の案も、これを以つて目標の一つとしてゐるものである。

然しながら更に一歩を進めて考へれば、日本の現狀では、單に組合が有力に代表せられるといふのでは、尚ほ不充分である。なぜならば標本的の無産階級たる工業勞働者すらも、組合に組織せられてゐるものは極めて少數だからである。そこで今ま、黨の執行機關のうちに、組合が有力に代表せられる組織になつてゐれば、工業が發達し、從つて組合の發達してゐる少數の工業地方では、府縣の執行機關のうちに組合が有力に代表せられるが、組合の發達して居らぬその他の大多數の地方では組合は全然、執行機關のうちに代表せられない。代表せらるべき組合が無いからである。けれども此等の地方にも、決して工業勞働者が無い譯ではない。唯だ組合の代表をのみ考慮に入れた組織になつて居れば、これ等の工業勞働者は組合が發達して居らぬといふ理由の爲めに、勢ひ執行機關のうちに有力に代表せられない。殊に大多數の中小の都會では、組合は今日以上に發達しても、少數の大都會や工業地方のやうに、それほど優勢となる見込みは(少くとも近い將來には)ないのである。

之に反して、農民組合の場合は、事情が少しく異なつてゐる。農民組合は散在的であつて、發達の程度こそ違がへ、今日までに、大多數の府縣に存してゐる。そして將來も、勞働組合に較らべたなら、遙かに、一地方にのみ偏せぬ發達をする可能性がある。從つて黨の執行機關のうちに、必然に組合が代表せられる組織にさへなつて居れば、全國大多數の府縣では、農民組合は黨の執行機關のうちに代表せられるが、これ等の大多數の府縣では、工業勞働者は組合が無い爲めに、執行機關のうちに、必然には、代表せられない。これは現存の勞働組合の一覽表を擴ろげて見れば、何人も見落すことの出來ない著しい事實である。そこで主として勞働組合の立場から、殊に或る特定の勞働組合の立場から考へて、黨の執行機關のうちに、組合が必然に多數を占める組織にさへなつておれば、その組合の勝手に黨が引き廻はされるかの如く考へるのは、大なる誤算である。

そこで私は、黨の機關のうちに組合が有力に代表せられればならぬことは無論として、尚ほその上に、組合の無い地方、乃

至は組合の極めて優勢でない地方でも、都會と農村との代表的の無產階級要素（勞働者と小作業）が相當に有力に（決定機關にも執行機關にも）代表せられる組織を取りたいと思ふ。先きに述べた地方支部のうちに產業支部を組織する案は、これ等の無產階級要素が、黨の機關に有力に代表せられることのみを目的としたものではなく、寧ろ第一の目的は、黨の結束力を強よめ、無產政黨をして、眞實に無產階級の大衆的の組織たらしめるにある。けれどもそれと同時に、斯ような必要をも滿たそうとするものである。

　けれども不幸にして、產業支部の組織が採用せられぬと假定したならば、私はこの組織の目的の一部を代行する、今一つの案を提出したいと思ふ。即ち、地方支部の總會がその執行機關を選擧する場合には、總會を三つの選擧單位に區別する。第一は總會全員、第二は賃銀勞働者（使用人をも含む）、第三は小作農である。この三つの選擧單位から、例へば三名と一名と一名の割合で地方支部委員會を選擧する。但しこの場合にも、勞働部で小作農を選擧し、農民部から勞働者を選出することも自由であつて、要するに最もよく利害を代表し、能力ある委員會を構成するに最も適したと信ずる黨員を選擧することゝなる。府縣の大會にも、全國大會にも、之に均しい選擧方法を採用することが出來る。

　產業支部の組織が採用せられぬとなれば、少くとも、これだけの制度は缺くべからざるものと思ふ。私は中央の執行機關に、組合が有力に代表せられることを以つて足れりとせぬ。私は一步を進めて、黨の全組織を通じ、黨の有ゆる機關のうちに、必ず實際の勞働者と農民とが有力に代表せられ、これ等の無產階級要素が、黨の行動に活潑に參加することを必要と信ずるものである。それが爲めには、中央の執行機關をのみ問題とすることは出來ぬ。否な反對に、斯ような制度は、地方に於てこそ一層必要である。全國的に見れば、組合運動は相當に有力なものであつて、假りに何等の特別の制度はなくとも、組合方面の意見は、黨の中央機關のうちには、相當に有力に代表せられることを疑はせぬ。然るに地方は事情が異つてゐる。勞働者の知識と政治上の經驗とに於ても、都會よりは後くれてゐる。勞働者の自分自身に對する評價と自信に於いても、また勞働者に對する一般の評價に於いても、都會と地方との間には甚しい差異がある。然るに中間階級分子は、政治上の知識と經驗とに於ても、比較的すぐれてゐる。斯ような狀態の下には、實際の勞働者と農民（殊に勞働者）が黨の執行機關のうちに代表される割合は、極めて少ないことを豫期しなければならぬ。從つて

中央の執行機關にのみ、組合が如何に有力に代表せられて居り、吾々の政黨の頭ばかりは如何に無産階級であつても、その四肢は中間階級黨となる危險がある。

それればかりでなく、實際の勞働者と農民（組合の幹部ばかりでなく、組合の一般大衆）とを政黨の仕事に習熟させ、無産階級政治運動の重要問題を實際に取扱ふ智識と經驗とを得せしめ、更らに勞働者と農民との間から、多くの才幹ある指導者を出だすが爲めには、黨の有ゆる機關のうちに、彼等を參加せしめることは絶對の必要である。私は斯ような教育的の意味からも、少くとも前述の如き制度の必要を信ずるものである。

（十一）

最後に殘されゐる問題は、既に無産階級の經濟上職業上の組織即ち組合の團體的加盟を認めるとすれば、無産階級の政治上に團體若くは其他の無産階級的團體を、如何に取り扱ふべきかと云ふ問題である。

日本の現狀では（恐らくは近い將來にも）、無産政黨を團體の聯合とすることは、明らかに間違つてゐる。從つて吾々の政黨の組織形態は、個人的加盟を基礎としなければならぬ。けれども尙その上に、或る形で團體としての組合の加盟を認めたと同じように、其の他の無産階級の團體をも、團體としての加盟を認め、無産政黨のうちに、團體としての發言の權利を與へることには、必ずしも反對すべき理由はない。そこで私は、組合以外の是等の無産階級團體をも、大體に於いて、組合に準じて取扱ふてよからうと思ふ。唯だ問題は、今日直ちに、實際にその必要があるかどうかと云ふことである。

第一に問題とするのは、少數同胞の解放運動である。少數同胞の解放運動は、それが無産階級運動に進展した時に、初めて眞實の歴史的意義がある。私はこの運動が、團體として無産政黨に參加することを希望するばかりでなく、若しこの運動が歴史的使命を全うするものであるならば、無産政黨に參加する日が必ず來るべきことを確信するものである。

けれども今日直ちに、少數同胞の解放運動が全體として無産政黨に參加し得るか、また如何なる代償を拂ふても、今日直ちに參加しなければならぬかと云ふことは、自づから別個の問題である。

全國水平社聯盟の第三回大會は、政治運動に對しては、消極的の態度を取る決議をした。私はこの大會に臨むことが出來なかつたので、この決議が如何なる情勢の下に、如何なる意味でなされたかを、充分に知ることが出來ぬ。けれども大體に於

いて、政治運動に對する消極的な態度は、水平運動の現狀から、必要な態度であつたと思ふ。水平運動は、多年の鬱積してゐた抑さへがたい感情が、一時に發露したものであつて、その運動は自然に起り、自然に組織せられた運動であつた。從つて今日までのところでは水平運動は、殆んど無組織の組織ともいふべき、極めて緩やかな結合の組織である。水平運動が『徹底的糺彈』を唯一の標語としてゐた間は、この無組織の組織こそ、最も適切な組織であつかも知れぬ。けれども若し水平運動が、この無組織の組織のまゝで現在の政治勢力と接觸したならば、その結果は豫想するに難くない。現にブルジョア政黨のうちには、この運動に着目して、暗中の活動をしてゐるものすらもある、そこで現在の水平運動は、數年前に於ける、政治運動に對する組合運動と同じ立場におかれてゐると云ふことが出來る。從つて政治運動に對する消極的の態度は、ブルジョアの政治勢力の侵入を防ぐ、唯一の方法であつたと云はなければならぬ。

しかしながら此の運動は、丁度今ま、發生期から組織期への轉換期に立つてゐる。組織を求める聲は、水平運動の內部に日々に高まつてゐる。水平運動は、先づ當面の問題として與へられた課題を解かなければならぬ。そしてこの課題は、可なりに困難な仕事であることをも理解しなければならぬ。私は水平運動が、この問題を立派に解決することを疑はぬ。そしてその時こそ、水平運動は、ブルジ・アの政治勢力と無産階級の政治勢力との間に、如何なる關係に立つべきかといふ、新しい課題に當面するものである。

全べての運動は進展する。そしてその進展のためには、固り努力を必要とすると同時に、その過程に必要な時間を貸さればならぬ。少數同胞の解放運動が、全體として無産政黨に參加することは、固より望ましいことであり、努力に値ひすることである。けれどもこの運動が、全體として無産政黨に參加するか否かといふことは、この運動が組織を持つた時、初めて問題となるべき問題である。私はこの問題が、一日も早く當面の問題となることを希望する、けれども現在のところでは、少數同胞の解放運動から、出來得る限り多數の人々が、個人として無産政黨に參加することを以つて暫く滿足しなければならぬ。

日本には、勞働階級の協同組合運動は發達して居らぬ。また近い將來に發達する當てもない。從つて、この種の經濟團體の加盟問題の起る筈もない。そこで問題として殘るのは、無産階級の政治的團體である。

特殊な無産階級政治團體の團體加盟を認めるか否かは、恐ら

く最も意見の分かれる問題である。一方には、無產政黨は、無產階級の政治勢力の結果を目的とする政治的の組織である。して見れば、既に無產階級の經濟團體をも包容するくらひであるから、無產階級の特殊な政治的團體を包容せぬ筈はない、といふ意見がある。然るに一方には、無產政黨は政治的の組織であるから、その內部に、更に獨立した政治的團體の存在は許されぬ、と主張する人がある。けれども組合の團體的加盟を認めるのと同じ方法で政治團體の團體的加盟の道を開くといふことは、たゞ團體としての發言權を與へることであつて、決して無產政黨の本來の組織構造を混亂させるものではない。そこで國家の中に國家は許されぬといふのと同じ簡單な理由を以つて政治團體の加盟に反對することは出來ぬ。私は如何なる場合にもではないが、一定の條件の下には、政治團體の團體的加盟に贊成するものである。

一定の意見の一致を條件として集まつた團體のうちにも、意見の差異に基づく流派の生ずることが、避けがたき事實であると云ふことは、先きにも言及した通りである。現在歐洲各國の共產黨は、意見の一致によつて集まるといふ條件が、恐らく最も嚴密に行はれてゐる政黨である。それにも拘らず、黨の內部には、原則として常に左右の兩翼があり、その間には中央の流れがある。之を若し弊害としたならば、絕對に避けがたき弊害である。けれども私は、必ずしも之を以つて弊害とのみは考へぬ。若し團體內の流派が、感情や行き掛りの現はれであるならば、慥にそれは弊害であつて、吾々は如何なる場合にも、極力これを阻止しなければならぬ。之に反して、團體內の流派が、意見と政策との差異の現はれであるならば、團體の內部に於ける限りこれに自由な表明の機會を與へ、出來得る限り公明正大な討議に導びくことが、やがてその團體の健全と活力とを增す所以となるばかりでなく、同時にその團體が、意見と政策との相異のうちに一致を見出してゆく、唯一の正しい道となる。

吾々が日本に豫期する無產政黨は、ヨーロッパに於ける共產黨よりも、遙かに包容的な政黨であつて、斯ような包容的な政黨こそ、日本の現在の形勢のうちに、無產階級の歷史的使命が必要としてゐるところの政黨である。從つて吾々の政黨には、無產階級の最も進步した要素と共に、進步の後くれた要素をも取り殘してはならぬ。そのうちには無產階級運動の左翼と共に、その右翼をも包容しなければならぬ。無產政黨の當面の任務は、全無產階級を、一つの政治勢力として集結することである。斯ように日本に於ける無產政黨の當面の任務とするところは、無產階級のうちから、出來合ひに意見の一致してゐる少數

者を摑み出すことではなくて、寧ろ反對に、無産階級の異つた要素、異つた意見を集めて、其の中から階級的の一致を見出だすことであり、是等の異つた要素と意見とを打つて一丸とした、强大な政治的戰線を作り出すことである。斯ような任務は、吾々の政黨の事業を、極めて困難なものとするのである。

無産政黨が無産階級の大衆に對して、包容的であればあるほど、意見や政策の相異が、いろ〱に傾向を代表した流派となつて現はれることは止むを得ぬ。吾々は大衆的の運動にも大衆的の組織にも、習熟して居らぬ。從つて團體の內部に、意見や政策を異にする流派のあることを、極度に危惧する傾きがある。けれども之は誤つてゐる。それが弊害であらうと弊害でなからうと、大衆的な團體の內部に、色々な傾向を代表した流派の生ずることが避けがたき事實であるとしたならば、吾々は徒らに之を危惧したり、徒らに之を阻止しようとする愚な努力をすてゝ、是等の異つた意見、異つた要素によつて、如何にして單一な戰線を築つき上げることが出來るかといふ方法を學ばねばならぬ。

無産政黨の內部には、早晩、左翼や右翼や中間の流派を生ずるとしたならば、そして是等の流派は、互ひに黨の內部に於いて、各々多數派たらんとして努力することは、避くべからざる事實であるとしたならば、是等の要素を包容しつゝ、尙ほ且つ强大にして單一な、無産階級の政治的戰線を維持してゆく唯一の健全な方法は、黨の內部に於ける限り、是等の異つた要素と異つた傾向とに、出來得る限り自由な表明の機會を與へ、出來得る限りこの爭ひを公然の討議に導びき、出來得る限り、この爭ひの結果が、黨の機關の構成や黨の政策の上に、圓滑に體現される方法を取らねばならぬ。

以上の如き豫想に誤りないとしたならば、無産階級の特殊な政治團體の團體的の加盟を認めるか否かと云ふことは、要するに無産政黨の內部に於ける是等の流派の存在を公式に認めるか、それとも非公式のまゝに存在せしめるかと云ふことに歸着する。私はこれを公式に認めて、一つの流派としての發言權を與へることが、卽ち是等の異つた傾向に自由な表明の機會を與へ、異つた傾向と傾向との爭ひを公然に且つ圓滑に進行させ、從つて無産政黨の結合力を强よくする所以であらうと思ふ。

それでは無産政黨は、直ちに政治的團體の加盟を認めねばならぬかと云へば、之は全然別個の問題であつて、私は明かにそれに反對する。現在の日本には、無産階級の政治團體が無い。」況んや私が、政治團體の加盟を是認する理由としたような條件に當て嵌まる政治的團體はないのである。無産政黨は、單に組

織の體裁を整へるために、必要以上の組織を持つ必要はない。

若し團體加盟の問題が起るとすれば、差當り政治研究會とフエビアン協會とがあるが、フエビアン協會は今日のところでは、まだ、政治團體ではない。政治團體ばかりではなく、必ずしも社會主義の一定の傾向と政策とを代表してゐるものではない。この點に於いて、日本のフエビアン協會を、たゞその名稱によつて、英國のフエビアン協會と精密に同一視することは早計であつて、日本のフエビアン協會が英國のフエビアン協會となるかどうかは、今日以後に屬する出來事である。私は日本のフエビアン協會が、英國のフエビアン協會のように、社會主義の或る一定の傾向と政策とを代表する團體として、健全に成長することを希望するものである。そして無產政黨とフエビアン協會との間に、一定の關係を定めることが必要となる時が、速やかに到來することを希望するものである。

無產政黨の機運を促進する上に、重要な任務を盡してゐるものは、政治研究會である。政治研究會は、主として組織された勞働者と農民以外の、一般無產階級要素を對象としてゐるものではあるが、組合の方面に無產政黨の機運を釀成する上にも、政治研究會の直接間接の刺戟が與つて力のあつたことは、何人といへども認めなければならぬ。今日までのところでは、組合の方面と組合外とでは、おの／＼別々に、無產政黨への準備の努力が進められて來てゐるが、この準備――乃至は準備の準備――が一定の程度に熟したなら、この別々の努力が持ち寄られ、別々の努力が一つになつて、こゝに初めて、無產政黨の樹立を目的とする正式の準備委員會とも云ふべきものが成立つだらう。若し無產政黨が、斯ような徑路を取つて實現されると假定したならば、政治研究會はこの準備機關のうちに、必ず代表せられねばならぬ要素である。

けれども創立大會によつて宣言せられたように、政治研究會はそのまゝ無產政黨の組織とならうとするものではない。また政治研究會は無產政黨の形勢を促進し、無產大衆の間に、之がために必要な政治教育を普及せしめると同時に、無產政黨の樹立に必要な調査と研究とを目的として集まつたものであつて、それ以外の或る一定の傾向や政策の下に集まつたものではない。そこで現狀のまゝでの政治研究會は、いふまでもなく、無產政黨のうちに溶解すべきものである。尤も無產政黨の樹立を見るまでに、尙ほ相當の時日があるとしたならば、政治研究會がそれまでにどんな形に發達するか、また無產政黨が成立してからも、政治研究會が何等かの必要のために存續するとしたならば、如何なる方向に發達するかといふようなことは固より別

問題であるが、政治研究會が現在の政治研究會である限りは、無産政黨との間に、團體的加盟の問題の起るべき理由がないのである。

斯やうに組合以外には、無産階級の經濟運動の方面でも政治運動の方面でも、無産政黨には、差當り團體加盟の問題を解決する必要はない。吾々には大體の原則さへ定めておけばよい。假りに無産階級の政治團體の加盟を認めることゝなれば、組合と全然、同一の條件の下におくべきであるが、それとも特別の條件が必要であるか。大會に於ける獨立の發言權を得る目的で、泡沫的の政治團體の發生する恐れはないか。資格の審査はどうするか。こゝには全べて是等の問題を省いておく。

(十二)

以上により、無産政黨の組織は、ほゞその骨組が出來上つた譯である。勿論たゞ骨組だけである。本論の目的は、固より無産政黨の規則の草案を起草することではないから。組織形態の大綱を說明するに止どまつてゐる。殊に重要視した問題は、黨と組合との關係であつた。そこでいよ／＼無産政黨が活動を始めるのには、本論のうちに全然觸れない種々なる組織や機關が必要である。例へば中央執行機關の下には、政務の研究調査や、宣傳や組織の機關として、色々の部門が設けられるに相違ない。これ等の詳細な事柄は、こゝには省いておく。これ等のうちで唯だ一つ注意を惹いておきたいものは、婦人部の組織である。吾々の政黨には、何等かの形で婦人の部門が設けられるに相違ない。婦人の部門は一面から見れば、調査部門や宣傳組織部門と同じ一つの機關のやうであるが、それと同時に、これ等の部門と同列におくべき單なる一機關ではない。また單なる一機關であつてはならぬと思ふ。私は寧ろ、やゝ產業支部に近い、實際の組織でなければならぬと思ふ。

婦人の重要については、改めて云ふまでもない。英國に於ける婦人の投票が、多くは保守的勢力を支持するものとなつてゐる一事を見ても、無産政黨に取つて、婦人問題が如何に重要であるかゞ分かる。そこで英國の勞働黨の如きも、婦人部に特別の重要をおき、地方の支部には必ず婦人部があるばかりでなく、地方勞働黨の執行機關には、婦人部から代表者を出だすことになつてゐる。また婦人部の大會も開かれてゐる。

日本に於いては婦人の地位と狀態から考へて、婦人の部門に一層重きを置く必要がある。無産階級の婦人は、極めて少數の例外を除いては、組合にも、その他の團體にも加入して居らぬ。從つて無産政黨は、單に婦人を黨に加盟させ、執行機關の

下に婦人に關する特別の部門を置くだけでは充分でない。無産政黨は婦人の加盟に最大の努力を拂ふと同時に、これ等の婦人を特別に組織しなければならぬ。單に婦人をも、男子と均しく黨内に包容すると云ふばかりでなく、黨の組織の一部として、婦人を實際に組織しなければならぬ。そこで各々の地方支部には、産業支部とその他の一般黨員とを通じた婦人の特別の組織を設ける必要がある。そして支部の婦人部は、支部執行機關の一つの部門一つの機關たるに止どまらないで、實際に婦人の組織を基礎とするものでなければならぬ。府縣の執行機關、中央の執行機關の下に設けられる婦人部も、その通りである。

×　×　×　×　×　×

以上は無産階級政黨の組織形態についての、私一個の私案であるが、それと同時に、之は必ずしも私自身の私案でないとも云ふことが出來る。私は出來得る限り多くの人々から組織形態についての意見を聞き、出來得る限り多方面の人々から、私の考へに對する批判を聞いた。私の考案として以上に述べたところは、過去十ケ月間に於ける多くの人々の意見と批評とを綜合した所産に外ならぬ。從つて若しこの考案のうちに、無産政黨の組織形態を考へるに當つて、多少の參考ともなるべき點があるならば、それは決して、私自身の功績に歸せらるべきものではない。

のみならず、私が曾ては、比較的欠點の少ない組織形態であるかの如く考へてゐたところのものが、多くの人々の意見と批評を聞くに至つて、全然無價値なものである、ことを教へられた場合が少なくない。私はこゝに述べた考案が、同じ場合の一つであるか、それとも此の考案のうちには、多くの斯よう點を含んでゐないかを恐れるものである。そこで私がこの私案を發表するのは、之によつて日本の無産政黨に、最も良い組織を示そうといふ――また示し得るといふ――大きな望からではなくて、日本の無産政黨に最も良い組織を與へようとする共同の努力への、たゞ僅かな貢獻とならんが爲めに外ならぬ。私の期待するところは、問題の解決よりも、寧ろ問題の提起である。私が必然に不完全であり未熟であるべき私案をすらも發表することを憚らなかつたのは、之に對する一層廣い範圍からの意見と批判を聞くことによつて、このうちに見落されてゐた多くの欠點を教へられると同時に、一層廣い範圍に亘つて、無産階級の諸要素が、この問題の討議に參加する動機の一つとなることを希望したからである。

農村問題の本質を論じて福田博士に答ふ

那須　皓

一、

福田德三博士は本誌前號及び前々號に於て、農村問題に關する河田教授の所論並びに余の論文『農村問題の歸趨』に就きて甚だ詳細なる批評を加へられた。博士の我が經濟學界に於ける業績を敬慕するに於て人後に落ちさる余は、博士の批評によりて啓發せらるゝこと多大なるべきを期待したのである。然るに遺憾ながら此の希望は過半裏切られた。余は博士が例によりて博辯宏辭、健筆縱横、馬上三軍を叱咤するの慨あるを觀て、博士の意氣益々壯んなるを悅んだと同時に、博士が余に向つて放たれたる矢は不幸概ね的を逸せる外れ矢に過ぎざることを發見して失望した。その何故に然るやを余は以下順次に說明するであらう。然も博士によりて種々考慮の材料を與へられたるのみならず茲に余をして余の立場に就きて更に細說し、博士に答ふると共に農村問題の本質に關する卑見を開陳するの機會を與へられたることを、余は博士に對して謝するものである。

二、

立論の順序として、余は先づ博士が余の所論に對して下されたる批評を辯駁しよう。

第一に博士は、農業經營に於て研究すべき事項頗る多端なることが、農業經營學なるものが學的存在を要求する基礎となると述べたる余の言に對して、「已れが眼を疑はざるを得なかつた」程に驚せられ、余を以て「學問方法論上、前代未聞の哲理を强制する」ものなりと揶揄せられた。之に依ると博士は、恰かも研究事項の多き事が直ちに學問の成立を意味すると余が論じた如く誤解せられたのである。斯かる誤解は逆に余をして吃驚せしめる。余は特殊なる研究事項の夥富なることが、農業經營學をして獨立せる一學科として成立せしめる基礎となるを論じたけれども、勿論研究事項の羅列が直ちに學問を形作るものだなどとは毛頭思はない。之は今更ら斷はる迄もないことであつて、該論文の前段に於て學問は抽出であると論じたる一節より考ふるも、明らかに察知せらるべきである。一貫せる原理に基き、論理的思索を以て此等研究事項を處理し、玆に正確なる知識の系統的綜合を生み出すことによりて、學問が成立すると云ふ位のことは、苟も學に志すものであつて何人か之を辨へざるものあらんや。余は彼の論文に於て、學問研究の方法論に就きて何等の意見をも披瀝した譯ではなく、唯か丶る方法によりて取扱はるべき特殊なる材料の夥多なることが、研究の利便並びに必要上、一獨立學科を成立せしむる因由となるを說きたるに過ぎない。地面が建物存立の基礎なりと云ふことは地面の存在が建物の存在なりとの論理を構成するものでもなければ、又建築物構成に關する建築學上の原理を論じたるものでもなきことは明かである。それは建物存在に對する數多の要件中の一を指摘したるに過ぎない。余の所說亦同斷であつて、余は該論文を讀まん程の讀者に對して、斯かる自明の理を詳說するの必要を認めなかつたのである。余は我が讀者の理解力を信ずるが故に省筆した。而してそれが偶々我が畏敬する稲田博士の躓きの石となつた事を遺憾とする。余は嘗て博士が公開の席上にて「學問は喧嘩なり」と喝破せられたることを記憶してゐる。若し玆に人ありて學問と喧嘩とが同一物にあらざることを論理的に證明しやうと試みたならば、誰しもその愚を嗤ふに相違ない。何となれば、此の語によりて博士の意味せらる丶所が何物なるかは言外に明かなるを以てゞある。斯かる飛躍的論法を用ひらる丶聰明なる博士にして、尙且つ余の叙述を誤解せらる丶とは余りに不可解である。博士の議論は學問成立の理由と原因とを混同せらる丶ものである。而して博士が其の誤解に基き、余を以て學問方法論上前代未聞の哲理を强制するものなりと評ひらる丶に

至つては、近頃以て甚だ迷惑千萬とする所である。

三、

博士の第二の批難は前者に比すればより有力である。即ち博士は余が農業經營上研究すべき事項が、商業又は工業よりも多樣なりとの意を述べたるに對して、然らずと論ぜらるゝのである。博士は余が農業經營の複雜性を示す一例として農具の改善に際して考慮すべき七ケ條の項目を舉げたるを捉へて、此の七ケ條に當る問題が商工業方面にも恐く存在するを以て、農業經營は決して商業又は工業經營よりも複雜ならずと論斷せられる。併し斯の如きはこれ角を捉へて牛となし鼻を抱きて象となすものである。余は農業經營の複雜性の一端を例示せるに過ぎぬのであつて、決して之に關する理論の全部を盡くしたわけではない。加之、「斯の如き經營上の問題は工業及び商業にも存するであらうが」と、明瞭に斷はつて居るのである。斯かる事例を一つ一つ並べ立てゝ農業と他業と何れがより複雜なりやを論ずるが如き愚を爲さんとは余は欲しない。余が農業經營の複雜性を說くには、別に本質的理由の存するものがあるのである。

第一に舉ぐべきは經營上の指導原理の複雜なることである。即ち工業經營は殆んど全部が市場に對する商品の生產であるに對して、農業經營、殊に中小農經營に於ては商品生產と、自家需要の直接充足を目的とする生產とが、尙多く相半ばして居る。而して農產物を評價するに當りて、之を商品として觀る時と、自家用品として觀る時とは多少評價の態度を異にする必要が生ずるであらう。商品生產を目的とする工業經營に於ては最大の利潤獲得を以て經營の指導原理となし得るであらうが、農業經營に於ては商品生產に依る最大の營利と、自家欲望の最も經濟的且つ合理的なる直接充足と、此の二者が相並んで經營の指導原理となり得る。此の點は福田博士も之を認められたればこそ、

『今日の所謂農村生活は、此の資本主義の支配を受くること余り無きか、若くは輕微のものである。殊に我邦農民の大多數は市場への接觸からは未だ甚だ遠い地位に在るものである。從つて營利主義の一貫的合則性、合理性の支配を受くること全くなきか、あつても極めて微弱たるに過ぎないのである。從つて農村と農村の生活態樣と其經濟行爲とは

有るが儘の素朴に任かされてあつて、營利主義によりて其態度を整理單一化せられ、生活行動を統一化せられること殆んど若くは全くこれなきものである』

と述べられたのであると思ふ。而も營利主義のみが吾人の經濟的活動に對する唯一の合理的指導原理であると見做すことは、大なる獨斷である。今若し農業經營に於て、營利主義と及び或る他の原理とが併せて考慮せらるゝものとすれば、此の兩者間の關係はより高位に存する或る目的によつて統制せらるべきであつて、營利主義によつて統制せらるべきではない。而して兩主義を適宜に妥協せしめんとするに際して、經營の取扱ひ方が複雜となり來るは當然の歸結である。經營は經營自身の爲めに存在せずして人間の爲めに存在する。之を誤れりとして排斥し去ると否とは論者の自由であるが、現在の農業即ち『一の嚮導的主義の中に整理せられたることなき素朴其の儘のもの』であると福田博士が見做さるゝ所の農業の經營は、複雜なる指導原理によりて支配せらるゝの可能性を有するものである。此の點は法人なる擬制によりて營まるゝ商工の大經營よりも、現實なる自然人を經濟主體として營まるゝ農業の方が、遙かに多大なる此の可能性を有するものである。これ農業經營の複雜性の第一因である。

第二に擧ぐべきは斯かる指導原理を以て貫かるべき對照の複雜多樣なる事である。玆に農業の一經營を取りて、之を工業又は商業の一經營と比較するに、多くの場合に其作業の種類及び經營の性質が、農業に於てより多樣複雜なるを認める。即ち商業經營に於ては專ら賣買等の商的行爲をなすに止まり、工業經營に於ては工業的生産と之に附隨せる商的行爲とを併せ行ふものであるが、農業經營に於ては農業的生産と商的行爲との外に、尚屢々若干の工業的生産をも兼ぬることが多い。昔時農家の副業たりし家内工業は多く獨立せる工業となりて農家の手より離れたりとは云へ、今日尚殘留せるものも尠なからぬのであつて、且つ新時代と共に新たに入り來れるものもある。而して此等の工業的作業を加味することによりて始めて農業經營が合理的に存立し得る場合がある。例へば製茶、澱粉製造、酪農等の如き是れである。斯かる場合に此の工業的作業をも農業經營の附帶的一部分と見做して差支無きことは、恰も工業者の商的行爲が工業經營の一部なりと見做して可なると同斷である。然らば農業經營の内部には異種多樣なる要素が含まれて居ると云は

ざるを得ない。而して季節に捉はるゝ有機的生産と季節に捉はれざる無機的生産との併存は、勞力の分配其他に於て特別なる考慮を必要とするであらう。これ農業經營を複雜ならしむる第二因である。

第三に余は農業に於ては其の生産の内部に於て各種生産物間に有機的關係あるために、經營の取扱ひ方が複雜化することを述べたい。例へば圃場生産物が家畜の飼料となり而して家畜の排泄物が肥料となりて圃場に施さるゝ如きものであつて、斯かる際に飼料や肥料の評價を適當になし、又各種部門の組み合せなどを合理的に決定することは、仲々面倒且つ複雜なる研究を要する。勿論之に類することは工業生産などにも若干は存するが、併しそれは農業に於けるが如く一般的ではないと思はれる。

第四に余は、商工業の經營は專ら社會的經濟的事情の變遷に適應すれば宜しいのであるが、農業に於ては社會的經濟的事情の外に、尙自然的事情の變遷に適應する必要があることを擧げたい。商工業と雖も自然的事情の制約から全然免るゝことは出來ぬけれども、併し自然的勢力の支配下に立つこと未だ農業の如くに甚しくはない。福田博士は工業に「シユタンドオルトレーレ」(地位學)なる一科の學問の構成が主張せられると云はれたが、農業の方では栽培作物のみに就ても既に「プランツエンオルトレーレ」(植物地位學)なるものがある位であつて、經營内に於ける作物、家畜の選擇並びに配合等は、充分外圍の自然を斟酌して定められて居るのである。

又商工業の經營に於ては、社會的經濟的事情同一なる限りは年々同種類の作業を繰返し得るが、より多大に自然の制約を被る農業に於ては、社會的事情に變化なき場合にも自然的事情に變化あるため、例へば氣象狀態が多少異り來るとか又は特定作物によりて地味土質に僻を生ずる等のことあるために、年によりて栽培作物其他經營の狀況等を變更すべく强制せられる事がある。之を要するに純社會的要素以外に、純自然的要素をも多量に考慮に入れて經營を決定せざる可からざる所に、農業經營の複雜性の一部が潜むのである。

此の他尙洩れたる點もあらうが、以上は余が農業經營を以て商工業經營よりも複雜性に富むと云ふ所以の主たるものである。余が先きに農業の作業が多様なりと述べたるも、亦此等事情に隨伴して生ずるのである。余は細かき具體的作

業の個々を取りて、其の數を工業經營と農業經營とに就きて比較せんと企てた譯ではない。無數に分業し得る工業生産に於ては、一經營に於て極めて僅かなる作業のみをなす事も出來るし、又甚だ多數の作業を兼ぬることも出來る。農業に於ても斯かる具體的作業の數は、經營毎に千差萬別であり得る。故に或る農業經營に於ける具體的作業の數は或る工業經營に於ける具體的作業の數よりも多いことも尠ないこともあり得るであらう。斯かる具體的作業の數を其のまゝ捉へて、農工兩業に對する概括的判斷を下す事は寧ろ不可能に近い。併し乍ら同種の作業は之を一括して一種類の作業と見做すならば、例へば鐵板に孔を穿つことは孔の大小に頓着なく一作業に屬せしむるならば、此の際には余は農業に於ける作業は概して、商業又は工業のそれよりも多種多様なるべき事を斷言して憚らざるのである。

但し斯く云ふことは、農業に於てのみ經營學が一科の學として成立し、商工に於ては然らずと云ふ意味にあらざること勿論である。博士は「商工にも經營學のある事を毫も知られざるにや」と余に反問せられたが、余不肖と雖もそれ位のことは承知致して居るのである。唯余は農業の經營が本質的に商工の經營よりも複雜なる要素を抱含せるものなりとの所信を抱けるに過ぎざるものであつて、福田博士の示教に接しても今尚之を改むるの必要を認めざるものである。

四、

福田博士の第三の批難は聊か珍妙である。余は「農村問題に於ては、一國全體又は都會に就て論じたる時に別々となせる問題を、往々一括して相聯絡せるものとして論ずるが故に複雜となるのであつて、而して斯様に一括して論ずるは下の理由あるによる」とて、六ヶ條の事項を舉げた。此等事項を略記すれば、(一)、農村住民の大多數が職業を同じくする事、(二)、農民の生活、心理、要求は略同一なる事、(三)、農業にありては生業が尙營業となり了せず、又家庭生活と經濟的活動とが尙不可分に存する場合多き事、(四)、農村に於ては文明生活の各要素間の有機的結合著しき事、(五)、農村事情の變遷緩漫なるため各種要素間の相關々係を研究する便宜ある事、(六)、農村の對外的政策的問題と、對内的又は農業經營上の問題とは切り離して考ふるを得ざること、これである。即ち農村生活が比較的單調不變にして且各種要素間の

相關々係を認め得る便宜多きが故に、此等各種要素を同時に動かすものとしての問題が成立する可能性ある事、從つて現在の農村問題中に於て種々の要素が同時に考慮せらるゝに至ることを論述したのである。然るに之に對して福田博士は、此等六ケ條の事項の大多數は數百年の昔から我國の農村に存して居たものであるとし、「然るにも拘らず往時は農村問題と云ふものは毫も存在して居なかつたではないか？農村問題の複雜なることを右等の事情が存するを以て說明しようとするのは、全然歷史を無視し社會發展の行程を全く度外に措くものでなくて何であらう」と論じて居られる。

余は此の一節を讀んで啞然とした。若し弘法にも筆の誤まりと云ふことがありとすれば、此の一節ほど其の適例を示すものはない。辯難攻擊の雄たる我が福田博士は、此所に於て正に論理を超越して議論を進めて居らるゝ。何ぞや。

余が揭げたる六ケ條は云ふ迄もなく農村問題發生の起因として之を述べたのではない。余は彼の論文に於ては農村問題の本質や其の發生の起因に就て、あまり多くを語つて居らない。余は之を拙著「農村問題と社會理想」に讓つたのである。余が該論文の劈頭にて云はんとせし所は、農村問題が既に或る動因によりて發生せるものとして、問題の內容が分析的に硏究せらるゝ以外に、尙總合的に硏究せらるゝ所以を述べたるに過ぎない。其の點は福田博士も他の箇所にて之を認めて居られるようである。然るにも拘らず博士が直ちに之を忘却して、恰も余が該六ケ條を以て農村問題の起因となしたるかの如くに論難せらるゝことは、余に取つては有難迷惑の甚しきものと云はざるを得ない。

博士の論理の超躍を示す爲めに一の例を擧げよう。此所に一臺のピアノあり而して種々なる音調を出すべき鍵盤を具へたりとする。今物ありてピアノの鍵盤上に落つるとせよ。然らば數多の鍵盤が同時に打たるゝ結果として玆に複雜なる一の音調を發するであらう。余が六ケ條の事項を揭げて、農村生活の諸要素が同時に取扱はるべき可能性ありと述べた事は、即ち同時に打たるべき數多の鍵盤ありと云ふことなのである。物あり鍵盤を打つて始めて音を發する如く、他に動因ありて始めて農村問題は發生する。鍵盤は昔から存在しても打たれざる限りは鳴らない。又雜多なる鍵盤あるにあらざれば、打たれたる時複雜なる音調を發しない。福田博士の論法を此の場合に飜譯すれば、『鍵盤數多あることが複雜なる音色を發する所以なりと云ふは誤つて居る。鍵盤は以前より存在するがピアノは鳴らなかつたではない

か』と云ふのである。想ふに斯かる論法は我が福田博士以外には通用せざるものである。博士が斯かる議論をせらるゝに至つた責任を、余は余の不文に歸せしむるわけにゆかぬ。若し博士の言葉を其儘借用することを許さるゝならば、余は『文章混沌たるにあらず、之を讀む者の頭腦混沌たるなり。文字若し罪あらば其の不遇を歎ずるであらう』と云はさるを得ない。

五、

福田博士は余が掲げたる六ヶ條に對して『教授の指摘せられた所は、農村問題其ものゝ複雜性ではない』と述べて居らるゝ。勿論の事である。余は此等六ヶ條を以て農村問題の複雜性を來さしむべき基因として掲げたのであつて、此等が直ちに農村問題其のものゝ複雜性なりとは決して述べて居らない。否、農村問題の複雜性の一面は、即ち都市諸問題に於ては一つ一つ切り離して別個に考慮せる問題を、農村問題としては有機的に相連絡せるものとして考慮する所に存在するのである。斯く有機的に相連絡せるものとして各種問題の總合的又は相關的研究を試むる所に、余は農村問題の特異性を認める。福田博士は、『本質が之を要求するにあらず、唯だ問題取扱者が精神的怠惰性の常習者にして、それぞれの性質に從つて問題の分類と其特殊的取扱を爲すことを怠つて、雜然と思ひ浮ぶる儘に問題を混淆する物臭太郎なるが爲に、此の複雜性が生じたのではあるまいか』と疑はれ、而して『都市に起る凡百の問題を若しも右と同樣なる物臭的取扱を爲すとせよ、其の複雜性は到底今日の農村問題のそれとは同一の談でないに相違ない。只都市諸問題の取扱者は幸にして物臭太郎にあらず、即興的常識論者にあらず、各般の問題に對して一々特殊的に適當なる取扱と處理とを爲せばこそ、農村問題を今日累しつゝある複雜性を免れ得て居るのである』と斷ぜられる。此の種獨斷論の妄を開かんとてこそ、余は都會と農村との社會生活に大差あり、農村生活の狀態は都會に比すれば單調均一にして且不變なること、此の爲に都會に於ては一々引き離して考ふる以外に殆んど研究の途無き各種問題も、農村に於ては有機的に相連絡せるものとして研究し得る可能性あり、又斯かる總合的研究の妥當有益なる場合多きことを論じたのである。斯の如き研究は勿論困難で

あり一朝一夕に其の成績を收むること能はざるは當然である。然も其の有意義なるを信ずるが故に、農村問題研究者の或者は難きを避けずして之に向つて突進し又は突進せんと試みつゝあるのである。難事に當る者を稱して物臭太郎とは福田博士の新日本語である。而も福田博士の示教を待つ迄もなく、農村問題に於ても、都市諸問題同樣に之を個々の問題に分析して研究することも夙に行はれて居ることである。農業信用問題、農業勞働問題、小作問題の如き皆然りである。然も斯かる分析的研究のみにては遂に問題の全部を解決すること能はざるが故に、苦しみ喘ぎつゝも一切の問題の有機的大觀を試みんと努力するに至つたのである。恰もこれ美しき眼、鼻、口等を得たのみでは未だ美しき顏を得るを必せず、美しき顏を得んが爲には此等一切の要素の比率配合が其の宜しきを得るを要件とするが如きものである。農村問題の綜合的研究者は正に此の美しき顏を描かんと努力しつゝあるものである。(各種要素の比率の問題に關しては、橫井時敬博士著合關率を參照せよ、該書は甚だ暗示に富む著作であつて今日以上に廣く讀まるべき價値あるものである)。

想ふに都市諸問題と雖も、かの分析的研究のみにては決して問題の全部を悉く解決し得るものではないのである。然るにも拘らず、都市に於て有機的綜合的研究の進まざるは、一には研究の困難絕大なる爲に始めより絕望して匙を投げたると、又一には商工業の隆盛に伴ひて都市は益々繁昌しつゝあるため、未解決の問題の存在が人にさまで苦痛を與へざるに依るのである。若し逆に地を替へて農村が益々繁榮し、都市は日に日に凋落すると云ふ場合に際して、都市問題研究者が只今日の如き分析的研究のみを爲して居つたならば、彼れは成功を祝せられる代りに失敗を咎められ、而して假令如何に困難大なるにもせよ極めて必要なる此の有機的綜合的研究の途に進まざりしことに對して、正に物臭太郎の汚名を浴せ掛けらるゝであらう。商工業隆盛、都會繁昌の時代の潮に乘つたる都市問題研究者は他を罵る前に先づ自家の幸運を祝すべきである。彼等と同樣なる研究を爲す以外に、更に一個のより困難なる綜合的研究に努力しつゝある少數の農村問題研究者は、よし事績の未だ見るに足るものなしとは云へ、決して物臭太郎と呼ばるべきではない。何處にも存する若干の怠惰漢の爲に、農村問題研究者の全部に對して此の汚名を投ずることは、餘りに理不盡である。余は同學の士の名譽の爲に、敢て此の稱號を福田博士に返却する。

六、

博士は更に余が『……都會生活に於ては確認することの甚だ困難なる因果關係の糸が、農村生活に於ては、明かに認識せられ、而して其糸は經濟、社交、教育、家庭等の各部門を貫いて居る。農村問題の複雜化は此所に發生する』と論じたるを捉へて、斯かる因果關係を見得る程、農村生活を然く單純なりとする此の論旨は、先きに農業經營は商工業のそれよりも複雜なりとせし議論と矛盾撞着するものにあらずやと難ぜられる。併し乍ら農業經營の問題と農村生活の問題とは同一物にあらず、從つて農業經營の複雜性が直ちに農村生活の複雜性を意味するものでないとする余にありては、此の二つの論旨は何等の矛盾無くして兩立し得るものである。更に又、農村生活を都會生活よりも單調不變なりとなすことは、何等農村問題の複雜性を否定する所以とはならない。如何となれば都會生活は農村生活よりも確かに複雜であるが、複雜なる都會生活は之を幾多の部門に分析し、而して此の各部門を以て獨立せる研究對照とすること、前述せる通りである。然るに農村生活に對しては之と同樣なる事が行はるゝ外に、更に各部門間の有機的關係を考慮することが屢々必要とせられる。即ち都會生活には假りに十個の要素があるとしても、此等要素は一つ一つ切り離して考究せらるゝが故に、都市を研究する諸問題の一を取りて見れば、それは研究對照として一の要素を含むに過ぎぬ。之に反して農村生活には五個の要素だけしか無いかも知れぬが、此等五個の要素の全部を含むものとしての農村問題が成立し得る。然るに都會にては十個は愚かのこと五個の要素を含む都會問題すら成立し得ない。故に五個の要素を含むものとしての農村問題は一個の要素しか含まぬ都市問題の或るものよりも複雜であると云へる。福田博士が捕捉し難しと稱せらるゝ余の趣旨は、斯の如く極めて簡單にして明々白々なるものである。

博士は更に余が上述の理由に基きて農村問題は複雜化すと云へるに對して然らずとし、複雜化と云へば始め複雜ならざりしものが複雜となるを意味するが、農村問題の複雜性は發生當時より已に存在するものであるから余の言は敢て當らぬとせられ、而して『これは決して單なる言葉の問題ではない、農村問題の複雜性そのものに對する見方の根本的差

違の問題である』と述べて居らるゝ。余も亦之を以て單なる言葉咎めとせずして、それ以上の見方の相違なりとせらるる博士の眞意を諒知し得るものである。而して余は此の見方の相違を來す原因は、農村問題なる語の解釋につきて博士と余との間に存在する相違にありとする。更に博士が都會に於てこそ上述因果關係の糸が最も明かに認識せらるゝのであつて農村に於てゞはないとせられ、『何となれば經濟生活に影響する諸般の事情は、都會生活に於ては、皆市場の大壓力に逢着し其爲めに悉く一貫永續の統一的のものに合則化せられ、制約せられるからである』と論述せらるゝ所以も、亦同じく農村問題の語義解釋の相違に淺からざる關係を有することを認める。茲に於てか余は農村問題の語義如何を檢討せざるを得ない。

七、

余の觀る所を以てすれば、福田博士と余とは農村問題の解釋上、左の二點に於て明かに異つて居る。

一、福田博士は農村問題を以て主として發生論の問題とせられ、取扱上の問題を無視又は輕視せらるゝ嫌ひがあるが、余は取扱上の問題を以て寧ろ主要なるものとすること。

二、福田博士は農村問題を以て農業經營又は經濟のみの問題とせらるゝようであるが、余は之を以て農業經營又は經濟以外に種々の他の要素をも併せ含める問題であるとすること。

此の立場の相違は、多くの意見の相違を導き出して居るものであるから、之に關して少しく詳說する必要がある。而して此の事は農村問題の本質を讀者に諒知せしめ、今後に於ける無用の論議を防ぐ所以ともなるであらう。

第一に福田博士は農村問題を以て主として發生論の問題とせらるゝようである。換言すれば、今日の農村が假りに病態にあるものとして、博士は農村問題を以て病源研究の問題なりとせらるゝようである。想ふに博士は治療の術は病源さへ判明すれば直ちに判明するのであつて、さして問題とするほど重要なるものではないとせらるゝのであらう。斯く解することによりて始めて、博士が農村問題の複雜性を以て取扱ひ方の複雜性にあらずとなし、又農村問題の本質は之

を農村に求める限り決して見究めることが出來ぬものであつて、寧ろ之を資本主義社會に於ける一の消極的事實と見て始めて本質を見究めうるものであると主張せらるゝ言を理解し得るのである。但し此の見解の下に『農村問題は確かに複雜である』と首肯せらるゝ博士が、同時に『問題そのものゝ複雜性が他の問題より大なるのではない、問題の依つて起る農民、農村生活そのものが未だ資本主義の洗禮を受け、合理化、合則化の聖別を受けざる生れながらのものであるからなのである』と論ぜらるゝは、何となく一個の矛盾を抱藏せる如き感を與へる。余は博士が不知不識の中に、取扱方又は具體的對策の複雜を以て農村問題の複雜なる一面なりと認められ、而してその爲に一種の混亂を生ぜられたのではないかとの疑ひを有するものである。

此の論は兎も角も、余は農村問題を以て單に病源研究の問題なりとは見做さない。否、余は寧ろ治療法研究を以て農村問題中に於て主要なる位置を占むるものなりとし、病源の研究は治療に役立つと云ふ意味に於て始めて農村問題の範圍內に入り來るものなりとする。即ち余は病源及び治療の研究を併せて農村問題と呼ぶものであつて、余が解釋する農村問題は福田博士のそれよりも廣義なるものである。余は病源の判明は直ちに治療法を判明せしむるものではなく、治病の術は然く容易なるものではないとする。而して同じ病氣に對しても醫師によりて治療法に關する意見を異にするが如く、農村問題の起因につきて意見の一致を見ても其の解決策につきては說を異にすることがあるであらう。例へば農業の困難が資本主義經濟社會に於ける農業の消極的立場に基いて起つたとしても、此の困難を排除せんためには資本主義を農業界に徹底せしむることに依るべきか、又は今日の資本主義營利經濟組織それ自身を改造することによりて農業の活路を見出すべきか、果た又他の何等かの手段に俟つべきか、人によりて意見を異にする所である。此の意見の相違の甚しき處に農村問題に關する紛爭混亂の大部分が潜むのである。されば病源病因の問題と治療法の問題とは極めて密接なる離る可らざる關係を有するものながら、尙これ別個の二個の問題である。而して病源病因の複雜性と治療法の複雜とは、亦これ同一物でない。多くの場合に於て病源複雜なれば治療法も亦複雜であるかも知れぬが、又屢々、病源複雜にして治療法簡單なる場合、又は病源單純にして治療法複雜なる場合もあり得るであらう。而して余は病源の複雜

は、それが治療法を複雑ならしむる如き場合に限りて、農村問題の複雑性を増すものとする。(尤も病源の研究それ自身をも農村問題と見做すならば、病源の複雑性はそれのみにて直ちに農村問題を複雑ならしむるとも云ひうるが、之は世間の通義に反する解釋であると思ふ。)而して余が先きに農村問題の複雑性の依つて生ずる源として農村生活の事情六ヶ條を掲げたるは、尙これ病人の體質がこれこれなるが故に治療法が複雑なるを要すると述べたるに類するのである。此の際余は何等病因に就て論及した譯ではない。それにも拘らず福田博士は宛も余が病因論をなしたるかの如く誤解して批評せられたのであつて、これ蓋し博士が異れる立場に立つて之と立脚地を異にする余の說を其のまゝ見られたことに基いて居る。

想ふに農村問題なるものは單なる事實(ザイン)研究の問題ではない。そは實に當爲(ゾルレン)を研究する問題である。一個の目的を有する問題である。而して此の問題が發生したに就ては種々の動因や機緣があるであらうが、問題自身と問題を發生せしめし此等起因とは之を區別して考ふべきである。譬ふるならば茲に流水あり岩に激して奔湍を生ずる。水と岩とは共に奔湍の起因である。さり乍ら奔湍を除かんとするは水と岩と共に之を除かんとするにはあらずして、岩を除きて以て舟楫の便を圖るに外ならない。農村問題につきても亦同斷であつて、その發生の動因中には之を取除く能はざる又は取除くことを不可とする所のものと、然らざるものとが存在しうるのである。例へば農村問題發生の起因としては、福田博士の論ぜらるゝ如く資本主義經濟界に於ける農業の消極的立場を擧ぐる外に、尙農民心理の變遷をも擧ぐべきであるが、併し農村問題解決の一策として博士が農民心理の逆轉を決して希望せられざるは、此の點に關して博士が横井、神戶兩博士に對して猛烈なる批難を浴せかけて居らるゝに徵るも明瞭である。之を以てするも問題と其の起因とは別物であつて、問題の起因を知ることは直ちに問題の解決を意味するにあらざることを察知することが出來る。一腕を切斷し多量の血を失ふた事によつて病人となつた者の治療法は、切斷せる腕を其のまゝつぎ合せ、流れたる血をそのまゝ飮ましむる事ではない。

八、

第二に余は農村問題を以て單に農業經營又は經濟的見地のみより論ずべき問題なりとする福田博士の所見に服し得ない。博士によれば農村問題は資本主義經濟界に於ける農業の消極的立場に基きて發生せるものであり、之を解決する途は一に資本主義を農業界に徹底せしむることに存するようである。博士の意味せらるゝ如き極めて狹義なる農村問題に對しては、之は一の解決方法であるかも知れない。併し余は斯かる狹義なる農村問題なれば問題解決の原理は實は比較的簡單なるものであると信ずる。殊に營利主義を農業に徹底せしめよと論ずるに到つては、余は其所に何等の複雜性、混沌性をも見出し難いのである。余を以て觀るに農村問題の複雜性や、福田博士の所謂混沌狀態は、寧ろ農村問題がより廣義なるものとして考へらるゝが故に發生する。而して農村問題の眞相は實に此の所に潛めるのである。

若し單なる營利主義の徹底を以て所謂農村問題を解決し得べしとせば、營利主義によりて合理化せられたる英米の農業界には農村問題は起らざるべき筈である。然るに米國に於ては田舍の社會生活改善の急務を感ずる所より農村問題の火の手は揚つたのであつて、英國に於ても田舍により多くの人間を養ひ、より多くの産物を出す必要を感ずる故に農村の振興が叫ばれて居る。人間を離れて單に業そのものゝみを觀れば、英國の大農經營の如きは實に營利主義に徹底せる點に於て世界に範を垂るゝに足るものである。然るにピグー教授の如き大經營農業の技術的優秀を信ずる人すら、之を以て農業勞働者階級に於ける事務的手腕、管理的才能を充分に發揮せしむる機會を失はしむるものなりとし、人材經濟の意味に於て中小農經營の存在を希望して居る。英國に於けるスモール、ホルディング運動の如き、純乎たる營利經濟的見地のみよりしては到底理解出來ざるものである。今日の農村問題中に於て農業經營が重きをなすことは云ふまでもないが、此の他尚、多數國民に健全なる職業を與ふることや、食糧及び工業原料を或度まで國内で生産することや、又は農村の社會生活を改善し農業勞働者の待遇をよくする事等、種々雜多の見地より農業及び農村に働きかけんとする問題が含まれて居ることを閑却してはならない。此の事は農業經營並びに小作制度の改善が焦眉の急務と感ぜられつゝあ

る本邦に於ても、尙且つ決して無視してならぬことである。而して斯かる雜多なる動機によりて雜多なる取扱ひが農業に對して要求せらるゝが故に、福田博士の所謂混亂が生れるのである。さり乍ら此の混亂を解決する途は、福田博士の說に倣ひて斯かる種々なる動機を引離して一つ一つ別個の問題とすることにあるのではない。これでは複雜なる一個の問題を解決するのではなくして、當初より簡單なる問題數個を解決するのである。混亂を解くにあらずして混亂を避くるのである。余は斯かる個別的研究法の肝要且有意義なるを信ずることに於て敢て福田博士に讓るものではないが、之のみを以てしては、今日の紛糾を極めたる農村問題を完全に解決する力の乏しきものなりと信ずる。余は寧ろ此等各種の動機、雜多なる取扱ひ方を比較對照し、その相互の矛盾撞着を斥け、一貫せる社會理想の下に之を統制して此等各種動機、各種對照をして各々適當なる關係的地位と重要さとを保たしめ、全體が一の合理的且有機的總合を形作るように努力するを以て、複雜なる農村問題の眞の解決法なりとする。猶これ人間の生存には衣服も食糧も家屋も其他のものも共に均しく必要であつて、一家々政を理想的に處理するに當りては、此等各種要素に對する支出が適當なる數量及び割合に於て定めらるべきことを必要とすると同斷である。

九、

以上の所說によりて讀者諸賢は、農村問題によりて余が何を意味するかを諒知せられたことであらう。余は夙に農村問題を以て一個の文明問題なりとなして居るのであつて、之に關する詳論は余の近著『農村問題と社會理想』中に收めてある。余は同書中に於て農村問題を解釋して、農村問題は

一、國內の農業を如何にすべきか、
二、如何なる農村を以て最も理想的となすか、
三、現在の農村を改善して理想的農村に達せしむべき手段方策如何

の三を考究するものなりとし、狹義に於ては此の第三の一部の研究、即ち現在農村の困難救濟策を考ふるものなりとし

た。此等廣狹の農村問題の研究は必然的に問題發生の起因の研究を含むに至るものであるが、併し乍ら問題の主眼は寧ろ具體的對策、實際の取扱ひ方に存する。而して取扱ひ上の事項が複雜なることは、其問題を複雜にはするが、併し福田博士の考へらるゝ如く、直ちに其問題を混沌たらしめるものではない。否、取扱ふ事項よりも寧ろ取扱ふ者の態度が複雜なることが、農村問題混沌化の主因である。換言すれば、相異る社會理想並びに農業觀を有する者が種々の見地より農村問題を取扱ふが故に、其の主張する處が彼此相衝突して人をして適從に迷はしめ、玆に福田博士の所謂混沌性が生れるのである。或は農村問題の各種動因相互間の關係を顧慮せず漠然その凡てを鵜呑みになして、無省察且つ雜多なる取扱ひ方、時には相兩立せざる各種の對策を主張する者、福田博士の所謂物臭太郎に當るものが存在して、尚更ら此の混沌性を增すかも知れない。併し乍ら斯かる物臭太郎と、眞面目に農村問題の綜合的解決に努力するものとは之を峻別しなければならぬ。玉石同架、農村問題研究者を以て悉く物臭太郎となすの謬れるは、余が先きに抗議せし通りである。

斯く觀ずる時は、農村問題の混沌性は物臭太郎又は傍觀者の腦裡には存在するかも知れぬが、一定の社會理想を抱きて有機的に本問題を解決せんと努むる個人の主觀裡には存在しない。彼れは問題の全部を悉くは解決し得ぬかも知れぬが、解決し得たる部分に於ては混沌性は存在せざるべき筈である。而して若し傍觀者の腦裡に映ずる混沌性の存在を云ふならば、之は獨り農村問題に限つたことではなく、勞働問題にしても婦人問題にしても其他の社會問題政治問題にしても皆悉く然りであらう。只農村問題に至つては、其の發生の動因が數多あり而して對照として取扱はるゝ農業經營其他の事項が雜多である處に加へて、之に對する一般世人の理解力、判斷力が甚だ貧弱であるが爲に、一層混沌として之が世人の眼に映ずるに過ぎない。

十、

余は玆に農村問題の複雜性と混沌性とを解剖して、混沌性は之を避け得べく、複雜性は之を避け得べからさるものな

ることを説いた。之を換言すれば農村問題を解くことは數多の未知數を有する聯立方程式の解法に類する。適當の手續きを踏むことによりて、X、Y、Z等の値はそれぞれ之を算出し得べきものであつて、處理宜しきを得れば計算は複雜ではあるが必しも混沌とはならぬのである。農村問題を農業經濟問題に限局し、而して營利主義の合則性を以て之を一貫することによりて問題を單純化せんことを主張せらるゝ福田博士は聯立方程式を解くの繁を厭ふて、之に代ふるに一未知數を含む一個の方程式を解かんことを主張せらるゝのである。斯の如きは複雜なる問題を單純化するにあらずして、始めより單純なる問題を新たに設定せんとするものである。之は別個の意味に於て役立つであらうけれども、之を以て聯立方程式の代用たらしむることは不可能であると云はざるを得ない。

農村に對して採るべき種々の施設對策中、何れが最も根本的にして最も重要なりやとの、屡々繰返さるゝ質問に對して、上述の論旨は其の半を答へたるものであるが、之に加へて余は更に下の如く御答へしたい。

植物生育上、必須なる養分として擧ぐべき原素の數は十指を以て屈する。その何れが最も大切なりやと問はるれば、その何れも均しく大切なりと答へざるを得ない。何となれば、此等原素中その一を缺くも植物は生育し能はざるを以てゞある。此等諸原素の凡てが適當なる比率を以て與へらるゝ時に植物は始めて圓滿に生長する。

余は人間の社會生活に於ても之に類する關係が存すると信ずる。例へば普通選擧制の如きは民衆の見識德操の或度迄の發達と相俟つて始めて充分なる効果を收むるであらう。農村に對する施設に就ても亦同樣の事が云ひ得らるゝのであつて、産業組合の如きは農家に對して意義頗る大なるものであるが、農家が適當に之を運用する頭惱無き地方に於ては、却つて之によりて損害を被れる例が尠なからぬ。所詮一本の名刀は宮本武藏の手にあつて始めて活躍する。劍が斬るにあらず人が斬るにあらず、劍と人と相俟つて始めて腰間の秋水が鐵を斷つのである。然るに福田博士は、斬るものは劍なりや人なりやと飽迄も追求して質問せられる。斯の如きは是れに餘りに分析的機械的に事物を考慮せらるゝに基くのであつて、總合的有機的考察法に缺けたるの致す所である。分業任意なる大工業の上に立脚する現代の機械的都市文明が、吾人の思索の態度に對して當然及ぼすべき惡影響を、余は此の福田博士の思索の中に讀みうるかと思ふ。「兩学相

隔れて壁あり、却つて隻手の聲を聽くや。」稲田博士の質問は此の禪家の公案に似て非なるものである。

十一、

以上余は農村問題が文明問題として經濟以外の要素をも抱含するに至る所以を説いた。併し斯く云ふことは、經濟問題が農村問題中に於て特に重位を占めて居ることを否認するものではない。而も此の限局せられたる農業經濟問題を解決するが爲にも、採るべき手段方策は數多あるのであつて、我が稲田博士の「最も重要なるものは何ぞや」との質問は、此の場合にも亦當然繰り返さるゝのである。

而して此の場合にも亦前項同斷の答をなしうるのであつて、農業經濟を形作る各要素は何れも必要不可缺のものであつて見れば其の何れに働きかくる施設が政策として最も重要なりやと云ふことを、架空には斷定し兼ぬるのである。併し乍ら一定の時、處を取りて見れば、此の事は必しも考へ得られぬわけではない。即ち余は博士が此の質問を發せらるゝ時は、想ふに彼のリービッヒの最少律（Law of minimum）に云ふ所の最少要素を求めて居らるゝにあらずやと想像する。リービッヒの最少律とは前述せる植物必須營養分中、或る一要素が適當なる比率以下に存在する時は、他の各要素は如何に潤澤にありても、此の最少量に存在する一要素の爲に支配せられて、其の最少量要素が許す以上に生育し能はずと云ふこと、是れである。尙これ連鎖の支持力は最も力弱き一鎖によりて決定せらるゝと云ふと同斷である。今稲田博士は他の要素又は他の連鎖の必要を無視せらるゝにあらずして、此の最少量に存在する要素、又は最も力弱き一鎖の何たるかを知らんと欲して居らるゝのではあるまいか。若し果して然りとせば、余は博士に對して別個の返答をなさねばならない。

國により所によりて農村問題發生の凡ての動因が必しも全然同一ではなく、農業の經營農村社會生活の狀況等も亦種々の地方的差別あるものとすれば、農業經濟振興上、最も重視すべき斯かる最少量要素又は最弱の一鎖なるものも、亦所により時代によりて同じからざるは云ふを俟たない。されど本邦現時の多數の農村に眼界を局限して云ふならば、余は農村の振興を阻碍する最も著しき要素、即ち上述の最少要素に當るものとして、本邦農家經營面積の過小なることを

擧げざるを得ない。如何に農業が合理的に營まれても、又如何に農民が營利主義の權化の如くなりたりとも、現今の如き小經營を以てしては特定なる地方、即ち極めて集約なる園藝農、特用作物栽培、又は相當規模の養蠶等をなしうる地方を除けば、普通農事一方のみにては到底農業者に充分なる文明的生活を保障することは出來ない。吾人は一部の農者の如く、如何に小地積たりとも農業の集約化によりて充分なる生産を擧げ得べきものなりなど丶農業技術の奇蹟的發達を信ずるわけにゆかぬ。又一種の煽動者や之を盲信する若干の農村青年の如く今日の制度を改め中間掠奪者を驅逐するに於ては五反百姓を以てして尙且つ都市中流人士に匹敵する生活を營み得べき筈なりなど丶は思はない。此等の人々は實に儼然たる土地收穫漸減の法則の存在を無視するか、又は農産物の多くが今日已に世界的商品たる事實に眼を蔽ふ者である。斯く考ふる時は、今日の農家經濟の最弱の一鎖を强める爲には經營規模の擴大を圖るか、又は新に工業を起して農工を兼ぬるものとなすか、或は此の兩者を併せ行ふかの外なきものである。此の事たる勿論全國劃一的に決定すべきものではなく、人により所によりて適宜に之を定むべきものであり、而して其の實現は容易ならざる難事業ではあるが、併し如何に困難なるにもせよ、何等かの手段によりて此の最弱の一鎖を强めるにあらざれば、本邦農業農村の振興は得て望み難いかと思はれる。

此の經營規模の擴大たるや固より何の他奇無きことであつて、我邦多くの學者が之を唱へ福田博士も亦其の中の一人なのである。現に今回の論文中に於ても博士は『兎に角我が農政の最大問題の一は經營規模の過小、それより來る生産能率の微小なること是れであらう。少なくとも私は茲に最重大の禍根を認む可しと考へつ丶あるものである』と、述べて居らる丶。されば此の點に關しては余は博士と同じ立場に立つのであるが、只斷つて置かねばならぬことは、余の經營擴張論はアーサー・ヤング流の大經營を本邦に於て主張するものにあらずして、寧ろ我が過小農を變じて中小農となさんと欲するものなること、是れである。無條件なる大經營優秀論、殊に其の生産能率優秀論に對しては、吾人は多大の割引をなして之を聞かねばならぬ。

偖て福田博士は經營規模の擴大化に同意せられたる後、その實現策を余に質問せられる。即ち此の事柄は如何なる階

級の手によつて而して如何なる道行を經て實行せらるべきであるか、實行せらるべき見込があるのであるか、其の具體案にして存せざれば之は一片机上の空論たるの外はないではないか、と。

余は此の質問に接して恰も總論を講義しつゝあるに際して、同時に各論を說明すべき要求を受けたる如き感がする。又二三十年前までは飛行機の理論を說いた者が空想家扱ひせられた事實を想起せざるを得ない。併し博士の質問は頗る剴切なるものであるから、詳細の研究は別の機會に讓るとして、玆に簡單に之に關する所思の一端を述べやう。

余は經營規模の擴大を以て固より實現容易なる問題なりとはしない。農事統計は最近數十年間に本邦農家平均耕作反別が約一町歩より一町一反歩に上つた事を示して居るが、此の平均數字の移動が果して何を意味するかは、尙詳細に調査研究する必要がある。兎に角之を自然に放任して尙且つ望み通りの經營規模擴大が實現せられるものなりとは、余は考へて居らない、さり乍らこの事は全然不可能なりとも余は信ぜぬのであつて、吾人の努力如何によりては實現の可能性がある。之につきては小作爭議其他の爲に小作組合が發達し、在來の產業組合や農會や靑年會等と相俟つて、次第に農業者が團體的に事物を考慮するに至りつゝある事は、一の好適なる心理的基礎を與ふるものである。即ち今後は小作組合の力によりて小作人間に於ける無分別なる小作地獲得競爭や、又過小小作出現の弊を次第に防止し得る可能性がある。而して之と自作農團體と相提携して玆に農村の耕作者同盟又は耕作者會議の如きものを組織し、此の會議に於て余の所謂農村計畫を基礎として、耕地の所有又は用益關係を合理的に統制すべく努力するに至らば、蓋し至妙である。此の間在來の產業組合、農會等が適宜介在して助力するは固より差支ないし、又此等在來の機關が本質的に改造せられて斯かる事業に對して熱心に盡粹しうるに至らば、此等をして其の局に當らしむるも亦一策であらう。只余は新しき酒を古き皮囊に盛らざる如く、新しき事業に對しては何等の傳統無き新しき機關を以てするの可なるを思ふものである。

偖て經營規模の擴大は當然過剩勞力を村內に發生せしむるものであるから、之と同時否寧ろ之に先ちて村內工業を盛んにして、此の過剩農業勞力を吸收するようにせねばならぬ。尙剩れるものは都會なり殖民地なりに仕事を見出すの外はない。但し村內工業發達すれば、之に伴ふて商業や運搬業等新たに村內に生ずる業務も若干は有り得るであらう。而

じて他面小作料並びに農地價格低落の徴あれば、經營規模擴大に對して都合よき條件を與ふるものであるが、尚此の經營規模擴大事業は政府の低利資金融通によりて著しく進捗せしめらるゝと信ずる。即ち農地等の購入者は之が爲に政府の低利資金を借り受くべきである。又耕地又は小作權、農具家畜等を他に讓りたる者は、その代金を事業資金として村内に組合式工業を經營し得るに至るであらう。斯くて政府の低利資金は土地所有權及び用益權の整理と、農村工業の發達との二つの目的を一擧にして達し得るであらう。斯くの如き農村計劃をなす村に限りて資金を融通する事は、彼の漫然たる自作農創定よりも、どれ丈け有効であるかわからない。而して之に加ふるに家産法の如きものを設けて、折角合理的の大さとなりし農業經營が再び無謀なる處置の爲に零細化せざるやう努むべきであらう。

以上は一の立案であるが其の實現と否とは農業者自身、並びに政府當局の協力的努力の有無如何に依る所が多い。何等實現に努力せずして拱手以て事業の成否を評ふは、これ賓卜先生の亞流である。又この事たる結局に於ては農業者自身が仕事の大部分を爲さねばならぬものなるが故に、農業者自身の智見手腕が之に堪ふる丈けに進まされば、如何なる名案も畫餅として終るであらう。東京市區劃整理事業に對する一部市民の無理解なる態度其他は、余をして社會的共同事業の達成に關する我國民の能力に就て、多大の疑念を抱かしめる。併し余は尚決して失望はしない。余が農村教育の改善を叫ぶも此の故である。「平凡は眞理と雖も平凡なり」と福田博士は云はるゝが昔から偉大なる眞理は多く平凡なるものである。併し乍ら三才の兒童も之を云ふが百才の老翁も之を行ひ難いのである。三度の飯を死ぬまで食する如くに平凡なる眞理の實現に我々は死ぬまで努力しなければならぬ。余は經營規模擴大の實現の可能不可能に對する最後の答案を、我が農業者の理解力と努力との中に置くものである。而して再び云ふ私は悲觀論者ではないと。ローマは三日にして成らざる如く本邦農業の改造は三年五年にして成就すべくもない。「農村問題をして農村問題自身を解決せしめよ」と叫ばるゝ我が福田博士は、流石に此の點に於て世の滔々者流と撰を異にするものあるを認める。農民の解放は結局農民自身の力に依らなければならない。而して今日の農村問題が農民自身を教育しつゝあることの多大なるは、一個眼あるものゝ何人も疑はざる所であつて、本邦農業が他日過小經營の桎梏より解放せらるべき因子の一端は、實に此所

に潜めるのである。

以上に於て余は現在に於ける本邦農業の最弱の一鎖を意味する經營規模過小の弊を除去すべき方策につきて述べた。併し若し此の事が實現せられ此の最弱の鎖が多少强められたる場合には、更に他のものが最弱の鎖となりて現はるゝことは理の當然である。永遠に不變なる唯一の農村振興手段を求めんとすることは、本來無理なる注文である。又唯一手段のみによりて農村問題全部の解決を圖らんと欲するが如きは、これ社會生活の相關性を理解せざるものである。

十二、

次に余は農業の資本主義化に關する福田博士の說につきて一言したい。農村問題發生の主因として、博士は資本主義經濟組織中に於て農業が一の消極的の事實なることを擧げて居らるゝ。これ多くの學者の論ずる所であつて、余も亦或る程度迄は之に同感なりと云はざるを得ない。さり乍ら博士が此の發生論より一轉して具體的取扱論、即ち政策論に移り農業を徹底的に資本主義化することを以て、農村問題解決の要諦なりと信ぜらるゝに至つては、余は之に賛意を表する能はざるものである。余を以て觀れば農村問題の發生は、單に資本主義營利經濟組織中に於ける農業の消極的立場のみによりて發生したものでなくして、確かに其の一面あると同時に寧ろそれ以上に、斯かる消極的立場にあり乍ら、之を徹底的に資本主義化する能はざる又は、資本主義化するを不可とする別個の社會的事情あるために農業が進退兩難の苦境に置かれたるが爲に生じたるものである。農村問題の發生の起因中には現代の資本主義經濟組織の缺陷が窺はれる。農業を直ちに資本主義の渦中に投じ去つて宜しきものであれば問題は至極簡單に片附くのであるが、その斯く爲し難き處に問題解決の困難は潜むのである。之に關しては既に拙著『農村問題と社會理想』殊にその中の農業の社會化なる一章に詳論して置いたから茲に之を繰返すことを避けるが、余は寧ろ農業の社會化を以て農村問題解決の要諦としたいのである。而して農業の社會化を農生産の上に適用すれば、それは營利本位の生産より必要本位の生産へ移ることである。即ち過渡期に於ける若干の營利主義の存在、時としては其の一時的局所的の增大すらも、余は否認するものではないが、

進みゆく方向は寧ろ營利主義を棄てんとするものである。余は現時の資本主義的營利經濟の力を或る程度まで農業より除却することによりてのみ農業の振興を期すべく、又農村問題の徹底的解決を庶幾し得るものではないかと考へる。此の爲には經濟組織そのものを改造するを以て最も根本的の遣り方とするであらうが、その未だ實現せられざる間に於ては、農業に一種特別なる地位を與ふることによりて之を期待すべきものである。

福田博士は朗々誦すべき名文を以て資本主義が魔王の如き威力を發揮し、七つを七倍せる惡鬼の網羅せる如き難問題をも簡單に片附くる功德を讃美して、その合理性合則性を叫ばれる。然も余を以て觀れば營利主義の原則に從ふもの丶みを以て合理的なりとなすは、これ純一無雜なる營利經濟社會に於てのみ通用する言葉である。猶これ足長國に於ては足長人のみが普通の人間とせらる丶が如きものである。營利主義以外の種々の原則、種々の生活目的を抱含する複雜なる社會に於ては、吾人の經濟的行爲を支配すべき原則として營利主義のみを以て唯一合理的のものなりと目するわけにはゆかない。營利主義の原則の下に於ては勞働は單に營利の手段に過ぎぬであらうが、他の原則の下に於ては勞働は同時にそれ自身を目的とするものともなり得る。通常遊戲と呼ばる丶ことなき勞働にして、勞働それ自身が吾人の創造的衝動の表現であり、或度迄の欲望直接充足を意味する場合がありうるのである。分業の極端に發達せる工業と、然らざる農業の間には、勞働が單に手段に過ぎざるや否やの點で大なる逕庭を見出し得る。今日の營利主義は這般の微妙なる消息を明かにし、吾人の經濟的活動が最大の文化價値を生むように統制しうるものではない。營利主義のみによりて凡ての經濟的行爲を律することは、或意味に於て人間の創造的衝動を抑制することになる。思へば吾人は餘りに永く營利主義の惡夢に促へられて居つた。その魔力の下に學者は眞を逐ふを忘れ、藝術家は美を作るに精進せず、而して勞働者は眞の効用を生み出すを怠るに至つた。今や吾人は此の妖魔を卻け、營利主義以上の生活理想を我が經濟界の眞の女王として迎ふべき神聖戰爭を起さねばならぬ。

顧つて思ふ、厚生經濟を主張せらる丶福田博士は這般の消息を觀破するに於て正に人後に落ちざるべき筈である。然るに博士が尚且つ農業の資本主義化を唱へらる丶所以は、蓋し博士は之を以て農業の發展が必然的に經過せざる可らざ

る一階段であると目せらるゝがためではなからうか。博士と余の見解の相違は此の點に之を見出すべきではなからうか。

之に關しては余は尙ほ自ら再三省察するの必要を感じて居るものである事を率直に告白する。併し乍ら現在に於ける余の意見を述ぶれば、余は商工業界に於けると全然同じき經濟發展の階段が、必然的に農業界にも起るものなりとは信じない。商工業界に於ける大經營の壓倒的優勢を農業界に於て見ざること、農事株式會社の余り發達せずして却つて產業組合の盛んなること、農業が工業の如く機械化し得ざること等によりても之を察することが出來る。而して商工業界に於ける資本主義が漸く行き詰りの狀を呈しつゝある今日に於て、農業が亦此の資本主義の徹底的洗禮を遁れ走せに受けて商工業に追從すべきものなりやも一の疑問である。吾人はランプ、瓦斯燈時代を經過して電燈時代に入つたが、今後の蠻民は直ちに電燈時代に入り得るかも知れぬ。農業に對しても之と同樣の事が云ひ得られぬであらうか。少なくとも商工業界に於ける資本主義の破綻が將來に迫れりとすれば、それは當然農業の資本主義化を困難ならしむるに相違ない。單なる歷史的宿命觀に捉はるゝことなく、吾人の悟性と意力との產物として吾人が農村問題の對策を考慮する時に、吾人は正に前者の覆轍に鑑みなければならぬ。而して斯く論ずることは時代に逆行せよと云ふわけではなく、寧ろ時代の新潮を作り出す上に於ける吾人の意力の役割を認識することに外ならぬのである。

斯の如き見地に立ちて余は農業の社會化、廣義に於ける其の社會化を唱へる。福田博士は余が『農村問題の解決は單なる小作問題の解決や生產及び經營技術の改善位で片のつくものではない。經濟、法制、教育、社會生活等百般の方面より統一的目的を追求して努力することによりて、始めてその解決を期し得べきものである』と論じたるに對し、然らば其の追求すべき目的とは何であるかと質問せられた。余は之に對して明瞭に、それは農業の社會化であると答へよう。農業社會化の意義は、拙著との重複を避けて此所に細說するを省くが、只それは單純なる社會主義化にあらず、又資本主義化でもない事を茲に言明して置かう。

十三、

以上、余は農村問題の本質に關する卑見を縷述して福田博士に答ふると共に、博士の所説につきても若干の所懐を吐露する所があつた。而して主要なる點は既に之を論じ終つたのであるが、尙一二云ひ洩したる所を此所に補足して置きたい。

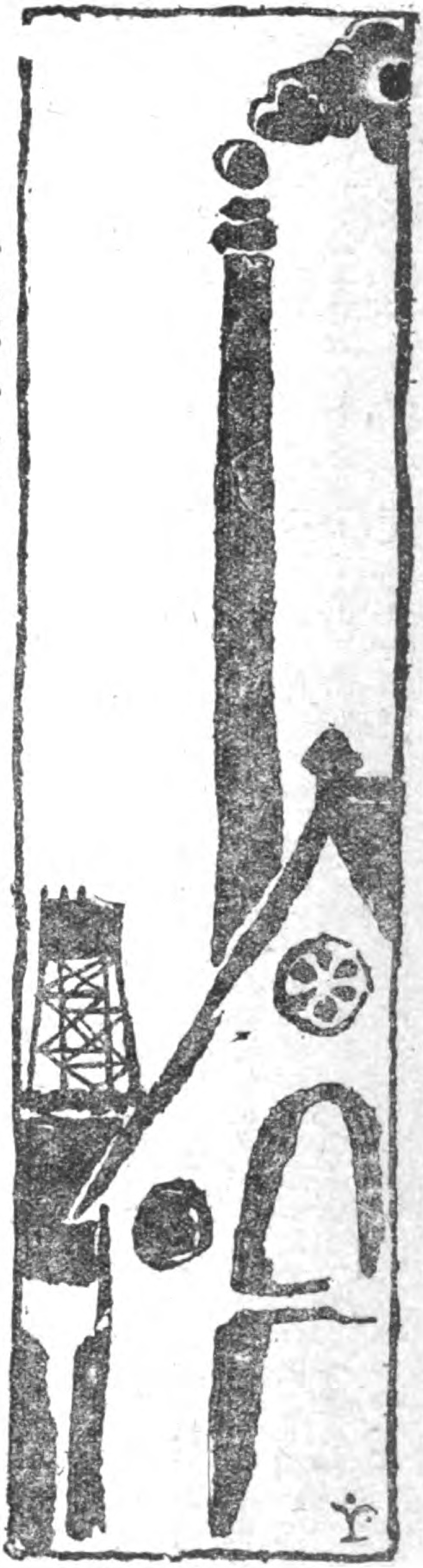
其の一は植民論である。余は農村の過剩人口を內地又は海外に移植民せしむる必要を感ずる。假令それが直ちに其後の增加人口によつて補充せらるゝものであつて、之により農村人口の永續的減少を見難きものであるにしても、尙且つ之を希望する。如何となれば何等增加人口の捌け口無きに依つて生ずる社會的沈滯や、或は益々加はるべき過剩人口の弊害を多少なりとも又一時的なりとも之によりて緩和し得べきを以てゞある。凡ての官吏が大臣となり次官となるにあらざれども、何人に對しても其の可能性の門戶開かれたる事が官吏生活に一種の色彩を賦與する如く、又萬一の僥倖を夢むる萬人が利率低き富籤附債券を購ふて滿足する如く、人は希望によりて其の現實生活を豐富ならしむるものである。他地方に出でゝ活躍するの途開け居り、積極的希望に基ける人口の移動あることは、よし夫れが村民の一小部分のみに關することなりとも、村全體の生活に淸新なる活氣を與ふるものである。而して此の潑溂たる社會的空氣こそ、我が農村に於て最も缺けたる所ではないか。而して此の農業者の出道を都市にのみ限る必要は斷じてないではないか。現今の漫然たる農民離村が村の社會的生活に與へつゝあるべき惡影響を除去し、禍を轉じて福となすの手段は、正に農村計劃と農業植民とに之を求むべきではなからうか。斯く考ふる時は、余は我國多くの學者政治家が徒らに現狀に泥み機械的に事物を考慮し而して農村靑年の心理に同情するの乏しきを慨せざるを得ない。余は福田博士や其他の多數の先輩諸學者と說を異にして、飽迄も過剩農民移植民論を唱へる。而して此の爲に國家として相當の施設をなすべきことを要求する。

第二は我が農業者の多數が企業者であると同時に勞働者であると余が云へるに對しての福田博士の論評である。博士は我が農民は未だ企業者又は勞働者と分類せらるべき程に我が農業は資本主義化して居らないから、此の兩資格を具備せるものとして我が農民を見るは謬れりと論ぜられるゝ。之は單に言葉使ひの問題であつて意味する所は博士も余も略

同じであると思はるゝから、余は强ちに自說を固執せぬでもよいのであるが、併し余は福田博士の論ぜらるゝ如く本邦農業の凡てが素朴なるものなりとは信ぜぬ。博士は我邦の農業は市場支配の下に立つ一の營利經濟によつて營まれるものでないと斷定して居られるけれども、之は云ひ過ぎである。都會附近の蔬菜農や又は各種特用作物の栽培、園藝、養蠶、養鷄等は一の企業として營利主義の下に、市場の狀況に基きて營まるゝものが決して尠なくない。而も其の企業者自らが彼れの雇傭せる賃銀勞働者と伍して同樣の勞働に服し、企業益を求むると同時に自家の勞働報酬をも求めるものが多い。斯かる種類の農民を呼んで企業者兼勞働者となすことは、余は左程失當なりとは思はぬのである。普通の米作業に至りては企業益を追求する心理も乏しく又實際多くの場合に於て企業益は之を見難きのであるが、然も近時は多少企業的色彩を帶び來れるものもある。此等に對しても便宜上同じ呼び方をしても差支ないと思ふ。

博士は更に余が小作農は法律的には企業者たるの形式を具へてゐると云へるを否定して、我邦の法律には企業者などと云ふ形式を規定して居らぬと主張せられる。併し乍ら余が意味した處は、小作農は地主に對して勞務を提供することにより勞賃として收穫物の一半を得ると云ふ立場にあるにあらずして、民法上の賃貸借の規定により地主の土地を借入れ、自己の計算に於て農業經營をなすものである、即ち自ら危險を負擔して企業をなすものであつて、小作料は單に土地使用料を支拂ふものたるに過ぎぬと云ふことである。若し小作農が法律の解釋上、此の意味の企業者たる立場に置かれずして勞働者たる立場に置かれてあるものとすれば、彼れは小作米不納延納等、小作爭議に際して地主に對する作戰上甚だ有利なる立場を棄てねばならぬ。余は法律の明文に企業者と規定することなくとも、小作農は其の小作經營より生ずる收支計算の危險を自ら負擔すべき法律的地位にあるものなる事を認める。

今や余は述べんと欲する所は略之を述べ、答ふべき處は略之を盡くした。而も顧れば多くの論爭の然るが如く、此の論爭の大半は博士と余との立脚地の相違及び農村問題に對する解釋の相違に基いて居る。余は此等論議が讀者諸賢に對して、農村問題に關する一層精密なる概念の構成上些少たりとも役立たん事を切に希望する。而して玆に筆を擱くに當りて、蕪辭、時に先輩に對する禮を失したる所あるべきを福田博士に謝し、學問上の論爭に於ては固より何の憚る所なけれども、私情に於ては博士の學究的熱情に對する畏敬の念切なるものあるを述べて、博士の筆硯の愈々多祥ならんことを祈るものである。



二元社會に於ける文明の成立と崩壊

長谷川如是閑

一　社會科學の使命

社會は必ずしも常に單純から複雜に、又は分割から統一に進むものではない。時にはその反對の過程をとることもある。今日野蠻未開の狀態にある種族は、必ずしも最初から低級の狀態に止まつてゐた譯ではなく、そのうちには、或る時代に於て自から一定の文明狀態を呈したものもあり、又古代文化の影響をうけて、或る程度まで進化の過程をふんだにも拘らず更に退化して再び低級の狀態に還元したものもある。古代文化が世界の到る處でその廢墟を殘してゐるのは即

ち社會過程に於て退化現象が一般に支配してゐることを示してゐるのである。

社會科學はそれ故に、社會進化の動機を見出すと同時にその退化の動因を發見する學問であらねばならぬ。近代に於ける原始人類の及び古代社會の研究の發達は、人類の過去の經驗が、この進化と退化の過程を說明するものであるといふ處から起つたものであつて、その智識は要するに、意識的に社會進化の過程を追ふて、退化現象から回避しやうとする人間的努力に外ならないのである。所謂『文化』意識の完成といふやうな概念構成を社會科學の終局の目的とすることは概念を得ることが生活の目的であると考へる階級的見地である。社會科學は決してさういふ閑散階級の、概念を享樂する企圖の下に起つたものではない。社會に類する科學的智識は、如何なる時代に於ても、一般の叡知的要求の然る如く、生存の意識として起つてゐるのである。生存の過程がそれ自身の機構によつて無意識的に發展しつゝある場合に、特に意識的企圖が起るのは、その社會の機構が生存過程に反して動き出した場合、言ひ換ふれば退化過程に入り出した時である。此場合に生存の衝動は、此の退化過程に反抗する人間的行動として現はれる。總ての科學はこの意味の行動を目的づける意識的企圖に外ならない。その意味で科學的智識は、思惟の生活に終始するものではなく、行動の意識として作用するものである。

叡智はそれ故に本來生存的である。生存を否定する叡智なるものは自家撞着である。而して生存過程は、生產の過程に依存するものであるから、叡智は當然、生產の過程に伴つて發達したのである。文明とは所謂文化の意識ではなく生存行動が生存の叡智—科學的智識—を生じ、その科學的智識が更らに生存行動を目的づけた生活樣式其のものをいふである。所謂『文化』の意識は、科學的智識が造り上げた文明の生活樣式の裡に生きる人間が、その生活樣式を動因として生み出した意識狀態である。『文化』の意識は、文明の結果であつて、動因ではない。それはすべての形而上學的思惟と同

しく、固定した文明生活の産んだ意識である。科學的叡智は人間的心意が生活の機構の上に積極的に働きかける作用であるが、文化意識は、生活の機構がある固定した生活様式を生み出した場合にその様式の上に成り立つ人間的心意である。それ故に、科學的智識は社會的生存の衝動であり、文化意識は階級的生存の觀念といひ得るのである。從つて社會がその生存の爲の叡智を要求する時には科學が起り、社會がその階級的様式を完成せしめた時には、形而上學が起る。社會も亦これを科學が特別の科學と考へる必要はない。それは一般科學が然る如く、形而上學に對する叛逆である。社會科學を形而上學化する總ての企は、階級生活の觀念享樂の態度である。

二　二元社會の構成

生活に關する科學が文明の唯一の動因であつたといふことは、社會進化の事實がそれを證明する。社會はその集團の生存を可能ならしめる生存資料を得る方法の如何によつてその生活様式を決定せしめられる。人類學者は、その生存資料獲得の方法に依つて、二つの社會を想定する。一つは食料蒐集の集團であり、他の一つは食料生産の集團である。（この二つの集團の社會過程に於ける地位並にその特質に就いては、本誌、大正十三年四月號及び同年四、五、六月號の「我等」で述べた處を參照されたし）社會は蒐集の集團によつて構成されてゐる間は、絶對に進化過程に入らない。併して食料生産の過程に入ると同時に、進化的となる。從つてこれを逆にして、社會の生産過程が衰退すると蒐集過程に入り、進化過程から退化過程に移るのである。一定の社會進化が一定の生産過程の進化に伴つてゐることは、歴史家が、或る社會の生産過程が進化的であるか退化的であるかによつてその社會の文明程度を推定しやうと試みることによつても明である。文明史は殊に生産過程の歴史であらねばならぬ、尤も今日までの文明史は主として藝術的創作（殊に工藝品）

の上に現はれたものを本位として觀察することになつてゐるが、生產過程がその最も精練された形で生活行動の上に現はれたものが藝術品なのであるから、藝術品を標準として觀察するといふことはつまりその時代の生產過程の進步を測定するといふことで、それが一つの可なり確かな方法なのである。生產過程が向上すれば必ず高級な藝術品が起る。如何なる時代に於ても、生產過程が衰退して高級な藝術品を生み出した例はない。故に文明狀態を藝術品によつて測定するといふことは、とりもなほさず、文明が生產過程に依存することを認めてゐるのである。文化に關する形而上學的學說が生產過程を無視して、『文化』とは、生產の過程の樣なものとは全く沒交涉な純粹の思惟の過程の生活であるかの如く考へるのは、階級的錯覺である。

社會的集團が單に蒐集の生活に止まつてゐた間は文明の現象が起り得なかつたのは、全く、その集團が生產過程には入り込まなかつた爲めである。併し乍ら蒐集の過程と生產の過程との間に絕體的な區別がある譯ではない。蒐集の過程もその複雜な組織に於ては生產の過程に劣らない科學的叡智を生み出す。只生產過程に於てその機能が一層發達するのである。故に蒐集過程が生產過程に進む順序は極めて自然的であり又有機的である。突然生產の過程がその特別な機構を以て蒐集過程に取つて代つたのではない。（この事は前揭『改造』の論文に述べてある。）蒐集過程のうちに自から生產過程に入る動機を持つてゐるのである。一般に蒐集の生活に止まる種々なる生物も、或る程度まで生產過程に近接した生活過程に進むことはあるが、その生產過程が一層複雜な發展を取り得なかつた處に人間社會との懸隔を生じたのである。

この懸隔の生じたのは即ち人間に於て思惟の過程が高級の發達を遂げたことに原因すると認められる。然も思惟は畢代人が考へたやうに、生活を超越した靈的本源から湧出したものではなく、生活經驗の排列である。過去の經驗が將來の經驗を產み出す機構である。總ての思惟が迷信的から科學的に發達するのは、即ち生活過程に於ける經驗の排列の進化

である。無論迷信も生活過程に密接して發達したものであつて、それは行動が生存過程に於て發展する場合に、それに對する障碍を意識的に排除する企である。例へば太古の人類は今日數萬噸の汽船を以てしても時に危險に遭遇する樣な大洋を極めて小さな舟で往來したのであるが、——それが如何に大航海であつたかはエジプトに發生し地中海を中心とした中央文明が、東洋南洋西半球の各部に分布されたといふことをもつても明かである。——古代人をして斯樣な大膽な行動を敢行せしめるについて、その行動を現實に遂行せしめしるものは科學的叡智であるが、それを遂行するに當つて、何度も〳〵失敗したに拘らず生存の衝動を以て更らにその行動を繰り返す場合に、それに伴つて發生する意識は、即ち海に關する迷信である。彼等が生存の衝動によつて、その危險行爲を繰り返す場合に、その危險な障碍と及びそれを排してその目的を達するに到つた事實とに對して科學的叡智でそれを解釋する知識が發達しない間は、即ち迷信がそれを解釋するのである。危險は神の怒りであり、目的を達したことは神の保護であると理解するのである。人間を現實に生存過程に於て生かして行くものは生存の科學であるが、それと併行して、科學的意識の隙間を塡補してゐるのが迷信である。科學は次第に迷信を破つて行くが、迷信は科學に破らるゝまでは、意識の上では、科學が持つと同じ價値又はそれ以上の價値を持つてゐるのである。

然し、生存の行動そのものの意識としては迷信は科學によつて打破されねばならないのである。航海の安全を意識の上で保障するものは迷信であるが、行動の上で保障するものは科學的叡智である。古代人がとも角も安全に大洋を航海したのは、やはり今の科學に基く航海術と同質の行動の科學的組み立てによつたのである。科學は畢竟生活行動として生存過程の上に働き出す叡智である。眞理が（科學の）目的ではなく、生存の行動に眞理を利用する爲めに、その眞理を見出す手段が科學である。文明は眞理が發見されたことではなく、眞理が生存行動として生產過程の上に現はれた成

果である。眞理がたゞ思惟の過程に徘徊してゐる間は決して文明は生じない。眞理が行動から思惟に退却すると文明も退化する。

蒐集の生活が生産過程に進むに從つて文明を發生せしめたことは明であるが、然しその過程の歴史的事實として現はれたものを見ると蒐集生活の社會群が有機的に生産生活に發展して今日の文明國を生み出したのではなく蒐集群が生産群を軍事的に又社會的に征服した關係から生れてゐる。故にその結果から見ると、すべての文明は征服事實に基く支配階級の存在を條件としてゐるのである。この征服に基く階級的支配が成立しなかつた處には決して文明現象は發生しなかつたのであり、又支配階級の衰退に伴つて文明も衰退したのである。エジプトの文明も中央アジアの文明もギリシヤ、ローマの文明も、その國々に於ける軍事的征服に伴ふ階級的支配の勃興に伴つて起り、その衰亡に伴つて亡びた。文明は嚴密に支配階級と終始したのである。

この支配階級は即ち蒐集群であつて生産群ではない。生産群はこの支配階級の管理の下にそれ自身の生産過程を有機的に組み立てゝゐた別の社會である。それが蒐集群の生活と有機的關係になかつたことの極端の例は、中世紀の封建國家の生活が農工商の生活と全く有機的に關係して居らなかつた社會狀態である。かく文明が支配階級の興亡に伴つたと云ふことは、即ち文明といふ現象が特に蒐集群の生活に於ける現象であることを說明してゐるのである。

文明が亡びたといふ場合に於てもその民族の生活は必ずしも共に亡びてゐるのではない。支那の樣な國家では、歴代の文明が、起つては亡び亡びては興つてゐるが、支那國民は民族的に國家の興亡と沒交渉に一貫した生存組織を維持して來たのである。これは民族の社會群と支配階級の社會群とが、別々の社會群であることの證據である。斯樣に一方に一貫した生産過程の組織が社會群を形造り、之れに對し蒐集群の組織がその上で起つたり亡びたりしてゐるといふ社會

狀態は、『二元的社會』と呼ばれてゐるのである。

社會は必ずしも右のやうな二元的のそれでなければならないことはないのであつて、一元的社會の存在し得ることはいふまでもない。又或る時代までは如何なる社會も一元的であつたのである。この一元社會に於ては、前に云つた樣に蒐集過程から生產過程に進むに當つてその社會それ自からの叡智的發達に依存したのである。即ちその社會に於て生活經驗の殊に豐富な人間――老人――や生活經驗の主觀的構成に於て特殊の能力を持つた天才――魔術者――が生產過程に於ける叡智を働かせることによつて支配者の地位を得たのである。それは即ち現代に於ける生產管理と同じ性質の支配狀態である。斯樣な一元的の社會は、生物學上の觀念をかりて單成社會と呼ぶのが便利である。然も歷史上では、この單成社會は決して文明國として發達してゐない。總ての文明國は、右の樣な單成社會の自然の――有機的の――發展から出來たのではなく、多くの單成社會が外部關係により無機的に結合して發生した社會群から出來てゐる。その場合に、出來上つた社會に必ず對立的關係に置かれた二個の社會群に分かれることに成つてゐる。即ち蒐集群と生產群との二元的社會である。これを單成社會に對し複成社會と呼ぶのである。

蒐集群と生產群から成つてゐる複成社會を二元的と呼ぶのは、蒐集群が支配階級を形づくり生產群が被支配階級即生產階級を形造つてゐるといふ對立關係を見たのである。ところがこの二元社會に於ける對立關係は、實は單に二元的對立ではなく、もつと複雜な種々なる社會群の對立關係を形作つてゐるのである。二元社會は　その根本的性質は武力に原因した經濟的權力の關係である。武力が腕力的の壓迫に止まつてゐる間は、二元社會の支配關係は決して成立しない。その武力が經濟過程に於て權力關係を基礎とする組織を完成せしめた時に、始めて二元社會の支配狀態が確立する。即ち征服者が生產過程に於ける諸條件を武力的に獨占することによつてそれが生產過程を支配するに至つた狀態が即ち二

元社會の支配狀態である。この經濟過程を權力關係の下に置いた組織は、更に政治的支配關係と同じ本質の上に立つ處の多くの對立關係を生じてゐる。生產者との消費者を對立とか、所有者と無所有者との對立とかいふことにすべて、二元社會の下にのみ起り得る特性である。それは社會的生存過程の關係を、自然の有機的生存關係から引離して權力關係の下に移した結果發生した制度なのである。其處から、國家的の權力關係即ち政治的支配關係の外に社會的支配關係を發生せしめたのである。斯樣にして二元的社會は種々なる利害相反する社會群の對立關係から成立してゐる、謂ば歐洲の國際關係の樣な複雜な社會狀態である。故にこれを複成社會と呼ぶのである。

文明は即ちこの複成社會の產物である。文明が定期的に崩壊することは即ちその動因をこの複成社會の組織のうちに持つてゐるのであつて、かやうな性質の複成社會は、その機構の裡に崩壊過程を藏してゐるのである。換言すれば、文明の組織が持つてゐる缺陷は、複成社會そのものゝ缺陷なのである。而して何故に複成社會の生活が定期的に崩壊するかを究める爲めには、複成社會の發達の裡に含蓄されてゐる退化現象を求めねばならない。即ち複成社會の發生は偉大な文明を生み出した進化過程であると同時に、しば〳〵自からが表示してゐる通り、一種の退化現象として發展する傾向を持つたものなのである。本論ではこの複成社會の生活の特徵を檢討することによつてその退化的性質を求めて見ようと思ふ。

二元的社會の複成的關係に基く生活の特徵を求めようとするならば、先づ二元的社會に於て最も發達した生活組織を捕へなければならない。二元社會で最も發達した組織的生活を擧ぐれば、第一軍國的生活、第二宗教的生活、第三政治的生活、第四經濟的生活である。今これ等の各々に就いてその複成社會に於て育成された特徵を觀察して見よう。

三　二元社會の生活組織の特徴

A　軍國生活

二元的社會の成立は已に云つた如く、軍事的征服を前提としたものである。從て二元社會に於ける生活組織の基礎は、軍國的生活であることはいふまでもない。元來社會的行動としての軍事行動は單成社會に於ても無論存在するのである。が、之れ亦單成社會に於ては決して組織的發達を見ることの出來なかつた行動である。單成社會に於ける軍事行動は今日の意味に於ける警察の程度以上に發達しない。單成社會の軍事行動は、内部に向つては作用せず外敵に對してのみ作用する行動である。單成社會の强制は、今日の家族内に於けるそれと同じく腕力であるよりは寧しろ道德的命令である。單成社會に於てはこの命令は殆んど組織的武力なしに行なはれたのである。多少の武力を伴ふことは今日の家族内の强制と同じであるが、併しそれが正確に行はれるのは武力の爲めでなく社會的心理によつたのであつた。この心理に反抗して腕力を用ふるものだけが武力的制裁を免れなかつたのである。從つて單成社會に於ては、軍事的行動はそれ自からの有機關係に於ては決して發達すべき理由を持たない。軍事的能力が組織的に發展するのは所謂國際關係に於てである。たゞ蒐集生活の群の中で所謂巨獸と戰ふ環境に置かれた種族がその武力的蒐集行爲の結果として組織的に軍事能力を發展せしめたのであるが、普通の蒐集生活は寧ろ極端に内部關係に於て平和的であつたことが明かにされてゐる。蒐集群が自然及び他の社會群に對し平和關係で蒐集生活を行つてゐた場合には、その社會狀態は極めて平和的であつたのである。それが巨獸や外敵に對する外部關係によつて軍事的に發達したのであるから、社會が平和の蒐集生活から成り立つてゐた時には戰爭はなかつたと考へられる。又その平和の蒐集群がそれ自から生產過程に入り一つの生產群

を組織しても、その過程から軍事能力は發生しない。蒐集行爲は自然に對し又他の群に對し戰鬪的態度に出なければならないことと所謂狩獵民族の場合や、軍國的蒐集群の場合に於ける樣な事情もあるが、生產群は何處まで發達してもそれ自からの生活の有機關係に於ては飽くまで平和的で、永久に軍事行動を發達せしめることはない。現在の軍國國家內の生產階級が少しも軍事的能力を持つに到らないことを見ても、生產群が如何に非軍國的であるかを知ることが出來る。單成社會に於ては、それ故に決して軍國組織は起り得ない。單成社會の支配階級は、前に云つた如く一種の生產管理者であつて決して軍國的支配者ではなかつた。たゞその外部關係に於て軍國的行動を取るのであるが、それは丁度蟻の群が自己の社會に於て軍國的組織を持たないで、只だ外部關係で軍國的であるのと同じである。故に單成社會の有機的發達が、所謂二元社會を發生せしめない關係で膨脹することがあり得たとすれば、社會は永久にその本質的平和狀態を持續してゐるのである。今日の野蠻部落の一部にさういふ社會もあるが、又軍國國家の內部に於て、その國家生活と沒交涉に、數千年間生產過程の組織を維持してゐる集團は例へば支那の農民の樣に、永久の平和狀態を持續せしめてゐるのである。

軍國的生活はそれ故に、或る社會群と他の社會群とが、生產過程又は交換過程に於て有機的關係で社會群を構成しても決して發達する生活ではない。言ひ換れば生活の有機關係に於て發生する生活組織ではない軍國的組織は必ず蒐集群が生產群を征服することによつて形造られた社會群に於てのみ發達する生活組織である。然もその場合に成立した社會が、蒐集群の階級的支配の下に組織せられてゐることを條件として發達した組織である。複成社會が今日まで必然に軍國的であつたのは、蒐集群の行動が社會組織の基調をなしてゐる結果である。將來組織が進化して複成社會の組織の基調が蒐集群のそれから生產群のそれに移り得るならば、軍國的生活は必然に崩壞するのである。

若しこの軍國的生活が人類の社會的生存に於て本質的の行動であるならば、その軍國生活に基つく文明は矢張り人間

の第一次的生活衝動に依存して發展したものであると云ひ得る。從つてそれが定期的に崩壞するのは一時的現象であつて、人類の世界は永久に軍國組織に基く文明に終始するものであると思はなければならない。然し乍ら軍國生活が根本的な人間的性能に基づいたものであるならば、元來本質的な人間的性能に基づいた組織である單成社會に於て軍國的生活組織が發達しなければならない譯である。が、さういふことは全く認められない。又生産の過程が人間の本能的行動に基づくものであることは疑ひないが、この生産過程の組織に於ては決して軍國的生活が發達しないといふことも亦軍國組織が人間の生活に本質的のものでないことを想はせるに足るのである。これによつても、軍國的生活組織は所謂制度的性質を持つた一時的の組織であることが斷定される。本來戰鬪行動に導く可き性質の生活組織即ち獸類等と戰鬪行爲を行つてゐる蒐集群の生活組織すらそれが外部關係に刺激されない限り平和的であつたといふ事實によつても、軍事行動の組織は、人間にとつて第一次的生活でないことが認められる。軍國生活は蒐集群としての支配階級が權力關係の支配を建設する第一動機であつたと同時に、その支配を持續する特殊の組織的生活だつたのである。

更らに社會進化の歷史によれば、軍國生活は二元的社會の過程としても決して永久的の組織でなかつたことが窺はれる。社會群が征服事實によつて複成的となつた場合にも、その複成社會が一定の安定した組織的秩序を回復すると、自から軍國生活が衰頽することは歷史の示す通りである。如何なる征服國家に於ても、軍事的行動が一先づ完成すれば、自から生産管理の組織に移り、支配の能力は軍事能力から管理能力に轉ずる。二元社會の文明は、この軍事能力が管理能力に轉じた後に始めて成立するのである。無論此の二元社會の管理は一元社會の管理の樣に、生産の有機關係に依存する組織ではなく、支配階級を本位とした强制管理なのである。土地、勞力等の生産要件を權力關係によつて配列する組織であるから、生産の機構そのものが蒐集群の消費生活を本位として組み立てられる。從つて文明は悉く消費文明で

ある。この關係はその根柢に軍國組織がなければ成り立たないものであることはいふまでもないが、然し管理そのことは軍國生活を離れた一種の生活組織である。而してこの生活組織が支配する様になつた後の二元社會は、軍國的組織を自から第二次的の地位に置くに至るのである。どの國家に於ても、創業時代が經過すると、所謂文官政治、又は市民政治が軍人政治に代つて興る所以は其處にある。然も二元社會は元來力の關係の組織であるから、軍國的生活を二次的の地位に置くに至ると、それが生活組織の上で余儀ないことであるに拘らず、そのことのために軍國々家は崩壊するのである。されば軍國生活を基調とする二元社會は一種のパラドックスである。組織自體が自家撞着的である。組織自體が力の關係に基礎してゐる場合に、その組織の下で、生活の有機的關係を尊重して軍國生活を衰退せしめると、軍國そのものは、他の軍國的勢力によつて覆滅せしめられる。故にこの狀態の二元社會は如何に生産過程の有機的關係を尊重する組織に移つても、決して軍國的生活の基礎を失ふことは出來ない。『文事あるもの必ず、武備あり』と云ふことが二元社會の法則になつてゐたのはその道理である。古代國家がさうであつたのみならず近代國家も亦その二元的性質を持續した組織であるから、その基底に軍國的組織を堅固に支持してゐなければならないことは同然である。近代國家の基調は資本主義的經濟組織であるが、この組織は、それが生産過程の有機關係に密接する程其の能率を舉げるものであるに拘はらず、その經濟關係自體が根底を權力關係に置くものである故に、其處にその力の關係を支持する軍國的實力を持たねばならぬ。其の社會の秩序は主としてこの權力關係の秩序である。それは單成社會に於ける様な生産過程の有機的秩序とは異なる秩序である。社會の內部關係に於て、その所謂社會的秩序が軍國的秩序の基礎の上に立つものであると同様に、外部關係に於ても軍國的基礎を持たないと、その經濟關係を支持することが出來ない。それは內亂又は國際戰爭が依然としてこの近代社會の生存過程に行なはれてゐることを見てもわかる。それは近代國家も亦古代國家と同じ二元社會だ

からである。近代的商人政治といふものも畢竟ギリシヤの市民政治や各國に於ける王朝の文官政治と同じく、軍國的基礎を失つては成り立たないものである。

古代社會を研究するものは、二元社會の支配狀態の下に於ては、必ず軍國的生活を基礎づける諸制度の發達することに注意しなければならない、二元社會の法律、道德、風俗、習慣の基底には、必ずそれを基礎づける軍國生活の組識が見出される。それと同じことは近代國家に於ても認められるのである。蒐集群の支配意識に基づく生活行動の組織は、法律、道德、風俗、習慣、及びあらゆる敎化を特徵づけてゐる。それは必らず軍國的生活組織の分化的に發達した諸制度である。それは、その基底をなす軍國生活の組織の崩壞に伴つて崩壞すべきものであることは、ヘーゲルの國家哲學が舊ドイツの國家組織の崩壞と共に崩壞するのと同じ運命に在るのである。その組織もその哲學も共に、人間の第一次的性能に基いたものでなく、後天的に發達した生活組織の產物なのである。

二元社會がそれ自體、自家撞着的のものであることは、一定の文化を生み出した文明の社會に於て、更に軍國的行動が支配するに至ると、必ずその社會が退化的となることによつて窺はれる。エジプトの文化やギリシヤの文化はそのエジプトやギリシヤの國家が軍國的優越を競ふ戰鬪狀態におちいるに至つて衰頽したのである。又支那の上代の文化即ち周に到つて完成した文化は軍國國家がその軍事的優越を爭ふ戰國時代となつて頹廢したのである。日本の古代文化も武門國家が軍事的活躍をはじめると同時に衰頽したのである。

斯様に二元社會がそれ自體を基礎づけてゐる軍國的生活の機能を發揮せしめると共の文明が衰頽することは、二元社會そのもの丶運命を暗示してゐる事實である。これは全くそれ自らのうちに崩壞の過程を含む文明であると謂はねばならぬ。

B 宗教生活

次ぎに宗教生活が二元社會に於て特殊の機能を發揮することを注意しなければならない。宗教生活はそれが單成社會に於ても、特に主要な働きを持つといふ點に於て、前述の軍國的生活と稍々趣きを異にしてゐるのである。宗教的生活が生産過程の意識であるといふことは一般の思惟又は叡智が本來さうであつたのと異ならない。單成社會に於て先づ發生した組織的生産過程は農業のそれであるが、農業の發達は蒐集生活に比べると更に大規模の協同行爲を必要とするそれである。啻に大規模であるのみならず行動の協同的性質が一層深刻でなければならぬ。社會が單なる蒐集群である間は社會的協同の廣さと深さとに於て極めて幼稚の狀態に止まるが故に、蒐集群の生活は極めて小規模に止まつてゐるが、一度び農業の過程には入ると、群は第一には協同行爲の性質上、第二には生産資料の豐富となる關係上其群が必ず膨脹の過程をとる。處が群が膨脹すればする程、親子兄弟といふ樣な生物學的親密關係が稀薄となり、一つ群の中に生物學的肉親關係の殆んど求め得ないものが、群的協同生活を營まねばならぬ。この場合に、生物學的肉親關係の心理に代つて群の協同を結束せしむる心理は即ち宗教的心理である。或る群が稍々複雜な組織で、家族群を澤山に集めた樣な群を形成する時には、そのうちの一つの家族群が生物學的關係に基づく心理で結束されてゐると同じ樣な心理的關係がその全群の間に成立つのである。それが即ち宗教的感情である。通常それは荒唐無稽の共同祖先の信仰から成り立つてゐる。トーテムが即ちそれである。この心理は單成社會が蒐集群の生活を爲す場合にも、又膨脹して生産過程に這入り込む場合にも、常に社會的に作用してゐる心理なのである。

故に宗教的生活はそれ自から破壞的の性質を持つた組織と發達するものではないのである。二元社會が軍國的に成立

する場合にも、宗教的意識はその複成社會に於ける協同の生活を持ち來たす心理的楔子として組織立てられるのである。總ての軍國的征服は、この宗教的意識に基づく心理的の楔子なしには所謂二元的支配を成立せしむることは出來なかつたのである。之れはつまり、宗教的意識が社會群の協同生活を完成する意識であつたからである。原始時代より今日に到るまで、この宗教的意識を全然欠乏した協同社會が有り得た例はない。それは協同行爲を發展せしめる人間的衝動の一つの屬性として、その衝動に附隨する意識なのである。人間が生産行爲なり又戰鬪行爲なり狩獵なり漁業なりその他凡ゆる生存行動に積極的に踏み入らうとする時に、必ずその衝動行爲の背景として宗教的意識が成立する。尤も人間に宗教本能といふやうなものがあるとは信じられない。本能を、人間をして生物學的行動を反覆させる潜勢的能力であると解するならば、宗教とか哲學とか科學とかを本能に基づけることは出來ない。「宗教は人間の本能である」といふ樣なことをいふのは、宗教的意識が本能的行動の樣に根强いことの譬喩に過ぎない。正確には、宗教は人間の本能的行動に附隨する意識であるといひ得るに止まる。宗教は從つて叡智の發達に伴つて種々なる内容を有つのであつて、又無宗教ともなり得るのである。將來は今日の意識狀態に於ける宗教といふものは成立たないといふ時が來ないとも限らないのである。けれども總ての人間的性能が然る如く、一定の宗教的意識は、それが生活關係の上で廢物となるまでは嚴格に一定の機能を生活の上に働いてゐるのである。宗教的意識の社會的生存過程に於ける意味は其處にある。

然しながら、二元社會に於ては、宗教が右の樣な本質的の作用を働いてゐるに止まらないで、更に二次的三次的の末梢的發達を遂げるのである。而してさう云ふ末梢的發達は、宗教をその本來の機能とは異る二次的三次的の機能を働く組織として構成せしめ、それを特殊の支配狀態を支持する制度として發展せしめるのである。

二元社會の支配に伴ふ宗教制度は、宗教が單成社會に於ける共同生活の心理的楔子であるといふ働きを一方に保存せ

しめ乍ら、他方に、特に二元社會に於ける支配の作用を完成せしめる機能を働き出す組織を確立せしめるのである。二元社會に於ても、單成社會の特長を保存せしめてゐる生產階級に於ては、宗教の第一次的機能が比較的多く保存されてゐるのであるが、支配階級はかやうに被支配階級たる生產階級に宗教の機能が有力に働いてゐることを利用して、その二元的支配に必要な二次的三次的の構造を以つて宗教を制度的に發達せしめるのである。一方に、宗教が尙ほその本質的の機能を社會的に保存してゐなかつたならば、決してさういふ支配階級の宗教制度は成り立たないのである。今その二元社會に於ける制度としての宗教について一考して見る。

二元社會は元來蒐集群が生產群を支配する狀態であるから、その組織の合理的基礎は蒐集生活の意識に基く論理でなければならぬ。生產過程を基調とする社會群の意識では、蒐集群は生活の協同者として意識することは出來ない。けれども二元社會は、蒐集群が協同者以上の地位に立つ制度である。生產過程に協同せずに生產關係の支配者となり生產の果實の收得者となるといふことは、生產關係の社會群に於ては合理的根抵を保ち得ない一種の奇蹟であらねばならぬ。生產過程の協同意識に於ては、一切の社會的享樂が生產過程に對する行動的參加を基礎とする。彼等が互に同一社會群に屬すると意識する所以は、彼等の各々が例外なしに生產過程に於ける行動的參加者であるといふ事實に立脚する。行動を以て生產過程に參加しないものは、彼等にとつては異種族である。彼等の宗教的意識はそれ故に此の異種族を除外する。若し行動を以て生產過程に參加しないもので同一社會群に屬すると認めらるゝものに對しては、一種の奇蹟的關係を想定するのである。子供と老人とがこの奇蹟的關係を保つものであつた。尤も子供は往々同一社會群に屬する生物と見られなかつた例が多い。併し其處には又生物學的關係に基づく無意識的協同が成り立つて、ある特別の場合の外生兒の哺育を忽がせにすることはなかつた。老人に至つては元來生物學的關係に基づく協同でありながら、概ね神秘的關係

を創造したのである。老人がその社會的生活の機能を失つても、なほ最高の社會的地位を與へられてゐたのは即ちその神秘的な資格によつてゐるのである。

この場合に老人に與へらるゝ神秘的の地位は一種の宗教的意識を基礎とするそれである。即ち老人が種族の神と共通の地位に置かれてゐるのである。單成社會に於ける老人の支配は、老人と種族神との共通的要素の上に築き上げられたものであるが、そのことは、本來老人その者が、今日の家庭に於て然る如く、小集團の中心的地位を占めてゐたこと即ち集團結束の心理的樞機を握つてゐたことに依るのであつて、これ又一種の社會的機能に外ならない。老人の具體的地位は老人が實際的の意味でさういふ機能を働いてゐた所から與へられたのであつて、老人の空想的地位即ち神秘的地位も亦そこから生れたのである。私の推察する處では、人格的神の觀念は畢竟この老人の具體的の地位から生れた想像ではなかつたかと思はれる。老人が一切の生産行動を離れながら尤も有力な地位を集團の上で占めてゐるのは、元來は生物學的關係に基づく感情だつたのであるが、同時に老人が有力な生産行動の經驗者であり又協同關係の中心であるといふ事實に基づいたのであつて、即ち生存過程に於ける老人の機能が老人の最高地位の基底をなすものである。斯樣な具體的事實が空想の過程に入つて其處に人格的神の觀念に進んだものと認められる。神の最も原始的なものが老人の姿を持つてゐるのも偶然でない。神と老人とは何等生産行動に參加しないが、然もあらゆる生産行動を支配する最高地位にあつて同時に社會群の協同の中心を爲す處の人格である。そこで神の人格的形態も亦老人そのものなのである。

老人はその意味で、今日の言葉でいふ「社會的』といふ概念の具體化である。老人の支配が成り立つたのは軍國的支配が成り立つたのとは異つて、全く『社會的』關係に於てである。だからそれの親類である神は『社會的』の存在物である。神の機能は社會的生存の機能である。凡そ神的なるものは本來の意味に於ては協同生活の機能である。社會群の生

存過程を働き出す有機關係が即ち神的なのである。

無論斯樣な神の人格の想像は元來變態的である。それは生活の科學によつて次第に打破さる可き空想であるが、二元社會の宗教制度は、此の變態的制度を一層制度的に發達せしめたものである。二元社會に於ける蒐集群は、老人若しくは魔術者の樣に生活經驗の蓄積者として、若しくは協同關係の有機的中心として具體的の機能を働いてゐる譯ではなく、全く力の關係によつて生産群を支配する蒐集群として成り立つてゐるのであるが、さういふ地位を、恰も現實の有機的關係に於ける具體的の機能を持つてゐるものとそれと同じ地位に置かふとすれば、その蒐集群の地位を神のそれと一致せしめねばならぬ。其處で總ての征服者としての蒐集群は、例外なしに自から種族神の地位を襲つたのである。

無機的關係で二つの社會群が複成社會を構成した場合に、有機的關係から發生した宗教的意識をそれに一致せしむることは、原始國家の重大な國家的行動だつたのである。宗教がこの國家的行動を完成せしむる爲めに組織立てられたのが即ち軍國國家に隨伴する宗教制度である。

其處では宗教は恰も一種の詐術であつたかと思はれるが、然しこの詐術は今日の意味に於ける僞りとは稍々性質を異にする。第一に征服事實そのこと、それ自身宗教的意識を刺激するのである。征服者はその目的の爲めに特に種々なる手段を講ずるのであるが、然しそれをしなくとも、征服の行動はそれが完成すると同時に一種の宗教心を發動せしむるのである。異常な行動は原始社會に於ては宗教的意識の最も有力な刺激である。明確に人間がした業も、それが異常であつた場合には神業と考へられる。偉大なる征服は一種の宗教的信仰を呼び起すそれ自身の力を持つてゐる。小さな社會群の中でも異常の力を持つものは神化される。社會群の接觸に於て異常の力を示した群は一種の宗教的信仰を刺激するのである。この結果、軍事的征服は最後に宗教的歸依となるのである。日本の樣に現在までも異常を示した人格者

を露骨に神化する種族は野蠻人の外には餘りないが、併しそれは神化の方法が稍々原始的であるといふ丈の話しで、西洋の文明人も何等かの方法で異常の人格を神化し異常な仕事を神業と考える習慣から全く脱してゐる譯ではない。佛蘭西國民のナポレオンに對する心理狀態によつてもそのことは察し得らるゝのである。

其處までは宗教が稍々その本來の機能に依存して二元社會に作用してゐるのであるが、二元社會の宗教的生活が此處で立止つたならば恐らく二元社會の支配は同じく其處で立止つてしまつたのである。宗教的生活が二元社會の發達を可能ならしめた事情はそれから後の發達である。

それは即ち前日云つた樣に、二元社會の支配が完成したのはその經濟組織の强制管理が完成した時であるといつたことに關聯してゐるのである。詳しくいへば宗教生活が二元社會の强制的經濟組織に加擔したことが二元社會の支配と宗教の末梢的發達とを確實に結付たものである。

征服事業が必らず宗教的意識を伴つたことは前述の如くであるが、二元社會に於ける支配狀態も亦軍國的强制を基調としながら、同時に宗教的意識を伴つてゐたのであつて、それはその支配が征服事業の發展である當然の結果に外ならない。而して二元社會の經濟的强制管理に就ても亦同じ事情が成り立つてゐるのである。征服者が神化されたことは、その支配狀態を精神的に支持する道であつたばかりではなく、同時にこれを物質的に支持する道でもあつた。而してその後者の意味が前者よりも一層重要だつたのである。元來二元社會の支配を基礎づけた征服そのことが、精神運動ではなく物質運動だつたのである。種族の間に軍事的行動が起る事情が生物學的生存競爭であることはいふまでもない。高級の精神狀態を持たない生物の間にも、征服事業は盛んに行はれたのである、蒐集群の二元社會に於ける支配も亦物質蒐集を動機とする運動の組織的繼續であるから、その階級生活の動機は、物質の蒐集とそれの結果なる消費（享樂）とにあ

ることいふまでもない。然も此の物質運動は、當初から精神運動の衣を着て現はれる。土地や物資や家畜や人間やの掠奪が最終の目的であり乍ら、それを行ふ征服群に於てその目的が殆んど意識されずに、物質問題と沒交渉な人間的感情だけが强烈に意識される。或る社會群が征服を行はうとするに當つて、群的に湧起せしめる意識は何んなものであつたかといへば、總ての國家の口碑に傳つてゐる通り、おそろしく感傷的な詩的感情のやうな興奮である。或は征服行動それ自體を讃美し或はその征服行動に伴ふ種々な道德的感情を高調し、一致、勇敢、服從、その他の軍國的情操だけが征服群の全意識を支配する。彼等はまるで異常な道德家か宗教家かであるかの如く、それ自身を意識する。その實、彼等の征服行動は、單純な物質掠奪の運動に他ならないのでありながら、然もさういふ行動が、群の生存に必然の過程であるといふことになると、群は決してその行動を否定する樣な意識を持ち得るものではない。如何なる行爲と雖も、當の行爲者の必至的の生存過程であるならば、それは必ず或は詩的に美化せられ、或は道德的に高調されるのである。征服事業に當つて群が發揚する感情は即ち、人間的意識が單純に生存過程に依存することを說明してゐるのである。

征服群がその征服事業を完成して、二元社會の支配狀態が開始されるに當つても、その物質追求の運動である處の本質を變へるものではない。その支配が當然に强制的經濟管理に進むのは即ち物質追求の組織的行動に他ならない。この行動が開始されると其處に支配階級の側に極めて豐富な物質の蓄積が起こるのである。それが即ち富である。二元社會の文明はこの物質的富を消費する組織に他ならぬ。支配階級にこの種の富が最も豐富に蓄積されたのは大規模の征服事業が完成されたその直ぐ後に限るので、歷史上の國家文明は悉くさういふ時期に起つてゐる。從つてその文明の消費文明であるといふ特徵も、その時代の國家文明に於て最も顯著に現はれる。然して斯樣な大規模の蒐集が行はれる組織の根柢には、軍國的行動があると同時に宗教的生活があるのである。

物質追求の企圖を美化する征服者の浪費主義は元來宗教的色彩を持つてゐる。その征服群の軍事的活動は要するに彼等の種族神の行動であるといふ信仰の下に行はれる。さういふ宗教的性質は更らに群の經濟上の要求を、同じ宗教的傾向に結び付けるのである。蒐集群が特に物質豐富な生活組織を構成するためには、生產群の社會意識を壓迫せねばならない。單成社會に於ては全群は或特殊の神秘的存在と生產した又は蒐集した物資とを結びつけるが、社會の一部である特殊な一群に蒐集並に生產の果實を結びつける機構は持たなかつたのである。彼等が物質を特にそれと結びつけた神秘的存在は即ち神若くは長老であつて、それが單成社會に於ては決して特殊の强制的經濟管理による蒐集生活の組織として發達しなかつたのである。處が二元社會に於ける蒐集群は、自己の群をこの單成社會に於ける神秘的存在と結びつけることによつて、その二元社會全體の生產の果實を自己の階級に結びつける組織を持ち來たしたのである。故に征服階級が自己を神化するのは、其根抵に物質蒐集の欲求を潜在意識として有してゐると認めなければならないのである。

種族神の地位を二元社會の支配階級が占めることによつて、物資の分配の組織が根本的に單成社會のそれと異つて來る。單成社會の神秘的存在は、人間的實在又は階級的實在ではないのであるから、種族が群の物資を全部それに捧げても具體的な分配の上には、何等の影響もないのである。その神秘的存在は決してその物資を消費し享樂することをしないのである。のみならず全群が群の物資をその神秘的存在に結びつけるといふことは即ち、土地を始めすべての物資の分配を、個的又は階級的慾求に基づいて分配しないで、社會的生存の有機關係で分配せしむる極めて天然の分配過程に伴ふ意識だつたのである。反之、二元社會の支配階級がその神秘的存在の地位を占めた場合には、それは征服者の群が物資を追求する本來の掠奪過程の繼續に外ならないのであつて、たゞその過程を二元社會の全群の意識に於て成立せしめる企圖としたのである。この企圖は前にも云つた如く征服事業の完成そのことが被征服者の間に征服群に對する宗教的

歸依を生み出すといふ事情によつて、比較的圓滑に成立するのである。

それは即ち、全く社會的であつた單成社會の所有が、階級的所有に移る過程なのである。單成社會で或る神秘的存在にのみ歸屬した所有は、事實は誰れの所有でもないのであつて、それは全く、社會的所有以外の所有を否定する意識である。處が二元社會は、さういふ社會的の意識をそのまゝ繼承して、その階級的所有を發生せしめたのである。元來『所有』の意識は、前に云つた如く、宗教的意識である。人間は何物をも所有することが出來ない。神秘的存在としての人格だけが所有者であり得るといふ觀念が所有の原始的性質であつた。然るに二元社會の支配は、この原始的所有の觀念を逆に利用して、宗教的所有の主體として、神の代りに階級的人格を置いたのである。それは征服事業か贏ち得た宗教的歸依を中心として、制度的に構成された蒐集生活の組織なのである。政治と宗教との一致狀態の下に、始めて所有がさういふ形式で支配の階級に移つたのである。

從つて租税の始めの形は宗教的所有の原理によつたのである。土地が神の所有であるといふ意識は、土地の生産物を神に捧げる制度となつたのであるが、二元社會の支配階級に於ける租税の始めはさういふ宗教的意識の下に合理的に成立したのである。それまでは征服階級の土地及び物資の獲得は單純な掠奪行爲に過ぎなかつたのであるが、土地その他の生産要件が神に所屬すると同じく二元社會の支配階級に所屬すると考へられるに至つて、二元社會の蒐集群の獲得は、社會的制度として、掠奪の性質を離脱した租税の形で成立したのである。この事情は蒐集群の地位が神的優越に基づく地位であることとの一般的信仰を基礎とするのである。

右の樣な組織は、後には分化して、宗教的首長と二元社會の支配階級の首長との分離となつたが、それは支配階級にとつて經濟的の危機だつたのである。國家と寺院との爭が如何なる國家の歷史にも現はれてゐるのは即ち一種の經濟戰

である。蒐集群の組織が、一方、軍事行動に基づく支配の集團の蒐集生活のそれと、他方、單成社會の神秘的存在の意識を繼承する蒐集群のそれとに分れて、其處に同じ目的の競り合ひが起つたのである。

單成社會の神秘的存在の所有が、轉じて、一種の人間的蒐集生活を生み出すときは、已に單成社會に於てその端緒があつたのである。神秘的存在を代表する老人又は魔術者は、神的所有を人間的に濫用して物資や婦女を享樂する地位を築き上げたのである。それは軍事的暴力とは全く關係のない社會的勢力に基づいたのであるが、併し神の意識をその蒐集生活の根柢とする點が軍國的征服群のそれと共通であつて、たゞもつと自然だつたのである。後の國家に於ける寺院制度は、右の非軍國的蒐集生活の發展したものなのである。從つて寺院制度による僧侶階級の生活組織はやはり一種の蒐集生活であつて、物資の豐富な蓄積によつて、生産群と全く類を異にする、享樂階級的生活群を構成してゐるのである。

二元社會に於ける寺院と國家との分離の爲めに、宗教的蒐集生活は次第に寺院の方に移り、國家の蒐集方法は、もつと原始的な單純な掠奪に近い方法にまで墮落したのである。西洋諸國でも、東洋でも中世式の軍國國家の時代に於ては、國家の蒐集生活は宗教上の根抵を寺院に奪はれた爲めに、その合理的根抵を失つて難境に陷り、殆んど露骨な掠奪にまで還元してしまつたのである。この狀態は近世に到つて、市民自體の支配といふ觀念が成り立つまでは、全くその合理的根抵を回復することが出來なかつたのである。封建國家はかやうな蒐集生活の行き詰りの爲めに、即ち經濟的窮迫の爲めに倒れたのである。

其處で今日は、寺院が二元社會の支配階級の宗教的意識に基づく蒐集生活を受繼いでゐるのであるが、次いでこの宗教的蒐集生活も亦社會の進化に伴つて、次第に難境に陷りつゝある。昔の社會は、所謂寺院が宗教的意識に基づく階級

生活を支持する蒐集行爲を神的所有に基づけ、事實は僧侶の階級的享樂の爲めに費やさるゝ物資を神秘的存在の生活の資料であるかの如く思惟して寄附行爲を行つたのであるが、今日では神格の觀念が變化して、さういふ意味の寄進が神の生活に必要であるとは、多くの人は考へなくなつて、ただ社會的風習としてのみ、因習的に寄進が行なはれてゐるに止まる。從つて宗教的蒐集生活も亦崩壊の過程に進んで居ると認められる。

斯くの如くにして二元社會の宗教生活は、その階級的構成を支持する精神的並に物質的機構としての資格を失つてしまつたのである。

C　政治的生活と經濟的生活

次ぎには二元社會の第三の特徵としての政治的生活と第四の經濟生活とを一緒に考察して見やう。

政治は、二元社會が單純に軍國的征服の結果であつて、社會的生存の有機關係に依存してゐないことを顯著に示してゐる機構の一つである。政治も亦二元社會の原始的意識としては宗教的であつたことは、已にしば〱說かれてゐたことである。それはつまり單成社會に於ける支配が宗教的意識と離る可からざる關係にあつたのを、全く其の機構を異にする二元社會がその支配意識とし踏襲したのである。原始的社會群の意識としては、人間が人間を支配するといふことは全く成立しない意識だつたのである。それは丁度今日の社會意識に於て、特定の個人又は階級がそれ自身の立場から人間を支配するといふ觀念が成り立たないのと同じである。而して、今日は個人又は階級を否定した場合に、之れに代る假定的存在として『社會』を想定してゐるが、原始社會に於てはこの想定物が神秘的人格だつたのである。しかもそれは、具體的な、どの個人でもないといふ意味に於てやはり『社會的』だつたのである。されば支配は原始的感情として

は宗教的歸依に外ならない。宗教が人心を支配し、政治が行動を支配する、といふ様な區別は不正確な概念であつて、政治も人心を支配し宗教も行動を支配することは勿論である。政治が原始的感情に於て宗教的歸依であつたといふことは、文明國家の政治が依然として一定の敎化を伴つて始めて成立する事情を見ても分る。とに角、一定の信仰が政治の基礎を爲すものであつて、政治は決してラショナリズムで成立する現象ではない。同時に政治は社會的生存の有機關係に於て成立するものでもない。明らかに有機的關係に反する過程が政治組織の機構の中心を爲してゐるのである。古來政治を合理的に理解しようとする企てが一種の空想としての外成り立たないのは即ち、政治の機構が軍國的征服の非有機的關係に立脚したものだからである。

　されば政治の肯定は、征服の肯定と同じく征服群の感情に基いてのみ可能である。被征服者に征服の讃美が起る場合は、その征服群の感情と共通の意識に基いてゐるのであると同じく、政治も亦被支配者の間には、支配者の意識の感染によつてのみ肯定されたのである。二元社會の被支配階級たる生産群は、政治の否定に終始したのである。生産群が政治を肯定する意識は、軍事的征服を宗教的莊嚴にまで昇華せしめる心理と同じく變態的である。けれども原始的の支配は、その感情がたとへ變態的であつても、反社會的ではなかつたといはねばならぬ。極端な人格神の信仰は今日では精神病者の幻覺であると認められてゐるが、原始社會に於いてはその幻覺的信仰が一般に社會的信仰を形造り、從つて當時の社會生活の機構と撞着しない人間的意識だつたのである。政治の神的起原もそれ故に、原始社會の支配感情としては全く社會的意識だつたのである。（之等の事情に關しては昨年八月號『我等』に『支配に關する原始的感情』と題して記述した處を參照されたし）

　右に云つた様な、社會的生存の有機過程の意識を繼承しつゝ、全くそれと異る關係に於て發達した權力關係の機構が即

ち二元社會の政治的生活である。二元社會の根本動機が蒐集生活にあることは上述の通りであるが、政治はその經濟的蓄積を支配階級の制度的完成に於て持ち來たす組織である。通常それを權力關係と云ふが、併し權力といふ力が目的なしに働き出すものではない。人間の組織的生活に於ける力の關係は決して『力』といふ一種の運動をそれ自體に於て發揚する過程ではない。尤も意識の上では往々力がそれ自體の運動を目的とするかの如く意識されるが、現實の運動としての力は必ず一定の目的を持つ。而もその目的は物質的である。生存の衝動といはれるものも、空漠たる運動それ自體ではない。それは生存といふ概念を追ひかける力ではない。それが酸素なり食料なり生殖行動の相手なり、何なり、とにかく具體的な何ものかを追求する行動であつて、それ等の物質的動因なしに、空漠に働くものではない。政治を基礎つける權力關係も亦單純に物質を追求する力の運動である。無論その力が發揚し又目的を達した時には、その物質的關係を全く度外に置いた樣な心理的興奮狀態が起り得ることは、前に征服事業の場合に述べたのと同じであるが、然もそれを以て政治的權力は、さういふ心理的興奮を目的とすると云へないことは明である。政治の感情は往々物質欲求の心理を無視するがそれは、潛在意識を度外した昇華狀態である。

單成社會に於ける支配は、さういふ物質的欲求でなかつた點に於て二元社會の政治と本質的に異なる支配であつた。單成社會に於ても、個人が物質的欲求を持つことは當然である。けれども單成社會の支配は寧ろその個人的欲求が社會的生活に於て調節され、物資の分配がその個人的欲求にのみ基づかずに、多數の欲求の調節に基いて行はれる組織だつたのである。即ち單成社會に於ては、個人が欲求し、支配は欲求しなかつたのである。ところが二元社會に於ては、支配が慾求したのである。そこに根本の相違が存する。個人の欲求はそこでは、その個人の階級的地位の如何によつて或は無上に充實せしめられ或は際限なく壓迫されたのである。

單成社會に於ても、神といふ人格は總ての所有者で且つ無限の欲求者だつたのである。然もこの人格は具體的な存在を持たないが爲めに事實上欲求者でないと同じだつたので、たゞその神を代表する老人や呪術者が前述の如く、往々神の所有欲を受け繼いだのであるが、その支配は軍國的征服によらかつたが爲めに、有機的生活關係に拘束されることを免かれなかつたのである。言ひ換へれば、個人的欲求を排除した社會的支配だつたのである。これに反して二元社會の支配は、軍事的征服の結果として有機的の生活關係を無視し、物資の分配をその軍事的行動の延長としての無機的の收得關係に置いたのである。二元社會に於て、何故に豐富な物資が支配階級に分配され生產階級はこれに與ふることが出來ないのであるか、その關係は社會生活の有機關係では說明することは出來ないのであつて、軍國的征服關係で說明する他はないのである。政治は此の非有機的關係を完成せしめる組織なのである。

故に政治の簡單な組織は軍國組織であつた，政治家は同時に將軍であり、政治的歸服は同時に軍時的降服であり、租稅は掠奪の稍々組織立てれたものだつたのである。而してその全體を通じて蒐集生活の完成がその終局の潜在目的だつたのである、單純に云へば、政治は生活の有機的關係による分配狀態を壓迫して、非有機的關係で蒐集する組織であると言ひ得る。

然も政治の進化は、初めの單純な軍國的蒐集の組織に變化を持ち來し、次第にそれを有機關係の組織に接近した構成に移らしめたのである，さうなるに從つて、二元社會の支配階級が初めの樣な不合理な蒐集生活を組織的に營むことが不可能になつて、結局その階級組織が崩壞に向ふのである。今日、軍國貴族の生活が古代又は中世のそれのやうな組織では全く成立たなくなつたのはその爲めである。

政治は此の變化に伴つて、次第に種々なる點で社會生活の有機關係に依存せしめらるゝ樣な方向をとるのである。

二元的社會の支配階級の無機的蒐集行爲が、莫大な消費國家を形造つた政治組織は、純然たる軍國的專制政治であつて、古代國家に於てのみ有り得たのであるが、その專制的機構を困難ならしめる事情はいつも必ず社會的生存の有機過程だつたのである。近代國家の成立は、主として生產過程の有機關係に基づいたものであることは、フランス革命がそれを一番に表示してゐるのであるが、更らに產業革命の結果が、今日の市民國家を確實に持ち來たしたについても、產業組織の有機關係が動機をなしてゐることは明かである。封建制度の崩壞が生產の有機關係を妨ぐる政治組織に原因してゐた事情は、その後も同じ方向に展開して、產業組織そのものの機構が政治の機構の動因をなす傾向を一層助長せしめたのである。近代市民の生活組織はギリシャ市民のそれとはやゝ性質を異にし、ギリシャ市民の生活組織が生產階級の生活過程の影響から生れたものではなく、奴隷と主人との關係即ち征服關係の延長であつたのに反し、近代的市民の生活は、奴隷解放の結果に生れた生產生活の發展である。即ちそれは產業の組織が生んだ所有階級であつて、軍國的行動の生んだ所有階級ではない。

それは確かに二元社會が生產過程の有機關係に沿ふて發達したと認めらるべき現象である。政治は其處では產業の機構を動因としてゐる。若し其の產業の機構が全く生產過程の有機關係に依存してゐたならば、此の組織は單成社會の支配に近接したものといへる。若しさうであるとすると、支配の狀態が單成社會のそれに還元する傾向にあると云へる譯である。即ち原始社會に於ける神意による社會的支配は二元社會の軍國的組織に於て崩壞し、宗教的支配は軍國的貴族の支配によつてとつて代はられ、其處で全く生存過程の有機關係による支配が崩れて軍國的專制の非有機的支配が成り立つたのであるが、その中世紀的支配は、更らに近代的產業組織の生んだ生產過程の有機關係による支配によつてとつて代はられ、單成社會の支配に復歸する傾向をとるに至つた譯である。處がこの當然の還元を妨げる事情が近代政治の

機構に於て殘存してゐるのである。

近代政治が生産過程の有機關係に近接し乍ら、依然として二元社會の階級的政治と同じ本質を持續してゐることは、近代政治の組織がやはり階級的蒐集生活の機構であるといふ事實を見れば疑ひをいれる余地はないのである。二元社會の支配狀態の特徴は、しば〳〵云つた如くそれが物質的蒐集の組織である點に存する。文明は只だその豐富な物質生活の結果として生れたのである。それと同じことが近代政治に於て認められる。なる程近代政治の勃興は、軍國的專制政治が生産の有機關係を極度に妨げた處からその有機關係を取戻す組織を持ち來したのであるが、然もその新らたな組織の根抵に存する産業の過程に於て生産された物資が、どういふ原則で分配されてゐるかといへば、依然として二元社會の支配狀態に於ける權力關係によつて分配されてゐるのである。決して社會的生存の有機關係による分配が單成社會に於けるが如くに行はれてゐるのではない。

産業過程の近代の組織的變化によつて豐富に生産された物資の分配について、近代政治は何等新らたな組織をも機構をも持つてはゐないのであつて、それは依然として權力關係による分配制度を組織的に支持する蒐集生活の機構なのである。政治は單成社會に於ける樣な有機關係の機構でなく、二元社會に於ける權力關係の機構である。

權力關係は前に云つた如く漠然たる力の概念ではなく、現實に蒐集生活を根抵づける――有機的にでなく無機的に――力である。權力關係の機構たる政治は、本來その動力を二元社會の權力關係から得てゐるのであるから、本體から發生したものが本體を否定することの出來ない道理であつて、如何に政治が所謂「社會化」したところで、二元社會の無機的構成を單成社會の有機的機構に引戻すことは出來ないのである。俥に乘つてゐるものは俥を曳くことは出來ない。そこに政治的機構の限界がある。

政治のこの本質は、それが依つて立つ處の權力的經濟關係に關聯してゐるのである。この經濟關係は全く二元的社會の組織であつて、その本質は單純に、生産物を生存過程の有機關係に於て分配しない組織であるといふ一事に盡きてゐる。然もさうしないことに就いて何等合理的根抵はない。權力作用がその唯一の根抵である。所有をこの權力關係に基づけて、單成社會に於ける樣な社會的所有の事實を排除するのが二元社會の經濟組織の本來の機能である。生産そのことがこの權力關係の經濟組織に於ては、個人的又は階級的所有の發展であつて、生産過程の有機關係ではない。資本はその非有機的所有の結晶である。單成社會に於ける物資の蓄積は個的所有の發展ではないから、階級的蒐集生活の過程ではない。之に反して二元的社會に於ける物資の蓄積は、蒐集階級がその所有を發展せしめる過程であつて、その點では古代國家の資本も近代の經濟組織の資本も異る所はないのである。而してさういふ蒐集生活の過程としての經濟關係を建設することが二元社會の階級組織の意識的企圖の根抵である。政治はこの二元社會的經濟組織をその時々の特徴に於て完成する機構に外ならない。

この事は近代の政治と經濟組織との關係に於て一層明瞭である。此の關係の下に發生したのが即ち所謂政黨政治であるが、この政黨の組織が蒐集群の組織であることは、政黨を基礎づける階級が二元社會の權力關係に依存する蒐集生活を完成しない間は、決してそれが政黨的勢力として成立しないことを見ても明らかである。市民の蒐集生活が、權力關係の經濟組織によつて階級的構造を築き上ぐるに至つて、始めて市民の政黨が完成したのである。この市民の政黨は、生産群に對して權力關係に基づく經濟的支配を建設してゐる市民階級の政治的重力に外ならない。その政黨の政治は依然として蒐集群の權力的支配に基づく機構の延長である。軍國貴族の劍の代りに市民の算盤が支配するに過ぎない。

この關係は更に生産階級の政黨といふものに就いても變りはない。元來生産階級の政黨といふことは一種のパラドツ

クスである。　數千年間の人類の歴史を通じて生産階級は決して政治しなかつた。それは生産階級の生活過程が權力關係による機構を持つといふことの、全く有り得なかつた爲めである。勿論或る程度まで生産階級の組織も又、政治的に發達した。ギルドの組織の樣なものがそれである。然もギルドの機構は決して生産過程の有機的機構ではないので、ギルドは他の政治の機構と同じく崩壊し永久に生産過程に伴ふことは出來なかつたのである。生産過程が如何にその生産の過程の有機關係に依存するものであるかは、ギルドの樣な階級制度に似た機構が出來上らうとしても――常にさういふ傾向を持ちたがるが――必ず有機關係でそれを破壊することによつても明かである。これは生産階級の組織の中に政治が成り立たないことを示してゐるのである。生産階級に於ける支配は生産能力の支配である。それは名人の支配である。何者もこの生産能力以外の力を以てして生産階級に於ける勢力者たることを得ない。其處に生産階級の支配が生産過程の有機關係に依存する微妙な作用を見出し得るのである。これは政治の機構などとは根本に性質の異なる生活過程なのである。

　されば生産階級の政黨といふことは或る意味で百姓一揆といふことに似てゐるのである。百姓とは生産階級である。彼等の生活に於ては生産要件と生産行動か生命であり、それが組織的に組み立てられてゐるのか彼等の生活組織である。成淋的席旗や殺人用具の竹槍や又それ等を振り廻す戰闘行動の如きは百姓の生活組織の有機關係からは決して生れ出づ可きものではない。從つて百姓一揆は、自家撞着の現象である。農民をして彼等自身の生活過程からは決して生れ得ない行動に出でしむるについては、それは農民の生活過程と全く別な外部關係によつてゐることが明らかである。それは初めに言つた單成社會の軍事行動と共通のものである。生産階級の政黨は即ち此の種類の外部關係の所産である。其處では百姓一揆で農民がしばらくその本來の生産過程を放棄して自分の社會過程にとつては全く脱線的である軍事行動を

とると同じ様に、政黨組織に於て生産階級は彼れ自からの生産過程の組織から脫線するのである。從つてその政治行動に於て生産階級は全く二元社會の支配階級と同質のそれをとる。即ち所有と權力とがこの場合生産階級の脫線的行動の根柢となる。

生産階級は單成社會からこの方、決して個的又は階級的所有を徹底せしめなかつた。彼等の生産行動は全く社會的生存の過程であつて、決して個的又は階級的過程の所有ではなかつた。そのことは古代社會に於ても近代社會に於ても毫も變りはない。更らに生産階級は決して生産過程有の機關係以外に權力關係なるものを持つた例がない。今言つた如く彼等の勢力は名人の勢力である、名人の勢力は生産能力の有機關係に基づく協同生活の心理であつて、決して權力關係と發展することはない。それが權力關係的に發展したギルドは名人を生む生活過程に反するといふだけで崩壊する。「權力」なるものは生産階級にとつては全く不必要で、それを考ふることさへ不可能な代物である。蓋しそれは生産階級の生活と沒交渉な所有關係を構成せしむる非有機的の力だからである。

處が生産階級が右の様な本質的態度に止まつてゐる間は決して彼等の政黨を發生せしめない。彼等が政黨を持つためには第一に所有といふ條件を充たさねばならぬ。然も個的所有は生産階級に於て不可能事である。其處で階級的所有がこの無所有階級の政黨の根據になつてゐる。生産階級にとつて全く不合理の富がこの生産階級の政黨に於て蓄積されねばならぬ。其處にはじめて權力の基礎が生産階級の中に築き上げられた譯である。それは市民が先づ個的所有に於て權力の基礎を築き上げたのとは違ふが、然し政黨として落ち過ふ時には同じものとなる。其處から無所有階級の政黨が權力關係の政治に於て有力なる地位を占め得るのである。斯云ふ境地は生産階級にとつてはたやすく到り得るものではないので――そのこと自身が自家撞着である故に――それを基礎づける色々の關係が具足して初めて成り立つのであつ

て、今日に於ては未だ英國に於て最も有力に成立したに止まる。か何れの國に於ても無所有階級の政黨が多少なりとも成功してゐる場合には、必ず所有關係に於て或る程度まで發展しなければならないのである。

生産階級の生活過程と相反する權力の關係に於いて政治の機構は働いてゐる。政治の作用は何處までいつても二元社會の支配階級の生活過程を追求するのである。それは權力關係に基づく二元社會の經濟組織が生産要件の階級的獨占を離れずに何處までも發展して行く過程である。二元社會の政治生活並に經濟生活は即ち永久にこの特徴を維持して行くのである。

四　結　論

二元社會が生み出した文明は、上に述べ來つた樣な、特殊の生活組織の機構から生れたものであるが、そこから之に對して二つの見解が取り立つ第一は、文明は二元社會の完成以後に發生したが故に、文明を肯定する以上、二元社會の完成を肯定しなければならないといふ見地であり、第二は、二元社會の機構が如何なる高級の生活を生み出したにしても、その機構が常に生活の有機關係と反するが爲めに崩壞するものである以上、それを社會生活の本質的組織と認むることは出來ない、即ちさう云ふ機構から生れた文明はそれ自身自家撞着である、といふ見地である。

この二つの見地の各々はそれ〴〵盛んに各自のユートピアを創作する。法律、道德、哲學の多くがその各々のユートピアに相應じて創作される。ギリシヤの思想や印度支那の思想、その他如何なる思想系統に於てもこの兩面のユートピアがある。併乍らそれは何れも思惟を享樂する階級の生活態度であつた。この意識に於ては、道德的生活も法の生活も宗教の生活も一樣に思惟による思推の肯定又は否定であつて、生存の過程は實はさう思惟を享樂する階級以外の社會群

に於て進展していつたのである。文明に闘しても一般に一種の錯覺がある。成程文明を生活する階級は蒐集群の享樂階級であるが、然もその文明を構成する基底となつてゐるものは、初めて云つた如く生産過程であつて、それなしには文明は全く成り立たない。生産過程が崩れゝば文明も崩れる。即ち享樂する階級は文明を構成する階級ではなく、構成された文明の上に浮遊する、幸福な然しながら慘めな一群に過ぎない。二元社會の蒐集群は、さういふ幸福を享樂する組織の完成者であると云ふ點で文明の創設者であるといひ得るが、その文明の要求を充すものはいつも生産階級の生産行動である。二元社會の支配階級はその特殊な要求を持つ階級即ち文明の注文者として文明構成に加擔するだけである。生産過程はその組織に刺激されて特殊の發展を遂げるのであるが、その發展の過程は全く蒐集群の意識にも行動にもよらないで、全く生産群の意識――寧ろ無意識――並びに行動の有機的發展によつたのである。

其處で文明は二元社會から發生したといつても、それ故に二元社會の支配階級が文明を作つたと斷定することは出來ない。二元社會的文明を構成するには二元社會的階級組織が必然である。然し、その文明を作り出したものは生産群である。

二元社會が生じなかつたならば文明が生じなかつたといふ過去の事實によつて、それが永久的のものであるといふ結論には達することは出來ない。それは將來を想像することによつて推定すべきものではなく、現在の進化過程に於て現に認め得る事實から判斷さるべきものである。今日までの歴史に於て、二元社會が常住的に發展の過程をとつてゐたといふ事實があるならば、その事實は特に中絶の原因を發見しない限り依然として同じ方面に進展すると認むる外はない。これに反して、二元社會の機構が明確に退化の過程をとつてゐるといふ事實があるならば、その事實は、特に中斷の原因が見出されない限り、依然として同じ方向に進展すると認むる外はない。

實際の事實は右の後の場合に該當してゐる。已に述べた如く、二元社會の支配組織はエジプトや中央アジヤやローマやの古代國家に於て已にその最頂點に達し、中世紀の軍國國家に至つて全く墮落的狀態を呈し、近代に到つて生存の有機過程が次第に支配の機構に影響して遂に二元社會の權力關係に基づく政治の機構が、それに影響されて一定の變化を生じてゐるのである。この歴史的事實による外、社會的進化の傾向を推定せしむる根據はない筈である。文明がその古代の樣式を保存することの出來なくなつたのは、今初まつたことではない。二元社會の文明樣式は古代ほど立派だつたのである。その後の生活組織の機構に於て古代式文明を一層發展せしめ樣とするのは、木によつて魚を求むる類である。

同じことは近代文明についても又現代のそれについても云ひ得る。近代の組織が完成した文明をより以上に發展せしむることは、近代の組織がより以上に發展することを條件とする。然も近代の組織は依然として昔崩壊した二元社會の組織の延長であるといふことだけで、そのとる可き過程が推定されてゐる。現代も亦全く同じ傾向をとつてゐるのであつて、さういふ狀態の下に、現代文明がその形式のまゝで、より以上に發展し得ると考へるのは、木に魚が生ると考える類である。が問題は、二元社會が生產過程の有機關係による社會的構造に進化する具體的の過程に依つて解決されるのであつて、その解決の鍵は生產過程の科學がこれから見出すべき使命を負つてゐる社會事實そのものが握つてゐるのである。

如何にして國家學は學として可能なるか

フィヒテ及びヘーゲルに關する一研究

ハインリッヒ・リッケルト

余は先きに本誌に於て、「フィヒテの社會主義の哲學的基礎」及び「フィヒテ哲學に於ける理論的個人主義と經濟的社會主義」に關する二つの論文に於て、フィヒテの所謂「商業的鎖國」なる社會國家的計畫（プログラム）が、如何なる意味によつて彼の思想の一般哲學的原理と必然に關係するものであるかを示さうと試みた。素よりフィヒテに現れておる如き、國家學と哲學との結合か、單に歷史的なる興味以上のものを有つてゐる事は明かである。この結合が理解されたならば、それよりして、哲學的觀念論の內に學的社會主義ともいふべきものが成立するか、即ち社會主義的國家學の條件及び原則なるものか哲學的觀念論によつて學的に、はたして、又どの程度まで、基礎づけられるか、といふ組織的問題にも光明を得る。

この目的のためにはフィヒテの社會國家學の論理的構造を詳かにすればいゝ。そこよりして容易に、如何にして一般に國家學は學として可能なるかといふ更に一般的なる問題に進むことが出來る。この故意とカントの有名な方式に擬へて現した問題は、「可能」といふ言葉の二重の意味によつて、二つの問を含んでゐる。一は、如何にして學的國家學の概念が課題として成立するかといふこと、二は、かゝる課題を解くには學は如何なる手段を用ゐるかといふことである。

余はこの問題をその全體の範圍に亘つて答へやうとするものではなく、それが觀念論的哲學の問題たる限りに於ての說明に止まらうと思ふ。而してそれに含まれる問題を徹底的に現すために、余はフィヒテの「商業的鎖國」のみならず、ヘーゲルの「法理哲學」にも觸れやうと思ふ。この二つの著作の相互の關係は興味ある對立をなしてゐて、フィヒテの社會主義的體系と同樣、歷史的意味以上のものを含んでゐる。余はかくして過去の國家論を、超歷史的なる原理を示す證例として用ゐる。從つて歷史的材料を遺漏なく敍述しやうとは思はぬ。過去の考察は組織的研究のためにするのであつて、歷史的資料の取捨に對する着眼點の如何もそれに基するのである。

哲學、時代史、國家學、

吾々の問題にとつてはフィヒテのうちでも殊に商業的鎖國に關する彼の書物の分類が有益である。內容を三編に、即ち哲學、時代史、國家學に分割したことは、たとひ其書が含む全ての假定や推論の內容が不用なものであつても、その內に現れてゐる論理的形式を見るときは意味深いものがある。吾人はこゝに、フィヒテが國家論に與へた特殊の形相以上の意義を有する、觀念論的國家學の決定的な型を見るのである。

「哲學」と表題する第一編は「理性國家に於て商業取引に關して何か適法なるか」を示すものである。されば哲學とは

理性に導かれたる理想的國家の論、或は理性の要求する理念としての國家の論であるといふことが出來る。第二の「時代史」と題する部分は現在の現實の國家に於ける商業取引の狀態を述べてゐる。かゝる國家は理性國家と根本的に區別される、即ちそれは未だ理性の要求する姿を取らぬ故に、それと關する哲學的研究は成立せず、單り歷史的研究のみが可能なるものである。第三編に於てはじめて「理性國家と現在の現實的國家との結合を取扱ふ」眞の國家學が現れる。フィヒテは國家學はこの二つの國家の中間にあつて、與へられし國家が理性國家に變ずるに至る確實なる方向を劃するものであると言つてゐる。謂はゞ第三編は未來に對する國家的計畫を含むもの、再びフィヒテ自身の言葉を用ゐるならば「如何にして成立國家の商業取引が理性に要求される狀態に持來らされるか」といふことを論ずるものである。

人もしこの三分に注目するならば、全體の著作の論理的構造も明瞭となる。國家論はフィヒテによれば一方理想を展開する理性論に基くもの、或は國家が如何にあるべきかを說くものであるが、又一方には現實なる即ち現在成立する與へられたる狀態、即ちあるべきものとは異つてあるものを示すものである。かくて始めて此の書物は一部は哲學的研究より、一部は歷史的研究よりして國家論上の結論を引出すことが出來る。この事がその論理的形式的構造から見て如何に解せらるべきかは、フィヒテ自ら第三編の初に明晰に述べてゐる。曰く、吾々は商業取引に關して國家の努めて求むべき目的を知る。又その目的に照して現在國家が如何なる點に止つてゐるかを知る。さればこの點よりその目的へ進むために國家の取るべき進路を見出し之を說明することは困難である筈がない。

かゝる言葉に對して事實何ら異議を挾むところはない。理性の要求するところから、國家生活に於て達成せらるべき目的を認め、更に國家が現在如何なる處に止るかを知るならば、理性に適合する目的に近づくために、現在より未來へ國家は如何なる道を進むべきかを說明することは可能でなければならぬ。かゝるフィヒテが試みた方法によつて觀念論的

國家學は少くとも形式上では學として「可能」である。その課題の概念は方法的に明晰に規定せられた、是に於て次には、この課題を學的に解釋し得るとするためには如何なる假定をなさねばならぬか、又かゝる假定ははたして學的に基礎づけられ得るか、と云ふ事を考へる順序となる。

然し此の問題に對しては「商業的鎖國」の三つの部分の何れもが同樣な意味で重要なのではない。最初の二編が第三のものに對する關係は、推論式の二前提が結論に對する場合と等しい。前程の示すところが學的に基礎づけられるならば、結論の基礎も亦確立する。されば吾々は先づ最初の二編の論理的性質を考へねばならぬ。

論理的の側より、その內容の學的性質を如何に見るかといふことは一定であり得ない。時代史は、フィヒテの考へた如く、大部分の國家論者にそのまゝ學であるとせられる。然し或る國家の現在の狀態を敍述しても、それは大體事實の確說に關する事であり、かゝる事のうちには國家學に獨特なるべき方法論的の問題は含まれぬ。之に反して一方第一編に基礎を與へ、之を承認せむとするものがある。フィヒテの考へた如く、理性國家の學としての哲學があるか。この場合事實の確說では用をなさぬ。フィヒテは自ら明言せる如く、理性國家に於て何が適法なるかを決せむとしてゐる。吾々は是に事實の問題より權利の問題を分つカントの分類に導かれる。而して國家論上の權利問題も純學術的に決定されるとは直ちには認めぬであらう。

かくしてフィヒテが彼の國家學の哲學的の部分に置いた、課題の解決可能といふことは、それに適用せられる手段を見ると、方法的に疑問のやうに思はれる。果して學はなほ歷史的に實現してゐない理性國家の概念を形造することが出來るか、果して學は未來に對する國家の理想を、理性が之を要求するといふ事から、理論的に基礎づけることが出來やうか。この事こそ、フィヒテが求めた如き種類の學的國家學の可能に論ずるに際して、何より先づ答へらるべき疑問であ

る。而して大體吾人は次の事を斷言する事が出來る。即ち國家の目的が理性に要求せられたものとして理論的に確立されぬならば、國家的計畫の學的基礎づけも不可能となる。かく學に、歷史的生活に未だ實現されぬ理想の定立が禁ぜらるべきものならば、フィヒテの社會主義的計畫が理論的に支持されぬものとなるのみならず、國家計畫定立の基礎たる、學としての國家學一般を云々することは出來なくなる。

人は學的國家學の方法を明かにせむとする試みに際して、かゝる點に關する錯誤に陷らざる事が肝要である。國家學者として一個の計畫意見を開陳するものは何人も先づ、未だ實現されぬ目的と現實なる生活との間に一の隔隙の存する事を豫想せねばならぬ。次に、彼がその計畫を學的に基礎づけむとするならば、生活に隔つた理想が理論的に認識されるといふことを假定せねばならぬ。その限りに於て國家的問題の學的取扱は、觀念論的なる、生活の經驗的實在を踏越えたる、哲學を基礎として始めて可能である。

この事は既にフィヒテの取つた方式に明瞭に現れてゐる 即ち第一に理性の理想の論としての哲學が、次に時代史が、次にはじめて計畫としての國家學が現れるのである。この點に吾人は「商業的鎖國」の超歷史的な方法的意義を認める。而してこの點から、學としての國家學の本質に對する問題へ結論を引く事が出來るのである。

國家學と價値の哲學

この最初の收獲の方法的意義を更に明白になすために、吾々は先づ今迄と異つた用語によつてそれを見て行かう。フィヒテに用ゐられた「理性」、及び現實的の、即ち現在成立する、與へられたる國家と區別して用ゐられたる「理性國家」といふ言葉の意味は、恐らく完全に明確であるとは言へない。殊に國家的計畫の學的基礎づけの根本に役立つために、

哲學は如何なる意味に於て國家の「理念」を取扱ひ、或は「觀念論的」な姿を採らねばならぬのであるかは判然しない。そのために吾人は價値といふ概念を考の內に導入れやうと思ふ。この概念は學問に於て多くのものに衝突するやうに見えるからなほさら、決定的の點に光明を與へるに適するものである。

「價値」とは極めて一般的には、將來に對して要求を進めむとする場合用ゐられるものであるからして、現在現實の、事實上成立する存在から離れてゐるところの要素である。されば吾々は「理念」として、既に到達された現實の狀態に對して、未だ到達せられずしかも到達せらるべき、價値目的を立てる。かくして價値とは非現實的なるもの、生活に於て始めて實現せらるべきものと解せらるる。是に最も注意すべきことは價値概念の意味を餘りに狹く取らぬことであつて、即ち、この概念を用ゐる場合には、社會政策に於て屢々行はれるやうに、物的の財に具體化せられる經濟的價値のみを考へず、經濟的財のみを實現せらるべき唯一のものと見ぬやうにすることである。快なるものも、眞も、有用なるものも、美も、道德的に善なるものも、神聖なるものも、其他多數のものが價値に屬する。即ち價値とは吾々の意志を或る一定の方向に運ぶ何か特殊の種類の價値と見らるべきのみならず、努力に値する目的に對して未來に存する狀態たることを得るあらゆるものを意味するのである。

しかも他面、如何なる價値も單なる價値として單に現實的なる現實と分たれねばならぬ。實に一個の價値は價値として通用する限り正に非現實的と言はれねばならぬ。價値は單に要求されるものであつて實在ではない。それはそれによつて有價物となる一個の現實に固着せしめむとする限りに於てのみ實現せられるものである。

價値と現實、即ち單に要求せられるものと既に實現せられたものに關する嚴密なる規定は、事がそれ以上遡り得ぬ究極の區別に關する故に、困難な、恐らく不可能なる問題に屬する。然し今の場合そこまでには到らない。即ち次の如く

言よならば價値の何たるかは何人にも確實に理解されるだらう。價値は、現實とは異つて、後者の如く吾々の無關心なるものではなく、吾々に何らかそれに對する態度を取らしむるものであり、又それは吾々の是認否認、同意拒絕、欲求忌避等の二者其一を選ぶべき態度に應じて、快苦、眞僞、美醜、善惡の如き常に對立の形を以て現れるものである。

かゝる用語によれば理性國家とは價値國家である。吾人が實現せむとするもの、或はそれが國家として價値あるが故に吾人が實現すべきことを知るところの價値國家である。之に反して現實に與へられたる成立國家は國家生活の現狀であつて、そのうちには國家的價値は國家上現實體として未だ、少くとも完全には、實現されておらず、從つて國家學者はそれを、現在既にあるものとは異つた姿になさむとし、又なさむとすべきものである。

かくの如く理性國家を將來に存する價値國家と解釋するときは、吾々は一般にかく言ふことが出來る。フィヒテが試みし如く論理的構造の學的國家學は、實現せらるべき未來の計畫に理論的基礎を與へるのであるから、必然に、哲學を、現實物のみならず、實在せずして妥當する價値をも研究對象とする哲學を、根據としてのみ成立するものである。されば理性國家の論は必然に國家的價値の論である。この價値のために理性國家は學的國家學の內に於ても根據ある國家理想として樹てられることが出來るのである。

かくして理性の本質が要求する觀念論的哲學が、方法論的に、學的國家學の構成に對して如何なる意義を有するかは餘程明かになる。先づ人は努力の目的たる理性的國家にその特性を附與する價値の何たるかを知らねばならぬ。その次にはじめて、現在の國家を研究して、如何なる道によつてそれより未來へ進むべきかといふ事を知ることが出來る。吾々が將來實現されると考へる價値のみが、國家を、要求の努力に報ひ努力に値する一個の目的となすものである。而して眞の國家的價値を具體化したものとして考へられる國家の概念にして始めて、フィヒテの理性國家論の目標たるもの

を國家學に完成するのである。

是に於て先づ次の事が決定される。即ち價値は妥當するものであつて、現在與へられし國家に於て現實物には現はれておらぬものと考へると同時に、人の到達せむとするものと到達せられたものとの間には一の隔隙のあることがわかる。そしてかゝる現在未來間の價値の隔隙なくしては如何なる國家論的計畫の樹立も意味をなさぬものである。

要するに國家理想なるものは哲學に於て價値として規定され得る時にのみ、國家學者の使用し得るものとなる。從つて妥當する價値の認識を基礎としてのみ國家學者は、何が國家に起るべきであるか、又如何にして國家學的計畫が形成せられるかを云々する事が出來るのである。

當爲に對する抗爭

とはいへかゝる轉向を思想に與へても、恐らく人はそれにフイヒテの國家學を超脫したる意義をも認めやうとはせぬであらう。即ちそれによつて觀念論的哲學の基礎に立つあらゆる國家學の意味が正しく示し盡されたとは考へぬであらう。價値が要求として現れ、吾等の爲すべきことを教ふるやうに、價値と、觀念論者の認識せむとする理性とを、結合せしむることは許さるべきであるか。

こゝに一個の問題の存することを見るためにはヘーゲルを考へてみればいゝ。この觀念論者はその論理學の内に極めて一般的にかう言つてゐる。「現實に於ても理性態と法則とは單にあるべきものに過ぎぬといふ如き哀れなる狀態にあるのではない。」又そのエンチクロペディーに於て彼は、理念は單に要求(ゾルレン)するのみであつて現實的ではあり得ぬといふ程無力ではないと言つてゐる。この事は吾々の國家學的問題にも密接な關係がある。何となればヘーゲルはその法理哲學の

序に國家學に關するその意見を述べて、國家學上當爲(ゾルレン)に付ては何も知りたくないとなしてゐるからである。彼の著作は、それが國家學を含む限り、一面に於て國家をそれ自身理性的なものと考察し敍述せむとする試みに他ならぬ。この點彼はフイヒテの「商業的鎖國」の思想と一致しゐる。然し他方に彼の著作は同時に哲學書として、あるべき國家の構成といふ如き問題からは全く遠ざかつておらねばならぬと言つてゐる。この言葉の內にはフイヒテの求めた如き種類の總ての國家學を忌避してゐるやうに思はれる。實際そればかりではなく、それに伴つてあらゆる價値哲學的根據の拒斥が、却つて、理性國家を認めむとする觀念論的哲學によつてなさることとなる。こゝに、觀念論の學的國家學の論理的構造を明かにせむとするに際して、看過し得ない一の新しき問題が生ずるのである。而してその說明はヘーゲルの國家論に連關して最もよくなさるべきものである。

ヘーゲルの「理性」は國家的價値の論に對して如何なる位置にあるか、又吾々は、未來の國家に於て何ものかをあらしめるといふ要求と、それ自身理性的なるものとしての國家の認識の概念とを、如何なる關係に置くべきであるか。この二つの問題は或は人の考へるほどに簡單には合一しない。何となれば價値の概念と當爲の概念とは、勿論互に非常に密接に連關してはゐるが、同一のものではないからである。兩者は理性及び理性國家に對する關係に於てはむしろ分離して取扱はれねばならぬ。而してこの事はヘーゲルの國家論に於て明かにすることが出來る。

當爲と價値

ヘーゲルは學者として殊に哲學者として、現在實在する國家に對し、何ら命令を與へ、政治上の要求をなし、成立する國家狀態の改善のために何ら提案をなさんとするものではなかつた。彼が學的國家學者として樹てたるものは彼の

計畫であつた、この點に彼とフィヒテとの根本的相違がある。とはいへ彼の哲學は價値思想に無關係のものであるか、又彼に於ては價値哲學的基礎なしの國家學が存在するのであるか。この事はその文章からは結論されぬ。ヘーゲルは國家をそれ自身理性的なるものと解釋せむとした。從つて吾人は、國家に於ける理性とは國家的價値を他にして何であるべきかを問はねばならぬ。

ヘーゲルによつても理性的なるもの、內に絕對的に價値あるものが認められるのであつて、この事より彼の當爲に對する攻擊が最もよく理解される。彼は理性を價値の總體と考へたが爲に、當爲によつてそれの侵されることを欲しなかつた。この殆ど看過されてゐる彼の思想關係は明瞭にせねばならぬ。ヘーゲルは價値哲學的に思惟しながら、當爲を排斥したのではなく、かく思惟したからこそ、それに反抗したのである。

ヘーゲルが國家をあるべきやうに構成することを避けたのは、道德界は偏見や恣意の主觀的偶然性に委ねらるべきではないといふ考があり、しかもかゝるものは彼にとつて當爲と必然的に結合するものと思はれたからである。從つて彼は、規範的意義を有する超個人的に妥當する「法則」としての理性を擁護するために、單なる個人的欲求の規定として見られた當爲を拒否したのである。之に就ては彼の言葉が明かに示してゐる。ヘーゲルは、各人が倫理的對象に就て、殊に國家、政治、國法等に就て、人の心情や氣分や感興から思ひ着いたものを眞實のものであるとする見解に反抗した。彼の考へた當爲はかくして彼には却て理性に對する反逆と思はれ、理性に具體化せらるゝ超主觀的價値に對する個的主觀の評價作用の戯と思はれたと異ひない。彼は理性的當爲なるものを學に於て規範として用ゐることが出來なかつた。

されば他面から見れば、ヘーゲルは國家をそれ自身理性的なるものと考へむとしたが、價値を離れた國家概念を形造らうとは夢にも思はなかつた。國家の理性はむしろ彼にとつては國家の價値であつて、その前には凡て個人の恣なる當爲

要求は戰はねばならぬものである。彼にとつては單なる當爲以上のものを意味する法則を、彼は永遠なる規範となし、個人の偏見を超越しこれらを從はしむるものと解した。單に當爲たるに過ぎぬ程無力ではなかつた理念は、究極の理想として、全て正當なるものを主觀的目的や見解の上に、主觀的感情や特殊の信念の上に置かむとする者の攻撃によつて毫も犯さるゝところなからむとした。彼は全ての主觀的なるものゝ内に、私人に於ける誠實なる良心、愛、及び正義の内面的な倫理性を傷け、同時に公の秩序及び國法を破壞するにも到るべき要素を認めたのである。

　さればこゝにヘーゲルが當爲に對して對立せしめたものは全く價値であり、從つて、他の方面の思想に於てこそヘーゲルはフィヒテと甚しく相異するが、彼の國家學はフィヒテのそれと同樣に價値哲學的の根據によれるものなることは、殊更證明するまでもない事である。

　然しヘーゲルの國家說の論理的構造を完全に理解するためには、價値と當爲の分離だけでは充分でない。一體ヘーゲルにとつては理性から導かれた超個人的規範的の當爲なるものはないのであるか。彼は國家をそれ自身理性的なるものと認識しておきながら、理性といふものゝ内に國家上の要求を課せむとはしないのか。理性價値の助によつて國家學的計畫は基礎を得ぬものか。理性が却つてあるべきものを吾々に語るのではないか。カントもフィヒテも當爲を口にする時、一の理性的當爲を意味しなかつただらうか。ヘーゲルはかゝる當爲をも拒斥し得たか。こゝにはじめて吾々は眞に困難なる問題に逢着する。

價値と現實

　こゝに明瞭を求むるならば、ヘーゲルの思想は非常に價値哲學的のものであつて、彼が現實的と稱するものこそ彼に

とつて價値あるものそのものであり、さればこそ彼には非現實的なる當爲は價値とは調和しないのである事を、先づ注意せねばならぬ。

法理哲學の序に、理性的なるものは現實的であり、現實的なるものは理性的である、といふ言葉がある。この言葉は吾々の問題にとつて重大な意味を有つ。何となれば彼は歷史的生活に於て事實上既に達成せられたものと、未來がはじめて齎すべきものとの間の隔隙を抹消するやうに見える。然も、既に述べし如く、かゝる隔隙なくしては當爲に就て語る國家學的計畫の成立は事實あらゆる意味を失ふからである。

なほ更に吾人は言ふことが出來る。若しあらゆる現實的なるものが理性的ならば、何の爲に國家學の如きものがあるのか不可解である。又然らば現實の國家が常に絕對的に理性的なる、或は價値あるものであり、國家學者は現實以外の何ものをも國家に對して望まぬ筈である。然しそれでは彼は普通の意味での國家學者ではなくなる。如何にしてもかゝる假定の下には學的國家學は問題とならず、從つてヘーゲルには哲學的國家學を確かに排斥したかの如く思はれる。

世界が如何にあるべきかといふ事を敎示するためには哲學は何時も余りに遲れて來る、と彼は言つてゐる。「現實がその形成過程を完了し、それ自身纒つたものとなつた後にはじめて、哲學は世界の思想として世に現はれる」。之と同樣の意味を、これに續く有名なる言葉が明瞭に示してゐる。「哲學が全く灰色に彩るときは、生命の姿は年老いてゐる。灰色は何ものをも若返らせず唯だ認識するばかりである。ミネルヷの梟はせまり來る黃昏に始めて飛出す」。之は關係から見て何よりも國家論上の意味であつて、從つてヘーゲルが國家改革者として出馬しやうと欲しなかつた事がわかる。そのために彼はあらゆる當爲を避けねばならなかつた。理性的當爲なるものは哲學者としての彼にとつては存在しなかつた。

然しヘーゲル自ら何を欲したかは論外であるし、又彼が當時の實際の政治に對して如何なる態度を取つたかは今の問

題に全く關係がない。吾々は法理哲學の序論を一般哲學的原理の表現として專ら組織的の見地から考察せねばならぬ。然るときは、そのうちにヘーゲルの全思想に特徴をなすもの、しかも同時に國家問題の取扱に際して、必然に彼を征服しがたき困難に陷込む一つの傾向が現はれて來る。その內に全ての觀念論的國家學の根本問題が現はれる。

融合の傾向

人は屢々ヘーゲルが彼の哲學に於て非常に藝術的な見方を取つてゐると說くが、これは全く僞りではない。彼はその哲學の完成に藝術的な形象を用ひてゐる。終のない直線はヘーゲルの價値意識と撞着するが、藝術品は圓周の如くそれ自身纏つてゐるといふことが彼の價値意識と共鳴する。然し眞實にヘーゲルの思想を理解せむとするならば、その藝術的傾向を見ただけでは足りない。實際それが原本的となつてゐたことは曾て一度だにない。既に彼に於ては、文化の範圍、價値一般の全ての範圍に於て、對立の融合に對する傾向が現はれてゐる。ヘーゲルの理性は如何なる場合も、それに課題として對立する、全く到達し得ぬ目的の無限の追求をその特徴とすることはない。理性は眞に理性的たるためにはむしろ完全なる究極に到らねばならぬ。それ自身纏つた藝術品はその特例に過ぎぬ。その限りヘーゲルを藝術主義のものとなしてはならぬ。更に一般的に原理を把捉せねばならぬ。

ヘーゲルの青年期に於て彼に獨特な融合傾向は先づ最も強く宗教的價値の世界に表はれ、又こゝに常にその最後の根據を持つこととなつた。ヘーゲルの全思想を通じて現はれてゐる、カントの道德至上觀に對する反對はこの點から最よく理解せられる。既に早くからヘーゲルは基督教の內に義務に對して愛を置いた。彼には人間が情意の世界に見出す宗教的滿足の方が常に充たされざる斷言的命令の當爲よりも以上ものを意味してゐる。當爲の內には彼は彼が考へたやう

な理性を見出さなかつた。これが彼が全ての觀念論的二元論を不完全なるものとして排斥し、之に別つて立てたる、その「一元論」の眞の中心點である。

この、一の完全なる終結に來る生活の價値に立脚することに、かの、現實的生活の非現實的理想との間の隔隙を更に考へやうとせぬ、觀念論の根元もあるのである。ひとり美的價値の世界のみならず、又情意的宗教的價値の世界に於ても、事實現實的なるものは理性的、理性的なるものは現實的とならねばならぬ。こゝに發展は完結してそれ自身纏つた圓となる。從つて專らこの絶對のみ見るものは、理性に單に要求する（ゾルレン）だけといふほどの無力ではないと言ふであらう。されば理性の本質は完全終結（フオルエンドウンク）として現はれる。全ての當爲はかゝる理性には遙に隔つたもの、むしろ非理性的なるものの内に下るものである。

融合と國家學

然し、彼が理性と生活との融合の見地から、國家學をもその考察の圏内に入れむとするときは、以上の如き立場の觀念論は如何なる姿を取らねばならぬか。

國家は如何なる場合に於ても歴史的生活に結はれてをり、始め終りも知られぬ時の内を過ぎ行くものである。完全終結は無涯限なる時間の内にある。從つて歴史的國家に於ては不可能である。國家論者はたゞ、國家生活に於て現在までに實現せられざりしものを齎すべき未來を待つより他ない。國家が決して完成せず又終結せぬといふ事は、國家學の本質に屬することである。

もしこの點に更に注意を向けるならば、何故、纏つた圓の形象に倣ふ哲學が、歴史的生活一般の無限の全態（トタリテート）の問題の如

き國家生活の問題に臨む場合、直ちに打克ち難き困難に陥らねばならぬか、といふことは論を俟たずして明らかであらう。國は形象としてはそれ自身で完結した部分にのみ適合する。現實の國家は、それに當る形象を求むるならば、必然に、完結を知らぬ直線の姿を取るものであつて、ヘーゲルの意味に於ける「惡しき」無限性の形を有つ。それで現在まで單に非理性的のものが何故國家に存在してはならぬのであるのか、從つて如何にして國家に於て現實と理性とが完全に合一すると主張する事が出來るのかは理解し難い。この場合發達の線は圓とはならぬ。國家はその無限性からは決して逃れられぬ。人は國家的價値の範圍に於て生活と理想との隔隙を征服せむとすればするほど、哲學的原理と原理を適用する歷史的事實との間に隔隙が益々大となり、原理はその材料の取扱には適合し得なくならねばならぬ。

この事は根本的なる重要さを有し、そのために、かゝる種類の試を含むヘーゲルの國家說が組織的の方面にも教へるところ多きものとなるのである。かくの如く彼の思想は國家論的の方面に於て興味ある姿を取り、又かくの如く重要なる問題を彼はこゝに明るみに出したが、又かくの如く必然的に彼の國家學は次第次第に調和し難き分裂せる性質を取り、しかも彼がこゝにも融合傾向を貫徹せむとすればするほど、益々確實にその性質に陷るに到つたのである。

これは種々な考となつて現れ、今日もなほ多く云々されるヘーゲルの同時代者に對する彼の法理哲學の反響も之から說明せられる。

ヘーゲルが理想現實を融合する彼の一元論を國家論にも徹底せむと試みた場合、如何にも彼は、今日迄發展したあらゆる國家的生活の理性的なる事を支持し、從つて國家に於ては一時的結果の尺度より他には尺度を知らぬかの觀を呈する。かゝる關係で彼の現實なるものゝ合理性の說は、必然に現代の窮乏を越へて更によき未來に向つて努力する者の猛烈なる反對を惹起した。彼等にはヘーゲルは政治的反動のつまらぬ奉仕者と思はれた。

ヘーゲルの思想が一般の論爭に引込まれた事は恐らく全く彼にも罪なしとは言へぬであらうけれども、右の如きは確に彼に對して重大なる過を犯したものである。瑣末な動因は確實に彼を離れてをつた。彼はこゝにも純なる哲學者として彼の思想の究極の原理を表明しやうとしただけである。しかも之が爲に彼の觀念論の方法によつては到底征服し難き實際の困難に衝突したことも確かである。この事は、學としての全ての國家學の論理的構成にとつて意味を有する限り、吾々の明白に意識すべき事柄である。

現實に於ける二元論

先づ第一に容易に確證されることは、ヘーゲルは一度も形の上では國家論を、國家生活の理性と現實とが相互融合するといふ處まで導いてゐぬ事である。

彼が國家のあらゆる事實に於て何か理性的なるものを見出すとは全く考へ得なかつた事は、彼自身明白に説明してゐる。彼は現在の現實的なる國家を、フイヒテの如く、「現實的」とは解しておらぬ。彼のエンチクロペディーの第二版に於て彼はその法理哲學の序論に言及して、やゝ尊大な調子で、人は一般に、存在とは一部は現象に過ぎず唯一部が現實であることを知つてゐる程の教養はある者として考ふべき事を述べてゐる。かくしてヘーゲルにとつては二種の異つた「存在(ダーザイン)」がある。日常の生活に於て人は全くの思ひ附きを、過誤、惡、この種のもの、及びあらゆる萎れた果敢なき存在を取り止めもなく現實と稱ぶ、と彼は明かに説いてゐる。かゝる立場の現實一元論はヘーゲルの與せぬところである。偶然なるものを理性的と見ることは彼にとつては意味をなさぬ。偶然なるものは現實的ではなく一個の存在を意味する。ヘーゲルの言葉によれば、それはそれが眞實あるほどのものになり得ぬ一の可能態の價値(!)より大なる價値を

有たぬものである。ヘーゲルは、彼がその「論理學」に於て、現實を、なほ存在を有つ偶然なるものより分つのみならず、更に存在、存立及びその他の規定から嚴密に區別してゐる事を注意してゐる、

全てこれらの事は實際避け難いことであつたが、然しこれがため同時に國家學の世界に二元論を導入することゝなつた。而してこれを征服せむとして、存在から現實なる名を剝奪しても、それに可能體以上の「價値」を認めぬとしても、毫も效果は現れぬ。「存在」する國家に於てかゝる「可能」なるものは立派に現實的なる現動的なるものとして現れる。國家學者は却つて之に、單に可能なるものとは思へぬ、又その現實性を見逃し得ない立派な實在に對するものとして、向はねばならぬ。

國家學の問題に就てはなほ二三言ふことが出來る。ヘーゲルが、既に常識にとつても偶然的存在は現實的といふ意味深き名前には當らぬ、と言つてゐるのは却つて、彼にとつては現實的なるものは有價値的なるものゝ概念に合し、單に現實的なる、即ち無價値的なるものゝ名前には當らぬ、といふ事を明瞭に言表してゐるものである。價値あるものに就てのみ吾々はそれが「意味深き名」に當ると言へるのであり、單に現實的なるものに就てはかくは言へぬのである。斯の如くしてこゝに現實と存在との二元論が成立するのみならず、之は同時にヘーゲルの場合には、吾々が價値と現實との二元論として擧げたものを意味してゐるのである。ヘーゲルにとつては價値あるもののみが理性的現實的なるものであり、價値を離れしものとしての吾々の意味に於ける單なる現實的なるものは偶然的或は可能的と稱ばれるのである。—

以上ヘーゲルの用語は錯雜してゐるにも拘らず、彼の哲學の價値哲學的根據は判然と現れてゐる。しかも之と共に又再び、ヘーゲルにとつて致命的なる隔除が、事實上存在するものと、然らざるも實現せらるべき理想との間に與へられる。**從つて融合の態度は國家學に於ては根本的に失敗に歸するのである。**

理性の國家學

これに事柄の片面は明かになつた。而して他の片面の解明はそれより直接に生ずる。生活と理想との二元論が確保せられ、その上理想が理論的に認識し得るものとなされるならば、吾々は直ちにまた觀念論的理性哲學の根據の上に國家學的計畫樹立の可能なることを維持する。理性的國家學者は理性的現實的なるものを擁護し、單に偶然的現實的に存在するものを排斥すべきである。しかも彼にとつては尙一の當爲が國家生活に對する理性なるもの丶內に存するのである。ヘーゲルも結局は之を爭ふことは出來なかつた。法理哲學の序に彼は自ら現實的なるものを表面に現れてゐる形貌や偶然性より鋭く區別してゐる。而してこゝに彼がなさむとする課題は、束の間の、過ぎ行くものの假象の內に本體を識認することに存すると彼はなしてゐる。かくして詰らぬ價値なき國家の外面的存在と、價値性を有し從つて存在すべき眞に現實的なるものとの間の隔隙が、ヘーゲルの國家論に於ても完全に支持せられてゐる。されば人が國家學に於て當爲に就て語る理性的計畫の成立を以て、觀念論とは調和し難きものとなし、之を拒斥せむとするならば、彼は決してヘーゲルを味方とすることは出來ぬのである。

この點より又吾々は全ての觀念論的國家學の本質に屬するものを知る事が出來る。確かにフィヒテが國家學に對して取つた具體的態度とヘーゲルのそれとは非常に異つてゐた。一は自ら國家改革者を以て任じ、他はひとり眞理を認識せむと欲したに過ぎぬ。しかしそれにも拘らず兩思想家は觀念論者として互に共通なるものを有してゐる。即ち彼等の國家學說を根柢として一の國家理想が成立し、この理想に由つて與へられたる一時的の國家生活の歷史的現象は完全或は不完全として評價さるべきである、といふ思想がそれである。ヘーゲルもフィヒテと等しく國家における理性を國家的

價値の實現として認識せむと欲した限り、彼の國家論の論理的構造は「商業的鎖國」のそれと本質的に相異するものではあり得ない。何人の否定すべくも思はれぬ、區別は、むしろ兩思想家の國家に對する具體的なる態度にあり、彼等の國家學說の根本概念には現れてをらぬのである。

その上、國家的計畫及びそれに結合した當爲の成立を、全て飽くまで徹底的に拒避することはヘーゲル自身にも不可能であつた。個人に由來せず理性なるものゝ內に課せらるゝ要求に對しては、彼は結局何事をも抗議し得ざるのみならず、却つてかゝる要求を力說し、從つて當爲に就て語らねばならなかつた。現に法理哲學の序に於て彼は事實存在する一の非理性的國家學に對して熱烈に反對してゐる。かくして彼は事實あるものとあるべきものとの對立を瞭々に、たとへ言葉によらずとも事實によつて、承認してゐるのである。

加ふるに「當爲」といふ言葉もヘーゲルに於て無いわけではない。勿論フィヒテの場合とは異つた所に非常に特徴のある形で現れてはゐるが。彼は言つてゐる、彼の國家哲學が與へんとする教は、國家が如何にあるべきかを國家に教へる迄には行かれない。むしろ倫理的宇宙としての國家が如何に認識さるべきかを教ふるものである。之に續いて次の言葉がある。在るものを把握することは哲學の仕事である。何となれば在るものは理性であるから。

この場合、國家學は純理論的に解釋せられ、國家學的計畫の成立は却けられてゐる。然し理性が價値概念である以上、その認識より、如何にして理性的國家は形造らるべきかといふ事が出ねばならぬ。それに關聯して以下の事が言はれる。行動する人が、理性的なるものを考察し、それが如何にその現實性の內に同時の外的存在をなるかと見る場合、彼は理性的現實的なるものを、無限に樣々なる形相、現象、姿態を取る外的存在に對立せしむるより他はなく、かくして直ちに眞に價値あるものとしての理性的なるものゝ內に、現在の國家生活の理性的なる、或は非理性的なることを基

る尺度を見出すことが出來る。

かくの如く吾々はヘーゲル自身の言葉を以て、彼の哲學思想の必然なる結果として國家論上の命令（インペラティヴ）の成立を基礎づけることが出來る。かくすれば、外的存在に未だ實現せられずそれに對して要求されるもの、或は課題として未來に掲げらるべき國家理想の成立も自明のことに屬し、もはや問題とするに足らぬのである。

こゝに組織的にヘーゲルの國家學より學ぶべき點、殊に一般的性質によつてフィヒテの國家學と比較するとき、數へらるべきものの全てを確かめた。なほ一度之を約說して見やう。

彼等の國家的理想の內容規定に於ては兩哲學者は甚だ考を異にし、大體の對國家的の態度も互に根本的に相異する。フィヒテは反抗する實在に對する戰士である。ヘーゲルは現實それ自身の內に理性を信じ、思想家として如何に理性的なるものが外的存在に現はれるかを眺めるに止らうとした。この對立は確かに存續する。又以下の事も否定し得ない。即ちフィヒテは非常に偏つた考を持ち、彼の當爲の哲學を以てしては數多くの生命の問題を一般的に正しく見ることが出來なかつた。かゝるものに對してヘーゲルは最も深い理解を有した。然しヘーゲルの思想も、彼の美的情意的宗教的價値に基く融合的態度に關しては又偏れるもので、その爲彼は國家的生活の問題に向ふ場合、打克ち難き困難に衝突せねばならなかつた。これ等の事の內には哲學的原理よりも彼等の個性がより强く現はれてゐる。一に於ては無限な組織態が、他に於ては熄むことなき努力が求められたのである。

全體の無終結なるものを部分の完全終結性と結合する綜合はヘーゲルも發見しなかつた。其爲彼は理想と現實生活との對立を拒外する彼の究極の哲學原理を貫徹せぬ場合のみ、國家生活の問題に對して正當なるを得た。謂はゞ不本意乍らも彼の國家學は、論理的構造上フィヒテのそれと本質的には異らぬ姿を取つたのである。事態がそれを要求したのである。

かくの如くして組織的にはフィヒテが國家學者として正當なる者となる。觀念論の國家論は常に彼の「商業的鎖國」の有する論理的構造を取るであらう。然らざればそれは一般に觀念論的國家論ではないであらう。最初に哲學が國家の價値を確立し、次に時代史が國家の現狀を指示し、最後に國家學が國家に於て生起すべきものを語る。觀念論を根柢とする國家學は決して之以外の形を取るを得ない。

勿論人は「當爲」といふ言葉を避けることも、又價値の代りに「必然性」或は「理性」などと言ふことも出來る。之等は用語上の問題である。事柄はそれによつて何ら變化しない。ヘーゲルの國家論はフィヒテのそれと等しく一の價値哲學的の根據を有し、又理性的當爲なくしては觀念論的國家學は考へることが出來ぬ。若し一個の實際政治家がヘーゲルの國家論の理論上正當なるを信じて、その根柢の上に一の國家計畫を成立せしめむとするならば、彼は理性國家の概念の内より彼の政治的行動に際して彼を指導する價値を取出さねばならぬ。未だそれが實現されぬうちは、この價値を、未來に對する要求として彼の國家的計畫の根本に存する、命令となさねばならぬ。その限りに於てヘーゲルの國家學の考察は根本に於て、吾人がフィヒテの「商業的鎖國」に關して得た何ものをも變更し得る底のものでない。觀念論的哲學を基礎として立つ哲學的國家學の論理的構造なるものは、フィヒテの書物に於て、立派に明白に、その超歷史的なる内容に適はしき表現を得てゐるのである。

素より、以上の事から學としての國家學に就て結論せらるゝ事柄は、ひとりフィヒテ、ヘーゲルの意味に於て觀念論者として思索する者にとつてのみ妥當する。かゝる種類の觀念論が學として可能なるか否かは又全然疑問である。吾人はたゞ、若しも學としての觀念論的國家學なるものが成立するならば、それは必然にフィヒテの「商業的鎖國」の基礎たる形相を採らねばならぬ事を確證せむと欲したるものに他ならぬ。

日本現下の經濟的危機と其の轉換策

我國經濟的危機の根因と其轉換策

高橋龜吉

一　我國經濟的危機の根因の一

いま日本の經濟は、年々その生產する物資以上のものを消費してゐる。さうした消費が出來得るわけは、一方に於ては過去の富の蓄積を喰ひ減らし、一方に於ては外國から借金してゐるからである。この事實は、我が外國貿易が大正八年以來左表の如く年々巨額の輸入超過を來たし、その累計實に二十二億四千五百余萬圓に達せる一事によつて端的に最もよく證明し得る。

日本外國貿易輸入超過表

	輸入 千圓	輸出 千圓	輸入超過 千圓
大正八年	二、一七三、四六〇	二、〇九八、八七二	七四、五八七
九年	二、三三六、一七五	一、九四八、三九五	三八七、七八〇
十年	一、六一四、一五五	一、二五二、八三八	三六一、三一七
十一年	一、八九〇、三〇八	一、六三七、四五二	二五二、八五六
十二年	一、九八七、〇六三	一、四四七、七四九	五三九、三一四
十三年(十月迄)	二、〇七一、三一七	一、四四二、〇〇〇	六二九、三一七
合計	一二、〇七二、四七八	九、八二七、三〇六	二、二四五、一七一

しかもこれ等の輸入超過――それは過去の蓄積を喰減らしてか又は借金することによつてのみ始めて出來ることだ。――の大部分が、結局殆んど皆不生產的のものであつたことは、その後我が生產力が一向に增加しないことによつて最も雄辯に語り得る。蓋し、若し右の輸入超過が、眞に我が生產設備のために

費されたものであるならば、その設備の完成と共に、全國としての生産力が増加しなくてはならないわけであるからだ。斯の如く我が經濟の不生産的消費が、最近年、その年々生産する所以上に昇つた當然の結果として、一方に於ては外國への借金は益々増加しつゝあるにも拘らず、他方我國に存在する富は却つて愈々減少するに至り、このまゝいまの經濟狀態を續ける限り今や日本は經濟的に破産する外行く途はない狀勢にある。

我國が斯くの如き所謂經濟的危機に直面するに至つた第一の主因は思ふに三つある(一)は國民の生活が現在の國力以上に奢侈になつたこと、(二)は折角歐洲戰爭中蓄積せられた資本が無知、無責任なる泡沫事業家のために湯水の如く濫費せられ、折角數百萬圓、數千萬圓を費やして設備せられた工場其他の多くが今や路傍の石コロと殆んど異らざるに至つたこと、(三)は昨年(大正十二年)の大震災に基く富の大破壞である。これ等三つの原因は、各々その形式と意味とに於てこそ異なるが、しかし、富の破壞と云ふ點に於ては何れも一つである。而して此際特に高唱する必要ある點は、今日の我が經濟的危機の第一根本原因は、世人の多くが漫然と考ふるが如く右三つの中の(三)の震災による打撃ではなくして、却つて世の注意から遁がれ勝ちである(一)の奢侈と(二)の富の濫費とであると云ふことである。震災の打撃は唯だこの(一)と(二)の根本原因のために傾きつゝあつた我が經濟的危機を、或る程度迄激成し、促進さしたに過ぎない。蓋し、若し(一)と(二)との根本原因さへ此際無かつたならば、(三)の震災による打撃位ゐ、容易に凌駕し得ることが出來るからだ。更に之を喩へば震災は一の大負傷である。若し此際身體さへ丈夫であつたならば、この負傷位ひ長くて一ケ年もすれば全快する。しかし他に根本的病氣があつて已にその健康が刻々危機に近づきつゝあつた場合に於ける負傷でそれがあつたとすれば、その負傷のために彼の健康の危機は急に促進せられるが如きである。この場合彼の健康を危殆ならしめたものは一見宛もかの負傷の如くであるけれども、眞の原因は云ふ迄もなく彼の健康衰弱の根因をなす病氣である。此際若し良醫あつて、彼の健康の危機を轉換し得るとせば、そは負傷の手當に全力を注ぐことによつてではなくして、彼の健康を絶へず衰弱せしめつゝある病氣を根治することによつて始めて期待し得ることである。

二　我國經濟的危機の根因の二

我が國の經濟的危機が單に以上述べたるが如き根因のみに止るならば尙ほ仕末は比較的に容易である。蓋し、其の轉換策は消

極的に富の消費乃至濫費を制限するだけで足りるからである。

然るに、いま我が經濟的危機の根底は更に積極的に、生産能力の行詰りに基因してゐる。玆に生産能力の行詰とは主として（一）我が資源の缺乏と（二）對外競爭のため從來の我が産業が衰亡しつゝあることを意味する。これ等の二つの根因のために、之れ迄例へば五千萬の人口に十の程度の生活を支へることの出來た我が經濟力は、今や五千萬の人口を支へんとせば八の程度の生活しか支へる力なく、若し又從來の如く十の生活程度を支へんとすれば四千萬の人口しか支へることが出來なくなつた。之を他の言葉で云へば、いまや我が經濟はその生産能力の行詰のために、例へばその生活程度を從來より二割方低下するか、乃至はその人口の二割、即ち約一千萬人を海外に移住せしむるか又は失業者にするかする外に致方なき狀態に陷つたのである。然るに、我が經濟力は斯く減退したるにもかゝはらず、我が人口はそう急に減少せしめることは無論出來ず、しかも生活程度は全國的に云ば仲々容易に低下するものでない。一度習性になつた生活程度は、過去の蓄積のある限り之を喰潰し、借金の出來る限り借り盡して、極力從來の生活程度を維持せんとするが人情であるからだ。況んや、我が政府も我が資本家も民衆の多くも、我が經濟のこの根本的行詰を自覺せずして、現在の難局を一時的性質の不景氣に基因する一現象と輕く考へてゐる實狀に於てをやである。更に況んや、利益——その本來の意味は消費よりも生産の多かつた餘剩であるが——と云ふ假裝の下に、過去の蓄積と借金とが、安々と喰潰される現在の經濟上の仕組の下に於てをや（尙ほこの點については後に詳述する）斯くの如くにして、我が國はいま、經濟的破滅の途を突進しつゝあるのだ。

（一）の我が資源の欠乏のため我が生産力が行詰つたとは、我が天然資源が根本的に欠乏したことを意味するものではなく、單に資本家の立場から、今直ちに營利的に引合ふ資源がなくなつた事實を指すものである。元來維新以來これ迄の我が經濟の發達は、周知の如く專ら歐米に於て發達せる産業を移殖し、歐米に於て發達せる科學及び技術を模倣することによつて贏ち得られたものである。所で、歐米に於て發達せる科學、技術、産業は何れも歐米の天然資源を基礎にして研究せられ、發達したものである。從つて、それは、歐米の資源から云へば、而して歐米の資源と等しき國から云へば極めて都合がよいが、歐米の天然資源と趣からず事情を異にする我國に於ては、何かと不利の點が多い。之を具體的に云へば、これ等の科學、技術、産業を移殖模倣して、有利に利用し得る資源は尠く、假令多少あつたとしても間もなく涸渇するに至り易いものである。なる程、

その當初に於てこそ、これ等の科學、技術、産業を移植模倣することに由つて、我が經濟の發達する餘地は尠からずあつた。しかし、それが一巡終ると、そこに行詰は來らざるを得ない。例へば、最早單に鐵道を布き汽船を浮べることによつて日本の資源が營利的に開發せられる余地は殆んどなくなつた。單に歐米の技術を模倣する事によつて開發せられ得る炭山も銅山も其他の鑛山も石油坑もいまや已に盡きた。歐米の機械を單に移殖することによつて發達し得る産業も已に資本家の採算に引合ふ限り一巡終つて了つた。之を喩へば我が經濟の維新以來最近迄の發達は、宛も一の未開地に大規模の開墾工事が施された如きである。その工事の續く限り、年々仕事は殖え、繁榮は增し、人口は激增する。しかし一度びその未開地が開墾し盡されると、最早やこれ迄の如き仕事はなく、繁榮は維持せられず、人口は增加の餘地がなくなる。否、從來の人口すら已に過剩になつて來るのである。この時に於て、尙ほ依然これ迄の如き繁榮を續け、進んではこれ迄以上の繁榮を齎らするためには、更に新なる方法によつて産業の開發を期せねばならないこと云ふ迄もない。その新たる産業開發の方法の見出せない限り、その新開地は人口の自然增加と、從來の天然資源の漸次涸渇することによつて、茲に經濟的に漸減せざるを得ぬ。事實史上にその例は少くなく、未開地の豐富の時代に於ては、斯る場合には或は全人口こぞつて、或はその一部分が、更に他の豐饒の未開地を逐つて大擧移住したものである。茲に云ふ資源の欠乏に基く我が現在の經濟的危機は、宛も斯の如き社會的行詰狀態に髣髴してゐる。

更に已述（二）の對外競爭のため我が從來の産業が衰亡しつゝあるとは、專ら支那其他の後進國に於ける産業發達のために、我がこれ迄の産業が競爭に負けつゝある事實を指すものである。嚢にも云へるが如く、元來、我がこれ迄の産業の發達は、專ら、歐米のそれの模倣移植である。しかも、直ちに誰れとも模倣移植し得るものについてである。勢ひ、それは熟練を余り要せず、勞力さへ豐富に且つ廉價であれば容易に發達し得るものに主として限られざるを得ない。之れ從來の我が大部分の産業が繁榮せるの發達階梯であつて、所謂粗工業と稱せられるものである。

然るに、一つには歐米戰中戰後に於ける我が全體としての生活程度の向上有産階級の奢侈、（その反面の現はれは賃金及生産費の騰貴）のため、一つには當時の物價暴騰のため、從來已に發達の途上にあつた支那産業は、日本に比し極めて低廉なる勞力を武器として、最近年急速なる發達をなすに至り、茲に、我が粗工業時代の産業は、一大脅威に直面したのである。

これ迄、支那其他に少からず輸出しつゝあつた多くの我が生產品が、或は輸出の大減少に襲はれ、或は進んで內地市場に於てすら廉價なる輸入品のために敗北するに至つた事實が即ちそれである。この結果は云ふ迄もなく、この種の我が產業の衰亡にして、更に精工業に發達せざる限り、それだけ我が勞力は過剩となり、生產は減退することを意味する。しかも、後進產業の競爭し得ざる一段進步し、熟練を要する精工業に發達するためには、先進諸國の產業と更に不利な商戰を鬪はねばならない。之れ、現在の我が經濟的危機の又の根因である。

三　幕末の經濟的危機の回顧

以上の如く、我が經濟的危機の根因は、一方に於ては富の消費及濫費が甚しいことにあり、他方に於ては生產能力が行詰乃至は減退せることにある。從ひ、この經濟的危機の轉換策は、結局一方に於ては富の消費を節し濫費を戒め、他方に於ては生產を增大する方法を講ずる外にない。併し乍ら、富の消費を節し濫費を戒めると云ふことも、乃至は生產を增大すると云ふことも、現に我が政府の音頭取りで切りに唆かされてゐるが如き、單に國民の自重心や愼重心に訴へる勤儉論や國產奬勵で簡單に達成し得るものでない。更に又、民間の資本家が盛んに運動してゐる如く保護關稅や其の他の方法による利益の補助によつて容易に一國の生產が增大し得るものでない。消費に奢侈があり、富の使用に濫費があり、生產が行詰るに至つたと云ふには、それ／＼之を齎らすに至つた深い根本原因があるのであるから、その根本原因を除かぬ限り、皮相な彌縫策を如何に講じた所で結局は無意味である。

いまその理由を詳述する前に、私は先づ之を我が幕末の歷史に由つて物語らしむることが、此際最も興味ある方法であると思ふ。蓋し德川末期に於ける經濟的危機は宛も今日のそれによく似てゐると思ふからである。當時、幕府及び諸藩の財政は極度に疲弊し、旗本家人諸藩の武家亦極度の窮乏に陷つた。此際幕府は通貨の改鑄による品質低下（今日云ふ所の通貨の膨張）によつてその不足を補ひ得たるも、諸藩旗本等はその便なく、或は町人の富豪から借財し、或は藩士の知行を減し（例へば諸藩何れも家臣に其の本高の封祿を給するものなかりしといふ）或は百姓を苛斂誅求した。殊に諸藩旗本等の借財の利子愈々嵩むと共に、領地の百姓に對する誅求は苛酷を極め、藩士の窮乏は益々甚しくなるに至つたのである。例へば當時の武士及び百姓の疲弊について「幕末史」は左の如く述べてゐる。「堂々たる武士にして一俵一粒をも置かず、自ら薪水の勞を取るものあり、或

は玉垣の小工を内職として僅少の賃錢に家計を補ふものあり、屋漏り軒傾むけども修覆の料無ければ座するに席なく草履を穿ちて室内を行くあり、甚しきは已が屋敷にも住み兼ねて貧窮の庶民と共に窮巷に雜居し、其風采武士とは見へず、只時に帶刀して隣人をして呆然たらしむる者ありしとも云ふ。されば文武の修業に思を潜むる者の極めて稀なるは言を須たず、勤役なき者は何のなす所もなく世祿を食むのみにて、醉生夢死するかさなくば博奕等によりて奇利を得んとし、武家屋敷は安全なる賭場たるの觀をなせり、」云々。又百姓の凋衰について同じ書は曰ふ「彼等は豐年には米價下落し且つ貢道急なれば米粟盡きて債は償ふ能はざるなり、凶年の慘は殆んど骨を削て食とする許なり。是に於て百姓の耕作に望を絶つて他に生業を求めんとし、故里を逃亡して三都等へ集り來るもの頗る多し。(天明五年より六年の一年間に農民百四十萬を減ぜりと云ふ)この結果他方の耕田荒廢して都會の遊民增加せり、乃ち幕府は屢々令を下して百姓の奉公の爲と稱して濫りに都會に出するを禁じ、名主等に命じて村内の田畠の耕作に欠くべからざる人數を取調べしめて若し餘ある時にのみ百姓の他國に赴くを許せり。此の如き窮困に伴ふて、夫の洗子、墮胎の惡俗を助長したり、當時天下を通じて各地方概ねこの風あり……。領主の苛政の外に農民を苦しめしは浪人の橫行なり、彼等浪人は罪ありて若は其主の困窮なる爲め世祿に離れし徒(即ち今日の失業者)にして容易に已に適する生業の得難きまゝ、諸方の邑里を横行して無力の百姓に對し金錢米穀を强求し之に應ぜざれば危害を加へ、又黨類を結びて群行し地頭領主も之を制する能はざるあり、良民の之に苦しみし狀態察するに足る。百姓の結黨して亂を起し、若くは居村を逃散して領主を苦しめ、或は江戸に集りて其の屋敷の門前に强訴する類は天明以後屢々見る所にして、其の之に至りし所以は皆領主代官の虐政に堪へず、多數の力に訴へて其苦惱を免かれんとしたるなり。幕府諸藩共に之を處分する事嚴酷を極め、峻刑酷罰を用ゐて假借せず、其主某從犯を併せて嚴罰するを常とせり」

斯くの如く、時の爲政者は一方百姓の要求を强壓すると共に、他方この經濟危機の根因は當時の奢侈にありと見て、峻嚴なる節儉の勵行に努めた。例へば天明七年(西暦一七八六明治以前約八十年)松平定信老中となるや、先づ幕府の財政緊縮を斷行すると共に武家庶民に對し極めて苛酷なる節儉令を出した。いまその極端なるものを例示するに、(一)遍く諸國に令して三年間衣裳萬端の新調を禁止し(二)諸侯の留守居職のものなど名を懇親に假り屢々會飲して儉奢を極め風俗を壞亂せしが故に嚴令を

發して諸士の集會を禁止し（三）女髪結を禁じて婦女子自ら結髪せしめしが如きである。以てその其他の節儉令が如何に峻嚴のものであつたかを伺ひ得られるであらう。しかも、定信退職すると共に世は再び奢侈傲奢の風盛になり、賄賂公行し賣官（所謂御家人株）流行するに至り、所謂文化文政の驕奢の時代を現出するに至つた。次で天保八年（西暦一八三七年、明治以前約三十年）水野忠邦老中となるや、「劇場所在の地たる堺町、葺屋町及び木挽町は繁庶の街にして風俗を紊すを以て淺草に移して區域を別にし、俳優の平民と交通するを禁じ、其他藝妓を禁じ、遊廓を減じ、奢靡の衣服を沒收して燒き捨る等」頗る嚴酷なる節儉令を敢行し、「旗本家人の遊惰を患ひ刀槍の競技を旺にする」（今日の所謂思想の善導國粹宣傳の如し）などの改革を再び敢行した。

今日の我が政府が現在の經濟危機の對策として、旺んに勤儉貯蓄を宣傳し、無産階級の運動に壓迫を加へ、財政整理で失業者を續出し、しかも資本家階級の利益の爲に爲替を暴落せしめて物價を暴騰せしめ（徳川幕府は良貨を改鑄して品質を低下し物價を騰貴せしめて當時の支配階級である武士階級の利益を計つた蓋し武士の收入は米であつたからだ）つゝあるのと、時は約百年を隔つるが、如何にもよくその採る政策は似てゐるではないか。併し乍ら、幕府の以上の如き諸政策は結局當時の我が經濟的危機を轉換する何等の貢献とはならなかつたとは歴史の説明する處である。それは其後明治維新に至る二三十年の期間に於ける我が經濟的困難の如何に甚しかりしかの事實を想到するだけで十分である。しかして、當時若し依然封建制度維持せられゐたらんには、我が經濟的危機は愈々增大して、當時旺んなりし歐洲諸國の殖民地獲得熱に對抗し得る經濟力は日本に無かつたに違ひない。しかもよくこの經濟力を養成し得たるわけは、全く、明治維新の革命によつて封建制度倒れ、資本主義制度採用せられて、徳川時代に於ける經濟危機の根因が全く除去せられたからである。之を更に他の言葉で繰返せば、封建時代に於ける富の濫費及奢侈の共因と、生産力の行詰原因とが、資本主義制度の採用によつて根絶せられたからである。

四　幕末の經濟的危機の根因と其除去

いま、幕末に於ける經濟的危機が、何故に當時の爲政者の採りし已述の如き對策では轉換することが出來なかつたと云ふに、それは當時の奢侈濫費及び生産行詰の根柢に手を觸れず、徒らにその枝葉のみを追ひ廻はして奔命に疲れてゐたからである。當時の奢侈濫費及生産行詰の根柢とは當時の封建制度そのもので

ある。例へば大名の疲弊せる根因は(一)參勤交代制度に伴ふ莫大の失費と(二)德川の高等政策より來れる大名轉封の制度と、(三)幕府が大名に課せし築城治水其他臨時の土木助成の公役又は將軍後閣の吉凶慶弔、歲末年始、參府賜暇等に要する獻貢及腐敗せる有司に對する賄賂と(四)奢侈等であつた。就中(一)の參勤交代制度は其の根因をなすものであつて、當時已に熊澤蕃山や荻生徂徠の如きその改革の必要を力說したが容れられなかつたものである。

なる程、德川封建制度の初期に於ては、當時の經濟力は斯る濫費多き制度をも之を支へ得る力があつた。否戰亂のために生產力の疲弊せるものを回復して、却つて生產力の增加をすら促進した跡がある。併しながら、其後封建制度の生產力(專ら米作を中心)の發展は或點以上に於て行詰り一向に增進せざるにも拘らず、當時の百姓の生產力に全ら寄生してゐる武士階級の人口は增し、生活程度は向上し、奢侈は增長して愈々百姓を誅求するに至り、從つて又農業は愈々荒廢して益々生產力は行詰に至り、玆に、當時の封建制度の下に於ける我が生產力は、その生產力の上に寄生せる武士階級を維持することが出來なくなつたのである。

しかるにも拘らず、この武士階級は上將軍及大名を始め下旗本家人武家に至る迄、奢侈極る生活をなすに至つた。しかもその奢侈は(一)貨幣の品質低下による通貨膨脹を通じての庶民の搾取と、(二)直接百姓に對する苛斂誅求とによつて愈々增長せられたものである。例へば、始め將軍綱吉先づ奢侈を極めて幕府の財政不足するや金銀貨を改鑄して品質を下げその利益によつて財政を補つた。然るにこの貨幣の品質低下は今日云ふ通貨膨脹に外ならず物價を暴騰せしめ、しかすることによつて當時の資本家たる武家に巨利を與へた。蓋し物價騰貴せば百姓より米を貢納せしめてゐる武家の收入は增大するわけであるからだ。斯くてこの暴富が更に武家全體の奢侈を賭ふこととなつたのだ。例へば「國史眼」によると、「貨幣の品質下り因て米價騰貴し、旗本家人の歲入遽に增し家計暴富なり、市中は百物流通し上下の奢靡增長せり。初め旗本家人の住する番町四谷等の宅地は樹木蓊鬱の中に茅舍を建るのみ、是に至り蒼瓦白壁相望み往々倉庫を造る」云々とある。加ふるに參勤交代制は遊惰奢侈を增長する環境をなしたものである。例へば同じ書によると、「江戶に於ける諸藩の人口益繁く、常住を定府と曰ひ、交代を勤番と曰ふ。多くは常職なく日に出て徘徊遊觀し市街到處轂擊肩摩す、……花街(吉原、深川、根津、音羽、品川、千住、四谷、板橋等)酒樓各處に充ち、辻駕籠を飛び絃歌地に湧

く。留守居の集會、官吏の招飲奢侈を極め一席の費數百兩を擲つ。吉宗以來旗本家人に儉約を勸れども奢靡は日に隨つて長じ、武家法度に貨財を以て養子女聚するを禁ずるに至る。官衙の昏濁も推知すべし」とある。斯樣にして財不足せば更に貨幣を改鑄しては品質を下げて庶民を搾取し以て武家の奢侈の資金を給し、それにても足らざる處は直接百姓を苛斂誅求する。斯樣にして農業の生產力は愈々退化せざるを得なかつた。

斯る狀態の下に於て、松平定信や水野忠邦等が、表面より如何に峻嚴に節儉を強制した所で、畢竟、臭者をそのまゝに放置して獨り蠅を追ふて弥命に疲れるの愚に外ならない。强壓の手少しでも弛めば忽ちにして奢侈の再び天下を風靡するに至るは必然である。此際奢侈を根絕し、斯くすることによつて農民の誅求を緩和し、產業開發の經濟的餘裕を所期する方法は、一方に於ては將軍大名其他の武士階級の遊食傲奢の資を絕つとであり、他方に於ては小人財を抱いて閑居する參勤交代制度及び無用の武士を陶汰して生業に就かしむる以外にない。更に進んで百姓の苛斂誅求を止めて一國の富を將來の生產增加のために有用に使用し、以てその經濟的發達を所期するためには、獨り富の濫費多き參勤交代制度を廢止する必要あるのみならず、進んで、何等の生產活動を營まずして遊食傲奢な生活をなし、その揮擲のために一國の生產活動に從事せる者の疲弊極度に達せる三百諸侯と約三十萬戶の武士階級とを廢絕し、以て剩し得たる財と勞力とを生產的に働かしむる必要がある。加ふるに當時行詰れる經濟を打開するためには、當時世襲的に閉鎖せられてゐた人物の利用の途を開放して、人才をして十分に其能力を發揮せしむることが肝要である。明治維新の革命は、實に、これ等の殆んど全部を一時に改革したものである。當時約三千萬人內外に過ぎなかつた人口すら、之を支ふる力のなかつた我經濟が、明治維新の革命と共に急激に增進して、今やその二倍に垂んとする人口を哺み、且つ當時に比し少からぬ高度の生活程度と富力を有するに至つた根因は、實に、維新革命のこの一大改革にあつたのだ。然し、こうした改革以外に當時の我が經濟的危機を轉換し得る方法はなかつたのだ。

五　現在の經濟的危機轉換策

私は可りに永く徳川末期の經濟的危機と其の轉換策について語つた。しかし聰明なる讀者は之によつて、現在の我經濟的危機を根本的に轉換し得る唯一の方策が如何なるものであるかを最もよく推知することが出來るであらう。われ等はいま、幕末の大名や武士階級の代りに、今日の富豪や資本家や株主や地主

やを置き換へさへすれば、宛も幕末の經濟的危機と事情を同ふする現在のそれを見出し、其の轉換策を學び得るのだ。

本文の初頭に闡說せし如く、此際、我が經濟的危機を轉換する方法は、國の富と勞力とを將來の生產增加のために有効に利用する方法を講ぜねばならない。それには先づ、今日の富と勞力の濫費及奢侈的消費を節して、將來の生產增加のために使用し得る少からぬ富と勞力とを捻出する必要がある。而して、進んでは斯くして捻出された富と勞力とを最も有効に將來の生產のために利用する方法を講ぜねばならない。しかし乍ら、その富と勞力との濫費と奢侈とを節するには、いま如何にしてそれが濫費され奢侈となつてゐるかを先づ研究して、その根幹を枯らさなくては駄目である。これ已に幕末の歷史の敎ふる所であるからだ。

先づ奢侈について見るに、現に月給や賃銀のみで暮してゐる所謂勤勞者にはいま奢侈は愚か、日々の生活必需品すら十分には買へない有樣だ。多少贅澤の生活の出來る者は何れも皆「財產所得」のある者のみだ。この財產所得者は昨今の如く爲替が暴落して物價が暴騰すれば、德川時代の武士の如く暴富を積むことが出來る。家賃や地代が騰貴すれば、之れ迄肥桶をかついで働いてゐた百姓も絹物ぐるみで遊んで贅澤が出來る。銀行や會社は損をしさうになると政府に運動して保護關稅や其他の補助や乃至は公債の値上げや利子の引下反對をやつて利益を擧げる（その費用は國民が負擔すること無論だ）斯樣にして財產さへ持つてゐれば、遊んでゐて樂に贅澤の生活が出來る。從つて之と云ふ常職のない乃至は名目ばかりの閑職にある多くの有產階級が「日に夜に出て徘徊遊観し市街到處轂擊（ではない自働車）肩摩す。花街酒樓カッフェー各所に充ち、辻駕（の代りにタクシー）空を飛び絃歌地に湧く、彼等の集會招飲豪侈を極め一席の費數百兩（數千圓數萬圓）を擲つ」に至つたのである。

この際、政府が如何に庶民（無產階級）に節儉を宣傳した所で、「收入に比例する生活」を奢侈ではないと云ふ考を持つてゐる始末では、有產階級の奢侈——それ以外に奢侈をなすものはないが——は永久に節約せられる時はない。しかも有產階級の收入は、物價の騰貴や政府の保護や奬勵政策で增加するが、その源はそれだけ無產階級の收入を減じて——宛も幕末の百姓の生活が、大名や旗本の收入が增加すると反比例に貧困に陷つたやうに——有產階級の收入に增したに過ぎないのであるから國家から云へば一文の富の增加なくして奢侈のいよ／＼增長する資源の涵養せられることとなり、その結果國の經濟力は疲弊し借金は嵩み、生產費は騰貴し、外國との競爭に敗北するに至るのだ。しかも更に惡いことには、今日の企業の根幹をなしてゐる條

式會社制度に於ては、會社に利益なきにも拘らず、重役は株主の歡心を購はんがために、帳簿を胡塗して所謂蛸配當をなし、或は過去の蓄積を座食し或は借金を居食するが常である。しかも政府自らその特種銀行に之を公許し之を補助して他に範を垂れるの有樣である。云ふ迄もなく斯の如くにして配當せられた金は「收入」として有産階級の手に入り、事實國家としても會社としても一文の利益なきにも拘らず「奢侈」の資源となるのである。それだけ國の富は減少し、生産獎勵に必要な資金は缺乏し、國の經濟力は愈々疲弊するや云ふ迄もない。之れ宛も幕府が一方に於ては盛んに貨幣の品質を下して通貨膨脹をやり、百姓の誅求を公許し、之によつて武士階級に奢侈の資源を與へながら、他方に於て峻嚴なる節儉令を發せるの愚と何等異る所はない。

然らば此際如何にせば我が奢侈を禁止し得るかと云ふに、一言にして云へばそは奢侈の資源であり、根因である×××××××××××である。遊食驕奢し得る經濟的基礎をなくすることである。具體的に云へば、幕末に於てさうした狀態にあつた武士階級が明治維新革命に依つて根絕せられた如く、今日のさうした遊食奢侈階級を根絕する政策を採ることである。しかし、これは今直ちに出來得ることでないならば、それに至る順序として、先づ「財産收入」を出來るだけ減少して、斯くして浮き上れる資金を生産事業に振向ける方策をとるべきである。具體的に云へば、地代や配當金や社公債及利子や、家賃や其他の財産收入に極めて强度の累進的重税を課し、その租税收入を將來の生産力增大の爲めに費すことである。更に他の言葉で云へば、財の所有權を保護する代りに財の利用權を保護することである。即ち財を所有してゐると云ふだけで何の働きもしない者の利益を極度に制限して、其財を現に利用して社會のために働かしてゐるもの丶負擔を出來るだけ輕減することである。例へば今日工場一つ建てるにも土地の買收費乃至は地代が、その生産費の幾パーセントに當ると云ふが如きことを若し無からしむるとせば、それだけで我が産業の對外競爭力は少からず增大し、しかもその結果は少數の地主の贅澤が止んで、一國の富の濫費がそれだけ減少すると云ふ一擧兩得になるだけである。更に地主の取る小作米が今日の何分の一となりそれだけ小作人の收入增と一般の生活費の低下を來さんか、我が生活程度は向上してしかも賃銀を引下げて我が産業の對外競爭力は增大し農業經濟は改善せられるのである。しかもその結果は田畑を所有すると云ふだけで何の働きもせずに遊食せる少數の地主の贅澤と遊惰が止んで、一國の富の消費は節せられ、生産力は增大す

ることゝなるのみで我が農業は些の不便も損害も受けないのだ。地主は居なくても我が農業經濟の發達には少しも痛痒を感じない迄に（武士階級が廢絶せられても明治初年の我が社會は何等の痛痒を感ぜなかつた如く）地主の社會的機能は絕無に迄退化してゐるからだ。これは又、株主その他の資本投資階級について云ふも大體に同じ方策を採るべきだ。以上の方策による以外、此際、我が亡國的奢侈を根絕する方法はないことを私は玆に再び繰返したい。しかも、この奢侈の制限が出來ない限り、後述の如き我が産業振興のために必要な資金も、之を賄ふ方法がないわけである。然るに、政府はいま約三十萬圓の經費をかけて、勤儉奬勵の大宣傳をやるそうであるが、斯の如きは戰時の如き非常の場合に於て、しかも一時的目的のためにするなら兎も角、今日の場合歐米の戰時中のそれに眞似て之を行つた所で、要するに最善に於て松平定信や水野忠邦の節儉令の亞流に過ぎない。それで我が現在の亡國的奢侈が根絕し得ると考へるなら、歷史に余りに盲目に、餘りに考方が坊ちやんだ。

六　資本の濫費の取締

幕末の當局者が奢侈の禁止にのみ一生懸命になつて、當時の參勤交代制度及封建制度そのものの維持に伴ふ富の莫大なる濫費――それが當時の經濟的危機の眞の原因であつた――に少しも手を觸れなかつた如く、いまの政府も亦、今日の資本主義經濟の維持に伴ふ莫大の富の濫費には少しも手を觸れようとはしてゐない。例へば、大正九年の反動以後に於て我が財界の損失せる金額は極めて莫大であるが、いまその一指標として左表を揭げるに、その總計實に六十三億五千二百萬圓に達してゐる。

	日本興業銀行調減資解散公稱資本計	日本興業銀行調株式社債拂込計	總計
	千圓	千圓	
大正九年	二六一、一九六	一、四八九、二六九	一、七五〇、四六五
一〇年	七九二、三四四	七六七、〇〇八	一、五五九、三五二
一一年	一、二〇六、六五六	七三〇、〇八四	一、九三六、七四〇
一二年	四八九、八三一	六六六、〇二七	一、一五五、八五八
計	二、七五〇、〇二七	三、六〇二、三九八	六、三五二、四二五

（備考）一方は公稱資本であり一方は拂込である。その上減資解散の中にも合併其他の如き意味のものが尠くない。しかも大正九年以來の株式及社債の拂込は大體に反動後の損失の埋合せであり、しかもこの外に銀行其他の借金其他に由れるものが多い。大體に兩者の合計は大正九年以來の財界の損失を示す一指標と認め得られる。

恐らく我が財界全體の損失はこれ以上であらうとも以下ではよ

あるまい。この損失は、大正九年以前の好景氣時代に於て、無謀の資本家や企業家が、泡沫的事業に對し目先の營利のために投資した金であつて、それだけ我が國の富が濫費されたものに外ならない。その額は震災の損害と匹敵し乃至はそれ以上であることを看取し得るであらう。之れは要するに、今日の經濟制度が無秩序に等しきものである犠牲の一例に過ぎない。斯樣の濫費は日に到る處に行はれてゐるのだ。更に又、之を國有にして統一すれば一つにて間に合ふ場合に私營にて競爭せるため數個を必要とするが如き濫費が多い。例へば電力の送電線の如き其著例である。更に石炭其他の鑛山が私營に委せられてゐるために、無用の坑道を堀り、有用の炭及鑛脈を放棄するが如き場合が少くない。

　これ等の資本主義經濟に伴ふ莫大の濫費を根絶しない限り、我が現在の經濟的危機を轉換し得ざること、宛も封建制度の續く限り當時の經濟的危機は永久に脱し得なかつたと同一である。尤も從來に於ては斯かる濫費にも我が經濟力は耐え得ることが出來た。しかしそは宛も封建制度がその發達の途上に於ては、參勤交代制度や其他の封建制度に不可避な莫大な濫費(三百諸侯三十餘萬戸の武家の寄生生活)に耐え得たと同じわけであつて、畢竟我が資本主義經濟が未だ發達の途上にあつたからに外ならぬ。さり乍ら、已に本文の第二に於て概說せし如く又本誌大正十一年九月號の拙稿「我國資本主義の特質と其前壞」に於て他の觀點より詳述せし如く、我が資本主義の生産力は已にその峠を越して下り坂に轉入し、最早斯の如き濫費を負擔する能力なきに至つたのである。斯樣のわけであるから、徹底的に此際我が經濟的危機を脱するためには、已述の如く此等資本主義經濟制度に伴ふ莫大の濫費を根絶することの必要であること云ふ迄もない。しかし、ものには順序がある。いま一足飛びにさうした大改革を斷行することは日本の現狀から云つてまだ準備が出來てゐない。そこで、それ迄の過渡的施設として、此際尠くとも、基本産業を國有にし、金融を社會的に管理統一し、且つ今日營業の秘密として神聖視されてゐる民營事業の經濟活動の中、社會經濟の統制上必要なる材料(例へば生産、販賣、消費、在荷、荷働き、貿易、金融、雇傭及失業、物價、賃銀、利益、生産費等)に對しては之を正確に毎月乃至は毎週報告せしめ、之によつて全國的な經濟統計を作成し、以て、一國の經濟活動を科學的計畫の下に進行せしむる努力をなすべきである。そは又他方に於て他日全經濟を有機的計畫の下に活動せしむる準備ともなるものである。しかすることによつて始めて目前に於ては一方に今日景氣不景氣の去來に基いて起

る莫大の浪費を最少限に少化し得ると共に、基本產業の國有によ る統一によつて產業分立に基く多くの濫費を節約し、以て我が經濟力の發達に必要な富を捻出することが出來るのだ。之を更に他の言葉で云へば、しかすることによつて始めて、此際必要なる生產費の低下が有效の程度まで行はれ、生活費も亦緩和せられることが出來　將來の生產能力增大の施設に必要な資金が生れ、以て我が經濟發展の基礎を築くことが出來るのだ。

七　生產能力の進步發達

我が現在の經濟的危機を轉換するためには、單に以上の如く奢侈や濫費を根本的に廢滅せしむる消極策のみでは足らない。それ以上已述第二に述べたるが如き生產力の行詰乃至は退化を積極的に打開する必要がある。普通斯る仕事は、必要なる資金さへあれば、資本家が遂行して吳れるもの丶如く漫然と考へてゐる者が多い。例へば、今度の財政整理の要望にせよ、斯くして歲出が節約せらるれば、結局その資金が資本家によつて有利に使用せられると云ふ前提の下に主張せられてゐるものである。成る程我が資本主義經濟が前記第二の所說の如く、歐米の科學、技術、產業を單に模倣し移植するだけで我が經濟力の發達し得る限りはそれは事實であつた。さうした模倣移植は資金さへあれば、直ちに實行せられることで且つ資本家に利益を約束することを得るからだ。しかし、一度已述の如く我が經濟が模倣移植の產業に行詰れる曉に於ては、我が生產能力の進步發達は、我が國の天然資源に基き我が國の經濟事情に適應して、科學的に新に根本的に生產技術を發見乃至改良するか、又は新に根本的に我が產業そのものの變化改造乃至は新組合せを圖らねばならぬ。そうした根本的な改良進步は、多大の資金を費やして、しかもその効果を早くとも數年、或は十數年乃至數十年の後ちに所期する大努力をして後ち始めて完成せられる望があるものである。

然るに今日の資本家、就中今日の企業の中心たる會社資本家は、目前の利益乃至は配當のみを目的に株を賣買する輩に過ぎずして、到底斯の如き多額の資金と長年月とを要する生產能力の進步改善に當る資格を有せないものである。勢ひ彼等資本家に如何に輸入關稅で多額の保護を與へ、各種の補助によつて如何に巨額の利益を約束した所で、その資金は單に多額の配當となつて株主を肥すばかりで、生產能力の進步改良のために費やされる見込はない。現に住友久原古河三菱藤田の如き我が一流の富豪は、銅鑛業保護の名の下に銅の輸入關稅（百斤につき七圓）によつて年額約七百萬圓の保護を國民より搾取し乍ら、銅

鑛業の發達の基礎である經營及技術の進歩改善のため必要な研究費に對しては、その得たる保護金の何十分の一も支出せず、ために我が銅鑛業は一歩も發達し得ない狀態にある。況んや、其他の我が我利我利資本家に如何に巨額の資金を給し、乃至は如何に多大の保護金を與へた所で、それで、我が行詰れる經濟力の轉換せられる望のなきこと誰にも容易に看取し得るであらう。そは單に資本家の懷を肥やして、彼等に再び奢侈と遊惰との資源を供する迄である。

是に於て、此際我が生產能力を根本的に進歩發達せしむる方法は、營利によつてのみ動く資本家の他に之を求むる必要がある。それ以外に我が生產力の行詰の打開せられる方法はないのだ。而して營利の目的以外に、此際我が生產能力の進歩發達のために努力し得るものとは、社會の福祉を目的として働く國家以外にない。然り、十數年の後の成果を的に、巨額の資金を投じて、この行詰れる我が生產力の打開に努力し得るものは、今の場合國家以外にない。

果して照らば、我が政府は、一方に於ては從來資本家及地主等に與へつゝあつた直接間接の保護金を取上げると共に、他方に於ては已述第五第六の如くにして節し得たる奢侈と濫費の資金を政府の手に納め、この全部の資金を以て、專ら我が生產能力の進歩發達のために必要な施設、研究、調査等に使用すべきである。そのためには、新に大規模の研究本位、實修本位、技術養成本位の機關を設ける必要あると共に一方に於ては、現在の學校教育、行政制度に大改革を加ふる必要あり、他方に於ては從來有爲の人才にして、財產なきため（幕末には職の世襲のため人才閉鎖せられ、今は財產世襲のため人才埋れる。蓋し現在は財產さへあれば凡庸にして要職につけるからだ）社會のために働き得ざるもののために途を開き、此等の人々をして、營利のためでなく專ら社會の利益のために科學、技術、組織の新たなる進歩發達を目的とする研究、實驗、技術の養成、熟練の修得等に全力を注がしむべきである。斯くして始めて我が今日の經濟的危機は根本的に轉換し得られるのだ。之れ恰も、幕末の經濟的危機が當時から云へば全く新規な精神と技術と組織とを持つてゐた資本主義經濟の採用によつて根本的に轉換し得られたと同一である。尙ほ實際問題としては如何なる組織によつて已述の如き生產能力の進歩發達を期すべきかと云ふことが最も重大問題となるわけであるが、已に私のために割かれてある紙數を少からず超過してゐるので、甚だ尻切れトンボではあるが之で擱筆する。

經濟的危機に面して

神戸正雄

A 今日の我國は經濟的危機に臨んで居ると思ふが、何うして之を突破したら良いか。君に何か名案はないか。

B 經濟的危機、其れは、ちと誇張過ぎる。私は日本が今、經濟的危機に臨んで居るなどとは思はぬ。

A 其を經濟的危機といはうと何んといはうと、名前は兎も角もとして、實際、今日、我邦の輸入超過の勢が猛烈であり、其が今年初から十月までにて六億三千萬圓に上ぼり、大正三年の世界大戰の開戰以來からの通計では八億以上の輸入超過となつて居り、そして爲替相場は今では三十八弗半だといふ有樣である。此は何としても對外比較上、我國經濟の不利を示す所である。此不利の狀態を何とかして有利の狀態に戻さなくてはならぬ。私は君から之が改善策を聞きたいのだ。

B 其の話なのか。成程、我國の輸入超過が少々位なら良いが、こんなに多くなつては、やり切れないし、爲替の大下落といふことも、國の面目からいふても情けないことだし、經濟上からいふても、つまり外國から買入れる物では其れだけ高い價を拂はなくてはならぬこととなり、外國へ賣る物については、其れだけ安く賣らなくてはならぬこととなつて二重に損失を招く。此を何とかしなくてはならぬといふことには私も同感である。が併し之を恢復するの策は實に六つかしい。

A 爲替の下落が、外國から買ふのに不利となり、そして外國へ物を賣るのには其が安くつくこととなるならば、恰かも其は輸入不利、輸出有利となるので、結局輸入超過はなくなりむしろ輸出超過ともなりさうなものであるのに、輸入超過依然たりといふのは何うしたものか。

B 實際、爲替の下落の爲めに、或度まで我國の生糸、綿糸布等の輸出を便にして居ることは事實であるけれども、之と同時に我國の輸入品には原料や食料品が多く、假令高價についても

買はなくてならぬものの多い爲めに、輸入を抑制することが少く、而かも爲替の下落したゞけ、然らざればあるよりもより多くの金額を輸入品の爲めに拂はなくてならぬこととなりて、結局、爲替の下落が輸入超過を制する力が乏しい。特に年初に於ける復興材料の大見越輸入の後を承けたので、下半季に之を輸出超過によつて取返すことが太だ六つかしい。

A 時に、最近には英米ともに政變があつて、何れも資本主義保守主義が勝利を得たので財界が安定を得たのみでなく、活躍の氣勢を示して居る。其れに支那も何うやら內紛が片着きさうだから益々以て外部から景氣の刺戟があり、我國産物に對する需要を增しつゝあるやうである。或は此からして我國經濟を好轉せしむる機會を攫ることが出來さうなものだが、何うか。

B 如何にも其の通りで、此等の外國事情は我經濟の爲めに或度まで有利に働らく。我輸出を刺戟する材料である。特に米國經濟界の活躍は我にとりて最有利な材料となつて居る。併し其は又我國の輸入するを必要とする、我國の買はなくてならぬ所の外國品の價格を高める原因ともなるので、我輸出增加の原因たるのみでなく、輸入金額增加の原因ともなる。所詮之によりて我大輸入超過の情勢を逆轉させることは出來ない。一體、爲替相場の下落といふことや、外國特に米國の景氣の好轉といふことやは、我國經濟を好轉せしむる所あるものではあるが、併し反面には之につき不利に影響する分子もあるから、此の如きものに依賴して我經濟の轉化を望むのは全く愚である。本當の恢復は他力に待つてはならぬ。自らの力によつて恢復し得るの土台を築かなくてはならぬ。

A 其の自力の恢復策、其が恰かも私が聞きたい所だ。其は何うしたら良いといふのか。

B 其策がないのではないが、兎ても實行難だ。いふたとて行はれまいし、いふのは無益のやうだ。

A 實行難といはるるが、大抵のことは實行の出來ぬといふほどの事はない。出來るだけ努めるとすれば良いから、まづいふて見たら何うか。

B それならいふて見やう。私は政策としては此際財政の大緊縮と正貨輸出禁止の解除と、此二大事業を完成しなくては駄目だと思ふて居るのに、財政緊縮の方も、何うやら來十四年度一般會計豫算十五億三千萬圓で、緊縮繰延一億五千萬圓、其內、繰延が九千萬圓、眞の節約僅かに六千萬圓といふのだから、私から見ると、緊縮の度が足りない。もつともつと思ひ切つて緊縮しなくてはならないのに、此有樣では先づ失望しなくてはならない。其れに正貨解禁に至つては當分見込なしといふの大

要求から、私は此分では我國の經濟の基礎は當分安定せず、其目標の外はなからうと思ふ。

A　成程、其は六つかしい。財政緊縮といふことになると、一方には役人が澤山に退職しなくてはならぬことになる。其方の苦情もあるし、他方には鐵道の敷設を止め、師團を廢し土木事業を中止しなくてはならぬこととなつて、地方民が其利益を失ふの故に反對し、隨つては政治家も自已の選擧區の干係上、反對しなくてはならぬことになる。

B　だからして私が初めから實行難だといふたのである。併し此際之が故障を除き萬難を排して、財政を緊縮するのは、政府より來る過大なる物資及勤勞に對する需要を縮少して、物價、勞賃、金利を低下するのに避くべからざる事である。

A　財政緊縮は實行難だが、兎も角、政府が一億五千萬圓だけでもやつたのだから、不十分ながら幾分か目的に貢獻したとしても良い。處で正貨解禁を行ふては、之によりて爲替相場の恢復だけは出來るか知らぬが、其爲めに一時的には相場の大變動があつて、前からして外國より輸入した原料及製品を持つてゐる者が第一に困まるであらうし、輸出商工業者も其輸出すべき物の價が外國にて割高となる爲めには販路を縮少さるることともなり、爲替思惑を爲しつつあつた銀行者の損失もあつて、經濟界に困難を與ふるであらうし、更らに多少永久的に見るときは、在內の正貨が續々流出して、無正貨狀態ともならさるを得ぬこととなつて困りはしないであらうか。

B　如何にも一時的には其通りの惡結果を持來す。だからして出來れば爲替相場を今日の三十八弗半から段々上ぼして四十九弗邊までにした上で、解禁するのが最穩當ではある。其には輸出入又は廣く國際貸借干係を我國に有利ならしめたら良いのであるが、其が今日の正貨輸出禁止の下には六つかしい。此制度の下に、國內通貨が過多なるを免れずして物價が過高となり、其れに爲替相場の不利からして輸入さるる原料及食料品が割高となる。此等は輸出品の發展を阻碍しなければならぬ。唯だ爲替の不利が輸出品の外國に於ける價格を割安ならしむるだけに於て此勢を緩めるけれども、此の如きものは爲替相場の恢復するに隨つて縮少さるべきものであつて、却つて益々輸出を不利とする所の通貨過多や、原料等の高價の影響を強く感ずることとなり、特に今日の如き大た程度の爲替下落によつて漸く輸出し得るが如き物は、爲替の少し許りの恢復によつても間もなく輸出困難といふことになり、其輸出たるや其基礎の極めて薄弱なるものである。其に此制度の下に爲替不利なる間は、輸出金額は割合に小く現はれ、輸入金額は大く現はれることになり、此點か

らしても、我國の國際貸借を有利とすることは六つかしい。だからして少々困ることが出來ても思切つて正貨解禁を行つて、正貨の流出すべきものは流出するに任かせ、之によりて通貨量を自然的に減縮せざるを得ざらしめて、國內物價の徹底的の低下を齎らし、此に於て生產費の減少、輸出の容易の爲めの堅い基礎を作らなくてはならぬ。之に伴ふて生ずべき爲替相場の恢復は又、輸入原料食料等を低廉ならしめて之に貢獻する。此場合に爲替不利の時代のやうな、爲替上よりしての我國輸出品の割安といふことは得られないが、併し我國物價の低下といふことによりて之を補償するに足るのみならず、此方は爲替の如く基礎の薄弱なものでなく眞に信賴するに足る所の基礎である。又た之を行ふの結果國內正貨が續出して、無正貨ともならぬかと心配するに至つては杞憂である。或度までは此が出て行くであらうが、全滅するに至る前に、物價の相當なる低下によりて輸入不利輸出容易となつて之を喰止むるを得るであらう。又若し事實上、其があまりに減少し過ぎるほどに至つたときには、之を救濟するの途なきにあらずである。むしろ今日の如く無理に過大の正貨を抱持する爲めに、徒らに物價を過高ならしめて、其爲め輸入超過の勢を大ならしめて、對外債務の增加を來たし、其を好まぬとすれば、矢張り國內正貨の外國への現送に依る外なきこととなるのを避けた方が良からうと思ふ。所詮、正握り通ほすことは出來ない。無理に之を握るよりは、自然の勢に任かせ、我國の持ち得べき力相當のものだけに甘んじたが良い。

A　成程、其れで解禁の方が良いことは分つたが、一時受くる所の打擊は何うかしやうがないか。

B　其は一定の豫告期間を置いて解禁を行ふこととし、其までの間、段々と爲替相場を上げて行き、正金銀行をして之を行はしむるにつき政府にて爲替運用上の損害の補償を爲すこととすれば良からう。

A　政府の行ふべき二大政策は先づ分つたが、まだ何か外にもなさなくてはならぬものがあるのか。

B　あるともあるとも。此政策を中心として行ふ傍に色々產業政策上、社會政策上爲さなくてはならぬことが澤山にある。今其を一々いふても際限がないが、今一つ重大なる政策が殘つてゐるから、其を話さうか。いや、其は政策といふよりは、むしろ國民一般の心掛の改造の問題だ。教育政策上の問題といへばいへぬことはないが、政府を待つて出來ることではなく、國民一般の力によりて自ら出來ることである。

A　其は聞きたいものだ。兎角、我國では何かといふと政府に

賴る傾があるが、實はもつと國民が奮發して來なくては國運の振興することは望めない。君のいふ國民氣風の改造とは何のことか。

B 私は國民が職業に擇り好みをしないで從事し、且つ報酬の多寡を喧しくいはぬといふ氣風を作るのが肝要だと思ふ。

A 其は隨分六づかしい注文だ。

B 六つかしいには違ひないが、此が出來なくては、日本は行詰りだ。行詰りから逃れる途は、此六つかしい所を押して行はなくてはならぬ。近頃は失業者が多い。此先きも行財政整理の進行に伴つては、まだまだ澤山に失業者が出て來る。此失業者が職に有りつくのには、彼等が職業の選り好みをせず、薄き報酬にも甘んずることとなるより外ない。だから此社會的困難を救ふの途も夫の氣風を作ることにあるのだが、即ち其が彼等自らを助くる所以であるが、今日我國の輸出產業の振はぬのも、夫の氣風の起らず、むしろ反對に、職業の擇り好みをして、特に報酬や待遇の厚からんことを期して、之に於て飽くことを知らざる風の盛なるに因るや大である。一體、職業は神聖であつて、何んな仕事でも卑むべきものではない。仕事なくして生活することは最も卑むべきことだが、仕事を持つて懸命に働いて居る者は最も尊敬すべきものである。そして其仕事に從事して世の中に貢献することが出來たからには、其れだけで以て感謝すべきである。場合によつては無報酬でも甘んじなくては濟まない。まして薄くとも何ほどかの報酬を得たときに、其につき二、に感謝しなければならぬ。報酬の高からんことを望みて爭ひ合ふなど最も卑しむべきことでなければならぬ。或は高い報酬を得なくては文化生活が營まれず、人間らしき生活が出來ぬ。人は之が爲めに報酬の爭ひを爲すのだともいふが、高い報酬を握つた所で、そして其れで以て有形材料が幾らか多く得られたからといふて、其の爲めに自分だけは何程か向上したやうであつても反面に幾多の同胞に仕事を失はしむる結果となり、多くの人々に低いドン底生活を爲さしむるやうでは、却つて同胞に相濟まぬと感じなくてはならず、眞の道德的な文化生活を營み得たとはいへない。今日人々が報酬戰爭にのみ熱心であるので、我國の生產事業の生產費が過高となり、我國產品が外國產物に對して競爭が出來ないといふことになつて居る。折角在る所の工場は立腐れとなり、田園は荒蕪しつつあつて、而かも人は就くべきの仕事なしといふて嘆息して居る。人々は何時までも戰時の成金時代、不勞利得の時代を夢想して居つてはならない。我國は只さへ土地其他天然資源乏しくして人口過多なる、經濟上の條件の不利なる國柄である。人が報酬の割安に甘んずるでなく

ては我國經濟の立ち行く譯はない。今若し人々が心掛を變へて、低き報酬にも甘んじて從業したとするならば、もつと多くの國産物を外國に賣出すことも出來、外國よりの輸入品に代るべきもつと多くのものを作出することも出來、そして夫の輸入超過、外債支拂難、隨ふては爲替下落の困難を一掃することも出來やう。

A　お説尤ものやうだが、其は現代人には兎ても望めない。もつと實現し易い方法が外にないだらうか。

B　あるのかも知れないが、自分には持合せがない。

A　君の説は要するに六つかしいものばかりだ。實行の六つかしいやうなものでは、聞いても仕方がない。

B　どうせ俺のいふことは、そんなやうなものばかりだ。それで詰まらんといふなら、是から君が意見を求めても答へることを止めにしやう。

A　兎も角、今日だけは此れで止めにしても貰はう。

現時財界の危機と其對策

堀江歸一

我國の經濟社會は今日餘程危險なる狀態に陷つてゐる。危機に瀕しつゝありと云へるかも知れない。斯る危機の到來するに至つた財政上の原因に就ては、別に執筆した論文中に述べたから本論に於ては姑く別の方面から、觀察を試みたい。

經濟的危機の殺到は色々の方面から、之を窺うを得るが、就中其一として注目すべきものは、國際貸借の狀態であつて、今日の如く一國が國際經濟の圏内にゐる以上は、此狀態の不安は確に經濟的危機の到來を促さゞるを得ない。我國現下の經濟に就て考へるに(一)輸入超過は年々非常の金額に上り、一方に之を決濟するに足る對外債權收入を持たない。(二)斯くて輸入超過の繼續は一方に在外正貨の減少を來すと共に、他の一方に國價の低落を促す。(三)而して正貨の減少を塡補する爲め、外

債を發行しやうとしても、不利なる條件に服從しなければならず、發行の回を重ねるに從つて、財政の信用を失墜する、(四)國價の低落は外國から我國の輸入する物資の價格を高騰せしめ、外國から原料品の輸入を受けて、經營される工業は總て不利なる影響を蒙るが如き、對外經濟上の關係に於て、我國の地位の現在極めて危險なりと認められる點である。

更に之を對內的に見れば、(一)大正九年恐慌以來の不景氣は益々濃厚と爲り、何時面目の一新を見るや、測り知るを得ず、(二)不景氣時代に尙ほ物價騰貴して、一方に國民の多數は所得に豐富ならず、又其一部は失業の爲めに、所得の全部を喪失して居る爲めに、生計を維持すること、容易でない、(三)金利の不廉なるに加ふるに、信用の梗塞を以つてし、事業の不振甚だしく、其或るものは倒產の危機に臨んで居り、(四)金利の上進は有價證券を利用して、金融の便を得やうとする者を苦しめ、又證券を資產とする者に損失を加へるが如き、明に看守し得られる所である。

而して我國輸出入貿易の不均衡殊に輸出貿易の不振は外國殊に合衆國經濟社會に於ける悲況の然らしめる所であると、一般に考へられて居る。而して合衆國經濟社會の悲況は歐洲經濟の不安定に據るものであつたが、今や倫敦會議の決議は獨逸の經濟に復活の曙光を仰がしめるに至つた。斯くて歐洲から合衆國に向つて、經濟的光明が放たれ、其れが自然日本の對米輸出貿易をも有利なる方嚮に轉回せしめるに至りはしないかと云ふことが一般に想像されるやうであるが、我國輸出貿易の不振は必ずしも一合衆國の經濟的趨勢のみに由るものではない。我國の一般物價が極めて高價であり、當業者が此高價を以つて外國に物資を輸出することを不可能なりとし、粗製品を濫造して、價格の引下げを謀り、然も品質劣等の爲めに、外國の評價を不良ならしめるが如き、確に輸出不振の原因をなすものであり、此外に物價の騰貴に伴う生活の困難が職工勞働者の生活を虐げて、彼等の能率を傷け、斯くて輸出工業の發展を害して居ることも、考へなければならない。即ち輸出貿易の發展、貿易の均衡を謀るには、內國に於ける物價の政策が確立されなければならない所以である。

金利の不廉、今日の如く、金融の梗塞、現下の如きことも亦財界に危機を招く所以であつて、出來得べくんば、金利を低廉にし、金融を疏通せしめる道を講じなければならない。此點に就ては、豫てから一部人士の間に日本銀行の金利步合引下が唱へられて居るが、今日の如く金利を騰貴せしめた根本の原因を除かずして、日銀の金利を引下げるが如き、寧ろ本末を顚倒し

た嫌なきを得ない。從來の如く物價が日に月に騰貴して已まない一方に、財政上に公債政策が濫用され、公債發行を通じて、民間の遊資が國家に吸收され、之を吸收する爲めに、公債に高利を付するが如き、金利を騰貴せしめる適切の原因であるから、金融を調節する點から云へば、物價政策と財政策との兩方面に就て、從來の方針を改新しなければならないのである。

更に我國の經濟社會をして速に不自然の狀態を脫せしめるには、金の輸出禁止を解除し、通貨價値の恢復を謀ることを以つて、急務とする。唯對米爲替相場が三十八弗臺に低落しつゝある場合に、輸出解禁を即時に斷行することは、經濟社會殊に貿易市場に急劇の變動を及ぼすの故を以つて、之を避けなければならないが、一方に貿易の調節を行ひ、輸出解禁を行つて、大なる支障を生ぜざる狀態を醸成する必要あるは、論を俟たざる所である。

歐洲戰爭當時の交戰國に於て、將又戰爭の打擊を蒙つた國に於て、通貨價値の下落を來すことは、已むを得ざる事柄として、之を看過するの外はない。戰爭に直接の關係なく、寧ろ戰爭に依つて經濟上に利益する所の多かつた我國が震災火難の影響を蒙つた後とは云ひながら、圓價に今日の如き低落を來し、容易に其恢復を得ないのは、要するに財政、金融、物價の諸方面に於ける政策に大なる過誤の存する結果であつて、其根本に向つて、匡正を施さゞれば、今日の危機は益々其甚だしきを加へざるを得ざるであらう。

故に種々の方面から考へて、我國現在の經濟的危機に對する政策として、輸出入貿易の均衡を保たしめることを以つて、最も急を要するものとしなければならない。政府が過般の臨時議會に於て、奢侈品關稅の增徵を計畫したことの如き、其目的を貿易の調節に置いたものゝ如くであるが、實際に如何なる效果を及ぼしたであらうか、今日の處では、何ものゝあるを知らない。隨つて貿易調節の方策を求めれば、其聊か永久に亘るものとしては、物價の引下げに依る生產費の節減がある。然も生產費の節減に依つて、物價が低落し、斯くて輸出の振興を期するに就ては、若干の時日を猶豫しなければならない。斯る猶豫は切迫した現下の事情に於て、之を許すの餘地を存しない。即刻調節策を立案して、其實行に着手しなければならないとすれば、殘された政策は輸入管理の外に、何ものもないと云ふことに爲る。即ち政府が一切の輸入貿易を其管理下に置き、近き將來に於て、輸出の用に供せられるもの、國民生活に極めて必要なるものに限り、其輸入を認めるが、其以外のもの殊に當業者の見込思惑に依る輸入、消費者の享樂奢侈に投ずる爲めに行は

れる輸入の如きは、總て之を排斥する方法を講ずるのである。

然しながら斯の如きは國民の經濟生活に對して、國家干渉の手を擴げ、其力を逞うせしめんとするものであつて、斯る程度に至らず、モツト自然的方法の下に、危機に當るを得れば、我國に取つて、欣幸とせさるを得ない。

經濟國難と國民經濟正解の急要

武藤山治

我國は一大經濟國難に直面して居る、然しながら是れは一朝一夕に起つたことではない。久しき以前より我國民は經濟國難と言ふ斷崖に馬を進めつゝあつたのである、今や漸く其ことが一部の我官民に意識され茲に我國家の一大疾患に對する種々の療法が唱へらるゝに至つたに過ぎぬ。

英國は總選擧の結果保守黨が大勝利を占めた。此變化は何故に起つたであらうか之に對しては種々の源因が双方の側に於て說明されるであらうが、私を以て見れば要するに英國が今回の大戰爭に參加した結果として起つた經濟國難より一日も早く脫却したい此一大疾患を治療するにはどの醫者が良いかと英國民が迷ひつゝある一の政治的現象に過ぎないと思ふ。マグドナルドを迎ふるに至つたのも、又今回ボルドウヰンを起したのも結局英國民が經濟上の病苦に惱む煩悶の現れである。

然るに我國民の大多數は由來經濟觀念に乏しい國民である、明治の初年大久保公だつたと思ふが西洋の經濟智識を普及せんが爲め英國より經濟學者を招いたことがある。其時英國の經濟學者は日本人は總ての點に於て優秀なる國民であるが、經濟上の智識丈は充分に會得せしむることが出來なかつたと嘆息したと云ふことである。我國民が斯くの如く經濟觀念が乏しくなつた源因は德川幕府の士分に對する敎育が金の事を言はさぬことにしたのと、農商工等の他の階級を卑め是等の階級に屬する物が獨立自治の精神を欠ひたる等に依る物で、それが維新の

革に依り富國强兵の旗印の下に其儘眞一文字に進み來つたのみで精神的には昔と變らぬからである。故に政治の如きも名は立憲政治に改まるも、制度は自治の制度を採用しても政治は國民の經濟に大關係あるものであると云ふ觀念が伴はぬ。從つて昔と同樣に政治が自分一個、又は一團體の利害に關する場合にのみ極めて鋭敏であるが、社會全體としての利害即ち國民經濟の上から政治を判斷し批評しようともせぬ此相違が日本の憲政の英國の如くならぬ所以である。英國では政治は實業と同樣に考へられ、總選擧に際し各政黨に對する國民の判斷は經濟を主とするに拘らず、我國では口には經濟國難を唱へ筆には經濟上の一大危機杯記するも、過般の總選擧は如何に擧行されたかと見れば、一も是に對する對策は示されずして、單に護憲と言ふ抽象二字が選擧の題目となつて國民は之れに判斷を與へたに過ぎぬ。斯くして其の結果今日吾政治は之を財政經濟政策上に於て正反對の意見を有する兩政黨の聯立に依つて行はれて居ると言ふ奇觀を呈して居る。之は過渡期の立憲政治として辛抱せねばならぬと言ふ人もあるが、今日の如く政治と經濟とは最も密接なる關係がある時代に於て然も吾國が經濟上の一大危機に際會せる非常なる場合に於て英國の憲政史杯を繙いて吾國の此現狀に對し自ら慰むることが出來ようか、私は吾國今日の如き不良なる政治に對し國を憂ふるものの袖手傍觀すべき時でないと思ふ、英國では保守黨が貴族富豪階級の利害を代表せると云ふも現に其首領たりしボナー、ロー氏が死去せる際、黨の内外に於ける其地位閲歷よりすればカーゾン卿が當然後繼者たるべき筈であつたが、單に貴族たるの故を以てせず、實業家たるボールドウヰン氏が推されたと言ふ位だ。是れ英國民は政治は實業なりと口に唱ふるのみならずして、其形式の上にも之を表現せんとするものである。勿論其地位形式杯、彼是言ふの要なきも、吾國の政治が、政治の政治であつて未だ政治は經濟なりと言ふ國民の理解が乏しいところに私は吾國民經濟の行詰まりの源因を見出だすのである。

德川時代は、專制時代で如何なる壓制にも庶民は御無理御尤もとして官權に屈從し、政事に容喙することが出來なかつたが然らば德川の政治が腐敗して次第に國民經濟を壓迫するに至れる五代將軍綱吉の頃より民間に於て盛んに落書が流行し、時の政治に不平を漏らしたものだ。其頃の事だが、江戸鍛冶橋の堀端に高札を建てそれに按摩が踏技をして悩んで居る繪が書いてある大勢の人々が黑山のように取卷いて見て居たが其意味が分らんで色々と判じて居ると、そこへ十一、二才の黃口兒幡隨院長兵衞が來會はして、是は當節の政治を惡口したものだと一喝し

て批判した。上に盲目が多いから下々のものが痛むと諷したものだと解いたので群衆は生意氣な小倅だとは思ひながらも感心したと言ふことだ。今日は昔と違ひ言論自由を保障されているから國民は國の政治を動かすことの出來る時代でありながら、極めて少數の人々の外は、吾國今日の經濟國難に對し其原因は政治が惡るい爲めであることを理解せぬ。斯くて政治の局に當るものが經濟に關する智識經驗が乏しい爲め、吾國民經濟を病的に陷らしめ、更らに病症を愈々重體にするやうな藥の盛り違ひをする。其失政に對し國民の輿論が却つて直接國民の利益幸福に關する重要なる政治問題に冷淡にして、極めて抽象的な感傷的に向つてのみ、常に沸騰し又は狂奔する其結果此國民性を利用する一部の職業政治家に乘ぜらるる場合が多い。又一方に於て此事を能く理解して居つても政府と爭ふような割の合はぬことをするよりも、寧ろ政府の意を迎合して餘利に與らんとする陋劣の徒が多い。かくの如き事は幕府時代に於ける吾々の祖先が非常なる壓制の下に、猶時の政治に對し非議し、反抗した其眞劍なる勇氣に對し耻づる所なきや否や。

私は是より吾國今日の政治は、單に之を國民經濟の上より判斷しても一大專制政治であつて、昨今の如き吾經濟界が一大困難に次第に陷つて行く其大部分の責任は吾國の政治の惡るい爲めで、政治の局に當るものの罪輕からざることを思ふ。乍去、立憲政治が當面せる現代では結局の責任は、國民其自身に歸するものである故に、今日の政黨政治家を幕府の老中同樣に非難すると同じに非難は出來ぬ。吾國の經濟は、日露戰後に行詰まりの運命に向つて居つた、それは誠に見易き道理で當時吾國の政治は吾國の世帶を考へぬ政治であつたからである。我國は永い間國を鎖し、世界の競爭場裡に於て立遲れた貧乏國で此小さな原料にも乏しい蕞爾たる孤島の中に於て、此大家族を如何に養ふかが吾國の政治の唯一の目的でなければならぬ。

而して、吾國は此目的を戰爭に依り達成したいと言ふに國論一致して日清戰爭となり、日露戰爭となつたのである。而して日清戰爭は之を經濟的に見れば大成功であつたが、日露戰爭は大失敗であつた。明治廿三年國會開設の當時、吾國の國費は一般特別兩會計を通じて合計一億三千百四十五萬四千二百十二圓であつた、それが議會の力に依つて翌年より國費が節減されつつあつたところが、日清戰爭が起り其結果が極めて容易に吾國の大勝利に歸した爲め國民の意大に驕り、又政府も軍備擴張の爲め國費を膨脹せしめたるも幸ひ、當時戰後の反動に加ふるに義和團事件突發し吾國經濟界は一大恐慌に陷り、國民を覺醒すると同時に其頃の議會は未だ官僚對政黨の爭闘時代であつた爲

め國費の膨脹も大に抑制され、明治三十七年日露戰爭起る時まては參億七、八千萬圓を超ゑなかつた然るに日露戰爭は、戰時及戰後の財政を外債に依つて維持し、同時に軍備擴張を行つた爲め國費は非常に膨脹して明治四十年は殆んど拾億に近き負擔を國民に課するに至つた。其頃より吾國官僚政治家と政黨政治家との間に馴合ひの弊を生じ國費の節約意の如く行はれず、此度の世界の大戰爭前大正二年に至る其間多少の節約は行はれたるも、又直に增加して大正二年は日露戰後軍備擴張熱の盛んなりし明治四十年の歲計と同額に達し國民經濟は脅迫され、大正三年此度の大戰爭が起つて局面に一大轉換を來さなかつたならば、今日吾々の直面せる經濟國難は夙くに大正四、五年頃吾國民を惱ましたであらう。私は此ところへ吾國の官僚政治家と政黨政治家との間に馴合を來さしむるに至つたことは全く國民が政治に冷淡なりしが爲めで誠に殘念なことであつたことを一言附加して置きたい。元來吾國の立憲政治は、西洋の如く稅率の喧嘩から起つたものでない、西洋の立憲政治は壓制政治の極度に達し國民の負擔が過重で、忍ぶに忍ばれずして國民一齊に奮起して之を得たもので、國民の自覺の結果に成つたものである。吾國は然らず國民の大多數は殆んど無意識で、唯有志家と稱する憂國の士が之を唱ゑ、終に是等少數の人々の熱誠なる努力に依りて立憲政治が行はるゝやうになつたのである故に、國會が開設されても當初其政爭が官僚對政黨の爭ひとして國民が無意識に政黨を後援して居つた間は極めて僅かの間で、國民は政治を以て自分等の仕事と考へずして政治家の道樂と考へ、所謂政治に奔走する政治屋と稱する人々の中にはこれが爲め産を破る者も出て來る、其狀態を見て國民一般は愈々以て政治には近寄るべからずとして中途より全く國民の後援を失ひたる政黨は其立場に窮するに至れるも誠に無理からぬ次第で、實を言へば國民が立憲國民たる政治に對する義務を盡さぬ爲め政黨政治家は矢折れ刀盡きて官僚政治家に屈服したのである。國民は自分等の爲めに戰ふ戰士を見殺しにしたのである。多くの政黨政治家中今日まで節を守り來たものもないではないが、最早指を屈する丈は殘つて居まい。私は昨年東北の或地方で農村の有權者中自己の投票を壹文でも高く賣る理由として、自分が此投票權を得る爲め參圓の納稅を爲すに至れる其間の苦勞は一通りでない、それを參圓や五圓で賣れと言ふのは余り殘酷である今少しく高く買へと平氣で談判すると言ふ話を聞いて驚ろいたことがあるが、本年選擧の後更らに驚ろいた話を聞いたのは東北地方の農民の言ふところは純朴な話であるが、或地方の都市では毎度投票を高く賣る習慣が付いて其値段が高く賣れる爲め事實

納稅資格が無いのに、强て有權者たる丈の納稅を爲し投票權を得て之を高く賣付け差引大に儲けたものがあつたと言ふことである。殊に驚いたのは子弟の教育に從事する學校教師の中で投票を賣つた疑ひあるものもあると言ふ非噂丈でも吾憲政の爲め重大事である。吾國民が斯の如き政治道德の上に憐むべき卑むべき狀態に陷つたのは全く官僚政治家が吾國民教育に干涉を加へ一方に憲政を布きながら他方國民には成るべく政治教育を與へぬようにした罪だ。又吾國政黨政治家が政權を得ることにのみ沒頭して立憲政治家の爲さねばならぬ不斷の政治教育を怠つたからである。英國の小學校の教科書は政治教育に關するもの多く私の前にある一教科書を繙いても立憲政治の下では代議士と選擧人とは重大なる責任を有するものであると說き投票に關して左の如く書いてある。

　公民は自分の有する投票は自己の一身上の都合に依り使用し得る權利と考へてはならぬ。之に反し社會公共の爲め善事をなすべく附與せられたる一の信託物と思へ、彼は候補者の人格識見を充分に吟味して眞に議員としては最も適當と思ふ者に投票を與へねばならぬ。彼は投票を怠ることは善事を爲す爲め與へられたる機會を取る事を拒むもので其義務を盡さぬ横着者である事を念頭に置かねばならぬ。

若し吾國文政を國會開設の前後より政治教育に重きを置く事として吾國の小、中學校教科書中に政治教育の教科書が英國の如く澤山にあつたならば前に述べた吾國有權者の如き無理解のものや、横着者は今日より尠く吾國立憲政治は今少しく立派に行はれてゐるに違ひない、然るに近來吾國政黨政治家が朝に立つても猶此政治教育を忽にするのは不都合である。先日私は或人に英國の小學校の教科書の話をしたら日本でも英、米、獨等の教科書が澤山飜譯されて居ると云ふから、私は直に人を走らして重なるものを買求めて來たが一つも私のいふ政治教育の教科書はない思ふに是は吾國の教科書は國定であるから文部省の檢定が濟まぬやうな政治教育の教科書を飜譯しても小學校に採用して吳れぬからでもあり、又文部省が今日古き思想に捉はれて小學校に參考書としても、政治教育の書物を備ふることを忌むからだと思ふ、今や普通選擧をも實行せんとする政黨政治家が吾國文政の上に一大刷新を加へざれば普選も永く其効果が擧らぬ事は今より想像される。政治は三度の食事と同樣で成年以上の男女でなければ用はないものでない。子供でも政治を正解し又政治に興味を持たせるがよい家庭でも政治を談じ芝居や活動寫眞やベースボール同樣又それ以上に家族が之に興味を持つ丈の智識と自由を學校にても公會にも與ふる事が必要である。此

點より治安警察法も政治の爲めには取扱を寛大にするやう改正する必要がある。吾國民經濟を行詰らしめたる此の不經濟なる政治を改むるには、國民の政治的自覺を促す外はない。

さて如何にして吾國政治が經濟界を行詰まらしめたるやを示すため第一に吾々は吾國の政治ほど政治が實業に喰込んで居る國はないと言ふことを知らねばならない、英國でも米國でも政府は殆んど何物をも所有して居らぬと言ふてもよろしい、然るに吾國政府は千六百萬町歩の山林を所有して居る、大藏省自身の見積りでも約六億圓も評價せられて居る更らに公有財産に屬する土地を十一億五千萬坪持つて居る、双方合すれば五六拾億圓にも達する財産を持つて居る。英米兩國政府は英國が、郵便電話、米國が郵便の外民業を官營にして居らぬ、又吾政府のような莫大な財産は持たぬ山林杯勿論所有せぬ吾國政府は驚くべき多額の所有物を持つて居る外に鐵道を殆んど全部官營にして居るのみならず、製鐵業も政府が之を營み軍器軍艦を自ら建造し軍用の羅紗まで製造して居る。猶それのみでない、中央銀行第一の爲替銀行たる正金銀行まで或程度まで監督權を利用して之を自由にして居る。其外に種々の特種會社特種銀行を動かして居る立憲國の政府でこう言ふ廣大なる實業上の權力を掌握して居る政府は、共産主義の露西亞の政府の外南米邊まで探してもあるまい。吾々は時々民間に於て資本家横暴呼はりの聲を聞くが、若し我國に於て眞に横暴なる大資本家を求むれば吾國の政府であると言ふてよからう、吾國の銀行家や、實業家が時の政府に楯突けぬのは何にも心から之に從つて居るのではない、正論を唱へて其怒りに觸るれば政府の手中にある是等の武器を以て痛い目に遭はされる恐れがあるからである。故に吾國に於ては間接に自己の權力を以て民業に干渉するのみでなく、直接民業に對し生殺與奪の權を振つて居る、吾國ほど政府が多くの認可權を其手中に握つて居る國はない。殊に吾國の議會はお人善しの集まりで何事も政府に委任して行政官の權力を強くする御手傳をして居る、先頃の特別議會で私が繼續委員を設けて議會閉會中も種々調査をしようと云ふ議會法修正案を出したら、其反對の急先鋒が政界革新を標榜する革新俱樂部の代議士で、然も其反對理由は憲法違反である杯最も舊式な憲法學者でも笑ふような官僚式を發揮した、斯くの如き始末で吾議會は餘りに多く立法權を行政權の自由意思に放任する弊がある。殊に吾國政界の腐敗の一原因たる利權の認可權を全然政府に委任して今日まで顧みないなど實業家の眼を以て見れば其迂濶に驚かさるを得ない、世界の文明國では利權の認可に對し嚴重なる法律上の規定がありて、吾國の如く政府の自由に放任して居ない、

吾國の如く多くの認可權、就中利權の認可權までが全部政府の手中にあるような狀態で國民が卑屈になり、又狡いものは政治家と結托して種々利權の獲得に運動することとなりて其處に腐敗沙汰を開くに至るは當然である。斯くの如く吾國の政治は、西洋の立憲政治と違ひ、名は立憲政治と言ふも其實は强大無比の專制政治で、或は詳細に比較したらば德川時代の封建政治より或意味に於て遙に實際上强大なる專制政治であるとも云へる、德川時代には全國各地に大名が割據して德川の政令も容易に行はれなかつたが、今日の政府は命令一下全國に向つて其權力を振ふことが出來る、吾國では外國と違ひ政黨が一旦在野黨となると尾羽打枯らしたようになり、吾黨内閣が出來ると枯れんとする田に雨の降れるが如くに元氣付くも一は此が爲で、昨今每日新聞紙上寄て政友會全盛の各地に憲政會支部成立が報ぜらるる所以である。私は先日宮津に一泊して、按摩の話を聞いたがその一節に如何にも日本の政情が縮寫されて居ると感じたことがある。それは宮津へ行くには海岸に沿ふて立派な道路があり、自働車が往復して居る。宮津は遊覽地で其れより奥へ行つても鐵道で輸送すべき大した貨物は無い。然るに海岸の道路と殆んど併行線に山の側面を切開いて今度鐵道が敷設され私の行つた頃は竣工して間もない頃であつた。此鐵道が斯かる不急な所に敷設されたに就て、按摩の私に語る處によれば其附近は以前憲政會の地盤であつたが、此鐵道を敷設する爲めに皆政友會に入會して、今度愈々其目的を達した土地の人々は昨今憲政會に逆戻り最中だとのことであつた。吾國の如く政府が利權の好餌を澤山持つて居ると、餌で國民を釣らうとするし、國民は釣られた風をして餌を喰つて逃げるような惡風を生ずる。何れにしても吾國に於て政府が單に行政を爲すのみでなく種々の物を所有し、各種の營業を爲し間接に金融業をも營んで居る許りでなく、更に廣大無邊の認可權を掌握して國民の自由を束縛する如き今日の狀態にては政治の善惡は吾國經濟界の盛衰のみでなく、死活にも關係するものであり、政治上の弊害も多く玆に發生するものなれば此點は一大刷新を加ふる必要ある事を吾々國民は悟らねばならぬ。吾國は日露戰後軍備擴張の爲めに國費を國力以上に膨張せしめた爲め、資本の欠乏に苦み、將に行詰りに達せんとする其際幸運にも今回の世界大戰爭は勃發した。是は吾國の日露戰爭後の財政を整理し、吾國を經濟的に獨立せしむべく吾國民に與へられた千歳一遇の好機會であつた、然るに吾官民は此好機會を逸したるのみならず之を財政經濟の上より觀察すれば日露戰後の病體よりも一層病勢を重からしめたと言はざるを得ぬ、尤も此重大なる時期に政局に立ちた

るものは、政黨內閣であるから國民の全責任であると云へばそれ迄であるが、時の吾政府が千歲一遇の好機會を得ながら如何に吾國民經濟を不利に導いたかを思へば政友會內閣の採りたる放漫なる財政策は吾國民經濟を死地に陷れたと言はざるを得ぬ。今茲に政友會內閣の誤れる財政策を一々解剖する必要はないが、其財政策の大なる錯誤は戰時中吾國民の得たる資金を海外に投資せんことを奬勵すべき時に之を內に引入れんことを奬勵した事にある。當時日本銀行が國內にて募集せる吾公債と背て海外にて募集せる吾公債との間に之を擔保として貸出す利率を異にして、外國市場にて募集せる吾公債の輸入を不利ならしめたるが如き、日本銀行が政府の國內に於ける公債の募集に便せんが爲め政府の見當違ひの財政策を援助せんとして行ひたる不可解なる公債の差別待遇であるが、大藏大臣の監督の下にある日本銀行として止むを得ぬものであらうが、此一事を見ても當時我政府が如何に其財政策を誤りたるかを知るを得。かくて盛んに輸出を奬勵して得たる資金を國內に回收せしめて、兌換券を膨張せしめて物價の騰貴に惱む俸給生活者を其苦しむが儘に放擲し、我財界に人工的百花爛漫の狀を呈せしめた。我國の思想界の惡化せるも我經濟界の行詰まれるも共に皆此戰時中の放慢なる財政策に起因する。されど人は神でない故に私は敢て此戰時中の我財政の失敗に就て餘り多く其當時の政府當局者を責めんとする者でない。私の遺憾に思ふは大正九年及其以後に於ける歷代內閣の財政其當を得ざりし爲め終に我が經濟界を今日の如き極度の行詰りに陷らしめたことである、其點に就ては現內閣の財政策も未だ何等局面の轉換を示さぬのみならず、稍もすれば其政策に矛盾せる處ありて既に重態に陷れる吾經濟界を一層危地に導く恐れなしとせず。

政友會內閣の瓦解後歷代內閣何れも戰後の財政を誤つた、英米兩國政府の如く徹底的に戰後の財政を處理することを怠つた此度の大戰爭の結果は世界を通じて通貨の膨脹信用の擴張となり物價の暴騰となつた。是れ戰爭に伴ふ止むを得ざる結果であつた。然しながら戰爭が終結と共に物價を其平準に歸せしむべき財政策を採ることが、列國產業競爭上最も必要な政府の仕事であつて、是を完全に仕遂ぐる國が世界の產業競爭場裡の優者となり得るのである。而して此財政上に於ける旋廻運動を最も迅速に爲し得る地位にあつた國は米國で、其次は我國であつたのである。英國は此度の大戰に參加した結果八百億の公債を募集し、殆ど聯合國の財政を一手に引受けた姿にて、如何に焦慮するも戰後財政の立直しを爲す上に英國政府は非常なる困難の地位に立ちたることは多く說明を要しない。米國が戰後直ちに

財政の整理を斷行せる其迅速なると、其徹底的なるは如何に有利の地位に立ちたるとは云へ實に驚嘆に値する者であつた。英國が其困難なる地位に立ちながら猶秩序的に財政整理を斷行せる其態度は流石に大英國民であると感服せざるを得ない。此間に立ちて戰後財政整理を斷行するに比較的有利の地位に立てる我國政府の爲したるところは如何と見れば吾等は實に嘆息の外はない。米國は大正七年六百八十億の財政を六十五億まで順次緊縮し、今日では米國一人當りの國費六十圓まで國民の負擔を輕減し、英國は大正七年二百五十七億の財政より最近七十八億八千八百四十萬圓まで切下げた。今日英國民の負擔は一人百七十圓まで輕減するに至つた、吾國は此間に立ちて戰後最も速かに財政を緊縮し、同時に國內に於て猥りに膨脹せる信用を收縮して物價を引下げ、世界各國との競爭に堪ふる準備を整ふるべき筈であつたのに拘らず今日迄此根本政策を採らずして、今日を送り終に玆に經濟國難に直面するに至つたのは全く吾官民の責任で國家の爲め誠に遺憾至極だ。

今や關東の大震災に遭遇し、官民擧つて財政經濟の上に一大立直を余儀なくされながら、猶躊躇して此經濟上の自然要求を回避せんとするは淺間敷き限りにて、國民の不心得は去ることながら今日政局に當りて自ら先づ行ふて然る後國民を指導する地位にあるもの丶責任は重大なりと言はざるを得ぬ。英米兩國は大正七年戰時好景氣時代の財政より非常なる緊縮を加へたるに拘らず獨り吾國は大正七年の國費總額二十一億三千萬圓なりしを反對に年々膨張せしめ、大正十年三十二億五千萬圓に增加し、其後三十億圓まで減額せるも震災復興を理由として本年度は再び大正十年度以上に增加し、現內閣は國費緊縮に一大努力を試みたりと云はるゝも猶來る通常議會に提出する政府の豫算は政友會內閣の最後に於ける最も過度に膨張せる時の歲計豫算に超過すべき疑あるに至つては益々吾經濟界を窮地に導くもので申譯の餘地があるまい。政府は總ての財政問題に對し其在野中の言質より免かるゝ爲め震災を以て止むを得ざる理由となすも震災は國費を一層緊縮する理由とこそなれ、之を以て國費增加止むを得ざる理由となすが如きは我々の理解に苦む所だ。若し一個人の家庫が潰滅、燒失した場合之を理由として一家の家計を膨張せしむる理由とするものならば、何人も其家政を治むるの能力なき者となすべし、潰滅、燒失せし家庫の建直しをするには家計節約の外なきは爭ふべからざる家政整理の必要條件なり。然るに政府は震災を理由として國費の膨脹止むを得ずとなし自ら大に國費を消費して獨り國民に向つて節約せんことを求むるか如き政府の爲すところは其理由なきや論ずるまでも

い。かくして政府の財政策は英米兩國政府の戰時財政策の如く國費を節約して國民負擔の輕減を爲さざるが故に此方面より物價の下落を期すること能はず、我國は此一點より見るも今後輸入は超過し、我經濟界は次第に行詰まるべきは明かなるに政府は更に、玆に貿易に對する財政策上重大なる失政を敢てするに至り我國を驅つて愈々經濟的一大危機に陷らしめんとしつゝある、貿易に對する財政上の失政とは金の輸出を禁止し爲替を放任せる爲め我國對外輸入爲替が二割一歩迄も下落するに至りたる事である。濱口藏相は先頃の特別議會に於て私の質問に答へ金を解禁して爲替相場が平價に復すれば、第一に輸入品のストツクを澤山所藏する輸入商及輸入品を原料として生產せられたる製品の持荷を有する生產者が爲替相場の回復に依り二割方値下がりを生ずる事に依つて不測の損失を蒙り、其結果一般經濟界に測知すべからざる悪影響を及ぼすであらうとて金解禁反對を聲明した。而して私の再度の質問に答へ諸般の方策を實行して貿易の逆勢を緩和し、爲替相場が次第に騰貴して其平價に近づくを待つて後に金輸出解禁を斷行すると明言した。然るに當時の對米爲替相場は四十一弗半であつたが、濱口藏相の期待を裏切り今日は三十八弗臺に下落するに至つた。之に依り見れば、明かに濱口藏相の採りたる種々の方策なるものが失敗に歸したことが明瞭だ。濱口藏相の主力を盡したのは財政行政の整理であつて、我々も其努力に對し感謝するものであるが、其結果を見れば部分的數字の上に於ては多額の節約が行はれたが、我國費の總體より見れば國民の負擔は少しも輕減されない。濱口藏相は吾財政のかゝる成行を生ずるは震災による多額の復興費の爲めだと辯解するであらうが、事情の如何を問はず、之を一國に於ける國費の負擔が物價騰貴に影響する事實より考へ藏相の努力は多とするも、其結果が一國歲計の總額の上に減少を來さずして國民負擔の輕減とならざる間は此方面より物價の下落を促がすことは不可能であるのみならず、よし其が震災復興費であらうが、他の如何なる目的に使用せらるゝであらうが、萬一通常議會に提出せられる豫算の歲計總額が前內閣時代より增加するとせば、反對に物價騰貴を誘發する原因となるであらう。故に藏相が獅子奮進の勢ひを以て臨みたる財行整理も撥減稅を斷行し能はざる以上、全く聲明せられたる輸出入の均衡を制する能はざる不結果に終ることは明らかだ。殘る處は奢侈法案の實行及節約宣傳の方策であるが、是も政府の財政策が物價引下げの根本義に觸れざる以上、全く其効果を奏せざるのみならず、其關稅引上によりて奢侈抑壓の目的を達せんとするが如きは時に反對の結果を來すべし、現に奢侈品の價を高めたるのみ

時

十二月發賣

はいかに動く？　死を賭して戀せられて彼はいかに靡く？　本書は彼が多感多情にして而も純眞無垢なる清教徒的の一の社會記錄。眞にして妥協なき此一書は天下の人心を震撼せずばやまない。

賣行熾烈我が國第一位を占む!!

發行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　**改造社**

で其目的に背馳する現象を呈しつゝある。

今後藏相は如何なる方策を示すであらうか不明だが、私は玆に斷言する濱口藏相が如何なる方策を以つて爲替回復策を講ずるとも從來の內閣が採り來れる如き姑息の方策にては無益なる治療費を仕拂ふのみで、結局治療の目的を達成するの不可能なるを。德川幕府の財政が紊亂せる六代將軍の時代に於て幕府の儒官新井白石が財政整理の任に當つたが其目的を達し得ずして職を罷め、門を閉して固く客を謝し殘年を終つたことは幕府財政史上有名な話だ。當時膨脹せる財政整理の爲め白石が苦心した事は白石の遺著「折たく柴の記」を見ても知る事が出來る。乍去、白石が如何に幕府の爲めに盡したにしても、彼は經濟上の根本原理を理解して居らなかつた爲め其誠意は財政及國民經濟の上に何等の功果を齎らさなかつた。即、當時德川の財政が行き詰まり、且國民經濟及道德の上に不良の結果を齎したるは將軍が不用不急の土木等を盛んに起せる結果、歲入の不足を生じ、其不足額を貨幣を改鑄して得たる差益金にて充當せる失策にある。然に流石の白石すら此病源より種々國民經濟及道德の上に不良なる作用を起せしを氣付かず、其余病たる國民の奢侈を以て財政經濟の重大問題と考へたようである、それは白石か貿易不必要を唱へ外國より藥材を輸入する外貿易杯は無用である。然しながら全く貿易を止めることが出來ぬとならば、之を制限する外はないこんな、ことでは慶長以後の金銀は向ふ百年位にて全部無くなるから、長崎から出る金銀貨幣の制限をすると同時に、來航の船舶の荷物の數量も制限せよと云つた、白石の經濟智識の幼稚なる之を以て見ても分明する。勿論當時は私曲を營む徒や、種々白石の整理を妨害する徒が多數ありて其目的を達成し得ずして退職せるも一は彼の財政經濟道德の因果關係を充分に理解し能はなかつた事に歸する。

戰後吾經濟界の行詰りは、吾國が戰後猶我國の物價引下を怠慢に附したのに歸するは衆目の一致せる見解である。而して物價の引下げの爲め今日まで我歷代內閣の採り來つた財政策は一つも其要點に觸れて居ない、濱口藏相は在野中は金解禁論者であつた、然るに一旦朝に立つや此主張を殆んど放擲した、其理由として震災後の經濟界の變化の大なるを以てした。察するに、濱口氏は在野中金解禁を主張せる頃は、我國輸出貿易が均衡を得て居り、爲替が平價に近いものであつたと誤解して居るようであるが、事實は決してそうではない。大正八年の頃より今日同樣吾貿易は均衡を失ひ、國際貸借上我國が大なる支拂勘定の地位にあつたのである。其が爲替の上に現はれなかつたのは在外正貨を拂下げて爲替の下落を喰止めて居つたからである。

災以後爲替が下落し始めたのは何にも此天災の爲急に我貿易の均衡が破れたのでなく、在外正貨の拂下げを次第に譲り來つた爲めで現內閣に至り殆ど爲替をその下落するが儘に放任した爲め昨今の如く下落したるに過ぎぬ。故に濱口氏が在野中の主張を震災後經濟界の變動に歸せんとするは理由なき事だ。

我經濟界は政府の此誤謬に基く金輸出の禁止のため一大危機に陷つて居る。然るに政府の此重大なる財政上の失政が吾國民經濟道德の上に如何に大なる弊害を來しつゝあるかに就て國民の理解乏しきは遺憾である。

私はこれより金輸出禁止の結果我國の貨幣の價値が下落するに至れる爲め、其各方面に及ぼす影響に就て卑見を述べたい。先づ第一に輸入爲替が貳割壹步下落したことは、壹ケ年の我國輸入品總額拾五億貳割壹步即ち參億千五百萬圓我國が多く外國に拂ふことである、而して此參億千五百萬圓は國民中の誰れが負擔するかと見るに、輸入爲替は輸出業者が拂ふことは拂ふが、結局此貳割壹步に當る參億千五百萬圓は輸入品價格の騰貴を見、其が原料であつても製成品であつても最後は民間の大多數の需要者が支拂ふ事になるのである、此點から見ると金の輸出を禁止し、爲替を貳割壹步下げて居ることは濱口蔵相が聲明**せる通り輸入業者や、輸出品を原料とする製造業者の爲めであ**りとすれば、其等少數の人々の爲めに、大多數の國民が損害を蒙る事となるので、是程不公平、不正義な政治はないのである。尤も此不公平、不正義を敢てする丈の特別の事情がある場合には國民全體が是れを忍ばねばならぬ、例へば戰爭中若くは、戰後も英國の如く特別の難境に立つて居る場合は一時止むを得ぬ政策であるが、我國の如き立場にあるものが戰後六年を經過せる今日、猶金の輸出を解禁せずして輸入品の値段を高くし、多數の消費者に迷惑と損害を與ふる財政策を正しいものとするは毫も理由がない、猶此財政策の不當なることは輸入品の値段が高くなるのみに止まらず、それが一般商品の値段にも波及して結局俸給生活者や、勞働者や其他一定の報酬により衣食する者が酷い目に逢はされるからである、幕府時代に金の小判や、銀貨杯の質を惡るくして貨幣の値が下つた時、幕士共は一時喜んだと書いてある、是は當時の士は米で俸給をもらつて居たから米價騰貴して其代金が餘計に受取られたからである、然し、米價の騰貴と共に他の物價も上がるから年末の仕拂ひに勘定不足を告げて困難せりとある、今日は金で拂はれるから俸給生活者や勞働者杯は始めから損失を招くことになる、次に貯金や、預金者達が損する郵便貯金や預金を引出して物を買へば物が高く**なるから夫れ丈減額されると同一であるから、かゝる財政策は**

不公正である。昨今政府は國民に向つて節約宣傳を行つて居るが此の財政策より見れば節約の反對を勸めて居ることとなる、金を貯めても又圓が下がれば損する危險があるから貯蓄するは考へ物だと言ふて居ると同一である。德川時代に於て十七年間に四回も貨幣の質を惡くしたような財政策を採つたその影響は覿面で江戶兒が宵越しの金を持たぬと言ふ習慣が出來たのはこれが爲めである。今日獨逸の青年中に貯蓄心が全く消失して困つて居ると聞くが、之は尤ものことである。昨今我政府が節約宣傳を盛んに行ひつゝ圓價を下落せしめて居るのは何の意なりや、昔橫濱に弗相場が盛んに流行したことがあるが、今後爲替相場で上がつたり下がつたりすることが甚しくなると爲替の投機が盛んに流行するやうになつて此方面からも堅實なる民心に惡影響を與へる。

我財政當局者は公債募集を打切り、又は少くして民間に資金を增加し、利息を下げんと試みて居るようであるが、これすらも金解禁を行はぬ爲裏切られることは明らかである。金を借すものは金の價を下げられ將來猶金の値が下がる恐れがあると其危險に對する利子の引上げを要求するは、戰時海上保險會社が特別の保險料を要求すると同一である。獨逸では一流の擔保品でも、猶貳割の利子を仕拂はされるに見ても、是れは當然のことで吾政府の利子引下げの政策すらも金解禁を行はず圓價を下げるやうでは實現せぬこと請合である。又、金の値が下がる國からは資本が逃げ出すものである。我國でも多少は逃げたものもあると思ふが、未だ甚しくない。然しながら今後政府が猶今日の如き不自然なる失政を繼續する恐れがある時に、資本は追々逃げ出す時が來ると思ふ。獨逸では頃日漸く貨幣政策が安定した結果、外國の銀行に六十九億金マークが預けてあり、又十二億金マークが外國の公債に投資してあることが發見されたと云ふことである。又一部の人々は輸入爲替で損しても輸出爲替で得するから國としては損得ないと云ふ者もあるが、之れは誤謬だ。輸入爲替を不利にする國の品物は外國に於て安く叩き取らうとすることは一個人の場合を見れば明らかである。例へば或る商品が金に困つて居ると分かれば、其店の物を安く取ろうとして賣出す迄買控へる。我國の生絲貿易の如きも好き例證である、我生絲の需用地である米國では常に日本が投げ出すのを待つて安く買はんとする爲め結局輸出品も安く買はれるから輸出爲替の割合が少々良いからとて我國に何の利益もない、輸出を獎勵刺戟するのは爲替の下がる束の間である、獨逸は一時輸出品を安く賣つて來たが、今日は全く其蔭もない是れは一度貨幣が安定すると反對に貨幣が下落しつゝある間の弊害に惱ま

れるのである。多くの人々の中には輸出品を高くすれば節約せしむる方便になる杯云ふ人があるが物價の上がる爲め一時容景氣を出し、其反對の現象を示すことは我々が眼前に見る通りだ。

元來物價を下げるには國內の信用を收縮する外途がないことは經濟上の原則である。國內の金を出すのは在外正貨を支出して國內の信用を收縮しなかつたから無意味に在外正貨を失ふたのである、國內に於て戰時中膨脹せる信用の收縮を行ふことなくしては、物價の引下げは絕體に不可能である。近年關稅を引上げて產業を振興し、又は助成金杯を與へて輸出を獎勵しよう杯と政府に內議ありと聞くが斯くの如きは皆其的が外れて居る。外國の話に一少女が山に登らんとして、途に迷ひ來合せた老人に尋ねたら反對の方向を指され人を馬鹿にするものと思つて一生懸命眞直ぐに登らんとしても上ることが出來ぬから、老人の云ふた通り反對の方向に步て行つたら終に山の頂上に登つたと言ふ話がある。我國にも急がば廻れと言ふ諺がある。輸出を振興するに輸入を妨害するような政策を採つて唯輸出のみ驀地に振興獎勵しようとするも西洋の此話や吾國の諺の如く其目的を達するものでない。

我國の物價を引下げ貿易の均衡を得て我國民生活を安定せしめようとせば、須らく經濟の常道を步み、膨脹せる信用の收縮を斷行せねばならぬ、然しながら此の手術を斷行すれば英米兩國の經濟界が嘗めた如く一時財界に動搖が起ること、それより生ずる多少の犧牲あることを覺悟せねばならぬ。之を厭ふて徒爾日を送らば吾國經濟界は終には救ふべからざる重大なる危機に陷り容易ならざる場合に立至るは理の見易きものである。然るに政府に之を見るの明なく又民間より之を促がす輿論沸騰せざるは未だ此問題に對する充分なる研究の足らざるか又注意を喚起せざるが爲めであると思ひ聊か卑見を述べて世人に訴ふる次第だ。

大亞細亞主義の意義と日支親善の唯一策

孫　文

本篇は一、二の二講より成る。共に其大意は孫氏が過般日本に滯在中に講述したのであるが、本誌のために其草稿を基本として訂正加筆し特に發表を許したものである。

一、大亞細亞主義の意義

この問題を論ずるに當つて、予は先づ我等の亞細亞が如何なる地方であるかといふことを考へて戴きたいと思ふ。即ち我亞細亞は實に世界最古文化の發祥地なのである、幾千年以前我等亞細亞人は旣に甚だ高い文化に到達してゐた。歐洲最古の國家たる希臘、羅馬の古い國の文化も總て亞細亞より傳はつたものである。我等の亞細亞には以前から哲學の文化、宗教の文化、倫理の文化、工業の文化等を持つてゐた、是等の文化はいづれも古來世界に有名であつて、近代世界に於ける最新の種々の文化は總て我等の是等舊文化より發生したものである。最近數百年以來、我等亞細亞各民族は漸時衰頽し、亞細亞各國家も亦漸時衰弱し、之に反して歐洲各民族は漸時發揚し、歐洲各國家も亦漸時强盛となつて來た。歐洲の各民族が發揚し、各國家が强盛となるに及んで彼等の勢力は漸く東洋に侵入し來り、我等亞細亞の各民族と各國

家とを抽へて一つ一つを滅して行くのではなくて一つ一つを壓迫し來つたもので、三十年前に至つては我等亞細亞の全部は一の完全なる獨立國家無きに至つた。

その時代に至つて世界の潮流は極端に達したのであつて、物極まれば必らず反するもので、亞細亞の衰弱が極點に到達した時、玆に別に一の轉機が生じた、その轉機が即ち亞細亞復興の起點であつて、亞細亞の衰弱は三十年前に至つて復興し始めたのである。その轉機は何處にあつたか、即ち日本が三十年前外國と結んだ一切の不平等條約を廢除したそれに在つたのだ。

日本が不平等條約を廢除したその日こそは、我等全亞細亞民族復興の日であつたのだ！その時より亞細亞の頭に一個の獨立國家が成立したのである。その他の亞細亞に名ある國家即ち支那、印度、波斯、阿富汗斯坦、土耳其、及亞剌比亞等はすべて獨立の國家ではない、皆歐洲より任意に割取されて歐洲の植民地となつてゐる。三十年前は日本も亦歐洲の×××であつたが唯日本の國民がよく發奮努力し歐洲人に對して奮闘してすべての不平等の條約を廢除したため日本をして一獨立國家に變ぜしめたものだ。日本が東亞に於て獨立してより亞細亞全洲の各國家と各民族とは一の大きな希望を生ずるに至り、彼等も亦日本同樣たり得べしと爲し、玆に於て種々の獨立運動が起り、歐洲人の束縛を離脫し、その植民地たらずして亞細亞の主人公たらんとするの思想は、實に最近三十年以來の思想で、甚だ樂觀的のものである。

然るに三十年以前にあつては、我等亞細亞全洲の民族の思想は、大いに之とは異つてゐた。『歐洲の文化はあのやうに進歩してゐる。科學はあのやうに進んでゐる。製造工業もあんなに進歩してゐる、武器は精良だ、兵力亦强盛である我等亞細亞は別に長じた所はない、であるから亞細亞は歐洲に抵抗は出來ない、從つて歐洲の壓迫から脫離することは出來ない、故に永久に、歐洲人の奴隸たらざるを得ない』と云ふやうな、極めて悲觀的の思想であつた。

そこで日本が不平等條約廢除の後、日本は一の獨立國家となつたといふことが日本と接近せる民族と國家に大なる影響を與へたには相違ないが、而も尙亞細亞全洲には傳はらなかつた。斯くて十年を經過して日露戰爭が發生した。日本は露國に戰勝した、日本人が露國人に勝つた。即ち亞細亞民族が最近幾百年の內に始めて歐洲人に勝つた。この戰爭の影響は直ちに全亞細亞に傳はつた。全亞細亞の民族は歡天喜地した、そこに一つの極めて大なる希望が生れたのである。

之は予が親しく見聞したところである。日露開戰當時予は歐洲にあつて東鄕大將が露國海軍を擊破したとの報を聞いた、露國が歐洲より派遣したバルチツク艦隊は日本海に於て全滅したとの消息が歐洲に傳はつた。歐洲全部の人民は之を悲しむこと父母の喪の如く、英國は日本の同盟國でありながら、英國人士はこの報を聞くや大多數はやはり心配顏であつた。『日本が大勝利を得たことは結局白人のためにはならぬ。』といふことは、英國で所謂 Blood is thicker than water の觀念から來てゐるのである。

予はそれより間もなく、汽船で亞細亞に歸つて來たが、途中蘇士運河を通過する際、許多の土人が予を見に來た。土人は多く阿剌比亞人であるが、彼等は予が黃色人種なのを見て非常に嬉しさうな顏付をして、予に日本人かと聞くのである、予は然らず支那人だと答へ、何故そんなに燥やぐのかと尋ねると、彼等は答へて曰く、『我々は今非常に喜ばしい消息を得た。日本は露國の全海軍を全滅させたといふではないか、本當だらうか。我々は運河の兩岸に住んでゐて、露國の傷兵が一船每に歐洲に運ばれて歸るのを見るが、之は屹度露國が戰爭に大敗した爲めだと思ふ』と。

今まで我等東方有色民族は、常に西方民族に壓迫され、受くるものは常に痛苦であつて、頭を擡げる日とてはないものとしてゐた。然るに日本は、露國を破つたので、我等東方民族が西方民族に戰勝したと同樣であるとて歡喜したので

ある。日本の露國に對する戰勝は全亞細亞民族に如何に影響したか、その影響は大きくはなかつたか、日本の戰勝の報を聞いた時、東方の亞細亞人は或者は左程重要視せず狂喜しなかつた。たゞ西方の亞細亞人は歐洲人と反目の間に朝夕相まみえ、毎日彼れの壓迫を受け、毎日その痛苦を受け、その受くる壓迫は東方に比して遙かに大であり深刻であるから、彼等が日本の勝利を聞いた時の歡喜の狀は、我等東方の人々に比ぶべくもない程であつた。

日本が露國に戰勝の日より、亞細亞全洲は歐洲の打破を想ふに至り、斯くして獨立運動は發生するに至つたのである。埃及に獨立運動あり、波斯、土耳古に獨立運動あり、阿富汗斯坦、阿刺比亞に獨立運動あり、印度人も亦是より獨立運動を始めたのであつた。即ち日本の戰勝の結果は、亞細亞民族獨立の大希望を生ぜしめたもので、この希望發生の日より今日まで僅かに二十年に過ぎないのである。埃及の獨立は事實となつた。土耳古の完全なる獨立も事實となつた。波斯、阿富汗斯坦、阿刺比亞の獨立も實現した。而して最近印度の獨立運動も亦日一日と發展しつゝある。この種獨立の事實は、亞細亞民族の思想が、最近進歩したことを表示するもので、この進歩發展せる思想を以て、亞細亞全洲の民族が聯絡して起つたならば、始めて全亞細亞民族の獨立運動は成功の域に達するのである。

近來、亞細亞西部の各民族は、互に甚だ親密の交際をなし、極めて敦睦の感情を持ち、彼等は既に聯絡して立つたのである。亞細亞東部の最大民族は支那と日本である、支那は日本と同じくこの種運動の原動力である。然るにこの種原動力の發生した後、我等支那人は今日之を知らず日本人も亦、今日之を知らない。故に支那と日本とは現に未だ大きな聯絡はない。將來潮流の向ふ所、我等東方の各民族は、必らず聯絡を要するのであつて、亞細亞の東西兩方の民族に發生せるこの種の潮流は、更にこの事實の根本の實現即ち我が亞細亞の從前の地位恢復を要求するのである。

（二）

この風潮を見て米國の學者の一人は一書を著はして、專ら有色人種の勃興を論じた。この書の内容は、日本が露國を破つたのは黄色人種が白人を破つたことである、將來この潮流が擴大して後、すべて有色人種は相聯絡して白人に對抗するに至るであらう、即ち白人の禍となるのであるから、白人は應にこの患ひを豫防することを考へねばならぬといふのである。彼は次で又、一書を出して、一切の民衆解放の運動を排斥し、是を文化に對する叛逆運動であるとした。歐洲に於ける民衆解放運動は、彼の主張に從へば、元より文化に對する叛逆となるのであるから亞細亞に於ける民衆解放の運動はなほ更、叛逆のことに相違ない。

この思想は歐米に於ける一切の特殊階級にすべて共通であつて、彼等は既に、少數を以て、彼等の本洲と本國との多數人民を壓制し來つたのであるが、更にこの流毒を亞細亞に推し擴げて、我等十二億の民族を壓制し來り、我等十二億人の大多數を彼等少數人の奴隷と爲さんとするのだ。何といふ慘酷であらう、眞に痛恨の至りではないか。

而して右の米國學者の論調は更に亞細亞民族の覺醒を以て、世界文化に對する叛逆としてゐる、以て歐洲人が自ら文化を傳授する正統と爲し、自ら文化の主人公に任じてゐることが判る。歐洲人以外に文化の發生があり獨立の思想がある時、叛逆と見做すのであつて、歐洲の文化と東洋の文化とを比較して當然彼等は歐洲の文化を以て、正義人道に合する文化とし、亞細亞の文化を之に合せざる文化とするのである。

最近數百年の文化に就てのみ論ずれば歐洲の物質文明は發達を極め我等東洋のこの種の文明は進歩しなかつた。皮表的の觀察を以て比較すれば、歐洲は當然亞細亞に優つてゐるが、而も深く根本的に解剖し來れば歐洲の最近百年は何の

文化であつたか、それは科學の文化だ、功利に傾倒した文化だ、この種の文化が人類社會に應用される時、そこに唯、物質文明を見たのみである。唯、飛行機、潜航艇、爆彈、毒瓦斯、鐵砲、大砲あるのみだ。全く一種の武力的文化ではないか。

歐洲人は近來專らこの武力的文化を用ゐて、我等亞細亞を壓迫し來つたのである。我等支那の古い言葉を以て言へば「覇道」を行ふものだ。故に、歐洲の文化は、覇道の文化なのである。併しながら、我東洋にあつては、古來、覇道の文化を蔑視し他に一種の文化を有してゐた。遙かに、覇道の文化に優るこの文化の本質は、實に仁義道德である。この仁義道德の文化は人を感化する、決して人を壓迫するのではない。人をして德を懷かしむるもので、決して人を威嚇するものではない。この人に德を懷かしむる文化を、我等支那の古い言葉で云へば、是れ『王道』を行ふものだ。故に亞細亞の文化は、即ち王道のそれである。

歐洲の物質文明が發達して、覇道大いに行はれた後、世界の國家的道德は日一日と退歩して行き、而して亞細亞の高尚なる道德も亦、之が爲に振はなくなつた。唯近來、歐米一部の學者のみは、稍東洋文化に注目し漸く東洋の物質文明をも知るやうになつたが 之は西洋には如くべくもない。併し乍ら、東洋の道德に至つては、西洋に比して遙かに高いのである。

覇道の文化と王道の文化とを比較する時は、畢竟、前者は民族と國家を利せしむるものであり、後者は正義と人道を助けるものである。予ま之を例證しやう。五百年乃至二千年以前に於て、支那は世界最强の國家で、當時の支那の地位は、現在の英米のやうなものであつた。英米今日の强盛はなほ列强であるが、支那當時の强盛は獨强であつた。支那が獨强時代に當つて、各弱小民族と各弱小國家とはどうであつたか、當時是等が支那に對してはどうであつたか、當時各弱小民族と國家とは、すべて支那を拜して上邦と爲し支那に來貢し、支那ま彼等を藩屬として之を容れた、彼等は支那に朝貢するのを光榮として相爭つて來集し之を爲し得ざるを恥辱とした。當時朝貢するものは、たゞに亞細亞各國のみ

ならず、歐洲、亞弗利加、南洋の各國までも遠路を恐れず來朝したものであるが、斯く多數の國家と、斯くの如き遠隔の民族を朝貢せしむるのに就て、支那は如何なる方法を用ゐたのだらうか、決して陸海軍の覇道を用ゐはしなかつた。彼等の朝貢を强制したか、然らず。支那は實に、完全に王道を用ゐて彼等を感化したのだ。彼等は支那の道德を懷しみ、甘んじて自ら志願したもので、その朝貢し來つたものは、彼等が一に支那王道の感化を受けたのだ。

彼等の來貢は一回に止まらず、子々孫々も總て支那に朝貢して來たもので、この事實は最近に至るもなほ證據がある。例へば、印度の北方にネパール、ブータンの二小國があるがこの兩國は小さいけれども、民族は頗る精悍で勇敢によく戰ふ。ネパールの民族はその內でも更に勇敢で、現在英國が印度を統治し多年ネパールの壓服を謀つたが、英國はよく大印度を滅してその植民地としたけれども、この小ネパールを輕視するを得ず、毎年なほネパールに金を費し、政治を調査するため官吏を駐紮させてゐるのである。今日世界最强の國家たる英國にしてなほ、斯の如くネパールに對し恭敬であるから、ネパールは亞細亞の一强國とも見られる。ネパールのこの强國が英國に對してはどうであるか、英國は印度を滅すに費したと同じ百餘年の長年月の間强壓した。併しながらネパールは、英國に朝貢しないのみならず、却つて英國から歲費を受けてゐるのである。ネパールと支那との關係はどうであるか、支那の國家地位は、現在一落千丈、英國の一植民地にだに及ばざるものであつて、ネパールとは又西藏を隔てて遠く離れてゐるのであるが、ネパールは今に至るもなほ、支那を拜して上邦となし、民國元年にはなほ支那に進貢して來た。近來交通不便に因りその後は來てゐないが、ネパールの支那と英國とに對する態度の相違は、奇怪であらうか。

ネパール民族の支那及び英國に對する態度を例に取つて說くも、支那の東方文明と英國の西方文化とが比較し得られるのであつて、支那の國勢は數百年衰微してはゐるが、たゞ王道の文化によつてネパールをして上邦となさしめるだ。英

國は現在頗る強盛で甚だ好き物質文明を有してゐるけれども、而もネパールの理解せざる所である、之によつて視るも、ネパールが眞に支那の感化を受けて、支那の文化を視て眞の文化となし、英國の物質的文明を文化と認めないで、單に覇道と視てゐることが解せられるのである。

（三）

我等は今大亞細亞主義を論じて茲に到たが、畢竟するに問題を簡單に言へば、即ち文化の問題に外ならない。即ち東方文化と西方文化の衝突の問題なのである。東方の文化は王道であり西方の文化は覇道である。王道を講ずるものは仁義道德を主張し、覇道を講ずるものは功利强權を主張する。仁義道德を講ずるものは、正義と公理を用ゐて人を感化し、功利强權を講ずるものは鐵砲大砲を用ゐて人を壓迫する。感化を受けた人々は之を受けた國が幾百年衰微するとも尙之を忘る能はず、ネパールの如く今に至つても、自ら願ふて支那を上邦として拜するのである。之に反して壓迫を受けた人々は、之を受けた國が、當時甚だ强盛であつても、常に脫離を想ふものだ。埃及、印度等は時々刻々英國より脫離を欲し時々刻々獨立の運動をなしつゝあるもので、たゞ英國の大武力の壓制の下に在つて、一時成功しないのに過ぎぬ。假りに英國が一朝衰弱するならば、埃及、印度は五年を待たずして、彼等は馬上英國政府を推翻して自己の獨立地位を囘復し來るに相違ないのだ。

東西文化の優劣は茲まで說き來つて、自然に明暸となつた筈である。我等は現在この新世界に處して、我等の大亞細亞主義を造成しなければならない。それには何を用ゐて基礎としなければならぬかと云へば、應に我等の固有の文化を用ゐて基礎とし、道德を講じ仁義を說かねばならない。仁義道德は即ち我等の大亞細亞主義の好基礎である。我等はこ

の好基礎を有して外に更に、歐洲の科學を學び、工業を振興し、武器を改良すべきである。我等自身が工業を振興し武器を改良するので、歐洲に學ぶのは決して歐洲が他の國家を滅ぼし他の民族を壓迫して來たことを學ぶのではなく、我等は自衛を學び來るのだ。近來亞細亞の國家は歐洲の武功文化を學んだ、その代表的なのは日本である。日本の海軍の製造、海軍の運用は歐洲人を頼らない。日本の陸軍の製造、陸軍の運用も獨立し得る、故に日本は東方亞細亞に於る完全なる一獨立國家である。我亞細亞はなほ一の獨立國家を有してゐる、それは歐洲大戰に當つて同盟國の一方に加入し一敗地に塗れ既に分割されたが、戰後歐洲人を驅逐し、現在一の完全獨立國家を成すもので、即ち土耳其である。實に亞細亞には唯二つの大なる獨立國家がある、即ち東は日本、西は土耳其で、日本と土耳其の兩國は、亞細亞東西の二大藩塀である。現在波斯、阿富汗斯坦、阿剌比亞も歐洲を學んで大いに武備に努めつゝあるので、歐洲人も敢て輕視しない。ネパールの民族に至つては、英國人は尚更、等閑視しない、從つて相當の軍備がある。支那は現在頗る多くの武備がある、統一の爲には極めて大勢力が出來る筈だ。

我等が大亞細亞主義を講じ亞細亞民族の地位を回復するに當つて、唯仁義道德を以て基礎となし、各部の民族を聯合して亞細亞全部の民族の優勢を圖ることは、歐洲人に對する爲めに外ならない、單に仁義を以て彼等を感化し亞細亞に在る歐洲人となつて貰ふべきだが、是等の平和的手段で盜んだ權利を還さしむることは、虎と皮の相談をするやうなもので、出來ないことでゐる。我等が完全に主權を回收するには之を武力に訴へざるを得ざるに至るであらう。再び言ふ武力に訴ふるに至らば、日本は夙に完全の武力を有し土耳其も最近頗る完全せる武力を有するし其他、波斯、阿富汗斯坦、阿剌比亞、ネパールの各民族も總て古來善戰の民族であり、我等支那人四億は、昔より平和を愛好するが、唯、生死存亡の場合に至らば、又從來の主張を捨てゝ武備を講ぜざるを得ない。故に馬上極大の武力を成し得られる。若し果

して亞細亞民族が全聯合して起ち、この固有の武力を用ゐて歐洲人と決戰するならば、確かに有勝無敗である。

更に歐洲と亞細亞の人數に就て比較するなら、中國は四億人、印度は三億五千萬人、緬甸、安南、暹羅、馬來は數千萬人あり、日本數千萬人、其他各弱小民族數千萬人、實に我が亞細亞人の數は、全世界總數の四分の三を占めてゐるのである。歐洲人は其の數四億に過ぎない、我が亞細亞全洲の人數は十二億ある。四億の少數人を以て十二億の多數人を壓迫し來るのは、正義人道と相容れざるもので、正義人道に反する行爲は遂に失敗に歸するものだ。

しかも彼が四億人中、近來我等に感化されたものがあり、現に世界文化の潮流は、英米にあつても少數の仁義道德を提唱する者を生じ、其他の强權の國に於ても同樣に提唱されるに至つた、是によつて觀るも、西洋の功利强權の文化が東方の仁義道德の文化に服從するに至りつゝあることが判る、即ち霸道が王道に服從することで、又世界の文化が日に光明に趣きつゝあることである。

現在歐洲に一の新國家がある、この國家は歐洲全部の白人の排斥するところで、歐洲人は彼を蛇蝎視し猛獸視して、全く人類ではないとするのだ。そして彼とは接近もしない。我等亞細亞にも歐米の流毒の宣傳を受けたため、同樣の眼で觀てゐるものが甚だ尠くない。その國家は即ち露國なのである。露國は現在歐洲の白人とは分家の形である、彼は何故に斯る扱ひを受くるのであるか、夫れは彼が王道を主張して霸道を主張せず、仁義道德を講じて功利强權を講ずるを欲せず、彼が極力公道を主持して少數が多數を壓迫することに反對するからである。

斯る情態を見れば、露國の最近の新文化は、頗る我が東方の舊文化に合したものであることが分る、從つて彼は西洋と分家し來つて東方と提携し得られるのである。歐洲人は露國の新主張が彼等の主義に合せざるため、彼のこの種の主張が成功して彼等の霸道を打破するを恐れるかため、露國の仁義正道を云はず却つて彼を世界の叛逆と誣ふるのである。」

予が大亞細亞主義を論じて研究し來つた結果、畢竟如何なる問題を解決しやうとするのであるか。其は亞細亞の苦痛を受けつゝある民族が、如何にして歐洲の强盛なる民族に抵抗すべきかといふ問題となるのである。之を簡單に言ふならば、即ち被壓迫の民族が其不平を打ち破る問題なのである。壓迫を受くる民族は單に亞細亞ばかりに在るのではない、歐洲内にもあるのである。覇道を行ふ國家は、啻に他洲の民族及び國家を壓迫するに止まらず、尚本洲本國の内に在つても同樣に壓迫を行ふものである。予は大亞細亞主義を論じて、王道を基礎として不平を打破せよといふのである。先に述べた米國の學者は、一切の民衆解放の運動に對して文化の叛逆であると看做すのであるから、今日予が主張した不平を打破する文化は、正に覇道に叛逆する文化である。一切の民衆の求むる文化である。日本民族は既に歐米の覇道の文化に到達したのであるが、亞細亞王道の本質をも有してゐる。今日以後に於て、日本が世界文化の前途に對して西方覇道の鷹犬となるか、或ひは東方王道の干城となるかは、諸君日本人が愼重に考慮してその一を選ぶべきである。

二、日支親善の唯一策

支那と日本との關係から見て、いづれの一方面から論じても、兩國の國民がよく相提携し協力して行き共に兩國の前途の發展を謀らねばならないのである。譬へば、予が今回我支那の時局に因り廣東を出發して南支より北支に到らんとするのは、我家の邸内の南の方から我邸内の北の方へ行くやうなものであるが、それを道を廻つて日本に來たといふこ

とは、即ちお隣の日本人の家の庭を通して戴いたのと同樣である。たゞ予が我邸内の南方から北方へ行くのに、日本人の家の庭を通ることになつたのは、全く交通方面のことにのみ就て云つたのであるが、支那と日本との關係は凡そ斯くの如く密切であつて、其他の種々の關係は之よりも更に密切なものであつて、我等兩國の國民の從來の口頭禪は、すべて支那と日本とは同文同種の國家であつて即ち兄弟の國である、兩國國民は應に提携しなければならぬ。從前日本の維新の元老は、維新に於て兩國提携に就き成功の時がなかつた。日支兩國提携の元からの提唱を現在の日本の維新は既に成就することになつたといふのであるが、之は兩國民の口頭禪であつて、實は未だその目的は到達されてゐないのである。

之は何に原因するであらうか、夫れは我等支那が是まで眠つてゐたからである。日本が維新の幾十年を經過する間、支那は夢の中に在つたのだ。毫も知らない。それから近來世界の大變遷を經過して歐米の勢力が東侵して支那を壓迫し來つたが、支那は依然夢の中で何も知らなかつた。遂に十三年前に至つて支那に革命が起きた。支那に革命を起したのは、少數の先覺者の提唱に因つたもので、政治の改良を說き國民の覺醒を促し國家の地位を從前同樣に恢復せんことを主張したのである。故に革命は起つたのであつて、支那の第一革命は單に時機の問題に過ぎなかつた。日本の先の維新の時機とは大いに異なつてゐる、日本の維新の時代は歐米の勢力が未だ完全に東に延びて來てゐない時で、東亞に於ても別にまだ障碍はなかつた。日本はその時に既に、軍備を整へ武を練り政治を刷新し何の制肘も受けずして、すべてが頗る自由であつたので、日本の維新は完全に成功を收め得たのであつた。我支那に於ける十三年前の革命の時代は、歐米の大勢力が夙に早く東亞に侵入してしまつた後のことであつたから、支那の周圍は總て强國で、四圍はすべて障碍であつた。一件を遂行せんとするに當つても、種々の困難を經なければならなかつた。即ち困難を切拔けて後もまだ、日

的に到達することが出來ない、それ故革命十三年今に至るも尚成功しないのである。

我等革命黨は支那にあつて、この十數年以來、本來の目的たる滿清の舊皇帝を既に倒した、袁世凱の新皇帝を消滅させた、其他種々の障碍を除去した。最近に於ては即ち曹錕、呉佩孚の大軍閥も亦我等の推倒する所となり國内に於ける革命の障碍に對しては總て我等によつて消滅し盡されたのである。我等は國内に在つては最早革命の障碍を有しない、既に革命の障碍なき以上、革命は當然成功しなければならぬのであるが、何故なほ成功し能はずと云ふのであるか。何故に未だ圓滿に目的を達するを得ないのであるか。是れ實に國外の障碍が尚存し未だ之を打破することが出來ないからである、この國外の障碍といふのは即ち支那が先に外國と締結した不平等條約なのである。之等の條約の字句に從つて説くならば甚だ簡單明白のものであるが、その内容に就て論ずるならば、たゞに支那人自身が不明なるのみならず、日本の傍觀者と雖も容易に理解出來ないであらう。

予が玆に不平等條約の大略を述べて見るならば、是等の條約の根據は、以前支那と十餘個國の列國と締結したもので、外國は支那と是等の條約を完了して支那と不平等の地位に立ちて支那を壓迫するに用ふる爲め、種々特別の權利を得たのだ。それが歐洲大戰の結果、獨逸と墺國とは、この不平等條約を廢除した。獨墺は現在に於ては最早、支那に對し特別の權利を享有してゐないのである。斯く獨逸と墺國とがこの種の條約の廢除を行つた所以のものは、彼等の國家が戰爭に敗れ我支那の要求を容れざるを得なかつたからである。

然るに近頃露國も亦、支那に對し不平等條約を廢止した、露國が之を廢除するに至つた原因は、露國の革命の後、彼が大いに公道を主張しこの種の條約が甚だ不平等であつて支那に對して頗る道理を盡さないものであるとの理由に基くものである、故に彼等は自ら進んで不平等條約の廢止を希望し露國は支那に於て享けた權利であるこれ等不平等の條約

を支那に還したのだ。故に現在では三箇國が既に廢除を行つたのであるが、なほその他の十數箇國は廢除せず依然として、我支那の主權を把握してゐるのである。一體この不平等條約といふのは結局何であるか。即ち昔支那政府が我國民を外人に賣つたことなのだ。一種の賣身契約の證文なのである。さうして現在に至つてもなほ、この賣身契約を十三ケ國が握つてゐるのだ。即ち我等はなほ十三人の主人を有し我等は之等十三ケ國の奴隷となつてゐるのだ。十三ケ國の植民地となつてゐるのだ。一國の植民地となることは左程ではないが、十三ケ國の植民地となることは、非常なる苦痛である。

譬へば、濠洲は英國一ケ國の植民地であり、加奈陀は英國一ケ國の植民地、南亞弗利加も英國一ケ國の植民地であり、新西蘭も亦、英國一ケ國の植民地である。而して英國が平時に於て、是等の植民地から受くる權利といふのは、極めて少いもので而も之等殖民地に對して負ふ所の義務は、甚だ大である。然るに之等の植民地の母國たる英國より受くる權利は、却つて非常に大きい。我が支那は十三ケ國の植民地なのであつて、之等の十三ケ國は、英國とその植民地に於ける關係とは異つて、唯支那に來つて特別の權利を受くるのみだ。只支那人を虐待するのみだ。毫も義務は盡さないのである。だから我等支那人は人の奴隷となつてゐて而も少しもその主人から惠まれない。たゞ虐待を受くるのみだ、たゞ苦痛があるのみだ。さうして支那の内に押し込められ、行くべき道もないといふ慘めな狀態にあつて、寧ろ外國へ駈け出して、一箇國の奴隷となる方がましである。

恰度廣東人に就て考へて見れば、近く香港まで駈け出すと、更に少々遠いが南洋諸島や南北米へ駈け出すことになるのである。此等の支那人は外國まで駈け出した後は、總て二度と祖國へ歸つて來やうとは思はないのである、一國の奴隷となる方が、十數國の奴隷となるのに較べると、遙かに愉快だと思ふやうになるからである。

支那は現在十三箇國の植民地で、一個の獨立國家では決してない。支那の地位を他の植民地に比較すると、更に一段低級である。そこで予は「次植民地」とでも呼ぶべきだと思ふ。我等の領土は米國よりも遙かに大きい、我が人民は四億であつて之も米國の人口よりはずつと多數である、而して米國は現在世界に於て最も富み且つ最も強い國家であり、我等の支那は斯の如く領土大にして民族は斯の如く多きに拘らず、なほ一個の獨立國家をすら成し得ないのである。この原因に就て考へると甚だ多くあるけれども、最も主要の原因は、即ち右に述べた如き不平等條約の壓迫を受くるが爲めである。繰り返して言ふ我等の支那は獨立國ではない、是れ十三ヶ國の植民地だ、而も支那人自身は未だこの事實を知らないのである。予は日本人も亦、この事實を知つて居ないと思ふ。

日本は現在に於ては、東亞最强の獨立國家であり且つ世界列强の一である。若し果して日本が眞に支那が十三ヶ國の植民地であることを知るならば、一獨立國家が植民地と相親善を求むるもので、予は之は出來ない相談であると思ふ、この理を明らかならしめる爲めに、私は一つの昔噺を以て說明しやう。

我が廣東に昔甲乙二人の友人があつた。甲は廣州人で廣州に於て頗る勢力があつて、地位のある一個の紳士といふ所であるが、乙は元來田舍の世僕（世僕といふのは廣東の習慣で家庭内の永久的の奴隷の稱で北方での老家奴といふに似てゐる）に過ぎないもので、未だ奴隷の地位を脫してゐないものである。乙は後に廣州に出て來て、當つて大金持となり、又大いに勢力も出來た。友人の紹介で、甲と相知るやうになり甲と朋友になつたのであるが、或日甲の友人が乙を御馳走に招いたので、甲乙兩人は頗る得意で街上を濶歩しつゝ愉快に語りながら、料理屋に行くその途中で、乙ははたと乙の主人に出くわしたのである。この主人といふのは、たゞの田舍の一老爺に過ぎない。彼は田舍から町にやつて來たので勿論いい着物などは着てゐない。靴も穿いてゐない、手にはたゞ一本の大傘を持つてゐるきりで、長い道中をしたので身體は非常に疲れてゐた、そこへ偶然に世僕たる乙に出遭つたので、老爺は少しも遠慮なく馬上で乙に云つた、「俺は長いことお前を見なかつたが、お前はゑらく變つたものではないか、今日は立派ななりをしてゐるが、お前は何處

へ行ゝのかね、俺は道中をしてひどく疲れたで、お前はこの大傘を差して俺について來いよ」。乙はその川合親爺の下僕であるから斷る譯には行かない、彼は主人の大傘をさして彼に隨いて行かねばならなかつた。そこで乙は友人の甲と御馳走に行けなくなつたのである。

我支那と世界各國とは許多の利益均霑の條約を締結してゐる。日本自身は支那が奴隷であつて、日本がその主人であることを未だ覺つてはゐない。毎日日支親善を提唱してゐるけれど、丁度右の話の甲が友人に招かれて乙と食事に出掛けてゐるやうなもので、途中忽ち乙の主人に遇へば、その主人は乙に傘を差させて行つてしまふ、そして甲は乙とは御馳走に行けなくなつてしまふのである。支那の現在は即ち一個の僕僕であつて、自由人ではない。十幾人かの主人を持つてゐる、日本は我等と親善を欲する。即ち我等と食事に招かれて行くのである。支那と日本とが同じ路を行く時に、支那がその第一の主人に出會はなければ、その第二の主人に出遇ふのである。第三の主人に出會はなければ、第四の主人に出遭ふであらう。さうして第十幾人目の主人に至つて、之等の主人と支那人とは初めて出會はす機會がなくなるのである。支那がこれ等の主人に遭へば、彼等の傘を持つて行かねばならぬ。即ち日本人に、如何に支那人を御馳走するの誠心誠意があつても、御馳走にはありつけない、即ち目的を達することは出來ないのだ。支那は之がために日本との親善を實現することが出來ないのだ。若し日本に眞に誠意があつて、支那と親善たらんとするならば、先づ支那を援助して不平等なる條約を廢除し、主人の地位を撤回せしめ、支那をして自由の身分とならしめよ。然らば支那は、正に日本と親善たり得るのである。我等の口頭禪の如く、日本と支那とは同種同文の國家であつて兄弟の邦である。幾千年の歷史と地位から論じて來ても、支那は兄であつて、日本は弟である。論じて茲に到らば、兄弟が相集まり一家の内に親睦を圖ることが必要であつてそれには弟たる諸君日本人は諸君の兄が既に十三箇國の奴隷となつてしまつてゐて今日まで非常に苦しみ現在もなほ苦しみつゝあつて而もこの苦痛の原動力が、不平等の條約であることを知らねばならない。更に諸君は、弟として兄の爲めに憂ひを擠ぎ、兄を助けて奮鬪しなければならない。不平等の條約を改良し、奴隷の地位を脫して然る後に於て、日本と支那とは、正に再び兄弟となり得るのである。(飜譯の責任は本社記者に在り)

日露交渉の過去現在及び將來

エス・スレパック

一

目下北京に於て芳澤氏とカラハン氏との間に行はれてゐる交渉に關して、無數の報道や言説が公にされてゐる。諸新聞紙に加ふるに東方、國際、日本電報等の諸通信社は、日々種々雜多な報道を齎らして、日本の公衆を悩ましてゐる。されぱこの退屈極まる交渉の經過に愛憎をつかした日本の讀者諸君は、私のこの一文に接しても、早急に頁をめくつて仕舞つて、モツト面白い記事に接しやうとされはしないかと、私は心から氣づかつてゐる。しかし讀者諸君はこの一文に於て、興味あるとまでは行かぬにしても、尠くとも今日まで與へられたものとは異つた或るもの、より打開けた、より直截な或るものを發見されるに違ひない。讀者諸君がこの簡單な序詞によつて、この一文を注意して讀まれんことを希望して止まない。

日露兩國の國民が一日も早く兩國の國交恢復を希望してゐることは、周知の事實である。更に進んで、單に普通の國交のみでなく、兩國間の眞に友好的な關係の萌芽を生み出す如き空氣を醸成せんとする希望が、兩國の國民の間に漸次成長してゐる。勿論から云ふ種類の言葉は、ヨーロツパ及び亞細亞の强國の政治家等が、時にとつて必要無害と思ふ場合にはいつでも口にするところで、今日左樣な言葉を口にしながら、明日になると手の平を返したやうに敵對的好意に出でたり、昨日は最友邦と呼んだその國家を今日は猛烈に攻擊したりすることは、讀者諸君のよく存知してゐることである。不幸にもそれが、現代のこの美しき世界に於ける、國際關係の常態なのである。しかし讀者諸君の知らるゝ通り、私は第一に政治家でも何でもなく、米國の大統領の候補に立つわけもなければ、英國の高官の椅子を爭ふこともない。だから私には投票を搔き集める必要もなければ空御世辭を振りまいたり、目的のために手段を弄したりする必要もない。

一九一七年の終りに較べて今日の世界は多少その面目を異にして居り、今日世界の諸國家の間に一個の新らしい國家が介在し、その國家は人間對人間、國民對國民の關係に於て、一個の新らしい様式を創造しやうと努めて居ることは、讀者諸君の熟知せらるゝ所と思ふ。その國家は言ふまでもなく我が勞農ロシヤである。勞農ロシヤの政治家及び今日のロシヤについて責任ある言葉を發する者が勞農ロシヤと他の國家との關係について言を僞したり、何等かの聲明を發したりする場合には、何物をも包み隱さうとはせず、極めて打明けた直言的な言葉を使ふのが常である。このことは今日如何なる人も認むるところであつて、ブルジョア世界の政治家連をひどく怒らせるのも、實に勞農ロシアの政治家の使ふこの直截な言葉である。そう言ふわけであるから、こゝに私が、ロシア國民は日露間の國交恢復の結果として兩國間の眞の友好關係の萌芽を造り出す如き雰圍氣の醸し出されんことを希望してゐると述べても、私は實際に、眞摯にそれを希望してゐるのだといふことを、了解して戴き度い。これはまた同時に、この一文中に私の述ぶる凡てに、當て嵌まることである。打明けて直截に語ることは、或る人々には氣持のよいことでないことでないかも知れぬが、人間對人間、國民對國民の眞の了解を確立し、相互の不信と疑念とを取除く唯一の道である。

二

然らば何故、近き將來に於て日露兩國間に眞の諒解の樹立さるゝ階段に未だ達せず、兩國間の普通の國交さへまだ恢復されないのであるか？これが理由は多々ある。しかし先づ第一に日本にも、その他强國の名をもつて呼ばるゝ諸國家にも一樣に適用さるゝ共通の理由がある。その理由とは、日本もその有力な一員たる資本主義世界は、一九一七年十一月七日、露西亞ソヴイエツト聯邦社會主義共和國といふ新らしい、恐る可き名前を掲げて地上に出現した新國家を破壞せんとする希望を長い間抱いてゐたこと、是である。その世界强國群中の有力なる一員たる日本も、勿論全力を擧げて彼等の共通目的の實現に貢獻せんとした。資本主義世界に對するこの不測の脅威を一刻も早く絶滅しやうと云ふ共通の目的のために働いた。この高貴な資本主義國家の理想の背後には、言ふまでもなく多くの實際上の動機が潜んでゐた。新勞農ソヴイエツト國家を破壞すると同時に、×××××××××、××××××××××××××××××、或はその兩者を兼ね用ひて、出來得る限り自國を利せんとすること是である。勞農ロシアの内政に干渉せんと計つたこの聯合國の陰謀に、貢獻を惜まなかつた日本の人士

は、ボルシエビキの魔手から、哀れなるチエツコ、スロバキアの捕虜を救ひ出すのだと高唱して、西伯利に出兵した。或はまた諸種の堂々たる理由を構へて、××××××××、露西亞國民を强要して、聯合國にとつては都合がよいが露國々民自身にとつては一向有難くない制度を樹立させやうと圖つた。これらの堂々たる、或は巧妙な言辭の背後に、出來得る限り多くの×××××××××××やうとする眞の欲望が潜んでゐなかつたと誰が言ひ得るか？日本の資本主義が他の國々の資本主義と同樣、何の障害もなく、その富源を利用し得る地域を手に入れやうと熱望してゐるのを、我々は熟知してゐる。この欲望は支那本土及び西伯利に對して特に强烈であることも、我々は知つてゐる。我々はまた、この欲望が今日猶日本の外交政策の重要なる一要素であることも知つてゐる。日本の資本主義は一九一四年の世界帝國主義戰爭に際し異常なる發展を見た。その時に當つて日本資本主義に擁立された××××××××××××××××、××××××××××××××××××、×××××××××××××。この誘惑は强かつた。されば所謂聯合國の干渉と相並んで、西伯利に對する日本の軍事的干渉が始まつたのである。

露西亞の民衆が全資本主義世界を向ふに廻して、自己の生存權のために、何者によつても左右されないために、惡戰苦鬪した歷史の最初の最も悲慘なる頁を、私はこゝに詳しく說かうとはしない。私はまた××××××××××、聯合國軍隊特に日本の軍隊といかに激烈な爭鬪をして、その生活權を保有し得たかを、こゝに說かうとはしない。日露の關係に興味を有つてゐるものは一人殘らず、この間の事情を熟知してゐる筈である。私はたゞ日露の關係を、全然新らしい基礎で樹立しやうとする場合に、日露關係に於ける此事實を決して忘却してはならぬことを、讀者諸君に注意しておき度いのである。

とは言へ日本の軍閥と、西伯利出兵に際して軍閥を支持した日本のブルジョアジーとは、一歩々々退却して結局西伯利から全く撤退して仕舞つた。この日本軍の西伯利撤退は、日本の軍國主義者にとつて眞に斷腸の思ひなるものであつたに相違ひない。他の聯合國の干渉軍が全部西伯利を撤退した後でもなほ、日本の軍國主義は干渉の繼續が更に形勢を惡化する所以であることを認めず、遲かれ早かれ全軍を撤退するの止むなきに到ることを認めなかつた。××××××××××××××××××××××××××、×××××××、××××××××××××××人形を動かすことに腐心した。それらの操り人形は名目上極東露西亞に於ける合法的露西亞政府の役目

を演じやうとするものであつたが、實は自己に利益にさへなればどんな主人にも奉仕する者共で、この場合日本軍閥の走狗に外ならなかつたのである。かくして浦鹽斯德には日本の劍戟に保護されて極東露西亞を「支配」し、手當り次第に棄値で利權を日本の商人に賣つて自己のポツケツトを膨らませやうとしたメルクロフ兄弟が起つた。その後更に事情が變化して、浦鹽斯德には同じ型のデイトリツクス將軍、カムチヤツカにはボヒカレヴが起つた。凡てこれからの出來事は、日本のブルジョアジー自身が干渉繼續の無益を知り、日本の軍事當局に對して此やくざな惡戯の廢棄を強要してゐた間の出來事であり、他の諸强國が既に露西亞に對する軍事的干渉の無力を知つた時に、依然として西伯利に行はれてゐたことである。

右に述べた所は勿論日本の西伯利干渉史の極く小部分に過ぎない。その全歴史を叙述すれば正に浩翰な一書を成すほどで、それはこの場合の業ではない。私の言はんと欲するところは、露西亞に對する他の强國の干渉のある場合と同樣、西伯利に對する日本の干渉のある間は、當時の勞農ロシアと外側の資本主義國家と國交恢復などは思ひも寄らぬことであつたと言ふことである。武力に訴へて已れの欲する如き政府を露西亞に强要せんとする國家にとつては、國交の恢復などといふ觀念は一片の惡戯に過ぎなかつた。されば旣に述べた如く、革命ロシアを破壞せんとする資本主義世界の欲望といふ理由は、日本にも他の凡ての資本主義國家にも一樣に適用さるゝものである。ただ日本の干渉と列國のそれとの異ひは、××××××××××、××××××××××××××、この點に於て、日本は西歐に在つては既に露西亞に對する武力干渉が廢棄され後も長く、××××××××××××××××××。而して日本のこの干渉政策は――日本軍に依る北樺太の占領――或程度まで、現在も猶繼續してゐるが、これに關しては後段に論ずるであらう。

三

前節に述べたところから讀者諸君は明確に次のことを知ることが出來る。日本が新ロシアと常態の國交關係を恢復することが出來なかつた理由は或程度まで、日本及び聯合諸國が對露國交の恢復を欲せず、ひたすら新ロシアの破壞をこれ事としてゐたに出ると言ふことである。そこで當然、かくの如く聯合强國に追從することが、日本の政治家にとつて賢明な方策であつたかどうかといふ問題が起つて來る。かゝる問題は現に多くの日本の政治家によつて提起されて居り、日本の國民は最初から軍閥の左樣な冒險に反對してゐたのである、日本の國民をして自

ら欲する處に赴かしめよ、この聲が起つてゐる。しかしかゝる問題に答ふるのは無用の業である。それは單なる賢明や狹量の問題でなく、曩に私が指摘した通り、日本の軍事當局の意圖が露西亞革命を利用して××××××××××××××××、特に然りである。彼等が狹量であつたとすれば、遠く慮ることが出來ず、その欲望は結局實現されぬといふことを悟らなかつた點に在る。實際それは單に日本の政治家ばかりでなく多くの大國小國の政治家の冒した失策で、たゞ異るところは、或者は他の者より逸早くこの事實を認めた點だけである。

しかし乍ら日本政府が早く旣に一九二一年に、當時の極東共和國に向つて、國交關係樹立の商議を求めた事實は、これを打消すことは出來ない。遺憾ながら私はいま、極東共和國の代表と日本の代表とが協定を遂げやうと努めた大連會議の歷史的文書を持ち合はせてゐない。が、當時勞農ロシアは英國と若干の通商協定を結んでゐただけで、他の聯合國と何等の關係をも樹立して居らなかつた時であるから、日本がかく極東共和國と協定を遂げやうと圖つたことは、日本の政治家に他の强國より離れて獨立の行動を執らうとする意志のあつたことを示したものである。この事柄は或點まで、日露の關係は極めて重大なものであるから、日本は徹頭徹尾いはゆる聯合國の「一致的行動」によつて、左右されてゐる譯には行かぬと云ふ事實を明らかにしたものであつた。當時の日本の政治家に或程度の獨立の意志があつたと斷定することは、恐らく過度の讚辭であらうが、當時それだけの勇氣を示したことに就ては、彼等は若干の讚辭を受ける資格があると思はれる。然し、いよいよ極東共和國の代表と商議を開始するや、彼等はその名譽をすつかり臺無しにして仕舞つたやうである。曩にも言つた通り私は遺憾ながら、その有名な會議の記錄を持つてゐない。しかし、大連會議に於ては日本の代表が極東共和國の代表に向つて爲した提議は、要するに、極東露西亞の或×××××××××××××とせんとするに在つたと言つても、敢て事實を枉ぐるの罪を犯すものでないと信ずる。私の記憶に誤りがなければ、日本代表は大連會議に於て十九箇條の要求を提出した。然かもその要求たるや、一九一五年のかの有名なる二十一箇條の對支要求に類似し、若くは或る點に於てそれ以上のものであつた。浦鹽斯德に於ける露西亞民兵の維持に關する問題、浦港、ニコライスク附近に於ける露西亞軍隊駐在の問題、沿海州に於ける天然富源開發の問題――他の諸問題において問はず、單にこれらの問題だけで見ても、露西亞の主權は全然無視され、全體としての條件は露西亞にとつて極めて屈辱的なもので、勿論かゝる基礎を以

つてして、日本と極東共和國との協定が成立する譯のものでなかつた。私はその「十九箇條」を讀んだときのことをよく記憶してゐる。私はそう言ふ條件を持出す人々の心理を諒解することが出來なかつた。戰敗國に臨む勝利者でなければ如何なる條件でも是れを押しつけて、敢て資本主義世界の所謂國際道德にもとらぬ譯であるが、そう云ふ條件を持ち出した日本の政治家は自己を勝利者と考へてゐたのであらうか。當時日本には勞農ロシアと友好的關係を結ぶ意志は全然無く、諸强國の干渉のため勞農ロシアの地位の危ぶかつたのを××××、××××××××××、××××××××××××××××、××の唯一の望みであつたことは、公平な觀察者にとつて明らかなことであつた。大連會議の經過中に現はれた極東共和國と日本との當時の折衝に關する私のこの見解に誤りがあれば、現外務次官で當時大連會議日本委員の首班であつた松平氏は、いつか私の誤れる解釋を是正して戴きたいものである。

翌年長春會議が開かれ、極東共和國代表の外に、勞農ロシヤの代表がこれに出席した。此度は日本委員も、勞農ロシヤの對外關係及び國內事情が一九二一年以來大いに變つてゐる事實を考慮して、大連會議に提起した條件に比して、多少緩和された要求條件を持ち出した。しかしこの要求條件も亦、日本は依然として日露國交恢復に對して特殊代償を要求するとの權利があるとの幻想に捉へられてゐることを、明らかに示す性質のものであつた。その上更に、日本の軍閥にはサガレンより撤兵する意志は毫も無いと云ふことが明らかになつた。露國代表ヨッフェ氏がサガレン撤兵の正確なる時日に關して繰返し質問したるに對し、種々様々なる一時逃れの答辯しか爲されず、それらは何れも質問の要點に答へたるものではなかつた。而して所謂尼港事件に關して、多くの會議が爲された。かくて長春會議も事態の變化から生じた極く僅かな改更だけで結局大連會議の延長に過ぎず、日本委員には大連會議の時と同樣勞農ロシヤの實際に協定を遂げようとする意志は毫も無かつたことが明らかとなつた。」若し露西亞委員がこの時日本の要求に應じたならば、實際日本委員は不意を打たれて呆然としたに違ひない。この會議が大連會議と同樣無結果に終る可きは、最初からそれほど明白であつた。その主なる理由は、露國主權の×××××××××××××××、××××××××せんとする念の皆無、是である。

かくて我々は日露商議の第三の場合――昨年東京に於けるヨッフェ川上商議に到着した。この商議については多く言ふを要しない。その實質に於て長春會議と同じ性質のものでほんの些少の改更さへも認められなかつた。ヨッフェ氏はとくの昔に日

本の承知してゐる露西亞の見地を、自身の健康の失はれてゐるのを顧みず、全力を盡して繰返し繰返し說明したが、その商議は結局日を欠ぎ夜を欠いでの無駄話に終つた。豫期通り萬事が終つて、ヨッフェ氏は病軀を携えて東京を去つた。其の後日本代表川上氏は「外交時報」に一論文を掲げ、日本政府に質問を發し、追つて開かる可き芳澤カハラン商議に對し政府は確固たる成案を有するや否や、政府は事實露西亞と協定を遂げんと欲するや、それとも協定締結に關し未だ何等の準備を有せざるやと問ふた。川上氏は對ヨッフェ商議の失敗を再びせさらんがために、この質問を發したのだつた。私はこゝに川上氏の該文の一節を引用しよう。(六月二十一日ジャッパン、クロニツクル紙所報より)「ヨッフェ氏と余との商議の乘上げた眞の暗礁は寧ろ次の點にある。勞農露國に對する政府の根本政策が極めて曖昧不決定で、政府は果して露國承認に贊成なるや反對なるや、余自身にさへも明白でなかつたと是である。」次いで川上氏は芳澤氏とカハラン氏との間に商議の開かる可きことを述べ、曰く「國民外交の成果を上げるためには、背後に確固たる力があつて、外交當事者をして安じてその全能力を傾けしめなければならぬ。」その力は「日露關係恢復のため露西亞を承認す可きか、それとも現在のまゝで放置す可きか、右に關する確固たる國策である。この國策が確立して居らなければ、幾度び商議が繰返されやうとも、結局徒勞に終る。しかもそれは何等實際的利益を齎らさぬばかりか、兩國の關係をして益々惡化せしめるばかりである。」かくて氏は「露國をして公明誠實の行動を執らしめるためには、日本自身が先づ公明誠實な態度に出でなければならぬ。」と結論した。大阪每日新聞も亦この問題に關して論じて曰く(本年八月十七日ジャッパン・クロニツクル紙所報より)「日本政府は不思議なる心理に促はれてゐるやうである。日本は西方隣邦露西亞と正式關係を復活する意志を全然持つてゐない。この事は、日露會議をして成果を擧げしめようとの意志が政府に全然ないのを以つて觀ても明らかである。例へば昨年のヨッフェ川上商議に際し、當時の淸浦內閣は右會議をもつて、「豫備交涉の準備會議」!なりと呼んだ。」

ヨッフェ氏との商議のため多大の勢力が費され、露西亞の「不眞面目」「不誠實」を證明するため多くの日本の新聞紙や政治家によつて無量のインキとペンが浪費されたに拘らず、日本の政治家は結果戲れをやつてゐたもので、勞農ロシヤと眞實の交涉を開始す可きや否やについて何等決するところなく、日本の非公式代表川上氏が言へる如く、日本政府は「全く公明誠實なる態度」を執つてゐなかつたことが明らかとなつた。實に日

本政府のこの態度は、大連、長春のそれを經て、日露商議の第三回目たる東京會議に於て、その全幅を暴露したのである。川上氏は「露西亞に對する日本の根本政策は極めて曖昧不決定であつて、政府が露國承認に贊成なりや、反對なりや、余自身にすら明らかでなかつた」ことを發見したのである。

かくの如く現在なほ日露國交恢復の道を閉し、兩國友好の實現を抑へてゐる理由を要約して見ると、第一に先づ對露日本外交政策の軍閥支配である。×××××××、××××××××××××××××、×××××××××、××××××××、××××××××××××××××。この夢の實現に當つて日本の軍閥はブルジョアジーから全幅の支持を受け、日本のブルジョアジーは軍閥の銃劍の擁護の下に有利なる市場を獲得せんと欲した。この野望は屢に説明した通り露西亞の内政に干渉した凡ての他の强國に於ても見出さることで、たゞ異る所は日本の軍閥の場合では特にそれが强烈なる點だけである。第二には日露商議に際しての、關係日本諸内閣の徹底的不誠實である。大連會議が開催さるや、露西亞の白衛軍は在浦港日本軍事當局の默認を得て、ハバロヴスクに活動し來り、日本軍閥の保護の下に日本と勞農露國との中間に、所謂緩衝國を樹立せんと企てたのである。また長春會議が正に開催されんとするや、駐佛日本大使石井子爵は佛蘭西政府に對し、日本は決して勞農政府を承認せぬであらうと述べた。日本の新聞紙の論斷や川上氏の意見はさておき、この二個の事實だけで見ても、日露交渉に關して日本政府に何等の誠意なく、その行動はその國による所を裏切るものであることは、何人にも明らかである。かゝる態度は勿論面白からざる結果を齎らすものである。今後モスコーに於て、日本政府に新交渉開始の意ありと傳へらるゝ時、モスコー政府當局は眞面目にそれを受取らず、過去に於ける日本代表のお芝居的の行動を記憶してゐる人々は、日露交渉復活の提議に接しても、たゞ微笑をもつて答ふるに過ぎなくなるであらう。關係日本内閣のこの失敗は、第一の原因即ち日本の外交政策が軍事當局によつて指揮せられてゐる結果に外ならない。而[illegible]日本軍閥の××××××××××、×××××××××××××××××××××××。勿論年一年とこの夢の實現の機會の薄らいで行き、それに比例して、日本代表の要求條件は從前のそれに比べて緩和され、削減されて來た。

更に第三の原因がある。日露交渉を開いた當該日本内閣が何れも、一般に世界的事情特に太平洋問題について知るところ極めて尠く、新らしい問題を處理する上の觀念についても方法に

ついても極めて保守的で、獨自の行動を執る勇氣を缺き、その眼界は官房の範圍を出でず、明々白々なる事實すらこれを認めやうとせず、國務を執る上に古き封建的習慣に支配されてゐて萬事をたゞ時の解決に委せ、若干の場合には他の「文明」諸國と步調を一にするとの口實を構けて他を顧みないことである。

第四の理由は絶えず日本に行はれてゐる勞農ロシア反對の頑强なる運動である。その目的とするところは政府の對露政策に向つて、何等峻嚴なる非難の聲を發せしめず、露國に對する政府の敵意、對露商議に於けるマキヤヴエリ的手段を是認せんとするに在る。

右に列擧した理由が芳澤カラハン商議に至るまで日露の友好的接近を妨げてゐたものであると私は觀察する。勿論、求むれば他の諸原因を數へることが出來やうが、右の諸理由が最も顯著で、最も强い理由のやうに思はれる。然もそれらは實際唯一つの源泉、即ち國家の新問題を處理する方法が封建的軍國的であるといふ源泉から發したものに外ならない。

四

今や我々は最後の場合に到着した。確固な友好的な諒解の上に兩國の關係を樹立せんとする兩國々民の希望を實現するため、勞農政府の企てた多くの計畫が、この度こそは成功させたいものである。私は今芳澤カラハン商議を心に描いてゐるのである。この商議は所謂特權内閣たる清浦内閣によつて提起されたものである。清浦内閣がその崩壞の前夜に於て、何故に對露交渉に着手しやうと志したか、私はその動機を知るに苦しむものである。恐らくこの特權内閣は、事實何等善政を行ふことは出來なかつたが尠く共善政を行はんと欲してゐたものなることを、國民の頭腦に印銘せしめんがためにこの仕事を利用したのであらう。また恐らくは、日露商議を開催して、それを救ふ可からざる難局に導き、次に樹立さる可き加藤内閣をして日露交渉再開の餘地なからしめ、以つて來る可き「立憲内閣」の聲價を傷けんと欲したものであらう。これは私の推測に過ぎないが、十分に當つてゐると信じてゐる。

加藤内閣が組織された時、この内閣は「憲法擁護、階級打破」を旗印として多數を占めた諸黨派の領袖から成つてゐるものであり、その意味で他の「文明」諸國と同一步調を執るものであるとの見解から、此度こそは日本も對露問題に關して、或者は平常の國交關係を結び或者はその途上にある「文明」諸國と、同一步調を執るであらうと一般に期待されてゐた。私の知れる

限りでは加藤内閣は對露問題に關しても對內問題に關しても從來の諸內閣よりは有利な立場にあると見られてゐた。この內閣はまた實際、比較的國際事情に通じ、封建的想念から脫却した、よりブルジョア的な要素から構成されてゐるやうである。これらの事情からして、加藤內閣の下に於ける芳澤カラハン商議の結果に關して、從前の日露交渉の如何なる場合よりも、樂觀的な豫測が加へられてゐた。しかし不幸にもその商議は既に半ケ年以上も、地を匍ふやうな進行を續けてゐる有樣で、たとへ商議が結局成功を收めるにしても、急速に有望に展開しそうな模樣は全然見えない。長い間、新ロシアに對して全然新らたなる政策樹立の要を力說し、前諸政府の軍國的な對露政策を猛烈に反對してゐた要素で組織された內閣を有ちながら、猶勞農露國との國交關係を快復せぬ理由は何處にあるか？その理由の一部分はかうである。現政府は裏にも言つた如く從來の諸政府に比してその社會的立場がよりブルジョア的であると云ふに止り、絕對的に言へば現政府は、ヨーロッパ的な意味で眞のブルジョア政府ではない。即ち現內閣は、國事に關して發言權を得んとして絕えず努めてゐる日本の全ブルジョア大衆を代表するものではない。私は現政府を呼ぶに「產業封建主義の政府」を以つてした方が當つてゐると思ふ。何故と云ふに此政府の代表××××××は、資本力の自由競爭の市場に於て、長き爭鬪の結果として、資本家となつたものでは無くして、余り反抗のない經路をとつて、例へば英國の資本家などに比して非常に容易な方法で、資本家となつたものである。日本に於ては資本主義進行の過程は、非常に短縮され、余り苦痛を作はなかつた。それだけまた完全でなく、決定的でなかつた。例へば日本の大資本家と、英國若くは米國の大資本家とを比して見よ。日本の大資本家は眞のブルジョアジーではなくて、若干の事情から六〇年乃至七〇年の短日月の間に大資本家となつた舊封建領主か若くは武士階級である。或は又諸種の事情から封建政府の機關の一部となり、更にその後諸政府と關係をつけて大資本家に成り上つた德川時代の商人である。然るに英國及び米國の大資本家は、數世紀の爭鬪の中に封建制度の尻尾を棄て去つた眞のブルジョアジーである。兩者にそれだけの差異があるのである。日本の大資本家は屢々大いに苦心してその尻尾を隱そうと努めるが、どうしても隱し切れない場合がある。茲で注意して置き度いことは、飽まで純粹のブルジョアと不純粹のブルジョアとが在ると言ふ風に解して貰つては困る。そんなものは存在する譯のものでない。上に使つた私の用語は何れも相對的の意味で使つたのである。更に附言して置き度いのは、日本の現政府がブルジョ

ア大衆を代表してゐないと言つても、英米の高度の資本主義國家に於て、政府が全般のブルジョア大衆を代表してゐると言ふのではない。さう解して貰つては困る。凡てこれらのことは日本に溜れる事情と照し合せての相對的の意味にとつて貰ひ度い。

この特別形態は加藤現內閣だけのものであるか、それとも產業封建主義の政府が嘗て日本に樹立されたことがあつたかどうか？過去十年乃至十五年間に樹立された日本の諸內閣は、いづれも產業封建主義の內閣で、各內閣で異るところはその度合だけであつた。或ものは封建主義の要素多くして產業主義の要素尠く、或ものは產業主義の要素多くして封建主義の要素が尠なかつただけのことである。私の見解からすれば現內閣は從來の諸內閣に比して、封建主義の要素よりは產業主義の要素に富んだ內閣である。若し現內閣が聯立內閣でなく、憲政會の單獨內閣であつたならば、產業主義の要素が更に一段と加はつたに違ひないと思ふ。私はまたこの政治過程は容易に終るものでなく、日本に於ける現在の諸政黨が更に一層分化し、政治的舞臺の上に西歐の意味に於けるブルジョア政府が出現するまで繼くものと考へる。勿論次のことを知つて置く要がある。第一、この過程は、將來より活動的なより廣汎な社會的要素が政治の舞臺に現はれることによつて、多かれ尠かれ圓滑に進行する。第二、現在の特殊な世界的形勢とその特殊な社會狀態の結果にして、他の重大な要素が不意に出現する可能性は十分にあるが、さう云ふ要素が出現しない限りは、その過程は進行するであらう。この問題に關してはこゝで詳說してゐるわけには行かない。たゞそれが現在及び恐らく將來の日露交涉に影響する限りに於て、一寸觸れて置き度いと思つたに過ぎない。

產業封建主義の政府とは猶依然として封建的手段と想念とに縛られた政府を意味する。その要素が軍國主義の要素に依據してゐる政府を意味する。その軍國主義中の有力なる軍國主義者に、封建時代の諸侯に忠勤をぬきんで、その明治政府の忠實なる從僕となつたものが大部分を占め、結局近代化された武士、一近代化された封建人に外ならない。それらの有ゆる軍國主義者が現政府と密着して居り、現政府は結局依然として封建的である。この意味に於て、日露國交恢復に對する從來の政府の態度に關して、私が曩に述べたところはそのまゝ、現政府にも適用することが出來る。現在の日露交涉が何等實蹟を擧げない理由の一つは茲に在る。日本の政府部內に於ては、或る人々は「外交政策の不變」を要望してゐるが、政府に對して今もなほ「外交政策の不變」を強要してゐるものは封建主義と軍國主義の壓力であると云つた方が、一層正しいと思ふ。しかしながら現政

府が依然産業封建主義の政府であるところから生ずる他の理由がある。

五

我々は再び現政府は誰を代表してゐるか？といふ問題に歸らう。上にも述べたやうに、現政府によつて代表されてゐるものは、いま猶封建的な、從つて狹量にして局蹐的な、且つ軍國主義と密着してゐる大資本家階級である。日本の急激な産業化は、日本の封建主義が出來るだけ早く日本に産業主義を導き入れ、産業主義を封建主義の忠僕となす必要を感得した結果だといふことは、既に自明の事となつてゐる。この意味に於て日本の政治家は屢々この過程に關してペルリ提督に一般に米國に感謝を表してゐる。實際彼等が感謝してゐるのかどうか知らないが、彼等はよくその感謝を口にする。英米に則つた資本主義生産方法の採用の結果、日本が短日月の間に資本主義國となることの出來たのは本より事實である。若し日本が封建的生産から資本主義生産への、自然の有機的な過程をたどつてゐたならば、それが完成によほどの年月を要したのに違ひない。この過程が短縮され、日本の近代化に貢献すればするほど、以前の封建諸侯及び他の封建人は、堂々たる封建的肩書や大領土よりも結局金錢の方が力强いといふことを知り、英米の資本主義に對する畏敬の念が高まり、この畏敬の念の增大と共に、日本の資本主義は益々英米の資本主義に依存的なものとなつて行き、更に實際上英米資本主義最近には特に米國資本主義の奴隷となつて仕舞つた。勿論凡ての國家は經濟的に相互に依存して居り、今日經濟的に絶對に獨立し得るが如き國家の存在しないのは明らかである。しかし日本の場合では、その依存する國家は米國といふ諸强國中の一國だけであつて、日本はそれに依存するばかりでなく、實際その奴隷となつてゐるのである。しかもこの隸屬は年一年と度を高めて行つてゐる。例へば昨年の日本の海外貿易を見よ。日本の對米輸出額は全輸出の約四割二分に當り、米國からの輸入額は全輸入の三割七分である。日本が米國から輸入する主要品目は、綿花、鋼鐵、毛皮、苛性曹達、曹達灰、製紙用パルプ、建築材料、石油、自働車、各種機械類であり、日本から米國への輸出品の主要品は、日本の輸出全額の五分の二を占める生絲、絹織物、絹手巾、綿織物、屑絲、眞綿、植物性脂肪油、樟腦類、陶磁器、ブラッシ及び玩具である。これによつても明らかである如く、對米貿易は日本の全經濟的發展の上に重大なる役目を演じてゐる。しかも日本が米國から輸入するものは大部分、日本の工業にとつて最重要なものであるが、

米國へ輸出するものは、大部分「奢侈品」である。そこへ昨年九月大地震があつて、日本は單に右の經濟的分野に於てのみでなく、純粹の財政的分野に於ても、米國に隷屬するものとなつて仕舞つた。日本は復興のため對外借款を起さざるを得なかつたが、現在世界に於て投資先のない遊資を持つ國は獨り米國あるのみである。この事實は國際關係及び世界經濟力の運轉に關して多少の知識を有する者には極めて明らかなことである。産業封建主義を代表する政府を戴き、極めて局蹐的な保守的な大資本家團を國家の舵手とする日本には、米國資本家の不快を招く如き手段を執る意志もなければ、勇氣もない。この點に關して從來の日本の政府も現政府も、その外交政策特に對露政策に於て、米國に氣がねせずして何事も爲すことは出來ない。しかも米國々務卿ヒユーズ氏に露西亞承認の意志無きことは周知の事實であり、「傍若無人」にも恐る可きボルシエヴイキを承認せんとする國家にたいして、氏が不快の念を抱くこともまた世の知る所である。日本の對露政策に於ても、また對支政策に於ても、右の如き米國の態度に對する考慮が現はれてゐる。日本が支那に於て、米國帝國主義の欲せざる何事かを爲さんとする兆候のある時は何時も、米國全土に亘つて、日本は極東に於て單獨行爲を執り、正に亞細亞聯盟を組織せんとしてゐる、これ米國を脅威するものであるとの聲が起る。日本が労農ロシヤと商議を開く場合にも同様である。日本はロシヤ及び支那と謀つて、「アングロ、サキソンに對抗せんとしてゐるとの聲が起る。この手段は日本を牽制するため、米國に於て屢々用ひられたものであつて、今もなほ著しい効果を收めてゐる。日本の對露方針がヒユーズの對露政策によつてよし全然率ひられてゐないとしても、尠くとも影響されてゐるといふ私の主張に對し、多くの人々は不滿と否定とを以つて酬ゆるであらうが、いかに否定しやうとしてもそれは依然として事實である。曩に述べた「産業封建主義」の要素の大部分を形成してゐる三井と三菱とは、ヒユーズ氏及びウオール街の不快を招いて、一錢の損失をすることをも是れを欲しない。三井は單に日本の政策を支配してゐたが、今日日本を支配するのは多く三菱である。日本の三大商人王たる三井、三菱、鈴木の中、米國市場に於て一毫をも失はざらんとするものは、三井と三菱である。この兩者が日本の政策を支配する間、日本の經濟が米國資本の隷屬を脫する時のないのは明白である。これは即ち、日本の外交政策の、米國の資本主義政策への隷屬を意味する。

加藤内閣が組織された時、極東特に日本に於ける米國帝國主義の機關紙ジヤパン・アドヴアタイザーが、「外交政策の不變」

（七月十九日紙上）と題した論説を掲げたのは、敢て不思議とするに足らない。この論文は私のこれまで述べたところをよく裏書するものであるから、少し長過ぎて讀者諸君に迷惑かも知れぬが、こゝに引用して見たい。曰く。「新内閣組織の結果、過去の外交政策持續の可能が加はつた。首相は親英派の人で、「英人加藤」の綽名さへ與へられて居り、外相はコスモポリタンではあるが、どちらかと言へば他の國よりは米國へ好感を持つてゐる人である。から云ふ事を日本帝國政府の二大官について言ふのは不都合かも知れぬが、加藤子爵と幣原男爵との協力は、正に英米親交の具體的示威である。兩氏が何よりも先づ自國民のために善政を敷かんとすることは勿論であるが、一度び外交關係に於て最善を盡さんとする時、二大アングロ・サキソン國家に對して、隱然若くは公然の、協働政策を執るは、彼等の自然の傾向の然らしむる所である。この新政府と、後藤子爵が外交政策を指導してゐた前内閣とを對照して見れば、この事情は一層よく了解されるであらう。更に英米に對する親善政策の賢明なることを示すものは、日本がもし汎亞細亞の旗を飜すが如きことがあつても、特に支那印度に現在それに參加する意志のなきこと、及び貿易上の關係等である。云ふまでも無く支那は日本にとつて有望な販路であり、原料の供給地である。一方東方ロシアの富源は事實上いまだ開發されてゐない。ところで日本は無援單獨を以てしては、その隣邦の富を利用することが出來ない。それは是非ともアングロ・サキソンの資本の力を借らなければならぬ。加藤内閣に米國よりの離反を喰止めんとする意嚮のあることは、北京交渉の經過を聽取するため、芳澤氏に歸還を命じたことに於て先づ現れた。去る五月十五日より始めて八日間の正式交渉中に、日露協定に對して、日本は過去三回の對露交渉の全體よりも大いなる進出を示した。しかし芳澤氏の歸京と共に、交渉は中絶した。既に政府の熟知してゐる北サガレンの實狀を視察させるため、芳澤氏を同地に派遣したことは、政府としては一時の方便に過ぎなかつたと解釋す可きである。この間に幣原男爵とその同僚とに、隱約の中に日米親交の樹立を圖つたのである。」

この論説は何を意味するか？第一、「日本帝國政府の二大官について、こう云ふ事を云ふのは不都合かも知れぬが、」加藤子爵は親英であり、幣原男爵は親米であるといふこと 第二左樣な態度は米國の見地から賢明な態度であると云ふこと、第三、日本がよし汎亞細亞の旗を飜がへそうとも、支那、印度は現在それに參加する意志がないと及び貿易關係から見て、その態度は賢明なること第四、「日本は無援單獨を以つてしては、隣邦の富源を利

用することが出來ない」「是非共英米の資本の力を借らなければならぬこと」是である。かくて我々はこの論説中我々の最も興味ある點に到着する。米國資本主義の代辯者の結論する所に依れば、芳澤カラハン商議が成功を收めることは、日英の離反を更に甚しくするものである。而もその離反の兆は既に見えて居る。そこで加藤内閣はこれを喰止めんがために、經過聽取を名として芳澤氏に歸還を命じ、次いで氏を北サガレンの視察にやつたが、それは單に「一時の方便」に過ぎず、その間に幣原外相とその同僚とに、隱約の中に日米親交の樹立を策したのであると。加藤内閣はこの論説に對して、余り吾人を責めやうとして、反つて吾人を傷けたと言ふに相違ひないと思ふ。

現内閣の社會的構成の問題に於けると同樣に、日米問題に關しても茲に詳說している譯には行かぬ。こゝに同問題に觸れたのは、加藤内閣が今以つて日露の國交を恢復することの出來ぬ理由の一つを讀者に知らせんがためである。その理由とは何ぞや。日本の外交政策が米國の外交政策に隸屬してゐること是である。而もこの隸屬は、特に三井、三菱の支配する間、一般に產業封建主義の支配する間は、決して止むことが無いであらう。

六

次に私は今日まで約半年以上に亘つて芳澤氏とカラハン氏との間に行はれてゐる北京交渉を述べる階段に到達した。この交渉は現在進行中であつて、遺憾ながらその經過の詳細を知ることが出來ぬ。私の手にしたる材料は、會議の露西亞委員の發表、又は日本通信社の報道だけであつて、日本委員側からは未だ何等の發表もないのである。隨つてこの點に於て、私の言議は大いに制約せられるであらう。

十一月二日北京發國際電報の報ずる處に依れば、露西亞委員が十月三十日に爲した提議は、基本協定六ケ條、A議定書四ケ條、B議定書六ケ條五附則から成つてゐる。この提議の主要内容は次の通りである。露西亞はポーツマス條約を尊重すること。漁業條約を始め他の諸條約は是を改訂すること。露西亞の舊債問題は後日の協議に殘すこと。露西亞は他の如何なる國家とも特惠的條約を結ばぬこと。露西亞領土に於ける石炭及びその他の資源の發掘に關し、露西亞は日本に一定の特權を讓渡すること。露西亞は尼港事件に關し遺憾の意を表すること。若し日本にして同じく露西亞に傷害を加へたことが明らかになつた曉は、日本も同樣露西亞に遺憾の意を表すること。日本は協定成立

實施後二週間以內にサガレンより撤兵すること。他の如何なる國ともヨリ有利なる條約を結ばぬことを條件とし、新通商條約を締結すること。通商條約の實施と同時に、外交關係を恢復すること。更にB議定書の附則には次の如く規定してある。露西亞は八月二十九日附の芳澤氏の覺書に記載されてある油田の四割の發掘權を、日本政府の指定する會社に讓渡すること。露西亞は五ケ年間露西亞領土の中一千平方哩を日本に賃貸し、同期間中同地域內に於ける全石油の四割の汲取を許すこと。露西亞は北サガレン西方海岸の特別地帶に於ける石炭發掘權を日本に讓渡すること。右の石油及石炭の利權讓與の繼續期間を、條約締結後四十ケ年乃至五十ケ年とすること。石油利權の鑛區稅は全產出の一割乃至一割五分と確定すること。

露西亞側の提議の右の摘要を見て、先づ最初に眼につくことは、提議そのものゝ實質はさておいて、兩國の國交關係恢復以前に、若干の細目の協定に同意したことは、既に露西亞側の大いなる讓歩だといふことである。周知の如く英國、伊太利、支那及び最近の佛蘭西の場合に於て、國交關係恢復に際して、何等細目の協定が行はれなかつた。この點に關して何故日本のみ獨り例外でなければならぬか、何人も知らぬ所である。日露國交恢復のために從來勞農露西亞のなせる諸の企圖を一瞥し、西伯利亞に於ける日本の干涉史を一瞥したところでは、日本がこの點に關して他の諸國より例外である可き理由を見出すことが出來ない。寧ろ日本こそ他の諸國に比して、例外を求むる權利がない筈である。露西亞の提議を檢討する前に、我々はまづ右の事を記憶しておかねばならぬ。

我々は右の提議中に於て、露西亞が出來得る限り速かに日本と國交關係を再開せんと欲する餘り、日本に對して極めて大いなる讓歩を爲したことを表示する多くの條項を指摘することが出來る。舊條約問題に關しては、露西亞はポーツマス條約を尊重することを諾した。舊債問題に關しては、後日の協議に讓ることを諾して、他の諸國に比して日本に有利なる立場を與へた。尼港問題に關しては、露西亞人中××××××、××××××××××××××××者はないが、露西亞は相互的の基礎に於て、遺憾の意を表すことを諾した。露西亞は露領サガレン及び西伯利に於て日本に利權を與へることに同意したばかりでなく、芳澤氏覺書中の地域の油田の四割、一千平方哩の賃貸、サガレン西海岸の特殊地帶の石炭發掘權を日本に與へることに同意した。その他の露西亞の提議に對して日本政府は果して如何に考へてゐるか、元より私は知らない。政府そのものと、政府に密着した者を除いては、何人も知らぬであらう。今

日に到るも芳澤カラハン商議が何等顯著なる結果を收め得ない理由は、世に喧傳されし處に依れば、露西亞が上記利權讓與の四割を提議してゐるのに對し、日本は六割を主張し、その他利權問題に於て一致せぬ點があるからだと言ふ。

我々は一歩進めて日本政府がヨリ多くの利益を「要求」するのは何に基いて然るか?、その要求は結局如何なる點に歸するか?を觀察しやう。尼港事件は國民の體面に關する重大事件である、露西亞が正式謝罪を爲し、サガレンの利權を引渡してそれが賠償としない以上は、露西亞と交渉を開く必要はなし、──日本政府がそう言明したのは、大して古いことでも無い。しかし時は過ぎ形勢は變化し、國民の體面の毀損も、石油石炭の利權で補はれゝば、結局大して重大なものでも無いと云ふことが認められた。そこで我々はこの二つの問題を切離した。尼港問題については日本は露西亞から謝罪を欲する。サガレンの利權は何のために欲するのか?吾々は知らない。或人々は言ふ。今もなほ以前と變らない。問題を紛糾させてそれから離れ去る必要はない。日本は今もなほ尼港事件の賠償として、利權を要求すると。又他の人々は言ふ。日本が露西亞に利權を「要求」するのは、日本は實際に石炭石油を必要とするからである。露西亞は天然の富源に極めて富んでゐる、サガレンは露西亞にとつて、大して重大なるものではないと。

先づ第一の理由を點檢しやう。所謂尼港事件に關して無數の宣傳が行はれ、西伯利出兵の失敗を××××××××十×××××××××××んとして、××××××××。×××××××××。この事件の根源にまで遡つて説くことは私にとつて眞に不快である。その上この事件に對する露西亞の位置は多少日本の國民に知られてゐる。さればこの問題が十月三十日の露西亞委員の提議の如く解決されんことを望んで止まない。日本の西伯利干渉の悲しむ可き物語と聯關したこの事件を、詳細に想起することは讀者にとつても苦痛に相違ない。たゞ次のことを言つておけば足りる。當時極東に在つて、尼港事件勃發の事情と經過とをよく知つてゐる露西亞人は、同事件に關して露西亞の××××××××××××××××す、況んや賠償す可き理由などがあらうとは斷じて認めないとである。一九二〇年の一月であつたか二月であつたか、日本守備隊が尼港を開け渡した時、尼港市政の代表者も參加して、日本守備隊と露西亞不正規軍の司令官との間に協定が結ばれた。この協定によつて「日本守備隊は武器彈藥を返へされ自由の行動を執ることを許された。外見上日本守備隊の士官と露西亞不正規軍の士官との間には、新しい關係が結ばれてゐた。日本の

士官はよく不正規軍の本部へ行つて、ウヰスキーや酒や葡萄酒を飲んだりした。×××××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××××。つまり日本の士官等は、不正規軍の司令官トリアピチンやその幕僚はコンミンストでもボルシエヴイキでもなんでもなく、無政府主義者、無政府共産主義者であつたことを知らなかつたのである。そうしたラヴ・ストーリーがあつた後で、一九二〇年三月十二日の夜半、日本守備隊は不意に不正規軍の本營を襲撃して猛烈な砲火を浴せ、×××××××××××××××××××××××××××××××××××××××。）×××・××××××××××××××××××。×××××××××××××××、××××××××××××××××××「××」×××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××。たゞこれだけ言つておけばよい。この隱謀に次いで四日間以上に亘つて猛烈な血戰が行はれ、尼港全市は修羅の巷と化した。この士官の隱謀に加へて、それまでは平和な市民であつた日本住民は俄然として軍國的精神を振ひ興し、×××××××××××××××××××××と云はず、あらゆる場所から不正規軍に向つて砲火を浴せた。第一日目には不正規軍は司令官トリアピチンが負傷をしたので受太刀となつた。ありとあらゆる武器を以つての、四日間に亘つての文字通りの白兵戰、肉彈戰の×××××××××××××××××××た。かりに日本當局が主張する通り、不正規軍がこの日本守備隊の謀反とそれに共力せる者を鎭壓するために、多少殘虐な手段を用ひたとしても、この兩國民の不幸なる損失に對して、日本政府が×××、×××、××××××××××××××××××××その上、トリヤピチン、ニナ・レベデヴア及び約三十名の者は、事前にこの大殺人を阻止し得なかつた罪で、確か一九二〇年六月であつたか、それぞれ處刑されたのである。この隱謀に關係ある日本の士官の一人でも、日本當局によつて審判處刑されたであらうか？

×！×××××××××××「××」××××××××××。×××××××××××××「××」×××××××××。

現政府の官吏と對談する時、彼等はいつも私に向つて言ふ。尼港で失はれた人命に對してはどうしても償ひさして貰はねばならぬ。「正義」はそれを要求すると。それに對して私はいつもかう反問する。獨り××××××××××××××、××××」×××××。××××、××××××、××、××××××××

落、その他西伯利鐵道の沿道に於て、×××××××××××××、××××××××、ボカレヴ、その他の「英雄」に對する日本軍の援助によつて失はれた露西亞人については如何にと。この質問に對して私は彼等から×××××××××××××××××××答辯を得ることが出來ない。××「××」×××××××××××××。現在進行中の商議が成果を擧げれば、何も舊き墓穴をほぢくり返へす必要はない。然し不幸にも此度の商議もまた失敗に終り、尼港事件が再び問題の種となるやうなことがあれば、露西亞は日本の公衆の前に、凡ての證據を示して、果して日本が露西亞から賠償を要求すべきであるか、××××××××××××××、財産に及ぼした損××××、×××××××賠償すべきであるか、國民自身の判斷に問ふであらう。

そこで露西亞の利權を「要求」する第二の理由は、二三の日本の新聞紙が言ふ如く、日本は實際石油と石炭とを必要としてゐる、露西亞の富源は巨大であるから、サガレンなどは露西亞にとつて重要なものではない、と言ふにある。これはいつたい何と言ふことであらう！こうした要求「理由」を揭げる人々は、自身無智な子供であるか、他を愚者だと考へてゐる人々である。勿論露西亞は巨大な國である。しかし露西亞は現在多くの金を持つて居らぬが、日本はその國に比して多くの金を持つてゐる。ところで露西亞が金が入用だからと言つて、日本は露西亞に二三億圓も呉れるであらうか？過去六ケ年間に於ける日本對露關係を顧れば、第一そんな問題を提起されたわけのものでない。日本の民衆が眞に生活の改善の上に必要とするなら、露西亞はいつでも喜んで出來るだけのことをする。しかし日本政府は、「石炭と石油が入用だ」からと言つて、そんな風にして露西亞から貰ふ何等の資格も無い。

利權問題に關する論議を終るについて、次の如き質問を發して見やう。日本は何故に、それほど侮辱されたと考へる尼港を占領しないで、その代りに露領サガレンを占領したか？私は一九二〇年四月二十一日に日本の巡洋艦がサガレンの西海岸のアレキサンドロウスク灣に現はれた時のことを記憶してゐる。私は同地の露西亞官憲から、日本艦隊の露西亞領海に入つた理由を訊ねる權能を與へられたので、同艦隊を訪ひ「見島」の副官から、同艦隊にはサガレンを占領する意志もなければ、露領サガレンの內政に干涉する意志も無い。たゞ日本住民が露國主權の下に於て無事であるか否かを視察に來たのだと說明された。これに對して私は、日本住民は極めて平和に暮して居り、露西亞官憲によつて何等壓迫されてゐないと答へた。果して然らば露

隊は數日中に當地を去るであらうと副官は言明した。この事實は勿論讀者諸君の知らぬ事である。その翌日、露領サガレンは、同艦隊が搭載して來た日本軍によつて占領されたのである。この占領は××××××××行はれたので無く、アレキサンドロウスクよりもサガレンを占領することが容易であり、サガレンには××××××××らである。まだ尼港事件の起らなかつた一九二〇年既に、二隻の日本巡洋艦がアレキサンドロウスクに現はれ、何等かの目的があつてか知らないが、同地ソヴイエツトに、非常な敬意を持つてゐたネツプスキーと云ふ一露人を引渡した。同地露西亞當局は同胞の士官をイスポルコム（サガレン政廳の執行委員會）に招致し、文書によつて同艦隊にサガレンの內政に干渉せずと云ふ確答を得た。その後イスポルコムから幾度びも無線電信で抗議した結果、やうやく同艦隊はアレキサンドロウスクの近海を去つた。これらの事件を以つて見れば、尼港事件は日本のサガレン利權要求とは何等關係なく、尼港事件の勃發する前既に、日本軍閥はサガレン占領に備へるために、偵察隊を派遣したのである、尼港事件はたゞこの××××××××××、××××××××××ぎぬのである。

以上によつて讀者諸君は、露西亞政府が日本に對して利權を與へねば××××××××××、と云ふことを諒解されたと思ふ。若し日本政府が露國承認の代償として、利權を要求するならば、こゝでも亦日本は代償を拂はるる何等の理由がない。露西亞はその承認に對して、何國にも代償を拂ふ意志はないし、嘗て拂つたこともない。勿論日本政府は承認の代償を求むる意志などはないと言ふであらうが、目下の芳澤カラン商議が成功に終るや否やは、日本がサガレン利權の四割を得るや六割を得るや、即ち二割の差に懸つてゐることは明らかである。

利權讓與の問題が左樣な基礎に於て取扱はれる限り、若し北京會議が決裂し、今後幾度び會議が開かれやうとも、結局滿足す可き結果を見ることの出來ぬのは明らかである。露領サガレンは露西亞の領土である。日本は先づ以つて、同地から撤兵しなければならぬ。第二に、日本も他の國と同樣露西亞の利權を得る資格があることを認めて、露西亞の申出でたサガレン利權四割の讓與に滿足しなければならぬ。しかし日本がこの問題を、露西亞の「義務」の問題とするならば、そして日本の露領サガレンに於ける利權の「要求」が、實際に軍時占領と同程度のものであり。單に其領土のみが形式上ロシアに屬し政治の費用も負擔するのに、其領有から生ずる一切の利益は擧げて日本に歸すべきであるといふ虫のいゝものなら、會議を決裂さすよ

り外に道はない。

勿論上に述べたことは凡ては、日本政府に露西亞と友好關係を復活する意志ありと假定してのことである。しかし加藤首相が岐阜の憲政會大會に於て爲した演說によつて見ると、日本政府には露西亞と友好關係を結ぶ意志もなければ、實際そんなことは考慮してゐないやうにも見える。首相は右演說に於て、その如き友好關係が日本にとつて必要だと信じてゐる人々に對し、たとへ日露國交が恢復されたとしても、商業上に於て即刻大した利益があるものでない、と力說これ務めた。勿論國交關係が恢復されたとしても、即刻三井、三菱、その他の大會社のポケツトへ巨萬の金が流れ込む譯のないことは、誰でも知つてゐる。しかし平常の國交關係の恢復は、兩國民友好の道を拓き、相互の通商を大いに促進することは、何人も是を拒むことが出來ない。

概括すれば私の言はんとすることは次の通りである。

近き將來に於て日露の友好關係を實現せんとするならば、第一、日本政府は今日猶その政策を支配してゐる産業封建的思想を脫却しなければならぬ。第二、何等かの形勢によつて勞農ロシアの國際的地位が惡化するかも知れぬとの豫想を捨てなければならぬ。勞農ロシアは既に危險期を通過して、日一日と國際政局に於ける重要なる要素となつて居り、その地位は日一日と强固となつてゐる。第三、日本は全然獨立の外交政策を確立しなければならぬ。世界の如何なる國家も、勞農ロシア承認に關する、日本の「愼重」なる態度を以つて、自國への友誼を示すものだとは思推しない。米國は當分露國を承認しないとの豫想は、佛國は當分露西亞を承認しないとの日本の以前の豫想が裏切られたやうに裏切られるであらう。第四、世界政局の進展は極めて急速である。明年若くば二三年後に國際的形勢が如何に變化するか、確的に豫測することが出來ない。特に東洋に於てそうである。第五、日本政府は次の事を知つておかねばならぬ。露西亞國民は一時に數百萬金を三菱のポケツトに投入れることは出來ないが、出來得る限りの友好と援助とを致し、震災によつて受けたる日本國民の創痍の一日も早く全治せんことを希ふものである。露西亞との友好の道を拓くことは、サガレン利權の二割や二割五分よりはもつと價値あることであり、對等な相互的な基礎に立つて始めて、政府對政府の尊信が生長する。日露間の健全なる雰圍氣の下に於てのみ、兩國民の實際上有利なる交際が芽を吹く。第六、露西亞政府が最早その領海に於ける日本漁夫の漁業權を許さないと考へた時に、日露交涉を提起す可きで無く、眞に露西亞と友好關係を取結ばんと欲した時に、

それを提議す可きであつて、その一歩として先づ、新らしい基礎の上にその關係を再建しなければならぬ。第七、勞農ロシアは帝政ロシアでないことを了解し、勞農ロシアと友好關係を結ぶ必要ありと思惟するならば、ありのまゝの露西亞政府を目當とし、日本政府の欲する如き政策を描いてはならぬ。第八、日露國交恢復を一日遲らせば一日だけ日本の損失である。第九、日本は露西亞政府から×××「××」××××××。勞農ロシアは今日與へたものを、明日與へないかも知れぬ。第十、日本は右に隨つてその見解と行動とを是正しなければならぬ。」

（一一・二三日）

追記　日本新聞紙に到着した北京電報によると、日本政府はカラハン氏に對し、モスコーに於て會議を繼續せんことを提議したと言ふ。果して然りとすれば、それは日本政府が從來の諸會議と同じ態度を執つてゐることを意味する。日本政府には協定を遂ぐる意志がないのである。この一文で芳澤カラハン商議を論議するに當り、詳細なる經過に亘らず、多少概括的に論議したことについては、讀者諸君にお詫びしなければならぬ。不幸にも同商議が失敗に終つた曉は、商議の經過の詳細に亘つて論議する所あるであらう。

我無產階級運動戰列概觀

日本勞働總同盟の現況

鈴木文治

一、組織

大正元年八月一日、東京芝三田四國町の惟一館に呱々の聲を擧げた友愛會は、大正八年大日本勞働總同盟友愛會と改稱し、同十年友愛會の三字を削除して日本勞働總同盟として今日に及んだのである。今より十三年前十五名の同志と共に、勞働者團結の必要を叫んで起つた微々たる勞働團結は、今日日本全國に亘つて三萬餘の健實なる組合員を擁し、我が國勞働運動の中堅を形造るに至つたのである。

今日勞働總同盟は、北は秋田より南は九州まで全國に亘つて六十有餘の組合を有し、之を大別して關東勞働同盟會、關西勞働同盟會全日本鑛夫總聯合會の三つに分つ事が出來る。關東關西兩同盟會は組合の地方同盟であつて全日本鑛夫總聯合は全國的產業別組合である。關東同盟所屬の組合は、野田聯合會を中堅とする關東釀造勞働組合及び關東鐵工組合の二大組合を中心に、荏原勞働、時計工、關東印刷、日本縫工組合、城北聯合會、相馬東勞働、南部合同、東部合同紡織勞働、横濱合同、山梨交通勞働、桐生勞働、郡山勞働、及び秋田製材、名古屋中部機械技工の十七組合である。關西同盟の下には各聯合會がある。大阪聯合會には、大阪機械勞働、合同勞働、造船勞働、印刷勞働、伸銅工、電氣勞働、電線工、交通勞働の八組合及び和歌山合同、徳島勞働、廣島合同、岡山、松永、因島各勞働組合が所屬し、京都聯合會には、京都染物勞働、紙機工、合同勞働の三組合が所屬し、神戸聯合會には、神戸印刷、造船、合同、護謨工、機械工、海上勞働の六組合及び鐵道工組合、兵電從業員組合が所屬し、泉州聯合會には堺合同、阪南鐵工、泉州勞働の三組合、尼ケ崎聯合會には、尼ケ崎合同、鈑金工、硝子勞働の三組合及び郊外電鐵從業員組合、灘聯合會には、灘製壜、羊毛、製樽、輸竹の四組合、九州聯合會には、九州鐵工、鑄物、硝子、合同の四組合及び福岡合同、三池合同勞働組合が所屬して居て、是等全部が關西同盟に屬して居る。全日本鑛夫總聯合は、足尾聯合會を中堅に、阿仁鑛夫組合、九州炭鑛夫組合、別子勞働組合が所屬して居る。

勞働總同盟は合同主義、集中主義を採つて居る。然し現在の組織は尙未完成のものであつて、今日組織改造の急務なるが叫ばれて居

る所以である。恐らく來る四月の全國大會には相當に其の改造が實現せらるゝであらう。總同盟の最高機關は全國大會(決議機關)であつて、其の下に執行機關(並に緊急決議機關)として中央委員會がある。中央委員會は現在、會長、主事兼會計、及び十名の中央委員(關西五名、關東三名、鑛山二名)を以て組織せられてゐる。中央委員會が統率して本部には各部門を設けて各種の活動並に事業を遂行して居る。而して各地方同盟、聯合會、組合並に支部にも同様それ〳〵の機關を有して居る。

今日總同盟の組合員は、機械鐵工造船等の金屬業及び鑛山、醸造、運輸交通等を中心に印刷、紡績、染物、製材、硝子・護謨等あらゆる産業に亘つて組織せられて居る。婦人組合員の如きも近時著しく増加し、關東に七百五十名、關西に五百名、合計千二三百名の婦人組合員を有するに至つた。

二、運動

勞働總同盟には、中央爭議部、政治部、教育部、宣傳部、職業紹介部、調査部、出版部國際部、法律部等がある。勞働組合の重要なる任務は戰鬪と教育及び宣傳である。今日までの我國の勞働組合の全勢力は、戰鬪即ち勞働爭議に向つて集中せられた。大正十三年に於ても、我が勞働總同盟は、淺野製鋼、日本電氣、宇部炭坑、阪神電鐵の爭議を始め、大小百數十の勞働爭議に健鬪して居る。不景氣の絶頂にある今日、資本家階級は一擧に勞働組合の城寨を破壞せんとし、且つ解雇と賃銀値下げを以て勞働階級に挑戰しつゝある。實に今日に於ける勞働爭議の勝敗は、勞働組合並に勞働者の死活問題である。勞働總同盟は此の戰鬪に備へる爲めに、本部に中央爭議部を置き、同盟會、聯合會、各組合の爭議部と緊密なる聯絡をとつて、臨時必要に應じて敏活に活動し得る方策を講じて居る。近き將來に於て組織が改造せられ、會費値上が斷行せらるる曉に於ては、本部に罷業基金は積立てられ、中央爭議部は此の戰鬪資金を提げて、十分なる活動をなし得るに至るであらう。

而して戰鬪と共に我が國の勞働組合にとつて最も急務なるは、教育と宣傳である。今日日本の勞働者四百萬の中、組織勞働者は僅かに十五萬余に過ぎぬ。此の無組織勞働者を組織し訓練する事は、現下の勞働組合の一大任務である。總同盟は東京に於ては勞働者教育協會經營の、芝、本所、日暮里の三勞働學校を援助して勞働者の教育に當り、關西に於ては、大阪、神戸、京都、尼ヶ崎、堺、廣島、岡山の各地に組合經營の勞働學校を開設し、別に各組合支部に於ては研究會、講演會、演説會を開催し教育部宣傳部に組合員の教育訓練に力を注ぐと共に、勞働大衆に向つての宣傳に活動を試みつゝある。殊に九月二十一日には、大會の決議に依つて全國的宣傳デーを擧行した。尙機關紙として關東は「勞働」及び其の婦人版關西は「勞働者新聞」、鑛山は「鑛山勞働者」を發行し、組合員相互の聯絡統一、教育に勉めつゝある。出版部は總同盟第十三年大會議事錄、十四年の勞働日記を發行し、近く勞働年鑑を發行せんとして居る。而して從來の日本の勞働運動の一大缺陥であつた勞働調査の方面に於ても、調査部は産業勞働調査所と協力し、組合、爭議、工場調査等に關して、各組合の調査員と聯絡をとつて正確なる調査を試みつゝある。かくて日本將來の勞働運動は確乎たる現實に立脚して其の運動方針を決定せねばならぬ。此の外職業紹介部は、震災當時獨逸伯林の國際勞働者救濟委員會から送られた八千圓を以て、本所太平町に建坪三十坪の總同盟本所職業紹介所を建設して、工場勞働者の職業紹介に努力し、且つ震災後東京府よ

りの六萬圓の下附金を以て、大井町及び大島町に廣大なる勞働宿泊所を建設し、獨身工場勞働者の宿泊に便し、玆には圖書室、娛樂室等も設け、勞働者の教養向上を計りつゝある。

尙大正十三年に於ける特殊の活動は、國際勞働會議と政治部の活動である。七月ゼネバに開催せられたる第六回國際勞働會議には、總同盟の會長たる私は、日本の組織勞働者に依つて選ばれたる最初の勞働代表として、顧問の米窪、川村兩氏、議員の西尾氏と共に出席し、我が國勞働者の團結權問題其の他に於て、全力を擧げて健鬪を試みたのである。尙普選實施を前にして、勞働階級の政治行動の開始せられんとするに際し、政治部は之が調査研究を進め、併せて組合員の政治教育に努力し、友誼團體と非公式に懇談を重ね、無產政黨に對する準備を整へつゝある。又近く議會に提出されんとする勞働組合法案に對しては、總同盟は臨時勞働法制委員會を設置し、調査研究の結果、(一)現在の組合を在るがまゝに認むる事、(二)目的の無制限、(三)自由福用主義、(四)損害賠償責任の免除、(五)一般法律に反せざる限り其の行動に干渉せざる事、(六)治警十七條の撤廢の精神に基いて制定せらるべきを主張し、其の運動に努力しつゝある。

三、主義主張、運動方針

勞働總同盟の目的精神は、其の綱領主張の中に宣明せられて居る。現在の綱領主張は、大正十一年の大會に於て改正せられたものであつて次の如くである。

綱領

一、我等は團結の威力と相互扶助の組織とを以て經濟的權利の擁護並に智識の啓發を期す。

二、我等は斷乎たる勇氣と有效なる戰術とを以て資本階級の抑壓迫害に對し徹底的に鬪爭せん事を期す。

三、我等は勞働者階級と資本階級とが兩立すべからざる事を確信す。我等は勞働組合の實力を以て勞働者階級の完全なる解放と自由平等の新社會の建設を期す。

主張

(一)八時間勞働及一週四十八時間制度の實施(但し鑛山勞働者の坑內勞働は坑口交代六時間一週卅六時間とす)(二)最低賃銀の設定、(三)夜業の廢止、(四)治安警察法の撤廢、(五)勞農ロシアの承認、(六)メーデーに全國的休業、(七)經濟的行動の全國的協力。

綱領は總同盟の根本精神であつて、主張は其の政策である。而して運動方針は每年大會に於て發せられる宣言によつて最もよく表明せらるるのである。大正十三年大會の宣言は實に劃時代的の宣言であつた。同宣言は運動方針に就て次の如く述べて居る。

「今や吾等は過去に於けるよりも其の政策をより現實化し、積極化されねばならぬ必要に迫られてゐる。而して其必要は最近に於ける我國資本主義の示しつゝある傾向と勞働階級の勢力の增大を、我等が正確に觀察するを得たからである。我國の勞働組合運動は少數者の運動から轉じて大衆運動に向ふべき一階段に到達したのである。改良的政策に對する從來の消極的態度は積極的に之を利用する事に改められなければならぬ。」

思ふに我國從來の勞働運動は我國資本主義の變則的發展の結果組合運動も亦多く思想運動の傾向を帶び勞働大衆の運動にあらずして目覺めたる少數者の運動であつた。然しながら今や日本の現狀は吾等の戰術を變更すべき機に臨んだ。由來勞働運動は單に理論のみの運動にあらずして、現實の運動であり實力の

運動である。吾等が今日我國の勞働運動の現況を見て其の最も急務なりと信ずるものは、勞働大衆を組織し訓練し、凡ゆる現實政策を積極的に利用して勞働階級の實力を增大する事である。現實の社會狀勢を無視する理想は空想である。吾等は空想的勞働運動は之を排し、飽くまで大地に足を踏みしめ一歩一歩健實に勞働組合の實力を養ひつゝ、其の最後の目標に向つて猛進せねばならぬ。吾等は勞働總同盟過去十三年の歷史を回顧する時、其處には幾多の波瀾と苦鬪があつた。日本將來の勞働運動の前途にも亦多くの障害と惡戰苦鬪が橫つて居るであらう。資本家と支配階級の彈壓、及び味方の陣容の上にも亦幾多の波瀾曲折は來るであらう。然しながら吾等は堅忍自重多くの試錬に耐へ、斷乎たる勇氣を持して來るべき難關を突破せねばならぬ。

世上今日勞働總同盟右傾左傾の論が喧しいのであるが、總同盟の根本精神は其の綱領の示すが如く敢て變る所はない。總同盟今日の主張は、やゝもすれば從來陥らんとした空想的非現代的運動方策は之を棄てて、飽くまで現實に立脚しあらゆる現實政策を利用し、健實に其の實力を養ふて其の終局の理想を貫徹せんと欲するものである。

政治研究會の組織と現狀

——無產政黨への階段として——

島中雄三

一、普通選擧と無產階級政黨

無產階級の組織に二つある。一は勞働組合であり、他は政黨である。

勞働組合と政黨とは、無產階級の種別によつて組織さるべきものではない。勞働組合は勞働組合としての機能をもち、政黨は政黨としての機能をもつ。無產階級は此の二つの組織に入り込むことによつて、或る時は勞働組合員として活動し、或る時は政黨員として活動する。勞働組合と政黨とは、無產階級解放に向つての別個の機能を有する二つの必要なる組織である。

無產階級の一つの組織としての勞働組合は我が日本においても既に或る程度の發達を遂げ、着々としてその機能を發揮してゐる。然るに、他の一つの組織としての政黨は、今日まで、未だ曾て實現せられてゐない。その實現せらるゝのは正に今日以後である。

無產階級の利益と幸福とを政治に表現するために、無產階級自身の政黨を組織する必要は、決して今日に始まつたことではない。けれどもいやしくも政黨であるからには、その活動舞臺は議會が中心であらねばならぬ。それには無產階級において、議會に參加し議員を選擧するの權利を先づ獲得することが必要である。然るに今日まで、一般無產階級には選擧權といふものが與へられてなかつた。普通選擧の要求は、常に無慙に斥けられてゐた。たゞ近年に至つては、有產階級に基礎を置く既成政黨そのものも、次第に自覺し來る民衆の勢力を度外して自々の勢力を伸張するの不可能なるに至り、普通選擧實施の氣運は年と共に漸く濃厚となつた。今日では、その內容如何は姑く措き、近くそれが實施せらるゝこ

とだけは疑ひない。そして此の形勢が無產階級政黨組織を促がしたのである。

　政治研究會は、此の新形勢と共に生れ出た一つの政治的團體である。

二、社會運動の進展

　更に他の一面に於て、從來日本の社會運動は主として啓蒙運動であつた。社會思想の宣傳普及が、その運動の主要部分であつた。そして實際運動としては、經濟運動に重きを置き、幾多の勞働組合は、その思想的指導の下に、對資本家的直接行動を殆と唯一の闘爭手段とした。しかし經濟運動は、專ら產業的部面に限られた運動である。それは或る程度まで發達するに從つて、必然政治的部面に延長せらるべき性質のものであると同時に、一方政治運動と相俟つにあらざれば、到底效果を收め得ない。殊に日本の如き、勞働組合さへ公認せられず、治警第十七條を始めとして、勞働組合の發達を阻止し、その運動に障害を與へる無數の惡法律が存在する國においては先づ政治運動によつて此の障害を一掃することが、組合運動のために必要なる仕事となつて來る。そこで此等の組合運動者、乃至は社會思想家の間に、だん〳〵政治運動の必要を高調する聲が起り、更に曾ては、政治運動を以て××××××××しむるものとして猛力反對の意を表示してゐた左傾派すら、別個の立場からまた政治運動の必要を叫ぶに至つて、政黨組織の要求と氣運は、ます〳〵濃厚となる傾向を加へた。

　然るに此の傾向に今一層刺戟を與へたものは大正十三年九月に起つた天災である。否、天災後の人災である。此の天災乃至人災は、必ずしも直接の理由となるものではない。けれども、此の當時に行はれた民衆の狂暴なる行動は、如何に從來の社會敎育が民衆の多數に行き亘つて居らぬかを判然と知らしめ、且つ民衆の間に組織を持たない思想運動が、如何に現實の勢力に對して無力なものであるかを悟らしめ、その結果、机上の空論に陶醉して居つた一部の理想家をして、現實に開眼せしむる端緒を與へたことは事實である。此の事實は可なりに大きい。そしてそれが、政黨の必要を裏書する有力な隱れたる理由であつたことは掩ひ難い。政治研究會の成立を前にして、多くの思想的異分子が鳴りを靜めた一面の理由はそこにある。

三、政黨組織に必要なる準備

　政治研究會は、斯の如き形勢の下に、斯の如き思想的經路を辿つて、組織せらるゝに至つた團體である。それは、政治的團體ではあつても、まだ政黨ではない。政黨を組織するために必要なるあらゆる準備を行ふための團體である。そして、政治研究會の設立に與つたものゝ考へとしては、政黨組織の完成せらるゝためには此の種の準備階段を踏むことが絶對に必要と信ぜられたのである。今その設立に與つた一人の雜兵としての、私の考へを申し述べる。

　第一に政黨が、政黨としての活動をなすためには、何といつても議會がその中心の目標であり、またその活動の中心舞臺でなくてはならぬ。それは無產階級解放の最後の目的を達成する上に於て、全價値を議會に置くといふ意味では必ずしも無い。たゞ物の價値は價値通りにエスチメートすることが必要である。オーパー・エスチメートすることの危險であるよりも、アンダー・エスチメートすることの誤謬は、一層甚しい。とすれば、議會の構成に與ることは、無產階級政黨組織の重要なる仕事でなくてはならぬ。そしてそれには、普選の實施といふことが何を措いても必要になる。そこで、無產階級政黨が組織

せらるゝためには、前提として普選が實施されなければならぬ。少くともその實施が、確實に法律とならなければならぬ。それまでの期間は、卽ち準備の期間である。また準備の期間であることが必要である。

第二に政黨を組織するための準備として、一般無產大衆に廣く政治的敎育を行ふことが必要であると考へられる。勿論これは大きな事業で、且つ容易ならぬ困難な事業であつてみれば、短い年月のうちに效果を收めることは出來ないであらう。けれども少くとも、現在の政治が如何に財閥本位の民衆を愚にした政治であるかの實際と、之に對する無產階級の政治運動が、如何に重要なる歷史的使命を將來に擔ふものであるかの價値意義とを、明確に知らしめることは差し當つての急務である、もし此の敎育が行き屆かず、何等の準備的組織も訓練もなかつたならば、普選の實施はたま〳〵既成政黨に好餌を與ふる結果となるに過ぎない。そこで一般大衆に對する政治的敎育と、兼ねて訓練と組織とを與へることが、政黨組織に必要なる準備となり、準備期間の最も肝腎な事業となる。

第三に政黨を組織するためには、掲ぐべき綱領がなくてはならぬ。而も如何なる綱領をかゝげて進むべきかは、政黨として最も考慮を要する重大な事柄であり、その綱領の如何は直に政黨そのものゝ生命に關する問題である。此の重大なる問題は、少數有志の手によつて無雜作に決定せられてはならぬ。あらゆる無產階級の代表的意見を綜合し、各階級層の要求を基礎として、多數者の討議と研究と合意と協力とによつて決定せらるべき事柄である。之を決定するための準備として、政治的、經濟的、社會的の各方面の事實を調査しその基礎的資料を蒐集し、地方的並に職業的に各方面の生活事實とその要求の存するところを質し、かくして將來組織さるべき新らしき政黨の、必然來らねばならない合理的針路を見出すことが、政黨組織の前提としての必要なる事業でなければならぬ。

第四に綱領と關連して決定しなければならない問題は、構成要素の問題である。無產階級の政黨たる以上、あらゆる無產階級に亘つて廣くその要素を網羅すべきは勿論であるとしても、事實その期待が實現せらるゝか否かは、机上の理論を以ては豫測せられない。更にそれよりも重要なことは、純粹に無產階級を以て組織するか、中產階級殊に下層中產階級たる自作農、小商人、手工業、官吏、勤人をも包括するか、之を包括するとして何の程度まで迎へるべきかは、一個の研究題目である。そして此の事は、おのづから綱領の細目に關係する。蓋し中產階級とはいつても、將來彼等は必然無產階級とその運命を等しくすべき約束をもつた階級である。故に之を無產階級の立場よりする政黨に編入することは、至極當然のことであると考へらるゝが、しかし現在それらの生活要求は、必ずしも無產階級のそれと一致するものではない。それと同じことは、都市勞働者と地方小作農との間においても見らるゝ現象である。否、等しく無產階級とはいつても、地域的職業間の差別により、各階級層の間には、當面の經濟的利害と、その利害に出發する生活要求とを標準として見る時には、間々一致し得ないものが少くない。一致し得るものは唯だ階級としての合理的要求のみである。然るに無產階級の政黨は、各階級層を網羅して一個の勢力となす以上、その綱領なるものは、端的に階級そのものゝ利害を代表するものでなくてはならぬと同時に、また各階級層の當面の要求にアッピールするものではなくてはならぬ。そこにおのづからなる混雜があり、首尾一貫を缺く憾ひがある。之を適度に案配することは、難

成要素の問題を考ふるに當つて、相關的に必要なる一事項である。

更に既成政黨との關係の問題、黨首の問題、資金の問題、或は支部構成の問題の如き、考慮すべき問題がいくらもある。そして此等は、いづれも政黨組織の實際に直面して、須臾も閑却すべからざる問題である。

此等の理由により、政治研究會は、無產階級政黨組織の準備團體として誕生した。それは歸結として、一は政黨無用論に反對し、一は政黨急造論に反對したものであることは言ふまでもない。

四、政治研究會成立事情

政治研究會は、かくして大正十三年六月廿八日、東京芝協調會館に於て發會式を擧げた。が、これより先、政黨組織の必要を痛感した東京の有志は、此の氣運の促進のために、或は此の運動の準備のために、しば／＼會合を催した。三人は五人となり、五人は八人となり、次第に數の殖ゆるに從ひ集る顔ぶれもかはつたが、意見は期せずして一致した。主として無產階級の中の知識分子を以て目せらるゝ人々であつたが、現に勞働組合の運動に參加しつゝある人も少くなかつた。學者、プロフエツサア、文士、思想家と稱せらるゝたぐひの人もあつたが、少くとも皆、忠實なる勞働者の伴侶を以て許し得る人々ばかりであつた。此等の人が肝煎役となつて、各團體との諒解に努め、專らその協力を求むるとこに奔走した。同時に、月一回乃至三回づゝ、政治問題研究會の名によつて、自由なる非公式の會合を試み、それについての腹藏なき意見を交換した。發會までの約八ケ月間は、主として政治研究會組織のための、準備の仕事に費されたのである。そして、斯の如く愼重なる用意の上に爲されたのは、かくすることが、政黨組織といふ大事業の出發において必要と信ぜられたからである。たゞ茲に一言して置きたいことは、その設立に與つたものが、たとひ如何なる思想的傾向を持つて居らうとも、政治研究會は決して思想團體ではないといふことである。無產階級意識に立ち、無產階級の利害を利害としてゐる以上、思想的には社會主義者であらうと國家主義者であらうと、リベラリストであらうとコンミユニストであらうと、政黨組織の準備に參劃する上に差支あるべき筈はない。むしろ極度の寛容を以て、あらゆる分子を包容するこそ、此の種の政治的團體の本領とする所でなければならぬ。

兎も角發會式は、約五百の會員及び會友を以て可なり盛大に行はれた。規約を討議し、委員を選擧し、左の決議を可決した。

我等は無產階級の利害に立脚する政黨の樹立を期す。

以上は政治研究會發會までの、成立事情の一班である。

五、政治研究會の事業と現況

發會式擧行後、政治研究會の名は全國的に廣まり、地方有志の多大なる共鳴を得て、忽ち會員は倍加した。たゞ勞働組合及び農民組合は、その趣旨に對する十分の諒解あるに拘らず、組合それ／＼の特殊の事情と行懸りとから、暫く團體としての參加を見合せ、個人としての加入を許して、好意的提携を保つといふ程度に止つてゐる結果、現在のところ豫期の如き會員數を見ることの出來ないのは遺憾である。而もそは唯だ時期の問題であつて、今や全國各府縣に於ける多數の熱心なる會員は、それ／＼地方に於て支部の組織に狂奔してゐる。その準備に着手せられてゐるものだけでも、やがて一萬餘の會員を網羅することは難事でないと信ぜられる。

さて當面の事業であるが、政治研究會は、その規約にも示す通り、政黨組織の準備のための調査研究機關であると同時に、無產階級の立場から政治的對策を確立し、且つ一般大衆に向つて教育と、組織と、訓練とを促がす團體である。そのために、本部にあつては委員を調査委員（廿四名）執行委員（十二名）會計委員（三名）の三種に分ち、それぐ任務を分擔してゐるが、調査委員會では目下主として綱領の研究に主力を注ぎ、執行委員會では主として地方の宣傳講演、支部の組織、雜誌『政治研究』の發行等、教育及び組織の方面に力を注いでゐる。

支部の組織も亦本部に倣ひ、いづれも委員制度によつて諸般の事務を處理してゐる。そして支部の下には部會又は班を有し、青森縣弘前の支部の如きは、既に縣下に四五の部會を設けてゐる。

終りに私は、政治研究會の設立に與つた一人として、また現に執行委員の一人として、廣く他の無產階級運動に從事せらるゝ先輩同志に告げて置きたい。無產階級政黨は、早晩必然に組織せらるゝものであり、組織せられなければならないものである。それは大きな事實である。また最も必要なる事業である。少數の獻身的努力にのみ委ねらるべきものではない。あらゆる無產階級の犧牲的協力を要求すべき當然の權利ある事業である。私はかく考ふるが故に、現に多くの同志と共に微力を之にさゝげてゐる。しかしそれは、まことに取るに足らぬ微力である。事業そのものの重大なるに比して、あまりに心細い微力である。願はくは諸君において、更に一段の協力と援助と鞭撻とを吝まれざらんことを。

日本農民組合

＝側面から見る＝

若木八重

「土地と自由」三十六號——大正十三年十二月發行の機關紙——

所屬支部數、六百。同盟會と爭議件數、三十五。總本部は大阪に在る。

生れてから、わづかに、三十六ケ月。

「鍬と鎌」の旗幟を、見出し得ない地方は、六縣——石川、靜岡、愛知、廣島、德島、長崎だけである。

日本農民組合は、未だ少年だ。

だが、背丈けの伸びた、肉附きのよい少年だ。これは、瘦せこけて、繼子育ちだつた。貴分の「日本勞働組合同盟」の生ひ立ちとは、違ふやうだ——尤も、時代も、ちやうど、一昔は隔つてゐる——。

無產階級運動の少年。凡ては、この一言でつくされる。

全日本の、いづれの地にも、足場のできたこと——骨組みのきまつたことも、それだ。「組織へ!!」「力の集中と配置へ!!」「戰線の擴大!!」……と、叫ばれ、その方向に動いてゐることも、それだ。

まづ、この組合の對外的方面から、みてゆかう。

要求條件の推移

「永久三割減」の要求。

これが、大阪の北河内に、日本農民組合の

烽火が點ぜられたときの、要求だつた。實行したものは、地主よりも、數百年來の忍從にならされてきた小作人だつた、枕もとに匕首をつきだされたのだ。舊藩時代の代官樣への納米法を引き繼いだゴミ米さへ、默々として地主へ運むでゐた頃である。

が、今では、この絶好な小作條件の改善も、重要視されてゐない。こゝに、成長の一面の現れがある。

一反歩の生産費計算をする――極めて、平凡な資本主義經濟の算盤で――と小作料は全免して貰つても、勘定尻が合ふか合はぬかの境目にある事を發見する。地主は、「永久三割減」の聲だけで一大事とばかりに頑迷振りを發揮する。片方に、行くべきさきが見えだした。――土地所有權の絶對觀念もヒヾがいつてゐる。地主側の對抗力は、實戰上にも理論にもモロさが知れてきた。現代農業制度の潰滅期は間近い――たゞ、ヂリヂリと押してゆけば足りる。

これらが、勞多くして功少き「永久三割減」を、お守りほどに大切がらぬ所以だ。

從て、要求は、勞働賃銀と肥料代と農具の損料が得られるまで、年々歳々の要求となつて來たわけである。

これは又、明白に、日本の農業經濟制度革の必然性に基く進展だ。小作爭議の特異性である。

「法廷戰」これが地主が頼みとする防戰術だそれで彼等はこれを濫用する。

「所有權は萬能。小作關係は賃貸借關係と同様」これで叩きつけやうとする。土地返還請求、小作料請求、家財の差押を、立毛の差押へ、小作人の耕地立入禁止――「天下の鴻の池」できへも、小作人を相手に、その全手段を應用した。が、移りゆく時勢に×××××××、×××ために決死の臍を固めた人間の集團に、どうなるものであらう。要は、地主が辯護士の喰ひものになるだけだ。

最近は、地主も、暴力團を使用して片づけやうとする。

こゝらが、まづ、爭議の現狀だ。

小作調停法の出現

地主の救ひ船「調停法」が、十二月から實施される。

農民組合は反對した。

小作爭議は、何處でも、一村内、一部落内の小作側と地主側對抗といふ形式をとつてゐる。これは公式である。必ずしも永續的の團體と云へぬ事は、勿論だ――然るに、調停法は、當事者間とコヂツケて、個人應對への團體行動の切斷策を計つてゐる。

小作官は、調停の權威?の押賣をすべく、内示を受けてゐる事でもあらう。

資本主義的産業として米作農業の不引合は天下周知の事實である。そこに、所謂公平なる分配を決定するつもりの曲藝は、封建的思想の地主連と、白い手で社會政策論をヒネクル官僚輩との「お好み」の獻當だ。

しかし、何としてもこれからの事だ、調停法に對し、てぐすねをひいてゐる農民組合との取組は、正に當面の問題である。

何、農民組合では、農民組合員が小作調停委員たらぬ事を原則としてゐる。

政治行動への進展

「無産政黨組織準備委員會」がある。

普選實現の可能性が見え出した頃から、無産者の組織團體間に、又、其他にも「政黨研究」が擡頭して來た。農民組合も亦、その御多分に洩れず、十三年十月の中央委員會で、準備方針の協議の果に、前記の委員會を全國に亘る六十余名の委員で組織した、

日本農民組合にとつては、政治行動は、我

線の擴大の意味ばかりでなく、他の理由からも、極めて重要な意義をもつてゐる。

單純な小作條件改善運動としては、前述した如くに、余地の乏しい事である。凡ての方面から——詳述は止めてをくが——現在農業制度では、地主と小作との共存共榮なるものは米作農業には成立しない。從て、農業經濟新制度の樹立が要求される。これは、他面からみれば、それこそ重大な政治問題である。

無產農民の全國的團結は、一時的減免等の小作爭議だけでは、その必要も痛切に感じられなくなる。一縣內の團結で足りる、この事は、社會が、農業經濟中心時代には、政治組織も地方分權であつたと、同樣の事情であらう。全日本に亘る大團結は、資本主義的中央集權國家內に於ける全無產農民としての、嚴然たる要求が存在するに違ひない。消費組合的事業も、技術上の革新運動も、農民教育の問題も、全國的結合を便とはするが、それらの、十分なる發達は、現在の貧農民には、資金の關係等よりして、第二義のものとなつてゐる。

次に又、農民の政治的興味——と云ふよりは投票に對する興味は、無產農民の立場を、既成若しくは新成のブルヂョア政黨によつて攪亂される憂のあることだ。それに、組合と政黨とを、別々のものと別けるほどの國民性とも豫想されぬことも、その一つではある。

中央委員會の決定は、無產階級黨、無產者の組織問題が組織準備する、等のものであつて、十二月には組織準備委員會々會を開催するなど、正に、準備行動中である。

それらの一切は、十四年三四月頃に、全國に——一齊ではないが——施行される、村會の改選といふ、より現實的の政治行動と相俟つて、促進もせられるであらうし、重大問題として、十四年度の大會に取扱はれることであらう。政治行動尙早論もある、農民黨樹立說もある、なんとしても「無產者の政治」に對する智識の程度も低いものであるから、極めて奇拔な論議の下にどう決するか、これこそ興味がある。

內部の諸問題

對內的の問題を眺めてゆくと、先づ眼につくものは「組織化」强調である。

農民組合の全組合員に「團結の必要」の泌みこむでゐることは、爭議に於いても、集會に於いても、十里、二十里の山河遠しとせずに集まる狀態は、驚嘆に値するが、團結の鞏固なるは、必ずしも全國的組織の完備を物語るものではない。

日本農民組合は、組合費を納附する正組合員は、戶主だけであるが、約五萬である、この外に、靑年部、婦人部があるから、平均一戶當り五人の統計によつても——老人、子供等の農業勞働の不可能者を除いて、——十五萬人を包含してゐる、この組織が完備され、動員計劃でも立つたら、かなりの大勢力だ。

六百の支部——この基本單位は、各村、大字、小字と一樣ではない。——は、郡聯合、地方聯合、縣聯合　同盟會と、二府三府に構成されてゐる、しかし未だ完成されてはゐない。組合運動は、それ〲の構成が、組合員自身の活動と組費の負擔とを特色とする、これらのことも、欺むかれ萎縮した農民には難事業であるらしい。現在は盛んに論議もされ編成に苦心中でもある。

農民組合の成長が、余りに急激であつた事は、當事者にとつても予想外であつたらしい。初期の擴張に腐心した時代から組織と整理の時代たる現在、日本農民組合も、これからが難問題の續出であらう。爭議中心とみて全國的結合——組合費まで納めての——も不必要と感じる不心得者も出やう、後進者の傑物？が

地方でお山の大將を極めてみたいであらう。ことに、最初の熱狂期もすぎて莫迦らしくなる者もあらう——費用と勞力をかけて、打算外の仕事だ、加ふるに野心は禁物、官憲と地主からは睨まれる——まづ〳〵、この峠を越せば、日本の資本主義にとつては、その集中的組織は怖るべき「神威の存在」たることは疑ひをいれない。

しかし、組合員全體の思想的水準はとなると、云ふ迄もなく少年だ、思想教育には全力を盡してゐるやうだ。サンヂカリズムの波らしいものも×××××。が、幹部の思想も大體に於いて一定してゐるやうでもある。何としても未知數ではある。

書き殘したこと

まだ、この外に書くべきことも多々あるのだが、勞働組合法案に對する態度各部門の仕事ぶりから、消費組合的事業の事、猶は、全國に亙る各地方の情勢から、當面の主要活動人物の事が、それである。その他にも、日本農民組合以外の農民團體の事——と云つても二團體があるだけで、規模も日本農民組合とは比較にはならない。——等である。

十四年度の全國大會——二月下旬か三月上旬に三日間開催する——に注目せられん事を附言してをかう。

官業勞働組合の現勢

川村保太郎

我國の官業勞働者の團體の內、最も永き歷史を有するものは、官業勞働總同盟であつて其の數に於て又其の活動に於て、從來官營工場に於ける唯一の勞働組合であつた。唯此の外に存在したものは純向上會があるのみであつた。然しながら、本年二月の國際勞働代表選出法が、勞働組合にのみ其選擧權を與へたのを機會として、海軍勞働組合聯盟が生れ、陸軍工廠勞働組合同盟會が成立するに至つた。今此を全般的に見る場合、其は啻に官業勞働者の團結の擴大を意味するのみならず、我國勞働運動の戰線の擴大を意味するものではあるが、然しながら、其の個々に涉つて此を見るならば、我々は幾多の不滿を痛感せざるを得ない幾多の理由を發見するのである。即ち其の量に於ては全國拾八萬の官營工場勞働者の半數にも足らず、然も其質に於ては未だ官業意識を脫せざるの情態にあるのである。勿論其れは、政府當局の勞働組合阻害政策と强壓的態度の結果であつて、我國の他の勞働組合の全部と同じく、否其れ以上に組合の生存が困難な位置にあるからである。

官業勞働總同盟は、政府の壓迫或は懷柔と戰つて今日一個の地位を占むるに至つた團體であつて、現在の加盟團體十、組合員總數壹萬有餘を算し、此れは關東、關西、九州の三地方同盟會に分れてゐる。關東同盟會に屬するものは、小石川勞働會、日本勞働聯盟、工友會、陸軍現業員組合であつて、工友會は王子火工廠に、小石川勞働會は王子火工廠及び小石川工廠に、日本勞働聯盟、陸軍現業員組合は何れも小石川工廠に其地盤を有してゐる。元來、一工場一組合主義は勞働運動に於ける原則である。然るに、以上の如く、王子及小石川工廠には、二個或は三個の團體が共

存してゐる。此れには此間種々の事情があつたのではあらうが、此の爲に關東同盟會は今日猶順當なる發達を妨げられ、引いては官業勞働總同盟全體の上に影響を及ぼしてゐるのである。けれども各團體とも、從來の行動の不備を認め、出來る限り速に此を整理合同せんとするの機運が漲りつゝあるが、關東同盟會が其組織の整理と、其行動の統一が完成さるゝならば、それは確に順當に發達し、量に於て質に於て一勢力となるであらう。

關東同盟會に比べる時、關西同盟會はより以上統一されてゐると言ふことが出來る。此に屬する組合は、名古屋向上會、向上會、大阪煙草勞働組合、京都煙草勞働組合の四個團體であつて、向上會は最も古くより存在し、二千有餘の會員を有し、兩度の大馘首にも拘らず、依然として同盟會の中堅を爲してゐる。其地盤は大阪砲兵工廠であるが、造幣局其他附近の官營工場に宣傳の手を延し、來らんとする再度の行政整理の馘首に對してゐる。名古屋向上會は、嘗て向上會の名古屋支部であつたが、大正十一年の秋、當時の會長八木信一君の排斥から生じた向上會分裂の際、獨立したものであつて、常に向上會と緊密なる關係を持續し、昨年七月關西同盟會の組織に參加したのである。同組合は本年二つの苦難に逢つてゐる。即ち一つは五月の名紡事件に際して、會長西浦宇吉君を始めとして幹部若數名が收監されたこと、今一つは、同じく五月末行政整理による大馘首の爲に、組合員を失つたことである。然しながら、其等の難關にも拘らず、此に屈することなく、今日に於ては千五百の組合員を擁し、熱田、千種の兩兵器廠の從業員及び名古屋煙草專賣局の勞働者を糾合してゐる。

大阪及び京都の煙草勞働組合は、各々大阪及び京都の煙草專賣局の從業員によつて、昨年二月及び四月に組織され、當時は殆ど全從業員を網羅してゐたのであるが、當局の極端なる壓迫の爲に、現在では組合員の減少を見てゐる。此れは、從業員の大多數が女工殊に幼年工であるからであるが、然も猶此等の種々の不利なる條件に拮抗して組合の基礎を固めて今日に至つてゐる。

九州同盟會は八幡製鐵所の從業員が組織する八幡同志會と以前向上會小倉支部のあつた小倉造兵廠の從業員によつて組織されてゐる革正會に依つて構成され、本年七月創立されたのである。同志會は官業勞働總同盟中最大の組合であつて、組合員總數六千有餘を算し北九州に於ける有數の勞働組合として活動してゐる。殊に、最近は質的方面に於ても著るしく發達の傾向を示してゐる。革正會は組合員數二百餘名に過ぎなかつたが、小倉造兵廠の全員を糾合し本年五月組織されたものである。

陸軍工廠勞働組合同盟會は、本年三月國際勞働代表選出を機として組織された小石川工廠の陸工會及び王子火工廠の火工勞働組合によつて構成され、官業勞働總同盟との間には密接な關係が保たれてゐる。其の組合員總數は陸工會七百、火工勞働組合八百で、東京に於ける官業勞働組合の中、其數に於ては第一位を占めてゐる。隨つて、官業勞働總同盟關東同盟會の整理は、此の兩組合を中心として行はるべきであらう。然らざれば、一工場一組合の原則は到底實現されないからである。海軍勞働組合聯盟は、本年の國際勞働代表選出を機會として生れた最大の組合であつて現在の我國勞働組合の內、最も多數の組合員を有してゐる。此に屬する組合は、橫須賀工友會、吳海工會、舞鶴共立會、佐世保勞愛會及び廣工修會で、何れも各海軍工廠の殆ど全從業員によつて組織されてゐる。此の內、其の最大のものは約二萬の組合員を有する吳

海工會であるが、曾て友愛會吳支部或は向上會吳支部に存在し、何れも惡戰苦闘の後、遂に解散するの已むなきに至つた所だけに、其の基礎が確立され、其の訓練を積むに至つたならば、質量兩方面に於て大なる勢力を示すであらう。海工會に次ぐものは、横須賀の工友會で組合員總數一萬以上を有してゐる。然しながら、工友會は共濟組合として數ケ年の歴史を有するが故に、單なる共濟組合の殼を脱して今日即刻、眞の勞働組合として活動することは、相當に困難ではなからうか。以上の二團體に比較して他の三組合は、其の組合員數に於ては遙かに劣つてゐるが、然も佐世保勞愛會は六千、舞鶴共立會は三千五百、廣工俠會は二千以上の會員を有し、何れも現在の勞働組合としては、其の量に於て、決して劣弱と言ふことは出來ない。只海軍工廠は、從來決して勞働組合の存在を許さなかつた所である。隨つて、其の質的方面に於て優勢であるとは云へ、此を保持するには周到なる注意を要すること勿論である。況や、此れが質的方面の發達は容易ならぬ事業と云はなければならない。此は獨り海軍聯盟のみならず、官營工場、殊に軍需品工場に於ける勞働組合に共通することではあるが、然しながら特に海軍聯盟は創立日猶淺く、又當局の態度は從來の公然の壓迫を、隱然の彈壓に更へてゐるに過ぎないのであるから、其の前途には幾多の難關が横はつてゐると思はれるのである。即ち、當局の一定限度以上に組合が伸長する場合には、往年の友愛會吳支部、同舞鶴支部或は向上會吳支部の如き悲痛なる運命に遭遇するであらう。故に海軍聯盟が當面の任務は、此等の難關を突破するに足る丈の實力を養ふことであつて、其の爲に、現在海軍聯盟は極めて愼重な態度を執つてゐるものゝやうである。

今一つ海軍聯盟に關して附加したいことは、吳にしろ佐世保にしろ、其地方の住民の大多數は工廠の勞働者であることで、此れは、組合運動にとつて有利な條件と言ふことは出來ない。同時に、普選實施の場合に於ては、工廠勞働者の投票如何に依つて其選擧が決定されるが故に、ブルジョア政黨からの誘惑を受ける危險がある。然しながら、此等の誘惑を斷然却け全組合員が全勞働階級の旗幟の下に參集するならば、其れは一の大なる力を示すであらう。此點に於ても今日海軍聯盟は非常な努力を要するであらう。

以上述べた以外の團體としては、先年向上會より排斥され、一部の組合員と共に分裂した八木信一君を會長とする純向上會と、八幡製鐵所の役付職工が組織する共同研究會がある。純向上會は大阪工廠に於ては向上會と爭ひ、名古屋に於ては名古屋向上會と爭つてゐるが、本年に入つてからは、大阪鐵工組合等と共に日本勞働組合聯合を組織し、川北電氣製作所に食ひ入り日本勞働總同盟大阪機械勞働組合と拮抗し、八木君は同所の人事係となり、恰も罷業抑への如き觀を呈してゐる。

共同研究會は現在一千以上の組合員を有するとのことであるか、此又純向上會が向上會に對するが如く、八幡同志會に對し、兩者の間は常に不和であること勿論である。此の如き組合間の爭闘は組合運動の發達を阻止するものであつて、殊に同一工場に於て二つの組合が相爭ふが如き、誠に遺憾なことであるが、然しながら、其の主張に於て、行動に於て非常なる徑庭の存する以上、此又今日に於ては已むを得ないことゝ云ふの外はなからう。猶、此等の外に最近、東京大井の鐵道工場を中心とする現業委員後援會が組織されたが今其の内容については充分此を知ることを得ない。然しながら、勞働運動の上に於て、從來難攻不落と稱されて來た全國廿万の鐵道從業員の間にも勞働者團結の必要を自覺し、漸次組合

組織の機運が熟しつつあることは事實であつて、現業委員後援會は、其の先驅として重大な意義を有するであらう。

以上極めて大雜把に官業勞働組合の現勢を述べたのであるが、此を要するに官業勞働組合は組合の生存の爲に最も其精力を費やすものであつて、團結權の確立は特に目下の急務と言はなければならない。而して此れは、現存の全部の勞働組合の援助の下に始めて可能であつて、此の意味に於ても、全國的合同若くはせめて全國的勞働組合會議の實現を望まずにはゐられないのである。(大正十三年十一月末)

機械勞働組合聯合會

高山久藏

(一)聯合會の組織と概念

來る可き所社會に、勞働者が、生産者としての立場から、重大な役目を務むると云ふならば、其の勞働者に依つて、組織せられた、勞働組合の組織は、當然、實に重大な意義を有するものでなくてはならない。

然りその組織問題に對する見解の相異の爲めに大正十一年秋の勞働組合の、全國的總聯合の創立は、遂に決裂して仕舞つたのであつた。

而して、現在を通して、中央集權組織なるが故に、幹部の讃美する樣な、[redacted]組織の進展が實際に行はれたであらうか、現在、勞資の實戰に對して、何を語つて居るであらうか。

自由聯合なるが故に、何等か實際の行動に對して、障害を生じたであらうか。

若し中央集權の絕體を論じ、自由聯合の絕體を論ずるなれば、吾が聯合會は、自由聯合組織の絕體を信じて疑はぬ者だ、何んとなれば吾々の求むる、絕體のものは、自己の自由にあるからである。玆に聯合會の組織の實際化に對する概念の根據を述べたいと思ふ。

社會生活に拘束の在る如く、當然團體行動に、拘束なくては、何等の意義をなさない事は、明である、が現在の事實は、充分、合議に依つて、拘束を得る事が出來、何等の障害も、會つて生じたことがない。罷工等の場合、秘密を要し、突差の場合の止むを得ざる行動を、中央集權とは、云ふ可きではない、若しかゝる行動に然る批難の言を投ずるなれば、それは、爭議の根本精神の何たるを理解せざる者の言に過ぎない。

吾が聯合會は、常に、中央集權組織に反對する、其然りとする所以は、かゝる組織の運用を意義あらしめんとするなれば、組合個々の獨立に有害なる一大權力の運用を待つ、以外に何等の意味をなさない。しかも現在を支持する、××、×××××、×××、勞働組合の重大なる、行動であるとした時に、××××、××××××××せんとして得る處のものは、依頼心と、偶像崇拜の精神に外ならないから。

吾が聯合會が組合員に對し、自主自治を强調し、組合自治の精神を組織の基調に置くの所以は、强力なる、資本主義制度に又、既道に對抗なし得るものは、而して是に勝ち得る唯一の力は、自主自治の精神を他にしては

出來得ぬことを深く信ずるが故である。自己を信ずる力の團體行動に表れたる時、如何に、偉大なる力を生ずるであらう、如何に偉××××××齎たらすであらうか。「大衆は遂に勝」若しかゝる言を致する者があるなれば、人類の幸福と、人類解放に對する大なる、錯誤である。

何處迄も、人類の幸福に邁進せんとせば、個々の力を信じ、即ち個々の人たるを信じなくてはならない。

解放運動の上に、組合の上に、個人の上に此の意識が働き、組織立てられなくてはならない、社會生活に、團體行動に若し、少數上層幹部の専制に依つてのみ、恐も可能なれば遂に、それは、解放運動の破綻でなくてなんであらう。出來得る限り、此の拘束を、理解と合議に依つての行動に强調しなくてはならない。

それは、下より組み立てられたる、集中組織即ち、大多數の意志を出來得る限り擁護し、且つ大多數の意志に依つて行動する事が、最も强大な力でなくてはならない。

かゝる概念が吾聯合會の、組織を最も、力强く有效ならしめてゐること、幾多の實戰が、最も、雄辯に物語つて居る。

組織に就いては左に本會の規約の第二章を摘記せば一層判然する。

一、本聯合會ニ左ノ機關ヲ設ク
イ、大會　ロ、中央委員會　ハ、執行委員會

一、大會ハ代議員ヲ以ツテ、組織シ毎年一回之ヲ開催シ、執行委員之ヲ召集ス
但シ、中央委員會必要ト認メタル時ハ臨時大會ヲ開催スル事ヲ得

一、代議員選出方法及代議員數ハ中央委員會ニテ決定スルモノトス、代議員ノ任期ハ大會開催中トス
細則（代議員選出ニ對シテ、特別ノ場合ハ中央委員ヲ以ツテ之ニ變ヘル事ヲ得レド平大會ニ於テハ各組合ガ三十名ニ、一名宛選出スルモノトス）

一、中央委員ハ加盟團體別ニ依リ加盟組合員中ヨリ選出シ、任期ヲ一ケ年トス
細則（加盟組合別五十名毎ニ、一名但シ任期中ト雖モ、加盟團體ノ增減ニヨリ、其他理由ニ依ツテ增減又ハ改選スル事ヲ得）

一、中央委員會ハ中央委員ヲ以ツテ、組織シ大會ヨリ、次期大會ニ至ル期間ノ決議機關トナリ、一ケ月一回執行委員會之ヲ召集ス但シ執行委員會ニ於テ必要ト認メ、又中央委員三分ノ一以上必要ト認メタル場合隨時開催スルヲ得

一、執行委員數ハ中央委員會ニ於テ決定シ、大會ニ於テ之ヲ選出ス執行委員ノ任期ヲ一ケ年トス
細則（執行委員數ハ各組合別一名宛トス）

一、執行委員會ハ、執行委員ヲ以ツテ組織シ毎週毎ニ一回開催ス

一、執行委員會ハ大會及中央委員會ノ決議ニ依リ本聯合會ノ會務ヲ執行スルモノトス

一、本聯合會ニ左ノ役員ヲ置ク
イ、中央委員若干名　ロ、執行委員　若干名　ハ、會計一名　ニ、會計監査役　若干名、

一、會務分擔ヲ庶務、會計、外務、文書ニ別チ、執行委員會ノ互選トス但會計監査役ハ中央委員會中ヨリ互選スルモノトス。

右に對して、聯合會の決定權は、各組合より比例選出による、中央委員會に属し、執行委員は、大會及び中央委員會の決か事項を執行すべき、任務を有するに過ぎぬのみである。

尙聯合會規約に左の如き一條を有して居る

一、本聯合會ハ加盟團體共通の利害ニ關スル事以外ハ加盟組合ノ内部自治ニ干渉スル事ヲ得ズ。

要するに本聯合會の組織の重點は、聯合會が各組合を支持するものに非ずして、加盟組合が協力一致支持するものだといふ概念に外ならない、現在の實戰即ち、勞資戰に於て、一に、各組合の自主的精神が最も、有力な力であり、有效な結果を齎たらして居る、更に現在の運動の要點は、勞働大衆の啓蒙であり即ち宣傳戰である。此の意味よりして、勉めて小なる問題に對しても出來得る限り、多數に、徹底せしむる樣、組織の運用を計らなくてはならない。多數の意志と多數の行動を便ならしめなくてはならない。

吾が聯合會は「倚らしむべし知らしむ可からず」の政策を、斷じて排する者である。是吾が聯合會が、如何なる苦痛をも甘受しつゝ自主自治の精神を高唱し、又組織の上の根本精神となす所以である。

(二) 聯合會の現況

一昨年聯合會の各加盟團體は殆ど、資本家の逆襲に逢つて、皆深ひ痛手を受けたのである、就中關東車輛二組合の八百名は、日本で稀有な資、官、勞、の三强敵を向ふに廻はして戰ひ、惡戰苦戰を續け、本芝勞働組合の如きも、六月廿五日から、九月十八日迄、日本運動史にかつてなき、苦鬪を續け、其他組合も、夫々激烈なる勞資戰の洗禮を受け、更に彼の震災に遭遇したのであつて、當時復興に從事活動された、同志の人々の中には、幾多の涙ぐましひ挿話を殘して居る程、悲慘で、悲壯であつた、而して此の不斷の努力は遂に、現在の如く、露に優る實力を有するに至り、殊に其の殆んどが、激烈なる、勞資戰を經た、精兵である事は、誇稱するに足るものであると同時に、關東方面機械產業の咽喉を掌握する勢力を有するに至つて居る。

現在は、内部組織の完備より、外部的に雄飛し今や宣傳月を開始し、ビラに演說會に、連續的の活動に未組織勞働者の開拓、敎化に全力を傾注し、將來勞資戰の要素に、又忠實なる宣傳戰に終始しつゝあるのである。

(三) 聯合會の指針

聯合會は、勞働組合が經濟的團體である立場より、其力を、經濟運動に注ぐ、方針を以て進む可きだと信ずる者である。

政治運動に×××××××××××××××
×××××××××××××××××××
××××××××××××××××××××
×××××××××××××幸福に資せんとせなくてはならぬと同時に、全然無關係なる態度は、大なる過誤であると思ふ。それは、個人の社會的政治行動を許して、何んで團體行動に影響せずに終るであらうか。

無產政黨に對しても、眞の吾々を代表するものの出現を希望すると同時に、互の協力を惜まぬものである、即ち吾々は利權の爲めの政治形態を排し、人類本位の政治を求むる者である。

勞働團體が、勞働條件の、維持、改善を、唯一の使命とする事は、本論に於て動かすべからざる事であるが、幾多の勞資戰に於て、得た意識は更に何者をか感じた、社會の何たるを觀破するに至つた、即ち勞働者が×××××××××精神が芽生て來たのである事は當然の歸結である、思想團體も當然此の條件に對して範を同じくする者であるが但し其の手段に於て、到底其の軌を一にすべきでない。

殊に勞働團體が、大多數の無自覺者を抱擁し、漸時に、意識なさしむると同時に、又資本家に對する、戰の手段は、此の力を此の抱

負を有力な行動に移さんとせば、當然、合理合法的に、運動の基礎を求めなくてはならない。多数の絶體は、安全を求めて居る、又希望の下に行動せんとして居るのが、現在である。

本聯合會は現實の手段として、テロリズムを排して實力を基本とする實行に依り、現實の上に着實なる力を以つて進まん事を、唯一の手段としてそこに吾々の幸福を齎たらさんとしつゝあるものである。

印刷工聯合會の概況

延島英一

大正十一年九月、大阪に於て開かれた全國的勞働組合總聯合設立會議が、日本勞働總同盟の主張した中央集權主義と、主として東京の勞働組合に依つて高唱された聯合主義との二派に決裂した後、東京の印刷工組合信友會と新聞工組合正進會及び京都印刷工組合との間に、聯合主義を基調として全國的印刷工組合聯合會を組織しやうといふ議が醸成せられた。そしてその翌年(十二年)五月に先づ信友會と正進會とが聯合して其の機關紙を合併し、新たに『印刷工聯合』を發行した。これに京都印刷工組合及び函館印刷工組合親工會が加盟し、十三年四月二十日、東京に於て第一回全國大會を招集し、綱領及び規約を確定して玆に印刷工聯合會は正式に成立したのであつた。其の後、更に千葉印刷工組合千工會、横濱印刷工組合、大阪印刷工組合、長野印刷工組合兄弟會、上毛印刷工組合三山會の加盟を見、又廣島印刷工組合、福島印刷工組合印友會、熊本印刷工組合等も近々に加盟する形勢となつてゐる。會員數は會費納付額に就て見るに、毎月かなりの増減があるが、大體に於て四千より五千の間を上下してゐるものと認めて大過ない。そして全會員數の約四分の三を東京印刷工組合(信友會と正進會とが十三年十一月合同して成立したもの)と横濱印刷工組合とで占めてゐるのである。

以上が印刷工聯合會と歴史と現勢力を何等の誇張も加へず其の儘述べた所のものだ。

印刷工聯合會は、其の創立の當初から日本の勞働運動界に於て一種特別な地位を占めてゐると言ふ事が出來よう。何となれば、其の主力たる印刷工組合信友會と新聞工組合正進會とは日本に勞働運動らしいものが起つて以來、最も進歩的な、また最も戰鬪的な勞働組合として知られてゐる。信友會は二十年以上の歴史を有してゐる點で、恐らく日本最古の組合であらう。しかも既に二十餘年以前に、其の大會に於いて組合の運動方針を決定するに際し、社會政策主義者金井延君等と社會主義者片山潛君をして各其の主張を演説せしめ孰れを採用すべきかを投票に問ふた事がある。大正七年の米騷動の際には、信友會の幹部は當局より『甚だ危險なる人物』といふ立派な烙印を押されて、自宅より幾日かづつ檢束されてゐる。大正八年の夏には、正進會の前身たる革進會はヂェネラル・ストライキを以て全東京市の日刊新聞を四日間休刊せしめた。同年の秋、信友會は八時間勞働制實施の要求を提げて、全市の印刷業者に迫り、約一ケ月間に亘つて稍ヂェネラル・ストライキに近い爭議を行つてゐる。同年の第一回國際勞働會議に際しては、友愛會と信友會のみが實際に桝本勞働代表反對の聲を擧げる資格ある組合であつた。大正九年の第一回メーデー示威

運動も、信友會と正進會との發起のものであり、其の標語に『シベリアよりの即時撤兵』を掲げる事を主張したのも亦印刷工であつた。同年成立した××××××××の發起人二十餘名の中には正進會と信友會より三名を出だしてゐる。又十一年には×××××××××××××××××××××××××××××××××

斯樣に日本の勞働組合界に在つて、印刷工は終始一貫其の××××の役目を務めてゐた。其の唱道した『組合より知識階級指導者の排斥』『經濟的××××』の主張は最近まで日本の勞働組合界を風靡してゐたのである。殊に十一年九月の大阪の總聯合會議に於いて聯合主義の爲めに飽まで戰つた事や、十二年九月、關東地方大地震に伴つた勞働運動者の恐怖時代に、他の殆んどすべての勞働組合の向背に關せず、所謂「石板塗り替へ」の醜を演ぜず、從來の主張を以て危機を押し切つた事等は、多少にまれ一種特別の色彩を與へてゐる。

印刷工聯合會の現在の主張を窺ひ知るには、十三年四月の第一回全國大會で發した宣言に依るを最も便とする。次に其の一部を引用して見やう。

「我が印刷工聯合會は、大地震後、政府の執りつゝある强大なる××政策に關せず、飽迄勞働組合の城砦を一步も退かず××するものである。多くの勞働組合は政府の×××に恐怖して勞働組合主義を放棄し、改良的社會政策に逃避し、或は所謂勞働黨運動にかくれ、勞働階級の敵たる資本家階級及び其の代辯者の御機嫌を損ぜざる事をのみ慮つてゐる。而して彼等は此の裏切り、此の逃避、此の詐僞、此の御機嫌取りを自ら名けて『現實的運動』と稱してゐる。我々は彼等の『現實的主張』を檢討することによつて、それと對立する勞働階級の『現實的主張』を明白にするであらう。

「今、僭稱して日本勞働總同盟と云ひ、事實は日本に於ける組織勞働者の一部の集合である一勞働團體は、其の大會に於いて、議會政策採用、國際勞働會議承認を決定し、其の當然の結果として勞働黨組織に手を染めんとしてゐる。國際勞働會議が勞働者龝濟會議であつて、これを承認する事に依つて勞働階級が何等利益する所無きは勿論、更に進んでは勞働階級より其の×.××××××××ふに至るは極めて明白な事である。………

されば……勞働階級の生活狀態改善は、一に其の階級的團結たる勞働組合に依る不斷の鬪爭を以てのみ達成さるべきを自覺しつゝある。例年の國際勞働會議に出席する勞働階級の代表者を見るに……彼等の團體は多かれ少かれ、政府、資本家の保護に浴し、又はそれと協調し、支配階級に損失を及ぼさゞる範圍に、勞働階級の要求を支持するものである。…

「更に彼等は議會政策採用を以つて、部分的利益を獲得し得べきを信じてゐる。×××其の改善し、向上し得る程度は、勞働者の階級的團結たる勞働組合と其の力、即ち經濟的行動の力の程度に比例するものである。勞働階級自身に改善を强要するの力無き時は、如何なる手段もそれに利益を齎すことは出來ぬ。

資本主義社會に於いて、勞働者に其の經濟的行動以外に、何等か其の地位を改善すべき手段のあるを信ずるのは××である。

……

「勞働組合は勞働者の階級的利害の一致を基礎として組織されるものである。政黨は

然らず、夫々各々の政治的意見を以て集る。即ち同じく勞働階級の政黨と稱するもの、間に在つても、意見の相違の故に、相互に敵對する。此の如くして階級的一致は破壞されるのみならず、各政黨が自らの大を成さんことを欲するが爲めには、あらゆる奸計、あらゆる詭詐、あらゆる不信が行はれる。政黨は階級鬪爭を促進しない。それは勞働者の階級的一致を破り、其の間に内紛を惹き起し、其の反資本主義運動を、奸計と、詭詐と、不信に充つる外交的運動に墮落せしめる。又政黨の組成分子それ既に階級的ではない。先づ產業的共通利害に發し、階級的共通利害を代表する勞働組合に反し、政治的意見を基礎とする政黨は社會の相反する各階級を包含する。其處には勞働者も在らう。しかし、それと共に中產階級も、新聞記者も、ロシア政府から金を貰ふ徒も、ブルジョアの子等も加盟する。政黨は此等各階級分子の雜然たる集合所である。それ自身階級調和の機關である。政黨は我々が日々當面し、其の下に生活を余儀なくされてゐる產業狀態を基礎とせず、單なる抽象的意見によつて立つ、必然に中央集權的であり、奴隸的であり、言語の上にのみ戦鬪的であつて、實質は辛うじて改良的であり得るに過ぎない。

現在のすべての社會現象は必ず階級的性質を帶びてゐる。我々は之等の現象に對し、それが政治的であれ、經濟的であれ、總て我々の階級的團結である勞働組合と、我々の執るべき唯一の手段、經濟的行動を以つて當るべきだと確信する。

「又同聯合會(機械勞働組合聯合會)は、現在の資本主義×××××××××××思想團體の任務に屬し、勞働者の關せざるが如き態度を裝ふてゐる。勞働者が現在の奴隸狀態より解放さるべき時は勿論、たとひ現狀より幾分の改善を獲得せんとするも、それに×××××××を伴ふを豫期せざるは空想である。……

「…我が印刷工聯合會は、政治屋指導者の現實でなく、勞働階級の現實に立脚して運動を進める者である。一切の政黨より獨立し、階級的に組織されたる勞働組合、我々は此の勞働組合主義を來じて、此の力を以つて、勞働階級の解放を圖るものである。」

印刷工聯合會の主力たる、印刷工組合信友會と新聞工組合正進會は地震に依つて大打擊を蒙つた。兩組合とも一時は會員の八割以上が失業した。然るに約半ケ年にして舊勢力を恢復し、十二年五月以降には東京に於ける頻繁なる印刷工の爭議に伴つて急速に組合員數を增加した。十三年五月以降十一月末日迄に信友會と正進會の關係した爭議數は四十二件に上つてゐる(參加人數の統計を欠く)。其の中積極的に勞働者側より要求條件を提出したるものは二十三であるが全然敗北したのは五件である。他の十九の爭議は消極的(主として馘首)なものであるが、此の方面は特に十月以降の現象であつて、東京に於いては、現在は是に忙殺されてゐる。

東京に續いて有力なのは横濱印刷工組合であるが、六月創立より十一月末日迄に六件の積極的爭議を醸し、內四件は完全なる勝利を得た。横濱印刷工組合は加盟組合中に於て、其の包容する組合員數の其の地方の全印刷工に對する割合が一番多い組合で在つて、現在横濱に於ける唯一の勞働組合である。京都印刷工組合は組合員數は少いが戰鬪的であり、六月中に積極的爭議を惹き起してゐる。

信友會と正進會は十三年十一月合同して、新に東京印刷工組合を創立した。其の合同組合の組織は全體を七つの職業部門に分ち、個

々の職業部門より其の包容する人數に關係なく、各々同數の役員を選出し、此れが組合の執行機關を構成する事である。これに依つて印刷工業に包含さるゝすべての職業の利害が最も公平に組合に反映される事になる。それと同時に組合の決議機關として、職業の別に關せざる工場を單位とする別種の機關が存する。執行機關は毎月一回以上此の決議機關に組合の狀勢と行動を報告し其の承認を得なければならぬ。斯樣にして前者は各職業部門の利害を公平に代表するものであり、後者は組合全體を職業部門の單なる聯合となる事を防ぐ機關である。これは產業的勞働組合の組織として、日本に於ける新しい試みではないかと思ふ。

印刷工聯合會は未だ加盟組合間の連絡が十分に取れてゐるといふ事は出來ない。それは第一回大會に於いて機關嫌惡論者が優勢であつたからである。然し乍ら一年間の經驗は、現在の組織を以つてしては、十分なる連絡は素より、積極的運動を起すに就いても多くの不便があるのを示した。十四年度の全國大會に於いては、此の問題が討議の中心となるうと豫測されるが、當然連絡上及び運動上の多くの不便は除かれ、以後自由聯合主義の眞價を發揮するに至るであらうふと思ふ。

我國婦人組合運動の概觀

野坂龍子

近年我國の勞働組合運動が、資本家階級の力をもつても、政府の權力をもつても、最早抹殺することの出來ぬ社會的勢力を築き上げるに至つたにもかゝはらず、婦人の勞働組合運動は、未だ甚だ微力であり、殆ど社會的にも認められぬ狀態であつた。

婦人勞働組合の發達が、男子勞働組合の發達に伴はないことは、歐米諸國と雖も同樣である。しかし、我國に於いては特にその傾向著しく其の主なる原因は左の如き點にあると考へられる。

卽ち（一）工場婦人勞働者を約八十五万人（社會局報告）と見積り、その一割二歩までが、工場法の適用を受けぬ小工場に雇はれてゐること。（二）女工の特に多い織維工場が、概して大都會をはなれた地域に多いこと。（三）教育程度の低きこと。（四）我國婦人の通有性たる非社會的及服從的慣習を特に多分に持てる事。――以上の諸點は、すべて婦人勞働者が、眞にプロレタリアとしての意識に目覺めるうへに、大なる障碍となるものである。――（五）勞働時間の長きこと。（六割までは十二時間或はそれ以上の勞働を强いられてゐる。）（六）賃銀の低廉なること（實にその七割までが、一日一圓未滿である。）（七）更に重大なる原因として、大工場（主として織維工場）の多數が、寄宿舍制度を有してゐること等である。

しかも、我國資本主義發達の初期にありては、女子の勞働は一時的性質を有し、或は小遣とりのため、或は嫁入り支度のためにのみなされたもの多く、從つて勞働組合の力を必要とするに至らなかつた。

しかるに、其後に於ける我國資本主義の急速なる發達は、資本の集中となり、小工場は崩解して大工場を生み、機械は益々精巧となり、熟練勞働者の代りに、不熟練勞働者たる婦人少年勞働者の夥しい增加を來した。

ここに至つては、婦人の勞働も決して一時のものではなく、永續的必要となつたのであ

る。また、絶えず起るストライキその他の労働争議にも、女子の加はらざるものなく、婦人労働者にも組合の必要なることを、男女共に労働階級は感ずるに至つた。

△

現在我國に於いて組織されてゐる婦人労働者は約七千五百人である。我國の婦人工場労働者八十五万人に比して、百分の一にも足りない。（鑛業に從事する婦人労働者は、七万余人といはれるが、未だ労働組合の成立を見ない。）これを産業別に分類すれば、

一、纖維工業　五千二百人
二、機械器具工業　千五百人
三、化學工業　四百五十人
四、飲食物工業　二百人
五、雜工業　百五十人

又地方別にすれば、

一、關東地方　千八百人
二、中部地方　八百三十人
三、關西及中國地方　四千七百人
（この地方の特に多きは、兵庫縣加古川織物工場内にある誠和會といふ三千七百人の婦人會員を有する縱斷的獨立組合が存在してゐるためである。）
四、九洲地方　百九十人

更に、系統別をみれば、

一、日本労働總同盟　二千人
二、中部労働組合聯合會（中部及駄知陶器工組合及駄知製陶工組合等）三百人
三、官業組合（煙草労働組合、向上會海軍聯盟等）七百八十人
四、労働組合聯合會（純向上會、美術友仙工組合等）六百人
五、機械労働組合聯合會（造友會車輛工組合）四十人
六、獨立組合（誠和會その他）三千八百人

（備考、以上の各数字は、産業労働調査所の組合調査の結果によるもので、調査組合は一般に労働組合と認められてゐるもののみであつて、なほこの外にも、共濟組合、或は御用組合ともいふべきものは多く存在することゝ思ふ。

△

右のうち、日本労働總同盟の婦人部について少しく述べよう。

大正八九年頃にも、日本労働總同盟内には約千二百人の婦人會員があり、大正八年度の全國大會には、婦人部獨立案が上議された程である「友愛婦人」の名の下に、労働雜誌も發行されてゐた。しかるに、その後まもなく富士瓦斯紡績に於ける罷業の失敗その他によつて婦人會員はことごとく影を沒し、男子労働者も亦婦人労働者を顧みる餘裕をもたず、そのまゝに三ケ年の月日は經過した。

しかし、婦人組合の必要は、すでに議論の時代をすぎて實際の問題となつた。總同盟に於いても、各地各組合に散在する婦人會員を統一する組織の必要を感じ、大正十二年度の關西（四月）關東（七月）兩同盟大會は、共に、婦人部設置の件につき討議するに至つた。關西同盟大會では、準備委員を上げるにとゞめ、その決議は見合はされたのであるが、關東同盟大會に於いては、なほこの外に婦人組合勸誘促進の件及婦人の賃銀を男子と同等ならしむべく努力するの件の二つがあつたが、これらはすべて、愼重、眞面目に討議され、可決されたのである。

もとより婦人部設置の趣意は、婦人組合員に特に必要なる教育をなすことを目的とするものであるが、この大會後まもなく突發せしかの大震災のために、何らなすこともなく、本年二月の日本労働總同盟全國大會となつた。

關東同盟會は、更にこの大會に於いて、全國的に即ち總同盟本部に婦人部を設置する事を提案した。しかし乍ら、この提案は、未だ

時期尚早との理由の下に次の大會まで保留することゝなり、關東關西より各三名の準備委員を擧げて、まづ内容の充實をはかることゝなつた。

この大會後まもなく、關東同盟會婦人部は、婦人會員向きの讀み易き機關紙を作る計畫をした。そして苦しき會計の中から漸く四六版八頁の「勞働」號外婦人版を發行するに至つたのは三月十五日であつた。從來一つとして婦人會員に對する特別の施設もなかつた折とて、この婦人版の發行は、婦人會員の大きなよろこびとなり、又、婦人部の存在を判然ならしめ、組合擴張のためにも少なからぬ便宜がえられた。

一方頻繁に婦人のみの茶話會を催し、あらゆる機會に於いて組合員の教育に行はれた。

しかし、統一せる組織のない婦人部は、連絡上圓滿をかき、事毎に困難を感じたので同年七月、關東同盟會婦人部臨時總會を開き連絡をはかり、内規を定めた。左の如し。

日本勞働總同盟關東同盟會婦人部内規

第一章、目的及び事業

一、關東同盟會婦人部は、關東方面の婦人勞働組合運動を促進することを目的とし、その目的を達するために左の諸部をおく。

教育部、宣傳組織部、出版部、身の上相談部

第二章　構　成

二、當婦人部は、關東同盟會に屬する各團體の婦人部をもつて構成す。

第三章　役　員

三、當婦人部には左の役員をおく。

部長一名、常任委員三名、

會計及會計監査役各一名、

四、右の役員は總會に於いて選ばれ、なほ關東同盟理事會の承認を得るものとす。

五、役員の任期は一ケ年とす。但し必要に應じて、改選することを得。

第四章　機　關

六、總會、總會は部長、常任委員及び當婦人部に屬する各團體の代議員とによつて開かれ我婦人部のために必要なる事柄を相談し且つ決めるために毎年一回開かれるものとす。

七、常任委員會は、部長、會計及常任委員によつて作られ、總會にて決められし事柄を行ふものであり毎月一回これを開く。

第五章　會　計

八、當婦人部は、婦人部會員が關東同盟會費として納入する會費の一部をもつてこれにあてるものとす。

この總會に集りしは、日本縫工組合の婦人會員十數名を初めとし、關東鐵工組合に屬する、田町支部、三田支部、大崎第三、第五第六支部、東部合同組合等の各婦人部代表者二十四五名であつた。當日、役員の選擧においても、これまで役員の全部は男子であり、またすべての事務も男子にまかせきりにされてゐたのを、すつかり改め、部長以下、全部婦人會員の當選を見、婦人部に屬する一切の仕事は出來るだけ婦人自身によつて行はれることとなつた。また、八月より、從來の「勞働」婦人版を、關西の婦人會員と提携して發行することゝし、形も菊版八頁に擴張し、内容の充實をはかることゝなつた。

又、教育部に於いては、毎月二回、定期に研究會を、又、月一回は合同茶話會をひらくことを申合せたが、これらは現在まで、少數乍ら、熱心なる會員達によつて、確實に繼續されてゐるのである。

△

以上述べし如く、我國に於ける婦人勞働組合の運動の現狀は、僅にその第一歩を踏み出したにすぎない。またその活動にも少しの華

懸賞寫眞募集

當商會は素人「アマチュア」娯樂寫眞を奬勵するの目的を以て當社製(カメラ)の愛購者より懸賞寫眞を募集す而して最も優秀なる映畫に對し左の懸賞を呈す。

第一の最上映畫三種に對し

一等・三百圓　二等・二百圓　三等・百圓

但シ右應募映畫ハ左記ノ「カメラ」ヲ以テ撮影シタルモノニ限ル

クラウス製「アクチスカメラ」カビネ 手札 名刺 F4.5「テッサア」「コンプア」附
同「テイクタカメラ」同 F4.5「テッサア」「コンプア」附
同「リリプト」「アトム型」ヴエスト型 F4.5「テッサア」「コンプア」附
同「ロオレット」ロールフイルム用 F4.5「テッサア」「コンプア」附

第二の最上映畫三種に對し

一等・二百圓　二等・百圓　三等・五十圓

但シ右應募映畫ハ左記ノ「カメラ」ヲ以テ撮影シタルモノニ限ル

クラウス製「テイクタカメラ」手札 F6.3「トリアナ」「イブソシヤター」附
同 同 手札 名刺 ヴエスト型 F6.3「トリアナ」「ヴアリオシヤター」附
同「ローレットカメラ」ロールフイルム F4.5「トリアナ」「ブロントシヤター」附

應募者ハ素人(アマチア)ニ限リ専業家ヲ除ク映畫ノ審査ハ(アマチア)寫眞界ニ有名ナル三氏ニ囑託シ嚴正ナル考査ヲナシタル結果ニ待ツ

應募期間(大正十四年五月三十日迄トス)應募各映畫ニハ當方ヨリ渡シタル「レンズ」番號記入ノ符紙ヲ添附スルヲ要ス此符紙ナキ映畫ハ無効ナリ。且應募者ハ「クラウス製」「カメラ」ヲ購入シタル販賣店ノ名ヲ記入スルヲ要ス

詳細ハ全國各地寫眞機材料店ニ御照會相成リ度候猶不明ノ點ハ直接當店ヘ御照會

東京市麹町區有樂町壹丁目壹番地　**ヱー・クラウス**　電話大手五二四八



石川啄木著

啄木歌集

石川啄木は新歌壇第二次の革命者也。彼は曾て短歌が歩まざりし大膽勇敢なる境地を開拓せり。即ち彼の纖細華麗なる情操を弄ぶを以て短歌の能事とする長袖者流のジレッタンチズムを蹴破して自己の生活を歌ひ眞に短歌をしてその居る處に居らしめたり。啄木歌集一巻八百首はその身動く能はずしてその心早くも一切の束縛より放れたる新時代青年の痛苦の聲なり。

菊半截百七十頁
洋布装
著者筆蹟挿入
定價壹圓
送費六錢

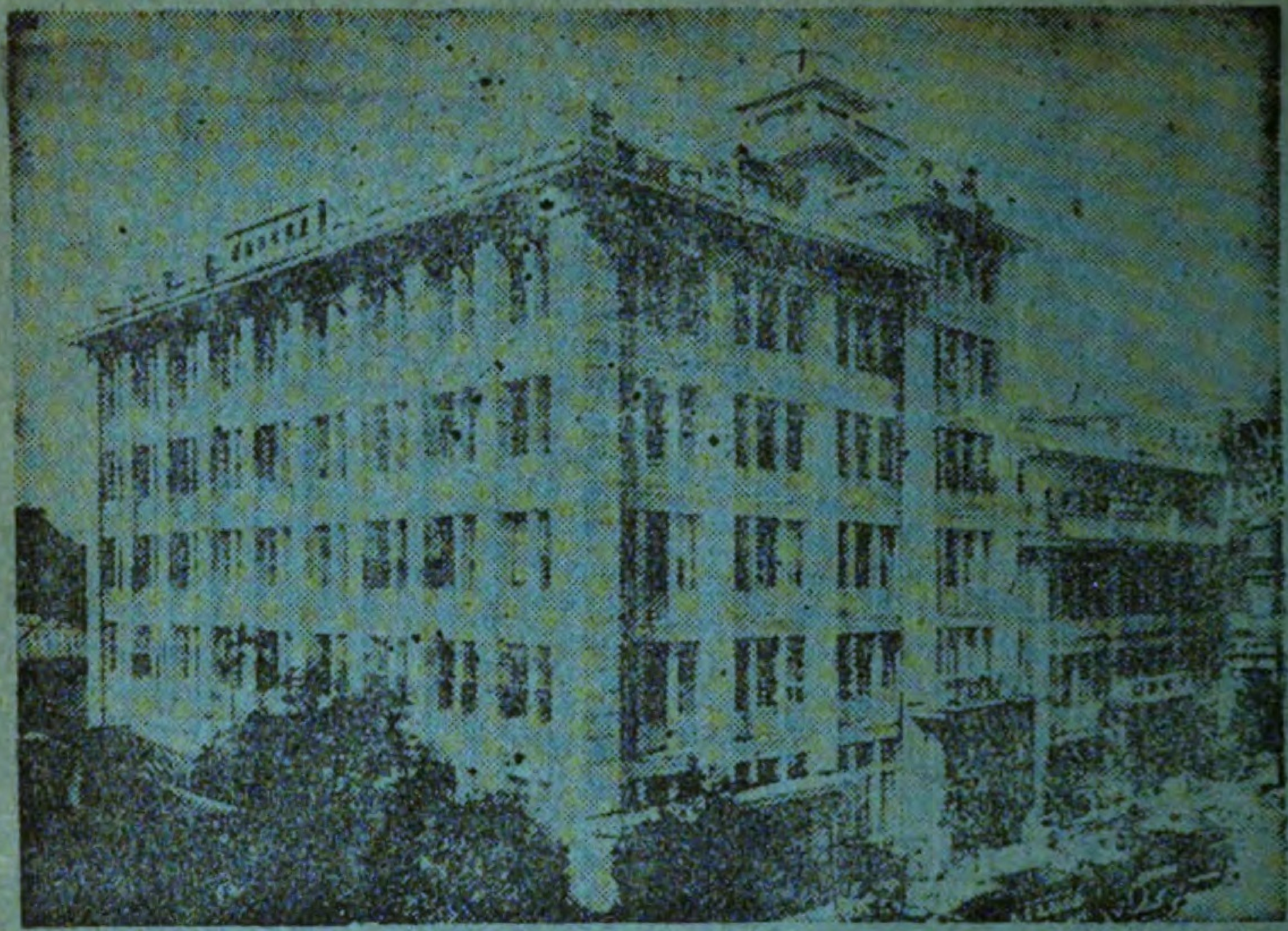
啄木遺稿

菊半截紙裝幀
本文總頁四七〇頁
定價金壹圓七拾錢
送費金十二錢

「啄木遺稿」は著者の遺せる唯一の思想的文集にして、卷頭にかの有名なる社會主義詩「はてしなき議論の後」以下三十五篇の詩と、後年の著者の傾向たりし社會革命家としての理想を語るべき長短十餘篇の思索感想を輯む言議熱烈直情眞摯若くしてその思ふところに行くを止めかねし著者の心は行文の間に横溢す。吁、その筆端の何ぞしかく、不平に滿ち、何ぞしかく鋭利なる！歌集とともに愛讀を賜へ。

◆附錄＝石川啄木傳　文學士　金田一京助

發賣所　東京市日本橋區元大工町一　振替東京三三一六番　紅玉堂書店



朝夕刊

東京日日新聞

◇『東京日日』通信網の完備と報道の迅速と記事の正確とそして批判の穩健——政治問題に、社會問題に、經濟に、外交に、學藝家庭方面に世界のあらゆる方面の出來事を最新式高速度輪轉機モノタイプ其他優秀な文化機關によつてこれを讀者の前に提供します。

◇『東京日日』は現に帝都第一の發賣紙數を有してゐます。眞に新聞界の第一人です。更にこの『東京日日』を母體とし背景として日刊『英文日日』があります。經濟界の好指針として定刊『エコノミスト』が發行されてゐます。新聞文化の完全な體系は實に我『東京日日』によつて表現されてゐるのです。

萬朝報

發行所
東京京橋弓町廿一
株式會社萬朝報社
電話銀座 自五二〇〇番 至五二〇八番
振替口座東京八〇〇〇番

一經營者の變更 社債の募集を終つて、豫定の計畫實行に入らうとする間際に萬朝報社は一般同業者と等しく大震災の禍害を受けた、此一般讀者及世間に負うた物質的、精神的の債務を何う鎖却するか、ソレが萬朝報社としては震災直後の問題であつた、紙面の回復も、內容の充實も、而して後の事でなければならない、當時の萬朝報社當事者が此の重大時機に直面して、而もこの重大問題を解決すべく有隣生命社長飯田延太郎氏に向つて、其の援助を求めたのは、最も賢明で、且つ自然の決意でなければならない、飯田氏は是より先き黑岩社長在世の頃から、同社長及び萬朝報社に對して最も共鳴した紳士であるそして事業界に於ける飯田氏は夙に其の手腕に於て定評のある人である、大震災は圖らず此の因緣淺からぬ兩者の宿命を結び付けて、萬朝報社の生命を產んだ實に去年末の事である。

二營業局の改革 既に新生命を得た萬朝報社が、新血液と新筋骨とを求むるのは當然である、松尾要氏は飯田氏の代理として萬朝報社の專務と爲つた是れ正に新萬朝報社の行く手に向つて、一石を投じたものである、社中の革新は全く舊來のてつこくを破り宿弊を內部から排除して新活動の素地を作つた、松尾氏自ら亦曾て萬朝報社の重職に在つて、黑岩社長の有力なる幕僚であつたのである、氏は早い萬朝報社の革命に就て、一家見を持つて居た、勢ひ其の新萬朝報社に對する革新は、眞に疾風迅雷的ならざるを得ない、人は耳目を蔽ふて却走するのが慨があつた、時として建設か破壞かを疑はしむる程に、劇く徹底的であつた。

三編輯局の改革 營業局改革と併行した編輯局の革新も亦殆ど徹底的であつた、營業局に清潔嚴氏を迎へて、面目を一新した之に對して、松尾氏は更に編輯局長に坂口二郎氏を拔き來り、同參事に村上猶太郎氏を採つて、茲にも新生面を開いた、新酒は新革袋に盛れらざるを得ない、然し同時に新革袋の酒には自ら新香味なきを得ない、新粧をこらした新萬朝報は、從來の所謂萬朝式の編輯法を固守するかと思ひきや全くその形式を放棄して、別に清新にして潑剌たる編輯振りを見せた徒に時代ばなれをした編輯を『珍寄』がる者の愛惜にほださるゝ事なしに一直に其の所信に向つて邁進した、元來の遊覽客は日本娘の振袖を賞美するかも知れない、土藏造の格子戶を潜る風俗を日本特異の情味と言ふかも知れない、然し國際競爭の世の中に、獨り日本が世界の文化を避けて、外人遊覽客の爲の博物館化する事はできない、萬朝報に於てまた然らざるを得ない、所謂萬朝式の編輯が遂に今の新聞文化の時流に對して一轉換を試みたのは必然でなければならない。

四萬朝報の意氣 而も新萬朝報及び萬朝報社が、其の創設以來の傳統的氣魄を亡ぼんとする者と做すのは大なる誤りである、其の形に進化があると共に、其の所信に不拔の堅實味がある、獨立獨步の意氣は萬朝報が創刊以來養成した唯一無二の生命である乃ち其の編輯方式の極めて清新であると共に、其の論議は十年一日の如く不偏不黨である、奇拔斬新である、深刻である、雄渾淋漓として、一字一行の文字にも活氣がある、新萬朝報は斯くて現に澎湃たる民衆主義の先驅者である凡そ民衆的であると云ふ點に於て、由來萬朝報ほど其の誇りと名譽ある歷史を有するものはない、保守と退嬰とは萬朝報の最も排擊する惡德で、個人的にも、國民的にも、國家的にも、民族的にも、萬朝報は常に時代の先驅者たり、積極精進の鼓吹者であるからである、新萬朝報に於て固より一層此の調子がある、今や萬朝報の讀者三十萬社中は鬱勃たる復興の氣に滿ち、外は本邦新聞界を睥睨して將に其の霸を唱へんとして居る。

京城日報

毎日申報

本社　朝鮮京城府大平通り

東京支局　東京市麴町區有樂町一ノ四

電話大手四八五七

河北新報

成功者は何れも熟慮果斷の人！

煙草の害を知りつゝ永年禁煙の出來なかつた人も一度「カロツト」を口にすれば斷じて再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロツト」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロツト」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロツト」を御説明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロツト」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる意を述べて「カロツト」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、そして先づ一社員の煙草好な方に御試しを願ひました、すると其社員の方は早速「カロツト」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロツト」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが社員方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですね—、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロツト」を取上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね—」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讃下さいました、其處で更に店主は口を開いて「カロツト」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロツト」が多くの人に認められて來た事の本懷を述べて暇乞をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

特徴

外見人も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを身體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する惡き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

カロツト（凡百日分）

パイプ ベークライト製付	壹組	貳圓五十錢
パイプ 象牙製サック入付	壹組	參圓五十錢

	内地	臺、朝、樺
送料	十八錢	四十五錢
引替送料	三十錢	五十五錢

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京府大森入新井町不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二一九壹壹

東京市京橋區瀧山町十三番地

代理店 天下堂

々しさも認められない。しかし、底力のある運動である。その上に來る議會に上案される筈の勞働組合法の通過は、必ずや婦人勞働組合の上にも大なる刺戟を與へるであらう。その刺戟によつて生れたる勞働組合の多くが、協調的若しくは御用組合的きはめて穩健なる性質のものであることは疑ひのない所である。それらの協調的組合の出現が勞働組合運動上、一つの重大なる問題であることはいふまでもないが、我國の如く×××××の行はれる資本主義制度の下に於いて存在する以上、いつまでも、その狀態をもちつゞけることは不可能である。やがては、眞に自覺せる戰鬪的組合となりうるものなる故に、ともかくも婦人勞働者が、一人でも多く組織されるといふ事は、きはめて望ましい事である。

これらの意味において、我國の婦人勞働組合運動の將來は、多難であると共に、又多望といはれるべきであらう。(大正十三年十一月末日)

東京市電自治會の指標

宮井昌吉

極めに短日月の間に長足の進歩を遂げたる我勞働運動は走馬燈の如く矢次ぎ早やに多くの思想的洗禮と尊い經驗を得た。最近漸く其の皈着點を摑んで實際的境地へと進みつゝあると思ふ。或時はツレドユニオンに、サンジカリズムに、或はボルセビーキに、アナキズムに、或時は議會政治を否認し或時は智識階級を排斥し、經々去就決せざるの處、たまく全國的總聯合の氣運に際會し、將に其の實現に至らんとしてボル系とアナ系の思想的衝突に至り、截然として二大潮流に岐れて、最も忌むべき同階級の抗爭するに至つた。我東京市電自治會は絕へず其の二大潮流の間に中立し來つた。

最近に至つて各勞働組合の方針と政策とが漸々歩みを共にするの氣運に向いつゝあるは無階階級の爲めに慶賀に堪へない。勞働運動は經濟行動を基礎として政治行動をも否定すべきものでないと信ずる。現在の資本制度の存在する限りは、其の時と力とに依つて行動を二三にせざるを得ないのは止むべからざる事である。

無産政黨も勞働組合を基礎として立つ限り有效に利用して行かねばならない。結局は組合社會主義への道程を辿る事になるであらう。我自治會は此の意味に於て、先づ勞働組合を全國的產業別に統一する必要を痛感する。我々が目下全國的交通勞働の總聯盟を實現すべく劃策しつゝあるは、玆に我勞働運動界に一新生面を開かんとするのにある。先づ全國的產業別に統一して、而して全國勞働組合會議に依つて凡ての方針と政策が決定されて行くことにならねばならぬと思ふ。

借家人同盟の現狀

布施辰治

借家人同盟は無産階級團體である。

借家人同盟は、主として其の戰線を裁判係爭の法廷戰に張つて居るので、其の戰術は自ら合法的たる事を免かれないのと、モー一ツには、其の陣容を無産階級借家人の間に敷いては居るが運動方針を實際問題解決の實行に置いて居る點に於て、自ら多少は有産階級視せらるゝ借家人も、同盟の結束に引き付けられて來て居る、其の爲めに、借家人同盟は、果して眞の無産階級團體なりや否やを疑ふものが無いでも無いらしく思はれる。けれども、借家人同盟が、其の運動方針を實際問題解決の實行に置く裁判係爭の法廷に合法戰術の戰線を張つて居るのは、最も慎重なる要意を以て、無産階級解放運動の堅甲利兵を與する一陣容である。

夫れ丈け、借家人同盟としては、以上の諸點に妙な誤解を抱いて居るものがあるとしたら、大いに其の眞意義を語りたいが、こゝには與へられた問題——借家人同盟の現状を與へられた頁丈け書いて、借家人同盟は、無産階級解放運動の使命を任ずる團體である事を實證する。

借家人同盟の目的

借家人同盟の目的は、創生の趣旨を簡條書きにすると、

(1)現實の生活苦と民衆の威力とに目覺めた、無産階級の借家人に依りて、弱き個々の私共を強からしむるものは團結の力なる事を宣言する。

(2)私共の活動努力は、安らかなる住宅にのみ益はれ、私共の幸福は、樂しき家庭にのみ創造せらるゝ事を主張する。

(3)今や、世界何處の國の都會でも、借家人の都會にあらざる都會なく、九二パーセントの借家人を有する我國の都會は、借家人の都會なる事を揚言する。

(4)家主の跋扈を許して、借家人の住宅不安を脅威する住宅爭議は、文化の中樞たる都會の不安なる事を絶叫する。

(5)住宅爭議の訴訟は、理否の裁判解決が出來ても、現に引越先の無い借家人、追拂ふて浮浪の罪人を作る譯に行かない現實の問題なる事を指摘する。

(6)住宅拂底に附込む家賃値上げと、家屋の明渡しを迫りて、無産階級の生活をおびやかす家主は、當に市民の公敵たる事を彈劾する。

(7)以上の主張を實行して、無産階級の都會に於ける住宅難解決の徹底機關たることを使命とする。

と云ふ事に爲つて居るが、經濟運動の觀點から其の趣旨を要約すると、無産階級の消費方面に於ける資本主義の搾取に反抗する運動團體である。

無産階級がどの位資本主義の横暴に苦しめられて居るかと云ふ事を、消費の方面から考察する時に、何人も氣付く事は、勞働生産の分配を受くる時には、其の大部分を資本家に掠奪せられ、最も僅少な報酬の分配を受け之を消費する時には、僅少な分配を受けた報酬を資本家から過當に搾取せらるゝ事實である。斯ふした無産階級の消費方面に於ける資本家からの搾取に就て、無産階級解放運動を起さなければ、如何に勞働運動が、生産方面に於ける資本家の掠奪に反抗して、多くの分配を受くる事に爲つても、結局は網の目である。少しでも多く受けた分配が、無産階級の懐中を素通りする丈けの事である。世の中でも、生活必需の消費を過當に搾取する事例の適確なものは家賃である。幾萬幾千圓の資本を投じた家屋を賃借する借家人が、現代の合法的搾

取を餘儀なくせらるとしても、其の家賃には自ら利廻りの制限がある筈の家賃、權利金、造作代、敷金等の暴利を貪らるる資本家横暴の搾取に反抗する目的を以て成立したのは實に借家人同盟である。

借家人同盟の運動方針及戰術

無産階級解放運動の戰術として、一番六ケしいものは、階級意識をシッカリと摑んで誤らない運動方針の徹底である。殊に其の運動方針を宣傳に置くものは易すいが、實行に置くものは甚だ六ケしい。之れ蓋し、總ての運動が宣傳には大いに其の威力を强調して居ても、一度び實行問題に逢着すると、殆んど幻滅の悲に堪へざらしむる場合の多い所以であらう。

其處で借家人同盟は、階級意識を最も明確に摑んだ運動方針として、家主の事件は絕對に取扱はない事にして居る。實を云ふと、妥點が未だ階級意識に目覺めて居らないものから攻撃せられたり、誤解せられたりする點であり、又、從來幾多の借家人運動と其の質を異にした、眞の無産階級解放運動の一陣容たる主點である。

借家人同盟を攻撃するものは、定まつて云ふ、家主の中にも正直なものがあれば、借家人の中にも隨分非道いのがある。然るに、借家人は、家主は總て之れ惡家主、總て之れ善良借家人として取扱ふ善惡無差別は、あまりに亂暴だ」と、如何にも夫れは事實に相違ない、借家人にも惡るいのもあれば、家主にも良いのがある。之を個々の問題として、個人的に考察する。そう云ふ事に爲るが、個々夫れ々々の問題に含む爭議當事者の正義的考察は、各箇の問題であつて、其の分量觀には、見る人見る時の氣分や、立場からの異見と誤解と共く、お互の正義呼はりを以つて、何千年來の走馬燈的活動を續けて居る正義人道の運動が、まだ正義人道の確立を期し得ない所以であらう。

こゝに、借家人同盟は、個々夫れ々々の問題に含む家主對借家人の正邪善惡分析よりも、全體の家主對借家人の階級的正邪善惡觀に依りて、何人にも誤解や異見の有り得ない借家人階級の事件のみを取扱ふ所に、借家人同盟の運動方針に於ける要意がある。果然、斯ふした借家人同盟の運動方針は、能く借家人自身を階級意識に目覺めさせて、地主の事件も家主の事件も取扱ふ辯護士が危くて頼まれないと云はしむるに至つた、と同時にどつちの爲にも働く辯護士も、借家人同盟の成立に依つて、自ら階級付けられた。更らに所謂暴力團體も又、自ら階級付けられた、夫れは所謂暴力團的に居ても、暴團に居る位のものは、どこかに現代呪咀の氣分に燃へて居るのだから、自然弱いものゝ味方に改宗したり、歸依したりして來るものが出來て來た事である。

夫れから、借家人同盟内部の組織であるのであるが、規約には布施辰治全責任を以て之を經營すと爲つて居るが、事實は同人組織として、中村、黑田、神道、中田、岩井、泉近君の辯護士非辯護士同人と二十三支部同人及約壹萬の會員が法廷内外の實際問題解決と每月十四日の演說會に、街頭苦行の活動を續けて居る、

借家人同盟の活動

成立以來の活動として書きたい事は澤山あるが、震災后の活動として特記したい事は、震災后十日、卽ち九月十日羅災借家人が、焼け跡にバラックを建てゝも良いか惡いかに迷ふて居る際に、斷乎として借家人がバラックを建てゝも良いと云ふパンフレットを作り、一擧八萬部を頒り盡くして、復興の花を咲か

したバラック建設の促進である。

倘ほ夫れに引き續いた活動は、震災后三回開かれた際の宣言決議が借家人同盟の壓倒的勢力に依りて、着々其の實を擧げて居る事を告げて置く。

借家人同盟の將來

借家人同盟の將來は、無產階級解放運動の將來と、其の運命を共にするものではあるが、特に同盟將來の運動として特記すべきものは、借家人デーの擧行である。

大正十二年九月一日は、住宅破壞の日であつた、突如襲來した激震は、私共を大地から追ひ立てゝ其の居るべきところを脅かし、忽然として起つた猛火は、人間生活一切の中心である住家を燒いた其の日の恐ろしさ、其の時の切なさは「生きんが爲めに」の努力を以て激震猛火の暴威に勝つた私共の體驗に明かなる所である。

此度には地主も家主も借家人も區別が無かつた、大震火災の暴威は眞に悲慘なる暴威ではあつたが、自然の暴威は貪婪飽くなき惡地主惡家主の生命と財產とを、より深刻に、より激底に破壞する程に眞に公平であつた。

地主も人であり、家主も人である限り、九月一日の激震猛火に、居るべき家を奪はれた恐ろしさとつらさは、其の體驗を刻みつけられて居らない筈がない。

然るに、彼等地主家主の無產階級借家人に對する從來現在の態度は、激震猛火のそれよりも恐ろしい陰險不法の手段を以て、私共無產階級借家人の居るべき地所の明渡を迫つて、住むべき住家の破壞を脅かす住宅破壞を敢てして居る、斯くの如き住宅不安の現狀は、私共無產階級借家人に對する地主の地震と、家主の猛火とを以て、九月一日の一大悲慘事を繼續するものである。

私共眞に激震猛火の天譴を有意義に紀念せんとするものは、不斷の住宅不安と住家破壞とを脅かす地主の反省と勵誡とを期する無產階級借家人の威力を强調しなければ爲らぬ、之れ我が借家人同盟が、九月一日の大震火災を紀念すべき借家人デーを擧行する所以であると叫んで、集會禁止の官憲壓迫を突破して、上野公園に集會し、夫れから堂々被服廠跡に慘死の遺靈を弔ふたのであるが、借家人同盟は毎年九月一日に之を擧行する豫定である。

最后に附言すべきものは、今や全國の各都會に借家人同盟の組織が計劃せられて居るから、軈がて、全國の無產階級借家人の大一結束を見るであらう。

學生社會科學運動の過去現在

林　房雄

學生社會科學聯合會の運動は、昨年—大正十三年の後半に至つて、漸く世人の注目を受け始めた運動である。然し、凡ての無產階級的運動が然るが如く、これもまた、決して一日にして成つたものではない。長き鬪爭の歷史——苦鬪と、經驗と、徐々たる發達の小歷史を、その背後に潜ませて居るのである。

一

我國に於ける社會主義的學生運動は、世界大戰の末期に於て、その姿を現した。當時、我國勞働運動の黎明期を背景として活躍した學生の姿——その數は寂く、その力は小であ

つたが、彼等が演じた先驅者的役割は、優に我國階級鬪爭史の一頁を飾り得るものあらう。殊にそれが有力なる勞働運動の指導者を無產階級の陣營に送りこんだと言ふ點のみより見ても、我國勞働階級の記憶に銘せらるるに足るものである。當時に於ける代表的學生團體として擧げらる可きものは、帝大の新人會早大の曉民會及び建設者同盟等であらう。

此の時代の×××××、×××××××
×××××××××××××××××××××ひ起さしめるものがある。一九六〇年代より八〇年代に至るロシアの革命史をひもとくものは、ツアリーズム及び地主階級に對して敢×××××××××十××××××××××
×××××××××

崇高にして劇的なるエピソード、××に値ひする勇氣と自己犧牲との實例に富んだ偉大××××——特にジノヴイエフも言へるが如く、此の時代に於けるロシア學生の運動は、人類解放運動の歷史の頁に、金色の文字を以つて記載さるべき壯觀である。

然し、我國に於ける學生運動は、その外觀は兎も角、本質に於ては、全然十九世紀末のロシアのそれと異る。後者は、十九世紀末の專制ロシアに於て、ツアーリズム及び地主階級への鬪爭として起つた。然るに二十世紀に入つて、新興資本家階級と封建的勢力との野合が完成されて、帝國主義的ロシアが成立するや、此の學生の運動は忽然として止み、『學生』なる概念の內容は『自衞團』たる意味を有するに至つた。二十世紀のロシアの學生は、少數のグルプを除いて、全く支配階級の忠實なる奴僕として、無產階級の敵と野合し、卑劣極る裏切りによつて歷史の頁を汚した。三月革命(ブルジョア革命)に於ては、彼等は全體として無產階級と協力した。然し十一月革命(プロレタリア革命)に於て彼等が演じた役割は、全く『自衞團』のそれであつた。且つて封建的勢力のもとにあつては、『學生』なる概念は、文字通り『人民の友』を意味して居た。それが資本家階級の治下に於ては『自衞團』を意味するに至る。

我國の學生運動は、日本の帝國主義的資本家階級が支配的地位に登り、學生が、その忠實なる奴僕たる俸給生活者の豫備群として、退嬰と反動の中に安住した時、即ち彼等が『自衞團』に結晶した時代に於て生れ出でたのであつて、ロシア十九世紀末の學生運動とは、この理由よりして、本質的に異る。

二

然らば、かゝる時代に於て、何が故に學生の間に無產階級的運動が起り得るか?

二十世紀に入つて、世界の資本主義が到達した新様相、帝國主義の時代に於て出現した種々の新現象の一つは、新中等階級(俸給生活者群)の急速する沒落と無產階級化とであつた。洋服細民(Hack-cunt Proletariat)頭腦勞働者(Kopfarbeiter)等の文字によつて代表される新プロレタリア群の出現であつた。この新傾向は、學生の社會的地位に非常なる變化を引き起す。大學が大臣博士の養成所であつた時代は夢と過ぎ去り、卒業後に於ては、從來の特權的地位と優遇との代りに、就職難と生活難、單なる頭腦勞働者として加へられる露骨なる搾取の鎖とが待つて居る。一方、獨占的資本主義の重壓は、大部分の學生の故鄕たり生家たる小ブルジョア階級を破壞し、學資の杜絕は、彼等の在學中の勞働をさへも餘儀なくするに至る。この事實は、一部の學生のブルジョア的心理の基礎を破壞し彼等をして次第に社會的自覺に到達せしめ、進んでは無產階級運動の積極的×××まで導く。即ち帝國主義時代に於ては、階級分裂は學校の內部にまで起るのである。

我國たりとも、決してその例外ではあり得ない。世界大戰以來、帝國主義の重壓は容捨なく學生の上にも加つた。就職難の脅威、俸給の低下、卒業證書の不渡手形化、夜學部の擴張、晝間勞働學生の增加、等の現象は、その實證である。大正八年以來の學生の社會運動が、單なる一時の波に終らなかつたのみか、全國的にその種の團體の發生を見、途に大正十一年十一月七日に至つて、それらの團體の總聯合、「學生聯合會」の發會を見るまでに發展したのは、實にこの歷史的必然の上に基礎を置くが故であつた。

學生聯合會の創立を境界線として、我國學生運動の第一期、即ち各個の學生團體が校外に於ける社會主義團體の一單位として、啓蒙者的な活躍を續けた時代は終る。これに續く第二期に於て、各團體はインターカレーヂエートに結合して、校內に於ては、一般學生への教育事業を組織し、校外に於ては、漸く發展せる勞働運動の遊擊的なる一翼として、組織的計畫的なる我國獨特の學生運動——こゝに言ふ學生社會科學運動を組織するに至つたのである。

三

學生社會科學運動とは何か？　この言葉は聯合會の顧問、大山郁夫教授が始めて用ひられたもの（「改造」九月號）であるが、私の理解する限りでは、これは次の如き、內容を持つ。即ち、さきに述べた如き根深い社會的原因によつて、學生の既成觀念の崩壞が起り、社會現象を正確に理解せんとする要求が生ずる。即ち社會科學への欲求が起る。然るに、現在の所謂社會科學、特に大學の講壇の社會科學は、かの『哲學の貧窮』の著書が指適せるが如く、自己自らの矛盾によつて、殆んど一つの偏見に化し終れる支配階級の科學である。それは新しき社會現象の理解に何物をも貢獻し得ざる概念の化石であり、發滅階級の詭辯であつて、學生のこの眞摯なる欲求を滿すことは、出來ない。社會科學運動の目標の一つは、この欲求を滿し得るより高級なる科學、即ち未來を支配する無產階級の科學を探究することである。

更に學生のこの要求は、單なる科學の討究に止らず、無產階級運動への積極的參加への意志に發展する。社會科學運動の第二の目標は、かゝる活動的なる學生を組織して、我國無產階級運動の現實が要求するところと、學生としての可能なる範圍とを考慮して、計畫的且效果的なる活動を期することにある。

現在の社會的條件よりして學生間に必然的に湧起つて來る社會科學への欲求を滿すこと、及び階級意識に到達せる學生を組織して、學生として可能なる範圍に於て、無產階級運動に貢獻せしむること、これが學生社會科學聯合會の現在の目標である。

言ふまでもなく、聯合會自身がこの目標を明確に認識するに至つたのは、幾多の失敗と、苦しき經驗との反省の後であつた。創立以來三年、長き暗中摸索、創業期のアドヴエンチエアー・××××××校長會議の陰謀、自ら犯した致命的なる過誤——然し、この苦鬪の中に、常に新しき一歩をふみ出すべき基石を發見することを忘れなかつた三年間？ロシア饑饉救濟運動、三惡法反對運動、反軍國主義鬪爭、大學擁護運動。

かくして、昨年七月の大阪市電罷業に於ける大阪學生ストライキ破り事件に對する抗議運動を機會として、聯合會は社會の水平線上に浮び出て、九月の全國大會に於て、名稱を學生社會科學聯合會と改め我國に於ける擴大されたる階級戰線の上に、獨自の境地を開拓するに至つたのである。こゝに至るまでの小歷史を詳述すれば我國無產階級鬪爭史の一部として、特異なる興味をそゝるであらうが、そ

れは別の機會に讓ることとして、次に、聯合會の現狀とその事業とを略述する。

四

言ふまでもなく、此の運動は、昨年末漸く社會の水平線上に浮び上つた運動であつて、聯合會に、團體としては、未だ決して完成されたものとは言ひ難い。その實際の勢力に於ても、樂觀は許されない狀態にある。

現在、聯合會によつて聯絡されて居る研究團體は、約五十校に及ぶが、その各々は、量的にも質的にも、非常な差異をもして居る。然し大體、種々の點よりして、これらを次の二種類に分けることが出來る。（以下數字は、昨年九月開催の全國大會の議事（アヂンダ）豫定錄による。）

第一種、まだ會として、發生中にあるもので、數名乃至十數名のグループに過ぎない。この種のグループの大部分は學校からその存在を認められて居ないが、如何なる研究會もこの階級を通過する。（二二團體）

第二種、第一種のグループが發展したもので、學校當局の公認を得、社會科學研究會、その他の名稱で、多くの會員を含んで居る。（二七團體）

更にこれを詳しくするために次の表を擧げる。

會員數一五名以下	二一校
三〇名以下	一六校
五〇名以下	四校
百　名以上	四校
會員合計	千五百名（概數）

これらの研究會は、關東（中部北陸を含む）東北（北海道を含む）關西（中國九州を含む）の三地方聯合會に分れ、この地方聯合會より十名の中央委員を出して、全國聯合會を形成して居る。

聯合會の重要な事業は、何よりも先づ校內に於ける教育事業である。研究會に集つた學生の意識內容を轉換するため、個人意識より社會意識へ、更に階級意識まで發展せしめるためには、組織的系統的な研究方法と順序が必要である。單にこれを無產階級の陣營に送るためには、種々の實際知識及び技術とを要する。このために聯合會は、研究課目の設定、『何を讀むべきか？』の綱領、出版、等に力を注いで居る。

組織事業としては、研究會未設校への擴張運動、基金運動等が當面の問題と成つて居る。

校內に於ける事業は、只上で、つきるが校外に於ては、國際排級運動、軍事教育反對運動の如き、學生として當然なすべき自由主義的運動にも積極的に參加して居る。然し、最も重要で期待さるべきものは、勞働者教育、及び農村青年教育への參加であらう。この運動は、歐米諸國でも學生の運動とは切り離す可からざる關係をもつて居るが、特に我國に於ては、注目に値ひする。漸く發達し始めた我國勞働者教育運動、この新しく開かれんとする分野に於ける、學生社會科學聯合會の活動こそ、我國勞働階級の感謝を受くるに足るものであらう。然り『思想はそれが大衆の間にしみ込んだ時、力となる』!

五

ロシア十九世紀末の學生運動は、ツァーリズムとの鬪爭より、資本家階級との野合に終る歷史であつた。我國の學生運動は、資本階級への從屬より、無產階級との共同に至る道程をたどりつゝある。勿論、現在の學生の大部分が、卑劣なる裏切りによつて歷史の頁を汚しつゝあること（かの大阪市電罷業に於ける大阪學生の行動を見よ！）また最後までさうであらうことは言ふまでもない。また、現在に於けるこの運動が微力であることも充分認める。

然し、すでに述べたるが如く、この運動は必然の産物である。如何なる勢力もこれを阻止することは出來ない。哀れなる神聖同盟、全國校長會議の××も、遂にその發展を阻止し得なかつた所以はこゝにある。だが、歴史の車輪に石をはさむことは支配者の好んでするところである。何時如何なる形に於て當局の彈壓が下らないとも限らないがそれはまたその時のことである。

こゝでは、たゞ學生の多くが、ミリオネーヤーの鞄の紐を解くものたらんがために汲々としてデカタンの酒に醉ひ、現實逃避の夢に眠る時、孜々として現實の中に未來社會の萌芽を求め、時には街頭に出でて呼ぶことをも辭せぬ學生の一團に、心よりの敬意を表しておけばそれで足る。（終）

日本海員組合に就て

米窪滿亮

現在日本の無産勞働階級が、何か一の社會運動を起さんとするとき、その存在を無視しては到底その目的を完全に貫徹する事が不可能である程に、强固なる地盤と偉大なる勢力とを現時の日本のプロレタリアン・サークルに築き上げたものに、三萬一千人の會員をもつて居る日本海員組合がある。

今左に端的にこの勞働團體の歴史、組織、主張、事業等の概略を紹介して見やう。

"歴史"この團體の創立のそもそもの動機は、彼の國際勞働機關の發生に伴つて居る。即ち「……多數の人民に對する不正、困苦及び窮乏を伴なふ現今の勞働狀態は、大なる社會的不安を醸生し、世界の平和協調を危殆ならしむるものたるべきにより……」と、宣言されたかのヴェルサイユ平和條約の第十三編のプリアムブル前文の精神に基づき「勞働者の結社自由の原則確立」を審議目的の一として、一九一九年始めて華盛頓で開かれた國際勞働總會及び諸種の海上勞働問題を審議すべく、引き續き一九二〇年に伊太利ゼノアで開かれた第二回國際勞働總會が、其時までまだ全國的中心をもつて居らなかつた日本の海上勞働運動に異常なる刺激と奮起を與へ、當時日本船主の殆んど全部を網羅して居つた日本船主協會に對抗して、海上勞働者の社會的地位を向上し、その勞働條件を徹底的に改善せしむる爲めには、もつと統一された組織的全國的の眞の實力ある一大海上勞働團體を創造しなくてはならぬ。それには從來の如く僅かに數百乃至數千の會員を有する少團體が分立して居つては駄目であるとて、茲に海員團體の協同合併を促進する機運が醸生されるに至つた。

此機運は、勞働問題こそ現在及將來に亘つて最も重要なる社會問題であり、從つて之に對する勞働政策は一國の爲政方針の基調とあるべきものであると云ふ當時（今日に於ても又然り）の時代思潮によつて益々促進されたのみならず、ゼノア會議に出席して、躬親しく歐州各國に於ける整然たる全國的海上勞働運動の實狀を觀取して來た各海員團體代表者の體驗は、一日も早く協同合併する事が即ち日本海員全體の利益を增進する唯一の道である事を確信せしめ、その即時實行の最も必要なる事を自熱的に高唱せしむるに至つた。

この運動の主唱者であり中心人物は現在日本海員組合の幹部（支部長）であり、當時日

本勞働總同盟から分離獨立した日本海員同盟友愛會々長濱田國太郎氏で、之に贊成した團體は海員共同救濟會、海員扶濟會、商船五友會、海員自治會、日本海員同志會等二十三團體にして、略んど當時現存せる全日本海員團體が大同團結した次第であつた。實に大正十年四月である。

その後共同救濟會（會頭柴山海軍大將）東洋機關俱樂部等々併合せる結果、今日現存せる他の海員團體は海上勞働者に非ざる有料職業紹介業者乃至海員宿泊業者によつて創立された海洋統一協會（本年社會局調査による會員數五千人）及び單に司厨部員のみより成る同職業組合たる郵司同友會（二千人）日本司厨聯盟（商船　志會東洋俱樂部の聯盟にして會員二千三百人）の三團體にして、しかも海洋統一協會の會員の中には日本海員組合に屬すものを二重に計算しある。事實より見て、日本現時の海上勞働運動は正に日本海員組合の完成によつてその全國的中心を得たるものと云ふ事が出來る。（中略）

創立以來僅かに三年半を經過せるに過ぎない日本海員組合の事業の內容は、之をその歷史と比するとき。これを陸上の諸團體と比して實に顯著なる進歩發達の迹を見る事が出來る。卽ち組合の實力の象徵とも認むべき會員實數基本金、產業從業範圍程度（大正十三年十一月末調査）をとゝに舉げて、日本海員組合の有する現在の實力の概念を記す事にする。

組合員數三萬一千人、基本積立金十萬八千圓、組合員乘船數七百九十隻此累計噸數約二百四十萬噸（全日本船舶噸數の三分の二）に達する。

目下組合本部を神戶に、支部を橫濱、小樽、名古屋、大阪、門司、戶畑、三池、大連等の諸港に出張所を設立して、組合事務の外に無料船員職業紹介及び船員宿泊等の諸事業を遂行して居る。

過去及現在に於ける組合の事業內容は之を詳說する事を避けるが、勞働組合の第一義的目的たる勞働條件の維持改善の爲め、本支部出張所を通じて四十余名の從業員が日々蝟集し來る勞働爭議の爲め忙殺される外に、船員の爲めに無料職業紹介事業を遂行して居る。（中略）

勞働組合の目的に就きその內容及意義、及びそのプラットホームと實行手段とに對する海員組合幹部の解釋は、左に摘出する同組合機關雜誌「海員」所揭の意見は同組合の態度を雄辯に物語るものである。

「次に勞働組合の目的は何であるかと云ふのであるが、それは各團體によつて種々の主張があるのであらうが、我組合は創立當時その宣言及綱領等に於て述べて居るが如く、「海員相互の利益擁護」であり「海員の國際的地位の確立」であり、勞働條件及待遇の改善」であり「海員の地位の向上及生活の安定促進」である。

是等は要するに現在の海員の惱むべき生活狀態を、その樣式に於ても、其內容に於ても、資本家並に或はそれ以上に引き上げ、海員も亦完全なる生存權を所有して居る一個の立派な自由人である。從つて彼等は自由に且幸福に（其主觀に於て）其生活を享有する權利をもつて居る。然るに從來の資本主義專制はこの權利を今日まで謂れなく奪つて來た。吾等は其奪はれた權利を搾取階級者から奪回し、其債權を完全に取り返さなくてはならないと云ふ要求に歸着するであらう。

然りとすれば此吾等の目的——多數人が最大幸福を享受する生活——を實行する爲めには、或る場合はその手段として鬪爭も必要であり、又或る場合は協調も必要であるであらう。

之を要するに鬪爭と云ひ、協調と云ひそれ

等は右記せる吾人の目的を貫徹する上の手段に過ぎない。然し是等の總ての場合を通じて勞資對立の自覺を持つ事、及び階級意識を把持する事の必要なるは說明するを要しない程の明白な事實である。(中略)

日本海員組合がその勞働運動の具體的手段として時として爭鬪的手段に出づる事を辭するものでない事は、昨年十一月六日より十日に亘り、海上の王國大商船を相手に神戶に於て行はれたかの大罷業大爭議の實例に見るも明らかである。しかもその罷業たるや實に秩序整然一人の犧牲者を出さず、一人の檢束者も出さず、罷業者の一人として酒に醉ひ暴行を働きしものなく、十八艘の大船巨舶を五日間に亘り物の見事に神戶港內に繫留せしめ、流石の頑迷なる船主も組合の偉力の前に冑を脫ぐに至り、罷業團の要求を全部承諾せし顚末は、當時の新聞紙上に於て社會の第三者が擧つて、我國勞働　議の模範であり勞働運動空前の成功であると激稱された程空前の大の成果を收めた程である。

之を要するに現時に於ける日本海員組合の主義主張は、大體に於てかのアムステルダムインターナショナルの綱領とその精神を一にし、之に(一)從來の勞働運動方針は日本獨有のオリジナリチーを發揮する精神を基調とする事(二)それが爲めには從來の勞働運動が勞働者がもつその經濟的生活の不正不義を匡救するに急なる余り等閑視されて居つた勞働者の啓蒙運動(智識の注入及德性及常識の涵養)を盛にする事の二點を加味するものと見て差し支へないと信ずる。

幹部。組合長ノ猪崎猪太郎。副組合長堀井司、同部長濱田國太郎。編輯部長、米澤滿亮

本組合の創立當時の綱領は左の如きものである。

綱要

本組合ハ現ニ人口過多ト人種排斥ノ難關ニ在ル我國ト海運ノ現狀ニ鑑ミ海員ノ使命ト地位トヲ自覺スルト共ニ政府當局及船主ノ諒解ヲ求メテ

第一ニハ我海員共同ノ福利擁護增進ノ爲メ

第二ニハ我同胞ノ活路確保乃至擴張ノ爲メ

第三ニハ帝國海運ノ基礎確立乃至擴張ノ爲メ至誠一貫主義ノ下ニ協力一致以テ我海員ノ地位ヲ向上シ生活ヲ安定ナラシメンコトヲ期ス

本組合ハ(1)組合員各自ノ品性ヲ向上セシメ(2)團體的精神ノ助長セシメ　(3)職責ニ對スル自尊心及責任觀念ヲ涵養シ(1)技術ノ鍛練シ　5船內秩序ヲ重ンジ健康ヲ保持シ勞働能率ヲ增進セシメ苟モ喧嘩妄動ヲ愼ミ以テ海員トシテノ內容充實ヲ期ス

本組合ハ權威アル團體統制ノ下ニ組合員ノ結束ヲ鞏固ニシ政府當局及船主トノ聯絡ヲ保ガ海員ニ關スル法律及勞働條件ノ改善竝ニ雇傭契約履行ノ監督其他組合員ノ福利ヲ擁護增進シ其ノ地位及生活ノ向上乃至安　ヲ期スルニ必要ナル事項ノ研究、主張、接衝、爭議仲裁ノ局ニ當リ苟モ遺憾ナカラシメンコトヲ期ス

組合ハ「ゼノア」ニ開催セラレタル國際海員會議ニ於テ採擇セラレタル協約案ニ基キ完全ナル無料職業紹介所ノ成立ヲ期ス

本組合ハ組合員ノ負傷、疾病、失業、癈老、死亡ニ關スル互助共濟及海員寄宿舍、病院等ノ施設ノ實行ヲ期ス

本組合ニ組合事業ノ經過及方針竝ニ海員ニ關シ政府又ハ社會ニ出現シタル事項精神上ノ修養其他有益ナル情報機關トシテ雜誌又ハ新聞紙ノ發行ヲ期ス



長岡半太郎論

石原純

一

水銀から金が採れたといふこと、それが我が長岡博士によつて成功されたといふこと、博士が更にこの金から白金屬に類似する未知の元素らしい物質を得られたといふこと、これらの相續いた報道は最近に私たちの耳朶を驚かし、科學への或る驚異と興味とを唆らずにはゐませんでした。

物理學の現時の理論は勿論この事實を當然なことゝして承け容れることが出來、元素の人爲的變化の一實例として見做すに躊躇しないわけですが、併し偶然にも之が金の場合に最初に成功したといふことは、古昔の錬金術以來人間が渇望し、先年羽鳥某氏の還銀法が或る詐術の結果に過ぎなかつたことにさへ恐らく或る失望に似たものを經驗させられたでもあらう通俗者たちに取つては、又新たな好奇の心を起させたかも知れません。長岡博士の實驗が與へるところの金は、たとへその獲出量に於て又その費用に於て再び彼等の渇望を癒やすには足りないものであるとは云へ、併しともかくも金が眞實に私たち人間の手で他の物質からつくられるといふ事實は、彼等に何等かの衝動を感ぜしめたことでせう。

水銀が金に變ずると云ふ事實は、長岡博士に先だつ二ケ月以前に獨逸のミーテ博士によつて先づ見出されたのでした。けれども長岡博士が之と全く獨立に、且つ之と異つた方法をもつて

成功されたことは、科學的に重要な意味をもつてゐると私は思ひます。この意味については私は別に「思想」十二月號科學雜錄のなかに論じましたが、之等を考慮するとき私たちは、兩博士の發見の先後の如き區々たる問題に拘はるよりもより以上に、特に私たちの最も親しい、そして最も敬愛する長岡博士がこの重要な發見に與かられたことに對し、よろこびと感謝とを捧げようと思ふものです。

抑も私たちの國に科學が輸入されて以來、私たちはそこにどれ程な成果を見ることが出來たでせうか。また科學に充たされた心がどれ程深く通俗的に民衆の間に泌みゆいたでせうか。私たちはたゞこの一つの發見をもつて安心し若くは滿足するやうなことは勿論出來ませんし、又その他のより大きな發見に比して甚だ些細なものであるとさへ謙抑したいのでありますが、併し之が人々の心を科學へ向はしめる何等かの刺戟となり得るならば、それは獨り我が長岡博士のためによろこばしいものであるばかりではないでせう。

二

私一個から云へば、長岡半太郎先生は私の最も懷かしい恩師の一人です。私は東京大學在學中に常に親しくその謦咳に接し、その教導にあづかつたばかりでなく、爾後引き續いて科學的研究やその他の私事に對してまで種々の厚誼を蒙ならして來たのでした。大學の三年生の折や大學院にゐる頃、私は理論物理學科の唯一人の學生としていつも先生の研究室のなかで、先生と膝を接して多くの古典書などを讀み學んだことを懷かしく思ひ出さずにはゐられません。そして私たちの教養について懇切であつた先生は、また自らの研究に對して稀に見る熾烈な熱心を持してゐられると云ふ點で、私はその眞の學究者の態度を欣慕せずにゐられませんでした。

その當時から今日に至るまで、先生の孜々たる研究心は聊かも衰へるやうな傾向を見ないのです。大學の研究室から更に理化學研究所のそれにまで手を擴げて益々盛んに深い研究へと進まれるやうに見えます。一昨年我が大學で停年制の論が盛んに起り、遂に之が内規として實行されるやうに至つたのは、從來多くの老大家がその名を教授に列ねながら、徒らに研學の心を失ひ、その知識の古びゆくのを忘れて、謂はゆる十年一日の講義に自らを委ねる弊を救はうとするに在つたのでした。我が長岡博士も最早その制められた停年なるものに達しようとする程の年齡になられました。併し今なほ潑溂たる厚い研究心に滿ち、多くの若年者を凌ぐやうな元氣に溢れてゐる先生の日常を見た

ならず、これ位研究熱心な先生の如き人には餘りにふさはしからぬ制度であることに氣づくであります。

勿論先生の研究はかやうな制度の如何によつて少しも妨げられはしないことを私は信じてゐます。今度の發見の如きは益々先生の研究心を燃やして、更に重大な、そしてより興味ある多くの問題から先生の手を放さしめないであらうことは誰しも疑はない處でせう。私は先生のために幸に我が理化學研究所が準備せられてあることを一つのよろこびとします。

三

長岡博士の從來の研究はすべて物理學に屬するとは云へ、その亘る處はかなり多方面でありました。博士が上に述べたやうな異常な熱心さをもつて之に從事せられた結果、その見るべき成果は既に少なくないこと云ふまでもありません。そして私たちの國のなほ新らしい科學史は博士の業績によつて飾られることも少なくはない筈です。

最近の水銀變質の實驗はその最も主要たるものゝ一つに屬することと勿論です。この外に私は主要なものとして、鐵の磁氣歪形、原子構造の模型、及び多くの光スペクトルの研究等を擧げたいと思ひます。

鐵の磁氣歪形の研究は恐らく博士の最初の業績に屬するものであつて、當時我が東京大學に磁氣學の泰斗たるユーイング博士の在任せられた影響を受けたものでもありませう。こゝにはこの現象に關する說明を列べることは出來ませんが、要するに鐵が磁氣化せられた場合に生ずる彈性的歪形に關するものであつて、之については引き續き今の東北大學の本多博士と共に種々の實驗的研究を遂げられました。

原子構造の模型は博士が一九〇三年に發表せられた著しい理論的研究であつて、當時エツキス線及びラヂウム等の發見があつて電子の理論が世界の學界に最も注目すべき興味を惹き覺めた際、始めて具體的に原子が電子によつて如何に構成せられるかを論じ試みられたものです。長岡博士は原子の中心に小さな陽電氣核の存在を假定し、多くの電子がその周圍に一平面内に圓形軌道を描いて周廻すること、丁度天體に於ける土星の環と等しいとなし、之によつてスペクトル線の或る事實などを說明しようとせられました。

之と殆んど同時に英國の有名なジョセフ・ジョン・タムソン卿の原子模型に對する一理論が公にせられたことは、科學史に取つて見逃すことの出來ない興味ある事實です。長岡博士が小さな陽電氣核を假定せるに對し、タムソン卿は陽電氣をば原子全

體を蔽ふところの全部に配布しました。しかもその後、ラザーフォード教授が美事な實驗的觀察から引き出した歸結によれば、原子核は極めて小さな中心體であつて、今日の量子論に基づく原子構造の形像に於ては、長岡説と同樣な見地を採つてゐます。量子法則を容れない限りに於ては長岡説は原子構造の安定を十分に保證し得ない缺點をもつて居ましたし、又之が量子則と相待つて事實に相當するやうになつたことには或る偶然さがないとは云はれませんが、然し當時の長岡博士の理論は私たちが原子構造論に立ち入る第一歩として決して無意味なものではなかつたと思ひます。

スペクトル線に關する長岡博士の多くの研究はその極めて精細な實驗的觀察によつて私たちの知識を豐富ならしめた點に價値をもつてゐると思ひます。本年の初めに發表された水銀スペクトルに關する考察のなかに水銀を化して金にたし得る可能性を述べられ、今回の實驗も或は之に基づいて企てられたのであつたかも知れませんが、併し之に含まれる理論的考察については私は少くともその當否を疑つてゐます。けれども斯樣な事情は聊かもそこに成功せられた實驗的成果にわづらひすることはないに違ひありません。

四

長岡博士はその精力の絶倫な點に於て誰人も容易に之に比することは出來ません。私はこの言葉を決して他人行儀のお世辭のやうに云ふのではなく、博士のすべてに接して心深く感ぜずにゐられないのです。その謂はゆるエネルギッシュな性格は日常の言動の末にもあらはれて、心強い頼もしさを抱かせます。博士が世界の學界に伍して、その學者としての有力な位地を保つたやうになられたのもこのお陰であると私は思つてゐます。

博士のこの性格は、純正物理學の研究に於ても、理論と實驗とを兼ね行ふやうに導き、また種々の應用方面にまで通ぜしめ、之等の驚くべき廣汎な文獻のすべてを常に怠ることなく渉獵して、何事に對する新知識をも取り入れられてゐることに至つては、まことに常人の企て及ぶことの出來ない點であります。そして之がまた、多く老朽に安んずる我が學界に在りて獨り溌溂たる研究心を最も旺盛に持續せられる源泉となつてゐることを私は思ふのです。

研究それ自身ばかりではなく、博士がまた我が國に於ける科學研究並びに奬勵のためのすべての機關に對して盡瘁せられることのいかに多いかは、單に之を數へるだけでも容易ではあり

ません。大學理學部に於て、理化學研究所に於て、帝國學士院に於て、學術研究會議に於て、震災豫防調査會に於て、測地學會、電氣學會に於て、その他私立の電氣會社の如き、博士の關係盡力せられる處は尙ほ甚だ多いことでせう。この點で博士は遂に一學究ではなくて、學界諸事業の運用に携はる實社會に重きをなす一員です。

長岡博士のこのやうな強大な性格をその周圍に於けるすべてのものを懾服せしめずにはおきません。それは例へば或る部內に於ける專制を云爲せしめるに至らないとは限りませんが、併し博士のあるがためにいかに外に對して嚴然と對峙することが出來るかを省りみたならば、博士の偉大な志向に感謝しなくてはならなかつたでせう。若し夫れすべての學に忠實なるものに對して、博士がいかに厚く之を遇しようと努められるかに至つては、まことにその懇切周到なるに感激しなくてはゐられますまい。その然らざるものに對して個々甚だしい痛罵を敢てせられる勇氣は、畢竟博士が餘りに學を愛せられる強い念慮のあらはれに外ならなかつたのです。

私は博士の書齋に西洋哲人の詩集の如きものを見ないではありませんでした。また屢、漢書の典籍を引いて語られる言葉にも接しました。相州下浦の海濱に極めて素朴な百姓家をその儘に自分の住居とせられて夏の幾日を過ごされてゐた浴衣姿の博士を訪ねたこともありました。けれどもそれらのすべての場合に博士はやはりあらゆる自然の事實を科學的に深く見ようと努められるのでした。その海濱の家の庭前にまで自ら石室を築いて氣壓微動計を裝置されました。

「君、まあ、あれを見てくれたまへ」

と私をそこに導かれた浴衣姿の博士は、やはり大學に於ける先生と少しも變りはなかつたのです。

博士はその地で昨年の震災に遭遇されたのでした。私は博士の書かれた「大震雜感」をどれ程興味ふかく讀んだことでせう。そこには實生活上の一大事件として博士の頭腦に興深く浸みてゐる科學とが一つの交響樂となつて織り出されてゐるのです。眞の科學者でなくて誰がこのやうなものを書くことが出來たでせう。

恩師としての長岡先生に私は異常な感謝を捧げるばかりでなく、たとへ先生の性格が私のやうなものと甚だ多く相異してゐることを感じてゐるとは云へ、先生のすべての事業に對して私は無限の尊敬を持たずにはゐられません。旣にその年齡に於て壯時を經過されたとは云へ、その極めて深い學識と頴才とは尙ほ今後に於て先生の業績を更に增すことに十分であると思ひます。私は先生の永き健在を切に祈つて止みません。

新煉金術への道

竹内時男

——星の燦く空を凝視する占星術者(アストロロジスト)と、坩堝(テーゲル)とレトルトとの裡に没頭する煉金術者(アルケミスト)。——斯かる難業は中世紀の闇黒時代を標徴するものである。——(長岡半太郎論)——

ケプレルの如き、コペルニクス體系の基礎を固めた大天才を以てしても、尙ほ且つ占星術的考察の下に其研究を進めたと謂はれる。星の運行を看て人生の運命をトする占星術は、かるが故に近代天文學の濫觴と申さればならぬ。然も忘れてはならぬのは占星術と煉金術とは姉妹の血縁があつた事である。天體と金屬との間に關係ありとは古くより信ぜられた處であるが、太陽を金に、月を銀に、水星を水銀に擬する事は中世以後に於ても行はれた。水星をマーキユリー(水銀)と呼ぶ所以は蓋し其處に在る。

而して天體と人體との間にも聯絡ありとし、太陽を心臟に、月を腦髓に例へた。で金は心臟の、銀は腦病の特効藥なりとの迷信が起つたのである。

煉金術の眞髓は黃金を得るに在つた事は申す迄も無い。賢者(フィロソファーズ)の石(ストーン)』と稱する珍奇なる一新成分を加ふるならば、立どころに無盡藏に賤金屬を黃金屬に變へ得可しとの信念の下に、數億の財寶を消散し、數萬の頭腦を擾亂し、數世紀の時間を徒費して此成分の發見に努力したのである。

『賢者の石』は又不老神仙藥(エリクシル・オブ・ライフ)とも唱へられ、之を内服すれば無病長命し、愚者は賢者と變り、薄志弱行の徒は堅忍不拔の士と成るとせられた。萬能藥である。

さればこそ上は王公相將より下は藥劑師の丁稚に到る迄ブラック・アートたる煉金術に陶醉したのである、煉金術師を看板に毒藥を鬻いだ者もゐる。然し此が近代科學の根歸を傳した事は疑ふ可からさる處である。

クルーシブル(坩堝)の辭はラチン語のクロッスより來てゐる。自然をしてその滔々たる勢恐るべきものがあつた。其秘術を發かしめるには之を苦めねばならぬと考へられたのである。

ボタシユはポツト、アッシュ（『壺の灰』）の意である。化學上の語が煉金術者に依つて産み出されてゐるのを見ても其の室に明かな事であらう。

支那に於ても煉金煉丹の術が行はれた。丹砂を化し石草を煉つて黄金となさんとすると共に、長生延年の藥を探したのである。太宗武宗の如き所謂不老長壽の仙藥を服んで却つて水銀と砒素とに中毒して死んでゐる。

煉金術者に斯くの如き永遠の未練を植ゑ付けたものはそも那邊に在つたのであらうか。

古代エヂプトに於ては金銀銅及び鉛が知られてゐた。又合金も造られてゐて、眞鍮の如きは其色黄金に似るが故に少しく性質を變へるならば金と化せんと考へられた。鉛は最劣等の金屬とせられたが、其鑛石が常に微量の金銀を含んで産出する事より、偶々之を化して金に爲し得んと考へられたらしいのである。

ギリシア、ローマに到つて水銀が知られて來た。其光澤や流動性、金銀を溶解する事、熱に對する其變化は遂に中世煉金術者をして、之を硫黄、後には更に鹽と伴はして凡ゆる金屬の基礎元素なりとせしむるに到つた。此等要素の化合の割合と純粹度との相違に依つて凡ての金屬は成立するとせられた。水銀は金屬に光澤と展延性とを、硫黄は之に可燃性を與へるとせられた。この原理こそ中世煉金術の關鍵であつたのである。

煉金術は常に試みられつゝ常に失敗に歸した。其處に近代化學は清新な曙光を投げて來た。

而して近代理學の最高潮に達した今日遂に水銀は金と化した。顧へば夢の如き心地がするではないか。

一八〇三年ダルトンが一つの『作用假説』として物質原子論を唱へた。一八一五年に成つてイギリスのプラウトは萬有水素一元論を與へ、水素はプロタイルなり、凡ゆる元素の基礎原子なりと唱へた。然し原子量は整數ならざるが故に明かに謬妄の論なりとして棄てられたのである。

ソツヂイは放射性元素の中には、原子量同じからざるも化學的性質の同一にして、週期率の同位置を占む可き元素ある事を知り、之を同位元素（アイソ『等』トープ『位置』）と名附けた。ゼー・ゼー・タムソンは普通鉛と、放射性元素の變脱して生ずる鉛所謂放射鉛との原子量の相違を指摘し、倘ほネオンにも同位元素ある事を示した。

イギリスのアストンはキャヴェンヂツシュ・ラボラトリーで、數種の元素の同位元素を調べた。其結果同位元素の數の多いものにはゼノンの七個、水銀の六個などが擧げられた。アストンは其功に依つて先年ノーベル賞を得た。

同位元素の原子量は實驗誤差を除いては凡て整數である。原子量の整數より遠いものは同位元素を有し、其混合の割合に依つて原子量に小數が現はれて來るのである。是凡ゆる元素は水素元素より成立する事を示すものである。今にしてプラウトのスペキユレーションは現實と成つて來た。

原子は陽電氣を帶びたる一個の原子核と之を周る數個の陰電子とより成る事は嘗て我長岡博士の創唱した處である。實に原子の中には其自身の世界が在るのである。原子核は之を太陽に擬す可く、電子は之を地球其他の遊星に比す可きである。而も電子を豌豆に例ふるならば原子全體は何町と云ふ廣延を持つ故に太陽系よりも更に隙間が多いのである。最近デンマルクのボールと云ふ若い學者は電子軌道の配列を研究して、ノーベル賞を得た。原子論は原子內の天文學と謂ふ可きであらう。

原子核は水素原子核所謂プロトン（プラウトの名を記念してプラウトンと呼べと云ふ人もある。）と電子とより成るのである。電子の質量は極めて小さい故に原子の質量は主として原子核の質量に依り、從つて原子量は核內プロトンの數と同一となる（水素原子プロトン一個と其を廻る電子一個とより成り、其原子量は殆んど一に等しい。）此はラザフォード及びチアドウイツクの實驗に依つて明かである。彼等はラヂウムより發射せられるアルフア線を數種の元素原子に衝擊せしめて之より水素を遊離せしめてゐる。アルフア線は小銃彈の二萬倍と謂ふ快速度を持つ微粒子である。此が百萬に一回と云ふ割合で原子核に打つつかつて之を破壞し、之よりプロトンを驅出するのである。

ラザフォードはキアヴエンヂツシユ・ラボラトリーの所長であるが、カナダのモントリヨールのマツギル大學に敎へてゐた事がある。シユスターの後を襲うてマンチエスター大學に轉任し、其から現在の位置を得たのである。マツギルに居た時分寒いカナダの日にはワニスを塗つた床の上を步くと强く發電して實驗にひどい邪魔をしたと最近の述懷にある。然し此處で彼の放射性元素の研究が出來たのである。大戰の際研究所は閉鎖せられたが、彼は此間に原子核破壞の判斷を試みたのであつた。之から考へても立派な設備は問題でないやうである。或程度の設備さへあればあとは研究者の頭腦と手腕である。オランダのゼーマンが前を車が通つてもガタ／＼する實驗室で夙に彼のゼーマン効果と云ふ大發見もやつたでは無いか。

ゼーマン効果とは原子內に於る遊星的電子の振動狀況を外部より加へた强い磁力で變化せしめ、從つて其放つスペクトル線の分裂を起さす現象であるが、强力の電氣力を加へても類似の現象を起すのであつて、此はシユタルクの發見に掛り、シユタ

ルク効果と唱へられる。

長岡博士はゼーマン効果並びにシュタルク効果を論ぜられ、人爲的に原子内部の狀況を制御し得る事を度々高唱せられた。此御意見は余輩も講室に於て度々拜聽した事がある。倘其に伴つて水銀のスペクトル構造を詳細に研究せられ、最近に到つては其同位元素に依つて生ずるものをも指摘せられた。此スペクトル研究の結果水銀原子核内にはプロトンが "detach" してゐるらしきものがある事を判定せられ、若し此プロトンを核内より驅逐せんには水銀が金に變ぜん事を豫言せられた。水銀は原子量が大で核は半安定の狀態に在る事は誰しも想像の附く處であるが、此プロトン驅逐の方法としてシュタルク効果研究に用ゐられた先生獨特の工夫を應用せられたのである。而して此は幸にして成功したのである。要は强電場に依つて核よりプロトンを剝ぎ取つて水銀を金に變へるのである。

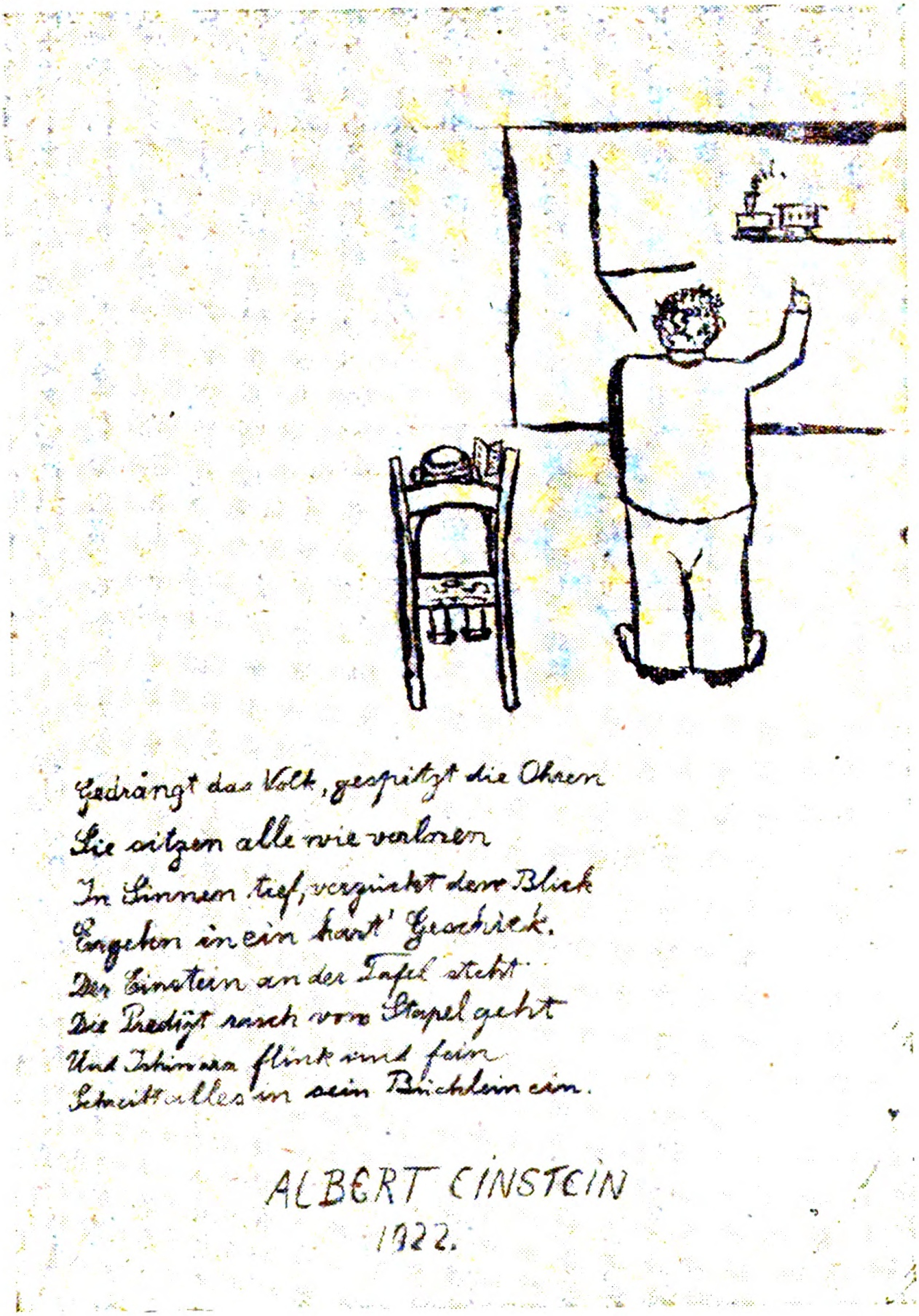
博士の還金法、換言すれば原子破壞法はラザフォードのと全く行方を異にしてゐる。博士のには何處迄も自家の研究方法が相助けてゐる事を見ねばならぬ。

煉金術は嘗ては妖妄の術であつた。どれだけ人間に禍した事であらう。王公所有の實驗室に聘せられ、詐術が覩破せられて極刑に處せられた者もある。或は特許は得たるも公に試さるを懼れて自殺した學者も居る。近くは我國にも行草を煉らんとの妄邪心に魅入られて地位を失つた學者もある。然も其惡夢は今日榮光に包まれた現實と爲つて現れたのである。

先生が明言せられたやうに先生の研究は還金術其ものを目的にせる如き俗惡なるものでは毛頭無い。先生の眞は "Transmutation" の新しい方法を見出された事に在る。

ラザフォードの實驗なり、ウエントのタングステン元素を破壞してヘリウムに歸した實驗なり、先生の研究なりは凡て重元素を低元素に變じた結果に成つてゐる。低元素を重元素に變へ得る方法は見出されないであらうか。勿論『建設』は破壞よりも困難であらうが、

水素が集合してヘリウムを造る時、其質量が減じ、其に相應して多量の熱が發生す可き事は計出せられてゐる。之に類する方法で多量の熱を得る事は今後の講究に値する事と思ふ。



(アインスタイン氏の毛筆戯畫の詩)

anglais, allemand, ou français, qui en sont, pour moi, le moins intéressant : car ils ne m'apportent rien de nouveau. Je trouverais beaucoup plus efficace pour la fraternité internationale que les articles européens fussent publiés en japonais, et une partie au moins des articles japonais en anglais, allemand, ou français. Il n'est pas très agréable pour nous, Européens, de ne rien comprendre d'une revue à laquelle on nous demande de collaborer.

Veuillez agréer, cher Monsieur, mes cordiales salutations.

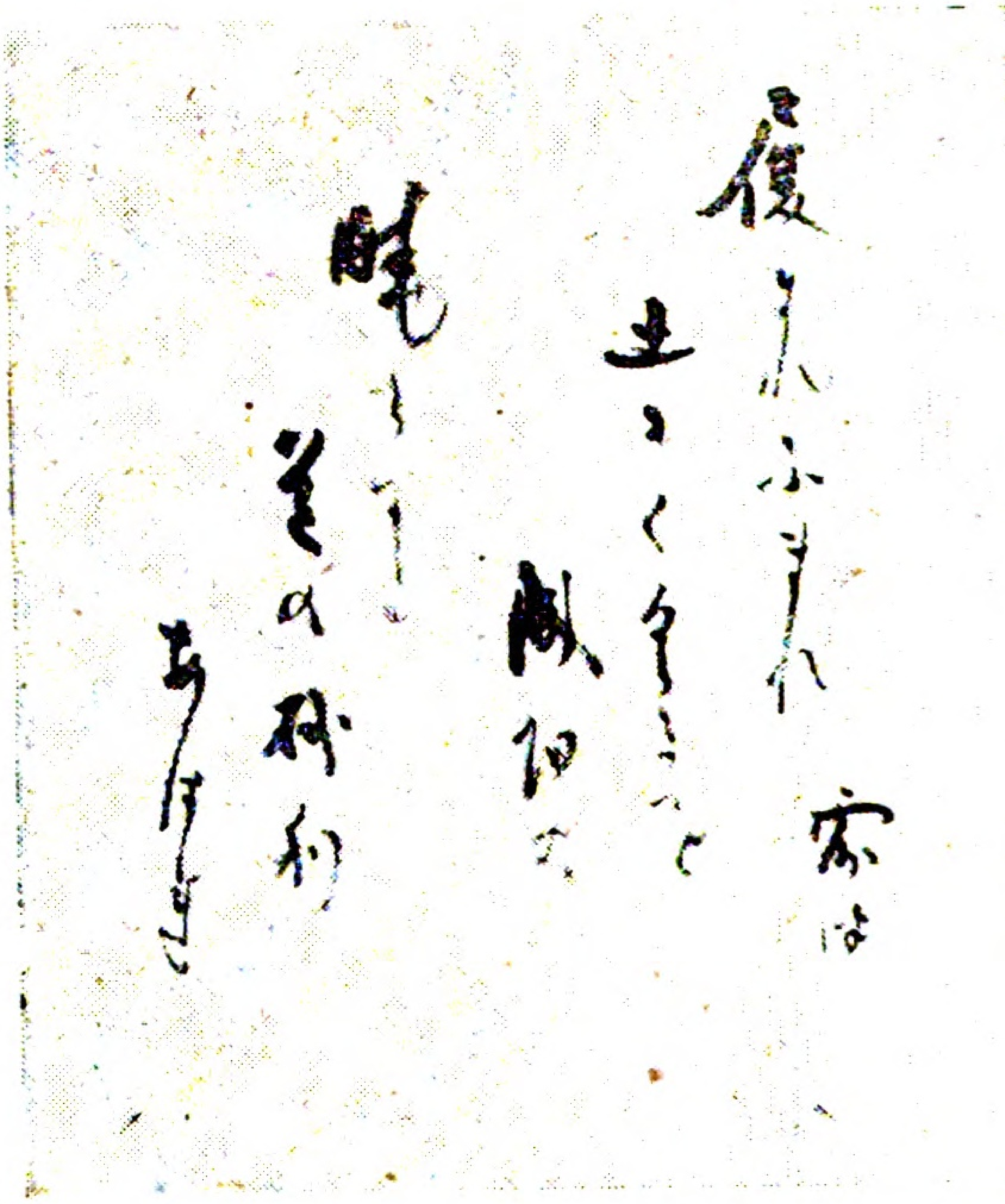
Romain Rolland

A la fin du mois, je retourne en Suisse, où mon adresse sera : Villeneuve (Vaud) villa Olga

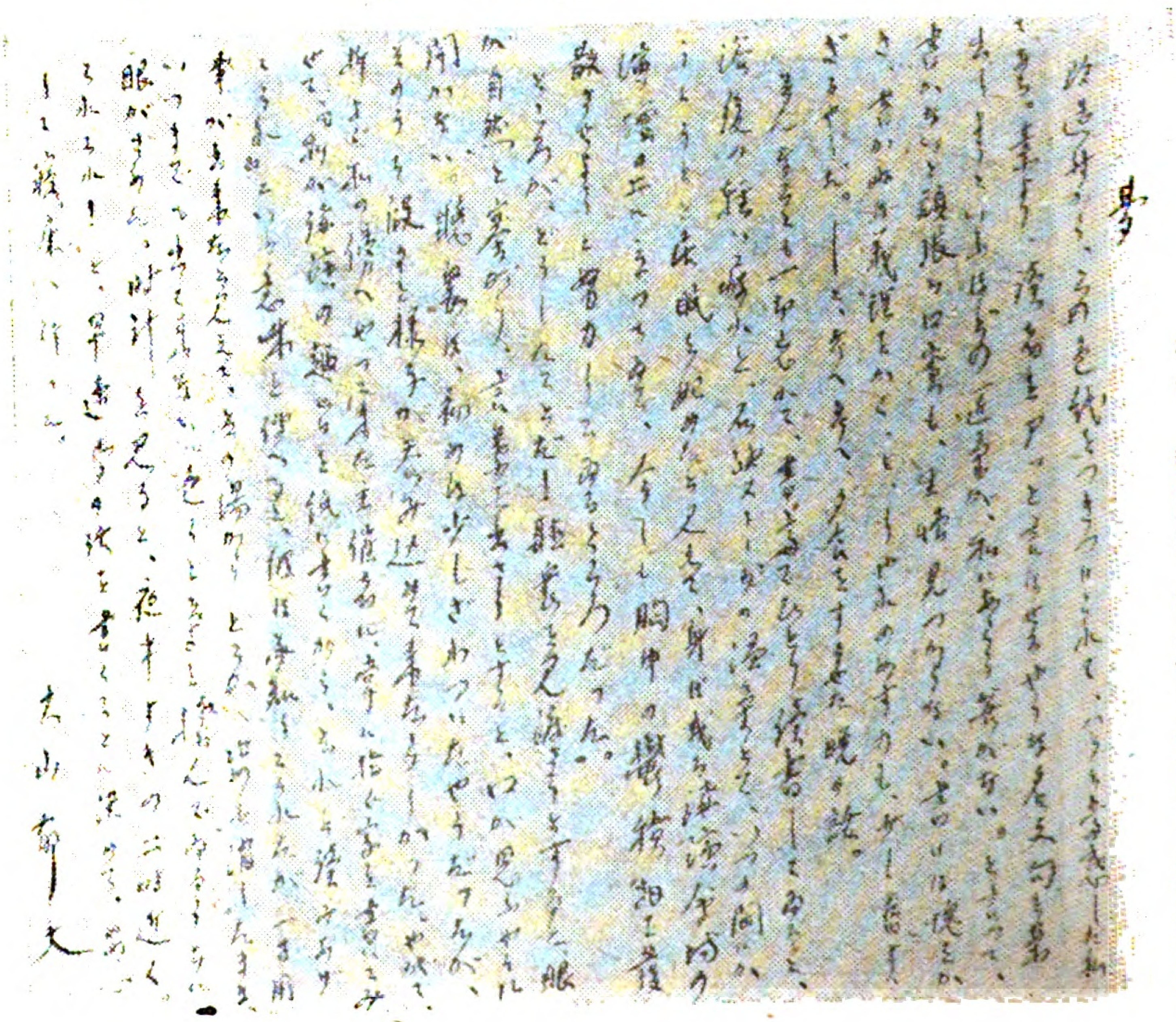
(ロマン・ローラン氏)



(孫文氏)



(上、幸田露伴氏)



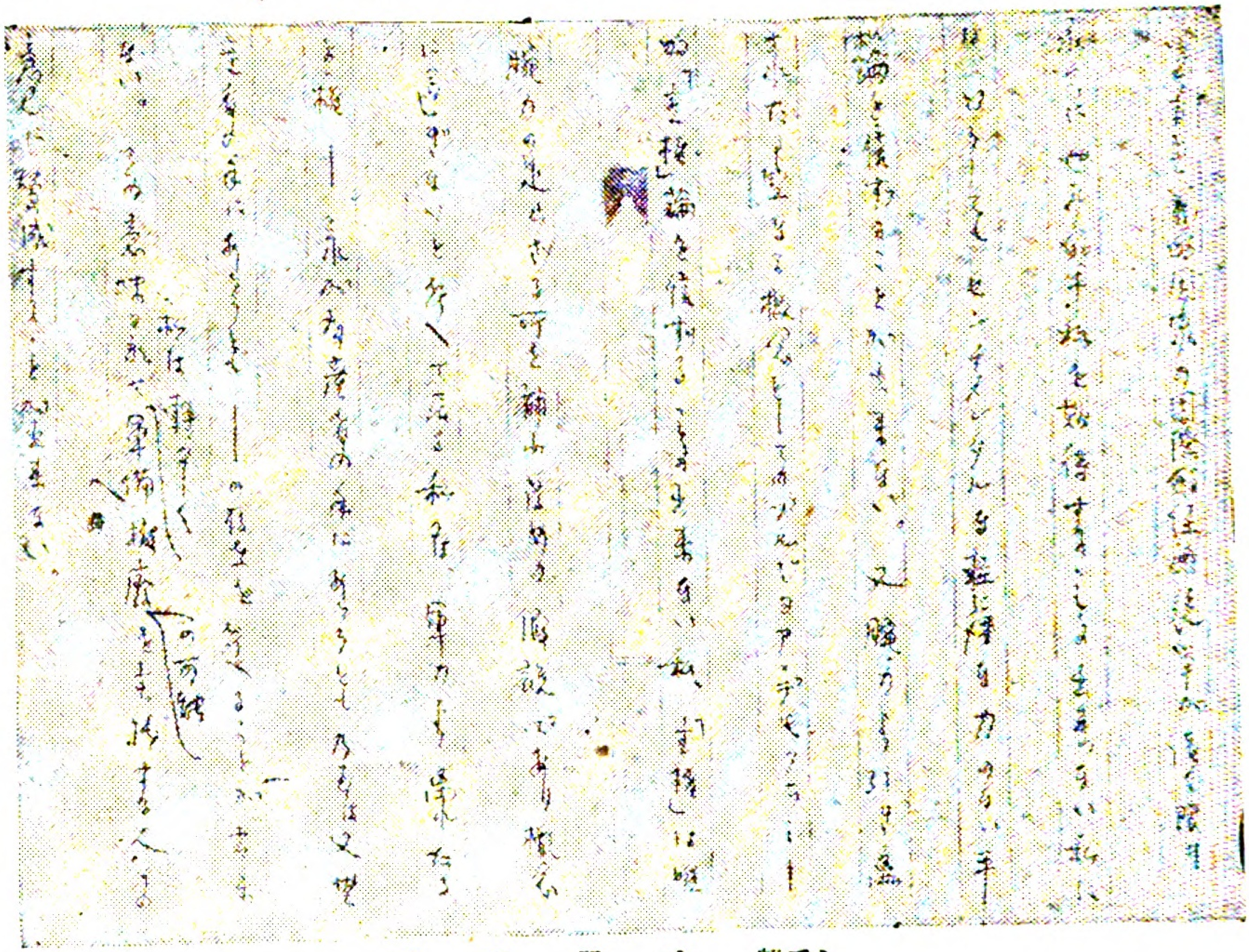
(下、大山郁夫氏)

きのふまたかくてありけり
けふもまたかくてありなむ
このいのちなにをあくせく
明日をのみ思ひわづらふ
いくたびか栄枯の夢の
消えのこる谷に下りて
河波のいざよふ見れば
砂まじり水まきかへる
あゝ古城なにをかかたり
岸の波なにをか答ふ
過し世をしづかにおもへ
百年もきのふのごとし
千曲川やなぎかすみて
春あさく水流れたり
たゞひとり岩をめぐりて
この岸に愁ひをつなぐ

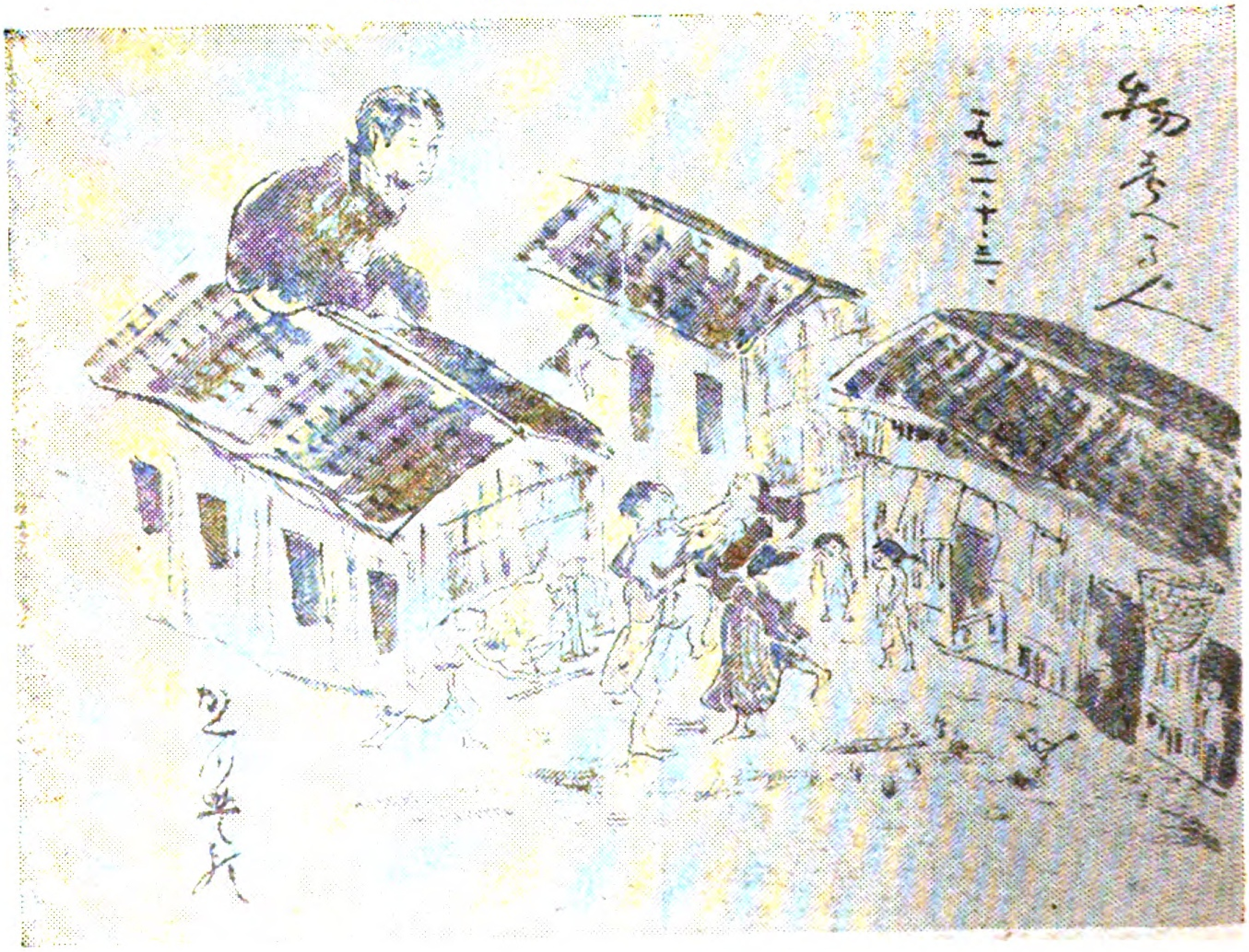
藤村

(島崎藤村氏)

千曲川旅情のうたをしるす



(末弘厳太郎氏)



(賀川豊彦氏)

首縊り上人

菊池寛

小原の寛明院に、寂真法師と云ふ上人が住んでゐた。何某の大納言の叔父に当ってゐる上、學文も秀れ、戒行も拙たなくなかったから、あっぱれ上人やとて、歸服し奉る僧俗は、数少くはなかった。

（菊池寛氏）

竹の芽も茜さしたる彼岸かな　澄江堂

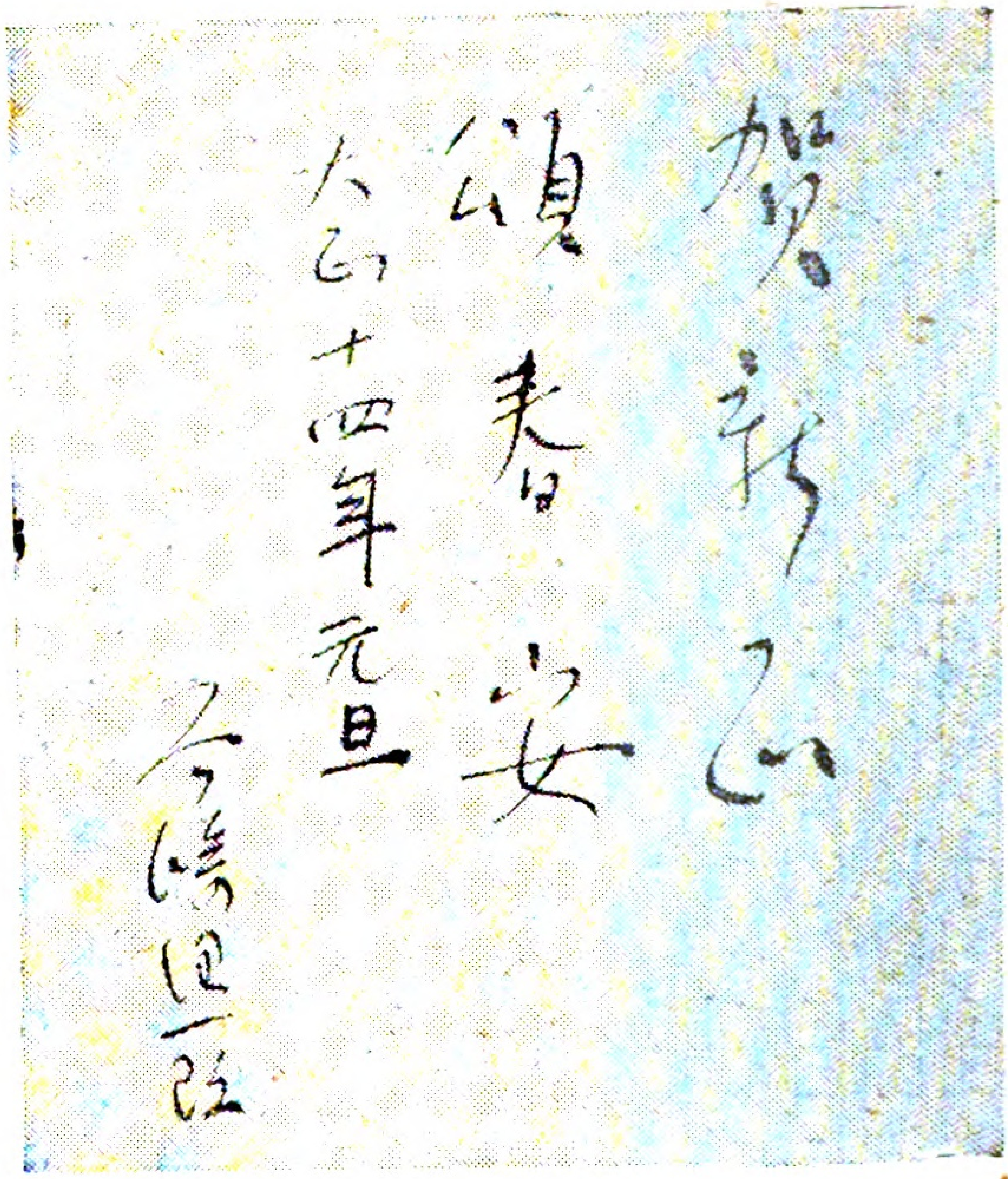
（芥川龍之介氏）

三つの死

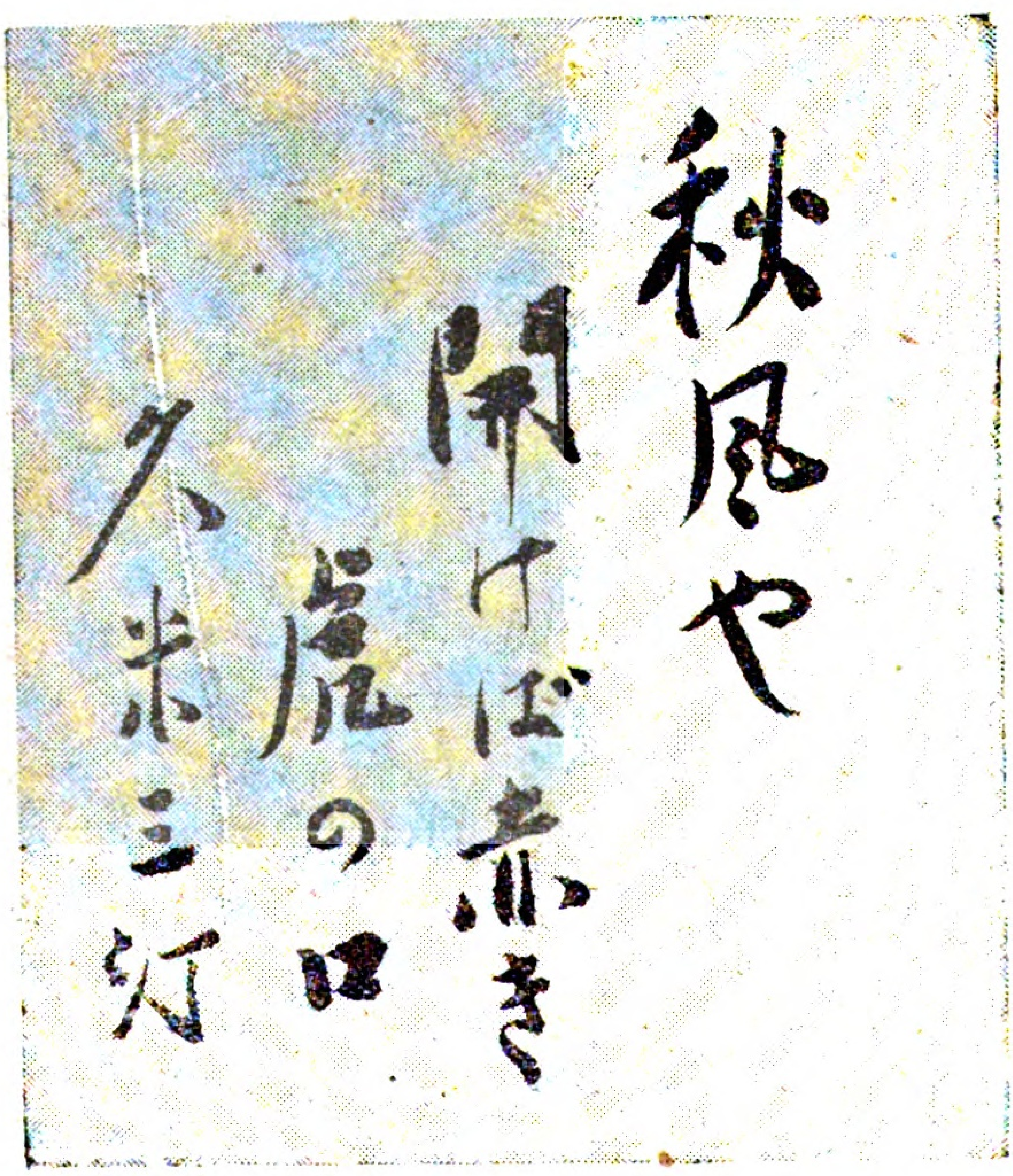
佐藤春夫

父は田舎医者である。来年は五十九になる。息子は、父が三十の時の子だから、来年は二十七になるわけである。この息子が、餅搗きの晩に、台所からかけ[illegible]へだてた離れ座敷で、爐辺に向ってゐる。息子は物憂さうに何か

（佐藤春夫氏）



(谷崎潤一郎氏)



(久米正雄氏)

離縁と離婚　穂積重遠

三くだり半の歴史

三くだり半は離縁状だ。離縁は即ち離婚である。今日の法律語では離縁と離婚とを使ひ分ける。離縁は養親と養子との離別、離婚は夫婦別れを云ふ。所が以前は両者を今日でも通信には[illegible]云ふ用ひ方とする。——

右（穂積重遠氏）

北窓雑記　阿部次郎

今日の社会に生きてゐるあらゆる人は、搾取者か被搾取者かの孰れかに属してゐなければならないであらうか。自分は自分の生活の基礎に関する道徳的反省の一つとして、時々この問題を考へる。例へば自分は搾取者か被搾取者かの孰れであるか。

左（阿部次郎氏）

（片山潜氏）

近つて今日最後の結果が英露関係に決するのです。戦争か平和か何れにしても露国民は決心をなしつゝあります。ヴォイコフの暗殺されし事は露国を害したと聯合諸邦を固めた結果となつたようです。英国のアにチメ[illegible]は英国のプレステーヂを損し[illegible]支那の中は二万歳の努力を為す運命へ傾きつゝあります。

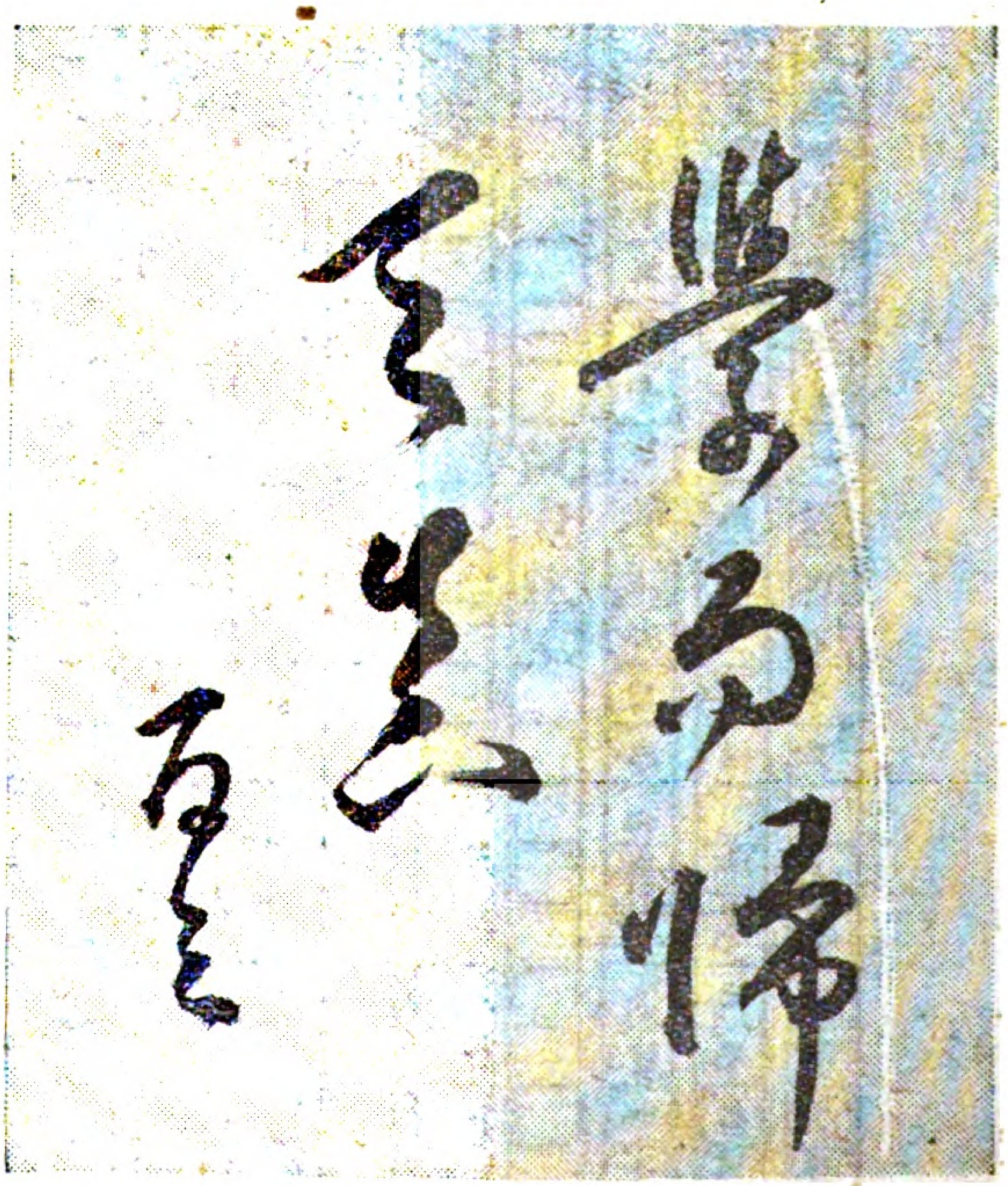
五月廿九日モスコウにて

不一

潜



(星見醉氏)



(倉田百三氏)

梅雨期の日本
山川均

(山川均氏)

杉森孝次郎

それ自身の基礎及び倫理的生存を保護されないことが人々に取つて不幸なるを意味することは、生の明確な事實及び論理だといふことが出来る。

(杉森孝次郎氏)

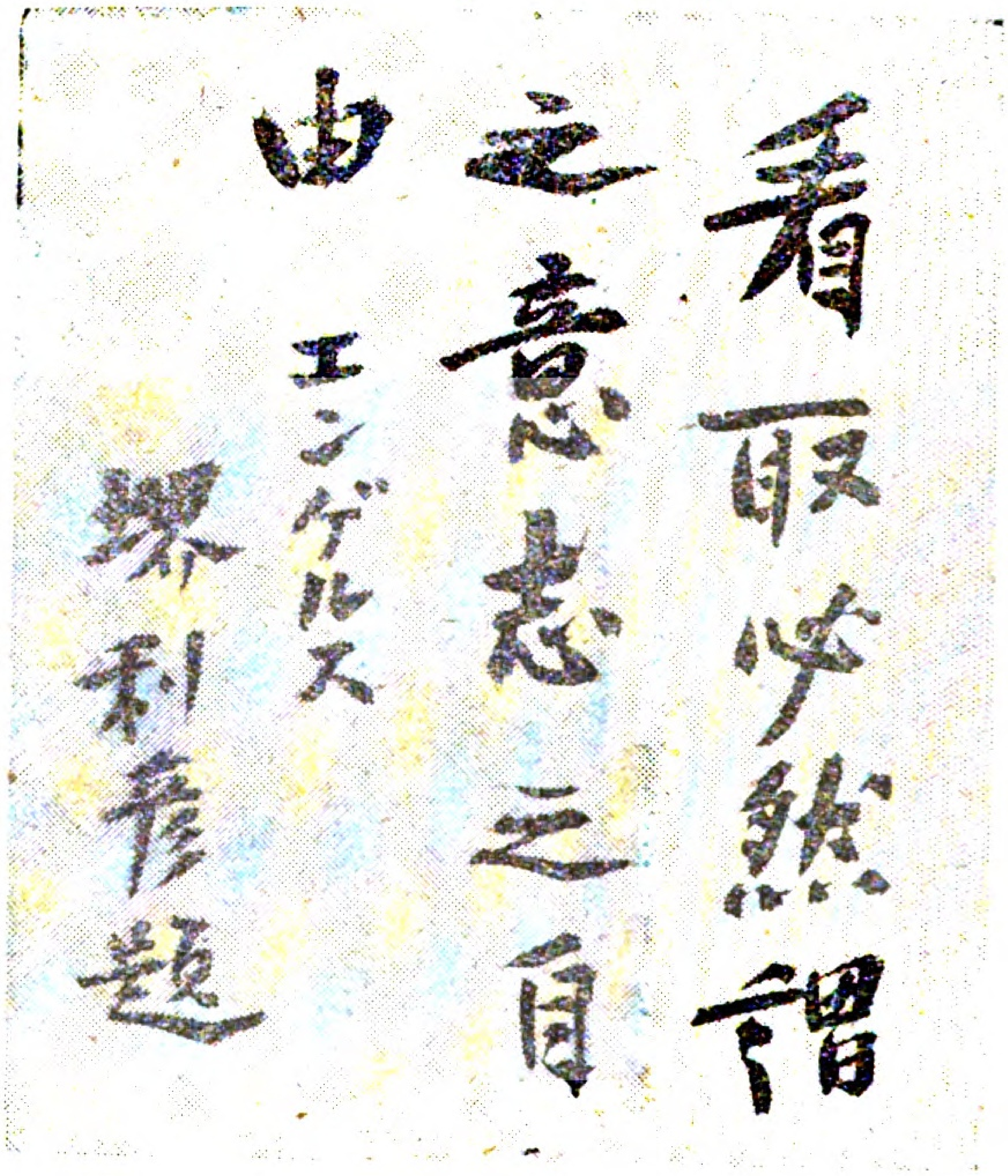
アインスタイン教授の講演

石原純

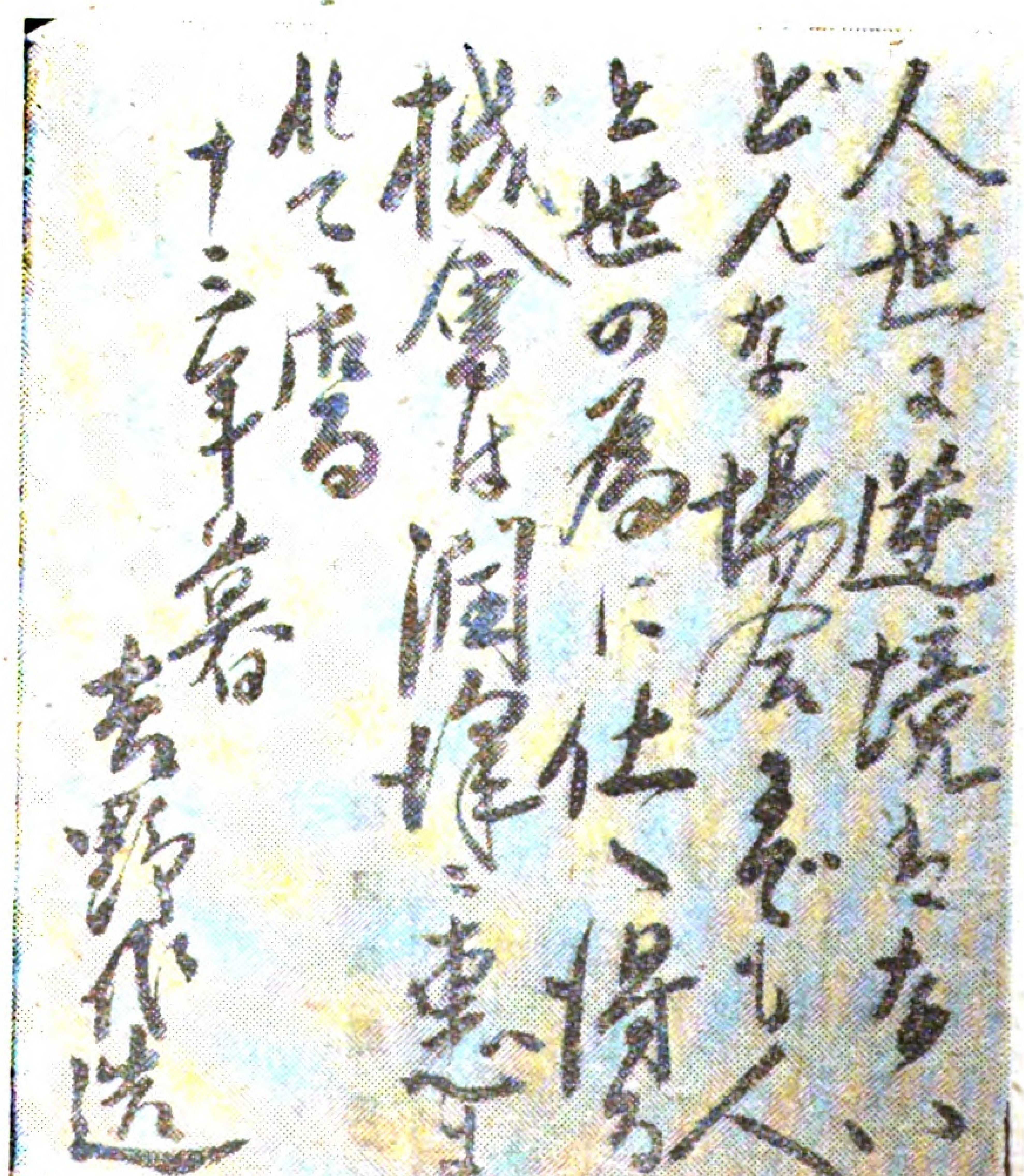
一　講演前記

アインスタイン教授が日本に、たとへそれが暫くの日数であらうとも、来られることは我が学界並に一般にとりてどんなに重大な

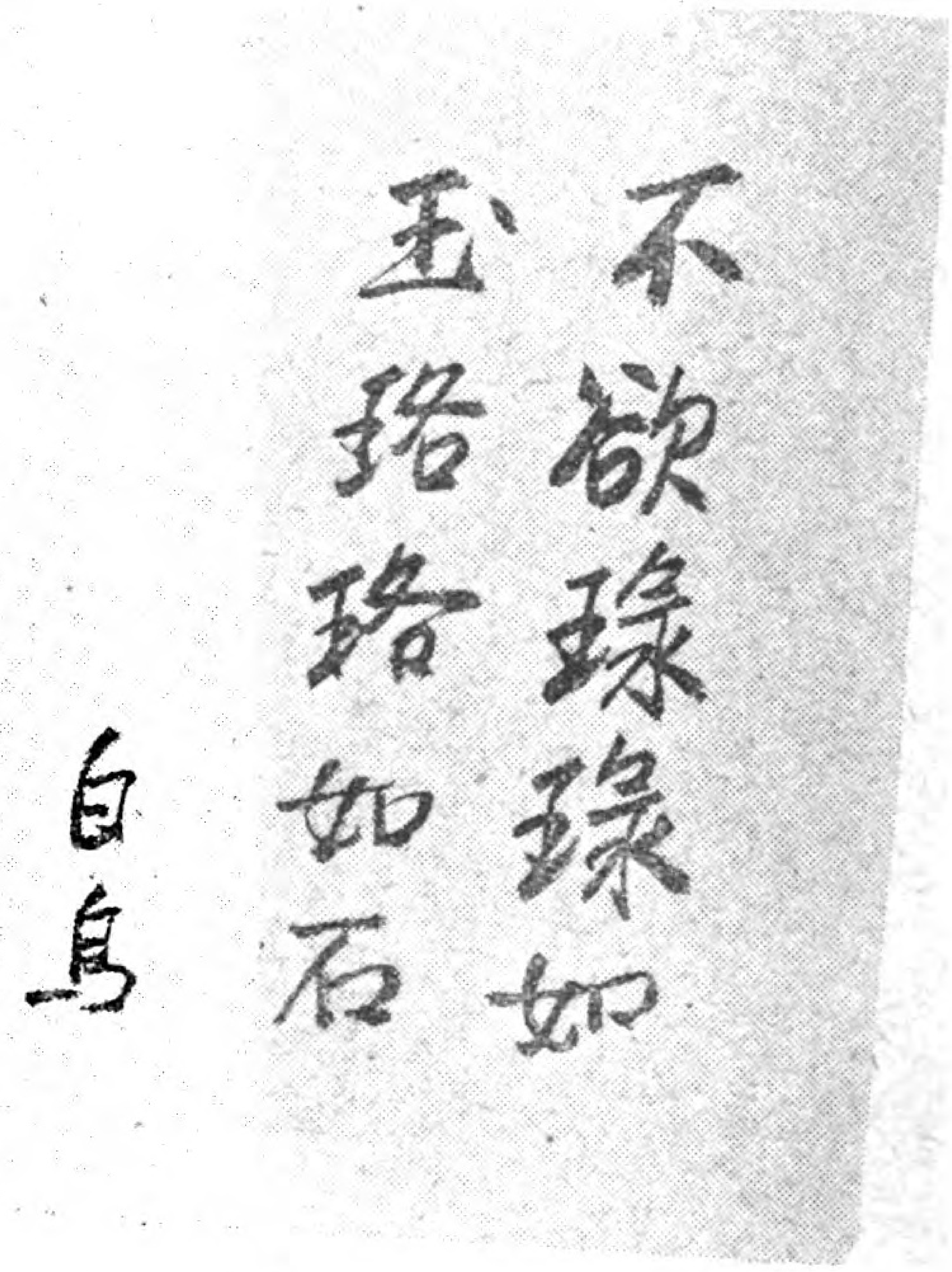
(石原純氏)


看取必然謂之意志之自由
エンゲルス
堺利彦題

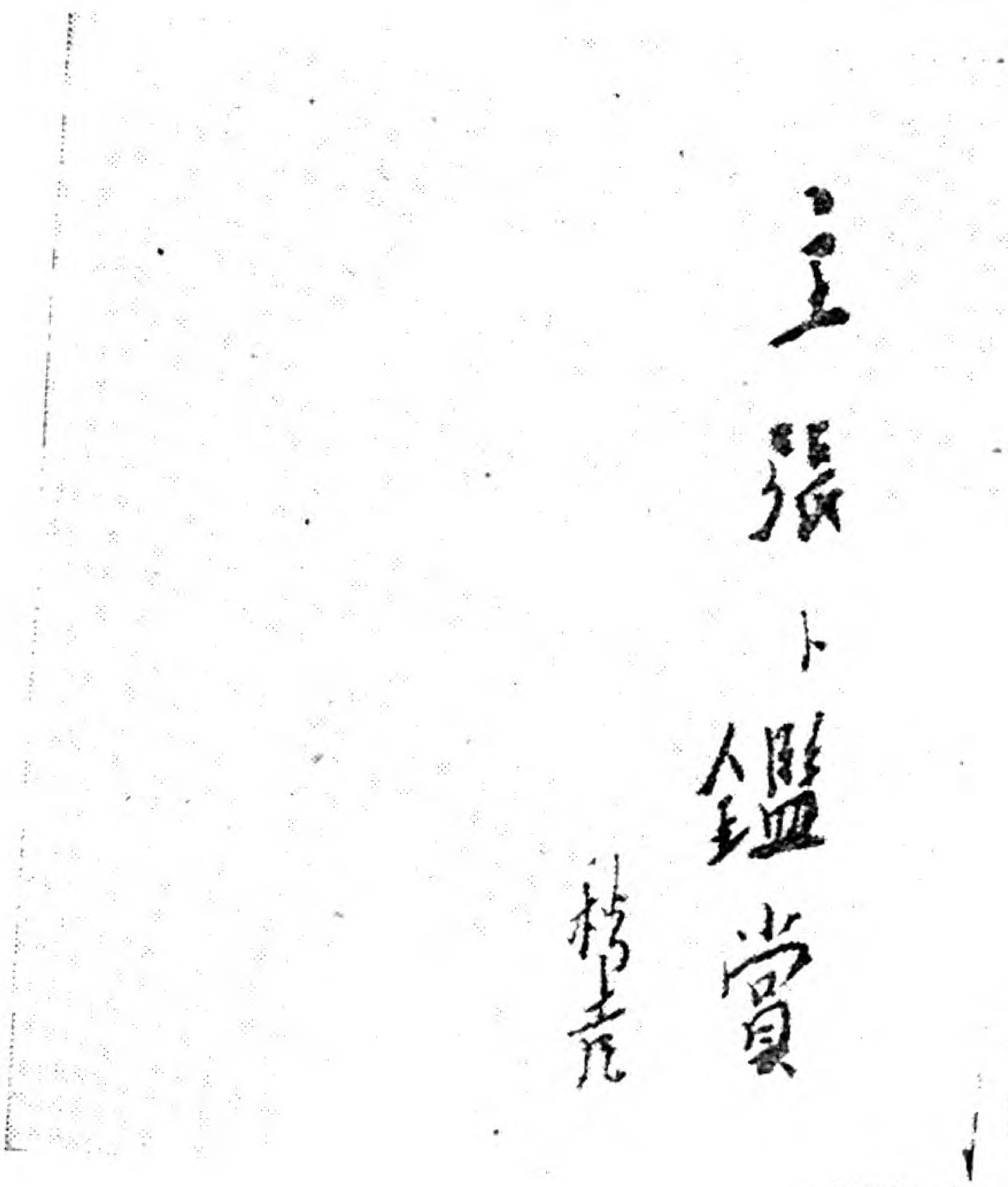
(堺利彦氏)


人世は逆境ばかりでない、
どんな場合でも人
と世の為に仕へ得る
機會は潤澤に恵ま
れて居る
十二年春
吉野作造

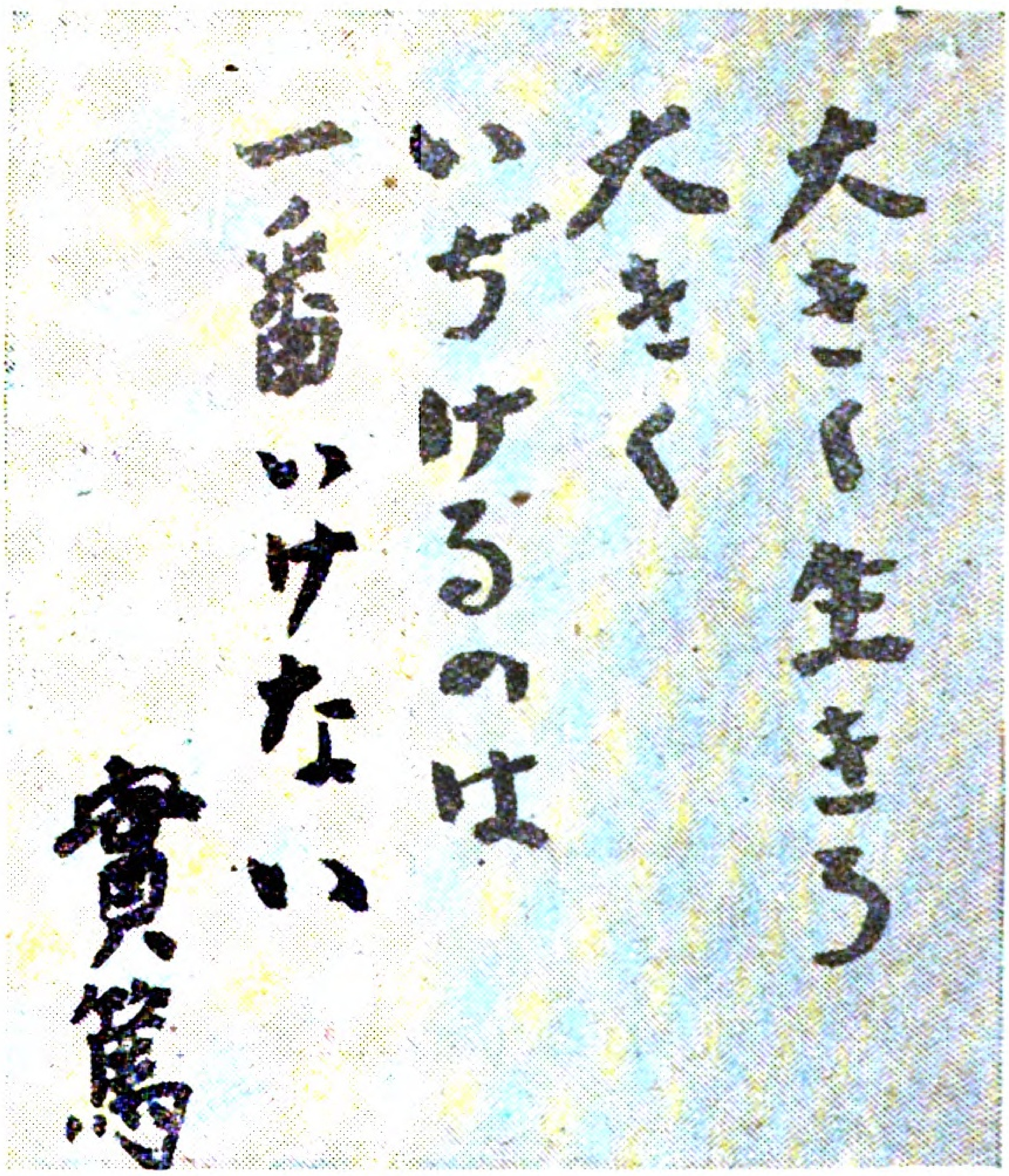
(吉野作造氏)



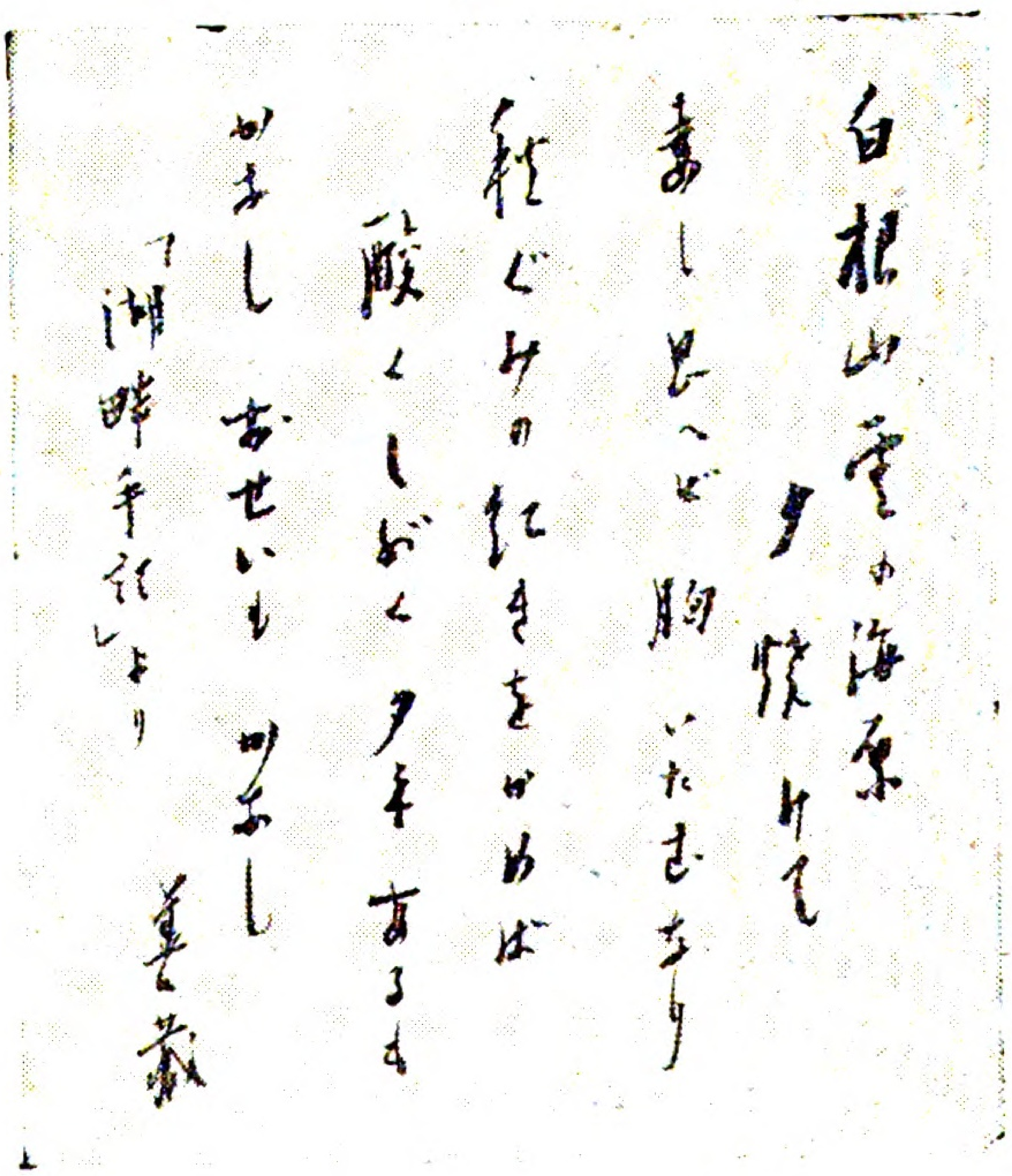
(正宗白鳥氏)



(德田秋聲氏)



(武者小路實篤氏)



(葛西善藏氏)

31 Sydney Street S.W.3

21.1.22

Dear Mr Yamamoto

I enclose an article which I think you may possibly find suitable for the Kaizo. If you have any desires that I should write on specific subjects, please let me know.

All best wishes:

Yours sincerely

Bertrand Russell

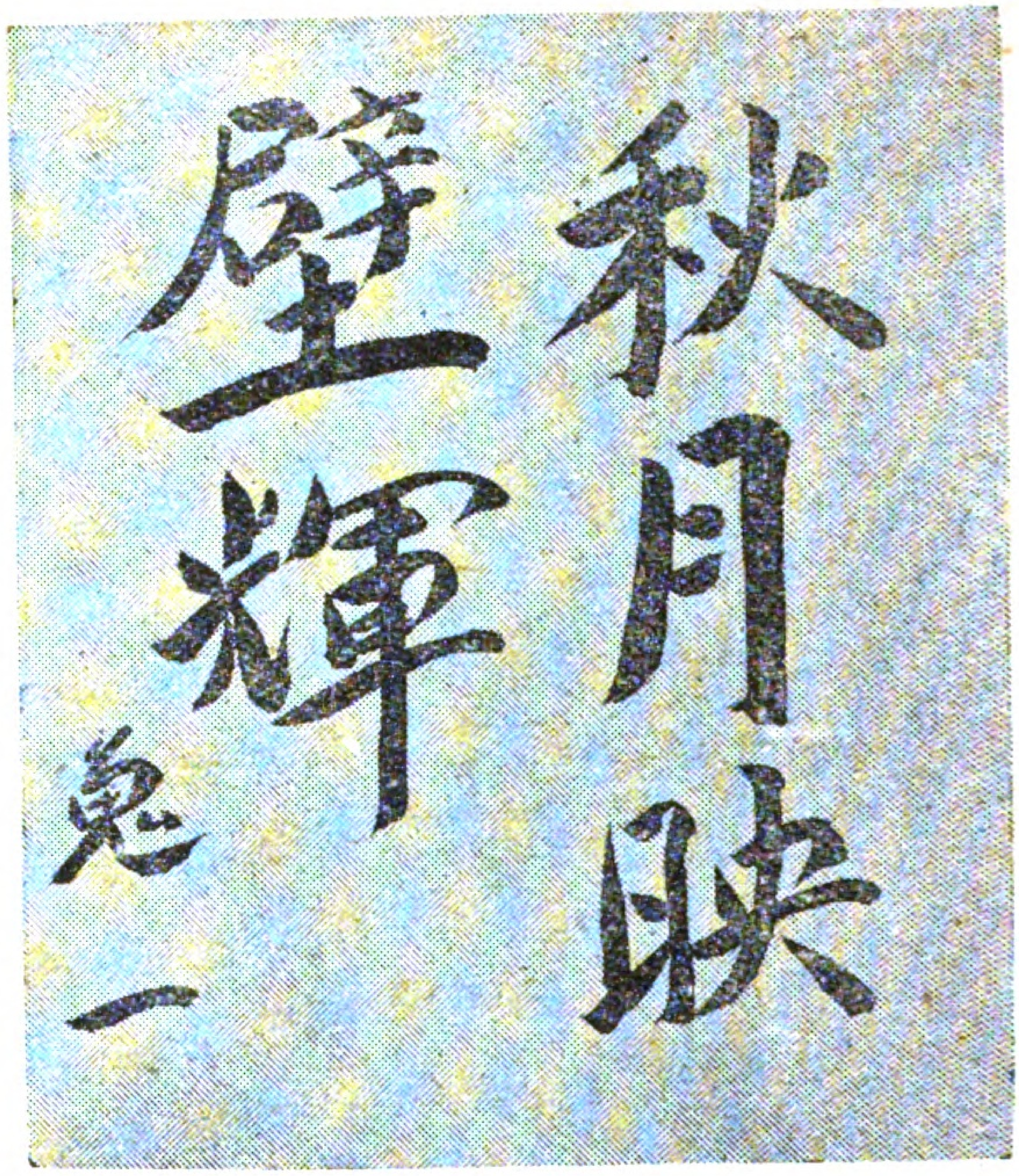
（ラッセル氏）

John Dewey

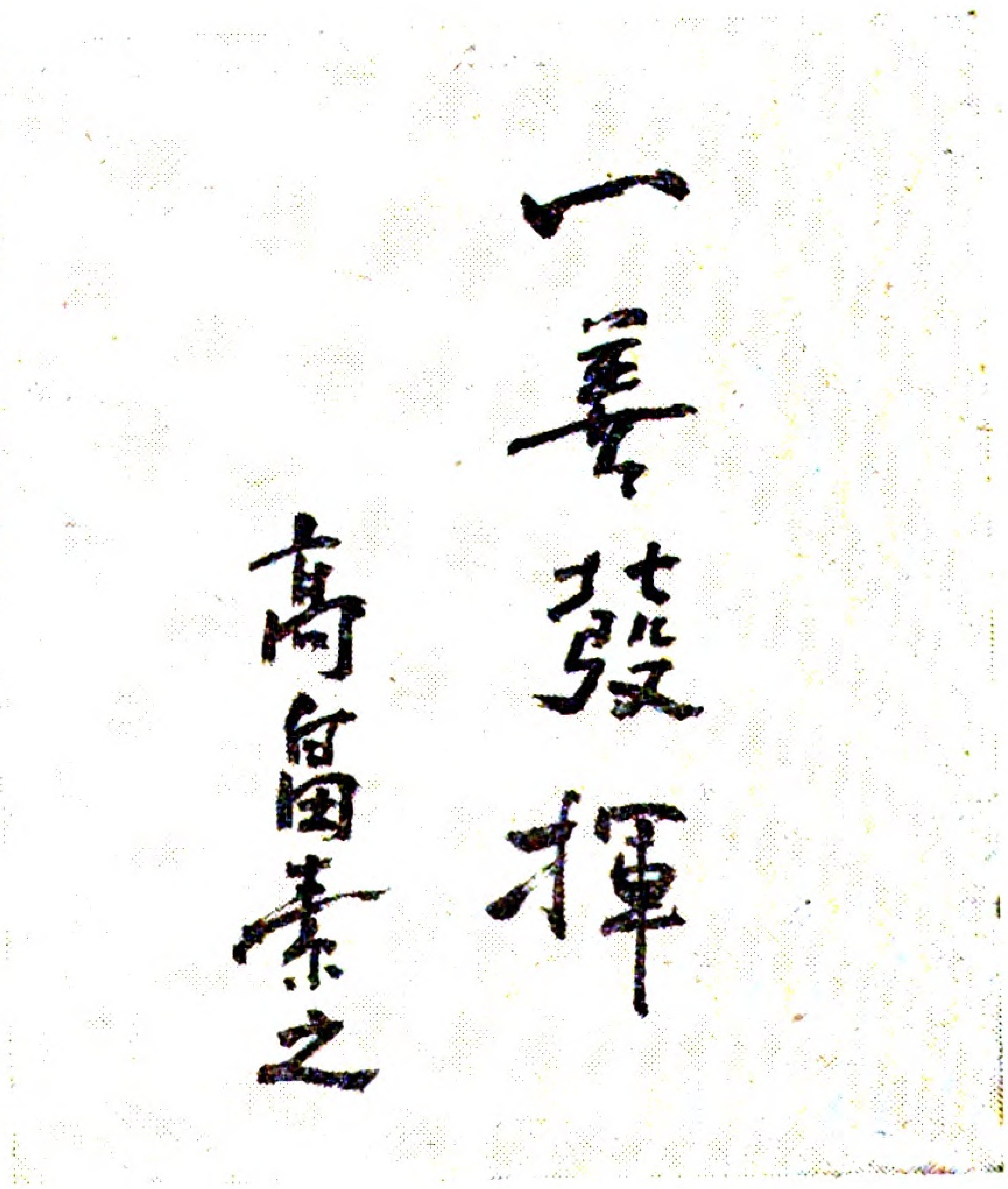
（ジヨン・デユーイー氏）

Rabindranath Tagore

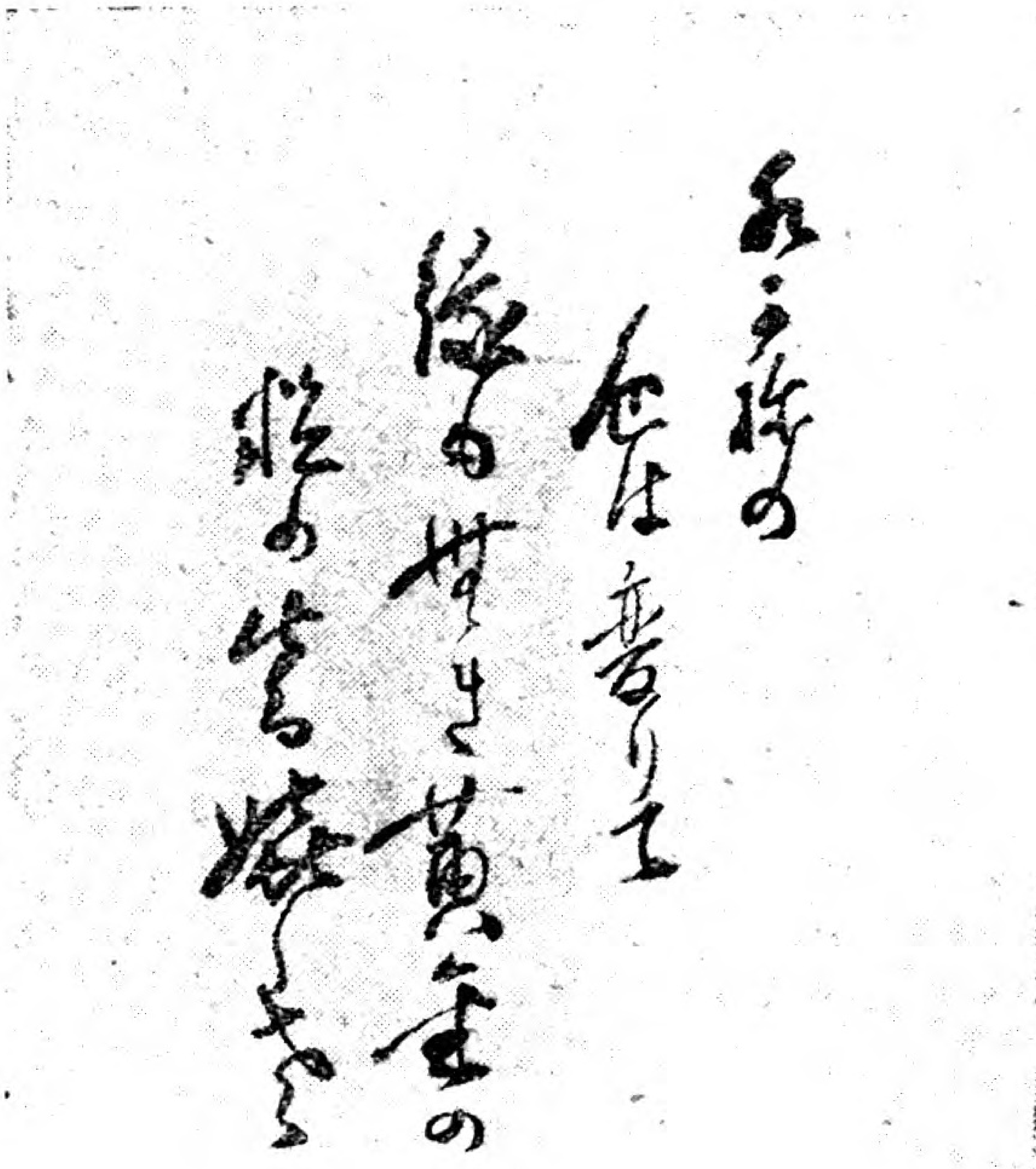
（タゴール氏）



(堀江歸一氏)



(高畠素之氏)



(長岡半太郎氏)



(長谷川如是閑氏)

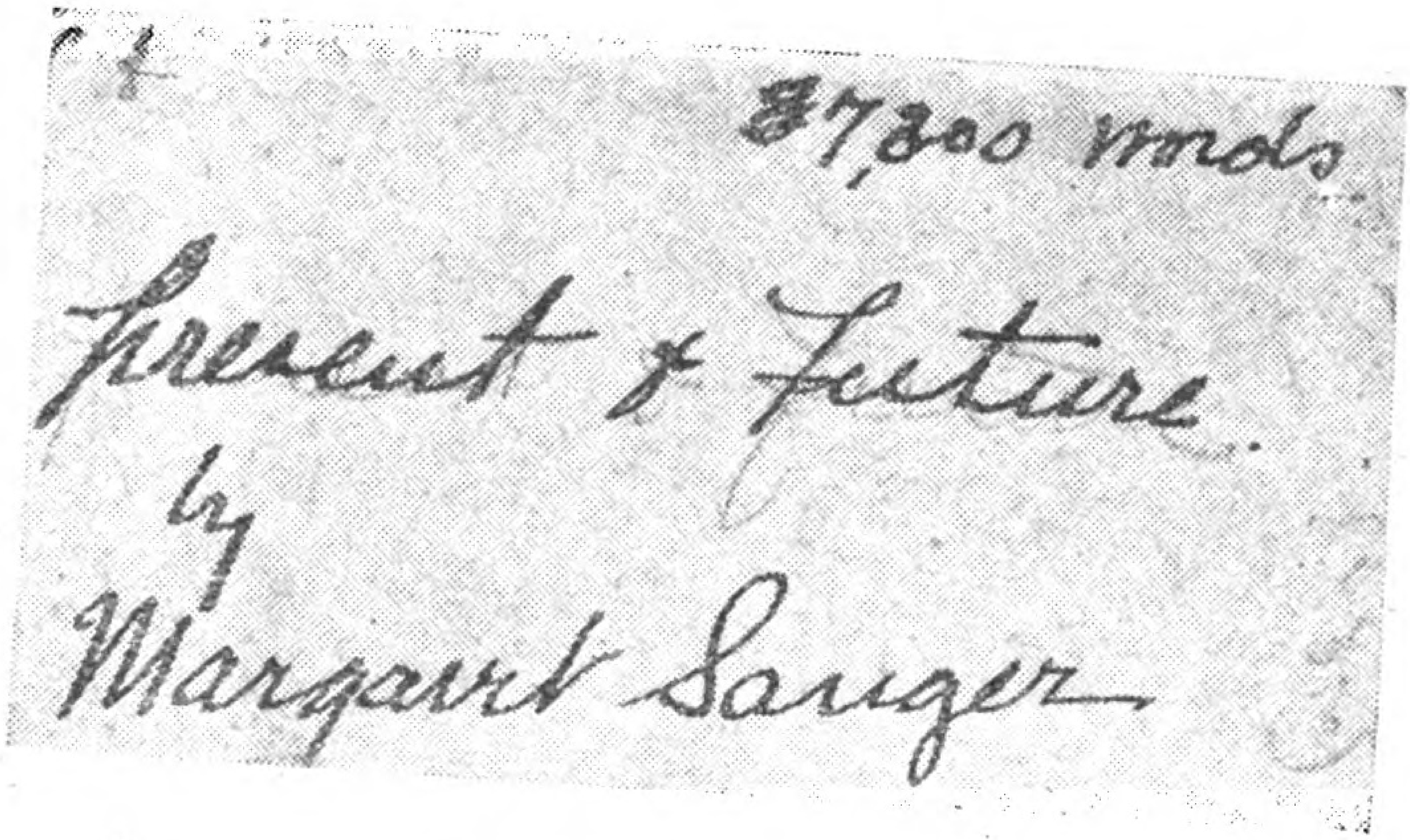
國民元氣智勇仁
殺身成仁從劍跡
黃花崗上草青青
赤血洗淨中華魂
白日照耀青天明
中華民國勃焉興
民權公配遍全民
被壓民族大同盟

(戴天仇氏)

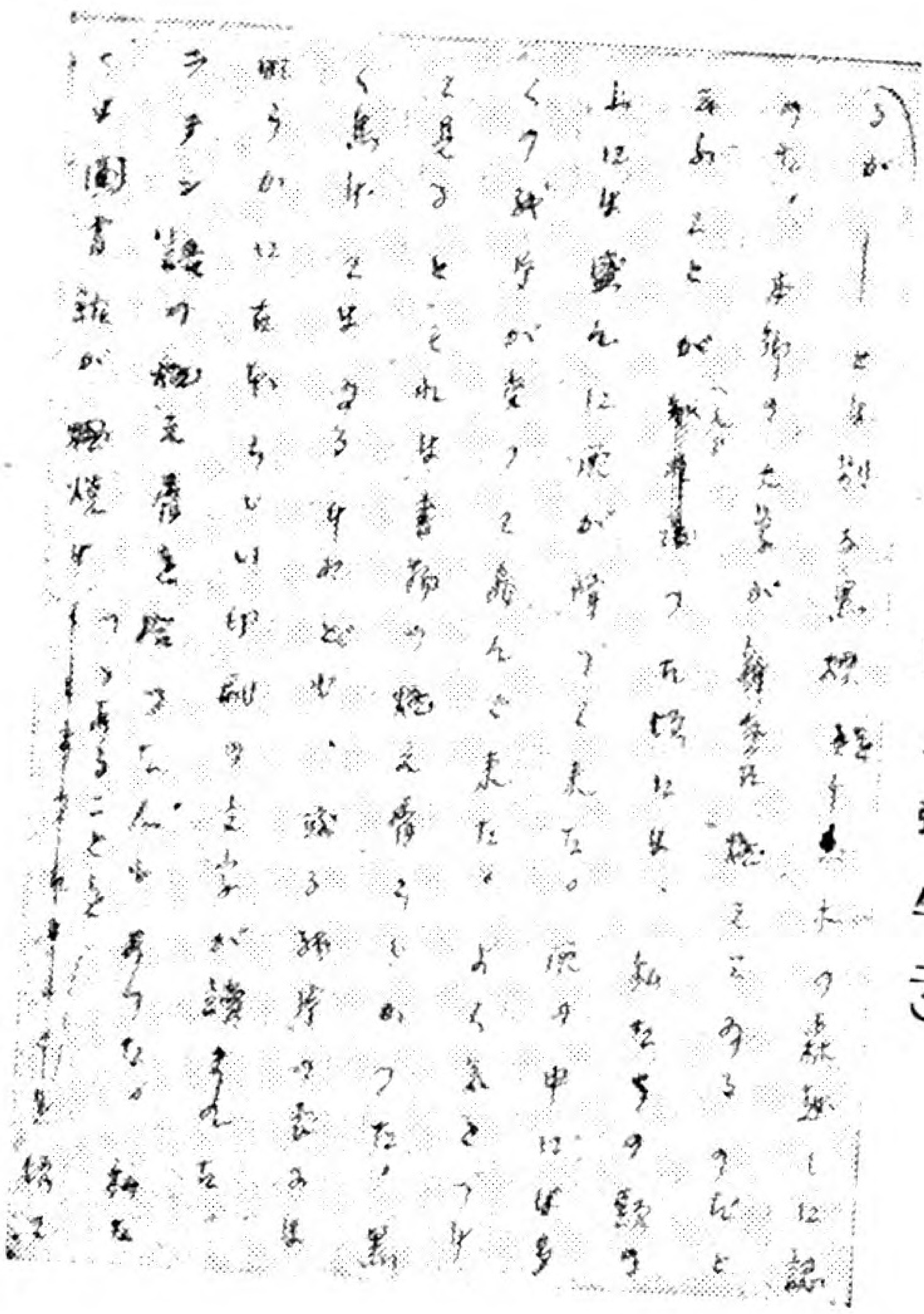
協作共享樂太平
天下為公大道行
前進前進更前進
誓為國民作犧牲
民族民權與民生
三民主義革命軍

書中國國民黨黨歌詞應囑

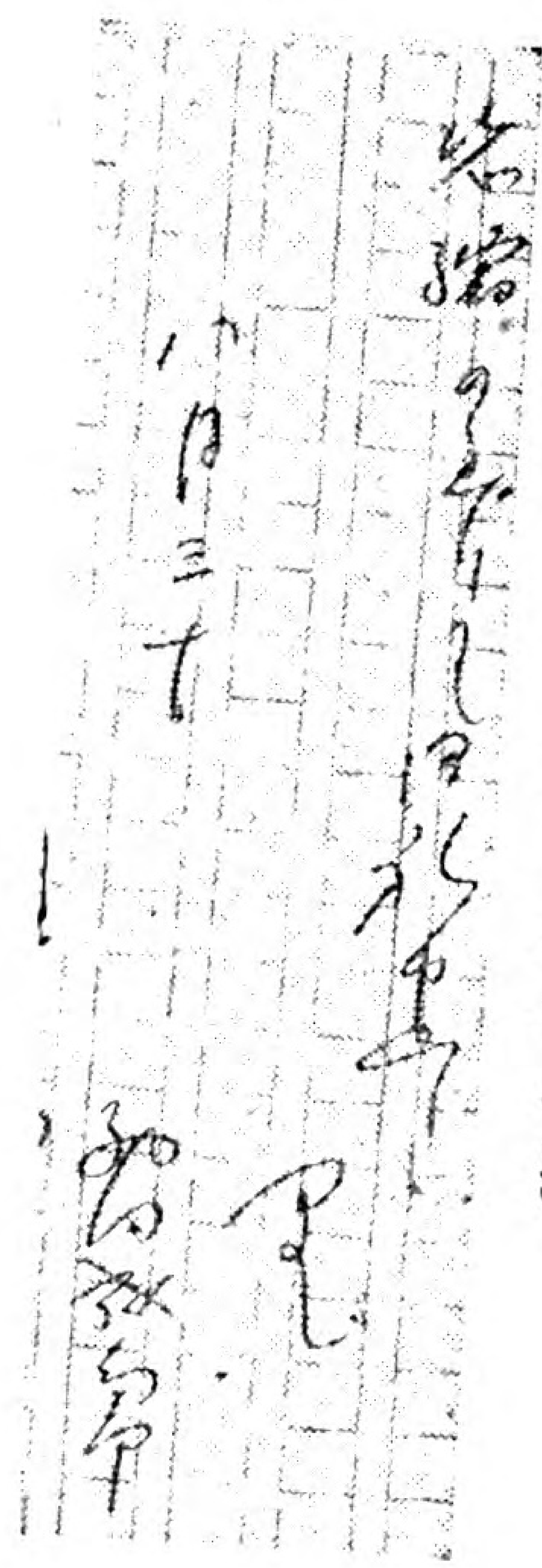
敬送社同人　天仇



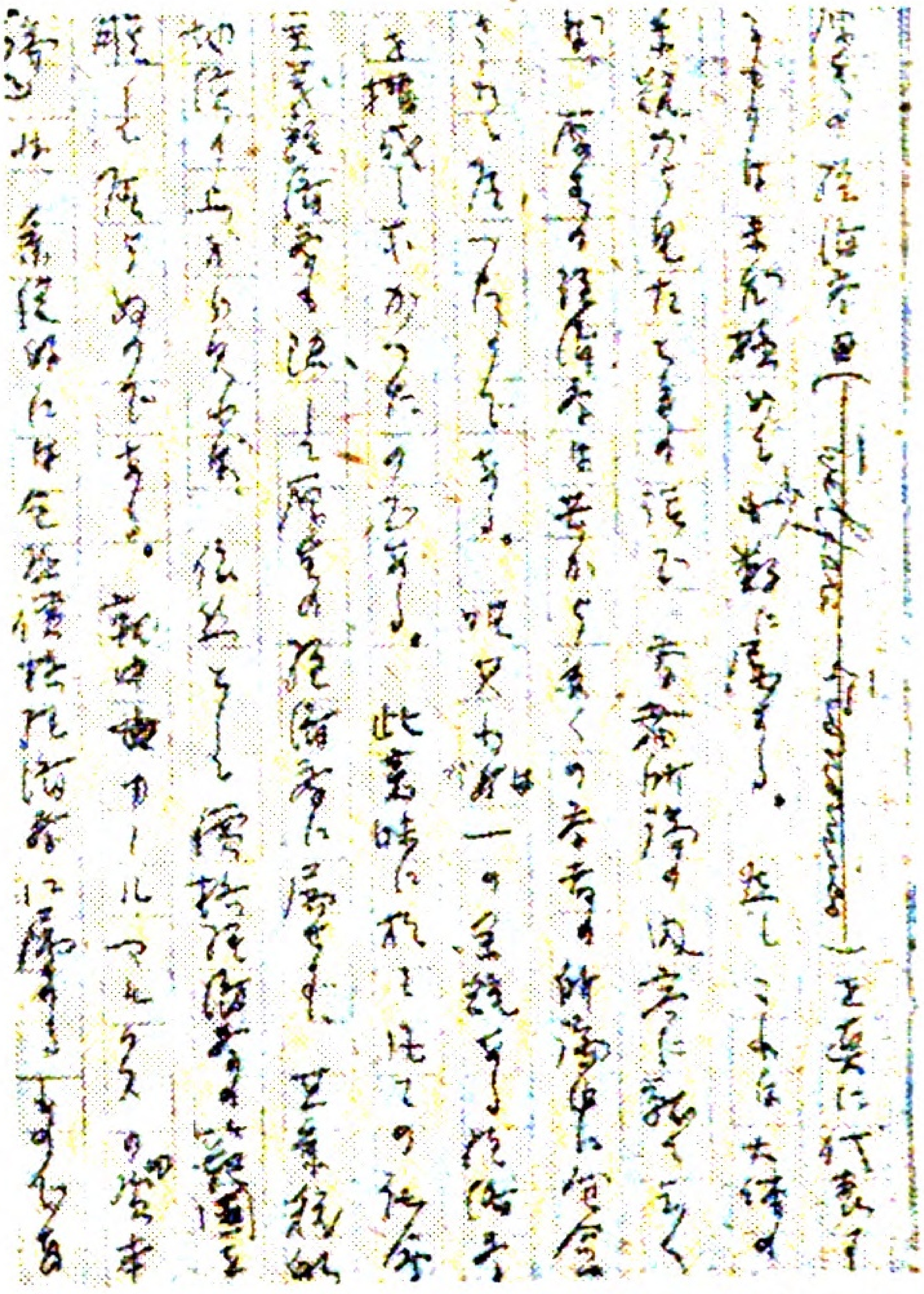
(サンガ夫人)



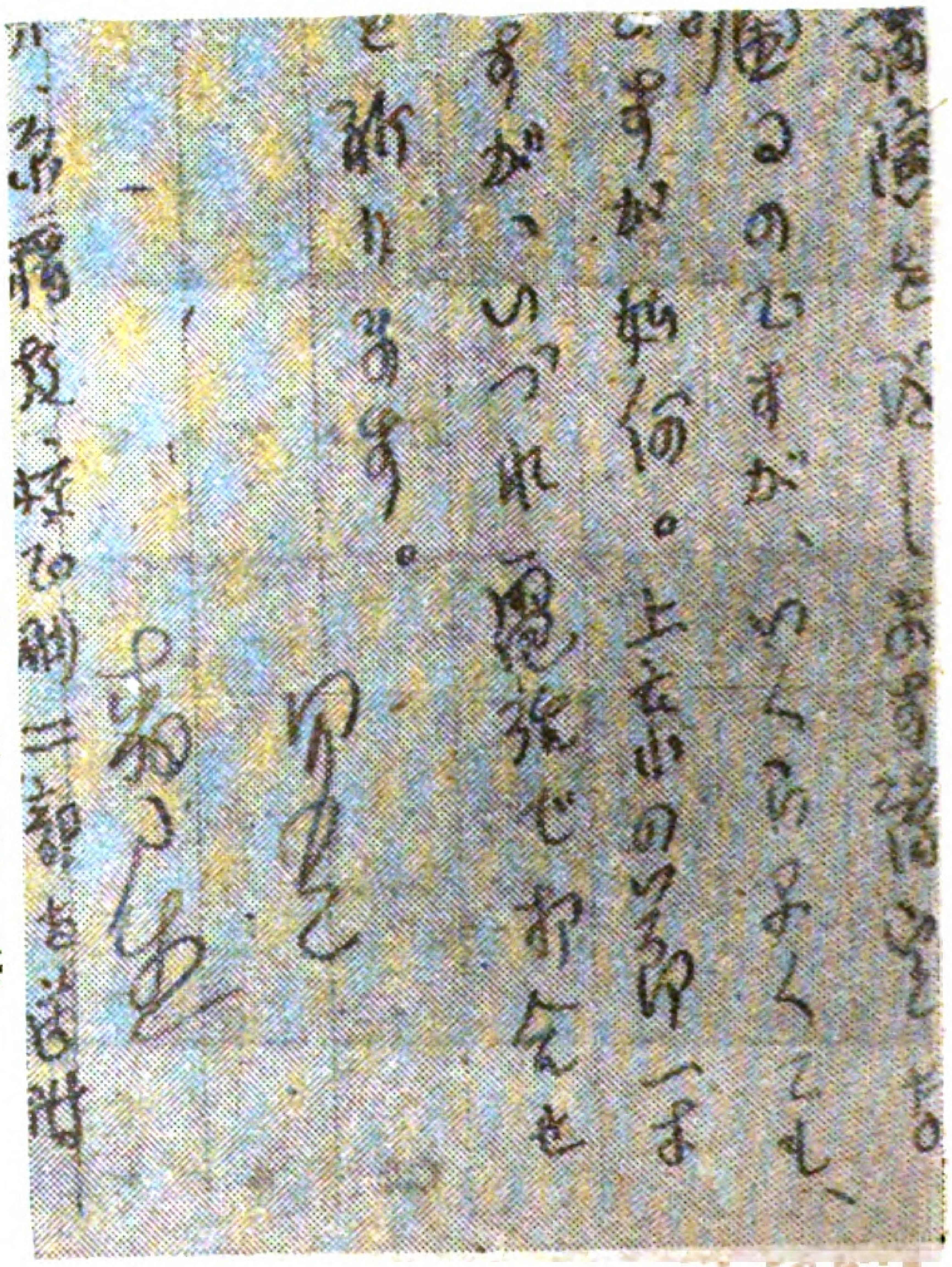
(野上彌生子)



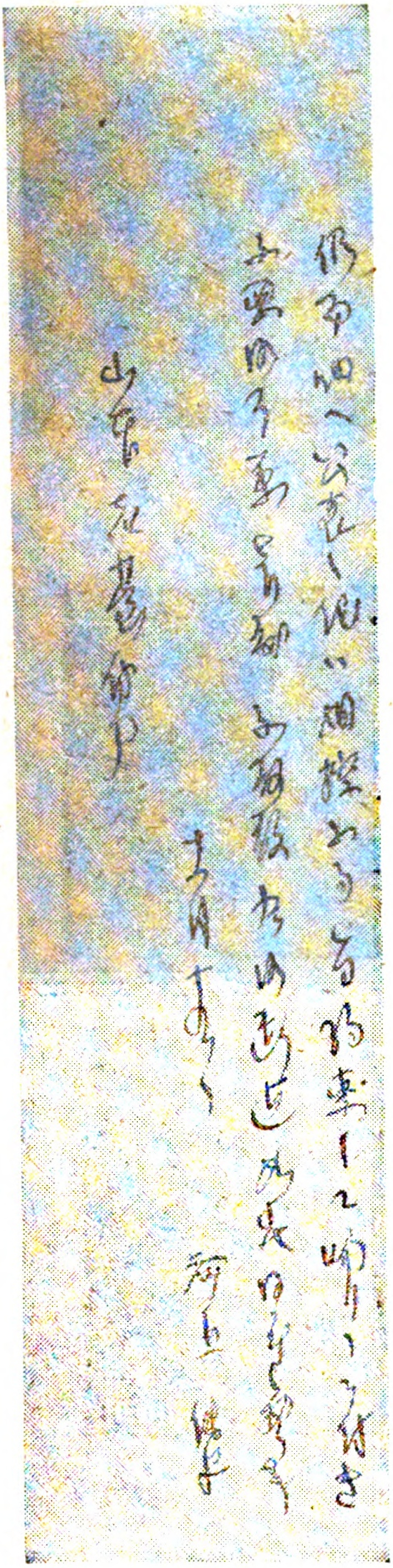
(西田幾次郎氏)



(福田徳三氏)



(森戸辰男氏)



(河上肇氏)

Professor Edmund Husserl
Freiburg i/Baden
Deutschland.

(フッサール氏)

[illegible]

(パルビユッス氏)

The British Engineering Struggle — Its Results and Morals. By G. D. H. Cole.

As I write, three months have passed since the end of the great national lock-out in the British engineering industry. I have chosen to write about it for Japanese readers, because it seems to me so extraordinarily significant as movement, both in its [illegible] its nature, and in its results. It is the clearest case of organised aggression on the [illegible]

(コール氏)



堺利彦傳

堺利彦

序

ブランデスが、クロポトキンの自傳の序に、こんな意味の事を書いてゐる。

大人物の自傳に大體三つのタイプがあつた。(一) 自分はこゝまで踏み迷つた。自分は斯くして眞の道を見出した。(オーガスチン)。(二) 自分はこれほど惡い事をした。然し誰が自分よりも善いと言ひ得るか(ルッソウ)。(三) 一個の天才が斯樣にしておもむろに内外から發展させられた(ゲーテ)。所が十九世紀の諸名士の自傳になると、兎かく斯ういふ傾きを示してゐる。(一) 自分はこんなに才能があつて、こんなに賞讃を博した。(二) 自分はこんなに才能があり、こんなに美德を持つてゐたが、それでもサッパリ認識されないので、非常な努力爭鬪の後、初めて名聲を博するを得た。然るに今この自傳の著者(即ちクロポトキン)は、自分を語る事を好む人物でない。この自傳の中には、自分の姿綺を眺めるといふ趣きが少しもない。懺悔もない。感傷もない。惡たれもない。自分の罪惡も語らないし、自分の美德も語らない。彼は讀者に對して、卑陋な打解話をしない。彼はいつ戀に落ちたかを語らない。いつ結婚したかをも語らない。讀者は只だ事のついでに、彼が遂に結婚してゐる事を知るだけである。彼は自分の心理よりも、他人の心理を語り、自分の歷史よりも他人の歷史を語りたいのである。故に彼

の自傳は、彼の生涯中に於けるロシャの歷史であり、又最近半世紀に於ける歐洲勞働運動の歷史である。

聖者オーガスチン、天才ゲーテ、それらは固より私如き凡人の比類でない。さりとて私は又、ルソウのような赤裸々のさらけだしも到底出來ない。『十九世紀の諸名士』の眞似だけは、さすがに爲し得ないと信じてゐるが、氣高くアッサリしたクロポトキンの態度に至つては、是れ亦た到底及びもつかない。然し私は今、若し出來得るならば、幾分なりともクロポトキンの態度を學びたいと考へてゐる。

自分の繪姿を眺めるといふ甘い所も澤山あるだらう。好んで自分を語るといふ馬鹿な癖も屢々出るだらう。多少の懺悔、多少の感傷、多少の惡たれもあるだらう。卑陋な打解話も出て來ないとは限らない。それでゐて、僞善、修飾、辯解、隱匿の數々もあるだらう。然し私は、それらの總てにも係はらず、猶この自傳が、明治大正の社會史として、社會運動史として、多少の意義あれかしと望んでゐる。

第一期　豐津時代

堺利彥は貧乏士族の子であつた。明治三年十一月二十五日に生れ、明治十九年（十七歲）の春まで、福岡縣豐前國京都郡（みやこぐん）豐津で育ち、其の間に『郷黨の秀才』として、小學校、中學校を卒業し、それから『笈を負うて』東京に遊學した。彼の生涯の第一期の歷史は、要するに只これだけだ。

然し豐前國豐津！　それが彼に取つて、日本國中で只つた一つの、如何なる物にも代へがたい懷かしの故郷である。十六年の春秋をそこに過して、（ツイ淨瑠璃のさわりめいた文句が出たが、）彼は先づ其の性格體格の根本を、そこの環境から作りあげられた。彼は今、現在の私をして、恍惚たるエクスタシーの感を以て、敢て其の當年の事物を回顧せしめる。

一　傳說的な故郷

豐津といふ處を地理的に說明するなら、低い丘陵の一と塊まりとでも云はうか。豐前國中第一の高山たる英彥山（ひこさん）（俗に彥山（ひこさん））から流れ出る二つの川、犀川（さいがは）と秡川（はらひがは）とが、僅かの距離で、相並んで海に注いでゐる其の中間に、彥山の山脚の一つが長く突出して、其の尖端が痩せ松原で蔽はれた低い丘陵の塊まりになつてゐるのが、即ち我が豐津である。それを海岸の方から見れば、今の行橋町から一里あまり引込んだ處の、低い山の上の野原である。

昔は此の豊津の地をナンギョウバルと呼んでゐた。バルは原の土音である。ナンギョウバルの貴狐といふ言葉が殘つてゐるので、其の荒涼たる原野の様がしのばれる。旅人が辨當の握り飯を烏にさらはれるといふ話を、私が何かのついでに聞き覺えてゐるのも、このあたりの昔の様を想はせるに足る。所が又、ニシキバル（錦原）といふ、打つて變つた別の名稱がある。或時ここに遊女めいた者の居た事があるといふ話も、私の小耳に殘つて居る。そこで此の錦原といふ美しい名稱も、貴狐といふ凄い文句も、同じく其の遊女屋に事寄せたものかも知れぬといふ解釋もある。更に遙かの昔しに逆登つて見るとこゝは穴居人種の住んでゐた一部落である、今は甲塚と呼ばれてゐる、尖端中の尖端たる一地域には、甲のような、丸い大きな土饅頭が、幾つも幾つも殘つてゐる。入口の塞がつてゐるのもあるが、中にはチヤンと、眞四角な、石で囲うた入口が開いてゐるのもある。當年の私等は、よく其の中にはいつて、焚火などして遊んだものだ。今は此の尖端から海岸まで一里餘りもあるが、昔しは此の尖端まで海が灣入してゐたのだらうとも云はれてゐる。それは豊津といふ名稱からも考へられるし、又甲塚の直ぐ下に大きな池が二つあつて、それが海の方へ長く延びてゐる様子が、如何にも灣の名殘らしく見える處からも考へられる。さすれば此の豊津は、野蠻人の穴居部落であつた事もあり、又舟つきの一小村落であつた事もあり、又或時には、どうかした事情の下に、遊女のすだく野中の宿であつた事もある。

斯ういふ傳説的な我が豊津、——凡そ如何なる土地にも、このくらいな傳説の無い處は無いのかも知れないが、自分の故郷を成るべく多く傳説的にして見たいのが、私のささやかなロマンチシズムである。そこで、斯ういふ傳説的な我が豊津が、明治維新の際、偶然にも藩政の中心地、從つて我々士族の居住地となつた。

豊前六郡（今では四郡）十五萬石は小笠原家（今の長幹伯爵家）の所領で、小倉が其の居城であつた。然るに慶應二年、徳川幕府の長州征伐の時、幕府の親藩として九州方面の先手を承たまはつた小倉藩は、戰で利あらず、城を燒かれて退却した。そして新たに地を豊津に相して、そこに城を築く事になつた。傳説的な我が豊津の痩せ松原は、斯くて又一つの珍らしい大きな運命に遭遇したのである。所が、それから間もなく幕府が亡びて、慶應四年が明治元年と變り、引續いて版籍奉還、廢藩置縣となつたので、豊津の城下は未成品のまゝ、まだほんの荒ごなしのまゝ、新時代の風雨の中に放り出された。そこに豊津の特殊性がある。

二　松原の士族屋敷

堺家は元、十五石四人扶持といふ小士の家柄であつた。私の父は先づ御書院番、次に御膳匠、それから檢見役、最後に御小姓組を仰付けられたと、系圖に書き殘してある。江戸にも二度出府してゐる。最初は御參勤御供として、二度目は品川御臺場詰として。だから私の父は、小祿とは云へ、正に一廉のサムライであつた。

然し私の目が漸く少しづゝ豐津の事物を見分けるやうになつた時、私の父は既にサムライでなかつた。腰に大小がさゝれてゐないは勿論、頭に丁髷ものつかつてゐなかつた。之を歴史に徴するに、明治の新政府が士民に散髮、脱刀、立禮を許したのは、明治四年の事であるが、私の父は最も早く散髮した一人として、少し自慢らしく折々その事を話してゐた。

私の父が既にサムライでないと同じく、豐津は既に城下でなかつた。殿樣と呼ばれた舊藩主は既に此の地方を引揚げて、東京住居になつてゐた。お城は、――と云つても、子供の目に城といふ感じを與へるやうな、高い石垣もなければ、櫓のようなものもない。只だ平地に建てられた、稍や大きな一構への御殿に過ぎなかつたが、――其のお城は、一部分は既に取り壞され、一部分は閉め切つた儘になつて居り、中程の一部分だけが仕切られて、小學校に使はれてゐた。

其お城のあたりを中心として、松原の間や谷あひに沿うて、士族の屋敷が或は群集し或は散在してゐた。本來なら城下の屋敷町であるべき筈が、總て松原と谷あひとであつた。昔しの山城を鷲の巣に喩へた話を聞いた事があるが、その格で行くと、豐津の士族屋敷は鳥の巣と云つても善かつたらう。然し、お城の迹を頭として、それに續く一條の大通りは正に此の豐津の原の脊髓であつて、そこだけはさすがに少し城下の趣きを示してゐた。大通りの上手の部分は本丁と呼ばれて、兩側には士族屋敷が規則正しく立ち並んでゐた。其の中には、『松の門』と呼ばれた、御家老小笠原織衛殿の老松竹林に圍はれた、大きな奥行の深い屋敷もあつたりした。本町に續いて錦町といふ町があつた。一丁目から七丁目までの、ほんの寂しい筋町ではあつたが、それが兎にかく此の城下に於ける商工の群れであつた。そして此の錦町の七丁目が前に記した甲塚に續き、其の甲塚が行橋方面から豐津への、正面の入口になつてゐた。

堺家の屋敷は、錦町の西裏に當る、不走谷といふ淺い谷のほとりに在つた。家は玄關三疊、坐敷六疊、臺所（茶の間）六疊、部屋四疊半、土間物置數坪の茅葺で、それに座敷の庭と、一裏庭の花壇と、竹藪と、野菜畑とが附屬し、更に裏手には松山

が附屬し、表には小道を隔てゝ小松原が附屬してゐた。近處の家屋敷も大體皆、そういつた風な烏の巣であつた。

三　歷史上の事跡

所で、私の幼い目が、この豐津の家を中心として、四方の空間を見渡した時、先づ西南の正面に、高い彦山の二つの峰が重なりあつて聳えてゐた。そして其の右左に、種々樣々の形をした遠近の山山、――中には人間が尻をまくつて見せて居る樣なのがあつたりして、――それが紺碧の色に連綿重疊して、三角形に私の眼界を限つてゐた。總て陸地といふものは、必ずこんな風に、三方に山があつて、一方だけが海に開けてゐるものだと、幼い私は思ひこんでゐたらしい。私が初めて東京に出た時、どちらを向いても山といふ物が無いので、何んだか締めくゝりのない、或は落ちつきのないと云つた樣な、不安らしい氣持を感じた事がある。

何しろ私に取つては、この三角形の眼界が自分の天地であつた。そして此の天地が樣々な歷史上の事跡を私に教へた。先づ神代の遺跡として、祓川の川口に『今井の祇園樣』と稱する神社がある。これはスサノヲの尊を祀つたもので、其の每年の夏祭には、私等はいつもそこで、たらふく飴を食ふ事を樂しみにしてゐた。次には等覺寺山の青龍窟がある。これは彦山の右翼の右端に聳えた山の中腹に在る。其の高山は頂上が一里四方の平野になつてゐる事を以て有名な平峽野山である。或る國自慢の國學者は、この平峽野が高天原である事を論證して、『神代帝都考』といふ著述を爲し、以て大いに豐前國の國威を宣揚しようとした事がある。私はまさかそれ程の愛國者ではないが、それでも矢張り、平峽野の一里四方に秋草の咲きさかつた時などを想像して見るくらいのアコガレを有してゐる。從つて文章上、可なりの脇道をしながら、平峽野の事を記す氣にもなつたのである。扨この平峽野の一里四方は、豐津から眺めた處、すこし右の方に傾斜して面白い恰好になつてゐる。そして其の左の一角の高く隆起した處を、龍が鼻と呼びなしてゐるが、等覺寺山は即ち其の龍が鼻の下の方に在る。そこで其の等覺寺山の青龍ヶ窟とは抑々何かと云ふに、昔しそこに土蜘蛛が住んでゐて、景行天皇に誅伐されたと云はれる處である。私は其の窟の中で初めて鐘乳石といふ物を見た。

景行天皇の熊襲征伐の時、我が豐前の國は畏くも行在所であつた。京都郡といふ郡名も其の爲であり、御所が谷といふ地名も或る山間に殘つてゐる。又、築上郡の傳法寺村には天皇御手植と稱される楠の木が殘つてゐる。それは現に、日本有數の大

樹として珍重されてゐるのださうだ。私はそれの見物に行つた時、五人か七人かの少年が手をつないで、やつと其の木を取り卷いた事を覺えてゐる。次には國分寺がある。これは豐津の直ぐ隣り村で、昔しそこに國府の在つた事を思ひ、又聖武天皇云云の事を思ふと、何だか頻りに其の邊の土地が尊い樣に感ぜられるのであつた。次には椎田の濱の宮がある。こゝは菅原の道眞公が筑紫に流された時、漂着した處で、綱敷天神として祀られてある。其の頃の少年の間には、月の廿五日に天神講と云ふを催して、闘書の競爭をする習慣があつた。次には平家蟹、平家の糸卷などいふ傳說がある。壇の浦で滅亡した平家の人々の怨みの相が、蟹の面に現はれたと云ふのである。如何にも、目を釣り、齒を食ひしばつた面影が見えてゐる。糸卷と云ふのは『人手』の事だが、そうすると之は、入水した女官達の化身ででもあらうか。我々の少年は、馬刀貝の事を平家のちんぼとさへ呼んでゐた。

最後に戰國時代の事跡が色々ある。彥山の左翼の山々の間に『城の郷』といふ處がある。そこは宇都宮公綱の居城であつたが、公綱が中津の黑田孝高にたばかられて、釣天井で殺され、其の爲に落城した。彥山右翼の一部に馬ケ獄と云ふがある。これは犀川のほとりにあつて、豐津からは最も近い、從つて私に取つては最も親しい山である。殊に山の形に、名に負ふ馬の鬣けるが如き趣きがあり、ところ〴〵斑に禿げたのも面白く、頂上のそぎ落した樣に見えてゐる城趾に、五六本松の村立のあるのが、誠に好い眺めであつた。(但し其の松はいつの頃か落雷に遭つて、今は一本もないと聞いてゐる。)此の山城は秀吉の九州征伐の時に落されたので、其の間道の水の手を寄せ手に知らせた百姓の家には、その後、代々片輪者ばかり生れるといふ話がある。その外、彥山左翼の香春獄、障子が獄など、皆な秀吉に落された山城である。私は友達と三四人連で馬ケ獄に登つた時、其の村立の松の下から四邊の眺望を欲しいまゝにしながら、意氣豪壯、皆で盛んに詩吟をやつた事を覺えてゐる。而も其の詩吟の中に『大風起つて雲飛揚す』といふ一句のあつた事を、殊に明かに覺えてゐる。

かういふ歷史を經て來た豐前の國の人物と山川との間に、德川幕府の初年、小笠原氏が其の家來を率ゐて信州から移つて來た。堺家は小侶ながら信州以來の古い御家來なのだから、私は血統上、本統の九州人では無い筈である。然し數代の婚姻中には、いつか必ず色々の血が混入してゐるに相違ない。だから私は矢張、信州の武士の子孫である以外に スサノヲ族の子孫でもあり、土蜘蛛の子孫でもあり、××××の子孫でもあり、菅公お

よび平家の子孫でもあり、處々の山城の武士達の子孫でもあると信じてゐる。又、血統の事は假りに別としても、私はこういふ歴史上の事跡を伴ふ山川草木からして、直接に種々雜多の感化を與へられた結果、そこに豐前人としての深い愛鄕心が兆してゐるのだと思ふ。

四　小士族の日常生活

扨、こうした歴史的の天地に於ける、傳説的の故鄕に於ける、松原の間の鳥の巣に於ける、小士族の日常生活から記して見る。

朝起きると、父は井戸端か畑の脇かに立つて、朝日に向ひ、かしわ手を打つて禮拜した。それから藁の莖を折りまげて、それに鹽をつけて齒を磨いた。父の齒は白かつた。母は臺所で磁石をカチ〳〵云はせてゐた。磁石の事は、今の若い人は知らないだらう。左の手に白い磁石のかけらを持ち、それにパンヤといふ、黑い綿屑の樣な、導火物を持ち添へ、そして右の手に持つた打金で其の石をカチ〳〵カチ〳〵と叩くと、赤い幽かな火の粉が飛び散つて、それがパンヤに移る。そうすると今度は、ツケギ（薄い長方形の木片の片端に硫黃をつけた物）で其パンヤの火を燃えつかせる。それから其のツケギの火を竈の下の枯松葉につける。それが當時の、火を拵へる方法であつた。程なくマッチといふ便利な物が輸入されて、スリツケギ、或は唐人ツケギと呼ばれてゐた。

夜になると、行燈がとぼされた。丸行燈は臨時の座敷用で、角行燈が毎晩の臺所用であつた。夫れ行燈とは、丸い、或は四角な、木のワクを白紙で張つて、其の内部に多分眞鍮の皿を釣るし（或は据ゑつけ）、その皿に種油を入れ、その油に燈心の幾筋かを浸し、その燈心に火をとぼすのである。私等は其の角行燈のまわりで大きな字の本を讀んだりした。母は其のそばで針仕事をしたりした。行燈の紙の針の穴が模樣のように見えてゐたのが、今でも目に殘つてゐる。母は又よく行燈のそばでブーン〳〵と糸挽車を廻してゐた。これが又說明を要するだらう。夫れ糸挽車とは、――これを行燈の場合の如く、正確に說明する事は容易でないが、――先づ木製の臺があつて、それに竹製の輪車が取りつけられ、其の輪車と、別に左り手にしつらへてある細い金屬製の錘との間に、調べ糸が掛けられてある。それから別に拵へてある綿のシノ（細長い管の樣な形の物）を左の手に持つて其の錘に輕く當てがひ、そして右の手で其の輪車の柄を廻すと、錘が迅速に回轉するので綿の先がそれに卷きつく。そこで左の手を遠く左に延ばしながら綿のシノを輕く引く

と、自然にそれが細い糸になる。私には今、精密な記憶が無いし、又その當時でも、精密には其の器械的作用を理解してゐなかつたのだから、こゝに十分な説明は出來かねるが、何しろブーン、ブーン、ブーンと車が廻されると同時に、母の左の手にズン〳〵ズン〳〵と糸が長く延びて行き、そしてそれが手の屆くだけ延び切つた處で、チョット車の回轉をとめると、今度は忽ち其の延びた糸がクル〳〵〳〵と錘に卷きついて行くのが、如何にも面白く眺められてゐた。私は折々シノ作りの手傳ひをした。それは、一升桝を俯伏せにして置いて、左の手に箸を一本持つて其の上に置き、好い加減に千切つてある綿を取つて其の箸に當てがひ、それを右の手でゴロ〳〵と前後にころがし、そして其の箸を拔くと、前に云つた樣な、細長い綿の管が出來るのである。私は極めて不器用な生れつきであつたが、そうした簡單な作業だけは辛うじて出來るのを、母が笑ひながら褒めてゐた。

食事の時は、親子兄弟が銘々に小いさい箱膳を据へてゐた。父の膳だけは抽出しが附いたりして、特に少し大きく、一番弟の私のは一番小いさかつた。銘々が箱の中から茶碗と皿と箸とを取りだし、仰向にした蓋の上に並べると、母が御飯とおかずを盛つてくれる事は、今日と變りがない。然しおかずは、朝は大抵、漬物ばかりであつた。蕪菜の葉の漬かり加減の奴に熱い飯を包んで食ふ時など、私等はそれを「頬冠り」と呼んで嬉しがつてゐた。若し其の漬物の好きなのが無い時には、私はよく燒鹽をこさへて貰つた。茶碗の底に鹽を詰めて、其の上に炭火を載せ、暫らくしてポンと茶碗をはたくと、錢形の鹽の塊まりが落ちる。それが即ち燒鹽で、生鹽とは違ひ、既に一個のおかずになつてゐた。晝や晩には何か一品のおかずがあるが、それは大抵、味噌汁、湯豆腐くらいの外、內の畑の野菜ばかりであつた。竹の子に唐豆（そら豆）などは、私の一番の好物であつた。魚を買ふ事は極めて稀で、折々口に入るのは雜魚か干鰯くらいであつた。

五　正月と節分

次に正月の事を少し書いて見る。正月の準備は第一に餅つきで、餅つきは實に我々子供に取つて一年中の重大事件であつた餅つきは每年、近處の村の百姓の若い者が組を作つて、士族屋敷を搗いて廻る習慣になつてゐたが、それが私の家には、いつでも大抵、朝暗い中にやつて來るのであつた。ソラもう裏の中村で音がする、この次が向ふの大池で、その次が内だと云ふので騷ぎはじめる。やがて暗がりの中に、どん〳〵火が燃えてゐる竈を二つも三つも景氣よく擔いで來る。それだけでモウ子供

等の氣分は緊張してしまふ。內では餅米を洗うて置くだけの準備がしてある。餅つきの人達は、直ぐに持つて來た臼と釜とこしきとで其の米をふかす。火の勢ひが盛んだから譯なくこしきから湯氣が立登つて米がふかされる。すると人々は、直ぐにそれを臼の中に移す。寒い空氣の中に熱い湯氣が眞白にパツトあがる。臼の兩脇には二人の男が立ちはばかつてゐて銘々に細長い杵を輕々と使つて、ホラサエンヤサと、共にかした米を搗きにかゝる。今一人の外の男は、二つの杵の落ちて來る合間々々に、手をぬらしては臼の中を掻きまわす。其の早業が誠に見事な熟練で、それに伴ふ三人の間の掛聲の呼吸が又、ホラサ、エンヤサ、ドツコイ、エンヤサと云つた風に、子供の心を飛びあがらせるような快活さを感じさせる。やがて合の手の男が『ヨシ來た！』と云つた樣な掛聲を發すると二つの杵はピタリと止まつて、眞白い柔かい餅の塊まりが、つる〳〵と臼の中から攫み出される。すると母は、白い粉を敷いた板の台を搔側に置いて其の餅の塊まりを受取る。受取られた塊は直ぐに其の粉にまぶされて、片はしから小餅にちぎられる。それが又中々の早業である。其の小餅の恰好を直すくらいの手傳は、我々子供もやらされた。其の間、父は何かの指圖をして、小餅が幾臼、のし餅が幾臼、外に豆入、靑のり、東山などの味つけが幾臼、まだ其の外、ぼんせい、柔餅、粟餅などが幾臼と云つた風に、樣々の餅が出來あがる。餅つきの男たちは酢餅か何かで酒をあふつて、元氣よくドン〳〵と歸つて行く。我々は先づ何は置いて、出來たてホヤ〳〵の牡丹餅を食ふ。

正月の第二の準備は、ゆづり葉ともろむき（裏白）とを取つて來る事で、それは我々子供の役目であつた。もろむきは何處にでも直ぐ近處の山にあるが、ゆづり葉は滅多に無かつた。我々は毎年それを宿見の山に取りに行つた。あの葉の赤い、肉の厚い艶のいいゆづり葉が無くては、正月が正月らしく感じられないのであつた。それでゆづり葉ともろむきとが揃つて、輪かざりも拵へられ、大きなお鏡が床の間に据へられ、その外、神棚、竈、臼などにも、それ〳〵小いさいお鏡が置かれると、スツカリ正月らしい氣分が浮んで來る。鴨居の上にある神棚の前に、二枚重ねの白紙が三並びも張られて、それが風に搖れてゐるのも、神々しく見えてゐた。

元日、二日、三日の雜煮のうまかつた事は云ふまでもない。雜煮と云つても、小倉風としては、只だ餅を柔かくゆでゝ、それに出し汁をかけ、靑菜のゆでたのを添へ、花鰹を振りかけるだけの、極めて簡單なものであつたが、我々はそれが正式であることを信じ、又そのアツサリした味ひが眞の雜煮の味である事を

疑はなかつた。そして我々子供は、めい〳〵年の數だけ雜煮餅を食ふ事が原則になつてゐた。

正月の夜は誠にゆかしいものであつた。ゆかしいといふ古めかしい言葉でも使はないと、其の氣分が現はれない。私としては、淸少納言あたりに眞似て、『いといみじ』とでも云ひたいくらひである。先づ神棚に幾つかの燈明があげられる。私の子供心は其の煌々たる光に射ぬかれて、底の底まで淨化されるやうな氣持がした。それから床の間、竈、臼、井戸、便所など、家の內外數個所にも燈明があげられる。但し此の燈明は、神棚のとは違つて、臨時の別製である。即ち、大きな大根を一寸餘りの長さに切つて、其の片面を少しえぐり取つて中をへこませ、そこに油をつぎ、燈心を入れ、そして火をとぼすのである。私は此の大根製の燈明を捧げ持つて、座敷に行き、竈に行き、臼に行き、更に眞暗がりの中の井戸に行き、便所に行つて、恭々しくそれを備へつけて來た時の、一種神秘な、莊嚴な感じを忘れる事ができない。又、臺所の室內に座つてゐて見まはす時、神棚の燈明を初として、座敷にも、竈にも、臼にも、到る處にキラ〳〵とした光のあるのが、近來の言葉で云へば、正に一のイルミネーションであつた。

三日から十五日までの間、小豆粥、七草の粥、黃粉餅、煮入れ（汁粉）など、色々の餅の獻立が珍らしかつた。殊に小豆粥を木の股に塗りつけてあるくのが面白かつた。これは果物のよくみのるまじなひで、私等は茶碗に小豆粥を入れて左の手に持ち、右の手に箸を持つて、栗の木、柿の木、桃の木、梅の木、梨の木、枇杷の木などを歷訪して、『今年もようなつてくれいよ』と云ひながら、小豆粥の餅を少しづゝ箸で千切つて、一々その木の股に捧げるのであつた。

節分の豆まきも面白い事の一つであつた。此の日には儀式として、ダラの木と、とべらの葉とが入用である。ダラと云ふのは、枝の一つもない、只だ一本の棒のやうな幹の先に、くしや〳〵と葉のついてゐる木だが、其の幹の全面に恐ろしい刺が密生してゐるので、それが鬼やらひの役に立つわけだらう。儀式としては、其の幹を一寸づゝくらいに切つて、それを竹串に突きさして、家の出口入口にさして置くのである。とべらと云ふのは、臭い厭な匂ひのする木だが、其の葉を火で焚くと、パチ〳〵パチ〳〵と、爆竹のやうな音を立てる。其の音が矢張り鬼やらひの効を奏するわけだらう。所で、とべらの木は私の內の庭に一本あつたが、ダラの木は滅多にない。只だ一個所、彥德村の川岸にあつたので、私等は每年そこへ切りに行つた。（此ダラの木を私の外の土地で見た事がなかつたが、ツイ昨年、寶塚の

道ばたに澤山はえてゐるのを見た。)扨、ダラもとべらも私等の手で揃へた上で、母がいり豆を拵へてくれる。夕方になつて、私等が室内各處にそれを撒き、或は襖にほうりつけ、或は天井にブツつけして、例の『福ア内、鬼ヤ外』と怒鳴り散らす。それから夜になつて、皆で其の豆を拾ひ集め、めい〳〵に自分の年の數だけ紙に包み、其の紙包みでからだ中を撫でまはす。勿論、健康のまじないだ。それで撫でまはしが濟むと、今度は其の紙包みを襟筋から脊中へ入れて、尻から裾へストンと落す。それで厄が落ちるわけだらう。それから今度は、其紙包みを皆な集めて、一年中使ひふるした火吹竹の中に詰め込む。そして其の火吹竹を棄てに行く。勿論それは私等子供の役だつたが、其の棄て方には面倒な條件があつた。第一、必ず四辻に棄てる事。第二、歸りに後ろを振向いてはならぬ事。私等は嚴重に此の條件を履行しつゝ眞暗い四辻を跡にして脇目も振らず歸つて來るのであつた。

其の外、七夕の事、ちまきの事、大根引の事、芋掘の事など、書けば色々の面白いと思ふ事もあるが省く。

六　私の父

私の覺えてゐる父は既に五十であつた。髮の毛なども既に稍や薄くなつてゐた樣に思ふ。『何さよ氣分に變りは無いのぢやがなア』などと、若やいだ樣な事を云ふて居る事もあつたが、何しろ私の目には既に老人であつた。名は堺得司。

父の顔には可なり多く痘痕の跡があつた。謂はゆるジヤモクエであつた。然し其の顔立は端正で、寧ろ品のよい方であつた。體格は小柄で、而も瘦せぎすであつた。サムライのたしなみとしては、劍術よりも多く柔術をやつたらしい。弓も少しは引いたらしい。喘息持ですいぶん永く寢てゐる事もあつたが、ズツト年を取つてからは直つてゐた。そういふ體質上、力わざは餘りしなかつたが、元來が器用なたちで、よく大工の眞似事をやつてゐた。大工道具はすつかり揃つてゐて、棚を釣る、ひさしを拵へるくらいの事は、人手を借らずにズン〳〵やつてゐた。

學問は無い方の人で、四書の素讀くらひはやつたのだらうが、ついぞ漢學なり國學なりの話をした事がなかつた。只だ俳諧は大ぶん熱心で、後には立机を許されて有竹庵眠雲宗匠になつてゐた。風俗文選などいふ本を態々東京から取寄せて、幾らか俳文をひねくつたりした事もあつた。碁も可なり好きだし、花もちよつと活けてゐた。私も自然、その三つの趣味を受けついでゐる。花の方は、別だん受けついだと云ふ程でもないが、

『遠州流はどうもちつと拵へすぎた樣で厭ぢや。俺の流義の池の坊の方が態とらしう無うてえゝ』といふ位の話を聞いてゐる。そういふ事は多少、私の處世上の教訓にもなつた樣な氣がする。棊について一つおかしい事がある。初めて私の家に棊盤が運びこまれた時、父はそれを餘所からの預かり物だと云つてゐた。然し私等は、いつの頃からか、決してそれが預かり物でない事を知つてゐた。思ふに父は、私等に對して、望むだけの本など買つてやらないのだから、自分の娯樂の爲に金を費す事を遠慮したのだらう。然し私は、それについて何も云つた事は無いし、只むしろ父の遠慮に對して好い感情を持つて居た。

父の俳句に『夕立の來はなに土の臭ひかな』と云ふのがある。これなどは豐津の生活の實景で、初めてそれを聞いた時、子供心にもハハアと思つた。豐津の原にはよく夕立が來た。暑い日の午後、毎日の樣に極つてサーツとやつて來るのが、如何にも好い心持だつた。そして其の夕立の來はなに、大粒の奴がパラパラ〳〵パラと地面を打つ時、濕氣がスウーツと催して來ると同時に、プーンと土の臭ひが我々の鼻を撲つのであつた。『かんざしの脚ではかるや雪の寸』などと云ふのも、私の子供心にそは別だん艶な景色とも思はず、只だ眼前の實景と感じてゐた。『何までも此の友達で花見たし』『菜の花や昔を問へば海の上』『月に立ちて杵のふえるや柳原』など云ふのも覺えてゐる。系統としては美濃派だとか、支考派だとか云つてゐた。然し父の主張としては『俺はもげた句が好きぢや』と云つてゐた。もげたとは奇抜を意味する。ついでに少し後の事だが、私は或る時、父から俳句で叱られた。『我が顏の皺を見て置け年の暮』これには實際ギクリと參つた。

これも後に『明月や疊の上に松の影』といふ古人の句を初めて見た時、成るほどハハアと、私は心の中で手を打つた。曾て其の通りの景色が豐津の家にあつた。そしてそんな時、火を消して其の月影の間に寢ころぶと云つた樣な趣味を、自然に父から養はれてゐたのであつた。

然し父の最も得意とする所は、野菜つくりであつた。私が今、私の少年時代に於ける父の姿をしのぶ時、それは炬燵にあたつてゐる姿か、さもなくば畑いぢりの姿である。殊に、夏中褌一つで、其の前ごをキチンと三角にして、すつぱだかで菜園の中に立つてゐる姿が、今も私の目の前に浮ぶ。五日に一度くらい働らきにくる小六といふ若い百姓男を相手にして、父は有らゆる野菜物を作つてゐた。大根、櫻島、蕪菜、朝鮮芋（さつま芋）、荒芋（里芋）、碗豆、唐豆（そら豆）、あづき、さゝげ、大豆なた豆、何んでもあつた。茄子、ぼうぶら（かぼちや）、人參、

牛蒡、瓜、黄瓜など、固よりあつた。蕪もあり、めうがもあり、唐黍（唐もろこし）もあり、葱もあり、ちしやもあり、らつきよもあつた。

殊に西瓜（水瓜）は父の誇りであつた。あの大きな丸い奴が、或は青く、或は白く、朝の畑に露を帶びて轉がつてゐるのを、私はよく父の尻について檢分に廻つたものだ。苗の時から、花落ちの時からいろ〳〵苦心して育てた奴が、一日々々に膨大して、とう〳〵こゝまで、一貫目以上もあらうと云ふ處まで大きくなつたのだから、父が上機嫌で破顏微笑するのも無理はない。私としても、蟲取の時から父の助手を勤めてゐるのだから、幾分か成功の光榮を分有する權利があるわけであつた。蟲取の時には、粘土を水でネバ〳〵にした奴を茶碗に入れて置いて、葉裏や若芽にとまつてゐる黑い小い蟲を見つけては、其ネバ〳〵を附けた箸の先で、ソツト苗にさわらない樣にして取るのだつた。それから花落の時には、ツケギで立札をして、其の月日を記しておくのだから、凡そ何日間であつたか、それは忘れたけれども、大體成熟の日取になつて、父が小首を傾けながら爪の先で彈いて見る。『コン〳〵カン〳〵と云ふような響の出る間は、まだ少し早い。』『もうアサツテかシアサツテぢやらう』と云ひながら、毎日彈いてゐる中、少しボト〳〵といふ音がして來る。サアもうしめたと云ふので、それをちぎる。大抵の場合、私の主張は父の意見に依つて一日二日延ばされるのであつた。扨それからが大變で、それを食ふ日時が容易に決定されない。アシタにせよとか、アサツテにせよとか、毎日食ふては惡いとかいふ親達の意見に依つて、兎かく私等の即時斷行説が阻止される。それからいよ〳〵日時が決定されると、其日の早朝、或は前夜、其の水瓜を細引でしばつて井につける。午後になつて、私等が學校から戻つて來ると、其の冷えきつた水瓜が井から引上げられて、先づ母の庖刀で眞二つに切られる。グウ、グウといふ音がして庖刀が水瓜の胴體に食ひこんで行く時、果してそれの赤いか否か一刻も早く見究めようとして、私等が息を殺して覗きこむ。『オ！赤いぞな！』と母が先づ希望の叫びを揚げる。やがてグウ〳〵、ザク〳〵と、其の胴體が一個の半球に切り割かれた時、『ほう！見事ぢやのう！』と父がサモ嬉しそうな感嘆の聲を發する。其の中、半球が更に二つに割かれて、ザクリ、ザクリと、赤い山形が續々と切り出される。私等は物をも云はずに、行きなりそれにかぢりつくのであつた。只一つ私の不滿で堪らないのは、父母が馬鹿念を入れた、腹下しの用心からして、ついぞ一度も、思ふ存分、食はせて呉れなかつた事である。

水瓜について一つおかしい話がある。お隣り——と云つて

も、裏の松山の間の小道を二十間ばかりも行つた處だが——其のお隣りの中村といふ家では、どういふものか水瓜を作らない。あそこの嫁孃は水瓜が大好ぢやぢやちうのに一度も食べんで氣の毒ぢやと云ふので、或日の水瓜切りの時、母が其の嫁孃を呼んで來た。嫁孃は大喜びで散々食べて行つた。所が、其の嫁孃、丁度臨月であつたのだが、其の晩、急に産氣がついた。サア私の内では大心配をした。水瓜が當つたのではあるまいか。若しかそうだとすると申譯がない。餘計の事をせねば好かつた！。殊に母は、氣が氣でなく騒いでゐた。然しお産は幸ひに無事で、好い女の子が生れたので、水瓜は却つて手柄をした。

父は又、野菜作りばかりでなく、屋敷内に竹林を作り、果樹をふやし、花物を植ゑつけ、接穗をするなど、いろ／＼計畫を立てゝ實行した。茶の木も少しあつた。煙草の少し作られた事もあつた。蓮池の計畫もあつたが、これは實現されなかつた。珍らしい物としては、甘茶の木だの、三叉の木などがあつた。桑の木の事は後に記す。

父は煙草も好き、酒も好きだつた。晩酌の一合ばかりを、ちしやの葉に味噌をくるんで頰ばつたりしりながら、ちび／＼やるのが餘程の樂しみであつたらしい。いよ／＼飯の菜や酒の肴のない時には、いたら貝か何かに菜漬を入れて、鰹節を少し振りかけて煮るのが父の發明で、それを「煮菜」と呼んでゐた。『貝の香物でも、こうして煮ると皆が好くけえ、これは煮菜ぢやなうて煮ずきぢや』などゝ云つて面白がつてゐた。

父は律義な人であり、正直な人であり、キチンとした小心の人であつた。そして多くの場合、機嫌の好い人であつたが、どうかすると可なり不機嫌の時もあつた。私としては、或る時、意外な事で叱られた事がある。それは、私より二つばかり年上の、少し裕福な家の友達が詩を作つてゐるのを見て、私も眞似がしたくなつて、たしかそれに關する雜誌が買ひたいとか何とか云ひだした處が、そんな事を見習ふほどなら、あんな友達とつきあふのをやめてしまへと、散々にきめつけられた。私としては、金が無いから買つてやれぬと云はれるのなら、少しも不平など起さぬ積りであつたが、友達とつきあふなと云はれたのが不平で堪らなかつた。然し父は其の後、東京に行つてゐる兄の處に云つてやつて、『作詩自在』といふ小さい本を取寄せてくれた。私は又、その事件のつゞきであつたかどうかは忘れたが、その頃、父から横面を平手で烈しくぶたれた事がある。私が餘ほど惡たれた事でも云つたからではあらうが、私としては、悔しくて悔しくて、ずいぶん永いあいだ泣いた樣に思ふ。そして一生涯、其の不愉快の感じが幾らか殘つてゐた。

又、私は父に對して斯ういふ滑稽な不平を持つてゐた。私は犬が好きで、途中で犬に會ふと、口笛を吹いてやつたり、頭を撫でてやつたりして、仲好しになつてしまふ。そして結局、内まで連れて歸つて來る。所が、せつかく内までついて來た奴に對して、何等の愛嬌をする事が私に出來ない。私はそれが堪らんほどつらい。私としては、餅の一片なり、飯の一塊まりなり食はせてやりたい。然しそれは父から禁じられてゐた。そんな癖をつけると、いつか其の犬が内の犬になつてしまうて困る、と云ふのであつた。貧乏士族の生活としては、犬一疋の食ひ料も問題であつたに相違ない。だから私も勿論、犬を飼はうとは云はない。又必ずしも毎度飯をやらうとは云はない。そこで私は父と協定して、犬のお客のあつた時には糠を一にぎりだけやる事にしてゐた。所が、それすらも父は餘り喜ばなかつた。思ふに父は、糠の一にぎりを惜しんだわけではなく、犬の愛に溺れさうな傾きのある私の性情を危ぶんだのだらう。然し父も、毎晩の食事時に必ずやつて來る習慣になつてゐた隣家の犬に對しては、黒、黒と云つて、鰯の頭など投げてやつてゐた。

然し私は又、深く父の寛大に感じてゐる事がある。或る時、私の家に東京の親類から『鶴の子』といふ結構な菓子の箱が送られて來た。一つだけ貰つて食つた時、おそろしくうまかつた。その後も欲しくて堪らないが、中々貰へない。あんな結構な物をムザ〳〵食ふものではないと云つて、父はそれを部屋の高い棚に上げてしまつた。それから幾日たつた後の事か知らんが、父も母も何處かに行つて、私ひとり内に居た。フト惡心を起して、踏台を持つて來て棚の上の鶴の子を取つた。勿論たつた一つだつた。露見するかどうかと樣子を窺つてゐたが、誰も何んとも云はない。そうこうする中に、又機會があつて又一つ取つた。とう〳〵三つ取り、四つ取り、五つ取つた。もういよ〳〵露見しない筈がない。幾ら年寄がぼんやりでも、五つも不足してるのに氣のつかん筈がない。困つた、困つたと思ひながら、又幾日も幾日も過ぎたが遂に誰も何んとも云はなかつた。結局、その事はそれきりで、年寄などゝいふ者は隨分馬鹿な者だくらいに考へてゐた。そして、ズット後になつて、私が自分の淺はかさに思ひ當つて、今さら冷たい汗を流したのは、父も母も亡くなつてしまつてからの事だつた。

今一つ、私は父の机の抽出しから一圓紙幣を盗んだ事がある。その頃の一圓は少なくとも今の十圓の値打があつた。子供としては大金であつた。私は直ぐにそれを持つて町に行き、新店といふ店で、唐紙と白紙をたくさん買つた。たくさんと云つても五錢か十錢かだつたらう。そして釣がないからと云ふの

で、代は拂はずに歸つた。唐紙と白紙を買つたのは、その頃、少し文人風の書畫の眞似をやりかけて居たからであつた。所が二三日後の或日、母が私を連れて座敷内を歩いてゐた。何か母が私に云ひたい事があつたのだと直感された。私は非常におそろしくなつた。然し母の態度は平生よりも柔しかつた。竹藪の片わきの、梨の木の下に來た時、母はいよ〳〵口を切つた。『利さん、ひよつとお前は――』サア來たと私は思つた。然し母は非常に柔しく、非常に遠慮がちに、『ひよつと』『ひよつと』を繰返して、そうならそうで仕方がない決して叱りはせぬから、兎にかく素直にそれを出してくれと云つた。私は非常な慚愧を感じて、一も二もなく兜をぬいだ。父はそれについて、遂に一言も云はなかつた。

ついでに今一つ私の盜みを書きつけて置く。その頃、錦町の或る小間店で、私は人のそばで遊んでゐる樣な振をして、柄のついた小い虫眼鏡を一つ盜み取つた。それを通して物を見ると、何んでも素晴らしく大きく見えたので、面白くて仕樣がなかつた。然しそれを友達に見せて自慢する事も、一緖に面白がる事も出來ないのが、非常に殘念だつた。同時に、若しか露見しやせぬかといふ恐怖が盛んに起つて來た。もうそうなると、只それを持つてゐる事だけが大變な苦勞で、毎日々々どうしたものかと心配してゐた。いつそ元の店に持つて行つて返さうと決心した。然し氣がつかれない樣に返すといふ事が亦た大變だつた。そうこうする中、幸ひな事には、或日何處かでその虫眼鏡を落してしまつた。それを落したと氣がついた時、私は實にホットとして安心した。

七　私の母と兄

私の母、名は琴、志津野氏、父より二つの年下で、父に取つては後添であつた。父の初の妻は小石氏で、私の長兄平太郞を殘して死んだ。其あとに私の母が來て、私の次兄乙槌と私とを生んだ。私の母が私を生んだのが四十二歲の時、兄を生んだのが卅八歲の時だつた筈だから、思ふに母は卅六七歲の時、堺家にとついだものだらう。

斯樣に母はずいぶんの晩婚であつた。それには理由がある。尤も、そんな事は、私が大人になつてから獨りで自然に考へついた事で、誰に話を聞いたのでもなく、又少年の頃は全く何の氣もつかずに居た事である。母は甚だしいジヤモリエであつた。その頃の人としては、『キンカ上品、ジヤモ柔和』といふコトワザがあつた位で、一通りのジヤモなら、一向問題にならなかつたのだが、母のジヤモは可なりひどかつた。鼻の穴が片方

は殆んど塞つて居り。鼻筋は全く平らに押しつぶされてゐた。

女としてさういふ顔容になつた以上、先づ嫁入りは六かしい筈である。只、私の父が女房に死なれて貧乏世帯に子供をかゝえて當惑した時、そこに略ぼ双方の境遇が平均したものと考へられる。その外にどういふ事情があつたのか、私は少しも知らない。

何んにせよ、母の晩婚の理由がその容貌上の大弱點にあつた事は確かだと思ふ。然し、さういふ差引算用の結婚が必ずしも夫婦の愛を害するものではなかつた。又さういふ見苦しい晩婚の女の腹から、二人の立派な(!)男の子が生れるのに、何等の差支がなかつた。又その生れた子供が、母に懐き、母にすがり、母を慕い、母を愛するのに、其の母の醜い容貌が何等の妨げにもならなかつた。實際、醜いと感じた事すらなかつた。

然しかういふ事があつた。或日、私が鳥わなの見廻りか何かに行つて來ると内には母が只つた一人で炬燵にあたつてゐた。其の顔が餘程變に、私に見えた。白毛まじりの髮が亂れかゝつてゐる處など、物凄いやうな氣がした。若しかこれが、狸か何かが來て母を喰ひ殺して、其の代りに化けてゐるのではないかと、私は思つた。然し母がやがて笑ひを含んで話しはじめると、そんな怪しみなど勿論すぐ消えてしまつた。私としては若い美しい母などゝいふものは、ついぞ考へた事もなかつた。

母は平假名以外、殆んど文字といふものを書いた事がなかつた。而し耳學問は可成りに出來てゐた。里方の志津野家が少し學問系統の家であつたのと、三十幾つまで行かず後家の境遇にあつたのとの爲だらう、浄瑠璃とか、草雙紙とか、軍談とか云ふ様な物には、大ぶん聞きかじりで通じてゐた。私等を教訓する時、よく浄瑠璃の文句が引き言にされてゐた。さういふ意味から云へば、私等は、父の方からよりも、母の方からヨリ多く教育されてゐた。

母は又、憐みぶかい性質であつた。折々門に來て立つ乞食のたぐひなどに對して、いつも温い言葉をかけてゐた。猫を可愛がる事も、私は母から教へられた様な氣がしてゐる。母は不器用なたちで、風流と云つたような、氣のきいた點は少しも無かつたが、それでゐて自然の美に對する素朴なアコガレを持つてゐた。例へば、活け花などゝいふ物に對しては、母は殆んど何の感興をも持つて居なかつた様だが、山や川などに對しては『おゝえゝ景色ぢやなア』などと、覺えず感嘆の叫びを發したりする事があつた。そして、私は、母の感嘆の叫びに依つて、自分の目が開いたやうな氣がしてゐる。

母は又、すこしばかり和歌をやつてゐた。これは只、里方に

於ける周圍から自然に養はれた事で、母にそういふ才能があつたとは思はない。然し、父の俳句と、母の和歌とが、私の家庭に於ける一つの面白い對立であつた。或時など、母が俳諧趣味のり取とめなさを指摘すると、父は和歌に面白味のない事を批難するといふ、文藝的論爭の起つたことがある。

それから父は、俳諧の歌仙つけあひの實例を擧げて、其の細かな心持や面白味を懇々と說き立てたが、母にはとう〳〵何の事やら分らなかつたらしい。お蔭で私には初めて少し『つけあひ』といふものゝ味ひが分つた。然し又こういふ事もあつた。維新の際、小倉藩の志士何某が京都で讀んだといふ和歌に『幾十度加茂の川瀨にさらすとも、柳は元の綠なりけり』といふのがあつた。所が和歌の先生は、上の句の『とも』に對して、下の句の結びは『なるらん』でなければ結に合はぬと云つて、左樣に添削したが、作者自身としては、たとひ將來のことゝは云へ、少しも疑ひのない堅い決心であるから、『なるらん』などゝいふ生ぬるい言葉はいさぎよくないと云つて、飽くまで『なりけり』を固持してゐた。父と母とが此の話をしあつた時、二人の意見は全く一致して、深く作者の意見に同感してゐた。

父と母とが面白くない言ひ爭ひをしてゐた（と云ふよりは寧ろ滑稽な）のを一つ覺えてゐる。母も煙草が好きで、よく長煙管でスパ〳〵やつてゐたが、例の不器用なたちとして、其の火皿に刻みを詰める時、指先きでそれを丸める事が足りないので、長い刻みの尾が煙管の先きにぶらさがつてゐる事が每度であつた。或る時、父はそれを見るに堪へなかつたのだらう、如何にも忙々しさうな、噛んで吐き出す樣な口調で、其のだらしなさを罵倒した。すると母もムツとして、それが自分の生れつきである事、五十年來の習慣である事、今さらそれを批難されても仕方のない事などを、すれた言葉でブツ〳〵と返答をした。此の爭ひに對しては、私は子供心にも、深く兩方に同情をした。

或年の春、つゝじの花の盛りの頃、裏の山の裾にござを敷いて、そこに夕めしのお膳を持ちだし、母の自慢のえんどうまゝで、父は例の一合を樂しみつゝ、つゝじ見の小宴を催した事がある。それからは父がアヂをやつたのであるか、それとも母の思ひつきであつたのか知らないが、兎にかく私には嬉しい一家の親しみであつた。又、父と母とは、ジヤモクエの年寄夫婦にも似ず――或は無邪氣な年寄夫婦らしくと云つた方が却つていいかも知れぬが――或時など、木箱に竹の棒を突きさして、それに紙を張り、糸をつけて、三味線のおもちやを拵へて見たりしてゐた。然し其おもちやでは滿足が出來なかつたと見えて、

後にはお隣りから本物を借りて來て、二人でツン〳〵云はせてゐた事もある。其の歌、『高い山から谷底見れば』『擂り鉢を伏せて眺めりや三國一の』などは敢て奇とするに足りないが、『芝になりたや箱根の芝に、諸國諸大名の敷き芝に、ノンノコセイセイ』などの古色に至つては、蓋し讀者の一粲を博するに足りるだらう。

母は滅多に外出しなかつたので、たまに前の山に千振摘などに行く時、私等はそれを大變な珍らしい事の樣にして、其あとについて行つた。母は千振を摘んでは蔭干にして置いて、毎朝それを茶の中に振りだして飲むのであつた。千ぺん振つてもまだ苦いと云ふのが恐らく其の名の出處であらう。私もいつか其の眞似をして、あの苦い味ひを、何か少し尊い物の樣に思つてゐた。後に私が人生の或る事件を批評する時、『苦底の甘味』といふ言葉を用いた事があるが、それは千振の味に思ひ當せたのであつた。又千振といふ草のツイ〳〵と立つてゐる姿、あのさゝやかな白い花の形などが、何とも云はれぬしほらしさを私に感じさせた。そして、それも恐らく、母から開かせられた目の働らきであつたらうと思ふ。

或日、母が珍らしく裏の山にナバ（茸）を取りに出た。兄と私とが嬉しがつて其の前後に飛びまはつた。すると猫も跡からやつて來て、手柄顏に高い松の木に駈けあがつたりした。『猫までが子供と一しよに湧きあがる！』と、母は面白さうに其の姿を眺めてゐた。湧きあがるとは、好い氣になつてふざけ散らすと云つた樣な意味。私は、前にも云つた通り、母に教へられて大の猫好きであつたが、母が毎度話して聞かせた所によると、私の幼い頃キヂといふ猫が居て、それが若樣に對する老僕と云つた樣な格で、一度私の手に掛ると、丸で死んだ樣になつて、叩かれ樣と、攫まれ樣と、引きずられ樣と、自由自在になつてゐた。然し次の猫は、それほどのおもちやにならなかつた。彼は冬になると、私の寢床で寢るよりも、母の寢床にはいる事を選んだ。けれども、私が是非とも彼を抱いて寢る事を主張するので、母はいつも、彼を連れて來て私の寢床に入れて、蒲團の外から叩きつけるのであつた。すると彼も往生して、私の寢入るまでジツトそこで我慢し、あとでソウツト母の方に行くのであつた。

母は又、觀音樣信仰で、毎晩お燈明をあげては、口の中で觀音經か何かを誦しながら拜んでゐた。そして毎月十七日の晩には、必ず錦町の觀音堂に參つた。私も必ず其お供をした。その晩、觀音堂では、三十三體の觀音樣に一々燈明を供へて、如何にも有難さうに見えてゐた。私は、（後に記す通り）佛教に對

しては餘り同情を持たなかつたが、母の故を以て新菅様は少し好きだつた。

今一つ母についての思ひ出。これは餘ほどまだ私の小さい時の事。私が炬燵の中で、――母と私とが一緒に寢る廣い寢床の中で――目をさますと。母は既に起き出でゝ竈の前で飯を炊いてゐた。私が何か云ふと、『起きたかな、お目ざましをあげよ』と云つて母は竈の熱灰の中に埋めて置いた朝鮮芋を取りだして、其の皮をむいて持つて來て吳れた。黄色い美しい芋の肉から白い湯氣がポカ／＼と立つてゐた。どうして、こんな光景が、特に私の記憶に殘つてゐるのか分らないが、恐らく其の蒸し燒の芋の味が特別にうまかつたのだらう。

今一つ、これは私が母に對する唯一の反感。或る時、私が何かの事で、さん／＼母にグズつてゐた。母も大ぶん怒つて私を叱つてゐた。すると、母は丁度お膳ごしらへをしてゐたのだが、とつぜん醬油つぎを引つくりかへした。赤黑い醬油がたくさん膳の上にこぼれた。母は慌てゝそれをツケギで掬ひ取るやら、其のあとを雜布で拭くやら（恐らく父に内證にするため、大急ぎで）してゐたが、『こんな事になるのも お前があんまり云ふ事を聞かんからぢや』と又私を叱りつけた。私は非常に不平だつた。私が云ふ事を聞かんのは惡いだらう。然し、醬油つぎを引つくりかへしたのは正に母のそゝうである。自分のそゝうの責任を私に塗りつけるのはひどい。私はそんな意味で大いに憤慨した。我が尊信する母、我が敬愛する母と雖も、腹立ちまぎれには、矢つ張りこんな勝手な事を云ふのかと。

考へて見るに、私は父と母とから、丁度半々づゝくらい、性質を遺傳したらしい。體質の方では、父も小いし、母も小いしそして私も小いのだから、文句はない。然し、私が小いながら稍や頑丈な處があるのは、母の方から來たのかとも思ふ。母は强いといふ方では無かつたが、母の弟たる『志津野のおぢさん』などは、ずいぶん大きな、しつかりした體格であつた。性質の方では、私に多少の才氣があつたのは父の方から來たのであり、幾らか學問好きで、そして少しゆつくりした樣な處があるのは、母の方から來たのだと思はれる。私は大體に於いて善良な正直な男だと信じてゐるが。それは正に父母兩方から來てゐる。若し私に、けちくさい、氣の小いさい、小事にアクセクするといふ處が著しく現はれてゐるとするならそれは父の方からの缺點である。若し又私に、不器用な、不活潑な、優柔不斷な處が大いに存在してゐるとするならば、それは母の方からの弱點である。

母の家には昔し大きな蜜柑の木があつたが、その蜜柑が熟す

る頃になると、母の父（即ち私の祖父）は、近處の子供を大ぜい集めて、自分は蜜柑の木の上に登つて、そこから蜜柑をちぎつては投げ、ちぎつては投げ、そして子供が喜ぶのを見て面白がつてゐた。私はそんな話を、花咲爺の昔し話と同じ様に聞いてゐたのだが、又どこやらに只の昔話とは違つて自分の祖父にそんな面白い人があつたといふ誇りを感ずる點があつた様に思ふ。

父方の祖父については、私は何の知る所もない。思ふにそれは、祖父が早く死んだので、幾許も父の記憶に殘つてゐなかつた爲だらう。父方の祖母は可なりシツカリした婦人であつたらしい。早く夫に別れて、年の行かぬ子供を守り立てゝ行つたのは、容易な事でなかつたらう。その頃、江戸に行つてゐた私の父に對して、國元の祖母から送つた手紙が一通、私の手に殘つてゐるが、其の筆跡も中々達者だし、文句もずいぶんシツカリしてゐる。又、祖母の妹（私の父の叔母、私の大叔母）は、私もよく知つてゐたが、これが中々只の女でなかつた。變屈者、やかまし屋として、あちこちで邪魔にされた場合もあつた様だが、私から見ると、ずいぶん面白い所のある、好いおばさんであつた。この人が大阪から私の父によこした手紙が殘つてゐるが、『黄粉が食ひたらうても粉がなうてでけぬ、今度來るなら粉を持つて來ておくれ、うんちんはおれが出す』と云つた調子である。明治廿一年に、八十に近いお婆さんが、大膽な言文一致體で手紙を書いてゐたのである。これらの事も、私に取つては、確かに多少の誇りであつた。

八　私の兄

長兄平太郎。これは私より十五の年長で、私に物心のついた頃には、モウ廿歳以上の大人であつた。私は彼に對して、自分と同列の子供といふ感じは持てなかつた。彼は『大けいアンニヤアさん』として、私等とは時代の異なる人物であつた。彼と私等と、母を異にしてゐるといふ事を、いつ私が知つたのか、その覺えは少しもないが、兎にかく彼と私等とは何となく兄弟としての親しみが十分深くなかつた様に思ふ。

それには氣風の違ひといふ事もあつたか知れない。彼は色の白い小男で、丸々と淳くふとつてゐた。そして濃い髭を青々と剃つてゐた。小心で正直で、律義で、キチヨウメンな事は、よく父に似てゐた。學問とか文藝とかいふ方面は、殆んど彼に無かつた。それに比べると、色の淺黑い、少し野性のある、學問文藝を嗜む二人の弟は、大ぶん違つた柄であつた。小作のおぢさんといふ人がいつか私の内に來た時、私は其の大きい目と、

丸い顔とが、よく『大けいアンニャアさん』に似てゐると思つた。然し私等は長兄に對して少しも惡い感じなど持つてゐるのでは無かつた。母と兄との間柄も、繼母繼子らしい厭な所は少しもなかつた。

兄は早くから多分（明治十年頃）東京に出た。親戚の間宮のおぢさんが陸軍の會計吏をして居るのをたよつて、陸軍十六號出仕といふものになつたりしてゐた。それがどういふわけか、明治十五年頃には、國に歸つて來た。思ふに、長男として家事を視るの責任を持たされたのだらう。其の時の事を私はハツキリ覺えてゐる。錦町の裏に人力車が一台見えた。やがて客がそれからおりて車夫を連れて細い坂道を私の家の方に降つて來た。そこから私の家に來るには、淺い谷を降つて、そして又少し昇るのだから、車は通れない。その客は兄であつた。兄は紺飛白に絽の羽織か何かキチンと着て、麥藁帽をかぶり、駒下駄をはいて戻つて來た。そして坐敷の縁側からズカ〳〵あがつて來て先づ父に向つて『細かいのがあるなら』と云つて、何がしかの金を取つて車夫に渡した。彼は蓋し一文なしになつて辛うじて歸つて來たのであつた。

兄の歸國に依つて私は初めて少し東京の風に吹かれた。兄がはだかになつて、眞白いからだにフンドシ一つで、初めて裏の菜園畑に出た時、『イョウ！大變によく出來てるなア』と云つた様な、驚嘆の聲を發したが、其の『大變に』が私の耳に甚だしく異様に響いた。後に父も母も其の事を云つてゐた。私は又、香水といふ物を初めて知つた。それは燗德利の細い様な硝子壜にはいつた青い色の液體で、栓のコルクに細い竹の管がさしてあつて、其の管から中の液を少しづゝ振りだして、頭の髪にかけるのであつた。プーンと好い匂ひのするものであつた。私は又、レモン水（？）といふ物を初めて飲んだ。ブリキの罐の中に、小い壜と白い砂糖とがはいつてゐて、其の砂糖を水に溶かし、其の壜の液を二三滴入れるのだつたが、それの甘酸いゝ味が、何ともかとも云はれぬほどうまかつた。

兄は東京で簿記法を學んで來たと云ふので、直ぐに大橋（今の行橋）の銀行にはいつた。間もなく銀行の本店が小倉に移つたので、兄も小倉詰になつた。兄が小倉から豐津に歸つて來た時私は父と母とに指嗾されて、兄に一つ買物をねだつた。其の買物は何だと問はれて、私は干鰯と答へた。兄は餘ほど意外らしく、大笑ひをして早速承諾してくれた。實は、私の辨當のおかずが無いので、母が毎日困りきつてゐるのであつた。

兄は明治十六七年頃、結婚した。小倉の依川といふ士族の娘を貰つたのであつた。豐津に移つて來ない士族もずいぶんあつ

たものと見える。婚禮の式は豐津の家で擧げられた。其の翌年學校の夏休みに、私は暫らく小倉の兄の家に滯在した。昔の城下、都會らしい都會を初めて見た。川口に沿うた、石垣の嚴めしい城あとが、新らしい兵營になつてゐた。其の時、兄は私に少しばかり簿記法を教へてくれたが、私は町で『風來山人春遊記』といふ漢文の本を買つて來たりした。

次兄乙槌。私より五つの年長で、私は彼の事を『こまアニヤアさん』と呼んでゐた。彼は私よりも餘ほど多く母方の血を遺傳してゐたらしい。彼には小心な謹直な所がなかつた。彼は少し疎大であつた。私はそれを多少の英雄式として子供心に崇拜してゐた樣に思はれるが、後にはそれが放縱な文人風にとれてしまつた。

私が山で兄と遊んでゐる時、紙がないのに大便がしたくなつて困つた事がある。すると兄は、帶に石をはさめと、私に教へた。帶に石をはさめばすぐになほると、彼は云つた。それが神功皇后三韓征伐の時の故事から來た、一種のまじなひである事は後に知つたが、さういふ場合、彼は多少、『權威ある者の如く』語るのであつた。少なくとも、私にはさう感じられた。その後、又同じ山で、今度は紙があつて用を足したが、手を洗ふ水の無いのに困つた。手を洗ふといふ習慣を直ちに全く無視する事は、氣の小さい私に出來かねた。すると兄は、芒の葉を三枚重ねて、それを短かく千切つて撒けと教へた。さうすれば汚れが去つて清淨になると、彼は云つた。私は其の通りにして、それで氣が濟んだ。

然し私は一度、兄と面白い爭ひをした事がある。私等は毎日學校から戻つて來ると、必ずカキモチを燒いて食ふのであつた所が兄は兎かく、火おこしから燒方まで、私にばかり面倒を見させて、自分は何んにもせずに食はうとする。それを私が厭がつて、自分の燒いただけを嚴重に自分の物にして、彼に取らせない事にすると、彼は今度は仕方なく、私が燒いてしまふのを待つてそろ／＼其の跡の火で自分のを燒く事にした。私はそれを馬鹿らしく感じた。それで或日、私は改めて兄に談判した。どうせ二人で使ふ火だから、おこす時にも二人で一緒におこさうではないか。サア少し手傳つてくれと。然し兄は應じなかつた。俺は今日は食ひたくない。彼はさう云つた。仕方がないから私は矢張り、獨りで火をおこして獨りで燒いた。すると、どうだらう、彼が矢張り、のこ／＼やつて來て、其の跡の火で燒きかける。私は大いに憤慨して其の不正をなぢつたが、彼は平氣で、火が來てゝあるから使ふのだと、濟ましてゐるので、仕方が無かつた。翌日、私は又、彼に火おこしの協力を求めた。

母も口添をして、一緒におこせと彼に勸めた。然し彼は依然として應じなかつた。そこで私は決心した。默つて獨り火をおこして、自分の焼くだけ焼いてしまつて、其の跡の火を水をかけて消してしまつた。これは私の家では有名な事件で、後々まで母がよく、（兄弟二人の性質の差を示すものとして）、其の話をしては笑つてゐた。

或る時、私の家の近處の山で、子供連の間に、旗の取りあひの合戰があつた。兄が十五、私が十くらいの時でもあつたらうか。先方の大將は誰であつたか忘れたが、私の方の大將は私の兄であつた。兩軍ともそれ〴〵本陣へ旗を立てゝ置いて、先づ甲軍が乙軍を襲撃し、次に乙軍が甲軍を襲撃し、そして旗が取られた方が負けといふ一般方略であつた。そこで我々の方は甲軍として先づ乙軍を襲撃した。敵の本陣には、五色の紙を段々に繼ぎ合せた美しい長い旗が、小松の間に立てゝあつた。私は小いさいので組打をすれば誰にでも負ける。それでも相手には可なり大きな奴を選んだ。勿論すぐにねぢ伏せられた。然し、幾らねぢ伏せられても、下から其奴にしがみついてさへゐれば、私の力で一人の敵將を食ひとめる事になる。それが私としての戰略であつた。それで私は自分以外にどんな合戰が行はれたか丸で知らなかつたが、兎にかく味方は安々と敵の美しい旗を奪つてしまつた。それから今度は敵軍は我々の本陣に攻め寄せた。所が、我々の本陣には旗らしい物が見えない。敵は見當がつかないで困つてゐた。よく見ると、反古紙を引裂いた樣な物が、小高い木の上に結ひつけてある。敵は漸くそれを目がけてやつて來たが、木の上ではちよつと近寄れない。勇を皷して其の木に登りかける奴があると、下から足をつかんで引ずりおろす。敵はとう〳〵我々の旗を取り得ないで、負になつた。かき餅の一件では腹が立つても、こんな事を見てゐると、『こまアンニヤさん』に對する私の敬心が湧かざるを得なかつた。

彼は數學にかけては丸で駄目だつた。代數も幾何も落第點ばかり取つてゐた。其の代り文章は得意だつた。彼は文章に於て正に私の師であつた。彼は又、詩も作つた、歌もよんだ、字もうまかつた、字は文徴明を習つて、よく似せてゐた。蘭だの、菊だの、四君子だのと云つて、文人畫も少しはやつてゐた。中學校に演説の會があつたが、彼は其の演説の中で、黄鳥（校長）が黄い聲を出して云々といふ、不穩な言辭を弄した廉に依つて、演説停止の處分を受けた事がある。

明治十五年、彼は本吉家の養子になつた。本吉家は矢張り豐津の士族で、そこにはお浪さんと云ふ、器量よしの獨り娘があつた。但しお浪さんが十四、彼もまだ十八といふ歳だから、直

く結婚したわけではなく、彼は暫らくお浪さんの『おあにさん』であつた。

彼は中學校を卒業した後、英語を學ぶ爲に、福岡に行き、長崎に行つた。本吉家では彼を遠方に出す事を好まなかつたのである。若い者は旅に出たがる、老人はそれを出しともながる、それが其の頃の一般の有様であつた。然し彼は結局、強いて養家の許しを求めて、明治十八年東京に遊學した。

彼は其の以前、既にお浪さんと夫婦になつてゐた。お浪さんは『おあにさん』といふ呼方を改める事が出來ないで困つてゐた。其の婚禮の晩に一つの面白い事があつた。丁度、酒宴の央に、雨戸が破れるかと思ふほど、盛んに石が飛んで來る。總て婚禮に對しては、石を投げるのが土地の習慣で、それがお目出たいとしてある。然し、それにしても餘んまり烈しすぎると云ふので、誰かゞ飛びだして叱りに行くと、バラ〳〵と若者の一群が逃げだす。逃げおくれた一人を引捕へて、ふざけ半分酒宴の席に引きずつて來ると、それは兄の極く親しい友達であつた。それから大笑ひになつて皆が寄つてたかつて酒を強いつけると其の人は恐縮して、ほう〳〵の體で逃げて行つてしまつた。

九　私の親類

次に私は堺家の主なる親類を略叙して見る。

唐瀨。これは父の弟が養子に行つた家。叔父の名は三津留。豊津から一里ばかり離れた、祓川の上流に沿ふた、節丸といふ農村に住んでゐた。叔父は父と同じく脊は低くかつたが、父とは違つて肩幅が廣く、甚だ頑丈に見えてゐた。父に比べると、遙かに粗野な、樸直な、いつも大きな口に齒を見せて機嫌よく笑つてゐる、好人物であつた。漢學のたしなみが少々あつたので、小學校の先生になつてゐた。小男には成るべく大きな女を女房に持たせんと、子供が小さくていけん、といふのが父の意見であつたが、父はそれを自分に實行する事が出來ないで、せめて叔父の爲にはと云ふので、色々苦心し奔走して、大女を嫁に貰つた。其の人は不幸にして早く死んだが、其の子供（私と同年のいとこ）は、私よりズット脊が高かつた。この叔父が又、父に宛てた手紙のうちに、折々片假名で『アリマス』などゝやつてゐた事を思ひだす。昔でも率直な氣持の人は、しぜん言文一致になつてゐたものと見える。

浦橋といふ家に娘が三人あつて、それが堺と、森友と、間宮とに嫁いでゐた。堺に嫁いだのが即ち父の母（私の祖母）で、

森友に嫁いだのが即ち前に書いた父の叔母である。それで此の四家は親類であつた。私の物を覺えた頃、浦橋家は既に大阪に移つてゐた。浦橋のおぢさんは大阪で役人になつてゐると聞いてゐた。同時に、間宮のおぢさんは（前にも記した通り）東京で陸軍に務めてゐると聞いてゐた。或る日、私が間宮へ行くとその子供達が、東京のお父さんから送つて來たと云つて、靴だの、帽子だの、色んな物を見せたのが羨ましかつた。

森友家については、いろ〳〵話がある。父のいとこになる當主の力藏といふ人が、何か藩の勤め向の事で切腹した。餘つぼど思ひつめたものと見えると、父が後に話してゐるのを聞いた。私は此の切腹の話を非常に壯烈に感じて、見たこともない力藏といふ人を非凡人として想像してゐた。私の内に、力藏さんが唐詩選を書いた習字手本が一冊あつたが、私は其の雄健な高邁な書體に對して、敬慕の念を禁じ得なかつた。その後、森友家には養子をして、其の人は海軍の士官になつた。力藏さんの弟は侗（たけし）と云つて、これは浦橋家の養子になつて居り、侗さんの姉はおきのさんと云つて、同苗森友に嫁いでゐた。當時は親戚間の重縁がずいぶん多かつた。此おきのさんといふおばさんは折々私の内に遊びに來たが、何處となくシッカリした人で、炬燵にあたりながら私に八犬傳の話などしてくれたりした。此の人が、私の少年時代に接觸した、一番教養のある婦人だつた。森友のおばあさん（父の叔母）は、後に此おきのさんの處に行つてゐたが、そこは豐津と大ぶん離れた、昔しの支藩と云つた樣な處だつたので、おばあさんは折々、私の内に泊りがけでやつて來た。其の度に、いつも麥饅頭の竹皮包をみやげに持つて來てくれたのが嬉しかつた。それに私は此おばあさんが、福々しい顏をして、そして何となく、世間並でない處のあるのが好きで、いつも力藏さんの墓參りのお供をするのを喜んでゐた。

母の里方の志津野。こゝは母の弟の範雄といふおぢさんが家を繼いでゐた。母は此のおぢさんの事を『群三々々』と呼んでゐた。元、群三が通り名で、範雄が名乘であつたのを、明治になつてから範雄を本名にしたのだらう。（ついでに、父の名は得司だけれども、實印には正陳といふ名乘が彫つてあつた。長兄には正民といふ名乘があつた。又、廣瀨のおぢさんの事を、父はいつも『半之丞』と呼んでゐた。これは幼名だらう。）志津野のおぢさんは、口數の少い、ドッシリした人で、鼻の兩側に深いひだがついてゐたのが目についてゐたが、冒險的な事業をはじめて大失敗をやつた。其の事は後に話す。

外に今一軒、志津野があつた。前の志津野は錦町一丁目の裏

に在り、後の志津野は二月谷といふ處に在つた。この二月谷志津野の當主は母のいとこで、通稱は拙三、名乘は範與であつた。このおぢさんはそこひといふ眼病に罹つて、厚い玉の眼鏡をかけてゐたが、氣節のある先輩として、若い者から志津野の先生と呼ばれてゐた。維新後しばらくは藩の參事か何かを勤めてゐたらしい。多分その頃の事だらうと思ふが、役所から月俸を貰ふて來ると、それを其まゝ床の間に放り出して置いて、若い連中の持つて行くに任せてゐたといふ話を、私は母から聞いてゐる。私はこのおぢさんを特にエライ人として眺めてゐた。『花熊や花も紅葉も枯れはてゝ名のみ殘れる松の村立。』これはこのおぢさんが前に記した馬ケ獄を詠じた歌。花熊とは、馬ケ獄の麓の村の名だが、思ふに昔し、この山城の城下として多少繁昌した處なのだらう。歌人としても此おぢさんは有名であつた。此おぢさんは酒が嫌ひで、親類の會合などの時、もう飯にしよう、もう飯にしようと、頻りに催促するのが癖だつたと、よく母が話してゐた。又此おぢさんの煙草入の汚ない事は評判で、皮は磨り切れて破れてゐるし紐は切れたのをコヨリでつないであつた。そんな無頓着な點は、廣瀬のおぢさんがコヨリを羽織の紐にしてゐたのと一對で、私の内では二つともよく笑ひの話の種になつてゐた。私は此おぢさんから南木誌といふ本を讀まされたり、大阪の大東日報といふ新聞を讀まされたりした事がある。後、拙三さんは大阪に移り、住吉神社の禰宜として死んだ。當時、維新の志士先輩で、多少の學問があつて實務の才のない人物が、何かの因緣に依つて神官といふ地位に祭りこまれるのは、よくある事だつた。大阪府知事建野郷三といふ人は、拙三先生の後輩であつた。

母の妹に嫁いでゐた篠田。こゝは醫者の家で、おぢさんの名は蒼安と云つた。髮の眞白い、眉の長い老人であつた。杖が好きで、鳩の杖だの、五三竹の杖だの藤の杖だの、いろ／＼な杖が十本も二十本も、杖さしにさしてあつた。家は錦町一丁目の角に在つた。これも名高い歌よみであつた。假名文字が上手でよく短冊など書いてゐた。歌の名は木埴と云つた。『劍太刀身は無きものと思ひてぞ、初めて仇は斬るべかりける』『立ちあれし彼の行衞を今朝見れば、只靜かなる水にぞありける』『鬼となる伏見の土を來て見れば、佛を作るいさごなりけり』などいふ、悟りめいた歌があつた。それから思ふと、夜中に溝をさぐる事を長歌に作つて、夜が明けて見ると、『垢と思ひし金は逃げて、蚤と思ひし垢ぞ殘れる。』と云つた樣な、滑稽の味をやつてゐる事もあつた。蒼安さんは又酒が好きで、醉がまわると色々面白い話をして聞かせた。——李白といふ詩人は大好な酒飲

みぢやつた。長安の市上、酒家に眠るといふ句があるが、あれは讀み方が違つて居る。酒家に眠るではなく、酒家眠るが本當ぢや。アレ向ふから李白さんが來なさる、李白さんに飛ひ込まれては大變ぢや、夜の明けるまで飲まれうも知れん、サア早う戸を締めて寢よう寢よう。酒屋が皆そう云う樣にしてしまうた。そこで長安の市上、酒屋眠る。――こんな樂天家らしい老人の悲劇があつた。おぢさんにはお淸さんといふ娘が只つた一人あつた。(それは私の叔母の生んだのではなかつた。)それでおぢさんは養子をした。養子は東京に行つて修業して醫者になつた。おぢさんはお淸さんを連れて東京に行つた。養子はお淸さんを嫌つた。おぢさんはすご〳〵お淸さんを連れて歸つて來た。私はお淸さんが肺病になつて死んだ事を覺えてゐる。その最後に近い頃、赤い絹のきれで拵えた、小さい丸い玉に水を浸して、わづかにそれを吸つてゐたのが目に殘つてゐる。篠田家については、猶ほ後に話す事がある。

十　士族、百姓、町人

私の親類は大概みな小士であつた。中で、二月谷志津野だけが少し格式が高かつたそうだ。小倉藩では百石以上をお歴々と稱したが、二月谷志津野は即ち其お歴々の最低位であつた。然し志津野が百石で、堺が十五石だから、志津野は堺の六七倍の收入があつたといふ譯ではない。百石以上はそれだけの領地を持つてゐるといふ名義で、實收は四十石に過ぎなかつた。然るに堺家あたり、(多分切米所と云ふのだらう)の十五石は其まゝ實收入で、それに四人扶持(一人扶持はたしか一石五斗)がついて合計廿石以上になるのであつた。

私は藩内の御大家について、殆んど知る所がない。只だ前に記した御家老の松の御門だけは少し知つてゐる。そこの若さんの『安三郎さん』と云ふ人とは心易くなつてゐた。細い髮毛の美しく縮れてゐる處と、溫和な上品な顏付をしてゐる處とが、我々とは少し違つてゐた。兄の乙槌は其の人と同年の友達で、「三郎安」などゝ呼んでゐた。そこに又、目のすゞしい可愛らしいお孃さんが三人あつたが、私等はそれを『お女郎さん』『小女郎さん』『ちい小女郎さん』と呼んでゐた。或る時、私はどうかした事で、そこの裏屋に行つてゐて、××院樣といふ御後室から話しかけられた事がある。その時××院樣が、『お前の內では――』と云はれたので、成るほど身分が違ふのだなと思つた。但しそれを不快に感じたのでは勿論なかつた。

その外、父や母が、××さんとさんづけにして呼ぶ家柄が折々あつた。又、輕蔑するといふ程ではないが、何となく少し見

くだすといふ態度であしらふ家柄もちよい〳〵あつた。そして大柢は相對のつきあひで、子供等は一様に『坊んさん』『嬢さん』と呼ばれてゐた。私は『小ぼん』『小ぼんさん』『ぼんけい』などと呼ばれてゐた。

前に云つた通り、豐津は既に城下ではなかつた。舊藩主忠忱公は既に東京住居になつてゐた。然し『御住居』若しくば『御家内』にはいつの頃までか、係りの人々が毎晩宿直するのであつた。私の其の宿直に行く人達から、そこのお倉に積んである千兩箱の話を聞いた。兄の乙槌が養子に行つた本吉家は、この御内家の元の長局に住んでゐた。

私の内の床の間には、『仁』の字を大きく書いた掛物が掛つてゐた。それには『忠忱』と署名してあつた。忠忱公が東京に行かれる時、仁義禮智信の五字の中を一字づゝ大書して、それを紀念として士族中に頒たれたものである。舊主と舊臣との間には、まだ〳〵暖かい親しみがあつた。或る時、忠忱公が久しぶりで東京からお歸りになつた事がある。其の時、私は本丁のはづれの或る店家で遊んでゐて、丁度『お通り』に出くわした。我々の履物がお目に觸れてはならぬと云ふので、店の閾の内にうづくまつて待つてゐると、向ふから洋服の殿様が葉卷といふ煙草を吹かしながら、ブラ〳〵とお出でになつた。丸々と善く肥えた、若い立派なお方だつた。今の小笠原長幹さんは父君に善く似てゐられる。

明治九年、豐津の原に重大な一事件が起つた。筑前秋月の藩士今村百八郎外二百名の者が豐津に押寄せて來て、育德館を圍んだ。曩に西郷隆盛その他が征韓論の爭ひで政府を退いてから以後、西南諸藩の間に不平の氣が醞釀されて、續々として爆發する形勢であつたが、秋月藩士の來襲も其の小爆發の一つで、彼等は豐津藩士を說き落して相共に小倉縣廳を襲撃しようと云ふのであつた。育德館を圍んだのはどういふわけであつたか善く知らないが、育德館は元の藩學であり、後の中學校の前身であつて、そこより外に豐津藩士の集合所（若しくは中心點）が無かつたのだらう。サア戰爭だと云ふので、豐津一體は大變な騒ぎになり、女子供はそれ〳〵便宜の場所に避難した。私等の近處では、道路から少し離れた山の中の凹地を選んで、そこに莚を敷き、茣蓙を敷き、家具も少しづつ持出して、數家族が一塊まりになつてゐた。私等には何が何だか丸で譯が分らなかつたけれども、父だの、平太郎兄だの、近所のおぢさん達だのが、大小を腰にさして行つたり戻つたりするのが、怖くもあり面白くもあつて、何だかサムライの世の中が跡戻つて來た樣な氣がした。然し間もなく小倉から鎭台兵がやつて來て、賊は譯もな

く追ひ散らされた。その時、私は初めて鎭台兵といふものを見た。彼等が饅頭帽をかぶり、ランドセルを負ひ、鐵砲をさげて、丁度わたしの家の前の山を横ぎつて、小腰をかゞめながら進んで行く姿を、實に珍らしく眺めやつた。それから、戰爭はもう終つて、賊の死傷者がそこゝに横たはつてゐると云ふので、皆がそれを見に行つた。私も錦町の一丁目の横丁の處まで行つて、戸板の上に轉がされてゐる、血まぶれの怪我人を一つ見てゾツトした。それから當分の間、毎ばん暗い椽側を傳つて便所に行くのが恐ろしくて困つた。

其の翌年、西鄕の戰爭があつた。さすが近處の事で、子供の耳にも色々の噂がはいつた。やがて戰爭の繪草紙が出來た。私等は錦町の山口屋で何枚かそれを買つて貰つた。賊軍が熊本城を圍んで大砲を打ちかけたりしてゐる畫を今も思ひだす。陸軍少將桐野利秋、篠原國幹等は、たしか陸軍の軍服を着てゐた。村田新八郎が袴をはいて白鉢卷をしてゐるのが、殊に勇ましく見えてゐた。私等の目の中には、賊軍の將士が總て英雄化されてゐた。畫の作意その者が既にそうであつたのだ。然し籠城側でも、谷少將など大變な英雄になつてゐた。殊に、城中と來援の官軍との連絡を初めて取つた奥少佐が小倉出身であつたのは、豊津人の誇りであつた。

昔しのサムライを思ひ出させる樣な事はそれきりであつたが、それでも豊津の士族はまだ暫らく特殊の地位を保つてゐた。それが經濟上から崩れて行つた。次第は次の節で話すが、ここには大體上、先づ士族と百姓と町人との關係を少し書いておく。

豊津の士族、その周圍の村々の百姓、錦町の町人、これが當時の其の地方に於ける、社會の三階級であつた。彼等はそれ〴〵に、可なり違つた言葉風俗を持つてゐた。士族には前に云つた通り信州以來の文化があつた。馬ケ嶽や、香春嶽や、城の郷の落武者の末孫が、小笠原家に召し抱えられたのも勿論少なくないだらうが、それにしても、豊前の土人とは違つた、一種の武士的文化を作り出してゐた。豊津の町人は大抵みな小倉の町人の移つて來たのだが、小倉の町人は、其の町人なる地位からしても、又その地理的事情からしても、豊前の土人とは大ぶん違つてゐた。小倉は狭い海峡を隔てゝ長州の下の關と相對してゐる。九州の一部に位してはゐるが、交通の便利は中國の方に多い。殊に山口や下の關の繁華が多大の影響を及ぼしてゐる。現に、豊津錦町の一番大きな店（呉服店兼雜貨店）は山口屋であり、二軒の料理屋の中、大きい方は關屋であつた。豊前の町人は九州的であるよりも寧ろ中國的であつた。豊前の士族につい

ても、幾分それと同じ事が云へるかも知れない。所が、農村に於ける生粋の豊前土人たる百姓は、容貌、言語、風俗等に於いて、如何にも土蜘蛛の子孫、スサノヲ族の子孫、或は熊襲族の子孫らしい所があつた。

扨この三階級が謂ゆる『四民平等』になつた筈だが、實際には中々そう行かない。士族には矢張り一段高い階級の心持があり、百姓町人の方では又、内心士族を小馬鹿にする場合、或はそれに反抗する氣味合になる場合がありながら、猶ほ習慣的に大なり小なり卑下した態度を棄て得なかつた。

『此ごろ百姓が途中で行き會うても馬から降りん様になつた』と、いつか父が笑ひながら母に話してゐた事がある。私等（即ち士族の子供等）は又、農村に屬する山に行つて、栗を取つたり、藤の花を取つたり、竹の子を抜いたり、その外いろ〳〵山を荒しまわるので、どうかすると、村の人達からひどく叱りつけられたり、追つかけられたりする事もあつた。左様に百姓達の態度が少しづゝ變りかけてゐた。然し私等の眼中に於いては近處の村々から馬や牛を引いて、米や薪や炭を賣りに豊津の丘に登つて來る百姓達の姿が、どうしても異人種の様に感じられた。私の内に折々、懇意な百姓の甚之助といふ人が來てゐたが『マア足を洗うて暫らく上んなさるとえゝ』と母がいろ〳〵勸めても、『ハイヘイ』『ハイヘイ』と馬鹿に恭々しい返事ばかりして、どうしても草鞋をぬがず、上り口に腰かけたまゝで茶漬など食うて歸るのであつた。

錦町の人達を私等は『町の者』と呼んでゐたが、これは百姓に對するほど見くだす心持になれなかつた。勿論、士族は町人以上である。私等は町の子供と友達にはならなかつた。けれども、町の者は田舍者（即ち百姓）と違つてゐた。彼等は稍や優等人種であつた。

錦町には、前に話した呉服屋の山口屋、料理屋の關屋などの外、大抵の店屋は一應揃つてゐた。宿屋も明石屋といふのが、一軒あつた。そこの親爺は、いつまでも丁髷を結つて威張つてゐるので有名だつた。葉茶屋の主人に山田瓢舟といふ俳諧の宗匠があつて、父はよくそこに遊びに行つてゐた。若い大工の何某君が士族の娘さんと駈落して評判になつた事がある。士族の娘と大工さんとの戀は、當時にあつては、どうしても駈落せねば收まらぬ程の珍事であつた。

私は町の子供等から多少の威脅を感じさせられてゐた。彼等はいつも美く團結してゐた。そして甚だ不作法であつた。或る時、石走谷を中に挾んで、彼等の數人と私等の二三人とで、石の投げあひをした事がある。彼等が多數で、私等は負けた。こ

ういふ關係は、子供等の間ばかりでなく、士族全體と町人全體との間にもあつたか知れない。

猶、階級の關係を示す實例として斯ういふ事がある。錦町の裏に、これこそ本當に鳥の巣の様な家を竹藪の中に作つて住んでゐる、杉山某といふ日傭稼があつた。私の内に米搗に來た事もある。所が此の人、御維新の際、奇兵隊といふ臨時の新軍隊に召募されてゐたので、後ち士族の格に列せられてゐた。そこで我々は彼の事を呼び棄てにせず、「杉山さん」と呼んでゐた。

それとは反對に、私の家と何か因縁のある小倉在の農家、——後に村長になつた程だから可なり裕福な家だつたらうと思ふが、——其の農家に私の家から苗字を分けてやると云ふので、酒井と名乗らせた。後に父が「酒井は餘り有りふれた字で氣の毒だつた。せめて坂井にしてやればよかつた」と云つてゐた。なぜ堺にしてやらないのかと私は思つたが、そこまでは父にどうしても考へられなかつたと見える。

〈以下士族の商法、小學校、中學校、娯樂と遊戯、自由主義と儒教、東京遊學等の數章を以て「豐津時代」を終る筈。

石田三成

高須芳次郎

（一）佐和山城内の密談

それは江州佐和山城内のある夏の出來事である。城主石田三成はその分別あり氣な顔に手強い決心の色をうかべて、大谷吉繼父子──他書には吉隆とも記してゐる──と靜かに對座してゐた。傍らには腹心のものが二三ゐるばかりであつた。三成は吉繼が出陣の中途、特に佐和山まで來たのを喜んで、別後の積る話をした。やがて三成は形を改めて「再度、使者を出して、强ゐて貴君の來駕を求めたのは、多年の心友に一大事を打明けて、その力を借りたい爲めである。」といつた。吉繼は三成の言葉を聞くと、はつと驚きの表情を示したが、束の間に色を正し、癩病でくづれた顔を俯向き加減に、盲ゐた兩眼の上に形ばかり見える眉を微動だもさせずに、ぢつと腕を拱いた。

「貴君は天下の形勢を何と見らるゝ。德川殿の振舞を何と解せらるゝ。心あるものは、ぢつと落着いてをられぬ秋ではあるまいか。私は太閤の御恩を思ひ、幼君秀頼公の御身を考へると、一身の安危を外にして蹶起せねばならぬことを痛感いたしたのである。」

三成はかういつて、太閤歿後の形勢を說き、家康が豐臣の天下を奪はうとする野心あることを罵り、今、家康が上杉景勝を征するため、東北に向つた際、景勝と呼應して、家康を倒すべき必要あることを說いた。吉繼は時々、うなづきながら、三成の言葉に聞き入つたが、暫く考へてから、沈痛な語氣で、その所懷を述べた。

「貴君の考へは一應尤もである。が、よく靜思すると、それは余りに大きい冒險であるまいか。私は確かに冒險といふに躊躇しない。德川殿の勢を見られい、今正に朝日が東天に昇るやうである。それに反抗するのは自滅を急ぐと同樣であらう。私がかういふと、臆病な奴と侮らるゝであらう。」けれども私は現實の上にしつかり起つて、かう申すのであ

る。」

三成はこの言葉を聞くと、すこし不愉快な色を見せた。が、吉繼は盲目であるので、それを知らないで言葉を續けた。

「第一、徳川殿は内大臣の地位を占めて五大老の筆頭である。天下皆内府に望を囑して侮り難い有様である。のみならず、貴君が恃みとせらるゝ毛利、島津の剛勇も内府の老練な戰術に對してどの位役立つであらうか、私には疑はしく思はれる。その上、内府には隨從の勇士が多い、また人情の機微を穿ち、時勢を洞察する鋭さがある。それらを合せて考へると、貴君は到底、内府に敵するだけの資力がないやうに思はるゝが、どうであらう。もつと深く考慮を重ねられたい。」

吉繼が率直にかういふのを聞くと、三成の面上には險しい表情が動いた。その眼は異様に輝いた。そして額に玉のやうな汗が滲み出た。

「成程、貴君の說は、一應誰れもがいふことである。が、人生は打算のほかにあると私は思ふ。利害のみに支配せられてゆくなら、この生は堪え難い。人には各意氣がある。打算や利害を越えて働く感激がある。この意氣、この感激に打たれると、人は猛然として起ちあがる。不肖、私のやうなものが徳川殿に弓ひかうとするのは、力と力とを思ひくらべた上ではない。太閤の大恩を回顧すると、强い感激が胸に溢れて豊臣家に少しでも酬ひたい意氣に促がされて、吾知らず起ちあがつた迄ぢや。」

三成の聲には激越した調子が出てゐた。吉繼は少し昂奮した様子をした。が、その昂奮は瞬間に消えて、また冷靜に返つた。

「貴君のいはるゝ通り、人間には意氣があり、感激がある。私もそれを思はぬのではない。けれども十萬、二十萬の大軍を動かし、多數の犧牲を出すについては、どうしても、冷靜な打算が要る。それは主家の興亡にも影響しよう、私らの先輩友人の盛衰、存亡にも關係するであらう。勢ひ勝敗を打算しなければなるまい。この點を熟慮すると、今は私らの起つべき時機ではない。徳川殿に充分の勝味がある。前田殿（利家）が、萬一私らの先頭に起たるゝなら、當方にも幾分の勝味があらう。その前田殿がをられぬとすると徳川殿に匹敵すべき總帥がないのぢや。毛利、宇喜田、島津などでは物足らぬ。結局、今度戰を起せば、當方が、十中の八九破れて、徳川殿が早く天下を自分のものにするよう自然に促がし立てるのと同じぢや。貴君は徳川殿に一日

も早く天下を取らせたいと思はるゝのか。貴君はまだ時機が熟せぬうちに起たうとさるゝのか。決して左様であるまい。」

吉繼が三成を心から諫めると、三成も流石に心を動かさぬではなかつた。が、一旦かうと決した後であるので、三成はその計畫を途中から擲つてしまふことが出來なかつた。靜かにしてゐても、三成はやがて家康にその頭を抑へられ、またその呼吸の根をとめられるかしれなかつた。進んでも、退いても、三成には恐しい落し穴があるやうに思はれてならなかつた。

「貴君の忠告は有難い。確かに私の計畫は無謀であらう。けれども大義の前には勝敗も得失も榮枯も考へられぬ。私は唯大義に殉ずる迄である。幼君秀頼公のために計つて、潔く生命を捨てるならば、それで滿足だ。私はその他のことを一々打算してをらない。」

三成はかういつて、吉繼を動かさうとした。吉繼はまだ冷靜であつた。三成は次第に熱して來た。

「長い間、貴君と私は太閤の許にゐて忠義を勵み合つた仲だそれに貴君は私の主家を思ふ熱情を見捨てゝ別な道を歩かうとはしまい。私は貴君の自由を妨げはしないけれども、貴君が必ず私と同じ歩みを取るであらうと固く信じてゐる。」

吉繼は三成から、かういはれると、何と答へて宜いか、わからなくなつた。彼れは内心天下の勢が家康に歸すべきことを察してゐるので、敗北を豫期しながら、反抗したくなかつた。けれども三成の主家に對する心持や多年の友情などを思ふと、一概に三成の賴みを撥ね付けてしまふわけにゆかなかつた。彼れは幾度も胸のうちで考へ直した後、暫くの猶豫を求めて、三成と別れた。

三成は吉繼が自分に背かないであらうと略ぼ察してゐた。ところが、吉繼はまだ決心がつきかねたと見えて、その臣平塚爲廣を三成の許へ遣はして、家康と和すべきことを勸めた。三成は聽き入れなかつた。そして一種の失望を感じた。吉繼の使者が去つてから、二三日經つて、吉繼が再び佐和山へ來た。その顏には、ある運命の前に犧牲とならうとする心持がほのめいてゐた。

三成の心は躍つた。三成は吉繼の智謀を深く重んじてゐたので、吉繼が家康に身方することになると、片腕を失つたのと同じ遺憾を味はねばならなかつた。それで三成は曩きに吉繼が家康の東征を助けるため、軍勢をひきつれて濃州垂井の宿に着いたと聞くと、急に樫原彦右衛門を吉繼の許に派して、それとなく」

內意を傳へ、佐和山へ吉繼を迎へようとしたのである。が、吉繼は東征を急ぐ旨を述べて穩かに彦右衛門を返した。彦右衛門の復命を聞くと、三成は再び彼れを吉繼の許へゆかせて是非、一大事について吉繼の意見を求めたい旨を切に請はせた。再度の招きによつて、吉繼も少年時代からの友人を見捨てかねて、到頭佐和山に來た。ところが、最初の會見は三成の思ふやうにならなかつたので、いくらか淋しい感じが三成の胸に起つた。「もし吉繼が萬一家康につくとすれば……」と思ふと、三成は吾知らず溜息したほどであつた。が、吉繼は到頭、三成の懷ろへ來た。

「今日、貴君を訪ふたのは、私の生命を豐臣家と貴君とに預けようと思つたからだ。私はいろいろ考へぬいたが、やはり、私は貴君に背くことが出來ぬ。」

吉繼はすこし沈んだ聲で、きつぱりいつた。

「有難い、人生はすべて意氣だ。君を身方に得たのは飛躍と勝利の前兆だ。」

三成は喜色を湛えて、吉繼が彼れと同じ道を歩かうとする上に心强さを感じた。程なく、三成は大阪から來た安國寺惠瓊を迎へて、三人膝を交へながら、謀議を凝らした。

惠瓊は凡骨でなかつた。その話振はきびきびしてゐた。太閤の生前、毛利を攻めた時、調停に當つた功で、伊豫に於て六萬石を領するやうになつた。三成の企については、早く共鳴した一人で燃ゆるやうな功名心を抱いてゐた。三成はその才辯に依賴した。かうして協議を重ねた末、惠瓊は毛利一家を身方に引入れる役目を擔當した。吉繼は一旦その領地敦賀に歸つてから、大阪で三成と逢ふ約束をして辭去した。間もなく、三成は大阪へ向つた。

三成が吉繼の忠告を容れないで、斷崖の上から千仞の谷底に向つて飛躍を試みようとしたのは避け難い運命の前に置かれたからであつた。太閤が世を去り、老實な前田利家が亡くなつてから、三成はまるで孤立の地位に置かれた。當時將士の輿望を一身に荷ふた家康とは太閤在世の時から意氣が合はなかつた。それに三成は家康の羽振が一時にひどく宜くなつたのを好まなかつた。家康の方でも、三成には警戒の眼を睜つてゐた。それに太閤恩顧の諸將（加藤清正ら）も三成と仲がわるかつた。彼等は三成を倒さねばやまない氣勢を見せた。が、三成はそれらに屈托するものでなかつた。

「加藤らは徒らにその武功を誇つて、私が政治の上にどんなに力をつくしたかを知らぬ。彼等には天下を見る眼がない。私情に囚はれて公義を忘れてゐる。彼等には家康の野

心がわからぬのか。家康を律義者などといふのは、彼の假面に欺かれてゐるものだ。家康は律義の蔭に隠れて天下を取らうとしてゐる。私は豐臣家の恩義を思ふと、ぢつとそれを傍觀してをられない。私は利害の關係を見る上では誰よりも、一番明るいが、利害の打算ばかりで動くわけにゆかない。今、家康に取入つて置けば、家のためになるのはわかつてゐる。が、そのため、彼れの前に頭を下げるのはいやだ。そんないやなことをして迄も、家を支えてゆく必要は認めぬ。豐臣家のために、また自分の生を延長するために、家康を亡ぼさなくては、どうしても安心出來ぬ。」

三成はかう考へて、勝敗の岐路に起つた。

（二）風前の燈火

三成がかうした天下分け目の大きい戰ひを決行するまでには、いろいろの込み入つた事情が、こんぐらかつてゐた。大閤の歿後、天下の變亂を豫想して、先づ家康に眼を付けた最初の人は三成であつた。その頃五大老（德川家康、前田利家、毛利輝元、上杉景勝、宇喜田秀家）が力を合せて政治を處理したが、三成は家康を信ずることが出來なかつた。「五大老たちのうちで、一番早く太閤に裏切るのは家康であらう。」と思つた。三成は家康がどんな風にその鋒尖を現はすであらうかと注視しつゝ、刻々に押しうつてゆく天下の形勢を見つめてゐた。

太閤がなくなつてからは、家康の姿のみが周圍の人々を壓するやうに鮮かに立役つて見えた。僅かに前田利家が家康の後に追ひつき得るだけであつた。秀頼がまだ幼いので、諸大名は家康の勢力に隨くか、利家の許に赴くかして、その地位を保たねばならなかつた。三成は初めから利家に近付いた。が、流石に長い間、勢力を保つて來た丈に、三成は自然、別派を形造る土壤が出來てゐた。そして萬事、利家を表面に起てゝ、家康に楯ついた。

折柄、三成は家康が太閤の遺命を破つて、諸侯の二三と約婚したのを知つた。元來、太閤は文祿四年八月、六ケ條の掟を出して「諸大名の縁邊の儀は御意を以て相定むべき事。」と觸れ出したのである。それによると、家康の一存で結婚するわけにゆかなかつた。ところが、家康はその六男忠輝のために伊達政宗の女を娶らうとした。その孫女の婿小笠原秀政の女を養うて蜂須賀家の子に嫁せしめようとした。また異父弟久松家元の女を養うて福島正則の子に縁組みさせようとした。三成はそれらのことを利家に告げて家康に迫つた。

利家、三成らは慶長四年正月、僧承兌、生駒一正を家康の許

に遣はして、その所存を確めようとしたが、家康は「媒介人がもう屆出をして、許可を得たのだと思つてゐた。」と嘯いて當座を濁した。三成はこの機會に家康を五大老のうちから取除かうと計つたが、家康は落着き拂つて「自分を邪魔物扱ひにするとは何事か。」と逆まに詰め寄せた。

この言葉を聞いた三成の顏色は颯と變つた。三成は家康が我意を振舞ふのを不快に思つた。その事が外間に漏れると、いろいろ不穩な噂が京、伏見にひろがつた。三成を思ふ人々は先を爭うて、その許にあつまつた。それは毛利輝元、宇喜田秀家、佐竹義宣、立花宗茂、小西行長、長曾我部盛親らをはぢめ、三成の同僚（四奉行）秀頼の近臣らであつた。その他加藤清正、加藤嘉明、淺野幸長、細川忠興らも、三成と同じ思ひを抱いたが、この一派は平生、三成と仲がよくないので、前田利家の許にあつまつた。

「この際、一氣に家康を倒さねば、他日の禍根を殘すにちがひない。」

三成はかう察して、二度も家康を襲擊しようと計つたが、先方の警戒が嚴重で附込む隙がなかつた。家康の方でも、伊達政宗、福島正則、黑田長政、藤堂高虎らがゐて、大谷吉繼も最初のうちはその方へ加つてゐた。この儘で打過ぎると、いつ戰爭が始まるか知れない勢になつた。京、伏見の住民は日毎にその噂をして不安の色を浮べた。が、三中老（中村一氏、生駒一正、堀尾吉晴）の調停で、二月五日、一旦和解が成立つた。けれども暗澹とした殺氣はまだ收らなかつた。

三成はこの和解に滿足しなかつた。

「おれは一片の反古によつて、表面握手した丈だ。暴風が起る前、一時天地が靜まり返つたのと同樣である。私らの脚下には大きい波が暗中に捲起らうとしてゐるのだ。」

と思つた。三成はすこしも油斷しなかつた。

三成が豫想したやうに最初の危機が突如として眼の前に現はれた。慶長四年三月三日、今迄家康と秀頼との間に起つて、平和の楔子となり、三成にとつても亦一つの支柱となつてゐた前田利家が心を殘して世を去つた夜、大阪の利家の許にゐて看護につくした三成が、疲勞と憂愁とに沈んでゐたところへ、桑島治右エ門があはたゞしく血相變へて駈け付けた。

「殿樣、一大事でございます。一刻も早く他にお移りなさいませ、御生命にかゝはります。」

呼吸をはづませて三成に告げた。三成は落着いた調子で「何事が起つたのか。」と靜かに問ふた。治右エ門はかねて三成と仲のわるい七將、加藤清正、福島正則、細川忠興、黑田長政、脇

坂安治、淺野幸長、加藤嘉明らが今にも玆へ攻めよせて、三成を亡きものにしようと騒ぎ立てゝゐることを告げた。間もなく、佐竹義宣も亦三成を訪うて、危機が迫つたことを知らせた。

七將が三成を覘つたについては相當の仔細があつた。朝鮮征伐の時、三成の親友小西行長と加藤清正とは互ひにその軍功を爭ふた。清正は日本へ歸つてから、始終、この事を不愉快に思つてゐた。それに清正が朝鮮にゐた時、武勇を誇つて豐臣の姓を名乘つたり、成鏡道で軍情を三成らに告げないで軍機を誤らしめたりしたことがあつた。三成行長らはその事を太閤に上申したので、清正は一時、不興を蒙つた。さうしたことにも清正は不快を感じてゐた。他の諸將らも、朝鮮役の賞與が少いのは萬事、三成の讒言によるのだと誤解して深い怨みを抱いた。また彼等は三成が死生の巷に出入して、勞苦しないのを見て、その威權を揮ふのを喜ばなかつた。

かうした事情があつた上に清正、正則らは太閤の正妻北政所に手賴り、三成、行長らは愛妾淀君に身方する風があつて、自然、この事も亦爭ひの種となつた。それは太閤の在世の時から、もう一般に知られてゐたことであつた。

（三）黑百合の花と美女にまつはる秘密

北政所と淀君については、いろいろの噂が傳へられた。北政所は聰明な婦人であつたが、その美しさの上では、どうしても淀君に及ばなかつた。淀君はその素性もよく、秀賴を生んだ上に水際立つた美さを持つてゐたので、太閤の愛は次第に淀君の方へ傾いた。

天正十三年、佐々成政が肥後六十萬石に封ぜられた時、ひどく喜んで茶會を催すことになつた。その時、成政は北國の人に賴んで、加賀白山の黑百合を取寄せて、北政所に献じた。北政所は珍しい鮮かな花の色を見て、急に茶會を開かうと思ひ立つた。それで千利休の娘、鵙屋の妻を招いて、茶會を手傳はせ、萬端の用意が出來た。ところが、その事を聞いた淀君は「私も黑百合の花を手に入れたい。」と云つて急使を加賀白山に送り、黑百合を搜した。そのうちに北政所の茶會が開かれた。淀君は招かれてその席へ出た。そして黑百合のことは話に聞いて知つてゐるので、「珍しく、美しい花でございます。」と賞讃(ほめたた)えた。それには、北政所も輕い誇りを感じた。

それから三日ばかり經つと、今度は淀君が花摘みの供養を催ほして北政所を招いた。北政所はその席へ出て、先づ驚きに打たれた。淀君が知らないでゐると思つた黑百合の花が撫子などと一緒に無造作に生けられてあつた。

「あの珍花をこのやうにして、私に見せるのは私を恥かしめるためであらう。

北政所は抑へ難い不快の情を起して、顏を曇らせながら、その席を去つた。それ以來、北政所は淀君と次第に遠のくやうに成つた。また佐々成政のことをも氣にさえて、それとなく、太閤に告げた。成政が自滅したのはそれがためだと傳へられた。黑百合の花を中心にして、いろいろの波瀾を生じたことは、いかにも人々の興味をそゝるけれども、それは實話でなかつた。それにしても、北政所と淀君との間に釀し出された不和は打消し難い事實であつた。それにつれて、北政所に身方した淸正、正則らは淀君に身方した三成らを柔媚の小人のやうに咀つた。それらも亦七將が三成を除かうとする一つの原因となつた。

さてかうした具合で、三成の身邊は危かつた。佐竹義宣らは當座の智慧を絞つて三成を人知れず女乘物に乘せ宇喜田秀家の邸へ逃れさせた。其處で三成は秀家をはじめ、上杉景勝、佐竹義宣らの身の振り方を相談したが、宜い思案が出なかつた。大閤が世にゐないので七將の不法を訴へ出るところもなかつた。

「かうなつた上は、德川殿によつて、一時、加藤らの銳い鋒尖を避けるのが萬全の策である。德川殿はたとひ、三成を快く思つてゐずとも、七將に身方して、三成を成敗することはあるまい。」

一同の考へは玆に傾いたので、三成はまた女乘物で深夜、舟までゆき、そつと伏見へ急いだ。三成が伏見に着くと、義宣は家康を訪うて始終のことを訴へた。このことが七將の耳に入ると「石田を逃してはならぬ。」とあせつていづれも馬を飛ばしながら、三成のあとを追ふた。それはまるで戰爭のやうな騷ぎであつた。淸正らは伏見に入つて、その邸に入り、大阪から人數を召寄せて「是非共、三成の首を得たい。」と意氣込んだ。

その時家康から伊東圖書昭綱を淸正らの許へ遣はして「各方は太閤恩顧の人々である。然るに秀賴卿の代始めに天下の靜平を計らうとされずに、無用の内輪騷ぎを致さるゝは心得難い。勿論、各方が一旦口外したとをその儘に打捨てるわけにゆかぬのは道理ぢやが、このところは我慢して穩かに事を收めてはどうか。それとも各位に於て、御不承ならば三成を打果さるゝことは御勝手である。」といつた。

淸正らは流石に家康の仲裁を拒みかねた。七將は相談を重ねた後、伊東圖書に向つて「御使の趣、承知いたした。私どもは三成に對して少からぬ遺恨を抱いて居りますが、內府公の仰せとある以上は違背いたすわけにゆきませぬ。枉げて御差圖に任せませう。この旨、御歸りの節、內府公へよろしく御傳へ願ひ

たい。」といつた。それで事が落着して、三成は漸く安心したがその前途を考へると、大きい難關があつてどうしても落着いてゐることが出來なかつた。

程なく、家康から生駒一正、中村一氏を三成の許に遣はした。その際、家康は三成に向つて「今日、天下の騷動はひとり貴君の動靜如何にかゝつてゐる。貴君が尙ほこの地に留まつてをられると、重ねてどんな變事が起るかわからぬ。一時、領地佐和山に引退して諸將の怒りを取鎭めた方が得策であらう。御子息隼人（重家）殿のことは家康身に引受けて保育し、他日、奉行とするよう、取計らふであらう。」といふ意を傳へた。

三成は家康の旨を聞いて、速座に隱退の意を決したが、兎も角「何事も内府公の御仰せに從ひませう。が、何卒一兩日の御猶豫が願ひたい。」と答へた。使者が領承して歸ると、三成は直ぐに宇喜多、小西、佐竹、上杉らを呼んで、隱退のことについて相談した。一同も三成のためにその事を得策と認めたので、三成は中村、生駒の二人を呼びよせて「私は愈よ佐和山へ退くことといたしました。内府公へよろしく。」と確答した。

家康はそれを聞くと、三成に向つて表面、好意を示し、七將が萬一、三成に危害を加へるやうではいけないといふので、堀尾吉晴、結城秀康の二人に三成を護衛させることにした。三成の隱退はその身方や同僚に淋しい感じを起させた。五奉行いづれも、それぞれの長所を持つてゐたけれども、三成ひとり特に優れてゐた。事が起ると、湧くやうな才智を出して、思ひ切つた決斷を下すのは、いつも三成であつた。その三成が天下動搖の際、佐和山へ引込むのは、同僚の人々に取つて、手ひどい打撃にちがひなかつた。三成自身はこの隱退を左程、心淋しいと思はなかつた。

「私の望みを成就すべき機會は今後にある。佐和山へ歸ると、專ら、私の劃策に全力を用ふることが出來る。雨降つて地かたまるといふが、加藤らは私に爭ひを挑みかけて、結局一つの好機を與へたのだ。今に見ろ、私は必ず家康を亡ぼして、目先きの見えぬ奴らの眠りを醒ましてやるから……」

三成はかう思つて、三月七日、伏見を出發した。秀康、吉晴の二人は家康の命によつて三成に隨從して護衛に心を付けた。醍醐、山科邊迄ゆくと、三成の臣、高野越中、大山伯耆、舞兵庫以下騎馬の人々が數多來てゐたので、三成は瀨田で秀康らに別れることにした。その時、三成は秀康の心づかひを謝して、その佩刀——作州津山の舊藩主松平家に保存せられてゐる石田正宗がそれである——を秀康に贈つた。

(四) 家康の會津征伐

佐和山へ歸つてから、三成は家康を亡ぼす策戰に餘念がなかつた。その時分、上杉景勝は伏見に滯在してゐたが、三成は景勝と東西呼應して、家康を死地に陷れる相談を始めた。景勝は最初から三成の身方であつた。そして三成と同樣、家康の前に膝を折るのをひどく不滿に思つてゐた。三成が景勝と聯合を計つたのは、それらのためであつた。

景勝の背後には、その家老直江兼續が附いてゐた。兼續は大膽不敵な上に智謀も亦當時彼れにならぶものがないとまで噂せられた。それに人品、骨柄が優れ、辯舌が爽かで、文學の嗜みもあつた。景勝は兼續を重く用ゐて、奧州百萬石を領した時、兼續に三十萬石を與へた。ある時、伏見の城に諸大名があつまつた席で伊達政宗が懷ろから金錢を取出して列座の人々に見せた。金錢はその頃新鑄せられたといふので、いづれも珍しさうに感じ入つた樣子であつた。政宗は末座にゐる兼續の方を向いて「貴君も一覽さるゝがよい。」といつたので、兼續は金錢を扇の上に受けて恰度少女が羽根つくやうな格好して一瞥した。政宗は「苦しうないから、手に取つて御覽なさい。」といふと、兼續は「私は先主人（謙信）の時から先陣の下知して采取つた手にかういふ賤しい物を載せるのは汚れとなりますから、扇に載せて拜見いたした。」といつて扇に載せた金をその儘、政宗に投げ戾した。それには流石の政宗もぐつと行詰つて默つてしまつた。

三成が景勝と聯合するには、兼續の智謀によつたことが少くないやうである。『常山紀談』には、三成が太閤在世の頃、ある雨の夜に兼續を呼んで、いろいろ話し合つた折、家康の前途を見越して人知れず默契し合つたことを記してゐる。それはすこし穿ちすぎた説のやうに思はれるが、景勝が慶長三年十月、伏見へ來て秀頼に謁した頃、三成は既に景勝、兼續と天下の形勢についてその行くべき道を談合したのでなかつたか。それが聯合のことに押進んだのは、三成の佐和山入城以後であらう。その魂膽は先づ景勝が會津に兵を起して、家康の力を牽制し、關西、近畿の地に德川勢が手薄になつたのに附け入つて、三成が兵を擧げ、東西から家康を挾み擊ちにしようといふのであつた。この約束が成立つと、景勝は慶長四年八月、領國の政治を見るべき旨を秀頼に請うて暇を賜り、家康に別れを告げて會津に歸つた。

三成は既に景勝らと略ぼ約束が成つたのでその發すべき機會がくるのを待ちつゝ、家康の樣子を細大となく覗つた。もう、

その頃、家康の權勢は天下を取つたも同様であつた。勢利になびく大小名は只管家康に取り入つた。家康は自分一存で加藤、福島、蜂須賀諸家と緣組みをした。また家康のために力をつくした堀尾吉晴、細川忠興、森忠政らに私恩を施した。毛利一家を手なづけることにも氣を配つた。そして慶長四年九月、大阪に入城して秀頼に逢ひ、西の丸に留ることになると、本丸同様、立派な天守閣を築いた。

その時分、三成の許へ突然家康の臣柴田左近が來た。それは家康が三成の心を疑つて、動靜を探らうとした爲めであつた。三成は表面、他意ない旨を固く盟つた。が、内心家康の老猾を憎んだ。その後、三成が尙ほ家康の様子をぢつと見てゐると、慶長五年正月、諸侯が拜賀のため、大阪城に赴いた時、秀頼、家康の二人に同様、賀詞を述べ、いづれも家康の前で臣禮を取つたことが三成の耳に入つた。三成はひどくその事を憤つた。

三成と聯合を約した上杉景勝擧兵の噂が京、伏見にひろがつたのは、それから間もないことであつた。景勝は歸國以來、家康と互ひに消息し合つて、何處までも平和を裝うてゐた。が、それは唯表面だけのことであつた。實は歸國匆々、城砦を修築したり、兵糧を蓄へたり、四方から浮浪人をあつめたりしてゐた。この事は、羽後北浦の戸澤政盛や江戸方面から頻りに家康の許へ詳しく報じて來た。景勝も亦それらのことを知らぬではなかつた。けれども一向氣に留めないで、慶長五年正月、老臣藤田信吉を大阪に赴かせ、秀頼、家康の前に賀辭を述べさせた。その時、家康は信吉に向つて、景勝の上阪を促かし立てたのである。

が、景勝は信吉から家康の意を聞いても、冷然としてゐた。また上阪もしなかつた。景勝は豫定の行動を續けた。先づ二月二日臣下に旨を傳へて、諸城を修築させ、飽迄家康に反抗する心持を露骨に示した。そしてその年四月、家康が伊奈照綱らを景勝の許へ派して、誓書か、人質を出せと迫ると、景勝はその何れをも斥けた。それから家康が再度、手紙を送つて、景勝の上京を促がすと、續はまるで家康を眼中に置かぬやうな返書を家康に與へた。それには可なりに手強い文句が記されてゐた。兼續は家康の不審に對して「當國の儀、その許に於て雜說が行はれてゐるので、内府様（家康）は不審の由は余儀ないことと存ずる。併し當今、京、伏見の間にさへいろいろの取沙汰がやまぬのである。況して遠國のこと、景勝若輩のためもあらうから、それは致方がございません。」ときつぱりいつた。また「景勝に於ては、心中別儀ないに開らず、逆心あるやうに取沙汰されてゐる上は、累代律義の名、弓箭の譽れまで廢つた次第

であるから、讒者を糺明されない前には上洛いたしませぬ。」といひ切つた。それを見た家康は烈火のやうに怒つて、周圍の諫めを容れず、會津征伐のことを決した。この報が三成の許につくと、雀躍せんばかり喜んで「久しい間、待つてゐた機會が來た。」と覺えず、獨語した。

が表面では三成も家康の東征を助けるやうに裝ふた。それでその臣隅東權六を家康の許に遣はし、その子隼人正重家を大谷吉繼に托して從軍するよう、請はしめた。それと共に三成は一方で、策をめぐらして、都合よくゆくなら途中で家康を亡きものにしようと考へた。その折、三成は長束正家と計り、家康を水口城へ迎へ入れ、島勝猛(左近)に命じて家康を襲はせようと準備してゐた。ところが家康はそれを悟つたと見えて、正家が家康を石部に出迎へた時には、水口に立ちよる旨約しながら急に石部を出發して、伊勢路に入つた。三成の計畫はそれがために、はづれてしまつたのである。

三成は、それから間もなく、前に述べた通り、大谷吉繼を身方に引入れ、續いて大阪に赴いた。其處で敦賀から來た吉繼を迎へて、家康討伐の旨を增田長盛、長束正家、前田玄以らに告げた。玄以は家康に心を寄せてゐたので、京都に留つて、策戰に加はらなかつた。長盛、正家は三成と同心で、諸將を身方に引入れることに應分の力をつくした。」

（五）三成の舉兵

天下分け目の大決戰は正にその序幕に入らうとしてゐた。三成は秀賴、淀君に謁した後、家康を除き、豐臣の天下を安康にするため、秀賴の命によつて家康を討つ旨の檄文を四方に飛ばした。それには「古から今に至るまで國家の興亡を見ると、奸人の所業にもとづくところが多い。德川家康は身を三州に起して、關八州を領し、大祿を得てその勢旺んである。遂に太閤の遺命に戾つて、わが儘を働き諸人を蔑視するに至つた。それは何人も憎むところである。私らは幼君秀賴公に代つて、茲に家康を誅滅しようと思ふ。各位は軍役を勤め、指揮に從はれたい。萬一、この旨に違背する場合は、大阪表に置いてある各位の妻子を禁獄するであらう。」といふ意味を記した。

その後、三成は長盛、正家らと大阪の諸士をあつめて、家康の我儘で野心深きこと、上杉景勝がそれに不滿を抱いて上洛しないことを述べ、同意を促がした。また三成は景勝の許へ書送つて、近狀を報じた。それから諸將の東行を遮るため、兄正澄を江州愛知川に派して、其處に關門を設けた。かうして先づ三成に加擔した人々は、毛利輝元、宇喜田秀家らであつた。三

成はこの勢に乘じて、長盛、正家らと連署の上、家康の罪十三條を數へて、それを諸將に送り、家康の許へも屆けた。そのうちには、家康が徒黨を愛して、それらを煽動したこと、專恣の振舞多いことを彈劾してあつた。その他、別に家康が秀頼を侮つて會津征伐を專行した不都合を非難した手紙を檄文に添へた。

その時分、諸將の妻子は大抵、大阪に質となつてゐた。三成は早く玆に眼を附け、長盛の手で、家康の會津征伐に從軍した諸將の妻を大阪城内に閉ぢこめて、諸將をすつかり身方に引入れようと計つた。が、この事は覗ひがはづれた。最初、長盛らが細川忠興の妻（明智氏）を大阪城内に收めやうとして忠興の臣にその事を迫ると、いろいろの辭柄を設けて應じなかつた。それで三成は二千余人の兵で取圍んで、忠興の妻を連れ歸らうとすると、彼の女は家士に旨を傳へて、邸に放火させ、自分はその火中で自殺した。中には、加藤清正、黑田長政、同孝高らの妻のやうに逸早く領地へ逃げ歸つたのもあつた。それで三成は唯守兵を置いて、池田輝政、藤堂高虎らの妻を監視するだけに留めた。

當時劃策に余念なかつた三成の胸のうちには、身方となるべき人々の名が、次から次へと浮んだ。「島津はどうしても、毛利と同様私の方に就くにちがひない。私は多年、島津のことを太閤に執成し、その政治向きの事にも、力をつくしたのだから、これは先づ宇喜多同様安心だ。立花も無論、こちらのものだ。關西の諸侯は大抵私の許に集つて來るであらう。」と指折り數へて、諸將の來着を待つた。程なく、前後して、大阪に集つたのは、秀家、輝元のほかに毛利秀元、小早川秀秋、島津義弘、島津豐久、毛利秀包、吉川廣家、小西行長、立花宗茂、長曾我部盛親、毛利高政、脇坂安治、小川祐忠、戸田重政、平塚爲廣ら將士を合して九萬三千七百人に上つた。その時、毛利輝元は人々に推されて盟主となつた。續いて輝元は正家らと共に全軍の部署を定めて、高麗橋、本町筋橋、久太郎町橋、久法寺町橋、安東寺町橋、淀の橋、淡路橋をはじめ、平野町、天王寺口、中津口、玉造口、福島口、平野町、新店、大和口その他に勤番を配置した。

三成は身方の軍略を見ると、自分の計畫が次第に纏つた形の上にはつきり現はれて行くのに抑へ難い快さを感じた。平生の鬱憤をぢつとこらへて、家康の我儘を通させて來たが、今日、愈よあの白髪頭に大きい鐵槌を打ち下す時が來た。家康は自分を佐和山へ押こめたことを玆にはじめて後悔しやう。今度の擧兵は秀頼公を背景とし、毛利輝元を表面盟主に立ててゐるが、歸

するところ、一切の駈引はこの胸一つにある。加藤などが、どんなにもがいても、これだけの軍勢を整へることは出來まい、こゝまで漕ぎ付けるには、自分もひどく苦心した、夜の目も碌々合はぬ日が多かつた、太閤の歿後二年目に家康を叩き付けるものは、自分の本望だ。自分の眼には、家康が血みどろになつて、尾三の平野で、もがいてゐる姿が幻のやうに見えてならない。勝敗はまだわからぬが、運命は自分を祝福してゐるやうだ。すべてはこれからだ。三成はかう思ひ續けた。

三成の意氣は自然に昂つた。その頃、三成は自然の必要から大津城主京極高次に使を出して「大阪方となつた證據として人質を送られたい。」と申込ませた。高次はそれをはね付けたので今度は朽木元綱を使に立てゝ、人質のことを促した。高次はまだ籠城の用意がしてゐないので、一時、三成に從うて、その子熊若を三成の許へ寄越した。

その後三成は宇喜多秀家の邸に增田、長束らの人々をあつめ將軍議を開いた、先づ秀家は「近日、內府（家康）は江戸の諸侯を引きつれて出發し、會津攻めを始めるであらうから、あの方面が心配である。」といつた。三成はそれについて「その心配は御無用である。御承知のやうに景勝殿の武勇は、太閤がその父謙信にゆづらぬと仰せられたほどである。それに上杉家の重臣には直江兼續以下武功の輩が中々多い。また佐竹（義宣）も上杉に一味してゐるので、總勢七萬に余るから、心配するに及ぶまい。」と説いた。

秀家らはそれで安堵したが「會津表のことはそれで宜いとして、さてこれだけ多數の軍勢が大阪にのみ留つてゐるのは不利である。內府は會津に攻め入るか、江戸に留るか、上方へ手を出すか、この三つのいづれかに出て來よう。それに對して豫め當方の軍勢を配置して敵の英氣を挫折させることが目下の急務である。」といつた。一同は、秀家の申出に異存なかつたので、配置の順序を定めた。毛利輝元、增田長盛は大阪に留まり三成は長束正家らと美濃、尾張に出向くことにした。時に三成は輝元の猶子、秀元に安國寺惠瓊、吉川秀家らと美濃路へ發向されたいと發議すると、異議なくそれに決せられた。

程なく、三成は手配のため、一應、佐和山に歸ることになつた。途中、三成は小雨降る日、羅紗合羽を着て、大津城に立寄つた。その時、三成は三田源藏といふ剛力唯一人を従へ、その余はすべて門外に待たせて置いて城のうちに入つた。高次は三成を客間に請じて、互に快く話し合つた。が、その話の隙に高次の家臣、安養寺文齋は家老黑川伊豫に耳打ちして、三成を生捕らうと計つたが、伊豫は城の用意が充分でないので、後難を

まり、文齋のいふことを聞き入れなかつた。かうして三成は危いところを逃れて、城外に出ることが出來た。

三成は佐和山に歸つて金銀を撒いて士卒を四方から集めた。

元來、三成は萬一の場合に備へるため、平生質素に暮して、金銀を蓄へた。城の居間は大概、板張りとしたが、壁は麁壁とした。庭園には人目をひくやうな花卉を植えなかつた。手水鉢は見すぼらしい石で作つたのを用ゐてゐた。が、それは吝嗇のためでなかつた。三成は最初、四萬石を領した頃、一萬五千石を割いて、島勝猛（左近）を用ゐた。また蒲生郷舎の勇名を聞いて、これも亦一萬五千石で抱へた。三成の許には、勝猛、郷舎のほかにも一廉の役に立つ人物が多かつた。

三成が佐和山にゐる間に宇喜多秀家らの伏見攻めが始まつた。三成は心にその勝利を祈りつゝ、眞田昌幸（信州上田城主）を身方に引き入れようと苦心した。最初、三成から擧兵のことを昌幸に報ずると「何故もつと早く知らせてくれなかつたか。自分にも相當の策があつたのに……」と申越した。が、昌幸は豐臣家のために、三成の企てに加盟すべきことを告げた。その手紙を受取ると、三成は昌幸に早く企てを知らせなかつた事情について「當時人心計り難く、謀がともすると洩れ易いので意外に遲延したのである。」と謝して、昌幸の感情を柔らげた。

（六）伏見攻め

三成が勝利をつ祈た伏見攻めは思ひのほか捗らなかつた。三成は佐和山を出るまでに勝報がつくであらうと心待ちにしてゐたが、到頭、それが來なかつた。三成が佐和山を出て伏見に着いたのは七月二十九日のことであつた。その時、伏見の城はまだ落ちなかつた。三成は「これではならぬ。こんなに長引くと、大勢に關係する。」と思つた。

元來、伏見の城は太閤がその隱居所として用心堅固に作り、兵糧、武器もよく整うてゐた。それに城代鳥居彦右衛門元忠以下、優れた勇士が多く立籠つてゐたので、附け入る隙がなかつた。最初、宇喜多秀家が伏見攻めをはじめる時、增田長盛の勸めを容れて、使者を遣はし、事なく、立ちのかせようと計つたが、彦右衛門は聞き入れなかつた。その時の返答に「御厚意は忝ないが、先頃、內府が關東へ下向さるゝ折、堅固に留守するよう仰せ置かれた。內府からこの城を開け渡せと申越さるゝならば格別、各方からの御內意では明け渡すことが罷り成らぬ。「それを氣にせらるゝならば、相當の人數を差向けられたい。彦右衛門の白髮首を引出物として差あげよう。」といつた。

かうして彦右衛門以下いづれも討死の覺悟を定めたので、秀

家が三萬餘の軍勢で、十五日以來、四方から城を攻めても、中々落ちなかつた。十日經つても、未だ強い抵抗をした。大阪軍は四五日位で、城を陷れて直ぐ美濃に出向くつもりでゐたが、かうなると、稍元氣を失つた。中には「かうしてゐるうちに關東勢が押寄せたらどうしよう。」と胸をいためたものもあつた。その時、長束正家の手勢のうちに浮貝藤助といふ甲賀衆がゐたので、このものに秘計を授け、同じく甲賀衆で松の丸に籠つてゐる敵勢のうちへそつと矢文を送らせた。それには「君たちが尚ほ敵對を續けるなら、故郷にゐる妻子をすつかり磔殺する。けれども當方に身方して內應の實を示すなら、莫大の恩賞を與へよう。」と記してあつた。これを見た甲賀衆四十余人はひどく驚いて協議をはじめ「明夜半、城內に火をあげて內應しよう。」と答へた。

その約束の刻限になると、甲賀衆は松の丸に火を放つた。その火の手を見ると、浮貝藤助らは逸早く城中へ飛び込んだ。そのあとへ小早川秀秋の軍勢が進み入つたので、松の丸を始め名護屋丸も大阪勢に攻め落された。彥右衞門は最後まで手強く抵抗した。月見の櫓へ火焰がすさまじく吹き付けると、彥右衞門は「もうこれ迄だ。」といつて、城の外に躍り出て、敵陣を暴れ廻つた末、潔く討死した。かうして八月一日伏見の城が漸く陷つた。

この時、城中から逃れ出た茶人神崎竹谷が大阪勢の手に捕へられ、三成の前に引出されると、三成は竹谷から城中の模樣を聞き取り彥右衞門以下忠死した人々の有樣をも詳かに知つた。三成はひどく感激して「敵ながらも天晴だ。鳥居殿の子息（忠政）は關東にゐる筈だから、貴君が尋ねていつて、最期の壯烈な死を告げ知らせるが宜からう。」といつた。竹谷は三成の情で傳馬を給せられて、關東へ赴いた。

伏見落城が思ひのほかに延びたのは、大阪勢の進軍にいくらか障碍を與へた。が、三成にはもつと他に心をなやますことがあつた。表面、三成は家康がどういふことをしようとも、力強く、はねのけてしまふまでだといふやうな心持を何人の前にも見せた。が、人知れぬ苦痛が三成の心にこびり付いてゐたのを誰れも知らなかつた。三成はひとり惱んだ。

大阪勢は打見たところ、侮り難い氣勢を見せてゐた。けれども關東勢のやうに、その中心となる人物がゐなかつた。三成は元來政治の方で優れたが、戰爭の方は、とても淸正らに及ばなかつた。それに毛利輝元をはじめ、秀家秀秋などの人々は、心から三成に服してゐたのではなかつた。各自、その力を恃んで、位置を爭ふ風が見えた。それを取纏めてゆくことは、ひどくむづかしかつた。關ケ原の戰ひを濟ますまでは內側から諸將の

和合を許る必要があつた。三成はこの點に少からず心を痛めたのである。

「今のところ、雄藩のうちで、一番手頼になるのは宇喜多秀家だけである。大谷、小西なども、頼母しいが、これは秀家らと同じ程度の實力、資格がない。その他、毛利島津小早川はどうもまだ心底がわからぬ。家康に從ふほどの輕薄さはないかも知れぬが、何時、ばらばらに分裂するかもわからない。もし自分にそれを統帥してゆくだけの興望と軍略とがあるなら、何も心にかけることはない。が、自分は唯政治の才を認められてゐるだけで、全體を率ゐてゆくだけの重味がないのだ。それを才略一つで纏めてゐるのだ。けれどもそれがいつ迄續くことか。私の見てゐる幻がいつ破れるかも知れぬ。成るべくこの幻を消してしまひたくないのだ。それにしても、この幻は………」

三成は冷かに目ざめて、こんなことを深く考へることがあつた。

三成は七月三十日、大阪へ出て秀賴、淀君に謁した。淀君は三成の來たのを喜んだ。太閤歿後、淀君は次第に衰へゆく豐臣家の行末について、心細く思ふた末、それが神經にひどく障つた。時にはげしく興奮すると、家康を咀ふことさへあつた。妙に感傷めいたことをいふ折もあつた。かうした際に淀君は三成が家康をうち亡ぼさうとしたことについて、家康に對する自分の反抗心を滿足させてくれたのを心嬉しく思つた。淀君は三成に優しい言葉をかけて、その擧兵を賴母しく思ふ口吻を洩らした。

三成はそれから輝元、長盛らに逢つて、軍事を議した後、八月五日、また佐和山へ歸つた。それは美濃方面にその軍を進めるためであつた。程なく、八月九日、三成は兵六千を從へて、佐和山を發し、美濃垂井へ進出した。この時、三成は大垣城主伊藤盛正の老臣伊藤賴母らを招いて、開城を促がし、一兵をも損しないで、大垣城を手に入れた。また三成は、尾州黑田の城主一柳直盛、淸洲城主福島正則の留守居津田繁元らを說き付けて、身方にしようとしたが、彼等は手強く反抗してそれに應じなかつた。

八月十一日、三成は大垣城に入つた。其處で大阪から島津義弘、同豐久、小西行長らを招いた。それと前後して、大阪勢は伊勢路に北國筋に九州地方に勢を伸ばして、侮り難い氣勢であつた。また織田信秀は三成が濃尾兩國を與へるといふ約束の下に大阪勢に加はつて、關東勢と戰ふ準備をはじめた。信秀は竹ケ鼻城の杉浦五左衛門、犬山城の石川貞清らと氣脈を通じた。

が、三成らが目ざしてゐた徳川家康は中々動かなかつた。家康が大阪方の彈劾文を手に入れたのは、七月二十二日、古河にゐた時であつた。二十四日、家康が小山へゆくと、伏見の鳥居彦右衛門から大阪勢が伏見に迫るといふ報知を受取つた。それは家康が豫期したことではあつたが、大阪勢の様子が思ひのほかに旺んなので、家康は近畿地方へ引返さうと考へた。その事を諸將に諮ると、本多、井伊らは、上方へ行くのに反對して最初志した通り、上杉、佐竹らを抑へ付けてから、上方へ進む方が宜いといつた。ところが、家康は深く慮るところがあるので「言語同斷のことを申すな。多年、死生の巷に出入した私のことだ。磯せゝりすることは好まぬ。この儘、直ぐに上方へゆく。」と嚴にいひ張つた。が、流石に家康の顏には不安の色が漲つてゐた。

従軍諸將のうちには、秀頼と關係あるものが、相應にゐた。池田輝政、黑田長政、藤堂高虎、淺野幸長、福島正則、細川忠興らはいづれも、打揃うて家康に加擔した。正則は家康に疑心あるのを察すると、逸早く口を開いて「私は治部少輔（三成）に一味いたす筋がござらぬ。大阪に置いてある妻子は彼れに人質として渡したのではありませぬ。たとひ、治部が私の妻子を刄にさし貫きませうとも、私はあの男と一緒に道をゆかうと思ひません。それに秀頼公はまだ御幼少で、何も御存知ありますまい。すべての寸法は治部から出てゐるものと存じます。」といつて、家康に身方する意向をはつきり現はした。この言葉を聞くと、家康はいくらか心強くなつたが、尚ほ形勢が明かになるまで、輕々しく動かうとしなかつた。

（七）大戰の前

三成は伊勢路と濃尾方面で關東勢を挾み撃つて、佐和山へは入らせまいと覺悟してゐたが、その戰ひが勝つか、敗けるか、はつきりわからぬやうな氣がした。運命は自分を祝福してゐると思ひ、またそれと共に運命は自分を呪つてゐるのではないかと疑つても見た。結束が固くない大阪勢が、眞劍になつて、最後の一人まで戰ひ續けようとは、三成の豫期し兼ねたことでもあつた。

「まあ行くところまでゆかう。事によると、家康の白髮首を討ち落すことにならうも知れぬ。」

と思ひ返して見た。

そのうち、關東勢が續々、上方に向つて進んでくる報知が三成の許に屆いた。程なく、三成は福島正則、淺野幸長、池田輝政、加藤嘉明、黑田長政、田中吉政らが井伊直政、本多忠勝と

藤堂高虎らと共に關西に向ひ、既に清洲城にあつまつて軍議を凝らし始めたのを知つた。それから續いて、家康の使者村越直吉が清洲に入つて、速かに大阪勢と戰ふよう、それとなく催促したことをも聞き知つた。三成は最初の手合せに眼を瞬つて注視したが、不幸にも、岐阜の織田信秀、竹ケ鼻の杉浦五右衛門らが破れ、三成の援軍も死地に陷つたのを聞くと、いくらか不安を感じないわけにはゆかなかつた。

「この形勢の儘に推移すると、わが軍の前途は何となく暗い。自分は最初、濃尾の諸城を關東勢がくるまでに手に入れて、地盤を固め、伊勢路にある身方と手を携へて、關東勢を喰ひ留めるつもりでゐたのだ。けれどもこの計畫がまだ緒に就かぬうちに、竹ケ鼻が敵の手に入つた上は今までの計畫が、すつかり水の泡となつてしまふのだ。この上は、大垣を出て、別に備へないと、一層苦しい日に逢はうも知れぬ。」

三成はかう思つて、小西行長と共に大垣城を出た。そして大垣と清洲の間にある澤渡といふところに陣營を張つた。また島津義弘、同豐久は三成と謀し合せて、墨股に陣取り、三成の臣、舞兵庫らは墨股の上流にある合渡川（がつど）を守つた。折柄、八月二十三日、藤堂高虎、田中吉政、黒田長政らは烈しい氣勢を示して攻め寄せたので、大阪勢は合渡川の守りを破られ、島津も亦支え難い有様となつて、すべて大垣城に入つた。そしてくづれかかつた勢を新たに盛り返すつもりで、三成は諸方の將士を急に呼びあつめた。程なく、宇喜多秀家その他の諸將が瀬田方面から、伊勢路から、また北國筋から續々馳せ付けた。

戰機は漸く熟した。

關東勢は戰勝の勢に元氣を増して、赤坂南方の高地（岡山）に陣を張り、家康の來着を待つてゐた。それに對して、大阪勢は大垣の西北に當る地方に位置を占めて對抗した。かうして家康は東西の形勢が、はつきりするのを待つてから、はじめて重い腰をあげて江戸を出た。それは小山の西上の議を定めてから、三十六日目のことであつた。それほど、家康は前後に氣を配つて、進退兩難に陷るのを避けたのである。この事がやがて三成の許に報ぜられると、九月十二日、三成は急いで増田長盛に手紙を送つて、毛利輝元の出陣を促がした。ところが、この手紙は途中、敵の手に落ちた上に、長盛が家康に身方したといふ噂が高かつたので、輝元は三成が希望した通り、秀頼を奉じて、大阪を出發しなかつた。この運びに至らなかつたのは、三成に取つて少からぬ痛手（いたで）であつた。

その頃、三成は諸將が互ひに疑ひ合ひ、思ひのほか、軍機を

説ることが少くなかつたので、內心いらいらしてゐた。差當り、三成は秀家、吉繼、行長、義弘らに信頼したが、その他は三成にはつきり、その意思がわからなかつた。その心のうちには、いろいろの不滿があつた。

「この重大時機に直政や正家は一體何を愚圖附いてゐるのか。伊勢路から來た秀元、廣家や北國筋から來た祐忠、安治らは戰爭をしたくないやうに見える。どうも安治は事によると、關東勢に內通したかも知れない。また秀元、廣家らの連中は不眞面目で大垣、佐和山の通路を經ないで、太田、駒野の方から江州路へぬけ出てしまふかも知れぬ。こんな具合に諸將が一致しないのは、どうも、身方の氣勢を弱める。それに増田長盛が關東勢に身方した一味の人々を成敗する氣込みも手ぬるい。もつと嚴重にしてくれないと、士氣が沮喪する恐れがある。せめて輝元が早く來てくれると、局面を一新するのだが、これも今のところ、賴みにならぬ。運命は身方に幸ひしない。」

三成はかうした苦境にゐて、氣をいらだてたが、もう挽回の仕樣がなかつた。大阪勢が最初の元氣に似ないで、兎角內部から分裂しようとする傾きが見えてゐるところへ「家康が清洲へ入つた。」といふ報知が來た。家康の優れた軍略は誰れ知らぬものがないので、大阪勢は一層氣勢を殺がれた。中には、苛くなつて敗北の苦慘に戰慄するのであらうことを疾く思ひ定めたものさへあつた。

三成はそれらを氣にかけた。これと察すると三成の臣、島勝猛は大阪勢の氣を引立てやうと思つて、家康の陣前に控へてゐた有馬豐氏、中村一榮の軍勢を楯川畔に誘ひ出して、鋭い一撃を加へた。大阪勢はそれを見て、少し元氣を盛り返した。けれども三成は、まだまだそれ位のことで安心することが出來なかつた。身方の分裂を防ぐ上に懸命とならねばならなかつた。

一番、困難なのは、兎角、動搖の色が見えてゐた小早川秀秋のことであつた。大谷吉繼はその事を案じ、三成の心中をも知つて、秀秋を說得することに力めた。最初、吉繼は三成と通謀して、秀秋を佐和山に誘ひ出し、生捕にしようとしたり、刺殺しようと計つたりしたほどであつた。が、秀秋は口實を設けて巧みにそれを免れた。それで吉繼は九月十四日、秀秋が大垣の西北にある松尾山に陣を置いたのを見ると、直ぐに秀秋を訪うて、太閤の恩を述べ、「豐臣家のために充分盡すべき人は公のほかにない。」といつて、大阪勢に充分助勢するよう、忠告した。」が、秀秋は表面同意した丈で、一方では、黒田長政の手を通じて、家康に內通した。この手を用ゐたのは秀秋のみではなかつ

た。安治、元綱、廣家、廣俊らも亦關東勢にそつと加擔した。かうして大阪勢は外から打破られる前に内から、いろいろの困難が湧いた。もう勝敗の數は略ぼ定つてゐた。

讀者よ、私は茲まで三成のことを描いて來て、その最後の運命を決する大戰をさながらに描きたいと思ふ熱情を抑へきれなくなつた。

「生か死か、地獄か極樂か、絶望か歡喜か、飛躍か顚倒か、天に向つて躍りあがるか地上にのさばり倒れるか、太陽のやうに輝きわたるか、暗夜のやうに滅入りこむか。」

讀者よ、關ヶ原の戰ひに臨む三成らの心の中を思ふと、かうした勝利の子としての、また敗北の兒としての辿る道のいづれもを頭に浮べてゐたことゝ思ふ。私は茲で三成の自叙傳の形式を借りて、以下の恐るべき、また驚くべき、そして痛快な悲壯な場面――手に汗を握らせる乾坤一擲の仕事を展開してゆかう。

（八）東西兩軍の決戰

私（三成）は愈よその長い間、考へてゐた到達點が、眼の前にいきいきと動いてゐるのを感じた。豊臣家の讐敵、私の生を脅迫する呪咀者、それが私の一擊を待つてゐる。私は身内の血が一時に沸騰するやうに感じた。が、敵の總大將は心憎いまで落着き拂つてゐた。その内心の驚き、抑へ難い焦燥を隱して、平氣であるやうに見えた。老猾！さうだ、家康は確かに老獪だ、私の周圍には、隱れた敵の魔手が確かに伸びてゐた。恐しい間諜が放たれて、身方が互に疑惧を起すやうに毒波のやうな中傷の言葉が、ひつきりなしに投げかけられてゐた。

わが身方には、最初から動揺し易い傾きがあつた。敵には總大將家康があつて、すべてを統一してゐるが、私の方には、その總大將がなかつた。威望と實力とをしつかり備へた人物がゐないのである。兎も角、輝元が盟主になつてゐるが、どうしたのか、まるで姿を見せぬ。秀頼公を戴いて、戰場にくるやう、私から熱心に勸めたのだが、手答へがない。油斷のならぬ恐るべき大敵と戰ふ間際に秀頼公と盟主（輝元）とを見ないのは、わが身方の中心、或はその魂を失つたも同樣だ。

それに私の威望が足りないのも、一層、事情を困難にしてゐる。私は政治のことにかけては、誰れにも負けぬ。が、軍人としての閲歴はまるでない。表立つた功名、手柄といふやうなものがない。私は始終、日蔭にゐて仕事をして來た。時に黒

つた專斷もした。それで私を理解してゐるものが存外少い。成望の足らぬのも、致方ないことだ。その弱味は私も自覺せぬのではない。が、人に先立つて家康を倒す計畫を描き出した私だ、やはり、何と思はれやうとも、身方の全體を統一するために立ち働かねばならぬ破目にある。私は勝敗のことは度外に置いてゐるのだ。けれども最初から敗北者たることを望んでゐるのではない。私の頭髮が一夜のうちにすつかり白くならうとも、私は分相應に最善をつくして、最後の一兵卒を餘すまで、執念深く戰はう。これよりほかに私のゆく道はない。

私は大谷吉繼と共に、分裂し易い身方を取締めることに非常な苦心をした。形だけは、兎も角も身方だが、心は敵に傾いてゐるやうな人々が周圍にゐるので、その心を掴へるのは、ひどくむづかしい。かうした間に私らは軍議を開いた。敵は私らが大垣城に據つて、手強く抵抗をするのであらうといふことを恐れて、大阪勢を平野に誘ひ出し、佐和山へ迫らうとするやうに思はれた。軍議の席で秀家は大垣城に據つて死守しようといひ出した。けれども籠城はともすると、身方の士氣を挫く恐れがある。それで私は寧ろ平野に出て一快戰を試みた方がよからう。私らは關ケ原に出ようではないかといつた。關ケ原は中山道と北國街道の交叉點だ、昔、そこに不破關を置いた要害の地だ。私の主張は一同に容れられた。私らが大垣城を出る時、熊谷直盛、垣見一直、秋月種長らを留めて置いた。それは九月十四日夜で雨が旺んに降つて、夜涼が身に沁むほどであつた。一同は泥濘の道を辿つて南宮山の麓、盛親（長曾我部）の陣營で焚く篝火が、ぽつと雨氣に赤く空をぼかしてゐるのを目がけて粛々と進んだ。

私の隊は笹尾（相川山麓）に落着くことになつてゐた。私は中途、隊から離れて、正家、盛親、惠瓊らを訪うて、軍略を話した。それから小早川秀秋の陣營を松尾山の麓に訪うて、その老臣頼勝に逢ひ、打合せをした。私は頼勝に「明日（十五日）わが軍の陣地に烽火をあげるのを相圖に關東勢の背後を衝いて貰ひたい。」といふと、頼勝は言下に承諾した。が、私は秀秋の心のうちを疑つてゐたので、頼勝が明日どういふ風に振舞ふか、はつきり豫測することが出來なかつた。けれども御互ひに武士だ。彼れを信じなければならぬ。私は秀秋と頼勝とを信じよう。その上は運命だ。私はかう思つて、頼勝と別れた。最後に吉繼を山中村に訪ふた。吉繼は秀秋の心事を疑つてゐた。「何といつても、北政所の手で育てられた人だ。加藤（清正）らと同じ脈だ。そこが危い。」と私にいつた。私は尚ほ軍略について長い間、吉繼と話つてから、私の隊へ歸つた。もう十五日拂曉

となつてゐた。霧が濃く山野をこめて、唯濛々としてゐた。

　わが軍の計劃は關東勢を袋の中の鼠のやうに押包んでしまつて、鏖殺の快擧を行はうとするにあつた。わが軍が全部定められた陣地に就いたのは十五日拂曉である。總勢十萬八千人、半月形の陣を描いて布置した。私の陣地は北國街道筋に當つた所を占めてゐた。前面に塁を堀り、矢來を結んで、大吉、大一大萬の六字を染めぬいた旗を押立てゝ、勝猛、郷舍の二人が大勢の部下を從へてゐた。大谷吉繼は山中村を出て、藤川の岸近く陣を進め、中山道に當る要所にゐた。島津義弘、同豐久の隊は私の陣營から一町半ばかり離れたところにゐた。また秀家の隊はわが中心の地位を占めた。遙かに離れて、南宮山には毛利秀元、吉川秀家らの陣があつた。その麓に正家、惠瓊、盛親らの隊がゐて大垣城と連絡するよう用意した。その他、それぞれの陣にゐた。唯私は秀秋を特に警戒して、萬一の場合に備へて置いた。

　敵勢は凡そ七萬五千余人であつた。家康は先頭に起つて、將士を指揮した。家康の本營は桃配山にあつた。その陣下は魚鱗の形で本營の附近に陣所を張つてゐた。その他の諸將は略ぼ一列に陣を布いた。福島正則、黑田長政、加藤嘉明、藤堂高虎、井伊直政、細川忠興らはすべて前列にゐた。また本營をめぐつて、山内一豐、本多忠勝らがゐた。南宮山のわが軍に對しては、池田輝政、淺野幸長らがゐた。私は濃霧のうちに敵の陣營を望んだ時、一種の武者慄ひを明かに感じた。わが軍には、いろいろの弱味がある、欠點がある。が陣容の上では兎に角、大規模の形で、數の上でも三萬人以上多い。二百五十萬石の大國を持つ家康と僅かに二十萬石の小國を持つ自分とが事實、互角の爭ひを赤裸々にやるのだ。運がよければ、家康を地上に叩きつけるほどの快さを味ひ得るのだ。が、その望みは？今のところ、私は唯痛快を感じるだけで宜い。緊張してゐれば宜い、私はかう思つた。

　午前八時頃だと思ふ。濃霧が漸く霽れた。敵は、わが軍の中堅、宇喜多秀家の陣をめがけて一齊に押寄せた。續いて、長政、忠興、嘉明の軍はわが隊に向つて、鋭く突撃して來た。中にも、長政は私の首級を得なければやまぬ決心と見えて、十數名の勇士を以て一隊を作り、島勝猛の隊を攻め立てた。長政の手から放つ砲彈は、度々、私の隊を悩ました。勝猛すら銃創を負ふた。この苦戰を眼の前にしながら、島津勢は一向、助けようとしなかつた。

「それはすこし冷淡だ。何とかして欲しい。」

　私は突嗟にかう考へて、八十島助左衛門を島津豐久の陣へ

派した。助左衛門は私の旨を傳へて出動を促がした。豐久は承知したが、やはり、隊を動かさなかつた。私はいらだつて再び助左衛門に豐久を催促させると、その言葉が禮を欠いてゐるといふので、どうしても動かなつた。私は軍機を逸すると思つたので、單騎、馬に鞭つて、豐久を訪ふた。そしてその活動を開始するよう、切に望むと、豐久は沈着に應接して「まあ急がずとも、各自、自由にその力を出して戰はう。勝敗は天の運である。それだけは、「どうも致方ありますまい。」といつた。この上、いひ爭ふわけにもゆかぬ。私は默つて豐久の陣を去つた。私は輕い侮蔑と淋し味とを感じた。

　その時、わが隊を主力として、吉繼、行長、秀家らの隊は最もよく戰つた。小氣味よく敵を惱ました。「時は今だ、一氣に關東勢を葬つてしまへ！」と私の心は躍りあがるやうに叫んだ。私は急いで松尾山の秀秋、南宮山の秀元、廣家らが山を下りて來て、關東勢の中に雪崩のやうに突撃するよう烽火をあげて信號した。が、肝心の秀秋は微動だもしなかつた。私は急使を秀秋の許に送つて「わが軍は正に優越である。この機に敵を撃てば、もう占めたものだ。直ぐ蹶起して戴きたい。」と促がした。老臣賴勝は「確かに承知いたしした。」と答へたが、依然として靜まり返つてゐた。私は「秀秋め、家康に計られて内通したな。」と直感した。

「運命は私を呪ひ始めたのか、前兆がよくない。」

　私はいらいらした。吉繼、行長、秀家らも必死になつて、秀秋を動かさうとしたけれども、甲斐がなかつた。

「最善をつくせ！」

　私はもう秀秋を當てにせぬことにして、身方の將士と家康麾下の精鋭を迎へて、劍戟と彈雨との間を馳せ廻つた。私の隊は猛烈に關東勢へ大砲を打かけた。流石の關東勢もその勢に恐れて一時後退した。私は「この機をはづすな。」と麾下のものに傳令して、家康の本陣目がけて殺到した。ところが、關東勢がまた盛返して來たので、互ひに入り亂れて戰つた。そこへ敵の本多忠勝が攻め寄せ、身方の足並を亂したので、私は一旦、軍を引上げねばならなかつた。けれども大體の結果はわるくないのである。私はまだ失望しなかつた。互角のところまでゆけようと信じた。不意の事變さへなければ――

　私はその時分、家康がどんな様子をしてゐたか、はつきり知らぬ。が、後で聞くと、家康は思ひのほかいら立ち、狼狽えてゐたのだ。さうであらう、さうなければならぬ。わが軍は割合に優勢で、事によると、家康が危いかも知れぬ位だ。彼れは馬を北國街道に進めて、全軍を指揮しつゝ、一方では秀秋を動か

さうとあせつてゐた。家康は黒田長政によつて、秀秋に決心を迫つたが、まだ動かぬ。彼の老臣頼勝は形勢のみ傍観した。

その時である。關東勢は怒つて、秀秋の陣へ大砲を打かけたのだ。その刹那！それはわが軍に取つて恐しい致命傷となつた。大砲の音と共に秀秋の軍が始めて目ざめたやうに動き出した。それが大谷吉繼の陣へ眞直に攻め下して來たのである。咄！

秀秋の軍勢に對して、吉繼はよく戰つた。敵は亂れて後退した。その時である、わが軍のうちから裏切るものが出たのは。脇坂安治、朽木元綱、小川祐忠らが敵に內應して藤堂高虎らの兵に合し、不意にわが軍を襲ふた。吉繼はこの困難な戰ひに全力を注いで討死してしまつた。悲痛な心友の最後を思ふと、私の心は痛んだ。が、それも直ぐに私の許に報ぜられたのではなかつた。

目前、吉繼が敗れて、秀家、行長らの隊もその餘勢に引きずられ、總崩れの體となつたのを見ると、私はその死期の近付いたのを知つた。敵はあく迄突進してくる。私の隊はすべて決死の意氣で島津義弘の兵と共に鋭くそれに當つた。前後七八回、最後の一人を殘す迄、敵勢のうちへ切り込んだ。肉彈と肉彈の大激鬪の前に血の洪水、屍の丘が出來た。私はわが隊がかく迄にひどく戰ひぬいたのを涙ぐましい眼で見た。強い感激が胸に起つた。がそれと共に勝猛や郷舍など、わが片腕と恃んだ者のものが枕をならべて戰場の土となつたのを見ると、敵に對する憤恨と敗北に對する遺憾とを痛切に感じた。

（九）伊吹山の奧へ

私は全軍敗走の前に起つて、一旦、死を決した。死の幻影が、絶えず、私を襲ふた。私は自刃しようと思ひつめたが、近臣の勸めで西北にある谷陰に身を潜ませると、私の熱した頭は次第に冷靜となつた。

「自分はこの儘で斃れてしまひたくない。大阪へ出て再擧を計る必要がある。關ケ原の半日はそれを過去の夢と見よう。ゆけるところ迄いつて見て、それでどうしても、進退を縛られる樣な境涯に落ち込んだら、この世を去らう。まだまだ自重しなければならぬ。」

私はそれを思つた。大阪は兎も角、佐和山には自分の肉身の人々がゐるので、氣に罹らぬのではないが、敵が重賞をかけて、私の首を頻りに求めてゐるので、うつかり姿を見せることが出來なかつた。私は一夜を伊吹山の奧にわびしく送つた。夜半の秋風が身に沁み、衣は露にぬれて、草枕の夢は醒めがちであつた。

朝になると、私は近臣渡邊勘平、磯野平三郎清介ら、鹽野と草野谷から大谷山を越え、鳥上山に向つた。私は多くの近臣を從へてゐると人目をひく恐れがあるので、次第に辭去させた。が、渡邊以下の三人は私と運命を共にさせて戴きたい、私の前途を見究めたいといつて、私から離れなかつた。けれども矢張、私ひとりになつた方が、人の注意から免れ易いので、三人を諭し「もし運がよく、うまくゆけば、お前たちと大阪で再會しよう。健固に暮すが宜い。」といづて、彼等を立ち去らせた。彼等は幾度も躊躇したが、そつと暗涙を拭うて、私と別れた。それが永劫の別れであつたのだ。

私はそれから唯一人、江州に入り、越前境を志した。私は力めて山路ばかり辿つた。時々、難路に行き惱んだ。饑渇にも苦められた。程なく、私は伊吹續きとなつてゐる古橋村（江州伊香郡）に着いた。其處は私の舊領地で昔、情をかけた百姓與次郎太夫といふものがゐた。私はその男の許に身を托した。が、その家にをるわけにゆかぬので、附近の岩窟に潜んで與次郎太夫が日毎に搬ぶ飲食で、僅かに生命を支えた。

そのうち、私はひどい下痢に罹つた。山路で饑渇に苦んだ時、稻の穗などを食べたのが、腹胃を害したと見える。關ケ原の戰敗に困らぬ私も、病氣には勝てなかつた。それに醫藥の料もないので、苦みぬいた。この病中に村のものが私の潜伏してゐるのを知つて、それがやがて名主の耳に入つた。それについて與次郎太夫は顏色を變へて岩窟へ來て、急を告げた。が、私は病のために、到底逃れ去るわけにゆかなかつた。

「殿樣、樵夫の姿になつて御逃げなされてはどうでございませう。」

と與次郎太夫が勸めたけれども、私はもうあきらめた。天命だ、天運だ。逃げようと思つても、身體の自由を大方失つてしまつてゐる。私は與次郎太夫の情を謝して、平生、私と親しい田中吉政の手に捕はれようといふ意を傳へた。彼れは泣いて去つた。

間もなく、吉政の臣、田中長吉が巖窟へ來た。私は乘物に身を托して、井の口村に至つた。田中吉政は恭しく禮をつくして、途中、私を出迎へてくれた。吉政は私の竹馬の友だ。太閤の生前、私は吉政を執成して友情をつくした。吉政はその事を忘れないで、私の病氣をよく世話した。私は以前、吉政が兵部太輔であるので「田兵、田兵。」と呼んでゐた。今となつても、その癖はやまなかつた。私は「田兵、韮雜炊を拵えてくれ。」と賴んだ。吉政は直ぐ拵えて、私の枕許へ持つて來た。

病氣が快くなると、ある日、私は吉政と話した。吉政は鄭重

に私に會釋して「今回數萬の大軍を率ゐて一戰を試みられたのは、すべて貴君の優れた智謀によることです。勝敗の事は全く別でございます。」といつた。私は「今度の戰ひは秀頼公の害を除いて、太閤生前の恩に酬ひようとしたばかりだ。運拙く破れたが、別段悔ゐることはない。」と答へて貞宗の脇差を吉政に與へた。

滯留三日、病漸く癒えた後、私は家康の許へ伴はるゝことになつた。關ヶ原で死んでゐたら、家康の顏を見ないで濟んだのだ。私はそれが不快であつたが、どうにも仕様がなかつた。が、顧みて疚しいところは一つもない。關ヶ原の一戰は、舊主人、幼君のためにしたことだ、また自己内心の叫びに從うてしたことだ。敗北者となつても、私の良心は曇らない。家康の前に出ようとも、私は彼れに遠慮するに及ばぬ。私は奉行の時と同じ威容を以て、彼れに逢ふまでのことだ。かう考へて私は吉政と共に九月二十四日、井の口村を出た。

大津にある家康の陣へゆくと、門外に疊を敷いて私を坐らせた。家康は私を元の佐和山城主と同じ待遇で迎へた。私は默つて家康に一禮した丈だ。それから、間もなく、私は本多正純の許に預けられた。正純は家康の旨を受けて、よく私を待遇した。が、それは形式ばかりで、正純には私の心のうちが、まるでわからなかつた。あれ丈の智者ではあるが、勝つたものは正義、敗けたものは不正だといふやうにはじめから定めてかゝつてゐるのに慊らなかつた。

ある日、私が正純と對座した時、正純は禮儀正しく、私に向つて問ひかけた。

「當時秀頼公幼少にゐらせられ、まだ是非のことを判別せらるゝ時期に達せぬ際、大老、奉行たちは天下の靜平を計られねばなりませぬのに無用の軍を起して、繩目の恥を受けられたのは口惜しう思はれませぬか。」

「足下が陪臣の身で天下の安危を心にかけらるゝ一段は感心である。けれども天下の靜平のみにこだわつてゐるわけにゆくまい。太閤の薨去後、幼君秀頼公を侮りまゐらせて、天下を覗ひ、我儘するものがゐるのを心あるものが指啣えてどうして見てをられよう。私が蹶起したのは當然のことだ。今度の戰爭は皆私一人のしたことだ。他の人たちは與り知らぬ。この旨、内府公へ言上せられたい。が、關ヶ原の敗戰は、私ひとりの責任ではない。君も知らるゝ通り、太閤御在世中の厚恩を忘れて、途中、裏切つたり、早くから敵に内通したり、或は心臆して軍を進めなかつたりした人たちにも、責任がある。が、宇喜多、大谷、島津を始め

し最後まで懸命に戰つたのだ。關東勢を幾度も惱まし
たのだ。當然、勝利は私らの手に歸すべきであつたのが、二心を抱くもの共にひつくり返されたのである。それは運命だ。それを無用の戰爭といふのは不當であるまいか。」

私はかう答へて、正純を諭した。ところが、正純は他へ言葉をそらして、私を窮させようとした。

「御高説謹んで承りましたが、私には尙ほ腑に落ちかねるところがございます。古來、名將は機微の消息を察して、的はづれのことは致しませぬ。先づ人情や時勢の上に考へて進退するのが名將でございませう。ところが、貴下は諸將の多くが動搖して、最初から同心しないのも知らず、內輪に裏切るものが相當にあるべきを考へず、唯大規模の軍を起されて敗北した後、自刃もせずに繩目の恥を受けられたのは、貴下に似合はしからぬことと愚考いたします。」

私は正純が、かういつたのを聞いて、余りに冷かな言葉に反感を起した。私は自然に苦笑し、また冷笑したい心持になつた。

「いかにも足下の言葉のやうに不明の誹りは免れまい。が、大將のゆく道は一概に是非し難い。その人の身になり、同じやうな境涯に起つて見ないと、容易にわかるものではない。君は余りに無雜作に事を判斷しようとする傾きがある。も少し謹んでほしい。」

私は再び諭して、もう正純が何といはうとも答へぬつもりで、屹と唇を嚙んだ。正純も默つてしまつた。私は「陪臣の分際で、生意氣な奴だ。」と思つた。智者としても、余りに眼先の見えぬ奴である。正純には利害の打算のほかに人生の意氣といふことが、まるでわからぬのだ。嗚！

正純は一體、家康が關ヶ原で狼狽したのを知らぬのか。私は露骨にその事をいつてやりたいと思つたほどだ。が、それをいふのは余りに大人氣ないから、差控へた。金吾（秀秋）が容易に動かぬ時、家康は「小悴めに輒く計られて口惜しい、實に口惜しい。」といつて、頻りに指を嚙みながら、地團太を踏んだのだ。敗北の場合に指を嚙むのは、家康平生の癖だ。これほどまでに家康を威嚇したら、たとひ、敗れても、武略がない、智慮が足らぬとはいへない筈である。正純は家康の影法師を余り大きく見過ぎたのではなかつたか。

（一〇）敗北者の運命

私の最後の日が次第に近付いた。

人々よ、笑ふな、私はまだ再擧を斷念したのではなかつた。それを夢といふか、幻といふか、はかない執着だといふか。所

證、私は煩惱の子だ。地獄、極樂などは、私の心胸に浮んだことがない。私は現世を愛する、その一日を愛する、否、その一刻を愛する。再擧の念が寸秒も私から消え去らぬからである。でなければ、どうして、いつまでも屈辱の生に甘んじてゐられよう。

もう秋の半ばだ。私の着衣は垢づいて、ぼろぼろに破れ、凄凉の氣が腹の底の底まで沁み入つた。行長も、恵瓊も同樣であつた。家康はそれを知つて、私らに小袖を頒つた。私は最初、誰れがそれを贈つたかと問ふと、傍らのものが「江戸の上樣です。」と答へた。「上樣とは誰れだ。」と質すと「徳川殿でございます。」といつた。私はそれが妙に不快であつた。

「當今、上樣といふのは秀頼公のほかにない筈だ。」

私は冷笑を含んで、きつぱりいひ切つた。そして家康が私に與へた小袖などは、どうでも宜いと思つた。そのうち、九月二十六日になると、私らは大津を出て、大阪へ送らるゝことになつた。屈辱の日を重ねるとのみ思ふと、私は堪らなく嫌であが、再擧のことを思ふと、私は大阪の町人らが、敗北者として私を嘲らうとも、指して笑ふとも、私は氣にも留めなかつた。堺の町を乘物で引廻はされた折も、私の頭に再擧の二字が固くこびり付いてゐた。が、その機會は？私はそれをぢつと思ひつめると淋しかつた。

九月の末、もうそろそろ京の紅葉が色づきはじめた頃、私らは所司代奥平信昌の手に渡された。今は逃れるに逃られぬ。再擧のことも一夢となりさうである。十月一日、私らは車で六條河原へ送られた。その途中、私は咽喉が渇いて仕樣がなかつた。警固のものに言葉をかけて、湯を求めると、その邊の民家にないと見えて「それは駄目だ、手に入らぬ。」と冷かにいつた。ところが、ある一人が「干柿なら少しある。それで我慢出來ぬか。」と勸めた。私は干柿が痰の毒になるのを聞いてゐたので、「それは衛生によくない。」と斷つた。警固の人たちは、私の言葉を聞くと一齊に大きく笑つた。

「もう少し經つと、首を刎ねられる人が、衛生に心がけるのは矛盾だ。」

かういふのを聞いて、私はその人々の淺慮を笑ひたくなつた。まだ運命は、すつかり私を見捨てゝゐるわけではない。もし事變が生じたら、どうする。私の同志が突如、私を奪ひ去つたら、どうする。

「お前たちには、到底私の心がわからぬ。お前たちは唯その日、その日を平凡に送つて、自ら重んずる味を體驗せぬのだ。俺は大義のために戰つて、敗北した後も大義を忘れ

ない。刻々、念頭にそれが動いてゐるのだ。首刎ねらるゝ瞬間まで衛生に心がけるのは、それがためだ。決して女々しく生命を惜むのではない。」

私は彼等にかう論してから、愈よ刑場に起つた。私は茲に四十一歳の秋を終るのだ。血の色に染む紅葉のやうに散るのだ。私たちに同情した僧が私のため成佛を祈つて、讀經しようとした。私には地獄の存在も、極樂の幻影もないのだ。僧の導きによつて、はじめて極樂へゆけると思ふほど、私は弱い者ではない。私は一種の强者だ。天下分け目の軍をした大賭博者だ。もし閻魔王の前へ出たとしたら、叱咤して、關ケ原の一戰を話してやるまでのことだ。今更、女々しくも、讀經などの用はない。私はその僧にこの旨を告げて、讀經を拒んだ。僧は驚いたやうな顔をして、ぢつと私を見つめた。

やがて劊手が私の背後に起つた時、冷めたい風が河原を吹いて、黄いろい枯葉が、はらはらと水の上に散つた。私は靜かに觀念の眼を閉ぢた。

讀者よ、私は自叙傳の形式を借りて、三成の胸懐の幾分を傳へた。が、關ケ原戰爭については、も少し起さねばならぬことがある。この戰爭は朝八時に始つて、午後二時に終つたのであるが、大阪勢の死者四萬、關東勢の死者四千といふだけでも、いかに激しい戰ひであつたかがわかる。一説に大阪勢は三萬五千二百七十余人の死者を出したと傳へられる。また大阪勢十三萬、關東勢八萬といふ説があつて、數字がはつきりしない。

關東勢の足並がよく揃つてゐたのにくらべると大阪勢の足並はひどく亂れてゐた。最初から毛利一家を大阪勢の身方に數へ入れることは困難であつた。毛利一家を勧誘したのは惠瓊であるが、吉川廣家は惠瓊の人物を信じないので、容易に動かなかつた。また廣家は輝元にも大阪勢に加はる不利を說いた。ところが、惠瓊が强ゐて、毛利一家を身方に數へようとしたのは自然の勢に戻つてゐた。廣家は逸早く、榊原康政らに三成擧兵のことに與らぬ旨を密報した。後に關ケ原の役、廣家が毛利秀元を制してすこしも立働かなかつたのはそれがためであつた。輝元の冷淡も亦自らそれと首肯かれる。

小早川秀秋は最初から鵺體の人物であつた。關東勢にも、大阪勢にも謎のうちに數入られた。が、その系統からいふと、やはり、關東系であつた。秀秋は北政所の弟、木下家定の五男で、幼少から北政所の養子として手厚く育てられたのである。」かうして眞實の母子同様の關係があつたので、淀君に黨した三

成とは、自然、反撥し合ふところがあつた。信ずべき説によると、秀秋は北政所の意見に從うて、大阪勢に裏切つたやうである。三成が早くこの點に想ひ及ばなかつたのは不覺であつた。

島津一家の進退は、毛利一族にくらべると遙かに鮮明であつた。が、義弘、豊久らは秀頼のため、余義ない形勢のために動いて、三成のために動かなかつた。三成の人物について、相當の理解はあつたが、心服はしてゐなかつた。一方、やはり家康にも意を通じてゐた。關ケ原役で、三成の指揮を快く受けなかつたのは、それらのためであつた。それはひとり、島津一家のみでないであらう。三成の周圍にゐる少數の友人と宇喜多秀家らを除くと、すべて表面、三成に共鳴して、裏面では動搖してゐたものゝみであつた。軍勢は多かつたが、實數は却つて關東勢の下にあつた。

かうして大阪勢には、最初からいろいろの無理があつたのである。

(一一) 思ひ出る儘に

敗北後の三成については、いろいろの傳説がある。三成が捕へられた話は、區々にわかれてゐて定説がない。「三河後風土記」には三成が捕へられる前、與次郎太夫に「俺を縛つて出して後難を免れてくれ。」といひ、また捕へられてから、一時、飲食、湯漿を辭したとある。けれどもそれは三成の氣象、性格にふさはしくない記事である。また古橋村に傳へらるゝ話によると、與次郎太夫の養子が、そつと名主へ訴へ出たので捕へられたことになつてゐる。一書には附近のものが山蔭の岩窟中に樵夫風の男が少量の米を携へてゐたのを見出して引立てると、それが三成であつたと記してゐる。

三成が捕へられて、大津へ出た時、其處で不圖福島正則、小早川秀秋らに逢つたといふ傳説がある。それによると、諸將が本陣へゆかうとして、途中、三成の前を通つた。最初に來たのは福島正則である。正則は馬上、鋭く三成を見下して「どうだ、今日の有様は?」と浴びせかけた。三成は悪びれずに「私は武運が拙いのでかうなつた。貴様を生捕れなかつたのは殘念だ。」と答へた。程なく、黒田長政がくると、靜かに馬から下りて「貴君が敗余の身となられたのは不本意のことであらう。失禮だが、これを着用して下さい。」といつて、羽織をぬいで三成に着せ「御健康で……」といつて去つた。

折柄、小早川秀秋は關ケ原戰で三成に裏切つたことを思ひ浮べて、それとなく、三成の様子を窺はうとした。細川忠興は「無用のことである。御やめなさい。」と忠告したが、秀秋は氣

に三成に近付いた。その姿を見ると、三成は眼を瞋らせて「私は貴君に二心があるのを知らないで信用したのは、いかにも愚かであつた。けれども太閤の恩に背き、義を捨てゝ、今日の生を全うした貴君は、それでも武將に恥ぢぬ丈の資格があるだらうか。」と叱咤した。秀秋は答へる言葉がなくて、顔色を失つたさうである。

　この傳說は各自の性格を浮べ出して興味が多いが、恐らく、想像の所産であらう。負けじ魂の強い三成は、家康の前へ出ても、容易に小さくならなかつたから、相手によつて、鬱懐を吐いたかも知れぬが、以上の問答は餘りに三成を小さくし過ぎてゐる。

　これも事實か、傳說か。はつきりしないけれども、家康は最初、三成を鳥居彦右衞門の次男成次に與へて、成敗させようとした。それは彦右衞門の死が、三成の擧兵によるからである。成次は三成を旅宿につれ返つたが、成敗はしなかつた。三成の縛を解いて入浴させ、新しい衣服を供して馳走した。そして成次は打解けて、快く三成と語つた。その翌日、成次は家康の前に出て、「父は家國のために戰死いたしましたので、私は三成を恣まに成敗することを差控へたいと存じます。三成は天下の公敵でございますから、國の大方によつて御處分願はしう思ひます。」と述べた。家康は成次の態度を賞揚した。殊に三成は「天晴の武士だ。」と感じ入つたと傳へられる。三成が彦右衞門の死を嘆賞してやまなかつたのを考へ合はすと、前後照應した美事である。

　三成が最後に臨んで、干柿を喰べなかつた話、讀經を辭した話などは、三成らしいところが、はつきり見える。が『三河後風土記』には、干柿のことをまるで記さずに「民家の前に來りし時、三成、我れ渴したり、茶をくれよと車の上より高聲に呼びければ、その家の老婆立出で、やれいとほしや、世が世にてあるならば、御門にかゝるべき身ならねど、今なればこそ、かゝる此賤に茶を所望し給ふ。いざ召上れと茶を持出でて進むれば、三成快く飮みほして、今は思ひ殘すこともなし。」云々と記してゐる。また同書に三成が喜んで讀經の聲に耳傾けたことを記し、クリスト教を信じた行長のみが讀經を辭し、僧に唾はきかけたと記してゐる。一說として玆に揭げる。

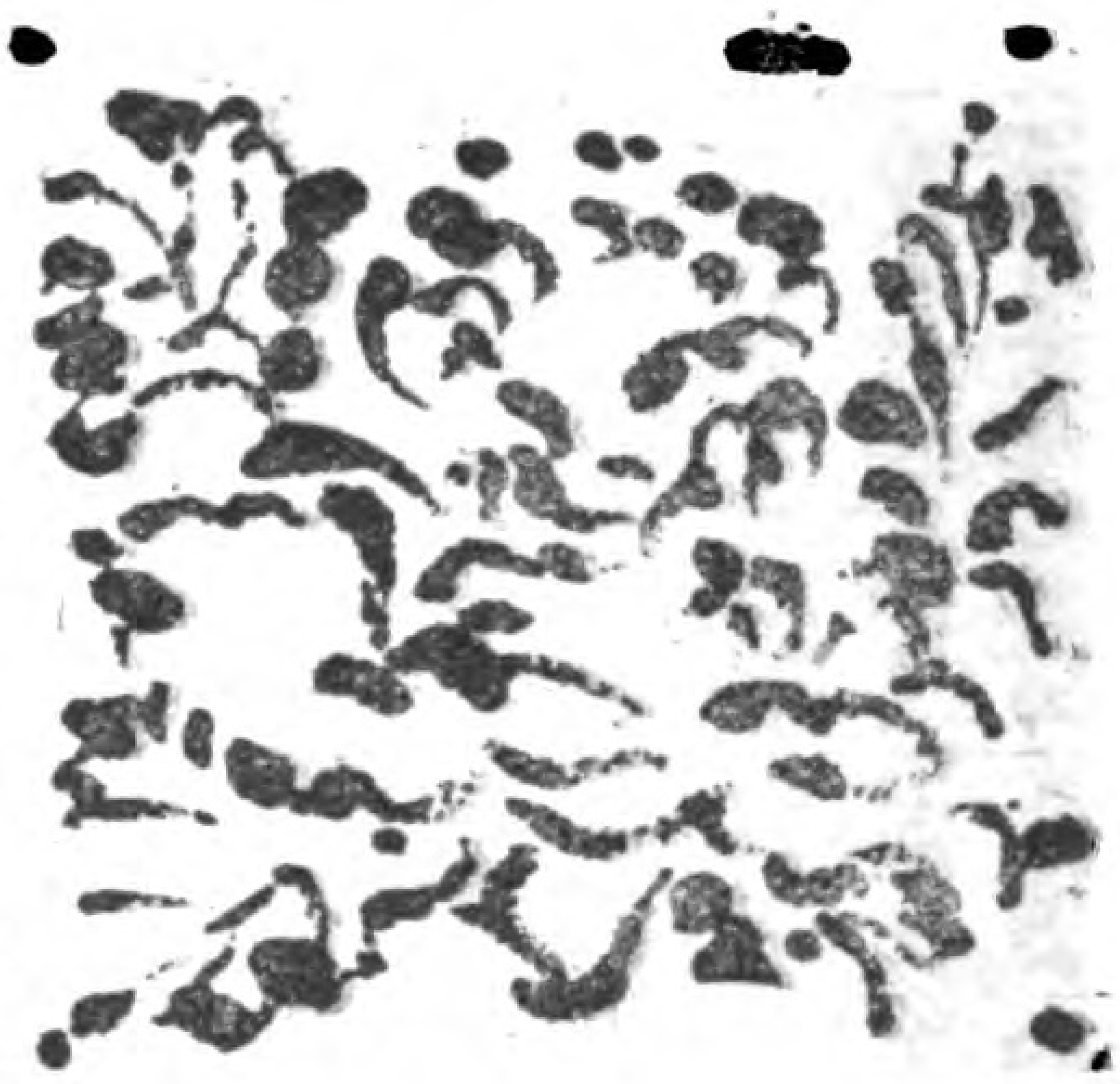
　三成の同志の末路は概ね悲慘であつた。行長も悲慘、惠瓊も悲慘であつた。殊に表面寛典に處せられたやうで、生きながら、地下に葬られたやうな目に逢つた增田長盛は尙ほ悲慘であつた。關ケ原戰後、長盛は郡山に退いたが、高力左近の許へ預けられて武州岩槻に移つた。爾後長い、淋しい月日が續いた

長盛は時の流れゆくにつれて、三成らの姿などを思ひ出して、深い感慨に沈み、自分ひとり、かうして生き殘つてゐる腑甲斐なさを思つた。長盛は「秀頼公の御前途を見屆けたら、いつ死んでも宜い。」と覺悟してゐた。

そのうち、大阪陣が起つた。左近は家康の侍臣だといつて 秀頼公の厚恩を受けた貴君は自由に大阪方のために働いてよろしい。」といつた。その言葉は解しようによつて 長盛に宜くも、あしくも考へられた。が、長盛には、昔ほどの元氣が消えてゐた。「内府公の御仁心を思ふと、私は大阪へゆく氣になられませぬ。また出かけても役に立たぬ身です。やはり、私は無爲の生を續けて、靜かに配所の土となりませう。」といつた。左近が長盛の意中を家康に取次ぐと、「では、まあ長盛の自由に任せる迄だ。」といつた。

その後、秀頼の武運が拙く、大阪城が陷ると、長盛はその死すべき時が來たのを知つてほつと安心した。長盛は左近によつて、家康にその存意を通じ、「私は秀頼公の御最期を見屆けました。もう用のない身でございます。永久に私は御別れいたします。」といつて、靜かに自刃した。

三成の同志には、かうした悲劇があるうちに、ひとり、家康から特に寛大に取扱はれたのは上杉景勝である。景勝は最初から終まで家康に反抗した。が、關ケ原戰が濟んでから、家康は景勝に米澤三十六萬石の主たることを許したのは、その裏面に秘密があるらしい。それは景勝が最初から三成と東西の聯合を約束しないで、家康の東征後、三成の蹶起したのを見て、はじめて聯合した爲めであるともいはれる。が、それは弱い理由でそれらを容赦する家康ではなかつた。それについて、内藤恥叟氏は「兼續と本多正信とが深く結托した爲だ。」といつてゐる。景勝の進退の大膽なところを見ると、何か恃むところがあつたと思はれる。この關係は永久の謎である。



戀の姿態

鈴木氏亨

私は近代の女性が辿つて來た徑路を顧みる時、其處に時代の生んだ、さま〴〵な戀の姿態（ポーズ）を見るのである。私の青春時代、矢張り、その一つの戀の姿態（ポーズ）を做つた一人であつた。この一篇は云ふ迄もなく、私の懺悔に過ぎない。が、しかし、この篇中に現はれた女性の、多少なりとも、近代的暗示を持つてゐることを否めまい。さう云ふ意味で、私は、これから近代的戀の姿態の種々相を書いてみやうと思ふのである。むろんこの一篇は、その試みに過ぎぬ

◇

女はこん夜もやつて來てゐた。――つゞけざまにもう三日も來てゐるのだつた。女はいつも一人だつた。

女はは入つてくると、定つたやうに、大理石のコクテル臺の前に立つた。そして酒を言ひ付けるのだつた。女は小さいグラスに入つてゐる甘にがい酒をつゞけさまに飲んだ。火のやうに強い酒であつた。女はそれを眉一つ動かさずに飲むのだつた。

女はこん夜も同じやうに入つてくるなり、飲場の前に立つて酒を命じてゐた。

私達の仲間や、他の客が驚いて視線を女の方に注いでゐたのに、目もくれず、酒を飲み終ると、勘定を拂つて、さつさと出て行つて終つた。

私はすぐ參つて了つた。酒が飲めると云ふことよりも、飲み振りのいゝことだつた。たつた一人酒場へ來て、酒を飲むことか、傳統を貴ぶこの都會の人々に、異端者を發見したより大きな叫びであつたに相違ない。それが眼のあたり雷が落ちたやうに行はれたのである。私の心が平靜を失つて、磁石のやうに吸ひ寄せられて行つたのに、不思議はなかつた。

それに、女の顔には血が躍つてゐた。幽靈のやうに青白く化粧した女しか見たことのないこの都會で、私には驚異であつ

た。淫蕩を思はせる切れの好い口と、黒い、長いまつ毛、繊細工のやうに透き通つた深紅な頬、それ丈でも、もう私の心は酔つてゐた。

それにどうだらう、あの大膽な振舞ひ・・私は長い間待ち望んでゐた、明い、新らしい時代の女が、直ぐ足元まで訪れて來たことを感じた。私は湧躍した。

「シヤンだね！」仲間の一人が叫んだ。女がカツフエーの扉から消えると直ぐである。

「うむシヤンだ。」私は感慨深く云つた。私の眼は女の跡を追ふてゐた。

「何者だらう。」

「なんだつていゝぢやないか。」

私は全く一人、孤獨な考ひにふけつた。

夏の夜は、私の魂を蕩してゐた。

女は、バルコンの一つのテーブルを占めて、又好きな杯を手にしてゐた。蟬の羽根のやうな薄物の間から、水色の下着が流れて、こん夜はいくらか、薄い桃色に化粧した顔をくつきり浮き立たせてゐた。黒味勝の眼は夢のやうにうつとり水の上にすべつて、夢遊病者のやうに浮いてゐる、道頓堀のボートの上に注がれてゐた。舟の上にぼんやり默つてゐる灯は水の眼のやうに光つてゐた。

私は、女の一擧一動を逃がすまいとした。

「また來てゐるぢやないか！」その時扉のカーテンの蔭から入つて來た、仲間の油繪描きが云つた。

「來てゐるよ。」私の心はもう女の魂の中に、溶け込んでゐたのだ。私ははつとした。そしてかう云つて自分を見透かされてゐる、油繪描きの嘲笑から、逃れようとしたのだ。

「女が勝手にやつて來るのに、いらぬお世話ぢやないか。」

「うれしい辭になんだい！」油繪描きは執拗に追つて來た。

「うるせいな、てめいだつてうれしいだらう。」

私は心の中で笑つた。美い女を見ることは、男にとつていちばん生き甲斐を感ずることなんだ。

「誰があんな繊細工に！」

「血が通つてゐるんだぜ。」

カツフエーの女給ばかり追ひ廻はすことを日課にしてゐる、この若い油繪描きに對して、私は皮肉に笑つてやりたかつた。

「見ろよ、あれの腹は鐵管のやう に飲物を入れるぢやないか！」油繪描きは負けてはゐなかつた。

何故か、その時、女は沈んでゐた。誰れかを待つてゐる風にも見えた。女はしばらくの間さうしてゐた。

私にはそれがもどかしかつた。慰めてやり度い氣持ちもあつた。親しく話しかけてやりたい心もあつた。しかし、明るい電燈の下で、はしやいでゐる他の客を見ると私の折角擡頭して來

た好意も、直ぐ亂雜な雜音の中に消えて行くのであつた。

時は舗道の賑やかな足音とともに流れた。

女は、それから稍々しばらく、グラスを舐めるやうにしてゐたが、急にウエーターを呼ぶと、何か小さい聲で呟いて立ち上つた。

女は、私達のテーブルの前を素通りして、外へ消えた。

私はひどく失望して了つた。

私はウエーターを呼んで、女がいま何を話したかを聞いた。

「誰かとお會ひする約束なんだつたんですつて、島崎さんと云ふ人がお見えになつたら、この名刺を渡してくれとお仰つたわ、それ切りよ。」

私は名刺を見た。それには松村みさと、小さい活字で書いてあつた。

島崎と云ふのは、私の知つてゐる、M新聞の學藝部の記者だつた。

私は直ぐ島崎に反感を持つた。

羨望とか、嫉妬とか云ふものぢやない。むしろ島崎の戀の反逆者になつてやりたかつたのだ。

私はひとりで昂奮した。それは女の姿を失ふた淋しい、やるせない心の行き場がなかつたからでもあつた。それでゐながら私の心は島崎を待つた。戀人のやうな心で待つた。

その夜、私達がその酒場をひき上げるまで、島崎は遂う〳〵姿を見せなかつた。彼はさつきの女と、どつかで會つて居るのかも知れない。

「畜生うまくやつてゐやがらあ！」私はひとりで激昂してゐた。

私は舗道を思ひ切り踏みつけてやつた。こんな時に、ビール壜の半ダースぐらゐ、叩きつけてやれば治つたかもしれない。」

それから間もなく私は女を知つた。女は文學好きで、島崎を古くから知つてゐたのだ。そんな關係から東京から大阪へやつてきたのであつた。

私達の仲間へ、島崎はかう云つて紹介した。

「眞珠だつて、いやもう人造眞珠なんだ。長い間の漂泊にも厭いて、安靜が欲しいんかもしれないよ。だがあの女は何よりも僞善が嫌ひなんだ。卑拗の前が戀しくなつてゐるのだ。もう眞實が戀しくて、戀しくてしかたがないんだらう。そのむしやくしやが、酒を呼ばせるんだ。ほんとうにあれは好く飲むよ。海の魚のやうにいつも飲んでばかりゐるんだ。一度も二度も剝いで了つて、剝き切り度いんだらうが、さうもたやすく剝けない

んだ。それが女の悩みなんだ。惡も知つてゐるし、善も知つてゐる。どちらにも强いんだ。それにいろんなものを持つてゐるよ。藝術、教養、技藝、育ちを想はせる女一通りの手巧、苦い酒も、甘い酒も、男を捕へる繩も、――だかそんなものはみな川の中へでもおつぽりだして了ひたいんだらう。女はいつも呪はれた運命だと云つてゐる。だが僕はさうは云はないよ、あれはあんまり酬ひられ過ぎたんだ。持物が多かつたんだ。過剰だ。僕はさう思ふね。不憫さうな女と……」

さう云つて島崎は、

「オイ、彼奴のために、これから飮もうぢやないか」

私達はウエーターに命じて、ウイスキーや、ジンや、てんでに好きな酒をコツプに注がせた。私もウイスキーを注がせて、一息に呑み乾した。

「酬ひられ過ぎた女に祝福あれ！」

私はひとり心の中で祈つた。

◇

私の運命は時に思ひ切つてでたらめな事をする。私は酒場に姿を見せた女と、日に增し親しさを加へてゆくに從つて、そして、女が、齒切れのよい、東京辯で、それが幾分あまつたるい調子であるにもせよ、「可愛いベービーさんよ！」なんて私を呼ぶことに於て、そしてどうやら、私が、ほんとうに好きになれさうな女であることに於て、どう考へても、私が女と知り合ひになつたことが、運命のでたらめないたづらとしか想像されない。私は運命に感謝しようよりも、すべてが豫通り行くので、椅子の下に爆裂彈でも藏(かく)されてあるやうな氣がして、嬉しさにそは／＼してゐたか、內心はびく／＼ものだつた。

「篠崎さん、私をどんなふうに思つて？」

私が奈良へ女と遊びに行つた時だつた。私達はお上(のぼ)りさんのやうに、興福寺から美術館、大佛殿、二月堂と順次に廻つて、若草山から、春日野の奧へ入つて行つた。私はつかれたので靑々とした草原の上に寢ころぶと、女も私の近くに座つた。私は今日見た美術館の佛像のことなどを話してゐると、女は突然こんなことを云ひ出したのだつた。

「どんな風つて、よくわからないね。」

私は女の唐突な問に返事した。

「私隨分でたらめに見えるでせう……さうぢやない！私、これでなか／＼苦勞したのよ。だつて、いくら苦勞したつてつまらないわ。女なんですもの、だから私、やけになつちやつたの。私を恐ろしく思はない。」

私は、女が妙に、小児じみたことを云ひだしたのを不思議に思つた。

だが、私は、女に對する好奇心が、段々薄らいで行くことを恐れてゐたのだつた。たとへ私の目の前に現はれた女が、如何にも自然さを缺いてゐてロマンテシトであるにせよ、私は偶然は偶然として、人生の矢張り一つの存在として餘びたいからだつた。

で女のその問ひには、私としては答へたくなかつた。が私が默つてゐるのにかゝわらず、女は、

「私の半生を聞いてくれない？」

と迫つて來た。

私は好きな女に頼まれることとなんだもの、それに女の過去の、知りたいと思つてゐた秘密を、女の唇から傳へられるのだもの、それが創作であらうと、嘘、僞りであらうと、異存や、不服があらう筈がない。が、しかし、そつとして置きたかつたのだ。けれど彼女の半生を、私一人丈で占有することは、愉快でないこともなかつた。

「ほんとうかい聞かしてくれよ。」

逐う〳〵私はかう云つて了つた。

「お前さんだけよ。」

女はきめつけるやうに、私に念を押した。その癖女は眼で笑つてゐるのだ。何と云ふいたづらな女だ。私はいゝ玩具になつてゐるのではないか——

「私はね、ある男と同棲してゐたのよ。男は法學士で辯護士よ、生意氣な男で、それは小憎らしい程生意氣だつたのよ。男はけだものね。最初は私を可愛がつてくれたのだけれど、おしまひには私をぶつたり、けつたりしたわ。それに私は、その男の眼が嫌ひだつたの、男つてみんなあんな眼をするのかしら……變な眼よ、思はせ振りな、眼に濁つた眼よ、少しも瞳孔が動かずに私を見据えてゐる眼よ、屹度こんな眼をすると私に無理なことをしかけてくるんだわよ。いやな眼よ。私は恐いと思はないけれど、隨分いやだと思つたわ。男ぐらいほんとうにあけすけに自分をさらけ出すものはないのね。男つて大膽ね。私は獅子使になりそこなつたの。だから別れちやつたのよ。ねえ私だつて自分があるわ。奴隷ぢやないわよ。ベービーさんこれ迄よ、私の半生は。」

「第一卷の終りですね。」私はからかふつもりはなかつたけれど、つひ、女のいゝ氣な告白が、ばか〳〵しくなつたので、云つてやつた。

「ベービーさん！お前さんも生意氣ね」女は寢ころんでゐる私

の肩のあたりを打つ眞似をした。

「ちや、こんどはほんとうにざんげするわ。」

女は急に眞劍になつた。私は女が意外にやさしく、眞面目に出たので少してれた。だがすぐ心を落付けることが出來た。

「私は不良少女だつたのよ、女學校を中途で廢して、男を戀ひして、カツフエーの女給になつて、それから田舍廻りの女優に墮ちやつたのよ。隨分いろんなことをしたわ。それにお酒も飲めるでせう。そして、私は私の思ふ通りに男を使ふことが出來るでせう。そして、私はいまの女が墮落して行く一通りの道程は、立派に踏んで來たつもりだわ。ですから私にはローマンスが澤山あるのよ。だけど私はもう、たいがいのことは飽いちやつたの、みんな何もかもいやになつちやつたの。だからいまの男だつてきらいになつたのだわ。そして、私はこれからどうしようつて云ふのかわからないのよ。だが、よくある平凡な女ね…………それに私はひどい飽性なんだから……あゝ、つまらないこんな告白みたいなことは廢すわ。もう廢しませうねベービーさん。これから私も美術館の佛像みたいに默つてゐやうかしら……………」

女がセンチメントであれば、若い男の心は、海綿が水を吸ふやうに、引き寄せられて行くものである。

私は、女の不眞面目なやうな、眞面目なやうな告白を聞くと、私丈に許してくれた過古の半生を、無意味に聞きのがすことは出來なかつた。そして、穴の中途で太い綱にでもすがつてゐるやうに、いつまでも離れがたないものになつてゆくのだつた。幻滅を感じて行くだらうことを豫期してゐた私が、反つて反對な現象を覺えて、女からのトリツクの穴を、一層深めて行かうとしたことを、私は不思議に思はざるを得なかつた。だが私などが全身をさゝげて戀しても戀ひ足りないくらゐ、女には批判と云ふものが、餘りに大きく、如實に寫り過ぎてゐるのではあるまいか。

「ベービーさん、私は父が憎くゝてしようがないのよ。私の家と云ふのは、東京に近い田舍の木綿問屋だつたわ。父は家をあけて、田舍藝妓と乳操り合つて、母をどんなに虐待したかしれないわ、父は母が大病で死んだと云ふ報らせを、女の家で平氣で聞いてゐたくらゐなんですもの、それでも私の母と云ふのは父に對して一言だつて恨みがましいことは云はなかつたわ。だから私は母が不憫さうで〳〵でたまらないのよ、ですから、私は放蕩な男を見ると、私の父に對して持つてゐる憎しみがひとりでに湧いてくるのよ、ベービーさんだつて浮氣をすれば、私は呪ひ殺して了ふかもしれないわ。いゝこと。」女は最後に冗

談のやうに云つた。

私は女がいつになく、しんみりして來たのを見た。果して女の笑ひの陰には、呪ひがあつたのだ。私はなんだか豫期してゐたものにぶつゝかつて、うれしいやうな氣がした。

「あたりまいの女ではない。」私は最初からかう、狙ひをつけてゐたのだ。そして、女が云ふやうに、ざらにカツフエーなどにころがつてゐる、平凡な經歷を持つた女であるとしても、女の持つてゐるローマンスが、私の好みにしつくり當てはまつてゐるのに、私は一層女が好きになれたのであつた。私は女を尊敬しだした。この尊敬と云ふ念(こゝろ)は戀ひだけでは、滿ち足りない境地であつた。多分その時、私は女とさうたいして年が違つてはゐなかつたと思つてゐる。私の方がその時巳の、女は未だつたと思つてゐる。その雛女は、ねえさんぶつて私なんかを小兒扱ひにしてゐたのだ。それに女は男を、どんな男でも服從させやうとして、「男からの玩弄物にあいた」と云ふ態度をあり／＼と見せてゐたのだつた。クイーン、さう云ふ氣持ちであつた。それには私と云ふものが、いちばんいゝ相手であつた。その頃私は文學好きで、若い文學者や、音樂家や、洋畫家等とある會をつくつて、毎晩のやうにカツフエーで會つてゐたから──私は遊んでゐても私一人が不自由しない丈の小遣も、どうやら拵へ**られた。それに、私はひどく人に惚れつぽい性分だつた。また、**人形のやうな女に飽き／＼してゐた時でもあつたから、すぐに女に參つてしまつたのだつた。それが今女の告白を聞いて、一層私の心を打つたのだ。私はぼんちだつた。

「みさちやん、握手してくれよう。」私は昂奮して了つた。

「まあ、どうしたのさ、べービーさん。おかしいわね。よつぽどお前さんはうれしがり屋ね。」

女はさう云つて、晴れやかに笑ふと、私の手を堅く握り返へした。私と女とは長い間手と手の接觸をつゞけてゐた。

甘いうづくやうな快さが、私の全身にみなぎつた。

逢う／＼その夜、私達は奈良に泊つて了つた。私は女の心も×××すべてを知つた。

◇

それから二三日、女は、私が行きつけのカツフエーに姿を見せなかつた。

私はなんだか無暗にいら／＼した。今夜は姿を見せるだらう、今夜こそは──と、私は内心ひどく待ち憬れてゐたのだつた。私はもしやに釣られて、女の宿をたづねずにゐた。

私は、島崎へも二三度電話をかけた。しかし、島崎はいつも留守だつた。私は最初のうちは、女の行動に好意を持てたが、

島崎がゐないとなると、急に女が怖くなつて來た。私に他人に話せぬやうな邪推もした。女も恨んだ。遂う〳〵しまいに、私の癇癪玉が破裂しさうになつて來た。私は、もうどんなことをしても、女に會ふまいと決心してゐた。

　そこへ電報が來た。

「カネ二〇〇モッテスグキテクレ」私が、電報を開いて讀んだ時、それが何のことやら判斷がつかぬ程だつた。或は誰れかの惡戯ではないかと思つて、出來る限り推測をたくましうしたが、發信人が、タカラヅカ、ブンドウヤミサとしてあるので、女が打つたのだと云ふことを拒むわけには行かなかつた。

　私は迷ふた。女の奔放な行動にあきれた。私は女の窮狀をしると、多少淡いながらも勝利者が持つ優越感を覺えた。ざま見ろ！私は少からず得意になつた。だがまた一面氣の毒にもなつた。何か深い事情なしにはこんなことを云つてよこすわけがない。さう思ふと私の心の城壁はもろくも崩れかけた。私は急に女に會ひたくなつて矢も楯もたまらなくなつた。だがしかし、女に會ふためには二百圓の金を要意しなければならないのだ。今の私に、これを拵へることは、並大低ではなかつた。私は焦燥つた。蛇のやうにのたうちまわつた。だがどうしようもなかつた。一日——一日と日は齒車が喰ひ込むやうにじりじりと延びて行つた。女からは、電報！電報！と催促が來た。私は電報！と云ふ配達夫の聲を聞くと、脅威を感じ出した。私はその聲を避けるやうにして、金をつくるために毎日奔走して歩いた。

　遂う〳〵終ひに女から「スグキテクレ」と云ふ電報が來た。私は狼狽した。金は出來かけてゐるのだ。私は直ぐにも行かうと思つたが、なんだか金を持たずに行くのは、男としての威嚴を傷ける怖れがあつた。餘りに意氣地がないやうでもある。私は躊躇した。かうして二日延びた。

　だが私は、二百圓の金を握つて、朝早く梅田から寶塚行きの電車に乘つた時には、たしかに昂奮してゐた。電車の進行がもどかしいぐらゐだつた。日一日と開けて行く郊外の賑はしい情景がどこまでも展開されるのが、可也長く待ちあぐんでゐた。やがて電車が山路にかゝつて、一方に廣い平野が長いスロープを作つて遠く横はつてゐるのを見ると、武庫川原に建てられた白亜作りの建物が、一刻も早く目に入るやうに望んだ。私の心も車輪と一所に急速度の廻轉をしてゐた。

　かくて、驛のプラットホームへ降りた時、私はうれしかつた。だが、急いでゐながらも心ではいくらか逡巡してゐた。

　私の前にはいきな湯上りを着た女と、もう一人浴衣を着た初對面の男とがゐるのだ。女が「嫌いな嫌いな夫」と云つたその男である。女は時々私と男に、同じやうな意味ありげな笑みを送つた。男はそれを笑つて受けた。男も時々私に笑みを送つた。しかしその眼は幾分私に好意を寄せてゐるらしく見せてゐて、私と女とを油斷なく監守しやう。あはよくば二人の關係を讀まうとする瞋恚がないでもなかつた。

　私はこの二人の間に挾つて、ひどくてれてゐた。

　私が旅館に訪づれると、女は、私が立つて待つてゐた玄關へ出て來た。そして魅惑的な眼で、私を意味あり氣に見た。

「よく來たのねベービーさん。おあがんなさい。」女はいつもの調子で、輕く云つて、またにつこりした。

　私は女のかうした樣子に、直ぐ不安を感じた。だが、「ゐてくれてまあよかつた。」と思ふとそんな考ひは直ぐ消えて了つた。女が私と旅館の廊下を歩きながら、

「ベービーさん、あなたにいゝお友達を一人紹介してあげるわ。」と云つた時、私は朧げながらも描いてゐた幻影が、はつきりした形となつて現はれて來たのに、驚いたのであつた。

　女はこれまで同棲してゐた男を、わざ／＼東京から呼んだのだつた。そして私はそこへ訪づれて來たわけなのだ。何と云ふ愚かな人間だらう。

　けれども女は、少しも惡びれる樣子がなかつた。至つて、輕く、あつさりと私を男に紹介した。

「この方篠崎さんと云ふのよ、おとなしい、いゝ人だわ。大阪の方よ。」

「あゝさうですか、僕は山村と云ふ者です。よろしく。」

「僕こそよろしく。」

　私はひどくどぎまぎした。

　これ丈け云つて了つて、私はしばらく默つて了つた。何んだか、二人にからかわれてゐるやうで、いくらか氣まりが惡いからでもあつた。

「こちらの方はいゝですね。」男はお世辭ばかりではなく、眞にさう思つてゐるらしく、云つた。

「えゝ！」私はどう云つたらいゝかわからなかつた。

「みさ子がいろ／＼世話になつたさうです。…………私の力では、どうすることも出來ない女ですから、隨分迷惑なこともあつたでせう。當分こちらにゐるさうですからよろしく願ひます。」

　男は私を信じてゐるやうでもあつた。私は、赤面した。

「篠崎さん、山村はこんなことを云ふことに、征服慾を滿足さ

す男なんですからね。そのつもりで聞いてゐなけりや駄目よ。」

私は女がはじめて、几帳面に私の姓を呼んだことを知つた。私の心は暗くはにかんで來た。私は默つて了つた。

しばらくすると、

「篠崎さんは矢つ張りぼんちね。」

女は感慨深さうに云つた。

私は二百圓の金のことを言ひ出す機會がなくて過ぎた。

私達は三人つれ立つて溫泉に行つた。××××と云ふのであつた。×××は武庫川にのぞんだ川岸に建てられてあつて、一室〱に仕切られてあつた。水の流が午過ぎの陽に光つて、時々川面をなでゝくる山あひの風が、汗ばんだ體にひいやりした。

私は、こゝで、×××××××××。×××××××、三色版の復製で見たルノアールの水浴の圖を思ひ出させた。一××××××××××××に醉ふた。そして私は、何よりも、××××立派で大きいのに驚かされた。海面を思はせるやうな胸の上で、ゆるやかに波を打つてゐる××××××、××××××××。××、×××××××××××××××××××××××。

私は、洗ひ場で、體軀のしやぼん泡を流すと、急いでバルコニーへ出た。私はほつとした。私は藤椅子へ裸體のまゝ腰を下ろして、對岸にぎつしり並列んだ旅館をながめてゐた。

そこへ山村も裸體で出て來た。

「篠崎君いゝところですね、すべてが遊蕩的に出來てゐるぢやありませんか。」

「僕は度々見てゐますから、そんなに感じませんが、矢張り時時やつてくるといゝと思ひますね。」

「さうでせうね。僕などは大阪がはじめてゞすから、都會の近くに、こんないゝところのあるのがひどくうらやまれます。」

「このまゝこちらにゐたらいゝぢやありませんか!」

「いや、今夜、急行で立とうと思つてゐます。ねえみさ子さうしようね。」

山村はさう云つて、風呂場で化粧してゐる女を振返つた。

「さう!隨分急なのね。だけど歸るんなら、仕方がないわ。」

「仕事の方がいそがしいので、やりきれないのです。みさ子の電報でやつと、拔け出して來たくらゐですから……」山村は辯解するやうに云つた。山村の心の中には女の放埒な行動に、超越してゐると云つたところがあつた。私にはさう云ふ山村の心理はわからなかつた。

私は、女と二人になることは嬉しかつた。が、また恐ろしくもあつた。

「みさ子さんも一所に東京へ歸つてはどう！」

私は、女とゐることに、恐怖を感じだしたので、かう云つて見た。

「そんなに嫌はれるのなら、私も歸らうかしら！」

女は、わざとらしく誇張したものゝ言ひ方をして、輕く笑つた。

山村を見送つて、梅田驛を出ると、私達はステーション前のカツフエに入つた。私は女と向ひ合つて腰を下ろした。しばらくの間私の顏を見てゐた女は、私に云ひ譯でもするやうに、につこりした。

私にはその笑が山村を嘲つてゐるやうにとれた。そして、私をも同樣に、否、男と云ふものを嘲つてゐるやうに思はれた。私は女の心の奥の惡魔的な奸策が見透されて、不快になつた。だが、私の懷中には二百圓の金が入つてゐる筈だ。私はそれの始末に困つた。

「みさ子さん！金をどうしよう。」

「まあ、お金を持つて來てくれたの、氣の毒だつたわね。いゝぢやないの、そのうちに、ゆつくり使へばね。」

「ぢや旅行でもしたら。」

私にはひどい工面をしてつくつて來た金である。一刻も早く有意義に使ひたかつた。

「當分旅行なんてしたくないわ。大阪にゐるはうがいゝわ。」

「さうか、僕はどうだつていゝんだ。」

「それよりも、いつものカツフエーに行かない。」

「あゝ行かう。ぢやタクシーでも呼ばう！」

私はあつらへた冷いコーヒーを飲むと、直ぐそこを出た。そして女と二人で、タクシーのある所へ歩いて行つた。

◇

運命は、遂う〳〵私をこんな風に導いて行つた。

私は、みさ子と同棲することになつたのだつた。私は共同生活の享樂に陶醉しながらも、一日だつてこの運命を呪はずにゐたことはなかつた。私はみさ子の狂暴な力に、打ち負かされて了つたのだから。――

私は山村に對して、自責の念を感じながら、みさ子からの同棲を拒めなかつた。その理由は私の力の弱さにあつたのかもしれない。しかし女の洪水のやうな強い力には、どうしてもかなわなかつた。私は麻醉劑にでもかゝつてゐるやうに、夢中で女に引ずられて行つた。私はみさ子に對しては立派な無抵抗主義者になつて了つた。だが、私と同棲して、一月二月とたつと、

みさ子に、憂欝な日が時々やつて來た。

それは、物質的窮乏が、二人の生活を脅かすことがあつたからかも知れない。あの小鳥のやうに快活な女が、一日ふさぎ込んでゐる日があつたり、妙にとげ／＼しく私に當つたりする日があつたりしたのだ。

私もこれには多少困つた。最初はそんな風にも考へなかつたが、だん／＼それがかうじてくるに從つて、それが、彼の女の病氣であることがわかつた。

それは、立派な病疾であつた。そして、これまでの謎のやうな彼女の性格や、性癖が、みんなそこから出てくるのであることも讀めた。

彼の女には、強度のヒステリーの發作があつたのだ。

だが、その發作が止むと、恐ろしくしんみりして來る、嵐のあとの靜寂さを思はせるやうに、彼の女の一擧一動がすべて眞情で溢れてくるのだつた。

男が、女に魅了せられる時、――私はいつもこんな時だと思つてゐる。私はこれが戀の逢魔ケ時ではないかと思ふ。

私はいつも、強度のヒステリーの後の、この女の眞情にぶつかると、ほろりとして了ふのだ。そして、みさ子の爲めならばどんな犠牲を拂つても好いと思ふ。

かうして私ひとりの生活は、戀の醍醐味を加へて行くのであつた。

その頃のあの日である。みさ子は何か思ひ出したやうに外出した。

私は不審に思つた。

みさ子は夜になつても歸つてこなかつた。

私は、この頃頻繁に行はれた、山村との文通のことを思ひだした。

その頃、みさ子は私と一所でなければ、殆んど外出したことはなかつた。それが突然に行はれたのである。私はひどく憤つた。私は同棲するもの丶孤獨をはじめて味つた。

翌日の晩遲く、みさ子は何氣なく歸つて來た。イ[illegible]チに包んだものを持つて來た。

「どうしたんだ。」私は女を詰問するやうな調子で、憤ろしく云つた。

「昨日、路でお友達に會つたのよ、それからお友達の家へ行つたの、お友達は天王寺にゐるのよ。そりやい丶家だわ、隨分贅澤な生活をしてゐたわ。あんな家にゐて、あんな生活をしてゐたら、家庭生活つて面白いものかもしれないわね。」女はさう云つて、何か想ひだしたやうに、

「それから、私に泊れ、泊れつて云ふもんだから泊つちやつたのよ。そして今日、堺の大濱へ遊びに行つたの、夜遲くまで遊んぢやつたわ、私に土産にしなさいつて、こんなものをくれたの、蛤よ。」

女はさういふと、私の前に、ハンケチの包みを開いて、小さい目籠には入つてゐる蛤を出した。

私は何と云ふことなしに、女のその言葉が信じられなかつた。しかし、それに反對する材料もなかつたので、そのまゝ默つてゐた。

「堺つていゝとこね。」女は甘えるやうな調子で云つた。

私は、蛤なんか見たくもなかつた。手に觸れたくもなかつた。だが、よく見てゐる中に、籠の外にレッテルがはつてあるが目に付いた。私の好奇心は動いた。

私は、その蛤の入つてゐる目籠を手に取つて見た。私はレッテルを見ると、欺かれたと云ふ氣がして不快になつた。それには和歌の浦土産と書いてあるではないか、女がまるつきり嘘を言つてゐることがわかつたからであつた。

私にはある邪推が湧いた。私は出來る丈想像の世界を擴げた。

更に、不快なものが私の眼に入つた。

それはハンケチである。女持ちにしては餘りに大き過ぎるハンケチである。みさ子は比較的、背格好の大きい女に似合はず、すべて持物に小さいものを撰んだ。ハンケチなんかもさうであつた。それが、これまで見馴れぬハンケチを持つてゐるのである。私の胸には疑問が湧いた。どうも不思議だ。このハンケチを見ると、堺へ遊びに行つたと云ふ女が男でなくてはならない。それに蛤の目籠のレッテルが和歌の浦としてある。私はみさ子のつれが立派に男であることを推定して了つた。それと同時に私の頭腦をかすめて行つたものは、

「媾曳！」と云ふことであつた。そしてその相手の男の山村であることに異論はなかつた。何故なれば、私はみさ子と山村との交通を默過してゐたから――だが、私はみさ子が、私の眼を盜んで、秘密裡にかうした媾曳を行つてゐることを知ると、猛然として嫉妬心を發した。そして、探偵犬のやうに彼女の媾曳の犯跡のすべてを、嗅ぎ出さずには措くものかと決心したのであつた。

それに私はまた、その頃探偵小説を愛讀してゐた、それでこんなことに深い興味を持つたのかもしれない――「オイ、篠崎も可愛想だから、こんなものでも持つて行つてやれよ」と云つた調子で、山村自身ハンケチに包んで女に渡した蛤！　私は忽

ちかう想像した。

「みさちやん。お前、昨日和歌浦へ行つたんぢやない。」

私は疾風のやうに、彼女の秘密の的を衝かうとした。

「いゝえ、」女は強いて反對した。そしてしばらくしてから、

「どうしてさ」と私に問返した。

「どうしてゞもない。」私は、私が嫉妬がましく、彼女の行動を詮議立てするのを、なるべく知らさぬやうに、平靜に言つてやつた。

「つれの女と云ふのは山村君のことだらう。」私は女の度膽を拔いてやつた。

「えつ山村！」女は一寸驚いたやうであつた。だが、「何を馬鹿な夢を見てゐるの、ベービーさん。」と幾分嘲けり氣味に、そして、私に「そんな馬鹿なことを言ふのはお廢しなさい」とたしなめ氣味に、そして幾等か哀願的に云ふのであつた。私は彼の女のかうした態度を見ると、小氣味よく感じ出して來た。もつと追求してやらう、何處までも責めてやらうと云ふ氣がつゞいて湧いて來た。

「ぢや、それでいゝとして、僕は、こゝで一つ、僕の創作した探偵小説のプロットを話さうと思ふが、聞かない。」

「あなたの創作、つまらないわ。」女は一言の下に、けなしつけて了つた。

私はそれにはさからわず、彼の女の持つて來た、蛤とハンケチとレッテルに依つて推定した、彼の女と山村との歸途の模様を、探偵小説の一節として、私は彼女の審判をしたのであつた。

先づ私は彼女の家を出た時間から想像して、最初、私は女が山村に梅田で會つた時間を推定した。そして、それから和歌山市に行つたものとして、少くとも彼等が驛前で話し合つたり、行先を決めたりする爲めに小半時間を費すものとした。それから難波に向ひ、そして、彼等は特等車に乘るものとして、恰度午後三時四十分の和歌山行に乘ることを推定した。

「みさちやんお前さんは、二人で三時四十分の難波發の電車に乘つたんぢやない。」私はいくらかの違はあるものとして云つた、そして直ぐ、私は女の顏に注意したのだ、彼女の顏色がどんなに變るか讀まうとしたのだつた。

女はさう云はれると、圖星を指されたかのやうに、さつと色をかへた。が直ぐ、何氣なく裝ふて、高らかに笑つた。

「あなた赤帽になるといゝわ。」と女は冷笑するやうに云つた。

「和歌山市へ着くと、あれからタクシーに乘つたね、そうして、和歌の浦の米榮の別莊へ行つたよ、それから、あすこの離れになつてゐる奥の部屋へ案内されたんだ、その部屋は、一番

與になつてゐて、二間つゞきの海に面したところだ。みさちやんと山村とは、今日の四時頃まで、そこにゐたね。それから、五時二十分の和歌山發の電車で難波へ來て、あれからまたタクシーで梅田へ行つて、九時の急行へ山村を送つたのだ。」

　私は、かう斷定した。

　女と男とが、媾曳の爲め和歌の浦へ行つたものとすれば、それは私にとつてお手のものであつた。私は和歌の浦へは再三再四遊びに行つてゐる。

　附近一帶地の理には可也りくわしいつもりである。宿屋も知つてゐた。そして、初めて和歌の浦へ遊ぶ男女のとる道程としては、十中の八九までかうでなくてはならない。蛤の目籠一つハンケチ一つではあるが、投げ與へられた材料としては、私には豐富過ぎる程豐富であつた。

「ルパン以上だわ！」

　かうなると女は、寧ろ、悪怯れもせず、大膽過ぎる程平氣になるのである。

　私は、みさ子が、私にうまく云ひ當てられたのに、内實を見すかされながら、自分の弱味を色にも出すまいとして、强いて反抗的に出てくることを知つてゐた。私はもつと彼等の行動を委しく説明した。

「米榮では、昨日着くと直ぐ、風呂に案内された筈だ。旅館の前の小さい巖一つへだてて、その陸にあつた風呂場へ、みさちやんは山村と行つたね。あの溫泉のやうな風呂場に、女中に案内されて山村がさきに入つて行くと、後からあなたが入つたよ。」

　私には豫備知識があつた。米榮では風呂場が戸外にあつた爲めに、明るいうちに入浴をすゝめることになつてゐた。

　そして事實さうした浴場等へは、女は決して先に入るわけがない。私は目擊して來たやうな推定を眞しやかに話した。

　私がかう迄素破拔くと、みさ子は顏をそむけた。そして急に込みあげてくる悲しさに、そこに突伏して了ふのであつた。

「あなたは私と山村の行動を指摘してどうしようと云ふの。羨ましいの、それとも妬ましいの、そんなにくやしいのなら、くやしいとお言ひなさい。あなたとなんか………いつだつて別れて了ふわよ……。」

　かう云ふかと思ふと、みさ子は急に泣き出した。

「いゝわ、いゝわ……いま直ぐでも別れるわ……。」

　女は泣きじやくつた。一瞬間、恐ろしい沈默がつゞいた。と思ふと、突如として夜叉のやうに狂暴な女を、私は眼前に見たのであつた。

私はとう／＼旋風に捲き込まれて了つた。

私は、私のつまらぬ嫉妬を悔いた。私は、女のヒステリーが沈まるためには、どんなことでもせねばならなかつた。男の尊嚴を傷けることぐらゐはなんでもなかつた。

私は女をなだめたり、すかしたり、わびたり、氣嫌をそこねないやうに、出來る丈の處置を講じねばならなかつた。

◇

かうして、私達は一年餘りもくらした。

その後山村から音信があつても、女は手紙の封を開かうともしなかつた。そして、女はいつもしんみりしてくると、私にかう云つたものだ。

「ベービーさん、私はね、ほんとうに男に飽いて了つたら、屹度あなたと一生を暮すわよ。たとひベービーさんと別れても、私が、もう男に飽いて了つたら、どんな遠くにゐても私を呼びに來てくれない。私はその時は尼になつたつもりで、あなたと生活するわ。屹度よ。あなたその時こそ私をほんとうに可愛がつてくれない。私はその時は屹度貞操を護るわ。ねえ、私の幸福を死ぬまで守つてくれない。」

かうしんみりして來て、たとへ女がヒステリーにもせよ、彼女自身としての眞實を告白されると、女がほんとうに不憫になるのだつた。そして、私の意識は、過渡期に生んだこの不具者のやうな女を、一層いぢらしく、眞から可憐なものになるのであつた。

私はさう云はれる度、どんな犧牲を拂つてゞも、私の生のあらん限り、女を救はふと決心したものだ。

そのうちに、みさ子は油繪に趣味を持ち出した。私はいゝ傾向だと思つてゐた。

私は私で、文學書や好きな探偵小說などに耽讀してゐた。

そのうちに、私達の生活の終末が來た。

一つは、私の物質上の窮乏が、救ひ難いものとなつて來たからでもあつた。

もう一つは、矢張りみさ子の感情の破綻であつた。

みさ子は別れる前夜、しみ／＼とした調子で、

「どんなにしても、もう一度私はあなたと一所になつて見せるわ、ねえ、そして、もう私が他の男に飽いたら、屹度私と一生をくらして頂戴、その時が來たら、どんな遠くにゐても來てくれない。ほんとうよ。このこと丈けは私は決してたがへないわ。」

かう云ふのであつた。

それから私達は別れた。

みさ子は翌日東京へたつた。

この話は、これで濟めば、みさ子は單なるセンチメンタルな、世間にさらにある女として、私の頭腦に殘つただけかもしれない。しかし後があつた。そして私としても、このつゞきを是非讀んで貰ひたいと思ふのだ。

　みさ子に別れた私は、ひどく自暴自棄になつて了つた。酒も以前よりは多くいけるやうになつたし、紅燈の巷にも足を入れるやうになつた。私の生活は滅茶〳〵になつて了つた。私の思想はいくらかニヒリズムに傾いて行つた。

　女と別れて、三月ばかりしてからのことであつた。私は、例の私達の仲間がよく集る酒場にゐた。私はその頃惡い病に罹つてゐたので、いくらか世事に對して哀觀を感じ易くなつてゐた。そして妙に怒りぽつくなつて、憂鬱でもあつた。

　私はその日はひる過ぎから、酒を飲んでゐた。

　電燈がつきかけた頃だと思ふ。

　私は、扉を開けて入つて來る客の中に、珍らしい男を發見した。私は最初はよくわからなかつたが、よく見てゐるうちにそれが山村であることが分つた。山村は頭のてつぺんから下顎へかけて繃帶をしてゐた。私も突然の邂逅に驚いたが、彼も驚い**たらしかつた。**

「しばらく！」私は歡んで迎へ入れた。私は山村のところへ走つたみさ子の、その後の消息も聞きたかつたからであつた。

「ヤア！」彼もにつこりした。

　私と彼は、二階の一室で卓子を圍んだ。

「どうしたんです。その繃帶は！」私は氣になるのでそれから聞いた。

「惡い腫物が出たんですよ。」

　私は、山村の不氣味な顏を見ると氣の毒になつた。

　だが、私は山村と二言三言挨拶を交へて、みさ子の消息を聞いてゆくうちに、山村の心は私に勝利者としての優越を誇らうとはして來たのではなかつたらうか？私を敵として、みさ子を彼が完全に占有したことを、誇るために來たのではなかつたか？　を疑ひ出した。

　私は内心憤りを發した。

「馬鹿野郎みさ子は完全に俺のものなんだ。誰がてめいになんか渡すもんか。てめいを充分食つて了へば、みさ子はいつでも俺のところへ歸つて來るんだ。」

　私は山村に、面と向つて、かう云つてやりたい位だつた。

　しかし山村は暗に私に、羨望を強いるもののやうに、

「みさ子は大變私に柔順になりましたよ。全く生れ變つたやう

です。私も別人のやうになつたみさ子を、不思議な目で見てゐます。みさ子の心理ぐらゐわからないものはないのです。」

私は山村の言葉を聞くにたへなかつた。それは何よりもみさ子を、御し得たことを誇つてゐる意味に、とれたからであつた。私はみさ子が別れる時の言葉、いつも私を慰めてくれた言葉を、想ひ出さずには居られなかつた。

「男に飽いたら、いつでもあなたと一所になるわ、その時はどんな遠い處にゐても私を迎いに來て頂戴！」と云ふ言葉！其の言葉であつた。

私は、かなり醉つてゐたからかもしれない。山村に戰ひを挑んだ。

「山村君みさ子は誰れに、ほんとうに惚れてゐたらうか。僕にだらうか、君にだらうか。」

私の言葉に、山村は意外だと云ふ顏をした。

「そりや僕さ！」

彼は、露骨に敵意を示して來た。

「いや僕でせう！」

「僕だよ！」

「僕です。」

私は、山村といつまでも抗爭した。

「僕だ。」

「僕です。」

二人はお互に讓らなかつた。

「ぢや、かうしようぢやないか、これから二人でみさ子のところへ行つてみようぢや無いか。そして、誰れにあれが惚れてゐるか。聞く方が早いぢやないか。」

「行かう、これから直ぐ行かう！」私は立上らうとした。

「九時四十分の急行に間に合ふかもしれない。」山村は洋服のポケツトから、薄側の金時計を出した。

「もう九時だ。恰度いゝ。これから直ぐ梅田へ行かう。」

「さあ行かう。」私は、酒場の主人に話をして旅費を借りた。

私達二人は、道頓堀の通りを湊町まで出るとタクシーで、梅田へ向つた。

私も、山村も寢臺をとつた。二人は列車の中でも、食堂が閉鎖する迄飮んだ。二人は全く醉ひつぶれてから、各自の寢臺に體軀を運んだ。

私は、明日の首尾に全く自信を持つてゐた。それ丈けによく眠れた。

私は、不圖渴を覺えて、眼を醒ました。

汽車は身悶るに、揃ふやうに走つてゐた。

私は寢臺から、グリーン色のカーテンを追ひのけて出た。

汽車が急にカーブしたので、私は危くよろけようとした。

私が洗面場へ行つて、口をそゝいで、歸つてくると、私の隣りに寢てゐた寢臺の中の、山村の繃帶が眼についた。私ははつとした。その瞬間、私はその後の光景がフイルムのやうに映じたのであつた。

「敵！」

私の心にはある企圖が湧いた。

か、しかし、……………私は、考へた。そして寢台に入つて、また軀を横へた。いま、私は、私の體軀から分泌してゐるある毒素を、脱脂綿にしめして、私がそれを持つて、直ぐ隣室に寢てゐる山村のところへ忍び寄つたとする。そして、私は山村が醉ひつぶれて、正體もなく寢てゐる體軀にふれずに、そう！と彼がいくらかゆるんでゐる繃帶を除けて、膿がにじみ出てゐる腫物の中へ、脱脂綿に附着してゐる毒素を入れたとする。

あゝ、その結果、山村はどうなるだらう……………そうして、それは單なる山村の不注意として、山村の死の謎は、永久に葬られるものかもしれない。…………………それからみさ子は、立派に私の所有となるのだ。事實山村の生命は私の手中にあつたのだ。

私は、寢台の中で、幾度、それを決行しやうとして、起き上つたらう。だが、その夜、いく度私はみさ子の、「私は他の男に飽いたら乾度、あなたのところへいくわ」と云ふ囁きを耳元で聞いたらう。

私は、勝利が苦も無く私にくるやうに信ずると、山村を生きながら殺し得ることに、ほゝえまずには居られなかつた。汽車は、この二人の競爭者を乘せて目的地へ向つて、進むのであつた。

私は、いつの間にか、深い眠りに入つてゐた。

東京驛へ着いた私は、晴れの競技へ出場する、選手のやうな興奮を心に感じてゐた。

「山村君二人一所に行かうぢやないか！」

私は勇敢に誘つた。

「君一足先に行つてくれ給へ、僕は後から行かう。」

私は、その言葉を聞くと、直ぐ驛外へ出てタクシーに乘つた。

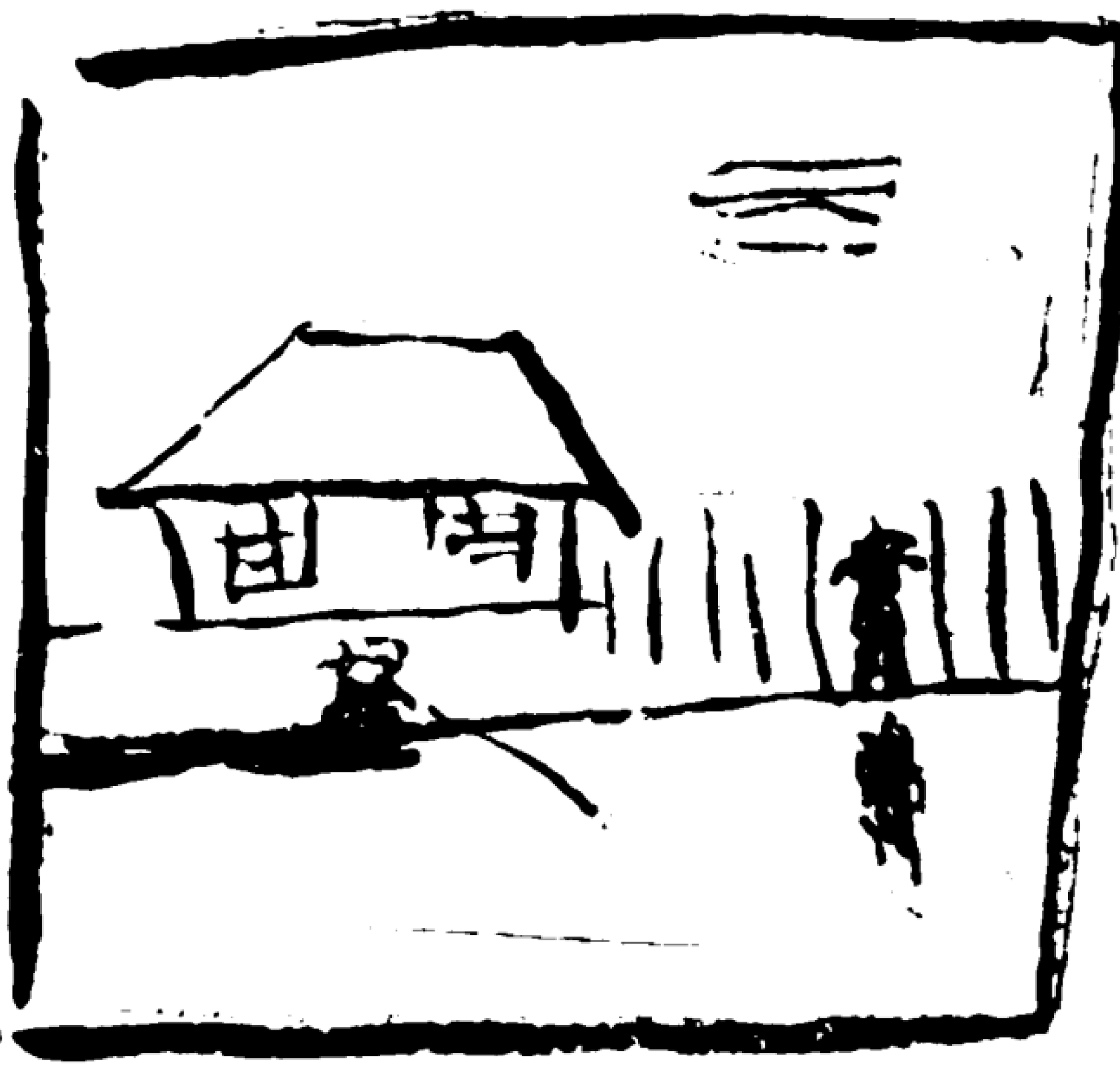
「青山五丁目へ！」

私は高らかに叫んだ。

「まあ篠崎さんなの！」
みさ子は、玄關に立つてゐる私の顏を見ると、餘りに意外なのに吃驚したらしかつた。
「珍らしいわね、どうしてゐらしつたの、お上んなさいよ！」
「聞きたいことがあつて來たのだ。」
私はこれ丈け云つて上つた。
私はどう云つて、訊かうかと思つた。しばらくの間考へてゐた。私は單刀直入に訊ねた。
「みさちやん、あなた、山村と僕とで誰れをほんとうに愛してゐたの。」
私は半ば勝利者の態度だつた。
「ほほ……、聞きたいことつて、そんなことなの、……隨分おかしいわね、どうかしたの？」
私は昨夜からのことを簡單に話した。
「で僕は、みさちやんに聞きに來たのだ。」
私の豫期は、飽くまで飜へさるべきものでないと、かたく信じてゐた。
「そんなこと、そんなことなら解つてゐるぢやない。私は矢張り山村が好きだわ……あなたは隨分ぼんやりね。」
女はかう力強く云つて、輕く笑つた。
私は急に、目つぶしをかけられたやうな氣がした。ものが云ひなかつた
「何と云ふ、お目出度さだ……」私はさう思ふと、一刻も女の前にゐたゝまれなかつた。決して聞かうとする勇氣も挫けた。私は、逃げるやうにして、其處を辭した。

私はその夜、神戸行きの三等急行に乘つてゐた。
その時私は、昨日以來、二日間の出來事を客觀することの出來る餘裕を持つてゐた。そして寢台の中で山村に對して持つた考を辱ぢた。すべてが憫むべき人々であつた。私にとつても惡まれない戀であつた。私は時代の生んだ奇形な、悲しい戀を、諦められぬ心の中で反芻してゐた。

（完）



巴里百景

コンコルドの幻想

武林無想庵

埃及の廢都ルウクソルから、はる〳〵船長ヴエルニナツクに運ばれて來て、一千八百三十六年十月二十五日、時の佛王ルイ・フイリツプの面前で、無量の民衆の大歡呼裡に、技師ルバア氏の作にかゝるこの礎の上へ、このとほり見事に建立されたものだといふ。

で、その礎のチユイレリイ側へ刻みつけられた平易な羅典語の碑銘すら、字引なしには滿足に讀みおほせぬ身が、その間に何千年といふ星霜が經たとはとても思はれぬ、きのふ磨いたばかりのやうにつや〳〵した、花崗岩の大オベリスクの、その四面を埋めたイエログリフなどが、何として理解し得らるゝ筈があらう？……

長大息して、方尖塔の頂點を見上げると、ちぎれ〳〵の灰色の雲が、南から北へ、南から北へと斷續して、慌たゞしげに低氣壓の空を走りぬけてゐた。

——餓死……親子三人手をつなぎあつて餓死……と、ほとんど百計のつきはてゝ了つたやうな、恰も人生の八衢に行きくれた矢先であつた。茫然として僕はそこへ佇んだ。そのオベリスクの臺座の下に。

行きづまつた生計の苦悶にか、折からの暑さにか、原因はそのどちらだか、或は二つながらだか、それは勿論わからぬけれど、とにかくカツと頭へ血がのぼつて、非常にのぼせた結果なのであらう、右の方の一眼が、或日パツタリ視力を失つて了つた。で、とりあへず、下の藥種屋でアドレスをきいて、アヴニユー・ヴイクトル・ユーゴーの眼科醫ルウイ氏の許へかけつけて診察してもらふと、それが Glaucome —— 即ち綠内障に罹つて

ゐるものと判明した。

——フン、色彩と輪廓との世界に、そろそろもうお暇か……その先驅として先づ遠近がなくなつて了つたわけだ。なアんのこつた！と、ガツカリしてつぶやくと、

——まア、いゝわよ。今迄さん〴〵お世話になつたんだから、こんどはわたしが一生懸命に働いて、高がこの親子三人口ぐらゐ、どうにかして養つて行つて見せるわよ。だから、まア、安心して、そんなに悲觀なんぞせず、氣長に靜養してお出でなさい。と、どうした彼女の風向きか、どうその心境に吹き變つて來たものか、近ごろしきりに薄氣味のわるい昔風の良妻賢母ぶりを發揮する運命に逢着しはじめつゝある女房が、殊勝にもさう云つて慰めてくれるわけだ。あだかも空前絶後の素晴らしい感興をもつて、ガストン・ルルウの短篇 La femme au collier de velours の飜譯に、ほとんど寢食を忘れてまで、彼女がとりかゝつた最中であつた。

二週間ほどして妻の飜譯はをはつたが、絶望的に全く見えなくなつて了つてゐた右の眼は、その頃になると、どうやら少しづゝ雲ぎれがして、又元通りの明瞭さで、再び見えはじめるやうになつた。恐らくルウイ氏の診斷したやうなそれほど重大なる緑内障ではなかつたものなのであらう。で、もう一度見てもらひに行く筈だけれど、さうしてさう約束はして置いたけれど、やめにした。行くたびに三十フランづゝとられるのが、非常に惜しくてたまらなくなつたからだ。自由は勿論のこと、平等、同胞愛、すべてただ金錢を通じてのみお互の間に實現さるゝを常とした文明國にゐる悲しさには。

三十フランは我々一家の一日の食糧だ。

『全世界のプラース中でおそらく一番美しいこの巴里なるプラース・ド・ラ・コンコルドは一千七百四十八年に濫觴する。ルイ十五世が恰も重い病氣であつた。さうしてその平癒をことほぐために、巴里市民は馬上姿のこの王の一彫像を奉建すべく議決した。王は彫像設置のために、チュイレリ園の端頭に位せる敷地をば市民に與へた。（一千七百五十五年中に送られたる書翰による。）ビギヤルによつて完成されたブシャルドン作のこの彫像は、一千七百六十三年六月二十日、おごそかに除幕された。讃歎の聲は高くなかつた。で、臺座の隅々に、平和、愼重、威力、及び正義が直立したが、これが次の如き一聯の落首を口づさませた。

おゝ！　美しき彫像よ！　おゝ！　美しき臺石よ！

道德は徒歩、惡德は騎馬！

『時の最良の建築家ギヤブリエルが、リユー・ロワイヤルの分括する兩個の美しい記念的屋面を建設する事に於いて、このプラースの裝飾を完全にした。はじめは造幣局であるべき運命であつた左方のそれは、引きつゞいてオテル・ド・コアスラン、オテル・クリツソン、オテル・ド・ブレツシ・ベルヴイエール、王室納戶所などになつたが、一千八百九十八年十月以來、自働車クラブがそれを占有してゐる。左方の宮殿は海軍省の所在である。

『當時このプラースはルイ十五世の名をとゞめた。一千七百九十二年十月十二日、彫像はくつがへされ、自由神像が置きかへられ、同時にプラース・ド・ラ・レヴオリユーシオンと命名された。恐怖時代の間、斷頭臺がこゝへ常設されてゐた。さうしてそこで落ちた最も有名な人々の頭の中に、ルイ十六世、マリイ・アントワネツト、マダム・ロウラン、ルイ・フイリツプ・エギヤリテ、マダム・デユ・バリイ、ブリツソタン黨員達などがあつた。一千七百九十五年十月二十六日の法律はこゝへプラース、ド・ラ・コンコルドの名を與へた。

『現在の裝飾はルイ・フイリツプ一世の治下に由來する。ルウクソンのオベリスク、兩個の記念噴水、それからリヨン、マルセイユ、ボルドオ、ナント、ルーアンブレスト、リイル、ストラスブール、即ち八市の八彫像がこゝへ据ゑ置かれたる一千八百三十六年の事である。ストラスブールとリイルとのそれはプラディエの作である。アヴニユー・シヤム・ゼリイゼの入口には、ギヨンム・クスツウによつて彫刻されたマルリイと稱せらるゝ駿馬が立つ。チユイレリイの入口には、屢々驚馬の名の下に指示さるゝ、コアズヴオツクスのルノンメとメルキユールとが相對して立つ。』

とり合へずこれだけ寫しとつて置いて、早速そのラルツスCの部をぽ、一世紀以前の郊外を忍ばしてコチヤ／＼と小にぎやかな、今は電車もビユスも頻繁に通る、狹苦しい、危險なリユ・ド・バツスイをはすツかひに横斷して、近所のポール・ソーニエール町二番地に住む望月女史の許へ返しに行つた。

ボアに面したブル ヴール・モンモランスイのメーゾン・ド・サンテ、ヴイラ・モリエールで生まれたイヴオンヌが、生後あだかも三十七日目から、即ち一千九百二十一年一月十日から、同年七月十九日まで、徒らに無我夢中であるにすぎなかつた我々夫婦の第一次巴里生活が、そこで點火されたマグネシウムのやうに、メラ／＼とたわいもなく燃燒されて了つたアパルトの建

街と、双方ともユージエーヌ・マニユエルの通りに沿うて、おたがひに隅角をなしつゝ相對した家だ。

——まア、這入つて、お話しなさい。と、愛相よく女史に云はれたけれど、日本へ向けて出發前のアンバラージにいそがしさうだつたので、かたぐ〵そのまゝで辭し去つた。

女史はまだ二十歳を越えぬやうな年輩に見えた。昔に名高い石川三四郎氏の娘さんだといふ。どことなく伊藤野枝氏の面影が思ひ出されたりした。

羨むべき青春よ！

十七歳から二十歳までの間に、Wiadle au corps と Le Bal du c.m e d'Crge との二作だけを遺して、昨年死んだ Raymond Radiguet がしきりに人々の噂に上りつゝある折からではないか？キーツ、一葉……なぜ二十年以前に死んで然るべき天才を荷つてはこの世に生まれ得なかつたものであらう？……あ……！

妻の譯したコルシカ島の復讐談には、戰慄すべきその物語構成の狙ひどころとして、斷頭臺上のマリイ・アントワネットが、いかにも巧妙に取扱つてあつた。ルーアンで焚かれたオルレアンの少女と共に、頬はしいまで傳統的なるこうした民族の脳裏からは、恐らく永遠に忘却し去り得られざる代表的の女性だからであらう。

すなはちその美しい首の落ちたコンコルドだ。血なまぐさいコンコルドだ。と、その當時の不可解極まつた自由神像か、或は有名なるサンソンのギヨチンが据ゑられたあたりでもあらうところに立つた、そのオベリスクの臺座の下だ。さうして、

——餓死……親子三人手をつなぎ合つて餓死……と、それより外にはもう何事をも考へられなくなつて了つてゐた瞬間だ。忽ち僕の心頭に、野分の吹きすぎる職野の一角に、斧膽する意識流の一泡沫に、月光の如くチラリと高瀬の姿が映つた。

……高瀬だよ、君、川田君、あの高瀬精太の姿がだ。

——オイ。と、あだかも二十四五年前そのまゝなる、例の詩人的にやゝ悄悴した。君も知つてゐるあの通りの容貌で、うしろからやさしく僕の肩先をば心持小突きながら、

——どうした？と、謎のやうにニツコリ奴は微笑したものだ。

さう、容貌は……容貌だけはなるほどそツくり昔のまゝだつたけれど、と見ると、いかになんでもこれではあまり貧乏くさすぎる見すぼらしい僕自身のそれが、思はずカツと氣ツぱづかしく顧みらるゝほどそれほど、奴の服裝は夥だしく立派であつた。淡い縹渺とした銀鼠の恐ろしくシツクな夏服を着て、黑

の幅の狭いリボンをかけた同じ地の同じ色の最新型の夏帽をかぶり、西藏の喇嘛佛から取りはづして來た希世の寶玉でも思はせるやうな、素晴らしく妖艶な裝飾をかゞやかした細身の奇拔なステッキを横たへ、さうして埃及の神秘的なこの本物の象形文字に埋められた雄大なるオベリスクの下へスッキリと彳んだ恰好は、詩人高瀬精太と云はんよりは、何となく寧ろゴーチエのロード・イヴアンデールに近かつた。

——なんだ？死んだんぢやなかつたのか？………それにしてもあんまり意外だ！

と、オロ／＼聲で僕がつぶやくと、

——人の事よりや自分樣はどうだ？いつまでこの世に生きてるつもりなんだ？と、物靜かな落ちつきはらつた聲で、ニコニコしながら奴は答へると、昔の洋銀が今のプラチナに代つた強度の近眼鏡の底で、鋭い、併しサン、パチックな視線を放射した。

——あれから何年になるか知らん？

——さア、何年たつたらう？

感慨無量に二人とも押默つた。

眞正面から見たアヴニュー・デ・シャンゼリイゼが、すぐわれ／＼の目の前にあつた。

ヲルッスにマルリイとある一對の石馬が躍る石門をその境界線として、ソロ／＼もう黄ばみはじめたマロニエの緑陰地帶が、そこから左右へコンモリとひろがり茂つてゐるわけだ。と、突きあたりに小さく遠く、恰も夢幻の國の樓門の如く、並木の上へボッカリ浮きあがつて現じてゐる凱旋門の方向から、間斷なき自動車の行列が瀾波瀾をなして、極度の快速力でトッ／＼とたぎり落ちて來る。

僕は溜息をついた。

——いつまでこんなところへ突ッ立つてゐても仕樣があるまい………とにかく來ないか？と、しばらくしてから、高瀬は一寸ステッキを小脇にかゝへ込むと、心持とがつた顋の先で僕を促した。

——どこへ？と、ボーッとした僕が夢心地でたづねると、

——あすこだ………と、例の燦爛たるステッキのにぎりをば、何かの標徴のやうに、脇の下から又すぐ右の手へ持ちなほすと、石突の先で、奴は無造作にルノアン・プレストの兩女神像が端座する方向を指し示した。

——あすこッて？

——オテル・クリヨンの事サ………多分もう起きてるだらう

……まづ第一にマダムを御紹介しよう。

オテル・クリヨン！この間アメリカの活動役者ダグラス・フェーアバンクスがメリイ・ピクフォードと共にそこへ滞在してゐて、一日平均百千フラン以上使はせられたといふ宿屋だ。

四千フラン！それだけあれば僕等夫婦にイヴォンヌを加へた三人口が、リュ・デュパンの三階に住んで二ケ月は優に食ひつなぎ得らるゝ筈の金額だ。フェーアバンクスの如きヤンキーはともかくとして、何だつて高瀬が、我々の知つてゐる高瀬が、あんな箆棒なところへ自慢らしく泊り込んでゐるのであらう？

……

海軍省の屋上には三色旗がひるがへり、しツきりなし自動車の連鎖を呑吐するリュー・ロワイヤルの盡きたところ、そこに列柱の立つた美事な希臘建築のマドレーヌ等が、チラリト視神經に感じた刹那、僕は心にこんな念慮を思ひ浮べながら、默々と高瀬のしりへについて、かの男性女性の希臘神話の海若どもが一つ〳〵抱きしめた魚類の口から、しきりに水の迸出しつゝある大噴泉の前を過ぎた。さうしてルーアン女像の横手から、ツとショツセエを横斷して、やがてホテルの入口に達した。

一般にルイ・キャンズとか、或はジャンル・ロキャイユとか呼びならはされたる、たぶんさうしたこの國特有の室内裝飾なのであらう。そこら邊に怪しく青貝のピカ〳〵ひかる、又煩はしく變手古に込み入つた鍍金細工のゴテ〳〵とりつけてある諸道具の据ゑられた、いやに薄ツくらい、さうして甚しく古色蒼然たる小サロンの中へ導き入れると、

――暫くこゝで待つてゝくれたまへ。と、どぎまぎする僕をばそこの腰掛椅子の一つへ落ちつかせて置いて、

――すぐ來る。と、高瀬はそのまゝ次の間へ通ずる扉へ手をかけたが、何と思つたか、一寸顧向き、

――君は支那語を話すかい？ 支那語と云つても、さう、所謂南京官話といふ奴だ……と、口早にそゝくさと訊いた。

――無論話しさうな筈も氣づかひもないが……なぜ？ と、あツけにとられて訊きかへすと、

――いや、どうかと思つて、一寸訊いて見たゞけなんだが話さなけりアそれでいゝのサ。やツぱり英語か佛語でやるとしよう。……なアにね、實は、これから君に御紹介しようと思ふ現在の僕のマダムと僕との間では、日常用ひなれた南京の支那語でばかり話してゐるからなんだ……と云ふのは、要するに彼女が日本人でないといふ譯サ。のみならずだ。僕のかうした生粋の日本人であるといふ事すら、不思議なやうだが、彼女は

まだ充分によく了解してゐてはくれないらしいのだ……こゝのうちの宿帳を見ればわかると語り、今日では、僕の國籍は中華民國サ……で……

三十年前の番町小學校で、今だに覺束ない英語の習ひはじめ、例のエキゾチックに黄ろい表紙をしたナショナル・リーダーの、たしか第三讀本の終尾に近くなつた、かのクリスマスの晩夜に、暖まるべく一本々々マッチをすつて、その火を光と熱とのチロ／＼と明滅發散する刹那ごとに、種々さま／＼なる美しい幻影を凝視しつゝ、あはれに凍死した少女のやうに、われわれ親子三人の、いよ／＼明日からの生活費の工面がつかなくて、さうして絶體絶命にコンコルドのオベリスクの下へ立ちすくんで了つた僕の、錯亂した、顚倒した、混沌たる頭の中へ渦輪を卷きはじめた、恐らくこれが荒唐無稽談の發端なのであらう。

その人の全集の日本に於ける一切の飜譯權の全部をば、さしあたりとにかく彼女自身の一手だけに讓り渡して置いてもらふために、この頃しきりと妻が手紙をやりとりしたり又たび／＼會見したりしつゝある、甚だ評判の高いガストン・ルルウ氏の、世にも幽邃不可思議を極まつた探偵小説に、凡そいかなる瞬間にかぎらず或種の先天的欠陥から必ずいつもガランドウであるを常とした僕自身の變質的腦神經の中樞が、突然バタ／＼と侵され影響された、勿論その伴ふべからざる結果である。

高瀬もまた昔エドガア・アラン・ポオに恐く心醉し惑溺した青年の一人であつた。「黒猫」「エルグ街の二重殺人」〝Maelström〟さう云つた科學的怪談が、或はスチヴンソンの〝New Arabian Nights〟とか或はハガードの〝She〟などと共に、キラリ／＼感激の目を光らしつゝ、又息だはしい小鼻翼をひろげながら、我を忘れて白々明まで、マンジリともせず、ズツと物語りとほしたる、熱しきつたあの男の脣の上へ顫へたものだ。

僕の妻は作者自身に勸められて、新たに、〝Le Mystère de la Chambre Jaune〟を譯しはじめたところだ。

さうした妻の飜譯と雁行して、もう既に十數年以前に死んだ筈の詩人高瀬精太をば、かくコンコルドのオテル・クリヨンに復活させて、僕はこれから僕一流の、デタラメきはまつた、根も葉もない、全くトリトメのない、甚だ傍若無人なる、いよい

よ本題に入らうと思ふ。

が、それに先だつて、生前に於ける高瀨精太と僕自身との關係をば、この話の豫備智識として、一と通り讀者諸君の頭の中へ注ぎ込んで置く事にしよう。勿論、君を通じてだ。

小山内だけは中學以來のそれだから別として、高瀨は君や上村や、また太田、吉田と同樣に、僕とは明治三十二年。云ひかへれば一八九九年。即ち字義どほり正確に十九世紀の Fin de siècle であつた年。型の如き一高文科の新入學生として、お互にまだ若々しかつた第一印象の顏と顏をば、この世ではじめて吉例の如くさらし合つた仲だ。

昔ながらに厚い友情の籠つた甚だ懇切なる君の書信によれば、君のところの周雄君は今年首尾よく中學へ這入られたさうだ。さうして我々が嘗てはじめて海老茶リボンの夏帽を蒙つた時のやうに、周雄君はダブ／＼のズボンを穿いて、得意さうに嬉しがつてゐられるといふ。

川田君。

二十五年前の一高は丁度今日の中學だ。その所謂入學試驗なるものゝ競爭の烈しさがだ。入學試驗！やがてそのまゝの生物學的生存競爭ではないか？さうして年々に平均六十萬人位づゝ、恐らく幾何學級數的、加速度的に、不可抗力をもつて增殖しつゝあるところの、甚だ暗憺たる前途を有する吾が大和民族よ！……それは或はたゞに地上に於ける一民族だけにかぎつた問題ではないかも知れないけれど……君、考へると、思はずゾツトするではないか？

——けふ重德さんとこできいて來たけれど、ガストン、ルルウのものなんか、日本ぢやもうとうの昔から遠慮なく無斷で譯されてゐて、既に四五十種も本になつて市場へ出てるんださうだわ……當のガストン・ルルウ氏はまだ日本へは一度も飜譯權の許可を與へた覺えはないなんて云つてるんだけれど…さすがに少々呆れたわね……だから『黄いろい部屋』なんてとても駄目よ。十四年も前に出た本なんですもの……

——さうかい……しかたないサ……我々が、あんまり迂濶だつたんだ。つまり、それだけの話サ……

僕は溜息をついた。

食堂の薄暗い一隅に据えた、薔薇色の、天鵞絨の、やゝ中古なる、ブツフのついた肱掛椅子にもたれて、ほつと溜息をつきながら、トラジツクに兩眼を閉じた僕の格好が、かりに若し僕

が、今死んだとしたら、恐らく永遠に彼女の眼先にチラついて離れないであらう、と妻が云つた。

――さうかねえ……死ぬものなら本當に死にたいよ……どうして俺は一ト思ひに自殺して了へないのだらう？……よく〳〵臆病な男に生れついてゐるんだね……

――まア、併し、もう少し死なゝいでゐてもらひたいものね……わたしが一人立ちで飜譯が出來る時が來るまで、せめて……

――飯が食へさへしたら、そりやいつまでだつて生きてゐたいよ……われ〳〵のやうな迂濶きはまつた飜譯ぐらひでこの三人口が糊せるものなら、喜んで生きてゐやうけれど……

――でも、さう云つて、たゞ悲觀して、何もせずにゐるよりは、とにかくやれるところまでやつた方がいゝと思ふわ。

――勿論、それやその通りサ。だから。やる事はやるがね……

われ〳〵夫婦がこんな問答をしてゐる間に、イヴオンヌがそこら中の椅子をスッカリ集めて、その上をわたり歩きながら、何かわからぬフランス語とも日本語ともつかぬ無意味な歌を大聲で唱ひつゞけてゐた。

――かはいさうに、オモチャ一つ買つてもらへないんだから、この子だつて、こんな事して一人寂しく遊んでゐるんだわ……

――日本でわれ〳〵の事を知つてる者がきいたら、さぞかし、いゝ氣味だ、ザマを見ろ、と、ひそかに溜飲をさげてゐる事だらうよ……

――困つた性分だわね……どうしてそんなに世の中をひがんだり恨んだりしてばかりゐたいんでせう？……尤もさういふ人はよく世間にゐるもんだけれど……なぜなんでせう？

――アナトール、フランスのやうな結構な頭に生れついて來られなかつたばッかりにサ……

ドシーンと凄じい物音と共に、イヴオンヌが椅子からころげ落ちた。さうして絶へ入りさうな聲を張りあげて、彼女はヒイツト大袈裟に泣き出した。

二人は慌てゝ彼女を助け起しに行つた。

――我々と同時代の今日の日本青年は、ほとんど一人として××××××でないものはないと云つていゝ位です……お斷りして置きますが、僕は今年二十三歲です……と、プル・オ・ボオの簡單なソップに日本流の茶飯をかき込んでゐる我々の食卓の一隅に片肱をもたせて、岩井さんは熱心に說いた。岩井さんは上方の富豪の息子さんで、ケンブリッヂの學生だ。

——どうです？　あなたも一杯めしあがつては？　サツパリしてゐて中々おいしいんですよ。と、妻が云つた。

——いゝえ、僕はもう午飯をすまして來ました。それにもう三十分以内に——と、頗るハイカラな新式の腕時計を見ながら——佐野さんとこへ歸つて、それからヴエジネへテニスをやりにゆかなくてはならないんですから……と、岩井さんは答へた。

——君もさうですか？　と、僕はきいて見た。君もマルキシストなんですか？

——いゝえ、僕はたゞさうした現象に驚いてゐる人間にすぎません。併しです……日本では、なぜあゝ雷同性に富んだ青年ばかり多いんでせう？　一方にマルキシストがあるならば、なぜ他の一方にラクション・フランセーズのやうなモナルシストが堂々として旗上げをしないのでせうか？　公々然と資本家擁護の叫び聲をあげないのでせうか？　と、岩井さんは論じはじめた。

——でも、日本には××××××××××××を布からうと企てゝゐる高畠素之氏の國體があるぢやありませんか？　と、僕は一寸横鎗を入れて見た。

——いや、僕の考へてゐるのは絶對にマルキシズムではありません。その正反對です。シヤルル・モーラスのやうな、アナルシズムの極限まで行つた後のモナルシズムです。モナルシズムとアナルシズムとは相去るたゞ一歩にすぎません。さうしてその本體は共に全く同一のものだと思ひます。日本へ歸つたら、僕は一つ充分にその點を力說したいと考へてゐるんです。

岩井さんは又云つた。

——學校を怠けたり酒色に荒んだりする不良少年は皆マルキシストに行きます。優等生はその反對にどうしても悉くアナキスチック・ナショナリズムに赴くべき筈だと思ひます。何となれば少數者は恒に正しいからなんです。多少ドクマかも知れませんけれど……

岩井さんの日本へ歸つて力說しようと考へてゐられるところは僕にはまだ充分に會得がゆかなかつた。さうしてたゞ何となく或はそれが岩井一家の財産擁護にすぎない結果だけで終らなければいゝがと余計な心配までしたものだ。

——あゝいふ學生さんは希望に充ち〳〵てゐるんだわねえ。

と、岩井さんが例の腕時計を見い〳〵、佐野夫人と約束したヴエジネのテニスに遅れては大變と、慌てゝ歸つたあとで、そこらを取片附けながら、女房が云つた。

——食ふ心配のない間は誰だつてみんなあの通りさ。

中學を出ると、すぐ小うるさい日本を去り、或はボストン、或はケンブリッ、チと氣の向いたところで氣の向いたまゝの學問が出來る、現代日本のブルジョア青年中で、尤も多く羨やまるべき岩井さんのやうなそれとは、おそらくその內容の程度の差に於いて、大變趣きが異つてはゐたけれど、その頃は……さう、僕の高瀨と知り合ひになつた頃は、僕もまた決して今日のやうに、毛頭食ふ心配なんぞする必要のない、甚だ幸運なる境遇にあつた。

川田君。

それはよく君の知つてゐられる通り、人の世の辛酸が、僕の養父母をして、あの質實な、あの小心な、正直な、さうして他人の貧苦に對して甚だ同情の深かつた、あの僕の養父母をして、六十年の長い〳〵忍耐の後に、わづかに漸くあれだけにすぎぬものをば築き上げしめた、小さい、併しながら尊い一個の創造的生活の中で、勿論、寄生蟲としての僕自身の人生の役目をば、寛大に演じさせて置いてもらへたお蔭だ。

『プラース・ド・ラ・コンコルドは黑山の如き人であつた。桟敷な職人どもがしつらへた四脚臺の上には、一人前二十五フランづゝ席料を拂つた男女の市民（シトワイヤン）等がおし合ひへし合ひしてゐた。と、その前に、すばしつこい小僧どもは、そいつを物見柱にした街燈へ、スル〳〵とよぢのぼつたものだ。タキシ自働車と私用自働車とが二重列をなして人間の鈴なりを支へてゐた。

喧囂を極めた群集は一大事件の期待のうちにあるやうに見えた。

私はこの異例なる大會合のよつて出來する所以をば傍人の人について訊いて見た。

明瞭に勞働階級に屬したこの男はやゝ驚いたやうに私を見まもつた。で、答へた。

――何をぬかすんでえ？……てめへ、どこからとび出して來た？掠鳥だナ？……で、知られへンだナ？けさブルを一疋しめるんだといふ事をよ……

プラースの中央、オベリスクの傍、もの〳〵しい秩序係に護られた絞首柱が、ひろ〳〵した空地へつゝ立つてゐた。憲兵にとりまかれた男が一人、さうした刑の裝置へ向つて進んで行つた。その男は蒼白かつた。顏筋は痙攣して、目つきは獰猛だ。足には足枷をはめられ、手首は背中で縛られ、のそり〳〵歩いた。で、絞首臺の前に立つた時、人目をひく紅衣を着て、嚴重な顏をした役人が一名、かう云ふ文句で彼に云ひきかした。

――破廉恥なる奸商、汝は民衆の貧苦の上に投機したのだ。

汝等市民より盗んで汝自身を富ましたのだ。汝は最も恥づべき刑に處せられて死ぬところだ。汝の死は汝の轍みに倣はんとする者どもに範例を示すものである。

と、絞首臺の方へ向つて大見えをきり、

——刑の執行者、汝の義務を行へ！……民衆の正義を貫徹せよ！

四名の力强き助手に鷲掴みにされて、罪人は絞首臺上へ引き揚げられた。さうして暫く間もなき時間内に、私は中有にブラブラするかれの體を見た。まツ黒な偉大な舌がかれの口外へ垂れさがつた……きたならしい獅嚙面がかれの顔のかたちを變へた。私が嘗てどこかで見た顔だ。

忽ち私は。素晴らしい自働車から降りて、御定連の一人として。あのボア・ド・ブロンニュの贅澤な料理屋へ這入つて行つた食料品屋の主人を思ひ出した。その料理屋の入口なるロハ臺で、恰も私が寢てゐた時だつた。』

これも『コンコルド』の夢の一つだ。所謂『美しい夢』の一つだ。

コンコルド——餓死に瀕せる親子三人——妻の翻譯——荒唐無稽談——高瀬精太——養父母の眞面目だつた一生——大和民族の將來——階級戰——刑罰……

川田君。

どうしても辻褄が合ふやうに働いて行つてくれない僕の永遠に混亂狀態にある頭の中は、かうした唯その場〳〵の出來心にのみ支配されながら。恰も旋風の中の塵芥のやうに。徒らにめまぐろしくゴツタかへしてゐるだけの話だ。

僕の筆先に書かれてゆくことはすべて悉くナンセンスだ。ナンセンスばかりだ。何となれば僕自身の生活が徹頭徹尾ナンセンスだからなのだ。

『四十九年一字不說』と云つた。

川田君。

それにも拘らず。僕はどうかして自己の眞實をば、どうかして僕自身の赤裸々をば、所謂天地に俯仰して愧るところなく、全人類の前に堂々と提供した上で死にたいと思つてゐる。

幻燈屋のふみちやん

──or Shuvenir de Magic-Lantern

DA潤AD

"It is a sweet thing,
Friendship, a dear balm,
A happy and auspicious bird of calm,
Which rides o'er life's tempestuous ocean."—Shelley.

ひどい宿酔の後、ペンを持つ指先きが少しくふるへてゐる。開城の菊慈童から貰つてきた人蔘を煎じて飲んだら、でもだいぶ快方に向ツちやツた。御蔭さまで…………

金剛山の紅葉をしきりに見に來いと、彼可愛ゆき菊慈童は幾度となくおれの顏を見たいみたいと云ふのだから…………

行つたら大洞に船を浮べ彼と一緒に筏を流し、安東縣につきかねてやつたり、駕一葉之輕舟、渺滄海之一粟、哀吾生也須臾、羨長江之無窮を唄つたり、シャリヤピンになつたりトレヤドオルをマーチしたりしてやらうと計畫山の如きものがあつたがつい夢中に實行して了つたのでな──

"Moon, art thou pale"──と云ふシエレイの詩にほだされて、眞靑なノクチュルネを一ぱい浴びて、昨日桃林から舞ひもどつた白蛇と夜ぴて散歩したら、すつかり幻燈屋のふみちやんのことを思ひ出しちやつたので、その話をすることにきめたのだ。

まだあまり女の話と云ふものはやつたことがないのだが、赤亭の御このみにあれば是非に及ばずだ。

昔ブランクリンの自叙傳と云ふものを讀んで、アイツのツラが癪にさわつたので、とうとうその自叙傳がきらひになつて、自分はそんなものは生きてゐるからには絶對にやるめいと思ひ

込んでゐたのだが、近頃はどうやら小ダシに少しづつやつてゐるやうな不甲斐なさ。

どうせやツつけるなら、キヤサノヴの向ふを張りていものでありやす。

小生も文明開化の御陰様でとう／＼ゲイコク語を饒舌らせられるやうになつたが、今晩はだいぶおふるいところを一席伺ふことにするのだから、どうしたツて、江戸ツコ訛りでやらなけりやあ、納りがつかない。

古渡りの半纏に一本ドツコをきりツと前結びにして「おいらあ今夜は異人の御馳走」だとよく代地にあつた萬里軒に出かけた祖父インロオの顔が眼の前に浮んで來る、まツたくおいらあ昔のことを考げえてみると先き立つものは癪の種後から來るもな突き落せだ。

癪にさわると僕はいつでも「江戸繁昌記」を引きづり出しては讀むのです。寺門靜軒てえのは實はおいらのぢいさんで、友達で、先輩で、相棒で、ヘトセトラなんだ。

今のワケイ者はこんな昔の爺さんの名前なんか知るまいから一寸教へて進ぜよう。Please chisel your ears!

いいクサビだあなあ…………

先ツきからオイラは「饅頭舗」を實はひろい讀みしてゐたのさ。つまり今で云やあなんとかアーチストと云ふ奴さ、やつぱり立派な藝術屋様のことなんさ。

それ靜軒とイツパだ………

江戸幕末の人なり。靜軒性俊邁嶔落詩を善くし文に長じ名聲籍然として都下に鳴る、自己も亦民間に書を講じて世を終らむ志なりしも其の自ら標すること甚だ高うして俗儒の利祿に齷齪たるに慊らず、天保中江戸繁昌記を著し俗話に託して大いに官儒を罵りたるために衆訟一身に萃まり遂に官命をもつて江戸を逐はるるに至れり。逐はれて後は踟躊轉従して八年の間ボヘエムとして風流自適し少しも悔ゆる色なく明治元年二月十四日享年七十三にて沒せり。碑は淺草橋場町惣泉寺に在り。

ザツトまあこないな先生さんで、今のコイタゴ詩人や、ズイロク作者よりやあ少しは骨の堅いお兄イさんなのでありました。」

山鯨

コイツを原文でコーテイションしていのだがさぞかし印刷屋さん泣かせだと思つたので元祖一流の陀々羅飜譯でやツツケることといたしやせう。

凡そ肉は葱によろし、一客に一鍋、火盆を連ねて供具す。大戸は酒をもツてし、小戸は飯を以てす。火がカンカン起ツて肉

が湧き、漸やく佳境に入る。正にこれ獣喰肉を食ふて死も亦辭せず、花和尚醉へり。爭論大いに起る。鍋の價約三等あり。小なる者は五十錢（五錢のことですよ）、中にして百錢、大は則ち二百、近歳肉の價やうやく高く、略々鰻と頡頑す。然もその味はウメイ、且ツ功驗の速やかなる人、誰か値を論ぜん。其獸は即ち猪、鹿、狐、兎、カワウソ、オホカミ、クマ、鴨鹿等の物がゴダゴダぶらさがつてゐます。ビロクの繩せられるところビロク蹁々たり、狩らず獵せずして隱れるナマなるを見る。オホカメの如きは刺すに庖刀をもツてせり、蓋し猛獸たる所以なり一人刀を叩きて之を屠る。手の觸るる所、足の履む所、カツ然コロツケ然、シチウ然、ビステキ然としてゐる。行人止つて觀る。

聞く天武帝の四年に令して始めて肉食を禁ぜらる。病に餌するに非るよりは、容易に食べることが出來なかつた。だから世間様ぢや、藥喰とよく云ツてたものさ。ツイこねいだも江都中に藥喰舗と稱する者タツタ一軒、麴町にあツたツけ。レツトアスレイ……二十年來此の藥の行はるるや、此店今復ジョウカンが出來ねえてやうなわけでね……なんとトンカツ屋のグルツペがふえたもぢやあな御座いませんか？　カンバンのレツテルには落楓紅葉を霊き、題するに山鯨の二字をもつてせり。藥食にかかると雖も、猶ほ國禁を裂く。作意の爲すところ、蓋しメタホルなり。都人字にしてチミモンスタアと稱す。亦化の皮をかぶつてゐるのみさ。妖怪と謂ふに非ず、愉快と云ふにあらず、」只だ厄介なものたるのみ。先だツて麴町で買つて居りました肉は苞苴するに必ず販紙をもツてせり。みんな竹の皮にしちやうんだよ。則ち都下一歳に幾萬の破れ紙。復お役に立たさればなり。ヘヱン！

Hehotuko proverh say's Yonber thehaKone Beacoup q"Obake7 と換言すれば「箱根からコツチにオバケなんかゐてオタリコブシがあるものケイ」と。蓋し江都の繁榮の光景を云へる也，タレカ思はん，數百年繁華を極むるの今にして、都人此をもツてクイモノとせむと汽車に積み、自働車に積み、一歳は一歳より多く、一年は一年よりおたかくなつてまひります。亦太平の世の御代はメデタキ繁華かな，豈奇ならずや，或者曰く、我よりして之を云へばこれのみ，顧ふに其獲らるゝ彼よりして之を云はゞ，何をもツてか太平の物とせん，御戲談でゲセウ。曰く、然らず，身を致して仁をなすといふ語あり，苟くも死して益あらば何ぞ憾と遺憾を存けむ。一劑に十の疾を瘳し、十の跡に百の病を救はは功德無量ならむ，思ふに彼れ三たび生れがへりて今の太平中の貴人と爲り、國には獸肉に飽き身には羅紗

をかされ。今日は帝劇、明日は三越と、獨り遊宴の樂みあるを知りて、螢雪の苦しみあるを知らず。女色を唯好みて子孫繁昌せん。決しておいらのやうな貧儒の身を餓えしめて書を讀み、生死並びに世に用無きが如くならじ、僕等が死んだ時、之を豺虎に投ぜんに、彼必ず云はん。一生菜根のみを喫淆せる者の、之を食はむにも味なしと。必ず三たび嗅ぎて起たん。予嘗て發願して曰く、尙はくは來世には獸の肉となりて、偏く功德を天下に施さん。若し人たるを得ば、必ず醫者となりて斯民を命永からしめんと。復又謂ふ、如かず獸の肉のみと。當世の醫風頗腐して、衣の美潔と門の高大と唯だこれをもツて第一義となし、自働車に着乘して病門を巡侯するを是れ務となし、意を承けて色を察し、痔を舐り、溺を嘗め、百も諂ひ、千も佞り、マダムと耳かくしとの心を失はんこととのみ恐れて、陰陽五行の何事なるやをも省みず、金櫃傷寒論の何物たるかを知らず。水藥はたゞ甘からん事を欲し、注射は痛からざらんことを欲せり、」吁、この輩の屁の如き百貼の藥を飮まんよりは一鍋の鹿の肉を食はんに如かず。然らば則ち如かず獸の肉のみ、必ずダニモオの肉のみ、これ山鯨の人氣ある所以なり。

世人或は曰く、獸の肉は不潔なり。之を食へば穢る。病めりと雖も食はずして曰く、身を汚し、神を濱かすと、然も安んぞ知らん、自己平生の爲す所も亦身を汚がし、祖先を辱むるの行を爲さざるをや、人にして言を食むは不祥これより大なるは莫し、汚るゝも亦甚し。ブルジョアの進取の間には、或は啗はするに貨を以てせり。若し誤つて之を食はば、身を濱し、君を汚し、不祥これより大なるは莫からん、河豚（スペキユレイション）を食ひて溝に死してすら、名亦從つて汚る。聞く、近日千人會の錢を食むもの殊に多しと。これ等の汚れは世界に固より多からずとせず、何ぞ獨り獸の肉のみならんや、呵々。

——おい一體君はなんの話をしてゐるのだい。

——知れたことさ、幻燈屋のおふみちやんの話をしてゐるのさ

——幻燈屋のおふみちやんは山鯨が好きだツて話か

——さうかも知れねえ

——おいらは又なにか艶ポイ話かなにかだらうと首を延して刮目期待……

——しようが、しまひが大きに御世話だ、無理にも聽いて戴かうと云ふ次第でもなかりけりさ

——では折角だから辛抱することにいたすで御座らう、

私はその頃、日暮里に住んでゐました。それは茅葺屋根の家で、驚くなかれ家賃がタツタ三圓さ。

日暮里(ニッポリ)などと願くば云つてもれえたくないものだ――ニッポりたあヤキ場のことだとばかり早呑込みをする野郎はまだしも、てんでそんな處が何處にあるのだか知つてゐる奴は恐らくあるまい、勿論、そんなことは知つてゐやうと知らなからうと自慢にも恥にもなんにもなるわけのものぢやないが……少なくともこのやうな美しい田園が無智蒙昧なヴルダルによつて蹂躙されたなあ嘆かはしい至りだ。

花見寺にはおれの小さい時分から大好きだツたお婆さんが埋つてゐる――十錢婆あと云ふ婆さんでおいらが藏前にゐた時、四谷からよくテク／＼やつてきては御小遣ひを來るたんびに十錢くれたものさ。先づ現今の一圓かね？

大岡窓法て畫描きの姪さ、おいらのおふくろのオヤヂの兄べ位にあたるその畫描きは四ツ谷の天王様の合天井へ六歌仙をベタ／＼と描いたことによつて有名だが、アルスプレビスの法則によつて、そんなことを一々覺えてゐる奴は今時あらう譯もあるまい。

日暮里はひぐらしの里と僕等では云つてゐるのです。

一體あの邊の界隈は僕等とは小供時からイヤに緣が深い、――大方彰義隊の亡靈が己れを呼びよせたのでもあらう。天王寺の五重の塔は露伴道人によつて極めて名高く、高橋おでんがゐたり、ムツシユオツペケあまりゾツトしない銅像が突ツ立つてゐたりその他枚擧に暇非ず。

俺は少年の頃、總領の潤六で胎毒をウント背負ひ込み、頭に一杯カビを生やかし、專らバイキンの食客を無類に頭に頂いて歩いてゐた。かるが故に、笠森大明神の御厄介にとう／＼なつたやうな次第で、おふくろに手をひかれて、御參りに出かけ、歸りには團子坂の菊を見物して、まさか當時ソバは相憎となかつたから、――己はおふくろにせがんで、己の大好な鰻を和泉橋向ふにあつた川升で認めることを習慣にしてゐた。

笠森稲荷大明神　鍵屋阿仙稱美人
土器碎爲土團子　只今唯有煮花新

又　面拵似足

笠守神祠日暮邊　酢中相伴例諸賢
殊令拙者頻懷古　曾識高名有阿仙

さツとおがんで御仙の茶屋へ
腰をかけたら澁茶を出した

澁茶ヨコヨコ横目で見たらば
土のダンゴか米のダンゴか
オダンゴ　ダーアンゴ……

先づ〳〵一カン貸したり、かされたりして僕は屢々幻燈屋のふみちやんと遊んでゐたものであります。

日ぐらしの里にいれば七面の社あり、衆僧讀經の聲高し。養福寺と云ふ寺には自墮落先生の墓あり。

その先生がおれのおぢさんときてゐるからやりきれない。實はそのおぢさん昔、ひそかに島原を拔け出して、ダダイズム宣傳の爲めに江戸へ上京したのだが、名詮自稱の結果ついにその志を果さず、今頃になつてヤツト僕の方へ御鉢がまわつて來たやうな次第なのである。しかし一説にはかうでもある、ああでもある。いづれ眺める御月様に變りはないことは昔からきまりきつた話だ。

先生は江戸の人なり、五君に鞍がへして志を得ず、髮をからわに結ひ、齒をかねに染め佯狂してハイケイ師となる。庵を無思庵といひ、軒を不量軒と名づけ、齋を捨樂齋と號し、坊を確連坊と稱す。昔の反古二卷をあらはす。その中に歸去來の辭を評して、淵明元レイ金持なるべし。僅かのあれ地をもちて、口をきくこそツラにくけれど、一口にはり込みししれものなり。

——一寸伺ひますが、ふみちやんとやら云ふ別嬪さんはいつ登場なさるんですね

——ウルサイね、なに分素人娘でオボコのボコときてゐるから、きまりがミツトも、恥かしく、チヨツクラチヨイとは出られませんよ、太夫身仕度整ひますればさ

——氣のながいヘドツコだなあ——

その頃、私は神田の佐久間町の狹い横町のとある家の二階を借りてゐた、そして淺草橋の傍にその頃あつた日本橋のT小學校に務めて、金拾五圓也を頂戴して暮らしてゐた……廢残のオヤヂは失業して氣が變になり、おふくろは死ぬばかりの大病にかかり、小さい妹は年頃をイヂケかへツて靑いツラばかりして火鉢の傍に噛ぢりついてゐた。だから自分は夜學と家庭教師の内職をやつて默りくさつて奴隷のやうな生活をしてゐたのだ。

炎えるが如き二十歲の美靑年はあツたら生活の車輪に打ちひしがれて靑白くみじめに自慰的生活の混濁したモノトオンを祕々と味めてゐた。

神様と、幻燈屋のふみちやんと、藝術がなかつたら僕は勿論自殺してゐたに相異ない。

そこの廡だらけな、うすぎたないケチな部屋で、私は生れて始めて物を書いた。

「いぬかは」と云ふのが處女作なのだが、それは、浮浪漫語中に收めて置いた。

霜月………日

これより先き自分は日暮里の花見寺の傍にやつと家らしいものを發見してそこに久しぶりで靜かな生活をする喜びを幻燈屋のふみちやんに宛てゝ報告した。

霜月………日

此處に參り候てより、早くも二週を閲みし候。又例の道樂よと御笑ひ被遊候はん、小生元より覺悟の前、これも孤身の一德よと自らほゝえみ居り候、破行李一個（兼本箱）、机一脚、夜の物、これにて財産は盡き申し候さて、早速新宅の御吹聽申上ぐべく候、

都の端れとは申しながら、これは又神田の四疊半とはいたく事かはり居り候、夕ざれば御長屋のどよみを拜聽し、鰯、秋刀魚の香に噎せ、窓側近き物干の襤褸に照りはゆる夕日影を望み、秋の夜徒らに長くして、壁一重なる妙法蓮華經の太皷に膽玉を消し時にササ法界の音樂（ミユウジツク）に醉ふ、これにては如何な小生も命、旦夕に逼るが如く感ぜられ候、方々勇を皷し、心を決して、住みなれし四疊半に別離の涙潑ぎたる次第に候、名にしをふ日暮の里と申し候は、少しく風流を解し候輩の杖をも足をも曳くところにて候。小生の新宅は千駄木の林と諏訪の森との中間によこたはる谷（ヴアレイ）にこれあり、花見寺へは僅かに數町田圃傳ひに螢澤に出で候へば、一條の野川靜かに流れ居り、そちこちに茅屋の隱見いたし居るさまえも云はれず、今は刈入も濟み、田の面は寂しく候へども、趣はかへりて深く、朝未きに、逍遙いたし候はば、千駄木の林に百舌の聲きかるべく、折ふし鳴き渡る一列の雁などさすが、都の眞中にては思ひも懸けず候、わきて小弟の胸躍らせ候は、程遠からぬ岡に昇りて、富士の彼方に落つる夕日打眺むる刹那にて候。秋の氣は澄みにすみ、遠山の姿紺青に際立てるは更にも言はず、薔薇色に匂へる富士の背後に紅の日落ちて、暮色蒼然たる迄の光景、たとふるにものなく、只だ心より心にと申さばたりぬべくや、さるにてもわが心の眼いと鈍く、直ちに深奧なる自然の懷に飛び入りて神秘の一片をも携へかへるすべ知らざるは、通らざる際とはいへさすがに心やすからず候。ああ只だかくの如く申し候のみ、これにては聊さか心慰さめ得られんには、自ら幸多き樣に思ひなされ候も、さて、現實は容赦なく何處までも絆纏ふものにて候。花見寺と御尋ね被下候はば、小生の新宅直に相解かり申すべく、茅葺にて、名のみの廻り椽柾垣越に打見られ候、こゝしばらく、風來の姿

に候故、氣の向き次第御たよりいたしたく候。

と〻まで、描いた時、まこと君が相變らず目を丸くしながら、「おどうさん、ハガキ」と云つて一枚のハガキを渡した。見ると美少年エイスケヨシユキからのだ。

一青年の告白ありがたうございます、僕の若さにとつてムウアはスチルネル　キエルチゴオ以上に能動をともなふ唯一書です感謝します。

一ぷくやりながら傍にある新刊の自著をとりあげて見る――こないだ讀んだパピニの興奮が二重になつておれの頭腦の中を旋轉するのだ、……私は少々パピニやムウアに改めて憑かれてゐるらしいぞ――

體面！郊外の別莊、客間のピアノ、晩餐に家庭に行くこと。かくの如きことは勿論、極めて上等なことではある。けれどそれ等は感情の緊張をも、精神の情熱をも促進しない。そして藝術はそれ自身に於て人間存在の獸性に反抗する絶叫であるから、藝術家の生活はよろしく所謂生活の合宜に對する實際的プロテストであつて然るべきである。過去に於て、藝術家は常に被追放者であつた、彼が家庭臭くなつたのは近頃である。その結果によつて判ずるに、たとへ放浪主義が必然でないとしても、それは少なくとも補助者である、若し長い毛髪や放縱が純粹な思想に對する補助者でないなら、何故、それ等は永く藝術家の特性となつてゐたのか…………

體面が人生から繪畫美を掃蕩しつゝある。國民的風俗が消え失せつつある。………そして日本人さへ基督教徒になり、レスペクタブルになりつつある。三十世紀の半ばに達しないうちにシルクハツトやピアノが江戸のどの家にも見出されるであらう。風俗の世界的均一があまりにもほんとうに世界の將來である。そしてモリス等が世界が社會主義的になつた時の民衆藝術に就て話す時、不運な連中は全體何處から彼等のインスピレーシヨンをひき出すことが出來るだらうと訊ねた。われわれの位置は今日ではまことに哀れむに耐えたりだ！俳優でも、競馬師でも、藝術家でも、まるで同じことである。かれ等は同じ仕立屋の衣物を着、同じ倶樂部で飯を食ひ同じ誓言をし、一樣にヒドイ英語を話し、同じ女を愛してゐる。かくの如き狀態ではまことに恐ろしい。………普通教育は十九世紀の過去二十五年の天才を既に虛勢した。そして將來の爲めに無限の畸形兒を產出した。教育、僕は君の恐ろしい名稱の前に戰慄する。ネロやカリグラの慘酷がなにか？……それは半球上に於ける僅かの四肢が粉碎されたのみである。しかるに、おお教育よ、汝は生に惱む靈魂の氣狂ひじみた不備の心の悉くが底知れぬ苦悶の絶叫であ

る。ゲエテが「もつと光明を」と云つた時、彼は人間の仔が嘗て發した最も猛惡な破廉恥な言葉を口にしたのである。………

かくの如きものが體面の終りであらう。しかし、その終局は未だ遼遠である。僕等は今次第に痛切になりゆく頽廢の時代に生活してゐる、舊き神々がわれ等の周圍に倒れつゝある。われわれの精神を向上させるに足る何物も殘されてはいない。そして、雜多の壞滅と廢墟との間に殘つてゐるのは唯だ Snobbery のみである。感謝す。それが深く英人の心に彫りつけられてゐる。スノブが今、民衆的波浪の上に凱歌を奏して漂ふ箱船である。舊世界の信仰が彼の胸中に休息してゐる。そして彼は洪水が鎭靜に歸する時それを宣言するであらう。

さうかうしてゐる間に、體面は酒場を破壞して、倶樂部を創造した。そして、文學上に媚惑的な虛勢力をふるひ續けてゐる。思想と發想の凡ゆる放縱が跋扈された。そして凡ゆる習俗性が嚴格に尊敬されてゐる。藝術は單にその時代の一反映であると云ふ言葉は千度も繰り返された。まツたくさうだ。唯だある時代が他の時代より面白いのである。だから、よりよき藝術を生むのである。恰かもある季節がよりよき收穫を生ずるやうに。僕等はヌウヱルアテネで如何に民衆藝術が即ち體面が、又教育が手工を絶滅したかを聴いた。そして更に個人的な藝術——即ち繪畫や詩に於て——人々は常に一ツの繪又は一ツの詩の爲めに生命を犠牲とすべく見出されるだらうと云ふことが承認された。しかし人間は結局、彼が生存する時代に卓越することが出來ないと同様、全然それに反抗することも出來ない。彼はどの方面からか生活費を得なければならない。過去の默想に耽つてばかりはゐられない。その時外部からの壓迫は潜水者の上を壓する水の如きものである。やがて彼は疲れて呼吸する爲めに水面に浮みあがる。彼は恰かも水中では鱶の爲めに追はれ、水面では猛獸に追はれる飛魚の如きものである。彼は深く沈潜することも出來ず、また彼の自由なつよき祖先の如く高く飛ぶことも出來ない。十九世紀に於ける勇敢なる精神は十六世紀に於ける臆病な乳母の靈魂の如きものに過ぎないであらう…………體面が社會に卷きついてゐる。恰かも一種の蛸魚である。諸君は何處にゐても、その恐るべき吸盤から逃れることは不可能である。ブルジョアが至上の權力をふるつてゐる。藝術も、科學も、政治も、宗教も悉くその要求に應ずるべく變更せしめられた。ブルジョアがアカデミイに行くブルが芝居へ行く。だから今日の藝術は微溫な寫實的である。偉大なる寫實の理想は現はれてゐない。單に物質主義なケチ臭い寫實主義、低劣極まる通俗小說の跋扈である。…………バルザツクの高翔する寫實主義ではな

く色付寫眞の墮落せる自然主義である。――――

なんと思ひあたることが澤山ござえやせう時に思ひ出したのは、ある時、本郷の菊富士ホテルに青年山内恒身を尋ねた際、久方ぶりでモミあげ浩二に出遇つた……モミアゲ浩二てたツて無茶小路君の從兄弟だなどと早呑み込みしてもらつては困りますよ。

――實は昨日あなたの「浮浪漫語」を買つて讀んでゐるところなんです――と、そんなことを彼は云つた。

彼も昔しはパルナシアン、増田篤夫等と一緒に、「シレエネ」と云ふ、萩原君なら「月に吠える」と云ふ雜誌までも出した。兎に角かなり心懸けはいい方なのだが、マラルメなどを云々するのは少々潜越至極だと僕はその時も一寸感じたことだつた。談、偶々ムウアに及ぶや、浩二先生、あの本は讀んだがあまり感心しませんでした。――と、浩二君などに感心された日にや、ムウア先生もさぞなさけながることだらう。すぐれた靈魂は唯だすぐれた靈魂が發見するばかりだと云ふことは昔からの通相場さ。それだけならいいが、その後、青年山内に「辻潤は頭がわるく下品で卑屈だ」などと浩二の野郎、飛んでもねい大風呂敷をひろげやがつた。

全體、おいらは昔から別段君達に對して何ん等の恩怨もない間だ……僕等の人種は由來わかりはいい方で、大抵の場合、三分もいいところがありや相應に買つてやつてゐるつもりなんだ。

頭がわるいと云ふことは錢をとることがヘタ糞だと云ふ意なら、文句なしに頂戴しよう、…………まつたく一言もなくあやまるよ、だが、下品で卑屈の方はそのまま君へのしをつけて返上しよう。

今頃は少々おいらの蟲のゐどころがわるいからもう少々序ながらやつつけよう。

菊池寛や久米正雄などに對してだつて僕は別段なんと思ふてゐるわけでもないし、てんで諸君のものは殆んどなにも讀んでゐないといつてもいい位に無知なのだから、どうと云ふことはないが、……しかし、まさか君達が日本の最高藝術家などとは夢にも考へてはゐないからこの點は安心してくれ給へ。

しかし、仄聞するところによれば君達はなにかメリケンの下等な商人の眞似をしてトラストを組織し、文壇？とやらを獨占しようといふ計劃ださうだが、萬一それがほんとうの了簡ならコッチにも相當の覺悟位は持ち合してゐないわけぢやない。

と云つて別段、諸君はこわがることはありません、始終云つてゐる通り、僕はイクサ人でも、おまわりさんでもないのだよ。

ら、人殺しの武器は一切携帶してゐる筈はない。それでおいらは徒黨を組むことがデイきらいだからダダ一流の軍法を用ひ疲勞しきつた頭と一本のペンを持つて孤身敢然と挑戰するつもりでゐるのだ。挑戰と云つたつて、誰かのやうに君達のアラ探しをたり、揚げ足をとつたり、下品なブロレのやうにサワアグレープのやうなミツトも恥かしい眞似をしたら、お江戸の兄イさんのコイツア面よごしだからそんなことは毛頭やりはしないよ。

已れの戰略はこれ以上更に君達を無視して僕獨自の道に精進することあるのみさ、ザツツォールだ。

幻燈屋のお ふみちやんは僕のモノ ログがあんまりながいので、出端を失つて舞臺裏でまご〳〵してゐる。

芝居があんまり面白くないので見物はみんなたいていゐなくなつてしまつた。大方今頃は活動寫眞か、文藝春秋か、講談倶樂部かなにかを讀んでゐることだらう。それでいいのさ、豚は豚づれ、狐は狐づれ、……みんな身分相應にやるがいい。おいらの知つたこツちやねい。

まつたく今の民衆野郎の低腦無智下劣淺薄無作法なのには呆れケヘルが何匹跳ねかへつてもたりない位さ。なんとかは人の和にしかずか緑雨も筆は一本、御箸は二本、衆寡敵せずと知るべしとは蓋し至言なるかな、

ふみちやんは震災前の幻燈屋の娘さんで、僕とおない年だ、つまり幼な馴染で四五歳位の時から毎日〳〵雨が降つても、風が吹いても中よく遊んだものだ。二人が裸體になつてキヤツキヤツ騒いだなどと、よく思ひだしてはおふくろが話す、今でも時々おふくろはどうしたかと云つて心配していることもある。

僕は八歳で東京を離れて伊勢の津で暮らし十一歳の時にまた東京へ歸へつて來た。その時、僕の家は神田の佐久間町にゐたのだが、やはり元の學校に執着があつたから、そこから淺草の猿屋町にある育英小學校に通つてゐた。そこで再びふみちやんと再會し、舊交を溫めた次第である。

私は今自分のヰタ・セキジユアリスを書かうとしてゐるのではない、若しそれを書くとすればふみちやんは除外されるかも知れないのだ。彼女とはまつたく終りまで友達として交はり、と云ふよりは寧ろ兄妹の如く愛し合つた。後年、彼女に愛人の出來た時、彼女は僕の家で屢々嫉妬をしたことがある位だ。

一千九百〇三年、一月十日、日暮しの野、思ひがけざりしはふみちやんの訪問なり、例の如く家へは無斷で來たのでもあらう。來たのは九時半頃であつた。すぐ歸へると云つたけれど、とう〳〵十一時頃までひきとめて、かへる時はO君のところへ

行く筈なので團子坂のところまで一緒に行つた。……又十六日に來るとのことである。ふみちやんが信者にならうとするのを聞いてA（妹）ちやんは非常に立腹したと云ふことだ。中々姉さん思ひの人だと僕は思つた。

今日は午後四時頃からH君のところに出かける筈であつたのだけれどH君が初週連合祈禱會に出席するので今夜は都合がわるいとのハガキをよこしたのでやめにした。

午後はO君から借りて來たフランスの小說家モオパツサンの短篇（英譯）を讀んだ。大方戀愛に關してゐるもののみである。隨分しつこい書き方だ、だがよく寫實してあるとでも云ふのであらう。一體、僕などはなにもわからぬ人間だけれど、骨のない主義のない、只々世間の人情とかを寫した小說にはあまりインテレストを持つては居らぬ。畢竟寫實一邊を目的としたのは面白くない。

四時半頃、ウオルズオスを手にして散歩に出かけた。太陽はもう殆んど沈まうとして、木々の間から赤い顏を出してゐる。空は中々よく晴れてゐる風もない。穩やかな夕暮れなのだ。僕は例の田端の「見はらし」に行くともなく行つた。筑波はまだハツキリ見える。少しく赤黑道の上に紫がゝつた色をしてゐた。見渡す限りは平原で、その突き當りは筑波の山々で、眼にさへぎるものと云つては左の方にあたつて黑烟を吐いてゐる王子の製紙會社のチムニイ許りだ。最も前には田端のステーションがあつて二六時中物質的な鋼雜聲をあげてゐるが別に景色を賊すると云ふ程でもない。此處にしばらく見とれて、あゝ詩人など云ふ方々ならばなどゝ、追つかぬ不平をこぼした。それから家へ戾る前に、いつもの阪の上で富士を見はらす、もう日はまつたく沈んで殘映が富士を中心に四方に放たれてゐる。右の方の秩父の山々は今日は雲に被はれてよく見えぬが富士は手にとるやうにハツキリと頑張つてゐる。あゝ、山の中程に白い靄のやうなものが起つて來たと思つてゐるうちに、それが段々這ひあがつて、中途から左の方へ離れてふわり〳〵と飛び出した。雲になつたのだ。實にえも云はれない、富士の景色などは最早、幾度となく見た、しかし見る度毎に新らしい感じにうたれる…………

廿六日……終日雨降る何處にも行かず透谷全集を讀みてくらす文に熱あり必ずしも笑ふこと云はず必ずしも壯なりと云はず文は生命なるのみ徒らに文辭を飾りて凡眼を悔ますのは文士の能に非ず直に人心の琴線に觸るるものこれ最も重んづべし即ちHeart to heartとも云ふべきなり、、、………

27th:—It rains all the day, and very cool. I was obliged to go to the Buddist Temple, being the funeral of our neighbour, a farmer of 70 years old; spent in reading this afternoon, neglected my daily lessons. Pleasure have I not, but sorrow. Idleness is the good oppotunity in which Temptation comes, I know, but still I am spending all the day idly. There must be some reason why I am such a fool in these days.—and I can not dare say the reason, though I know it well enough. Ah! Weak in the mind of human. Woe to those who have cool head, and heart! Blessed be those who have human passion, love & sympathy!

その時分ふみちやんは家で幻燈の畫を描く手傳をして　一日と十五日の休みを樂しみに淺草からわざ〳〵日暮の里まで尋ねて來たのであつた　勿論、電車も自働車もあらばこそ——

二月三日

朝來飛雪霏々たり紛々たり坂の上まで雪見んものをと立ち出で下駄を切らし洗足となりてかへる馬鹿者は予なり雪見には至極景色よき所なり一昨日叔母のところへよこしたる書面によればふみちやんは今日來るとのことなりしかしこの雪故到底來たる勇氣あるまじ否、家で出すまじ又來たりとて別にこれぞと云ふ用もなければ（隣りの桶屋の妻君「よつぽど用でもなければねえ——」）と。

炬火にあたり雜書くりつつ胸の中にてやたらに批評を逞かくしてゐると門口に雪をはたく音してやがて傘をふるふ音もしけり、母は立ち出で思はず「あらふみちやん」と叫ぶ多分意外なるに驚きしなるべし予も君が約束をなみするが如き人にては非ざるを知れり然れども今日はまさか來たるべしとは思はざりき余は君の親切決して忘れまじと心に誓へり君寫眞を余の爲めに持ち來たれり「奇々妙々」どころにてはなく中々よくとれたり話しとては別になけれど時の過ぎ行くを知らざりき四時頃共に家を出ず雪は猶やまず益々激しく降りつつあり

予は叔母（本郷）のところに行くなり無縁坂にて別かる

今夜叔母のところへとまる叔父に大磯の話しを色々ときかせらる。

ふみちやんスふらぐめんたる・れとる・

文して申上候只今は參上仕り厚き御待遇に預かり誠に喜ばしく存じ候其節私事突然御暇申しさぞかし失禮の者と御立腹の事と存じ居り候實は俄かに持病の胸痛を覺え堪えがたく失禮をもかへり見ず御暇乞ひ仕り知邊へ立ち寄り服薬いたし候ところ少しく心地よろしく相成り無事に歸宅いたし候まま憚かりながら御安心下され度右の次第故御叔母様始め皆々様へろく／＼御禮も申さず御前様より宜しく仰せ聞けられ下され度御願ひ申上候私も御前様にはいろ／＼御話を承りたくと存じ候へども只今も申上し通りに御座候まま惡からず思し召し下され度候

あなかしく

婦美より

潤様へ

わざ／＼このやうなことを申しあげるのでは御座いませんが御立腹もやと一寸申上候

私も度々御尋ね致したいのですけれど御親戚へまで御伺ひ申してはあまり厚かましく自分ながら氣がとがめていけませんそれですから余り伺ひませんから惡しく思はないで下さいその變り御宅へは相變らず度々伺ひますよ私は御存じの通り禮儀作法など少しも存ぜず失禮の振舞も度々御座いましたらうから御馴染がひに許して下さい

じゆんちやん貴方が度々おつしやる通り私とは親友と思し召し下さいますか私はあなたを厚く信用致してゐるのですからあなたも私と永久に交はつて下さいこの事は是非御聞き濟を願ひたいのです

胸痛はもはや快くなりましたから御手紙は下さらなくつてもよろしう御座いますよ

ふみちやんは生れると間もなく生みの母親にわかれ、その人の、つまり叔母さんに育てられて來たのであつた。

文して申上候御前様には時候のおさわりも無之御出遊ばす由誠に喜ばしく存じ候本郷なる御叔母様にも御變りもなく御暮らし居られ候や一寸御尋ね申上候

文に書きては思ふ如く書けませんから御話のやうに書きます仰の如く一昨日の雨には驚きました丁度あなたが學校へ御

出かけになる頃でしたねさぞかし御困りでしたらうと思ふて心配いたして居りました

昨日御前様の許より御手紙下されし由妾相憎不在にて今迄に番頭より私に渡して來たのですが少し事情があつて昨日から居らないのです其れですから折悪しく父の手へ這入つたのです父が讀んださうです今迄御前様と往來してゐた事は父には話さなかつたんです母は知つて居るんですが打明ければよかつたんですが父の心中も如何と思ふて其れに父は御手紙の來た事をかくして私に渡して下さらなかつたものですから私は知らなかつたんです今日忙がしくもなきに（註これはふみちやんが家で手傳ふ幻燈の畫の彩色をする仕事）仕事（ふみちやんが外へ習ひにゆく裁縫のこと）は休むやうにと云ふのです私も不思議に思つてゐたんです先日から今日は御出になるか明日かと日々心待ちに思ふてゐたんですそれから若しやと思ふて父の不在を幸ひ方々さがしたんですすると机のしきだしに貴方からの書面がありました是れはとんだ事が出來たと思つてやがて讀み始めました相變らず潔らかなる文章にて少しも汚れたる思想はなく先づよかりしと父も文章にて貴方の人となりをきつと覺つたでせうと私は却つて嬉しく思ひましたですが親は先きから先きを心配致すものですから今日も私には行かぬやうと母を姉の家へ使にやつたさうです母の云ふには潤ちやんの氣質はよく知つてゐるけれど其處は親故心配してゐるなれば以後はあまりゆかぬやうにと母の心も察し是れから二度ゆくところは一度とします私の不行屆からこのやうな勝手なことを申しあげては誠に相すまぬ譯ながら書面はこれから是非父の手に這入りますからよしませう貴方に對して申譯なく何卒妾の罪御許し下されんことを切望いたして居ります貴方と私との交りは互の心に疚しいところはないのですが他の者はみなさうは思ひません青年の男女が同席してゐても直ぐ疑ぐります其れ故貴方は相方の爲め絶交すると仰せにでもなるだらうと思ふて私は非常に恐れて居ります私は只だなにとはなしに御懐しふ思ふ者ですから御迷惑をば顧りみず度々伺ふのです其れで御話しもなく只々貴方の家にて終日暮らして歸へるのが何より樂しみなのです其れより樂しみはないのですから私の心を憐れと思し召していつまでも／＼今迄のやうに交はつて下さい私は心中を打ち明けて慰さめてもらふ方は貴方より他にないのです今日手紙が父の所より出た時は非常に狼狽しました幾分か顔の色も變つたでしよう實に心配しました其れはわづかのまでしたよく／＼考へれば別に恐れる事はないと思ふて父が尋ねた

ればかくさずに打ちあけやうと思つて心の中で準備してゐたのです父の前へ出て少しでもまちがつた言葉がよどんでは後ちく\迄相方の爲め悪からんと淀みなく云へるやうにと神に祈りました（笑つてはいやですよ）…………貴方の御手紙まだよく拜見いたしませんが一靑年が華厳の瀧へ投身せしことが書いてありましたね私も一昨日でしたか讀みました實に暗涙に咽びました前途有望の好靑年は「不可解」の結果實に悲慘なる最期を遂げたと——其時私は實に殘念に思ひました若しあなたのやうな信仰をもつてゐる方が御友達ででもあつたら或は無事だつたのかも知れないと思ひます母御弟妹のなげき叔父樣の御落膽は如何ばかりぞ心中御察し申して氣の毒なり

まだ申し上げたきこと澤山ありますが思ふ半分も書けませんから今度御面會の節御心に掛けずにゐて下さい只々知らぬ者ですから御返事も差上げないでさぞ貴方が變に思し召して御出でしようと思ふて遲くなりし原因を一寸申上げたのですなにもかもあなたに隱しませんからその積りでゐて下さい

御宅へ（私はその頃本郷の叔母のところに厄介になつてゐた）御出の節は御兩親始め御祖母樣（十錢婆さん）へ宜しく本郷の叔母樣へも御同然に願上候

愚妹より

私の敬愛する
兄上樣へ

心の中がゴチヤく\してゐるものですから切れく\になつたり前後してゐるところは豫め御推察願ひます貴方の御腹立なきやう御壯健に御務めに從事せられんことを御祈り申上候

私はその頃日暮の里から日本橋の吳服町にある會文學校といふ私塾に雇はれて往復歩いて通つてゐたが、あまり遠いので閉口して本郷の叔母のところに寄寓することになつたのだ。午後二時頃から夜の九時半頃まで働らいて月給がたつた九圓とは嘘のやうな話だか、なんと素晴しい月給ではあるまいか——

私のその頃の日記からの斷片。

池田君（ふみちやんのこと）に書面認め申し候、三時頃漸く學校に行くべく出かけ候、夜は圖書館（上野）（註、私は始め二時頃から五時頃まで三圓の月給で働らいてゐたのだが、夜學を引受けるやうになつてから九圓もらふやうになつた）

だ）にてショウペンハウエルを讀み申し候、苦痛は人生の第一義」なりとは氏の意見にて候、眞の幸福とは唯だ苦痛を脫却するにあり。それ以上に幸福と快樂とを求めて世の多くの人々は不幸と困難を醸し居るにて徒らに空想にさまよひ、醒めて後初めて苦かき盃を味はふものなりとの事にて候。報知新聞に藤村君の記事掲載しあり、君が正兄に宛てたる書面の最後に「人生これ悉く涙」の文字これありしとの事にて候。

（二十七日）

又ある心の友に宛てたる尺牘。

十一月三十日

今日は幸ひ一日の休暇を得候ものから、南椽の日當りよき處に座を占めボウを繙きて切りに幻想の後を追從致し候。薄倖彼が如きはげに少なかるべく序に醫師モランが彼の最後錄せるもの讀み候時は覺えず戰慄いたし候。わが抱一庵、綠雨の徒が最後の如き到底比すべくも候はず、孰れ詳しき事は折にふれ申し上ぐべく、尙ほ彼に對する兄が御意見の程も伺ひたく存じ居り候近頃ボウに心醉いたし居る故にや、昨夜も快からぬ惡夢に襲はれ候、シーンは夢中の事とて何處とも定めがたく候へど、とある陋屋の一室に存じ候。

うるはしき天長節の朝にて、｜そこともなく兒等がうたふ唱歌の如きものきこえ、心の長閑なるさまは春の朝かと疑はれ、かかる平和のまたとあるまじ、など獨りいひ知らぬ想に耽けり……聊時は時の過ぎゆくをも知らず。不圖耳元に何物かの呟やく聲きこえ我にかへり候時は、自から黑き裝ひせる一冊の書を手にいたし居るに氣付き候、書は申す迄もなくボウのそれにて、開くともなく我は「僊の島」なる一篇に注がれ候、

麗らかなる小春の日影に曇りそめ、空は鈍色に黃ばみ四顧の氣重々しく濕り、頭と云はず、顏といはず、怪しく熱り來り候。と見れば前栽の菊の鉢いつしか悉く顚覆され土に塗れたる花の姿哀れに痛ましく、これは又如何なる事にやと打ち惑ひつつも眼は書を放れず。

『この島の東の端れは、永劫に眞暗の蔭に包まる。陰欝あたりを領すれど、萬象の美は靜かなる彩を帶べり。樹木は枝撓悉く地に首垂れ、その態愁ふるが如きは、無限の悲痛に悶ゆるにも似たるかな。茫々たる千草の色は沈める松柏のそれの如く、墳墓(つか)の如き岡、遠近(をちこち)にほの見ゆ………』

讀みゆくともなく、我は暗黑なる夜の翼に蔽はれ地を放れて何處ともなく、翔けりゆくが如く、今し『時(タイム)』の白壁に『運命』の二字生々しき血汐をもつて書かれしよと見るまに、天

使が旗紅に交え、果は寸斷〳〵に破られて、そこひなき深淵に葬らる。かくの如き無數の幻にせめられ、身も魂も泥の如く倦み疲れ、終に力盡き、眼眩めきて何處の涯とも知らず、轉々落下しゆくよと惟ひて眼醒め候。醒めての後も、身内慄のき、額に玉の如き汗したたり居り候。嗚呼信なき者の心は實にかくの如くに候哉。されど我が心詐らんに由もなく、このまま他界に移りゆかんも計られず候。幸ひ兄の如き友のありて、かよはき我を慰さめ勵まし給へばこそ、微かなる理想の光りを認めて、相應の努力精進及ばずながらいたし居るにて候。

色々申し上げたきこと有之候へど、夜もいたく更け候へば、これにて御免下され度候。明日より愈々忙がはしく相成り候故、當分は無沙汰に打ち過ぐるやも知れず、御含置被下度候。妹よりもよろしく申し居り候。なほ折々の御消息切に待上候。

ふみちやんは家庭の事情からと、自分の兼ねての意志から、經濟的獨立を得ようとしてやがて神田の簿記學校に通つてゐたが、間もなく貯金管理局の試驗に及第して、其處へ通ふことになつた。彼女にはその頃から一人の愛人が出來た、それはもとふみちやんのところにゐた人だが、その頃、近衞聯隊づきの兵隊になつてゐた。日曜日にふみちやんは、よく一人で、若しくは、愛人と二人で、私の借りてゐた佐久間町の二階を訪れて來た。

愛人は兵役をすますと、間もなくふみちやんと同棲して、同じ役所に通ふことになつたらしいのだが、その時、自分もかの女達と最早、現實の桎梏にいたく責め苛いなまれてゐたので自然往復が少なくなつた。

間もなくかれ等は朝鮮に渡り、京城の役所に務めることになつて音信はしばらく斷絶した。私は重荷を背負ひながら都會をアチコチと轉々し始めた。

この間六七年の歳月經過。

自分は失職して染井の小やかな家で野枝さんと同棲してゐた。

ふみちやんは久しぶりで朝鮮から東京へしばらくの休暇を得て歸へつて來た、愛人は病ひを得て別府の温泉に靜養を試みてゐた、二人の間に子供のないことをふみちやんは寂しがつてゐた。彼女はどこできいたのか私の住んでゐるところを探して訪

ねてくれたのであつた。その時、野枝さんは留守であつた。

私は久しぶりで染井の墓地の方から王子の方へぬける静かな谷をふみちやんと二人で色々の追憶に耽りながら歩いた。ふみちやんは京城で一生懸命に働いたと見えて、身なりもかなり立派でなんとなく落ち付きが出來てゐたやうだつた。私は無收入で恐ろしく落魄し、慘憺たる樣子をしてゐた。その時、ふみちやんはかなりの金を僕の母に置いて行つた樣子である。

なんにも知らない野枝さんは突然異性の訪問客に接して、遽かにヒステリーを起して泣くやらわめくやら、僕は手が付けられず、折角訪ねて來てくれたふみちやんに對してなんと申しわけをしてよいやら途方にくれた。

ふみちやんは氣の毒がつて、早々歸宅した私は名殘りが惜しまれたので駒込からせめて上野まで見送らうと云つたので、野枝さんはどうしても僕一人では不安だと思つたものか一緒にゆくと駄々をこねたので仕方なしに野枝さんと二人でふみちやんを見送つた。電車の中でも僕等は變にしらけきつて御相互に無言の業を續けるより仕方がなかつた。野枝さんは膨れた顔に涙をためてぷり〳〵してゐた。自分は恐ろしいデスイリユウジヨンに襲はれた別のことを考へてゐた。

それから二三日して、私は朝鮮へかへるふみちやんをやはり野枝さんと二人で新橋驛まで見送りに行つた。その時、久しぶりでふみちやんの姉さんや妹にも逢つた。性來内氣なふみちやんは野枝さんが一緒なので遠慮したものか思ふやうに口をきくことも出來なかつたと見えて默つて悲しさうな顔をしてゐた

ふみちやんの姉妹達は僕等のみそぼらしい姿を憐れむが如く、蔑むが如く見やつてゐた。

これが昔、自分達が借家をしてゐた大屋さんの坊ちやんのなれの果てかと………

柳の街路樹に燕が飛びかひ、夕暮におほかたと蝙蝠が飛ぶ、──大晦日の晩には松が一本くばられ、月夜には影やトウロクジン、牡丹餅は錠齊屋にある。若し今日が二十八日ならば明日は必ずおかめの團子の日なのだ。犬が歩けば棒にあたり、虎をふまへてゐるのは即ち彼國戰爺和唐内、チンクン猫ニヤンチユウ、金魚に放し龜、牛モウ〳〵高麗狗に鈴ガラリン、鳥井におかめに般若がピユウドンチヤン大寒小寒山から小僧が飛んで來る、ヅイヅイヅクコロバシゴマミソズイ、俵の鼠が米食つてチユウ、鳩ポツポに立石イシ燈籠、テテシヤレテテシヤレ山王様の御猿さんは赤いオベベが大お好き〳〵先づ〳〵一貫借したりかされたり………

さて、坊チヤンは自由の權利でヤツケロ！

（一九二四年、十一月）



詩三篇

千家元麿

或る秋の日

朝の神が、夜の眠りの天使達を追ひはらひ
太陽が燦然と朗らかな姿で、
天帝の如く、平野の末に
圓い焔の眼を瞠る時
私は見る。家々から飛び出す百姓の群
額に汗して働く力強い、山岳と平野の征服者を
私は見た。野の英雄のやうな老ひた農夫
凛烈な霜のやうなこわい白髭に飾られた赤銅色の首
勞苦の痕を語る無數の皺で刻れた名譽な額
この地上で最も老ひた人のやうな
神々しいシンボリツクな百姓を

併し彼は未だ腰も曲らず、堂々とした超人のやうな脊丈で
武士のやうに鍬を捨てない。
私は彼の姿を見て、思はず泪が胸に下るのを覺へた。
生涯をおろそかにしなかつたらしい此の人の姿に、
私は恥づかしくなり、思はず讃嘆した。
「をゝ老英雄よ、大なる父よ
地上の星霜を經て神々しくなりし友よ
ヨブの如き老丈夫よ」と
彼は今、征服者のやうに旭の登る野を見渡してゐる
彼の眼は、その息子に、嫁に、息子の許嫁に走る
彼はボシヤリ彼の壯時を樂しく思ひかへしてるのかも知れない
彼の旭に照らされた顔には溫かな微笑と寡默な決心が
怠けものゝ若い者の心を警める。
私は、泪ぐんで考へた。そこの枯草と榛の落葉の上にグタリと重つて。
野の秋は朗らかだ。
平和に落し水のゴボ〳〵とする響きに和して、
鶫や鶺鴒の清らかな歌

澄みわたる野面には太い聲や、鍬の石にふれる音や稻こきの音
働く人々の動く氣勢、
怠けもの〻私、ブルジョアの子弟の私は
胸せぐまつて、大地に跪く
私はこの着物が脫ぎ捨てたく成る
裸一貫になつて、夢のような生涯から新しい生涯に目覺めたくなる
百舌が啼く、頭を擡げると
大なる山岳が平野を圍み
或る高い頂きは雪を帶び
白馬のやうな雲が走る姿
颯爽として秋の歡喜は天地に充ちてゐる。

（十一月）

秋

をゝ秋よ、
黃なる寬衣（ガウン）をゆるやかに着こなした山毛欅よ

金髪の木々よ、瑪瑙色の紅楓よ
惜しげなく散る木の葉の上に
私は獨り座つていみじき四邊の調和に見恍れ、
目白の連れ啼きに聽き惚れて默想に耽る時
見知らぬ二人の愛人が仲睦じく麓の方へ
峰の亂るゝ松の間から下りて來るのを見た。
男は眉目秀麗の貴公子
女も卑しからぬ人品だが
男よりは稍々劣りし身分の人だらう
女はわざと華美の裝ひを
地味なコートの下に隱して
手には道々摘んだ花束をもつてゐた。
紫のりんどうに白い山菊、それに漆の紅葉を添へて
二人は枯松葉こぼれ、草紅葉する山徑を
語る事も盡きたのか
肩を並べて默々と歩み去つた
そう秋にふさはしい二人の姿よ

都からこの山奥まで、秋を訪ねて遁れ来た
戀の外には何も考へてゐないような二人だ。
まことに他を忘れ、世を忘れ
醉ひ狂ふ戀ならで
この秋の美にも劣るべし
私は涙ぐんで二人の幸福を祈つた
山鴉切りに啼き
日の蔭つた林には
藪鶯の夕暮の歌、澄んだ空氣に響いて
杯の中に夕べ迫りてひろかりゆけば
自分も疲れた身を枯草の上から起し
二人の消え去つた山の傾斜を麓へ下る
遠く平野に一流の河。
秋の狹霧の中にほのめいて流れてゆく
をう二人の貴人の行衛はいづく
この、河沿ひの鄙(ひな)めける宿にでも入りしか
それともはや驛より汽車に搭じて、都へ去りて此の土地にはあらざるか。

幻のごとく二人の秋の姿、我が胸に殘れるを感じた。

(十一月)

我等の仲間

若い人達と一緒に
田舍を歩く樂しさ
野原、畠、林、森
どこでも歩き唱ひふざける
底ぬけに呑氣で善良な友達ばかり
畫家に、詩人に小說家、
磊落な樂天家揃ひ
それで皆んな貧乏でゐて氣位ひが高く
自信の强い、我等の仲間、樂しい仲間
一同揃つて押し出す田舍
野天の集會の樂しさよ



成吉思汗傳奇

露伴學人

第一折

場處 敖嫩河の上流の南方の山中　支源の小川草隠れに流れて　白樺川柳などの雜樹處々に欝として茂れる無人岑寂の地。放牧され居る羊の群、彼處に三四、其處に五四、或は日當りに、或は日蔭に、草を食み水を飲み居る。

人物 牧奴二人、いづれも舊くして見苦しく、毛も處々剝脫したる毛皮の裘を被て、圓く淺くして破れ垢づきたる氈帽を冠り、日當りの草原に横になり、退屈懶惰の態をあらはしながら雜談に耽り居る。一人は四十過ぎ、一人は四十前の年頃。

甲。今年ももうそろ〳〵草か白なくなつて來たナ、ア、いやだ、いやだ。

乙。いやでも仕方が無い、樺の葉が黄色になつて、柳の葉がはら〳〵落ち出すと、

——トしきりは山が明るくなつて、かうして日だまりに居ると睡いやうな好い心持になるが、其代りに寒くなるのはもう直だ。

甲。寒くなるのも可いが。

　　ト羊の群を指さして

彼奴等の世話をするのが面倒だから困る。物を食はないでも大きくなると好いがなア。

乙。ハヽヽ。オンゴンだつて脣を濡らしてあげなけりやあならないのだもの。（オンゴンは木製或は毛氈製の懸け佛やうの偶像。土俗食事の際先づ馬乳等を其口部に塗りて後に食を攝る。像を奉じ饌を供するの儀なり。）

甲。ハヽヽ、ちがひ無い。然し汝は甚い奴だ、オンゴンと羊と一ツに言ふ奴があるか。

乙。ナニ汝だつてオンゴンなんぞかまふ方でもあるまい。腹が減つてゐる時は、先へ自分が食べて終つて、それから餘り汁を塗抹る位のものだらう。

甲。さうだともサ。自分が急な時には人の事は忘れる。忘れりやあ仕方が無い。だが俺は忘れた時には忘れついでに何も彼も忘れる、そんな餘つた汁を塗抹るなんといふことは仕ない。

乙。ハヽヽ。眞面目に言譯をしてゐるナ。馬鹿な奴だ。

甲。それぢや汝はオンゴンは何とも思はないか。

乙。さうさナア、年寄なんぞのする事に楯を突いたつて詰らないから別に惡くも云は無いが、あんなものは何だ、人が指先でこしらへたものぢや無いか。

甲。フム。それぢや騰格里（天）は？

乙。脱裕里は俺だつて拜む。人のこしらへたものぢや無いもの！天のほかの不思議なものは悉皆あやしい。

甲。汝は少し人が惡いのだナ。それで何でもあやしがるのだ。

乙。汝は少し人が善いのだ。オイ、褒めたと思ふと違ふよ、人が善いといふのは馬鹿だといふことを異つた言葉で言ふのだぜ。それでオンゴンなんぞにも不圖したら不思議な力でも有るやうに思つてゐるのだ。

甲。馬鹿でもいゝや、世の中に不思議なことは澤山ある。解らないことが澤山ある。オンゴンだつて解らないことの中の一ツなのだ。

乙。ハヽヽ。解らないことも解れば解るぞ。解らないで始から終まで解らないものは天ばかりだ。其ほかのことは解つて見ると大抵虚妄なのが不思議の本性なのだ。

甲。馬鹿ッ！ そんなら黒と黒との羊から何樣して白が出る？

乙。馬鹿！ そんなことが不思議なものか。白から黒が出ることも有るから、黒から白が出ることも有るのだ。

甲。俺が負けたのでは無い。汝は口が達者なのだ。そんならも一ツ聞くが、雌が無くて子が生れたら？

乙。そんなことが有るものか。

甲。有る！

乙。有るものかい。

甲。有る、虚妄ぢや多いぞ！

ト戯談募りて云爭ふところへ、阿蘭豁阿の長子不古訥臺、二十六歲、腰に小刀、手に半弓、裘衣氈帽、見苦しからぬ扮裝、同じく次子別勒古訥臺、二十四歲同じ服裝にて出來り、こゝにさしかゝる。甲乙二人は心付かず。

乙。そんなことは無いと云へば、

甲。イヤ、有ると云へば、

乙。そんなら何處にある？

甲。鼻の先にある。

乙。虚言つけ。

甲。虚言ぢやないぞ。言うては悪いか知らぬが、

ト少し遠慮氣味にて、

甲。彼の阿蘭豁阿さんぢや。

ト云ふ。來かかりし兄弟、母の名を噂されて顔見合せ、柳の一ト簇茂りし陰に立止まりて身を潜ませ竊聽する。二人は毫も知らず。

乙。フン羊の事かと思ふたら、何だ彼の事か。

甲。それどうだ。彼の人はナ、朶奔篾兒干殿を夫に持つて、不古訥臺、別勒古訥臺の二人を生み居つたらう。それから朶奔篾兒干殿は病死されて終つて後、別に誰を夫にしたといふことも聞かぬに、不忽合塔吉、不合禿撒勒只、勃端察兒の三人を生んだぢや無いか。しかも品行の良い、行屆いた、賢い人なことは誰しも知つて居る哩。斯様した不思議なことも世には存るぢやないか。

乙。ハヽヽ。何を下らぬことを言ふのだ。だから汝は少し甘いのだ。

甲それでも誰だつて阿蘭豁阿さん悪い陰口など云ふものは無い。それで季の子の勃端察兒でさへ今は十七、もう立派な

若い人になつて來られるぢや無いか。

乙。馬鹿だナ汝は。それで汝は不思議な事の例に引いたのか

甲。でも男が有るぢや無し、朶奔篾兒干殿の兄さんの一家は疾に他處へ移つて終はれて近しい往來する人が有るぢや無しだもの。全く不思議に相違無いぢや無いか。

乙。ハヽヽ。そんなに不思議がるなら教へてやらう。朶奔篾兒干殿が亡くなつてから、篾兒干殿の種で無い三人の子の中の、一番季の勃端察兒が生れた時でさへ、一番の兄の不古訥臺殿はやつと九年か十年だもの、何が解らう筈は無い。あれはナ、彼家に居る馬阿里黒伯牙兀歹、古溫ナ。

甲。あの奴のか。

乙。アヽ、彼の奴よ。彼奴は本は何だか知れないものですナ。朶奔篾兒干殿の存生中の事だが、篾兒干殿が或時兀良罕の人から貰つた三歲の鹿を馬に附けて歸つて來られた路で、

甲。ウン。

乙。蹣跚と疲れながら步いて居た旅の老夫と小兒とに遇はれたのだ。そこで、何樣したのだ汝等は、と聲を掛けられると、私共は甚く困窮してゐる者で、物も食べかねて此有樣です、御慈悲に其鹿の肉を頂戴いたしたい、此兒を御召使に差上げませう、と云つたのだ。まるで昔昔大昔の談さ。悠然なので篾兒干殿が鹿の半分を呉れられると、老夫は小兒に因果を含めて篾兒干殿の御供にした。其鹿の片身と代へられたのが、今の彼の奴なので、彼奴其後ずつと通して働いてゐるのだ。あれさ、あれのだらうぢや無いか、牡が無くつて子が生れるなんて、そんな事の有りやう筈はないことだ。

ト云ふを聽きて此方の兄弟二人は烈しき感情に襲はれる。

甲。だから汝は少し人が悪いといふのだ。三人の子息達が毫も馬阿里克古溫に肖て居ないではないか。それに阿闌豁阿さんは其様なことをする人では有るまい。

乙。肖て居ないことは肖て居ない。又肖て居れば誰だつて意のつくことだ。

甲。それぢや汝は手證を見たことでも有るのか。

乙。ナアニ、そんなことが有るのぢや無い。彼家に一緒に居るのでも何でも無いもの。

甲。そんなら然様いふのはたゞ汝の邪推といふものぢやないか。

乙。それぢや汝は何様思ふのだ。

甲。だから俺には解らないといふのだ。第一誰でも意のつくことは、彼の三人の子息達の眼の色が少し異つてゐることだ。俺達はじめ、彼の兄弟の不古訥台殿でも別勒古訥台殿でも皆茶色の眼ぢやないか、それだのに後から出來た三人の子息達の睛は茶色ぢや無い、灰色がゝつて居る—不思議ぢや無いか、あたり近處に灰色がゝつた眼の者は一人も居無い。馬阿里克古溫だつて、たゞの茶色の眼だ。

乙。ハヽヽ、そんなに不思議がることは無い。大きな御世話だ。たしか朶奔メルゲン殿の祖父様に博爾濟吉台メルゲン殿といふのか有つたといふ談だから、(博爾は博囉に近く、博囉は蒼色、濟吉は睛の義)眼の色が異つたからつて不思議は無い。

甲。汝の言ふことは愈々をかしいぜ。阿闌ゴアさんの近祖に灰色の眼の人があつたといふのなら聞えるが、朶奔メルゲン殿の血筋の方に然様いふ人が有つたといふのでは、メルゲン殿が亡くなつてから出來た子息達に然様いふ眼色の出

た譯の理屈にはならないぢやないか。

乙。こいつは成程俺の言つたことは筋か立たないナ。

甲、第一博爾濟吉台メルゲン殿といふ人が有つたことも俺は聞いて居ない。虚言ぢや無いのかえ。

乙。それは俺のこしらへごとぢや無いが、確なことは知らない。

甲。何だか妙だナア。何にしても不思議だ。

乙。ひどく不思議がつて居るナ、大きにお世話だといふのに。

甲。ちがひ無い！　だが解らないことも有るには有るだらう。解らないことの本性は大抵虚妄だと汝の決めてゐるのも當にはならないぜ。

乙。ナーニ然様だよ。あのことだけは今解らないから何とも云切れないが、矢張り俺は解らないことの本性は大抵虚妄だと思つてゐるよ。

甲。人の悪い奴は大抵剛情なもんだ。

乙。おめでたい奴は何でも受取るもんだ。

甲。ハヽヽ。

乙。ハヽヽ。

甲。大分日ざしが移つて來た、どれ山麓の方へ出て行かうか。

乙。ウン、然様しよう。

ト二人動き出さうとする。竊聽せる兄弟二人も顔を見合せたる儘無言で立去る。

第二折

場處。 不兒罕山の東方なる裾野の緩き傾斜地。中央のエ、デと稱ふる心柱より四方へ張りたる一つの大なる幕舍、」幕舍の頂上の風拔き窓より薄々と煙立上り、六日頃の月、やや離れたる楡の樹立にかゝりて、四邊薄明るく、幕舍の外には人の乘用の車二輛、轅門を爲すが如くに置かれあり。遠からぬ處に當りて馬の嘶折々聞ゆ。阿闌豁阿の住居。

人物。 前折に見えたる不古訥台、別勒古訥台二人、前と同じ扮裝にて、此處へ歸り來りながら語る。

不古訥台。おもしろく無いナア、別勒古訥台！別勒古訥台。然樣ですとも！今朝と同じ吾家だけれども入るのが樂しくない、何處か別の處に我等兄弟の居處が出來て居れば、そこで二人きり寢みたいやうな氣がします。

不古訥台。ウン、俺もそんな氣がする。何だか忌々しい。他所の部落の小惡い奴でも通りかゝればよい、思ふさま喧嘩でも仕て、そして腰の骨の折れるほど擲りつけてでも與れたい。

別勒古納台。ヘ、、、。然しまあ今が今何樣も仕ようは有りません。いづれ其中には何とかするとして、………此處まで「歸つて來て、馬のやうに屋外に立つてゐる譯にもなりませんから。

不古訥台。ヘ、、、汝は頓智がある。人の氣むきを直させるよ。

ト　二人幕舍に入らんとする時　中より馬阿里黑古溫　三十七八歲の柔和なる面ざし、取廻し良き物ごし、立派にはあらねど不格好ならぬ毛裳、水壺を手にして出來り、二人を見て親しげに一寸會釋し、外へ行かんとする其面に月の光薄白く射したれば、ひとしほ優しく人好きのするやうに見ゆ。二人は忌々しげに見て、

不古訥台。何だ此奴、いやに尊大だナ。
ト、咎める。馬阿里克古溫、合點ゆかねば不思議と思ふのみにて躊躇ふを、重ねて
別勒古訥台。我等二人にそんな樣子をして濟むとおもふか。
ト罵る。
馬阿里克古溫。何か御氣に觸りましたら御免下さいまし、つい急いで居りましたものですから。
不古訥台。何を急いで居る？ 急いでも急がなくても主人は主人だぞ、馬鹿にして居やがる。
馬阿里克、古溫。何時に無く大層御氣嫌が惡い、
ト獨語して、
何樣致しまして。そんな氣は少しも有つては居りません。たゞ御病人樣の御吩附、冷い清らな水を取つて參れとのことで、心忙しく出て參らうと致して居たばかりでござります。
別勒訥台。母樣はそんなに御宜しくないのか。
馬阿里克、古溫。イヱ、別に御惡くなりましたといふのではございませんが、御存じの通り召上りものは全で無いも同樣、たゞ清水ばかりを御好みなさるので。
不古訥台。フン。そして清水も汝の汲んであげるのを御好みなのだらう。
馬阿里克古溫此語の意味を解せぬながら。
馬阿里克古溫。それは何樣か存じませんが、私はせい／＼良い清水の出る處を調べまして、少しは遠くても良い水を汲んで來て差上まするので、

不古訥台。然様だらうよ。そして俺達に飲ませる水は近處の宜い加減の處から汲んで來たやつなのだらう

別勒古訥台。母様の水は勃端察兒(ボドンチャール)にでも汲ませれば宜い。

馬阿里克古濫。何様いたしまして若様方にそんなことを。

不古訥台。フ、汝(きさま)が勃端察兒(ボドンチャール)を若様といふのか。なるほど、若様でないことも無い、

主人筋には主人筋だからナア。

といふ。馬阿里克古濫、合點も行かず返辭も仕兼ねたる顔付。

別勒古訥台。彼奴等が若様でも若様で無くても宜いんだが、俺達二人は彼奴等と一緒にはならんぞ、馬鹿にするな。

馬阿里克古濫愈々合點が行かず、たゞ當惑するのみにて、

馬阿里克古濫。どうも私には何だか解りませんが、それでは勃端察兒(ボドンチャール)さまに強(たつ)て水を汲んで戴けと仰あるのですか。

不古訥台。やかましいやイ。勝手にしろ。

別勒古訥台。フ、何だ水を汲む水を汲む!? より泥を汲んで人に飲ませる方が汝の得手だらう。下手にまごつくと蹴飛ばすぞ。

ト所以不明に言葉を荒くして打擲もしかねまじく罵るところへ、奥より勃端察兒(ボドンチャール)出で來る。十七歳ばかりの若者、眼の中清しく、色やゝ白く、淡色の毛裘、綰(わが)ねたる髪、動作顔貌、粗野ならずして自づから上品なるところあり。二人を見て、先づ兄等に對ひ、

勃端察兒。オヽ、歸つてをいでになりましたか、母様が待つておいでゞす奥へおいでなさいまし。

ト親しげに言ひ、更に馬阿里克古濫に對ひて、

勃端察兒。喧ましい、何をわやついてゐる！母様が段々御悪いのを知つて居るではないか、さつさと水を汲んで來い。

ト馬阿里克古溫の言譯をせんとするを抑へて、

勃端察兒。何も言ふことは無い、水よりほかには此頃召上るものも無いことは知つてゐるでは無いか、ぐずぐずせずと行けく。風も無い夕暮の靜かさに、何か譫言（うはごと）のやうな聲がきれぎれに奥へ聞えるぢや無いか、母様に氣兼無しで失禮ぢや、行けく。

馬阿里克古溫。ハイ、ハイ。

ト出て行く。不古訥秦（アグヌダイ）兒弟は忌々しげに勃端察兒（ボドンチャール）を見て言はず、寂然たる秋、今や夜に入りて風も無く落つる楡の木の葉の三四、幕舎の屋を撲つて幽に聲あり。

○馬阿里克古温といふ名は宜しからず。但し馬阿里克の子、即ち鹿の肉に身を購はれたる者の名明らかならねば、馬阿里克の子と其儘にしたり古温は子の義なり。

第三折

場處。阿闌豁阿幕舎。一面に粗き毛皮敷詰めある室内、心柱（エーデ）を側にして阿闌豁阿の寢臺、寢臺は柔らかなる毛皮を以て掩はれ、又美しき毛皮の夜衾の爲と見ゆるがつくねられたるに、四十五六歳の阿闌豁阿憑りかゝり氣味に坐し居る。寢臺に對して胡床六七箇列べられ、支那製の眞鍮の瑠璃燈樣の大燈懸り居りて、それに輝ける獸脂の火の光り割合に明るく室内を照し下手二ケ處に燭臺、蠟燭燃ゆ。心柱の後方、懸棚樣のものありて、種々細玩寶器、美しく飾られたる小刀等見え、又其奥の方には異樣胡風の甲冑、弓箭、靱など懸けあり。寢臺の枕の方、小き臺に水

盥、小さき水壺。

人物。阿蘭豁阿。阿蘭豁阿に近き胡床に不古訥臺。其次に別勒古訥臺。次に不忽合塔吉。次に不合禿撒勒只。次に勃端察兒。各胡床に腰掛け居る。

時。前折の夜のつゞき。食事済みたる後。

阿蘭豁阿。身體は日に衰へて來るが、斯樣して母の膝下に、五人が五人睦まじう揃うて居る逞ましい健氣な、

ト云ひかけて不古訥臺等四人を見、次に勃端察兒を見て、

阿蘭豁阿。又は心の高い吾子等を見るといふことは、何とも云へない妾の喜悅で、つく〴〵吾身の幸福があらゆる女の中で勝れて居ることを思うて嬉しい。今宵のやうに、しつらへさせた一ツ臘羊を五人が妾の前で仲宜う喫べる、マア何といふ美しい樂しい有樣であらう！妾はあらゆる女の中の幸福の女、天の恩寵は妾に極まつた。もう恩寵に全く足りた。何時此世を去つても慶喜ばかり、秋の獸の毛の尖で突いたほどの憾も無いゆゑ、たゞ靜かに此世の外に招ばれて行く日を待つてゐまする。しかも何の病氣といふでも無く、たゞ老いて、衰へて、自づからに精氣が竭きて行つて、丁度薪が盡きて火が滅ゆるやうに、近々に此世から消えさうなのは、又何といふ有難い天の恩寵だらう。わたしは一生あたゝかい心を有ちとほして來た。お父樣を愛し、お母樣を愛し、又朶奔篾兒干殿を愛し、不古訥臺をかはゆがり、別勒古訥臺をかはゆがり、不忽合塔吉、不合禿撒勒只をかはゆがり、一番終りに勃端察兒をかはゆがり、有つて居るだけの心の火の力を和らかな不斷の情思の風で片向けて、身も世も忘れて月日を過した。濕つた薪が燃えるのを難つてプス〳〵と嫌な煙を出すやうな、そんな、きたなびれた心を有つてゐる人々を見るたびごとに、何樣して彼樣いふ情無い愍然な人々が、よくも自分を卑まずに人の妻になつたり母になつたりして世に在るのだらうとさへ思つ

たほどだが、實はまたわたしが幸福に良い父母を有ち、良い夫を有ち、良い子供を有つた爲に、よくわたしの心の火が燃え通したのだと思ふと、わたしは天の恩寵がほんとに有難くて、此樣に薪の短くなつて來たのも猶更有難い。薪の火炎は薪に吸はれる、石や土には吸はれるもので無い。人の心の火は、燃え出す心を有つてる人に吸はれる。わたしの父も母も夫も汝等も、皆妾に取つては適好くも石でも無ければ土でも無かつた。妾の心の火を吸ふものであつた。あゝ幸福で有つた妾の一生は。それでわたしはもう薪が盡きようとして居る、が汝等に吸はれてまだ燃えてゐる、遠からず雪のやうに白い灰になつて終るだらうが何といふ幸福なことだらう。そこで汝等に一ツ話して置くことがあるが、勃端察兒や、あすこにある箭束を持つておいで。

勃端察兒立つて奥の方より箭束を持出し、母の傍に置く。

阿闌豁阿。不古訥台、別勒古訥台、これを折つて御覽。

ト一本づゝ箭をわたす。二人受取り、各、無造作に折りて捨てる。

不古訥台。母上、これは何樣いふことでございまする？

阿闌豁阿。マアよい。

ト云ひながら復二本を抽きて取りて、

阿闌豁阿。不忽合塔吉、不合禿撒勒只、これをお折り。

ト一本づゝわたす。二人も無造作に折りて捨てる。阿闌豁阿、また一本を勃端察兒にわたし。

阿闌豁阿。勃端察兒、これを折つてごらん。

勃端察兒少時其意を考へしが、測りかねて言葉に從ひ、同じく造作無く折る。

阿闌豁阿。勃端察兒、此箭束を一寸緊く縛りよせて。」

ト小手招きして命ずる。勃端察兒立寄りて命の如くに、二ケ處ほど緊しく縛る。

阿闌豁阿。よろしい。汝、それを折つてごらん。

トいふ。勃端察兒折らんとするに折れず。

阿闌豁阿。不古訥臺！ これを折つてごらん。

不古訥台も折らんとするに折れず、母また残れる三人に一々同じことを命ず、三人共折る能はず。

阿闌豁阿。これ五人の子供、よく此事を身に引締めて記えて置くがよい。汝等は五枝の箭のやうなものぢや、離れ〳〵獨自〳〵、一枝づゝに分れたならば、誰にも彼にも容易く折つて捨てられよう、緊しく相頼つて一ツになつて居たらば、中々人には折られまいぞ。親しい者は互に親しみ、力になる者は力になり合ふが大切なこと。五人は皆わたしから出たものぢやに、わたしが亡くなつても能く結び合つて、離れ〳〵になつてはならぬ。五人兄弟とは云へ、上の兄二人は朶奔篾兒干殿存生中に出來、あとの三人は然樣では無ければ、隔て心も出ようなれど、いづれもわたしの血を引いたもの、必ずともに疎みあふまい。三人の子の父は誰と疑ふことも道理ではある、又世の中には禽を取らいで常々馬糞を摑むことを己の能としてゐる馬糞鷹のやうに世を送る者のあつて、人を惡う云ふが有るが常の習ぢやが、篾兒干殿亡くなられてからはわたしは自由の身、考へて見ても解ること、何で後暗い思をして苦しまうや、三人は決して賤しいものゝ系では無い、天より光が來て光が去つて、そして三人は遺つたのぢや、强ひて言へば三人は天の子といふもの、土民と一ツになるものでは無い、やがて三人の中から合木渾合場（世を總べ統ぶる總王）が出たらば、賤しいものの系で無いことは人々も悟らう。天の意はわたしには測れぬ、汝達にも測れぬ、誰にも測れぬ、然しわたしには幸福な

街であつた、そして燃え盡して此火は玆に滅えようとして居るが、火は新しい薪に傳はつて又新しい火炎を揭げよう。汝達も一生を快く燃えて欲しい、吾が火を吸はれる薪に遇はねばそれまでぢやが、惡う燃ゆるな熾ゆるな熄ゆるな。假令曉の星のやうな小さな火でも、火は種子さへあれば時と風とで、世界を焚盡すやうなことにもなる。

ト訓ふる。五人の子はそれ〴〵の性格より出づるそれ〴〵の態度。不古訥台、別勒古訥台は感じもせぬ樣子。不忽合塔吉は脚下の折れたる箭幹を凝然と見詰め居る。不合禿撒勒只は腕組して考へ居る。勃端察兒はたゞ聞惚れて二心に母を瞻る。阿闌豁阿は兒等を見廻し、最後に勃端察兒と眼を見合せて深く喜び、勃端察兒が膝に載せ居たる矢束の一端に手を掛けてやさしく引く。引かれて放ちもせず、同じく優しく引合ひて母子の愛に互に融くる時、大鐙の燈火、華を結んだるが落ちてパット光揺ぐ。

○折箭訓兒の譚は我邦にては毛利元就の事として傳へらる。元就の阿闌豁阿に後るゝ數百年なり。彼邦にては、魏書卷一百一、及び北史卷九十六に、吐谷渾の阿豺、死に臨みて、緯代等二十人の子と、母弟慕利延とに喩すの事見ゆ。阿闌豁阿の阿豺に後るゝも亦數百年なり。吐谷渾は遼東に起りて、西南白蘭を極むるに至り、北地數千里を占む。阿闌豁阿、聞くことあつて、阿豺の話に本づきて子を喩すか、或は偶合か。今たゞ古傳の輪廓に依りて筆を寄くるのみ、考證を敢てするを須ゐざるなり。

○阿闌訓兒の事、古傳に於ては春日なり、今秋夜とす。筆墨の便宜に因るのみ。

第四折

場處。斡難河流域の山中高地の荒涼蒼茫たる曠野。

人物。 勃端察兒。

時節。 秋。

全體鼠色の薄青き水青の馬の、見苦しく汚くて脊通りのみ黑き毛の生ひたる、しかも其脊に瘡あるため悩める上、かてゝ加へて尾筒禿げ短く、何とも云へず貧乏臭く、痩せさらぼひたるに、食料を盛りたる古き革嚢、古くて良からぬ毛皮二タ卷、小さき雜具入りの袋など付け、小刀を佩び、弓箭を負ひて悄然と騎りて、ホク／＼と歩ますると馬の足搔も健やかならず。曇り空の陰氣なる未刻下り。馬をいたはる微なる口笛といふほどにも無き口笛を吹き已めて、

勃端察兒。ア、淋しい日だ！　ナ。淋しいのも當りまへだ。ハヽヽ、永年棲み馴れた家舍を捨てゝ、目的も無く此樣なところへたつた一人で來たのだもの。

ト、復しばらく無言になり。フイツ。フイツと口笛を微かに短く鳴らし、馬をいさめる。馬はたゞホク／＼懶げに歩む。やゝ久しくして。

勃端察兒。かはいさうだナア青馬！　齢はよつて居る！　脊瘡はある！　平生善く喫はれて居るでは無し！　朝からは歩き通しだし、荷は付けられて居るし！　俺は脊られるだけ脊て、持てるだけ持つて重くなつてゐるし、やりきれまいが、マア勘忍してくれ！　好い草があるところへ掛つたら休ませてやるからナ。

ト云ひしが、フト氣が變つて、

勃端察兒。ハヽヽ、ハヽ。何だ、馬と談話をするものが有るものか。ハヽヽ、ハヽヽ。

ト流石に年若ければ元氣に笑ひて。フイツフイツと口笛する。馬はホク／＼。又少時して、

勃端察兒。然し馬を相手に談話をしたつて成下つた譯では無い。母樣の仰あつた心の温みを情思の風で柔らかに馬に吹付けただけだ。羞かしいことは無い。却つて斯樣いふやうに氣をもつて日を送るのが幸福だと教へて下さつたのだつた！然樣だ。然樣だ。青馬よ。汝に話し掛けた時は、默りこくつて居た時よりは、俺の心は和らいで、そして俺は幸福だつたのだ。ハヽヽ。して見ると今はもう青馬は俺のたつた一人の話相手なのだ、可愛がつてやるよ、青馬よ。ハ—ハヽ、耳を動かして返辭をして居るナ、ハヽヽ。

と心明るくなりし時、日は薄雲に遮掛られて空暗くなると、又心も暗くなりて、

勃端察兒。それに付けても情無いのは四人の兄だ。母樣がなくなると直に俺を邪魔物にして—成程俺は齡も足らぬ、力も足らぬ、愚で弱からう。彼等が立派な駱駝なら、俺は其の背の荷物でも有らう。それだと云つて俺一人を馬鹿にして、母樣の遺された吾家の所有物は、馬群も羊群も家寶も貯蓄の糧食も、あらゆる物も、みんな四人で相談して分けて終つて、小兒だからとて俺には當歳駒一匹呉れぬのは甚い。もと〳〵然樣いふものも分けぬのが本當なのだ、一つ心柱の周圍で衆人が生活すのが母樣のお望だつたに違ひ無い、それで箭の喩の御話も有つたのだらう。と思つたから兄さん達に思ふ通りを云つたら、默つて引込んでゐろ、との只一と言は酷過ぎた。爭ひも爲得まい、爭ひもすまい、と多寡を括つての挨拶で有らう。成程俺はまだ爭ひも爲得無い齡では有り、力では有り、又一番季の弟では有るし、そして兄弟いさかひをするやうな氣は少しも有つてゐぬ。それだとて只一と言は酷過ぎる。兄さん達は温味が無い、卑吝だ、冷い石だ、土だ。俺の心の火は吸はれかねる。俺はプス〳〵燃える薪のやうにされた。可厭だ。悲しい。それで箭束の喩には負くやうだけれど唯一人になつて、自分は自分で自分の世界に自分を置かうと思ひ立つた。塵ほども分配など取らう料簡は無い。人の欲しいものは人に取らせてよい。與へる者は取る者より大きい。取らぬ者には取られる者

が待つて居る。俺は測り知られぬ運命が俺の行末にあることを思ふ。親の物を受取つて好い顔をして居る者ほど卑吝な者は世の中に無い。王になる者は立派だ、王の子になる者は乞食の子が乞食になるのと同じ立派さだ。俺は天の子だと母様から言はれた。無一物で、赤裸々で、朋友も無くて、奴僕も無くて、馬も羊も有たず、家舎も無い、助けて呉れる者も無い。ほんとに俺は天の子だ。そして今こそ瞭然と天の子とわかつた。俺は俺の心の火を天に向けて燃すべきだ。薪の火は薪に吸はれる。天の子の心の火は天に吸はるべきだ。俺は子である、天は俺に取つて決して有では無い土では無い、有難い！天が包んで居るほどのものは皆俺の取るに任せられる筈だ。イヤ、人は誰も皆天の子の筈だ、たゞ自分のと卑吝にして人の子になりたがる、馬群を承取りたがる、羊群を承けたがる、奴僕も財寶も貰ひ繼ぎたがる、そして然様いふものを承繼いで其軀殼の中に蹲踞つて、人の子となつて死んでしまふのだ。あゝ有難い、嬉しい、幸福だ、芳草は践まれて其の佳い香を發す、俺は兄さん達に蹴付けられて天の子であつて其の本來が押出されたのだ。合木渾合惕（世界王）は必ず此の尾の短い、脊に旋の有る、汚い青馬に騎つて軀殼を脱出して寂しい寂しい目的も無い山路に身を抛り出した俺の末から出る！

ト青年的雄偉感に自づから感動して、差掛りたる山口を横に昂然として馬上遙に蒼天を仰ぐ時、片雲疾馳して、時雨めく空より薄日の光寒く射す途端、悲風忽然と下し來つて、山樹鳴り騒ぎ、野草倒れ靡きて、大小黄赭さまぐ〳〵の樹の葉バラ〳〵〳〵と飛んで、飛蝶の如く人を撲ち馬を撲てば、馬は悲み鳴き人は懐え竦む。

勃端察兒。エ、ひどい風が出しぬけに吹く！吹くなら吹け！兄達は俺を兄弟扱ひにせぬ。俺は天地の間のたつた一人になつたのだ。死なば死ね、生命が有らば有れと、俺は自分を曠野荒山の中へ抛り出したのだ。俺の頭の上には天が有るばかりだ。ア、もうそろ〳〵斯様いふ風の吹く時節になつたのだ。樹が殘らず裸になつて、草が殘らず骨ばかりに

なる冬が逼つて居るのだ。俺の前途には何がある？何一ツ無い！でも厩の下なら雨は防げよう、畦の蔭なら風も凌げられう。まゝよ！天の子だ。ハヽヽ。

ト空洞のやうな心になつて笑ひしが、

勃端察兒。だが、俺につき合つた青馬はかはいさうだナ、青馬よ。俺は汝をかはゆがつて居ないのぢや無い。堪忍してくれ、青馬よ。もうすこし辛抱しろ。

ト馬を急がせ行きかゝる時、前方の森の中より狼の唯む響き聞え、馬驚く。

勃端察兒。まし〱。何とも無いぞ、怯えるな。フイツ、フイツ。

孤影蕭然痩馬の足掻も哀しく混沌冥落たる運命の前途へ進み入る。またしてもドツと下し来る風、落葉繽紛として馬頭を撲ち、鞍上の青年惨として顧盼せず。

第五折

場處。斡難河邊の巴勒諦阿剌。河に對ひて奥深き澤の開け居る其入口。

人物。勃端察兒。

皮つきの丸太の長きを眞直に地上に樹てたるに、同じ丸太を三方より寄せて縛りたる穹舎形の庵、恰も柱なくして屋根のみなる日本家屋のやうなる形、總べて小さき樹枝と茅類の草とを以て葺き包み、南の一面のみに小さき出入口、吊り垂れたる毛皮を以て内外を劃る最粗しき手作りの住居。出入口の前に乾草を厚く敷き、其上に狼の生皮を

敷きて、勃端察兒兩脚を前に伸ばし、腰を下して坐し居る上を冬近くして力無き日の光射し居る。草の廬の後は楡、樺なんどの雜樹の大きなるが簇立ち、前面の開けたる緩傾斜の草地に、前折の水青の瘦馬、草を撰みて噛み居る。勃端察兒、不器用なる手つきにて、熱心に馬の尾毛を綯りて細き線をつくりながら、

勃端察兒。絲と異つて馬の尾は綯りづらいが、それでも物事は骨を折つて巧く仕ようとする中には慣れて來る、慣れて來ると巧くなる、巧くなると速くなつて來る。有り難い！もう斯樣なに出來た。

ト出來上りたる綯絲の尺を取つて見て、少時考へ、

勃端察兒。ア、まだ少し足らぬ。仕方が無い、また蒼馬の尾毛を貰はなければ。

綯絲を座右に置き、立上りて馬の傍に行き、後方に廻りて、小刀を腰邊より抽き、笑顏にて

勃端察兒。青馬よ、かはいさうだが、も少し尾毛を與れ。もと〳〵餘計も無い汝の尾の毛を奪るのは氣の毒だがナア。

ト、小刀にて毛を剪る。馬は少し跳ようとする。

勃端察兒。よし。もうよい、もう奪りはせぬ。ハヽヽ、何をするかと怪しがつて居るナ。

前へ廻りて平頸を撫でゝやり、以前の坐へ復り、また綯り繼ぐ。少時して、

勃端察兒。此程出來たら、もう足りるだらう。野禽の雛を取つた彼の若鷹、うまく此の俺の罠にかゝればよい。

ト又立つて馬の居る處より遙に左手なる枝疎なる小樹の低き弱き枝をあちこち押撓め、綯絲を操りかけて、別に懐中より猶生き居る小禽を取出し、これを小枝に縛しつけて、鷹來りて之を攫み去らんとすれば、機發して馬絲絡むやう罠套を裝ひ置き、歸りて草廬の中に入り、身を潜めて垂れ皮の間より覗ふ。天地寥閑たること良々久しくして、何處よりか若鷹颯と下し來て、禽を攫み去らんとする時、罠套にかゝりて、ハタ〳〵と搏ち踠く。勃端察兒急に走

出でゝ、鷹を捕へ、其脚に兼て設け置きたる少し幅ある革緒を着けて、自づからなる枯枝の架木に止まらせ、鷹に地上五尺ほどの高さを有たせて、其枝を確と立つ。鷹は一應は暴れたれど、如何ともし難く、やがて枝上に靜まり居る。

勃端察兒。鷹よ、諦めて俺の手に居る者になれ、彼の青馬と朋輩になれ、俺は決して惡い主人では無い。ハヽヽ、眼を光らせて睨るばかりだが、可愛い奴だ。今に俺に馴れて好い働をするだらう。アヽ今日は好い日だ、天空を飛ぶ禽さへも、寛とした考と緻密い骨折とを積めば俺のものになることを目前の事實でおぼえた。そして此の一羽の禽から、鴨だの雁だの色々の水禽や、鴫、鸐雉だの色々の野鳥山鳥が、其時節に隨つて獲れるやうにならう。嬉しい！こんな、小さなことでも俺には嬉しい。

年若き者には希望のみの前途に悦びの笑を面に上せたる瞬時、

勃端察兒。アツ！喜んでは見たが、マア何といふ俺だらう！俺は狼の殘り物で生きて居るのぢや無いか。狼の啖ひ餘しの野の獸の肉を食つたり、狼が崖下で取卷いた大きな野獸を、崖上から一ト箭呉れて仕留めて、狼に食はせて、其後から行つて一ト臠斫取つて來て食ふなど、まるで俺は狼の仲間か、狼の友達だ！仕方が無い、食ふ物が無けりやあ誰でも何様なことでもするのだ。俺達の先祖は布爾特齊諾（神話的人物、蒼き狼の義）だといふ。其の布爾特齊諾が此處よりは西の方の遠い〳〵騰吉斯海（圖理琛の書に從へば即ち今の裏海）を渡つて此方へ來たといふが、先祖が蒼い狼だつたといふなら、俺が狼の仲間になつて日を送るのも先祖と一諸に日を送るやうなものだ。ハヽヽ。いづれ先祖といふものは俺のやうな生活を仕たものかも知れない。吾家を出る時から、死なば死ねと思つて出て來たが、小家を造れば雨にも打たれぬ、濕氣にも負けぬ、一枚一枚と獸皮を剝ぎ蓄はへれば夜風朝風も寒くは無い、野

獸の肉を食へば饑えても死なぬ。青馬が居る、鷹が居る、何樣か斯樣か俺も主人らしい。今さら死にさうにも無くなつた。なまじ人の子で無くつて、人の祖になつて、却つておもしろい。生きてさへ居れば、昨日で無い今日が出て來たのだ、今日で無い明日が又出て來よう！昨日は此鷹は空のものだつたのだ。

此時鷹羽ばたきする。勃端察兒これを看やりて、細き樹枝の先端に野獸の肉片を献せ、鷹の嘴邊にそつと出す。鷹これを啄み食ふ。勃端察兒いと滿足げに見て、

勃端察兒。よし。若鷹！汝にも明日があるぞ！鴨が出て來るか、鵝が來るか、雁か鴻か、何も出て來ぬか、それは分らぬが！

第六折

場處。勃端察兒の住處巴勒諄阿剌より程遠からず、そこより東南に當つて、細き懸瀑の末の小川となりて流るゝところ、鄂郭爾察克。

人物。勃端察兒の兄不忽合塔吉。鄂郭爾察克の人民。勃端察兒。

時節。春。

毛澤美しき栗毛馬の背上ゆたかに、鞭を後さまに腰に挿みて悠然と歩ませたる不忽合塔吉、四方を見渡し、

不忽合塔吉。山河は皆膨れる、樹の芽は芽ざす、澤の草も野の草も新らしい粧をはじめる、土や巖までが潤ひを持つて來る、和らかい空にフワリ〳〵と淡白い光のある雲が浮いて流れる。アヽ睡くなるやうな好い心持の春だ。然し小禽が聲を立てるのは其友を招ぶのぢや無いか、蟲が羽音をさせるのも同類の睦みのしるしぢや無いか。弟に居なくなら

れて俺は悲しい。初は然程にも思はなかつた。別に構ひもしなかつた。が、淋しくなつた、逢ひたくなつた、濟まないやうな氣がしだした。亡くなつた母様が喩に引かれた箭が一ト枝一ト枝何處からか飛んで來て俺の胸へ立つやうな心持がしだした。で、斡難河に沿ふて去つたといふだけを心當に、段々と探して斯様なところへ來たが、さて弟は何處へ行つたのだらう、少しの手がゝりも得ず、影も見掛け無い。けれど、何様か弟に逢ひたいものだ。そして逢つたが最期一も二も無く連れて歸つて、束ねられた箭束になつて一緒に生活したい。物は皆亡くなつてから其價値が現はれる。秋風が稍寒くなつてから夏の日の有難さを悟る。人は何といふ馬鹿なものだらう。居なくなつてから弟を尋ねる位なら、居る中から大切に思へば可かつたものを！

ト漸くに鄂郭爾察克に近づき、幾點かの幕舍の棟、樹の間に見え、馬の影、人の影目に入る。勇み立ちて

不忽合塔吉。オ、馬が居る、人が居る、幕舍の心柱の頂が見える。居た歟、居ぬ歟、先づ尋ねる手がゝりは有つたといふものだ。

次第に近づくと、鄂郭爾察克の仲間の五十過ぎの一老人、稀らしき若き人の來かゝるを眼をあげて看る、極めて無邪氣の朴實なる顔つき、疎野なる扮裝、牡馬一匹其後に隨ふ。不忽合塔吉馬を下りて、手を擧げ會釋し、

不忽合塔吉。老人！わたしは人を尋ねるものだ。仇敵をでは無い、親しい者をだ。女をでは無い、親族の若者をだ。敎へて呉れ、知つてゐたら包まずに。

老人。ハア、何様な人を尋ねさしやる？

不忽合塔吉。兒童にはもはや過ぎて居る、大人にはまだ少し若い、俺に肖た面つきで、背瘡のある汚い若馬の、尾の短いのに騎つた男だ。見掛けたことが有るかい無いかい。

老人。アツ　それなら知つて居まする。若い鷹を持つて……

不忽合塔吉。鷹？

老人。好い若い鷹です！其鷹を此處の者が誰しも欲しがつて、何物かと換へ無いかと頼んだけれども、換へて吳れ無かつたのです。住んでゐるところも知らぬ、何處から來た人だかも知らぬ、一體恐ろしい沈默で、何でも自分の思ひ通りに唯一ト條に自分を扱つて行く人で。わたし達の處へ毎日のやうには來るがたゞ默つて鷹で獲つた禽を一羽二羽くれまする、そして自分の欲しい馬乳をわたし達から飲んで行きます。つまり取換へて行くのですが、言葉さへ碌に交しませぬ、まるで可汗かなんぞが人に對ふやうな態度で、わたし達が馴々しくなるのを好まぬやうに見えます。それで名もまだ知りませぬ、何處の人だかも知りませぬ。

不忽合塔吉。フーン。して何處に寢泊りするのであらう。

老人。それも知りません。たゞ此處より餘り遠く無い西北の高處に、わたし達より早く――去年から居る人と思はれます。西北の風が强く吹きますると、鴨や雁をむしつた羽や毛が雪のやうに散つて來ます。屹度彼の人が鷹で獲つた禽の羽や毛に相違無いと皆が噂します。

不忽合塔吉。ムヽ。その人の姿や様子に何か記えたことがあるか。

　老人一寸考へ、不忽合塔吉を仰ぎ視て、

老人。アヽ、有ります〱、眼が貴下のやうに、わたし達とは異つてゐました。灰色の眼でした。

不忽合塔吉。さうか！今日はもう來たか。

老人。イエ、今日はまだ見えません。おほかたもう見える時分ですが、

ト右手の澤の奥なる高みへ眼を遣る途端、

老人。ア、、見えました〳〵。彼處に馬へ騎つて此方へ來る姿が……あの人です、ソレ、鷹を臂にして居ます。

ト云ふ。不忽合塔吉其方を見るに疑も無き弟なれば、老人を捨てゝヒラリと馬に跨り歩ます。馬頭忽ち相近づく大樹の下、不忽合塔吉、手を擧げて、

不忽合塔吉、オ、、勃端察兒！

勃端察兒冷然。

不忽合塔吉。オ、勃端察兒！逢ひたかつた！

勃端察兒猶冷然、眞直におのが前途を看るのみ。不忽合塔吉堪へかねてヒタ〳〵と馬を寄せ駢べて、手を取りて、

不忽合塔吉。尋ねて來たのだ！

勃端察兒。わざ〳〵？

不忽合塔吉。オ、サ、もとより。

此の眞率の一語に勃端察兒の面はサツと輝き、兄の手を緊しく取るや不忽合塔吉、馬の頭を立直して、

不忽合塔吉。勃端察兒！隨いて來よ。

とばかり、もと來し方へ引返す。老人は二人を見送り、たゞ呆れて立ち、

老人。何といふ人々だらう、

第七折

場所。撒難河邊の途中。
人物。不忽合塔吉、勃端察兒。
兄は弟を引つれて、遽に無に馬を馳せ、故居へ歸らんとする。弟は物思ふことありて馬足遲くなり勝なるに、兄振返りて、
不忽合塔吉。何で然様おくれるか、馬が出かねるか。
勃端察兒追ひつきて、
勃端察兒。馬も疾くは無いが………
不忽合塔吉。何様かしたか。
勃端察兒。何様もしない。
不忽合塔吉。それなら早速と隨いて來い。
ト先に立つ。背後より
勃端察兒。兄様!兄様!身體には頭の有るが善い、衣服には領のあるが善い。
不忽合塔吉、等閑に聞做して、答もせずに進む。勃端察兒追ひ及びて、
勃端察兒。兄様、兄様!身體には頭の有るが善い、衣服には領の有るが善い。
不忽合塔吉、何とも聞取らずに馬を進むる。又二人の間の隔たるに、振返りて
不忽合塔吉。何うした?
勃端察兒。何様もしませぬ。

トは答ふれど物を思ふ樣子。

不忽合塔吉。そんなら早速と隨いて來い。

勃端察兒追ひつきて、

勃端察兒。兄樣！身體には頭の有るのが善い、衣服には領の有るのが善い、。一ト枝の箭は弱い、一ト束の箭は強い。」

不忽合塔吉聞咎めて

不忽合塔吉。何だ！何を先刻から云つて居るのだ？身體には頭の有るが善い、衣服には領の有るが善いとは知れきつた事ぢやないか、それが箭の教訓と何樣して關聯がある？

勃端察兒近々と馬を寄せて、

勃端察兒。兄樣は心づかずにか。」

不忽合塔吉。ナニ。

ト屹度なり。弟の面を視る。

勃端察兒。今見られたらう彼の鄂郭爾察克の一ト族の民！彼の都亦連の山の方から來た彼の一ト族の民、彼等は大きい者も小さい者も、男も女も働きの有る者も無い者も、皆同じことで頭も蹄も無い。衣服に領無く、身に頭無く、たゞ譯も無く一ト塊になつて居る。造作も無く取つて抑へることの出來る者に違ひ無い。

不忽合塔吉。ウム、、さては汝は、

と勃端案兒を盾て、

不忽合塔吉。其の頭になり、領にならうといふのだナ。

勃端察兒。不思議な事でもございますか。

ト儼然又冷然と兄を見かへす。兄は少時考へて、

不忽合塔吉。ム、。ハ、、。榛樹は時が來れば親樹を離れて落ちる、そして地に入つて新らしい樹になる。汝も大人になつたナア。よしッ、彼の部郭爾察克の民に對つて征伐の手を下さう！　たゞし汝と俺とだけでは何様にもならぬ。歸つて兄弟五人揃つて、壯士どもを引連れて來ることにせう。一ト束の箭の力で、個々の箭に對ふに、勝たぬといふことは必ず無い。善く思ひ付いた！面白い！

勃端察兒。銘々が自分の事だけしか思つて居ぬ者は征伐さるべきものだ。彼等は平等だ、一個一個だ、自分さへ好ければ幸福だと思つて居る。身體に頭無く、衣服に領無く、中心も無く、結束も無いものだ。あゝいふものが征伐さるべきもので無くて、何處に征伐さるべきものが有らう。中心の無いものには中心が與へられるだらう。結束の無いものは結束を與へられる筈だ。そして彼等は漸くに力となり、漸くに幸福となるだらう。

不忽合塔吉。よく言つた、其通りだ。汝は彼等の頭となれ、領となれ。さあ馬を疾めて準備に取懸らう！

二人は馬を馳せて東に去る。

（淸系緣起畢）

憤恨種子

第一折

場所。金國中都（今北の京）宮城內、貞元殿。門々莊嚴、廊々蜿蜒。樓閣巍々として、金碧煌々たる中の、最も殿

へなる一殿。正面南に向へる玉座の一段高きに、日月の扆、交龍の椅。玉案、寶鼎、それ〴〵按排せらる。玉簾しづかに垂れて、名香おもむろに薫じ、宏麗云はん方なく、嚴肅人をして虔ましむ。

人物。金國皇帝雍（世宗）四十五六年、體貌奇偉にして、鬚髯甚だ美はしく、鳳眼龍準、神威人を壓す。玉冠黄袍。

太師張浩。

太保都元帥奔睹。

平章政事移剌元宜。

元帥左監軍高建忠。

右監軍完顏福壽。

右副元帥完顏謀衍。

左丞相晏。

參知政事獨吉義。

右丞相翟永固。

左副元帥完顏元宜。

其他文武百官、文官武官各々一方に官位階級によりて居流れ居る。冠帶朝服、威儀儼然。太師太保は一段上席。

殿頭官。其他宮官。

時。大定年間、某日。

殿頭官の聲により百官諸司拜伏す。

御簾高く捲かれ、皇帝晴やかに一同を俯視する。百官山呼し朝見の儀を終る。

殿頭官。事有らば奏聞申せ。

ト云ひ、少時の間を置きて、事無くば退朝せよ、と例に依りて云はんとする時、左副元帥完顏元宜、班を離れて進み出づる。赭黑の面色、眼尾強く上りて、人を畏れしむる殘忍の相貌、先帝を弑したるほどの事は有り。

完顏元宜。國運は愈々隆昌、聖祚萬前々歲。宋國は日に屈して、夏は日に伏し、契丹（遼）は既に亡ぶに垂々として殘喘を保つばかり、高麗は臣妾に等しき今日、陛下の黼黻の臣、貔貅の士、各々の其徳と智と勇と才とを以て任に在り事に當り居れば、天下は太平、微臣の如きが何をか申しませうや。但しこゝに聊か心の惹かるゝ事のござる。杞人の憂、もとより高明の笑を受くべきは存じ居りまするが、默して申さゞらば誠を盡さゞるに似たること、よつて、敢て聖聽を驚かし奉らんと存じ申す。然しながら其事機微に關し申す。さりとて又密奏致すべきやうの事にもあらず。願はくは陛下と陛下の相將七八人との前に於て愚存を吐露するの幸を得たしと存じまする。

ト勿體ぶつて言ふ。諸臣は何事かと疑ひ危ぶむ。

皇帝。ム、

と太師を視る。太師心得て、笏を以て文官の列の或處、武官の列の或處より以下を指し麾かし、

太師張浩。諸卿は退朝御許しでござる。

諸臣皇帝を拜して退く。殘るは太師より完顏元宜まで、以上十人となる。

太師。何事の御奏聞か。聖慮御寬洪にわたらせらる。淵底を盡して奏聞あれよ。

完顏元宜。ハツ。

ト得意氣に諸將相を一トわたり見廻はし、

完顏元宜。奏聞せんと存ずること餘の儀にこれ無し。定めし諸大臣大將も御存知とは存ずるが、此頃民間に怪しからぬ謠言これ有り。すなはち當華京(ミヤコ)ならびに契丹地方にかけて、

『韃靼去る……』

ト云ひかけて、恐懼して後を竭(ヤ)め、唾を咽み、

完顏元宜。畏れ多ければ、有りのまゝを此處には奏しかねますが、謠言の其意は、「韃靼の者ども我朝に禍ひせん」と申すことにござる。斯樣な謠言は如何なる者が如何なるところより申出したるか、一應は取調べさせましたけれども、もとより謠言の事ゆゑ雲烟を把らんとするが如く、確と取調べ得たることもこれ無し。兎にも角にも甚だ以て怪しからぬ次第ゆゑ、御聖慮を仰ぎたく、御聖聽を瀆し奉りましてござる。

皇帝。フ。謠言の沙汰か。

ト笑ひ出しさうになつて、餘り取合はず。

獨吉義。如何にも然樣の謠言を承はり及ばぬではござらぬが、シテ其謠言について何事か御座つたか。

完顏元宜。イヤ、何事の有つたと云ふではござらぬ。が、餘りに不吉なることでござれば……

完顏謀衍は單純剛毅の武將氣質を面に現はして、無遠慮に、

完顏謀衍。ハハハ。何事の一大事かと存じたれば、取るにも足らぬ民間のムダ言でござるか。蟬も鳴くものでござる、虻も鳴くものでござる、蟬虻の聲、打棄てゝ置いても苦しうござるまいに。

翟永固。イヤ、如何にも其謠言はまことに忌はしいゆゑ、打棄てゝ置き難う思はるゝも御道理でござる。然し民間の甲

要無き者どもの申す讒言の事ゆゑ、之を如何様にも致し難いことでござる。斯様な事を一々取上げて、たとへば其讒言を申したる者を召捕つて罪に附しませうか、それは苛察を事とすると申すもので、煩鎖苛碎の政、衰世の法、小人の事でござる、國家は德を以て民に臨まねばなり申さぬ、棄置くよりほかは無いかと存じまする。政正しく德行はるれば自然に消えて無くなることでござらう。政を爲すは小鮮を烹るが如し、なまじひに、いぢり立を致すのは却つて德を損ひ事を生ずるに當りまする。

丞相晏。德化を以て謠言に臨むの論は、まことに正大の議と存じ申す。

獨吉義。そのほかに何の道もござるまい。

完顏謀衍。謠言なぞを耳に入れるは小さい。忠義餘つて、聖德を小さくするといふものぢや。忠義餘つて、聖德を小さくするといふものぢや。

完顏元宜。ヤ、これは怪しからぬ。それがし何を苦んでか聖德を小さくすべきや。まつた謠言などを氣にするは、衰世の政、小人の事と云はれたるも心得申さぬ。聖人だに芻蕘の言を取りたまひ、誹謗の木を立てられたるは、皆いづれも雨ふらざる前に綢繆する用意でござる。小さなる火も捨置く時には、炎々を如何、とは六韜の金言でござる。そもそも諸卿は國家の歴史をさへ顧みられざるや。既に我が大金國勃興の初は、遼國の德衰へたるに當りて、我が太祖皇帝女直より起つて、天縱の英武、大業を創めたまふ。當時遼人の間に謠言ひしとなき言葉あり、「女眞の兵若し萬に滿つれば敵す可からず」と。太祖皇帝、遼兵十萬を鴨子江に破つて、其兵萬に滿ちたまひ、遂に大號を稱したまひしは、諸卿もよもや知らずとは申されまい。凡て是の如き謠言ふとも無き言葉は、天意こゝに洩るゝとも申すべきか、既に現に應驗ありて我邦これより興りたり。機微を察するを聖とは申す、小さきを視るを明とは申し、微けきを聽くを聰

とは申すと承はる。それがしたまく心づきたるを以て、愚者の一得、聖上の御聰明に添ふることあらんとて、讒言の義を申上げたるに、讒言など耳に入るゝは小さしとは、かたはら痛し。特に其事韃靼に係るをば、等閑に聽流さるるは、重ね重ね其事心外でござる。

皇帝。ムヽ、完顏元宜、もつともなる申狀とも聞いて取らすぞ、して韃靼が何と致した。

完顏元宜。ハツ、有難き聖旨を拜受仕り、面目至極に存じ奉る。然らば韃靼の事情、一應陳じ申さんに、陰山の北に居る者を總じて韃靼とは申す。北方に近きを熟韃靼と申し、北方に遠きを生韃靼と申す。生韃靼に白韃靼あり黑韃靼あり。凡て此等の韃靼、部落種族甚だ多く、いづれも我邦に隷屬致し居りますけれども、生韃靼に至つては未だ深く服しなつかず。克魯連河以東はまだしも我に馴れ申せ、それより西の方色楞格河あたりは、我が德化未だ至り屆かず。然るに克魯連河敖嫩河等の川上に當りて、勒端察兒といふもの出でゝより、漸くにして勢を得て自から淸系と誇り、天より出でたる系統と稱し、他の者を多兒勒斤即ち常人と做し、次第に一族繁榮し、他族を從へ、枝を張り根を張りて、既に勒端察兒より七八世に當る合不勒と申すものは汗（王）と稱するに至る。此合不勒は嘗て前朝の御召によりて來朝したることもござれば陛下も御聞及びあるべきが、筵を賜はりても毒あらんことを恐れて用心せしほどの曲者。終には其後に於て强ひて入朝させんとしたる我が朝使をば、如何にしたりしや、察するところ欺き殺したるに疑無き不屆至極の者でござる。遠隔の地にはあり、林の禽、草の鹿の如き無智の者なれば、天朝の天大の御慈悲を以て、罪を正さるゝことも無く今まで過ぎたれど、韃靼の者は是の如きものでござる。然るに今また忌々しき讒言もあり、涓々の水も捨置かば滔々の波を揚ぐる日の無しとも限らぬ道理。これによつて微臣一片の忠志、敢て聖慮を仰ぎたく存じましてござります。

ト諸臣を尻目にかけて述べる。

皇帝。善くぞ申した。

少時考へ、

皇帝。大師、此事およそ誤謬（アヤマリ）無いか。

大師。如何にも完顔元宜奏上の通りにござります。

皇帝。然らば如何致すが宜いといふのぢや。定めし汝は考案が有らう。其方策を申して見よ。

完顔元宜愈々乗地になりて、

完顔元宜。ハツ。天朝の威を以て彼等に臨み、まして二タ葉を摘みて取る。其の易きことは掌（タナゴコロ）を反す如きことでござる。然しながら遼遠の地、無象の敵でござれば、今遽に大兵を動かすが如きことには及ばぬ次第で、たゞ減丁の計で足ることでござりまする。

皇帝。減丁の計とは何様いふことぢや。

完顔元宜。目前に鼓を鳴らし戈を執りて攻来らぬ敵の、しかも其意の測り難くて、我に取つて危きを為すに足るものをば無象の敵と申しまする。無象の敵に對ひまするには銷資減丁の計に若くものはござりませぬ。三軍一日、其費（ツヒエ）千金と申しまする。されば戦は軍資無くては叶ひませぬ故に、敵の軍資を銷耗さすれば敵は動けませぬ。美酒を輸（オク）り、女樂を輸り、器玩錦綺を輸つて、敵國をして傲（おご）らしむれば、彼の資は日に銷えて我の資は日に益しまする。これを銷資の計と申しまする。戦は必ず壯丁が無くてはなりませぬ。が敵國をして人々日に亢（タカ）ぶり相鬪ひ相搏たしむれば、敵の壯丁は日に減じまする。敵國の男女をして其の逸樂を樂しむべきを知つて、しかも生活の苦を省くの智なることを思は

じむれば、嫉妬を避け、賂を墮し、兄を洸(スカ)して、敵の壯丁は日に減じまする。人の情は必ず己より勝れたものを嫉みまするから、己より勝れた者を除いた者に名と利とを與へますれば、凡才庸物は其同輩の多きを恃んで喜んで俊才傑物を除きまする。壯丁の俊秀雄傑のものが少くなれば、敵の壯丁は日に大に減じた譯になります。公の戰を以てせずして彼の隙を見て闘ふて殺す時は、敵の壯丁は日に減じまする。今荒京の地に住して居る韃靼如きに銷資の計は施すに及びませぬ。たゞ減丁の計を行へばそれで足りまする。彼の壯丁を我が幾許かの兵で三年或は二年毎に突然に襲つて殺し、又彼等の部族と部族と相惡み相鬪ふやうにし、其俊秀雄傑を殺したものに好い地位を與へて取つて代らしむるやうにすれば、彼等は互に含み互に除いて、俊秀先づ盡き、鈍駑も次いで亡びるやうになります。此の減丁の計を爲せば、我が國患はおのづからに除けまする。これより好い計は無いと考へますのでござります。

ト鼻うごめかして說く。皇帝は沈默して考へる。こらへかねて

完顔謀衍。ヤ、卑劣千萬、醜い〳〵。減丁の計などとは何たる卑怯だ。特に大國の天朝の取るべき計で無い。陛下願はくは是の如きの毒策を御採用無きやうに有りたうござる。

皇帝。ウム。して汝はまた如何な策を取る？

完顔謀衍。敵對し來らば蹴散らすばかり。何の手間暇がいりませうや。

完顔元宜。その敵對を仕出させぬやうに、豫め取るべき計は？

完顔謀衍。ウム。それは。

完顔元宜。如何樣な御方策がござりまする？

謀衍。それは。

元宜。サアそれは、

謀衛。エ、面倒な。一體それがしは方策沙汰は嫌ひでござる。

と面を赤くして赫として怒號する。皇帝、太師はこれを愛するかと覺しく笑ふ。元宜は嘲るやうに笑ふ。

獨吉義。イヤ、方策無きこそ眞の方策。誠實一味にして巧を弄せぬが、即ち坦々たる王道といふもの。たとへ謡言ありて人の胸にあたるとも、蚩々蠢々たる蒙昧の韃靼、此方よりして疑はずに、仁愛誠實の德を以て臨まば、やがて王化に霑ふでござらう。寃は解く可し結ぶ可からず。天子の道は天に則りて、其公明正大なるを失はるべからず。減丁の計は覇者の術でござる。

元宜。覇者の術とて卑みたまふか。王道の論は美なることは美なれど、それらの談はいつも容易にして、それらの功はいつも空無でござる。

獨吉義。眞の良藥の功は速疾でない。滋潤して神を養へばでござる。功が遲いとて危さはござらぬ。巴豆附子の類は峻烈にして危い。まかり間違へば恐ろしい禍を貽る。減丁の計は宜しからぬと存ずる。

元宜。酒は人を醉はすを尙び、藥は病を掃ふを尙ぶのでござる。可も無く不可も無きやうなことは、功を成すことは無いものではござらぬか。

此間皇帝やゝ考へ居たるが、

皇帝。太師！太師の意見は、

太師。完顏元宜の策はまことに宜しきやうなれど、御用ひ無きかた宜しいと考へまする。

皇帝。然らば他に何ぞ好き法もあるか。

太師。誠にこれぞと申す策はござりませぬ。高吉義の言葉に盡き居ると存じまする。

皇帝。ム。

と又考へ。

皇帝。完顏元宜、此事、汝に任せる。よきに計らへ。

完顏元宜大将臺にて拜伏し恩を謝する。太師及び諸臣諫めんとして愁に默す。

此一折史上に是の如き光景有る無し。但し誠丁の方針金庭にありし事は實にこれなり。完顏元宜の立計とするは是又假説なり。此傳奇、事實の輪廓は一々皆據るところあれども、此一折のみ然らざるを以てこゝに附記す。

第二折

場處。斡難河と同じく不兒罕山の重嶺の間より發源すれども、斡難河より南に當りて一流を成せる克魯倫大河の東へ向つて遠く遠く流れたる末、斡勒山脈、不威公特山脈、巴彥察干山、錫爾伯山、阿爾坦諾爾山等の然まで高くはあらねど蜿蜒たる山嶺に包まれて、集瀦して一大海を成せる闊連海（今の呼倫海、唐書の倶倫泊）と其南方我が三四十里に當つて哈爾哈河を呑んで一大淵をなせる捕魚兒海（今の貝爾海）とを繋ぐ兀兒失溫河（今の鄂爾順河）を横に渡りて、一路あり、西方克魯倫方面より、東方海拉爾方面に通ずる、其路と河との十字を成せる邊。

人物。勃端察兒より第八代の俺巴孩王、前の可汗（王）の合不勒の子にはあらねど其の三從兄弟にして、可汗の指

名によりて同族中の勇者たるを以て可汗の位を襲ぎたる俺巴孩。

俺巴孩に隨從せる巴剌合赤―俺巴孫の叔父別速台の後。

俺巴孩の從者數人。

兀兒失溫河附近住民、塔々兒部の主因族の者多勢。

時節。夏。

俺巴孩。巴剌合赤一行、從卒數名、皆武器糧食を携へ、いづれも騎馬にて、馬に輓かせたる前室ある黑き車二輛を隨へ、西方より出づる。馬を打たせながら。

先頭の從卒甲。オヽ、もう鄂兒失溫河の水の光りが近々と見ゆるところに來た。

從卒乙。克魯倫河を東へ渡つてからは、一日路の餘も河を見なかつたが、また水を見ると思ふと、好い心持だナ。

從卒丙。しかし克魯倫河を東へ渡るとナア、以前は身體が固くなるやうな氣がしたが、今ではその樣な事も無くなつた。嬉しいことだ。我々の勢が伸びたのだ。

從卒甲。然樣々々。これも哈不勒可汗以來段々と我々が強くなつたせゐだが、隨分幾度もの戰だつたナア。

從卒乙。俺は齡が若いから、開爾伊拉克の戰に一寸出たきりで、發端からの事を知らないが、お前は大分舊い人だから詳しく知つてゐるだろう。話して聞かせて吳れないか。

從卒丙。それは大抵知つてゐるさ。けれども、もう河近くなつて、草も段々肥えて來たから、乾度馬を休ませろと、巴剌合赤殿が仰あるだらうから、後の方の奴等は皆若くて何も知らないし、知つてゐるにしても又聽だらうから、彼等と御前とが巴剌合赤殿に、休息の間にお願ひして、直に御話を伺つたら又一段だらう。

從卒乙。そりや有難いことだ、然様願へれば。

ト云ふ時、

巴剌合赤。草が好いぞ。馬を休ませろ！四方を十分に瞻て。

と、少し離れたる後の方より命令の聲かゝる。從卒等、前のも後のも、又巴剌合赤も俺巴孩も、皆馬上に身を伸ばして四方を屹度見る。別に何も意を惹に足るもの無きを見て、

從卒一同。眼にかゝるほどのものは更にござりませぬ。

巴剌合赤。よし。皆休息せよ。馬をいたはれ。

俺巴孩はじめ皆々馬を下りる。馬は自かじし、草を啖ふ。從卒丙は巴剌合赤に對ひ、

從卒丙。皆のものども、取別け若い者共が塔塔兒との爭の一部始終を知りたがつて居ります。心得のためにもなりますことゆゑ、御話しなさつてやつて下さりませぬか。

從卒乙。克魯倫河を東へ渡ると以前は身體が堅くなるやうな氣がしたとのことから起つたことでございまするが、どうか始終を聞かせて下さいまし。

從卒一同。御願ひでござりまする。

巴剌合赤。先刻から其樣なことを言つて居つた樣子だが、それではザッと搔摘まんで話してやらう。そも〳〵の發端は哈不勒可汗殿の時から起つたことよ。可汗の奥方は呼阿忽郭阿と云はれた。勿論その呼阿忽樣の外に、篾台殿といふのもあつた。篾台殿は火魯剌思氏で、金の使者めが哈不勒可汗を欺いて殺さうとした時、可汗の命令によつて人々と共に巧く金の使者めを殺された方だが、子の多い事は呼阿忽郭阿樣には及ばれなかつた。其の呼阿忽郭阿樣は哈不勒可

汗御病死の後も榮えて居られたが、何にせよ斡勤巴兒合黑殿はじめ六人の立派な方々を子に持たれたので、威勢盛んに日を經て居られた。其中に呼阿忽郭阿樣の弟の賽因特斤殿といふが病氣になられた。これが抑、塔塔兒の奴等と爭の本になつたので、當時御病氣を治さう爲に、塔塔兒の巫者の乞兒奇兒布圖といふ者を招んで其指圖通りに萬端を取計らはれた。ところが其の巫者めは散々に威張りちらして、何の彼のと人々を驅使つて偉さうに振舞つたが、何の效も無くて其爲に賽因特斤殿は歿くなられた。そこで此方の者は怒り出して其巫者めを、この似而非者めと打き殺して終つた。塔塔兒の奴は塔塔兒の奴で、自分の方の大切にしてゐる巫者を殺されたので、默つては居ないで突掛つて來た。さあ然樣なつては、此方も後へは引かず、先方も後へ引かず、とう／＼弓矢の沙汰になつた。六人の方々はいづれも彼の通りの强い方々だから、呼阿忽郭阿樣の御實家の翁吉拉特族を助けて、手痛い戰をはじめられた。最初は貝爾色爽濶端の地の戰だつたが、合答安把阿禿兒（把阿禿兒は勇將の義）殿は塔塔兒の大將の木禿兒把阿禿兒を馬から下へ突落された。木禿兒もさる者だから、傷は負ふたが死にきりもせいで、一年餘りも養生した後、また取つて掛つて來た。

從卒等乘り出して聞き、

從卒丙、丁、戊、己等。して。

巴刺合赤。で、修刺伊拉克でも戰がある。また開爾伊拉克でも戰があつたが、其の開爾伊拉克の戰の時に、敵の大將の木禿兒めは、とう／＼合答安巴禿兒殿に首を擧げられて終ひ居つた、それで塔塔兒も勢がなくなり、手出しも仕得無くなつて何時となく戰沙汰も遠退いたが、翁吉拉特の部は東の方、我等は西の方、我等の方から翁吉拉特の方へ往來するには、是非とも塔塔兒の中を通らねばならぬばかりか、克魯倫の河より東は阿勒坦（金國）の氣息が强くか

ゝり、阿勒坦はいつでも我等の榮えを悦ばず、機さへ見れば壟を付けようと思つて居るのだから、それで此邊を通るのは用心せねばならなかつたが、それが今では塔塔兒も閉口しをつて、今度なんぞは斯様して塔々兒の内の阿亦里兀(アイリウト)(兀惕は猶族と云はんが如し)備魯兀惕(ビルウト)から北方の汗へ美女を獻ずるやうになつて、それで御招待を申して來たので、可汗も御出掛なさつたやうな譯だ。段々と我等の勢は四方へ伸びる！まことに嬉しいことではないか。

ト云ふ時、俄に聞ゆる馬蹄の音。巴剌合亦忽ち聞耳立てゝ

巴剌合赤。ヤ、あやしい物音がするぞ！

ト立上つて馬を引寄せる。從卒丙は身を屈めて大地に耳を附け、其音響を聞き、驚きて飛上り、

從卒丙。馬軍大勢たしかに此方に打寄するぞ。仔細は分らねど油斷するな。

ト云ふ間に、俺巴孩はじめ皆々手早く馬に上り、屹度四方を見る。意外にも我が今來し後の方より突出せる數百騎、馬塵を揚げて奔突し來り、忽ち其形勢分明になる。

俺巴孩。彼奴等十分に戰意(タヽカヒ)を持つたるぞ、弓絃噉濕(クヒシメ)して箭をかけよ。

馬首をそなへ向くる間も無く、近々と逼り來りたる大勢の馬軍、物も云はずに散々に射かくる。應戰の暇もなく敵の箭の飛ぶこと雨の如くなれば、從卒甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、皆射落さる。身に立つたる箭をかなぐり棄てながら、齒をくひしばつて、

巴剌合赤。卑怯な塔々兒めの欺(ダマ)し討、兎に角此處は斷破つてお落ちなされ。叶はぬまでも後(アト)を斷ちまするから。

俺巴孩。オヽ、やみ／＼死んでなるものか。

ト馳出でんとする時、はや逼りたる

塔塔兒の一。恨事なる乞要特（蒙古族を稱す）め、阿勒壇可汗（金國皇帝）へ引渡す。繩を受けよ。

ト投繩を飛ばさんとするを

巴剌合赤。小僧め。

ト一ト箭に射落す。

塔塔兒の二。着れ。

塔塔兒の三。着れ。

ト箭を飛ばす。巴剌合赤の左の臂に中る。合剌合赤アッと弓を落とす。途端に腰刀を拔いて馬を躍らせ近より。

巴剌合赤。此餓鬼。

ト二人を切つて落す。

塔塔兒の四。五。六。七。おのれッ

ト亂箭繁く射る。巴剌合赤は膝頭を射られ、其馬は胸を射られて、巴剌合赤落馬、塔塔兒大勢打重なつて生捕り縛す。

俺巴孩も馬足を射られて落ちかゝるところを、切拂へども及ばず投繩に引かけられ。手取足取り、ぐる／＼卷にせられ、眼を剎して大喝し、

俺巴孩。エヽ、心外ナ。蛆蟲めらに謀られて、繩目の耻とは忌々しい。塔塔兒の奴原、サア殺せ。

塔塔兒の一將。ハヽヽ。口惜しいか、俺巴孩。ナニ手短に殺すものか。阿勒壇可汗からの云渡しだ、可汗に叛く心ある者、生捕つて差出せば恩賞がある。おのれ等いづれ見懲らし爲め酷い處刑に掛けられよう。氣長に自分で苦んで居ろ。

第三折

場處。金國中都郊外。

人物。完顏元宜。

軍官軍士大勢。

監刑官、及び法官、刑吏、押牢節級、牢子刑手大勢。

俺巴孩。

巴剌合赤。

見物士民大勢。

西郊廣場に埒を設け、民庶の雜鬧を防ぐ。

埒外民庶押合ひて見物する。埒の中一方に壇あり、壇上中央に立派なる椅子を設け、中央椅子より左右へ流れて同じく椅子。壇の下正面に又低き壇ありて、監刑官の席。監刑官の席よりやゝ距りて平地に荒莚を敷き、そこより又距りたるところに、削らぬ木を以て造りたる不細工の頑固なる木馬の脚甚だ長きあり。こゝへ刑吏、刑手等入り來りそれ〳〵控へる。やがて押牢節級騎馬、牢子數人水火棍(セイスイボウ)を手にして罪人を追立て來る。罪人俺巴孩水梳り(ミツクシ)藁束の髮(ワラタバネ)、鼠色(ネヅミ)の獄衣、緊しく背手(ウシロデ)の本繩をかけられ、瘦馬へ逆向きに乘せられ、背に名を記したる小旗をさゝれて、引出さる。罪人の前に、罪狀を記したる大きなる板札を一牢子持つ。俺巴孩の後、牢子二人を隔てゝ巴剌合赤、同じく本繩にて徒歩、前後すべて牢子等取卷きて場に入る。俺巴孩を馬より下し、荒莚の眞中に引据ゑ、同じく巴剌合赤を

從はす。監刑官、騎馬にて、下僚を率ゐ入來り、設けの席に着く。少時して完顏元宜、八人肩の轎子、轎上虎皮を敷きたるに坐し、騎馬の軍官、徒歩の軍士、鎗、鉾、棋、旒などの光に護られて入來り、轎を下りて壇上椅子に靠る。從士大羅傘を立て、棋旒を立つ。軍官等各々椅子に靠る。節級は罕子に相圖し、俺巴孩等をして俯首拜跪せしむ。

法官罪狀を讀む。

法官、蒙骨の首、俺巴孩、屈强自ら恃みて、朝憲を輕んじ蔑し、暴横憚らずして、隣疆を踐み躪り、數々馬を塔塔兒の彊に馳せて、老幼を驅逐し、幾を箭爾順の磧に飛ばして兒女を脅威す。しかのみならず、先何哈不勒、兇梟にして、分際を省みず、蠢愚にして、體禮を辨へず、夜郎自大、ほしいまゝに可汗と稱し、南越無智、みだりに黃屋を構へんとす。加ふるに朝使を殺して以て身を免る。潜僞の罪、天も能く覆はず、叛逆の惡、地も將に載せざらんとす。皇德の至つて厚き、其の蠢々として蟲の如く頑なるを以て、姑らく烈々として火の如くなるの威を加へず、其の天命を終らしめしに、汝俺巴孩、みづから改むるを爲さず、傚ひて以て常となし、假りに將に返さざらんとす、未だ天朝の冊封を受けずして、私に胡境に纛旆を建てんと欲す。其罪其惡、恕し難く容れ難し。殛竄の罪、聖王もこれ無き能はず、鼎鑊の法、妄人みづから焉に抵るを致すもの。こゝに刑を明らかにし法を嚴しくするの斷を取らずんば、それ將に微を防ぎ漸を杜ぐの道なからんとす。乃ち汝を極刑に處し、痛を木馬の背上に負はしめて、元高の心、其罪こゝに至るを悟らしむ。外徼諸夷も亦遠く聞きて相警めんには、汝の罪も或は閻王廳前に一籌を減ぜん。皇恩聖澤、汝それ頂戴心伏せよ。

ト讀終る。埒外の見物等、ワッと聲を擧げどよめく。俺巴孩おもむろに頭をあげて完顏元宜の方を屹と看やり、

俺巴孩。ナニ！俺を木馬にかけて殺すといふのか。

刑手の一、オヽ然樣だ！今更何を云つても返らぬことだ。念佛でも何でも申すがよい。
刑手の二、此世の名殘の冷水、冷飯、それはもうチヤンと支度が出來てゐる。今食はせてやるから有難く思へ。

　刑手の三は眞實より憐む顏色にて。

刑手の三、仕方がない！惡いことは云はぬ、無念になつてたゞ佛樣を賴み、せめて未來を助かりなさい、南無佛南無佛と云ひなさい。ナ、南無佛といひなさい！

　俺巴孩此刑手の情に感じて、小聲にて

俺巴孩、ア、心添は有り難い、忝けない。しかし佛樣は賴まずともだ、俺は渣滓水も渣滓飯も欲しくは無い。飲まぬ、食はぬから、其手數も要らぬ。早く埒を明けてお前達の手をあけな。
刑手の四、罪人は渣滓の食事を致さぬと申します、直に手配致しませう。
刑吏、常例には違ひまするが如何致しませうか。
監刑官、よろしい。構はず執行致させい。
刑吏。コレ、當人の言葉にまかせ直接執行致すがよい。
刑手等。ハッ。

　刑手等木馬を中央に持來り、其甚だ長き四脚を二尺ほど確と埋むると、丁度好き程の高さになる。その上へ俺巴孩を扶け乘せる。埒外の見物ワツと騷ぐ。刑手等は大きなる鐵釘鐵鎚を持出し、刑吏の面を瞻る。刑吏よし、と眼まぜして命ずる。俺巴孩の一方の脚に二人づゝ立かゝりで、先づ脚の尖を木馬に釘づけにする。鎚の音カチ〱、鮮血流れ、俺巴孩木馬の上に身を踠き苦む。見かねて

巴刺合赤。アーッ　何といふ酷いことだツ。

ト趨りかゝらんとする。

罕子。コレッ　何とするのだッ。

ト繩尾を取つて引据ゑる。

巴刺合赤。ト云つて餘りな酷い仕方！

罕子。エヽ喧ましいッ　默つて居ろ。

押罕節級。其方は今に赦されるのだ、神妙にしてゐるのだ　何を云つたからとて其方の主人の爲になることは出來ぬのだ。

此間に脚先、髀、高股の三處に大釘を打着けられて　俺巴孩齒を咬み痛を忍び、鋭き眼に血をそゝぎて

俺巴孩。ウヽムッ。例も聞かぬ木馬の刑、よくも此俺巴孩を罪せしよナ。汝等阿勒壇可汗に告げよ。可汗おのれは正々堂々と　武力を以て戰つたでも無く、卑怯千萬、不意に乘じて　他人の手を借り　我を生捕り、かゝる酷き目見ること、自から耻とも思はざるか、見下げ果てたる性根の奴、可汗しとて世に立つ器量で無い。アッハヽ、ハヽ、ハヽ。阿勒壇（金）の世ももう末だ哩。我こそは死ね、我死なば、合不勒の子の忽闘刺、合答安　まつた其孫揑坤太司、也速該把禿兒等たゞ居ようや、必ず汝に仇を復さん。その時思ひ知らせて吳れうぞ。

ト、凛々たる大聲に罵る。居合はす官人吏卒等これを聞いて色を失ふ。この様を見て取つて少しも躊躇せずに　身を動がしたる壇上の

定顏元宜。ハヽ、ハヽ。

ト大きく笑ひて　先づ諸人の心を安んじ、

完顏元宜。俺巴孩とも云はれた者が　死吠は聞苦しいぞ。神妙に死ね！汝のよまひ言、皇帝陛下に申上ぐるまでも無い、然樣有らうとは、聰明の陛下は疾くより御存知だ。陛下は豫て仰せであるぞ。汝最期に何を云はうと、それを汝の部族に告げしめよ、其爲汝の後者の巴剌合赤、生命を助け放ち返して、汝の言葉を傳へ得させよ　汝の部族等何と跳くとも、それを畏るゝ我ならずと、陛下は豫て仰せであるぞ。何と今更膽が潰れたか。狐兎の汝等部族が飛ばうと跳ねようと大金國はそれを畏るゝものでは無い哩。

俺馬孩。オヽ、よく云つた！阿勒壇可汗記えて生き居れ、記えて死なうぞ我俺馬孩。もはや汝等に言ふことは無い。ト、

身を拗曲げて、巴剌合赤を見、

俺巴孩。別速臺の巴剌合赤、汝も大丈夫だ、何の樣に苦しくとも屹度生延びて、しつかり傳へよ、我が言葉を。

巴剌合赤、悲涙憤涙、滿面の氷雨にて、

巴剌合赤。生命の限り、屹度傳へまする。

俺巴孩。ム、滿足ぢや巴剌合赤！　忽圖剌、合答安、捏坤、也速該、彼等に屹度申傳へよ。我俺巴孩、過つて輕々しくして、人に暗算られた。此後は必らず我をもつて戒となせ。塔塔兒の民、阿勒壇の可汗は我が仇ぞ。汝等、五ツの指の爪を磨り耗すまで、十の指の皆壞れ無くなるまで、必らず我が爲に讐を報いよと。

巴剌合赤。五ツの指の爪の耗きるまで、十の指の皆無くなるまで…………ム、ウ。巴剌合赤屹度申し傳へまする。

監刑官。刑手ツ

と烈しく注意する。刑手槍を取つて右左より俺巴孩の胸の前にカチリと合せ、

刑手の一。二。念佛申せ。

俺巴孩。何を佛沙汰！

槍は一旦引かれて、サツと繰出さるれば、ずつくりと胴體に刺りて、熱血迸り出づる。俺巴孩屈せず、眼を睜開して

俺巴孩。巴刺合赤！

巴刺合赤。可汗！

俺巴孩。頼んだぞ。

巴刺合赤。た、たのまれましたツ。

と見合はす眼と眼に青白き電光通ふばかりなる時、刑手鎗を一ト捻りして抜く。俺巴孩ガクリとなる、巴刺合赤ワツと地に倒れる。

完顔元宜。何も皆我が思ふ通り。

ト塔塔兒と乞要特(キャット)の互に恨みて兩滅に陷るべきを思ひて、滅丁の計の漸くに成れるを喜び、ニヤリと笑ふ。

高雄秋夕

中村憲吉

栂の尾を高雄へかへる日のくれは清瀧川の音のさやけさ

谷かげの紅葉がしたの片淵や瀬なみの鳴りに夕しづまりぬ

いにしへの聖は宜べも山かはのかく靜けきを求めて住みにし

山村のここの河内はさま幽しつぎつぎの世に聖僧の住みし

日の暮れに戻りてくれば高雄谷ひとすでに去りて谷しづかなる

夕かげの紅葉がなかは音のする川ありて其處
に霧のなづさふ

今日ひと日ここに喧(さわ)ぎしひと去(い)にて谷のせせ
らぎは罪なきごとし

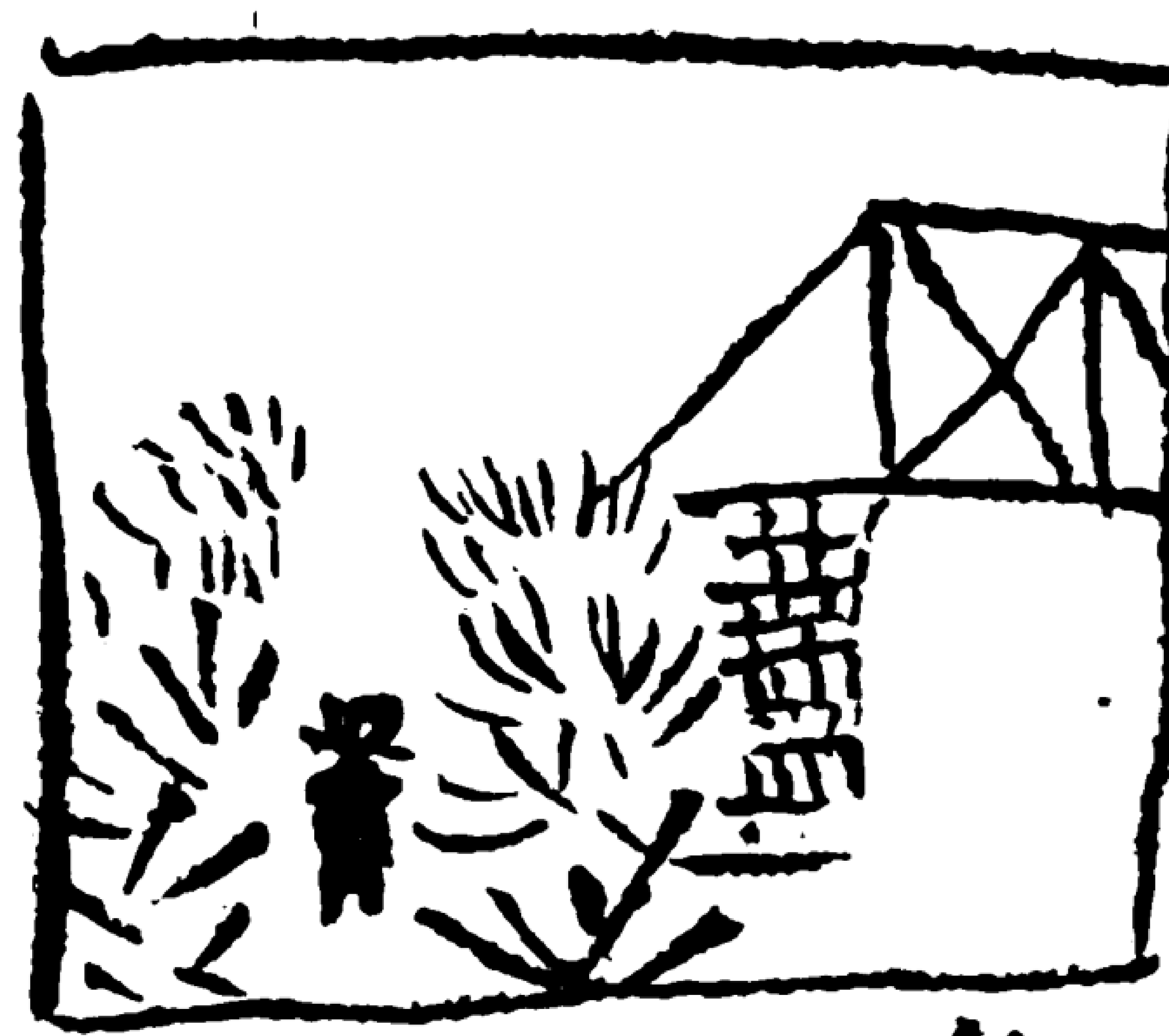
夕谷ははやく人去に川も岸も散りたまりたる
紅葉のおほさ

今日の雨にぬれし落葉を焚くならめこの夕山
に匂ひしるしも

我れひとり悲しきごとし夕谷の紅葉の茶屋に
柿を喰ひ居る

この谷に日ぐれておもふ山のうへはなほ明る
みに寺あるところ

我がまへの夕溪川(ゆふたにがは)はいく世たび僧のわたりて
山にかへりけむ



冬の日

若山牧水

沼津千本松原にて

枯松(かれまつ)にまひくだりたる椋鳥のむらがりとまるむきむきなれや

茂りあふ松の葉がひにこもりたる日ざしは冬のむらさきにして

うち聳え茂れる松のうれにをりてこまやかに啼く繡眼兒(めじろ)なるらし

鵯(ひよ)の鳥(とり)啼きかはしたる松原の下草は枯れてみそささいの聲

鶯かみそささいにかひそかなる啼く音(ね)はきこゆ枯草むらに

まろやかになびき伏したる冬枯の草むらのなかのみそさざいの聲

路ひとつほそくとほれる松原の此處の深きにみそさざい啼けり

胡頽子の實の眞赤にうれてあらはなるこの草原の枯草の色

ひといろにすがれ伏したる草むらに花とも見えぬうすむらさきのはな

見てをりてこはおもしろき冬枯のさまざまの草の草の實なれや

房なせる實の見えてゐて眞さかりの櫨の紅葉のうつくしきかな

時すぎし紅葉の枝のふさふさと實を垂らしたるあはれ櫨の木

圖畫教育私見

岸田劉生

一　圖畫教育の目的

○德育としての圖畫教育

近來藝術教育等の問題が相當眞面目に考究され、實に一つの新傾向として流行してゐる事は事實である。この事は舊來の唯物的兒童教育實用主義の教育から新しい境地に一歩踏み出した事であつて先づ慶とせねばならぬ事の樣に見える。

しかし乍ら、今日流行してゐる藝術教育といふものは、可なり上すべりのした、概念的のものであつて、趣味も惡く、緊實な考究を缺く嫌があり、從つて、兒童の感情又は情操の教育法としてはむしろ不健全なところ多く有害の結果を生みはしないかといふ疑を起さしめる。しかしこれ等の問題に就ては次の項にゆづるとして、私は自分の圖畫教育見解を述べる順として先づはじめに圖畫教育の目的に關する私見を述べねばならない。

圖畫教育の目的は何にあるか、一言に云へば、兒童の感情の美化にある。兒童の感情の美化は何にあるかと云へば、兒童の心に内から有識的に「善」を植えつける事にある。かくて圖畫教育の第一の目的は必ずしも美術や術を教へる事ではなく、美術や術によつて眞の德育を施さんとする事であると云ひ得る。勿論常識教育として、手工能力の練習、一

般形象に對する注意、等も疎外する事は出來ない。しかし、これ迄の教育法だと先づ第一に圖畫教育の目的を、形象描寫の能力即ち智育の一つとして見た。そして、情操の教育としての目的は第二に置かれてあつた。この事は今日もまだ文部省の圖畫教育に關する定義に明文されてある。のみならず、從來の圖畫教育法である臨畫法、又は美の意義を全然缺除せる形態寫生法（三角形、四角形等から石膏寫生にいたる迄）等が雄辯にこれを語つてゐる。石膏寫生などゝいふものは美術學校の入學試驗の豫習としてなら意味もあらうが、美育とは何の關係もないものである。

かくの如く、圖畫教育は智育又は常識教育の一つとして、即ち、實用教育の一つとして考へられて來た。圖畫教育がともすれば、他の科目よりも輕んぜられ、蔑視されて來たのはこの理である。何となれば、單に智育、又は實用教育としてこれを見るならば、何も畫が下手だからとて、立身出世するにさしたる不便はなく、むしろ畫など小器用に描く人物に大出世する人間はないとも云へる。智育としては、第一に算術、英語、理科、等の大切なものあり、圖畫や唱歌などは遊び半分のことにて、教師も、家族も、更に生徒自身も何となくこれを輕視するのは又當然と云はねばならぬのである。

しかし、もう一歩進んで考へるならば、これは單に國家教育のみの問題ではなく、我國の教育全體が唯物的傾向にあつたからの結果であつて、圖畫教育の目的なり効用なりが、兒童の德育にあるのだといふ事を氣づくにしてはこれ迄の日本の教育界なり家庭なりは德育といふ事を深く考へなさすぎるのである。事實これは單に教育界のみの問題ではなく、我國民は幕末より明治以來、西歐の所謂先進國の物質文明に恐畏される一方人口増加、經濟問題等の恐畏により、著しき唯物論者となり、發明贊美者となり、現實尊重主義者となつた。これは必ずしも惡い事ではない。我國民性の一つの缺點として、科學的な綿密な頭腦力を持たぬ事は決して誇る可き事ではなく、今後の文明なり社會の幸福なりが、さう

「いふ物質文明によつて持ち來される事の多い事は論を待たない。これ等の事は後項にゆづるとして、とも角も我國民は明治以後物質文明の追從に急であつて、意識の上では多少それが過重せられた、少くとも、それを對立す可きものを輕視し、又は忘却したといふ事はこれも事實である

教育の根本殊に兒童教育の根本が、智より德にあり、人格にあるといふ事は昔から人々のよく云ふところであり、今日でも、「心」の事などよく分りさうもない教育家などが、ともすればこれを口ぐせの樣に云ふのを聞く。しかし、それ等は、眞に内からさう感ぜられて云ふのではなく、只尤もらしい言を用ふるだけであつて、要するに概念的な空言にすぎず、從つて何等さういふ問題に就いて深い考究もされず如何にしたら眞の「心」の教育が出來るかも工風されてはゐない。

今日、藝術教育等の問題が起り、いかゞはしい、ダンスや假作りの趣味の惡い唱歌學校芝居等が流行する一方ではやはり依然として、物質主義の修身教授が行はれる。學校の先生はダンスをおどり乍ら、皆立身出世をせよ、偉いものになれ、と云ひ、太閤秀吉や德川家康、ナポレオン等を世界一等の偉い人の如くに教へる。

『身を立て名をあぐ是孝の終り也』といふのは我國の道德教育の可なり重要な要點であつて、つまり、金持になり、名聲を博さなくては眞の善人とは云へない事になつてゐるのである。眞の善なり、眞理なりのために、世に容れられず、名も擧らぬ底の人格は、むしろ不孝の事とされるのである。

今日の世の中は優勝劣敗の世の中であるといふ事は何の反省もなく修身の先生の口から教へられるがその「優」の意味、「劣」の意味が人格にあらずして、功利主義的毛色を帶びてゐるのは否む事が出來ない。

しかし、これは、或る點それでいゝのである。私は何も決して、理想論をふりまわすものではない。今日のこの現象はやはり、今日の人間全體の精神能力の現象なのであつて、今日の人間の精神力でもつて、さう假に澤山の超現實的の

人格者が生れやう筈もなく、從つて、世間は當分まだ〳〵物質的に優勝劣敗の世の中であらう。現實を超えられぬものに眞に生きる道を教へる事は出來ないし、又それよりも、惡人にならぬ程度で弱い人間を作り個人々々が出來る丈け幸福になる樣に仕立てゝやらねばならぬ事は決して今日として、間違つた事とのみは云へないのである。

事實今日センチメンタルな超現實主義を以て、幼い頭に、「家や親などよりも、もつと大切なものがある、富や名譽は何だ」等を教へ込まれては少々危險である。力のある頭ならいゝが、そんな事を只外から聞かすよりもつと愚な事で、安つぽい藝術家や働きぎらひのなまけものを澤山作る事に結局なるであらう。私はこの例を信州の或る一部の自由教育法の中に見て寒心を覺へた事がある。これ等についてはしかし後項にくわしく批評しやう。

しかし、要するにそれはそれである。それとゝもにこゝに寒心す可き事がこの在來の唯物的教育法の中にある事は又動かし難い事實である。

今日の世相を見るものゝ等しく感ずる所として、人情日に輕薄となり、粗惡となり、人々の感情荒み、世の中に潤ひといふものがなくなつて行く。昔は何だかいら〳〵とした氣持で暮して行くといふ事は否み難い事實である。これは昔もさうであつたと云へない事もなからうがしかし、私の覺えてゐる範圍にあつても、私の幼少時代と今日では世相の感じがまるでちがふ昔は治まる御代と云ふ樣な感じが何となくしたものだ。

この現象の理由の一つとしこには、人口の增加と物資の關係等の經濟問題が重大なる役目を持つてゐる事であらう。國が豐であれば自然と民の心も豐かになるともいひ得る。しかし、もし一面から考へる時、今日の人心の荒廢、焦噪は物資の不足からのみではなく、又實の物質の豐饒なる享樂より生ずる、物質贊美、物質萬能からも生じ得る事を忘れては

ならないのである。物質の享樂の豐饒はやがて、物質過重、現實實利等を生み、又更に強き利己主義を生む。

更に又、今日の物資の缺乏は、無論人口の過增にもよるだらうけれど、一面物質享樂の質量二つながらの增加にもよる。電車や汽車は便利で結構なものではあるが、それ等の無かつた時代の方がたしかに呑氣であつた。電車や汽車にはたしかに、人の心を騷がしくし、落ちつかせない物質文明的要素が確かに存する。

竹の柱に茅の屋根のこもだれよりは鐵筋コンクリート方が丈夫で健康にもよいにはちがひない。しかし、住ふ事、食ふ事、等に、それ程に心をつかはなかつた昔の方が人は「心」の事を考へる時間と問題とを持てたであらう。今日物資は缺乏してゐると云はれ乍ら、昔からみると、物質的享樂をうけるものは何十倍に殖へてゐる事か。

私は決して、物質文明を排斥するものではないが、只それを用ふる「心」の用意がない時、人々は何時までも、物資の窮乏を感じ焦燥し、我慾を張り、不幸であるよりあるまいといふのである。

汽車は便利であり電話も電信も讃美す可きである。飛行器も用ひ樣によつては野蠻の道具ではなくならう。

物質を豐富にし、樣々な物質文明の利益を生み出す事はたしかに大切な事で、この方面からも今日の世相が潤はされる事は否まないがそれ以上に、人の「心」をもう一段高尙に、物質以上のものに喜びを知る樣に育てる事は、又更に大切で、この事はやがて、今日人々のなやんでゐる多くの問題を解決する唯一の鍵となるかもしれないのである。

經濟問題の解決はこれを經濟問題にまかせる。そして教育に於てはこれは智育の領域である。しかし、それ以上の大切な問題を忘れてはならない。人の心に、潤ひと、やさしさと、思ひやりを生ましめる事、物質以上のものゝある事を知らしめる事、眞の人としての、樂しみを知らしめる事、肉身以上のものを覺らしめる事、これが今日の教育に最も大切であり、又最も缺除してゐるものではなからうか。

明治以後我國經濟界の澎漲は、物質殖、乏二つの意義によりて我國の人心を極端に物質文明主義者となした。殊に西歐諸國の物質文明に對する强迫觀念及び、實際に必要なる競爭心は、我が學校教育、殊に兒童教育を一層、物質文明主義と爲した事は先に述べた通りである。

今日と雖も、物質文明ではまだ中々日本は所謂先進國に及ばぬらしい。だからまた〳〵一方に於て、兒童の頭を學術的な組織立つた頭にする樣な教育法は必要である。否それは永久に必要かもしれない。又或る程度迄、物質文明を尊ぶ事を教へる事も、(そんな事は教へなくても、獨りでに覺へるが)別に惡い事ではないかもしれない。少くとも、西洋の發明家や、理學者の偉さを教へ、我國のその點の貧弱さをよく覺らしめる事は强ち不必要の事ではあるまい。

しかし、間違つても、兒童を物質主義者にする樣な教育は困る。先にも述べた通り今日兒童をつかまへて、外から子供の心にむつかしい超現實的な概念を說いたり、弱々しいセンチメンタルな、愛を說く樣なキザな教育は又困るが、しかし今日の修身では兒童の心を內から美くしいものにする事は出來ない。兒童に、內から物質以上のもののある事を知らす事は出來ない。

或る程度迄は教育は常識的である事を私はむしろ喜ぶ。徒らに理想家らしい事を子供の頭に注ぐ事は、キザなばかりでなく、第一子供の頭を變態にするものである。舊弊の樣だが私は淳風美俗と云つた樣なものも相當に尊重する。殊に、今日凡ての人を超現實の深い理想人にするといふ事は出來ない事だし、いろ〳〵の仕事に適した人を生み、いろいろの仕事をする事を世界は要求してゐるのだから、兒童の持つ、いろ〳〵の知能、いろいろの本能を偏する事なく發育せしめる事は最も大切なる事である。

彼の軍事教育の問題は、多少、乃木大將式な頑固な武士道主義の味があり、贊成出來ないが、しかし、兒童がセンチ

「メンタルになり、柔弱になるといふ事はいゝ事ではない。必ずしも軍事教育には限るまいが、とも角も兒童の心に「强」—「勇」といふ感じを一面に於て育てる事は必要の事である。

しかし乍ら、もし、兒童教育が、兒童の心を、唯物的にし、美や、柔しさをいやしめ、殺伐、殘酷、冷酷、粗野、粗暴等の感じを助長するが如き事があつたらそれは更に更に惡い事である。

今日の世相の殺伐、非禮、焦燥、利己、輕薄等の感じは、主として、今働きざかりの青年中年たちの醉してゐる空氣である。老人にも勿論貧富ともに、さういふ感じの人々があらう。物質の乏、豐二様ともにこの感じを人々に持たせる。—しかし、今日の若い男たちの持つてゐる様ながさつな唯物的な感じは一寸前代にはない味の様にみへる何と云つても義理人情は一時代昔のものとなつた様である。この事を考へてみる時、明治以後今日迄の兒童教育がこれ等の現象と何等かの關係があると考へる事は決して牽强の說ではないと思へるのである。

今日の世相の荒廢にはたしかに明治後の唯物的兒童教育の結果がある。これを只ひたすらに學校教育にのみ攻めるのは當を得てはゐまい。家庭教育、世態の影響等も可なり大なる關係があらう。しかし、もし家庭に於て、世間に於てさうであるなら猶更學校では、それを排し、それから兒童の心を守る様にす可きであつた。學校が、實利教育をする一面にて於て、更に强き熱心を以て、兒童の「心」の教育、人格の薰育をしなかつた事はたしかに責ある事である。それは時代の罪で仕方がない事ではあるが、それだからとて、正しい事ではなく、今後はこの點に深く心を用ふ可き事である。—

人々は、修身の教授がこれを爲したといふかもしれないが、先にも一寸述べた通り、これ迄の修身の道授は一般的又は概念的な道德を外から、大した熱もなく、智育的に敎へたものである。のみならずその、道德は、功成り名遂げる事を理想とする、現實主義に立脚したものであつて。現實以上のもの、精神的なる實感は全くと云へる程缺除したもので

ある。

かくの如き道徳が、正直なる兒童の心に何等の反響を起さないのは當然の事である。耶蘇教の日曜學校に行く子供が往々にして、あたゝかき「心」を持つのは、何と云つても此處に、現實以上のもの、實感が潜在するからに外ならない。

更に又、學校の修身は只に、實感的なる「善」に立脚してゐるのみならず、往々にして甚だしき物質讃詠主義に傾く事が多い。

試みに今日各小學校に於て用ひてゐる教科の掛圖を見る時、學校に於て、偉い人、善い人、としてゐるところの人物は、精神界に於けるそれではなく、太閤秀吉や織田信長である。二宮尊徳や、中江藤樹等もあるかもしれないが第一義的の偉人とはされない様である。

勿論、其處には、兒童の英雄崇拜の心理を薫育するものであつて、それ等の戰勝者等は殺伐にして、老猾な、利己主義者としてゞはなく、一つの偶像となり、その行爲も立派なる理想人となつて語られるのではあるが、それにしても、さういふ人をさう思はしめる又は教育者自身が思ひ込む事の根底には、精神的なるもの、物質以上の世界に對する實感の甚だしき缺除を示すもので、それ等の人の精神生活が、現實主義、功利主義唯物主義に立脚してゐる事を語るものである。

今日の世界の状態では、かゝる英雄崇拜や唯物的教育を全然排除する事は尚早であらうし、又唐突であらう。しかし、それはそれとして、一方に、兒童の内部が暖くやさしく美しい心を芽ぐましめ、愛から出發した自然なる忠、孝、仁、義、禮、智、信を生かす事は、もういい加減に氣がついていゝ時機に達してゐると思ふ。(私のかゝる言説は甚だしく妥協的に一部の急進的の人々にはみえるだらう。しかし私は教育の理想を說いてゐるのではなく、今日の教育界なり、今日の

民衆なりを土台として、それを徒らにこわさず、それ以上のものをかへる事によつて、それをも次第によくして行ける道を考へるのである。）

今日の世の中に一番缺除してゐると強く感ぜられるのは「禮」といふことである。禮といふものは、半可通な自然主義者の思ふ如く、外面的なものではなく、心に潤ひが生ずれば自然に生ずるものである。禮は世の中を住み心地よくする。禮や、義や、信、といふものは、世の中の不平を消すもの爭ひを少くするものである。か丶る事は外から教ふ可きものではない。何等かの方法によつて子供の時より有機的に内に芽へさせなければならないのである。

この事は「善」を兒童の心に有機的に植へつけるよりない。「善」は外から教へる時、堅い氷の様なものになつてしまつて、枯れてしまふ。子供の心はそれを容れる事は出來ない。そして「善」は感じられなければならない。さもなければそれは有識的に、生きる事は出來ない。そして善が感覺的に觸れさすのは、「美」によるのが一番である。

美は善ではない。しかし、美化され、美を知れる心は、殺伐、利己、輕薄、等を嫌ふ力を持つに至る。美と知る事は醜を知る事である。

今日の教育に於て最も缺除せるもので、而も人間として最も大切なのは善と惡との感じに對する神經への教育である。これは美的感情教育に依るのが一番だと思ふ。

善や惡は、外からだけで教へられるものでなく、又區別されるものではない、時代々々によつてもその標準は異る。しかし、眞の善惡の感じはそれを知る神經さへ持つてゐればすぐに感じられる。その鍵を得れば摑む事が出來る。

勿論一方に於て修身の教授もよろしからう。但しもう少し、實感からの「善惡」を知つた人があの教科書を造りかへる必要はある。今日の教科書では寧ろない方がい丶とさへ云ひ度くなる。しかしまあそれはそれとしても、とも角も、

兒童の心を、もつと「美」と親しいものにする事は一層に大切である。

圖畫教育は從來は智育の一つであつたけれども。かく述べ來る時は、唯一の德育の機關となつた。それは實にその通りである。

後にくわしく述べるが、かつて圖畫教育は必ずしも畫を描く事を教へる教育ではない。畫を描く事によつて、自然、「形美」を幼き心に經驗さす教育である。だから、或る時は必ずしも繪を描かせる、美しい藝術品をとりかこんで先生と繪の御話をするのもいゝ、又は充分に考究された美術讀本の編輯も望ましい。そして、他の學課の時間をたとへ割いても、圖畫の時間をせめてもう一時間はふやしたいものだ。

よき美術に觸れる國民の心は幸福である。さういふ、環境にある兒童の心は幸福である。家庭に於ては仕方がない、何となれば各家庭は貧富樣々であり又家庭によつてその風を異にしてゐるから。しかしせめて學校に於て、「美」といふものがどの位子供の人格的薰育に効果のあるものかを明確に知つたなら、今後の兒童は誠に幸福である。

今日自由畫其他の問題が興隆し、以前よりこの問題が注目される樣になり、公園、境內郊外に至れば可愛らしき兒童が喜ばしい顏をして自然と畫筆に親しんでゐるのを見るのは誠に幸である。これ等兒童はたしかに一と昔前の子供より只單に畫もうまいし、それだけ美や自然といふものに親しい間柄となつてゐるのである。

この事は誠に結構な事であるが、しかし動ともするとそれ等の事は、その進路なり立場なりの反省を缺き、盲目的になるのきらひがある。私は教育者ではないが、一個の畫工として、又一個の父兄として、考へた私一個の德育としての圖畫教育觀をのべる因緣である。

○現今の藝術教育に就て

圖畫教育の目的が、智育に非ず、一種の德育にあり、而もそれは、むしろ修身等よりも、重要なる可きものである事は如上にて述べた。次に起る問題は、それは單に圖畫教育のみではない。他の藝術教育、即ち唱歌、作文、童謠、ダンス、兒童劇等のものも圖畫と同じく德育の一つとして必要ではないかといふ問題である。

しかし、作文、唱歌は別として、ダンス、兒童劇等のものが果して兒童の教育課目としてそれ程必要なものかといふ事には大きな疑問がなければならない。

今日流行してゐる兒童劇、ダンス、童謠、又は或る種の新作曲の唱歌等の如きものは、しばらく問はず、單に課目として一般の兒童に芝居をさせたり、ダンスをさせたりする事が適當の事であらうか、やり方によつてはこれ等のものは美育として適當なものたり得るであらうか。

單純に私の考へを言ふならば、そんなに迄しなくても、圖畫、唱歌、作文等で美的教育は充分であらう。圖畫の外に、ダンス、演劇迄を加へるのは少し多すぎる。それではむしろ情操教育の中毒を起してしまふであらう。さればとて圖畫よりも演劇、ダンス等の方が美的教育に適してゐるといふ事は云ひ得ない。

舞踊といふ事、(演劇を含めて)はたしかに、一個の美術にはちがひないが、それは子供自らにやらせるよりも、あまり有害にならぬ、玄人のやるものを見せる方がむしろ有益であらう。又、私一個から云はせれば、生徒に、子供らしいといふ感じで作られた、ドツチつかずの舞踊などおどらせるよりは、もつと完全な、日本の踊なり、西洋の本式の踊りなり何なりをみつしり習はせてさらはせた方が美術的教育になるとさへ思つてゐる。

ざつと云へばさうであるが、何故さうかといふ事はくわしく述べねば解らない。

第一に、圖畫と、ダンス、又は演劇とどちらが美的教育として有意義かといふ問題であるが、第一にダンスといふものは、一定の音樂につれて姿體を一定の形に動かす事によつて、一種の藝術的經驗を自己も味ひ、他人にも味はしめるのである。從つて、第一にその音樂が藝術的に上等のものでないと困るし、次にその型も藝術的に上等のものでないと困る。

圖畫に自由畫があるからとてまさか、兒童に自由ダンスをやらせる譯には行かぬ。圖畫にあつては、畫を描くといふ事によつて、自然といふものを「美」としてみる事を知らしめ、從つて直接に美と心とを高尙で素直な方法で溶け合はすのである。即ち何等かの美的對照を與へてこれを模さしめるのであるから自由にさせる事がかへつて意義がある。しかし、ダンスはさうは行かない。餘程のその道の天才兒童でない限り、自分から踊りをする事は出來ない。喜びのあまり、踊るといふのとはちがふから。

これはやはり本當にいゝ踊りをみせたり、いゝ音樂を聞かせたりする方が本當である。兒童への美的教育は製作よりもどうも鑑賞教育の方が本當である。畫をかゝせる事も、結局、それによつて、形の美に注意させる事に外ならぬ。つまり、鑑賞又は觀照の教育である。

殊に、子供に教へるとなれば、本當の歌曲音樂や、舞踊の手はむづかしいもので、學校の時間をさいてこれを教へる事は出來ない。やはりもしそれをするなら家庭で、昔の樣に師匠に通はせて、みつちり仕上げてもらはねば駄目だ、しかしそれは、普通教育の中に入れる事は出來ない、專門教育になつてしまふから論外の事である。

又、一般兒童にそれを施したところでむづかしくて出來るものではない。しかし、見せるのなら如何にむづかしいも

のでも、見せてさへおけばそれがいゝものであれば必ず美的薫育となる。

かくて、どうしても、兒童には子供らしい音樂、子供らしい舞踏を與へるといふことになる。ところでこれが問題である。私しはこの子供らしいと大人の考へて作つた味が嫌である。それは結局、簡單な大人の頭が考へた、子供であつて、少しも「内」からの子供らしさではない。へんに甘つたれてゐたり、センチメンタルだつたりして嫌味である。

一、御手々をつないで
　野道を引けば、
　みんな可愛い。
　小鳥になつて、
　うたをうたへば靴がなる。
　はれた御空に靴がなる。

二、御花をつんでは
　おつむにさせば
　みんな可愛い
　兎になつて、
　晴れた御空に靴がなる。
　晴れた御空に靴がなる。

といふ歌をこの頃子供に教へてゐるが、如何にも子供にこびてゐて嫌味である。子供が大ぜいで、手をつないで、森

か林の小道を嬉々としてうたひ乍ら行くと、晴々しい空の中でまるで小鳥の様だ、とんではねると、桃がたなるといふ様な事をうたつたものであらうか、この言ひまわしがわざとらしく、あどけなさがねらつてあつたり、全體のモチーブが概念的で、子供といふ感じに於ける一種のセンチメンタリズムに過ぎない。これ等は一例だが、近來出來る御伽噺、童話、童謠の類はもつと嫌味なものが多い。一種の安價な子供雜誌趣味であつて、何となく下品である。歌詞がさうなら又曲譜もさうであつて、近來出來る唱歌といふものはあまりに俄づくりの作曲である。何となく下品で安價で、センチメンタルな、そしてごまかし細工の感じのするのはどうしても否めない。

「あやに畏し」と「今日しもあげます」とは二つとも、雲上の事を子供にうたはしめたものだが、三十年へだてゝ曲の感じはひどく安つぽくなつてゐるのを否めない。「雨か雲か」「螢の光」「おりなす錦」等は外國の曲譜をかりたものであるが、この單純な様な曲でも今日の日本の唱歌にはとてもない。明治代の唱歌には一味の雅味、傳統味の完成された味があるのをどうしても否む事は出來ない。

要するに今日の小學校の唱歌は困つたものだ、一つは、作者の安價に出來すぎるのだ。これはその道のオーソリテーがないから世間に本當の批判がないため、何でも「いゝ」ものとされ、採用が容易だからであらう、とも角も安つぽいといふことはひとり、教育界のみでなく、大正年度の文物一切の通弊であるが、ことに小學校の唱歌や、又國語讀本等の内容等にこれをみるのはいやな氣持である。

歌曲が既にさうである。これに合せておどらせられるに到つては、實にみじめである。

ことに首をかしげて、嫌な表情などをやらせられるに到つては面をそむけたくなる、或る時、これは一種の情操教育であらう、兎も角も兒童の心とか感情とかに直接の刺戟を與へ、助長せしめるものではある。しかし、それに「美」に

おてはいない。こんな眞似を小供にさせてはかへつて小供の心に芽ぐむ、純正の美的感情を萎靡にして了ふ」

近來の人々は、長唄其他の踊りは歌詞、振附、すべて、男女の情に關してゐて、下品であるといふ。しかし、「宵は待ち」や「供奴」をうたつたとて別に子供は早熟にならうとは思はれない。「戀の手習、みそめてそめて」等といふ、言を怪しがるのはかへつて大人で、子供は何とも思つてはゐない。長唄其他にも隨分如何はしいものがないではないが、概して其處に表はされた、男女の情や戀等は藝術的に渾然と「美化」され、醇化されてある。だから、長唄其他でよし情を解す芽を植へつけられてもそれは可なり美化されたものであつて、むしろ渾然とした性教育となるかもしれない。殊に女兒に、いゝ意味での「色氣」といふもの、女性美の根底を與へる教育としては子供の時に何の事か解らぬ乍らその曲や、全體の味等で一種の「色」といふものを與へる日本の歌曲等は可なり面白いものとさへ思はれる。

私は何もだから子供に長唄や清元をやらせろといふものではないが、只、今日の學校でやらせるダンスよりは、「美育」としては有意義なものを、彼等は持つといふ事を云へばいゝのである。

學校でやらせるダンスは、「色氣」とか、「情事」とかは全然ぬき去つた、子供らしさ、無邪氣といふ感じを元としてゐると一般には思はれてゐるが私をして云はしむれば、それはむしろいけないのである。

大人の作つた、歌曲にふくまれた「色氣」等は子供には直接には何の交渉も持たない。只全體としての一つの感じが、むしろ一種の「美」となつて傳はる位のものであるが、兒童のダンスに於ける「表情」や、目づかい、姿體は、子供に分る樣に作られたものだけに直接に子供の情的方面と關係し、動ともすると、色氣ぬきと思つて作つたものが、色氣を「美化」によらず、生のまゝで、下品に助長さす傾向を持つ。論ずる迄もなく、この事は、ダンスをしてゐる子供の、大人びた、いやな有樣をみたら一見にして解る筈である。或る人々は、これを見て、子供らしいと云つて喜ぶかも

しれないが、その子供らしく作つた表情をさせる事がいけないのである。子供に係るだけにいけないのである。それからみれば「戀の手ならひ、みそめてそめて」と首をうちふり、袂をひるがへすのは、心配の樣でむしろ心配はない。むづかしい型、美的に洗練された型をしつかりとおぼへ込むだけでも、充分の難事である。子供はその方に刺激をうけて戀の手習の刺激は特別の子でない限りうけはしない。ダンスは子供らしい、とされる丈けにその點危險である。ことに、その品のわるさ、安價さは子供の審美的神經を毒するとも益する事はない。

ダンスといふものをやらせるといふ事が、絶對にいけないか否か、それは何も絶對にわるいとは云へないであらう。只自由畫の樣に、自由ダンスといふものは出來ない。何と云つても、御手本(型)なり對照なりを人が作らねばならないのだから、事が面倒なのである。だから、本當に優れた、子供に適當したいい歌曲、いゝ型が生れるならば或はダンスをやらせてもよいかもしれない。しかし、何もこれは無理にがんばつてやらせねばならぬ「美育」の一つではあるまいと思ふ。

兒童劇についても、同じ事が云へる、子供の内には、芝居をしたい本能はたしかにある。畫を描き度い歌をうたひたい、踊り度い皆同じだらう。だから子供は芝居ごつこをする。しかし、ダンスと同じ樣に、芝居にはやはり脚本の入用である。しかしまさか藝術的な大人の脚本を用ひる譯には行くまい。結局子供らしさといふ事を元とした「美感」を主體としてそれが作られる事になる。そしてその結果は、ダンスの場合、童謠風唱歌の場合と均じ事になる。又よし、相當兒童に適した而も藝術的魅力ある脚本があるにしても、これを兒童にされる事は考へものである。畫を描かせるといふのとこれとを同じ意味に考へたら間違ひである。つまり、子供がへんにコマシヤクレたり、小才子になつたりする弊がどうしても生じやすい。これは兒童劇などをやつてゐるのを一見すれば分る事で、どうもあまり、美的教育になり

さうもない。

童謠については、無邪氣讃美や、安價な品のない調子や、子供雑誌趣味や、小才子風な感じやになりさへしなければ一種の情操教育としてやらせるのも別に悪るくはない。ダンスや芝居よりは有害でなく、先生さへよければ有益な美的教育の一つとなる事も出來やうか。

これを要するに、藝術教育の中、ダンス、芝居等は、今日の現狀であると否とにかゝはらず、美的教育として、別に强いてやる必要はない、殊に今日のものは低級で、趣味が悪く、子供の心に美と反對のものをさへ植へつける危險があり更に子供を早熟にしたり小才子にしたりするおそれもあるから、止めた方がいゝのである。この點、今度の文部大臣は上出來であつた。その動機や解釋は不問、その採決だけは私の日頃望んでゐたものであつた。殊に斷乎として止めさせたところ、その世俗の評を肯ないところは氣持よく思つた。序ながら、女子の亂暴なる運動を禁止した事も大出來である。只軍事教育をこれ迄よりもつとやらせるのは困る。本論ではないが一寸附記しておく。

かくて、子供には、作文、（よき方法によれる童謠、創作をふくめてよし）唱歌、圖畫の三つをあたへればよろしからん、舞踊、芝居等は、その美は「見せる」方がかへつてよく解るもので、適當なるもののあつた場合に、鑑賞教育としてこれを施すに止めたいものである。特殊な子供への特殊教育は別として。

唱歌、作文、圖畫、いづれも、美育、又は德育としてこれを認める事が大切であるが、その中特に圖畫は直接に、形態に親しむ課目故ことに「美」を教へるのに最適當である。自分が畫工故、我田引水の樣に聞えるかもしれないが「美」を子供につたへるのは、大體に於て圖畫が第一だといふ事は論をまたぬ事であらう。子供の各個の性質により、唱歌が向く子と、作文の向く子と、圖畫の向く子とは勿論あるが、圖畫教育は、生徒自身に創造的境地を最もよく與へ得る點

で、すぐれてゐる。

がしかし、それはどうでもいゝ、とも角も吾が教育は今後、この、圖畫、唱歌、作文等に、新しき德育としての價値を見出し、その位置をもう一段尊重し、少くとも幼稚時代の教育に於ては他の智育と同等又はそれ以上に重きを置く必要があるといふのである。

二　圖畫教育の方法

○圖畫教育の眞意義

かくて、圖畫教育の目的及び精神は如上を以て明らかに爲し得た樣に思ふ。さらばその方法は如何。

先づ第一に考ふ可きは、圖畫教育は決して、美術家を作らうとする教育ではないといふ事である。そして、圖畫教育とは云へそれは繪畫又は彫刻等、造形美術を通じ、美術の美と、自然の美とを知らしめるのであつて、必ずしも畫を上手に畫かすといふ事にあるのではないといふ事である。

後にくわしくのべるが、だから、先生は、子供の畫に、子供がどんなに、「美」といふものに注意したか、どういふ風に子供が美を知り得たかに注意す可きである。

勿論、上手下手といふ事は子供の美に對する受感の結果を語る場合が多い。又畫を描かしめるといふ事は、子供を自然、又は美術上の美に接近させ、交遊させる最もよき手段であつて、結局、圖畫教育は主として圖畫をやらせる教育になる事は事實である。

只、主客を明確にし、これを轉倒さへしなければいゝ迄である。

次に考ふ可き事は圖畫教育とは、兒童に美を教へる事ではあるが、しかし、美といふものは、他の科學の様に智識を以て知るを得ないものであるから、先生自身美を知つてゐない場合の方が多い。美といふものは主觀のもので、美さとか奇麗とかいふ感情の經驗を持たぬものはないから、美を知らぬ先生はないといふ反問が生じるかもしれないが、普通の人が、單に奇麗だとか美しいとか感じる感じは嚴密に云ふと、美以外の感じをいろ〳〵な先入や概念やらと美と間違へてゐる場合もあり、さもなくとも、極めて低い視覺的快感を指して云つてゐるのであつて、こゝに私が云ふところの美、即ち特に、人心の教化に役立つ程の美は、單に普通の人々の感じる程度のものではなく、もう一歩高い程度の美である。

こゝで、「美」に就ての講義をしてゐる譯には行かないが、とも角普通の人の感じる美感はたとへその當人にとつては絕對のものであつても、客觀的には、「美」と特に云へない程のもので、只その人の應美能力が低弱であるために、その程度のものに衝動されるといふに止まるのである。赤ん坊が刺激の强い色をみると興奮するのは、赤ん坊にとつては絕對であつても、大人にとつては馬鹿〳〵しいのと同じ事である。

ところでかういふ「美」を知るといふ事は、知識的な道では出來ない事であり、その人の內なる美の力による事だから、俄かに覺へ込む譯には行かない。從つて、「美」を本當に知つてゐる人は誠に少いのであつて、先生だから「美」を知らないと云つてせめる譯には行かず又、當然の事でもある。尤も非常に深くこれを知る事はさして必要ではないかもしれないが、しかし、とも角も、或る程度迄、「美」の感じを內から知つてゐる人でないと生徒に「美」を教へる事は出來ない。

其處で嚴密に云ふと圖畫教育といふ事は出來ない事になる。しかし、それでは困るから、それを承知の上で他の方法によらねばならない。如何いふ方法かといふなら、「美」を敎へるといふ考を止めて、「美」を自然に知らしめる様な機會を與へそれを助ける様に導く。これなら組織さへしつかり立てたら、「美」を知らぬ人でも、生徒を指導する經驗のある人なら出來る。

かくて、圖畫教育は、一般には「美」を敎へる事ではなく、「美」を自然に知らしめる敎育だといふ事になる。一般にと云つたのは、本當に美を知つた優れた先生が在る例外の場合を考へたからで、この例外の場合が最も理想的ではある。

それならば、先生は兒童の畫を批評又は指導しない方がいゝか。この問題は中々面倒である。生なかの先生に批評されたり指導されたりする事はたしかに困る事ではある。しかし一見して誰れにでも、出鱈目だつたり、いゝ加減であつたり、低能的であつたりするものは解る筈で、これを只野ばなしにしておく事も考へものである。しかし、それならそれを敎へるとなると、どうしても、「美」の問題にふれやすくなる。

其處で私はどうしても、圖畫教育に鑑賞教育をもつと、何か組織だつた方法に於てなすの必要を感じるのである。その一つとして他の學課と同じ様に一種の讀本風の敎科書を作り、生徒用と敎師用の二つとし、敎師用のものは教案の助けとなる様に造り、つとめて、敎育しつゝ、自分も敎はるといふ風にしたらと思ふのである。結局は、先生を敎育しなくてはといふ事にもなるが、これは別論となる。即ち師範學校時代に殊に、先生になる敎育の一つ。

それならば、先生は兒童の畫を批評したり指導したりしない方がいゝか。これはやはりあまり批評したり指圖したりしない方がいゝと思ふ。

がしかし、只野放しにするといふ事は考へものである。其處で、批評もせず、敢て野放しにもせずといふ方法によらねばならぬ。こゝに鑑賞教育を基礎とした自由臨畫法といふ道が考へられるのである。さもなくとも私は「美」を知らしめるのには只野放しにしておいてはいけない。兒童を藝術品に接近せしめ、進んではなるべくは生徒自身能働的な臨畫に迄進めてもいゝと思ふのである。この事のくわしき考察は後にゆづる。

それと同時に、こゝに最も必要なるのはよき美的教育の先生の出來る事である。しかしこれは至難の事である。中々師範學校で教へたつて解る事でなし、第一師範生に教へる先生がこれ又拂底である。しかし、生徒とゝもに「美」に面接してゐる中に永年の間には先生自身も美を解する樣になるかもしれない。少くも今後の圖畫教育にはそれだけの新鮮な力があつていゝ譯である。後に述べる私の、鑑賞教育法等は、生徒の教育とゝもに先生も何等かの教育になる要素がある樣に思ふ。

○實際の方法――四つの方法

圖畫教育の目的が、畫を描く事を教へるといふ事でなく、又必ずしも美を教へるといふ事でもなく、生徒とゝもに美の中に遊び、美を味ひ、美を不識の中に體得するといふ事にある事は如上に於て明らかになしたと思ふ。次に考ふ可きはその方法である。

その方法として、私は左の四法を（原則的）考へ得る。即ち、

一、自由畫法（寫生
　　　　　　（想像又は記憶畫、

二、見學法 ⟨ 鑑賞 臨畫

三、手法教授、

四、裝飾法、

これ等の中、最も美的教育として有効なりと思はれるのは美術から美を汲みとる事であつてこれを除外して、只單に生徒を自然に親しましめ又は自由に畫を描かしめてもそれは美的教育としてはむしろ消極的であつて、有効ではない。」

從つて、美的教育としては、第一に、見學法――即ち、鑑賞教育を擧ぐ可きであるが、しかし、又一面美的教育の手段としては生徒に、美的作品を創作せしめる事が、生徒の興味をそゝり、勉強としては最もいゝ方法であり、圖畫教育としては最も普通の道であるから、鑑賞教育をどこ迄も一面で尊重しながら自由畫法を手段として第一に置くのが最も當を得たものと思はれるのである。

見學法の中に、鑑賞と臨畫とを置いたが、鑑賞の方は解るとして、臨畫とは如何なる意味又は範疇を示すかといふ事が問題になりさうに思ふ。臨畫法といふものは圖畫教育としては既に舊い昔の事となつた今日この質問は當然である。」くわしき事は、後項に於て、これ等の四法の一つ一つをのべる時にゆづるが、こゝに提出した臨畫法は、鑑賞教育を一層確實に、又實際的にせしめるために、生徒の興味本意にまかせながらやらせるもので、その手本は鑑賞用の美術品による事勿論である。これは、模寫したいといふ、美術的本能を認めた上にそれを活用するところのものである。

三、の手法教授も、一寸問題になりさうである。既に前項に於て、先生は、生徒の畫を批評したり指導したりしない方がいゝといふ事を述べたのと、手法教授といふ事とは矛盾する樣に考へられる。しかし、美と關係のない、全然の手法だけの教授は或場合に限つて必要である。實際に於て、それを除外出來ない事だし、害なき事として原則として擧げた

迄である。精しくは項後に述べる。これは鑑賞法の中にも自由畫法の中にも含まれるものである。

四の装飾法については、後項にくわしくのべる。

これ等の四法は、装飾と寫生（模倣）と、想像と、美術品への模倣（傳統）の美術上の四つの要素から出發したものである。

次にこの四法の一つ一つについて項を別にして考へてみやうと思ふ。

○自由畫法

前にも述べた通り、感情美化の教育としての圖畫教育としては、鑑賞教育が最も根本的な位置にある可きであるが、しかし兒童をして、所謂「畫心」をおこさしめ、畫には美術といふもの引いては「美」といふものに引きつけさすには兒童に畫を描かすといふ事が第一である。

この事は、兒童の、制作本能を、善用し有意義に生かす事であつて、教育としては最も生きた方法である。兒童は本能的に何か描き度いのである。白い壁や白い紙と、鉛筆又は墨といふものは、兒童のその本能を刺激するのであつて、落書等は意識的といふよりも本能的なものといふ可きである。

かくて、圖畫教育の手段としてはどうしても、「畫を描かせる」といふ事を第一に置かなくてはならぬ。これが最も圖畫教育の常態である。

かくて、圖畫教育の手段としては第一に畫を描かせる事であるが、その方法はと云へば先づ自由畫法による可きである。

自由畫法とは、子供の意志を尊重し、なる可く自由に不干渉的に好きな畫を描かすところから生じた名であり、その對照としては舊教育法の臨畫を第一とし、用器畫、透視法、其他美的感情と交渉のない教育法がある。

これ等の舊來の圖書教育法が圖畫教育の本旨たる感情の美化の手段として誤まつてゐる事は論をまたない。のみならず單に圖畫の教育法としても本當のものとは云へない。

自由畫を唱へた人がこの點を明らにして、圖畫教育界からあの貧寒な圖畫手本を一通り驅逐した事は功ありといふ可きである。が自由畫の人々の說くところは主として、兒童の個性尊重、自由尊重にあり、臨畫は一定の型に兒童の觀照をつめこむ事で、自由を束縛し、芽生へようとする「心」を刈りとるものだとする批難であつた樣に記憶する。これ等の中兒童の個性尊重、型の排斥等には又別の考へ方によりて、或る異つた見解も生ずるがそれは後項にゆづるとし、これ等の自由畫派の人々の考は大體に於て當を得たものと云ふ事が出來る。兒童の自由や個性を尊重するといふ事も、型を排するといふ事も、舊來の圖畫教育を對照として云ふ時には當然云はれなければならぬ事だし、兒童の個性を無視し自由を抑へ惡い型を强いる事は正に排斥されなくてはならない。しかし兒童の個性や自由を尊重し過ぎる事や、型を絕對に排したりする事は考へものである。この事は後に述べる。

とも角も私は、臨畫といふものを全然排するものでもなく、優れた、美術に關する教科書の編輯の必ずしも不可能でない事を考へ得更にそれを兒童の美的軌範の一助とする事が決して惡くない事を信ずるものである。かゝる意味で私は絕對的な臨畫排斥ではないが、しかし臨畫といふものは兒童の審美的發芽に惡影響を與へ得る要素のある事、殊にいゝ臨畫帳を造るといふ事は相當困難な事であり、ともすれば不快なる非審美的なものが多く生れ勝ちであるといふ事を認めるものである。かくて、大體に於て、兒童には臨畫を禁じた方が無難であるといふ事にも贊成するものである。

かゝる見地から舊圖畫教育法は全く排斥される事は先づ不當とは思へない。のみならず、舊圖畫教育法はその根據が終始、畫の初歩の手ほどきにあるのであつてその本旨は要するに智育の域に止まる。殊にその感じはどうも機械的に陷り易く、兒童の心に何等かの愉悅をも興さしめる要素を持たず、又安つぽい。これ等の言は現今の圖畫手本だけの評になるけれど、先づ從來のどこの圖畫手本でも、その根據が「美」になく、型にあつた事は否み得ない。かくの如き教科書を用ふる事は單に兒童の個性の生長に有害である等の事に止らずもつと積極的に兒童の心を貧寒な、無味なものとなし、引いては美術に對する愛の生芽を刈りとる事になる恐れがある。

教科でない他の舊圖畫教材はそれなら如何と云ふと、これ又、美的訓練とは關係なきものが多い。學校で與へる寫生用の教材は、三角形四角形圓筒をはじめとし石膏模形、雉子、兎等の剝製標本、其他何等の審美批判を經ざる、日用器具、たとへば、煙草盆、火鉢、土瓶等の如きもの、これ等のものは、美の觀照を目的として與へられるのではなく、形を正確に描く必要として與へられるのである。

先にも云つた通り、圖畫教育の根本目的は兒童を畫家にする事ではなく、兒童の内に眠れる「内なる美」を目覺まし、引いてその性格を美化し、その心に愛と善とを植へつけやうとするにある。勿論、形を描ける能力を養ふ事もあわせて教へ得るがこれは主たる目的ではない。前賊の如き諸器具は、其自身何等の美的意義を持たない。美は主觀のものだから、そんな器具にも美を認めるかもしれないといふのは詭辯に過ぎない。大體に於て諸人の心に美を誘發する要素といふものは客觀的にある。

と云つて、美術的價値を持つてゐる作品即ち美術品や工藝品を、寫生せしめよと云ふのではない。これはむしろ臨畫の意味を持つものゝ事であつて、これはそういふ意味に於て、時にやらせるのは美的教育の一法といふ事が出來るしか

し寫生用としてはやはり、それ自身が美術的價値を持つのでなく、美を人の心に誘發する要素を持つ自然物、又は器具を用ふるのがいゝ。ところで、これが採否、批判が實に困難である。今日多くの自由畫展覧會等に臨んでみるのに、いゝモテイフを兒童に與へてあるのは實に少い。がとも角も、兒童に美的にいゝモテイフを與へるといふ事は中々むづかしい事だけれど、又これは、何等かの方法によつてなさなければならない。その方法について多少考へ得た事は後に少しくのべやう。

とも角も、舊圖畫敎育法に於けるこれ等の敎材はその根據を美に置かず、形に置いたのから主客を顚倒してゐる。これ等のものは兒童の心に何等形而的快感を引き起さなひ、石膏像の如きでも何も强いて練習さす必要もない。兒童がその形や色をみて、美的快感を喜び、樂しみつゝそれを寫さしめ、寫しつゝ樂しみ得るところにはじめて、圖畫敎育の本旨が生く可きである。石膏像をはじめとして、三角四角其他の模形の如きは、子供の心に美的興味を起さしめず、むしろ義務的な勞役心をさへ感ぜしめるきらいがある。又物體の形象を正確に描く能力の練習といふ事も、何も石膏や三角四角の模形を與へてやらせなくとも、戸外寫生、室内寫生等にて、充分これを美の習得と併んで成し得る事である。專門家にするのではなく又少い圖畫の時間はなるべく經濟にこれを活用す可きであるから、根本の目的たる「美」の習得を主として、これとあわせて、智育としての圖畫敎育を施す可きである。

他の用器畫、透視畫、其他もこれと同じ事であるが、これ等は圖畫敎育以外の智育としても、常識の一つとして知つてゐていゝ譯であるし、又物象觀照上の一助にならぬ事もないし、用器畫等は、圖案を考へる時の便宜にもなるから、排する必要はない。しかし、これに重きを置く事は賛成出來ない。

要するに舊圖畫敎育法は、圖畫敎育の本旨であるところの美育又は德育としての自覺を得てゐなかつたのであつて、

これは時代の責であるから致方のない事である。從つてその教育法が手技上の智育に止まるのも致方ない事であるが、一今日藝術が人の德性に與へる効果が一般に意識される樣になつた時、もしまだ官學的な立場から舊教育法を固守し、又は辯護するものがあればそれは笑ふ可きものと云はなければならない。

かくて、圖畫教育の中製作教授は、その基礎を第一に自由畫に置く可きである。第一にと云ふのは、第二第三に臨畫法や裝飾法を考へるからであるが、それ等は、常にこれを施すのではなく時に應じて施す可きであり、常態としては、そして最も必要とす可きものは、自由畫法による可きである。即ち、實物（風景靜物、人物等）寫生及び、記憶又は想像畫を生徒の自由にまかせて描かしめるのであつて、その描畫材料は、クレイヨン、水彩、其他筆墨和紙油繪等皆結構である。但し材料に關する審議は別項に述べる事としてこゝには省く。

この寫生と、想像畫とはどちらも輕んじてはならない。それは生徒の好みにまかせるのが本當であらう。何となれば、生徒によつて、寫生を樂しむ生徒と、想像畫を樂しむ生徒とあり、又時によつて、同じ生徒でもそのどちらかを好む場合もあるから。しかし大體に於て寫生する事によつて、物の形に宿る美を覺らめしめ、興味を感ぜしむる事は大切である。しかし、想像畫も決して忽にすべきでない。それは、自分の見て來た事、日常見てゐる事等に對して一層細かい觀照をうながす事になり、一種の愛情を育て得る。

即ち、寫生は、物の美に對する訓練であり、想像畫は、「事」に對して美的想像又は追想を爲さしめるのであつて、兩方とも一種の愛感を心に生ぜしめるが、殊に「事」に對する人間の記憶又は想像は一種の愛感をともなふ事の多いものであつて、美術上に於ける「事の美」といふ一境は實にこの愛感の形象的具象とも云ひ得るものである。だから、子供がたとへば運動會の記憶であるとか、祭禮、緣日、遠足家庭の日常等、自分の經驗したる事象を想起して寫す時の心理

には、この一種の、愛感が不識の間に働いてゐるのを見る事が多ない。これはさういふ種類の兒童の作品を見る時よく感ずるところの事實であつて、たとへば、籠の中へ澤山の紅白の球を投げ入れる競技をかいたものを先日も見たがその競技を行つてゐる生徒を寫すのにいろ／＼自分が日常見てゐる服裝をしてゐるがそれが一種喜んで寫され、愛されて寫されてある、又紅白のボール等の表現には一種の美意識の表示をみる少くも兒童から美しいと實感され經驗された味が暗示されてゐる。かくの如くそこには中々微細な觀察や注意がみへる。それは即ち單に兒童の觀察を練磨するといふ樣な功果のみならず、その觀察や注意が微細になつてゐるといふ事には、やさしい「心」が行き通つてゐる事を見逃してはならない。注意を微妙に行きとゞかせるといふ事は、藝術教育の可なり重大な役目であつて、即ち、デリカシーの教養となり、從つて、ものに對し、いたわる心を養ひ助長し、粗暴、殺伐の氣をなくし、「善」又は「愛」の根本的教養となるのである。

これは單に想像畫のみの獨專の事ではなく物象寫生においても、勿論いろ／＼な形や色に對する觀照や注意の微妙をうながし、それによりて心をやはらげ、デリカシーを養ひ得ると云へる。

しかし一面からみる時この物象寫生は、ともすると「美」よりも「形」を寫しやすく、これに比べる時想像的作品には、兒童の「主觀」が生かされやすく、從つて兒童の内なる「美」即ち裝飾的能力が自然發露しやすい。即ち兒童が運動會に遊ぶ子供の服飾を寫すのに、實際とはたとへちがつても、自然に其處へ色彩上の美感を生かす樣になり、又殊に兒童の心に殘つた、美的感銘を生かす誘因ともなる。先例の赤や白の球の裝飾的効果等はその例である。のみならず、物や事に對する愛感も直接に生かしよく、記憶、追想、想像等の能力が生き／＼する事により、情操の藝術訓練となる。即ち美術にあつては、寫物の道よりも想像の道の方より裝飾に近いものであつて、それだけに兒童の内なる美を誘出し生

かす爲には直接的なところがある。

要するにこの寫生と想像の二つは自由畫としてどちらも大切なものであつたが、只「寫實」といふ事は繪畫の上では一番普遍的な本筋の道だから從つて、兒童の圖畫教育上にもこれが最も普遍的な基本的な位置を持つ事は認めねばならない。しかし私がこゝで特に圖畫教育に於ける想像畫の價値を述べたのは、この事が充分にまだ人々に考へられて居らないのを感じたからであつて、ともすると、學校の自由畫は寫生さへすればいゝといふ風な傾向をみるからである。

この事は後に述べるが、美術に於ても、圖畫教育に於ても、單に「自然」といふ樣な空ろ言を尊重しない樣に、それよりも、殊に圖畫の教育にありては「美」といふ事を尊重する事を心がけねばならぬのである。

次に考ふ可き事は、描く可き題材を教師が選ぶか生徒が選ぶかといふ問題である。これはどちらでもいゝ譯だが、しかし生徒の頭には元來まだ審美能力は殆どないのであつて、何が美くしいか否かにはかなり漠然としたものである。紅葉があれば單に紅葉は美くしいものといふ、先の概念で美くしいと思つたり、赤といふ色の刺激を美也と思つたりする。それが證據には、子供のかいた紅葉の寫生などをみると、何等の美的感興なく、一本の紅色の色塊をつけた木がかいてあるだけで、紅葉の美しさ等には何等の注意がされてゐないのが多い。これを直に兒童が紅葉を美くしいと感じて寫したとゝる事は早計である。これにはやはり、物の形や色の持つ美しさといふものに氣のつく樣な指導なり助力なりが必要といふ事は否み得ないやうに思はれる。

この指導又は助力には、美術品の鑑賞法見學法、引いては美を主旨とした臨畫法等が有効であらうけれど、又、何等かのよき手段によつてよき畫因を與へ得るならば可なりそれも効力多い事だと思はれる。

即ち畫因の指示によつて、自然の美しさを覺えしめるといふ事は、自然の美に入る可なり重大な鍵である。自然を見

る人は多いが本當に自然の美しさを知る人は少い。花をみ鳥をみて美しいと云ふけれど、もしそれ以上にそれ等の美を人々が知つたらそれだけでもその世界は如何に樂園となるであらう。今後のそして眞の圖畫教育が知らせようとするのはさういふ、今迄の類性以上の「美」でなくてはならない。それは何と云つても、藝術上の「美」の法則に從ふ可きである。鑑賞法はそれを指示するものであるが、自由畫法に於てはそれは主として畫因の指示的注意に於て施さる可きものと考へられる。

しかし、それは實に難い哉である。何となれば、今日の教師諸子の自力を以てこれを施されてはこれ又大變である。又それは今日の教員の實力では實際、本當に正しくは施し得ない事は斷言しても過言ではないと思はれる。

美に關して兒童が無智だから教師がこれを指示するといふ事は當然の樣ではあるが、美に關して無智なのは兒童のみでなく多くの教師が又然りであつて、畫因の指示は兒童と同程度に教師もこれを與へられなければならぬものと考へなければならない。

だからこの問題については、今日のところでは、畫因について教師の積極的な干涉や、指示は避ける事とし、只よき方法あらば、放任よりはよき指示を與へる方がいゝといふ事に止めるよりない樣である。

只一二、多少參考ともなる可き愚考を述べれば、第一にやはり、定評あるよき既成美術品の畫因に對するよき意味の模倣、又は畫因を參考とする等の道がある。又さういふ參考品をよき信用ある美術家が編輯し發行する事も一つの方法である。しかし、この定評あるよき既成美術品の畫因を參考とし又は模倣するといふ事も結局はその教師の審美能力に歸する事になるので困る。淺薄なものを感心したり、いゝものでも淺薄に解釋したりする場合が非常に多い事は論をまたない。これを案じるなら信用あるよき美術家によつてその參考書の編まれる事を希望したのだが、これもその信用あ

るよき畫家を定める事が又厄介な問題である。しかし、そういふ本の發見が盛になり多く作られる樣になればおのづと定評も生じるであらうが、さてこの定評を信ず可きか否かにも亦問題に殘る。

要するに描く可き題材を生徒にまかすか先生が指定するか、これは今のところ、どつちでもいゝとしておく外あるまい。只兒童はそれ自身決して畫因を知つてゐるものではないのだから決してそれを放擲しておく事がいゝ事ではなく、只致方ない事なのであるといふ事は記憶しなくてはならないのである。

要するに、後にも述べる通り、自由畫法は兒童の美意識を誘發し生長さす道としては消極であつて、一面よき美術のよき鑑賞法によつて「美」を示し、美に交る事を爲し、猶、美の法則の根元であるところの裝飾の法則を學ぶ道をも考へ、この三つが協力して、すなはち完全な圖畫教育が成されるものと云ふべきである。

次に考ふ可き事は、曾て一部の自由畫論者によつて云はれた、兒童の個性尊重、模倣排斥に關する批判である。これは自由畫法を考へる上に問題とならなければならない。

兒童の個性はもとより尊重す可きであらうけれど私をして云はしむれば、それ等の言說が動ともすると兒童の個性といふものを過大に考へるきらいがあつた事である。即ち、私は屢々兒童の幼稚なる能力から來る觀照の粗野に因る非常執的描寫の偶然な味等を、兒童の個性の發露と誤說されてゐるのを見聞きした。

勿論兒童にも十人十種の相異つた性質はある。そしてその造るものにもその行爲言語と同じくおのづと異つた發露があるのは當然の事である。教師がこれを顧みない事のいけないのは論をまたないのであつて、この程度でならば私も熱心なる個性擁護論者である。しかしこの程度を超えて、他と異を樹てたる如きものを個性の明らかなものとし、さういふ作をよき作也とする一味の個性過重者はこれを排す可きが至當だと思ふものである。それは個性ではなく、又個性と

は必ずしも他と異るといふ事ではない事は云ふ迄もない。しかし、近代の流行語としての個性といふ事を只何となしに有難がつて、盲拜する人の多い今日、これ等のものの誤りに一應正しておかねばならぬ事だと思ふ。

もとよりかくの如きは可なり愚なる一例であつて、一般の個性尊重者が皆これであるとは云ひ得ない。しかし、それにしても美術又は圖畫教育に於て、個性といふ事は今日の人々の考へてゐる程重大なものではない。殊に圖畫教育は美術寫教育ではないのだから、個性よりは「美」的教育を旨とす可きであつて、個性はこれを只傷けない樣に育めばそれでいゝのでこれを特別に奬勵する事はむしろ、美的觀照を素直にせずかへつて個性を傷ける事にもなる。個性を強くすれば美を見る力も強くなるといふ考へも強ち不當ではないが、美をみる力が強くなれば個性も自然に力を得るといふ方が本當で、美を主としないで個性だけを特に過重すると、かへつて個性を傷ける事になる。要するに個性は手段で美又は善が目的である。

模倣を全然排する事もこの個性尊重から來てゐるが、これは又近代藝術家の陷つた一つの惡癖とも云ひ得る。がこの事については後項見學法に於てくわしく述ぶる事とする。

が要するに、自由畫法は、圖畫教育の手段としては最も普遍的なものと云ふ可きであるが、兒童の美意識を誘發し生長さす道としては消極である。何となれば兒童は元來美意識と稱へ得る程度のものは殆ど持たぬと云つていゝのであり、教員も亦、この兒童と五十步百步であるとしたら兒童が美を知るためにはこの道にあつては、自然物象の寫生や、想像畫等の製作をしてゐる中にいつか兒童の心の中に美が育つであらうといふのを待つのであつて、これは甚だたよりなく、もう一步進んで積極的に、兒童の心に美を接せしめ、交遊せしめるには、それ自身が美的經驗によつて、成立してゐる美術的作品に接せしめる鑑賞法又は見學法及び、美的法則を內から啓發するところの裝飾法等と協力して、はじ

めて、其處に、この自由書法も、美的生氣をより強く得ると云ふ可きである。

即ち、前述の、畫因の問題でも、この鑑賞法がうまく効を奏するならば、兒童が内から必然に、自己の感心したる作品の畫因に學ぶ事も出來、其處に、何等かの意味に於ける美的經驗によれる畫因が生じる譯だからである。たとへそれが幼稚にせよ、淺いものにせよ、兒童が自發的に、他の美術品（相當に定評によりて審議されたる）の美を味ひそれに傾到したといふ事は正に美的教育の成功であつて、更にそれによつて、兒童が自然物象の形に興味を感じ、それを生かして自己の作を作つたとすれば、それは明らかに美を基礎とする製作の第一歩である。これはたしかに、頭の固まつた教師が概念的に得たものではなくて、頭の素直な子供が直感的にうけた美術上の感銘であるからたとへ幼稚にせよ、淺いものにせよ其處に、生きたものがある筈である。生きて居るものなら育て様によつては生長する。

裝飾法は、内から美的本能を育て、啓發する事によつて、一層兒童の鑑賞眼や觀照を本當のものにして行くであらう。

かくて自由書法は先づ第一に見學法又は鑑賞法によらなければならない。（この項終り次號完結）

附記　本稿は來月號を以て終る。來月號は〇見學法〇手法教授〇裝飾法等を考察し、次に、大體の針路といふ樣なものを考へて、筆を擱くつもりである。猶、この外數章の考察を添へて、近い中に一篇の書物としたい考を持つてゐる。私は元來一畫工であつて、教育問題等に容喙するのは烏呼がましいのであるが、私としての考へを持つ以上、まとめて發表するのも強ち無意義とは思はない。しかし私は他にいろ〳〵多忙な本職を持つてゐる身分故、この岡崙の問題のみにかゝつてゐる事は出來ない、從つて、これに關する質問其他の私に用返事はお斷りしたい。又講演等も一切應じないつもりである。甚だ不親切の樣だが私としては、これ丈けかくのがやつとであるから何卒あしからず、猶大方諸君の御教示を喜んで拜受し、自分の考へ違ひ等は正して行きたく思つてゐる。以上附記。

劉生誌

大正甲子、十二月一日午前二時

農人と文藝

吉江喬松

一、農村と文藝

椿や、藪竹や、樫の樹やなぞの立ち籠めたなかに、遠くから見れば、全く存在すらわからないやうにして立つてゐるのが、上總あたりの海沿ひの村の農家である。

海からの荒い風を防ぐために、自づと、どの家でも舊時からの自然林の中へもぐり込むやうにして立てられたものではあらう。けれど、それぱかりではないらしい。自然を防ぐために自然の懐へもぐり入つたばかりではなく。そのほかの敵から身を防ぐためにも隠家をつくつたものゝ如き心持もせらるゝ。どの農家にも、正面から見ては氣のつかない、」全く有りとは思はれない、一種の樹木の色に掩はれた、枯葉色の防護色に包まれた、全後の、屋根の底い、薄暗い一間、二間のほとんど穴居の痕跡かとも思はるゝものを持つてゐる。

我々の。山地の、また高原地の農家と比べて見れば、餘程の相異がある。十五度の傾斜地まで耕地とせずにはゐられない山國の農家では、平地である限り一寸の隙もないまでに利用せずにはゐられない。軒下から直ちに稻の葉がつゞく。」

新刊

新撰谷崎潤一郎集

谷崎氏の傑作悉く集錄せり

世界的藝術家として明治、大正に卓出せる谷崎氏が文壇の一角に明星の如く輝き出でてより今日に至るまでの代表名作廿一篇を年次的に集錄したるものにて、或る意味よりせば氏の自傳的全面を髣髴せるものにて、氏の惡魔主義的傾向が玆に全く巨大なる風格を成し、一家の風格を以つて天下の文壇を率ひ、さしもに騷然たる大正、明治にあつて尙ほ唯一の太陽を見るが如き偉觀を呈するのは氏が千古を通じて朽ちざる藝術力の化現であるからである。玆に氏が約二十年に亘りて努力せし名作一千二百餘頁を一輯として江湖に贈り得ることは何としても近時文壇の一壯觀と稱すべきである。

目次

象　羹　惡魔　續惡魔　あくび　The Affair of Two Watches　前科者　異端者の悲しみ　人面疽　二人の稚兒　玄奘三藏　ハッサン・カンの妖術　柳湯の事件　富美子の足　ちひさな王國　獨探　呪はれた戲曲　或る少[illegible]の怯れ　母を戀ふる記　兄弟

東京芝愛宕下町一ノ一

改造社

ウインター・スポートの白眉、山岳スキーに關する我國唯一の權威ある良書。本年も目捷の間にスキーのシーズンが迫つてくる。實に嚴そかなる冬の山岳こそは人の世の惱みを淨化し、神域に引き入るゝ崇高なる殿堂である。著者平井左門氏は斯界の第一人者たる事は萬人の識る所、その多年の經驗と微細の點に渉る科學的研究を極めて用意周到なる準備の下に論じたるもの、今や山岳スキーの活動期を前にするに當り此の一著を幾多スキー・ツーリストに贈る。

細田民樹著

或兵卒の記録

定價二圓六十錢　送料十七錢

本書を新兵諸君に贈

文壇の一奇材たる著者が一兵卒として軍隊に入り、其の二年間の苦しき、そして面白い生活を精微の筆もて描く。或る有力なる一將校は此書を讀むでこれ程軍隊生活を如實に細寫したものは他に絶えて無いと嘆賞し、嘗て其の一部は米國及び歐洲で日本軍隊生活の眞相として譯出された事もある。軍事教育問題で贊否兩說嘈々たる今日、何人も先づ本書に依りて軍隊の內情を知る必要がある。又將さに入營せんとする新兵諸君と在營現役兵諸君の此上なき好伴侶であり、歸休の在鄉軍人諸君には興味多き思出草であらう。

桑の餘は戸口とすれ〳〵にまでのびる。まつたく耕作地の中の島である。

この海沿ひの農家では、周圍の自然林と住居との間に可成りの餘地がある。或は竹藪の中の途を餘ほど辿らねば母屋まで達しない家もある。この土地の餘裕は何から生じて來るのであらうか。

それは海が與へる餘裕である。百八九十戸のこの海沿ひの農村では、一戸夫婦と子供或は老人との三人で、七八段の耕作地から作物を取り上げる純農者は四五戸しかない。他は半ば海によりかゝつてゐる。私の生れた百戸たらずの山地の農村では、純粹の地主は一人もゐない。皆なが耕作者である。總て地上で働かねばならぬ。海などは一生見ないで死ぬ人は大多數である。

山地の純農者等は夏季、耕作物の自然の成長をまつ間に、餘業に全力を擧げる。夏季二三回つゞけて繰返される夜の目も眠らない養蠶の苦しさは、その實驗をもたないものには全く解せられない事であらう。その間を、海沿ひの人々は海上へ出掛ける。冬季、山地の農人等が雪の中で殆ど穴居の如き生活で、來るべき時期の準備をしてゐる間にも、海沿ひの農者等は同じく海へ出掛ける。

山地の農者等の全力を擧げる餘業たる養蠶も、實際は勘定には合はない。合はないやうにされてゐる。合はないやうに出來てゐる。それでも人々はせめてそれをなさずにはゐられない。徒勞と知つても働かずにはゐられない。海上に出掛ける人々にとつても、最早以前のやうな利獲はない。大仕掛な、大資本の漁獲が行はるゝやうになつてから、その魚群の進路さへ變更せしめてしまつた。小さな一時的の漁業者等は農閑に船で出ても、地曳をしても屢々徒勞に終ることがある。けれど、徒勞と知つても出掛けずにはゐられない。

フランスの作家ピエル・アンプは、地中海の岸で薔薇を栽培してゐる人々の生活と、その薔薇からしぼり出さるゝ香

水がやがてパリ、ロンドンなぞのサロンで薫ぜらるゝ有様とを對照せしめてゐるが、薔薇をつくるなぞといへば、それを風流かなぞの如く考へてはいけない。それは丁度、桑の葉の緑が果しなくつゞくのを見て、それを作る人々がいかにも爽快なのんきな生活でもしてゐるだらうと思ふと同じことである。一つの繭が出來るまでも、その行末とを考へて見るがよい。

日本の山地で桑の葉を育てる人と、その桑の葉から繭をつくらせる人とは、太平洋を隔てた彼等の市場での、若しくは所謂交際場裡での或る連中の一顰一笑の及ぼす直接の影響を受けずにはゐられない。市場の變動は、流行の變遷は、直に電報で知らされる。その電報で利益を得るものは幾多の中間者であり、その電報の直接損害を負はされるものは、日本山地の一度も海も見たことのない養蠶者等である。我々は幾度びこの電報を口實にして、一夏中の勞苦を無駄にしせしめられたことであらう。毎年の夏季の末頃になつて、太平洋の彼方からのこの電報を氣にしてゐる者で、日本の中央山地の人々くらゐなものはないに異ひない。ところが、その電報は必ず來る。少くも來たことになる。そして、それが非常な一時的損害になりさうな場合に救濟を受ける者は、中間者のみだ。製絲業者等のためには一國の選良等が當局へ向つて運動を開始する。けれど、製繭者等は自分等の勞力を一切無償で提供せずにはゐられない。

アメリカ大陸の市場と、太平洋に漂ふ島國の中央山地とを結び付ける一線の上には無數の中間者がある。そしてこの線をめぐつて現代歴史の悲慘と罪惡と滑稽との大きなロマンが廻轉されてゐる。たゞ欠けてゐるのは、このロマンを具體化し、我々の住む現代歴史に深酷な批評を加へるロマンスイエのないことである。いや現在の日本文學には、ロマンなる語の日本語すらもない。

山地の農人の餘業と、海沿ひの漁者の餘業とを差引いた、本業の農業にいたつては、ほゞ兩地とも同じ狀態である。

假に一反歩から五俵乃至七俵平均六俵の米がとれるとする。その半分は年貢米として差引かれる。七八反の耕地からの小作者の實收は廿俵乃至廿七八俵である。一俵十五圓とすれば三百圓乃至四百廿圓の年收、しかも三人がゝりの仕事である。これには肥料代も拂はねばならぬ。これでは到底やりきれない。そこで一反歩七俵取りから三俵半の年貢米を二俵半にさげても現在では借り度くない。返地が頻々としておこる。返地して、その地主へ年給二百五十圓で雇はれる方がまだましである。三人で七百五十圓にはなる。

ところがこの返地が集つて、千俵取りの耕地となつた。それを耕すのに十四五人の人手を借りた。年給と、食料と、肥料と、租税とで、計算はどうにかいつたとしても、其處へ一二三町歩の手の屆かない不作地をつくつてしまつた。此樣な不作地と掛爭上の不作地とが地方によつては年々增加して來る。

いづれにしても現在の××では、年々我々は一層の窮乏のなかにはいつて行くより仕方がない。現在の耕地は我々にとつて最早や年々「死に行く大地(フーテル・キ・ルム)」である。大地に生るゝ人々を生かし得ずして、大地から離れしめるだけである。この組織を改めない限り何が出來得よう「神々のうち最も偉大な、疲勞なき、汚れなき大地」も、現在の我々にとつては疲れたる殆ど廢土に等しきものとなつた。しかもその胸の上で生れ、育ち、それを愛しながら、心から愛するを得ず、幾代の膏血をそゝぎながら、それを捨て去らずにはゐられない。若しくは、その死に行く大地の上で年々爭ひ、疲れ、やがて倒れて、再び大地の胸へ身を沈める如何に多くの人々がゐることであらう。

その實際の數字は、今より滿三ケ年以前、大正十年末の農商務省の調査では、純小作農の戶數百五十五萬四千六百六十七戶、一家平均五人として、約七百八十萬人、自作兼小作農の戶數二百廿三萬千九百二十四戶、約千百萬人、併せて千八百萬人餘、これに純自作農、百六十六萬九千九十戶、八百三千萬餘を加へれば、二千七八萬人、三千萬人に近き人

々である。無論これには耕作に從事せざる純粹の地主は加はつてはゐない。全くの農業者だけである、殖民地を除いた日本の總人口の半分、或は過半に當るのであらう。

處々に輝く都會地を取繞いてゐる四方の黑地の上では、刻々にこの大多數の人々が、大地への愛と大地への嫌惡と、自己を生んだものゝ胸の上で生死の爭ひをして、喘いでゐる。×××××を改廢せざる限り、この苦鬪は層一層に絶望的になるばかりである。さうだ、現在の對人間の組織と、對自然の組織とを根本的に改廢せざる限りは、我々は次第に冷たくなりゆく死土の上に、最後の時期をまつてゐるばかりである。

最も氣紛れな大自然を合手にして、その胸の上で生死をかけて働いてゐる人々、この自然は最も合理的な手段より以外には受付けない。自分の思ふ通りの經過をとらねば、何物をも生かさない。自分に從つて自分を利用するものゝみを生かして行く。自然に對しては人間同士の間に行はるゝ對抗手段では解決がつかない。反抗すればひどい復讐が來る。服從しなければ思ふまゝの我儘を振ふ。我々が手を束ねてゐる上を、自然は濶歩し、蹂躪して通りすぎる。このむつかしい自然を合手に夜の目も眠ずに幾代とも經過して來た人々の上に、更に人爲的な不合理が、××××が臨んでゐるとすれば、その苦鬪は言語に絶したものとなるのである。自然と人間との二重の脅迫の間に、我々の過半數の人々はあがき、もがいてゐる。我々は半身を板ばさみにされて苦しい叫びを擧げてゐる。

對自然の現代的合理的手段を講ぜんとすれば、人間同志の現代的合理的組織を立てるより他に途はない。

燈火の輝く都會地で、しばしの暗黑を忘れてゐる人々は、それを取繞いて四方に廣がつてゐる大地の上で、組織を持たずに、無數の同胞が、我々の親共が、自然と人間との厚い暗黑に壓倒せられてもがいてゐることを更に忘れてゐる。

振返つてこの暗黒の中へ歸ることを恐るゝな。今更そこへ歸つて行くことを嘲笑せらるゝことを氣遣ふな。さらに我我が大地から生れた兒であることを常に意識に持つてゐるべきである。

私一個の經驗を語ることをゆるして頂きたい。最近二三年間に、私は地方の農者の直接の文藝表現の可成り大篇なるのを、十篇以上も各地方から送つて來られたものを通讀した。それが大篇長篇であるが故に、如何にしても出版して世に問ふ手段が見付からずに、その人々に對してもまことにすまないことに思つてゐる。と同時に、其等の作品が、取扱ふ題材はいかにもせつぱつまつた事柄でありながら、その表現法がまた如何にも都會的、技巧的、流行的で、本質的、本能的でないことを發見して、何となく中間的なものになつてゐることを悲しまずにはゐられない。併しこれは今までの私の狹い經驗だけのことである。やがて、次第に、大地から拔けだした如き精氣と自信とのある、眞の大地の藝術が生れいづるものと信じて疑はない。

けれど、若し環境の影響といふ事に非常に重きを置いて、現在の農村の環境よりしては、現在までの如き中間的のものよりほか出られないではないかといふ人があるとすれば、それも一應は尤である。併しその現在の環境の中に於て、現在の組織に對する爭鬪力の强さ如何、更にこれを如何にすべきかといふ自信力と理想への力の强弱が、その環境を突破し、改廢する尺度となるのである。例へば、植物の或種族にあつて、突飛變形（ミュタシオン）をなして繁殖するものは、その種族の力が最も盛んである。私は我々の多數の農人等の中に、このミュタシオンをなし得る力がないものと信ずるほど悲觀論者ではない。若しそれがないとすれば總ては絕望だ。文藝は常に、自分等の生命力に對する自信から發する。その自信をもつて、言ひ換へれば生きんがための意力によつて、環境常習的組織を突破して、新境地を開いて行く生命の姿でなければならない。それ故、文藝は我々の生命の端的直接の表現である。

農人のなかに生るゝ文藝も、この生きんとする意志で、環境を突破する、また改廢する力の發現でなければならない。特に現時の農人を取り圍む環境にあつては、さうでなければならない。

現在の農村生活者にも、他の何處にも見らるゝ如く、現狀から脫出を企てる人と、現境にとゞまつて、或はやむを得ずとゞまつて、苦鬪をつゞけて行く人とがある。現實を直視すればするほど、その不合理、醜惡なるに氣付き、それを嫌惡するに耐えずして、我と我が身のなかに引き籠つてしまふか、或は他境への脫出を企てゝしまふかである。農人のなかに現はるゝこの態度の最も極端なものとしては、私は自分の生れた山村に於て、非常に元氣であつた若者が、そして常は克く論じ、克く働いてゐた人が、或時から、不圖だまりこんでしまひ、集會なぞへ出て來ても、たゞ薄笑ひをしてゐるばかりで、やがてその集會へも出席せず、默つてゐるばかり、つひにはいつも一人きりで地面を合手に働くだけで、そして時々稻むろへ身を寄せかけて、破れるやうな哄笑はするけれど、その後はまたもとの沈默にはいつてしまふ、所謂「默狂」となつた二人の人を見た。その他には、何處にも見らるゝ現象の如く、農人生活の痛苦に耐えないで、遠く引かれて出て行つてしまふ多くの人々を見た。或る山村なぞでは、年々戶數が減じて、今は全く廢村となつた處さへある。こんな事は今更擧げなくても、今日到處に見らるゝ現象である。

この脫出者等は、農村にゐて眼前に展開せらるゝ不合理、醜惡を直接身に感じない代りに、振返つて、一まとめにして、自分等の鄕土の上に演じられてゐる慘劇を眺めやつて、更に一層の戰慄を感ぜずにはゐられない。

これは決してルネ・バザンが純粹の巴里生れの文學者等が、たゞ虛榮のための故のみで、農人生活を問題にせず、從つて文藝家として、忠實を缺くといつて攻擊するに當るやうな、それほど田舍離れのしてゐる人達ではないはづである。我々の現在の文藝家の中にも、この農村の脫出者が多少はゐることであらう。脫出後の十年、廿年の都會地の教養

なぞは、我々の身内に流れてゐる幾代もの壓迫せられて來た血潮の響きに比べては、極めて短い經驗である。歐羅巴なぞで有智階級なぞといふものに當るほどのことはない。土の兒が多少の他境の經驗を持つてゐるにすぎないといふだけである。若し我々に多少の經驗教養があるとするならば、それはこの幾代もの血潮の發露表現のために都合よき機關に資すべきであり、脫出し得ざる人々のために、その人々が當然持つべき生命への自信力を增すために向けらるべきものである。

現在の農村にとゞまつて、現在の環境に眞正面に打當つて、狂ほしきまでにも、倒るゝまでも戰つて行かずばならぬ人々の生活こそは、勇敢でもあり苦しくもある。そして、それがために全意識を奪はれて、それがために疲れて、全力の爭ひのために弱つて、他に何等の表現を持つ餘力もなくなつてしまふことであらう。その爭ひの間になされた、幾つかの文藝表現に接する時、私はつく／＼その勞苦の尊さを思はずにはゐられない。よくもかくまでの不合理の生活の中に立ちとゞまつて、敢て脫出もしないで、まともに戰つて行かれることであると思ふと共に、その力に對する自信を最一層强めて行く手段はないものかとしみ／＼思はずにはゐられない。

併し文藝は食糧でもなければ、實彈でもない。寧ろ軍歌であり、軍樂である。ただ時にそれが實彈以上の働きをするものであるといふのである。時に食糧の代りに得られないこともないといふのである。但しこれは作つて與へられたものでなければならない。自然との爭鬪のなかでも、舊組織との爭ひの間でも、爭鬪者自身の胸から出て來たものでなければならない。それを如何なる場合でも絕望の悲歌たらしめてはならない。

海沿ひの農村にも秋が長けて來た。芋畠を隔てた砂丘の上の杉林と、それにつゞく草屋根と、枯れて靡くとうもろこしをすかして、先きの弓に、紺青の一線を太く引きのべた海が、私の籠つてゐる草屋の窓から終日眺められる。

海水浴客といふ奇怪に衣飾つた連中の引上げた漁村は、秋の日を浴びて、靜寂の中に眠つてゐる。波はのびやかなリズムをたてゝ、砂山の麓にまろぶ。豚と鷄との鳴聲のほかには物音一つしない。その靜かな空氣をゆるがせて、波の音は、私のやみつかれた頭の調子を調へてくれるやうに、いつも一定の確かさを以つて、家のなかまでひびいて來る。家の人達は、私に留守居を托して耕作地へ出て行つて了つた。私は自分の生れた家へ歸つたやうな安らさをもつて、活力の除々に身に歸つて來るのをまつてゐる。

風の強くない、日光と海の響との總てをなごめて行くやうな日である。

二、海の叫び

今夜、彼は狂ほしい叫びをあげて陸地めがけて打當つて來るらしい。家の內の闇までもその狂はしい調子に搖れてゐる。何物かに鞭打たれる苦しさを陸へ向つて救を求めに來るやうな、砂丘までもその狂亂の中へまき込みでもするやうな勢で、砂濱一帶にまろび狂つてゐることであらう。

併しその狂亂のなかにですら一定のリズムがある。人間の集合地たる都會のどよめきの亂雜さとは異つて、この狂亂のなかの定調が、不思議に、大地から足を離した亂雜の人間の胸に一つの基調を與へてくれる。これだけはいつも疑らない確かなものゝ表現樂であることを教へる。變轉極まりなき人事の中にも、必ずこの波の響きの如き、いかなる變亂を通じても、常に定調を備えた一つの法則があるに違ひない。

或時はそれに觸れた悅びを感じ、また或時はそれを見失つた悲しみを味ふ、この悲喜の間に人は疲勞を覺える。けれ

と我々はこの人事の中に横はる自然の必然性を求むるためにこそ努力もし、勞苦をも重ねるのである。「藝術は自然の模倣である」といふ舊き言葉も、解釋の仕方によつては、現時の我々の心持を現はさない事はない。自然の中に横はる如き必然の法則を、人事の中に見出して、常に變らざれども、常に新たなる社會の表現相を生々と持つて行くことである。

けれど、海はまた旋風の源泉地でもある。ことに上總の海邊は、時々この旋風を胎みいだす。最初は、砂の上を戯れまわる、方一（尺）とはないほどの旋風が、仔犬のまろぶやうにくる〱と、小砂をまき、濱ひるがほの葉をちぎつて、砂丘より砂丘へと、亘つて行くのであるが、いつしかそれが水の上へ出ると、忽ち旋風の眞中へ、潮水を捲き上げて、旋轉することも一層烈しくなり、一條の龍卷と變じ、見る〱高く伸びて、空に向ひ、太さをまして、海上を暗くし、漁船を撒き散らし、深い自信あるものゝ如く、見る〱大東の突角を繞つて、更に遠く洋上に浮びいで、犬吠岬を目掛けて突進んで行く。――翌日はそれが海陸の暴風として報導せらるゝやうな現象となつてしまふ。

生きて動く自然、我々を載せて晝夜運行してゐる地球の大魂は、瞬間もやまない活動をなして、時にはそれが非常な爆發となつて現はるゝ。常に變らざる如き平調を備えた海が、瞬間にして旋風を生み出す。我々を取卷いてゐる大きな共通の環境は四方から迫つて、人間生活もその中に卷き込んで、それと同じ方向に、同じ一つのプリンシプルの下に働かせようとする。或時は躍進を、或時は靜平を我々の上へ强ひる。

我々は今共通の「世界苦」の波をあびて、その中から、倒壞と、解脱との倒影をまつこうに受けてゐる、仰いでゐる。その解脱、解放、新生の創造へ全力を傾けてゐる。けれど、その中から時には疲勞と混惑とが生ずる。自然はさらにその疲勞し混惑したるものに整調を與へ、平靜を供し、やがての躍進を期せしむる。

黒い波の動亂と音調とが大地を傳はり、空氣を搖がして、竹藪の中の草屋の小部屋の中までも侵入して來る時、それ

を五體に感じ、心胸に徹せしめ、流木の波間に漂ふ如く、全く身心を自然の前に投げ出してゐるものにあつては、その興波の無數の手は、彼を自在に運び動かすことが出來るのである。

月夜がめぐつて來た。

「夜深くして遊游三萬里」といふ心持がする。岬角の一端に立つと、一つの黒影が枯草の上へ小さく落ちるのを見る。無限のひゞきと、無限の感じとが上下兩界の太虚を包む。月といふ空虚の一塊。地球に比してたゞ重力が六七倍だけ輕いが故に、有ゆるものが爆發し飛散して、一つの生物もその胸上にとゞめて置けなかつた。死魂の放つ燐光の如き冷たい光、この屍體の光、死光が今我々の住む、生物の住居たる地球の表面を輝らしてゐる。月に對するのは死に對するのだ。死の殘骸に對するのだ。生物は失せても、その死宅は宇宙から姿を消すことが出來ないで、永久の死光を我々の上へ浴びせかけてゐる。

月光を浴びて人が狂ほしくなるといふのも、この死光を浴びてゐるからだ。月光を仰いで靜寂を感ずるといふのも、この死光の仕業である。意識せずして、死の不意打ちに逢ふからである。我々が晝間空に消えのこる月の片影を見て、いかにもはかないもの丶如く思ふのは、晝間の月は光なき死の殘骸、殘骸のさらに殘骸であるからである。我々の生氣失せた肉體の飛散するまでの暫の間の姿が、空中に高く描き出されてゐるからである。

我々の地球がいま、何とかして現在持つてゐる重力を六七倍減じたとすれば、我々の地球もまた月と同じ運命となつて、有ゆる生物が飛散し、地球の表面は死岩の魂團となつて、その殘骸が默々として、永久脱れられない一定の桎梏の範圍の内を、虛空の中で、年々廻巡をくりかへしてゐるにすぎないでもあらうか。

月に對した時、人は無意識にこの死の豫感に打たるゝ。そして生に執着すること强き人が、不意にこの對照のもとに身を照らし出ださるゝ時に、取りかへしのつかぬ物狂ほしさとなるのである。そして我々は死者と狂者とに對した時、何としても抗し難い一種の必然力に打たれずにはゐられない。我々自身の日常生活にも、この死と狂とが常に交錯して影を投ず。たゞ我々は生を信じ、生の意力に身を委かせて、その意力の更に强からんを期してゐるだけである。

併し斷えず生と死とを繰返し、生と死とを對照せしめつゝも永久に存在する自然の中に生きてゐる我々人間は、同じく斷えず死を追及し、斷えず生を要求しつゝ存續して行くのである。時代より時代へ、組織より組織へ、壞倒と新生とを要求しつゝ進んで行く。現在我々が浴びてゐる「世界苦」もまさしく、この壞倒を期し、新生を熱求する一大轉回期である。總て倒壞に屬すべきものは、いかに强大を誇つてゐても滅びずには置かない。いかに微弱の如くに思はれても純眞の生は巨光となつて世界を照らさずにはゐない。

月はいま波の打寄する砂場に近く眠つてゐる小さな漁村の家々の薄黑き屋根の上を照らして、その薄光は纎細な無數の糸となつて、屋內へ忍びこみ、無數の小さな夢魔となつて、眠つてゐる人々の胸の上に跳り、死の影を空中に彫みいだし、脅かす。いまこそその死球は天に沖して、冷笑の極みを我々の眞上より浴せかけてゐるけれど、そして波はその冷たさに壓せられて、頭をも昂げ得ず、四方にひれ伏して、死光が思ふまゝに自分等の脊上で跳るにまかせてゐるけれど、この死の女王が一度び西方へ傾き走りはじめると、天地に一種のさわめきが起る。波上に微細な無數無限の微笑がきざみいだされる。地平線上が除々に生色を呈して來る。潮の色が紺青に一刷さつとぬられる。眞夜中の波のうめきが、除々に囁きとなり、歎語となり、やがて凱歌となる。そして眠つてゐる人々を一齊に目醒ますやうに、もうよいから起き出でよと告げるやうに、歡呼して波は漁村の軒下まで打寄せて來る。

何人でも廣漠たる水の曠野を前にして立つた時、四時やむ時なく陸地へ寄せて、四方からこの島國の岸邊へそれ等の不盡の偉力を表示しつゝ迫つてゐるのに接した時、何人でも、これ等の無限の水力があまりにも我々の住んでゐる陸上には直接の關係を及ぼしてゐないのに氣づくに違ひない。我々が海を利用するのは、その上へこちらから出掛けて行く時だけである。フランスの或科學者等が企てたやうな、サハラの大砂漠へ海水を導き入れるといふやうな計畫でないまでも、この無限の動いてゐる水力を何とかして我々の陸上へ用ふる工夫が發見されないものであらうか。

こゝの海邊は比較的廣く、砂場が遠くつゞいてゐる。その砂の上へ、白日の眞下を、藍青色の波が盛り上り、捲き上つて、それが一時にその白砂の上へ折れかゝり、さあつと崩れて、陸上へ攻め上る。この力を、この不斷に我々の眼前へ來て表示してゐる力を我々は利用し得ずして、愚者の驚嘆をもつて眺めやつてゐるばかりである。

海はこの力を利用せよと日夜我々に告げてゐるやうに思はるゝ、しかも空しく告げてゐるやうだ。ミシユレはいつてゐる「大地は默し、太洋は語る。太洋には一の聲がある。彼は遠き天體に話しかけ、その行動に莊嚴な言葉で應答する彼は大地に、岸邊に、悲愴な語調で話しかけ、それ等の反響と對話する。或は悲しげに、或はをどすやうに、太洋は叱りつけ、また吐息をつく。彼は殊に人間に向つて物を言ひかける。太洋は創造が已が力の中に初まり、繼續する坩堝であるが如く、その生きた雄辯を持つてゐる。幾百萬、幾千萬となく彼より生れ出づる生存物、それは彼の言葉である」。我々人間の眼前へ伏しまろんで無限の巨大な動物が、四時やむときなく呼びかけて、その通話を求めても、そしてその持つてゐる無限の力の利用を求めても、それを示しても、我々はいまだそれと通話し、それを利用し得ずにゐるのである。我々の科學はいまだ海と陸との直接の連聯をはからない。

ミシユレは更にいふ「太洋の言ふことは何か。太洋は、永久の變化たる生を語る。太洋は流動の存在を語る。太洋は地上生活の硬化したる野心に恥を與へる。

太洋の語るのは何か。不滅（イムモレタリテ）である。自然の最下に於ける生命の制すべからざる一の力、さればこそ靈の中に於て何よりもさらに高き力。

太洋の語るは何か。連帶性（ソリダリテ）である。個人にあつて、その樣々な要素の間に存在する迅速たる交歡を我々は受け入れやう。多數生存者を、ユマニテの一體に結合する至上の法則を我々は許容しよう。」

太洋の連帶性（ソリダリテ）を忘れて、この無限の領土にさへも領域を劃せんとし、この差別なき藍青の一色にさへもさまぐの國色を染めいださうとあせる。その中から人間の種々なる慘禍が生じて來る。そして太洋の話し掛くる言葉を誤讀し、若しくは了解し得ずして、硬化さる地上の野心を、この太洋を中にさしはさんでさへも、相互から照し合はさうとしてゐる。

海洋の誤用がたしかに近代文明の大なる欠陷である。殖民と交易とは常に國旗をかゝげて行はれた。國旗の下には常に資本があつた。國旗は資本の爭鬪のしるしに用ひられ、資本の爭ひは、つまり國際間の戰爭であつた。そしてその爭鬪の場處は海洋が提供せられた。戰鬪に習らされた者には海洋の呼び聲もつねに戰の叫であつた。海陸の交歡をさへ、水陸の爭ひとばかりに解してゐた。それ故海が胸を開き、手を擧げて、連帶性を示し、調和を求め利用せられんと願つても聽きわけることが出來ない。

カルタゴの征服者、ロマの勇將と、そのカルタゴの囚人、被征服者とは共に孤島の岸邊で貝を拾つて生をつないでゐた。彼等は最早や忘恩殘虐なロマも、破滅轉壊のカルタゴも忘れてしまつて、善良な互救の友として生きた。彼等は共

に海によつて倚存してゐることを痛切に感じたからである。そして共にその海潮音のソリダリテを默をもつて讀むことが出來たからである。

何んでも大自然に倚存してゐる人間にすぎないではないか。そして互救の友として生きるより他に途のないものではないか。然るに硬化せる野心に囚はれて、反噬を事とする。自然に還るといふよりは、領土を自然に返すがよい。そしてその共通の環境のなかに於て、重苦しい虚構の過去を捨てゝ、互救の友として生く可きである。

今日は海は連日連夜の空しい、手ごたへなき、陸地へ向つての交歡を求むる呼び聲に疲れたかして、灰色空の下に、音もたてず、遠く遠く引き退いて、遙か先きの方から陸地を眺めやつてゐる。頑强な默せる大地の目醒めをまつやうに、さらに、その地上の人間が早く眠を醒まして、海の語るのに耳傾けるのをまつやうに、しづまりかへつて、凝つとしてゐる。

併しこの疲勞した海は、疲勞した人間の如く、暫しの休息の後には、更に勢を盛りかへして來るのである。灰色を追ひのけ、垂れ下つた雲をかき破り、藍青を湧き返らせ、一齊に頭を昂げて、活躍をはじむるのである。そして、この海がその休息と昂進とをもつて、我々に語ることは何か、それは少くも不斷のプログレと、或時期に於ける躍進とである。

長風行

野上彌生子

からから――ツ、からから――ツと云ふ冴えた滑らかなものゝ響で目が覺める。これは別莊の前の河口に碇泊してゐた船が、積荷を終へ、朝の滿潮に乘じて出帆しようとして帆を繰りあげてゐる時の轆轤の響である。この響を聞いてゐると、これ等の小さい轆轤が持つてゐる『蟬』と云ふ名前が興味深く思ひ出される。轆轤は帆綱の上に帆柱を周つて高く取附いてゐる時に最もよく蟬である。昔の船乘たちは、その恰好で陸の高い樹にとまつて鳴いてゐる昆蟲を聯想したのであらう。而して今の率直な面白い命名も、恐らくその聯想から生じたのであらうと思ふと、からから――ツ、からから――ツと云ふ響まで、何かが朗らかに歌つてゐるやうな氣がする。廊下へ出て見ると、大きな白帆が庭の木立を掠めるやうにして悠々と沖をさして出て行く。櫓の音が聞こえる。これ等は大抵大阪か、門司か、日向へ通ふ船である。

今年の一と夏を送つた故鄕の家は、山から流れて來た二つの河が、合してU―灣に注がうとしてゐる港口のデルタの上に立つてゐるので、これ等の入り船出船の光景は、朝晩、私たちの目に最も親しい見物となつた。河口が深くないので餘り多きな船は奧までは入らない。六七十噸位までのスクーナー型が多い。それが却つて大艦や巨船の騷々しく群がり寄つてゐるよりは、落ちついた古風な情趣を漂はせてゐる。船と左右に開く腕を擴げた美しい江灣が暖かい愛でびつ

たり結びついてゐるやうに見える。船は鳥が巣を出て行くやうに元氣よく出て行く。而してまた鳥が巣に歸るのを樂しむやうに悦んで歸つて來る。起重機や、コンクリートで堅めた棧橋や、石炭のもの凄い黑煙や、煤の中では決して見られない古い港の詩が其處にある。私たちはこれ等の船を望みながら天文年間にまだ長崎も平戸も知らなかつた葡萄牙の船が、初めてこの港に入つて來た時代のことをよく話題にした。大友宗麟が義鎭と云つて府内（大分）の城にゐた頃である。——U—町は隱居後の居城——葡萄牙人は城主の命令に依つて此處に船を殘して、陸路府内に赴いた。宗麟の治下に現はれた南蠻の特殊な文化——葡萄牙人の居留地や、貿易市場や、羅甸語學校や、壯麗な天主教會堂に飾られた繁榮は、すべてこの港に投錨した一艘の小さい船から吐き出されたものに外ならなかつた。その意味に於てこの小さい港は、西歐の文物を日本へ導き入れた最も早い、長崎や平戸や乃至横濱の何處よりも早い不思議な扉として、日本文化史の上に名譽ある地位を要求することが出來る。然かも、大友氏の滅亡はこの地方から一切のきりしたん臭いものを剿絕させて、往時の珍しい優秀な發達を忍ぶ唯一の遺物は、紅毛碧眼の居留民から種子を貰つて植ゑたと云ふ口碑を持つてゐる南瓜ばかりだと云ふのは何と云ふ皮肉な記念であらう。

口碑の眞僞は別として、附近一帶の砂地に產する南瓜は素派らしく大きくて美味である。『セミ』の響と共に帆を張つて出掛ける私たちの親しいこれ等の船の中には、南瓜をこの季節の主な積荷としてゐるものもある。

小さい甥たちが『ぱん〳〵船』と云ふのを何のことかと思つたら石油發動機船のことであつた。これも面白い無邪氣な命名である。この船が石油を焚いて動き出す時には、ぱん、ぱん、ぱん、ぱんと太鼓を叩くやうな——それも少し皮のゆるんだぼろ太鼓を叩くやうな高い響をあげる。最初この音だけを聞いた時には、私は對岸の小さい森の中にある氏

神の祇園神社にお神樂でも始まるのかと思つた程であつた。小さいのは二三十噸、大きくとも五六十噸を出ないこれ等の船は船體を灰がかつた青色に塗られて、昔ながらの白木の小舟や潮風と波に洒された帆前船の中に、目新しく輕快に見える。これはすべてが漁船で、彼等の獲物を町の魚市場にかけるために近くの漁村から集まつて來たのである。私たちが子供の頃見馴れた三挺櫓四挺櫓の勇ましい船は殆んどこれに變りつゝあるのださうで、日向寄りの或る島の如きは、一つの島で千何百艘の石油發動機船を持つてゐると云ふ。

この石油發動機船の中に、船尾から丁度一枚の障子を横たへた位のがつしりした格子の如きものを、船體から外へ向つて長く突き出してゐるものがある。これは地方で『くますゞ』と稱してゐる魚を突くための足場で、これ等の裝置を持つてゐるものは悉く『くますゞ』突きの船である。この魚は鮫類の一つで、先細りにステッキのやうに伸びた長い頭から尾まで殆んど二間に餘るほど大きい。從つて彼等はこのあたりの美しい靜かな海の棲み手ではない。

『くますゞ』の漁場として近傍の漁夫たちに知られてゐるのは玄海灘である。漁夫たちは漁期が來るとこの灘に潜んでゐる敵を襲撃するために周密な準備をする。銛が研がれる。それに結びつける投げ繩も、少しでも弱はつてゐれば新たにされなければならない。浮標の樽の吟味も必要である。斯うして完全に武裝された上で、漁船はその戰場に向つて勇敢に突進する。僅かに四五十噸の船が、玄海灘の、而かも秋から冬にかけての最も荒い波の上に浮ぶと云ふことは、單にそれだけでも普通の者には恐怖なしに考へられることではない。漁夫たちは其處で殆んど海に露出して戰ふのである。波を切つて獲物を追ふ時、彼等を支へてゐるものは最早や船ではない。船尾から遠く突き出た例の格子の足場——太洋の怒濤の中では一本の芦以上でもないさゝやかな臺のみである。けれども彼等は百姓が畑で鍬を使ひ、職工が工場で機械いぢりをしてゐると同樣の平氣さで其處に立ち、同樣の熟練と熱心で銛を投げる。

併し私たちは彼等の勇氣や見事な手練に喝采する前に、これが決してスポートでなく、彼等のたつた一つの生活、その日の糧を得るための命懸けの眞劍な奮鬪であることを忘れてはならぬ。この夏私の聞いた一つの話はその點に於て意味の深い物語であると共に、彼等がどんな荒海をも自分たちの軒先かそこいらの横町位にしか思つてゐない大膽さを表はしてゐる。

　昨年の秋の出來事であつた。灘に出てゐた漁船の一つが遠くの波の間に、一尾の大きな『くますゞ』の浮いてゐるのを見つけた。勇み切つた若者たちは逸る心を抑へて足場の上に突つ立ち、銛を掴んだまゝ適當な距離に近づくまで靜かに追つて行つた。船が動くほど標的も前に泳いで行くので直ぐには機會が來なかつた。今少しで銛が使へると云ふところまで進んだ時、彼等は不圖一艘の他の漁船が、自分たちの獲物の方へ横合からまつしぐらに進んで來るのを認めた。彼等は其處に浮かんでゐる『くますゞ』は、既に此方の船が追つかけてゐると云ふことを知らないのであらうか。それ位の鑑別の出來ない男が灘の波の中で暮らせる筈はなかつた。彼等は承知の上で、横取をしようとしてゐるのであつた。これは漁夫仲間で第一義の誓約として守られてゐる獲物の先取權を侵すものとして、此方の船を非常に怒らせた。同時にまた彼等は向の船の亂暴な突進が『くますゞ』を脅やかして逃がして仕舞ふやうなことになりはしないかを怖れた。否、向の船はそれ以上の無茶をやつた。最初から仲間の誓約を無視した彼等は、一分でも早く獲物に襲ひかかることに依つて自分たちの權利を具體的に示さうと企て、まだ遠くの方から銛を投げた。あせつた銛は勿論屆かなかつた。『くますゞ』は驚いて沈んだ。此方の船はそれを見てます〳〵腹を立てた。四人乘り込んでゐた若者のうち、年嵩の仙は人一倍利かぬ氣の男であつたから、終に長と云ふ自分の弟を連れて、二人で傳馬に乘り込み、談判のために向の船へ漕ぎつけた。それ程の横紙破りをやるだけに、彼等とても不敵な漁夫の揃ひであつたが、それでも仙の條理の立つた抗議には

勝てなかつた。で結局、若し今一度『くますど』が浮かんだならば、それは二艘の船の共同の獲物としよう。但し、第一の銛を刺した方の手柄を重んずる意味で、四分六分の割合で分けようと云ふ約束が出來た。仙はこれで滿足して、乘つて來た傳馬で自分の船の方をさして歸りかけた。八九間も漕いだ頃には彼方に自分たちを待つて留まつてゐる本船と後にして來た船との中程に來てゐた。丁度その時であつた。彼等は本船の右舷の直ぐ前に、例の『くますど』が今一度その大きな姿を現すのを認めた。船に殘つてゐた二人の若者も元よりそれを見逃しはしなかつた。二人は今度こそ邪魔の入らぬうちに仕留める氣で銛を振つた。二つの銛は空に跳る長い繩を持つて、劍を頂くバシリスクのやうに前後して『くますど』の上に飛びかかつた。一本は左に外れたが、一本は見事に獲物の脊中に命中した。仙と長は傳馬の中から賞讃と激勵の叫び聲を上げた。これに依つて自分たちの分前の方が確かに一割多くなつたのも愉快であつた。向の奴等の鼻を明かしてやつたのはそれ以上に愉快であつた。で、二人は大得意で、後の船が周章てて獲物の方へ進んで來るのを嘲笑と侮蔑で眺めながら漕いだ。が、次の瞬間二人は喫驚した。後の船は明らかに彼等の傳馬を目がけ、衝突をたくらんで襲つて來た。二人がそれに氣がついた時には、進路から逃げ出す暇がなかつた。斯うして五十噸の石油發動機船は子供が道ばたの石ころを蹴飛ばすやうに彼等の小傳馬を蹴飛ばした。傳馬は轉覆した。長の方は彼等の本船に救はれたが、仙はその儘波の下に沈んだ。

因に、『くますど』一尾の價は、その町の魚市場では最高六十圓、夏の安い時には六圓もしないのださうである。

この物語のやうな死方をした漁夫はたんとはないかも知れないが、——決して絶無でもない——海上の不意な不可抗力に直面してゐる漁夫の命は如何にも果敢なく無造作である。この小さい江灣の左右に並んでゐる十ばかりの漁村の家家について見ても、家族の男たちの一二人の墓を、玄海灘や朝鮮沖や、乃至土佐、日向の海の下に持つてゐないうちは

恐らく一軒もないであらう、それ故漁村から來てゐる召使達に對しては、うつかり男親や兄弟のことは尋ねられない。私は自分で二度氣の毒な經驗をしたことがある、釀造場に働いてゐる男の一人に、ふとした事から父親のことを聞いたらば、彼は父を知らなかつた。彼がまだ幼い頃朝鮮の海へ出たきり歸らなかつた、女中の一人は父をも兄をも二人ながら海で失くした娘であつた。シングの海を取扱つた有名な一幕物の悲劇の如きも、此處では寧ろ平凡事である。

滿潮にはこれ等の船を容易に入れる河口も、汐が引くとひどく淺くなつて、別莊の前の如きは一面に廣い砂利の干潟になる。此處で凧をあげることはこの夏私たちの最も樂しい遊びの一つとなつた。奇妙な習慣に依つて、この町では凧揚はお正月の羽根や羽子板に伴ふ遊でなく、必ず盂蘭盆の季節のものとされてゐる。東京のことしか知らない私たちの三人の男の子は、最初彼等のために三つの凧を親戚の伯父さんから貰つた時にはおかしがつた、本統を云ふと、都會で家の中に圍はれ勝ちに育つて――寒い時分には尚更――お正月の凧と云つても奴凧を廊下で振り廻すか、小さい一枚凧を庭先からあげて見た位の――それも決して滿足には上らなかつた――經驗しか持たない彼等は、凧あげの眞の愉快はまだ知らないのである。

夏休み一杯、せめて試驗と敎科書の幽靈から解放し、都會の日常生活に缺けてゐる强い野生の樂しみのすべてを味はせ度いと望んでゐた私は、彼等に早速凧揚をすゝめた。十二になる二男は凧は容易に揚るものではないと信じ込んでゐた、寧ろ飛行機に乘つた方がましだと彼は云つた、私はそんな筈はない、あの干潟の上なら母さんにだつて揚げられると云ふと、彼等は驚き悅んで叫んだ、お母様と一緒ならあげて見てもいゝ。

私は三人の子供を連れて干潟に下りた。私にしたところで決して凧揚に自信があつた譯ではない、けれども揚げて揚

がらない筈はないと思つたし。一つにはまた、子供たちと珍らしい遊びをして見るのが樂しかつた。私は三男の桃太郎を描いた凧を取つて、東を後にして上流の方へ向いて靜かに手繰りかけた。この位置は沖から吹いて來る風を凧の表にまともに受け得る點で最も理想的であつた。凧は初め干潟の上を一間ばかり離れては左右に搖れ、飄々として危く落ちさうになるので、私はその度に出鱈目に糸を手繰つたり伸ばしたりして、どうにかして落すまいと骨折つた。今度こそ大丈夫揚がると思つてゐるうちに、急に安定を失つて、くる／＼と舞つて落ちて來る。糸目を調べて見ると、右の肩に吊り糸が心持ちたるんでゐるのを發見したので、その糸に結び目を一つ拵へて見た。調子がよくなつてする／＼と素直に揚つて行つた。風も十分に吹き出してそれを推し上げた。さうなると凧を揚げてゐるのでなく、凧の方からぐん／＼引つ張られてゐる感じであつた。手に握つた糸に集まる空氣の壓力の强大なのに驚かされた。私は子供よりは自分で面白くなつた。三男に糸を渡した後も、少しかしげたりすると大急ぎで自分の手に取り戻した。

その時分には二人の兄たちの凧もどうにか成功してゐた。二人は終に私の凧と競爭しようとした。斯うして私たちの三つの凧は別莊の木立を越え、屋根を越え、三角洲の上のすべての森と建物と、それを圍む水の上に高く、南國の午後のきら／＼した大空を糸の續く限り揚がつて行つた。

この日以來お天氣で風さへよければ、子供たちは汐の引くのを待ち兼ねるやうにして干潟に下りた。本宅の方からも小さい子供たちがめい／＼の凧を持つて參加した。私は彼等の監督者のやうな顏をしてその中に交りながら、いつの間にか乾度誰かの凧に手を出してゐた。或る日のことであつた。私は三つになる甥のために萬里高風と書いた四枚張の字凧をあげて見せようとした。凧が大きいのと風があまりなかつたのとで旨く揚がらなかつた。其處へ向の河岸から小舟で水を渡つて來た弟が、舟を下りると笑ひながら近づいて來て、代つて糸を取つた。彼は子供の時から凧あげの名人で

あつた。私は小さい甥を彼の父親に托しておいて、凧揚げの群から離れて干潟の水たまりで水いぢりをしてゐる親類の女の子たちの方へ行つた。か、五分間もたゝないうちに私の持て餘した凧が頭の上に高く、先刻から揚つてゐた子供たちの凧を凌いで揚つて行くのを見た。子供たちは又決してその位置を譲るまいとするらしく、凧の群が俄かに青空の中で動搖してその高さを爭うた。か、『萬里高風』は彼等には目もくれない風で、悠々と周圍の凧を突破しながら、最も高く、大きな太陽の直下に一片の輝く雲となつて留まつた。子供たちが口惜しがつても仕方がなかつた。彼等の凧の糸は、その四枚凧に附いてゐる糸ほど長くはなかつたのだから。そのうちに私は小さい力ちやんが泣き出したと云ふ子供たちの注進の叫び聲に驚かされた。駈けて行つて見ると弟はいつの間にかゐなくなつてゐて、揚げつ放しの凧の糸のみが、小さい息子の洋服のバンドにしつかり結びつけられてあつた。私は吹き出しさうになつた。けれども笑ひどころではなかつた。十分風に乘り切つた四枚凧の引力は、三つの小さい甥の身體には、變な、目に見えない怪物の手と違はなかつたのであらう。私はベソをかいてゐる彼をすかしながら、また彼の若い父親の腕白小僧のやうないたづらを惡口云ひながら、バンドに纏れてゐる凧の糸を苦心して解きにかゝつた。

O―市の親戚を訪問した良人から電話で明日畫を見に行くから出掛けて來いと云つて來た。私は一緒に行く筈になつてゐた弟と二人で、次の朝一番の汽車に乘つた。

今度國へ歸つたらば竹田一派のよい南畫を出來るだけ澤山見ようと云ふのは私たちの計畫の一つであつた。それらの傑作は決して他から來たものではなく、往時の故郷人の手に依つて作られ、南畫の名を飾り、從つてまた何處よりもこの附近の地に多く貯へられてゐる作品であるにも拘らず、それを親しく見ようとしてもローマでヴァチカノを、或はパ

りでルーヴルを、乃至マドッリドに行つてプラドーでヴェラスケズやゴヤを見るやうな譯には行かないのであつた。それはこの土地に限つたことではなく、日本では藝術上の立派な作品を公共の建物の中で自由に樂しみ味ふ設備は何處にもないのだと云ふ人があるかも知れない。併し美術館や博物館の缺けてゐるところにも私たちは代用物を見出せる。優れた繪畫や彫刻に飾られた寺院の如きはそれである。けれどもこの地方にはその代用物さへない。昔寺にあつた傑作は皆んな金に代へられて仕舞つたから。斯んな事情の中で豐後の南畫を見ようとするには、個人の蒐集家に就いて彼等の秘藏品を見せて貰ふと云ふ不自由な方法しか殘されてゐない。就中O—市の舊家として知られてゐるN家と、H—町の富豪で杏雨の本家に當るH家は、他の珍寶と共に南畫の蒐集を以つて聞こえてゐるので、兩家の畫を一見することは、—竹田や草坪の傑作を一時に豐富に見得る點で最も便利であり、同時にまた兩家の畫を見ないで南畫の最も優れた畫を見たとは云へないのである。

私たちは最初N家を訪ねる手筈になつてゐた。私と弟は途中で親戚の家に寄道をしてゐたので、その古風な藥屋の店に着いた時には、約束の時間を少し遲らして仕舞つた。私たちは落ちついた暗い部屋々々と廊下を通りすぎて奥まつた六疊に導かれた。左右に庭を控へ、そのまん中に突き出たやうになつた一と間で、良人は今日の紹介者である遠縁の二人の畫家や、その家の老主人、並びに若主人と共に既に座にあつた。老主人は寫眞で見る西園寺公に似た風貌を持つた人であつた。若主人は寶生新を小型にしたやうな人であつた。弟は知人の挨拶をした。私は元より初對面である。

床には丁度竹田の『朋酒斯饗』の圖が懸けられてあつた。幅一尺竪四尺ほどな紙本の淡彩の小幅で、支那の風俗をした五人の人物が、横に二つの大きな酒甕を控へて、車座になつて酒を汲んでゐる畫である。天保四年冬十一月、とあるから、竹田の死に先だつ約一年半の作である。彼の枯れ切つた、が、決して粗雜にならない周密な手法は、稍酔うて隣

の友と拳を打つてゐるもの、主人らしい一人に向つて盃をさし出してゐるもの、それを受ける代りに何一杯を相手に強ひてゐる主人、またその左手に盃を前に置いたまゝ、兩手をあげて何かしきりに辯じ立てゝゐる今一人の客、これ等の無邪氣な酒飲の一圖を描いて、見る者をして共に座にあるやうな悦と曖昧を感じさせる。併し忌憚なく云へばたゞそれだけの畫である。この程度の作品ならば、敢て竹田を待たなくとも容易に見出されるであらうが、それにも拘らず、この小幅が特殊の魅力を以つて私たちを引きつけるのは何故であらう。云ふまでもなくそれは全紙の殆んど四分の三に亘つて書き埋められた五百字に餘る贊のためでなければならない。その贊は詩經豳風篇の一節であつた。晩年になつていよ〳〵淸髙にさびの附いた竹田の書體はこの細書の贊に於て殊に見事である。

畫面の情調を周圍の餘白に漂はせ、餘白から生ずる氣分を畫面の中ににじみ込ませる點は日本畫の特技であるが、それを今一歩進めて餘白に文字を置いた南畫の行き方は思ひ切つて大膽な、また文字に對する東洋人の愛と敏感を利用して、詩趣に依つて畫材の聯想を一層強く高めた最も賢い新機軸であつたと云へる。同時にその完全な効果は、畫家にして詩人、詩人にして畫家であつた竹田のやうな人にして初めて得られるものだと云ふことを證據立ててゐる點で、『朋酒斯饗』は作品の價値以上に深い意義を持つてゐると思ふ。何故ならば、若し上部の見事な贊がなかつたならば、平淡な畫面は幾らか空疎を免れなかつたであらうし、またその贊が下手な詩文や書であつたならば、反對に畫の方を滅茶々々にしたであらう。

『朋酒斯饗』が撤せられると、それに續いて私たちは竹田の左記の傑作を次々に見た。

『江樓對客圖』『松陰飼鶴圖』『猨猴桂樹圖』『柳陰漁夫圖』『黄雀群飛圖』――取分け『松陰飼鶴圖』と『柳陰漁夫圖』は蒐集家の間に羨望せられてゐる逸品であると云ふ。前者は兀屹として起つた大小三つの岩山と（右の最も高い山

の中腹には二本の松がある）その下を流れてゐる湍早い溪川と、その水を挾んで山に迫るやうに聳え立つた三本の老松と、樹下の四人の人物と、二羽の小さい白鶴と、二三の岩石とから出來てゐる構圖で、それが飽くまで力强い筆の技巧の最高限を盡した表現で纒められてゐる。淡彩で、山はうすい代赭で塗られ松も同じ位のうすい青緑に彩られてあるのが、その陰に二羽の白い鶴や、それに餌を與へてゐる童子のくすんだ紅い衣や、またそれを眺めて右手の岩に膝をかけた一人物の（他の二人は水に近い松樹下の卓に凭つてゐる）茶つぽい衣の色と相應じて、一體の畫面に高雅な快い効果を作り出してゐる。白状するとこの畫に接するまで私は竹田が斯んな優れた色彩家であつたかを知らなかつた。賛は次の詩である。

盤松陰淨不生塵　石洞苔青自作春
童子手招雙白鶴　十年養得長衿人

今一つの『柳陰漁夫圖』はこれに比べると非常に趣味の違つた畫で、大きさも『松陰飼鶴』よりは横は倍以上、竪は二尺から長い淡彩大幅である、同行の畫家の言葉に依れば、竹田の畫としてはこれが最大なものだと云ふことである。先づ畫面の主要部とも云ふべき中景には、右から左へ向けて低いがつしりした岩岸が突出して、その上に大きな屈曲した幹を持つた柳の古木が二本立つてゐる。この柳は二本とも非常に高く突つ立つてゐるので、早春の柔かに芽ぐみかけた枝は、空に房のやうに群がつてゐるだけで、岸を浸してゐる水の上には決して垂れてゐない。柳の樹の間には一軒の小屋が見える。小屋の後には水の中に楕圓形の廣く杙を打ち廻して魚の圍い場の如きものが拵へてあつて、そのあたりに芦が生えてゐる。而してこの芦と枝の一廓と柳の梢でこの畫の後景が出來上つてゐる。前景には岸の下に一艘の漁船がもやつてある。船首は紙の中央まで進んでゐるのに、船尾は描かれないで右端に省略されてゐる位の大い船である。裸

體で腰に型ばかりの布を纏つた漁夫は船首に立ち、築管の一種らしい、圓筒形に卷いた簀を水の中に漬けてゐる。後には同じ簀がまだ五つほど積まれてあり、またその後に丁度胴の間の中央には漁夫の女房が赤ん坊を抱いて坐り、如何にも優しい笑顔で胸をあけて乳を飲ませてゐる。（實際この豆人形ほどもない略畫の母親と、その乳房にくつついてゐる坊主頭が、私にはラファエロやチチアノの變に氣取つた器量自慢らしい聖母や分別臭い顔をしたクリストよりも——尤も石版畫しか知らないのではあるが——餘程立派に純粋に見える）此處にも一叢の芦が船に面して紙の右の隅から生ひ茂つてゐる。船の周り、芦の葉の陰に僅かに波のあとを見せた穏かな江水が、これ等のすべてを圍んで漫々と漲へてゐる。見るからにのびやかな、神經質な點の微塵もない、寛濶な畫である。取り分け漁夫親子の生活に示された畫家の強い同情は、一幅の畫趣に暖かい餘情を殘してその作品を一層快いものにしてゐる。

若し私の想像がひどく間違つてゐなければ、竹田は頭脳の明晰な高邁卓見の士であつたとは云つても、普通の理想主義者に見るやうな冷い荊棘な性情ではなく、反對に非常に熱情的な人間味の豐かな人であつたらうと思ふ。（山陽との友情はその最もよい證據で、二人を結びつけたのは單なる風流韻事の交りではなく、その性格に内在した類似が深い共鳴を呼び起したに相違ない。）彼の畫に現れてゐる最も著しい特色——どんな枯淡な筆を使つても決して荒れず、どんな超俗的な境地を描いても空疎に陷せず、謹嚴閒逸な描寫の中に常に一脈の匂ひと暢かな雅致を漂はせてゐるのはこの性情の反映でなくして何んであらう。

この意味から『黄雀群飛圖』は非常に興味のある愉快な畫である。名前の示すごとくこれは夥しい雀がむら竹の葉の間に遊び戯れてゐる淡彩の幅九寸、長さ五尺に近い横物で、雀たちが悦んで飛んだり、躍つたり、囀つたりしてゐるのが丁度竹田自身が悦んで友だちと飛んだり、躍つたり、歌つたりしてゐるかのやうに見える。雀の群の間々に書かれて

ある彼自身の説明に依ると、友達の家を訪ひ、餘り暑いので裸かになつて一緒に酒を飲んで、樂しい醉ひに乘じて描いたとあるから、彼の洒脫で快活な性格の一面が最も自然に流露したものと見ることが出來る。その他の書入れも面白いもので、或る場所には斯んなことが書いてある。

余畫固拙不足觀也、然拙朴眞率處、文晁南湖岸駒諸子、亦不能夢見也

强い信念と精進の間に京阪地方の流行畫家を睥睨してゐた竹田の面目がこの言葉の中にはつきり表はれてゐる。

竹田に次いで私たちが見度いと思つてゐた草坪に就いては『松陰觀瀑圖』と『山水花卉帖』の二を見た。前者は青綠紙本の中幅、後者は淡彩の畫帖である。

一筋の瀧が天から落下してゐるやうな勢で非常に高い絕壁――紙の殆んど上端から始まつてゐる――にかかつてゐる。これに對して二つの岩が紙の下端の中央と稍上部の左手とに斜に並び、各の岩の上には二本づつまつ直な高い松が聳え立つて、その枝で絕壁の中復と瀧の一部を遮つてゐる。一人の隱士が二つの岩の間から瀧壺の上に突き出た大きな平つたい石の上に佇んで瀧を眺めてゐる。これが『松陰觀瀑圖』である。

『山水花卉帳』は菊判の上をもう一寸ほど裁ち落した位の紙に、四君子を初めとしてその他、季節と時間の各種類に亘つて描き分けた山水花鳥などを十數枚集めたもので、それを見てゐると畫を廣い紙に大きく描くことの無意義を感じさせられるやうな畫集である。殊に力に充ち切つて、それで微塵も覇氣のない無垢簡素な彼の筆致は、師の竹田の作品が淡逸の間に常に閑雅な趣を藏して、見る者を朗らかな悅びで包む代りに、ひたむきな眞率と一種不明な壓力で强く人の心を打つ。而かもその生涯はやつと三十を出たばかりで不幸な終末を告げたのだと云ふことを思ふと――彼は誰にも逐はれないやうな病氣で歿したのである――私たちは痛ましい死を悲しむと共に、彼の異數な天才に對して新たな嘆美を

感じないではゐられない。當時にあつても彼の畫は識者を驚かしたものらしく、それに就いての一つの逸話が傳へられてゐる。」

竹田が草坪を連れて大阪に滯在してゐた時、或る日、同じ畫家なる春琴を訪うた。春琴が、

『近頃、高草坪なる者の畫を見たが、實に立派なもので、明人か淸人か知らないが、決して乾隆以後の作品ではなく、稼圃、半九も遠く及ばないと思ふのですが、あなたは御覽になつたことがありますか。』

と聞いた。竹田はそんな人の畫はまだ見たことはないが、併し私の弟子に同じ姓號の者——草坪の姓は高橋である——があると云つて、伴をして玄關に待たしてあつた草坪を呼んで紹介した。春琴は靑年に向つて、昔の名人と姓號を同うすることに就いて祝賀を述べた。その後、竹田が草坪の描いた畫を持つて行つて春琴に見せたところが、春琴は喫驚して、

『この畫が本統に先達の靑年の畫ならば、私の話した高草坪はあの靑年と別人ではない、何んと云ふ失禮をしたものだらう。』と云つて過を謝したと云ふのである。

以上の傑作の外に蕪村、木米、殊に茶室の床を一月毎に新しく飾り代へることが出來ると云ふ松花堂の四季の果物と花を描いた十二幅揃の茶懸を見たりした後、私たちはN家を辭して大急ぎで停車場に駈けつけた。黃昏の汽車でH——町に行つてH家の蒐集を見るためであつた。私情を述べるならば、H家と杏雨のことに就いては、私は小さい時から幾ら色んな話を聞かされてゐたか知れなかつた。若い頃暫く同じ町の親戚の家で暮らしたことがあり、且つ杏雨の家とは遠い血緣の繋がりさへあつた母が最も委しく知つてゐた。殊に杏雨が二度目の妻を貰はうとした時の逸話はいつも私たちを笑はせたものである。花嫁花婿は親兄弟や仲人や親類の者と共に二階の座敷に着席してゐた。而して盃事が始まる

ばかりになつた時に、花婿の杏雨が突然席から立ち上つて、『墨を擦れ、墨を擦れ』と叫びながら、二階から駈け下りてしまつた。花嫁が急に氣に食はなくなつたのである。勿論その結婚は中止となつた。

　また杏雨は或る意味に於て私の恩人でもあつた。何故なれば、故郷の家はどの部屋に入つても床の間か長押の襖か、乃至袋戸に杏雨の二三枚を見ないではすまないやうに出來てゐたので――これは祖父や父が彼の畫を特別に好いてゐたと云ふよりは、知合の中で氣安く描いて貰つた爲に相違ない――幼い時から私が最多く見て來たのは杏雨の畫であり、同時に繪畫に對する鑑賞力、取り分け南畫の閑逸素朴な畫趣と約束を容易に受け入れ樂しみ得る氣持の素地は、彼の畫に依つて養はれたのだと云ひ得るから。極端に云へば、私は南畫以外には畫らしい畫を見たことがなかつたのであつた。(十五になつた春、從姉や伯母たちと共に私は父に連れられて四國を旅行した。而して琴平神社の社務所で――あつたと思ふ――岸駒の弟子かなんかの描いた金碧燦爛たる壁畫を見た時、世には斯んな畫もあるのかと驚いたのを今でもはつきり覺えてゐる。)一人で座敷にぽつつりしてゐる時など、幼い私はよく掛物の淺絳山水や、梅花書屋を眺めながら、それ等の美しい自然や風雅な家の中で、茶を煮たり、琴を彈いたりしてゐる唐人たちの生活を羨んだ。同時にいつか自分もそんな場所を見つけ出して住むために、一つの家を夢想した。たつた一人はいれる位の、而して好きなところ、例へば清い流のほとりとか、靜かな山の中とか、おもしろい岩の傍とか、丁度唐人たちが選んでゐるやうな美しい景色を追うて何處へでも自由に持ち運びの出來るやうな小さい籠のやうな家を。後年能を見るやうになつて『景清』や『蟬丸』を見る度に、私はひとりで微笑する。あの作り物の庵は當時の私の夢想にすつかり當てはまるものだから。

〇――市から約一時間ばかりで達する田舍の小さい停車場で私たちは汽車を下りた。而して改札口に立つた驛夫に切符

を渡して待合室に入ると、先に立つた案内役のN氏が不意に驚の聲を出して、其處のベンチの一つに、他の三四人の乘客に交つてかけてゐた五十恰好の太つた色の黑い小男に近づき、帽子を取つて話をはじめた。他の人たちは遠慮して離れてゐたのだけれども、狹い場所のことで二人の話は大體聞き取れた。察するところ、その人はH家の者で、これからO—市に用達に行くために汽車を待つてゐたところらしく、N氏はまた丁度蟲干中と聞いて前觸れもせず出向いたことを話し、その蟲干が盂蘭盆の準備のために中絶されて、すべての物が仕舞ひ込まれたと聞いて殘念がつてゐる樣子である。が、最後にその人はベンチから立ち上つた。するとN氏は私たちをさし招いて、H氏が私たちのためにO—市行をやめて家に引返して珍藏を見せてくれることになつたと傳へた。その人こそ正しくH家の主人なのであつた。けれどもそれと知つたからと云つて私たちは彼の質素な着物や、殆んど二十年前位に流行つた銘仙のへら〳〵した夏羽織や、赤つちやけた帽子を別に驚きはしなかつた。H家の生活樣式に就いて少しでも豫備知識のある者には、それ等のすべては寧ろ自然すぎる位自然であつたから。

簡單な挨拶を取り交した後で、私たちは新にH氏と連れ立つて停車場を出た。其處から目的の町までは一里近くあるのである。併しH氏は停車場の前に並んでゐる車や馬車には目も呉れないで先に立つてさつさと歩き出した。まだ其處まで汽車の通じない頃には、O—市の銀行に行くのに(H氏はX銀行の頭取である)往復六七里の道を必ず歩いて通つたのだと云ふ。H氏の流儀からすれば、これも極く自然な譯であらう。人々は一緒に主人に續いた。併し私だけは車にした。

八月の午後の日盛りの田畝道を、凡そ十五町も進んだと思ふ頃、私の前には一つの川が現はれた。この間の暴風雨に流されたのだと云つて橋がなくなり、僅かに殘された橋桁が引きちぎつたやうになつて折れたまゝ水中に突つ立つてゐ

る。道から右手にだら〱下りに降るやうになつた川岸には同じ汽車から下りた人や、近所の村の者らしい人たちが立つて向から來る渡舟を待つてゐた。やつと一艘の渡舟が漕いで來た。けれども船頭は客が舟に一杯になるのを待つために中々渡さないので、私たちは十分間以上も其處で立往生をしてしまつた。そのうちにH氏と連れ立つた夫や弟たちの一と群が追ひついた。私は高い道の方から汗まみれになつて下りて來るH氏の姿を認めた時、一つの新な興味を以つて彼に注目した。彼の家の名前とは殆んど切り離されない關係に於て存在するこの村の交通機關の不幸な中絶に對して彼がどんな顏をするだらうかと思つたのである。併しH氏はどんな顏をもしなかつた。平然と落ちつき拂つて、而して頑健さうな血色のよい頬の上に絶えず浮べてゐる一種の微笑に似た皮肉な表情を微塵も變へないで、すまして皆と一緒に川を渡つた。

　最初私は停車場でH氏の質素な服裝や古つぽけた帽子に接した時には寧ろ或る快さを感じた。停車場からの暑い道を汗を流して歩くところも氣に入つた。少し金が出來たり、銀行や會社の一つにでも關係したりすると、直ぐ贅澤を始めて、それで一つぱし進歩した顏をしてゐる輕佻な地方紳士の多い中で、性格とは云ひ條、また誰に顧慮することもない身の上であるとは云へ、これまで頑固に自己を主張し得てゐるのは痛快だと思つた。併し今橋の落ちた川を素知らぬ顏で、悠々と渡つた氏を見た時には、私の敬意は驚きに變つた。私はバルザックの『ユウゼニ・グランディ』の中の父親をふと思ひ出した。

　十疊が二間つゞきになつて、障子も唐紙も取り放したH氏の夏座敷は、二方に木立の多い庭を控えて、涼しく、晴々としてゐた。私たちはその一方の間の長押にかかつた山陽の『富春館』と題した額を眺めたり――これは山陽が杏雨のために揮毫したのだと云ふ――、またその横の小部屋にかかつた隱元や雪山の見事な書幅を見たりしてゐるうちに、着

換えをすました主人は浴衣に木綿の兵子帯と云ふ一層身輕な風で現はれて、何をお目にかけませうと云ふ。N氏は南畫を見る前に少し唐畫を見度いと云ふ私たちの希望を取り次いだ。するとH氏はにこ〳〵して、唐畫を見れば伯父（杏雨のこと）の畫なぞはとても見られなくなる、と云ふやうなことを話しながら庭に立つてゐた一人の若者に何か囁くと、彼は忽ち庭のすぐ先の土藏から五つ六つの細長い箱を運び出して來て緣側へ積んだ。主人は箱を開き、長い篶竹を使つて如何にも馴れきつた仕方でそれを掛けて見せた。最初は正面の床に、次には横の壁に、それからまた上の間の方の床へと云ふ風に、人々の注意を一つの畫から他の畫の方へと自然に間隙なく移さして行く陳列の方法もひどく巧であつた。斯うして呂換成、藍映、孫儀、巨山嶠、玉川、などの大幅が順々に私たちの前に現れた。取り分け藍映の谷ほどもあるやうな素破らしい米點を連ねた水墨山水と、玉川の同じ水墨の『松陰舟中對坐圖』は皆んなの眼を見張らした。後者は午前N家で見た竹田の『柳陰漁夫圖』を思ひ出させる畫であつたが、飽くまで簡明で、飽くまで高逸なその筆致は、畫中に漲つてゐる一種雄渾な氣魄と共に、『柳陰漁夫圖』を壓倒するものであつた。否、兩者の相違は單に玉川と竹田の優劣ではなく、支那大陸と日本の相違であることをつく〴〵感じさせるやうな畫であつた。これ等の後では、續いて見た竹田の最初の二三幅が、丁度竹田自身や草坪、若しくば南海、大雅堂あたりのものゝ後に、土佐か四條派の畫を見る時のやうな、優雅な、ひどく美しいものに見えた。

併し『暗香疎影圖』（淺絳）『青芦白鶴圖』（設色）『漁樵問答圖』（淺絳）『曲溪複嶺圖』（淺絳）『青綠山水圖』『桃花流水圖』（淺絳）の如き代表的傑作が續々取り出されるに連れて、私は彼に對する正しい評價を取り戻した。――『松陰舟中對坐圖』の前に感じた『柳陰漁夫圖』の不滿も、日本の河が揚子江ほど大きくないのを嘆じて、その河の持つ獨自性を忘れた判斷に過ぎなかつたのを知つた。實際竹田は此等の畫に於て獨り彼のみが知り、彼のみが味ひ得た天地自然の秘密を彼の

みが持つ筆で餘蘊なく描き盡してゐるやうに思はれた。その意味から『曲渓複嶺』や『桃花流水』は最も異色のあるものである。前者は上端に僅かに掌ほどの空を殘して大小七つの山が聳え立ち、その前からまつ直ぐに山を侵すやうに起つた絕壁が、わるい稻妻形に曲折しながら紙の下端まで駈け下りてゐる珍らしい構圖で、絕壁の左右には水が周つてゐる。而して崖が幾つかの枝を出して丘陵を拵へたり、低く伸びて岬になつたり、または田畑の見える平地に變つたりしてゐるに連れて、水も入江になつたり、長い汀になつたり湖になつたり、瀧になつたり、急湍になつたり、細い小川になつたりして續いてゐる。湖や入江の附近にはあまたの舟が浮び、岸に沿うたところには港町らしい家並が見える。田畑のほとりには百姓屋があつて、百姓が仕事をしてゐる。河には漁夫が漁をしてゐる。風雅な木立の蔭、高い岩山の間には、隱士らしい人の住家や、寺院らしい高い建物が覗いてゐる。また、これ等の絕壁の側面には細い路がついて、森に遮られたり、深い谷底に消えたり、長汀曲浦に沿うてまがりくねりながら、最後には上の七つの山の一番下の山際まで這ひ上り、其處に立つた一つの嚴めしい樓門の中に通じてゐる。――竪五尺六寸、巾一尺五寸の紙に、これ等のものが代赭と靑綠の淡い彩色を使つて實に細かくミニエーチユアのやうに描き埋められたところは一偉觀であると共に、その立體的な巧緻を極めた構圖に依つて、見る人の幻影を一渓一嶺の起伏の間から遠く無何有の鄕に誘ひ込む魅力を持つてゐる。百姓も漁夫も樵夫も同時に哲學者、隱君子の風格を持つて生存する南畫の境地に於ては、何處を描いても其處が畫家のユートピアであるが、この圖の如きは殊に比類のない程美しく、また最も効果多く描き出された夢の國であると思ふ。

後者の『桃花流水圖』は名前に依つて想像される通りまた武陵桃源である。而してこの理想鄕には『曲渓複嶺圖』に見るやうな奇趣はない。巖の山と岩か根と、一面の桃花と、岩と桃をめぐつて流れてゐる水と、二人の小さい人物、彼

等の住家と見えて遙かに雲烟の間に現はれてゐる樓臺、これだけの寧ろ平凡な布置であるが、全幅の上に生み出された效果に於ては、人の目を驚かすものを持つてゐる。竹田の最もよい素質——野趣と高貴、優雅と朴訥な強さ、滋味と熱——が渾然として一つの輝やかしい諧調の中に溶け合つてゐるやうな作品である。取り分け、強いと云ふよりは厳めしく見える線で層を追うて疊み上げた岩の黒々とした美しい墨色と、その上に散在する桃花の粟粒のやうな細かい紅との對照は云ひ樣もない位見事である。

以上の諸作に於て、またその間に見た『青綠芙蓉峰殘雪圖』『設色雁來紅群雀圖』『淡彩牡丹圖』の如き作品に於て、竹田の色彩家（カラリスト）としての眞價をますく\よく知ることが出來たのは仕合であつた。同時に私は竹田が餘りに『色』を使ひ過ぎてゐるのに驚かされた。今までの畫について云つて見ても、殆んど大部分着色畫であり、それ等の作品が濃彩に依つて魅力を傷けてゐないことも事實であるが、併し一切の『色』を超越して、純淨無雜な水墨の中に天地の全局を生かさうとした南畫の本領からすれば、それは決して第一義的な描き方とは云へないであらう。竹田がこれ位の理窟の分らない人ではなかつた筈だし、またその理窟を實行するに餘りある大手腕を持ちながら、何故彼の畫に比較的水墨が少くして、淺絳、設色乃至淡彩のものが多いかゞ疑問となつた。私は二つのドグマを思ひついた。一つは畫の依賴者が色を使つたものを念入りな大作と信じて、その方を注文したのではなからうか。今一つは、彼は詩人及び書家として墨には餘りに馴れ過ぎてゐたので、畫となると色彩に對して一種偏派な愛惜を感じたのではなからうか。

草坪のものでは『設色雪中仿友圖』を見ることが出來たのは幸運であつた。これは『畫淸物也、梅淸物也、而詩人亦淸物也、併寫三淸、非二十分精絕筆則不能也。』と記した山陽の贊と共に名高いものであるが、私は一緒に見た杏雨の松の大幅や、同じ人が故鄕の村から京都に上るまでの旅を到るところ畫にしたものに、師の竹田が一枚々々詩贊をした一

卷の畫帖と比較することに於て一段の興味を覺えた。竹門の二秀才の特長は、このほんの二三の作品に於ても著しい對照をなして、草坪の飽くまで鋭く嚴肅な中に、一種朗かな美しさと天禀の高貴を見せた筆致の前には、杏雨ののびやかさも曖昧も、たゞ金と暇に任せて氣長に習錬した上手の畫と云ふ以上に見えないのは已むも得ないことである。而かもこれに對して山陽が『田翁の畫野趣、帆子の畫富貴、翁の正脉を傳ふるもの、其これ子に在るか。』と云つてゐるのを見ると、山陽も飛んだお世辭者だと云ふ氣がする。

四五日泊まりがけで來て見ても容易に見盡せないと云はれてゐるH氏の蒐集は、いつまでたつても私たちを飽かせることはなかつた。けれども汽車の時間が氣になるので、頓て私たちは歸り支度をした。丁度五時間近く邪魔したわけである。その間H氏は何人の助けも借りることなしに、すべての掛物を自分の手一つで箱から取り出し、かけ、外づし、箱に收めた。庭に立つた若者はまた彼の簡單な合圖の下に、自動機械のやうに素早く後から〳〵と新たな箱を持ち出し、見終つた箱は順々に片附けて、縁側にはいつも五六の箱以上は決して殘さなかつた。これもH家らしい流儀、H家らしい訓練と見えておもしろかつた。殊にそれ等のものが目錄なしで出し入れされてゐるのだと聞いた時には私は驚いた。案内役のN氏は何故目錄を作らないかを尋ねた。H氏は例の皮肉な微笑で、毎年二三十幅づゝもふえるので面倒臭いから、と云ふ意味の返事をした。果してさうであらうか。H氏の如き人物に取つては、目錄がなければ自分の所有物が完全に記憶されないと云ふことこそ寧ろ不思議であらう。途中で見た橋の落ちた河がその時ふと私の目の前に浮かんだ。今まで見た畫の最も小さい一つで、また今年買ひ入れられる畫を一幅減らしたゞけであの河の橋は容易に懸るのだと思はれた。斯う云つたからと云つて、私がよい美術を愛する心を知らぬ者のやうに誤解されてはこまる。これ等の畫が眞の藝術的價値に於て愛され尊重されてゐるならば、生命にも換えぬと云ふ人があつても、決してそれを無理とは思

ばないであらう。併し多くの優れた美術品がそんな純粋な愛され方をしてゐるであらうか。殊に金持の手に歸すると共に、それはミューズの支配を脱して全然マーキュリーの管轄に屬して仕舞ふのである。美術品であるよりは最も確實な公債、最も安全な銀行株となるのである。が、それでどうしたと云ふのだ、それでこそ貴重なのではないか、と彼等は云ふであらう。否H氏は云ふであらう、おれと橋と何んの關係があるのだと。私は金持は殆んど悉くムッシウ・グランデイであること、而してこの世界は今まで見てゐた南畫の境地のやうなユートピヤではないことを忘れてゐた自分の愚を憫笑した。

最後に私は此處で三十年ぶりに珍らしい人に出逢つたことを書き落してはならない。それはH夫人その人である。私の生れた町のI家から嫁いでゐる彼女は、ずつと年上の人ではあつたけれども、Tさんと云ふ名前で私には記憶のある人であつた。その結婚も亡くなつた父が世話したのだとかで、七つ八つの頃の私はよく噂を聞いてゐたし、里歸りの美しい花嫁姿を見た記憶もかすかに殘つてゐる。初め家に着いて改めて挨拶をした序に、私はちよつとその話に觸れた。が、さうですか、と云つたきりのH氏の素氣ない返事を聞いた時には、三十年ぶりの人に逢つて見ようとした自分の子供らしい望みを私は捨ててしまつた。併し晝がすんでもう歸るばかりになつたところへ、主人は急に庭の若者に向つてお母樣を呼んで來いと云ひつけた。今まで小丁稚でもあらうかと思つてゐた人が、それならTさんの息子であつたかと驚いてゐると、Tさんが主人に劣らぬ質素な風をして出て來た。大さう老けてゐたけれども、すぐれて美しかつた目と口許の特長に依つて、私はすぐ三十年前の面影を見つけ出した。私たちは丁寧に頭を下げ合つた。一つ二つの昔話も出た。知らず〳〵私の眼は熱くなつた。――斷つて置くが、この涙はマダム・グランデイには何んにも關係のない涙である。私はTさんを見たことに依つて新たにはつきりされた自分の空しい三十年の消失を悲しんだだけである。」

十年ぶりに一と月もゐて故鄕の生活をちつと見てゐると、四五日泊りや一週間位歸つてゐた時には分らなかつたことがいろ〳〵分つて來る。その中で一番强く私の注意を引いたのは、町が一體にひどく淋しく寂びれてゐることである。少くとも私の幼時の記憶にある故鄕の町は、斯んな眠つたやうな町ではなかつた。汽車もまだ通ぜず、電燈も電話もなかつたが、不便なりに町が引きしまつて、希望と力に充ち、一軒々々が明るく活氣づいてゐた。人々は一生懸命に働き、またその働に十分な効果が伴つた。その代り遊ぶことも徹底的で、何かと云ふと町ぢう大陽氣にはしやぎ拔く寬濶さを持つてゐた。夏の行事に就いて云つても盂蘭盆會の時の如き、町の夜は賑やかな踊の輪と、俗に『由來』と稱する流しでどこの通りも湧くやうな騷ぎを現はした。これは男に限つてうたはれる歌に三味線を合せた一種の唱歌隊で、踊り手が手拭で顏を隱すに對して、深編笠をかぶり、白扇を大きく使ひながらうたふのが普通の型である。稍更けて踊の輪も散り、家々でも盆燈籠の灯を傾け消さうとする頃になると、わざと宵を避けてゐた喉自慢の男たちが地の三味線も腕の冴えた女を選り拔いて靜かに流して來る。踊見や初の盆の家の燈籠見で興奮して、いつまでも眠らうとしなかつた小さい私たちは、蚊帳の中から如何にもお盆らしい氣持でそれを聞いたのを覺えてゐる。古風なゆつたりしたその歌の調子と、それに絡んで行く澁い三味線の手が私は大好きであつた。

盂蘭盆會が近づいた時、私は久しぶりに上手な『由來』の流しを聞くのを樂しみにしてゐた。けれども今の町の盂蘭盆會にはそんな悠暢な遊びは跡方もなくなつてゐた。踊さへろくな踊も立たないですんでしまつた。而かもこれは地方の古い町からあらゆる古い習俗を奪ひ去る恐ろしい颶風——汽車と電燈と電話と數本の工場の煙突と、乃至中學校と女學校に依つて代表された所謂文明が、彼等の趣味を更新させ、そんな浮れ氣を出させないほど生活を嚴肅にした爲では

なかつた。原因は他にあつた。今の場合彼等は全く『由來』や踊の騷ぎではないのだと云ふことを私は知つた。

歐洲戰爭の結果日本に入つた來た思ひがけない富は、斯んな片田舍の人の懷をもそれ〴〵腕に應じて膨らませた。百姓も米がよい値を吹いて商人に劣らず金持になつた。で、その金は何に使はれたか。彼等は、當時至るところに物凄い勢で設立された企業會社の株を競爭で買ひ込んだ。この流行は一種變な熱病のやうに町から町、村から村を侵してゐたので、誰でも何か新しい會社の株を持たないでは、人交りの出來ない屈辱のやうにさへ見なされた。偏避な土地の百姓たちは、草鞋がけ辨當持ちで町の仲買店までわざ〳〵買ひに出掛けた。

『おい、わしにもシャントリをお呉れ。』

彼等は大きながま口から金を摑み出しながら景氣よく怒鳴つた。シャントリと云ふのは上海取引所扱ひの株の意味で、どう云ふわけでか、一時これが彼等の仲間に非常な評判を呼んだのださうである。店員はシャントリの中の何を渡さうかと聞く。彼等にはそんなことは問題ではなかつた。

『シャントリなん何んでん構はん。まあ、利子の一番うんとつきさうなのを選つておくれ。』

斯うして店員からこれが一番確實で、一番利廻りのよい株だと云ふのを受け取つて、彼等は大得意で女房のところへ歸つて行つた。その厚い素破らしく立派な株券――子供の小學校の免狀よりもつと上等で美しく出來上つてゐて、而かも持つてさへゐれば默つて金を產んで呉れる世にも不思議な紙を見せるために。――その幾枚かの紙に依つて自分たちはもう單なる百姓ではなく、有名なシャントリの株主樣になつたのだと說明して聞かせるために。――女房はまた女房で、村にはまだない流行の家具か身のまはりの物でも買つた時のやうな氣持で、或はうちのシャントリは向ふ隣りのシャントリより何枚か多いと云ふ自慢で、良人と悦を共にした。この瞬間の彼等に二三年後にはこれ等のシャントリが

反古同様の物となり、また僅かに殘つた金を預けてある土地の銀行は、次々に破産する日が來ると云ふことがどうして考へられたらう。

『何んとか云つても、鍬一挺で仕事の出來る百姓は浮ぶ瀬もあるが、困るのはこちらです。銀行の水の手は留まつたりで懐は空つぽと來てるのぢやけん、何をどうしやうもないぢやごさんせんか。え？「出來」でも大いにやつた方が景氣が立つたらうつて。――併し歌ひ手が胴慄ひしちよるんぢや碌な聲は出ますまいよ。』

盆過ぎの或る晩、シャントリの話をして呉れた、而して御當人でも大分すつたらしい噂のあるXさんは、商人の悧巧さうな眼に自嘲の色を見せながら語つた。

彼も評判の歌ひ手であつた。

U――町の入口には一つの目に見えない門が立つ。これは地獄の門である。而かもこの門の銘はダンテの地獄の門のやうに長つたらしくはない。もつと直截で、もつと嚴めしい。

政友本黨か、憲政會か。

それを定めろ。

此處で、人間であり度いなら。

この町に於ける二つの政黨の對抗は、今では殆んど氣狂ひじみた手のつけられないものになつてゐるらしい。彼等は自分達が同じ日本國民で、而かも同じ田舍の小さい町に、先祖代々隣り合つて住んで來た人間だと云ふことを忘れてゐる。否、隣人が敵同士である位は何んでもない。親、兄弟、親類がいつでも敵になり得るのである。政友本黨か、憲政

會か――味方か反對黨かをたつた一言名乘つただけで。

政友本黨のY氏、憲政會のM氏は共にこの町の出身である。而してこの町の政爭なるものは、最初は種々複雜な原因を持つてゐたとしても――舊士族と彼等の所謂素町人なる平民との勢力爭ひは主なる導火線であつた――現在に於ては要するに兩氏の對立である。けれども、兩氏に依つて其處に代表されてゐる二つの政黨は果して何を爭つてゐるのか、主義綱領は何であるか、どちらが正しいのか。彼等はそんなことは考へて見たこともないであらう。一歩進んで、どちらの政策が自分たちの町を眞に幸福にするかさへ考へはしないであらう。それならば、そんな事に考慮を煩はす必要のない位兩氏に傾倒し、その人格手腕に信賴を置いてゐるのであらうか。而して昔の軍物語の中の勇敢な兵士たちのやうに、各自の大將のために戰ふことをただ悅んでゐるのであらうか。決してさうとは信じられない。第三者から見ると、彼等は戰の眞の對象を知らずして戰ひ、爭の根源を究めずして爭つてゐるのである。それはもはや戰や爭ではなく、深い、拔くことの出來ない箇人的の憎みに變じてゐる。主義政綱の如きは問題ではない。彼等はどちらでも反對黨のすることなら、どんな善い事でも最惡であり、どんな立派な行爲でも笑ふべき愚かな振舞であり、また反對黨の人間ならば悉く馬鹿か惡人か、無賴漢か、盜人か、豚か、犬かであつた。隅から隅を步き廻つても約一時間とはかからない、而してその間には同じ人間に三遍位は出逢はなければならないやうな狹い田舍町の中で、彼等は七生前からの仇敵のやうに睨み合つてゐる。冠婚葬祭の交際を斷つてゐるのは勿論、途上で顏を合せることさへ避けてゐる。もしこの町の政友本黨を代表する一軒の藥屋の主人と、憲政會に屬して彼の敵手を以つて目ざされてゐる紙屋の主人とが、偶然町の四角で出逢つたとして、その時彼等が天氣の挨拶でもし合つたならば、町の人々は去年の東京の地震の號外を見たときと同じ位に驚くであらう。

この記事を私の小說的な誇張に過ぎないと疑ふ人があるならば、私はそんな想像でなしに事實に就いてそれを證據立てることも出來る。

町の中學校の寄宿舍に新しい生徒が入つた。AとBが同じ部屋に入つた。すると親達から學校に對して抗議が持ち出された。自分の息子をあんな奴の子供と一緒に置くことは御免だと云ふのである。――Aの親は熱心な政友本黨派でありBの親は憲政會であつた。學校の當事者から見れば、それは元より不合理な云ひ分である。併しこれ等の不合理を不合理だと主張し得るのはこの土地では超人でなければ出來ない。二人の中學生は別々の部屋に引き離された。

今一つは近くの村の話である。その村は兩黨の勢力が相半してゐて選擧の時なぞは最も物凄い戰場とされてゐる。秋祭の時此處では獅子が出る。村の若者に二人頭と尾を受け持つて獅子を舞はせるのである。これが常に同じ派の者であれば無事にすむが、籤引のことで、反對派の者が一人づゝ出る場合もある。神事であるから彼等も役目だけは拒みはしない。併し獅子が村を一順廻つた後、重だつた家々に一種の祝福を投げ與ふる意味で「御祈禱!」と叫びながら舞ひ込んで行く段になると、彼等はもう辛抱が出來なかつた。その家が憲政會であつた時には獅子の中の政友本黨員は獅子の中から飛び出して仕舞つて決してその閾を跨がなかつた。反對に舞ひ込む家が政友本黨である場合には、今度は憲政會の方の獅子が飛び出した。

最後の話は私の新たな經驗である。

毎年暑中休暇になると山の方へばかり轉地した私の家では、子供たちがまだ泳ぐことを知らなかつたので、この夏は故鄉の海で正式に稽古をさせ度いと話し合つてゐた。別莊の近所では水が不潔なので、町から二十町ほどの海岸で練習させることゝなつた。日に一度は海に入ることにしてゐると云ふ弟が自分の小さい子供たちや、家兄の一人息子や、私

たちの三人の男の子から出來上つた一隊の子供連を引き連れて毎日午後から出掛けた。義弟に當る游泳の達者な中學生が師匠である。

今までは、山の湖でボートを浮べる位の樂しみしか知らなかつた三人の男の子は――それも漕げるのは兄だけで、十一と七つの二人はぢつとおとなしく小さい胴の間に縮かんでゐなければならなかつたのが――夏の海の自由な快樂を初めて味つて、非常に悦んだ。而して黒くなつた肩のあたりが一皮むける頃になると、上の兄弟はもう立派に泳げると云つて自慢をし、またそれを見て貰ひたがつた。大勢の人に出逢ふのを臆却がつてめつたに町には出ないやうにしてゐる彼等のお父樣が或る日とう／＼引つ張り出された。

『如何でした。』

夕日陰の中を潮燒けのしたまつ赤な顏を揃へて歸つて來た時私は夫に聞いた。すると意外な報告を受け取つた。子供たちの泳いでゐるところは岩の多い入江で、水泳場としては決して適當でなく、それに何にしたものか水の中に針金なんぞが引き廻してあつて危險だと云ふのであつた。

『今一つ向ふの入江は非常にいゝ場所だのに、何故其處へは行かないで、あんなけちなところで泳がせたものかね。Iにも似合はない。』

『まあ、さうですか。自分でついて行つてる癖に何てことでせう。』

斯んな惡口を云つてるところへ當の弟が例の如くふらりと遊びに來た。――彼は今日は一緒に行かなかつたのであつた。――私たちは早速彼の不注意とまづい選擇に就いて非難した。すると彼は當惑したやうな顏をして、にやにやしながら、岩は大した邪魔はしない、また針金の方は危くないやうに取らせやうとは云つたが、その入江を捨てゝ向の入江

に移らうとは云はなかつた。私たちもまた彼が何故その不適當な場所を固守するかと云ふ眞の原因に就いてはその時はまだ知らなかつた。併し間もなくそれが分つた。

或る日いつものやうに泳ぎから歸つて來た十五になる長男は、不思議さうな顔をして話し出した。

『お母樣、お國つて變なんですね。』

『何が變なの。』

『だつてね、僕等の今泳いでるところは政友本黨の方の泳ぎ場で、お父樣が先達いゝ場所だと仰しやつたのは憲政會のだつてさ。決して一緒に泳がないんだつて。』

而して茶店も兩方に一軒づつちやんと分かれて立つてゐて、客を區別してゐると云つた。私は夫と顔を見合せた。説明するまでもなく私の兄弟の家はどちらも政友本黨である。

『そんな事は子供の關係したことではないのだから、あなた方は知らぬ顔をしてたゞ泳いでゐらつしやい。』

私はさう云つて話を切らうとした。子供にまでそんなことを噂させるのは厭であつた。併し彼等は同じ土地の人が、同じ海岸で泳ぐのに、そんな嚴重なしきりを置いてゐると云ふのが、滑稽でたまらないらしかつた。兄弟はいつまでもそれに就いて論じた。而してその二派の人々が、一遍その海で裸體のまゝ本統に喧嘩をして見たら素敵に面白いに相違ないと云ふ結論に達した。同時に茶目な小學生は今一つの素敵な冒險を思ひついた。

『僕は今度憲政會の方へ行つて游いで見てやらう。』

ところが偶然な行きさつからこれが實現することになつた。

師匠役の中學生に少し忙しいことが出來て彼等に教へられなくなつた。弟も旅行したりして一緒に行かれなくなつ

た。子供たちは丁度身體が浮き出して今が大事な時であるし、且つ長くもない滯在なので、私たちは早く代りの人を見つけ度いと思つて氣を揉んでゐた。其處へ夫の以前の知合で中學校に勤めてゐるM氏と云ふ人が訪ねて來た。彼は旨い泳ぎ手で、以前は町の水泳場で敎へてゐた位だから、若し彼が今でも泳いでゐるなら子供たちを賴むには適當な人だと思つた。聞いて見ると、自分も毎日海に行くので此方さへよければ相手をしてもよい。併し本統の稽古はYと云ふ人を勸め度い。彼なら町で一流の達人であるし、自分の子供達もそれにつけてあるのだからと云ふ返事であつた。私たちはその點はどちらでもさし支へないから、兎に角子供を彼の家まで出すと云ふ約束をした。

明けの日の午後、二人の兄弟は父親からM氏のところへ行く地圖を貰ひ、幾日ぶりかで水着を包んだ大タオルをぶら下げて出掛けた。私たちは叔父もいとこ達もゐない初めての他人の間で、二人がどんな風で泳ぐかを思ひやつて待つてゐた。二時間ほどして歸つて來た。而して歸ると行きなり弟が報告した。

『驚いちやつた。僕等は今度は憲政會になつた。』

兄は弟の言葉に繼ぎ足した。

『政友本黨の方の茶店の爺やが變な顏をしてるんですよ。僕等がMさんたちと一緒にその前を通り過ぎて憲政會の方へ行つたもんだから。』

此方さへよければ引き受けると云つた時のM氏の變に遠慮したやうな態度が、ふと私の目に浮かんだ。この町の色別に從へば、M氏は當然憲政會の人で、また彼が子供等のために推薦したY氏は、所謂憲政會派の入江の水泳の敎師であると共に、その茶店の主人なのだと云ふことが頓て知れた。私たちは前と同じ訓言でそれに對することが最もよいと思つた。

「そんなことは子供の關係したことではないのだから。知らぬ顔をしてたゞ泳いでゐらつしやい。」

その内に子供たちはM氏のところには寄らないで、家から眞直ぐに海岸へ行くことゝなつたが、それがまた奇妙な現象を生み出した。彼等は二人だけで行くと、最初から馴れてゐて而かも手前にある政友本黨の方の茶店を冷淡に通り過ぎることが出來なかつた。で、彼等は其處へ一と休みしてお茶でも飲んだ。それから憲政會の方へ出掛けて水泳の日課をすまして、その茶屋でまた休んで、歸つて來た。二人はこれを何處までも自然に平然とやつてのけた。

「今日はどうしたの。」

と聞くと、彼等は答へる。

「着物は憲政會で脱いだの。それから泳いで歸りに政友本黨の爺やのところでお茶を飲んだら、ドロツプスを持つて來てくれたから食べて來た。」

私たちはいつも笑ひ出した。彼等の無意識な横紙破りは、絶對に不可能だとされてゐたものを容易に可能にして見せた點で、この町に於てはナポレオンのアルプス越え、乃至ナンセンの北極探險以上の壯擧であらねばならぬ。

文學博士 新村出著（新刊）

南蠻更紗

定價貳圓參拾錢
送料十九錢

趣味の名著出づ

美文家として、南蠻研究の第一人者として知らるる新村博士の近業である。博士が珠玉の如き麗文、斷想にて幾多面白き題材を捉へ來りて明治以前の奇しき文化の跡を訪ねた近來類稀な文献にて、讀み去り讀み來りて身は其の時代にあるが如く、卷を掩ふ能はざるのものである。近來の好史家のみならず家庭、學校の必ず一本を備ふべき參考書であり、趣味の讀み物である。

（1）雪のサンタマリヤ（2）切利支丹文學斷片（3）遊王聖範の舊譯本（4）切支丹宗の遺物（5）日本最古の銅版畫（6）南蠻趣味と和歌其他（三百年前の回顧）（7）南蠻に關する俚諺その他（8）眞宗と切支丹（9）煙草と煙管（10）時計傳來の歴史（11）歴史と地理（2）加留多の將來と流行（13）近世輸入服飾品と其稱（14）ちやるめる（15）日本美術史上の新研究（1）日本文學の海洋趣味（17）海賊の話（1）大西洋上より（19）長崎再遊（20）日本人の眼に映じたる星（21）星に關する二三の傳説（22）昴星讃仰（23）星夜讃美の女性歌人（24）花の名三つ四つ（25）「ふれふれ粉雪」（26）徒然草とその口譯（27）北原白秋の「思ひ出」（2）圖書館の一隅より（29）地獄小話（30）鷹狩（31）鋤焼物語（32）語原雜話（33）エスペラントの好望（34）ベクーニン來航の事など（3）去來一家の事

東京芝愛宕下町
振替東京八四〇二

改造社

電話高輪
四九九三


漫畫脚本
象の變貌
(舞台面武梁祠石刻ニ倣フ)
岡本一平作



第一場　無聊宮大居間

無聊大王『南蠻の矛も北狄の矢も怖るゝ事ではない。したが無聊は命を縮める。博士。生命が躍り出すやうな珍らしい話を聽かせて呉れ』

博士老顚『毎日毎夜、申上げてもう種も盡きてムります』

無聊大王『何か思ひ出せ〳〵』

博士老顚『はてさて、――こゝに一つ象といふ獸がムります。天竺の獸でムります。殊の外鼻が大きく、身體が鼻についとると申します』

無聊大王『その話〳〵もつと委しく申せ。』

博士老顚『書にはこれだけでムります』

無聊大王『惜しい事だ。』



第二場　無聊宮外桂濱

近視眼の學者甲『無聊大王様は象といふ奇獸に見ぬ戀でおはす。それでわれ等を取調べに舟出させられる。』

同　乙『廷内學者も多い中をわれ等五人が選まれたは名譽な事ぢや』

同　『隨分念をかけて調べて來よう』

同　丁『われら四人は舟に乘つたのにあの若い學者の釆和は何故舟に乘らぬのぢや。呼ばう』

四　人『釆和！早く乘れ』

學者釆和『わしは乘らぬ。象といふ獸はわしの主觀に立派に描かれて居る。恐らく實物よりこの方が象らしいに違ひない。だから見に行かぬ』

四　人『勝手にしろ』



第三場　天竺聚獸園

近視眼の學者、丙『天竺へ着いた。國王へ願つて聚獸園に入る事を許された。どれ〳〵これが象といふものか。象とは扁たい壁のようなものだ』

同　乙『判つた。象とは太い柱のようなものだ』

同　丁『判つた。象とは紐の先の房の垂れたようなものぢや』

同　甲『判つたわかつた。象とは芭蕉の巻葉のようなものぢや。』

四人『判つた。判つた歸らう』



第四場　無聊宮廣場

近視眼の學者甲『さて、おの〱天竺で調べ上げた象の智識を宮へ戻つて雛型に作つて大王樣へお目にかける約束をしたが今日がその期日ぢやの。おの〱持つて來たか』

同　　乙丙丁『持つて來たとも』

同　　　甲『どれ〱。そしておの〱この雛型は實物の象に忠實ぢやな』

同　　乙丙丁『忠實だとも』

同　　　甲『だのに、これはどうした事だ。四人が四色ぢや』

學者釆和『は　は　は　は』

近視眼の學者―四人「何故笑ふ」



第五場　仝

近視眼の學者甲『成程、柔和のいふ通りだ。われ等は象の局部に忠實で綜合の研究に迂遠ぢやつた』

同　丙『然し。迂遠ぢやつたとのみで離れ〳〵に大王様にお見せする事もなるまい』

同　乙『幸な事がある。柔和貴公は象といふものを主觀で直覺してると申されたな』

學者柔和『その通り』

同　丁『では、柔和の考へ通り纏めて貰ふより仕方あるまい』

同　甲『それより仕方あるまい。柔和、頼む』

學者柔和『どれ〳〵。（組立てゝ）これが象といふものだ』

近視眼の學者四人『はあ。さうかね』



第六場　天竺より支那へ通ずる街道

支那の騎吏一、『もう無聊宮へも六里の道だ。夕景には着くだらう』

同　二『うん、だがな　天竺の國王は何だつて遥々こんな獸を無聊大王樣へ贈りものにするんだらう。その爲め向ふからは國境まで送る。こつちからは國境まで迎へる。大概の手數ではない。この獸はこの間學者が調べに行つたのでもう澤山ぢやないか』

同　三『人間といふ奴は妙なものさ。費用を使つても人の驚く顏を見て得意になりたいといふ奴さ』

象の牧夫『支那へ來ると寒い』



第七場　無聊宮大王居間

象の牧夫『これが天竺の國王より贈られた象でムります。』

無聊大王『なにこれが象だと。ばかをいへ、これは象ではない。』

象の牧夫『いゑ。これが本當の象でムります』

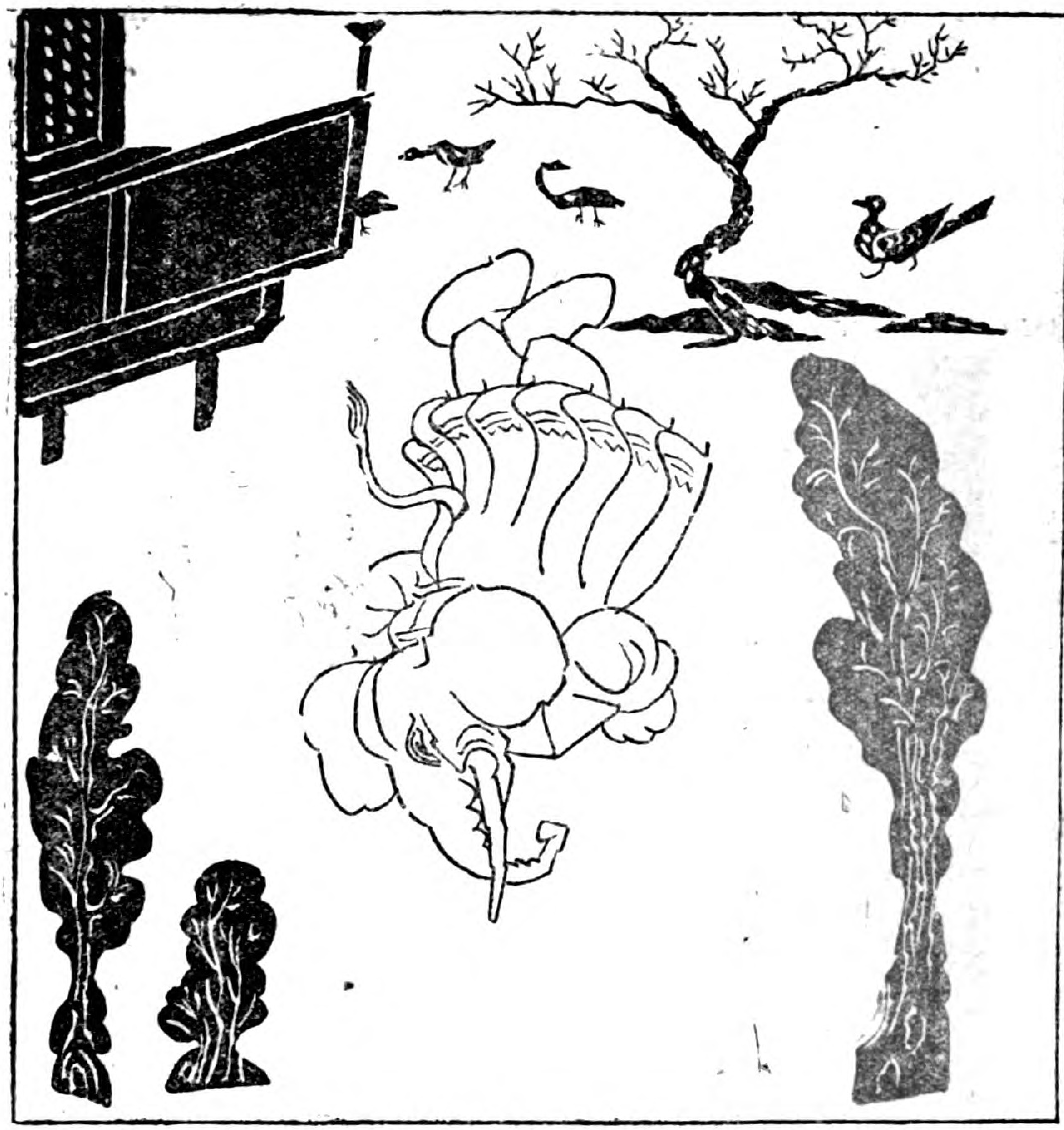
無聊大王『こんな平凡な象が何處にある。この間學者達が調べて來た模型が寶庫に藏めてある。あれが本當の象だ。象らしい象だ。この象は普通の獸を大きくしてそれに鼻が少し長い丈けだ。奇獸らしい神秘が無い。奇獸らしい奇跡が見出されぬ。見ても生命が躍らないぢやないか。象らしい象でなくては象も象でない』



第八場　無聊宮寶庫

（天竺渡來の象、この幕より擬人法を使とし人の姿に裝はす）

天竺の象『妙な事があるものだ。俺れは今迄自分が象である事を一刻も疑つた事は無かつた。それを今日大王がもつと象らしい象があるといふので急に氣になり出した。象らしい象とはどんな象だらう一つ忍んで覗いて來よう。ややや、こいつか。ふーーむ。成程。――成程。如何にも奇獸としての象はこの形で無くちやならない。これから見ると俺れの姿は平凡な獸で全くきまりが惡い。俺にも一つ考へ直す時が來たやうだ。』



第九場　無聊宮寶庫外庭

天竺の象『どうして、自然のこの俺れの象が象らしく無くてあの拵へもの丶象が奇獸らしい象に見ゑるのだらう。今、立聞きして來たがあの象は柔和とかいふ若者が主觀から織り出した象の形なのだそうだ。して見ると神はこの俺れ達に形の象と神秘の象と二つ與へられて居たのを人間は敏い奴だから神樣と生命によつて直取引して神秘の象をちやんと知つて仕舞やがつたのだ。そして俺達は形の象に置去りか。今こそ俺れが俺れに追付く時だゑいツ』（象、一つ筋斗を打つ）



第十場　仝

(象、筋斗を打つと今迄の自然の形の象と釆和が考へた形にそつくりの主觀の象と體二つに分る。主觀の象、自然の形の象を抱いてそこへ寢かせ乍ら)

主觀の象『客觀の象。しばらくおやすみ。生命がまだお前を必要とするまで。そしてしばらくは象の生命はわたしが預つて置く。時だ。輪廻だ。今はわたし番だ。安心して任しておやすみ』

客觀の象『ぢや。おやすみなさい』

(釆和登場)

學者釆和『象！象！』

(象と、釆和莞爾として舞ひを舞ひ出す)

――唄。――

南を向いて、ぢんならな　ぢんならな。
北斗が抱けた。ぢんならな。
娘。男知らずに祖父を生む。
ぢんならな。ぢんならな。

新刊發賣

親佛文藝會編（石井柏亭裝幀）

ゆかり

特製八圓 並製四圓五十錢 送料廿三錢

詩人大使ポオル・クロオデルに贈る爲めに佛國文學に關係ある文壇人總出でにて編纂されたる紀念的の出版物である。その總ての筆者が何れも佛蘭西文藝に造詣深き人々であることと、大使の轉任を惜むといふ美はしき動機とからであるので、上梓されぬ前から本書は異常の期待をかけられてゐる。

○佛蘭西文學篇

春を待ちつゝ（島崎藤村）人種平常等觀の佛英人間に與ふる理由（五來素川）ギクトル・ユゴオの根本思想（新城和一）ボシユエの抒情詩（關根秀雄）アナトオル・フランスの齋（平林初之輔）巴里第一の印象（内藤濯）文學の科學化とゾラの自然主義（後藤末雄）フイリツプとギヨマン（小牧近江）

○クロオデル篇

印象（辰野隆）ポオル・クロオデルの劇作（吉江喬松）加特力詩人ポオル・クロオデル（木村太郎）春と夏とのあはひ（増田篤夫）棵棠の心（岸田國士）水時計（クロオデル）の藝術を讀みて（山田珠樹）人とその欲望（柳澤健）クロオデルの一考察（石川淳）ポオル・クロオデル（川路柳虹）聖ジユヌギエテヴ第三歌（堀東日路士）クロオデル詩抄（竹友藻風）正午の頌母（堀口大學）——（山内義雄）

○創作篇

たぬき（豐島與志雄）ジヤン・メランの宅（岡田三郎）外國婦人の贈物（中村星湖）詩（西條八十）譯詩（與謝野寛）詩（與謝野晶子）譯詩五章（鈴木信太郎）百田の叫び（エミイル・ギヨマン）（椎名其二）詩（百田宗二）Pillow of Wisdom（野口米次郎）

佛文

La littérature Française et le Japon (Simon Dazn)

L'effet suggestif du Haikou (T. Chitané)

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

佐藤春夫譯

（四六判上製）

定價壹圓五十錢　書留送料拾五錢

ピノチオ

新刊

子供たちによい習慣とよい文學とを同時に與へようとする人にのためにこの書物がある。全く、これほど快活で上品でその上に人間的で、生々とした興味を呼ぶ童話がさうざらにあらうとは思へない。又、おとなはこれを讀んでむかしの自分に會ふやうな氣がするだらう。ピノチオはそれほどよく子供の性質をつかんでゐるからである。掛引なしにそれは少年文學中の名著である。これを讀んだ子供たちにとつてはこの話はいい思ひ出になつて一生涯殘ることを私は疑はない。この廣告に責任を持つために私は署名する

—佐藤春夫—

クリスマス贈答品として何れの家庭にも熱狂歡迎を受くべき近來類なる少年文學の好讀物です

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

野口米次郎著

最新刊

四六判並製

定價壹圓八拾錢

送料十三錢

先驅者の言葉

ヨネ・ノグチの詩人的名聲は散文家としての功績を教へて居る。本社はこれを遺憾として、今本書を出版し彼の文明批評家としての價値を世に問はんとするのである。謙讓の德を知る彼が、先驅者を以て自任するに於ては、何事か語るに相違ない。彼は想像と現實との間に音樂を奏する樂天家である。一地方主義を世界心から批判し價値付けて精神的破産から逃れる近代人である。人生の過然を眞理の必然から眺めて群集から離れる勇者である。然し先驅者として彼の悲哀は盡きない。乞ふ本書を繙いて彼の樂觀が悲觀と一變する場合の痛ましい叫を聞け。

東京芝區愛宕下町

發行 改造社

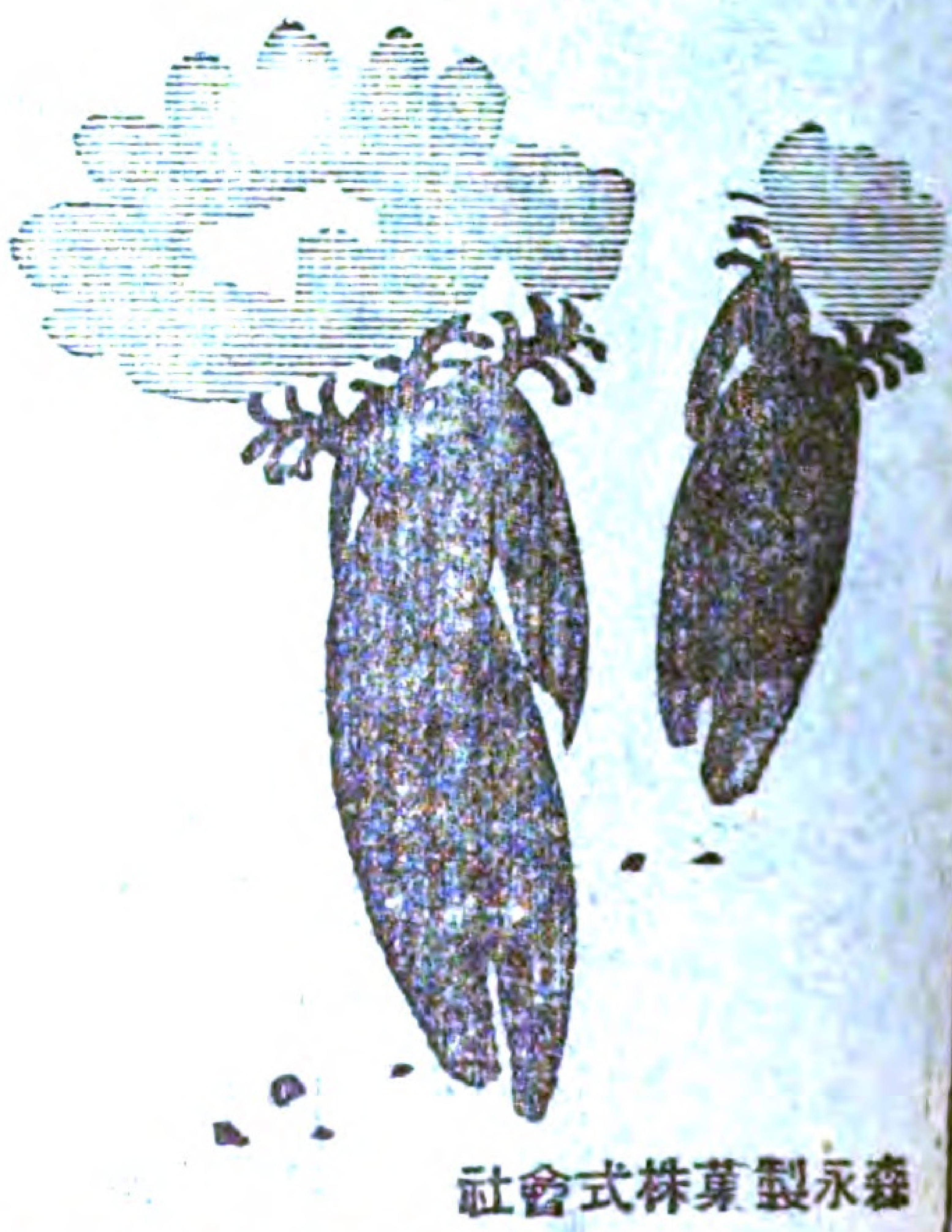
振替東京八四〇二

電話高輪四九九三

めでたさに
ことぶき添ふる
これやこの菓子

森永の菓子

ミルクキヤラメル
ミルクチヨコレート
ドロツプス
ピース
ビスケツト



森永製菓株式會社

聞け　見よ

讀賣新聞

明治七年創刊

◇昨今『讀賣新聞』の紙數の驚ろくべき激増が、到る所に噂の種をまきつゝあるは何故？

□讀者が新聞の性質を眞面目に撰ぶやうになつた爲！

□特色のある新聞が、やはり誰にも一番面白い爲！

□日常の生活に必要な記事が一番澤山書かれる爲！

◇滿都のファンをして翌朝の新聞を刮目せしめる運動界諸大家の權威ある批評が載つてゐる爲め！

◇創設最も古く實益興味共に日本一の評ある『婦人附錄』の活躍してゐる爲め！

新聞代
一部四錢　一ケ月八十錢
地方郵送前金（郵税共）
一ケ月　九十錢
三ケ月　二圓六十錢
六ケ月　五圓　一ケ年十圓

廣告料
（五號活字十五字詰）
普通　一行一圓三十五錢
特別　一行二圓[illegible]十錢
指定　一行二圓十錢

電話番號
營業用　銀座　五一〇〇番
　　　　銀座　五一〇一番
編輯用　銀座　五一〇二番
　　　　銀座　五一〇三番

振替貯金口座
東京　六一二番
名古屋　一〇、五三三番

發行所　東京市京橋區[illegible]十一番地　讀賣新聞社
發行人兼編輯人　三吉亥吉　印刷人　渡原久吉

北村壽夫著

幻の部屋

定價壹圓六拾錢 ◆ 四六版 ◆ 送料拾五錢

小山内薫氏激賞　今年一年の内に讀んだもの見たもので、一番面白かつたものを擧げろと言ふ。北村壽夫君の「幻の部屋」これが僕には面白かつた。「幻の部屋」は北村壽夫君の處女作戲曲だ。勿論、まだこれ一つだけでは戲曲家としての北村君を地位づけることは出來ない。併し、「幻の部屋」が滔々たる新戲曲——每月十も二十も三十も一度に生る——サンガー夫人を必要とする程多產な現今の新戲曲——の內で、拔群のものたるとは疑ひを容れない。

若僕の詞に少しでも疑惑を感ずる人があつたら、改造社出版のこの戲曲を——若面倒だつたら、第四三頁から第一二四頁までゞも讀んで見て貰ひたい。貧乏な美術家の糺についてのユウモラスな演說その美術家と資本家のお孃さんとの戀、その間に介在する秘書役の滑稽さ……「アンコオル、アンコオル、アンコオル、何て場面だ。」と絕叫する作者(戲曲の人物としては常に傍觀者たる「狂人」——作者は確に唯者ではない。

發行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　電話高輪四九九三　改造社

賀川豐彦三名著

星より星への通路

五十版

賀川氏の震災後の東京に於る活動は全く感謝に値する。氏の人類愛の半面を語る本書は、震災と共に全然東京に影を潜めたが、今回改版して玆に讀書子に相見ゆるを得るに至つた。乞ふ一書を購つて氏の得意とせる散文に親め。

定價貳圓
送料十七錢

(近刊)

死線を越えて

(二八五版)

定價參圓
送料十九錢
四月中旬出來

(近刊)

太陽を射るもの

(一八三版)

定價貳圓八十錢
送料十九錢
五月上旬出來

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

植田壽藏著

藝術哲學

菊判 上製 定價二圓七拾錢 郵送料十七錢

最新刊

、この書の如く、世界に於て燦々たる光輝ある藝術國日本に向つて、深く要求せられた研究を、この著者の如き著者に依て公表し得ることは、本社の聊か悦びとする處である。憾むらくは、著者の固執する希望の故に、この書に就て、自ら價値を主張することを、本社は凡て差控えねばならない、唯だ眞に嚴肅なる新時代文化の建設者たり、支持者たらんとする諸君自ら、藝術の最も深き眞理に沈潜せられん爲に、(夫れは人類の輝ける義務の一つである)この書が一つの堅固なる階段として役立ち得ることは、著者と共に本社の深く希望する處である。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二番 改造社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

倉田百三著

超克

第四十版

此の書は、ソクラテス的勇氣、卽ち合理的實行意志を以て、自分の內なる「賤民」を征服せんとする思索的努力を跡づけたものである。「轉身」の序文に約束した、自己超克の成績を幾分擧げ得たかと思ふ。自分は、惡の魅力から脫し切る爲に、善と禍との嚴密なる一致の觀念に到達した。又善を盡く、且つ其の度に從つて生かさんと努力して、基督教主義と、希臘主義との調和の手がかりがついたやうな氣がする女性美に就いても其の美を盡く、且つ其の度に從つて生かさん事を努めた。此の書は、自分の此れ迄の論文集の中浮いた點の最も尠いものとして、自分を顧みて下さる人々に、讀んでいたゞくのに氣持がいい。(著者)

定價貳圓貳拾錢

送料十九錢
四六判上製

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

新年號創作

冬の往來……志賀直哉

時計のいたづら……佐藤春夫

兄と歩く……宇野浩二

搖れる樹々……中條百合子

（戲曲）マンドリンを彈く男……谷崎潤一郎

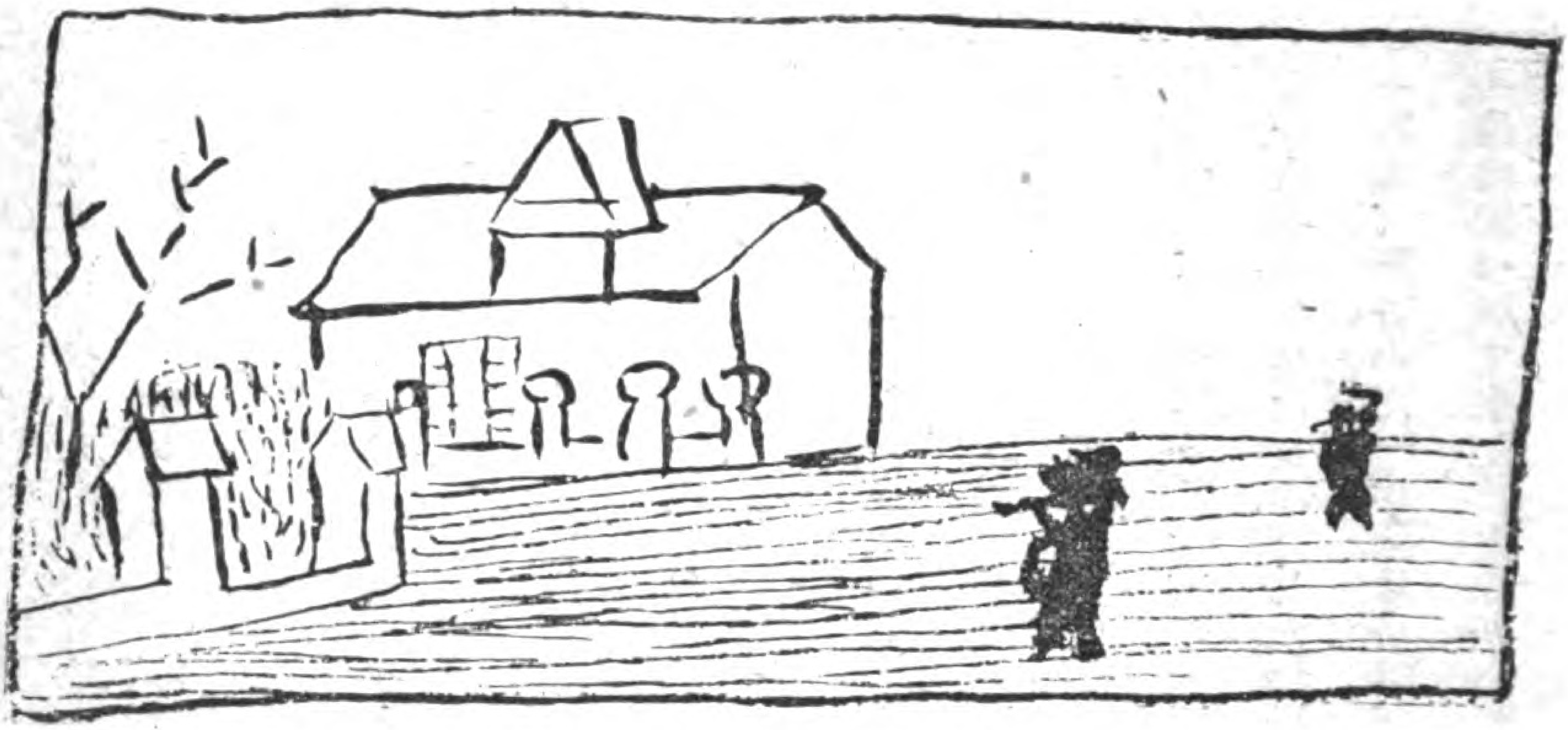
石門の奥に……里見弴

太つた女その他……正宗白鳥

ひと秋の場面……犬養健

墓參……久米正雄

（戲曲）妻……菊池寛



冬の往來

――小説家らしい戀の話――

志賀直哉

寒い空つ風の吹く日暮れだつた。私は小説家の中津榮之助と山の手の或る町を歩いて居た。

「正月號の仕事はもう皆濟んだのか？」私は此の間中から口癖のやうに忙しい〱と大袈裟に吹聽しながら、毎日何所か出歩いてばかりゐる中津にかう訊いて見た。

「駄目さ」

「何日が〆切りなんだ」

「あしたが〆切りだ。未だ何んにも出來てやしない」

「材料はあるのか」

「うん、それはあるんだが、どれに手をつけても、左う直ぐは物になりさうもないんで、具圖々々して了ふんだ。どうも勇氣がなくて駄目だよ」

「あんまり怠けてばかりゐるからだ」

世間では仕事に念を入れ過ぎて書けないやうに解られてゐるが、——彼自身も幾らかその氣でゐるらしいが、私からいへば彼は子供からの只の怠け者に過ぎない。

「それは怠けてもゐるが、少しつめて机に向ふと、胃が惡くなつたり、熱が出たり何かしら故障が起こるんだ。實際不思議な位だ」

「ふだん、やりつけない事をすると直ぐ身體に障るといふ部だよ」

「その通りだ」

二人は笑つた。

風は時々往來の砂埃りを捲き上げ、大砲の烟のやうに押寄せて來た。私達は幸ひ、風下を向ひて居たが、それに向ふ人々はその度立止まつて、背後を向くか、帽子を顏に當てるかして、やり過ごしてゐた。別に用もない私達ではあつたが、知らず／＼急ぎ足に歩いてゐた。

往來は割りに賑やかだつた。私は向ふから肥つた女の人を乘せた一台の俥の來るのを何氣なく見てゐた。女の人は四十以上に見えた。はつきりした眼鼻立ちの、色白で、でつぷりと肥つた如何にも豐かな感じの人だつた。髮は無造作なひつつめに結つて居る。女の人は一方に大きな風呂敷包みを抱え、片一方に三つばかりになる女の兒を抱いてゐた。その一人乘りの俥に食みだした樣子が可笑しかつた。

「あゝ、薫さんだ」中津は小聲でかういふと、何氣なく一寸顏を背向けたが、又思ひかへしたやうに俯向いて了つた。

俥は近づいて來た。中津が心の平靜を失つて居るのが分かつた。彼は顏を赧めて居る。私には彼の左ういふ樣子が如何にも子供染みて見えた。何をそんなにドギマギしてゐるのだらうと思つた。

俥がそばに來た時に彼は不意に顏を上げ、いやに叮嚀なお辭儀をした。女の人も一寸頭を下げたが、それは中津を中津と認めて下げたのではないらしかつた。女の人は尙不審さうに凝つと此方を見て居た。

此時、丁度又大砲の烟のやうな埃りが押寄せて來た。兩手の寒がつてゐる女の人はそれを顏へ眞正面に受け、顏中の筋肉を鼻へ集め、妙な顰め面をした。それでも薄眼で此方を見てゐたが、漸く彼を認めたらしく、

「あら……！」左う云つて子供の頭の上で窮屈さうに頭を下げた。そして女の人はその奇妙な顰め面のまゝ、擦違つて行つた。

「君はあの人を見たかね」暫くして中津が云ひ出した。「見た」と云ふと、彼は續けて、

「あれは薫さんと云ふ人だよ」と云つた。

「ふむ」

「僕の初戀の人だ。そして今でも戀人なのだ」

「戀人？」私は多少吃驚して訊き返えした。

「左うだ、戀人と云つていゝだらう。勿論僕だけの氣持でいふのだが」

「むかうの人はどうなのだ」

「薫さんは何んにも知つてやしない。初めから仕舞ひまで何んにも知つては居ないのだ。僕は遂に打明ける機會なしに失戀して了つたのだ」

「打明けない內にあの人が結婚して了つたのか」

「左うぢやあない。僕があの人を意識にのぼらして戀し出したのは五年程前、あの人が未亡人になつてからの事だ」

「然し、それが君が云ひ出さない内に再婚したんぢやないか」

「いや、あの人はその時から未だにずつと一人で居る」

「今の小さい子供はどうしたのだ」

「あゝ、あの子供か。あれはあの人の孫だよ」

私は危くふき出しかけた。然し今、頭も胸もその人の事で一杯だといふやうな彼の眞剣な顔つきを見ると笑ふわけには行かなかつた。勿論私は此親しい友を笑ひ者にしようなどゝは毛頭思はない。が、笑はないまでも兎も角、それは可笑しな事には違ひなかつた。一體中津はこれまで餘りラヴストリーは書かない方だつた。私は恐らく彼自身の經驗に書く程の事件がなかつたのだらうと思つてゐた。實際彼は書かないばかりでなく話しさえしなかつた。所で、今私は彼から左ういふ經驗のあつた事を聞き、その戀人を眼のあたりに見る光榮をも持つたわけである。

「君は何故それを作物に書かないのだ」

「書く時期が來たら書くつもりで居る」

「話す時期が來たから話したのか」かう云つて私は笑つた。私はそれを別に厭味のつもりで云つたのではなかつたが、彼は左う解つた。

「別に隠す氣ではなかつたが、話す機會がなかつたのだ。然し君が聽いて呉れるなら僕は喜んで話す」

「左うか」

「君は聽いてくれるかね？」

「勿論喜んで聽く」

以下はそれから彼の話し出した彼の「薰さんの話」である。然し此話は餘り精しく書くわけには行かない。何故なら、時期が來れば彼自身精しく書くつもりで居る材料だからである。

僕が薰さんを初めて見たのは姉の結婚披露が紅葉館であつた、その時だつた。薰さんは先の親類の一人として來てゐた。四つ位になる男の兒と多分十位になる痩せた女の兒とを連れて來てゐた。良人といふのは或る官省の課長をしてゐる痩せた小さな人で、評判では所謂切れ者の官吏としても先のある人だといふやうな事だつた。年はよく分からなかつたが、薰さんのあの大やうな豐かな感じとは全く反對に、變にひねこびた感じがする、大分年のいつた人に僕には思へた。後で聽いた事だが、薰さんは元來此人の弟の所へ行く筈だつた。それが結婚間際に弟が死に、それで話はそれ切りになりかけたのだが丁度その頃今の良人が細君を亡くなし、子供もない所から、その方へ來ては貰らへないだらうかといふやうな話になつた。元々弟に對して別に愛情があつたわけではない。で、云はれるまゝに薰さんは今の良人の所へかたづいて來たのだといふ事だ。

薰さんは僕の祖母と火鉢を挾み、女持にしては少し太過ぎる舊式な銀烟管で、うまさうに烟草をのみながら、何か切りに話し込んでゐた。僕は遠くからその樣子を見、その人に對し、今日初めて見た人ではない、前からよく知つてゐる人だといふやうな親しい感じを持つた。兎に角薰さんは僕にとつて、一人の立派な母性として映つてゐた。少なくも其時はそれ以上で惹きつけられて居たとは思へない。當時僕は二十で、高等學校に通つてゐた。

その後薰さんとは時偶に會ふ機會があつた。直接の親類でないからお互の家としての交渉は殆どなかつたが、姉の家で何かある場合、よく其所で落ち合つた。

或る時僕は姉から、蕙さんが近頃神經衰弱で轉地して居ると云ふ噂を聽いた。何の屈托もなさゝうな、あの大やうな蕙さんにもそんな事があるのかしらと僕は不思議な氣がした。それを云ふと、未だ娘つ氣の脫けない姉はいつも癖で、眼に角を立て、さも輕蔑するやうに、

「蕙さんといふ方は、お前さんなんぞが考へてゐる、只それだけの方ぢやあ、ありませんよ」と云つた。

そして姉は、蕙さんが結婚してから後、或る戀愛事件の爲に家を飛び出した事のある人だといふ話をした。これは僕にとつては全く思ひがけない事だつた。

蕙さんの父といふのは自由民權といふやうな事を云つた政客の一人だつた。最初他の專門で外國へ行つたのが、向うで中江兆民などゝ親しくなり、歸つて來た時にはもう一トかどの佛蘭西仕込みの政論家になり濟ましてゐた。かういふ人だつたから、初めの內は地方遊說などに大勢の壯士などを引連れて步いたものだが、それも或る一時代で、その後或る新聞の主筆として、前とは生活も幾らか落ちついた頃には、以前の壯士流の人間は余り出入りしなくなつた代りに、私立大學出といふ種類の青年達が大分その門に集まつた。蕙さんの戀愛事件の對手だつた岸本といふのはその仲間の一人だつた。

地方出の、今見る蕙さんのやうな肥つた、――當時十七八の蕙さんは今のやうにあんなに肥つた人ではなかつたさうだ。すらりとした、そうもいへまいが、兎に角、せいに延びる年頃で普通の娘らしい若さを持つた人だつた、――が、今いふ岸本といふ人は丁度今の蕙さんのやうにでつぷりと肥つた如何にも落ちついた所謂膽汁質といふ側の人で、眼尻の下がつた、風采は普通いふ好男子とは遠かつたが、何かしら人を惹きつけるものを持つた、信頼するに足るといふ感じを與へる方の人だつた。蕙さんは戀とは知らず只だ心の中で此人を好いてゐた。其人も亦、蕙さんに對し、同じやう

な氣持を持つてゐたが、さりとて、互にそれを氣にも現はせない妙な一種の神經質を持つてゐたのだ。つまりは互に思ひながら、對手の心を少しも知らずにゐた。

薫さんの父は比較的自由な考へを持つてゐた人だから、その氣持を何方かで一寸でも現はす事が出來たら、堰かれた水は一時に流れ出し、萬事はうまく運んだに違ひないのだが、其所が、互の神經質で自分だけの氣持とのみ思つてゐたから、氣にもそれを現さうとはしなかつた。しかも、それなら、それで仕舞ひまでそれで過せば何の面倒も起らなかつたが、薫さんが結婚して一年余り、薫さんの父が死んだ時に、そのお通夜で二人が一緒に夜を明かし、はしなく、その事が兩方の心に通じて了つた。これはよく云ふ運命の惡戯とでも云ふやうな事だつた。

岸本といふ人はしつかり者だけにかう云ふ事にも態度は明瞭してゐた。自分は勿論結婚を切に望んでゐる。然し貴女が今の良人と別かれて出て來る手傳ひまでは出來ない。それは貴女自身の領分内の事だ。其所まではどうしても貴女自身で解決をつけて來なければならぬ。然し若しそれだけを貴女自身で埒をつけさへすれば、後は總て私がやる。對世間の事柄でも何んでも。そのためにどんな犧牲を拂ふ事も自分は決して辭さない。貴女はその自分の領分内の事を自分で處理出來るだらうか？かう云つたさうだ。薫さんは「やります」と答へた。其場では勿論自分でやつて見せる氣でゐたのだが、扨て家へ歸つて見ると、此關所は却々左う易くは破れなかつた。薫さんは悶えながら空しく日を過すより仕方がなかつた。薫さんにしろ無斷で飛び出すなら、出來ない事ではなかつた。然しそれでは岸本の云ふ解決にはならなかつた。實際かういふ難問題を女に課するといふ事は無理である。岸本がもつと女といふものをよく知つてゐたら、かういふ難問題は課さなかつたに違ひない。が、彼は未だ若かつた。その上總てを理想的に考へる方だつた。彼は女に出來ない事を女に要求したわけだ。そして彼は獨り薫さんの出て來る日を力瘤を入れて待つてゐた。

薫さんからは時々手紙が來たが、要するに女らしい愚痴ばかりで、それには少しも其事に突進んで行く力が現はれてゐなかつた。岸本は歯がゆかつた。が、最初の決心通り、彼はその事には直接一指をも加へない氣で返事さえ出さなかつた。薫さんの方はどうしても岸本の力を借りなければ此關は破れない。そして空しく幾月かゞ過ぎて了つた。

岸本の方も苦しかつた。その事が自分の領内に入つて來た場合には、どうにでも片附けて見せる氣ではゐるものゝ、未だ其所まで來ない今、彼には力の入れやうがなかつた。彼は何事も手がつかず、蛇の生殺しで日を送つてゐたが、仕舞ひには流石の彼もそれに堪えられなくなつた。もう仕方がない。いつかはその日が來るに違ひないが、それまで自分はかうして手を束かねて待つてはゐられないと思つた。彼は一年でも二年でも息抜きに亞米利加へ行くことにした。

岸本は此場合薫さんに無斷で行つて了ふわけには行かなかつた。彼は寧ろ事務的に、いつ幾日の船で渡米するといふだけの手紙を薫さんへ出した。そしてその前日彼は横濱の西村といふ船はたご屋へ行つてゐると、夜晩くなつて、突然薫さんが家を飛びだし、其所へ訪ねて來た。薫さんは此儘自分もどうか連れて行つて吳れと泣いた。これは薫さんとしては精一杯だつた。薫さんは良人に宛て手紙一つ殘し、着のみ着のまゝで出て來たのだ。

これには岸本も弱つた。來て吳れた事は嬉しかつたが、薫さんのいふやうな事は出來なかつた。それでは最初から約束の本統の解決にはなつてゐなかつたし、兎に角、未だ人妻である薫さんを此儘同じ宿へ泊めるわけに行かなかつた。彼は止むを得ず薫さんの實母に直ぐ來て吳れるやう電話をかけた。

二人――實母と良人は終列車で來た。良人はわざと岸本と會ふ事を避け別室に入つて了つたが、その意を受けた母親から岸本は薫さんが既に妊娠四箇月である事を聽くと、彼は崖からいきなり突き落とされたやうに感じた。

良人の云ひ分はかうだつた。岸本の此事に處する態度の公明正大である事を先づ充分に認め、それで自分の方でもこ

れを疋夫疋婦の痴情の爭ひには、したくない。で、薫さんの心がそれ程にまで貴方の方へ傾いてゐるものなら、自分の方も薫さんに對する愛がさめたわけではないが、潔よく彼女をあきらめるつもりだ。けれども、只一つこゝに條件がある。それは今薫さんの胎にある子供の事で、此未だ見ぬ兒に對する父親の責任として、此儘薫さんを米國へやつて了ふ事は、どうも忍び難い。夫婦の關係は此まゝ切つても差支えない、が、胎の兒が無事に生れるまでは實家へやつてなり、又別居なりしても薫さんを自分の手近かに止めて置きたい。この事は貴方ばかりでなく薫さんにも是非快く認めて貰ひたいものだ。かういふ話だつた。

岸本はその話を聽きながら夢から覺めたやうな變に白らけた氣持になつてゐた。彼は理想家だつた。その彼にとつて薫さんが姙娠したといふ事は實に晴天の霹靂にも等しかつた。四ケ月といへば彼と心を打明け合つて一ケ月か二ケ月後の事だ。左う云ふ事があり得るものだらうか。

彼は勿論、その場では何も云へなかつた。そして翌日彼は淋しい姿で二三の友に送られ、一人米國へたつて行つた。その後岸本からどう云ふ事が薫さん、又薫さんの良人の方へ云つて來たか分らないが、兎に角岸本はそれから十年餘り彼方へ行つたきり日本へは歸つて來なかつた。そして歸つて來た時にはその爲めばかりでもあるまいが、直ぐ滿洲の方に仕事を見つけ、その方へ出掛けていつたといふ事だ。未だに獨身でゐるといふやうな噂もある。そして薫さんがそのまゝうやむやに良人の家に落ちついて了つた事は云ふまでもない。

此話は僕には全く意外だつた。此話で僕は僕の頭にある薫さんといふ人間を全く作り變へねばならなかつた。何所にさういふ熱情をあの人は隱してゐるのだらう?さういふ熱情が今も尙あの人の何所かに隱されてあるのだらうか、左う思つた。が、僕が左う思つたのも實は束の間だつた。僕はそれでこそ、あの人があの人らしくなつた。それでこそあの

人が丸彫りになつたのだ、と、直ぐこんなに思ふやうになつた。僕は今まであの人を余りに平面的に見てゐた。それは岸本があの人の嫉妬に幻滅を感じた事が余りに平面的な見方からであつたと同様であると考へた。

それから年月が經つにつれ段々に薫さんといふ人が僕には明瞭（はつきり）して來た。同時に平凡にもなつて來たが、薫さんに對する知らず／＼の好意は少しも變らなかつた。姉の家で落ち合つたりすると、その日一日、或は翌日までも私は云ひしれぬ淡い幸福を感ずる事がある。然しそれが薫さんを自分が戀してゐるからだとは僕は少しも考へなかつた。臆病者の僕にはそれは考へられない。人妻を戀ひする。――左ういふ經歴を持つた人だから戀する、若しかうなつて來ると、それは尙考へてはならぬ事だつた。が、事實は僕は矢張り薫さんを戀してゐた。只それを意識に上らせる事がどうしても出來なかつた。これは臆病といへば臆病だが、人間はそれでいゝのだと思ふ。時には人妻を好きにならぬとはかぎらない。然し好きは好きでも、それ以上に自分で嵩じさせないのが人間の運命に對する知慧なのだ。

僕の薫さんに對する氣持はかう云つた不即不離の狀態のまゝ續いた。どん／＼月日が經つた。その間に話すべき事も別に起こらなかつた。さうして今から五年前、初めて薫さんに會つた時から云へば七年目に薫さんの夫はインフルエンザで亡くなつた。

或る日僕は祖母と姉とがこんな話しをしてゐるのを聽いた。

「薫さんは今、お幾つかね」

「左うね、割りに老けてお見えになるけど、お三十四かしら、五かしら」

「未だお若いんだね。」

「左うよ、私とは五つか六つしかおちがひにならないのよ。本統にお可哀想ですわ。

「でも、もう再婚はなさらないんだろ」

「それが、分からないの。若しかしたら、左ういふ事があるんぢやないかと私は考へてるの。別に變な話ぢやありませんけどね、大分年のいつた方で元〇〇鐵道の社長さんだつた方から左ういふ申込みが、あつたとか、なかつたとか、何だかそんな事を此間うちが云つてゐましたよ。——うちがその方に頼まれたのかしら………」

「それでお子さん達の方はいゝのかね」

「それですわ。私もそれを云つたんですよ。處が、雪子さんの方はもうやがてお嫁にいらつしやるんだし、茂さんの方は當人さへ承知なら、此方へ引きとつて今まで通り一緒に暮らして少しも差支えないと、何んだか話が大變直なのよ」

僕は左ういふ話を聽いてゐる内に、その席に居堪らない氣持になつた。僕は何氣なく起つて自分の部屋に入つて了つた。

然しそれから間もない或る日だつた。僕は又姉の口から、薫さんがその話をきつぱり斷つたといふ事を聽き、思はずほつと息をついたものだ。

薫さんの年に就いて、誠に迂濶な話ではあるが、僕はこれまで判然考へたことはなかつた。只漫然四十越した小母さん——姉といふよりも明らかに小母さんといふ氣持でそれを考へてゐた。所が、姉の話によれば、姉と五つか六つ違ひ、自分から云へば六つか七つの違ひ、——左うなると、こゝに今まで全く考へられなかつた事が考へられて來た。全く望み得ないやうに思つてゐた事が滿更望めない事ではないと云ふ氣が僕にはして來た。僕はどうしたらいゝか。手近い所で矢張り姉に相談すべきだらう。姉が又例の意地惡い調子で僕を頭から馬鹿にするに違ひない。或はてんで取合つてくれないかも知れない。が、又こんなにも考へた。根が善良な性質だけに此方の心を汲んで、案外本氣にその爲め盡

くしてくれるかも知れぬ。何はしかれ、自分は機りを見て姉にこれを打明けて置いてもいゝ。左う考へた。

が、かう考へながら、矢張り僕は具圖々々してゐた。自然な云ふべき機會も捕えられなかつたし、我儘者の姉から頭ごなしにやられるのも、業腹な氣がしてゐた。その內、或る日突然、それは全く突然、僕は薫さんの訪問を受け、我ながら可笑しい程に甚く亢奮して了つた。薫さんは實は祖母を訪ねて來たのだが、取次が留守だといふと僕の名を云ひ、會ひたいと云つた。

「お邪魔ぢやないこと？」薫さんは例の落ちついた樣子で親し氣に云つた。

「いゝえ、どうぞ」僕は左う云つて薫さんを座敷へ通した。

薫さんはいつにない寬いだ樣子で話して吳れた。僕の事も色々訊く、――と云つて別に立入つた事ではなく、何が好きかとか、何をどう思ふかとか、そんな事だが、釣込まれて僕も段々氣樂な氣分になつて行つた。どの位話したらう。

「お祖母樣は却々お歸りになりさうもありませんね」

「さあ、もう歸るかと思ひますけど………」

薫さんは祖母に用事でもあるらしく、歸りを待つた。僕は少しでも長く薫さんに居て貰ひたかつた。

薫さんは一時間程ゐて歸つて行つた。僕は其日ですつと薫さんに近づく事が出來た。薫さんの方からもずつと近づいて吳れた。その好意が、僕には通り一遍の好意とは思はれなかつた。全體これはどう云ふ事だらう？自信の乏しい僕は直ぐ左う疑ふ氣にもなる。自分は何所までそれに附け上つて考へていゝのだらう。僕は僕の好意を何の程度まで表明する事に成功したらう。それを薫さんはどう解して吳れたらう。

僕は余りに自分が臆病であり、そういふ事に自信のないのを齒がゆく思つた。自分は薫さんより年下ではある、が、

兎に角俺は男ではないか、男がこういふ事に何時までも受身でゐるといふ法はない。俺は一度此方から燕さんを訪ねて行かう。

それから三四日しての事、姉は前に電話で僕達が家にゐるかどうかを確めてから出掛けて來た。姉は上るなり、人の悪い微笑を浮べながら、

「今日は榮さん、お前さんの事で、少し御相談があつて、來たのよ」と云つた。僕はそれだけで、或る豫感からどきりとした。

中津は此所まで話した所で、改めて私の顔を見ていつた。

「君、この姉の云ふ相談といふのがどういふ事だつたか分るかね？或はもう大概見當がついてるかも知れないが、燕さんの娘の雪子さんを僕に貰ふ氣はないかといふのだ。燕さんが自分でそれを姉の所に頼みに來たのだ」

「左う………………」

「これが僕に何を意味するか──萬事休矣。今更母親の力と結婚したいとは云ひ出せないぢやあないか。僕は姉の此一言で見事崖から突き落された。岸本が姙娠を聴いて突落されたやうに一ト思に突落された。しかも前は胎兒、今度は同じ人が雪子さんとなつて僕を突落した。先づ因緣とでも云ひたい所だ」

「直ぐ斷はつたのか」

「勿論斷はつた」

「それから君はどうしたかね？」

「何をする事があるだらう？僕の燕さんに對する心持はそのまゝ永久に葬り去られたのだ」
「陽の目を見ずに………」
「燕さんの訪問で陽がさしたと思つたのは勘違ひだつた」
「君はそれを何故書かないのだ。君の今の話だけでも話になつてゐるぢやあないか」
「實は僕は此話から二つの主題を見出してゐる。それはその內短篇に書くつもりだが、今僕が話したやうな事を其儘書けない氣持は分るだらう？」
「分らないね」
「若しその儘書くとすれば、とりもなほさず、それは燕さんに宛てた僕の戀文になつて了ふぢやないか。僕は今更燕さんに、左う云ふ戀文を書かうとは思はないよ」
私は不圖、先刻擦れちがつた時の、女の人の、顰め面を憶ひ出した。

（完）

（十二月二日城崎にて）



時計のいたづら

佐藤春夫

第一章

机の上から枕もとへ持つて來た時計を臥ながら弄んで、その持主は、そのしやれた時計が今さらにひどく氣に入つてゐる。趣味のいい代物だと信じてゐる。薄手の、さりとて、華車に失しない銀時計で、わざと少々古風に細工してある。そのさえ〴〵とした光澤のいい文字板には、ダイヤモンドといふ型の――いや、それよりはもつと小さいかと思へる活字で

ULYSSE NARDIN

LOCLE & GENEVE

と書いてある。くつきりと美しく並んでゐる。*Ulysse Nardin Locle and Geneve* と彼は口のなかで二三べん呟いてみて、ひよいとそれがウヰリアムーブレヱクの詩句か何かのやうな響があるやうな氣がする。――「對句のやうに美しい脣」か。どう

と

してだか我々の主人公はふとそんなことを思つた。——この男は永年の神經衰弱で一種の輕微な意想奔逸に落入つてゐるからであらうと思ふ。彼は小ブルジョアで兼ねてへぼ詩人である。何をして食つてゐるのだかそこまでは僕も知らん。即ち、私が今、ピンセットで摘み上げたこの男はサロン文學の駄作の主人公には持つて來いに出來てゐる。さうしてこゝでもう一つ序に注意すべき事は、私が偶然にこのやうな人物を拾つたからこのやうな話を書くのであつて、敢てこのやうな話が書きたくてこんな主人公を探し出したのではないといふ事實である。これ等のことを御承知の上で、親愛なる讀者諸君よ、この波瀾曲折に富んだ物語は讀まれなければならない。さうして諸君の何よりの急務は讀んで感心することにある。

——これは一見つまらない時計のやうだが、そこらにざらにある金時計などよりは倍も好いんだからな。——我々の主人公はどうやらそんなことをちよつと問題にし出した。——みんなは、どうもこいつを安物のやうに見ていけない。心外だが、さればと言つて吹聽してしまつたのでは、折角のこの時計の奥床しさに對して申しわけがない。……が、見る人間が見ればちやんと判るんだ。現にこの鎖を——と、そこで彼は今度はその白色のどツしりとした鎖の端を高くつまみ上げて、そいつを疊の上へザク／＼と音をさせながら置いたり、また持ち上げたりして遊びながら——この鎖を買つた時だつても、こいつが果して時計に似合ふかどうかを試さうと思つてポツケットからとり出すや否や、店の主はそいつを横目で素早く見て取つて、

「失禮ながらちよつと拜見させて下さいまし」

と、恭しく手を差し出しながら、

「へへえ」と感に打たれたやうな聲を出して「何と！高尙なものですな。こら！　みんなも拜見させていただきな。こ

れや珍らしいお品だよ。――すつきりとしたものですねえ」

いかにもつく〳〵とさう言ひながら中僧や小僧たちにも見せたものだ。それから店の主人は、彼が買はうかどうしようと迷つてゐた一つの鎖を、匣のなかから外すと、それを時計にぶらさげた形で持ち副へながら、

「さよう。細くも御座いませんやうですな」

と言つたものである。實をいふとその鎖は大して彼の氣に入つてはゐなかつたのに、その場の呼吸でつひうつかり買ふ氣になつたのであつた。時計をほめておだてて置いて、主人はうまく鎖を賣りつけた……そんなことは俺だつてちやんと知つてゐるよ――と彼は考へた。だからこそ、思ひ出すと、そいつが少し業腹で、從つてこの鎖は、――と彼はその鎖を指から放してしまつた。鎖はザク〳〵と落ちて、グシヤリト丸まつて、ギラ〳〵と電燈の光に眩しくかがやいてゐる。彼はそれを見つめながら、不意とその鎖がだん〳〵いやになつて來てしまつた。さうしてさういふ視線を五分ほどつづけてゐるうちに、彼の心はその鎖に就てほゞ三段に分つことの出來る進行を加速度的につづけた。

第一にはその品質に對する憎惡である。それはプラチナでもなく、ニツケルでもない、又ホワイトゴールドでもない。ごく新しい一種の人工貴金屬で、しかしそれはそれ自身で獨立的に權威があるといふよりも他の最も貴重な物にそつくりだといふので、つまりは物欲しさと淺ましさとの傑作であるといはなければならない。かつて或るカフヱのウヱイトレスが全く若い貴婦人のやうなスタイルで店へ通ふてゐるのを見たことがあるが、さうして其志や憐むべしと思ひ、同時にその姿や愛すべしとも思つてつく〳〵その後姿を見送つた事があつたが、この鎖も多少此ウエトレスに似てゐる。簡單に云ふと、この代物は目方に於ても光輝に於てもプラチナにそつくりなので、その點に於てはホワイトゴールドなどのやうな間抜けなものではないとは言へ、やはり、一種のイミテーションに相違ないのである。高いなら高い、安いならば安

い、さうしてもつと純粹な、且つ素狀の何人にもわかるやうな特つことは趣味の士としての心がけでなければならない。

第二には、その細工がごくありふれた奴で、彼は最初にはその平凡な處が飽きが來ないだらうと思つたのであつたが、かうしてその品質に對して不滿を抱き始めると、その細工までが、飽きないどころかいよ〳〵曲がなくつまらなくなる。せめてこの細工が時計に打つてつけの趣味ででもあつたならば、そこにまた理由も發見出來やうといふものであるが。……なに、氣に入らないとなりや直ぐにも取り返へればいゝさ、何も女房をとり代へるのとは違ふ、煩悶する事はない。

第三に、これは第二の末節に接續して甚だ有效であつたが、あの時、あの店の主人の話ではこの鎖の金屬はつぶしにして一匁十六圓でならいつでも引取るのだし、これは四匁三分あるのだから１４が４の４６の、24、１３が３の、３４の12ええと、――ともかくもあまりたいした損ではなしに、この鎖は取換へる事が出來る。……

彼は、そこでもう一ぺん、その時計と鎖とに目をやつた。今まで氣がつかなかつたが、まあ何といふ不調和だらう。――不調和。不調和。まるであの女があの男の女房になつてゐるやうなものだ彼は手をのばして電燈をパチンと消すと、「對句のやうに美しい脣」……ふともう忘れてもいい彼の女の顏を思ひ出し、それが……、我々は此の氣まぐれな男のわけても今夜のやうな氣まぐれな晩の聯想について行くことは出來ない。ロオーレンス、スターンではないから、要するに彼はそんなとを思ひながら寢たのだ。

第二章

あの晩、あんな風に――といふのは第一章に書いたとほりであるが、あんなゆつくりと時計を見たことも、どうやら

こんなことになる約束があつたからかも知れない。一たい、あの鎖のことをあんなくそみそに思つたのがそも〳〵よくなかつた。自分でケチをつけてしまつた。時計はもう多分現はれないだらう。昨夜も捜したのだし今日も捜したのだ。

それにしては一たい誰が盗んで行つたのだらう。

せつかくの秋晴が、さうしてその散歩が、どうも面白くない。忘れてゐる時でもその失はれた時計が潜在意識にあり、しかもいつも潜在してゐてくれればまだしも、それがひよくりと表面へ浮出して來る。

――尤も、捜したと言つても、二度ともそそくさと見ただけだ。留守にT子がゆつくりと捜して置いてくれれば出て來るだらう。いや、やつぱり出ないかも知れない。さうさ、あの晩の事が何しろどうもよくない。

「おい、A」と彼はふりかへつて同じ散歩者のAを呼んだ「どうだね。時計はあると思ふか。無いと思ふか。賭をしよう。俺はもう無いと思ふ。あつたら祝ひにおごるよ――あの時計は俺の氣に入つてゐるんだからな。鎖もさ」慌ててさうつけ加へた。賞めると出て來るやうな氣がしたからだ。彼はAに「あると思ふ」と言つて貰ひたかつた。そこで自分では無いと思ふ方を言つたのだ。しかしAは言つた――

「さあ。どうもやつぱり無いやうな氣がするな。」

「え。」彼は心細さうに「それぢや、ふたりとも無いと思ふぢや賭にならないぢやないか。何故ないと思ふ?」

「そんな豫感がするんだよ」とAは答へた「でもね、僕は昨日の三時ごろに、あの机のわきの窗の上で見たんだよ。それからあそこの窗はあのとほりだし、窗の向ふでは二軒の家の物干し臺があるだらう。手を延せば直ぐだ。僕はその時、これやちよつと不用心だなと何氣なく思つたところだつた。……」

「ふむ、そんなことを考へたかい。それぢややつぱり物干し臺で物欲しいと思はれたかな」

そんな冗談を言ひながら彼は心では、ああやつぱり駄目かなと思つた。弟のAがそんなことを像想したのは全くよくない。この間金を落した時だつてもさうだ。自分でこれやこんなことをしてゐると金を落してまふわいと思ひながら、今度氣がついた時にはもうなかつた。一たい我々の一族は不思議と第六感が發達してゐるので、この間金を落した時だつても……彼は、もう一ぺん又同じことを考へ直して、――この間は金を落し、今日は時計を無くし、十日とは經たないうちにつづけさまにこの始末ぢや、今に何が起るかわからないやうな氣がして彼はすつかり悄氣てしまつた。

「おい！おい〳〵！」

突然、Aが呼びかけるから首を上げると、

「Hさんだよ」

見ると、彼の鼻のすぐ前にHが立つてゐる。

「や、おかへりですか。今お宅へうかがつたところでした」

「はあ」

彼は氣のない返事してゐる。

「もう歸るところですよ。一緒にお出なさい」

彼があんまりぼんやりしてゐるので、Aが歩き出しながらHにさう言つた。彼もやつと氣がついて、

「さう。さ、一緒に行きませうや。――實は僕、今日、時計を無くしちやつてね」

Hも彼等と同じ方へ歩きながら「へえ？道でですか？」

「いいや。うちで。出がけに無いことがわかつたんだ。いや、昨夜からなかつたのだ。ゆうべ客があつて時間を聞くか

ち、見ようと思つたらいつも置くところに無い。その時も捜したのだがそのままになつてゐて、今日また出がけに氣がついて捜した。無いんです」
「ははあん？妙ですな」
「妙ですよ」

第三章

家へかへるといきなり彼は、
「時計はあつたかい？」
と言ひながらつか／＼と茶の間へ這入つて行くと、そこに客がゐたので面喰つた。客が婆さんであつたので彼はちよつと辟易した。
「やあ」
と一口言つて立つたまま、彼はT子に
「時計は？」
「ありませんわ」
「え、無い。嘘だらう」
「いいえ。見えませんよ。ほんとう！」
彼はHをつれてそそくさと二階へ上つた。彼は茶の間にゐる婆さんを好かなかつた。理由は、挨拶が丁寧すぎてその

上にもう一つ、いつか立替へた金の拂へないでゐる申しわけが同樣に甚だ長すぎる點にあつた。それで彼はT子の言葉を信じなかつたけれども重ねて尋ねなかつた。T子は口ではさう言つたけれども、その顏つきには見失はれたものが出ないといふ人の絶望が少しも熱情的に現はれてゐなかつた。T子の言葉は冗談にしか思へなかつた。T子の言葉は寧ろ彼に安心を與へた。わざととぼけてゐるやうにとれたからである。しかし弟のAがつづいて二階へ上つて來た。こんなことを呟きながら——

「さてな。どうしたのだらうな。氣がかりでいけないな」

「なあに。あつたんだらう。あるのを出さないのだらう。」

「さうではないさうだよ。本當のことを聞かせろといつて今よく聞いたんだよ。本當に見つけないさうだ」

「本當か。ふむ、困つたな……」

「一たい、どこへお置きになつたのです」この心配を共有しなければいけないといふのでHも、そばからさう言つた。

「ここの上——」彼はふりかへつて手を差し延べて自分のうしろにある机の、そのわきの箱を指した。斑竹で出來た支那風の小さなものである。「ここの上へいつも置いておくのです。きのふもね、三時ごろには弟がここで見かけたのです」

「確にあつたのだよ。僕が出かけやうと思つて、ちよつと時間を見たら、ちやうど三時二十分ごろでした」

「それから客が來たのは夕御飯の時だつたから、その時、時計がなかつたのだから、三時半から六時半までの間の事だね。ふむ——」彼の頭の中には今まで影であつたものが、むつくりと現はれて鮮やかに活躍し初めた……

「ちやうど夕御飯のころですね。——茶の間に下りてゐらしつたのですか」

「え！――ちやうどその頃。夕方。ちやうど干し物をとり込む時刻ですね。きのふもいい秋晴れだつた……」その日見た一つの光景を彼は思ひ出した。

「うむ。――一たい、どうも不用心なところにあつたと僕は思つたのです。不思議とその時計を見て出かけた後でね」

「窓はあけてありましたか」

「いや、閉めてはありましたがね」

「だが閉めたつて何にもなりやしない」弟と客との問答へ彼がかう言葉を挾んで、つと立ち上つて窓のところへ行つて「ね、これです」――開けてあつた窓をぴしやりと閉めた。その障子の眞中は一尺五寸に二尺ほど、ガバと穴があいてゐた。ガラスの嵌つてゐたところである――「この間の大風に、戸をしめずにゐたら、ガラスは飛んで破れちやたんです」

「ははあ、かうなつて閉まつてゐるくらいなら、あいてゐる方がまだましですね。」

「さうです」彼はそこの穴へ手をかけて、ピシャリと障子を開けながら「さうしてここはこのとほりです」さう言ひながら外を眺めた。彼のするとほりに客も立つて來て覗いた。

「なあんだ。これやすぐ屋根つづきですね。いや、何だつてあんまり近すぎる。おや、あそこの屋根は何です」

「あれは鹽せんべいやの屋根でしてね。あの板の上へ一面に、毎日なまのせんべいを干すんですよ。――赤いせんべいを干すとこの障子へ赤く映る程にねえ。毎日幾人も人が昇りますよ。屋上工場だ。しかし今までにものをなくした事はありませんよ。もつと近いところをごらんなさい。そら、目の前に細い柱がありますね、向ふにも。ここが、この下の家の物干し場です。ね――」

彼はさう言ひながら、ひらりとその窓を飛び越した。それから次の時間には自分の家の狭い板庇の上に下りてゐた。そこと隣家の屋根とは五寸とはへだてていなかつた。彼は足を踏み出す眞似をして、他の二人にそこを越すことが平地を歩くと同様なことを默つて示した。それから手を差出して台の上をさわつた。

「しかし、あなたは背が高いから」とそれを見ながら客は言つた「ですが、私のやうに背の低い人間だつたらそこから、この台の上のものは見えますかな」

彼は早速に五寸ほども身をこごめてみた「見えますよ、よく見えますよ」

「おい、もうやめた方がいいよ」と弟が彼に言つた「近所で見てへんな眞似をしてゐると思ふよ」

「知らない人はへんな眞似をしてゐると思ふ。知つてゐる人があつたらひやりとする」

「今度やらうとする人間には手本を見せてやるか。ヘ、ヘ、ヘ」

彼は再びぴよこんと窓を乘り越えて今度は自分の部屋に居た。

いつの間にかT子がお茶を持つて二階へ來てゐて、

「おや、何をしてゐらつしやるの」

「何、運動をさ」

「時計は？」

「無い！」

「さうお？」

T子は直ぐに下りて行つた。

彼等三人は茶をのみ初めた。と、彼は危く含んでゐた茶を噴き出すところだつた。」
「何です。何がそんなにをかしいのです」
「いや、なあに。西洋の一口話をふいと思ひ出したのでさ。裁判官が盗人を取調べてね「その方はまた何と心得て窃盗などを働いたか」すると賊が云ふのさ「何だと心得てだなんて……。戸は開いてゐる。人どほりはない。奥には金目のものが見えてゐる。これや、まあ考へてもごらんなさいましよ、旦那だつても這入らずにやゐられますまいが」……」
「ハ、ハ、ハ」

第四章

「で、客に來た人は、きのふ、誰もありませんでしたか――尤も、ここへ來てそんなことをするほどの太い人物もゐますまひがねえ」
しばらくの沈黙を破つて客がさう言つた。
「さう」と彼は答へた「大ていは一度きりの人ぢやないから。しかし、ともかくも客は三人あつたのです。ひとりは夜來てかへりがけに時間をたづねたといふその人で――これは女ですが、遠慮をしてそこの隅つこの方にゐて時計の近所などへはてんで來はしない。それにそのころには時計は既にもう見當らなかつたのです。もう二人は――さう、そのうちのひとりは來てすぐに歸つてやつぱりそこの入口のところにゐたきりでした。その間に僕は下へもどこへも行きはしない。のこりの一人だが、これがちよつと――一應は取調べられるかも知れないな。時計の方へ立つて行つて窓から外を眺めたりもしてゐたし、三時間ばかり遊んで行つたからその間に僕も下へおりたりした。それから五十圓ばかり金が

欲しいやうな話もしたよ――それがさうだ。恰も三時から夕飯近くまでゐたよ。誰だと思ひます。I君さ。我々はあの信頼すべき人物はよく知つてゐるが、警察ではわかるまい――ともかくも取調べるだらうな。I君さぞ面喰ふだらう。をかしい、嫌疑者が思ひがけなくひとり出て來たぞ」

　彼の言つたのは無論冗談だし、又I君を知つてゐるHにもAにもそれが冗談だといふことが直ぐに通じた。

「すると」と客が言つた「I君が、あなたと夕御飯前までここにゐたのだから、さうしてI君がそんな人でないことは言ふまでもないのだがら、つまり時計はあなた方が夕御飯をあがつてゐる三十分ほどの間に無くなつたのですね」

「あ、なるほど。三時二十分から六時半の三時間が、I君の信用によつて三十分に短縮したわけだな――夕飯の時刻の二十分。――あたりはうす暗くなつてゐる……」

「いよ〱無いとなれば、もう決つてるんだよ」Aが思ひ切つたやうにさう言つた。

「…………」無言で彼もうなづいた。

「あの窓のわざに相違ないですね。――一たいどんな時計なのです?――無論いいのには相違ないが」

「ええ。だが見かけはごく惡いので。銀の時計です。ただ機械はすばらしいのです。たとへば針を逆にまはすでせう。それ――セコンドの針ががちよつと戸迷ひして、しかも十秒ばかり健氣にも逆行した上でそれからやつと止るのです。それほど精密に出來てゐるのです。それに趣味から氣に入つてゐたのでねえ」

「しかし類の尠ない奴だから直ぐ脚はつくね」

「うん。しかし見かけはあのとほりの奴だから粗末なものだと思つて取扱ふだらうよ。鎖だつてもニツケルそつくりだからね」

「はア、失禮ですが一體どれぐらゐするものです」

「まあ、失禮ながら君の月給の倍ですね」

「やあ！　そいつは大變だ」客は半分意識的にしかしあとの半分は無意識にそんな聲を出した。」

「——社會主義者たる君には少し遠慮があるけれどもね」

「それほどのものと知つたら反つて盜りはしなかつたでせうね。ほんのちよつとしたものぐらゐに見たので……」

見失はれたこの時計に就て一座は熱心に評定をつづけた。

「……何しろ困つたな。とどけ出て置いた方がいいものだか、どうしやうかな」

「それや屆け出て置いた方がいいです」社會主義者Hが一も二もなく所有權の保護を力說するらしい口吻なのは、少々奇觀であつた。

「さう。やつぱり屆けるかな。もう一應よく搜した上で。……もし無ければもう見當はわかつてゐるんです——それが却つて困るんだが。……僕は實はきのふそこで、窓のところで人を見かけたのです——」

「へえ？」

「いつも見かけない人が、きのふその物干台へ登つてゐたのです。なに、張り物をしてゐたのですがね」

「へえ？」

「あれかい？」Aが頤で窓の方の或る方角を指した。

彼はうなづいて見せてから暫く默つてゐたが小聲で言ひ出した「ね、H君。あの窓の直ぐ下の屋根のなかに間借をしてゐる夫婦者がゐるんだ。細君はつひ二週間ほど前に來たのだよ。それがね、偶然のことでその結婚式——ともかくも

結婚式だ――それがすつかりうちから見えてね。といふのはうちの便所の前と向ひ合つてゐるところへ、向ふで窓を一つぶち開けてね。ぴつたり向ひ合つてそれが文字どほりに手のとどくところさ。その向ふの窓のなかが、こちの便所から何もかもすつかり、自分のうちと同じに見えるのさ――屋根を見てもわかるとほり、あのとほりくつゝいて居るんでせう。話まで手にとるやうに聞えるのでね、その細君といふのが、周旋屋(しうせんや)か、結婚媒介所がつれて來たのだがね」

「はあ?その話は私、雜誌で讀みましたよ」

「へえ!いつです」

「つひ四五日前ですよ。今お話のとほりを詳しく書いてありましたよ。自分でども見た人のやうに。……たしか「改造」で見ましたか知ら」

「畜生。あいつがもう書いたんだな。佐藤でせう」

「何でもそんな人でした」

「彼奴(きやつ)。――書くことがないものだから。ふむ然うですか。――僕も讀んでみよう。……それぢや君は御存知だらうが……その細君がね。昨日しきりにあそこの物干台へ出て來て働いてゐたのです。二十ぐらゐでせうかね。全くの田舍娘だ……」或る手癖の惡い田舍娘が、村では評判になつてゐて結婚も出來ないから、婚期を失ふまいと思つて都會の結婚媒介所へ出て來る……といふやうな想像を彼はさつきから腦裡に描いてゐた。さすがにそれは口に出しては言はなかつたがその代りに、彼は一口だけ言つた「何だか知ら、僕にはその女が氣になるのだよ」

「何ですか、さうして、その女はきのふ始めてその物干場へ上つてたのですか」

「さ。どうもそこまでは知らなかつたが。いや、確かにきのふ始めてですね。――でもあれからいつもじめじめした日

で、物を干したり張りものをしたりする日は無かつたでせう。きのふが始めての秋晴だつた……」
「すると、始めてそこへ登つてみて、いつも蓄音器などを鳴らして遊んでゐるうちだが一たいどんなうち、だらうと、ひよいと家のなかを覗き込んだりして、すぐ手のとどくところにあつたものを見つけたかも知れないですね。――一たい田舍の人といふものは、我々も田舍でよく育つて知つてゐますけれど、自分のものや他人のものなどの見さかひが、あまりはつきりとしないのではないでせうか。ちよつとそこらの花を摘んだり道ばたにあつた果物を捲いだりするやうな氣持で。無智――やつぱり一種の田舍の純朴の變形で……」
「ふむ」彼は外のことを考へてゐた。さうしてひとり言のやうに言ひ出した「……戸はあいてゐる。人どほりは無い。奥を見ると金目のものがある――か。――いや、無論のことさうと決めてしまふわけにもいかんな。ひよつとするとそこらに在るのかも知れない、――二階ではなく下にありさうな氣がする。下の柱時計がひどく狂ふものだから、それを見るために僕はI君が歸る時か何か、それを下まで送つて序にあの時計を持つておりる。それから柱時計と見くらべてゐるうちに便所へ行きたくなる。時計を握つたまま便所へ持ち込んで、氣がついてそれを窓の上へちよつと乘せて置く。それつきり忘れて來てしまふ……。どうも何だか、そんなこともあり得るやうな、いやあつたやうな氣がして來たぞ……」
「いや、そんな事が――ありもしなかつた事があつたやうに思へたりする事が、時々あるものですよ、殊にかういろ〳〵と考へ込んでゐると」
「然し、假に今もし便所の窓に時計がポツネンと置かれてあつたとしたら、ここでまたもう一度考へ込まなけやならないことが出來て來る。そこへ、一たい、僕自身が置きわすれたのだか、それとも時計を持つて行つた人が、ここでかう

して時計々々と騒ぐのを見て、殊に僕が庇屋根に下りてみたりしたのに氣味が惡くなつて、そつとあちらの窓からこちらの便所の窓へ時計をかへして置くやうなこともないとは限らない……。ええ、うるさいな。高が時計一つの事ぢやないか！」

「まあ何にしろ」とAは少しやけになりかかつてゐる兄を慰めるやうに「もう一度、篤と搜して見ようぢやないか。搜すと言つても狹いところだ。家中搜したつてもわけはない」

「それにしても成べく早い方がいいですね。あんまり遲れては屆け出るにも惡いし……」

客もさう言つて注意した。さうして皆の心のなかには駄目なことを確實にする爲めにといふ意嚮ばかりがあつた。就中、彼はここには斷じて無いことを思ふと、人々のすすめさへ氣に入らなかつた。彼は妻のT子が實に丹念な性格で彼女がものを搜す細心な樣子をよく知つてゐたからである。

「さあ？T子も無いといふのだし、ここらにある筈もないのだが。どうれ」

彼は不精不性に机の方へふりかへつた。

とたんに、ドタン、バサリ！とごく低い音がした。本の一冊でも落ちたやうに。

「あ」

Aが短い音を發した。

三十秒ほどして、

「そこにあるのは……」

「あるではないか」

客とＡとの言葉はぶつかつた。

彼も目の前に落ちてゐる一つの不思議な時計を見た。それは信じ難かつた――幻影か何かのやうに。

「その時計とは別ですか」

客がやつと完全に言葉を言つた時、彼は手を延して見ても大丈夫、時計は消えさうにもないとわかつた。

「何の事だ！」

彼は手にとつて、怒つたやうな聲だつた。それからきまり悪さとをかしさとがこんがらがつて彼はクス〳〵と笑ひ出した「こん畜生、うまく隱れん坊をしてゐたな。ちよつといたづらのつもりで隱れたら、皆があんまり大騷ぎをし出したので、をかしさを嚙み殺してゐたんです。――忍び切れなくなつて吹き出してちやつたから、その拍子に出て來たのだ」

皆も彼に聲を合せた。

「ひとりでにころがり出したのですか」

「いや、まさか！ただね、僕が何氣なく本を一冊抽き出したら、そいつと一緒に出て來たのさ。待つてゐましたとばかり」

「奥さんが、ひよつとして、そんなところへ隱してお置きになつたのぢやありませんか」

「さあ、何しろ……」

彼等はもう一度笑ひ出した。なかでも一番笑つたものは時計だつた。鎖はさまを見ろとばかり苦笑してゐる――彼にはそんな氣がする。――時計は持主の心配が氣の毒で出たくつて仕方がないのを、鎖が引きとめてなかなか出やうとは

しなかつた……
「まあ、皆さん、何がそんなに面白いのでせう。御飯を食べていたゞかうと思つて、何べんお呼びしても聞いて下さらないのね」いつの間にかT子が來て立つてゐた「まあ、あかりもつけないで」
T子が電燈のスヰツチをひねると、明るい光のなかで彼は時計を珍らしさうにもう一度見て、わざと道化た聲で
「全くこの品に相違ございません。鎖も、なかなかいい鎖だ。」
「H君。今日自慢の時計を吹聽する好機會を得たやうなものでしたよ」
「一つ大騷ぎの主人公を拜見させて下さい。」
Hに渡す時計を見ながら、T子は、
「時計々々てあつたぢやありませんか。私も隨分心配しましたよ。おかげで」

第五章

「でも見つかつてよかつたわねえ。隨分とたづねたでせう。さつきから」
みんなが食卓に就いた時、T子がさう言ひ出した。
「何を言つてるんだい。俺が捜せばすぐにあつたぢやないか」
Aと客とはまた笑つた。
「でも、無い、無い、とおつしやつたぢやありませんか」
「それや無かつたさ。捜さないうちは」

「——さつきから搜さなかつたの」
「自分こそどこを搜したのだい」
「いいえ、わたし、搜しやしませんよ。だつてお出かけになるとすぐ婆やさんが來て、旦那が御留守ならと言つて座り込んだのでせう。搜す間なんかありやしませんよ。でも、搜したやうに言はなけや、あなたがお怒りになるでせう。さうすれや婆やさんに氣の毒でせう」
「フフン。ばかにしてら。みんなお前が一生懸命さがしたものとばかり思つて……」
「だから、わたし、Aさんによく見て下さいて言つてあるぢやありませんか。——無い、無いとおつしやるから、わたし、ずいぶん氣を揉んでゐたの。きつと無くなつたと思つて。さう言へば、きのふの夕方、あしこの向ふでは（言ひながら便所の方を指しながら小聲になつて）牛肉の匂ひがして來たのでせう。まあボール箱をはつてゐてあんな御馳走をしてと思つてゐたやさきだつたから、あれやきつと時計を儲けたからだつたかしら、と思つてさ、今もさう考へてゐたところでしたわ」
「ばかな！」
彼等は別に何もかせぎもしなかつたけれども牛鍋の用意をしてゐる。T子は隣のゆふべの御馳走から今日のうちの御馳走を聯想したのだらうが、彼等には偶然のやうにをかしかつた。
「ばかな！誰がそんな泥坊があるものか！」
「さうお？」
「あたりまへさ」

「だつて、あなたも盗れたらしいておつしやつたぢやないの」

「それや、とられたかとは思つたさ。——おい、もつと炭をつぎなさい。これぢや火が駄目だ。待ちどほしい」

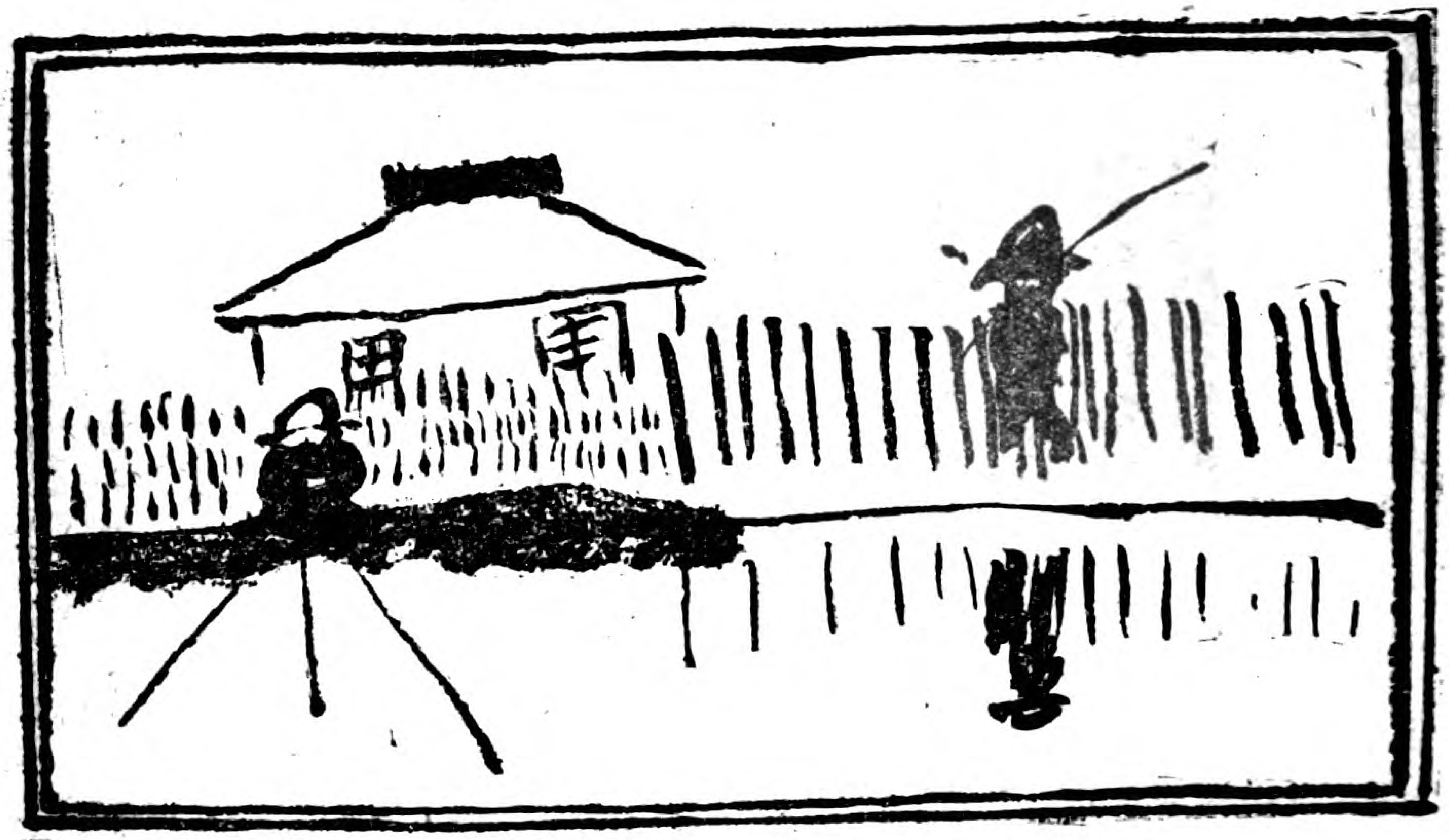
彼は火を吹いてゐた顔を上げて「フ、フ、フ、みんなしてつまらない事を言つて、やれ時計を盗んで牛肉を食つたらうの、田舎の人は自分のものと人のものとの見さかひがないからだの、晝間見ておいて夕方干し物を取込だ所にだのと、——まことにはや、言ひたい放題なことを、申しわけが御座いません」彼は箸をおいて、隣の方角へ向き直りながら丁寧にお辭儀をした。半分ふざけてゐて半分實意があつた。

「御自分で言ひ出したくせにねえ、Aさん」

「ウフフ」

「全く申しわけがないよ。——しかし、俺は時計を盗んで夫婦して牛肉を食つただらうなんて、そんな面目ない事を思ひやしないぜ。ただね。あの細君が時計をみてふとそれをとつてしまつて、それや死んだ兄さんの片身(かたみ)だけんど……とか何とか言つて、可愛いい亭主にやりやしなかつたかと思つたのだよ——だとすると、これや何でもなく屆けられないつて」彼はそこまで低い聲で言つて來たのが急に大聲で「いや何しろ、いい時計だ。いい時計だ。鎖も實に上等。だがこれからもうあんないたづらをしちやいけないよ」

皆が笑つてゐるうちに、彼は、これやまたうつかり佐藤などに言はない事にしなけや、あいつまたしめたとばかり直ぐにも、何かに書くだらうと思つた。それから、創造力のない小説家などを友達に持つことは何かにつけて、全く、金のない親類を持つたと同様によくないと思ひながら、牛肉の一片を箸でつまみ上げてゐる。



兄と歩く

宇野浩二

或晩、私はふと兄を誘つて散歩に出ることになつた。

この兄が私の家に歸つて來てから、二ケ月ぐらゐであるか、それとももう半年近くにもなるか、私はよく覺えてゐない、それほど私と彼とは同じ家の中に住むやうになつても、沒交渉に暮して居るのである。若し私の家がもう少し大きな邸宅でゞもあつたなら、私達は容易に半年以上顏を合はさずに濟ますことだらう。

だが、私たちは眞に二人切りの、同じ父母を父母とする兄弟ではあるのだ。私は今年三十四歳で、彼は私より七歳の年長である筈だから、四十一歳になる。彼は今に至る迄獨身で、(それは恐らく墓まで、)そしてこの年になるまで犬のやうに人に養はれて生きて來た、(それも恐らく墓まで。)何故といつて、彼は二歳の時に腦膜炎に罹つて、やうやく命を取止めはしたが、それと共に腦髓の機能の、どこかの一部分か或は數部分かに破損を持來したと見えた、といふのは、多くの腦

膜炎に罹つて命を取止めた人に見るやうに、彼は全然の白痴にもならずに、一二度小學校も落第しながらだが高等三年まで修了したし、從つて讀み書き算用なども一通りは出來、惡い人に接しると惡い人と感じ、優しい人に會ふと優しい人と感じ、賢い人を見ると賢い人と感じ、そして彼自身のことを、普通の人より劣つた、所謂少し足りないものであるといふことさへ知つてゐた。（彼は屢々それを口にした。）——といふ位の腦力の働きを持つてゐた。

彼の宿命的な不幸はまだそればかりではなく、四歳か五歳かの時分に中耳炎をわづらつて、それがなほつた後で、聾（といつても、全く聞えないのではないが、）になつたことであつた。だから、初のうちは、聾であるために、こんな風に少しぼんやりしてゐるのではないかと人々に思はれた位である。「おうちの兄さんは、耳さへ遠くなければ、何も馬鹿といふ程ぢやないんですから、」と他所の人たちがよくお世辭半分にいつたものである。だから、女親である母なぞは、もしかするとさうかも知れない、これで少し耳が聞えるやうになつたら、なぞと思つて、時々は微かな希望を持つたことがあるかも知れない。しかし、さすがに男親である私たちの父は、（彼は私が四歳、——だから兄が十一歳の時死んだものであるが、）兄がまだ床の上を這ひまわつてゐる頃から、彼を溜息と共に眺めながら、「こいつは、……こいつは、」と獨言にいつたさうである。「こいつは……こいつは何にしたものだらうな。困つた奴だな、まつたく困つた……」と頻りに首を傾けてゐたといふことを、私は祖母から聞いたことがある。

兄のことをいふと、俗にいふ「足りない」といふ言葉は、まつたく俗諺らしい巧みな言ひ廻しであると私はつくづく思ふことがある。といふのは、前にもいつたやうに、彼は普通に讀み書きはしたが、彼の書いたものを見ると、文字の間違ひとか、文章の出來そこなひとかが、よく世間に見る無學のための間違ひと、似てゐるやうであつて、どこか違つた。——文字の誤りでいふと、棒が一本足りない、その足りないやうか、又文章の方でいふと、何と何の續き具合が變

だ、そのつゞき方が——無學でなく、何といふのか、或種の無能（腦力の缺陷）を示してゐるやうに思はれるのである。かと思ふと、又、たとへば私が修業中に女のために間違ひをした時など、彼はどこからとなくそれを聞いて、私にいましめの手紙をよこしたものであるが、そのいふところは、普通世間の兄の言葉と變りがないと思はれるのに、そのいひ方なり、言葉なりに、どこか足りないところがある。或は又、彼が人を賞める言葉にも、貶す言葉にも、やはり同じやうな缺點があると思はれるのである。所詮、彼は、腦膜炎のために、その頭腦全體をおかされて、透明であるべきものが少し濁つたと思はれる上に、先にいつたやうに、それ等の諸機能のうちの幾つかの部分を破損されたと見るのが、最も至當であらう。

更に、彼の不幸に加勢したのは、私たちの父の若死にであつた。その外、案外僅しかなかつた遺産を、金に代へて親類に預けたのを失くされたり、いろ／＼の不幸がつゞいた末に、私たちの家が解散しなければならなくなつた時、彼は神戸にあつた、死んだ父の從兄弟の家に預けられたのである。多分、それは彼の十五六歳の頃だつたらう。それから、彼は四十歳の今日になるまで、その家にずつと居つゞけたのである。だから、私の家がなくなつて、彼が神戸に去つた時、弟の私は八九歳であつた。私は私の家が存在してゐて、彼と一緒に住んでゐた時分のことを、殆ど覺えてゐない。たつた一つ、私が五歳か六歳の頃であつたらう、私たちの家の奥の座敷の前に庭があつて、それを挾んで離家があつたが、その離家に向つて、縁側が兩方から通じてゐた。だから、その兩花道のやうな縁側と、座敷の縁側と、離家の縁側とで、庭をぐるりと一周してゐた譯であつた。どういふ時であつたか覺えてゐないが、私は何か譯の分らぬ歌を大聲でうたひながら、太鼓を叩いてその縁側をぐる／＼と廻り歩いて遊んでゐた、すると、私より七歳上の、即ち十一二歳になつてゐた兄がそれに興味を持つたと見えて、私の太鼓に合すために、金盥か何かを持つて來て、それを火箸で叩きな

がら、私の後からついて來た。そこで、私は一層勢を得て、彼の金盥と、私の太鼓と、そして私たちの歌を合唱しながら、その椽側をぐる〳〵と廻つて歩いた、すると、その頃母の叔母で、彼女の息子が東京の大學へ來てゐたので、私のところへ居候に來てゐたのが離家にゐたと見えて、私たちの騷ぎがあまり喧しいので、突然障子を開いて叱られたやうに覺えてゐる。

記憶といつては唯それだけのことであるが、私がこの兄と、興味を同じくして遊んだといふこれが唯一のもので、その後の記憶は悉く彼を避けたものばかりである。例へば、彼が十二三歳にもなつてゐるのに、もつと小さな子供の中に交つて兵隊ごつこをしてゐるのを見て、私もその中にちよつと入つて見たいと思つたのだが、彼を恥ぢる心が先になつて私は家に逃げて歸つたとか、又小學校に行くやうになつてからは、（彼が高等科の一二年の時、私は尋常科の一年に入つたのだと思ふ。）私は彼が同級生たちから馬鹿にされてゐるのをいつとなく知つたので、彼の弟であるといふのを恥ぢて、大抵別々に出かけたとか、又中學に入つてからは、その頃は彼はもう神戸へ行つてゐたので、私たちは別居してゐた譯だが、たまに彼が神戸から尋ねて來た時など、私は友達の生意氣盛りの中學生に、兄である彼を見られないやうにどんなに苦心したかとか、——さういふ記憶ばかりである。

兄が世話になつてゐた神戸の親戚から、私は中學時代半分と、東京に出てから大學を出る筈の年までと、ずつと學資をもらつてゐたので、中學時分、私は私の嚴しい祖母のいひつけで、夏冬の休暇には必ずその家へ御機嫌うかがひにやらされた。兄が初めてその家へ行つた頃はまだ私たちの父の從兄弟の代であつたが、間もなくその人は亡くなつたので、その長男の代になつてゐた、即ちその家の主人は私たちと又從兄弟の間柄になつてゐた。御機嫌伺ひといつても、その又從兄弟は當時三十過ぎの年輩であつたし、私は少年のことであるから、彼が會社に出る時か、彼が會社から歸つて

來た時かに、恐る恐る彼の部屋に行つて、言葉少なに頭を下げて來るだけのことであつた。私はそこへ行くのが石を呑むやうな思ひだつた、その御機嫌伺ひも厭だし、それに、その金持らしい大きな屋敷の中で、兄が大勢の下男下女の間に交つて、私が來たのを見ると、如何にも嬉しさうに私の傍へ挨拶に來る、それをあちらからもこちらからも大勢の人が見てゐる、彼等は始終兄を愚か者として、輕蔑したり、馬鹿にしてゐるに違ひない、兄はそれ等に對して仕返しも出來ない、あゝ、あそこへ馬鹿の弟が來たぞ、といつた風な目で見られてゐると思ふ恥かしさに、私は堪えられなかつたからだ。だから、私はその家へ行つた時、兄が私の傍へ挨拶に來ても、いつでも笑ひ顏さへ返さなかつた、唯ぴよこりと他所の人へのやうにお辭儀をして、すぐに出來るだけ彼の傍を離れるやうに心がけた。時とすると、さういふ私を、彼は停車場まで送つて來てくれることがあつた。私は彼と歩きながら、誰も知つた人で見る人も聞いてゐる人もないと思ふと、急に鹿爪らしい顏をして、こんな風なことを彼にいつた。

「あなたは何故いつ迄もそんな子供のやうなことを考へてゐるのです？」とか、「あなたはそんな事をして、人があなたをどう思つてゐるか分らないんですか？」とか、「あなたは弟にこんなことをいはれて、少しは恥かしいと思ひませんか？」とか。――

時には、「そんなことをいつたつて、お前……」と、彼は胃が惡いからか、始終兩方の口尻に白いものを溜めた、締りのない口を悲しさうに開けながら、抗議していふこともあつたが、大抵の場合は、

「へえ、へえ、」と目上の者から叱られる時に返事するやうな言葉で答へた。彼の心ではゆつくりと弟を送つて行く途で、兄弟水入らずの樂しい話をしたいと思つてゐたであらう望を裏切られて、いつの時でも情なさうな顏で、改札口のところから私を見送つた。私は彼にお辭儀を一つしたまゝで、彼を背にしてさつさと歩いた、が、私も心は悲しさで一

ばいだつた。

だが、そんな風にして、たとへ一年に一度ぐらゐでも會つてゐたのは、私が中學を卒業する迄の頃で、東京に出てからは、殆ど彼に會ふことはなかつた。それからざつと十年ぐらゐ私は彼を見なかつたのであるか、この四五年、やつと私が家を持つやうになると、彼は又一年に一度ぐらゐ神戸――といつても四五年前から、この親類の家は神戸から三四里西の鹽屋といふ、海岸の別莊地に引越してゐた、だから、彼も亦鹽屋にゐた譯である、――から主人（彼はいつからが、又從弟であるその家の主人のことを、旦那樣と呼んでゐた、）に暇をもらつて私の家へ遊びに來るやうになつた。だが、さういふ時でも、私は彼が滯在してゐる間、初に「しばらく」といふ挨拶と、歸りに「ぢやあ、さようなら、」といふ言葉を交す位に過ぎなかつた。

ところが、今度、鹽屋の家から私に宛てゝ手紙があつて、兄のことに就いていつて來たことには、自分の方ではいつ迄ゐてもかまはないが、彼ももはや自分の家に來てから二十五年になる、自分の方でもこれ迄いろ／＼彼の身の上に就いて考へもし、骨も折つて見たが、結局だめであつた、だが、さうかといつて、このまゝ自分の方へ置いて置くよりは小さいながらにも弟である私に家が出來たのであるから、彼のやうな廢人としての生涯ではあつたが、それはそれなりに人の家で暮した二十五年は決して樂なものではなかつたらう、といつて、私の方に歸つて來ても、これから改めて彼に新しい生活の途を立てゝ上げる譯にも行かないだらう、矢張自分の家にゐた時のやうに、庭を掃くこととか、使に行くことかをするより仕樣がない人とは思ふが、同じ掃除にも、使歩きにも、母や弟の家のそれをする方が年取つた彼に適はしくもあり、又樂しくもあらうと思ふ、――引取つたらどうかといつて來たのだつた。

それで、彼は荷物をもつて、二十五年の間住みなれた家に別れを告げて、私の家に住むやうになつたのである。その

一ト月ぶり[illegible]二十五年ぶりの出合ひに外ならなかつた。だが、私は毎日起きると家を出て、仕事の爲に借りてある下宿の部屋に行つて、そこで仕事をしたり、人に會つたり、殆んど三度の食事もそこでし、そこから散歩に出かけるといつた風な生活をしてゐるものであるから、今度彼が荷物を下ろした時、例に依つて「しばらく」といふ簡單な挨拶をした外、或朝私に來てゐる郵便物の一束を、彼が默つて（口の中で何かいひながら）私に渡し、私がそれを「有難う」といつて受取つた時があつた位で、殆ど言葉を交したことがないのである。といつて、四間か五間しかない小さな家のなかであるから、朝、私が下宿へ出かける前に食事をする時とか、顔を洗つた後でちよつと茶の間に坐つた時とかには、別に一つの部屋も當てがはれてゐない兄は大抵茶の間にゐるので、顔を見合すことは珍しくない。時として、私が火鉢の前に、そして彼がその横手に坐つてゐることもある、しかし、私はわざ〳〵彼に話すことを少しも持たなかつたから、五分間さうしてゐても、三十分間同じ位置にゐても、言葉をかけることは決してない。それは話しかけても、彼は耳が遠いといふ譯からでもあつた。さういふ時、彼が新聞か雜誌かを持つてゐたなら都合がいゝが、さうでないと、彼は目のやり場に困るらしかつた。そして、どうしてゐるかといふと、不自然な恰好に見える迄、始終顔を横の方に向けてゐた、彼のやうな人でも、私の氣むつかしい性質をまぶしく思ふのであらう。私もさういふ彼の氣持を察して、なるべくさういふ場面を避けるやうにしてゐた。だが、今は私は以前のやうにそんなに彼の存在を悄むやうな氣持もなくなつたし、それ程恥でたまらないと思ふ心持も薄らぎはしたが、それと共に彼の存在を念頭に置くことが少なくなつたのかも知れない。——

ところが、その晩、夕飯の後で、私は妻にかういつた。——といふのは、この半月ばかり頭を悪くして仕事がはかどらないにつけて、私はちよつとした旅をした後だつた。歸つて見ると、初から分つてゐることではあるが、原稿の締切

は近づいてゐるし、(或はもう約束の日の切れたのもあるし、)旅先では豫定通り仕事が出來なかつたし、さうなると、いつもの下宿にさへ出かける氣になれなかつたので、又もう一度旅にでも出ようかと思ひながら、珍しくその二日ばかり家にゐた時であつた。でなければ、家で家族の者たちと一緒に夕食の膳に着く事などは滅多にないことなのである。――

「これから兄さんどこかへ散歩に行つて來ようと思ふ。」

「兄さんと、散歩に？」と妻は文字通り目を見張つて叫んだ。

それは茶の間で、まだ夕飯の食卓が片附けられてない時のことであつたから、長火鉢の傍に私が、そしてその向側に母が、それから火鉢と並べて置かれてある食卓に沿うて、母の隣に兄が、兄と私とを左右に見る位置に妻が坐つてゐたのであつた。が、母は老年のために耳が遠くなつてゐたし、兄は先にいつたやうな理由でやつぱり耳が遠かつたので、私たちの會話は普通の音聲でするのだが、彼等には聞えなかつた。

「あゝ、どうも仕事が出來ないで、頭がくさくさする。」と私は妻の方を見ないで、妻にいつた。「かういふ時は、何か變つたことでもしたらいゝかと思ふから、兄さんと散歩して見よう。」

彼女はそれでも未だ十分私のいふことを呑みこめぬらしかつたが、幾分氣持だけは分つたのか、反對することでないと思つたのか、素直に、

「さうですか、ぢやあ、行つてらつしやいまし。」といつて、「あなた御自身で兄さんに仰しやいますか、それともわたしからお話しませうか？」と聞いた。

兄は、彼の話が目の前で私たちに依つてされてゐるとは知らないで、丁度卓子越しに私と向き合つてゐる位置にあつたものだから、いつものやうに私から目をそらすために、不自然なほど顏を横向けてゐた、或は又、母と、耳の遠い者

同志の大きな聲で、とんちんかんな會話を交したりしてゐた。

「あゝお前から話してくれ」と私はいつたが、それも變だと思つたので、「いや僕からいはう」といつた。が、又考へて見ると、兄弟でありながら、滅多に言葉を交さないので、突然散歩しようなどといふのが、變なやうな氣がされたので、「やつぱり、お前からいつてくれ。僕、二階で着物を着かへて來るから、」といひ殘して、私は急いで坐を立つた。

　私が二階の自分の部屋で、外出の仕度をしてゐると、下では何か大騷ぎをしてゐるやうであつた。母の聲で、「それでないもう一つの着物を出しておやり、」とか、「雨が降るといひたいが、鈴でも降らなければいゝが、」とか、「お前、そんな汚い手套などして行かない方がいゝ、」とか、「足袋を穿きかへなさい、」とか——しかしそれ等の聲の調子は何かなしに陽氣だつた。そしてそれ等の聲の間に、「へえ」とか、「へゝゝ、」とかいふ、兄の鈍い返事や、笑ひの聲がまじつて聞えた。私のやうな氣むづかしい、不斷碌に物もいつたことのない弟に、そんな氣まぐれな誘ひを受けて厭がりはしないかと思つた私の心配に裏切つて、彼も亦ひどく嬉しさうに、「帽子はあつちの方を被つて行きます、」とか、「へえ、え、」とかいつてゐる言葉が何とも嬉しさうに聞かれた。無論、母も嬉んでゐるに違ひなかつた。

　間もなく、私は彼と共に、母や妻やに玄關まで送られて、夜の町に出たが、それから公園の方へ歩いて行く途々、今夜の自分の氣まぐれを自分でくすぐつたく感じたり、馴れない着物を着た時のやうなぎこちなさを感じたり、變な氣持で二町ばかりの間、彼と並んで無言で歩いた。私は痩せて背の高い方であつたが、兄は太つて背が低かつた。私は彼が今に何か話しかけるか、話しかけるかと思ひながら、少しも話しかけないので、これは矢張りこんな氣まぐれな散歩に出ない方がよかつたかと後悔した。が、公園の路を大方半分ばかり來た時、私は思ひ切つて、

「あなたは神戸（近頃ではそれが鹽屋を意味してゐる譯である、）で毎日どういふことをしてたんです？」と聞いた。

「あの、あちらで何してゐたといふんでございますか？」と兄は私が話しかけるのを待ちもうけてゐたやうに、から返事をした。私は弟に對する、――それは多分彼のやうな頭腦から、私に世話になつてゐるといふことで、兄であるといふ位置を忘れて、尊敬を表するのであらうが、――その餘りに丁寧な言葉に驚いた。それと、もつともかういふ習慣が私の家に多少あるのぢやないか、といふやうなことも思ひ出して見た、といふのは私の四五年前に死んだ伯父と母とは眞實の兄妹であつたが、やつぱり他人のやうな丁寧な言葉をつかつてゐた、彼等は互に「あなた」といふ言葉で話してゐたことを思ひ出した。だが、この私の兄の場合は又別であつた。

「朝起きると、顏を洗つてから、庭の掃除をするんでございます、」と彼はつゞけた。さすがにこの「ございます」といふ言葉はいひにくかつたと見えて、二三度で止めたが、「それから縁側を拭きます。」と、かれこれするうちに旦那様のお出かけの時間ですから、送つて行きます、」と彼は子供のやうな單純な言葉で、しかし私の意外にも、彼は話すことが嬉しいやうに、耳の遠い者に共通した、濁つた聲だが、割合に雄辯に話しつゞけた。

「旦那様つて、休一郎さんのことですか、」と私は聞いた。

「さうです、その休一郎さんのことです、」と兄は答へた。

「送つて行くつて、どこまで行くんです？」

「玄關までゞす。奥さんと、それから女中が二人と、それから私とでゞす、」と彼は答へた。「それから御飯を食べると、使に行きます。」

「使つて、そんなに定つて？」と私が聞くと、

「えゝ、大抵あります、神戸とか、それから時々は、まだその向うの、蘆屋といふところがありますね――あそこの問

本さんとか……」
「それは電車？」
「いえ、定期です。」
「定期の切符を持つてゐるんですね、そこで電車に乘るんですね？」と私は聞き直した。
「いえ、汽車です、」と彼は答へた。「大抵何か彼か荷物がありますから、汽車の方が都合がいゝんです。」
「それで、使ひといふのは夕方までかゝるんですか？」
「へえ、それはお晝頃にすむこともありますし、二時三時頃になることもあります。」
「ぢやあ、お晝御飯はどうするんです？」
「二時頃までに歸れる時は家へ歸つてから食べます。が、もつと遲くなつて、お腹が空いたら、うどんやでも何でもそんなところで……」
「ぢやあ、夜はどうするんです？」
「夜はいつも旦那樣のお迎へです、」と彼はいつた。
その時、もう私たちは公園を通り過ぎて、賑かな電車通へ出て來たので、話が少し途切れ途切れになつた。
「あぶないですよ、電車が來ますから、そら、自動車が來ます、早くこちらへ、」などと私は兄に注意しなければならなかつた。彼は私に引かれるやうにして、道を驅けながら、
「その旦那樣のお迎へは、外に男衆が二人ゐるんですが、みんな嫌がるんです、」とつゞけた。
「乘合に乘つて銀座へ行つて見ませう、」と私はいつた。

「へえ、」と彼はいつた。「へえ、」といふのは、二十五年もの間、人の家で一番下等な用事をして來たための習慣か、彼の口癖であつた、而も歯切れのよくない、濁つた音の「へえ」！

私は彼との問答が少しうるさく感じられ出したが、乘合自動車の中は幸ひ空いてゐたので、

「どうして旦那様のお迎へを外の人が厭がるんです？」と聞いて見た。

「それは、あの邊は山手で、停留所までの道が遠いんです。それに、阪道が……」と考へて、「丁度神樂阪ぐらゐの阪道が五町ばかりその間にあるんです、後は阪道でも、」と考へて、「赤阪見附から青山一丁目の方へ行く道がありますね、あの位の道なんです、」といつた。彼がそんなに東京の道を例に引くのは、私の家へ來てから、毎日用事がないので、東京中を殆ど電車に乘らずに、地圖に依つて歩き廻つてゐる智識からなのだ。

「そんな道ぐらゐはかまわないんですけど、」と彼はつゞけた。「旦那様のお歸りになる時間が分らないものですから、大抵八時頃から出かけて行つて、十時位にお歸りになる時はいゝんですが、十一時、時に依ると十二時過ぎることがあるんです。へ、、、、」

この「へ、、、」といふ笑ひが彼の獨特のものでもあり、又それに依つて、彼が普通人より少し「足りない」人間であることを他人に看破される表象になつた。彼はどうかすると、否、屢々言葉の終りに、何の意味もないのにこの「へ、、、」といふ笑ひを入れた。

「そんな迎へに行くといつて、休一郎さんは毎日荷物でも持つてゐるんですか？」

「いえ、荷物なぞないんです、唯停留所から家までの道が阪道で、それに道が眞暗だもんですから、提灯が入るんでございます。」

「ちやあ、その提灯を持つて、あなたが先へ歩いて行くんですか？」
「い丶え、並んで歩くんです。」
「何かその間に話をしますか？」
「い丶え、何にも、何一つ話をしないんです。時々、話をなさることがありますが、それは子供見たいなことなんです、へ、、、、。」
「毎日その停車場へ行つて、ぼんやり二時間も三時間も待つてゐるのは辛いでせう。」
「え丶、辛いんです。田舎のことですからね、九時になると、どこの家もみんな戸を閉めてしまふんです、だから、眞暗です、冬だと足が冷えて、足が冷えて、寒いんです。」
「だつて、休一郎さんは會社にそんなに長くはゐないんでせうが、どこかへ寄るんですね？」と私がいふと、
「さうなんです、どこかへお廻りになるんです、」と彼はいつた。「始終何か會があるらしいんです、もつとも會があるといつて、朝家を出る時に仰しやることがありますが、どこへ行つてそんなに遅くなるか、その行先の分らぬこともよくあります、へ、、、、」
が、この「へ、、、」は普通の人の場合と同じで、どこか妾のところか、遊び場所かへ行くんでせう、といふ意味を彼とても含ましてゐるのだつた。
なる程、毎晩九時に歸るか、それとも十時になるか、十二時にもなるか分らぬ人を迎へに、田舎の寂しい停車場へ迎へに行く役割などは、この人の外にはするものはないだらう、これはこの世の中で可成り辛い仕事の一つに違ひない、などと私が考へてゐるうちにも、彼の話はどん／＼進行して、「神戸の家は十三萬圓でお賣りになつたんだといふことで

す。」とか、それでどうして今の鹽屋に來るやうになつたかといふことや、旦那樣と休造といふ理科大學を出た長男とがどうして氣が合はないかといふことや、旦那樣の兄弟はみな奥樣に逃げられるが、うちの奥樣も、若しこんなに子供がなかつたなら、とつくに里へ歸つてゐるとよく話されるといふことや、それからそれと無數に話しつゞけた。いふ迄もなく、私たちはその間に乘合を下りて、銀座通を歩いてゐた。そこでは、人込の中のことであるから、今迄のやうに彼も話したり、私も聞いたりすることが出來なかつたので、私たちは又無言でさつさと歩きつゞけた。

私はその時ふと思ひついて、

「あなた、何かほしいものがありますか？」と彼の耳の傍に口を寄せて聞いて見た。

すると、彼は四十歳の顏を子供のやうににやりとさせて、心持首をかた向けながら、

「へえ、」といつた。が、その後を急にいはないので、私は自分の言葉の意味が通じなかつたかと恐れて、

「何か買ひたいと思ふもの？」と催促するやうに附足した。

「へえ、」と彼は先と同じ表情をしながらいつた。私のいつた意味は先から分つてゐるのだが、或はそのほしいものを考へてゐるのだか、それともそれは定つてゐるのだがいひにくゝて躊躇してゐるのか、分らなかつた。

「いつて御覽なさい、」と私がしばらく歩いた時、又催促すると、

「私、あの……」と彼はそれが定つたらしく、だがそれをいひ兼ねてゐる風だつた。

「何です？」と私がもう一度いふと、

「私、あの……着物とか、帽子とか、下駄とかは、始終あなたのものを貰つたり、又買つてもらつたりして澤山あるんですけど、私、あの……」と彼はもう一度いひにくさうに唾を呑み込んでから、「あの……ステッキが一本ほしいんで

す」といつて、あわてゝ「どんな悪いんでもいゝんです、あなたのいらなくなつたんでもいゝんです、」と附け足した。」

「ステツキですか、」と私は少し困つていつた。といふのは、つひ先達て、私の留守中の出來事として、私が妻から聞いたのであるが、彼はその時も母にステツキが一本ほしいといつたのが元で、「まア！」といつて、母をあきれさせた。「お前がステツキ、ステツキ？」と彼女は叫んだ。「まア、この子は錄なことをいはない、お前のやうな人がどこにステツキを持つてゐます。お前は自分の恰好を考へて御覽、お前のやうな人がステツキを持つて歩いたら、まるで按摩さんとしか見えないぢやないか、本當に、程を知らないつたら、仕樣がない！」と彼女は眞赤になつて叱つた。この彼女の言葉はもつともだつた。といふのは、兄はあらゆる片輪者に見るやうに、その身體の恰好といひ、その容貌といひ、所謂風采が悪いといふ程度を越してゐた。彼は彼自身が普通の人より智能が劣つてゐるといふことを知つてゐたが、風采までがそんなに劣つてゐるとは思はないのであらうか、どちらかといふと、不斷から着物をほしがつたり、帽子をほしがつたり、化粧水や石鹼を集めたり、とてもさういふ風采の人とは思へない程、おしやれをしたがる癖があつた。して見ると、彼が常々自分の智能が人より劣つてゐると自覺してゐるやうに見えるのも、その程度かも知れないのである、まつたく、母のいふ通り、彼がステツキを持つたら、按摩の外のものには見えないだらう。

しかし、彼はその時母にいつた、この世の中で彼が一番遠慮なく話の出來るのは彼女に違ひなかつた。「そんなことをいつたつて、それはあなたは私をあんまり見くびつてゐなさるといふもんです。」

すると、母も亦變に譯分らずにかつとなつて、「お前は親に向つて何といふ言葉を使ふんです、わたしがお前を見くびる……？」

「いえ、その、何も私だからつて、そんなにいはなくてもといふことを……」と彼もその濁つた聲を張上げて叫んだ。

こんな風な、筋道のない言ひ爭ひなので、傍にゐた私の妻は仲裁する言葉に困りながら、やつとの事で二人をなだめたのださうであるが、無論、これでステッキの話はどこかへ飛んでしまつたといふことであつた。——私はこの話を思ひ出して、彼が未だステッキを思ひ切れずにゐるかと思ふと、（もつとも、彼は所謂馬鹿の一念といふか、これまでにも一旦思ひ込んだことは中々あきらめない性質であつたが）、私は變に可笑しい氣持と、情ない氣持がして來た。

「ステッキではこの間姉さんと喧嘩をしたといふぢやありませんか、」とそこで私はいつて見た。

「いゝえ、あれは何も喧嘩をしたといふ程ぢやないんです、」と彼は私がそのことを知つてゐたのを知つてひどくあわてたらしい調子で叫んだ。

「それにしても、ステッキは僕もあなたに似合はないと思ひますがね、」と私はいつた。

「へえ」、と彼は不平さうに云つた。「だけど、私は散歩が好きなものですから、あれが一本あると便利だと思ひまして……」

なる程、この人は散歩が好き、——といふよりも、過去二十五年の間、使ひ歩きとか、送り迎へとかいつた風に、隨分歩いてばかり暮した上に、やつと私の家へ來るやうになつてからも、今度は又用事がないと、その方が家の中にちつとしてゐるより氣樂に違ひないのとで、散歩ばかりしてゐる譯だ、と私は思つた。

その時、私たちはカフエー・ライオンの前へ通つてゐたのだが、私はちよつと考へた末、そこへ入るのはよさうと思つた。彼のやうな人を連れて、この花やかなカフエーに入るのは極りが惡いと思つたのもその一つの理由ではあるが、それと共に、以前彼が神戸の家にゐた時分、私がどうにか仕事の上で少しばかり金が入るやうになつたにつけて、母が彼に月々二圓とか、三圓とかいふ僅な小遣錢を送つてやつてゐたことがあつたが、彼はそれで、つまらない洗粉とか、

安香水とかを買つたり、時々カフエーへ行つて珈琲を飲んだりするといふので、神戸の家の主婦から私の家に注意するやうにといふ手紙が來たことがあつた。私はそれを思ひ出して、彼が私のためにカフエー・ライオン等を覺えて、これから時々そんなところへ現れるやうになられては困ると思つたのだ。珈琲の飲むこと位はいゝが、四十歳になる現在まで、女の肌を知らずに來た彼であるとはいへ、女を美しいと思つたり、好きだと思つたりする氣持は同じに違ひないから、カフエーの女を好きになられたりしては困ると思つたからだ。彼が好きになつて、彼を好きになつてくれる女があつたら、私はどんなにもして彼に家を持たしてやる事を辭さないが、この世にそんなものもなささうであるから。

「それにしても、ステッキは僕もあなたには不贊成ですね、をかしいですよ」と私はもう一度云つた、「何かもつと外にほしいものがないんですか？」

「何かもつと外のものですか？」と彼は靜で、人にいつた言葉を自分でくり返しながら、今度は本當に何がいゝか知らと、彼は彼の心の中を一生懸命に探がしてゐるやうな風に見えた。

私は彼の思案を亂すことを恐れたのと、何を彼が今度はステッキの代りに云ひ出すだらうかといふ好奇心とで、默つて歩きつゞけた。そして、稍々しばらくの間、私たちは無言で歩いた。

やがて、彼は何か思ひついたらしかつたが、又それを云ひ出しにくさうに見えたので、

「どうです、何かいゝものがありましたか」と私は笑顔で促した。

「あの……」と彼は歩きながらちらと私の機嫌を伺ふやうにして、「あの……私、鳥はいけないでせうか？」といつた。

「鳥？」私は驚いた。「鳥つて、小鳥のことですか？」

「へえ、」と彼は再び私から叱られるのを豫想して恐縮したやうに、「あの小鳥のことです、」とこわ〴〵答へた。

だが　瞬間の後、私はこの小鳥の望みには贊成した。それに、丁度私たちがこれから行かうと思つてゐたカフエーも、小鳥屋の千疋屋であるのが好都合だと思へた。

「小鳥はいゝかも知れませんね、」と私がいふと、彼は望が遂げられたのが意外だつたやうに、にや〳〵しながら、

「あの、私は神戸の家でもずつと小鳥とか、それから犬とか、——猿もゐるんです、——猿とかの世話をしてやつてたんです。」

「だけど、小鳥は中々飼ひ方が面倒だといふぢやありませんか？」

「へえ。」

「あなたはそれが出來るんですか？」

「へえ、出來るんです。」

「小鳥は何がいゝんです？」

「何でもいゝんです、」と彼は嬉しさうに、「文鳥なぞ安いのがありますんです、」といつた。

この彼の望はしをらしいものに違ひなかつた。いつか、誰からとなしに聞いたことであるが、彼は神戸の家で、主人よりも誰よりもそこに飼はれてゐる犬や猿やに親しまれた、それは彼が彼等に食べ物を與へるからといふより以上に、彼等から慕はれてゐたといふのである。猿はしば〳〵彼が外の者と立話をしてゐるのを喧嘩してゐると思ひ違へて、突然彼の話相手に飛びついて顔を引つ搔いたとか、或犬は彼からでなければ決して食事をしないとか、或は鳥籠に何かの用事があつて手を入れる時でも、彼の手の時はどんな小鳥も騷がないで、その手の上にとまりさへするが、外の者の手では鳥籠中が大騷ぎになるとか、いふ話である。妙な理屈をいふやうだが、彼のやうな單純な頭は、丁度鳥や犬やが共

鳴するのではないだらうか、そして多分唯言葉を交さないといふだけで、彼は鳥や犬等に、そして鳥や犬等は彼に、心持を通はすことが出来るのではないだらうかと思はれるのである。――で、私は彼のために小鳥を買つてやることに決心した。

果して、千疋屋の店先に着くと、彼は彼の望みが餘りに早く、そんな夜の銀座通の明るい電燈の輝いてゐる店に、――彼には魔法のやうにも思はれたに違ひない、――數多の小鳥の籠を見出した驚きと喜びとで、彼のどこやら締りのない顔を一層締りなく微笑ませながら、むさぼるやうに彼方此方の鳥籠を覗き出した。

「これは白文鳥です、」と彼は私にいつた。「これはいゝ聲で鳴きます。」

「これは？」と私がその下の籠を指さして聞くと、

「これは、」といつて彼は籠の中を覗き込みながら、「これは櫻文鳥です、朝起きると、ホーホーといつたやうな聲で鳴きます。」

そして、彼は又彼方此方の籠を眺めながら、一つの籠を指して、「カナリヤは可愛いものです、あれはよく子を生みます、子が生れると、玉子の黄味をくだいて餌鉢の中に入れてやると、親がそれを含んでは、子に食べさしてやるんです。子はしかし生れ立ての時分は毛がないので、眞赤で、鼠の子のやうです。子はよつ程氣をつけてやらないと死にます、」などといつた。

私は一先づ中に入つて、珈琲を飲まうと思つたので、彼を誘つてカフエーの部屋の方へ入つた。が、彼は卓子に腰を下ろしてからも、始終小鳥等のゐる店先の方を振り返つては、どんな風にして鶯に歌を教へたかとか、或朝どうして山雀が死んでゐたかとか、鼠の攻撃をどんな風にして防いだかといふやうな話を、絶えずしつゞけた。

「鳥だけ買つたつて駄目ですね、籠が入りますね、」と私がいふと、

「鳥だけ買つたつて駄目です、籠が入ります、」と彼は答へた。

「籠は、」といひながら、見ると、彼はどこまで少しづゝ足りないのであらう、一杯の珈琲を飲むのにも、一皿の菓子を食べるのにも、その飲食の仕方にどこか甲斐ないところがあるものと見えて、それが普通の人がさうしたのでは別に私の目を引きはしないのだが、彼は卓子の上に珈琲をぽつ／＼とこぼしたり、外套の胸の邊に白いクリイムをくつ附けてゐる、――私は子供にいふやうに、「そんな子供のやうに匙ですくつてしないで、茶碗を口に持つて行つてお上りなさい。それから胸のところへ白いものがくつ附いてゐますよ、」などと注意しなければならなかつた。

「へえ、」といひながら、彼は尙あわてゝるものと見えて、袂から手巾を出して胸の邊を拭くのだが、かへつてその爲にクリームの附いてゐる部分を廣がらすのである。

「それぢや、尙駄目ぢやありませんか、」と私は見兼ねて私の手巾で拭いてやつたりした。彼は一層おど／＼してゐた。

「籠は、」と私は先の話に戻つて、「金網の籠がいゝのですかね？」といふと、

「へえ、金網の籠がそれは重寶です、掃除するのに樂でしてね、」と彼はいつた。

「だけど、さつき札を見たら、案外高いものですね。」

「へえ、それは案外高いもんです。」

「僕は今日はそんなにお金を持つてゐないから、明日でも改めて買ひに來ませうか？」と私がいふと、

「へえ、それや明日又買ひに來てもよろしい、」と彼がいつた。

「竹の籠の方なら今日でも買へるんだが、竹の籠だつて惡くはありませんね？」

「へえ、それや竹の籠だつて悪くはありませんよ、」と彼はいつた。

結局、その翌日か翌々日あたり、私に金が出来た時、改めて彼に買ひて来てもらふ事にして、私たちは千疋屋を出た。

やがて、尾張町まで来た時、時間がまだ早かつたので、彼だけ一人で家にかへして、私はどこか友達の家をたづねようと思つたので、彼にその事をいふと、

「へえ、」と彼は例の聲で答へた。「私、一人で家へ歸ります。」

「十一時頃までには歸るといつといて下さい、」と私がいふと、

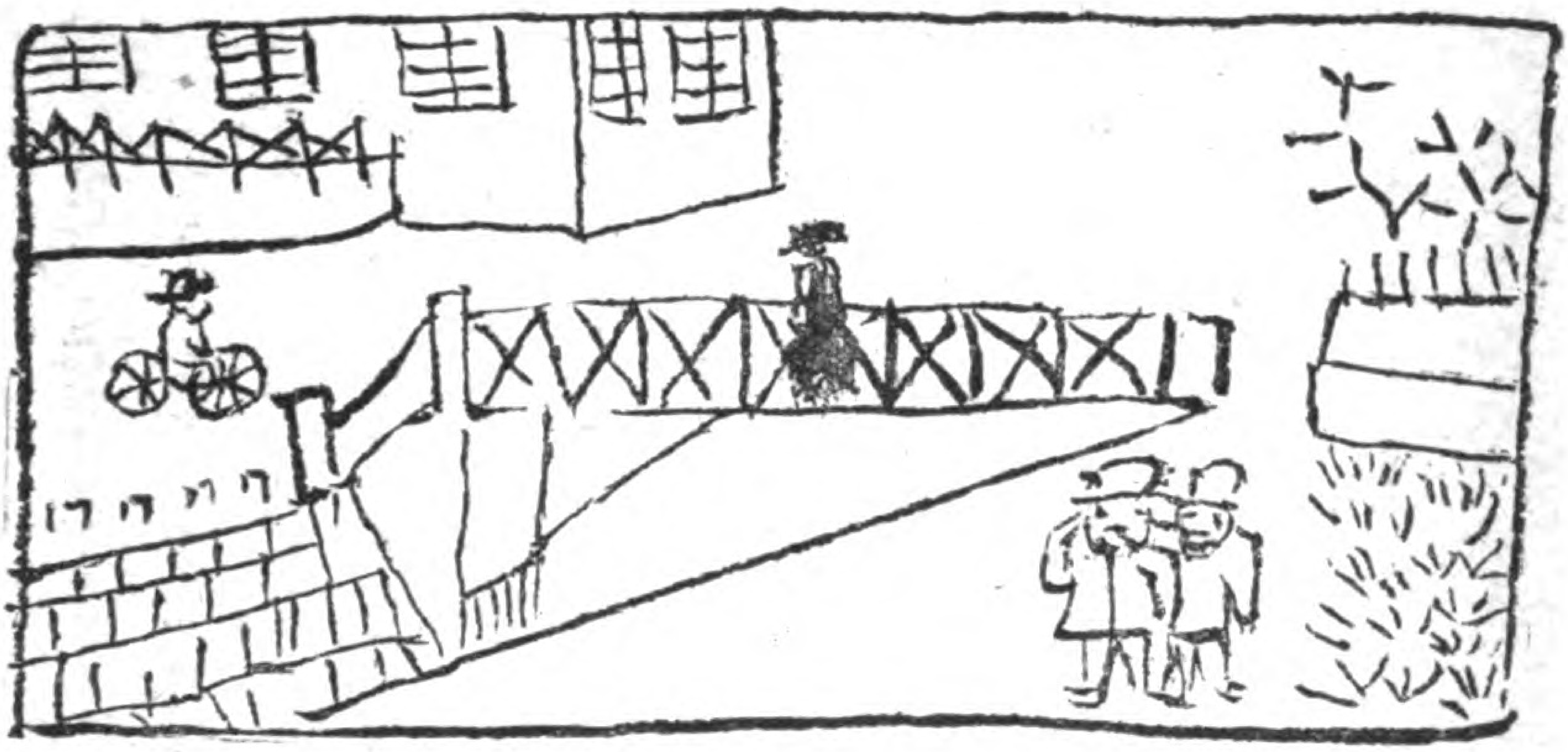
「へえ、」と彼は答へた。

「おや、あなた、こゝに切符がありますから、こゝから乘つてお歸りなさい」といつて、私が帽子を頭から浮かすと、

「あの、」と彼はその時私の傍に戻て来て、「あの、私、いろんな話を知つてゐるんです、神戸の方のことですけれどね、」と彼は何かいひにくさうな、又恥づかしさうな調子で、「その中に又あなたの小説の材料になるやうなものがあるかも知れません。私、いつでも話してもよろしいし、書いて見てもよろしうございます、」といつた。それは、彼のやうな頭の持主でも、弟の私が仕事が出来なくて困つてゐるといふのに同情したことに違ひなかつた。

「えゝ、有難う、又聞きませう。……さあ、自働車が来たからお乘りなさい、切符は三枚出すんですよ、ぢやあ、さよなら、」と私はいつた。

「さよなら、」といつて、彼は丁寧に帽子をとつて、進んで来た自働車の方に、その脊の低い、太つた、不恰好な後姿を見せながら歩いて行つた。



搖れる樹々

中條百合子

（一）

仲子は、沈んでむつつりしたまゝ卓子の隅で夕餉を食べ始めた。

建物の翼の出張りにつれて、奥で擴つてゐる廣い寄宿舍の食堂は今晩餐の最中であつた。數十の卓子を取繞んで座つて居る若い娘達の群からは、陽炎のやうに喋り聲、笑聲、身じろぎの動搖が絶えず起つた。仲子の場所から大厨房に通ふ扉の一つが見えた。胸一杯に大きな錫の給仕盆を抱いた給仕女が、グンと靴の爪先で其の扉を蹴あけて出入する毎に、白い帽子を冠つた太い料理婦の後姿だの、大鍋のかゝつた料理ストウブの列だのが、ちらりちらり視野を掠める。仲子の卓子は八人であつた。彼女のすぐ隣りには、心理學を研究して居る安川が座つて居た。次には、殆ど口らしい口を利いた事のないおとなしい金髮のミス・ノートン。支那人の薛。仲子は、七階にある自分の部屋から食堂に來る迄、卓子で安川に會へることを、我と

もなく樂しみにして居た。彼女の、顔を見たら

「あゝお腹が空いた！」

といふやうな蟠りない甘えが口をついて出ると思つてゐた。それで、朝からの滅入り込みを退散させることを願つてゐたのだ。けれども、安川は、おくれて來た仲子を見ると、行儀よく二つの腕を胸の下に組み合せたまゝ、輕く首を傾け、外國人の友達に對しての通り

「今晩は。いかゞ？」

としきたりの挨拶をした。彼女の先輩らしい構へ方が、仲子の心の溢れを制した。仲子も、仕方なく冷靜な言葉で答へ、スープ匙をとりあげた。ひどく空腹でゐながら、愉快でない人間のする通り、皿ばかり見て食べて居るうちに、仲子は段々周圍に無頓着になつて來た。食べながら考へてゐるのか。考へを食つてゐるのか判らない樣な有樣になつた。」

朝、仲子は十時から十一時まで英文學史の講義に出席した。ちつとも面白くない時間が終ると、彼女は急いでアヴェレー・ホールに行つた。其處は、美術、建築等に關する圖書館兼研究室であつた。仲子は、大圖書館の混雜した大人數に落付けず、人の尠ない靜かなこのホールを好んだ。二階の廊下に、古代ギリシア彫刻の模寫や石膏の剝形習作(モウルディング)などが置かれ、程よく散らかつた工房といふ感じがあつた。彼女は其等の環境を愛したに違ひないが、其程急いで缺かさず每日此處に來るには、他の原因があつた。仲子が、寄宿舍に入つて數日後此の建物の一隅に場所を定めると、いつの間にか個も此方で仕事をするやうになつた。彼が大學に來て居、教室に行つて居なければ、必ず此の圖書館で見出せることになつた。仲子は、朝教室から出ると、一種の速まる鼓動を感じ乍ら、アヴェレー、ホールの唐草金具の大扉を押すのであつた。

其日、佃は珍らしく伸子よりおそく來た。間もなく時間があるので、彼は、青赤の鉛筆で一杯書き入れのある帳面からせわしく何かのノオトをとり、フオセット博士の教室に行つた。伸子は、窓際の大卓子で、二月の午前の日光を愉しみ乍ら、どの學課にも必要のない小說を讀んで居た。すると、大扉が開き、黑い毛皮外套に氣の利いた鍔廣帽をつけた一人の婦人が入つて來た。彼女は眞直圖書掛の机の方に行つた。が軈てヌックになつて居る一々の大机を覗き乍ら伸子の方に來た。伸子は何心なく顏を擡げ、思ひ設けない中西を見て深く悅んだ。彼女は一週間程前から、ボストンの許婚の處を訪ねて留守であつた。留守中、伸子は時々淋しい思ひをした。一月の中旬、父が歸國してから伸子は新しい友達の中に生活することになつたのだが、親しめるのは、佃の他に殆どこの中西一人であると云へた。中西は、彼女の眸や聲にある獨特な軟い深い調子が示す通り情的な、偏見のない教養を持つた婦人であつた。格別何をしなければならないといふ義務のない處もやゝ伸子の境遇に似て居た。伸子は、寬大な姉に對するやうに中西に對した。

伸子は、中西の兩手を執つて、自分の傍に腰かけさせた。そして、ひそひそ聲で熱心に旅行の樣子や何かを訊いた。

「どうだつたこと？彼方は。――樂しかつて？」

「えゝ、よかつたわ。靜ですしね宿でも何でも。……それにあの人は今いゝ研究をし始めて居るのよ、有望なの。――あゝ、此方ではどう？雪が降つてよボストンは。」

天氣の事、友達の噂の後、中西は、奇麗な撫でるやうな艶のある眼で伸子を正面から眺め乍ら微笑して呟いた。

「どうなのその後、あなたがたの方は……」

伸子は、曖昧な複雜なかげのある微笑を洩した。彼女は、低い聲で答へた。

「どうでもないわ――まあ大抵同じよ」

仲子は、細かに云ふと、佃と自分との間に最近此迄見えなかつた一つの現象が顯れるやうになつたのを自覺して居た。けれども、其那ことを圖書館で話は出來ない。

「——今日は？來て被居るの？」

中西は、仲子の向ひ側に置いてある黒い鞄を目で指した。仲子は、默つて合點をした。

「土曜日に御約束があることなにか。今つい其處で横尾さんと樋口さんにお目にかゝつたら貴女へ御傳言をたのまれたの」

横尾と樋口は二人とも中西の近頃近しくして居る男で、社會學をやつて居る人達であつた。」

「何なの」

「オペラよ、貴女が被行れば四人で行かうといふことなの。——どう？」

「さあ……」

誰とも約束はなかつた。けれども、仲子はすぐ佃を念頭に浮べた。誰でもが愉快に過したい土曜日の晩、自分だけオペラに行つたら、佃はどうするだらう。何處かで彼の時間を樂しく費すだらうか。

「今週はいゝのよサムソンとデリラですつて。——被來い。たまにはいゝわ、ね」

曲目をきくと、仲子は行つて見たくなつた。行きたいのと、佃を獨りぼつちにするといふ心配との間に彷徨して居る處へ、折よく佃が戻つて來た。

仲子は、彼を見ると、俄にいゝ事を思ひつけた。佃に相談して見よう。彼が若し一晩を樂しく滿す計畫をきめたら、安心して自分は皆とオペラを聽きに行ける！

仲子は、せき込み加減で、佃と中西の挨拶が終るのを待つた。そして、佃にいきなり自分の考へを打ち明けた。

「どう？私少し行きたいの。貴方はどうなさること。」

佃は、彼女等が坐つて居る向ひ側の机の上に書物を置き乍らのろい、咎めるやうな響のある調子で反問した。

「僕は勿論よばれては居ないのでせう？」

仲子は、思はず中西の顔を見かへりさうな衝動を感じた。然し、彼女は恥しさから其を堪へ、強いてさりげなく彼を見守つたなり答へた。

「今度は私だけ。――貴方何處かへ行きでもなさること？私、御相談してから中西さんに返事を持つて行つて戴かうと思ふのだけれど」

佃は、仲子から眼を逸し、持つて歸つたばかりのノオトを自分の前に展げた。明に見る必要のないのに見て居る風で。

「貴方がいゝと思ふ通りに返事をなすつたらいゝでせう」

仲子は、胸の中で何かが淀むやうな苦しさを感じた。

「相談してもいゝでせう？兩方いゝやうに。――本當に貴方如何うなさること」

「自分の判斷で返事をなさればいゝです。――然し……………」

「なに？」

「貴方には、横尾君や樋口君がどういふ人だか其那によく判つて被居るのですか」

不快な沈默が擴つた。佃は、再び彼のノオトの上に注意を集注して居るやうに裝つた。けれども、蒼白い顔や、神經的にいかつく見える肩は、鋭い感覺の網をはりつめて凝つと仲子が次に云ひ出す言葉を待つて居る。仲子は、悲しさと

憤りの絡り合つた感情が喉につまつて來るのを感じた。彼女は、椅子をずらして立ち上つた。中西も其につれて席を立ち、愕き、慰めるやうな眼差で伸子を見た。伸子は、又其を辛く感じた。彼女は、痛々しい、歪んだ笑ひを唇の端に浮べ乍ら元氣なく云つた。

「――私、やめるわ」

「さうお。……その方がいゝかもしれないわ又いつでも行ける處ですものね。よく云つて置いてよ」

「約束があることにして置いて頂戴」

「大丈夫よ。――では又ね」

中西は、自分より低い處にある伸子の、紺の服に包まれた若い肩を輕くパットした。――伸子は、「さあさあ、氣をとりなほして」と優しく抱かれるやうに思つた。

中西が去ると、伸子は書物をとりあげた。讀めない。彼女は向ひ側の佃を見た。彼も本氣で仕事はして居ないらしい。伸子は身動きをし、頭を振つて氣を換へ、讀み續けようとした。けれども、胸一杯のなら〳〵が眼先で搖れて細かい横並びの活字を散り〴〵ばら〳〵にする。彼女は遂に本を伏せた。

「佃さん」

佃は顔を擡げ、切迫した表情を浮べて彼を見つめて居る伸子を眺めかへした。

「何ですか？」

「何ですか！」まるで何があつたか知らない人のやうだ！伸子は、落付きを失ふまいと努力し乍ら云つた。

「さつきのやうな場合ね、私、はつきり心持を云つて戴く方がいゝのよ。彼那風なの私嫌なの」

「貴女のいゝと思ふやうになさいと云つてはいけなかつたのですか」

「さうぢやあないのです。貴方――」

仲子の抑制した聲に感情的な顫へが出た。

「いけなくてよ。貴方は行かせたくなかつたのぢやありませんか。行かれなくたつていゝから相談したのですものちやんと正面から左様仰云ればいゝ。口ですきにしろと云つて、様子や何かで出來ないやうになさるのは不愉快よ。――やめてね」

佃は、何か打たれる獸がするやうな眼つきで仲子を見た。

「私に行くなといふ權利のないことは知つて被居るでせう？私はたゞ貴女の參考に自分の思ふことを云ふだけです。それをとるととらないとは全く貴女の自由なのです。被行ればいゝですよ、被行ればいゝですよ。決して私のことなんぞ心配して下さらなくていゝのです」

其處へ、入口の大扉が開き五六人の學生が入つて來た。今までがらあきであつた前後の大机に彼等の坐を占めた。仲子は勢口を噤まなければならなくなつた。まだ心持は、何方にも片づいて居ず、陰欝な泥濁が一杯たまつて居る。仲子は生彩のない氣分で書物を弄り、窓の外を眺めた。程なく構内の禮拜堂の鐘が、朗らかに壯麗に、其時の仲子の感情では涙組みさうになつた程晴れやかに嚴冬の眞空を貫いて鳴つた。

仲子は、書物をまとめ佃と肩を並べて圖書館を出た。

晝飯を終つて四十分ばかりすると、仲子はミス・プラットの處へ出かけた。今日は、課業ではない。先の火曜日に行つた時、二時間の勉強の後、二人はいつもの通りいろ／＼雑談をした。仲子はミス・プラットを敬愛して居たし、彼女

も伸子には始めから特別な好意を感じて居るらしかつた。大柄な、いつも質素だがきちんと身なりを整へて居る、ミス・プラットは、何處かダッチ風な重々しさや靜けさを持つて居た。厚い栗色の髪で、同じ〳〵と云ふにも、教育の女らしいせわしい發聲ではなく、字と字との間をのばして、悠くり丁寧に發音する。伸子は、母親と下宿人とで生活して居る女教師の平穏な雰圍氣に家庭的な慰安を感じるのが常なのであつた。木曜日に話が寄宿舍の事になつた。伸子は始めての經驗である寄宿舍の生活に幾月經つても馴染めなかつた。第一人間が多すぎる。朝目を覺すとから眠る迄、人聲と跫音とで刺戟され通しなのは彼女に堪らなかつた。伸子は半分冗談に

「まるで蜂の巣のやうですもの。これも皆が女王蜂だから賑やかなことです」

と笑つた。すると、ミス・プラットは暫して

「木曜日の午後からうちに被來いな、氣が變つてい〻でせう。お喋りでもしませうから」

と云つてくれた。その約束で、伸子は、佃と話したい午前中の氣持の行きがかりをそのま〻にして、出かけたのであつた。

扉を敲くと、ミス・プラットの母親が取次に出た。

「今日は」

「あ〻、今日は。よくおいでなさいました」

老婦人は、伸子の右手を執つたま〻廊下に導き入れた。そして、愛嬌の深い碧い眼に訴るやうな表情を浮べ、地になつて居る嗄聲で云つた。

「今、他に御稽古の方が見えて居りますのですよ」

午後が暇なので招かれたと思つて居た伸子は意外に思つた。彼女は念を押した。

「今日は木曜日でせう?」

「えゝ、間違なく……」

「では、恐入りますが一寸ミス・プラットに私が來たと仰云つて見て下さいませんか。御差支へだつたら、又出なほして構ひませんから」

老婦人と一緒に、日本羽織を着たミス・ブラットが出て來た。彼女は、伸子が何とか云ふ時を與へず挨拶し、自分の居間らしい部屋に案内した。

「もう卅分ばかりですから失禮ですが待つて被居て下さい。静かないゝ部屋でせう?」

口を利き乍ら、彼女は書棚を覗いた。そして、オウスティンの普及版を一冊とり出して伸子にあてがつた。

「これでも讀んで居て下さい。一寸御免なさいね」

伸子は、本と一緒にとり遺された。

全く、ミス・プラットの部屋は居心地悪かるべき場處ではなかつた。二つのたつぷりした大窓は、街路を隔てゝ大學構内の空地の一部と、大學總長の邸宅の側面を見晴した。椅子や寢臺の上には、溫和な趣味で選ばれた小綺麗な更紗や、小布團が飾られて居る。目立たない壁紙で被はれた壁間に、ホヰッスラアのエッチングが懸つて居た。伸子は、小卓子の傍の揺椅子にかけ、あづけられた本の第一頁を讀み出した。

狹いアパアトメント中ひつそりとして、どんな物音もしない。窓下の街路から、子供が片脚載せて轉がす一輪車の軽い長閑な木の輪の響が晴れた空氣を傳つて來るばかりだ。ミス・プラットの來るのを心待ちにして居るので、伸子は折々

頭をあげては窓の外や室内を見廻した。卅分は極遲く經つた。廊下で別れを告げる聲、やがて此方に來るミス・プラットの衣擦れの音。仲子は助かつた思ひで、自分の眼付が急に活々としたのを感じた。

ミス・プラットは仲子のすぐそばの低い安樂椅子にかけた。二人は、種々な題目に飛んで話した。ミス・プラットが今、英譯の稽古に或日本紳士に讀ませて居るといふ漱石の作品に就て。又彼女の處に來る或中年の日本人について。其男は、もう三月彼女の處に會話の稽古に通つて來て居た。最初の日から今まで、其男はたゞの一度も笑つた！ 笑顏をしたといふ事がない。笑はない許りではない。第一、彼の顏は總ての感情を現す表情を全然持たず、今日は昨日のやうに、昨日は一昨日の通り木彫りの面そつくり威のある顏で來るのだ。ミス・プラットは其男の活きた顏を見ようと種々に努力したがいつも失敗に終つた。處が昨日の午後、思はぬことで彼女の希望は遂せられた。平常通り、筋一本動かない紳士の茶色の顏を見乍ら稽古して居ると、突然ベルが鳴り人が訪ねて來た。母夫人が名刺を持つて取次いだ。

「山崎さんといふ日本人のお方がおいでなりましたよ」

其を聞くと同時に、紳士は何とも云へず周章狼狽した態で、混亂した表情を浮べ乍ら彼の椅子から突立つた。そして、云つた。

「私もう歸ります」

逆に驚いて對手の顏を凝視し、ミス・プラットは思はず微笑したと云ふのだ。あの木の面は何處に行つた。紳士は、同じ日本人にお稽古を受ける自分を見出されるのが厭さに、平素の威嚴も、東洋流の沈靜さも一息に忘れた。氣の小さな、自尊心だけ發達した大人子供が生で現れた！

仲子は、男の様子も、ミス・プラットの氣の毒がり乍ら些か皮肉に滿足して居る心持も可笑しく、大笑ひをした。

快く、段々話が彈みかけた時、又稽古の人が導き入れられた。ミス・プラットは當然期待して居た事らしく、仲子に二言三言云つて、客間に去つた。——たつぷり一時間更に待たなければならない。——

仲子は、立ち上つてぶら〳〵室内散策を始めた。二時過の澱みない日光が、窓帷の端と窓框に睡いて居る。雲一片ない冬空は透明に明るく明るく眺められた。空地に一本巨大な樹木があつた。空に冲る梢に如何うして遣つたか一二片眞赤に色づいた楕圓形の朽葉がついて居る。碧空の前にぽちりと滴つた紅の色がひどく美しく豐富に見える。恍惚と見とれて居るうちに、仲子は不圖自分が變に間の拔けた端目に置かれて居るのに心付き出した。ミス・プラットはあゝやつて勝手に彼女の稽古をして居る。自分は大して居たくもないこの彼女の居間に、帽子を脫ぎ外套をとり、悠くり仕なければならない命令でも受けたかのやうにぼんやりして居る。「何の爲に私は此處に居るのだらう？」仲子は、我知らず苦笑を浮べた。昔話に斯ういふ馬鹿娘がある。——だが、私は本當に何しにこゝに居るのであらう？

何故ミス・プラットが呼んだのだらうと云ふ疑問が始めて仲子の頭に生じた。弟子ではあるが、彼女から呼んで置いて、續けさまに獨り放つて居るのは禮儀の上から云つても變ではないか。只、仲子に違つた部屋を與へようと云ふのであつたら、何故前以て、彼女はいそがしいが獨りで何かして居るのならばと云つて吳れなかつたのだらう。仲子は神經的になつて來た。異樣に居心地わるくなつて來た。彼女は、相談をかけるやうに腕を組んで、自分の脫いだ外套や帽子の纒めてある前に突立つた。自分で豫想もしなかつた素速さで此時一つの暗示が仲子の意識に閃いた。十日程前の事であつた。稽古の後で、ミス・プラットは何かの機會からか個の噂をした。

「貴女始終あの人と御一緒ですつて？　さうですか」

仲子は左樣だと答へた。

「佃さんは以前高崎さんにも大層親切にしてよく一緒にいろ／＼なすつてゞしたよ」

漠然とミス・プラットの話しぶりに不快を感じ、伸子は單純に答へた。

「さうでございますつて。あの人からきゝました」

「元西部の大學に居た時にも何か餘り面白くない事があつたのですつてね。一寸其那話をきいた事があります」

「云ひ度い人は何とでも話を拵へるでせう。」

伸子は、瞬間冷靜さを失つた調子できつぱり云つたのを明瞭に思ひ出した。あの日ミス・プラットに其等の數言を云はせた心持が、今日の奇妙な招待――何處やら「御部屋に入つて考へて被居い。私に話したい事がある筈でせう？」といふやうな處のある招待――になつたのではなからうか。此直覺、或は推察は湧き上つた刹那から伸子の心持の上で動し難いものとなつた。

自分の置かれた境遇の眞意が分ると、伸子は小娘扱ひにされることが不滿になつて來た。彼女は、自分と佃とのいきさつをミス・プラットに隱して置く氣は毛頭なかつた。誰に對しても、彼女はこそ／＼する必要を微塵も認めて居なかつた。時が來、心が熟せば、敬愛して居るミス・プラットに對して恐らく誰より先に自分の感情其他を告げたに違ひないのだ。然し、其は決して此那對手から作られた機會に釣られてゞはない筈だ。斯樣に、中學生とこつそり手紙の往復をして居た十六の小娘が見つかつて、反省させられた揚句、半分可怖がり當惑し乍ら、

「どうしたらいゝのでせう」

と縋りつきでもするやうな遣り方ではない筈だ。伸子は屈辱に近い不快を覺えた。伸子は決心した。「今日はどんな事があつても、私から佃に關して口は利くまい。」假令明朝自分から馳けつけて一部始終を話すとしても。――今日は決し

てー決してー

仲子は兎も角、ミス・プラットが時間を終つて來る迄待つて居た。其から連立つて、モウニングサイド公園を散歩した。ミス・プラットは、彼女の內心に在つた計劃に就て何も云はない。一二度、偶然と思はれる口調で佃の名に觸れた限りであつた。寄宿舍に日が暮れて戻ると、仲子は沈欝な氣分で足が重いやうであつた。

(二)

計らず其日だけ、不愉快な事が重なつて起つた丈なら、仲子は雜作なく彼女の快活さを取戻したらう。然し近頃は、餘り晴やかでない日續きであつた。每日苦しいこと、悲しいこと、或は厭な事が何かしらある。而も其等は殆ど皆自分と佃とを中心として起る。佐々が去つてから、彼女等は一層一日の多くの時間を一緒に過すやうになつた。一日會はずに居る事はとても苦しくて出來ない。其かと云つて會へばその間に必ず何か互の感情に動搖を與へる不快な小悶着が挾る。會へば苦しく、會はなければ猶苦しいといふ困つた狀態なのであつた。

仲子の苦しむ主な原因は、佃が、彼女の激しい情熱のあるに拘らず、ちつとも自信を以て二人を結ぶ心の絆に安じて呉れないといふ一事であつた。勿論、仲子は佃の他に男の友達も女の友達も持つて居た。彼女は其人々との交遊を愛し、佃にその樂しさを秘密にしなかつた。けれども、彼女の生命に食ひ込んで居る深さから云つたら、比較も出來ないものではないか。友達は友達だ。

或晩、仲子は數人の友達から晩餐に呼ばれた。翌日、佃が不機嫌で神經質になつて居るのを見出した。仲子は、彼の左樣な感情に未だ馴れなかつたので半信半疑乍ら云つた。

「――貴方、私が昨夜行つたとこで不愉快さうにして被居るの？」

佃は、眉毛の下から仲子を瞥見した。

「何か其那わけがあるのですか？」

「いやな方！ 貴方は確に變よ。他に原因がないのですもの、さうとしか思へないぢやないの。ね」

仲子は腕組みして居る佃の手を解いて、自分の掌に執つた。そして、其を鼓舞するやうに愛撫し乍ら云つた。

「これからもある事だからよく解つて被居て頂戴。私は貴方を愛して居てよ。本當に愛して居てよ。だから却つて私は誰と居ても安心だし、大丈夫だといふ信念があるのです。わかるでせう？私にはもう護り神があるの。本當に愛す者が居る時、決して人は自墮落になぞなれるものではなくつてよ。ね、解つて下さるでせう？」

佃は、正面から來る仲子の注視をさけ乍ら、呟いた。

「私は貴女がどうといふのではないのです。貴女は人をすぐ信じる。世間の人間は決して表面から見るやうなものではありません。如何うして彼那に安心して人とつき合へるか…………」

仲子は、佃が彼一流の辯證法で、內密な感情を表現して居るのを直覺した。彼女は、佃の大きな手を益々自分の胸の方へと引よせ乍ら、呻き聲に力を入れて云つた。

「人を信じられない者なら、如何して貴方を此那に信じる事が出來て？ 安心して堂々として頂戴。下らない心配なんぞ全く無駄よ、貴方が行けと云つたつて、私は曖昧な交際なんぞ仕たくないのですもの」

今日の晝前の事を考へると、仲子は新たな佗しさを感じた。自分が、久しぶりでオペラを聽き度く思つたのは悪い事だつたのだらうか。愛する者があれば、その愛するものと一緒に居る樂しみ以外の總ての悅びを棄てなければならない

のだらうか。伸子に其は餘り狭苦しく感じられた。さう度々のことではない。ほんの一週に一度か一月に二三度彼以外の友達と罪なく愉快に一晩を過す――其も彼を故意に除外するではない、彼も一緒だつたら自分は猶々嬉しい。たゞ今の事情が、彼と自分とを一組として招待させない丈だ。彼には何故、面白かつた話を聞かせて一緒に蟠りなく笑つて貰ひたい自分の心持が通じないのだらう。佃が、招かれゝば彼自身はどうせ斷る――仕事が忙しいからと云つて――に定つた場處に、伸子だけ出る場合でさへ、何とか拘泥してすらりと快く行かれないのを考へると、彼女は苦しいものを感じた。「さう、貴方には殘酷めいた處がありますよ。私が、貴方に一ついやな顏をされると、如何那に樂しみにして居たことでも、興ざめ詰らなくなつて仕舞ふのをよく知つてゐながら。愛は其那もの？　それで愛して居るといふ？」

然し、さう思ふ一方から、伸子の心には、今、たつた今佃の處に飛んで行つて、彼の頭を抱きすくめ接吻で被ひ

「よくつてよ！　よくつてよ！　分つてゐるのよ」

と叫びたいやうな熱愛がせき上げた。彼の心持を思ひやると、嫉妬深いやうな彼の不安が伸子には云ひやうなく可哀想になつた。何といふ自信のない愛人！　彼は自分が若くない事や、貧乏な老書生であること等を、ひどく念頭に置いて居る。いくら自分が云つても、彼は何處からか不意に現れて引攫ふ競爭者でもありさうに感じるのではないだらうか。伸子は、衷心から、佃を安心させる丈自分の愛を披瀝したく思つた。自分のこの愛を燃え移らせ、佃を、堂々威嚴に滿た愛人として、下らないやつかみ半分の私語をぴつたりと默らせるだけのものにしたい。其にはどうしたらいゝのだらう。――

伸子は、永い間腰かけて居た、單純な鐵の寢台から立ち上つた。彼女は心にある問題に引廻されるやうに狭い部屋の一隅に在る化粧台の前に立ち、他人を觀察するやうに夜の鏡に映る自分の顏を見つめた。彼女は、自分がもう疾うに、

この疑問に屢々逢着して居、解答は一つしかないのを知つて居た。同時に、その一つしかない結論を、自分が何となく畏れ、一寸のばしに不決斷で居ることも知つて居る。彼女等の先に在る道といふのは、結婚だ。

（三）

仲子は、大體これ迄自分の結婚について、はつきりした豫測といふものを持つた事はなかつた。いつか誰かを愛して結婚しさうにも思はれた。又仕なさうにも思はれる。長女に生れ、年の割に早く感情が發育した故で、仲子は小さい時から兩親の生活に心持の上での影響を受けた。彼女が日常觀て來た結婚生活といふものは、決して愉悅に滿ちたものではなかつた。特に、母が女性として背負つて居る分娩の任務、子供に對する責任の重さは、十代の仲子に恐怖を抱かせた。「結婚すれば自分はあの恐ろしい目をして、更に恐ろしい母親とならなければならないだらう」仲子は、兩親が自分達の敎育について意見が合はず論爭した揚句、いつも母が涙を滾し乍ら訴へる言葉を到底忘れることが出來なかつた。

「よくお考へになつて下さい。貴方は二言目には私の敎育が惡いと仰云るけれども、子供達は私ばかりの子ではありません。皆が佐々家の遺傳を持つて居ます。それはどうしたら好いのです？　私が母親だからと云つて不可抗な其那ものゝ責任まで負はさうとするのは、あんまり酷ぢやありませんか。好きで嫁に來たのでもないのに！」

仲子は十二三頃から、子供といふものが或時如何那に母にとつて重荷で恨めしいものであるかを感じて居た。母が激し、現に子供等の裡に現れて居る家族的遺傳を殆ど復讐的な正確さで父に指摘するのをきゝ乍ら、仲子は自分の裡に見た事もない祖父や曾祖父の性癖や傾向の一部が活き蠢いて居るといふ氣味惡い不幸な心持を抱いた。萬一自分が母のやうに子を生めば、其子も父親や母方から流れ込んで混り合つた複雜極まる性格を持つだらう。仲子は、自分がむらのひ

どい性質を持つて居ると自覺してゐたから、この遺傳といふ考は一層可怖かつた。何かの廻り合はせで、自分の過剰と父親の天質の裡にある過剰な部分とがかち合ひでもしたら如何那ことになる。居ても居ないでも——いや其處かこの世に生れた事が自他ともに悲しみであり取かへせない悔であるやうな親子が一組殖えたとて、其が何だらう。

極端に懐疑的な部分だけ誇張した斯様な恐怖は最近伸子から可なり遠のいた。その代り、若し自分が母となつた曉、本當によい母、子供に全心、全時間、一生の重要な大部分を惜しみなく捧げ切れるやうな母になれるだらうかといふ疑が根深く生じた。夫婦だけの生活を考へても、此は伸子の心を惱む苦しい疑問であつた。「自分は眞實よい妻になれるだらうか」伸子は、自分が家を愛し、家族的な團欒をどんなにか愛することは判つてゐた。けれども、其だけで彼女は生活出來なかつた。彼女は自分が一生かかつて遣りとげたい一つの宿望を持つて居たから。其が容易に達し難いものなのは火を見るやうに明だ。力の足りない自分一人に、大きな二つの事がやり遂げられるものだらうか。佃に會ふまで、そして近頃のやうに左の感情がさし迫るまで、この疑問は常住な疑問として高まりも低まりもせず伸子の裡にあつた。今、その堤は破れやうとして居る。伸子は遂に自分に向つて、「さあ何う覺悟を定る積りだ。」と云はなければならない時になつたのだ。

伸子は、考へつめると苦しくなつてひとりでに溜息をついた。到底、考へた結果位で此事が決斷出來るものでないのが、次第にはつきりして來た。彼女の裡には、此問題について二つの拮抗する力があつた。佃を愛して愛して、愛し抜きたい切望と、彼が實際上良人としては種々困難な點を持つて居るといふ明瞭な知識と。或瞬間情熱に燃え立つて、伸子は夢中で彼を良人と呼びかけさうになる。然し、猶その刹那でも、貫くやうに意識の面を掠めて

「本當か？大丈夫なのか？」

と警告する何ものかゞ在るのだ。仲子は、いそがない事に腹を定めた。暫くこの不決斷な狀態に忍耐して居よう。心持が何方に傾くか。來るものならいつか自分に一思ひの決心をさせる時が來るだらう。息も樂々出來ないやうな重い數日が過た。

もう四五日で三月にならうとする或晩のことであつた。仲子は獨り部屋に居た。自習時間なので、寄宿舍は、眞夜中の樣に靜かな時刻であつた。閉めた扉の外では、コンクリートの廊下を歩く學生の小さい靴の踵の音が時々する。仲子は机に向つて居た。黑つぽい塗料のかゝつた勉强机の上には、數冊の書籍が去年降誕祭の時父から貰つた青銅の本立てに狹まれてある。綠色硝子の笠を持つた讀書用電燈が、今文字を書いて居る帳面の白紙や本の背革を森と照して居る。

仲子は、明日ミス・プラットの處へ持つて行く爲に、竹取物語の一部を英語で書きとつて居るのであつた。

物語は、元から彼女のすきなものであつた。自分から選んで始めた仕事だから、彼女は充分感興に滿ちて居る筈であつた。實際日によると、仲子は面白さにつり込まれて文法の間違ひや途法もない言葉使ひに頓着なく、自分の創作でもするやうな熱中で沒頭した。けれども、今夜は如何うも捗取らない。必要な表現が、彼女の貧弱な語彙に無いからばかりではない。物事にぐつと集注する熱が何だか胸の邊で缺乏して居た。仲子は、考へようにも字を書かうにも、自分といふ全存在の影が變に薄くなつたやうな手答へなさを内部的に感じるのだ。淋しいと彼女はいつもさうなる。佃が二日前から、紐育のずつと北に或る或る市に、職務上の用事で旅行して居た。彼は未だ二三日歸らない。――その旅行の話をきいた時、仲子は寧ろ悅んで贊成した。

「結構だわ、行つて被行い。たまには別々になるのもきつとよくつてよ。氣が變つて！」

彼が居なければ、獨りで自分の心持を考へなほして見る事も、亢奮しがちな神經に休養を與へる事も出來てよいと、思

つたのであつた。僅に最初の晩は、豫想の通りであつた。夕飯後、階下の廣間に自分を訪ねて來る者も居ないといふ安らかさで、仲子は早くから部屋着に着換へた。くつろいで、氣まかせに衣裳箪笥を片づけたり讀書したりする獨居の樂しさが彼女を魅した。九時頃風呂に入つて、眠りにつく時、仲子は日頃忘れて居たゆつたりした懐舊がさし上る月のやうにほの〲と我身を照すのを感じた。

次の日は一日暇な日であつた。其でも十時過にはアヴェレーホオルへ行つた。そして、いつも定りの卓子に坐つて見ると、仲子は何とも云へない物足りなさを感じた。大卓子の向ふ側に、見馴れた山高帽子もなければ、ノオトを入れた黒い手擦れた鞄もない。空の椅子と空の卓子の焦茶色の面に、朝の光が白々と落ちて居る。空氣の爽やかなるべき一種の冷たさ、清潔で人の跫音もしない建物全體、迫つて來る空虚が充滿して居るやうに思はれる。仲子は、なるべく向ふ側を見ないやうにして、英文學史の參考書を讀み始めた。

彼女は、本氣で讀んで居る積りであつた。それだのに、入口の扉がさつと開いたり、近よる人の氣勢がしたりすると、制せない勢で其方に注意が走つた。伸は市に居ない。數百哩離れた處に居る。理性は其事實をよくよく知り抜いて居るに拘らず、若しやといふ心持が電流のやうに胸を走つて、彼女の動悸を高めるのだ。僅か一二時が何と云ふ緩漫さで過ぎた事か！仲子は、仕舞ひに自分が餘り心の自由を失つてゐるので、情なく苦しくなつて來た。彼女は本をぱつたりと伏せ、帽子をつけて圖書館を出た。

午後、仲子は獨りでハドソン河沿の公園を散歩し、ブロオド街で手套を買つた。そして、この夜になつたのだが。……

……………

仲子は、やつと一時間の種になる丈竹取物語を寫すと、いそいで帖面や字引を片よせた。彼女は、次の瞬間にさもい

ゝ事でも待つて居るやうに、勢こんで勉强机から立ち上つた。が――何もありはしない。待つて居るものも無いし「あゝやつと濟んだ！」と云ふ者も居ない。伸子は寢臺や化粧臺が隅々に置いてある明るい室内を見廻して、歪んだ淋しい獸の仔のやうな顏をした。彼女は、持ち扱ふやうに兩方の腕を頭の上で組み合せ堂々廻りをして窓の處へ行つた。彼女の窓からは、とつぷり暮れた寒い夜を越して、同じ寄宿舍の鍵のてに突出した翼の窓々が見えた。灯のともつた切拔畫燈のやうに、澤山の窓から燈火が煌いて居る。處々に窓帷の引いてないのがあり、凍つたやうな外氣越しに、若い女の頭や白い上衣の肩がちら〳〵見える。どの窓の裡も平和で暖くて、人に知られぬ幸福が舞ひ降りて居るやうだ。伸子は突然、何でもよい樂器を力一杯掻き鳴らし、自分を溺らすやうなこの寂しさを心の限りぶちまけたい衝動を感じた。彼女は寢臺の端に腰かけ、靴の爪先で拍子をとり乍ら小さい聲で歌を歌ひ出した。これが自分の聲だらうか？此那慘めな、弱い震へた聲が？ぽつんと歌を切り、今度は雜誌をとりあげた。伸子は、涙が滲んで霞む眼を据えて、組つくやうに活字を征服しにかゝつた。

卅分も經つと、伸子はその抵抗力も失つた。彼女は、心持を紛らす事はとても駄目なのを知つた。「――それにしても、何といふ心の捕れ方だらう！」伸子は、自分が佃なしではやつて行かれないのを知つた。この世界中空つぽになつたやうな寥しさ、何をしても――路を歩いて居ても、讀んで居ても――彼に會ふ迄の時間を送る方便だといふ感じ、吸ふ空氣まで妙に稀薄になつたやうな苦しさ、佃でなくて誰がこれを救つて吳れよう。彼は、自分が此處でこのやうに彼に憧れ、切ない思ひをして居るのを知つて居るだらうか。

伸子の眼の前に、佃の顏がぼんやり浮び上つた。段々はつきりして來る。佃は、彼の古くさい山高帽を擧げ、伸子を見、溶けるやうなよき微笑を洩した。伸子は、眼を瞑り、熱く寒く體ぢゆうで顫へ乍ら、幻の佃を抱きしめた。彼の頰

……彼の唇――柔かい髪の手觸り。伸子は呻くやうに彼の名を呟いた。

壁に頭を靠せかけ、恍惚して居た伸子は、ノックの音ではつと氣をとりなほした。彼女は、いそいで兩手の甲で涙に濡れた眼を擦つた。

「お入りなさい」

然し扉は開かず、外から受付の少女の聲がした。

「御電話です、廣間に被來つて下さい」

「さうお、有難う」

誰から掛つて來たのだらう、伸子は氣のない樣子で身づくろひをし、昇降機で階下に下りた。廣間では、相變らず愉快さうな男女が彼方此方に群れて、笑つたり喋つたりしてゐる。夜會服をつけた娘が三人花束のやうにかたまつて嬉しさうに耻しさうに人中を通り拔け戸外に消えた。隅の大理石柱の下では長椅子に、黑い服をつけた監督の老孃が、動き廻る學生達を眺め乍ら、作りつけの微笑を强いて口元に堪へて坐つて居る。

伸子は、違つた生物の生活でも横切るやうな素氣なく廣間をぬけ、昇り口に近い電話箱に入つた。彼女は興味なく、若し誰かに何處かに招かれるのだつたらすぐ斷らうと思ひ乍ら受話器をとりあげた。

「もし、もし」

「佐々さんですか、すぐ其方につなぎますから」

軋み、カカカといふ接續の音がした。

「もしもし」

「もしもし……あなたは」
非常に不鮮明ながら、遠く途切れ〳〵に來る聲を一聲聞くと、伸子は思はず卓上電話の銀色に光る台を握りつめた
「佃さん？」
「佐々さんですか？どうして居られます？」
伸子はこみ上げて來た嬉しさと懸しさとで口が利けなくなつて仕舞つた。彼女は、やつと先方に聞える位の聲で
「もしもし　もしもし」
と呼きながら、動顚した熱い頰をぐい〳〵送話口に壓しつけた。さうやつて見えない彼からの愛撫を一刻も早く受け度がるやうに。佃の聲にも、優しさがあつた。
「紐育のお天氣はどうです？此方はひどい吹雪ですよ——話が聽えますか」
伸子は愼らない感動で息づまつたやうな低聲を出した。
「聽えてよ——よくかけて下さつたこと」
「御一人ですか？」
「えゝ」
「つい先刻まで會議があつていそがしい思ひをしました。——餘りひどい天氣なので一寸どうして被居るかと思つて……
……………」
「有難う」
伸子の胸には再び火の塊りのやうなものがせき上げた。出來ることなら一飛びに彼の手許に飛びついて、我武者羅に

熱情を浴びせかけたい。――迚も言葉などで言へない感情で伸子は送話口に額を押つけたまゝ默つて仕舞つた。

「もしもし」

「――なあに？」

「どうなさいました？」

「…………」

向ふ側にも情の深い沈默が生じた。伸子は、數百哩の彼方から夜の電線を傳つてまざ〳〵と來る彼の心持を感じた。その感じを追ひ追ひして行くと、二人を隔る距離がまるでつまつて、佃は、ぢきその壁の彼方側まで來て居るやうにさへ思はれる。軈て、先から云つた。

「そろ〳〵時間になるかもしれませんね。――切りませうか」

「さう？」

「ずつと部屋ですか？よくおやすみなさい。私は豫定通り明後日歸ります」

「何時頃？」

「多分あしたの夜行で此方を立てるでせうから夕方迄には着くでせう。夜おめにかゝります」

彼女はさようならを云つた。そして、恐らく自分の目の前で誰かゞ刺されても心付くまい程、氣を奪はれた顔つきで部屋に歸つた。

（四）

仲子は、其夜まんぢりともしなかつた。翌日は、陰鬱な小雨降りであつた。ミス・プラットの店から歸つて、玄關傍で洋傘の雫を切つて居ると、昇降機の方から安川が外出の仕度で出て來た。彼女は仲子を見つけて聲をかけた。

「佐々さん、あなたこれから何か時間がありますか」

仲子は、昨夜から絶えない内心の考へに囚れ、ぼんやり安川の顔を見上げた。

「なぜ?」

「若し何もないなら一緒に百二十五丁目まで行らつしやらないかと思つて」

「買ひもの?」

「一寸ね」

仲子は少し歩いて來る氣になつた。決めることは既に昨夜のうちに決つて仕舞つた。部屋で凝つとして居ても神經が疲れるばかりに違ひない。

「ぢやあ一寸待つてね、このごたくをあづけて來るから」

仲子は、本や帖面を受付に頼んだ。

近いからこそ細かい用を足すのだが、百廿五丁目邊は下等な街であつた。並んで居る店舗は三流以下で、街路は塵埃、バナヽや林檎の皮、貨物自働車の粗惡なガソリンの臭氣で滿ちて居る。窓硝子が破れ黄ばんだやうな半地下室に、靴直し、古着買、いかものゝ鋳職が鼠の巣のやうな店を張つて居た。天氣がよいと、其等等の石段から歩道にかけて、襤褸の塊のやうな無數の子供と、臭い彼等の母親とが姿を見せて居る。少し先から仰々しく飾つた百貨店其他が在る。市街全體品位がないので、寶石屋にある何百弗、何千弗と正札つきのダイヤモンドでも、何だか贋物としか思はれないやう

な場處だ。

安川は平常綿を一足買つた。仲子は思ひついて、リボン一卷と、白レース卓子掛と、何とも云へぬ可愛さで目についた家鴨の子の玩具を二つ買つた。子家鴨は本ものを剝製にしたので、掌に載る大さであつた。むく／＼した暖い茶色の和毛、平たい滑稽な嘴、黒い瞳。妙な工合に脚を踏張つて立つて居る様子には誰でも微笑する。安川は、仲子の子供らしい買物を見て笑つた。

「可笑しな人ね、どうするの其那もの二つも」

「可愛いぢやないの、まるで可愛い恰好だわ、佃さんにも上げたいの」

安川は、ちらりと仲子を視、理解し難いといふ表情をした。仲子は、手應へない紙包を片手で大切に抱へ、片手に傘をさし、びしよ／＼の濡れた舗道を戻つた。

眠らないに拘らず、仲子の心持は、はつきりして居た。永い間考へ悩んで居た問題に對して、遂に今自分の腰は定つたといふ、落付きがあつた。其は決して樂な行手を示しては居ない。お嬢さんであつた自分に、女性としての苦勞が始るだらう。佃にさへ協力する熱誠があれば、仲子は其を恐れる自分とは思はなかつた。彼がよし、と云へば自分の決心は出來て居る。仲子の胸には希望と一緒に、云ひ難い一筋の悲哀があつた。それは、親の事であつた。彼女は兩親を愛してゐたし、彼等が自分の良人を想像すれば凡そ如何那青年を考へるか、見當はついて居た。公平に云つて、佃は彼等の空想の中に現れるかも知れない人物とは違ふ。彼等は自分の決心を知つたら、驚き、不快に感じ、或は憤るかもしれない。無理ない事だ。然し、自分は後に引くまい。最も悪い場合を考へれば、其が一生感情上の不和となつても。昨夜、仲子はこの事を考へた時、激しく咽び泣いた。そして、どうか兩親も自分の心持は理解して呉れるように。佃も、萬一

運命がさう向いたら、彼等のよき息子と成つて呉れるように、祈つた。

次の日、午後の五時過、佃から電話がかかつた。仲子は、自分が行くから、七時頃圖書館に來て居て呉れるように頼んだ。

夕食を、仲子は儀式にでも臨んで居るやうに味なく、厳かな氣持で食べた。部屋に戻つて、佃にやらうと買つた子家鴨の頸にリボンの薔薇飾を結びつけ薄葉に包んだ。髮に刷毛をかけ、帽子をかぶり乍ら、仲子はいつもより少し蒼ざめ、いかつい自分の顏付を冷やかに眺めた。昨日の雨は上つて、今夜は風もないしつとりした晩だ。潤ひを帶びた黑い空には、夥しい星が燦いて居る。處々の街燈で、まだ葉のない樹木の梢や、大圖書館の圓屋根が暗い裡に模糊と浮立つ大學構内を通つて、アヴエレー、ホオルに行つた。佃の姿は見えない。仲子は大圖書館に行き、三階の隅の特別室の戸を開けた。隈ない明りの下に、林のやうに書架が並び、乾き古びた紙の香が四邊に漂つて居る。仲子の跫音は異様に人氣ない天井に反響した。讀書室で、誰かゞ席から立ち上つた音がした。仲子は足を速めて敷居に立つた。佃は居た。獨りだ。彼は入口の方を向き、仲子の來たのを迎へるやうに、椅子の背に左手をかけて立つて居る。――

何處か少し窶れたやうな彼の顏を見た刹那、仲子は今まで自分を內から支へたゐた軸が響を立てゝ前折れるのを感じた。彼女は、盲目になつたやうに佃の胸にとびついた。

最初の感動が鎭ると、仲子は佃と並んで椅子にかけた。短い言葉で旅行の有樣を尋ねた。彼女は、やがて薄葉の包みを出した。

「お土産。なかをあけて御覽なさい」

佃は、珍しさうに包を解き、中から出て來た子家鴨を見ると、一時に微笑で顏を輝した。」

「これは可愛い！有難う。どうしたのです？」

「きのう見つけて買つて來たの、安川さんと」

佃は、無骨な指先でふわ〳〵した羽毛を撫でたり、靴の上を步かせて見たり、罪なく子家鴨と戯れて居る。仲子は、その平和な顔を息苦しいやうな心持で眺めた。彼は、この自分が次の瞬間に何を云はふとしてゐるか、まるで知らない。自分達の運命が、この數分に定らうといふのに！

仲子は、重大な話を切り出すに一種の辛さを感じた。彼女は伏目になり、佃の手に自分の手を重ねた。考へて置いた言葉は頭の中ではつきり判つては居るのだが、劇しい感情の動搖が先き立つて、舌が重く強張る。仲子は、唐突に彼の名を呼んだ。

「——佃さん」

異常な調子に驚いて佃は仲子を見た。仲子は眼を見合はせせた途端、胸の何處かでも急に痛むやうな苦しげな顔をした。彼女は手を延し、彼の頭を自分の方に引寄せた。そして、ぴつたり耳に口を寄せ、囁き始めた。

「私ね……私ね……」

が、いきなり、仲子自身豫期もしなかつた涙がひどい勢でこみ上げて來た。彼女は、佃の耳に顔を押しつけたまゝ啜りあげて泣き出した。佃は周章てゝ、自分から仲子の顔を離さうとする。

「どうしたのです？え？どうしたのです」仲子は一層激しく彼にしがみつき乍ら、途切れ途切れに涙の間から呟いた。

「私ね……考へたの、……若し結婚するなら……私は……」

佃は打れたやうに、ぐつと兩手で仲子の顏を挾んで自分の前に持つて來た。仲子は、涙でぐつしより濡れ、上氣し顔へ乍ら懺悔する子供のやうに一氣に云ひ切つた。

「貴方とでなければいや。」

（五）

リヴァサイド・ドライブの端れに、グラント將軍の記念塔めいた墳墓があつた。數段の石段を昇ると、甃石の廣場が建物の周圍を繞つて居る。目の下に眞暗なハドソン河と冬枯れの公園があり、四邊に散歩する人影も見えない。ぼんやりした瓦斯燈の光が車道から屆いた。時々寒い河風が吹き渡つて、雪を帶た水の匂ひを運んで來る。

仲子と佃とは、先刻劇場を出て此處迄來た。彼等は明に亢奮して居た。けれども、心持は眞面目で、寧ろ沈んで居た。仲子の告白をきいた時、佃は

「此那ことがあり得るだらうか！此那ことがあり得るだらうか！」

と呻いて、骨も碎けさうに仲子を擁き締めた。彼の眼から涙が激しく溢れ落ちた。これ以上の承諾が何處にあらう！

仲子は自分が幸に誤らず彼の內心にも在つた希望を切り出したのを知つた。彼女は次第に落付いた。

「もつといろ〳〵聞いて戴かなければならない事があるの。少し步きませうか」

其處で、彼等はこの時候のこの時刻では、往來も疎らなリヴアサイドに來たのであつた

仲子は自分が彼那風に、自分の心を打ち開けようとは思つて居なかつた。もう少し冷靜に、自分が其決斷に來た心持の徑路から、實際上の種々な相談をし、最後にあの一言を云はふと考へて居たのに！順序や考へ等、いつの間にかけし飛んで仕舞つた。今逆に戾つて始めの方を彼に話さなければならない。佃に腕を執られ、ゆる〳〵建物を廻り乍ら仲子は考へ考へ口を利き出した。

「これから申さうとするのは皆私の我儘なのよ。妙な工合で後先になつて仕舞つたけれど。でも一生の事だからどうか聞いて頂戴。私は遠慮なく思ふ事を申上げてよ。——毎日の生活はたゞ可愛いといふばかりで行かない深山のことがあるから」

「勿論さうです。」

111は熱心な調子でなつた。

「何でも云つて下さい。よく相談して、私は自分の力の及ぶ限りの事はします。この四五年私は結婚といふことなんかすつかり斷念して居た。——實に思ひがけない——信じられない程です——今頃」

「私にしても其は同じです。まるで思ひがけない。——でも、私はどうかして自分達の愛をよく活したい。私が貴方の被居らない間考へて、かう定めたのも私共の心に育つて居るものを眞直伸して立派なものに仕て見たいからなのです。たゞ旦那と妻君を作りたいからなのではなくつてよ」

「其は解つて居ます」

「お互が安心して、その愛で少しでも深みや廣さの増した人間になりたい。——若し心持の故障なしにやつて行けるなら、私は一つ家に」むといふことや他のいろんな形の上の事など、如何でもよいとさへ思ひます。でも貴方が安らかでないと結局私も安らかでないから。——」

彼等は數歩沈默の裡に歩いた。伸子は、訊ねた。

「貴方——これが私の我まゝといふ處なのだけれども——貴方は御自分の細君が、家のことは下手で勉強したがりでも平氣で被居れて？——私は本當に貴方は愛してよ、この心持に嘘はない。けれども、仕事も愛して居ます。貴方と同

じ位！ね、これは言葉で斯うして云ふと何でもないやうだけれど、我々が若し生活を一緒にするように成ると、なか〳〵大變な事だと思ふの。私は――」

伸子は、勇氣を失ふまいと努力して、力一杯佃の腕を自分の脇に壓しつけ乍ら云つた。

「迚も貴方に會はなかつた時の心持に戻れないと思ひます。だから、思ひ切つてそれを育てゝ見ようと思ふ……其でも、仕事はすてられなくてよ。其だけは出來ない。一生碌なことは出來ないかも知れなくてもやめることは出來ないの。萬一其を止めなければならないものなら…………實に――苦しいけれど……私は仕事と一緒に……貴方に………左樣ならをするしかないのです」

唇をかみしめ、伸子は辛うじて涙を制した。佃は、彼の全身の身ぶりでその疑念を晴さうとするやうに、心をこめて斷言した。

「其那心配こそ無用です。――貴女が大切に思つて居るものゝあるのは判つて居ます。貴女を假にも愛して居る者が、どうしてそれを捨てろなどゝ云ひます！――私は自分をすてゝも貴女を完成させて上げたいと思つて居る程です。決して家政婦を求めて居るのではない……私は元から、何か自分の仕事を持つ女のひとを助けて立派なものに仕て見たいと云ふ考へを持つて居たのだが…………。力の足りないのが遺憾です」

伸子は、嬉しさに思はず其處で棒立ちになつた。

「本當？本當にさうお思ひになるの？」

「本當です！御覽なさい」――

佃も立ち止り、伸子の兩手を自分の一つの掌に握つて、彼女に顏を向けた。

「私の顔を御覧なさい。――嘘は云ひません」

「――有難う！有難う！」

仲子は、ぽろ〳〵涙をこぼし乍ら、執られたまゝの兩手を強く振り動した。

「本當に有難う！どんなに嬉しいか貴方にお解りになつて？有難う！あゝ全く！有難う」

仲子は、しんから感動して傍の夜霧で濕つた腰架に腰を下した。彼女は、この寒い、眠つて居る夜の自然に向つて跪き、「この良人を私に授けて下すつたのは、どなたですか。私は其程惠み愛されて居たのでせうか」と畏れ感謝したい程であつた。あゝ本當に、このやうな彼に廻り合へようとは！仲子が涙を止めあへなかつたのはこの理解の嬉しさばかりではなかつた。彼が、始めて男らしい權威を以て自分の心持を明言して呉れた歡喜である。あゝ！彼は始めて男らしく口を利いてくれた。

佃は心配して度々仲子の肩を撫た。

「大丈夫ですか？………餘り亢奮すると」

「大丈夫なの。　此那嬉しい時に病氣になんぞ成るものですか。………でもお互に氣をつけて丈夫で居ませうね、私共はどうせ貧乏よ。お互が助け合つて生活して行くのよ。私は親達から何も貰ふ氣はないのだから――勿論呉れるものもないけれど」仲子は、二人の貧乏さへ悦び愛すやうに揚々と笑つた。

彼等は、歩道に降り、河風が厳しい寒氣を凍み渡らせるもの頓着なく歩いた。

「私は自分の愛には責任を負ひます。だから萬一傍から苦情が起つても踏み堪へてよ。」

佃は、やがて心付いて時計を見た。

「九時半すぎて居ますが………いゝのですか」

仲子は、寄宿舍の出入簿に圖書館へ行くと書いて來た。圖書館はもうそろ〳〵閉る頃だ。仲子は一寸考へた。

「――いゝわ。大切なことを話して居るのですもの。若し何だつたら明日、ミス、リイにちやんと理由を話します」

仲子の心は、もう何でも彼と一緒だといふ信念で、勇氣に滿ちた。けれども、晩くどももう二時間ばかりで佃と別れなければ成らないとすると、彼女には心がゝりな事がもう一つ在つた。其は重大なことだ。佃も未だ其には一言も觸れない。仲子は、緒口を見出すに又新たな工合惡さを感じた。然し云はずに濟む事でない。仲子はぎごちない風で、

「もう一つ忘れては大變なことがあるのだけれども――」

と云ひ出した。

「何ですか」

「………」

仲子はつい云ひ澁つた。

「何ですか」

「――………子供のこと」

「……解つて居ます」

「――どういふ風に?」

今度は佃が躊躇した。

「つまり………」

「私は悦んで適當な境遇で育てゝゆけないうち、子供は決して何方にとつても幸福でないと思ふのです。貴方の思つて被居るのもそのこと？」

「さうです——仕事もあるし……」

「第一私共は二人でやつと生活をするに定つて居ます。滿足な教育もさせてやれない親になるのはいやよ。それに……

……私の心持の中に何かすらりと受けられないものがあつて——」

仲子は、低い聲で尋ねた。

「男のひとに、私のこの可怖さが解つて？實に可怖いのよ。可怖くて、斯う云つて居ても堪らなく成るやうなものがあるの本能的に。——」

佃は、ひどく散文的に云つた。

「何んでもないでせう　其那ことは」

仲子は　彼の情味の缺けた調子で微に傷けられたやうな口調で云つた。

「何でもない事とは思はなくてよ。私は、さういふ心持があり乍ら一方、此方の女の人達のやうに平氣で純科學的に取扱へない心持が強くあるのです——成り下つた、淺間しい暗い氣がして、——自分や、何か斯う晴れ〳〵と高く美しいものに對して、ね。矛盾した心持なのです。けれども……私には二つ乍ら更へられないから——」

彼等は寄宿舍に曲る横通りに出た。佃は、仲子の上に心を被ひかぶせるやうに云つた。

「安心なさい。——私は貴方を苦しめるやうな事はしません。さういふ心持も、いつか變るかもしれないから……何も私は——解るでせう？さういふことについて少しは分つて居る積りです」

今になつて、彼等は自分達がかな氷のやうになつて居るのに心付いた。彼等は寄宿舍のすぐ前に在る喫茶店に入つた。遲い朝食を食べに來るので仲子を見知り越しの主婦が、帳場の奥から笑顏で頷いた。熱い珈琲を飲み乍ら、仲子は小ぢんまりした店内の有様を、今夜は特別な感銘で眺め渡した。鏡張りの大柱、その面に映り輝やいてゐる枝形燈架の如何にも冬の夜の室内らしい美しさ、卓子の間を斡旋して居る給仕の姿まで、忘れ難い必然さで運命的な今日といふ日に繫つて居るやうだ。――

佃は、寄宿舍の、もう灯の仄暗い玄關口まで仲子を送つた。

（六）

冬と春との入れ換る三月で、天候は著しくむらになつて來た。今朝ちら〳〵粉雪が降りかけたかと思ふと晝頃ぱつと日が照つて、夜は濃やかな霧が市街を包む。次の日は風が強く吹いた。喉が痛む程空氣が乾燥する。――晴れても曇つても、冬が日一日と溶ける氣勢は爭はれなかつた。街路樹は、いつか梢に靱やかな撓みを持ち始めた。一向無頓着で買物がてら街路を歩いて居る時など、不圖、高い高い塔の頂上でヒラ〳〵はためいて居る赤と碧の旗に目が留る。何もあるのではない。たゞ空高く年中見なれた一つの旗が飜つて居るばかりだ。が、人は、その旗の色や、眺める空や空氣から、今日ばかりは、ことさら何か閃く歡ばしさのやうなものが自分の心にとび移るのを感じる。訝りつゝ瞳がなごむ。……其が春の遠慮深い先觸れだ。優しい、目立たない、然し確かな指先の香が冬を追ひ立てる。

其日は、夜前からの淡雪が降り積つて居た。

仲子は、午餐を、或實業家の夫人に招待された。久し振りの日本料理なので、皆悦んだ。中でも仲子は、五人の女の

仲間では、目立つて快活であつた。あの晩以來、彼女は元の元氣、いつでも何かに熱中出來る心の潑溂さを取り戻した。彼女は、全く、自分逹の間に生じた新しい希望について考へると、ひとりでにこみ上げる感動をやつと制すのが常であつた。思つても、思つても思ひ盡きないものを確かり心の裡に抱いて、何も知らない尋常な人々の間に坐つて居るのは、樂しい。仲子は、自分だけ知つて居る理由で、誰にでも愛嬌よく仕た。よく喋り、よく笑つた。

二時から、ミス・プラットの時間があつた。けれども、前晩おそくまで佃と居た上、今日招かれたので、何も仕度が出來て居なかつた。仲子は、眞直其わけを話す積りでミス・プラットの處へ行つた。先日のこともあるので、若し話が延んだら、彼女にだけは、佃と自分の心持をはつきり話してもよい氣持もあつたのだ。

五分程早めに着いたにも拘らず、ミス・プラットは、いつも彼女等の坐る側部屋の長椅子で仲子を待つて居た。挨拶がすむと、仲子は率直に云つた。

「――今日私は大層なまけやなのです。いつもの準備が出來ないまゝ參つたのですが、勘辨して下さいますか」

ミス・プラットは房々した栗色の前髮を仰向けて仲子を見た。

「どうして？……まあこゝにお坐りなさい」

背中に腕を廻して、彼女は仲子を自分のぴつたり傍に腰かけさせた。

「何故出來ませんでした」

「本當は昨夜する筈だつたのですけれど、餘りおそくまで佃さんと話したのでつい駄目。今朝は阪部夫人におよばれだつたので時間がございませんでした。……勝手ですが、今日は口で申す話をなほして下さいませんか」

「勿論それでかまひません……けれども」ミス・プラットは、仲子の背中から手を離さず、却つて愈々凝つと情をこめ

て自分の方に壓しつけるやうにしながら云つた。

「貴女はこの頃少しいそがしすぎるのではありませんか？いろ〳〵なことで。…………」

仲子は、ミス・プラットの聲に、眞實な憂慮があるのを感じた。彼女は、大勢の裡でやゝ陽氣になり過て居た心持が森となるのを感じた。仲子は、丁寧にミス・プラット の腕を自分の體から離して膝の上に持つて來た。

「落付いて居りませんか？」

まともに向けた顏を、ミス・プラットは注意深く覗た。

「其程ではないと思ひますけれどもね。」

仲子は、彼女の眞面目さにひかされてこの間から溜つて居たことを自然に話し出した。

「私は、先達から佃さんと私のことについて御心配いたゞいて居ることは知つて居りました。……いつぞや私をお呼び下すつたのも、その事に關係がありましたのでせう？」

ミス・プラットは彼女獨特の重々しさで yes を云つた。

「さうだつたのです——貴女は感じが早い方だから……」

仲子は、彼女がこだはらず話しを受けて呉れるのを悦んだ。彼女は、信賴に滿されて云つた。

「有難う、さつぱりお話が出來て嬉しうございます。あの時はね、私の心持も定つて居ませんでしたし……あゝいふ工合で其那ことを云ひ出すのは私いやだつたのです」

「……けれども、いつか必要な時が來れば、そして必要なら貴女はきつと私に相談して下さるだらうとは思つて居ましたよ。私が及ばず乍ら、貴女の幸福を心から願つて居ることは知つて居て下さるのですものね」

伸子は默り込んだ。彼女達の坐つて居る前面の壁には、戸外の建物や街上から反射する雪明りがぼつと白く映つて居た。雪解が速いので、どん〳〵立昇る水蒸氣の微な搖れも見えるやうだ。伸子は、困つた揚句、無技巧な一本調子で到頭云つた。

「――私は佃さんを愛して居ます」

「…………さうでせう」

「……私共は婚約をいたしました」

「婚約を？」

穩やかであつたミス・プラットは、思はず伸子が目を逸した程顏全體に驚愕の色を現した。伸子は悲しい氣がした。其那、不快な程の愕きを與へることなのであらうか。ミス・プラットは、軈て氣を鎭めて詫びた。

「御免なさい。餘り突然であつたので……本當に思ひがけないことです……貴女が。」

永い沈默が來た。ミス・プラットは暫く後、感動の餘りといふやうに呟いた。

「貴女は本當に若い！ 可愛い人です。私はどうかして一生幸福な貴女を見たいと思ひますよ」

彼女は、伸子を自分の胸に抱いて髮を慰撫した。

伸子は、魂にしみ徹るやうな痛さで、自分が始めて受けた祝詞ともいふべき言葉の性質を感じた。これは、婚約者の普通受ける祝福ではない。傷み、あきらめ、歎息する響があるではないか。伸子は、或場合、此上更に冷笑や輕蔑の加ることも覺悟しなければならないのを知つた。――知つたと云つて、彼のいとしさが減らうか！

ミス・プラットは訊ねた。

「御父様は佃さんを御承知ですか」

「知つて居ります」

「云つてお上げになりましたか？　事情を」

「すぐ書きました。詳しく、――其に、ずつと前から自分の心持は知らせてありますから……」

ミス・プラットは、佃が萬一何か爲にする處があるのではないかと疑つた。仲子には、何より其が辛く、彼の爲にすまなく思つた。彼が若し金持の息子なら、彼の父親の名が紳士録に載つて居たら、誰が其那ことを思はふ。假令其男が騙す氣でかかつたとしても、世間は默つて居るだらう。佃はその點、辨明さへ信じられ難い立場に居るとは。仲子は、自分が卑められるやうに苦痛を感じた。彼女は、殆ど頑固らしく云つた。

「ね、ミス・プラット。あの人を愛して居るのは私です。あの人を信じて居るのも私です。私は誰があの人をちやほやしたつて愛さないものは愛さない、信じられなければ信じません。けれども、私が愛し、私が信じたら、少くとも私にその心持がある間動かせません。」

仲子は、日暮れ近くまで、ミス・プラットの處に居た。彼女は、内心を吐露した一種の輕やかさと同時に、自分等の結びつきに對するやや憂鬱な感傷とに滿されて歸つた。

（七）

日曜日。――仲子は、ミス・プラットと市の繁華な場處にあるミセス・チヤァチルの茶に招かれた。

ミス・プラットは

「面白いものですよ、紐育はいつでも最新な生活様式や流行で皆が暮して居るやうに云ふでせう。處が、あゝいふ市街の眞中に、ヴヰクトリアン・エイヂの破片がちやんと、ミセス・チヤアチルといふ名を持つて生きて居ます。一度行つて見ませう、貴女が窒息しないうちに、きつと連れ出してあげますから」

と云つて、仲子をつれて行つたのだ。仲子は、興味を以て、然し實に窮屈に二時間其處で過した。彼女は、珍しい紋章學の話を家柄の自慢と共に、ミセス・チヤアチルから聞いた。

五時過に、二人はC大學の集會所に廻つた。Y、M、C、A主催のコスモポリタン俱樂部の日曜晩餐があつた。世界各國から留學して居る學生の大多數が會員で、世界主義を理想とする討論や研究、講演があつた。その前に、大廣間に幾列も並んだ卓子で、皆が簡單至極な食事をするのだ。

仲子は、入口で、規定通り渡された紙に自分の名と國名を書いて胸にピンで止めた。今日は、他處に大して面白い催しもないと見え、盛會であつた。絕間なく扉が開いて、種々な國籍の男女が參集する。控室に外套や帽子を置くと、ミス・プラットと、階下廣間の暖爐の傍に坐つた。仲子は、出入口に面した方に席を占め、其となく人の出入に氣をつけた。昨日の夜から、彼女は佃と會はなかつた。今夜は彼も來る筈だ。仲子が、大して氣もないのに來たのは、彼に會いたいからだとさへ云へる。大方待ちくたびれた時、仲子は思ひがけなく、期待したとはまるで反對の方に佃の姿を認めた。彼は彼女等より早く來て居たものと見える。奧の男子控室のすぐ前で、玄關の方に向いて立ち比律賓人らしい眼の大きい青年と話して居る。話し乍ら、彼はちよい〳〵外を氣にして居た。やがて、青年と別れると、彼は、肩を左右に振るやうな步き方で仲子の方に來た。彼はまだ仲子が、一團の人かげの椅子に居るとは知らない。段々近よつて、佃がその集團の向ふ側を通り過ようとした刹那、仲子は我知らず左手でミス・プラット の膝に觸り乍ら彼女の名を呼ん

た。
「ミス・プラット」
聲を出すと一緒に、仲子は自分の失策に心付いた。何といふ馬鹿だ！ミス、プラットはもう前から佃を知つてゐたではないか。彼を見た瞬間、仲子は、何故か改めてはつきり
「ミス・プラット、あれが佃さんなのです」
と告げ知らしたい烈しい欲望を感じた。彼女は考へる暇なく、ミス・プラットと呼びかけたのだ。告げてどうしようと云ふのだつたらう。永年支那で傳道して居た婦人と話して居たミス・プラットは、悠くり頭を廻して答へた。
「何ですか？佐々さん」
仲子は、自分の呼びかけと、彼女の應答とに間があつたので、やつと愚かな混亂から救はれた。彼女は、何でもなかつたやうに呟いた。
「御免下さい。人違ひだつたのです」
仲子は、自分の突拍子ない心持を我ながら喫驚した。
餘興に、ボウランドの青年が熱情的にポロネイズを彈奏して會は終つた。九時少し過た許りであつた。ミス・プラットは仲子と佃に自分の家に來るようにと頻りに勸めた。彼女はもう一人、仲子等の友達の一人に佛語を教へて居る白井義婦人と一緒であつた。
「よろしかつたらどうか來て下さいな。久しぶりで日本の綠茶をおもてなし致しますよ。ね、いゝのでせう？」
仲子は、餘り云はれるので斷り切れなく成つた。彼等は四人で、ミス・プラットの家に行つた。

母夫人は留守であつた。彼女が獨りで茶器を揃へるので、仲子は食堂に出て行つた。

「私もお手傳いたしませう、このお湯沸しをかけてようございますか」

仲子は指圖通り、スヰッチを捻つた。戸外から歸つたばかりですぐ用を始めた故か、ミス・プラットは何處かせか〳〵して居た。彼女は珍しく何か獨言を云ひ乍ら、菓子を鉢に盛り分け、客間に持つて行つた。戻ると、彼女は

「どう？　もう沸いたでせう？」

と湯沸しに觸つた。かけて五分も經つて居ないのに仲子は云つた。

「まだかけた許りですもの、もう少々待たなければ。」

ミス・プラットは、掌でアルミニュウムの光つた胴に觸り乍ら云つた。

「かなり熱くなつて居ますよ」

「外側から先に暖まるものでせう？」

「ようございますよ、もう！」

仲子は笑ひ乍ら云つた。

「大變せつかちで被居ること！　私が丁度よくして持つて參りますから、彼方に被行るとようございます、わかつて居ますから」

彼女は、物判りのよい、泰然とさへして居るミス・プラットが、湯ぐらゐのことでせかつくのを愛らしく面白く感じた。けれども、ミス・プラットは理屈なく、もう湯が沸いたと主張する。

「いゝのですよ、確にわきましたよ、御聽なさい音がして居ますもの、おろしませう。」

彼女の、脣や眼にある强情さがふと伸子を警戒させた。其は早く彼方に行つて皆と一緒になりたいといふ、わく／＼する子供らしい氣ぜわしさではない。一徹な、何かに反抗して居るやうな頑張りだ。伸子は、沸いたとか沸かぬとか云つて居る氣が仕なくなつた。彼女は

「では消しませう」

と、スウヰツチを切つた。

湯はなま沸きで、不味い不味い茶が出た。ミス・プラツトは、さすがに苦笑した。

「佐々さんに負けましたね、夏向のお茶が出てしまつて………」

伸子は、四邊に妙な雰圍氣の醸されてゆくのを感じ、居心地よくなかつた。ミス・プラツトは絶えず話題を提供するのだが、不自然な處があつた。彼女は、誰にともなくぼんやり話してすむ處を、故意に佃を焦點とした。一々

「佃さんはどうお思ひになります」

又は

「貴方の御意見をおきかせ下さい」

佃は、迷惑らしく、はきはきした返事をしない。而もミス・プラツトは同じ調子をかへようとしない。

彼女が

「佃さん、貴方の御專門は何でしたか、いつぞや伺つたのでせうけれども、つい失念して………」

と云つた時、佃は、神經の焦立つた様子を制さうともしないで突離すやうに答へた。

「面白くもないものです」

棘々しさが心を刺した。仲子は間から口を入れた。

「彼の專門は古代言語學なのです、特にイラン語の。」

皆の氣を輕くしやうとして、仲子は云つた。

「いつかよろしかつたら御一緒に美術館にでも行つて見ませう、佃さんを說明役にして、きつと面白いでせう」

それを、ミス・プラットは自分の言葉で後ろに控へさせるやうにした。

「私は佃さん御自身からいろ／＼伺ひたいのですよ。――それで、如何那目的で研究して被居るのです？」

これは、座談ではない。詰問めいて居る。仲子は、何故今夜に限つてミス・プラットが此程變なのか解らなかつた。殆ど意地惡いやうだ。心の裡ではら／＼して居る仲子の注目の前で、佃は、腕組みをし、益々不活潑な拗た風で答へた。

「研究の爲の研究です」

「…………失禮ですが、私共は遁辭だと思ひます。私は勿論、眞の研究がたゞ功利的なものでないのは知つて居ますが、研究の爲にする研究なら猶更、其處にはつきりした御自分の目標がおありでせう？　犬でさへ土を堀るのは何か嗅ぎつけて居る證據です」

「――失禮ですが、今晩、私は議論する氣分になれません、又いつかゆつくりした時に」

「あら、私共はちつとも議論などしては居ませんよ、たゞ眞面目な話、ありふれたことをほんのちよいと本氣で話して居るのぢやあありませんか」

ミス・プラットは、仲子をぞつとさせた笑顔で、他の二人を顧みた。誰もそれに應じて微笑出來なかつた。彼女と佃と

の間に戦端の開かれたのは明瞭だ。伸子は、どうかして、佃が、ぴりりと一言でこの不快極る場面を終らせる丈の技倆のあることを祈つた。出來るなら、ミス・プラツトに「やめて下さい、もつと穏に別な話をしませう」と云ひたかつた。けれども、何方も子供ではない。獨立した二人の、同じやうに硬い背骨の人々だ。伸子はミス・プラツトが、この話をしたさに佃ぐるみ家に誘つて來たことを諒解した。

「まあ、では私は不幸にも、貴方の御專門について理解出來ないとして――これだけは伺へるでせう？ 貴方が一人の人間として人生にどんな目あてを持つて被居るか……」

先刻から凝つと三人を眺め乍ら、當惑して坐つて居た白耳義婦人が此時口を出した。

「ミス・プラツト、もうよろしいでせう？ 餘り問題が――」

ミス・プラツトは佃を正面から見据へ、上體をぐつと椅子の上で立てたまゝ、きめつけるやうに云つた。

「いゝのです心配なさらなくつて。――私は自分の申すことを辨へて居るのですから。――佃さん、沈默は場合によつては、黄金で通りませんよ」

「…………」

「佐々さんは」

伸子は、豫想しなかつた自分の名が引合ひに出されたのに眼を瞠つた。

「もう自分の仕事や人生に或目標を立てゝ被居ます。貴方は、何も仰云ることがないのですか？ 仰云れませんか」

伸子は、居たゝまれないやうになつた。然し、佃の爲に容赦を求めることなど迚も堪え難い。彼女は、佃に對する歯痒さと、それをわざ／＼斯樣にして他人と自分との前に暴露させるミス・プラツトの冷やかな驚くべき畫策とに、むら

くとした。悲しく情けなくもあつた。ミス・プラットは、伸子の爲にと思つて、佃の赤裸な姿を暴らさせようとして居るのは伸子によく判つた。「人前で器量を下げるやうな男！」ミス・プラットは、自分がさう思つて愛想づかしでもすると思ふのだらうか。其ならば見當は違ふ。伸子の心は、齒痒ゆさと共に、子供の試驗に立ち合つた親のやうな心配、盲目的な憐れみで一杯であつた。彼女は確にあとで佃にくつてかゝるだらう、何故てきぱきなさらないの、と云つて。然し、其は見切りではない。愛の、何處までも先の見越しは希望を以てする鞭だ。――

默つて居る佃に向つて、ミス・プラットは平手打ちのやうに云つた。

「仰云られないのは、貴方の人格が空虚な證據です。――理想も熱情も、思想もありはしないのです！　貴方はそれでよくも」

「ミス・プラット！」

ミス・プラットは蒼くなつて彼女に向つた伸子を見た。――彼女は、神經的な身じろぎをして口を緘んだ。

（八）

伸子は、ミス、プラットの好意を重荷に感じた。彼女は自分が親を離れて居るので、出來る丈の親切を盡して呉れようとするのは感謝を以て理解した。けれども、彼女のやり方に、何か伸子が素直になれないものがあつた。ミス・プラットは、正面から物事に當る筈の人だのに、佃との問題に對しては始めからこぢれて居る。伸子は、次の時間のあつた日、日曜の夜のこと就ては一言も云はなかつた。が彼女から云つた。

「この間の晩、コスモポリタン倶樂部で、私心付いた事があつたのですがね」

伸子は、閉した帖面の上に兩手を置き、弱つた顔でミス・プラットを見た。

「食卓についた時、佃さんが貴女と私とに椅子をなほして呉れました。そのなほしが貴女に對してと私に對してとは違つたのですよ、——氣がつきましたか？」

仲子は頭を、振つた。

「いゝえ」

「私に對しては丁寧に些も非難出來ない樣子で。ところが貴女には、ずつとぞんざいに片手でしたのです」

此迄一番樂しかつた時間が、冴え〳〵しないものに成つた。仲子に厭はしいのは、ミス・プラットが佃によい感じを持たないと云ふ丈の單純なものでなくなつた。自分に對する偏愛が彼女には寧ろ苦しかつた。女らしい、行屆いた假借しない殘酷さで佃のことを彼此云はれると、仲子は、ついミス・プラットは嫉妬して居るのかとさへ思はずに居られ成くなつて來るのだ——

一寸の間晴やかになりかけた仲子の生活は、再び内外から不安を感じるようになつた。丁度紐育から出征した兵士が凱旋するといふ日であつた。早朝から、寄宿舍中は殆ど空であつた。學生達は市民全體を捕へた熱狂で、第五街の大通りにつめかけた。或者は彼女等の愛人や友達の雄姿を見ようとして。他の者は、未曾有の市の盛典を見物しようとして。仲子は、近頃さういふ事に餘り興味が持てなかつた。彼女は、此こそ寄宿舍にとつても未曾有な朝の靜寂を樂しみ乍ら部屋に居た。窓から見る街路もからりと人氣なく、まるで日曜の朝のやうに滑らかに廣々して居る。仲子は、まだ編み下げのまゝの髮の先を、指に卷きつけ乍ら窓際に佇んで戶外を眺めて居た。背後で扉を敲く音がした。突嗟に、佃の來た知らせかと、彼女は困却した。十一時頃から彼等はハドソン河を彼方に渡つて、少し永い散歩をしようと約束して居た。佃は早く來たのかしら。扉の方に歩き乍ら、仲子は

「お入りなさい、どなた」

と聲をかけた。

「——被居つたの？」

扉がすらりと開き、高崎が現はれた。平素餘り親しくもして居ないので、仲子はこの早朝の訪問を意外に思つた。

「まあ、珍らしいこと！　どうぞ」

「えゝ有難う。ついそばを通つたのでおよりして見ましたの」

直子は、袋を置き、外套の襟を開いて仲子のすゝめた椅子にかけた。仲子は、寢臺の端にかけた。

「どうなすつて其後。——いつか御病氣だつたのはもうすつかりお癒りになつて？」

彼女は、直子が化學の實驗の時、藥品から發生した瓦斯に中毒して床に就いた事をきいて居たのだ。

「えゝ、好い鹽梅にもうさつぱりなの」

直子は、小柄な、然し濃い髮、眉、意志的表情のある大きな口元の工合で、美しく印象强く見える顏を動かして室内を眺め乍ら、仲子の近況を訊いた。彼女の態度には、寛ぎ切れないものゝあるのが著しく目立つた。其は、この部屋にちよく〳〵來つけないからと云ふ丈ではない。氣易さうに話して居る世間話は、本題の前おきに過ないと云ふはつきりした意識が彼女の心に在るかららしい。——仲子は、側から聞いた直子とのいきさつを思ひ出した。——

とりとめない話を數分した後、直子は遂に

「實はね」

と本論に入つた。

「今日お寄りしたのは、久しくお目にかゝらなかつたこともあるし、傍々一寸私の老婆心をきいて戴かうと思つて上つたのですよ」

伸子は、相手の話を樂に續けさせる爲、單純に應じた。

「さうお、有難う。――如何那ことなの？」

「大したことではないのですけれどね……」

直子は微かな感情の動搖を制さうとするやうに、必要もないのに兩手をあげて帽子をなほし乍ら云つた。

「貴女――佃さんと大變お親しく仕て被居るのですつてね此頃」

「さうよ」

「其につけて――貴女もきつと御承知でせうけれど、一年ばかり前、私大變佃さんにいろ〳〵御厄介になつて居た事があるのですよ。勿論金錢上の事や何かではありませんけれどね、學課の手傳ひをして戴いたり、仕事を紹介して戴いたりして。

直子は、云ひ出して仕舞ふと彼女の確かりした氣象を現はして澱みなく進んだ。

「お友達ですけれど、年もとつて被居るので私は叔父さんにでも頼るやうな氣がしましてね。――かなり長いおつき合ひでしたから、私は、佃さんが彼此云はれなさりはしても決して下等の方ではないのは知つて居ります。私と二人ぎりで居たつて其はちやんとしたものでした。其は私誰の前でも公明正大に云つて上げられるのですよ」

伸子は、微笑ましい心持がした。無自覺の裡に佃に與へられた信用狀を喜んだこともあらう。直子が、佃の行狀を保證することで、間接には自分の潔白さをも力說するのが、伸子に自ら微笑を齎したのだ。伸子は、優しく相手の言葉を承

認した。

「其那ことについて、私は何とか思つたことだつてなくてよ。」

直子は、輝きの出た眼で仲子を見た。

「貴女はさうですとも。わかつて居ますわ。たゞ當時迷惑な噂を立てられたのでね――お話し仕ようと思つたのはね何さんには、私、今だつて好意を持つては居ますが、あの人は友達以上に入つてはいけまい、と云ふことなの。貴女がよ、きつと幸福に行きませんよ。」

「さう？　何故」

「何故つて……私さう思ふのですもの。」

「如何那根據で？」

「あれ丈御交際しましたもの、少しは解つて居ますわ。」

直子は、自分の信念に滿足して居るやうに繰返した。

「決してわるい方ではありません、けれどもね、私はどうしてもさう思ふのです」

仲子は、云つた。

「貴女がさう仰しやる點も私には解る氣がしてよ。あの人の性質の裡にあるものがね。其はよく判つて居るのです。――でも、貴女如何うお思ひになつて？私は一つの信仰があるのよ。――愛は人間を變へると思ふのです」

直子は、不確な、相手の心持をすぐ掴み得ない調子でぼんやり仲子を見、呟いた。

「……それはねえ……」

やがて、彼女は俄に自分の云ふ丈のことは済んだといふ遽しさで、袋や手套をかきよせた。

「兎に角、私は思つて居たことを聞いて戴いてさつぱりしたわ。用ひて下さらうと下さるまいと、矢張り申して仕舞はないうちはね」

直子は立ち上つて手套を留め乍ら、仲子を顧みて、殆ど幸福に溶けるといふ笑顔をした。

「とんだお邪魔を致しました。では又いづれね。」

「さう？」

仲子は、何だか變で、間の抜けた返事をした。直子は、しやき／＼した足どりで廊下に出た。

「左様なら」

「左様なら」

直子は、さも重大な任務を果したといふ自信に満ちて居る風で、右手に袋を抱へ、左手を振つてしかつめらしく人の居ない廊下を遠のいて行く。――何といふ事なく角を曲る迄其後姿を見送つて居た仲子は、扉をしめると同時に、力無い歪んだ微笑を口邊に浮べた。高崎は果して何を云ひたくて來たのだらう。

二週間經たないうち、仲子はもう一つ不意な訪問を不意な人から受けた。

或午後、一枚の名刺が渡された。田中　寅彦と云ふ、仲子の父の友人の子息であつた。彼女は、其青年にまだ一度も會つた事はなかつたのだ。仲子は、廣間に降りた。彼は、凹室（アルコウヴ）で待つて居た。仲子を見ると、いかつい、稍々ぞんさいな調子で初對面の挨拶をすますと、いきなり、怒つたやうに訊ねた。

「きのふ或處で貴女が佃君と婚約をするとか仕たとかいふ噂をきいたが事實ですか？」

何用かと思つて來た仲子は、うんざりして青年を覗た。この色の淺黒い、眉の吊り上つた見ず知らずの青年が、其事に何の拘りがあるのだらう。どうして、さう前世からの特權でもあるやうに、ずか／＼私事に立ち入るのか。仲子は、不快を感じ、冷やかに答へた。

「何か貴方に關係がおありになりますの？」

「關係なんぞあるものですか。私はたゞ自分の親父と貴女のお父さんとが友達だと云ふ緣でだけで來たのです――解つて居るのに注意をして上げないのは惡いと思つて。――佃君は僞善者ですよ」

仲子は、正面から凝つと田中の眼を見つめた。

「何故さうお思ひになりますの？」

「さう思ふのではない、さうなのです！」

此等の訪問者以上、仲子の神經を疲らせたのは、佃の、再び懷疑的になつた感情であつた。グラント將軍の墳墓の周りを歩き乍ら話した夜の、熱の籠つた、確乎たる彼は、何處かへ消失した。佃は以前に増して感傷的に成つた。仲子は、外界からの不安や不愉快さを、彼との話、樂しい對坐で忘れようと一心に來るべき生活を想像した。

「ね、本當に私共は好い生活をしませう、自分達さへ動じずにやつて行ければ、何が來たつて安心よ。ね、互に助け合ひ、よく仕あふ生活が始るのかと思ふと堪らなく嬉しいぢやあないの」

佃は、喰ひ入るやうに仲子を見守つた。そして、沈鬱極る調子で呟く。――

「どうかさうしたいものです。然し……分らない……時が證明するでせう。Great big "IF" です」

「――どうして？私共はもう決心したのぢやないの？決心したら決心した甲斐のあるやうにやつて行く丈ぢやないの。卑怯よ、一旦決心し乍ら其を信じないなどゝ」

彼等は、互に片時も離れられないやうに益々執着を深めつゝ、絶間なくさういふ衝突から涙を流し合つた。彼等の神經は、北方の天地を一時に滿す春、氣が遠く成る程魅力ある初夏の熾んな生活力に擾されたのだらうか。

復活祭が過て五月が來た。總ての樹々は新綠に包まれ、大膽な溢れる日光の下で歡び戰いだ。大學構内の草には憧れにゆすぶられ乍ら坐つて居る人々の姿が見えた。空氣は濃く、朝も、晝も、夜も、鼻翼を擽る軟い香に滿ちて居る。郊外の林間では、去年の落葉の下から種々雜多な芽生と野花とが出揃つた。その上を、翅蟲が飛んだ。夕暮、眠い霧がこめると、沼地で藻の下から、シユワアーシユワア。シユワア、シユワ、と馬毛で胡弓をこするやうな小動物の合奏が起つた。梢で、ツチ・ツチ・ツ、チユル……………と鋸切りに似た小鳥も囀る。自然は夜ぢゆう其等のざわめきを聽いた。

伸子は、自分達の運命に對して性急になつて來た。彼女は、よく夜通し眠れなかつた。何處からか彼女を呼んで居るものがある。…………

伸子は、大學の長い夏期休暇が始るとすぐ、佃の行く或湖畔の避暑地へ出立した。彼女は、其爲に、計畫に不贊成であつたミス・プラットや寄宿舍の監督等との一切の交渉を苦しい非難を覺悟して絕つた。

伸子等は十月近くまで湖畔に居た。都會に歸ると、伸子は、自分達の結婚を知人の間に通知した。彼女にとつて記憶すべきものとなつた其日は、內氣な細雨が秋の市街を濡して居た。彼等は、晩餐にブロウド街の或料理店に行つた。自ら心を一杯にする感動で、彼等は默つて食卓の上の飾蠟燭の光を見守つて居た。すると、伸子のすぐ背後の仕切りの向ふ側で、思ひがけない男の聲が日本語で云つた。

「おい、佐々伸子が結婚したつてさ」

別の嗄れた聲が云つた。

「へえ、どんな奴だい」

「狆くしやんさ。佃とか何とか云ふ亞米利加ごろとくつついたのさ！」

——伸子は、彼等の酒を啜る音を聞いた。



戯曲 マンドリンを弾く男

—一幕—

谷崎潤一郎

人物

マンドリンを弾く男（盲人）

浮子（その妻）

影の男

第一場

土蔵のやうな感じのする、上手に一つと正面に二つ窓のある、厚い白壁の洋風の室内。窓には凡べて緑の窓かけが垂れてゐる。下手に扉。上手の窓際にデスクと椅子。正面の窓と窓

との間に小型の本箱。その上に置時計。中央に安樂椅子。下手の方に小卓とソオフア。家具は孰れも古びた質素なもの。或る物靜かなマンドリンの小夜曲が聞えつつ幕開く。秋の夜の情景。小卓の上に緑の笠のあるスタンドが燈つてゐる。その向つて右に、安樂椅子の角に腰かけ、左の奥の妻の方を向き、盲人が今のマンドリンを彈きつづける。妻はソオフアに凭れ、恰もその曲を聽き入るやうな姿勢を取りつつ、桃色の表紙の書物を讀んでゐる。盲人の服裝は黒のズボンに鼠の毛絲のスエーター、妻は地味な綿入に羽織。彼女の傍にクションが二つと白い毛布が置いてあり、毛布の一端がソオフアから床へずり落ちてゐる。

短き間。

(盲人)（曲を彈き終る）今夜はいつもより好い音が出る、己の氣のせゐかも知れないけれど。…………

妻、默つて本を讀んでゐる、そしてそうツと、音のしないやうにページをまくる。

(盲人)……ねえ、己はさう思ふよ、今夜は月がいい筈だが、かう云ふ晩には誰かが外で此のマンドリンを聞いてゐるだらう。きつと誰かが、湖水の上に船を出して、此の部屋の窓を見上げてゐるだらう。…………

(妻)…………

(盲人)え、浮子、お前はさう云ふ氣がしないかね？　己は恐らく、此のマンドリンが湖水の方まで聞えてゐると思ふのだが、…………

(妻)（ちよつと本から眼を放して）聞える筈はありませんわ。

(盲人)お前、ほんたうにさう思ふかね？

(妻)だつて、あなた、――

(盲人)いいや、聞える、――お前も多分聞えると思つてゐやしないか？

(妻)もうそんな事は云はないで下さい、お願ひですから。――ね、窓はすつかり締つてゐるから大丈夫よ、だから安

心してもう一度聽かして。

(盲人) お前、ぢつとして聽いてゐるだらうね？　外の事は考へないで。

(妻) 聽いてゐますとも、外の事なんか考へやしないわ。

(盲人) 己が初めてお前に此の曲を聽かせた時分、――あの時分のことを考へるんだよ、ただそればかりを。

(妻) ええ、そればかりを考へますわ。

盲人再び同じ曲を彈奏する。妻は竊かに讀みつづける。やや長き間。

(盲人) (中途でぷつりと彈奏を止める) おい、――

(妻) なあに？

(盲人) お前、聽いてゐるのかね？

(妻) 聽いてゐますわ。

盲人、樂器を置いて立ち、手さぐりしつつ妻の傍へ行く。その間に妻は書物を閉ぢ、毛布の下に隱す。盲人は妻の體に觸つて見、手を伸ばしてソオフアの上を調べ、遂に書物を探りあてる。

(盲人) (書物を手の中にいぢくりながら) 此の本は何だね？

(妻) それ？

(盲人) ああ、此の本は？

(妻) それは毛絲の編み方の本。

(盲人) それにしては贅澤な本だね、隨分いい紙が使つてあるね。……

（妻）　………

（盲人）　浮子、己は盲目(めくら)になつてからもう三年も立つんだよ。かうして手で以て觸つて見れば大概な物は分るんだよ。此の本の表紙は桃色をしてゐる。………

（妻）　桃色をしてゐてはをかしいのでせうか？

（盲人）　此れは詩集だ。お前は今、己に内證で讀んでゐたのだ。

（妻）　いいえ、違ひます、それを讀んだのはさつきでした。

（盲人）　己は此の本を貰つて置くよ。

　　さう云ひながら本箱の前へ行き、ズボンのポッケットから鍵を出して抽出しを開け、本を收(しま)つて又鍵をかける。やがて電燈の前へ來てイみ、スタンドの位置と妻との距離を測るものの如くである。

（盲人）　浮子、お前の影がそのカーテンに映つてゐやしないか？

（妻）　窓のところは笠の蔭で暗くなつてゐますわ。

（盲人）　暗いにしても、ぼんやり影がさしてゐやしないか？

（妻）　（窓を振り返つて）　いいえ、ちつとも。

（盲人）　窓かけはみんな、一寸(いつすん)の隙もなく垂れてゐるだらうね？　皺が寄つたりよぢれたりしてはゐないだらうね？

（妻）　（恨めしさうに盲人を見る）………

（盲人）　え、おい、なぜ默つてゐる？

（妻）　あなたはそれほど、あたしをお信じにならないの？

(盲人) お前を信じないと云ふのではない。己は外の奴を恐れてゐるのだ。窓からそつと、此の部屋を覗く男があるのを、………

(妻) でも、此の部屋は湖水の縁にあるのよ、さうして險しい崖の上に。

(盲人) しかしあの男は、湖水の縁まで船でやつて來るだらう、さうして此の崖を攀ぢ登るだらう。………

(妻) まあ、どうして攀ぢ登つて來られるでせう、こんなお城の櫓のやうな高い所へ。

(盲人) 己はあの男に備へるために、此の窓の外へ鐵格子を嵌めたが、あれはよくない考へだつたよ。此の格子から綱を垂らすと、それを傳はつて上つて來られる。己は毎晩、よくそんな夢を見るんだ。

(妻) それではあなた、綱が結んであるかどうか、格子を調べて御覽になつたらよくはなくつて?

(盲人) お前は己が、此の窓をあける勇氣はないと見縊つてゐるのだ。だからさう云ふことを云ふのだ。

(妻) 窓の外まで登つて來たにしたところで、どうすることが出來るでせう。あんな嚴丈な、牢屋のやうな格子があつては。

(盲人) 己はどうするかよく知つてゐる。それだから己は、窓かけへ影が映らないやうに注意するのだ。己はをりをり夢の中で、ピストルの音を聞くことがある。

(妻) さうです、それはみんな夢なのですわ。

(盲人) だが、夢でない音を聞くこともあるのだ。それ、その壁のところだよ、(正面の窓と窓の間を指す)毎晩毎晩、あのガリガリと云ふ音がするのは。——

(妻) あれは鼠の音だと云ふのに。——

(盲人) 己はあの音を、もう一年も聞いてゐるのだ。夜が更けてから、たとへ一晩でもあの音を聞かないことはないのだ。此の厚い壁を執念深く、外から切つてゐるやうな音を、……

(妻) でも、此の壁が切れるでせうか。此の、土藏のやうな厚い壁が、……

(盲人) 毎晩毎晩、一年もかかつて、少しづつ切れば切れるかも知れない。あれは鼠の音ではないよ。何か刃物で、壁を削つてゐる音だよ。

(妻)それはあなたの氣の迷ひだわ。

(盲人) お前はそれが、己の氣の迷ひでないことを祈つてゐやしないかね？

(妻) ああ、又あなたはそんなことを、……

妻、ソオフアの腕に兩手を重ね、その上に打ち俯す。盲人は安樂椅子に腰かける。

(盲人) 己がこんな事を考へるのを、お前は根のない妄想だと云ふのかね？ 盲目の僻みだと云ふのかね？

(妻) ええ、さうですわ、それに違ひないんですもの。

(盲人) お前はあの男の執念深いのを知らないのかね？

(妻) あなたは自分の影に怯えていらつしやるんだわ。

(盲人) 己の此の眼が潰れたのは、あの男の仕業（しわざ）なのだ。己はやうやう此の頃になつてそれが分つた。あの男は第一の復讐をした。さうして今では、第二の復讐にかかつてゐるのだ。……

(妻) うそです、うそです、みんなあなたの作り事です。……

妻、打ち俯したまま、密かに泣いてゐるやうに見える。間。

(盲人)　お前、……もう何時かね？　時計をお見。

(妻)　はい。

泣いてゐたことを悟られぬやうに、はつきりと答へる。そして物憂げに身を起し、本箱の上の置時計を見る。

(妻)　十二時二十五分前。

(盲人)　ではもうお寢、いつもよりも五分遲れた。……

妻、溜息をつき、ソオファの背にぐつたりと凭れる。盲人は本箱の前に行き、鍵で箱の扉を開け、中から白い散藥の這入つた壜を取り出す。それからデスクの所へ行つてその上にある西洋紙の紙片を取り、小卓の方へ戻つて來る。その間、妻は盲人の方を見ないで、恰も刑を待つ人のやうに項垂れてゐる。盲人の動作は念入りで、注意深く、可なり手間取れる。

盲人、紙片を小卓の上にひろげ、壜の栓を抜き、散藥を少し紙の中へ振りかける。その時妻が顏を上げる。

(妻)　あなた、もうそのくらゐで澤山よ。

(盲人)　いや、もう少し、……もう少しお飲み。……(云ひながら分量を殖やす)

(妻)　そんなに飲まないでも寢られますわ。

(盲人)　いや、まだやうやう二グラムだ。藥と云ふものはだんだん利かなくなるものだよ、少しづつ分量を殖やさないでは。

(妻)　あたし、あまり澤山睡眠劑を飲むせゐなんだわ、毎日毎日體がだるくつて仕樣がないのは。――きつと中毒を起してゐるのよ。

(盲人)　此の藥は大丈夫だよ、中毒を起しても死にはしないよ。己はお前を、まだまだ死なせはしないのだから。

(妻)　いつになつたら死ねるのでせうか？

(盲人) 五年も、十年も、事に依つたら二十年も先のことだよ。己の命のある間は、いつ迄もお前を生かして置くのだ。

盲人、藥を紙片に盛り終り、壜を持つて本箱の前に行き、棚に收めて鍵をかける。次ぎに下手の戸口へ行き、鍵を出してドーアを開け、外から再び鍵をかけて出て行く。短き間。妻はぢつと動かずにゐる。

盲人、水の道入つたコップを持つて戻つて來る。ドーアに鍵をかけ、妻の側に進み、コップを卓上に置き、掌の上に紙片を載せてもう一度藥の分量を測り、その臭を嗅いで見る。

(盲人) さあ、お立ち。

妻、立ち上り、盲人と向ひ合つて口を開ける。盲人、片手で妻の頭を捕へ、片手に紙片を持ち、藥を彼女の口へ入れる。妻、苦さうに額をしかめる。盲人、幾度も幾度も紙を振つて藥を入れてしまつてから、コップの水を一滴も殘さないやうに飮ませる。

(盲人) 此れでいい、横におなり。――樂にすやすやと寢られるよ。

(妻) ああ、いつそいつ迄も眼が覺めなければいいのだけれど。………

(盲人) 明日の朝の八時迄はね。

妻、兩手で顏を掩ひつつよろよろとソオフアにかけ、上手の方を頭にして仰向きに身を横へる。盲人、クシヨンを重ねて彼女の頭をその上に載せてやり、毛布を取つて襟のところまで一杯に被せてやる。妻は靜かに眼を閉ぢる。

(盲人) ゆつくりとお休み、今あの曲を彈いてあげるから。

毛布の上から妻の體をさすつて見、安樂椅子に戻つて來てマンドリンを取り上げる。

(盲人) さあ、此れをお聞き、夢の中で此れをお聞き。――外のものを見たり聞いたりするんではないよ。――

云ひつつ彈奏し始める。そして、時々手を休めて妻の寢息に耳を澄ます。やや長き間。

盲人、そつとマンドリンを置き、忍び足でソオフアに近寄り、再びしみじみと寢息を窺ふ。最初は恐る恐る、次ぎにはやや荒荒し

く、妻の體を揺すつて見る。妻は身動きもしない。盲人、跪いて兩手で彼女の顔を挾み、頬擦りする。

（盲人）浮子、勘忍しておくれよ。己はお前を苦しめたくはないんだよ。……己はお前が、あの男の所へ逃げて行くのが恐ろしいんだ。……

更に頬擦りをし、クションを一層工合よく頭の下へあててやり、今度は裾の方へ行き、彼女の脚を抱きかかへ、毛布の下部を少しまくつて兩足の足袋を脫がせ、足の甲に頬擦りをし、暫くして立ち上る。

（盲人）ああ、よく寢てゐる。——お前、ほんたうに寢てゐるんだらうね！

脫がせた足袋を取り上げ、一方の足袋をもう一つの足袋の中へ押し込み、それをズボンのポッケットへ入れ、毛布をもとの通りにかける。

（盲人）待つておいでよ、お前が寢たら己ももう寢る。今直き向うへ運んでやるよ。

安樂椅子の所へ戻り、マンドリンの絃を弛め、鍵で下手のドーアを開け、明け放しにして出て行く。

長き間。正面の壁と壁との間にガリガリと云ふ音が聞え出す。一旦途絕えては又聞える。そして次第にはつきりと響く。妻の寢姿は死んだやうに靜かである。

壁の物音が途絕えた時に、盲人が寢間着を着て這入つて來る。寢間着は白いパジヤマである。矢張りドーアを明け放しにしたまま、妻の側へ進み、毛布を剝ぎ、彼女を抱き上げようとする。とたんに壁が鳴り始める。盲人、彼女の頭を再びそつと枕に載せ、壁の方へ忍び寄つて耳をそばだてる。音はますます高くなる。盲人、小卓の方へ後ずさりをし、突然電燈を消す。月の光が窓を透して鮮やかにさし込み、鐵格子の影をくつきりと窓かけに印する。同時に一箇の人影が、正面の向つて右の窓の向うに照らし出される。影は恰もやもりのやうに格子にぺつたり喰つ着いて見える。盲人は尚も一心に物音を聽く。音の性質がだんだん變つて來て、メリメリと軋むやうな響きを發する。と、右の窓に接する壁の一部が、細かい土砂になつてパラパラと落ちる。

（盲人）おお！あの男だ！

鋭い叫び聲を發し、轉ぶが如くソオフアの前へ來、さながら救ひを求めるやうに妻の寢姿に縋り附き、彼女の體を激しく搖す振る。

（盲人）浮子！　浮子……　おお！　とうとうあの男が、……………

土砂が崩れ落ちると共にその窓の枠が全體動き出し、次第に壁の面からずり出で、鐵格子が附着したまま遂にすつぽりと室内へ落ち込む。格子には綱が結んであり、それが外へ續いてゐる。

窓の脫けた四角な穴から、影の男が、身輕に音もなく這入つて來る。盲人、ソオフアから飛び退き、安樂椅子の蔭に身を屈める。影の男、飛鳥の如く盲人に躍りかかり、矢庭に頸を緊扼する。

（盲人）あ、浮子！　浮子！　助けてくれ！…………

影の男、盲人を後へ後へと押して行き、落ちてゐる窓枠の上へ壓し倒し、馬乘りになり、ポッケットから紐を出して盲人の頸を絞める。盲人は纔かに抵抗しただけで息が絕える。その死骸の周圍に、穴からさし込む月の光が青白い圈を描く。

影の男、息が絕えたのを見定めてから立ち上り、安樂椅子の前を通つて、寢てゐる女の方へ進む。と、床に捨てられたマンドリンがその足に引つ懸り、絃が鳴る。男、腹立たしげにマンドリンを取り上げ、棹をポッキリと折り、床に叩きつけ、ふと氣が付いて又死骸の方へ戻り、窓枠に結んである綱を解き、それを引つ張つて來て左の窓の鐵格子に結び着け、寢てゐる女を肩に擔ぎ、再び綱を傳はつて前の穴から降り去る。

舞臺暗くなる。

第二場

湖水の岸。上手の崖の上に白壁の洋館。その一つの窓は破られ、そこから綱が崖の下まで垂れ下り、窓の中は眞つ暗である。美しい月夜。

影の男は湖上の小舟の中に坐し、妻はその膝に凭れて寢てゐる。

(影の男) 浮子。もういいのだよ、すつかり濟んでしまつたんだよ。

妻、ぱつちりと眼を睜く。

(妻) ああ、あなた。敵(かたき)を取つて下すつたのね？

(影の男) 取つてやつたよ、己たち二人の憎い敵を。――

(妻) あたしを牢屋から救ひ出して下すつたのね？

(影の男) 己はあの牢屋へ這入るために、お前を救ひ出すために、一年も前からあの壁を切つてゐたのだ。

(妻) あたしはあなたを待つてゐました。長い間。………あきらめながら待つてゐました。ああ、此れで望みが叶つたんだわ。いつ死んでもいいのだわ。

兩人抱擁する。

屋の上の窓の中から、マンドリンの音が聞えて來る。盲人の彈いたあの曲である。兩人竦然とする。

(妻) おお、まだあの人は生きてゐる。――まだ。――

(影の男) (窓の方を見上げて) ふん、それが貴樣の復讐なのか。だが己たちは恐れはしないぞ。己は此の女を、己の大事な妻を、もうそんなものが聞えない所へ連れて行くのだ。

(妻) さ、早く連れて行つて下さい！ あたしたちは生きてゐる間は、いつ迄もあの音が聞えるんです！ 早く一緒に！

影の男、船底の栓を拔き、中央に坐し、彼女の手を執る。

(影の男) 浮子！

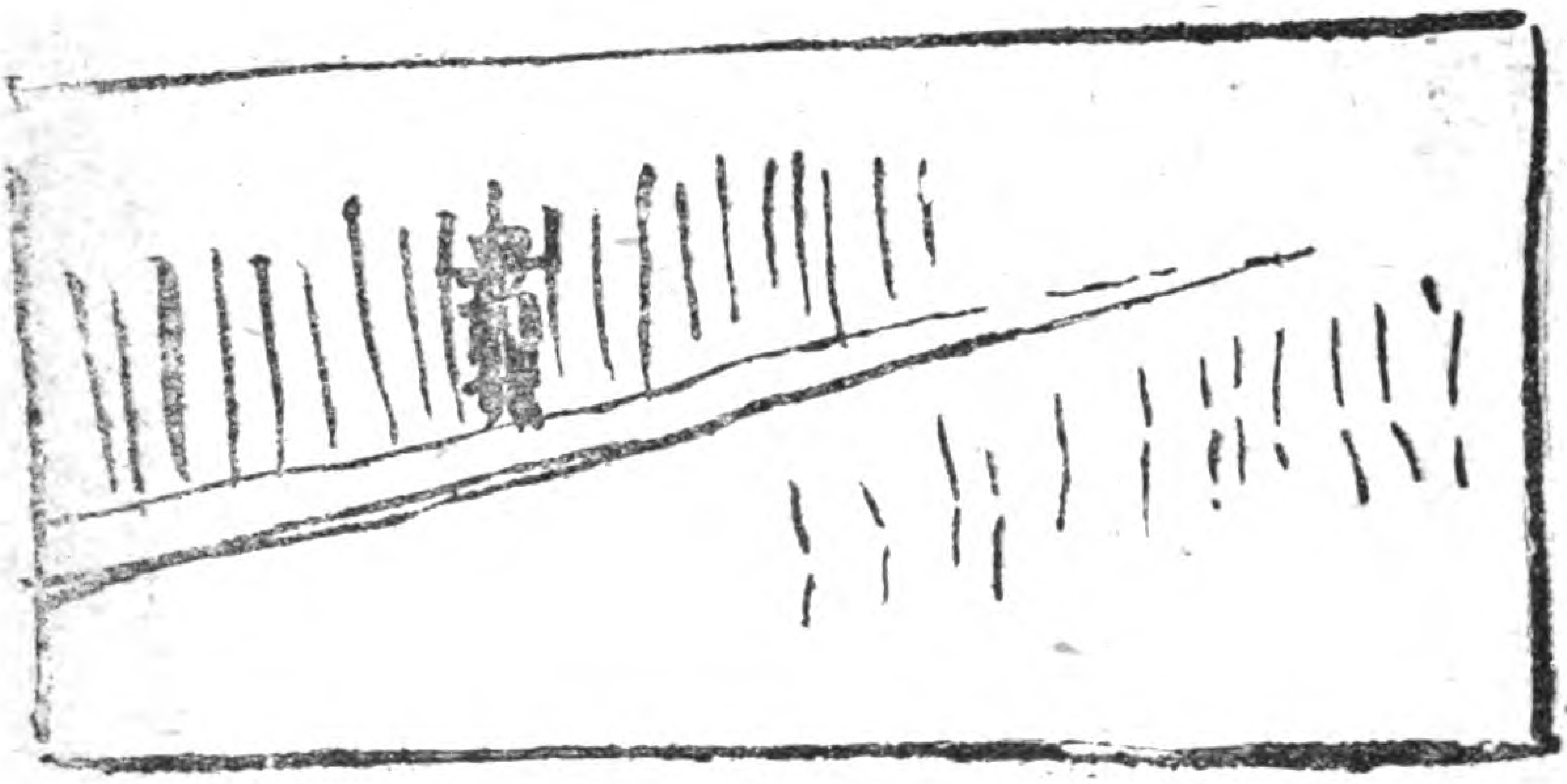
(妻) あなた！

(影の男) 己にしつかり抱き着いておいで。もう己たちは離れないのだ。

(妻) おお。一緒に死ねる、あなたと一緒に。――

舟、次第に波間に沈む。全く沈み終るまで、マンドリンの音が連續する。そしてぷつつりと止む。

(幕)



石門の奥に

里見弴

一

洗ひ晒しのゆかたの上に、帯だけは白木綿を絎けた、それも手垢で鼠色になりかゝつたやつをしめ、素足に朴齒をひつかけて、まだやつと四十かそこらとみえるのに、老人じみた猫背に屈んだ住持は、本堂から庫裡へ橋にかけた渡殿の下を通りながら、

「失禮ながら、何をなさいます？」

「僕ですか。僕は小説を書いてゐます」

熊谷は、話の容子で、見せて貰つたところでとても無駄らしいと思つてゐたので、愛想つ氣もなく答へた。

「はゝア、小説ですか」

と、意味もなく感嘆したが、さう云ふ向の方だつたら、ひよつとするとお氣に入

るかも知れません」

「さうですか」

住持のあたまに、文人墨客と云ふやうな言葉で云ひ現はされる質の人間が思ひ描かれたな、と思ふと、一段と望み少くなつて來た。

石段をあがつて、山門をくぐつた時に見あげた岩山は、建物の背後に、五六間の空地を殘すばかりで、すぐ切つ立つてゐた。岩山と云つても、ボク／＼の水成岩で、雑木や灌木が一面に生ひ茂り、嫌になりさうな蟬の聲だつた。

「あれです」

燒きつくやうな日中の陽を遮るために、左で、青々と剃りこぼつた頭を、頻と撫で廻しながら、右で、山の、可なりの高みを指さし示した。青葉の間から、柿葺の、小さな家が、斷崖に望んで建つてゐるらしく眺められた。

「はゝア」

ちよつと惡くないな、くらゐには思つたのだが、めつたに風も入れないから、蟲なんぞむれてるかも知れない……知れないと云ふくらゐだから、なかの有様は………、と、うつかりすぐには乘り氣にもならなかつた。

「何しろ、一々このあがりおりが大變ですよ」

雑木の幹や、墓石の破片で土止をした、急な段々を登りかけて「何が面白くつて、あんな厄介なところに離れを建てたもんですか。先住の仕事ですかね………」

七八間も行くと、トンネルと云ふほど整つてはゐないが、荒削りの洞門があつた。

「へえ、成程、これア中々手がこんでますな」

文人墨客趣味よりも、寧ろ盜賊の山寨めいた感じで、この、下からは樹木の陰になつて見えないほんの二三間の洞門が、大ぶん熊谷を元氣づかせた。

「ねえ、馬鹿げた話ですよ。何もこんな不自由つたらしい思ひをしないだつても、いくらも下に平な地面があいてるものを…………。先住と云ふのがかね、佛樣のお守りなんぞそつちのけにして、うまくもない南畫ばかり描いた人ですから、つまり自分が畫中の人物にでもなつた氣で、得意になつてあすこへ納つてゐたんでせう」

「その方は……？」

「えゝ、もう久しいあとに死にました」

「ぢア、貴方は、隨分お若くつてあとをお繼ぎなすつたわけなんですね？」

「えゝ、どうせこんな寺ですもの」

石門のなかの、地面へいきなり刻みつけた段を、三つ四つとおりると、ぱつと眞正面に、空と海との遠い見晴しが耀き出た。決して偶然の仕事とは思へなかつた。暗い穴を通して、明るい遠景を望む、――さう云ふ意圖が、先住の風懷を、奥ゆかしく忍ばせた。氣がむれてゐるくらゐのとこなら、少々我慢をしても借りよう、と熊谷は心をきめた。

離れは、山の、急な斜面を、抉つたやうに切り取つて、十坪あまりの土地に拵へたところに、貧しくたつてゐた。貧しいながら、いやにえばつた感じだつた。

「これアいゝ！」

熊谷はすつかり氣に入つて了つて、思はず喜びの聲を放つた。

「はゝは」

住持は、お氣に入れば結構！と云ふ心持を笑つてみせて、一間の入口に、がらり〳〵、一枚とも雨戸を引きあけてはいつた。

「さアどうぞ。……大丈夫、誰もゐやアしません。……二三年前でしたよ、知らない間に泥棒のやつがはいり込んでましてね、どつか町で捕まつてから、お巡査さんが調べに來ましたつけが、はいつてあけてみると、戸棚のなかから、着物だの時計だの鐵瓶だの、……どうも實に、種々雜多なものが出て來ましたつけ。その時にね、たまにやア見廻つてくれなきやア困る、なんて、お巡査さんにお小言をくつたもんですからね、それからは、月に一遍やそこらは、これでも男をよこしてあけさせてゐるんですよ。……あゝ、これア、なか〳〵綺麗にしてある。この分なら、結構住めますさア……」

話の間に、すつかり座敷の雨戸を繰り終つた。土間の入口をあがると、六疊、その裏側に便所があつて、奥の四疊半には、一間の戸棚と、三尺の水屋がついてゐた。この間取りには、申分がなさすぎるほどだつたけれど、成程疊は、眞黄色になつて、ブク〳〵浮いてゐた。おまけに、生温くむれ返つて、ちよつと、水氣の來た人間を踏んづけて歩くやうな氣がしないでもなかつた。然しそれとて、庫裡での話に想像して來たほどのことではなかつた。貧しさに馴れた熊谷の身にとつては、十分我慢のなる程度だつた。第一、はいるや否やのからつとした感じ、――見晴しのいゝことゝ云つたら、もと〳〵それだけの目的で建てたやうな家だから、四五日もすると、却つて倦きの來ることが惧れられるくらゐだつた。――深く伊豆半島に抱き込まれた駿河灣の水は、一碧の天空を映して鏡よりも明かに、點々たる漁舟を載せて、柔かく盛り上つてゐた。振り捨てた網のすなほさに、河岸線の迂り續くこなたには、沙汀、松並木、川口、漁村、稻田、街道、果樹園、街、畑、鐵道線路、森、烏……何もかも小さく目の下に在つた。

「結構です。拜借することにきめて頂きませう」

「どなたでも、ちよいとはお氣に入るんですがね、何しろ一々あのあがりおりですから、それで大抵へこたれて……」

「なに、大丈夫です。さう出かけるやうなこともありませんから」

「然し、貴方、食事はどうなさる？」

「麪麭でも買ひ込んで來といて、……そりあまあなんとかなりませう」

「一番厄介なのは、水まで下から擔ぎあがらなけれアならないことです。尤も、寺の男が慾張ですから、貴方が若干か奮發しておやんなされば、喜んで運んで來ませうけれどね……」

「さうですか」

と、それには、人は水のみにて生きる者ではない、と云ふやうな冷淡さで答へた熊谷も、あとはちつと云ひ憎さうに、「それで、都合によると一月二月置いて頂くことになるかも知れませんが……」

「えゝ〳〵、いくらでも……」

「家賃……と云ふのも大袈裟ですが、月どのくらいで置いて頂けるんでせう」

「さあ。今まで金を取つて人に借したことは一度もないんですがね。先住の息子が、……息子と云つたつて、もう貴方くらいの年輩ですけれど、二三年あとに工學士になつて、今では鐵道省に勤めてゐますが、それが、學生時代から、休暇の間なんぞに、自分が來たり、友達を紹介してよこしたり、一度なんぞ、女學生が三人づれて來て、一週間ばかり自炊をして行つたこともありましたつけが、……そんなわけで、みんなそれ〳〵つてがあつて來た人たちですから、今まで一文だつて貰つたことはありませんのですが……。一體貴方は、なんと思つて、ぶツつけに寺へいらしつたんです？……まア、おかけなさいまし」

住持は、さう云つて、自分から先に、丸太で手摺りをした肘掛窓に腰を休めた。畳へぢかには、――無論さう云ふ、埃の飛んで來よう筈のないところで、ザラ／＼と埃つぽいわけではなかつたけれど、一度すつかり雑巾でも當てゝからでないと、とても座る氣になれない程度にうす汚れてゐた。向合ひに、熊谷も腰をおろして、父の片身の、はげちよろけた薩摩上布の膝を重ねた。

「先月の末から友達がこつちに來てゐまして、あの……」

と、緩いS字形に流れ注ぐ、□□川の川口に近い松林のあたりを指しながら、「丁度、あすこらだらうと思ふんですが、一軒うちを借りて、夏ぢうこつちで暮すことにしてゐるんですが、僕は、ちよつと故郷へ行つて來た歸りに、そいつのとこへよつてみる氣になつて、途中下車が利くもんですから、ついこゝで降りちまつたわけなんです。降りてみると、可なり氣に入つちまつて、僕も暫くゐたいと思つたんですが、あんまり海に近いところは、僕、好かないもんですから、どつか山の方で、――とても僕には、一軒うちをもつやうな餘分の金もないし、倦ツぽいんで、いつ何時いやになるかも知れないしするから、部屋を貸してくれるうちはないかしらつて相談したんです。さうすると、その友達が、散歩の序に來てみたんださうですが、このお寺を馬鹿に褒めて、下手な素人家なんぞに間借をするより、あすこへ行つて、明いてた部屋がないか訊いて見ろ、つて云ふもんですから、――それに、僕は、先にも一度、谷中のお寺で部屋を借りて住んでた憶えもあるし、ちよいといゝと思つたもんですから、それでだしぬけに伺つたやうなわけなんです」

「成程、然し貴方のお友達つて方も、よつぽど變り者だと見えますね。こんな寺か、どこかよくつてそんなことを仰有つたんでせう」

住持は、讃の皺紋のよつて來る頭を撫で廻しながら、少しばかり得意らしく笑つた。

「頻に杉を褒めてましたが、成程立派なもんですね。然し杉は、どうも寺より、神社の方がうつりがいゝやうですな。先刻石段をあがり切つて、眞正面に本堂を見た時にさう思ひました」

「はゝゝは。そんなもんでせうかなア」

「そこで先刻のお話ですが、一つ、部屋代なみで家賃をきめて頂けませんでせうか」

「えゝ〱、ようござんすとも。お思召つて云ふと、却つて高いものにつくつて話だから、さつくばらんに、一つ、貴方の方から、いゝほどのところを仰有つてみてくださいませんか。無論わたしの方にやア、是非いくら〱で貸さなくつちやならない、なんて算用はありませんのですし、土台、どのくらゐに貸せるものか、まるつきり相場も知りませんから」

「僕だつて知りやアしませんよ」

「成程、御尤だ！」

と、へんに感心して、「ぢや、まア、貴方の懐都合でいゝほど置いてお歸ンなさい」

「懐都合で云やア、一文も置いてかないのか、一番いゝにきまつてますがね」

「實を云やア、わたしの方でも、それでもちつとも構はないんだ。たゞ、ちよいと慾張つたことを云つて見るだけなんです」

そこで二人は、聲をあげて笑ひだした。この坊主、ちよいと附合へる、と熊谷は、嬉しく思つた。

二

「和尚！　和尚！」

月はなかつたが、空は晴れてゐた。しまりのない海の風が、桁を渡つて、あとから追ひ越して行つた。——熊谷は、ひよろつく足を踏みしめて、高々とゆかたの尻を端折りあげながら、五六間先を行く住持を呼びとめた。「おい、和尚！待てつたら待てよ！」

住持の足もとも、あんまり慥ではなかつた。猫背を一層丸くし、だらんと首を垂れて、ふらり〳〵歩いてゐる姿は、酒に酔つたとよりは、死神に誘はれて行く、と云つた態(かたち)があつた。

「酒を飲みさへすれあ、きまつて陰鬱になりやアがる。へんな奴だなア。そんなこつちア、以後つきあつてやらねえぞ！」

追ひ縋つて、おぶさるやうに首へ手を廻した。

「おい、重いよ、おい！」

「ねえ、和尚、お前、二郎公をどう思ふ？　嫌ひか？　好きか？」

「お前は駄目だよ、酔ふとまるツきり駄目だよ。友達々々つて云ふけれど、あの人はあれで、お前さんなぞとは比べものにならないほどしつかりしてるよ」

「さうさ、無論さうさ！」

「おい、重いからよツかからないで歩けよ！だらしがないなア」

「さうさ、俺はだらしがないさ。そこい行くと、二郎公は俺のやうなもんぢアないさ。兎に角あいつア金が取れらア。仕事はだん〳〵つまんなくなるが、それだけ金にやア なるんだ。金が取れるくらゐだから、もとより玄人(くろと)だ、商賣人だ！」

「お前も、矢つ張り金がほしいとみえるなア」

嘆くやうな調子だつた。

「ほしい！無論ほしい！お前だつて、家賃をほしがつたくせに、いやに坊主くせえ顔をして、白ア切るねえ！」

「だから、矢つ張りと云つてるぢアないか。俺だつてほしいんだよ」

「お前なんぞ、あんな大きなうちに住んでゝ、何も別に金なんぞ要らなからうぢアないか」

「金はどうでも、酒が飲めないとなつてみろ……」

「酒か？酒は、金から取れるんぢアねえ、米から取れるんだ！」

「……然し、あの人はしつかりしてるよ。なか／＼出來たもんだよ。お前なんぞ、一體だらしがなさすぎるよ。そんなこつちア、いつまでたつたつて、うだつアあがらないや」

「うだつか？うだつアあげねえね。うだつなんぞあげて、碌な仕事をしてゐる奴が一人でもゐるか！憚ンながら、俺なんざア、十年このかたこの道で苦勞をしてゐるが、今もつてうだつなんざアあげやアしねえや！」

「泣言をいふない、みつともねえ……」

「たまにやア愚痴も出るよ、あんまり解らなすぎる……」

「解つてるよ、あの二郎さんなんぞ……二郎さんも、今夜は珍しく醉つぱらつちやつたねえ」

「醉つたつて、あいつア玄人だ。なか／＼はめをはづしアしねえ。今夜らだつてさうだ、俺が二郎公なら、一緒について出て來らア。出て來て、またどつかで飲まァな。あん畜生、醉つたふりなんぞして、寢ちまつたりしやアがつて、あれでなんだぜ、夜なかになると、またむく／＼起き出して書きやアがるんだぜ。美濃版の罫札を、一時間三枚平均ぐら

ゐに書き飛ばしやがるんだ！」
「羨しがるなよ！」
「羨しがりやアしねえ、天下國家のために義憤を發してゐんだ！」
「よせく！　金ばかりほしがつてゐくせに、えらさうな口を利くない！」
「和尚！　和尚はよき和尚なれど、いまだ仕事の法悦を知らざるが故に、遂に予が義憤を解せざるなり、と、お釋迦樣が仰有つたのを知るめえ！　坊主のくせに、なんだ、だらしのねえ……」
「……然し、今夜、二郎さんの云つてたことで、一言感心したことがあるよ。──から云つてた、熊谷の書くものなんぞ、三文の價値もない、そこが價値だつて……お前、その三文をほしがるやうぢア、お友達に對してもすまないよ。俺ア小說なんぞ、一つだつて見たことはないが、きつとお前は、書かなくつてもいゝ方の小說家なんだよ」
「そんな馬鹿な話つてあるかい！書くから小說家だよ」
「でもさ、書かないだつて……」
「ちつともお經を讀まないで、お前が坊主で通るやうなもんか？」
「俺ア坊主ぢアないよ」
「さう云やア、俺だつて小說家ぢアないよ」
「ぢア、いゝぢアないか」
「だからいゝんだよ、誰が惡いつて云つた！」
「先刻つから、だつて、愚痴ばかりこぼしてゐぢアないか」

「それアこぼすよ、俺は、小說家ぢアないけれど……」

「俺だつて、坊主ぢアないけれど……」

「眞似するない！　この坊主頭……」

と、いきなり首つ丸に手をかけて引きよせ、一つピチヤリと平手で叩いて、「これが爺のくせに、感心にちよいと働きやアがるんだ！」

「それ故にこそこの始末だ！」

「どの始末だい。俺たちと、かうして每晩のやうに飮ンだくれてるのが、墮落だとでも思つてるのか！　さア、和尙、白狀しろ！」

「お前はいゝなア、若くつて。一體、いくつになるんだ」

「誤魔化すない！　さア、墮落だと思ふか、どうだ！」

「痛い、痛い！　さう虐めるなよ。……墮落たア思やアしないが、年齡に恥ぢるよ。お前の年齡なら、いくらじたばたしたつても似合ふけれどもう、かうなつてからぢア、我ながら、少々淺間しいからね」

「ちエッ！　よせやい！　爺いくせえこと云ふない！　こないだ、お前に出た女郎がさう云つてたぞ、小鰭の彌助が貢らせたいつて。彌助と來たところが、いかにも宿場らしくつて、ひどく氣に入つたね」

「あゝ、あゝ、あゝ……」

思はず空を仰いで歎息した。――アンドロメダ、牡牛、カシオペアなどの諸星座が、夏の夜の暗さに、燦然として光芒を放つてゐた。宏大もない天蓋の、厚い黑布の彼方から、小さな蟲食ひ穴を洩れて、チラ〳〵と光が射して來るや

うな氣がした。すぐ身のまきとも屋へたず

「悄氣るなよ、堕落坊主！」

「悄氣るよ！　いつまでも若くつて、いつまでも死になくないなア……」

「威ばるない！」

「威ばると寂しいな！」

「威ばらなくつたつて寂しいやい！」

急に、咽で、クルツ／＼とへんな音をさせたと思ふと、熊谷は、嗚咽に泣き出した。

「だから、云はないこつちアない、お前は、酒を飲むと馬鹿になるんだよ……」

「馬鹿だつていゝやい！」

「いゝとも！　だアれも悪いたア云はないが、あんなにはしやいぢやア、あとがたまらないにきまつてらア、馬鹿！」

もう寺の石段だつた。住持は、張子の虎のやうに、ふら／＼と首を振り動かしながら、つれに構はず、さつさと先にあがつて行つた。

熊谷は、自分のことを馬鹿と呼んだ男を、そんなに馬鹿だとも思はず、さうかと云つて、格別えらいとも思はなかつたが、さう云はれたことで、自然と涙がおさまつてゐた。――あとから、ゆつくり／＼と石段をあがつて行つた。

「和尚、待てよ！」

中ほどの廣場で一休しながら、もう石段をあがり切らうとする後姿に呼びかけた。老杉の木下闇に、白地のゆかたが、ほのかに浮んで、宙に懸つたやうに見えた。

「「おやすみ」」

「「不人情な奴だ！　おい、待てよ、待てよ！」

熊谷は、最後の十二三段を、勢こんで馳けあがり、ひよいと彼方を見ると、空に聳えた眞黒な山門が、屋根の頂から、前のめりに、グヮーッと重たく倒れかゝつて來た……。危い！　と思つて、うしろへ引いた足が、宙を踏んで、ゴロ〳〵と轉げ落ちた。不思議にどこも痛くなく、轉げてゐる間が馬鹿に永いやうな氣がしたり、やつた〳〵、と自分で可笑しく思つたりしてゐるうちに、中段の廣場まで來て止つた。

「どうした、馬鹿！」

ぬげて、石段を轉げ落ちる下駄の音でも聞いて氣がついたのか、住持が戻つて來て、上から覗き込むやうに見おろしてゐた。

「痛くつて動けない」

「困つた奴だなア」

「あいたゝゝあいたゝ！」

膝頭が、ちよいとひり〳〵するくらゐのことで、平氣で起きあがれるのを、ひつくり返つたまゝ、故意とそんな風に痛がつて見せた。

「どうしたんだ、一體……」

案のじよう、コトリ〳〵駒下駄の尻を引摺つて、住持が下りて來た。

「どうもかうもない、いきなり山門がひつくり返つて來やアがつたんだ」

「やられたな」

「なんだ、狸か」

「狸はお前だらう。さア、巫山戯てないで、早く行つて寝るんだ〳〵」

腕をとられて、熊谷は、しぶ〳〵ながら立ちあがつた。

三

湖氣を含んだ風雨に晒らされたせいか、へんに白つちやけて見える自然木の門柱に、荷札でも削つたらしい粗末な表札で、沖二郎殿と掲げてあつた。その片扉の耳門を引きあけると、毀れかゝつた鈴が、ひどく不景氣な音をたてた。それが、來る度ごとの不愉快だつたので、はいるとすぐに熊谷は、振り返つて見た。薄い鍛鐵をアーチ型に撓ませた先に、小さな眞鍮の鈴がブラ〳〵してゐるやつだつたが、その、鐵の柄がもとのところから折れたのを、不器用に針金で括しつけてあつた。――小金を貯て、家作の一二軒も持つやうになつた男の、しみつたれた根性が見え透いて、不愉快が二重にされた。鈴の首つ丸を掴んで、ぐいつと引くと、麸のやうに針金が延び、そして切れた。キリ〳〵振り廻して置いて、生垣の上から、そとの松林へ投げ飛ばした。

玄關へ來て、格子をあけてて、

「ごめん、ゐますか」

靜まり返つた氣勢は、留守と思はれたけれど、たぶん海へはいりに行つてゐるのだらうと思ひ、もしさうなら、こゝで着物をぬいで、自分もあとから行く氣だつた。

「はい」

通ひで煮炊をしに來てゐる婆さんの聲ではなかつた。返事をしてから、暫く衣摺の音をさせてゐたが、すぐ右手に續く八疊との隔ての襖をあけて出て來たのは、見知らない若い女だつた。ちよつと形のいゝ耳かくしに結つて、ゆかたに半帶をしめてゐた。小麥色の瘦型で、どこに一つ魅力はなかつたけれど、然しちよいとした目鼻だちだつた。

「留守ですか」

「えゝ」

「海ですか」

「いゝえ」

平氣でこつちを見返してゐる容子は、人馴れたものだつた。そのうへ、來訪者の誰であるかを、もうちやんと察してゐるらしい親しみをさへ見せてゐた。

「どこイ行つたんです」

「東京へいらつしやいました」

それをお前が知らない筈はないが、と云つた顏つきだつた。

「へーえ、いつ？」

「お午ちよつと前の汽車でした。……まアどうぞおあがりくださいまし」

「昨日まで、なんともそんな話はなかつたんだけれど……」

「さう云つていらつしやいました。……どうぞまア……」

「婆さんは？」

「今ちよつとそこらまで出かけました。……鬼に角まアおあがりくださいまし」

熊谷には、突然こゝに姿を現はしたこの女が、何者であるかを知る興味が、可なり强く動いてゐた。

「ぢア、ちよつと休んで行くかな」

「どうぞ」

その「どうぞ」が、へんに職業的に響いた。――沖が、書齋なり客間なりに使つてゐる八疊へ、づかづか通ると、座布團のそばに、五寸ほどの山に雜誌が積んであり、ほかに讀みかけのが、開いたまゝ伏せてあり、そして、三角な陶器と灰落しのなかゝらは、消え殘つた煙草が、細々と煙をあげてゐた。

「ねてゐましたね？」

先方でこつちのことを知つてゐるなら、と云ふ安心で、いきなり馴々しくすつぱぬいてみた。

「いゝえ」

「いゝえがあるもんか。雜誌を枕にして、煙草をふかしながら、……何を讀んでたかな？」

伏せてあるのを、取りあげやうとすると、

「あらいけませんわ」

と、横からひつたくつてから、改めて、疊に手をついて、「いらつしやいまし」

「僕は、貴方にあつたこと……？」

「ありません。貴方、……熊谷さんでいらつしやいますわね？」

「よく知つてますね」
「貴方がお見えになつたら、つて、お手紙をお預りしてますの」
「へーえ」
女は立つて行つて、新聞、雜誌、寫眞器、フイルム、旅行用の化粧道具などの、散かり放題になつてゐる床の間のそばに、東向に据ゑた、家主からでも借りて來たらしい粗末な古机の抽斗をあけて、四折に疊んだ原稿紙を出して來た。讀んで見ると、今朝突然□□の脚本部の人が來て、俺の「赤蕪」を、××座の九月興行つで演りたいと云ふから、いろいろ打合せのために、その人と一緒にこれから東京へ出る。たぶん二三日で歸つて來られるつもりだ。和尚さんにもよろしく。――と云ふやうな簡單な文面だつたが、自作の上演を契約するために、態々東京から人の來たことを吹聽してゐるあたりが、いかにも得意らしく、ひけらかしてあるやうに讀まれるのは、こつちの僻みと、自から窘めなければならないけでも、決して氣持のいゝ手紙とは云へなかつた。――で、手の平に掴み丸めてから、
「一體、君は……、誰なんです？」
「あたしは、……あたしですわ」
「いつ來たんです」
「昨夜」
「何しに來たんです」
「たゞ、……遊びに。あんまりお店の方が暇ですから、一週間ばかり休暇をとつて來たんですの」
「店つて……？」

「カフエエですわ」
「へーえ、どこの？」
「銀坐の、キヤバレ、ド、パノン」
「へえ、ぢア、僕、二三度行つたことがあるがな」
「伺つてましたわ。まだあたしがあすこのうちへ行かない前でせう？」
「さうかな。兎に角僕は、君の顔、憶えがないやうだな」
「あたし、この六月に行つたばかりなんですから……」
「あゝ、それぢア知らない。……それで、君ア、何かい、沖が好きなのかい？」
「あらア」
とは云へ、別に赤らめもしなかつた。
「こいつは、我ながら愚問だつたな。嫌ひで態々こんなとこまで出かけて來る筈はないんだから、それア好きは好きなんだらうけれど、ぢア……？」
「それア嫌ひぢアないけれど、ほんとになんでもないんですのよ」
「獨立家屋のなかで、若い男と女が、二人つきりで一晩すごしたとすれば、いくらなんでもないと云つたつて、信じられない方が當り前だね」
「そんなこと……」
馬鹿に「ん」に力を入れて、ちよいとむきになつた。もの言ひに一々技巧のあるこの女が、それだけむきになるから

は、云ふ通りかも知れない、とも思ひ、また同じ理由で、その反對とも釋れた。」

水口をガタ〳〵云はせて、屆婆さんが歸つて來た。

「今すぐ持つて來ます」

臺所から、いけぞんざいな聲だけ送つてよこした。

「あゝ、すみませんがね、お客樣が見えましたから、もう一ツふやすやうに、さう云つて來てくださいません？」

さう聞くと、婆さんはのこ〳〵出て來たが、熊谷の顏を見ると、なアんだ、といふ風に、忽ち氣をぬいて了つて、

「いらつしやいまし。……ねえ、貴方、わたしさう頂きたくもありませんから、二つ來たらそれでいゝでせう？」

「そいぢア……。いゝわ、今度はあたしが行つて來るから、どこ？　こゝを出て、右？左？」

「いゝえ、なに、行つて來るには、さうさもありやアしませんけどさ、別に大してたべたくもないもんを、貴方……」

「だつて、嫌ひぢアないんでせう？」

「一體、何を食はせやうと云ふんだね？」

と、横合から熊谷が「ものによつちやア、僕は棄權するよ」

「いゝえ、何だか急におしるこが食べたくなつちまつて……」

「しるこ？　斷る？」

「お嫌ひ？」

「それより、婆やさん、まだビールがある筈だがね、冷してなくつても構はないから、一本持つて來てくれないかね」

「あら、あたし氣がつかなかつたわ。……婆やさん、よござんす、あたしがしますから」

ぴよいと飛びあがると、その惰性のやうに、軽るげに身を弾ませ、素足の裏で、シュッ〳〵と微に脊を立てながら、台所へ出て行く後姿の、半帯の下に、全く鮮の腰つきへ、熊谷の視線が射つけられてゐた。——山の上と違つて、えらい蠅だつた。

四

「あたし、やつぱり歸るわ」

女は、肘掛窓に腰かけ、上體をうねらせて、手摺へ匍ひつくばつたやうに凭れかゝり、兩手を重ねた上にぺつたりと眞ッ赤な頬をおつ付けてゐた。

「歸れるもんなら、一人でお歸ンなさい、僕ア知らないから」

「しどいわ」

「だから、初ツから、山賊の住居みたいなところだよ、石の門をこぐつて行くだんよ、それでもいゝかいつて、ちやんと念をおしてあるぢアないか」

「あたし、婆やさんが困つてやしないかと思つて……」

「あいつに、困るなんて感情がもてるかねえ、もてると思ふんなら、一生の思ひ出に、一度はもたしてやる方が功徳だよ」

「どうしたでせうねえ」

「戸締りをして、さつさと歸つちまつただけの話さ。ひよつとすると、澤庵石ほどの大さに、前掛けに米を包んで提げ

て行つたかも知れない。もしさうとすれば、君が歸らなかつたことは、彼女にとつて、祝福すべき事實だつたらうからね」

「もしかして、留守に泥棒でもはいつたら、申譯がないわ」

「泥棒は、もう、夙にはいつて了つてるよ」

「…………」

「解らないかい？　お下髪にして、緋の袴をはいた女は、もう大江山につれて來られてるぢアないか。谷川で洗濯する代りに、そろ〳〵こゝらを片附ける手傳でもしてくれないかな」

剝げちよろけた一閑張りの机の前で、熊谷は、厚手な水飲コップに、德利を逆にして、最後の滴を切つてゐた。

「街から、隨分あつたわね」

「まだ云つてるのかい。往生際の惡い人だな。歸つて、一人でねたところで、夜なかに泥棒がはいつて來りやア、結局おんなじこつたぜ」

「さうねえ」

「感心しちやアいけないな」

熊谷は、肚から可笑しさうに笑ひだした。「それだけのことに、今まで氣がつかずにゐたなんぞは、君もなか〳〵いゝところがあるよ。……君はもう食はないのかい」

「澤山」

見るも可厭だと云ふ風に、顏を反けた。――零れ落ちた星がちら〳〵浮んでゐるやうな漁火の數だつた。近い街の灯は動いた。眞ッ下の谷で、何か夜の鳥が鳴いてゐた。」

熊谷は、上から被せてあつた原稿紙をとりのけて、竹の皮のまゝの稲荷ずしをつまんで食つた。四つ目のにかけた指をはなして、柄にもない木綿の手巾で拭きながら、

「よさう。あんまり食ふと睡くなる」

その時、微に汽車の響が聞えて來た。

「あゝあ」

「東京へ行きたい、かね？……一體君は馬鹿だよ、それほど戀しい男なら、なんだつて今朝出してやつたんだい。たかゞ芝居者なんぞに見變へられて、口惜しがらないのが馬鹿だよ。遙々あとを慕つて來てさ、一晩きりつて話はないよ。二郎公だつて、ちつと薄情すぎらアね」

「よしッちようだいよ！」

「ほゝう。むつとしたね？　然し、今夜君が、こゝで泊つて行くかぎりには、明日になつてから、決してそんな風な顔はさせないよ。僕ア嘘つきは嫌ひだから……」

「歸るわ！」

「お歸ンなさい」

「卑怯ね、貴方は！」

「多少さう云ふ點もないではないね。つまり、地の利を恃んでゐる點はね。然し、さう云やア、君にだつて恃んでゐる點はあるね。つまり、自分は女だ、と云ふ點でね。女は男よりも弱いもんだと云ふ概念から云へば、君の立場は、誰からも同情されなければならない筈だけれど、然し君が、醉ッぱらつてる僕を、その窓から谷底へ突き落さうと思へば、

必ずしもさう出來ない限りでもないんだから……」
ずるこけたやうに、疊へ尻を落して、今度は、窓の敷居へ額を伏せて了つた。
「いくら醉つたつて、俺アそんな亂暴しやアしないよ。女は、大事に可愛がつてやるべきもんで、暴力を加へるなんざア、野蠻未開の遺風だアね。安心してねたまい。いま床をとつてあげるから」
そつくり上に載せたものゝまゝ、机を四疊半の方へ擁へて來て、その次には、ずん胴に切つた竹を足にし、丸火屋をかけた臺ランプに手をかけたが、「ねえ君、僕はね、二三日前の晩から、アルコールの廻つてゐる自分の足に對して、ひどく自信を失つて了つたんだがね、ランプだけは一つ、君にお願ひしたいんだ。何しろこいつは火だからね、火事の卵だからね、ねえ、君」
橫座りに、ぐつたりと出窓へよりかゝつたまゝ、女は身動ぎもしなかつた。
「おい、君！　君！………一體、君はなんてんだい？　まだ名前を訊かなかつたね？　え、？　君！」
「うるさいのね！　名前なんぞなんだつていゝぢやないの！」
「えらい！　君の云ふ通りだ。名前なんぞなんだつていゝ。………實、與三郎と云ふ男が、木更津の濱で見初めた女が、お富と云ふ名前だと云ふことを知つたのは、幾日か後のことだ。その幾日かの間、彼與三郎なる者は、名の知れない一人の女を思ひ續けてゐたんだ。それを思へば、今夜君と一緒にねて、明日の朝になつても、まだ僕が君の名前を知らずにゐたとしても、別段それは恥ずべき行爲ではないんだ。實際、名前なんぞどうだつていゝ。……そこで、ランプだが、どうしようね、自信のない足で運んでみるかね？」
「いゝわよ！　あたしが今もつてつてあげるわよ！」

「然し、君の足もとはどう云ふことになつてゐるかな？」

「大丈夫よ！」

女は、すツと立つて來て、ランプを持ちあげ、「どこへ置くの？」

「さう、その机の左側がいゝ。……さう〳〵。そこ〳〵。それから、どうせそこまで行つたもんだから、序に机の上のものを、みんな緣側へ出してくれたまい。緣側まで行つたら、もう一つ序に、蚊燻粉をくべてくれないか。まだ火はあるだらう？　もしなかつたら、緣の下のビール箱に炭がはいつてるから……」

「うるさいのね、默つていらつしやいよ！　そんなに一々云はなくたつて、今すつかりやつてあげやうと思つてたところぢアないの」

「さうか、それア有難う。然しものは手順だからね。手順さへよければ、什事が樂で、それで結果は擧がるものなんだ。だから、ちよつと手順だけを……」

「お喋！　男つてものは、さうヘラ〳〵喋るもんぢやないわよ！」

「女と云ふものにしちア、あんまり君が口を利かなさすぎるからだ。君さへ元氣に喋つてくれりやア、無論僕は默る。生來いやア、その方が勝手なんだから」

熊谷は、ほんとうにそれきり默つて了つて、女が机の上を片づけ、緣先のバケツで絞つて來た布巾で、あとを綺麗に拭いたりしてゐる間に、布團を出して敷き延べ、六疊の方だけ雨戸を入れた。

「蚊やり粉、どこにあつて？」

「床の間」

「まア、今度はまた、急にぶつきら棒になつてちまつたのねえ」
「それがすんだら、君はさつさとねちまふんだ。□はないが、貧の口と逢つて、もう今時分になりやア、そんなに來やアしないよ。一匹や二匹は辛抱したまい」
「たうとう泊るの？」
「斷つて可厭なもんなら、送つてつてあげてもいゝ」
「でも、これから、大へんだわねえ」
「なアに、大したことぢやアない。どうせ僕は、下まで送つてくだけで、あとは、寺男に賴んぢまうつもりなんだ」
「あら、可厭だわ、それぢア」
「可厭ならねちまふより仕方がないね。そこに洗濯したてのゆかたが出してあるから着換へたまい。それも可厭なら、强ゐてとは言はないが——」
「寢床は、一つツきやないの？」
「贅澤いつちアいけない。時と場合によつちア、人間は棺のなかへさでねかされるんだ」
「まア、不吉なこと……。貴方は？」
「僕は仕事をするんだ。可厭になつたらねるが、今夜は馬鹿にあたまがいゝから、今からねるのは勿態ない。そのために、すじを一つ控へて置いたくらゐだ。……まア、なんでもいゝから、君はさつさとねちまふこつたね」
「ぢや、お先きに失禮するわ」
机の前に坐つた熊谷は、可怕いほど眞面目な顏になつてゐた。女は、こそ〳〵と六疊へ出て行つたが、暫くしてから

小さな聲で、

「こゝ、どうしませう?」

「明るくなくつちアねられないのなら、あけとくし、暗くてもいゝんなら、しめちやつてくれないか」

襖がしまつた。熊谷は、まづ原稿紙を展べ、ペンを把つて、暫く空を見詰めてゐてから、煙草に火をつけ、永いことかゝつて一本吸ひ終つた。それからペンを持つて、ぢつと紙を睨めた。五分ほどさうしてゐてから、また煙草にした。灰が、象の鼻のやうに垂れさがつて來て、落ちた。それを一息に吹き飛ばして、三度ペンを把りあげた。暫くして、一行も書かずにまた煙草……。

一時間ばかりかゝつて、熊谷は、やつと書き出しの一行をとツつかまへた。それを、何遍となく、口の中で呟いてみてゐた。

「暗いと、蚊が來るわ」

そつツと襖があいた。

「蚊やりをあげよう。そつちへ持つてきたまい」

「こゝ、あけといてもいゝ?」

「いゝ」

振り向きもしなかつた。――或る世界が、もう彼のあたまのなかに固く出來あがつてゐた。そとからは何もはいつて來ず、内からは、何も出て行かなかつた。もとより、言葉は空だつた。時の歩みも、少しもそこへは響かなかつた……。

世界が歪になつた。境界がぼやけて、雀の囀りが飛び込んで來た。ペンを置いて、いきなりうしろへひつくり返つた。

目をつぶると、あたまのなかは、まるで痺を切らした足の裏だつた。立つてどし〱歩けるやうになるまでに、何分かかゝる、さう云ふ時間が、あたまの痺れには、もつと永く必要だつた。

……人並に歩けるやうになつたあたまへ、女がはいつて來た。熊谷は起き返へつて、隣室へ出て行つた。ちかには射して來ないランプの、ほの暗い光に、禱の時のやうに組み合せた兩手を顎の下にあてがつて、左下にねてゐる姿が、ひどく子供つぽく浮んだ。男ものゝゆかたの袖が肩までまくれあがつてゐた。顏を覗き込んで見ると、輕く口をあけて、靜な寢息を通はしてゐる……。

熊谷は、クル〱と帶の結び目を前に廻してから、座布團を二つ折に拵えて、足の方からそろ〱と、搔卷のなかへ體を入れた。」

五

本堂に向つて左に續く庫裡の、奥のはづれの北庭を控へた居間で、三人鼎座の酒宴が始つてゐた。たつぷり半疊敷はある木瓜の卓には、沖が、恐れ氣もなく山門を提げて漭つた獲りたての蛸を、酸にして大皿に盛つてあり、ほかに、蓮根と萊豌豆と蒟蒻の煮つけ、遠來と稱して、主人がちび〱と食ひ惜んでゐた河豚の干物、熊谷の好物で、自分で行つて買つて來た豆腐が五丁、――然し今はもう、幾度か取り變へた山清水も溫み、箸の先にくつついてはいた藥味の紫蘇や葱が浮んで、底に二片三片のこるばかりだつた。酒はもとより、般若湯の隱し事ではなく、小暗い、廣々とした臺所の片隅に、菰を被つて控へてゐるのだから、客好きの、氣のいゝ扉婆さんが、片口に出し、德利に注ぎ、燗をし、奥へ運ぶ間の匂ひだけで、あたまがふら〱して來たと云ふくらゐ、更に痛々しげもなく、捗がいつた。

「いくら云つたつて、歸つて了つたのが何よりの證據ぢアないか」

熊谷よりは、五つ六つ年長だが、髪の整へ方や身裝もきちんとして、それに文壇でも評判の器量よしだつたから、ほんのり酒の廻つた沖が、一座のうちで一番若く見えるくらゐだつた。

住持は、存外執念深いやきもちやきで、

「いや〳〵、怪しいもんだて。……兎に角お前たちのすることは、狐狸妖怪の不可思議だ。とても正面にやア考へられない」

「だつてね、兎に角、ひよつこりあいつがやつて來た晩は……」

「一つ寢床でねたらう」

熊谷は、ギヨロリと眼玉を光らせて、「お前のとこにだつて、泊り客の夜具までは用心してなかつた筈だ」

「いや、それやアね、婆さんが、歸りがけに、町の貸し蒲團屋にさう云つて、屆けさしてくれたんだ。無論別々にねたよ」

「蚊帳はどうした」

「蚊帳は一つ蚊帳だよ」

「いや、そんな事實調べなんぞしないでも、一目見りやア解るぢアないか。こんないゝ男を、女の方でたゞ置く筈はない」

「とまア、實は俺も自惚れたんだよ。ところがね……」

「それ見ろ、お前だつてやつぱり手を出してゐるんだ―、

と、住持は、空嘯いて盃をあげ、熊谷に酬した。」

「ところが……の先はどうしたんだい？」

「ところが、兆さんの前だが、あいつ、へんに……」

「さうだ〳〵、なか〳〵堅固だらう？」

「何が堅固だ！　さんざ惚話を聞かせて置きやアがつて！」

「和尙、まアさうやくなよ」

熊谷は、眞面目に制して、「いや、實は和尙に叱られるかと思つて、これだけはちよいと云ひそびれてゐたんだが、あいつにやア、ちやんと亭主があるんだとさ。どうせ碌なんぢアあるまいけれど、新派の役者でね……」

「へえ、そいつは、俺ア初耳だ。さうかい。人の女房かい。さうとすれア、然し、ひよつこり俺んとこへ尋ねて來るつてのが、第一、少し圖々しいぢアないか。よくまた亭主が、そんなことを平氣でさせるもんだね」

「それアね、この半年ばかり、大阪へ行きツきりに、歸つて來ないんだとさ。つまり、あつちでばかり芝居をさせられてるんだね」

「へえ、なんてやつだらう！」

「いや、とても沖先生のお目にとまるやうな代物ぢアなささうだ。三度の飯より博賭が好きで、とても出世の見込がないんだ。なんて、女が自分で云つてたがね、それでも、兎に角亭主は亭主だ。そいつを聞かされた時にやア、實は有體の俺もちよいとひるんだね」

「嘘ウつけエ！」

住持は、うちで飲む酒の、馬鹿に廻り具合いがよかつた。殊に十ばかりも若返つて、何隔てない友達の気だつた。「お前が、そのくらゐのことでひるむ面かい！　狸め！」

「だから、結局はひるまなかつたんだが。そこでは、僅かにちよつとひるんだよ。だが、ちつと考へ直したよ……」

「どう考へた」

「こゝだと思つたよ」

「どこだと思つたんだ」

「そんな表面的な事實に捉はれちアいけない、とな。女がそれに拘泥るのは仕様がないとしても、俺まで一緒に□き込まれて、くだらない反省に縮こまるやうぢア、男の面目が立たないと思つたんだ」

「感心だ！　いゝところへ氣がつきアがつた。そこで、女の迷夢を拂つて、成佛得脱させてやつたわけか」

「そんな大袈裟なわけぢやないが、あとは、まア腕力だ」

「實は……」

と沖が、一膝乗り出して、「實は俺も、よつぽどそこまで行かうかと思つたんだけれど、兆さんの山寨と違つて、離れてゐるとは云ふじよう近所隣があるからね、ぎやア〳〵云はれでもしたらみつともないと思つて……」

「ところが、存外云はないもんだね」

「のめ〳〵してやがら……」

「いや、これア決して惚話ぢアない、二郎さんなら無論のこと、よしんばそれが和尚みたいなひよツとこだつたつて……」

「なんだと、ひよツとこだ？」

「まアさ、そこまでいきア誰だつておんなじことだつて云ふのさ」
「急に自信がついちまやアがつて、どうだい、和尚さん、兆公の納り具合と云ふものは………」
「どうも、お前さんの留守中なんぞ、二言目には出るんだから、所詮助からなかつたよ」
「然し、悪いことは出來ないもんでね、今日歸つて來てみて、すぐと俺にア解つちやつたね。何しろ、顔を見るなり、何より先に東京へ歸ると云ひだしたんだ。へんにまぶしさうな具合で、こつちが正面に見られないんだ。はゝアん、と思つたから、君、僕の留守中に熊谷のとこへ行つたね？つて……」
「おい、いきなり俺に見當をつけるやつアないよ」
「だつて、ほかにそんな醉興なやつがあらうたア考へられないもの」
「なんとでも申せ。戀の意趣と云ふものは可怕いもんだ。自分の方が一晩さきに、その醉興で恥をかゝされてゐながら……」
「さうだ〳〵、こいつは一番、二郎さんの負だ。それとも……と見せて置いて、肚のなかでニヤ〳〵なんて筋合のものなら、口惜がつて、こゝらでぷツつり鯉口を切つて了ふんだね」
「腹は立たぬ、口惜しうは御座らぬ」
「然し、一言の沙汰なしに、今日ぷいと歸つて行つて了つたんだとなると、山寨の色男も、ちよいとペコシヤンだね」
「いや、それア重々俺が悪いんだ。と云ふなア、和尚にもまだ話す折がなかつたけれど、こゝに一條の悲慘な物語があるんだ。まア聞いてくれ、かう云ふわけだ」
「合方きつぱりとなるところだな。兆公も、なか〳〵これで隅に置けないね。生意氣に話を締めやアがる。その意氣で

小說が書けりやア、もうちつとは賣れるんだがね」

「馬鹿にするない。これアほんの、當世流行の、所謂餘技なるもんだよ。さて、話と云ふなアから云ふわけだ」

「チ、テツトン、チ、チ、チンリン〳〵」

「昨日の午後、女の方から尋ねて來たことまでは、先刻御披露申した通りだが、もうちつと詳しく話せば、素面で、まして白晝だ、その前の日の朝は、こつちがぐつすり寢込んでゐる間に、そうツと歸つて行つて了つたんだから、つまりそれ以來の對面だ。俺もちよいと悄氣る、彼方ももじ〳〵、お尻で「の」の字を書いてゐやうと云ふわけなんだ」

「へ、笑はせやがる」

がぶりをあけて、住持は沖へ獻した。

「いや、然し面白いよ、それからどうした」

「おだてに乘つて、構はず辯じ續けるがね、――そのうち、『あの、これ……』てツて、机の端にそつと乘つけたのがなんだと思ふ、……こないだ俺が二郎公のとこで分捕つて來た麻の手巾なんだ。……こいつを、綺麗に洗濯して、きちんと疊んで、――火熨はかゝつてゐなかつたが、兎に角、お返し申します、と云ふわけなんだ。……汚ねえやな！ 殊には机の上だ！ いかに和尚の使ひ古しの、剝げちよろけたア云へ、大事な仕事を載せて、俺が使つてゐる限りにやア、淨机だ！ 穢らはしい、何をしやアがる！ とかつとなつて、七輪のそばにあつた、先の燒け焦げた割箸を把ると……」

「細いぞ！」

「うるせえ！………そいつを摘んで、谷底目がけて投げ飛ばして、序に箸も捨てちまつたんだ。さうなりア腹立まぎれだ、『歸れ！ 歸つてくれ！』……こいつが惡かつたね！ 假令手巾一枚でも、ひとのものだと思へばこそ、そのまゝ

便所にも捨てずに持つて歸つて、綺麗に洗濯して、態々こゝまで返しに來たんだ。馬鹿々々しくつて　お話にもなんにもならないけれど、その志を思つたら、——歸つてからはどうしようとも、その場はそのまゝ受け取つて置きアよかつたのさ。若氣の至りだ、恥ぢ入るよ」

　熊谷は、二人の前に詫びでも云ふ態(かたち)に、その時、深々と首を垂れた。——ぽつんと話が切れると、早や秋近い蟲の音が、雨氣を含んだ風に綴(つ)つて、三十二燭球(たま)の、ほの暗い座敷のうちへ流れ込んで來た。

「馬鹿の智慧はあとからつてね」

　口では譏(けな)しても、住持の感動は、眉宇の間に蔭となつて、二三合の醉は醒めた。

「それで、お米のやつどうしたい？」

「え？　お峰つて云ふのかい？　あいつ」

「君にやアなんてつて教へた？」

「あゝ、さう云やアたうとう訊かなかつた。訊き忘れちやつた」

「暢氣なやつだなア」

　それで、三人とも聲を擧げて笑へた。——酒の量に比べて　笑の量が足りなくなつて來てゐた。で、丁度笑ひは、無意識の間に要求されてゐるものだつた。

「さうかい、お峰さんつて云ふのかい、へえ……」

「何がへえだ！　それでどうしたんだよ」

「どうもかうもないさ、その見幕だもの、すごすごと歸つて行つちやつたのさ」

「どうれで、ひどく悄気てやがつた。……然し、なんだつてまた、手巾なんぞ使つたんだい」
「だつて、女のくせに、……もつてないんだもの」
「不用心なやつだなア」
住持が、そのあとへ、結論でも與へるやうな調子で、
「兎に角、今時の女は、いろけがないよ。助平根性ばかりで、いろけのないことおびたゞしいやね。坊さん夜叉へばかみがない、つて古い洒落があるけれど、さうなつちや、女も坊主も一緒だね」
もう一度、みんな聲を揃へて高笑をしたが、なんとなくそれは、冴々しなかつた。

六

空の色が靜まり、遠い雲が、箒毛を出して斜に流れるやうな九月にはいつた。
夏中の、やたらな昂奮のあとに、しんみりとした思索が來て、熊谷の仕事も、いくらか纏りかけた。沖が引きあげると云ふ時にも、ちよいとは迷つたが、どうにかなつたものを一つ仕上げるまでは、寂しくとも踏み止つて、うんと勉強しやうと心をきめて、殘つた。辛抱しきれるかぎりは、盃も手にしなかつた。二十間かそこら隔てゝ上と下に住みながら、住持とも、二日くらゐ顏を合さないことがあつた。夕方、ひと風呂浴させて貰つたから、臺所口へ出て來て、煮物のうまさうな匂ひを嗅ぎながら、厘婆さんに、和尚さんは？と訊いて、奥にゐると云ふ返事をされると、そのまゝ下駄を突つ掛けて了ふのに、人に話しても、とても信じられないくらゐの意力を用ゐたりした。油が乘つて書き續けてゐるところへひよつこりあがつて來た住持に、一二度無愛想な顏を見せたのに、悉く遠慮して、彼方からは、ぱつたり來なくなつ

て了つた。それでも、初めから遊ぶ氣で出かけて、飲み出したりする時の親しみは、度ごとに加はつて行つた。

ものうい雨の午後だつた。前の晩の夜更しに、本式に床をとつて晝寢をしてゐる熊谷を、四疊半の縁先へ廻つて、番傘を肩に、「おい〱」と聲をかけて呼び起したのは、珍らしくも住持だつた。

「な、な、なに……？」

頰が歪むほど、力いつぱい伸をして、熊谷は寢惚聲を出した。

「今夜は、是非松牛かどつかへお供をしよう。どうあつても、唯ぢアすまされない」

「雨は降るし、いゝね」

「お前におごるわけがあるんだよ」

「なんだらう。……まあおあがんなさい。さう聞きやアいづれ惡い話ぢアないね」

飛び起きるなり、慌たゞしくあたりを片づけて、席の設けをした。住持も傘をつぼめて立かけ、のそりとあがつて來て、

「おい、來たぜ〱、てつきりあの娘からだ……」

「なんだ、手紙かア」

「なぞと、安く扱ふなよ。西洋封筒で、ペン書きと來たひにやアいろけはねえが、それでも兎に角女文字だ。裏に、M、Tとあるね。Mは即ちお峰のミの字で……」

「や、これア、和尚さんに蘭學の心得があらうたア思はなかつたな」

「おい、松牛は慥かい。それを訊いといてから渡さう」

「松半は見に角、今夜は飲む氣でゐたんだよ。出かけよう」
「つもりを訊いてゐるんぢやアない、懷中を訊くんだ、心得はあるかよ」
「まア……ね」
「馬鹿に曖昧だな」
「讀んで見ないことにやア、さうはつきりとはいかないさ」
「ぢアまア、可愛想だから讀ませてやるかな」
なんとしても乘つて來ない相手の氣の重さを、持て扱つて了つたやうに、懷から、水色の角封筒を取り出すと、作持は、つまらない顏つきで、そこへぽんと擲り出した。「女からの文を讀んでる面つきと云ふものも、一度はしみぐ見て置くかな」
「御勝手だ」、
洒々と、封を切つて讀み始めた作持の想像どほり、無論峰子からよこしたものだつた――まづ、こゝでの出來事は、たゞ「いつぞやは誠に失禮いたし」と簡單に云ひ退けて、あとはすぐ、最近自身が陷らなければならなかつた窮境を訴へてあつた前には、大阪にゐる良人から、ほんの僅づゝでも、月々送つてくれるものがあつたし、それにカフヱでの稼ぎも相當の額にのぼつたから、母と二人、わりに樂に暮せてゐたが、三月ばかり前から、ぱつたり良人の消息が絕へていくら手紙を出してみても返事はなく、會社の方へ訊き合せて、やつと、七月の末から九州地方へ巡業に出ることとてゐだけは判つたけれど、もとぐ籍のはいつた女房と云ふわけではないのだし、今では、これまでの緣と諦めるよりほかはないかと思つてゐる。そこへもつて來て、夏霖枯の八月にぶつかり、困りぬいた擧句、ふと新聞の文藝欄

で、沖樣がその地に避暑してゐる由を知り、常々からの御贔負に甘へて、自然の御手傳でもしたり、永年の間無理ばかりして來た自分の體も、少しは休めたく、そしてよい折があつたら、今まで經て來たさまぐな境遇をお話して、小說の種にでも使つて頂き、それを恩に着せるわけではないけれど、今後の身の振り方を御相談ねがつたり、何かと御援助を仰ぎたいと思つてゐたのだ。それも、然し、あゝ云ふ思ひがけないことになつて、なんの思案も出ず、すぐ歸京して了つたやうなわけだが、そのうちやつと九月になつて、これで少しは息がつけると喜んでゐる矢先に、この一週間ばかり前から母に患はれて、勤めにも出られず、はいるものは一文もなく、出る一方に、もとくありもしない家具や衣裝は、かれこれうも賣り盡して了つたやうなわけだ。沖樣は、八月末に一度店に見えたけれど、どうやら何もかも御存知の御容子、さうでなくても、今更あちらへ御願ひするのは、なんだか氣がひけるし、身よりたよりはもとより、ほかに力になつて頂けさうなあてもなくなつて了つた――さう云ふわけゆゑ、貴方もお樂ではなからうと思ふけれど、至急に百圓でも、五十圓でもいゝから送つて頂けまいか。厚かましいお願ひだけれど、どうぞ枉げて御承知ねがひたい。御恩は、決して、死ぬまで忘れないから……」

大體かう云ふ意味のことが、あたまの惡さをむき出しに、廻り諄く、たどくしく、可なりの長文に認められてゐた。敬語の使ひ方があべこべになつたり、誤字や當字だらけだつたり、文章も、判じものゝやうに意味の汲みにくいところがあつた。

「うーん」

讀み終つた熊谷は、レタアペエパアを折り疊みながら、鼻音で深く唸つた。

「どうしたい」

そこらに出てゐた雜誌を手に取つて、あちこち拾ひ讀みしてゐた住持は、その唸り聲で顏をあげ、「ひどく感じ入つたな。どうだ、松半ものか、それとも藪蕎麥ぐらいなとこか」

それには答へやうともしずに、眼を据ゑて、ぢつと考へ込んでしまつた。——金の才覺だつた。部屋代はもとより、五十錢、一圓とちよい〳〵住持に立て替へて置いて貰つたものすら、どうして拂ふ氣か、全く自分であてがつかないでゐるところへ、まして……。

「弱つたなア」

「何を云つて來たんだ？」

「弱つたよ」

「はゝア、一遍でとまつたか。辨慶上使のおあさと云ふやつかな」

「冗談ぢやない。まア、ちよつと讀んでみなさい」

住持も有繫に、吊り込まれて、眞面目顏に手紙を讀み始めた。熊谷は、兩腕をぶつ違へて、しつかりと我が胸を抱きしめ、體を堅くしてゐた。——へんにうすら寒かつた。軒をめぐる點滴が繁くなつて、たそがれは、夙くも障子紙の、古ぼけた鼠色へ迫つて來た。

「なアんだい、これア」

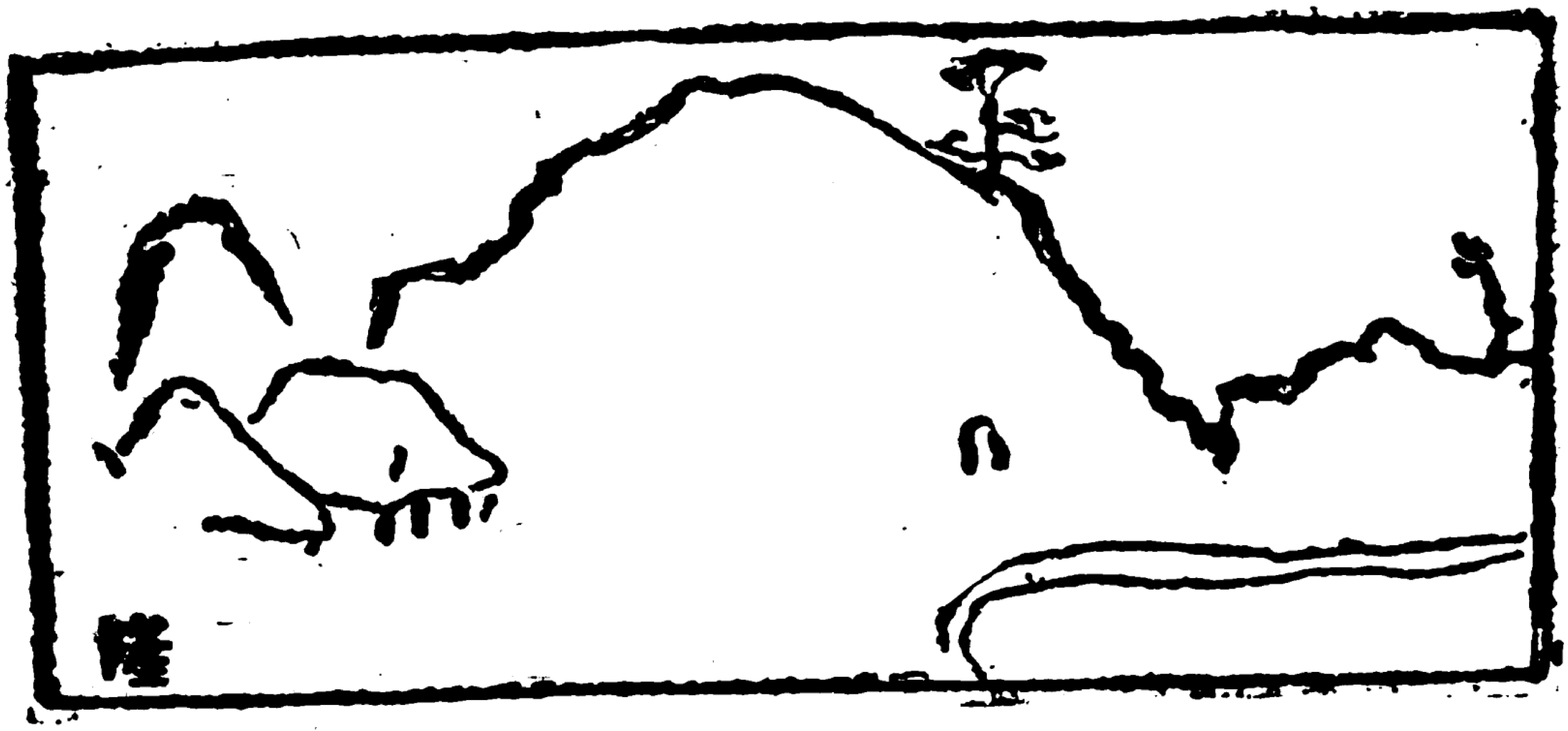
やがて住持が、手荒くそこへ手紙を擲り出すと、はゝは、と短く嘲笑つた。

熊谷は、腕を拱いて、答へなかつた。

「何が故に、お前が、こんな手紙で困らなければアならないんだが、俺にやアさつぱりわけが解らないね」

「どうして？」
「一體これア無心狀だね？」
「まア、さうだね」
「こゝに長々と陳じてあるのは、いかにして彼の女が貧困に陷つたか、つまりその事情だね？」
「さうだよ」
「それと、お前が、彼の女のために金を出してやらなければならない事情とは、全く別な話だぜ。こゝには、いかにして彼の女が金に困るやうになつたかは、縷々數萬言を費して書いてあるけれど、何故にお前が彼の女の窮乏を救はなければならないか、その理由と見るべきものは、一つだつて書いちアないんだぜ。その二つは全く別なもんだ。貧乏してゐることが、たゞちに人から金を取る理由にもならないし、まして權利になるわけはないんだ。甲の理由と、乙なるものゝ理由を錯誤混同して、自分勝手に、そこに義務を感じるなんざア、我が兆さんにも似合はしからぬ、あたまの惡さだよ」
「なアるほど！　理屈を云やアそんなもんだな」
「もとより俺ア理屈を云つてるんだ。人情の話なら、自ら別だが、然し山ンなかの一つ家へ、女を引摺り込んで、腕力に訴へてまで、勝手なまねをするやうな男に、よもや人情なんぞがあらうたア思へないから、この手紙に對する俺の理解は、悉く正當なもんだと信じられるんだ。而しお前は困つたと云ふ……。何が困るんだ。俺にやアちつともわけが解らないね」
「まゐつた！」
熊谷は、腕をといて、坐り直した。

「よし！きつとまゐつたな？」
「まゐつた」
「馬鹿！ ひつかゝりやァがつたな。……お前、ちつともまゐることァないぢァないか。なぜかう云はない、――あの女を取ッちめたのも人情だ、人情も人情、大した人情だ！ 同時にこの手紙を讀んで、急に可哀想になつて、どうでもして金を送つてやりたいと思ふのも人情だ、俺ァ理屈なんぞ大嫌ひだ、徹頭徹尾人情だ。それがどうしたと云んだ、馬鹿野郎、と、かう云やァ、俺の方で、すぐにまゐつた！ とへこたれてやる手筈になつてゐたんだが、お前もまだ駄目なところがあるな。どうだ、今度こそはほんとうにまゐつたらう！」
「よし！」
住持は、悠々と立ちあがつて、縁側からおり立ちながら、「そこで、人情、これァどうしても金を送つてやりたいところだらうが、どうだ」
「それで弱つてゐるんだ」
「さうだらうな。才覺のつくあてはないのか？」
「ない！ 皆目ないんだ！」
「よし！ ぢァ、俺が一つ心配してやらう。無論俺ンとこにやァないが、これから、心當りの壇家へ行つて、なんとか一つちよろまかして來てやらう。待つてろ。うまくいつたら、それこそ松平もんだぞ……」
パチンと番傘を開いて、「どつちみち晩飯までにやァ歸つて來るから、あんまりあてにしないで待つてろ……」
熊谷は、胸がいつぱいになつて、すぐには返事が出來なかつた。……やうやく、ゴクリと量ばつた堅い唾を飲みくだして、なんか云はふとした時には、パラ〳〵パラ〳〵と、しぐれじみた雨を傘にうけて、住持はもう、石門近まで行つてゐた。痩せてひよろ〳〵した、みすぼらしろ後姿に對して、熊谷は、思はず掌を合せた。



太つた女その他

正宗白鳥

太つた女

「あたしはこれで大喰ひなんですけれど、どうしてかう痩せるんでせう。あなたはお肥りになつてゐるから立派ですね」

目ばかり大きな顔の尖つた、身丈けも人並みよりは小さな露子か云ふと、—

「あたし、顔よりも身體がもつと肥つてゐますのよ。十五貫くらゐになりたいと思つてゐるんですけれど、」と、筆子は晴々した聲を立てて應へた。彼女の顔は、廣々と平たくて、唇が厚ぼつたくて、目は目蓋からはちきれて飛出しさうな形をしてゐた。

「體格は御立派だし、お聲はいゝし、舞臺にお立ちになるとよろしいでせうね」

「それは新井かさう申すので御座んすよ。自分が會社からアメリカの支店へ派遣される時には、お前を連れて行つて、あちらの舞臺に立たせるつて。……あたし、外

國でなら活動の女優になつても、よ御座んすわ。あちらでは、ドッサリ、山とお給金が取れますのよ。」筆子は言葉に力を入れて、手を動して、目前に金を見てゐるやうな表情をして、「日本では、歌劇の女優になつても、堕落したやうに思ふ人があるんだから、文化がまだ幼稚なんですねえ。あちらへ行つたら、あたしなぞ何をしても歡迎されますわ。あちらでは、肉體美を尊重しますから、あたしは、日本人よりも外國人に認められると思つてゐますわ。わたしの目がいゝんですつてね。」

「新井さんも體格が堂々としてゐらつしやるし、お二人がお揃ひで西洋の社交界へお入りになつたら、決してあちらの人に蹴押されるやうなこと御座いませんわね。」

「さうですとも。新井は英語が達者で、發音に日本的なくさ味はありませんのよ。あたしだつて英語塾を優等で卒業したのですから、時々は、英語の方が先へ頭に浮んで日本語ではどう言現はしたらいゝかと思ふことがあるんで御座んすよ。外國の有名な文學書は大抵讀んでゐますから、日本の作家のものなぞ、淺薄でとても讀む氣にはなれませんわ。あたし少さい時分から、書物が大好きで、三日でも四日でも徹夜して讀みました。遺傳なんですねえ。父も祖父も學者で、昔はあたしの家には　家中に山のやうに書物が積んでありましたのよ」

筆子の手は山の形をした。露子は、洩れこぼれやうとする笑ひを噛締めて、

「それで、新井さんはいつ家をお持ちなさいますの？。いつまでも宅借りしてゐらしつちや御不自由ぢや御座いませんか」と見窄らしい部屋の中を見廻して云つた。

「新井は氣が大きいですからねえ。家を持つほどなら、あたしのお小使だけでも月々二百圓くらゐはくれるやうでなきやいけないと云つてゐるんですわ。あたしだつて、女中の二人や三人は使はなきや、家を持つ甲斐がありませんからね

新井は社長に信用されてゐますから、二三年うちには、部長か支店長に上進することは、ちやんと極つてゐるんで御座んすよ。だから、今のうちは月給なぞ眼中に置いてゐませんの。……あたし、新井が立身してお金が取れるやうになつたら、理想的な生活をいたしますわ。」

「あなたの理想的な生活つてどんな生活でせうね。早く拜見したう御座んすわね」

「あたし御殿のやうな家に住みますわ。」

と、雛子は御殿といふ言葉に力を籠めて、「あたし、自分の身體は使はないで、足袋でも召使ひに穿かせて貰ひますわ。氣轉の利いた行儀のいゝ召使ひを一人、あたしの身の廻りの世話だけを專門にさせますわ。西洋の名畫をズラリと懸けて、……あたし、日本の繪は淺薄で詰らないから、自分の居室には懸けないつもりですの。女神の彫刻なんか、あたしの居室の裝飾には調和してよ御座んすわ。……あたし、自分の身體その物が、寢てゐても起きてゐても、藝術品に見えるようにしますわ。……用事のある時は、誰れぞと云つて、召使を呼びますわ。」

雛子は、「たあれぞ」と、ふと柔しい聲で今召使ひを呼んでゐるやうに、首を傾げて輕く手を叩く眞似をした。路子は思はず聲を出して笑つた。

「あなたは大變に貴族的な趣味を持つてゐらつしやるのね」

「だつて、あたしの父は××公爵家へ家庭教師に上つてゐたのですもの」雛子は眞面目な顏してさう云つて、「あたしだつて、伯爵や子爵の家庭教師になれつて、方々から勸められたんですけれど、あたしの教授法は嚴格なんですからねえ。自働車で送り迎へをすることや、言葉使ひに禮儀を守らなきやいけないことや、あたしの條件が六ケしいので、話が纏まらなかつたんですわ」

「……お父さんはこの頃はどうしてゐらつしやいますの？」

「父は、……父はこの頃は何もしないで叔父に養つて貰つてゐますの」笹子は、急に今までの勢ひの消えてしまつたやうな聲で云つた。

「叔父さんて、あの六本木で印刷屋をしてゐらつしやる方？」

「えゝ。……叔父も大變で御座んすわ。肺の悪い甥に轉地をさせたり、自分の子供が多い上に、親類に厄介を掛けられ通しなんですもの。せめてあたしだけは獨立して、叔父に手頼らないやうにしなきなりませんのよ。」

「でも、新井さんが、月々いくらか補助して下さるんでせう」露子はさう云ひながら部屋の中をじろ／＼見廻はした。

「たまあに、五圓や十圓置いて行くきりなんですから、何の足しにもなりやしませんわ。あの人なか／＼おしやれなんですからね。ネクタイだつて二十本も三十本も持つてゐますのよ。お金が入ると、直ぐにパツ／＼と使つちまふんですから、あたしの家へ來る時には、いくらポケツトを捜したつて、お金の形は見えないんです。カツフエーの女の御機嫌取りに無駄なお錢を費ふんぢやないの？そんなことしたら承知しないつて、あたしいつも警戒してるんですから、新井は外の女に性根をむしられてることは、決してないに極まつてゐますのよ。あたしと新井との間は、戸籍面の夫婦關係で束縛を受けてるやうな、そんな水臭い愛情ぢや御座いませんからね」

「それはまあ、お安くないんですね。」

「新井が少しでもあたしに不誠實な仕向けをしたら、あたし、今直ぐにでも關係を絶つちまひますわ。新井にもたびたびさう申してゐますの。」笹子はふと興奮したやうに聲を強めて、「あたし、この人を自分の者にしようと狙ひをつけたら、乾度手に入れるといふ自信は持つてゐますからね。新井に侮辱されてまで付纒つてやしませんわ。學校へ通つてた

時分に、毎日のやうにいろ〳〵な學生から手紙をつけられて、父に心配させてゐたあたしですもの。その時分から、あたし、男つて甘いものだと思つてますの。」

「わたしには、この年齢になつても、男と云ふものが甘いか辛いか分りませんわ。」

露子は腰を浮せて、「今日は御邪魔に上つていろ〳〵面白いお話を承りましたわね。」と師作度をして、「ぢや、弟さんは二三日うちにいらしつて下さいますでせうね」

「えゝ、あたしが連れてまゐりますわ。愛人は新井でよろしければ、新井に印を捺させませう。」

「知らない方ぢや御座いませんし、保證人なぞどちらでもよろしいんですけれど」

露子は、コートを着けて階子段を下りかけた。

「あたし、さつき申上げたやうに、事務員でも何にでもなつて稼ぎたいんですから、いゝ口があつたら紹介して下さいましな。お願ひして置きますわ」

鏡子は歎願するやうな口調でさう云つて、露子を玄關まで見送つた。そして、自分の部屋へ戻ると、注ぎ置きの冷たいお茶で乾いた喉を潤してから、窓側に立つて、愛宕山の焼け木を眺めながら、「遊びに來たのに、なぜ出て命はぬ。いつも呼ぶ聲忘れたか……」と、小聲で唄つた。

痩せた男

「やはり鏡子さんだつたね。歩きつ振りがどうもさうらしいと思つた。」

痩せつぽちの小柄な天野は、後からセカ〳〵と歩いて伸子に追付いて、互ひに顔を見合せると、笑ひながら云つた。

「後に目のないのは不便なものね。あなたにあとを跟けられてゐるとは分らなかつたから、あたし、いゝ氣になつて歩いてゐたわ。この頃は景氣がよくつて。何だかよさゝうぢやないの？」

「どういたしまして。……あなたは僕にあとを跟けられちや氣になるやうな後暗いことがあるの？」

「なんでもないわ。あたし、今大變なことを企んでゐたんですもの。」

「ハヽヽヽ。いつか僕の家へ來た時にも、大變なことを企んでゐると云つてゐたが、今日も企んでゐるんですか。でも、そのシャナラ〳〵した歩きつ振りぢや、大した謀叛を拵へてる人らしかないけれどな」

「さう人を見くびるものぢやないわよ」

伸子はふと目の前に喫茶店を見つけると足を留めて、「あたし、電車にも乘らないで溜池から歩いて歸つたら、喉がいりつくやうに乾いちやつた。天野さん紅茶でも奢らないこと？」と、大きな目をやゝ細めて相手の顔を覗くやうに見て、柔しい聲で云つた。

「それくらゐなら奢つてもいゝね。けれど、新井さんに叱られやしないだらうか」

「いやみなら、もつと氣の利いたこと仰有い。」伸子は先に立つて、喫茶店に入つて、よささうな所で重さうな腰をおろした。

天野は約束通りに女給に向つて紅茶二つを命じたが、伸子は、

「プヂンがあつたら頂戴ね。あ、それよりもサンドヰツチがいゝわ」追掛けるやうに云つて、「あなたは召上らない？」と、天野を見た。

「僕はよろしい」と、天野は眉目に不機嫌らしい相を現はしたが、律子は何とも感じないで、

「新井は身装でも趣味でも西洋好みなくせに、洋食嫌ひなのよ。」

「いゝ料理屋のを食べないからだらう」

「さう見くびるものぢやないわよ。ホテルへでも風月へでも、丸ビルの八階へでも、しよつちゆう食べに行つてますよ。風月のスヰートポテトおいしいわね。」

「洋食嫌ひな人がそんなに洋食屋をあさり歩いてゐるのは可笑しいた。」

「……そりや食べ物は何だけど、西洋料理屋の氣分が趣味にかなつてるの。」

「氣分を味ふなんて、言葉が少し古いな」天野はふと笑つてゐた顔を和らげて、「さう云へば、此間大沼の妻君があなたをお訪ねしたさうだが、おのろけばかり聞かされたつて非常に恐縮してゐましたよ」

「嘘吐きね、露子さんは」律子はふと憎さげに云つて、「あの人、なぜあたしに反感を持つんでせう。昨今のお知合ひで、昔からの遺恨も嫉妬も何もないぢやないの。あたしが新井と愛し合つてるのが氣に障つていろんなことを言觸らすのかも知れないけれど、それぢや隨分陰險だわ。あたしと新井との間がどうだらうと餘計なお世話よ。羨しければ、御自分も、御自分の旦那様と、手を握り合ふとも、キッスするとも、勝手にするがいゝぢやないの。」

「御尤も……」

天野は、あたりに客がないとは云へ、新井田律子と鼻つ面を突付合つて、ピシ〳〵露骨の話をされるのを面痒く感じて、さして慾しくもない煙草に火を點けて、二人の間に煙を漂はせた。

「世間には餘計なおせつかいが多いのね。露子さんなぞ、あたしが新井に早く背かれゝばいゝと待つてるらしいのよ。

……だけど、お生憎様だわ。……そのくせ、露子さん御自身は上べはお上品らしく見せかけても、随分な浮気ものらしいのね。……だつて、よく、新井があたしの家に來てる時分をねらつて、訪ねて來るのよ。そんな時には、あの人、年齢甲斐もなく、白粉をこてこてと塗つて、派手な襦袢の半襟なぞチラ〱させて、大きな口を窄めたりして、様子ばかりつくつて　その滑稽なざまつたらないの。新井があんた低能な趣味は大嫌ひだつてこと氣づかないのだから無智な女ね。……此間の晩にも、新井がビールを飲んでゐるところへ入つて來て、はたでぺちやくちやお喋舌をして新井がコップのお酒を膝にこぼすと、あの人、慌てて自分のハンケチを出して、新井の膝を拭いてやるのよ。あたし、いま〱しいから、いきなりそのハンケチを取つて、廊下へ抛出しちやつたの。あんな安香水を振かけたいやな臭ひのするハンケチを、あたしだちの前で恥かしくもなく、よく出せたものだと、呆れちやつたの。」

「それは痛快だつたね。雛子さんのやりさうなことだな」

「あたし、負けてやしないわ、あんな人に」

「だけど、雛子さん。年齢甲斐もないと云つても、大沼の妻君はまだお婆あさんぢやないよ」

「あの人年齢を隠してゐるの。もう額に小皺が寄つてるぢやないの」

「可愛相に。まだ三十になるやならずだよ。…………あなたは幾つだつたか知ら」

「あたし忙しくつて年齢なんぞ忘れちやつた」雛子は詰らなさゝうに云つて、「そんな話もう止すわ」

ちよつとの間言葉が止切れた。二人の間を遮る煙草の煙はます〱濃くなつた。そこへ、サンドヰツケが運ばれると、雛子は悦れしさうな目をして、小楊子のさゝれてゐる一切を先づ自分の口へ入れてから、「あなたはいかゞ」と、皿を心持押出した

「僕は御免だ」
「ぢや、何か外のものを取らない？」
「林檎でも頂かうかね」
「さう？。あたし、サンドヰツチに林檎を添へて食べること好きよ。滋養にもなるんですつてね。ヴイタミンがあつて」
筆子はさう云つて、林檎を二人分吩咐けた。
「あなたはヴイタミンを採り過ぎるから、活氣旺盛になり過ぎて却つていけないんだね。」天野は、サンドヰツチをさも珍味のやうに味はつてゐる筆子の口の運轉に目を注ぎながら、「昔のことを思出すと妙なものだな。筆ちやんと僕とは同い歳で、體格も同じくらゐだつたのに、今ぢや、正反對なんだから不思議だ。見たところ、あなたの體量は僕の倍もありさうだ」
「昔の事あたしに思出させちやいやよ。實さんは神經家だけに記憶がよくつて、昔の詰らないことまでよく覺えてるからいやさ。あなたに會つてると、時々、襟元へ冷つこい水を振りかけられたやうにゾツとすることがあるわ。」
「ぢや、僕をこんな所へ連れ込まなきやいゝのに……實は僕もあなたに會つてると、時々、筑波おろしに吹きつけられたやうにブル／＼つと慄へることがあるんだよ。」
「あたし、そんなに寒さうに見えて？。あたし、皮膚を鍛錬させるために薄着してゐるけれど、今でも、身體中がポカ／＼するほど温かいのよ」
それを、天野は聞流して、「筆子さんの御殿はまだ建たないの？」
「御殿と云つて何の御殿？」

「あなたは自分の年齢を忘れるほどあつて忘れつぽいね。…………お互ひが少かつた時に、さうだ、僕が十一か二の時だ。××公爵家の家庭教師だつた間宮さんに連れられて、お庭の拝見をさせて貰つたことがあつたでせう。築山があつて瀧があつて、都會の内とは思はれなかつた。切髪の御隠居さんがお座敷の方へ僕たちを呼んで、女中にお菓子を持つて來させて、二人に包んで呉れたが、あの時はお互ひにおど〱して、柔しい聲でいろんなことを訊かれても、口が利けたぢやないか。御隠居さんが、たあれぞと云つて手を叩くと、女中が襖を開けて三つ指を突いたね。あなたは、あとでよくその眞似をしてゐたものだ。それで、一生のうちにはあんな御殿に住みたい、屹度住んで見せると、あなたはよくさう云つてみんなに笑はれてたぢやないか」

「あんな廣い家にゐたら、お掃除が大變ね。もつと文化的の建築でなきや駄目よ」と、雛子はとぼけたやうな返事をした。

「一室つきりの愛宕御殿の掃除だつて大儀がつてる人なんだから」と、天野は笑つて、「あなたのお父さんは、拭掃除でも臺所でもこまめにする人なんだから、あなたはお父さんと一しよに、小さな家でも持つてゐた方がよかないのか知ら。……」

「いや〱」雛子は口元を緊張させてさう云つて首を振つて、「あなたは叔父に頼まれて、あたしを説付けて、父と同居させようと思つてるのね。あの耄碌した父の御介抱は全く御免よ」

「僕はあなたの叔父なんぞに頼まれやしないよ。馬鹿々々しい。つい、世間の人の云ひさうなことが口から出たまでなのさ」天野は冷かに云つた。

そこへ、紅茶と林檎が運ばれたので、二人は暫らく無言で飲んだり食つたりしてゐたが、雛子は、

「でも實（みのる）さんはあたしの境遇に同情して呉れるわね。まさかの時にあたしの力になつて貰へる人はあなたばかりと不斷思つてるのよ」と、しみ〴〵した口調で云つた。

「筆子さんが心細いこと云ふやうぢやおしまひだよ。あなたの一生を今までよく見て來た僕は、このさきも、どういふ風に面白い世を送るかと、おとなしく見てるつもりなんだ。……お父さんは叔父さんに預けたし、米吉君は奉公に出したし、あなたは、これからは自分の好きなやうに世が渡れるぢやないか。……大沼の妻君の話によると、あなたはまた職業婦人になりたがつてるさうだけど、本當にそんな氣持になつてゐるの？」

天野は言葉に身を入れて訊ねかけたが。

「いやなこと……」筆子は氣だるさうな聲で云つたが、何かを急に思出したやうに、嚙りかけの林檎の切れを下に置いて立上つた。

そして女中に案内させて電話室へ入つたが、やがて、そこを出て來ると、晴々した顏して、

「實（みのる）さん、これからあたしの家へ行かない？」

「新井さんが來ると云つたのかい。それなら僕は御免だ」

「なぜさ。聞けない人ね。……今日おいやなら、お次手の時にいらつしやいな。今日の御返禮にドツサリ御馳走するわ。……それから、あなたにお頼みしとくことがあるのよ。あたしの家へ來ても、新井のゐる時には、不斷のやうな存在（ぞんざい）な口を利かないやうにして下さいね。あたしも言葉を謹むやうにするわ」

筆子が眞顏で云つたので、天野は噴出（ふきだ）しさうだつたのを危く應えて、

「貴夫人に對する禮儀を守るのかい。たまらないねえ」

「おら、さうぢやないけど、新井は嫉妬燒くつてしようがないのよ」

「ぢや、僕があなたに馴々しい口を利くと、新井さんが變な風に氣を廻すつて云ふんだね。これは驚いた」天野はたまらない不快を感じたやうに苦々しい顏して、聲音にも苦味を含んで、「僕はね、笹子さん。二十年來あなたを知つてる譯だか、たゞの一度も、異性に會つてるやうな感じをもつてあなたに接したことはなかつたですよ。あなただつてさうでせう。肥つちよの女、瘦せつぽちの男と、お互ひの目に映つてたゞけぢやありませんか」

「さうか知ら……」笹子はやゝ俯いで、「あなたはをり〳〵いやみなんぞ云つてゐたくせに。……」

「姉さんいくらです？」

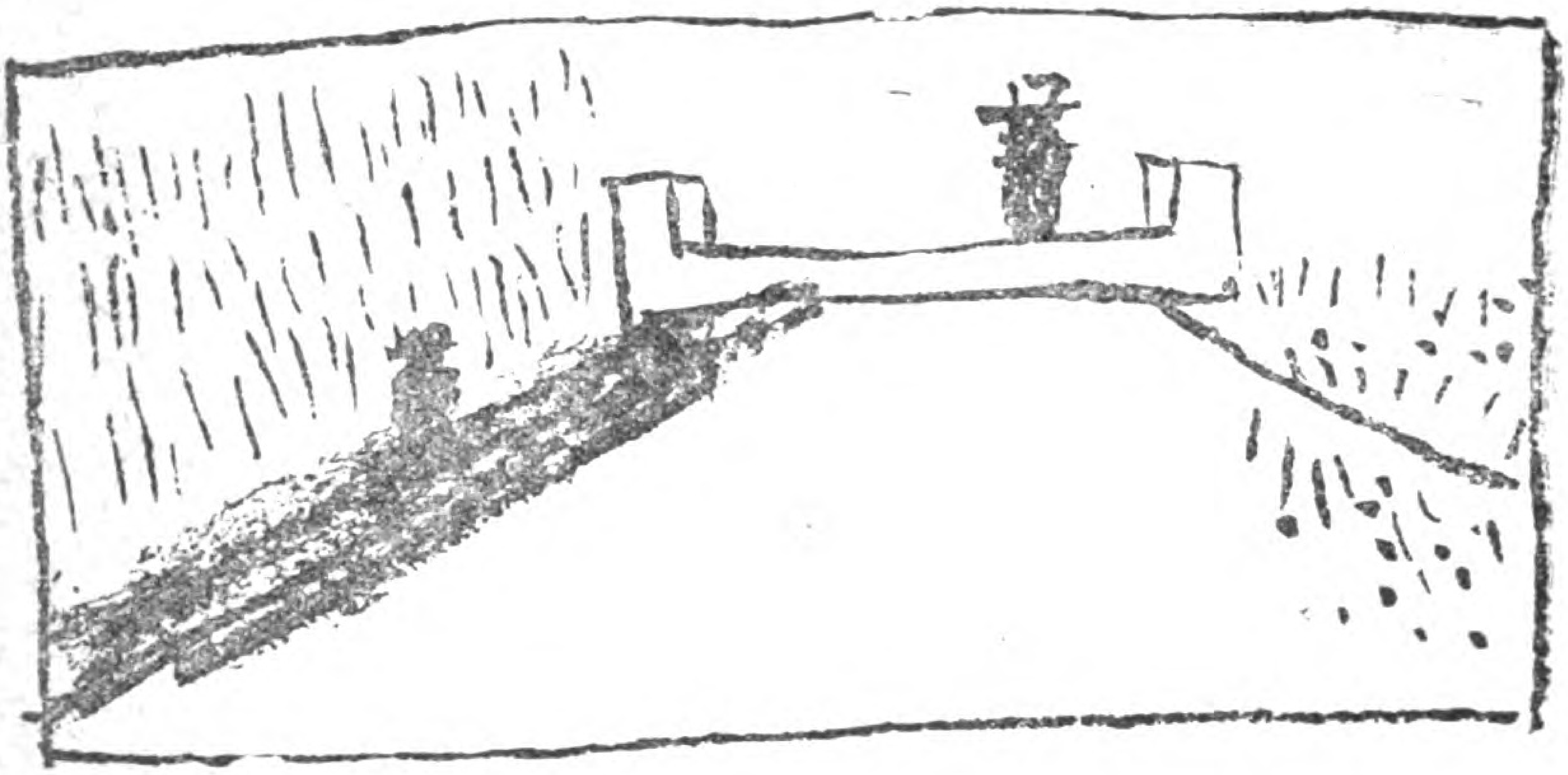
天野は突然高い聲を出して女中を呼んだ。そして勘定を濟ますと、先に立つて外へ出た。

「これでお別れしちや何だか飽氣ないわねえ」と、笹子は云つて、ちがつた道へ向つて卒氣なく行つてしまつた天野の後姿を、暫く路傍に立つて見送つてゐた。

そこには赤いポストがあつた。白衣を着けた看護婦らしい女が二人、大きい方が小さい方を庇ふやうに肩に手を當てて寄つて來て、小さい方が教へらるゝまゝに、ポストへ手紙を入れた

「これで、あなたの手紙はお母さんの所へ着くばかしですよ」と、大きい方が柔しく云つた。

笹子はその聲に耳を留めて、二人の方を一心に見詰めた。



ひと秋の場面

犬養健

一

秋の中ばの日曜の朝だつた。井手の長男の正吉は前の晩、劇關係の青年や女優志願者などのよく出入りする安島(あじま)といふ畫家のアトリエで夜更しをしたので、十時近くになつて目を覺ました。彼は顏を洗ふとその儘庭先に降りて行つた。茶間に入つて遲起きの顏を母に見せるのが、具合わるかつたからである。鮮かな日が濡れた芝生にもう射してゐた。

正吉は明け方にひとしきり激しい雨の音で起された事を思ひ出した。晴れきつた空にその名殘がある。――昨夜のアトリエでの騷ぎは、所謂山の手の邸育ちの彼には異樣な經驗だつた。女優志願の娘達が互ひに戀事のからかひ合ひをしたり、カルタの勝負で往來にまで響きわたる歡聲をあげたりする光景に、彼はすつかり壓倒された形だつた。その場合彼には、安島氏の弟で彼と同じく若

い小說家である杉男だけが獨りだつた。

「正吉。正吉」

椽側に出た母が認めて聲をかけた。

「御飯を濟ませてくれませんか」

「今行きます」

さう答へたが、やはりあのアトリエの放縱な刺戟強い空氣を、今雨上りの澄んだ朝の空氣のなかで頭に浮べるのが、何だか不思議だつた。……昨夜は終ひに正吉までも娘共の揶揄の標的に上げられたのだつた。それはモデルの八重子が樂座から脫けて、長い間正吉の隣に腰かけて話し込んだからであつた。八重子は安島氏の親戚で、或る色町の大きな茶屋の一人娘だつた。——「何笑つてゐるの？好かない！」と彼女が艶つぽく娘共に應酬した「一人でお氣の毒だから、お相手をしてゐるんぢやないの。ね、さうねえ？」そして彼女はその曲線の多い、疲れた美しい顏で正吉を覗き込んだのだつた。さういふ言動には、いかにも離婚した二十六の婦人の持つ、人を不安にする魅力が含まれてゐた。正吉は今それを思ひ返して赧面した。

「正吉。正吉」

と母が又呼んで、パンと紅茶道具とを椽先に運んでくれた。母親のもてなしが多少氣に咎めた。

「昨晩は何處だつたの」

正吉の食事をする傍で、母が栽物をいぢりながら遠慮がちに訊ねた。

「安島さんでした」

「安島さんて、繪描きの方だつたね。繪を見せて頂いたの？」

かういふ折に、正吉の新しい友達仲間を恐しく知つて置かうとしてゐる。

「安島さんは畫家ですけれども弟が小説を書くし、それに安島さんの隣續きに此木(このき)さんていふ雜誌の監督の人が住んでゐるものですから、双方に出入りする人がよく落ち合ふのです」正吉はパンを噛り噛り説明した。

「お前のこの頃の原稿も、その方々のお世話になつてゐるの」

「えゝ、前の雜誌がつぶれたもんですから」

「……藤瀬さんの奥さんもお前がどうしてゐるか、案じていらしつたよ」と母は、正吉の新らしい仲間に對する自身の不安は隱して云つた。「お前、この頃ちつともお訪ねしないんぢやないの？お世話になる時だけなつて、あとは不沙汰ぢやあ、惡いよ」

藤瀬の奥さんといふのは、母の古い友達にあたる文學好きの未亡人で、正吉の文學志望が家庭で問題になつた時に、間(あひだ)で種々とりなしてくれた、謂はゞ彼にとつて恩人の婦人だつた。

「えゝ、二三日うちに行つて來ますよ」

事實あのアトリエに出入してから、藤瀬の家には自然疎遠になつてゐたので、正吉は一言もなく服從した。

「それはお前も自由にしてゐたいだらうけれど」母が庭からの光線を受け、病身らしい内氣な聲で云ふのだつた。「わたしもお父さんがお歸りになると、又夜のお遲い事が續くし、今のうちに休養して置きたいのだから、夜はなるべく早く歸つて來ておくれね。どうしてもお前の物音で眼が醒めると、それから又眠そびれてしまふものだから」

彼女は案外その位で切り上げてくれたが、それでも母子は一寸口を噤むでしまつた。

正吉は腹這ひになりながら、反射の强い新聞を開いた。が、そのなかで文藝欄の日曜附錄のある、L——新聞の來てゐないのが物足りなかつた。

「愛子、愛子」と彼は氣を揃へて大きな聲を出した。「お前L——新聞を知らないか」

「知らないわあ」十五になる妹の愛子が、茶間から甘えた聲で答へた。「龍兄さんぢやあ、なくつて？それよりかお兄さん。龍兄さんがあんたのお机から展覽會の切符とかを、一枚貰ひましたつて、云つてらしつた事よ。お晝から廻るんですつて！」

さう彼女は、高等學校に行つてゐる正吉の弟の龍二の言傳を云つた。この雲もない好天氣に、自分も出掛けるかな、」と考へた。正吉はこの頃家に居るとすぐに退屈するのだつた……

「さう〳〵」母も仲間に入るやうにして、膝元から繪端書を出して見せた。「お父さんからこんなお便りが來ましたよ。愛子さん。お前のも兄さんに見せて御覽」

愛子がもう一枚の繪葉書を持つて馳け出して來た。それは箱根宮ノ下のホテルに滯在してゐる、外國の商務官の病氣見舞に出かけて行つた、彼の父の寄越したものだつた。（正吉の父は役人の出で今は勅選議員をしてゐる。）——二枚の繪端書にはホテルの全景と附屬のゴルフ場とが刷られて、「商務官令孃令息と終日のゴルフにて疲勞。今夜は此處でぐつすり眠るつもり」こんな文句が記してあつた。正吉はその寫眞から、骨格のたくましい精力家の父が運動服のいでたちで、草の色づきはじめた山のゴルフ場を大股に步く樣子を想像した。

「山の紅葉もこれからいゝだらうなあ」正吉は活動家の父に比べて、あまりに病氣勝ちに暮してゐる母を氣の毒に思つた。「お母さんも一つ奮發して、二三泊で出掛けちやあどうです」

「いや〱」

と母は眉をしかめて、言葉に出さず首を振つて見せた。自身の氣分にかまけてしまふ彼女は、かういふ折に相手の氣をはぐらかすのだつた。

二

市ケ谷の外濠に向いた或る細い坂を登つて行くと、頂上に安島氏の住んでゐる角屋敷が見えた。同じ日の午後だつた。大きく採つたアトリエの硝子一ぱいに空の色が濃く映り、杉男の部屋の小さい窓までが窓布(カーテン)で閉されてゐた。留守かなと正吉は思つた。

彼は杉男を上野の博物館に誘ひに來たのだ。博物館には古畫の模本展覽會が開かれてゐて、正吉の家に招待劵が來てゐたからだつた。――正吉には近頃何かにつけて、杉男との往き來を繁くしたい心持があつた。それは勿論藝術の話のいかにも泌々と出來る、この齡の近い友達に對する親しみの情がさうさせるのだが、それだけと云ひ切つては何か足らない、他の形のない原因があつた。

この日も杉男が留守ではないかと疑ひながら、正男はわざ〱寄り道をした事を少しも後悔しなかつた。彼はやはり八重子の事を考へてゐた。午後の光線に充ちた畫室のなかで、安島氏と對ひ合はせに腰かけてゐる八重子を考へた。その澄ました顔、その規則的な息づかひ、その動かさぬ手に持つた手布(ハンカチ)から立つ香水の匂を考へた。――この無邪氣でない想像が、コスモスの叢の脊よりも高く亂れてゐる、門の内に入つて行く彼を不安にした。

畫室の扉の呼鈴を何度も押したが、果して寂つそりしてゐた。そして物音で、庭續きの此木氏の住居から却つて返事

があつた。

「おや」此木氏の細君が格子窓から挨拶した。「安島さんはお留守ですよ。杉男さんも本屋まで行きました。でも直きでせう。畫室に上つていらつしやいまし

柔和で、この家に集まる女達のなかで唯一の愛らしい平凡人である此木氏の細君は、すぐと畫室に廻つて鍵を開けてくれた。其處では、カーテンを閉した陰氣な蒼い光のなかで、十號の畫布の八重子が、案外無心な小さい横顔で、部屋の中央に掲ゑられてあつた。不幸な結婚に懲りたものゝ鋭さや、色町に生活してゐるものゝ氣まぐれな驕態は、その繪の畫因(モティーフ)からは除かれてあつた。

「今日はこの肖像は、どうなさつたのですか」

正吉は塗りたての目新らしい色彩が、ほんの少しゝか加へてないのを訝かつて訊ねた。

「八重子さんが中途で氣分がお悪くなつて、お歸りになつたんですの。安島さんは何だかいら〳〵なすつて、氣晴しに寶立を見るんだつて、日本橋の方へお出かけになりました。でも今夜はお遅いかと思ひますの」

安島氏が飲み場所へ廻る事を、遠慮がちに話すのだつた。

「どうかなすつたんですか」

「え？」

「八重子さんです」

畫架の脇の灰皿に、アトリエに備へ付けた女向きの西洋煙草が何本か消してある。——正吉は疲れると氣のない口付で續けさまに喫煙する、八重子の表情を思ひ出した。不健康だといふ話が却つて彼を悩ましくさせたのだ。

「きつと昨晩、皆さんの遊び事が過ぎたからでせう」細君は愛想よくカーテンを開いて、光線を採り入れたりしながら喋つた。「安島さんはもう、繪の出來上るまではあゝいふ騷ぎは中止だなんて、言つていらつしやいましたよ。本當に恭は恭ね。あなたもお家にお歸りになつたら、隨分お遲かつたでせう」

そんな話をしてゐるうちに、裏口からのつそり杉男が歸つて來た。やはり部屋の無人なのを訝かつた彼に、細君はまた說明役に立つのだつた。

「もう三四度で出來上るつていふのに、さぞ不機嫌になつた事だらうな」杉男が勉強家の兄に同情しながら、彼等と並んで畫布の前に立つた。「……この繪は、兄貴の注文が六つかしいんだね。錆びた色ばかりで濃い印象が出したいんだから」

「でも、それが中々いつてるぢやないか」

正吉はさう云つて、額緣のなかの小さい顏に見入るのだつた。それは實際、顏にも着物にも沈んだ華やかさのみを選んでありながら、全體としては妙に存在の强い肖像になつてゐた。

「うーん。始めは何となく兄貴の繪にしては、控へ目な印象しか受けなかつたけれども――かうやつて見ると、何だか無邪氣に生きてゐるといふやうな感じが、くつきり出て來たね。さう思はない?」

「あゝ。……僕もこの繪は好きだ」

正吉はひと筋に答へた。だがもう夜分は、あゝいふ騷ぎは止めるといふ話だつたな、そんな事にふつと影が淋しく外れたりした。

二人は出かける事にして外へ出た。

「兄貴はもう一枚お八重さんを描きたがつてゐるんだよ。今度はもつと濃厚な、何ていふかな、デカタンな感じの勝つた畫にしたいんだつて、云つてゐたがね。でもお八重さんは母親の手前、さうも家を空けられないつて云つてるんだよ」

「お母さんは餘つ程喧ましいのかね」

さう云つて正吉は、若い頃或る維新以來の有名な政治家に寵愛されたといふ、彼女の母親の傲慢な（さういふ評判だつた）粹らしい風付を想像した。

「いや。割に寛大にしてゐる方だらう。何故つて、本當なら稽古事か何かのほかは、あんなにぶら〳〵外へ出てゐられる身體ぢやあ、ないんだからね。だけれどお八重さんに無理に婿をとらせて、それが別れ話になつて――堪らない厭味な奴だつたんだよ――それからひどい神經衰弱に罹つたもんだから、母親も出來るだけ大目に見てゐるんだよ。身體が癒つたらお八重さんだつて、もう商賣の采配は委される人なんだからね」

「あの人がそんな事を切り廻すなんて、何だか不思議だな！」

坂の上から九段の方の屋根瓦の塊が遠くまで展望される。それを見ながら、彼は變に澄んだ淋しさを胸に感じた。

「――僕は君達と近づきになつて、本當にいゝ事をしたよ」正吉が少時して、何故かそんな感動した事を云ひたい氣持になつて、口に出すのだつた。「君達の仲間に入つてから、趣味でも心持でも、ずつと肥えて來たやうな氣がするよ。仕事の範圍もこれから擴がりさうで、何だか樂しみなんだ。だつて今まではあんまり單調な暮しゝか、して來なかつたんだからね」

それは正吉の云ふ通りだつた。安島兄弟との偶然の交際は、今まで山の手の穩和な家庭生活から一歩も出ずに來た正

吉に、全く異つた雰圍氣を見せてくれた。強氣で、趣味の豐富な生活が好きで、藝術の上でもねばり強い味ひを把んでゐる——さういふ點で共通な性質を持つた安島兄弟に接して、正吉は自分の舊い單純な殼を自然と脫ぎ棄てる心地がした。そして彼の身體のなかの樣々な欲望が、活氣を持つて段々と解放されつゝある有樣だつた。これは二十五の彼にとつて、何か捨身になる事の出來たやうな、幸福な心持だつた。

三

博物館の内では、高等學校の制服を着た龍二をすぐと見つけたが、互ひに氣に入る繪の種類が違ふので、とかく離れ離れになりがちだつた。こんな事さへ起つた。彼等が揃つて或る室に入つて、あちこちに生ま生ましい筆付で描かれた多少好色的な圖面が目に入ると、龍二は初心らしい顏に不快さへ現はして、素氣(そつけ)なく元の室に引き返してしまつた。そして正吉の場所からは、佛畫の部をもう一度見直してゐる彼の後姿が、遠くの角に見えてゐた。かういふのが龍二の性質だつた。

兄弟が再び一所になつたのは、杉男が用事の都合で先に歸つた後だつた。龍二は廣場の泉水のほとりでベンチに腰を下してゐた。泉水は明け方の雨で美しく濡れ、彼等の出て來た本館の高い屋根では百舌鳥がしきりと啼いてゐた。

「それはさうと今日のレー新聞ね」正吉の近づくのを待つて立ち上つた龍二が、思ひ出したやうに云つた。「僕が持つて出てしまひましたよ。失敬！」

彼は制服の懷(かくし)を押へて見せた。

「あゝ、後で見せて貰はうか」

正吉が和らいで答へた。そして二人は、入口の扉をもう閉してしまつた正門の方に足を向けた。

「えゝ……」龍二はどういふ譯か、むつゝりした顔を赤らめてゐた。そして思ひ切つたやうに「Ｌ――新聞にね、今日厭な記事が出てゐたんですよ。それで僕は家から持ち出しちやつたんです」

と云つた。

「どんな」

正吉は弟の言ひ方が變なので立ち止つた。黄葉しかけた大木が頭の上にあつた。

「こんな風の記事なんですけれど」

龍二は狹い出口を通り拔けながら、「無線電話」といふやうな欄を折つて彼に示した。それには「妙な紅葉狩」といふ題で、箱根宮ノ下のホテルへ外國の商務官を見舞に行つた役人連が、先輩の井手氏をも加へて、その晩は塔ノ澤まで下つて美しい女共を對手に、妙な紅葉を愛でながら豪遊した。さういふ記事が、その場の光景を悉しく擧げて、面白可笑しく書き立てゝあつた。

「うむ」

正吉は默つて新聞を弟に返した。足元の道に櫻落葉が散らばつてゐる。それに廣告ビラが混つて汚れてゐる……

彼は自分が不愉快になつたやうな、はつきりしない不機嫌に陷つてしまつた。それは感じ易い子供が裸になつた折に、餓鬼大將の友達から裸體を指して露骨な事を云はれた、そんな場合に感じさうな自己嫌惡に似てゐた。

「溝にでも捨てつちまへよ」

正吉が簡單に云ひ捨てた。

「そんな欄の記事のことだから、あんまり氣にするなよ」

又彼が宥めるやうに云つた。

「記事ばかりが不愉快なんぢや、ないんですよ」龍二が不意に遮つた。「今朝それを讀んだら、丁度お父さんからホテルの消印なんぞで繪葉書が來てゐたんで、正直なところ不快な氣がしてしまつたんです」

今度は正吉が露骨に顔をしかめて見せた。彼自身は記事から受ける不愉快の方に氣を向けて、父の行動から受けるやうな或る感情には、息子としての優しい神經から自然觸れまいと努めてゐたのだ。それを遠慮なく指摘しようとする龍二の潔癖な物言ひが、彼には目立つて粗雜に響いた。

「そんな風に僻るなよ。友達に誘はれて、多勢泊る方に替へる事だつてあるぢやないか」

「……」

「お父さんのやうな生活で、厭な仲間は避けて暮すといふ譯には行かないぢやないか」

正吉自身は父のやうな生活が肌に合はないのだが、今はそれを隠して云つた。龍二が默つてゐるので、小粒な砂利を踏む音が起つた。こんな話のために、こんな寂れた道を選ぶなんて厭だなと正吉は思つた。彼はやはり心の奥で、あまりに病身な、晴れ晴れしたところのない母と、精力家で人情脆い、そしてその爲めに交際もひろがつてゐる父とを對照してゐた。――父の行動に對する漠然とした疑ひが彼にもあつた。それは龍二よりも大人びた實際的な疑ひであるだけに、彼を苦しめるものだつた。だが彼はやはり父を寛大に見たかつた。少くも默視したかつた。弱々しい母親に性的生活の重荷の影を見る方が、むしろ彼の人生に對する空想を暗くする材料としては直接だつた。――さうかと云つて、それを決論としてきめる事も出來ずにゐるのは、彼がやはり母親の子供だからであつた。息子としての優しい神經が、こ

の場合何ものよりも彼を困却した。正吉は曖昧にしか物が云へなかつた。云ひたくなかつた。だが龍二はその曖昧さを誤解して憤つてゐるのだつた。そして正吉のこの頃の出歩きは、龍二にとつては立派に母親に對する冷淡の證據になつた。

「もうこんな話止さうや」

正吉は息を吐くやうにして切り上げた。

「止してもいゝさ」龍二が彼の態度に對する憎悪をありありと見せて答へた。「どうせ話が通じつこないんだからな」

「おやあ俺が、家の事に無神經だつて云ふんだね」正吉もムッとして、押へてゐた不機嫌を一時に現はした。それなら大違ひだ。それよりかこんな話をいつまでもして居なければ、兄弟で氣持が通じないと思ふ方が餘つ程無神經だ。記事を見せて貰つただけで俺には十分だ。（彼の聲が少し慄へた。）お前がお父さんに不愉快を感じるのは自由だとして、（さう云つて彼は、性的な噂話の種なぞに使はれた父に對する、本能的な愛情で胸が迫つた。）……それならば默つて新聞を讀んで、默つてお母さんによくすればいゝ事ぢやないか」

龍二の顔に苦痛があらはれた。彼は新聞を丸めると、癇癪を起して道端に投りつけた。そして泣きかけた。――新聞紙は捨てられた辨當包のやうにころころと櫻並木の間を轉がつて、公園用と立札のしてある砂利溜の傍に、いかにも無關心に止まつた。

二人はそんな狀態で、いつの間にか石燈籠の續いた博物館の裏の道を、ひと廻りしてしまつた。

正吉は弟が可愛想になつた。龍二の思ひつめた顔には、少年の純潔と理想主義とがありありと現はれてゐた。龍二は病身な母親の立場から、昂奮して理想論を云ひたかつたのだが、それがどうしても感傷的にしか言葉に表はせさうもな

かつたので、吃つて躊躇してしまつたのだ。彼は一體正吉の新らしい友達を好まなかつた。先刻の好色的な畫を二人して觀賞してゐる態度も氣に喰はなかつた。其處へ或る場合の夫の遊蕩は仕方がないと觀るやうな口裏を、正吉から聽かされたやうに思つたのだ。そして彼の身體の純潔さが烈しく痛められたのだ。

それが皆正吉には分つた。

「おい。汁粉でも飲んで行かないか？」

正吉は木立の奥に見える、風流らしい造りの店を見つけて優しく云つた。

「厭だ」

と龍二は、俯いた儘さつさと歩いて取り合はなかつた。そして二人は、秋らしい斜めの日差を横から受けた公園の人道を、其邊に來ると急に多い人込みを縫ひながら、音樂の一帶に籠つてゐる電車通りの方に出て行つた。

四

郊外の藤瀬の家では、座敷の前からだら／＼と下つた丘地面の下半部に、夫人の手でダリアが栽培されてあつた。傾斜の盡きた處に小川が流れ、岸には籬が水の上に伸びてゐた。

正吉は川に渡した丸太から這入つた。午後の四時頃で、座敷の高みでは次女の聲樂の練習がしきりと續き、ダリアの群からは姿が見えず鋏の音が漏れてゐた。

「今日は」鋏の音が途切れ、しつこい程濃い花の上から夫人の顔が現はれた。「あんまり珍らしくて、言葉が丁寧になりさうですわ。――いらつしやいまし」

正吉は笑つて帽子を脱いだ。羽蟲が花の周囲で西日に光つて、いかにも爽々した氣持だつた。

「まあ、その程度の怒られ方なら安心した」

「えゝ、その通り。それであなたもさう恐縮してない事が分つたわ」夫人は無雜作な髮をかき上げながら、母親の持つ愛情を見せて答へた。「本當はね。あなたが恐縮なんぞしてゐると惡いと思つて、この間うちからお孃さん達に手紙を頼んどいたんですけれど、あの人達の筆不精と云つたら、又ひどいの。まあ上に行きませう。あなた歸りに、その花を少しばかりお母様に持つて行つて下さいね」

正吉が剪花で埋まつたバケツを提げた。花壇の徑を登つて行く時に、夫人の老けかゝつた髮が灰色に燃えた。

「ずつと丈夫だつたの」

「えゝ」

「お仕事はどんな風なの」

「まあやつてゐます」

「前の雜誌よりも本式なお仲間が出來たとか、伺つたわ」

「あゝ、その話、まだ叔母さんにしてありませんでしたね」正吉は顏を赤くした。

「いゝのよ、いゝのよ。どうせ伺つても、何だか生意氣に見えるだけですもの。……雜誌を持つて來て下すつたのね？」夫人は正吉の四角い風呂敷包みをいぢつて見た。「あなたのを、樂しみにして置かう」

聲をきいて二階の窓から長女の朋子が會釋した。二十の女學生に似合はず面長の緊つた顏立だつた。彼女は作り笑ひをして見せたが、それもその齡らしく餘分に媚びるといふ風がなかつた。英和中辭典が窓枠から食み出てゐた。

「降りて來ない？」と夫人が云つた。
「ぢきに。今大變なの」
そして忙しい素振を悧巧に見せて、又机に俯いてしまつた。赤い辭典だけが目に當つた。
だが正吉と朋子との間には、何となしに窮屈な感情があつた。第一朋子は甘たるい事が性質的に出來なかつた。この事は從兄妹とさう違はない、そしてもつと光澤のある親しさゝへ持てる二人の間では、何となしに機械の自然な運轉に油の乏しいやうな變なものになつた。正吉は自然戯れ好きな妹の慶子を冗戯の相手にした。
朋子は讀む本を正吉に相談するといふやうな事さへ、滅多にしなかつた。その方はむしろ、學校友達の間の呑氣な流行に從つてゐた。彼女はアナトオル・フランスを一番好きだと正吉に云つた事があつた。勿論それは女學生らしい戯作癖の手傳つてゐる事は分つたが、それでも正吉には、智的な傾向に饒かでない自分に對する、一つの傍觀のやうに受けとれるのだつた。それは若い者同志の誇張された可笑しな感情だつた。
正吉の方でも、氣付いてゐながら同じやうな素氣ない事をした。——だが例へば夫人と差し向ひになつて、順良な息子のやうに苦勞話の相手をしてゐる場合に、それが朋子に對する或る意地惡から出てゐるやうに、ふつと思ふ事があつた。彼はその想像の若々しさに氣を奪はれるのだつた。その癖朋子は向うで慶子と面白さうに遊んでゐるのに……
——椽先で夫人と無駄話をしてゐると、稽古が終つて聲樂の先生と慶子が出て來た。先生は三十を少し過ぎた、起居のはき／＼した、見るから健康さうな獨身の婦人だつた。慶子は姉と反對の丸顏で、眼と眼との間隔の廣い、それが又子供らしい魅力になつてゐる。
「さあ、それではお客さんの御馳走を見て來ませう」夫人は地續きに台所へ廻らうとしてゐた。「おゝさう／＼。正吉さ

んに取つて置きのお話があつたわ。この間ね、わたしの留守に大變な議論があつたんですつて。ねえ先生、さうでせう?」

「私はたゞ謹んで伺つたゞけですわ」

先生は何の譯か、淺黒い、肉付のいゝ顏を急に赤らめた。

「いゝえ。どうもさういふ報告ぢやなかつたわ。正吉さん、本當に恐れ入つてしまつたの。だつてどうでせう、慶子までが一緒になつて、結婚論をさられ、晩の十時頃までしたんだつて云ふぢやないの」

「本當にやつたのかい。慶子さん」正吉が笑ひ出した。

「お止しなさい、正吉さん。先生に惡いぢやないの」慶子が眞顏で、その特徴のある眼差を正吉に向けた。

「まあ慶子さん。わたしなんぞ、何も申しませんでしたわ。ほんとに唯謹聽してゐたゞけですわ」先生は眞赤くなつて、幅廣い胸から音量の出過ぎる聲を狼狽させた。「それよりか、もう朋子さんのお稽古を始めさせて戴きますわ」

「何?どうしたの」朋子が二階から降りて來た。

「今あなた方の議論を正吉さんに聞かせてゐたところ」

「いけません。慶子さん」朋子は可笑しな位一つ一つの詞に力を入れて、いきなり慶子を叱つた。

「わたし何も云やあしないわ」慶子が大きく眉を寄せて見せた。「わたしだつて、云つたら困るんぢやないの」

「みんな、餘つ程困ると見えるのね」夫人が笑ひながら立ち上つた。「ぢやあ正吉さんは慶子と遊んでゐて下さい。そこらを一緒に歩いて來たらどう、お厭でなかつたら。――家のなかは喧ましいでせう?」

「えゝ、さうしませうよ」と慶子が誘つた。

「歩きながら今の話を聞かうかな」

「慶子さん、いけなくてよ」

朋子が短かく注意した。そして済まして洋琴(ピアノ)の前に立つた。

正吉と慶子とは坂地面を勢よく降りて行つた。黒い軟土に氣持のいゝ足當りがあつた。

「慶子さん」もう一度、譜を持つた朋子が廊下に現はれた。「どうしてもいけなくつてよ」

「云やあしない事よ」

姉とは反對に長く語尾を引きながら、慶子が鶴の下りはじめた前の田圃に向つて大聲に應へた。教練された音聲が遠くまで屆くのだつた。

少時して二人は、川べりの家の續いた道を七八町散歩してから、再たもとへ引返してゐた。家々で培つてゐる花に集つた羽蟲が、先刻よりも空の中間にのぼつて塊つてゐた。彼は慶子をつかまへて、無理に結婚論といふのを話させたのだ。そして慶子は甘えるやうに、姉の不平を訴へた。

「お姉さんは駄目よ」

「何故」

「だつてお姉さんは一番熱心に喋りさうだつた癖に、結局皮肉なのか喩(たと)へなのか、分らなくして了(しま)うんですもの」

「そりや無論さうさ」正吉が鋭く入れた。

「なぜ?」

「朋子さんはさういふ時に裸になれない人なのさ、なれたら御結婚してもいゝよ」

「まあ、正吉さんもさう思ふ？」慶子は女學生らしい同感を籠めて、正吉の背を柔かく押へた。「えゝ、わたしもさう思ふわ。お姉さんはいつだつて、わたしに正體を見せた事ないわ」

單純でない或る反感が、正吉の胸で唆（そそ）かされた。彼は話を外らせた。そして故意と先生の場合をしつこく問ひ詰めたりした。

「きつと默つてゝね」いかにも大切な事を明かすのだといふやうな物々しさが愛嬌になつた。「これあね、先生もいづれ結婚なさる氣なんですつて」

「あの人がッ・さうかなあ」獨立した生活に自足し切つたやうな、その氣持のいゝ動作を正吉は頭に浮べた。

「先生はね、あのAさんね、（これはもう四十に近い、名を言つた、教養のある女流音樂家だつた。）あんな立派な方でも獨身でいらつしやると、人としちや隨分變なところがあるんですつて。お弟子さんのお姉さん達が花など持つて行つてあげると、どうかした折には氣味の惡い程お喜びになつて、お弟子さんをいきなり抱き締めたりなさるんですつて。さうかと思ふと雨の日なんか、淋しくつて淋しくつて仕方がないつて、何時間も話相手に留めたりなさるんですつて。先生はそんなところを御覧になると、自分まで先（さき）の事が心細くなるつて、仰るのよ。――まあ、あのきちんとなすつたAさんにそんな事があるたんて、わたし想像もつかなかつたわ」

その話は何だか、正吉の想像に陰氣に映つた。髮をほどき化粧を落して、小皺を露はにしてしまつてゐる中年の婦人の私室を覗いたやうな、何か生理的な、清潔でないやうな印象を受けた。二人は川の丸太のところに跨つて佇んだが、雲が低く掛かり、蘆の陰の流れが鼠色になつて、何となしに快活な氣分でない氣分に包まれた。

——座敷から先生に聲をかけられた。

「お電話です。安島さんと仰いました」

正吉は花壇道を駆け上つて電話口に出た。

「誰だか、當てゝ御覽なさい」

張りのある浮き浮きした聲がいきなり耳元で聞えた。それは思ひがけなく八重子だつた。

「分ります」あまりに豫期がないので、正吉はそれに應ずるだけの語調が出なかつた。

「何だか丁寧ね。——皆に頼まれてさつきお家へかけたの。さうしたらそちらだつて分つたのよ。いけなかつて？そちらこわいお家？」

「いゝえ」正吉は笑つた。

「誰方が其處においでになるの」

「居ませんよ」

壁の向うに朋子が默つて聽いてゐるやうに思はれた。

「そんな事どうだつていゝけれど、稿がね、明後日ですつかり済みますの。だから暫らくわたしも遊べませんから、安島さんへいらつしやいな。御馳走があるさうよ」

「明後日？ えゝ行きませう」

「ぢやあ、きつと行つて下さいな」

そして切れさうになつた時、正吉が不意に言葉をつないだ。

「行くつて、今何處からかけてゐるんです」

「自家なの。此處は大變なところなんですよ」八重子は一人で甲高く笑つた。「硝子戸を開けたらそれこそガチャ〳〵なの。聞えますか？」

彼女が悪戯らしく硝子戸といふのを開けたらしかつたが、何も聞えなかつた。たゞ壓搾されたやうな冴えた想像が正吉をかすめた。話が途切れた。そして物足らないうちに電話が終つた。

だが思ひがけず耳にした八重子の一本調子、その艶つぽい勝氣が、今の川べりの浮かない話のあとで、正吉に殊更活々した彈力のある印象を與へた。それがいかにも胸の空くやうで快かつた。八重子は身體にあり餘つた生活力を持つてゐる。八重子はその力で、明日の事は明日でいゝとしてゐるのだ。正吉は頭のなかでさういふ風に八重子を創り上げて、一人でその魅力に囚へられてゐた。

慶子が黒くなつたダリアの間を縫つてくり登つて來た。かういふ背もない郊外の景色に取り卷かれた、西洋趣味の家庭と八重子との釣合が、いかにも距離があつて適はなかつた。だが正吉はそれだけに物悩ましかつた。薄暗い椽先の空氣のなかで、もう一度あの浮浮した聲の特色を繰返して見たかつた。そして彼は八重子が電話を引き受けた心持をさぐらうとして、落着けなかつた。

「さつきの取次の方は、だん〳〵聲のせり上る方でしたのね」先生が後で笑ひながら批評した。「私までつい釣り込まれて、お答に困りましたわ。——時々あゝいふ物言ひの方がありますわね」

五

燈のついた特室では、安島氏のモデルの勞をねぎらふ馳走と八重子の氣前のいゝ振舞とが合併して、卓を狹く使ふほど亂雜に食器が竝べられてあつた。脂ぎつた支那料理の皿は突つかれて汚れ、酒の匂が發(た)つた。其處へ晝間から本讀みをやつてゐた此木氏の連中が入り込んで相伴したので、部屋は一層賑やかさを增した。藝術家風の放縱と自由戀愛風の放縱とが入れ混つて、正吉を刺戟するのだつた。

安島氏は煙管(パイプ)に強い煙草をつめ、時々出來上つた繪を醉つた眼で振り返つてゐた。骨格の太い精力家の安島氏は、この二月(ふたつき)ほど續けて仕事に興が乘つてゐた。彼はまた落着かぬやうに立ち上つて、壁の隅にこしらへた靜物の配置をいぢつたりした。

此木氏は別の卓で若い者達と負けん氣に演劇論を戰はしてゐた。同じ時代の巴里生活から受けたボヘミアン趣味が安島氏と一致して、二人の半共同生活は大變しつくり行つてゐた。——女優志願の娘達は妙に一列に塊つて、傍(はた)に通じない話をこそ〳〵と續けてゐた。だが他から話しかけられると、急に愛嬌をこめた高飛車な應酬をしたりした。

杉男は滿腹して座を替へ、大きな古畫の復製を一枚一枚めくり初めた。正吉と八重子との間の椅子が、そのために空いた。二人は自然顏を見合せた。

「………」

「この間の電話ね」八重子の眼眸に動いた惡戲に追ひ立てられて、正吉の方から口を切つた。

「え?」

八重子が聞えない表情をして、その機會に空いた椅子に移つて來た。彼女は醉つて、一層皮膚が透き徹るやうに美しかつた。繪のために結つてゐた支那女のやうな髪を壞して、ふわ〳〵した柔かい下町風の束髪に直してゐた。彼女は

つて見えた。發散してゐる熱氣が正吉に感ぜられた。

「取次いだ人がね、あなたの聲をせり上る聲だつて、感心してゐましたよ」

「適評だね」と安島氏が云つた。

「お互ひだわ」彼女は大きい息をして、襟の派手な色を揺れさせた。「あの人の聲だつて大した事はないわ。あれは又妙にはき／＼したもんね。あれで女中さんなの？」

「いゝえ、先生ですよ」

「先生？家庭教師？」

「どうして。音樂の先生ですよ。演奏會なんぞぢやあ、なか／＼花形なんですよ」

「あゝ音樂家？音樂家ならわたしも澤山知つてるわ」

「本當かい？」煙管（パイプ）のために片眼を細くして、床を往き來してゐた安島氏が口を出した。

「本當ですとも！わたし以前ね、松原さんて女の方があるでせう、歌を唱ふ、あの方のところへ譜の讀み方を教はりに行つてたんですよ。長唄の若い連中で、一時そんな新らしい事が流行りましたの。――そのお宅でいろんなお仲間に會つたわ。その方は何て方？」

「吉田つていふんです」

「吉田みわ子？」

「えゝ」

「知つてるわ」すら／＼と尻上りに答へた。

「おい〳〵本當かい」酒のまはつた安島氏が又口を入れた。

「一々五月蠅いのねえ」八重子も剽輕に眉を顰めて見せた。「えゝ吉田さんなら松原さんの相棒だわ。研精會へふたり誘つた事があるわ。――さうお？偶然ね。今度會つたらあなたの事云つて見よう」

正吉が曖昧な顏をした。

「褒めてあげるんだからいゝぢやないの！」

「おい」肖像の前に立ち止つた安島氏が振り返つた。「この繪は、やつぱり暮まで離すのは厭だな」

「さう？」八重子は何故かぼかした返事をした。

「暮になつたらモデルを使つて一枚肖像をするから、さうしたら渡してやらう。それまでは惜しい。さう云つて見てくれ」

「さう？でも……」八重子は、話の形をはつきりさせるのを躊躇してゐた。「それぢやあ少し惡くないかしら」

「何とか畫題を、わざと裏に書いといてやらうかな」安島氏がそれには答へずに、苛々と云つた。「某家令孃の肖像はどうだい。――お八重さん。それだと好都合な事があるだらう？」

安島氏は、氣に入つた繪をすぐに手離す不機嫌を隱して、そんな何か嫉がらせらしい事を云つてゐた。

「えゝ結構よ」八重子には多少利き目があつた。「お白粉氣のない顏に描かれちやつたんだから、「令孃」で似合ふわ」

「繪を離すんですか」

これから秋雨が畫室の硝子をはたくといふのに、その畫の失くなる事は辛らいと思つた。

「あゝ、さうなりさうだ」

「どういふ人ですか」

「わたしの知合」八重子が済まして返事を繕つた「自家の御贔負なの」

いかにも何氣なく云はうとしてゐるだけに　正吉には空々しく響いた。

此木氏の卓で酒が盛んになつたので、彼は調子の外れた心持に抵抗するやうにその仲間に入つた。ジヤンケン飲みといふのが始まつて、正吉は何杯も負けて强いられるのだつた。八重子は安島氏を相手に、土地の猥褻な茶屋の噂をしきりと早口に饒舌り續けてゐた。それが彼の存でいかにも遠々しく聞えるのだつた。此木氏の若い連中がなか〳〵離さないので、やがて彼の顳顬がヅキ〳〵と烈しく打つて來た。

「おい、正吉さん。この間話した繪の本ね、部屋から出して置いたよ」

杉男が外す機會を與へるやうに聲をかけた。――正吉は古畫とか陶器とかいふものゝ觀賞を、安島氏から影響されて、熱心になり初めてゐた所だつた。

「あゝ。その棚の二段目にある」八重子との話を切つて、安島氏が顔を擧げた。

「そんなに飲んでいゝの」振り向いた八重子の聲が、やはり冷靜に聞きとれた。

「二段目でしたね。ありがたう」

正吉が返事を外して、安島氏に聞き返したりした。――本を眺めて冷めてやる。これは眞面目なんだ。醉つちやゐないぞ。そんな事を考へながら、彼は書棚の方に立ち上つて行つたが、思つたよりも胸が悪くなつてゐるのに氣付いた。そして彼は本の重みを手に受けると、その儘長椅子――いつも裸體のモデルが長々と横になる、腿の青い長椅子に腰を落してしまつた。

――火照つた顔があちこちに殖えて、骨牌の一群と將棊の仲間とに分れた。だが、正吉はやはり隅の長椅子に身體を伸した儘、後頭を肘掛にあてゝ仰向いてゐた。彼はさうやつて部屋の騒ぎを傍觀したかつた。電燈が近づく煙草の烟を受けながら、白々と天井から下つてゐる。それが何となしに、醉つても騒ぎ立てるところまで行かない彼の感情に調和してゐた。

「疲れたから拔けてよ」

八重子が透つた聲で斷ると、正吉の前の椅子に來て腰を下した。そして息をつきながら、例の西洋煙草をとつて氣拔けしたやうに吸ひはじめたが、血行の目立つてゐる唇からもくり／＼と出る小さい白い烟が、正吉には非常に美しく對照して感ぜられた。彼は珍らしいものゝやうにそれを眼近に眺めてゐた。

「正吉さん」骨牌の卓から杉男が思ひ出したやうに話しかけた。「君はトランプはいつもの一種類しか知らないの」

「あゝ、知らないね」

「花はどうだい」

「花か。花も敎はつたが、忘れちやつた」

「花は知つてゝいゝね」杉男は札を考へ考へ選びながら、唐突に强いた。「もう少しあゝいふ、何て云ふかな、身を持ち崩したやうな一面があつてもいゝな」

「杉男君は獰猛だよ」

將棊の此木氏が、杉男の强氣に對する好意を含めてさう批評した。

「どういふ事かね」此木氏の對手になつてゐる安島氏が杉男に振り向いた。

「つまり、今の正吉さんの書くものは、あゝいふ特色としてはいゝと思ふけれども」杉男が落ち着いた、親しみのある笑顔で説明した。「今云つたやうな一面も持つた方が、もつと複雑なものが書けると思うんです」

「小さく澄んでは恐いと云ふ意味かね」

「まあさうです」杉男は同じ微笑を正吉に向けた。「廢頽といふと何だか弱々しく響くけれども……つまり人の生活と繋がりのある仕事をしようといふほかに、もつと情緒を汲み取る方でも後へは退かない、といふやうな處があつてもいゝと思うんです」

「うん」安島氏は首肯いて、正吉を辯護する方から物を云はうとしてゐた。「しかしさういふ世間知らずのために、感覚が返つて新鮮な場合もありさうだね。他人の氣の付かないところに敏感に氣が付くといふやうな……」

そして安島氏は、日本の或る作家の初期の作品に含まれてゐる鋭い觀察力を解剖して見せるのだつた。

「まあ待て、待て」と、正吉が冗談ともつかず、昂奮して來て杉男に云つた。「今に驚くほど持ち崩すかも分らないぞ」

「何だか大變な話ね。なあに？」八重子が不意に正吉の方に身體を傾けた。「身を持ち崩すつて何よ」

「お八重さんに講義して貰へつて云ふ事らしいね」安島氏が揶揄した。

「えゝ、えゝ、有難う。せい〴〵監督してやるわ。――正吉さんほんとに道樂する氣？お止しなさいよ」

「おい、おい。僕は女の事までは云はないよ」杉男が案外真顔に言譯した。

「構はないさ！」正吉は安島氏の前で、自分の思つてゐる事を存分云つてしまふ快感を感じてゐた。「僕を解放するやうな女が出て來たら、何とも分らないさ。僕の周圍はあんまり窮屈なんだからな」

さう言つて、朋子の事が彼の頭を通り過ぎた。

「それあいゝかも知れないぞ」安島氏が醉つた大きな眼をして、年長者らしい笑顔をぐつと側向けた。そして不意に消えた、溫かみのある聲を出した。「だがそいつは靈魂の冒險だからな！」

正吉は酒の頭で何となしに感動した。自分の持つてゐるものが非常に若い、そして價値のあるものだと氣付いたやうに思はれたので……

「何だかいよ〱大變な話ね。もうお止しなさいよ。ね！」八重子が前よりも正吉を覗き込むやうにして、愛の匂ひする位に屈んで來た。帶がきし〱鳴つた。それは流產した事のあるといふ彼女の細つそりした身體を想像させる、艶めかしい、彼を不安にする音だつた。「わたしそんな風になつた正吉さんは嫌だわ。何だかさう思ふわ」女優達が譯わからずに囃し立てた。「あら、本當よ！」

「お八重さんは君の若いたちのを見たがつてゐるんだよ」安島氏が緩和するやうに、正吉に執りなした。「それがつまり先刻云つた、自分にない性質に對する興味といふところかな」

女達が强請（せび）つて、皆が一所になつて出來る遊びを始める事にした。だが何をやるといふ事で、又跳ね上るやうな騷音がひとしきり續くのだつた。正吉は長椅子から起き直ると、咽喉が甚く渇いて來たので、水を飲みに部屋を出て行つた。薄暗い廊下の突當りが階段になつてゐて、その手前に西洋風の洗面場がある。廊下の明りは、其處の二三間ほどの窪みから及んでゐるのだつた。

彼は棚にある洋杯（コップ）を借りて、ゴクリ〱息をつかず飲んだ。そしてまだ生醉のはつきりしない額を、蛇口にあてゝ水を掛けてゐた。寢室から出て來る足音がした。正吉は身體を曲げた儘、何といふ事なしに胸を躍らせた。やはり八重子

だつた。彼女は部屋へ振り返つて、何か確かめてゐた。

「おや、正吉さん。何してゐるの。もどしたんぢやないの」

「いゝや」

「そんなに屈んで、驚かすぢやないの」

そんな事を云ひながら、二人は電燈が頻とすれ／＼にある、妙に明るい狹い場所に落ち合つてしまつた。

「胸燒けするんでせう。お冷やを飮むといゝわ」

「今飮んだところです」

「あゝこれ？汚いこと」八重子は美しい齒並を見せて笑ひ出した。「これは杉男さんの揚枝を使ふコップぢやないの」さう云ひながら、彼女は別に濯ぎ直しもせず殘りの水を飮んで見せた。そして强めも弱めもしない笑顔を、故意と正吉に突き合せてゐた。だが或る隔たりを常に置いた上で、さういふ事をして見せるのが、正吉には返つて酷く感ぜられるのだつた。正吉は絕えず或るイリユージョンを、八重子に持つて此處へ來てゐる。そしてそのイリユージョンは彼女の氣紛れな言動で或る程度まで滿たされながら、それ以上の變つた事は何事も起らないのだつた。唯更けた時間が經ち、畫室のなかで何か時計のやうにカチ／＼働いてゐる、白々した夜氣を感ずるばかりだつた。彼は息苦しかつた。彼はその壁を一重破りたかつた。

「二階へ行つて柿の籠をとつて來なくつちや」八重子は柱鏡を覗いて、兩手で上氣した頰を凝つと押へたりした。

「行つて來てあげませう」

「いゝのよ。あなたぢやあ分らなくつてよ」

「ぢやあ一所に從いて行きませう」大膽にさういふと、正吉の眼が自然睨むやうな風になつてしまつた。
「お止しなさいよ。好かない」彼女は敏感にそれを見てとつた。「廊下がそれこそ見通しぢやないの」
「構はないぢやありませんか」平手で敲たれたやうな表情をして、もう一度押強く繰り返した。「從いて行きますよ」
「あなたいけなくなつてね。それよりか今夜歸り途、一所に歸りませうよ」横目で襟を合せながら、鏡のなかの自身に氣を取られてゐる様子をした。「ね、それでいゝでせう」
「そんな事駄目です。どうせ誰かゞ一所になるに、定まつてるぢやありませんか」
「なつても町子さん位だわ。町子さんならいゝぢやないの。あの人穩和しくて何も云やあしないわ」矢張り鏡に突き付けた顔を離さずに云つた。「あなたほんとにいけなくなつたのね」
「僕はどつち道、今夜は早く失禮するんですよ」短い時間に物を言はうとして、正吉は焦立つた。「夜更し續きで家に具合がわるいんですからね」
實際眠い、そして彼女に一歩も進めなかつた空な心持で歸り着くと、家が陰氣に寢鎭まつてゐる、それを考へると彼は興も醒めてしまふのだつた。
「わたしだつて同じ事だわ。それで結構ぢやないの？大丈夫、あなたより智慧があつてよ。ね？」
八重子は正吉をあしらひながら、上手な眼を据ゑて、口で氣輕な接吻の眞似音をたてゝ見せた。そして着付を直すと出て行かうとした。
正吉が兩肩を押へて遮つた。新らしい息を呼吸したかつた。彼は例の睨んだ眼付の儘彼女の薄い脣を引寄せて、粗々しく接吻した。「厭あね」彼女は眼を外らせて笑つてゐた。正吉がもう一度強く接吻した。そして離さなかつた。すると

八重子は息のつまる表情をした儘睫毛を落し、上唇を力なく擧げ、首を伸びし、全く弱々しく受働的になつてしまつてゐた。正吉はその動作を意外に思つた。どうしても自分より優越を保つてゐるとしか思へない、一つ年上の、氣まぐれな情熱を持つた、離婚した女と急に位置を顚倒した心持に驚くのだつた。だが到頭壁を敲き捨てた。――さう思つて、二十五の彼の生活慾が、全身で、それ自體喜んでゐるやうに感ぜられた。

八重子が何事もなかつた身振で竹籠を提げ、いかにもその商賣らしい足捌きで階段を馳け降りて來た。化粧し直して來た事が正吉に分つた。――「まだ其處にゐたの？さあ彼方へ行つて、面白い事して遊びませうよ」

そして柿を賭にした騒々しい遊び事が、それから二時間近くも續いた。

皆が歸り仕度をしたのは十二時近かつた。玄關で大勢がゴタ〳〵と履物を選んでゐる間、身體の大きな安島氏が手を伸して、電燈の笠を三和土へ向けてゐた。書室に籠つた煙草の烟が逃れて來て、明りの屆く境目に渦卷いてゐた。

「お八重さんはどうする？俥を云つてやらうか。譯はないよ」

「えゝ、わたし下のツーリングへ行くわ。だけれど坂が暗いから、正吉さんに從いていつて貰ふの」

安島氏が電燈の横で、眼を瞬つて二人を見比べた。それはモデルの或る姿勢をつかんだ時のやうな、鋭い、そして興味を含つた眼付だつた。

「少し仲が好過ぎる事？」八重子がすぐと遣り返した。「でも、町子さんにも乘つてつて貰うんだからいゝわ。町子さん御一所に行きませうねえ」

彼女はさう云つて、町子といふ十九になる耳隱し娘を誘つた。

しかし往來の岐れ目で、醉つた影法師がぐす〳〵塊つてゐるうちに、段々臆劫になる者が出て來て、その儘八重子の

車に同乘する事になつた。俳優連が前の席と運轉臺に乘り、餘つた娘たちはそれらの膝に快活に腰掛けて走り出した。

八重子は自分の膝に乘つた町子の脊に額をつけながら、この混雜が快いもの〻やうに眼を閉つてゐた。だがさうやつてゐると、彼女は頰から口元にかけての特種な美しさを失つた。それがいかにも、彼女が氣力で保つてゐる事を思はせるのだつた。車が夜店の終つた大通りへ出て、兩側の街燈の白熱瓦斯が强く降りか〻ると、その印象は一層露はになつた。

「晝でも夜でも、牢屋は暗い――！」男達が「どん底」の劇の歌を合唱して、迅く走つた。

「お止しなさいよ。監獄自働車のやうぢやないの」町子の笑ひこけて留める聲が、その歌の合間に應ずる臺詞のやうに聞きとれた。

八重子が吃驚したやうに眼を見開いた。そして彼女の魅力を恢復した。

「もう當分畫室へは、遊びに行かれないんですか」正吉が、やはり自分の膝で饒舌つてゐる娘の陰で訊ねた。

「さうねえ、これから暮にかけて忙しいから」

「すると、もう一枚の繪はどうなるんです」

「お正月一ぱいは駄目だから、まあ二月の中頃ね。それもこんなに吞氣には出來ないわ」

「ぢやあ、暫らく會へないかも知れませんね」

「來月に入つたら一日ぐらゐ、安島さんへ行く日、こしらへるわ。あなたはその時分東京なの」

「多分」――その頃になつたら畫室の光線が薄らぐだらうな、そんな事を考へた。

「旅行に出るとか、先刻云つてたぢやないの」

「え〻、でも五六日です」正吉は事實、安島兄弟からの影響で頭は肥えたが、何となしに落着きを失つてしまつたの

で、旅に出て物を書き上げる氣になつてゐた。又さういふ淋しい退屈な位置に、自分を置いても見たかつたのだ。彼は思ひ付いて、

「旅行先から、何か名物でも送つてあげませうか」と云つた。

「うん！」

八重子が聲にあらはして、打切棒に首肯いた。傍の町子がクスクス笑ひ出した。

「おや可笑しい事！」八重子はとぼけた顔を向けた。「あゝ、閉口してゐるのね！」

「閉口しやしないけれども、うん、なんて云うんですもの」好人物の町子は、愛嬌のある前歯をすつかり出して笑ひ續けた。「さうお、とても云はなくつちや、映らないぢやないの」

「さう！覺えて置きませう。——ぢやあ、さうお！」

八重子が身動き出來ない箱のなかで、艶つぽい作り聲を張り上げた。それは非常に美しい、そして身振のある響きを持つた作り聲だつた。

「わたし隨分精悧でせう。驚いてしまふ！」彼女はそれでも赤くなつて、庄吉の顏色を覗つた。

「何だかその反對に見えるな」

「お世辭ぢやないの」

「お世辭ぢやないさ。僕は君の活氣が好きなんだ」さう云つてしまつた。

「さう！有難う」彼女が神妙な笑顏を見せた。「わたしね、自分の考へてた事があんまり通らないんで、大變負けん氣になつてしまつたの。でもそれで、本當に身體を壞したわ。この頃少し呑氣になる氣が出て來て、かうやつて遊ばして貰

つてゐるけれども、やつぱり同じだわ。三十前の癖に仕様のない話ね。先でどういふ事になるんでせう。すぐと疲れて、何でもない事に憤つたりしてしまふの」

だが車が墓地の冷たい並木のなかを走り抜けた。彼女は言葉を切り、神經質に墓石を見まいとした。正吉の家に近づいた。そして霞町で二人程降りた。

「僕も此處いらでいゝんですよ」自家の門前なぞで止められては目立つので、正吉が中腰に云つた。

「もう少し」八重子が正面を見透かした儘、正吉の脊を押へた。そして早口に續けた。「さうねえ。……あなたに長唄だの踊だのゝ切符を、時々送つてあげようかしら。わたしそんなものを始終義理で貰はされるんですよ。氣の向いた時だけ來て御覧なさいな。わたしはどうせ顔を出してゐますから」

「貰はないでも、自分で出掛けてもいゝな」正吉は一寸拘泥した。

「いゝえ。わたしの送つた時のにいらつしやいよ」八重子が何故か打消して、頭からさう強いるのだつた。

正吉の家に曲る路角で降して貰つた。空いた彼の席がガヤ〳〵と埋まつた。後ろの窓から剽輕な美しい眼が挨拶した。――車が去り邸町の月明りが殘つた。固い地面に立つて正吉は急に氣拔けした。彼はあの小さい生き物に有り餘つた情熱の程度を、もう一度面と向つて糺したいやうな、疲れた衝動を感ずるのだつた。

六

十日ほどして藤瀨の家を訪ねた時、すべての様子が變つてゐた。砌石の上に縁を縮らせた紅葉が溜り、庭の木戸を隠してゐたコスモスは拔かれて、土が新らしく平らされてあつた。そして西日が穩かに落ちた後だつた。

夫人は留守だつたが應接間に入つた。襖の開いた次の間では、娘達が先生を中にして譜を展げながら、しきりと記しを附けてゐた。先生は時々片手でピアノを打ち、肝要な斷れ斷れを歌つて見せては、その說明に戾るのだつた。

雨戶がもう閉められて、電燈が照つてゐた。正吉は卓にある西洋の音樂雜誌を展げて稽古の濟むのを待つた。が、往來から入つて來た眼で、急に黃ろく照らされる頁を見るのが臆劫だつた。

娘達が這入つて來た。何となく話がはずまなかつた。快活な時と浮かない氣分の時との差の激しい正吉にとつては、かうい場合西洋流に話の賑やかな夫人でもゐないと、始末がわるかつた。

「先生は？」――正吉は四人になつて、この家で敎はつた麻雀でもしようかと考へた。

「わたしの机で手紙書いていらつしやるの」と朋子が答へた。

「今日はね、お母さんが他所へお招ばれだから、先生に殘つて戴いてゐるの。――この間先生と二人で、帝國ホテルへ行つたのよ」

さう云つて慶子に、意味ありげに間隔の廣い眼差を正吉に据ゑた。

「お儞行ねえ、慶子さん」朋子が無關心を裝つて、窘めるやうな事を云つた。

「行つてどうしたんだい？」

「何でもないの。……たゞね」躊躇してゐた慶子が正直に云ひ足した。「いつかあなたへ電話かけて來たつていふ人を、見たの」

「ふーん。どう云ふ處で」

全然音沙汰がないので、正吉は固い表情をした。

「演藝場でよ。鬪舞會の童話の踊りがあつたの。わたし達が並んでゐたら、その人が先生の席へ來て、大きな聲で挨拶してたわ。あなたの事も云つてたわ」さう云つて慶子は、娘らしく羞むだ感情の吐け口を姉に向けた。「もう驚いてしまつたのねえ。お姉さん」

「お止しなさいよ。いゝぢやないの」

朋子が正吉と眼を合せまいとして、五月蠅いやうに叱つた。

「正吉さんは一體あゝいふ人をどう考へてゐるの？」だが感情家の慶子はなか〳〵肯かなかつた。

「別に悪い人とは思はないね」何といふ曖昧な答だらう。

「ぢやあ、わたし達と同じやうに、あゝいふ人とも平氣で話が出來るの？」

「出來るとも」

清々した。

「おゝ、厭だ！」慶子が大きく息をひいて、澄んだ、半端な、烈しい聲をたてた。「おゝおゝ、厭だ」

「慶子さん、自分の知らない人の事をそんなに云ふの、お止しなさいよ」朋子がやはり、自分の考は隠して云つた。

「まあ何て事！正吉さん。ひと眼見たつてどういふ人だか分るぢやあないの」慶子の子供らしく力んだ眼に、正吉と太刀打出來るだけの一本氣が現はれてゐた。「本當に意外だわ。ほんたうに」

「ぢやあ、あの人の何處が悪いんだい」正吉が憤つとして開き直つた。「それを聞かう」

「だから慶子さん。お止しなさいつて云ふのに」

「何だい、止すなんて卑怯ぢやないか」正吉は妙に腹が立つて來た。「君達の觀察を構はず云つたらいゝぢやないか！」

「わたし迄よく知らないのよ」朋子が済まして、讓歩とも皮肉ともとれる言葉を挿んだ。

「ぢやあ先生が何とか批評したのか。それなら先生を連れて來給へ」正吉が昂奮して殺氣立つた事を云つた。先生自身A女史を引き合ひに出して、心の動揺を見せてゐたではないか。――「みんな結婚した事もない癖に、大體出過ぎてゐるよ」

「ぢやあ結婚で氣の毒な事があつたら、どんな事してもいゝの?」口惜がりの慶子が、正吉に打つかつて來るやうな向な顏をした。「あんな男の人に連れられてゐてもいゝの?先生に伺つたら、（彼女は言へないで赧くなつた）御主人でもないんですつて。おゝ厭だ!それでも構はないの」

そんな事を云つてゐるうちに、彼女は自分から感動して泣きかけた。

「お母さんがそんな話聞いたら、どんなに厭な氣持なさるでせう」

「…………」

同じやうな位置にある母親と聯絡させて、慶子は頻りと不快がつてゐるのだな、さう正吉には思へて來た。そして多少氣が和らいだ。

「もう止めませうよ。ひとの事ぢやないの」

朋子が又横合から挫くやうに、短かく云つた。そして西洋雜誌を繰つてゐた。

「いやに皮肉だね」

慶子の憤慨の方がずつと氣持がいゝ、さう思ふと、正吉には別の立場が出來るのだつた。だが自分に當つて來たな、さう敏感に察すると、朋子は暖爐へ向いた安樂椅子に默つて掛け替へた。天鵞絨の四角な脊から、展げた大型の頁しか

食み出なかつた。

「讀みもしない雜誌なんぞ止せよ」

朋子が手を伸して、棚へ置いた。

「一體朋子さんは生意氣だよ」

手應へのあるまで詰めてやる。さう思つて、彼はその昂奮の單純でないのに氣付くのだつた。

「正吉さん、お姉さんは何も傷しやしないぢやないの！」慶子が人善く口を出した。「わたしが云ひ過ぎたのなら、謝まるわ、御免なさいね」

「君に慣つちや居ないんだよ」正吉が勢で撥ね退けた。

「あら、それぢやあ、あんまりお姉さんに酷いわ。お姉さんは始めつからわたしを留めてたんぢやないの。ねえ？」

椅子の脊から、朋子が不意に立ち上つて出て行かうとした。だが慶子の庇護から返つて氣弱くなつてゐた。顏が歪むだ。

「お姉さんどうしたの」慶子が驚いて遮つた。「此處に居ませうよ。あつちへ行つたつて仕方がないぢやないの」

「放つといて頂戴」

朋子が肩越しに思ひ切り正吉を睨んだ。彼女は正吉を憎むでゐた。靜止した兩方の眼の下に堅つた筋があらはれて、耐えられず顫へてゐた。だがそれは女學生に似合はない、變に澄んだ陰翳を持つた氣品のある筋だつた。淚がぼろぼろ零れた。

「お姉さん、お止しなさいよ。お止しなさいよ」慶子が情けないやうに繰り返した。

「だつて、あんまり、酷いんですもの！」朋子からそんな調子の外れた、神經質な聲を聞くとは意外だつた。「わたしが先刻から我慢して、我慢してゐるのに、自分こそ意地になつて當らう〳〵として。……正吉さんこそいつだつて皮肉なんだわ。いくらわたしが莫迦でも、その位は分るわ」

朋子は正吉に擲きつけるやうに云つた。そのやうな輪廓を投り出した彼女を見た事がないやうに思つた。後ろ向きになつて鼻をかんでゐる彼女の襟の生毛が形わるく亂れ、頸部の線が妙に貧しくて幼稚だつた。その缺點が可憐らしく目立つた。――彼女の批難を、正吉は何の武裝もない心で受け取つてしまつたのだ。それ程に印象が鮮やかだつた。

朋子は顏を直しに部屋を出て行つた。慶子が心配さうにその後に附いた。

「歸らう……」と、正吉もさう思つた。だが一人になると、何となしに氣が弱つて、兩足を敷物に伸すのだつた。やはり八重子の事が打撃だつた。八重子の生活が普通の形のものであるまいとは、今までも漠然と考へてゐたが、眼のあたりそれを激しい語調でびし〳〵聞かされると、矢張り彼は碎かれた。彼が八重子に輕快な女友達とか、感傷を投いた火遊びとかを求めたのでなく、彼女を終ひに困らすかも知れぬやうな重苦しい場合を欲してゐただけに、それは打撃だつた。彼はあの接吻の機械的な無關心をも、今見拔いたやうに思つた。風が出て窓の雨戸を鳴らしてゐる。「さうだ、歸らう……」と思ひ出すのだつた。

襖が開いて、先生が慶子に附いて貰つて來た。

「まあ私、ほんとに濟まない事を致しました」先生は淺黒い顏をおど〳〵させて、足を入れるなり云ひ譯した。「わたくしが一寸申した事から大變皆さんに御迷惑かけてしまつて」

「何でもないんですよ」正吉が反應のない返事をした。そして慶子に「今日は失禮するよ」

と云つた。

「どうして？」まだ執拗いといふやうな、不服な顔を見せるのだつた。「もう濟んだんだから、それでいゝぢやないの」

「いゝかも知れないけれども」正吉は吾ながら弱々しい、軟らげた聲を出した。「一所に飮食つたところで、何だか變だもの。又きつと來る」

そして玄關へ出て靴を履いた。

「まあそれぢやあ私、愈々どうしませう」穏和な先生が途方に暮れて、仕方なしに笑つて見せた。そして自身も、送るともなく下駄を突つかけた。「どうしたら宜しいか、慶子さん助けて下さいな。分らなくなつてしまひましたわ」

「其處までお出になる？わたしも行きますわ」

先生の困惑を見て、慶子が續いて肩掛を取つて出た。實際日暮の風が冷えてゐた。……朋子ので間に合はせたな、姉妹の柄を覺えてゐる正吉が、何故か茫んやり氣付くのだつた。それは毛のふか／＼した愛らしい肩掛だつた。

「わたくしの申し方が全く足りなくつて……」先生が云ひ辛らさうに手を口に當て、氣の濟むまでは付いて來る樣子だつた。「それは濟井さんは、(八重子の姓だつた)あの方のお世話になつていらつしやる譯なんでせうけれども、それだけで惡く解つてあげては、お氣の毒だと思ひますわ。何故つて——」

先生は正吉に話し惡いので、自然慶子を相手にしてゐた。

「あの方々はまだお若い時に、結婚なさる氣がおありになつたんですもの。松原さんから伺ひましたわ。——でも、お聟取りでないとお母さんがどうしてもお許しにならないやうな事情で、何か大變ゴタ／＼なすつて、到頭お話がそれつ切りになつたんださうですわ。それも、松原さんへいらしつた頃よりずつと前の事ですから、濟井さんのそれこそ、箱

入娘時代のお話ですわ。――だから世間普通のさういふお世話と、同じに解つてあげては、悪いと思ひますわ」

これは妙に古臭い話に響いた。だが古臭く平凡なだけに、色街の社會を知らない正吉には、何か動かせない仕來りから成り立つた堅固な深い關係のやうに釋れるのだつた。そして先生が前の初心らしい戀愛の色彩を主にして話せば話すほど、若い正吉には濃密な、肉情的に調和した、現在の取り済ました二人に對する想像となつて、頭に逼つて來るのだつた。彼は息苦しかつた。ひと筋に續いた敷石を、彼は無意味に踏みながら聽いて行つた。

「それは何してゐる人ですか」

彼が不意に、眼の前の青白い顔に對つて訊ねた。

「辯護士さんだつてお話ですわ。市會だの芝居だのにも關係していらつしやるやうに伺ひましたわ」

「家族があるんですね」

「えゝ」

「向ひ風で寒いこと」と外套なしの慶子が云つた。

「そしてー」正吉は響きの異つた聲を出した。「お母さんの考はどうなんです」

「もう大抵、大目に見ていらつしやるんでせうと思ひますわ」

これでは妾生活と違はないぢやないか、肖像を買はうとしてゐる男だな。――彼の心の中にはつきりした光線が、段々増して來たやうに思つた。接吻の話も既うすら〳〵と聞かせてはゐないか。彼は烈しく突かれたやうに感じた。

「その角で失禮しない？」

と慶子が、肩掛で風を除けながら云つた。彼女は大分來てしまつた生垣の道を振り返つた。

別れて省線の踏切まで來ると、八王子の方へ直線に走つた線路の先に、低い、しつこい程赤い、液體のやうな夕燒の名殘が塊つて見えた。それが打ち碎かれた彼の心の底まで泌み徹つた。レールが眞上の明るみで細く光つてゐる。遂さかつた美しさを思はせるものが、すべて彼には苦痛であつた。

冷えて空腹になつた。彼は灯をともした洋食屋の賑やかな擦硝子に惹かれた。が、同じ外で晩飯をとるならば、八重子の家の近くのさうい ふ店まで行かう、彼はさう思ひ付くのだつた。そんな事でもしなくては、彼には今、息苦しい嫉妬の鎭痛劑を見出す方法がなかつた。

その晩遲く家に歸ると、杉男から端書が屆いてゐた。

「先日は失敬。兄が東海道線の×××へ寫生に行くので僕も同行する。暖かい岬と濃い海の色とを兄が描く傍で、僕も短篇小說に身が入りさうに思はれて、樂しみにしてゐる。君も原稿でも持つて來てはいかゞ？　伸々するよ。――それから八重さんが、何か君に約束したものがあつたさうだが、忙しくて送れないでゐるとの由。昨日十五分ほど寄つて行つた」

若い者の愛すべき無分別さよ。寛大な安島氏がそんな心配した笑顏で、杉男にそれを書かせたのではないかと想像した。

十

暫く經つた或る朝、井手の家では箱根からその儘關西へ公用で廻つた父親が、早朝に着く急行で歸つて來た。庭に面

した茶間の卓では、皆が揚枝を使つたばかりの顔で、パンと紅茶の食事に集まつた。その五六日また身體のわるい母も**起きてゐた。茶碗から煙がたち、**健啖家の父は齒の音を起てゝ空腹を充してゐた。彼は子供達が済んだ後も、まだ其處**に居坐つて母にオムレツを頼んだりしてゐた。**

正吉は新聞を持つて、陽の差し込んだ椽先に休息した。龍二がやはり出て來て、一枚取り上げながら一間ほど隔つた障子の腰に倚りかゝつた。庭では芝生が短かく刈られ、落葉を集めた掃き目の波が、朝らしい冴えた光線を受けてゐた。躑躅はもう赤茶けた。

「お兄さん、お兄さん、わたし運動家、えらいでせう」玄關の方へ出て行つた愛子がその鳥打帽をかぶり、ゴルフ道具のケースを提げて入つて來た。「お父さんは關西でもこれして歩いたのに」

「そんな暇があつたらいゝがなア」父が笑つて答へてゐた。「それでも神戸では一度やつたよ」

「あのゴルフ場の繪端書着いたことよ」

「宮の下のホテル、いかゞでしたか」母の聲が、思ひ出して訊ねた。「寫眞だと大分棟を増やしましたのね。設備はどうですか」

障子の前に膝を立てた龍二が、緊張した顔で足先を見つめてゐた。

「あゝ、ホテルへは到頭泊れなかつたよ」と父は寛ついで云つてゐた。「省の連中につかまつて、その晩は塔の澤まで下りてしまつたよ」

「あら、あれ箱根の繪葉書ぢやあないの」愛子が甘えた口を出した。

「塔の澤も箱根さ」父の聲がいかにも和らいでゐた。「省の連中が皆飲み盛りの奴ばかりでな。女が來て騒ぐし、夜明し

のやうな始末だつた」

龍二が眩しいやうに細めた眼を擧げ、何か清清しい感動をそれで押し隠してゐた。正吉自身も父の物言ひが心から氣持よかつたが、それでも酒席の父をすぐと淡泊だつたと思ひ定めるところまでは行かなかつた。だが、前に正吉の寛大を怒つた龍二は、彼に氣付かれないやうに向うで昂奮してゐる。日が當り、新聞を凝つと擴げた肩先に、硝子戸の棧が明るい影をこしらへてゐた。

「旅行先では、少し無理して腸をこわしたよ。同病相憐れむかな。お前はどんなだね」父がまた母に云つてゐた。

午後正吉が二階の部屋に一人でゐると、龍二が上つて來た。

「お父さんと相談して、お母さんを修善寺へでも連れ出す事にしましたよ」家を空けがちの彼に、卒氣ない報告の形で云つた。「僕が學校の行軍をすかして行きます」

「さうかい」正吉が机に向いた儘、同じ對抗した調子で答へた。「俺も行くよ」

「……さうですか」矢張り別に奨めようとしなかつた。

「行軍の休みぐらゐいゝぢやあ、身體に利かないぢやないか。後は僕が附いてるよ」

正吉がさう附け足した。そして今の自分に最もいゝ休息場を見つけたやうに思つた。東海道はもう止めた。

――庭に降りた龍二が、階下の壁板にボールを打つけては受け取る、野球の肩馴らしのやうな事を始めてゐた。机に傳はる粗い響き具合で、それが妙に精一ぱい投げてゐる事が分つた。息使ひさへしてゐる。何か拘泥した事の腹癒せを求めてゐるなと、正吉はそんなに思ふのだつた。彼は龍二の眼に映る、落着かぬ兄としての自身を想像した。……あれ

から安島の家も藤瀬の家も、音便りを寄さずに默つてゐる。それが彼には一種淡い脅迫觀念となつて纏はるのだ。つた自分は獨りなのかな、と感じた。

「えゝ、もうかーえりました」

垣境のところで愛子の高調子な聲がした。枝を下ろして日當りの増した木の間で、彼女は垣越しに隣りのお嬢さんと父の話をしてゐるのだつた。ボールの音が一度止むだ。年少の者のみの作る空氣が、下の方で花やかに醸された。

いや、自分にも龍二に劣らない純潔さが殘つてゐる。彼はさう主張したかつた。だが、どうして自分に具はつた力強い欲望や衝動や、さういふものを頭から冷酷に扱はれよう。……彼は涙ぐむで來た。

耳障りな球の響きの來ない畑の隅に避けて、ぐつたり寢轉むだ。八重子へは修善寺から、有りの儘の手紙を出さう、さう考へた。柿の實の纔かに殘つた、田舍の平凡な郵便局に入つて行く自身を、彼は想像した。

疊に附けた肩先が妙に倦るかつた。睡不足續きの祟りか來たのだ。──彼はあの、初めて畫布に線を引かれた横顏の素描を思ひ出して、ひと秋をイリユージヨンに追はれた儘使つたのかしら、と氣付くのだつた。だが、若い自分にとつてそれ位何だらう！

原始人の剛さが欲しかつた。

（十二月九日）



墓參

久米正雄

……N先生の死後、其遺族F子との間に、起つてゐた私の戀愛が、遂に友人Mとの三角關係から、遂に破綻に陷つて了つたのは、丁度先生の一週忌直前の事だつた。が、萬事はまだ伏せられてゐた。そして忌日に際して、急に双方の態度を變更する譯にも行かないので、私は凡ての感情を押し匿して、當の令嬢を初め、家族、先輩、知己、友人たちと一緒に、忌日の營みに連り、墓前の燒香に加はらなければならなかつた。

皆が禮裝してゐるに係らず、私はちやんとした紋付羽織と袴とが無かつたかして、焦茶色の背廣、——それはよく彼女たちに、狸の皮と冷かされたものだつたが、——を着て、門弟たちの一番最後を選み、最後の公然たる墓參を濟ました。最後の番を選んだのは、あながち服裝の爲ばかりでなく、何となく氣遲れがして、人々の後ろに居た爲め、一つは自然とさうなつたのであるが、又自分は先生の墓に對して、

一番後に顔を合はせる資格しかないやうに、其時思はれたからだつた。

私は戀を失つた悲痛な氣持ちと、何となく先生に濟まない心持ちとで、やゝ永く禮拜した。

墓は忌日前に、出來たばかりの廣い前面を、薄い日影に照らされて、冷たく堂々と眼の前に在つた。花崗岩の白い表は、大理石のやうに磨かれてあつた。私は先生の蒼白いやうな、時としてはひどく懷しいと共に、怖いやうな眼を連想し、左腕に喪章を卷いて、横眼でぢろりと此方の心底を睨んだやうな、最近の、代表的寫眞の姿を思ひ浮べた。そして地下の先生に、無言で叱られて居るやうに感じながら、併し又先生は、凡てを許し、凡てを公平に見て居て下さるであらうと、强ひて思ひ直して、墓前を退いた。

それから私は、忌日を期して門弟たちが、先生の書齋に集る九日會に、最後の列席をした。私が矢張り悄氣てゐるので、既に事情を知つてゐる友人のAが、陰になり日向になりして、私を勵まして吳れた。

後一二回訪問はしたが、殆んどそれつきりで、私はN家から義絶された。はつきり、來て貰つては困ると、宣告された譯ではなかつたが、兩方の中間に立つてゐたAから、

「……君が來て吳れると、どうも奧さんやお孃さんも、感情的に迷惑だと云ふんだ。それに第一、君がその後一度でも二度でも、向ふへノコ〱出かけるといふ法はない。未練なやうで、見苦しいぢやないか。Kなぞも、どうして久野は、向うのお孃さんでも叩き毆つて、出て來なかつたんだと云つてる位だ。」

と云はれて、一言もなかつた。さうだ。未練。――確に斷末魔的な未練で、撚を戾すなどとは到底望まれなかつたが、一何か藥一本でもいゝから、向うの家に繫りついてゐたいやうな氣で、一二度勇を鼓して訪問したのだつたが、全く考へて見れば、それは見苦しいに違ひなかつた。

それつきり、私は向うの家に行くのは止め、向うの人に會ふのを避けた。

それ以來、年々十二月九日の、先生の忌日にも、私は夜になつてから、一人ひそかに墓參するのを例とした。三回忌が、牛込の或る大きな料亭で、營まれると云ふ話を聞いたが、私には通知も勿論無かつたし、私の方から強ゐて出席する事なぞは、勿論出來なかつた。それで九日の夜になるのを待つて、誰にも云はず、一人でそつと雜司ケ谷の墓地に出かけ、墓前に立つて長く禮拜した。

年々の事で、今では何の年はどうと覺えて居ないが、毎年冬の其の時分は、磨き澄ましたやうに夜空が晴れて、夕照の影が明るく西の隅に殘つてゐるやうな、しん〳〵と、打てば響くやうな宵が多かつた。或る年は又どつしりと重い空が、眞つ闇に護國寺裏から蔽ひ被つてゐた。

墓地の中央にある疎林は、殆んど葉が落ち盡して、音も立てず、しんと空と交つて、墓の背ろに立つてゐた。墓の表は、どんな暗い宵でも、仄白く見えた。重い、銀行か金庫の扉の重さを連想させる。鐵の門柵をぐーと開けると、鈍い環の鳴る音が、妙に私の心に響いた。線香の火は、もう大抵消えるか、立つて了ふかしてゐた。暗の中に、今日人々が上げて行つた樒や、花なぞが左右に、黒く或ひは、仄白く見えた。そして墓の前には、水がまだ大抵乾かないで、墓石を濡らして居た。……

止むを得ずではあつたが、かうして夜一人墓參をするのは、私の感傷を却つて滿足させた。それは一年に一度の、一番大きいセンチメンタリズムとして、何だか人に云ふには恥しいが、自分では毎年一回も缺かさず、其日其夕になると、必らず萬事を措いて駈けつけた。

或る時は酒席から、烏渡「人に會ふ約束がしてあるから。」と云つて、自動車を命じさせた事もあつた。或る時は夕方から來た友人を、忙しげに匆々返すやうにして、出掛けた事もあつた。

或る年には、銀座から、餘り晩くなりさうだつたので、タクシーに乘つた。初め雜司ケ谷と云つて、運轉手に命じた。江戸川橋の邊まで來ると、雜司ケ谷は何方だと云ふから、墓地の方だと答へた。タクシーは、護國寺前から左へ折れ、それからめつきり人通りの無い、墓地へのだらく坂を、右へ上り初めた。

「どの邊ですか。」と運轉手は又訊いた。

「墓地の中だ。行れる所までやつて呉れ給へ。」

私は何の氣もなく答へた。

車は墓地に突當つて、又左に折れ、石屋の前まで來た。冬の寒い夜で、もうさすがに其處らには、人つ子一人見えなかつた。

「道は此處迄ですが、此處ですか。」運轉手は車を停めて聞いた。

「うむ。此處でいゝ。ぢやァ車を廻して、五分間ばかり待つて居て呉れ給へ。」

私はかう云ひ棄てゝ、タクシーを下りると、其儘暗い墓地の中央の小路へ、どんく入つて行つた。運轉手は呆氣に取られて見てゐたらしかつた。

私は遠く僅かに暮れ殘つたやうな、夜空に立つ疎林を目當てに、直ぐ先生の墓地の在を、それと探し當てた。そして例の重い鐵の柵扉を開け、中に入つて、仄白い墓面を仰ぎながら、心の中でいろく先生に訴へ、そして何時ものやうに

禮拜して戻つて來た。

　運轉中は車を下りて、不審さうに私の去つた方を、そして歸つて來た方を見てゐたが、如何にも怪訝な態度で、其時私を迎へた。

「それぢやア、是から本郷の方へ歸つて貰はうか。」私はさう云つて車に乘つた。

「旦那、」とう〳〵運轉手は、自分の乘るべき臺上に腰をかけながら、妙な聲で聞いた。「どうなすつたんです、今時分。何處へ行らしたんです。」

　私は悲しき微苦笑を禁じ得ないで、さりげなく答へた。

「いや、なアに知つてゐる人のお墓參りさ。」

「さうですか。——私は又どうしたのかと思つて、心配しましたよ。」

「籠拔けでもされると思つたかね。」

「まさかさうでも御座いませんけれど。……」

「それとも墓地で、自殺でもすると思つたかい。」

「正直のところ、ひよつとすると、此儘、お戻りにはならないんぢやないかと思ひました。」

　運轉手は頻りに人懷つこく、そんな事を云つた事もあつた。……

　其の墓參りの事は、外の誰にも殆んど云はなかつたが、私はたゞ、其失戀の前後から友人になつた、Tにだけは打明けた事があつた。

其頃、Tは江戸川端の、小さな二階居に住んでゐた。そして其處は、墓地からの歸り道に當つてゐた。

或る年、私は例のやうに墓參を濟まして、たしか八時頃だつたと思ふが、淋しい音羽通りから、灯の賑な江戸川の方まで來ると、何かだ急に佗しくなつて、墓參りして獨り歸るには、堪へられなくなつた。それで急に思ひついて、車をTの家につけさせると、折よくTは家に居た。

「……今頃、こんな所へどうしたんだい。」

Tは其頃まだ、何處かゝ切が殘つてゐる雜誌へ、雜文か何か書いてゐる所だつたが、滅多にTの家に訪れた事のない私が、しかも中途半端な時間に、ひよつこり現はれた事を不思議がつた。

が其處で述懐を吐く程、私とTとの仲は親しくなくはなかつた。

「うむ。實はね。」と、私は柄にもなく、眼蓋が鳥渡潤まつて來るのを意識しながら、「今日はN先生の忌日なんだよ。それで雜司ケ谷へ行つて、墓參りをして來た歸りさ。夜だら誰れにも會ふまいと思つて、そウッとね。勘當息子が、親父の墓にお參りするやうにさ。――時代なセンチメンタリズムだらう。」

私は先廻りをしてそんな事まで云つた。何だか胸の中に、昂奮が殘つてゐて、涙が出さうなのを堪へたから。

「ふうむ。さうか。古風だね。だがいゝよ、Nさんなら。外の人の墓だと鳥渡困るが、Nさんなら相應はしいさ。惡い氣持はしないよ。――だが感心だね。――併し君たちのやうな師弟關係は、Nさんでお終ひだらうなア。」

Tも落着いたながらに、鳥渡感激を潜ませた口調で、さう云つて呉れた。

「さうかも知れないなア。」

「尤も是からの文學で、そんなことがあつちやア不可ないだらうけれど、君たちまでなら、鳥渡いゝよ。」

私は少しは嬉しいやうな、面映ゆい氣恥しさも感じて、打切るやうに云つた。

「と云つたところで、一ぺえ飲みに行かうか。」

さう云ひながら、私は先生の門弟たちが、今夜は例の道愛の書齋へ集つて、常例になつてゐる川鐵のあひ鴨を煮ながら、樂しげに談笑してゐる態を、烏渡羨ましく思ひ浮べた。

「行かうかナ。」Tは直ぐ私の心持をも酌んで、素直に應じた。……

いつとはなしに、足が遠のいてゐたけれども、年忌々々には、AはN家へ行き、人々と一緒に、法事や墓参に列してゐるらしかつた。そして時々思ひ出したやうに、其次に私に會つたりすると、其樣子の片鱗を傳へて呉れた。彼は彼の友情で、全然それを默つて居る事は出來ないし、又私に對する、一種の刺激劑とでも思つてゐるらしく、必ず義務のやうにその一斑を知らして呉れた。

「……うむ、」と彼は輕く思ひ出したやうに、私に云ふのだつた。「此間の九日には、久しぶりで先生ん所へ行つたよ。珍らしいもんだから、奥さんやMなぞも大變喜んで呉れてね。矢つ張り淋しいらしいんだ。……Mもなか／＼元氣だが、ひどく瘦つたよ。妙な骨董なんぞ集め出してね。」

「ふうむ。さうかい。」と私の方でも、一應聞くだけの事は、聞いて了つた方が、一と通り心持がからりとすると思つて、「F子さんはどうだい。會つたかい。」

「うん、會つた。あの人も子供を生んでから、非常に綺麗になつたよ。」

友情は含めながらに、ひやりと一太刀見舞つた方が、却つて爲になると云つた心持で、Aは云つてのけたりした。

「さうかい。」

私は意地にも、例の微苦笑で受止める。……

「併し彼處の今度建てた家も、餘りいゝ趣味ぢやないね。」

「さうだつてね。」

其後、Mには一二度會つて、――其會つた時の話を、私は「敗者」と云ふ小説に、當時書いた事がある。――鳥渡挨拶した事があるが、F子には、殆んど會はなかつた。

たゞ一度、先輩M・S氏の主宰してゐる、「青い鳥」と云ふ童話雜誌社の主催で、帝劇に童謠音樂會が開かれた時、私も寄稿家たる文壇の諸氏と共に、招かれて出席した。

すると、Y・Sと云ふ詩人の、後に流行になつた「カナリヤ」の歌が、可哀いゝ少女の胸を膨らせて、急調になつて終りを告げた時、ふと何の氣もなく、センチメンタルな感動から吾に返つて、階下の左り側のボックスを見たら、其處にひよつくり先生の未亡人の、太つた姿を見出した。そして鳥渡どきつとしながら、其側を見ると、丸髷姿の彼女が居た！ 顏容の細い處なぞは、私たちが二階の席にゐた爲に、よくは見えなかつたが、確に彼女には違ひなかつた。服裝などは、もう目には入らなかつたが、丸髷の赤い手柄をかけ、その日本髮に結つた、婦人の常として、首を割り合に眞つ直に立てたまゝ四邊を少しも見廻さずに、舞台の方だけを神妙に見て居る、七分位の白い横顏は、はつきりと私にも分つた。

私はぎゆつと椅子に倚りかゝつたまゝ幕間になつても動かずに、彼女の方を見凝めて居た。彼女の方で、私の存在を

認めたら、どんな表情をするだらう、と思つたり、いつそ此方から出かけて、あのボクスの背ろの、廊下を歩いてやらうか、なぞと思つたりして、ぢつとして居ると、丁度隣りの席に居たH・Sが、鼻眼鏡の奥から私を見下ろして、

「どうだ。出ないか。」と云つた。

「うむ。出てもいゝが、彼處に氣になる人が居るんでね。あのボクスに。」

私は何んとはなしにそんな事を云はずに居られなかつた。

「誰だ。」

「うむ。N未亡人とM夫人さ。」

「さうか。」

H・Sは、そんな人の事なぞに、さう興味もなげに、少し黒い尖つたやうな顔を、其方に鳥渡向けたきり私を殘して出て行つた。

やがて私も席を立つて廊下に出ると、其處で粹なモーニングに、ボヘミアンネクタイを結び、青い鳥の村を、襟釦の穴に挿した、氣嫌のいゝM・S氏を取卷く、多くの藝術家たちの間に入つて、さりげなく輕い冗談やら、挨拶やらを取り交してゐた。——其音樂會は全く成功だつた。そして殊に私には、其處で初めて聞いた、Y・S君の「カナリヤ」と、H・K君の「チョツキン〳〵」ほど、感銘深く聞いた作品はなかつた。

F子とは、遠目で見たそれつきり、其外には一度も會つた事はなかつた。其時ひよつとしたら、歸りの出口位で、顔を合せやしまいかと、ひそかに怖れながら、豫期もしてゐたが、彼女たちは少し早く歸つたと見えて、お終ひの合唱の時には、もうボックスに居なかつた。

俺の來て居るのを知つて、早く歸つたんぢやないかしら、そんな事もちらと思つたが、さうでもないらしかつた。

Mには、前にも云つた通り、其後度々會つた。「敗者」に描いた、淺草の活動寫眞館での邂逅は、玆で述べる迄もなく、私が眞に敗者の思ひで、彼の前から身を退いた。それから其後、再び私は、本郷三丁目から大學病院前までの、一と停留場間を、偶然電車に乘り合せて、私は直ぐ氣が付いたが、向うはまるで知らないのか、知つてゐて、——私の方がさう混んでも居ない車に乘り込んだのだから、或ひは知つてゐながら、向うも知らぬふりをしたのかも知れないが、短い丁場の事だつたので、正式には顏も合さず、會釋も交さなかつた事があつた。其時私は彼の方に、自然に背を向けて、しかも全身の見えぬ感覺で、彼の存在に氣をつけて居たのだが、彼が直ぐ病院前で、そゝくさと下りて了つたのを知ると、何だか吻とすると共に、今度は向うが逃げたのではないか、とふいと考へた。が、後で話を綜合して見ると、其時彼は何か病氣で、其處に通つて居たものらしかつた。

それから又或る時は、先輩大家のS・T氏と、森ケ崎の或る私たちの馴染の宿の、俠氣ある主人の盡力で、私の爲に或る結婚候補者を見付け、其の見合を帝劇でする事になつて、私がわざ〳〵自身で、其前切符を買ひに行つた歸り、警視廳の前のぐんにやり柔いアスフアルトの上で、Mともう一人、私たちの高等學校時代の仲間で、Mには特に親しかつたNと云ふのが、連れ立つて歩いて來るのに、ぱつたり出會つて了つた。

「やア。——」

向うから、先に認めたと見えて、さう聲を掛けた。

「やア。——」私も帽子を取つた。そしてNの方を見乍ら、「相變らずだね。」

「其後どうした。」Nも云つた。
「どうも相變らずだ。──どうだ。時々は俺たちの方へ遊びに來いよ。」
私は、そんな事は出來ないのを分つてゐながら、少々上り氣味で、Mにそんな事を云つた。
「うむ。君も來いよ。」
Mの方でも、さう深い意味もなく、鸚鵡返しに、そんな事を云つた。彼はひどく機嫌よくにこ〳〵してゐた。
「ぢやア失敬。」
私はさう云つて、二三言で、直ぐ分れた。
「失敬。」「失敬。」
彼らは歩み去つた。私の眼には、Mの着てゐた、玉羅紗の上等なオーヴアーが、はつきり殘つてゐた。それから「遊びに來いよ」とか何とか、其場に任せて妙に云ひ過ぎたのを、あたしげないやうに思つた。が、又彼が、高等學校時代からの舊友と、──それは可なり親しかつたとは云へ、何となく淋しげに歩いて居るのを、憫殺してやりたいやうに思つた。そして自分が、彼らには分るまいが、明日の見合ひの爲に、切符を買つた歸りであるのを半分は淋しく、半分はひそかに誇らしく考へた。其上、私の毎もの宿命的な考へで、かうして、見合の切符を買つて出ると、偶然彼に出會ふなどと云ふのは、天が、今度の見合の相手と、結婚を勸めて居るのではあるまいか、尠くともMに會つても、もう見返してやつたやうな心持で、落着いて居られる爲に、結婚を早くしろと暗示してゐるのではあるまいか、とさへ思はれた。いゝ時に出會つた。私には何だか仄かなる嬉しい豫期があつて、彼と會つたことを淋しく思はなかつた。
其見合ひは、滯りなく行はれた。そして相手の人は、可なり美しく純な處女だつた。黑い眼をぱつちり見張つて、白

粉氣の尠い皮膚が、白く滑かで、顏容にも、さう非の打ち處はなかつた。が、何と云つても、餘りに純な少女らしい人だつた。それで私は前日の暗示があるに拘らず、强ゐて進んで貰ふといふ程、氣運が熟して居ないのを感じた。それで話は、それなりになつて了つた。まア申分はないが、年も行つてないらしいので、——たしか其人は十七八だつた。——もう少し期を待たう。そんな事で、過ぎて了つた。ふつと現れて、其儘過ぎて了つた美しい其人の俤は、今でも思ひ出す事が出來るが、其後彼女はどうしたであらう。彼女には恐らく、煮え切らない私の返事が、多大な悲みと侮辱とを感ぜしめたか知れない。が、それも仕方がなかつたのだ。……

其後、——いや、或ひは其前だつたかも知れぬが、Mとは、矢張り私達の共通の知合だつた。Uが洋行する時、東京驛でも會つた。其事は、又「和解」といふ私の小說にも、終りに描いて置いた。そしてそれから暫らくは、會はなくても、屢々噂を聞いたりした。或時は私と同じく時事新聞の社員で、牛込に住んでゐる新進作家のM・Sが、田原屋で彼と卓子を隣りに座つて、Mが同行の友人と、頻りに猥褻の話をしてゐるのを聞いたとか、夜晚く矢來の通りで、太い洋杖を振つて步いてゐるのに出會つたとか。—

さうかうしてゐる中に、或る月、新小說の卷頭に、Mの小說「福兆の話」が出た。其時たしか、私も「破船」を主婦之友に書いてゐたので、妙な期待を以て、半分は何となく厭々ながら、その小說を讀んだ。すると其中には、あの當時の私の事を、滅茶苦茶に惡く、侮蔑と憎惡とを以て、讀むに堪へぬほど描いてあつた。

それを讀んだ時、私は勿論、腹が煮えくり返るやうな、憤激を覺えはした。が、氣を落ち着けて、友人の修業家S・Tが、よくする故智に倣ひ、下腹に力を入れて、讀んで了つた後は、一時の激情が去ると共に、何となく淋しいやうな、併し腹の定まつた安堵を覺へた。と云ふのは、度々私の方こそ、あの事件を題材にして、種々な長短篇を描き、割りに

正直に、其時々の感想を披瀝して來たが、併し、彼は一度も、それに就て感慨を述べた事がなかつた。一體、彼はどう思つてゐるのか。此方は非常に悲苦もしただけ、又私の性情からして、だん〱その狀態を卒業し、彼らに對しても、憎惡から漸次に許容的な心持に移つて、時としては、――それは强ゐて鞭打した傾きもないではなかつたが、――可なり彼らを慕しむ位迄に、センチメンタリズムと嗤はゞ嗤へ、兎も角も半生の努力を費して、進んで來て居るのに、彼は一體どんな心事を抱いて居るだらう。そんなセンチメンタリズムは、彼一流の粘り强い氣質から、暗々とせゝら笑つて、相手にしないでゐるだらうか。それとも內心は、案外此方より慕しがつて居るだらうか。でなくば又、義絕した當時同樣に、全く私を侮蔑し切つてゐるだらうか。――いづれとも此方は此方で、此方の氣持を持ちこたへ、それを私らしく處置すれば、それで充分なのだが、それにしても、向うが全く沈默を守つて居るのは、何となく薄氣味惡かつた。謂はゞ此方の陣中が、頻りに旗鼓の勢を見せたり、或ひは和議の氣配を見せたりしてゐるのに、向うは林の如くしんとして動かないのが怖ろしかつた。私は凡ての長短篇を、描きながらも恐く、Mに敗けた思ひを濃くしてゐた。それが、「福狀の話」を讀んで、一朝にして崩れた。私は一時憤激もしたが、又直ぐ其後から、からりとした氣持になつた。そして初めて此の對陣では、私が勝つてゐたと云ふやうな、一種の憐憫に似た感じと、――それは强ゐて持つたのかも知れぬが、――尠くとも安心の息を吐いた。なアんだ。そんな事で、彼は俺を侮蔑してゐるのか。こんな風に、彼は俺を憎惡してゐるのか。勝利者たる彼が、そんな憎惡を私に持つたり、怨恨を含んだりしてゐるなんて、寧ろ逆ぢやあないか。失戀の爲に、取り亂した當時の私を一應蔑視するのは聞えてゐるが、それから先、こんな心境に留つてゐたのか。是では、憎むなら徹底的に憎む、と云ふ程の事でなく、相手の行爲に對する認識不足で、たゞ單純に私をやつつけたい意志のみが先だち、毫末も其小さい心境から、脫け出さうと云ふ努力のないのを私ははつきり見て取つた。

で、私は其後に、K・Kに會つた時、彼にかう云つた。
「おい、Mの「福扰の話」つて云ふのを讀んだか。」
「うむ讀んだ。」
彼は時として非常に寡默になる時の癖で、奥深い眼をぱちくさせながら、私の顏を鳥渡見たなり、簡單にさう云つた。
「俺の事を、隨分ひどく書きやがつたな。が、俺はあれを讀んで、すつかり安心したよ。向うの氣持がはつきり分つて、分らない中は何となく不安だつたがね。」
と、K・Kは、私の方を見て、鳥渡妙な顰頻に、薄笑ひを浮べながら、わざと決斷的な語調で、すばりと眞理を道破する如く云つてのけた。
「だが、併しそれやア、あの小説が拙かつたんで、君が安心したんぢやないか。」
「いや、さうぢやないよ。――それは少しは、さう云ふ事もあるかも知れないが。」
私は幾らか慌てゝさう抗辯した。
「小説が拙かつたせいだよ。――Mはもとの赤頭巾やなんぞ可なりうまかつたんだがな。」
さう云つて、彼は肯かなかつた。
「ほんとに、Mもあれからずつと書いてゐれア、よかつたんだらうがなア。」
「が、Mが非常な傑作を書いたら、君は鳥渡厭だらう。」
K・Kは更にずばりと突き込んで來た。

「さうだね。――だが、さう云ふ事になると、俺は案外正直な感激屋だから、却つていゝかも知れない。其位の心持の用意は、出來てゐると云つちやア可笑しいが、俺は割りに俺のさうした場合の氣質に、幾らか安心してゐるよ。」

「それはさうだね。」

彼は重厚に點頭いた。

Mの「寺院の内外」と云ふ長篇が、彼の友人の經營し始めた書肆から、大きな廣告と共に出版されたのは、それからたしか一年ばかり經つた後だつた。

その廣告を、各新聞の第一面の第一段に見た時、さすがに私はドキリとした。ふうむ、先生、やつたな、愈々勉強し出したな。――と思つた。そして妙な昂奮で、廣告の全文を讀み終つた。

その内容は、前に書いた事があるので、幾ら長篇に改作したところで、私には大略分つてゐた。讀んで見たいな、とも思つたが、直ぐ又、讀みたくないと云ふ氣が強くした。讀んで、其廣告の云ふ如く、眞に傑作だつたら、どうする？其處まで安心してお前は讀めるか。内心、少しも怖れては居ないか。――そこで私は確に行き詰つた。

そして今度は、どうせどんなによくても、底は知れてゐる。放つて置け。風馬牛を裝へ。其方がまだしも、お前の今の心持に對しては、素直な態度だ。まだ／＼、そこ迄虚心坦懐には成れてゐない。それでいゝのだ。――と思ひ直した。

さう思ふと、廣告の厭に大きいのが、私の氣持を、やゝ蔑視にまで誘つた。こんな大きな宣傳をして、無理にも世間に認めさせ、賣り廣めたいなんて、どうした事だ。――さう思つて安心した。そしてそれから次ぎ／＼に、廣告面では忽ちに版を重ねて行く其の著書を、一種の冷たい微笑で、強ゐて眺めて居る外なかつた。

聞くともなしに、世間の批評を聞いてゐると、それは讃辭嘖々だつた。そして結局のところは、廣告の大に行かされた程、讀者は内容に脅かされてはゐないやうだつた。力作には違ひないらしかつた。が、さう傑作と云ふ程のものでない事を、私は自分の卑小なる安心にまで、漠然と感じてゐた。

Aは、Mから一本を贈られて、讀んだらしかつたが、何かの序に其話が出た時、さう感服しない口吻を、私の前だからかも知れぬが、洩らした。

或時、「女性」の編輯をしてゐるF君が、私の原稿を催促に來た時、それを小脇に擁へて持つて居た。そしてそれを傍に置いて、私の前に座つた。

「どうです。その小説は？　讀んで見ましたか。」

私は軽い氣持で訊く事が出來た。

「えゝ半分程。――なか／＼一生懸命書いて居ます。が、どうも少し讀み難くてね。」

F君は私の前だと云ふ、何のこだはりもなく、――こだはりがある位なら、わざ／＼私の面前へ、その本を持つても來まいが、――答へた。

「文章がですか。」

「いゝえ、文章もですけれど、少し概念的な書き方なんで。」

「さうですか。僕も實は讀みたいとは思つてたんですけれど、まさか買ひに行くのは業腹でね。」

「成程、さうですね。」

F君にも、私の心持が通じたと見えて、彼は隔てのない笑顔をした。

「讀んぢまつたら、一つ貸して下さい。」
「えゝ、お貸ししませう。」
さう云つて歸つたが、其後、私もすつかり忘れたし、F君もわざ〱持つては來て與れなかつたので、其儘になつて了つた。
其中に、廣告が又一つ出た。それは、新聞の本欄と間違ふやうに仕組んだ、記事的な廣告だつたが、其中に、批評家の文章を拔いたり、それが全國寺院の問題になつてゐる事を書いたり、著者と出版者の苦心談が、載つてゐるの迄は、先づよかつたが、F子夫人の談話が揭げられて、良人が此の小說を完成する爲に、家族をも顧みなかつたと云ふやうな、恨み言が述べられてあるのを見て、外の人は知らず、彼ら二人の相手たる私は、非常に複雜な微苦笑を禁じ得なかつた。そして結局は、廣告には責任がないかも知れぬが、さう迄して宣傳に努めなければならぬ彼らに、侮蔑と憐憫とを禁じ得なかつた。
そこに私は、一言にして云へば、何となく焦つて居る彼らの姿を、見ない譯には行かなかつた。
其中に、K・Kの出してゐた雜誌「文藝往來」に、誰が書いたか知らぬが、文壇馬鹿總まくりと云つたやうなものへ、Mの事を自分で金を出して、自分の著書を出版させ、自分で提灯を持つ馬鹿と云ふやうな意味で、遠慮なく書いたのが載つた。
勿論それは私に取つて、一應痛快でない事はなかつた。が、それと共に、餘りに穿ち過ぎてゐるので、內部に關係してゐる私たちが、刺戟して書かせたやうに思はれやしまいかと思ふので、私の心持は寧ろ厭な氣がした。
K・Kに會つて其話をすると、彼も亦さう思つてゐるらしかつた。

「……まア幾らか眞實だらうから、仕方もないけれど、Mの奴、吾々を不快に思つて居るだらうな。」

そんな事があつたので、色々な氣分のこぢれから、とう〳〵私は彼の著書を、少しも讀まないで了つた。

さうして見ると、お前は矢つ張りMに對して、どうしても敵意か、敵意とは行かない迄も、まだ競爭意識に似たこだはりを持つて居るに違ひないぢやないか。――と言ふ内心の呻きを、充分耳にしながら。……が、まアそれでいゝのだ仕方がないのだ。――と云ふ他の呟きにも聞入る外なかつた。

その中に例の震災だつた。――

そして其前後から、私に起つてゐた戀が、偶然にも酬ゐられた。それはツルゲーネフの喩へに依れば、前の古い樫の葉が、悉く落ち盡して了つたから、新芽が生じたのか、其若葉が萌え出た爲に、古い葉は悉く振ひ落されて了つたのか知らなかつたが、私に取つては、殆んど古い感情上の先入を、悉く忘れ去る事が出來るものだつた。

私は地震から一と月經つた經たぬに、今の妻と婚約した。そしてその婚約期限を、今考へると甚だ不都合にも、時々同伴外出する事を許されて、まだ夜警のある町角々々で脅かされながら、燒け殘つた山の手の町々を、散歩するのを常としてゐた。

其時分の、東京の散歩の中心地は、神樂坂だつた。それで私たちも、時々は其人波の賑さを慕つて、其方へ足を向けた。殊に其處の中心にある田原屋は、東京で一番初めに復興した、唯一の美味な洋食を喰はせる家だつた。

或る夕、私たちは夕飯を食はうと思つて、二人で其處へ入つた。彼女はまだ白粉もさうつけずに、目立たない普通の束髮に結つて、地味な汚いセル單衣を着てゐた。それでも其頃は、惡びれずにそんな装で、何處へでも入れる時分だつ

た。

私は先に立つて、鎖のついてゐる扉を押し、中へ入つた。彼女は後から從順について來た。

と、私は其處の空いてゐる、中央の卓子へ席を取らうとして、もう一つ先の卓子に居る、二人の洋服を着た男を、何氣なく眺めた。そして吃驚するともなく、

「やア。――」と云つた。

「やア。――」と向ふでも答へた。

其處に居たのはMと、それから「寺院の內外」を出版した。彼の友人のM・Hだつた。

私は彼女を連れてゐるので、其儘、丁度卓子の都合上、私だけが彼らの後ろ向きに、席を取つた。そして何は兎もあれ、食事と飲物とを命じた。

それから改めて、彼らの方を向いた。――其時の私の心は、もう前々向會つた時よりも、ずつと波打つては居なかつた。寧ろ、自分でも不思議に思ふ位、穩かで親しみ深かつた。

「おい。どうだつたい。君ん所は？　皆さん無事だつたかい。」

私は自分の方から、かう訊ねた。もう此方からそんな親しげな口を切るのが、性格上の弱味だの、心持の上での敗者だのとは、考へもしなかつた。お互が共通に受けた、大自然の震火の洗禮が、二人から過去の蟠りを少くとも一時は全く忘れさせてゐた。それに私は戀を得てゐた。しかも其當人を連れてゐた。其連れてゐると云ふ事が、若干耻しいやうな、又兎角の批評をされさうな氣がしたが、そんな事は今何でもなかつた。

彼の方でも、震災を通して、生きて、かうして會つた事に、何かしら懷しみを、持つてゐたに違ひなかつた。

「うむお蔭で。みんな無事だつたよ。」

「家は？」

私は重ねて訊いた。

「家も何でもなかつた。——君は鎌倉だつたんだつてね。みんな心配してゐたやうだつたが、無事でよかつたな。」

彼は快活に云つた。

「うむ。お蔭で助かつたよ。」

私も其際、まさか彼が私の死を願つてゐたらうなぞとは、邪推もする氣持はなかつた。

「おつ母さんは？」

「無事だつた。僕は殆んど被害なしさ。——奥さんにどうか宜しく云つて呉れ。」

「あゝ。——」

丁度そこへ、定食が運ばれたので、會話はそれつきりで終つたが、私の連れてゐたT子は、深く氣にも止めて居なかつた。

やがて、彼らはもう食事が濟んだと見えて、更に機嫌よく私に挨拶しながら、出て行つた。出る時、MはT子に鳥渡眼を呉れたが、彼も亦さう深く意に止めぬやうだつた。

私は彼らの姿が、揺らぐ扉の後ろに消え、街頭に出た頃になつて、T子に初めてかう云つた。

「おい。今此處を出て行つた、先刻俺と話をした男ね。あれ、誰だか知つてゐるかい。」

「いゝえ、知りませんわ。」

彼女は私を見上げるやうにして、不思議さうに答へた。

「あれ、Mだよ。――N先生んところに居る、Mだよ。」

「まア、さうを。」彼女は急に振り返つて、戸口の方を見た。「そんなら氣を付けて見るんだつた。」

「それにしても妙な時に、うまく打突(ぶつ)かつたもんだね。」

私は一種の感慨でさう云つた。

「もう餘つ程行らしたでせうか。」彼女は何故か、そんな敬語を使つた。「私、よく見たござんしたわ。」

彼女は非常に殘念がつた。

「なアに。君までがそんなに興味を持つたりしちやアいけないよ。」

「いえ、――でもあの人、私たちの恩人だつたんですもの。私、既(と)うからさう思つてゐたのよ。」

「生意氣云つちやいけない。」

私は彼女が、小聰しくそんな風に云ふのを、口では鳥渡叱しながら、内心、そんな事を云ふ彼女の心持に、ぴつたり共鳴してゐた。……

月を越えて十一月半ば、私たちは結婚した。

そして其足で直ぐに新婚旅行に發ち、月一ぱいを京阪地方で過ごして、十二月一日の朝、初めて家へ歸つて來た。

それから、不整頓ながらに、新婚の家庭生活は初まつた。私は珍らしく自家にゐて、何が樂しいともなく、只慌しいやうな喜びの中で、其日々々を送つてゐた。

そしてさすがに、先生の忌日の迫つてゐるのも、忘れて過ごしてゐた。

が、八日の朝だつた。私は毎もの通り眼を醒ますと、床の中で其日の朝刊を讀んでゐた。と、或る新聞の學藝欄か何かの一個に、ふいと漱石七回忌といふ、報導があるのを見出した。

讀んで見ると、明九日は漱石氏の七回忌に當るが、今年は震災後に當る事とて、萬事質素に法要を營み、親族知己門弟の親しいもののみが集まつて、神樂坂の某旗亭で、さゝやかな振舞がある由を、簡單に記してあつた。

私は眼が醒めたやうに、忌日の事に氣が付いた。そして先生に對して、濟まないやうに考へた。が、それにしても、もう七回忌になるのかなアと思つた。今更ながら月日の經つのが、早いものであるのを感じない譯には行かなかつた。

妻はもう疾うに起きて居なかつた。私は獨り床の中で、暫らく感慨に耽つた。

「……ほゝウ、もうそんなになるかなア。して見ると、あれからもう五年經つてゐる譯だが、つい一昨年あたりの氣もするし、もつとずつと、一と昔も前のやうな氣がする。併しまアそんな時日も、殆んど忘れる位になつたんだから、俺も不幸とは云へない。……明日は又夜になつたら、獨り先生の墓に詣でゝ、遂一事情を報告して來よう。」

それから私にはふと、某料亭の名から、F子と最後に相見た、一週忌前夜の事を思ひ出した。今度の七回忌の法筵も、新聞の報ずる所が眞實なら、其處で行はれるのだつた。

……あの時は、私が先生の位牌へ、燒香に立つて、座に戻らうとした時、遺族の一番前の列に、彼女初め子供たちが、全部並んで座つてゐたが、ふと見ると彼女は、私の顏を見る事が出來ないので、すつかり首垂れ切つてゐた。そして彼女の束髮の髷が、圓く渦を卷いて見えた横に、翡翠かエメロードかの環形の釵が、微かに首筋と一緒に戰へてゐたつけ。――

そんな事を思ひ出したが、自分にはもうそれも、別に悲哀も怨恨も感じさせずに、何だか快い刺戟のやうにさへ思は

れた。今の妻と比較して、どうかうのと云ふ譯でなく、もう凡てそれらは、遠い所にあるのを感じた。

事實、今度の私の結婚にしても、先の傷を癒さうとか、見返してやらうとか云ふ氣は、初めから更に無かつた。二人は結婚するより他に道が無かつたので結婚したのだつた。それで殆んど私の方なぞは、前の事なぞは問題にもしてゐなかつたのに、周圍のものや世間は、矢つ張りさうは行かなかつた。新聞雜誌なぞでは、今度の結婚よりも、前の失戀の方をより重大な位に、いろ〳〵對照して書き立てた。私としては今迄、謂はゞまアそれで賣り込んだ形で、身から出た錆だから、苦笑しても濟まされたけれど、先方は何となく、いゝ氣持はして居ないに違ひなかつた。が、それにしても納まる所へ、皆納つて了つた感じは、双方とも同じだらう。……

私はその翌日の忌日になると、餘つ程晝間堂々とお墓へ出かけて行つて、お參りをしようかと思つた。が、そんな事をすると、何だか幾らか勝ち誇つてゐるやうで、成心ある人の眼から見ると、醜いに違ひないと考へ直した。そして、夜になるのを待ち兼ねて、まだ其頃、妻を置いて一人家を出た事の稀だつた身を、

「……鳥渡、Tの所へ用があるから、是から出かけて來るよ。」

と辯解して、外出した。そして本郷三丁目でタクシーを拾つて、急いで雜司ケ谷の墓地に赴いた。そして墓地の手前でそれを乘り捨てた。

先生の墓地では、冴えた蒼い宵闇の中に、鐵棒の低い門扉は、相變らず冷たく重かつた。墓前の左右には樒の外に、花輪のやうなものが上つてゐるやうだそして碑面を濡らした水は、もう乾いてゐるやうだつた。

私は燐寸を磨つて、先生の墓に對面した。そして今度の結婚や、其間の氣持を心の中で、一と通り述べ立てた。——今度の結婚がいづれにしても私に取つて、和やかな氣分に導くに違ひないが、從つてこれを機緣として、先生の遺族と

の間に起つてゐる蟠りを、素直に解くやうになつたなら、望外の仕合せである事。私の今度の結婚が、何ら前の事件に對する、復仇的氣分を以てしたのでない事。……凡ては先生も知つてゐて、了解して呉れるだらう、と思ひながら、禮拜を終つた。それと同時に、何と云つても私の態度が、前よりも誇らしいのを、恐らく先生も感じて居て、苦々しく思つて居るに違ひない、とも考へながら。……

そして護國寺の前まで出て、電車で歸つて來た。

「Tさん、居らして？」

妻は私の顔を見ると、何氣なしに訊いた。

「うむ？いや、居なかつた。だから其處らを鳥渡散歩して來た。」

何故か、其時は妻に對して、云はでもいゝ噓を、私は吐いて了つた。何となく一人ひそかに、暮夜先生の墓に參る事なぞを、感傷的に語るのが、まだ耻しかつたに違ひない。……

それから、一足飛びに、越えて今年の事だつた。

今年は、家庭生活にも落着くと共に、執筆の都合で旅行してゐたのを、前々日に歸つてゐたので、彼々から忌日の墓參を、忘れず心構へしてゐた。

其日は朝雪が降つた。そして可なり寒かつた。私は例に依つて、前夜晩くまで起きてゐたので、九時頃一旦眼を醒まし、手水を使ひに床を出たが、庭の、濡れて黒黒と深い八ツ手に、大きな雪がぼた〳〵降り込むのを見ると、其儘又二階へ上つて、床の中へ潜り込んだ。そして二度寢をし初めた。

するとうと〳〵しかゝつた時だつた。既に起きてゐた妻が、階下から上つて來て、私を搖り起した。

「……貴方。只今Uさんがお見えになりましてね。今日朝の十時から赤坂の葵館で、『巴里の女』の試寫をやるから是から直ぐ起きて、飯なんぞ食はなくてもいゝから、直ぐ來て下さいつて。――Uさんは家から、タクシーでわざ〳〵迎ひに來たんですけれど、貴方がまだ寢てるつて云つたもんだから、そんなら自分も是から急いで行つて、準備をしなくつちやならないから、先に行つてゐますけれど、呉々も來るやうに云つて下さいつて。――」

「さうか。成程あの試寫も今日だつけ。」

私はまだ尠なからず眠いながら、やつと身を起した。――私たち活動寫眞愛好の、所謂權威あるオールド・ファンたちが、作つてゐる名畫鑑賞會があつて、その第一回にチャプリンの「巴里の女」をやる事になつて居り、幹事連だけが先づ研究的に、其下見をやる事には約束が成つてゐたが、それが今日だつたのか。さう云へばUから、當日迎ひに行くと云ふ、熱心な手紙が來て居たつけ。――と私は直ぐ思ひ出した。

そして今日は或る雜誌の締切日で、先生の忌日だ。直ぐ私の頭の中では、それだけが一時に浮んだ。

原稿の方は先づどうにかなるとして。N先生の墓參と、チャプリンの映畫の試寫。――その對照の妙に、鳥渡氣持がこだはるのを感じたが、先生の忌日とは云つても、精進潔齋する譯ではなし、要はたゞ墓參を欠かさないだけの話で、酒を飲まうと待合へ行かうと、そこは普段と同じに振舞つて差支ない上に、此の近來の日本が生んだ最大のユーモリストと、現代世界に生きてゐる最大のコメディアンとは、萬事違ふやうで、靈犀一點相通ずる所があるやうにさへ考へられた。殊に彼の原作監督したその寫眞は、彼自らは出演しない唯一の眞摯な映畫劇で、向うの知名の監督や批評家の間に、名作の評判が高かつたものだし、わざ〳〵さうして、僕を迎ひに來て呉れた人の熱心を思ふと、私は何を措いても

先づ、その試寫會に行く義務を感じた。

「ぢやおいでになりますか。——もう十時なら十五分前ですよ。」

「うむ。急いで顔を洗つて行くとしよう。どうせ三十分やそこいら遅れるだらうから、まだ間に合ふだらう。」

「ではお召物は？」

彼女は急いで用意をして置かうと思つて、さう訊ねた。

「さうだね。」私は考へた。是から出かけて行つて、試寫を見るとすれば、少くとも閉館前には濟ます積りだらうから、丁度晝少し過ぎになる。それから一旦歸つて、締切の迫つた原稿を書き、夜になつて、例のやうに墓參に出かけるとすると、厭に時間がツギハギになつて、氣分が落着かないに違ひない。殊に夜は、どうしても落着いて原稿を書かなくちやならぬとすれば、宵になつて改めて出かける事は、幾ら感激的な墓參とは云へ、いや、感傷的であればあるだけに、何となく妙に昂奮した氣分が殘つて、落着けないと思つた。だからいつそ、今日は試寫會へ出かけた歸りに、晝間思ひ切つて、お墓へ參つてやらう。序でと云つては先生に惡いが、此の天氣の惡いのに、二度も改めて出たり入つたりするのは厄介だから、いつそさうして了はう。晝間、そんな時間に行くと、誰かに會ふかも知れないし、又遺族や門弟たちと、一緒に打突からないとも限らないが、いつそ會つたら、會つたでも關はない。寧しろ、そんな事があつて、あの家との義絶關係が、元へ戻るやうな機會にならないとも限らない。たとへ又惡く行つて、妙な白眼で皆に見られても、もう此方は驚かない。もう動じないから大丈夫だ。その上、萬一さう云ふ困つた場合の用心に、樂館から、若し都合がよかつたら、Uを一緒にお墓まで引張つて行つてやらう。Uは前に、N先生の關係してゐた新聞に、記者をして居た關係上、先生とも知つて居るのみならず、先生の一の門弟である。H・K氏とは可なり親しい友達で、引いては又遺族ともよく

知つた仲であり、現にUが洋行する時は、H・K氏は勿論だが、當のN未亡人やMまで、送りに來て居た位だから、墓參すると云へば、都合が惡くない限り、喜んでついて來るに違ひなかつた。そしてUが一緒に居て呉れれば、遺族に會うと門弟に會はうと、兩方の緩衝地帶となつて、巧みに感情を捌いて呉れるに違ひない。殊に今日は、Uの勸誘で癸館へわざ／＼行くのだから、それから僕の勸誘を入れて、墓地まで行つて呉れてもいゝ筈だ。――そう考へたので、私は今日は妻に隱す必要もなく、かう命じた。

「それぢやア出先から、今日はN先生の命日なんで、雜司ケ谷のお墓參りに廻るから、モーニングを出して置いて呉れ。」

「さうですか。――ぢやアさうなさい。」

外の雪は、何時の間にか、冷たい氷雨に變つてゐた。

私は近所の、乘りつけの小型自動車を雇つて、急いで癸館へ赴いた。

試寫は、まだ初まつてゐなかつた。皆が集つてゐる事務所みたいな所へ入つて行くと、Uが例の呆けたやうな白顏を、今日はさすがに寒さうに顰めて、私を迎へた。

「やア、それでもよく來たね。先刻はあゝ云つて、無理に迎ひには行つたが、仕事の後で疲れてゞもゐるか、今日はこんな天氣なんで、十中八九來ないだらうと思つてゐた。」

「それやア僕だつて、此の會のメムバーの熱心さに對して、感動する位の意氣は持つてるさ。」

「だが、どうしたんだい。」と、Uは私のモーニングの襟を、ちつと見下しながら、かう私に訊ねた。「それにしても、馬鹿に今日はちやんとした裝をしてゐるぢやないか。それ程迄に敬意を拂つてると云ふ譯なのかい。」

「いや、さう云ふ譯ぢやないが、今日は鳥渡用があつてね。——いづれ後で話すよ。」
「ふうむ。さうか。それで車を待たしてあるんだね。」
彼は眼ざとく、私が乘つて來た自動車を、どうせ其邊から改めて命ずるよりは、少し長い間待つてゐて貰つても、乘りつけの自動車屋だから、チップも尠なくて濟むし、遠く迄乘るとすると、却つて此邊のハイヤーでは高く取られて、不經濟だと思つたものだから、待たして置いたのを認めて云つた。
傍に澤山人が居たので、それつきり私は云はなかつたが、其中に試寫は初まつた。
寫眞は、話に聞いてゐたが、思つたよりも面白かつた。そして連中の、いろ〳〵な批評や讃歎の中に、試寫は終つた。一時近くだつた
それから皆で、近所のカツフエへ行つて、開くべき本式の會の相談をする事になつた。
「……君は何か用があるのかい。あるんなら、早く歸つてもいゝが。——」
Uは私の氣を兼ねて、そんな事を云つた。
「いや、いゝんだ。時間に制限がある事ぢやないんだよ。」
私はまだそんな事を云つてゐた。
「車は待たして置いて差支ないのかい。無駄ぢやないかい。」
「いや、歸りに、實は少し遠くまで廻つて貰はうと思つてゐるんでね。乘りつけだから、此處らで雇つて、高い現金を取られるより、却つていゝんだよ。」
「さうか。そんならよし。」

私たちは近所の、鳥渡綺麗なカツフエエへ入つて、暖い飲み物や、手早いランチなぞを命じながら、相談はと云ふよりも話を初めた。

それが濟んだのは、二時近くだつた。雨はまだ止まなかつた。

そこで私は、初めてUを捉へて、かう云ひ出した。

「おいU君。君は今日用があるのかい。」

私はそれ迄何だか、今日其處から先生の墓參りに行くと云ふ事を、はつきり云つて、Uを勸誘するのが、氣恥かしかつたのだ。

「うむ、是から日活へ行つて、Nに會はなくちやならないんだ。つまらない用を頼まれてるんでね。——だが　何處か面白い所へ、交際とでも云ふのかい。そんなら用が濟み次第　電話でも掛けて呉れりやア　何時でも行つてやるよ。」

そこで私は更に苦笑しながら、云ひ出さない譯には行かなかつた。

「いや、今日はそんな所へ行くんぢやないよ。今日は君、N先生の命日でね。僕は是から雜司ケ谷へ、お墓參りに行かうかと思つてゐるんだ。實は僕去年まで、毎年向うの家の人に會ふのが厭で、夜そつとお參りにばかり行つて居たんだが、今日は一つ出た序に是から　勇を皷して行かうかと思つてゐるんだ。で、墓地で誰に會はないとも限らない。さう云ふ時　君が居て呉れると、俺は餘計な感情の浪費をせずに濟むと思ふから。君も久しぶりで先生の墓參り位したつていゝだらうし、萬一向うで誰かに會つたら、僕との間の緩衝地帶になつて貰はうと、實は思つてゐたんだがね。」

「ふうむ。」Uは鳥渡眞面目な顔をしたが、又白つぽいにやにや笑に返つて、「いつでも人を緩衝地帶にばかり使ひやがるなア。」

「だつて君なんざア、それつきり能がない人間ぢやないか。」

私も冗談を云つた。

「それは確にさうだがね。そしてこの際　久野道雄の一年一度のセンチメンタリズムを、滿足させてやりたくもあるがね。相憎用があつちや仕方がない。」

「なアに、いゝよ。今日は獨りで行くから。」

「一人で行つて、誰に會つたつて、關やしないぢやないか。——現に君は、此間帝劇で、未亡人には會つてるだから。」

「それはさうだ。平氣だがね。——」

……それは九日前、十二月一日の、チンバリストの初日だつたが、私は偶然、一部と二部とのインターヴアルに、廊下でN未亡人とばつたり會つた。それ以前にも、一二度帝劇で、食堂や何かで會つた事もあるが、震災後、はつきりさうして顏を眞面に向き合せたのは、それが初めてだつた。

——「あ、暫くでした。」

私は思はず和やかな聲で、さう丁寧に挨拶した。

——「あら、暫らく。」向うも丁寧で、心做しか幾らか親しみを持つてゐるやうだつた。「ちとお出かけなさい。」

——「えゝ、難有うございます。御無沙汰ばかりして。」

——「あの、貴方、Kさん——近頃獨逸から歸つたばかりの、一の門弟の名だつた。——何處にゐるか御存じありませんか。」

——「あゝKさんでしたら、先刻じと向うの廊下で、話をして居ましたよ。」

――「さうですか、ぢやア失禮。……」

――「御免下さい。」

さう云つて分れた、其時の話だつた。――Uは續けて云つた。――

「まア、それぢやア一人で行つて來給へ。そして、僕を、雜司ケ谷まで行く序に、君の車で日活本社まで屆けて呉れ給へ。」

「うむ。仕方がない。さうしてやらう。」……

霙がかつた雨は、まだ止んで居なかつた。自動車の助手は、一兩度、その沫滴に曇る前方の硝子板を、赤手で拭はなければならなかつた。が、江戸川を過ぎる頃から、やうやくそれは小歇みになつた。

護國寺前を左折して、例のだら〳〵坂を、上り初めた頃から、車内に一人揺られてゐる私の心は、少し動めきを帶びて來た。丁度、學校の引ける時分で、遺族の少年少女たち位の、生徒が道々澤山すれ違つたので、N家でも、小供達の歸る其時分から、葬參を初めやしまいかと推測された。若しさうだとすると、是から丁度、その眞つ最中位に、私が行き着いたらどうだらう。まさか今となつて、平氣は平氣のつもりだから、動轉しない膽は出來てるものゝ、何と云つても闖入者だ。それも烏渡双方に取つて、曰くのある闖入者だ。どう少く見積つても、其私の入つて行く瞬間だけは、劇的だ。表面に表はれなくとも、内心、感情の上では尠くとも、劇的な緊張を、恐らくは動悸を、激しく覺へずにはゐまい。

矢つ張り厭だなア。今更此の穩な日常生活で、そんな感情上の冒險をするのは。出來るのなんぞ、廢せばよかつた。――

と思つた。が、自動車は命ぜられた儘に、遠慮なく走つて行く。……でなくば、彼らが誰も居ないで呉れゝばいゝ。——だが、併し又、彼らに會つて、さう云ふ胸が動悸打つ思ひに、久しぶりで接するのも、決して惡くはないぞ。却つて其方が、かうして折角、晝間墓參をした甲斐があつて、面白かも知れない。そしてそれが甘く行けば、双方で互に許し合つて、明日からは天下晴れて、そんなこだわりは微塵も持たずに濟む。今だつてもう自分の方は、さうひどく煩はされてはゐないが、矢つ張りそれでも、雲の懸るやうな思ひは、どうしても追ひ退ける事が出來ないからな。——誰か居て呉れゝばいゝ。——いや、誰も居て呉れるな。——此の二つの希望が、私の胸の中を、激しく交互に飛び交ふた。自動車は坂を上り切つた。

「其處を左へ曲つて、墓地口の石屋の所まで行つて呉れ給へ。」

私はさう云ふと共に、注意深く、前方を透し見た。

が、もう彼らが居れば、自動車か車が置いてあるだらうと、思はれるあたりには何もなくつて、寒い雨の路上には、人影すら見えなかつた。

自動車は忽ちに、中央の墓地口まで來た。

「よし。——」

私は停車を命じて、それから、外套を車内に脱ぎ棄てながら、

「ぢやア、此處で鳥渡待つてゐて呉れ給へ。墓參りをして、直ぐ戻つて來るから。」

と、運轉手たちに云つた。そして赤土の泥濘路を大股に踏んで、それと知つてゐる先生の墓の方へ赴いた。誰もゐないのを、何となく物足らないやうな氣持と、併し吻とした思ひとで。……

鐵の扉を開けて、中へ入つて見ると、もう人々の墓參は、明に濟んでゐる事が分つた。香花に夥しく、左右の花筒に溢れてゐた。水は凹みにすつかり、滿く新しく張られてゐた。そして其濡れと、注ぎかけた痕とは、雨の跡と交りなが

ら、生々と揺れてゐた。そして手向けた線香からは、五つ束の中三つまで、まだ煙が立つてゐた。それも束の半ば位までしか、灰になつてゐなかつた。——恐らくは、さう長い前ではないらしかつた。

私は胸を撫ぜるやうにして、氣を落着かせると、墓前に改めて手を合せた。そして今日の、何もと違ふ墓參りの心持を、心の中で先生に訴へた。誰にも會はなかつたが、かうして貴、會つても差支ない積りで、お參りに來られるやうになつた心持を。——

空はまだすつかり曇つて、重くどんよりと、背ろの疎林を灰色に包んでゐた。碑面がしらじらと、光らずに見えるのも冷たいが慕しい感じだつた。

「さうだ。是でいゝのだ。幸か不幸か、誰にも會はず、昔一人、曇つた空の下で、しんみり墓參りを濟ましただけで、それでいゝのだ。それこそお前の半生を被つてゐた、あの事件の終りに相應はしいのだ。」

さう呟く聲が、私の直ぐ耳許にあつた。

私は滿足して、再び自動車に乘つた。そして其儘、何處へも寄らずに自家へ歸つて來た。

「まア、今日はお早いのね。」

出迎へた妻は、私の顏を見ると、直ぐから云つた。此頃出さへすれば、矢つ張り酒を呑んだり、麻雀をしたりして、夜可なり晩くなければ、歸らないのを常としてゐたので、冷かすやうに云つたのだつた。

「早くもないさ。」

私はわざと少し不氣嫌に答へた。

「お墓參りを濟ましていらして？」

彼女は更に又さう訊ねた。

「あゝ、濟まして來たよ。——水仙の花がうんと上げてあつた。」

「さうを？もうそろ〳〵其時季ですものね。」……

（大正十三年十二月作。）



戯曲　妻（一幕）

菊池寛

人物。

川瀬。三十二三の男。

女。丸髷に結つてゐるが、藝妓であることが直ぐ判る女。二十一、二。

旅館の女中。

所。東京に近き海岸。

時。ある年の冬。

情景。旅館の一室。可なり立派、卓上電話などある。人氣なくやゝ荒寥たる感じ、雨戸なども閉められてゐる。幕開くと男と女、女中に案内せられて登場。

男。なるほど、お客はありませんね。

女。今が、一番ひどうございますよ。戸なんかも、かうして幾日も開けないんでございますよ。

(女中急いで雨戸を二三枚開ける。夕暮の海が見える。)

男。でも、夏場ウンと儲けてあるからいゝでせう。

女中。さうでも、ございませんわ。夏場と申しても、ホンの丸二月でございますからね。(座蒲團を押入れより出し、)どうぞお敷き下さいませ。

女。(立つたまゝで)ねえ、ちよいと。妾暮れない内に、鈴龍さんの所へ行つて來るわ。

男。うむ、早く行つて、早く歸つておいで。

女。(女中に)ちよいと、此の家を出て右へ行くと、山部と云ふ煙草屋さんがありますわねえ。

女中。えゝ、ございます。

女。あすこまで、茲から二丁もありますかしら。

女中。いゝえ。そんなにございません。橋をお渡りになると、直ぐでございますよ。

女。(取つたショールをまた肩に、まとひながら)ぢや、わたし一寸行つて來るわ。

男。直ぐ歸つておいでよ。向ふでお茶なんか飲んぢやいけないよ。

女。えゝ、でも妾肺病なんか恐くないわ。

男。恐くなくつたつて、傳染つちや困まるぢやないか。

女。傳染つたら死んでしまふわ。なんて……ぢや妾行つて來るわ。

（女、女中と連れ立つて去る。男縁側へ出て、しばらく海を眺めてゐる。女中、火を持つて來て火鉢に入れる。直ぐ去つてお茶を持つて來る。）

女中。どうぞお茶を。

男。富士が、かすかに見えてゐるね。

女中。冬は、毎日のやうに見えてゐます。

男。冬は、全く淋しい土地だねえ。

女中。これでも、春先きになると、お客様がボツ〳〵お見えになります。

男。落着くことは落着くがね。

女中。でも、あまり落着き過ぎますわねえ。

男。本當だ。心中をでもするのには、いゝ土地だな。

女中。まあ。御冗談を。でも去年もございましたのよ。丁度今頃。

男。此の家でかい！

女中。いゝえ、此の向ふの海岸で。

男。身を投げたのだねえ

女中。えゝ抱合心中でした。

男。いゝ女だつたかい！

女中。まだ二十前の女學生らしい女でした。

男。男は？

女中。男は、三十二三の立派な方でしたよ。何だか奥さんがお在りになるやうな話でしたよ。

男。（一寸いやな顔をしながら）叶はぬ戀と云ふ奴だねえ。

女中。奥さんが、お可愛いさうですわねえ。

男。うむ、まあさう云つたわけだね。

女中。（ふと氣がつき話題を易える）山部さんは、御存じなんですか。

男。いやさう云ふ譯ぢやないんだがねえ。あれの朋輩が、あの家へ來てゐるんだよ。亭主が肺病で、その看病で來てゐるんだよ。

女中。あゝなるほど。

男。肺病患者は、澤山來てゐるのだらう。

女中。お見えになつてゐるやうでございます。

男。冬は、暖かなんだねえ。もつとも、今日あたりは東京と變らないが。

女中。この二三日寒ないんでございますよ。……あの、晩のお支度は？　何かお好みがございませうか。

男。なに、別に。

女中。ぢや、奥さんがお歸りになつてから、御一緒に。

男。あゝ、さうしてくれ。

女中。畏りました。（去らんとする）

男。風呂は湧いてゐるか。

女中。申し兼ねますが、一日隔きに立てゝゐるものですから。今日は……

男。（苦笑して）さうか、そいつは……

（女中去る。男、持つて來た小さいトランクを開ける。中から、二三冊の本を取り出す。つゞいて、革袋にはいつたピストルを取り出す。微笑して、革袋からピストルを取り出す。右手を伸して人を射つ眞似をする。今度は自分の、こめかみに擬す。微笑。ピストルを革袋に收める。本もつゞいて收め、立つて壁にかけてある外套のポケットから、折り疊んだ夕刊を取り出し、卓子の上に擴げて讀む。硝子戸越しに見える海、全く暗くなる。……間……やゝけたたましい足音がして、女歸つて來る。）

女。おゝ苦しい、馳け出したものだから胸が苦しくつて。お、苦しい！

男。何うした。鈴龍さんは。

女。まあ。いやになつちまつたわ。俊ちやんは、こんな顏をしてゐるのよ（げつそりと死にかゝつてゐるやうな顏をして見せる。）山部のお女房さんが、二階へ上つてくれと云ふんでせう。妾、例の調子で「お邦さん！　どうして」つてた事を云ひながら、馳け上つて行つたでせう。すると、俊ちやんは、頬つぺたがこんなになつて、（頬をこさげて見せる）死にかゝつてゐるぢやないの。もう、今日か明日かと云ふ顏をしてゐるのよ。お邦さんは、お邦さんで、眞赤に目を泣きはらしてゐるのぢやないの。妾、あんなにてれたことはなかつたわ。引込みがつかないのよ。だから、妾一寸坐つた限りで「お大事に」つてなことを云つて、逃げて來たわ。でも、お邦さんは、下まで送つて來てくれたのよ。しく／＼泣いてゐるので、妾、可愛いさうになつたわ。

男。お前が、遠出氣分か何かで、飛び込んで行くから、引込みがつかなくなるんだよ。向ふは、遊んでゐるんぢやないんだもの。生死の境だよ。

女。でも、お邦さんは感心だわねえ。あんな浮氣者が、よく俊ちやんの看病をしてゐるわねえ。

男。やつぱり、人情があるんだね。

女。お邦さんにも病氣が、きつと傳染つてゐるわねえ。

男。傳染つてゐるだらう。接吻なんかするだらうからね。

女。そりやするでせう。でも、俊ちやんの肺病が、傳染つて死ねば、心中ですわねえ。

男。先づ心中と同じだね。

女。肺病心中ですわねえ。

男。お前は、どうだい、俺が、肺病になつたら看病してくれるかね。

女。えゝしますとも。看病だつて、何だつてするわ。でも、貴君は肺病になりさうはないわねえ。

男。肺病になるならないが、問題ぢやないんだ。俺と一所に死ねるかいと云ふんだい。

女。えゝ、死にますとも、何時だつて、死ぬわ。

男。(やゝ眞實目に) 本當かい。

女。嘘なんか、云はないわ。

男。ぢや、今一所に死なうと云つたら、死ぬか。

女。えゝ死ぬわ。いつだつて死ぬわ。

男。冗談ぢやないんだぜ。
女。えゝ、冗談ぢやないわ。
男。ぢや、いよ〳〵となつて駭くな。
女。(少し不安になり、)まあ、どうするの。
男。俺は、ピストルを持つて來てゐるんだよ。
女。まあ。ほんとう。
(男ピストルを取り出して、卓子の上に置く。)
女。まあ。ピストル！　あなた何時か持つてゐると云つたわねえ。(恐々取り上げて見る。)彈丸がこめてあるの。
男。あるとも、五發とも這入つてゐる。
女。まあ、恐いわねえ。死んでもいゝわ。でも、死ななくつてもいゝぢやないの。
男。お前の心が、確でないから死にたいんだ。
女。まあ、あんなに云ひわけをしても、信じて呉れないの。
男。おれは信じられないんだよ。
女。まあ、口惜しいわねえ。鵠沼へ行つたなんか、何でもないんですもの。安島さんと、芝男さんの取巻きで行つたんですもの。安島さんと、戀だなんて、隨分人を馬鹿にしてゐるわねえ。あなたが、そんなに疑ぐり深いのなら、妾死んでーまふわ。
男。さうか、ほんとうに死ぬか。

女。え丶死ぬわ。

男。本當に死ぬか。

女。でも、そんな事疑はれて死ぬのは、いやだわねえ。

男。やつぱり、死にたくないんだね。

女。でも、妾一月位待つて貰ひたいわ。せめて長唄會が済むまで待つて貰ひたいの。妾が、死ぬと「傾城」タテを謡ふ人がないんですもの。

男。馬鹿！　そんなことを考へてゐて、死ねるかい。

女。だつて、死ぬにしても、遺書を書かなきやいけないわ。」

男。お書きよ。遠慮なく。

女。あなた嘘でせう、そんなに冗談のやうに云つてさ。

男。嘘なもんか。俺は、ちやんと遺書をかいてゐる。御覧！

（男、トランクの中から白い封筒を取り出して見せる。）

女。まあ。

男。どうだい。俺は嘘は云つてないだらう。

女。一寸、これ讀んでもいゝでせう。

男。いやだよ。

女。讀ましてよ。

男。駄目だい。馬鹿！

女。よましてよ。わたし、あなたがどんな事書いてあるか讀みたいのよ。

男。駄目だ、いけない。

女。よましてよ。わたし、どんな事があつてもよむの。

（二人、烈しく手紙を奪ふ。女、必死になり、到頭男の手から、手紙をもぎとる。」

男。馬鹿！　讀んで目を廻すなよ。

女。えゝ、目は廻さないわよ。（女、恐々封を切る）

男。（笑ひ出す）はゝゝゝゝ、馬鹿。

女。（女封筒の中から、紙片を取り出し、じろ〱見る）。まあ、あなたこれ白紙ぢやないの。

男。さうさ。いけないか。

女。まあ、ひどいわ。あなた！

男。だつて、ほんとうの遺書が出たら、お前困つたらう。

女。だつて、ひどいわ。……（女急に笑ひ出す）ほゝゝゝ白紙はよかつたわねえ。

男。まだ心中なんかしてたまるかい。

女。ぢや妾をためして見たの。

男。さうだ。

女。卑怯だわねえ。男のくせに。

男。何が卑怯なものか。お前のやうな浮氣者は、時々試さなきや。

女。ぢや、今日試めした結果は、どうだつたの。

男。あまり、いゝ成績でもないね。

女。落第！

男。落第でもないがね。

女。ぢや、わたしが、もつと死ぬ〳〵と云へばよかつたのね。

男。まづさうだね。

女。だつて、あまり死ぬ〳〵と云つたらあなた困まつたでせう。

男。困まりやしないさ。心底見えた、兄は東の作を許すと云ふところだよ。

女。だつてあなたの狂言の底が見えてゐたんですもの。由良之助より芝居が下手よ。

男。由良之助ほど、肚が出來てゐないんだねえ。

（女中、食事の仕度をとゝのへ、まず酒盃を持つて來る。）

女中。どうも、たいへん遲くなりました。

（料理を、次ぎ〳〵膳の上に並べる。女、男に酒をつぐ。）

女中。ぢや、御用がありましたら、どうぞ鈴をお鳴らしになつて下さいませ。

女。お銚子のお代りをね。

女中。畏りました。（去る）

女。でも妾少しはビックリしたわ。でも、ピストルなんか生れて始めてでせう。

男。ピストルを見せると逃げ出すかと思つたら、逃げ出さなかつた丈、感心だねえ。

女。そんなに、薄情ぢやないわよ。妾の實意だつて、少しは分つたでせう。

男。いやな奴、お前は直ぐそれだからね。だから、此間の話の長襦袢を買へと云ふのかい。

女。そんなことは云はないわよ。

（卓上電話のベル、けたましくなる。女、あはてゝ受話器を手にする。）

女。はい、はい。はい。えゝさうです。

男。どうしたんだい。

女。（受話器から口を放し）東京から電話らしいのよ。

男。玆へ來ると云ふこと話したのかい。

女。梶村丈へは、さう云つて置いたのよ。……（受話器へ）えゝさうです。妾です。お八重さんですか。あゝさうですか……へえー、さうですか。…へえ、まあ。……何か起つたのでせうか、へえ、さうですか。えゝ、一寸待つて下さい。

男。何うしたんだい。

女。あなた大變よ。あなたのお宅で、何か事件が起つたのですつて。

男。何だつて。

女。お宅から、梶村や妾の家へ幾度も、電話がかゝつて來たんですつて。

男（蒼くなる）どう、一寸お貸し…（受話器を受取る）お八重さんか、僕だよ。うむ、うむ。…………何が起つたか

分らないかい、……うむ、うむ……困つたな、人を先方へ寄越すつて、……うむ、……　ぢや、兎に角此方から、電話をかけるから、………………

（受話器を置く。）心配だな。どうしたのだらう、

女、それ御覧なさい。お宅の事だと、隨分心配するのね。

男（だまつて受話器を取りあげる）もしもし記錄ねがひます、小石川の五千八百十五番です、はい、至急で。

女、何うしたんでせう。

男、まさか、家内が自殺するわけはあるまいし、

女、そんなに、奥さんヒステリイ？

男、だから、自殺するわけはないと云つてゐるぢやないか。

女、ぢや、そんな心配しなくつたつていゝわ。

男、子供が急病かな、だつて、今朝出て來るときは、ピン〳〵してゐたんだからね、

女。妾と遠出をした事を知つて、騷ぎ立てゝゐるのぢやないの、

男。馬鹿云へ。お前と、箱根へ一週間も行つてゐたときだつて、何とも云はなかつたぢやないか。

女。さうね。今になつて騷ぎ立てるなんて、可笑しいわねえ。

男。心配だねえ。

女。あなたがお宅のことでそんなに心配するとわたしいやになるわねえ。

（電話の鈴なる。）

男。(受話器を取り上げて)、はい。はい。あゝ小石川の五千八百十五番かい。お前は、よしかい。俺だよ。奥さんはゐる。うむ。…………

女。奥さんは、ピン／＼してゐるのでせう。

男。うむ、俺だよ…………何を……馬鹿なこと…………何でもないよ。うむ、うむ、馬鹿だねえ、お前は。ちえつ…………そんな馬鹿なこと。馬鹿！　馬鹿！　えゝ、しようのない奴だね。…………横山や、南に頼んだんだつて、馬鹿！　何うしてそんな……いたづら書おやないか。ピストル…………馬鹿だね、そんな、軽々しいことをする奴があるものか、…………

女。あなた何うしたの。く

男。(無言で女を、押しのけながら)。困まるな、南は出發したんだつて、俺の耻を曝すのだな。馬鹿！　えゝ仕様のない奴だ！　歸るとも／＼。馬鹿なつ、そんな、馬鹿！

(受話器を荒々しく置く。)

女。何うしたのさ、あなた。

男。えゝ仕様のない奴だ。家内の奴！

女。何うしたのさ。

男。泣きたくなるね。あゝ何うせう。

女。あなた、何うしたの、一寸あなた。

男。あゝ仕様がない。あいつ、俺達が心中すると思つてゐるんだよ。

女。何うして。

男。俺が、この遺言狀とかいた封筒を、一枚かき損じた奴を、机の上に忘れて來たんだよ。

女。それを、奥さんが、御覧になつたの。それぢや心配するのが當り前だわ。

男。それで、駭いてピストルのは入つてゐる戸棚を見たんださ。すると、ピストルが、ないだらう。家内の奴、すつかり信じ切つて、今もオロ〳〵聲で電話へかゝつてゐるんだ。

女。まあ！ 奥さんの方が、スツカリ狂言にのつちやつたのね。あなた、つまらないことをするからよ。

男。いやだな、それに、南や、横山へ知らせたんだつて。南の奴、此方へ來ると云つて、もう東京驛を發つた時分だらうて。あゝいやだ。〳〵。

女。まあ、ほんとうに大變なことになつたわねえ。あなたが、そんな書き損じなんか捨てゝ置くからよ。

男。家内の奴が、それを見ようとは、夢にも思つてゐなかつたんだからね。

女。奥さまも、そゝつかしやねえ。そんなに、人を騒がす前に、もつとお考へになればいゝのよ。

（男しばらく無言。）

男。仕方がない。南が來れば、よく事情を話すんだ。だが、あんまり馬鹿々々しくつて人に話せないことだからな。狂言に遺書をかいたとも云へないしね。

女。人に笑はれちやうわね。

男。仕様のない奴だ。家内の奴。

女。奥さんなんて、云ふものは、もつと落着いてゐるものよ。

（男、しばらく無言、考へ込む。……間……。）

女。でも、そんなに本氣に騷がれたら、うれしいでせう。やつぱり。奥さんの方が、實意があると思ふでせう。

男。馬鹿な。

女。奥さんの方は、たしかに及第だわね。

男。馬鹿を云へ〳〵。

女。さうだわ。たしかに。

（男立ち上つて女を離れ縁側に出て海を眺める。）

女。オロ〳〵聲で、電話にかゝつた奥さんが、いとしかつたでせう。やつぱり、さうよ。本當にあなたの事を思つてゐるのは、奥さんよ。妾は、どうせ藝妓ですもの。雨さんが、來ない中に、歸りませうよ。こんな所にゐて、心中をするとでも思はれたら、馬鹿々々しいわ。

（男無言、ちつと海を眺めてゐる。女中　お銚子を持つて上つて來る。）

女中。はい！お銚子。

（不思議さうに、二人を見る。）

女。（やゝ險しく）其處へ置いといて下さい……

女中。はい。

（忽々として去る。）

女。ねえ、あなた歸りませうよ。奥さんのことを思つてゐる人と一所にゐたつてつまらないわ。

（男。欄干にもたれて無言。）

――幕――

編輯だより

□本年以後の本誌がいかなる目標に向つて突撃するか。加藤內閣の今のやうな無氣力さでは所謂國民の期待に副ふことは出來まい、權兵衞は上院と、樞府などは眼中におかなかつた。しかし加藤は左顧右盻實に醜態を極めつつある。我等は動かざる林の如くである。しかし一旦意を決すれば自己の利害、成敗を度外に置いて猛進する。

□智識階級の失業者が寒氣と飢餓に泣く。我國の經世家が深甚の仁俠的行爲に出づべき時である。時期を失して悔ひなきやうの對策があるべきだ。

□震災のため、本社の種々の活動が制限された傾きがあつたが、もう羽翼も整つたから本年から目まぐるしい活動に取りかかる。

□『改造』が東洋雜誌界の權威であり、且覇王であり、そして高級雜誌中發行部數の首位であることも事實である。隨つて我誌の社會的責任は愈重大を加えた。我誌の缺陷であると評されていた『趣味』欄も來月號から充實させたいと思つている。

□とにかく、我々は沈默の裡に自己の彫琢を深めて行つた。我々、及我誌の過去六箇年間にはいろ〳〵毀謗するものもあつた。我々は我徒の爲めに片言、隻句も辯解しなかつた、我徒は事實がお饒舌より雄辯だと信ずるものであるから。

□我徒の信條は簡單である「愚圖々々云はずに汝のペンを磨け」である。社會のことも然りである。

□我等は虛僞多き大宰相たることよりも眞實なる改造の一記者たることを衷心より榮譽と思ふ。信念の前には遮る何物の榮譽もない。

□本社より出版する筈の經濟講座は『社會講座』と改名し、一、二ケ月後より發刊する筈だ。

□現下我國で第一の賣行を示せるは死線を越えて下卷だそうだ、それから第二位が末弘博士の『農村法律問題』だそうだ。

□本誌の『讀者欄』は二月號より登載することにした。隨つて讀者の社會に對し、文藝に對せらるる抱負や、疑問やを千字以內で認めて本誌『讀者欄係』に投稿して欲しい。

改造定價

册數	定價	郵稅
壹册	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	郵稅不用 特大號共
壹ケ年	拾壹圓廿錢	郵稅不用 特大號共

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲増大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正拾參年十二月廿日印刷納本
大正拾四年一月一日發行
(特價壹圓八拾錢)

東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行印刷人　平田賢一郎

東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區愛宕下一ノ一　改造社
振替東京八四〇二一
電話高輪四九九三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

改暦の吉慶各位御揃ひ被爲遊目出度申納め候舊年中は復興の後を承けて、努力着々功を修め、諸般の設備、新しき計畫、益々積極的に進捗し、ライオン齒磨工場の完備、ライオン齒磨製品の精良、本邦嚆矢の稱あるライオン兒童齒科院の整頓、各地方に於ける口腔衛生普及のための講演會の奮闘、齒科全書を兼ねたるライオン當用日記の美裝出現等、全國一齊に揚げらるゝライオン萬歳の聲裡に感謝と光榮との幸運を喜びつゝ、今日を迎ふるを偏に大方の寵眷に歸し奉りたく候

敬具。

大正十四年元旦

ライオン齒磨本舗

東京驛前丸ノ内ビルヂング一階

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

東京株式會社秀英舍印刷所